

私本「葛飾北斎ハンドブック」年譜で辿る画工の生涯（改訂版）

東京都台東区生涯学習「葛飾北斎研究会」村井 信彦

【初めに】

葛飾北斎は研究者によるさまざまな角度でのアプローチに関わらず、伝説の域を抜けな
い推測の部分が少なくない。一言でいえば「謎」多き有名人なのである。

制作年、刊行年、作品の解釈及び画題等の読み方の違いは言うに及ばず、北斎の生き方
に関わるあらゆる面で謎が多いが、先学者の地道な研究が常になされているので、新たな
事実や発見が今後もなされるに違いない。

私もまた在野の素人ながら、自分なりの北斎像を描きたいという思いがあった。そのた
め、諸研究を参考にしながら、改めて年譜を作成し、作品と関連づけるという基本的な作
業により、北斎の全体像を浮き彫りにする方法をとった。

披見した資料をできるだけ客観的に示すことを心がけた。その結果、煩雑さはまぬがれ
ないものの、これから北斎にアプローチしようとする諸氏の基本資料として活用される事
を願うためである。「ハンドブック」と名づけたのはそのためである。

在野の研究であるので、資料は各種展覧会、図録、種々の参考資料に拠らざるを得ない
ため、思い違いや訂正すべきところもあるかもしれない。掲載した図録等は、出典を明示
しているものの、来歴不明の作品も多々あると思われるので、あくまでも参考としての掲
載であることをお断りしておく。

かつて芥川龍之介は「昔から前人の造つた大きな花束が一つあった。その花束へ一本の
花を挿し加へるだけでも大事業である。その為には新しい花束を造る位の意気込みも必要
であらう。この意気込みは或は錯覚かも知れない。が、錯覚と笑つてしまへば、古来の芸
術的天才たちもやはり錯覚を追つてみたのであらう」（『文芸的なあまりに文芸的な』三
十九「独創」）と述べた。

本稿で一本の花を挿し加えることができたか誠に心もとない。前述したように北斎に関
わることは、永遠の謎解きとしか言いようがない。今後、新事実や従来の説を覆す論考も
出るに違いないことを念頭に置けば、本稿もまた永遠の未定稿であることをご理解いただ
ければ幸いである。

なお、北斎と関わりの深い曲亭馬琴の動静についても多少記述した。

【凡例】

- 西暦や算用数字の関係もあり、横書きの年譜とした。
- 年齢は全て数え年で表記している。
- 制作年の枠組に示した落款・印号は、筆者が知り得るその年の作品に限定している。
- ◇印は周辺の世相等を示している。
- ○は北斎以外の刊行物等を示している。
- ★は北斎に関わる事項を示している。
- ●は北斎の作品・刊行物を示している。
- ☆は揃物等の各図を示している。
- 洒落本・滑稽本・黄表紙・読本等は、特に注釈がない限り当該本の挿絵の落款を指す。
- 作品は原則として刊行年で示している。
- 作品の寸法はセンチ単位で、縦×横のように表記している。肉筆画以外は、初摺や版元の再摺等により、所蔵館の作品のサイズに若干の違いがある。
- 作品（挿絵を除く）はできるだけ簡単な説明を施し、同画題等の検索の便宜に供するように配慮した。ただし、未見のものは表題にとどめた。また、説明は知識不足による不備なものもあり、碩学の教えを待ちたい。
- 参考資料等の著者の敬称は原則省略した。
- 引用資料の『葛飾北斎伝』（飯島虚心著）は、岩波文庫版（平成 11 年：1999 年刊、鈴木重三校注）を使用した。同書の初版は明治 26 年（1893）に浮世絵商の蓬枢閣から出版された。本文中の『葛飾北斎伝』は同書を指す。
- 引用資料の『葛飾北斎年譜』（永田生慈著）は『北斎研究』22 号（平成 9 年 4 月 18 日発行 葛飾北斎美術館編 東洋書院発行）所収のものを参照し、本文中では『年譜』と略記する。
- 書名・人名・引用文には、原文にはない振り仮名や句点を施してある。また、引用文の旧漢字は現行漢字に、ふりがなは現代仮名遣いとした。必要があれば原文に当たっていただきたい。読み方が不明の場合は筆者の判断で記した。また、本文中の北斎名および画号については、原則としてルビは付していない。
- 図版は主に Web 上に公開されている画像・展覧会図録・画集等を中心に掲載し、出典を明記するよう配慮した。ただし、図版に付した所蔵館等と図版は必ずしも一致しない。同一図の所蔵先を示すにすぎない。
- 作品所蔵施設等は代表的な施設を取り上げているので、全ての所収施設を記載しているわけではない。

【目次】

宝暦 10	1790	1 歳	誕生の謎・・・・・・・・・・・・・・・・・・11 当時の銭相場・・・・・・・・・・・・・・・・12 北斎の父母の謎・・・・・・・・・・・・12 北斎の父は中島伊勢、母は小林平八郎の孫娘か・12 北斎の兄妹・・・・・・・・・・・・・・13 北斎の実父は川村家の長男か・・・・14
宝暦 13	1763	4 歳	鏡師の養子の謎・・・・・・・・・・・・14 養子に入ったのは 20 歳頃？・・・・15
明和 2	1765	6 歳	絵暦・錦絵誕生・・・・・・・・・・・・16 六歳より物の形を写す・・・・・・・・16 百歳の後に至りては此道を改革せんことをのみ願ふ 16
明和 3	1766	7 歳	妹没・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
明和 4	1767	8 歳	生涯関わる曲亭馬琴誕生・・・・・・・・17
明和 5	1768	9 歳	美人で評判の笠森お仙たちのプロマイド・17 中島鉄蔵を名乗る・・・・・・・・・・・・18
明和 7	1770	11 歳	役者似顔絵確立・・・・・・・・・・・・19
明和 9/安永 1	1772	13 歳	浮絵確立・・・・・・・・・・・・・・20 貸本屋で働く・・・・・・・・・・・・20 この頃の貸本屋の実態・・・・・・・・20 写本一冊八文で貸す・・・・・・・・21
安永 2	1773	14 歳	彫刻家の弟子になる・・・・・・・・22
安永 4	1775	16 歳	黄表紙誕生・・・・・・・・・・・・23 筆耕彫としての作品・・・・・・・・23
安永 5	1776	17 歳	大首絵登場・・・・・・・・・・・・24
安永 7	1778	19 歳	勝川春章門に入る・・・・・・・・25 春章一幅価千金・・・・・・・・25
安永 8	1779	20 歳	第一期春朗期・・・・・・・・26 富士塚が建つ・・・・・・・・26 勝川春朗を名乗る・・・・・・・・26 絵師デビュー・・・・・・・・26
安永 9	1780	21 歳	黄表紙挿絵師の始まり・・・・・・・・29 廓遊びで幫間と知り合うか・・・・29
以下安永年間			
天明 2	1782	23 歳	艶本処女作・・・・・・・・33 初の美人画か・・・・・・・・34
天明 5	1785	26 歳	第二期春朗期・・・・・・・・38 勝川派から一旦離れ、群馬亭と称す・38 貧窮により唐辛子、柱暦を売る・38 雅号の推移・・・・・・・・39 「改」は「改め」改号は 30・・・・39
天明 6	1786	27 歳	北斎結婚する・・・・・・・・40 天明年間の北斎自身の黄表紙著作はない？・41
天明 7	1787	28 歳	第三期春朗期・・・・・・・・42 長男誕生・・・・・・・・43 絵暦・摺物を描く・・・・・・・・43 浮絵を描く・・・・・・・・44
以下天明年間			春朗期の最も早い肉筆絵（版下絵）・・・・47

			印号・辰政と雷震の由来・・・・・・・・・・	48
			春朗期唯一の大型美人画・・・・・・・・・・	50
天明 9/寛政 1	1789	30 歳	長女。阿美与誕生・・・・・・・・・・	59
			戯作の草紙を描く・・・・・・・・・・	59
			日千両・市村座の芝居絵本を描く・・・・・・・・	59
以下、天明末～寛政初期				
寛政 2	1790	31 歳	出版統制令により極印制度が始まる・・・・・・・・	62
			春朗時代唯一の中国歴史画・・・・・・・・・・	71
寛政 3	1791	32 歳	次女阿鉄誕生・・・・・・・・・・	72
寛政 4	1792	33 歳	北斎の師・勝川春章没・・・・・・・・・・	76
			世界一の画工を志すも春好の悪意のおかげ・・・・・・・・	76
			勝川派に固執せず。狩野融川に入門したか・・・・・・・・	76
			春章による破門はなし・・・・・・・・・・	76
			曲亭馬琴との幻の初提携か・・・・・・・・・・	78
寛政 5	1793	34 歳	第四期春朗期・・・・・・・・・・	81
			長男富之助を中島伊勢の養子に出すか・・・・・・・・	81
			狩野融川の怒りを買う・・・・・・・・・・	81
			叢号を用いる・・・・・・・・・・	83
			落款「春朗」を記した唯一の肉筆画・・・・・・・・	84
			「鍾馗図」が貧窮を救い画業に精進する・・・・・・・・	84
			絵暦以外の最初の摺物・・・・・・・・・・	84
			摺物の名手北斎 生涯に 949 点・・・・・・・・	85
寛政 6	1794	35 歳	この年までを春朗期とする。年末より宗理と号す	85
			写楽登場・・・・・・・・・・	85
			春朗期の作品数と挿絵数・・・・・・・・・・	86
			妻きみ没す・・・・・・・・・・	86
			年末に宗理と号し俵屋一門の頭領となる・・・・・・・・	86
			菱川宗理は門人宗二・・・・・・・・・・	87
			曲亭馬琴との初の共作か・・・・・・・・・・	87
			初の狂歌本を手がける・・・・・・・・・・	88
			役者絵から離れる・・・・・・・・・・	88
寛政 7	1795	36 歳	浮世絵一枚十六文～十八文・・・・・・・・	89
			宗理期始まる・・・・・・・・・・	90
			この年より狂歌本に意欲・・・・・・・・・・	90
寛政 8	1796	37 歳	曲亭馬琴の読本第一作・・・・・・・・・・	92
			「こと」と再婚・・・・・・・・・・	92
			住吉広行に土佐派を学ぶ・・・・・・・・・・	92
			摺物にも意欲・・・・・・・・・・	92
			副号としての「北斎」現る・・・・・・・・・・	94
			この年より画風一変、宗理型美人も登場・・・・・・・・	94
			初の誹諧摺物・・・・・・・・・・	96
寛政 9	1797	38 歳	菱川宗理は北斎にあらず・・・・・・・・・・	99
寛政 10	1798	39 歳	娘・阿栄誕生の謎・・・・・・・・・・	106
			カピタンからの注文に北斎の心意気・・・・・・・・	107
			北斎の大和魂・・・・・・・・・・	108
			歌麿、北斎らの所業を非難する・・・・・・・・	109
			宗理号を譲り北斎辰政と号し俵屋から独立・・・・・・・・	109
			北斎流確立 明画の筆法を以て浮世絵をなす・・・・・・・・	109
			黄表紙『化物和本草』で号・可候を用いる・・・・・・・・	112

			黄表紙『化物和本草』号・可俣を用いる・・・・	112
			忠臣蔵シリーズの開始・・・・	113
			落款と印の使い分け・・・・	115
			北斎辰政改名通知の亀・・・・	117
			見立てとやつし・・・・	120
寛政 11	1799	40 歳	江戸読本登場・・・・	123
			北斎期・不染居北斎と号す・・・・	123
			三囲神社の箱提灯と扁額を見事に描く・・・・	123
			全図北斎号による最初の狂歌本・・・・	124
寛政 12	1800	41 歳	宗理様式美人の評価・・・・	138
			北斎の最も早い時期の自画像・・・・	140
			画狂人北斎号登場か・・・・	144
以下寛政年間			春朗期の最も早い肉筆画か・・・・	153
			津和野藩伝来摺物・・・・	161
寛政 13/享和 1	1801	42 歳	次男誕生・父没か・・・・	185
			白猿との交流・・・・	185
享和 2	1802	43 歳	全図を描いた唯一の帖装狂歌絵本・・・・	193
享和 3	1803	44 歳	読本初の挿絵・・・・	204
			「亀毛蛇足」印初出か・・・・	205
			寛政 6 年以降久々の役者絵・・・・	210
			東海道シリーズ始まる・・・・	212
			北斎作品の重要文化財指定第 2 号・・・・	217
			絵入読本此人よりひらけたり・・・・	226
			読本と肉筆画に意欲、曲亭馬琴との 読本コンビの始まり・・・・	226
享和 4/文化 1	1804	45 歳	永井荷風の絵解き・・・・	258
以下享和末～文化 前期				
文化 1	1804	45 歳	音羽護国寺で大達磨を描く・・・・	278
			米一粒に雀二羽と、大紙に大馬と布袋の大画を描く	279
文化 2	1805	46 歳	文化 2 年の浮世絵等の価格・・・・	286
			この年のみ画号九九屋を用いる・・・・	289
文化 3	1806	47 歳	合巻時代に入る・・・・	295
			馬琴宅に寄宿中、母の年忌の香典で馬琴と争う・	295
			木更津に逗留・・・・	296
			行元寺の波に感銘を受ける・・・・	296
			人体の骨格を知らざれば真を得ること能わず・	296
			読本に傾注し始め、落款に北斎に葛飾を冠する・	297
			馬琴、北斎の挿絵が気に入らず、二編以降は 高井鴻山の翻訳・・・・	297
			北斎の勧めで執筆・・・・	298
文化 4	1807	48 歳	馬琴に低姿勢・・・・	307
			最後の役者絵か・・・・	310
文化 5	1808	49 歳	長女嫁ぐ・・・・	312
			次女没す?・・・・	312
			亀沢町に新居を構え、書画会を催す・・・・	313
			挿絵で馬琴と争う・・・・	315
文化 6 年	1809	50 歳	柳亭種彦との親交・・・・	319
			北斎の看板絵は中評でも鳥居派に並び描く・	319
			彫刻頗る鮮明なり・・・・	321
文化 7	1810	51 歳	馬琴・北斎、文化七年に団円す・・・・	325

			北齋子へゆきおらんだの十露盤けいこなす・・・・	326
			ドラ孫誕生・・・・	326
			看板絵は苦手・・・・	327
			絵手本の初作。この頃より戴斗号を用いるか・・・・	328
			娘阿栄が初めて挿絵を描く・・・・	329
文化 8	1811	52 歳	戴斗期・・・・	340
			辰政ト云シ頃ノ門人・・・・	341
			北齋号としての門人・・・・	341
			前～は「さきの～」・・・・	347
			戴斗号登場・・・・	347
文化 9	1812	53 歳	絵手本の時代・・・・	348
			長男没し、後妻と別居か・・・・	349
			第一次関西旅行『北齋漫画』の下絵を描く・・・・	349
			名古屋滞在の様子・・・・	349
			谷文晁、北齋の先触れとなる・・・・	350
			またまた馬琴と口論・絶交か・・・・	351
			規矩方円説・・・・	352
文化 10	1813	54 歳	印・亀毛蛇足を譲る・・・・	356
文化 11	1814	55 歳	北齋号を門人に譲り翌年より戴斗号を使用・・・・	358
			尾上梅幸に媚びず・おじぎ無用・みやげ無用・・・・	358
			北齋はとかく人の真似をなす・・・・	358
			この頃の弟子 250 名以上・・・・	359
			『北齋漫画』初篇刊行・・・・	359
			『北齋漫画』一冊 銀二匁八分・・・・	360
			艶本名作『喜能会之故真通』・・・・	364
文化 12	1815	56 歳	馬琴との連携終わる・・・・	367
			北さいも筆自由に候へ共、己が画ニして 作者ニ随ハジ・・・・	368
			主号としての戴斗号現る・・・・	368
			三つ割の法を説く・・・・	370
			北齋翁、割り出しに精しかりし・・・・	371
文化 14	1817	58 歳	阿栄嫁ぐか・・・・	377
			第二次関西旅行・・・・	377
			二度目の大達磨を描く・・・・	377
			屁くさいの芝居がかった借金申し込み状・・・・	379
以下文化年間			文化初期から西洋銅版画に関心を示す・・・・	383
			潮干狩図の謎・・・・	430
			北齋作品の重要文化財指定第 1 号・・・・	431
			為一翁は曲画を善す・・・・	434
			「北齋筆」の落款と印葛飾は二代目北齋か・・・・	461
文化/文政 1	1818	59 歳	彼人ハちとむつかしき仁故、『北越雪譜』の 挿絵ならず・・・・	474
			2.3 月頃、牧墨僊宅から伊勢・紀州・大坂・京都へ 行き江戸に帰る・・・・	474
			翁は葛飾一族の画祖なり・・・・	475
			初の大大判鳥瞰図・・・・	477
			北齋、蕙斎の一覧図を窃かに笑う・・・・	477
文政 2	1819	60 歳	戴斗を北泉に譲り、為一号を翌年から用いる・・・・	479
文政 3	1820	61 歳	為一前期・・・・	484
			この頃より為一号を用いる・・・・	484

			阿栄、夫の絵を笑い離縁・・・・・・・・・・	484
			阿栄、応為（オーイ）と号し、美人画に長ず・・	485
文政 4	1821	62 歳	四女阿猶没か・・・・・・・・・・	491
			北斎の挿絵一枚金一分二朱・・・・・・・・	491
			連想遊びの狂歌本・月癡老人為一号を用いる・・	492
			落款に年齢を記す・・・・・・・・・・	498
文政 5	1822	63 歳	長女阿美与、離婚して孫と同居する・・	499
文政 6	1823	64 歳	川柳デビュー 俳号卍を用いる・・	508
			北斎の川柳・・・・・・・・・・	508
			長女阿美与没・・・・・・・・・・	515
			『誹風柳多留』に序文を書く・・・・・・・・	515
文政 9	1826	67 歳	北斎工房の絵、大量に海外へ・・・・・・・・	523
			シーボルトが持ち帰ったとされる 15 図・・	523
			文政 9 年頃、フランス国立図書館蔵の北斎に 関わる作品 25 図・・・・・・・・	526
			更に「江戸の風景」6 図発見・・・・・・・・	531
			大英博物館所蔵の素描・・・・・・・・	533
文政 10	1827	68 歳	卒中を患うも自家薬で回復する・・	536
文政 11	1828	69 歳	シーボルト事件勃発・・・・・・・・	538
			妻こと没す・・・・・・・・	541
			ドラ孫を永寿堂に奉公に出す・・・・・・・・	541
			「水滸伝」は北斎の画で売れる・・	542
			挿絵はさすがに北斎なれば評判よろしく・・	542
文政 12	1829	70 歳	ベロリン藍が輸入され使用される・・	545
			またまた馬琴の批判・・・・・・・・	547
			新発見の下絵集・・・・・・・・	548
			為斎の作画か・・・・・・・・	549
以下 文政年間 以下 文政後期～ 天保前期			酒を嗜まず、茶を好まず、絵に似たる画を書く。 真をはなれて真を写す・・・・・・・・	556
文政/天保 1	1830	71 歳	為一後期 錦絵の時代・・・・・・・・	561
			どら孫の尻拭いと窮乏生活・・・・・・・・	561
			北溪の絵手本を北斎名で出版・・・・・・・・	562
			文政 4 年に続き落款に年齢を記す・・	563
天保 2	1831	72 歳	この年の信州小布施・高井鴻山宅に寄宿するは疑問 564 真実の虚構か、虚構の真実か『富嶽三十六景』・・	567
			表富士 36 図・・・・・・・・	568
			追加された 10 図（裏富士）・・・・・・・・	583
			落款の謎・・・・・・・・	586
			「極」印・「改」印の謎・・・・・・・・	587
			永寿堂の広告・富士の形、異なる事を示す・・	588
			富士講・講元の永寿堂の策略・・・・・・・・	588
			富士の頂角、広重は 85 度、北斎は 30 度くらい・・	588
			ベロ藍の発見・・・・・・・・	588
			ベロ藍とは・・・・・・・・	589
			ベロ藍の絵で流行おびただしく・・・・・・・・	589
			あれこれ印の使い分け・・・・・・・・	590
天保 3	1832	73 歳	長女阿美与の元夫 柳川重信没す・・	595
			鶏の足跡が竜田川の紅葉に・・・・・・・・	595

			立田川の紅葉絵は失敗だったか・・・・・・・・ 596
天保 4	1833	74 歳	広重 保栄堂版東海道五十三次刊行・・・・・・・・ 600 歌川広重、北斎と会った?・・・・・・・・ 600 『北斎漫画』パリに到着・・・・・・・・ 601 この頃の北斎の評判・・・・・・・・ 601 総て総身に画法充満したる人・・・・・・・・ 602 余の美人画は、阿栄におよばざるなり・・・・・・・・ 603 阿栄の絵、気韻生動、筆力非凡なり・・・・・・・・ 603 年齢入り落款を以後継続して記す・・・・・・・・ 615
天保 5	1834	75 歳	画狂老人卅期 80代から肉筆画に傾注・・・・・・・・ 618 愚老も久々疝痛にて、未歩行不相成候・・・・・・・・ 618 卅に改め、北斎なることを知らず・・・・・・・・ 619 どら孫を自立させるも、依然物入りの生活・・・・ 619 イメージとアイデアが縦横に広がる富嶽百景・・・・ 630 色をすて、墨色の濃淡で大地の空気が動く・・・・ 630 真面目の画訣この譜に尽せり・・・・・・・・ 630 己六歳より物の形状を写の癖ありて・・・・・・・・ 631 初めて川柳の号である「卅」の落款を用いる・・・・ 631 歌川広重、北斎の富士を評価する・・・・・・・・ 636
天保 6	1835	76 歳	浦賀に蟄居・・・・・・・・ 638 『唐詩選』の画料の残額を請求・・・・・・・・ 638 旅先の旅住之場所は、したゝめ不申候・・・・・・・・ 639 百歳の頃は、画工の数にも入るつもり・・・・・・・・ 640 投米会で糊口を凌ぐ・・・・・・・・ 640 『武者絵』の画料、金一両と銀四十二匁を受け取る 640 天保飢饉を肉筆画帖等で乗り切る・・・・・・・・ 641 富嶽百景三編以後、肉筆画に傾注・・・・・・・・ 649 表題の表記の異同『百人一首うはがゑとき』・・・・ 655 『百人一首うはがゑとき』の版下絵・・・・・・・・ 660
天保 7	1836	77 歳	秋頃まで浦賀に逗留・・・・・・・・ 668 歌川風の鼻、どうぞ此のやうにならぬやうに・・・・ 668 北斎の晩年の支援者・高井鴻山と出合う・・・・・・・・ 669 北斎の細密画批判に反論、不学者の論一笑に 備ふのみ・・・・・・・・ 670 酔中筆の拙き画・・・・・・・・ 672
天保 8 年	1837	78 歳	林町から本郷に住むか・・・・・・・・ 674 天保 8・9 年は作画減少・・・・・・・・ 674 放蕩孫没か・・・・・・・・ 674
天保 9	1838	79 歳	天保 9 年の浮世絵等の価格・・・・・・・・ 675
天保 10	1839	80 歳	この頃、家には飯器なし。土瓶、茶碗 二、三個あるのみ・・・・・・・・ 677 初めて火災に遭う。此の頃の貧苦は、殊に甚しかりし 677 車一台分の縮写(スケッチ)の図を消失・・・・・・・・ 677 生涯の肉筆画 1326 点、80 歳以降 134 点・・・・・・・・ 677 北斎の孫、多知女に結婚祝いの「鯉図」を贈る・・・・ 677 西瓜図の謎・皇室との関わりは?・・・・・・・・ 678 曲亭馬琴、失明するも『八犬伝』執筆に意欲・・・・ 683
天保 11	1840	81 歳	最後の一枚鳥瞰図・・・・・・・・ 683
天保 12	1841	82 歳	阿栄、其の品行は頗る正し、常に翁の傍にありて、

			孝養怠りなし・・・・・・・・・・・・・・・・・・	686
			『新編柳樽』に序文を書く・・・・・・・・・・	687
天保 13	1842	83 歳	柳亭種彦、取り調べで北斎の所業を口にせず	689
			七代目市川団十郎、江戸拾里四方処払	690
			一両が 6 貫 5000 文となる	690
			榎馬場の仮住まいの様子	691
			その部屋、物置と掃溜と、一様なるが如し	691
			礼儀礼譲をなすことを好まず	691
			猫一疋も描くこと能わず、己及ばずとて自棄てん	
			とする時は、即これ其の道の上達する時なり	692
			読本挿絵の評判遠のくも、絵に於ては天下絶品	692
			小布施に行く 八の字のふんばり強し夏の富士	692
			小布施訪問はいつか	693
			小布施訪問の目的は	693
			高井鴻山の北斎の印象	693
			小布施までの道のり	694
			北斎の自画像	694
			北斎自画像とアゴの四角ナ女	695
			北斎作品の重要文化財第 3 号・孫なる悪魔を	
			払う「日新除魔」	699
			文化庁の「国指定文化財等データベース」の記事	699
天保 14	1843	84 歳	浮世絵一枚 20～30 文	702
			転居 60 回	702
			阿栄の「関羽図」松代にあり	702
			小布施での除魔図作画の様子	705
以下天保年間				
天保/弘化 1	1844	85 歳	長寿番付に入る	719
			二度目の小布施行きにお栄を伴ったか	720
			自らの誕生の年月日を示す	720
弘化 2	1845	86 歳	阿栄を伴い三度目の小布施行きか	726
			小布施行きの謎	726
			牛嶋神社の額絵復活	727
			牛嶋神社にあったもう一つの額絵	729
			鬼ヶ島図のスケッチ	729
弘化 3	1846	87 歳	大坂の偽北斎・百歳の余までハ、死亡之沙汰ハ、	
			まづ休みに仕候	733
			犬北斎はあっても、北斎名に二代目なし	733
			紺縞の木綿を着、六尺の天秤棒の杖と草履履き	734
			画風公聴に達す	734
			めがねをかけず、背も曲がらず、健脚の達者	734
			雨でも草履、法華経を唱え歩き、雑談を厭う	734
			病気再発する	735
			最後の読本挿絵	735
弘化 4	1847	88 歳	松代藩士宮本慎助に「日新除魔」の絵を渡す	737
			この年応為は 50 余歳か	738
			長寿の菓	738
			この頃から「百」に執着	739
			蚊帳を売って観劇する	739
			この年、広重と接触したか	739

			鳳凰図天井絵下絵・・・・・・・・・・・・・・・・	740
			鳳凰状・・・・・・・・・・・・・・・・	741
			中島鉄蔵藤原為一の落款・・・・・・・・	745
以下弘化年間	1848	89 歳	馬琴没す・・・・・・・・	748
弘化 5/嘉永 1			長寿会では自分が一番壮健・・・・・・・・	749
			北斎デザインの立体造形物・・・・・・・・	749
			四度目の小布施行き・・・・・・・・	749
			北斎の画は「画」というしかない・・・・・・・・	749
			北斎、終焉の地に移る・・・・・・・・	750
			本間北曜、晩年の北斎の弟子になる・・・・・・・・	750
			93 回の転居をする・・・・・・・・	750
			転居三百、百庵にならひ・・・・・・・・	751
			身体は壮健、歩行は自由・・・・・・・・	751
			金銭を得るも、消費すること土芥のごとし。	
			常に赤貧・・・・・・・・	751
			画法・画論を展開する『画本彩色通』	752
			油絵具の調法を示す・・・・・・・・	752
			己六歳より八十八年独立して、心に怠らざりし事	752
			陰影法について・・・・・・・・	753
			九十歳よりハまた々画風を改め、百才の後に	
			いたりてハ此道を改革せん・・・・・・・・	753
			制作年の分かる最後の摺物・錦絵	755
			小布施にある北斎画・・・・・・・・	758
嘉永 2	1849	90 歳	画工北斎 此せつ大病のよし	759
			北斎逝く・・・・・・・・	759
			天我をして五年の命を保たしめば、真正の	
			画工となるを得べし・・・・・・・・	760
			親族等の会葬無くも多くの参列者あり	760
			『北斎漫画』十三編の刊行年はいつ？	761
			『北斎漫画』まねもならざる画風の筆癖	762
			翁の遺墨若干葉を画本中に補い入れて十五編とする	768
			北斎最後の傑作・・・・・・・・	766
以下、江戸時代（年代不詳）				766
北斎没後				768
嘉永 6 (1853)			応為の菊図。鴻山の菊図の謎	769
春峯庵事件				775
参考資料：阿栄（応為）				775
			・お栄、画をよくし、土木偶を作るに妙手で、火事を好む	775
			・北斎没後、阿栄はどこでなにを、そして、いつ没したか	775
			・応為の作品（広義の北斎作品を含む：北斎の制作に阿栄が手を加えたと考えられるもの）	776
以下、制作に関わったと思われる作品				780
葛飾北斎末裔				781
判型				784
北斎作品を所蔵する美術館等				785

宝暦10 (1760) 庚辰 1歳 時太郎

◇2月6日、宝暦の大火。神田旅籠町明石屋卯兵衛より出火。市村座〈境町。現東京都中央区日本橋芳町二丁目と人形町三丁目辺〉と中村座（葺屋町。現東京都中央区人形町三丁目辺り）が焼失。中村座は3月に新築、再開する（小池章太郎『考証江戸歌舞伎』三樹書房より）。

◇宝暦期に江戸に居酒屋が多く出来始める（飯野亮一『居酒屋の誕生 江戸の呑みだおれ文化』ちくま学芸文庫より）。

◇長崎オランダ商館の江戸参府（寛政元年：1789まで毎年参府する）。

◇徳川家治、10代将軍となる。

【誕生の謎】

★9月23日、葛飾郡本所南割下水に生まれたとされる（飯島虚心『葛飾北斎伝』鈴木重三校注 岩波文庫版 p31 以下、『葛飾北斎伝』と表記）。

※南割下水は、現江戸東京博物館前から墨田区錦糸4丁目10番付近までの下水で、現在は暗渠となり「北斎通り」と呼ばれる。この辺りの本所亀沢二丁目辺が誕生地と推測される（現東京都墨田区亀沢2-15-10辺）が、確証はない。

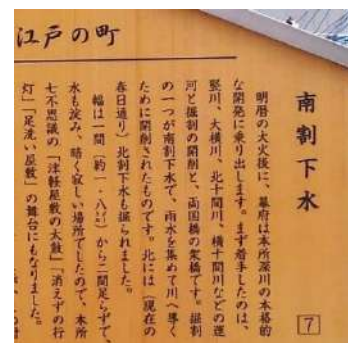
【南割下水 明治41年頃 / 「墨田の今昔—写真カタログ—」資料提供：墨田区立 緑図書館】



★本所の渡し場を豎川といい、この豎川より北に北割下水（現春日通り）、その南に南割下水があった。この辺り一帯は葛飾と呼ばれていた。両割下水とも幅九尺（約272.7cm）で主に排水用であったらしい（墨田区の説明では、1間〈1.8m〉から2間としている）。

墨田区緑町公園の案内板

当時、長屋の裏店は二軒が向かい合って建ち、1m程度の路地の真ん中に下水が流れているのが一般的だが、南割下水はそれより少し広い堀川のような様子であり（明治期の写真による）、昭和初期に埋めたてられた。



北齋がどのような家に住んでいたかは不明だが、おそらく幼少期は長屋であったと思われる。当時、長屋の家賃は安く、職人なら三日程度で稼げる額であった（『江戸から東京へ』東京都教育委員会編、平成23年：2011年度版）。

棟割長屋の内、一般的な九尺二間の裏長屋注1は月500文（約12,500円）、戸無し長屋注2や老朽化した長屋、なめくじ長屋注3等は月300文（約7,500円注4）。土方の日当は300文（約7,500円）なので、2日働けば一般的な長屋の家賃が払えた。ちなみに、平均月15日の労働だったらしい（『大江戸万華鏡』ひとつくり風土記^[13] ^[14] 農文協）。

注1) 裏長屋：表通りの裏に造られていたので、こう呼ばれた。間口九尺（約2.7m）二間（奥行約3.6m）。四畳半一間、台所と玄関を兼ねる土間。隅に枕屏風。奥が取り外しのできる雨戸つき。

注2) 戸無し長屋：開く所は入り口のみで部屋の三方は壁で仕切られている。

注3) なめくじ長屋：現東京都墨田区業平1-7-2の小梅銭座跡辺にあった最下等の長屋。水はけが悪く、風通しも悪いので、ナメクジが大量に発生するといわれた長屋。

【当時の銭相場】

注4) 1文=25円で換算した。本来米相場で換算するのが一般的だが、本稿では蕎麦一杯16文（現在のかけ蕎麦：400円程度）の庶民相場を現在（2018年現在）の相場に当てはめた。因みに一両は江戸中期の平均5000文（5貫文）なので約125,000円であった。いうまでもなく同じ江戸期でも時代によって貨幣価値は異なる。天明期には一両は6000文（6貫=約150,000円）となり、江戸後期の天保13年（1842）には銭相場公定で、一両6500文（6貫500文=約162,500円）と定められた。

【北齋の父母の謎】

★北齋の肉筆画「大黒天図」（天保15/弘化元年：1844。現在所在不明。弘化元年条参照）の落款に「天保十五年甲辰子ノ月甲子ノ朔日子ノ刻 宝曆十庚辰年九月甲子ノ出生」（旧曆1760年9月23日。西曆1760年10月31日出生）とある。また『浮世絵類考 補記』（式亭三馬著）には「本所ノ産」とある。⇒天保15年（1844）「大黒天図」参照。

★北齋の父については、北齋の墓の傍らに刻された「川村市良衛門」（石工・仏師。号：仏清）を指して「蓋し市良衛門」は、北齋の父の俗名にして」とある。（『葛飾北齋伝』p178）。

但し、川村家は後妻のこと女の実家であり、川村市良衛門が北齋の父ではないとする説もあり。

【北齋の父は中島伊勢、母は小林平八郎の孫娘か】

★一方で、同『葛飾北齋伝』では「父は、徳川家用達の鏡師にして、中島伊勢といひ、母は、吉良上野介の臣、小林平八郎の孫女なり」（p31 ルビは筆者、以下同じ）とも述べている。「北齋常に我母は小林平八郎の孫女なりと語りたるよし」（p32）とも伝える。

★『浮世画人伝』（関根黙庵著・明治32年（1899）刊。p108）による出生記事では「父は中嶋注伊勢とて、幕府用達鏡師なりき。母は吉良上野介義央（「よしなお」とも）の家臣

小林平八郎とて、武芸絶倫の聞えありしが、孫女とかや。平八郎は、元禄十五年、赤穂の義士復讐の夜に、防戦して斃れしが、この時八歳なる女子一人あり、吉良家滅亡の後、親戚に寄りて成長し、他家に嫁して女子を産めり。此の女子中嶋伊勢の妻となりて、宝暦九卯年正月三日、本所割下水の家に北斎を生みたり」（筆者注「宝暦九卯年正月三日」は誤り）とある。

注）「中島」は「中嶋」とも表記されるが、本稿では、多くの論考が使用している「中島」と表記する。

※上記記事から、小林平八郎の孫娘は四代目中嶋伊勢（32歳）の妾で、伊勢は翌年の宝暦11年（1761）に本所松坂町（現東京都墨田区両国3丁目）へ移るまで、神田乗物町の自宅から割下水の妾宅へ通い、ここで北斎は誕生したとする説もある。

★安田剛蔵『画狂北斎』（昭和46 有光書房）では、曲亭馬琴が文化5年（1808）5月23日の北斎の手紙注の余白に朱記した「叔父御鏡師中嶋伊勢が養子になりしか」の文の「叔父」に注目して、次のような考えを示している。

「しかし、筆者が推定するように川村氏某女が中嶋伊勢の二号となって北斎を生んだのが事実とすれば」（p34）という前提で、「北斎の父である伊勢は実子がなくて、或はあっても夭折して家督相続人がなかつたため実弟が直つて当主の伊勢を継いだのであろう。ところが当主の伊勢がまた同じような事情に立ち至つたので、相続人を選ぶに当り血脈の絶えることを憂えて兄の妾腹の子である北斎に白羽の矢を立てたのであると考えられる」（p37）としている。すなわち、川村家の娘が中嶋伊勢の妾となり北斎を生み、伊勢の弟が養子にしたとする。

※同書では「当の北斎は曾て川村氏を称したことはなく、生涯中島氏を称していたことは厳然たる事実である」の述べている（p33）。

注）北斎の手紙：自分宛の書簡を曲亭馬琴は丁寧に保管していたが、それを川瀬一馬が昭和18年（1943）に『曲亭来簡集』としてまとめた。その中に「朱記」で、「（略）壮年その叔父御鏡師中嶋伊勢が養子になりしが、鏡造りのわざををせず、その子をもつて職を嗣がせしが、そは先だちて身まかれり」と記されている。

【北斎の兄妹】

★誓教寺の北斎の墓の側にある川村市良衛門の墓の右側には、北斎誕生前に早逝した兄（微陽童子。宝暦九己卯年〈1759〉三月二十四日に没）と兄（微緑童子。宝暦三癸酉〈1753〉四月朔日没）、および妹（春巖童女。明和三丙戌〈1766〉二月二十二日没）が記されている。

「蓋し市良衛門は、北斎の父の俗名注にして、此の童子童女は、皆其の子なるべし。されば微陽童子、微緑童子は、北斎の兄にして、春巖童女は、妹なるべし」（『葛飾北斎伝』p 廻178）。

※童子童女名のふりがなは本稿筆者による仮の読みかたである。

注）北斎の父の俗名として：市郎衛門は「仏清」とも称したとされる。北斎は初め仏清の

墓に埋葬され、後に北斎の孫である白井多知女、あるいは多知女の子の加瀬昶次郎により建てられた墓に移されている。現存するこの墓の基石には「川村氏」と刻まれている。

【北斎の実父は川村家の長男か】

瀬木慎一『狂人北斎』（講談社現代新書）では、北斎の父は川村家の長男であるとする。川村家の二男が鏡師の中島家に養子に入り伊勢と称したが、子がなかったので北斎が中島伊勢の養子に入ったとしている。

宝暦11(1761) 辛巳 2歳 時太郎 (8歳までの幼名)

◇山東京伝生 (～1816)。

◇葺屋町(現東京都日本橋人形町三丁目辺り)の操り人形の結城座より出火。同所にあった市村座も昨年に続き類焼した(小池章太郎『考証江戸歌舞伎』より)。

宝暦12(1762) 壬午 3歳 時太郎

◇相撲興行(3月、深川八幡境内：現東京都江東区富岡1-2)。

※以下、相撲興行の記録は「資料館ノート 第106号」(江東区深川江戸資料館 平成26年11月16日発行)及びWikipedia「本場所の一覧」による江戸相撲に限る。

宝暦13(1763) 癸未 4歳 時太郎

◇相撲興行(4月、神田明神 10月、浅草八幡宮)

◇5月5日、小林一茶生(～1828)。

◇平賀源内、『物類品隲』(2巻)で、ペルシャン・ブルー注を初めて紹介する。この色は、

後に北斎や他の画工が好んで使用するようになる。

「ベレイン ブラーウ 紅毛人持来ル。扁青(注：青い水晶状の結晶)ニ似テ(略) 扁青ニ比スレバ色深クシテ甚 鮮ナリ(略)」(早稲田大学デジタル版による)

注) ペルシャンブルー：1704年、ドイツ・ベルリンにおいて、ディースバッハによって発見された。一般に、ベルリン・ブルー、あるいはペロ藍と呼ばれる。天保2年の項参照。

【鏡師の養子の謎】

★中島伊勢(幕府御用鏡師)の養子となる。伊勢は北斎の叔父という(『江戸の奇才 北斎展 葛飾北斎とその弟子たち』島根県立石見美術館 2005年 所収の永田生慈の記述を『永田生慈 北斎コレクション100選』P5(島根県立美術館 2019年)で紹介)。

※中島伊勢は幕府御用達で、それなりの地位と名誉があったと思われる。お目見格として登城も赦される身分で、吉良家取り潰し後に、その西北一帯を御鏡の工房として拝領を許可され、本所松坂町に移転したとされる。

※宝暦10年版『宝暦武鑑』に〈御鏡師かんだのり物丁 中嶋伊勢〉とあり、宝暦12年版

『宝暦武鑑』に〈御鏡師 本所松坂老丁目中嶋伊勢〉とあるので、中嶋伊勢は宝暦12年には本所松坂町の元吉良屋敷の一面に移っている(現東京都墨田区両国3-7-5 松坂町公園辺)。

※鏡は銅と錫の合金で形を造り、表面の鑄造面を磨き、水銀と明礬・砥粉を混ぜたものを塗り、磨いて鏡としたもので、変色したり曇ったりするため常に磨く必要があった。鏡師は鏡面を磨くのを主な仕事とした。

鏡師の仕事場と鏡 (WEB「江戸散策」17回より〈深川江戸資料館〉)



★8歳までは時太郎と名乗ったか。

【養子に入ったのは20歳頃?】

★『曲亭来簡集』(月之巻画工之部)別添朱記(宝暦10年〈1760〉条参照)に「壮年その叔父御用鏡師中嶋注伊勢が養子になりしか鏡造りのわざをせず。その子をもつて職を嗣かせしか、そハ先たちて身まかれり」(筆者注:「その子」は北斎の長男・富之助を指す)とある(「国立国会図書館デジタルコレクション」より)。

注)中嶋:表記は「中嶋」「中島」とされることが多いが、本稿では「中島」と表記する。

※通説では、15・6歳頃には中島家を出る。北斎は結婚後、長男富之助を中島家に入れ、その職を継がせたというのである。

※田崎暘之助『浮世絵の謎』では以下の説を展開している。

『曲亭来簡集』(月之巻画工之部)別添朱記の「壮年その叔父」部分に着目し、当時の壮年は馬琴が好んで用いる言葉で、15歳から20歳くらいを「弱壯」と呼んでいることから「壮年」は20歳から30歳前後を指すとして、「北斎が中島家へ養子に入ったのは通説の五・六歳ではなく、二十歳から三十歳前後だったことになる」(p148)としている。

この説によれば、北斎は養子のまま、19歳で勝川春章に入門したことになる。あるいは、4・5歳で養子になり、数年で中島家を出、やがて20歳頃に再び中島家に入ったが、それは形だけの養子で、後に結婚後に長子富之助を代わりに養子に入れ、自らは絵師の道に進んだことかもしれない。

また、伊勢を叔父とするところから、北斎の父は川村家の長男で、川村家の二男が中島家の養子になったが子がなかったため、北斎が叔父の養子に入ったとする説がある(瀬木慎一『画狂人北斎』講談社現代新書 p23)。⇒宝暦11年【北斎の実父は川村家の長男か】参照

宝暦14/明和1 (6/1~) (1764) 甲申 5歳 時太郎

- ◇4月19日、江戸深川三十三間堂注の通し矢あり。12歳の久保田源太が雷雨の中、4月18日の酉の刻（午後6時）から4月19日の未の刻（午後2時）までに14,320射中11,638本を通す。但し、正規の120mの半分の60mの距離であった（墨田区「下町文化」264号）。
- 注）深川三十三間堂：深川（富岡）八幡宮（現東京都江東区富岡 1-20-3）の東側にあった。
- ◇相撲興行（3月、浅草八幡宮、10月、深川八幡境内）。
- ◇琉球使節来朝（将軍家治即位の慶賀使）。

明和2(1765) 乙酉 6歳 時太郎

- ◇相撲興行（10月、深川八幡境内）。
- ◇十返舎一九生（～1831）。
- ◇この頃、伊藤若冲が「動食綵絵」（群魚図）でベロ藍を最も早く使用したとされる。

【絵暦・錦絵誕生】

◇鈴木春信（1725?～1770）が絵暦注を描き、この年から翌年に掛けて新年挨拶として俳諧趣味人の間で絵暦のデザイン（大小絵）を競う交換会が流行し、春信の「清水の舞台より飛ぶ美人」（明和2年）などが錦絵誕生の礎となった。



注）絵暦：その年の大小月を判じ模様のように絵の中に書き入れたもの。裕福な粋人がアイデアを出し浮世絵師が作るようになった。

鈴木春信：清水の舞台より飛ぶ美人（絵暦：足立区立綾瀬美術館 ANNEX）

【六歳より物の形を写す】

★この頃より好んで物の形を写す。天保5年（1834）刊『富嶽百景』初編の跋文（後書き）に「己六歳より物の形状を写すの癖ありて」（私は6歳から物の形を画き写す習性があった）とある。

【百歳の後に至りては、此道を改革せんことをのみ願ふ】

★弘化5年（2/28 改元：嘉永元年：1848）刊の絵手本『画本彩色通』初版の自序にも同様の記述あり。「己六歳より八十八年、独立して心に怠らざりし事を、いかでか、今方寸の昏中に演尽すことを得べき。（略）」

同書跋文には「（略）九十歳よりは又々画風をあらため、百歳の後に至りては、此道を改革せんことをのみ願ふ。長寿君子のわが言のたがはざるを知り給ふべし」とある（『葛飾北斎伝』 p 266～288）。

〈6歳から88年間、自分なりに怠らずに絵を描いてきたが、どうやって四角い紙に描き尽くすことができるのだろうか（序文）。90歳からはいっそう画風を改め工夫して、100歳以降は絵の道を更に突きつめ改革することを願っている。どうぞ長寿の神よ、私の言うことに嘘はないと御承知ください（跋文）〉（以上、筆者による意訳）。

明和3(1766) 丙戌 7歳 時太郎

◇相撲興行（10月、深川八幡境内）。

【妹没】

★妹没（春巖童女。名は「春」か。年齢不詳）。北斎の墓所・誓教寺（浄土宗：東京都台東区元浅草4-6-9）の過去帳には春巖童女について「施主 川村市郎右衛門」の名があるという。

※『葛飾北斎伝』（p176）によれば「按ずるに、画狂老人の墓の傍に、古き碑石あり。正面に、春巖童女、明和三丙戌年二月二十二日」とある。

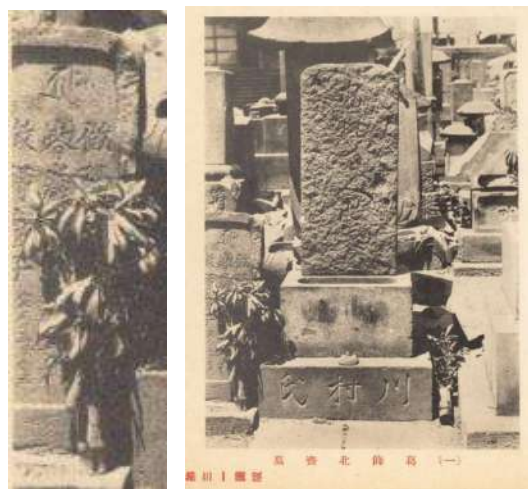
北斎墓の左にある春巖童女たちの古い碑石：現在は無い（<https://okab.exblog.jp> より転載）

明和4（1767）丁亥 8歳 時太郎

◇相撲興行（3月、深川八幡境内、10月、深川八幡境内）。

【生涯関わる曲亭馬琴誕生】

◇曲亭馬琴、6月9日、深川（現東京都江東区平野1-7-8 付近の松平家邸内）で生まれる。父は旗本松平信成の用人滝沢興義（下級武士）、五十石取り。母は細川家の家士吉尾門左衛門の女もん。名は興国。字は、瓊吉。通称、清右衛門。別号：著作堂主人、蓑笠漁隠、愚山人など。更に解と改名（～1848）。北斎と馬琴は良くも悪くも生涯関わりを持つことになる。



○10月、役者評判記『明和伎鑑』（淡海三磨〈栗本兵庫〉著。勝川春章画。伏見屋清兵衛版か）が「河原乞食の事を天下鎮撫の武家に擬して述作するなどは、公儀を畏れない不届至極の者なり」（大田蜀山人『半日閑話』明和六年条）として作者淡海三磨は遠島・流罪となる。挿絵の勝川春章は咎めなし（宮武骸骨『筆禍史』より）。

○大田南畝（四方赤良 1749～1823）、19歳で狂詩狂文集『寝惚先生文集』を刊行。

○河村岷雪（生没年不詳）、『百富士』（早稲田大学図書館蔵）。後年の北斎の『富嶽三十六景』『富嶽百景』に影響したとされる。

明和5（1768）戊子 9歳 中島鉄蔵

◇1月13日、本所出火により江戸大火。

◇12月4日、麴町出火により江戸大火。

◇12月11日、白隠禪師没（84）。

◇相撲興行（9月、本所回向院境内、11月、市ヶ谷八幡宮）。

【美人で評判の笠森お仙たちのブロマイド】

◇江戸谷中の笠森稻荷（福泉院にあった稻荷神社。その跡に功德林寺が建立される。現東

京都台東区谷中7-6-9) 参道にあった鍵屋という水茶屋の女お仙(笠森お仙)は、美人と評判で、一筆斎文調(「笠森お仙茶屋図」出光美術館蔵)や鈴木春信(「お仙の茶屋」「お仙と菊之丞とお藤」東京国立博物館蔵。「お仙茶屋」立命館大学図書館蔵)らが多く描いた。大円寺(ここにも谷中のもう一つの稲荷神社があった。東京都台東区谷中 3-1-2)に、大正 8 年に永井荷風により建てられたお仙の碑がある。大円寺に碑があるのは、永井荷風が福泉院と混同したためといわれる。お仙の墓は正見寺(東京都中野区上高田1-1-10)にある。

同様に、浅草奥山(浅草寺裏一帯で見世物小屋が多くあった)の銀杏下の楊枝店・柳屋おふじ(銀杏おふじ)、浅草二十軒店(浅草寺仲見世)の大和茶屋・蔦屋お芳も美人で、明和の三美人といわれた。いずれの美人も浮世絵美人画としてプロマイドのように売り出されたと思われる。

○上田秋成、『雨月物語』成稿。

【中島鉄蔵を名乗る】

★中島家の養子としてこの頃に鉄蔵を名乗ったか。

※リチャード・レイン『伝記画集 北斎』(p7)では明和9年(1772)頃より鉄蔵を名のつたとする。

明和6(1769)己丑 10歳 中島鉄蔵

◇相撲興業(4月、深川八幡宮、10月、深川八幡宮)。

◇6月15日、山東京伝(浮世絵師名：北尾政演)生(～1816)。

◇10月12日、青木昆陽没(72)。

◇10月30日、賀茂真淵没(63)。

◇唐衣橋州(1743～1802)、四方赤良(大田南畝〈蜀山人〉1749～1823)らと四谷の座敷で初の狂歌会を開き、後の狂歌盛行の基をなす。

◇ツンベルグ注、江戸で浮世絵を買う(その内、鈴木春信の2図がスエーデンに現存しているという(『在外日本の至宝』7巻「浮世絵」所収の檜崎宗重「末期浮世絵史潮」p121)。

注) この記事にあるツンベルグが、安永4年(1775)8月13日に来日し、翌安永5年(1776)11月23日まで滞在した植物学者カール・ペーター・ツンベルグ(Carl Peter Thunberg 1743～1828 ツェンベリーとも)と同一人物かは不明。年代が合わない。

明和7(1770)庚寅 11歳 中島鉄蔵

◇この頃、江戸で釣りが流行。類似本に続き、この年、釣りの指南本『漁人道志るべ』(玄嶺老人著)が刊行される。佃島、鉄砲洲、洲崎、中川、品川の釣り場、他に隅田川百本杭(両国橋北側に水流を和らげるために百本の杭を水中に打った場所。現東京都墨田区両国 1 丁目～横網2 丁目の隅田川沿い)辺の鯉釣り、春の彼岸頃の鮒釣り、八十八夜過

ぎの中川の鱧釣りなどを紹介している(林綾野・美術出版社『浮世絵に見る江戸の一日』などによる)。天明期には釣りの隆盛につれ、釣り具も豪華となったという。

◇6月15日、鈴木春信没(46)。

◇鳥居清長(1752～1815)、細版注役者絵を始める。細判は明和から寛政期の役者絵に多く用いられた。

注)細判:小奉書(33.3 cm×47.0 cm)を横にして縦に三つ切りにしたサイズ(約33.3 cm×15.6 cm)。

◇相撲興行(3月、芝西久保八幡宮、11月、市ヶ谷左内坂長龍寺)

【役者似顔絵確立】

○一筆斎文調(1725?～1794?)と勝川春章(1743～1792)合作の役者似顔絵「繪本舞台扇」(雁金屋伊兵衛版。大英博物館蔵)により役者似顔絵を確立。扇型の枠の中に半身像を描き、枠外に役者名と、演じる俳名を描くという写実表現が誕生した。好評によりすぐ同年に改編・再摺版が出た。

明和8(1771)辛卯 12歳 中島鉄蔵

◇2月25日、日本橋村松町よりの出火で江戸大火。

◇相撲興行(3月、深川御船蔵八幡境内(現東京都江東区新大橋2丁目)、10月、深川八幡宮境内)。

◇3月4日、杉田玄白・前野良沢・中川淳庵ら、ドイツ解剖学者クルムス(Kulmus, Johann Adam 1689～1745)の『解剖図譜』(Anatomische)のオランダ語訳『ターヘルアナトミア』(原題:Anatomische Tabellen)を見ながら、小塚原刑場(現東京都荒川区南千住2-34-5延命寺辺)での腑分け(人体解剖)を実見する。安永3年(1774)に、この3人により『解体新書』として翻訳される。

◇6月4日、歌人・国学者:田安宗武没(57)。

◇百姓一揆・村方騒動(農民が村役人等の不正を暴いて領主に訴えることをいう)・都市騒擾等が全国で増加(東京都教育委員会『江戸から東京へ』平成23年度版所収、青木虹二『百姓一揆総合年表』より)。

◇江戸深川洲崎弁天前(現東京都江東区木場6-13-13)に懷石料理店「升屋」(望汰欄)が開業。

◇この頃より、役者絵は一筆斎文調の人気から勝川春章の人気に移る。

明和9/安永1(1772)(11/16～)壬辰 13歳 中島鉄蔵

◇1月、田沼意次、老中に登用さる。

◇2月29日、目黒の大円寺(現東京都目黒区下目黒1-8-5)より出火、江戸市中の3分の1を焼失したといわれる。行人坂(目黒区下目黒1丁目付近)の大火とよばれる(ツンベルグ『江戸参府随行記』p170)。死者14,700人、行方不明者4,060人といわれる。

◇8月、大風雨災害。「年号は安く永くとかはれども諸色（物の値段）高くて今は明和九」という落首が出たという（尾崎周道『北斎 ある画狂人の生涯』 p23）。

◇相撲興行（11月、本所回向院境内注）。

注）本所回向院：現東京都墨田区両国 2-8-10。明暦3年（1657）の大火（振袖大火）の犠牲者を祀ったのが始まりの寺。

◇一筆斎文調、役者絵をやめる。以後の動向不明。

【浮絵確立】

○歌川豊春（1735～1814）、浮絵「江戸名所上野仁王門之図」（錦絵：永寿堂版）を描く。上野仁王門はこの年9月に焼失しているの、それ以前の作ともいう。豊春は明和8・9年（1771～72）頃からオランダ画法を参考にするなど透視画法（遠近法）を確立する。

【貸本屋で働く】

★中島伊勢の没後、本所横網町（現東京都墨田区両国1丁目辺。JR両国駅より南東に国道14号までの当たり。現横網町とは別）にも住むか。

「北斎は、実母と何不自由なく暮らしていたが、ある日を境に不遇となったと思われる。す

なわち中島伊勢たる実父の死である。

北斎と実母は、中島家の充分な手当で暮らしていたから、実父の死は生活の貧窮へつながることであった。北斎、幼名を時太郎、後に鉄蔵といった。父の死後、本所横網町に移り、鉄蔵は貸本屋の丁稚となり、たちまち世間の荒波にさらされた」（田崎暘之助『浮世絵の謎』 p162）

★この頃迄に中島伊勢の家を出て貸本屋の丁稚になる（檜崎宗重『北斎芸術論』 p8）。北斎は中島家を出た後も生涯中島姓を捨てなかったという。

★『葛飾北斎伝』（p35）には「一説に、幼時貸本屋某の小奴となり、四方に奔走し、苟暇あれば、貸本の画注をみて自ら書き、遂に画道に志せしともいふ」とあり。

注）画：この字は絵手本その他のルビで「が」と読むことが多いが「え」と読むことも多い。本稿では出典のルビに従うが、ルビが無い場合は「え」と読む。また、「画く」は「かく」ではなく「えがく」と読む事が多いのでそれに従う。但し「画本」は「えほん」と読む。

★安田剛蔵『画狂北斎』（p16）では「（中島伊勢の養子になる）その又以前には、貸本屋の小僧となった事があるように伝えられているが伝説の域を出ない」としている。

★瀬木慎一『画狂人北斎』（p31）では、中島伊勢の養子に入ったのは貸本屋の小僧や彫師の弟子になった後で、勝川春章門に入った19歳以前のこととしている。

【この頃の貸本屋の実態】

★この頃の貸本屋の目玉商品は艶本や話題になった読物であったらしい。江戸の貸本屋は文化5年（1808）5月には江戸12組の組織構成がなされ、世話役33人で、全部で656人い

たという。（『画入読本 外題作者画工書肆名目集』東京堂出版・長友千代治『近世貸本屋の研究』所収 p 43）。

★『地本草紙問屋名前帳』（国立国会図書館蔵）による資料を、江戸東京博物館が紹介しているが、それによれば、本所・深川に 40 軒、浅草に 42 軒、外神田・下谷・湯島等に 64 軒、本町組に 74 軒、小日向組に 33 軒、神田組に 60 軒、日本橋南組に 95 軒、京橋南組に 109 軒、芝金杉・品川・三田・白金に 38 軒、麴町・老幡組に 39 軒、四谷組に 33 軒、さらにその他合わせて 656 軒と紹介している。また、一店で 170 軒から 180 軒の客を持っていたという。

※封切（新刊書籍）本（300 文＝約 7,500 円：1 文 25 円で計算）の値の 3 分の 1 から 6 分の 1 の値で借りられた注。江戸時代後期では一卷 24 文（約 600 円）、古本 16 文（約 400 円）、貸出期間は約 10 日から 2 週間位という（広庭基介「江戸時代貸本屋略史」昭和 42『図書館界』所収）。

注）（ ）内の価格は本稿筆者による換算。江戸期の価格を現在価格に換算するのは容易ではない。江戸末期の平均価格は 1 文＝16.5 円との換算があるが、蕎麦一杯 16 文を現代のかけ蕎麦 400 円と想定し、平成 30 年(2018)時点では仮に 25 円相当とした。上記引用参考資料には現在価格は記載されていない（宝暦 10 年の項参照）。以下、本稿で記載される価格はこれによる。

※貸本屋の丁稚たちは、大風呂敷あるいは笈箱を背負い、更に小さな箱を乗せ、そこに薄物の本を重ねて得意先をまわった。13 歳の北斎が貸本屋の丁稚になった経緯は明らかではないが、それが事実とすれば、「貸本屋は素人も簡単に取りかかることのできる商売であり、初心者が本業を身につけるまでの渡世の手段にしていたこともわかる。したがって、専門の貸本屋ばかりがいたとは決して言い切れないのである」（長友千代治『近世貸本屋の研究』p 36）ということから、とりあえずの仕事に就くということであったのだろうか。動機はともあれ、貸本屋で多くの書物に触れる機会を持ったのは、後の北斎の創作に役だったと思われる。北斎は博識家であった。



『近世貸本屋の研究』より転載

【写本一冊八文で貸す】

※塚原渋柿「江戸時代の軟文学」（大正 2 年：成光館出版部『趣味研究 大江戸 全』所収）では江戸時代末期（万延・文久期）の貸本屋について次のように記している。

「（略）此の貸本屋が、其の得意場として廻るのは、第一が丸の内その他の諸大名の勤番長屋。其れに続いて御旗本御家人の富い家の次三男。町家の楽隠居の柳橋、金春あたりの芸者屋。吉原初め四宿（筆者注：千住・板橋・内藤新宿・品川）の遊女屋などである。

（略）兎に角二百六十大名といふ上中下の屋敷が皆其れであるから（本稿筆者注：諸大名

の勤番が暇であることを指す)、其の貸本の闇がしいこと羽が生えて飛ぶがやう。見たいと云ふ本は一月も前から口を掛けて置かぬと容易に手に入らない。されば貸本屋では、版本などと一々買つては引合ぬから、写本にする、其の写本も、門戸を張つて居る筆耕書きなどに頼んでは費用が掛るからと云ふので、少し繁昌する家では、皆な其の書き人を二人なり三人なり雇つて写させる。然して又其の版本を写本に為せるには、他にも自然ら所以があつて爾來貸本は一部幾許でなく、一冊何文といふ見料で貸したもの、それには版本の細かい字の一冊を四十八文(筆者注:約 1,200 円)で貸すよりも、其れを十冊に写して置させて、一冊八文(筆者注:約 200 円)で貸した方が遥かに割が好い。のみならず、借人の方でも一冊四十八文と云ふよりも、一冊八文、十冊八十文といふ方が、銭は高くても出し心が好い、と云ふ様なので、武王軍談、漢楚軍談、十二朝軍談、太閤記でも、後風土記でも、又新作のものでも、少し出方が闇がしいとなると直ぐ写させる、然して其の写す字は、ツカを取る為(筆者注:嵩を殖すため)長く大きく書く、だから当時の俗諺に、手紙などを一行四五字ぐらゐの走り書きにしたものを、『貸本屋』の字のやうだ、と嘲つたものである(ルビは筆者による)

安永2 (1773) 癸巳 14 歳 中島鉄蔵

◇相撲興行(閏3月、深川八幡宮境内、10月、本所一ツ目八幡御旅所注)。

注) 御旅所: 神が巡行の途中で休憩したり宿泊する所。神社などに設けられ、神輿を安置したり、立ち寄ったりする。一ツ目弁財天(現江島杉山神社: 東京都墨田区千歳1-8-2)か。

◇版元・蔦屋重三郎(1750~1797)、新吉原五十間道注に開業。

注) 五十間道: 吉原大門(現東京都台東区千束4丁目の東側辺)を出た所の曲がった道をいう。

【彫刻家の弟子になる】

★この頃、彫刻家の弟子となる。

※「鉄蔵十四五歳の時、彫刻家某に就き、彫刻を学ぶ」(『葛飾北斎伝』p35 ルビは筆者)。

※安田剛蔵『画狂北斎』によれば、彫刻家に就いたのは16歳から19歳とする(p15)。

※文化5年(1808)5月23日の曲亭馬琴宛北斎の手紙の末にある馬琴自筆の朱書きに「北斎はじめは劂斂(筆者注: 版刻)をまなびしが云々」との文あり。

※北斎は、晩年に一本の髪の毛を小刀で三本に割いてみせたという版刻の技術の賜を示すエピソードがある(定村忠士『いま、北斎が甦る』河出書房新社 p36)。

※彫師は、頭彫(筆者注: 顔面と髪の毛の生え際を彫る)、胴彫(筆者注: 頭彫以外の部分を彫る)、筆耕彫(筆者注: 文字を彫る)の三種があり、北斎は一番下の筆耕彫であったらしい。(『浮世絵八華5 北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」p119)。

安永3 (1774) 甲午 15歳 中島鉄蔵

◇3月18日、建部綾足没 (56)。

◇相撲興行 (4月、深川八幡宮境内、10月、深川八幡宮境内)。

◇鳶谷重三郎、吉原の遊女評判記『一目千本』などの出版を始める。

○前野良沢 (1723~1803) と杉田玄白 (1733~1817)、『解体新書』を刊行。

○長崎のオランダ語通司・本木良永 (1735~1794) 訳『天地二球用法』でコペルニクスの「地動説」が紹介される。

安永4 (1775) 乙未 16歳 中島鉄蔵

◇相撲興行 (3月、深川八幡宮境内、10月、深川八幡宮境内)。

◇5月、講仲間取締令。富士講は、江戸時代に流行した民衆信仰。富士山を崇敬する人々で構成する。浅間講ともいう。般若心経などを唱えて富士に登山し祈願することを目的とする。但し、このときの禁止令は、講名を示さず「町中にて、職人日雇取軽き商人等講仲間を立て」という表現で、寄り集まりを禁じただけのものだが、実質富士講の禁止であった。

◇7月18日(西暦8月13日)、スウェーデン人のカール・P・ツンベルグ (Carl Peter Thunberg) がオランダ人植物学者・医師として長崎のオランダ商館に赴任する。

◇9月8日、女流俳人：加賀千代女没 (73)。「朝顔につるべ取られてもらい水」

◇アメリカ、独立戦争始まる (1775年4月19日~1783年9月3日)。

【黄表紙誕生】

○恋川春町 (1744~1789) 『金々先生栄花夢』 (謡曲「邯鄲」の翻案)。黄表紙の嚆矢となる。黄表紙は、表紙が黄色であったところから名付けられた江戸後期の草双紙。洒落や風刺を特色とし、絵を中心として余白に文章を綴った大人向きの絵物語。二つ折りの半紙5枚で一巻一冊とし、二、三冊で一部としたが、しだいに長編化し、合巻に変わった。

※北斎は安永9年 (1780) に黄表紙『白井権八幡随長兵衛 驪山比異 (翼) 塚』から黄表紙の挿絵に関わる。

○向井去来 (1651~1704) の俳諧論書『去来抄』が、没後71年目に刊行される。

【筆耕彫としての作品】

★洒落本『楽女格子』 (「青楼楽美種」注1とも。一冊。雲中舎山蝶注2 (行成山房大公人) 作。国立国会図書館蔵)

遊客が青楼 (遊郭のこと) に遊ぶ様子を描く。現所在不明) の文字部分 (末六丁注3ほど) を彫るか。

注1) 『洒落本大系』第三巻より。

注2) 雲中舎山蝶：本所横網町の大山田源兵衛の息子。狂歌を唐衣橋洲に学ぶ。

注 3) 末六丁：全十八丁の終わりの六丁（12 ページ）のことで、北斎は全編の三分の一を担当した。一丁とは、袋綴じの裏表の 2 ページいう。

『楽女格子』筆耕部分（太田記念美術館 Web より）

※同本巻末で石塚豊介子（1799～1862、考証家）は「為一翁云、此書の末六丁程は予が（筆者注：『洒落本大成』6 巻の解題では「予が」の文字は無く「卍翁の」と表記される）彫刻なり、此節十六歳なりと云々、十九歳まで産業とし、是より此業を廃し画師になりしと云々」〈大正 7 年、朝倉無聲『浮世絵私言』43 号。飯島虚心『葛飾北斎伝』p 36 所収〉と記している。2005 年『北斎展図録』（日本経済新聞社）所収の永田生慈「北斎の画業と研究課題」にも同文が紹介されている。



（本巻西しせ創影地の歳六十齋北斎葛）

安永5 (1776) 丙申 17 歳 中島鉄蔵

- ◇相撲興行（1 月、浅草八幡宮、10 月深川八幡宮境内）。
- ◇将軍の日光社参が中止となる（天保 14 年：1843 まで）。
- ◇カール・P. ツンベルグ（Carl Peter Thunberg）、江戸参府に出発（西暦 3 月 4 日、旧暦 1 月 15 日）。将軍に謁見（西暦 5 月 8 日、旧暦 3 月 21 日）。江戸出発（西暦 5 月 25 日、旧暦 4 月 8 日）。長崎から帰国のため母船に乗船（西暦 11 月 23 日、旧暦 10 月 13 日）。帰国に向け出帆（西暦 12 月 3 日、旧暦 10 月 23 日）。以上、『江戸参府随記』（ツンベルグ・平凡社東洋文庫）による。
- ◇平賀源内、長崎で手に入れたエレキテル（静電気発生機）を修理・復元する。
- ◇式亭三馬生（月日不明～1822）。
- ◇4 月 13 日、池大雅没（54）。
- ◇7 月 4 日、アメリカ独立宣言。
- 大田南畝（四方赤良）、洒落本『世説新語茶』『南客先生文集』（この頃か）。
- 北尾重政、勝川春章共作『青楼美人合姿鏡』（実在の花魁を描く）。

【大首絵登場】

○勝川春章「東扇」（大判錦絵。扇枠に描く初代中村仲蔵の「仮名手本忠臣蔵」五段目の「斧定九郎役者絵」東京国立博物館蔵）などで大首絵注の先駆となる。以後、大首絵は連作される。

注) 大首絵：人物の、主に首から上を画面に大きく描く絵。

○上田秋成、読本『雨月物語』刊。

○鳥山石燕(1712～1788。俳人・画師。門人に喜多川歌麿、恋川春町ら)、『画図百鬼夜行』により妖怪絵師の地位を築く。北斎の『百物語』(天保2年：1831)に影響したか。

安永6 (1777) 丁酉 18歳 中島鉄蔵

◇相撲興行(4月、深川八幡宮境内、10月、深川八幡宮境内)。

○与謝蕪村、『夜半楽』(俳詩「春風馬堤曲」を収める)。

安永7 (1778) 戊戌 19歳 中島鉄蔵

◇相撲興行(3月、深川八幡宮境内、11月、深川八幡宮境内)。

※この年3月の興業より、一場所晴天8日間から10日間の興行となる(『大江戸万華鏡』所収「ひとつくり風土記」[13](#) [48](#) p 680)。

【勝川春章門に入る】

★人形町に工房を持つ勝川春章(1743～1792)注に入門。彫刻の業を廃す。

※『葛飾北斎伝』(p 37)では「安永六年、鉄蔵十九歳の時、彫刻の業を廃し、浮世絵師勝川春章の門に入って」(ルビは筆者)とあるが、安永六年(1777)とあるのは安永七年(1778)の誤り。また、「HOKUSAI」新聞(小布施：北斎美術館：2015GW号)によれば入門は安永8年(1779)としている。

注)勝川春章：この時弟子30人といわれ役者絵の一派を形成。始め宮川を名乗る。俗称：祐助。旭朗井西爾と称す。また李林春草と号す。勝川春水の門人となり、英一蝶の草筆を学ぶ。門人に春好、春英、春朗(北斎)、春江注、春常などがいた。

注)春江：竜田舎錦編『新增補浮世絵類考』の宮川長春系譜には勝川春章の弟子として記載されているが詳細不明。

※「勝川」は、『葛飾北斎伝』(p 40)によれば「按ずるに、宮川、勝川は、もと地名にして尾張国海西郡(筆者注：現愛知県海西郡)にあり。勝川は訓みてカチカワなり」という(ルビは筆者による)。

※養子先の中島家から春章入門の支度金(筆者注：東脩)を出してもらい、その後、中島家の長男没後に中島家に戻る約束を反故にして、そのまま浮世絵師の道を行んだという推測もある(リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p 8 河出書房新社)。

【春章一幅価千金】

※この年、春章の役者絵等は賞賛され、安永4年(1775)の洒落本『後編風俗通』(内題「後編女風俗通」金錦先生注¹著)跋文の冒頭に「春章一幅価千金注²」(筆者注：中国宋代の蘇軾の絶句詩「春夜」の起句「春宵一刻価千金」のもじり)と記された。一枚の絵がそれほどの価格で売れたということである。

「一幅」とは肉筆画を示す言い方であるが、安永4年、(1775)頃には春章(数え年33歳)はまだ肉筆美人画は描いていないので、数点確認されている柱隠しの錦絵(版画)美

人画等の、「一枚の絵」程度の意味と考えられている。春章が肉筆美人画を描くのは、天明後期に勝川の代表の座を弟子の春好、春英に譲った後である。

注 1) 金錦先生：恋川春町と目されるが未詳。戯作者朋誠堂喜三二（平沢常富）説もある（『洒落本大成 第6巻』解題 p 414）

注 2) 跋文の冒頭に書かれた一文だが、この文に続き「花有青楼之錦絵 月有両国之楼船」などとあり、この時世の華やかさを象徴する一文であることが分かる。この本の挿絵を春章が描いたことを示すものではなく、春章の絵もまた華やかさを持つという文脈である。

安永8 (1779) 己亥 20歳 勝川春朗

【第一期春朗期】

◎「春朗」号は寛政6年（1794）頃まで使用する。

◇相撲興行（3月、深川御船蔵八幡境内注、10月、深川八幡境内）。

注) 御船蔵：現在の東京都江東区新大橋1～2丁目辺で、ここにあった八幡宮（明和8年条を参照）。御船蔵に幕府の軍艦「安宅丸」が係留されていたので、この辺りを「アタケ」と呼んだ。歌川広重の「大はしあたけの夕立」（大判錦絵。安政4年（1857）『名所江戸百景』）に描かれた所。

◇12月18日、平賀源内獄死（51）。大名屋敷の修理を頼まれた際に、酔っていたため修理計画書を盗まれたと勘違いして大工の棟梁二人を殺傷し、11月21日に投獄され、獄中で破傷風に罹り死亡した。

【富士塚が建つ】

◇江戸高田に住む植木職人高田藤四郎が、戸塚村の水稲荷（現東京都新宿区西早稲田3-5-43）の別当・宝善寺境内に、富士五合目より上の形を模して5mほどの築山を造る。戸塚富士とも高田富士ともいう。これが朱楽菅江の洒落本『大抵御覧』（安永8年：1779）に「新富士」として記され、以後、富士信仰により江戸中に富士塚が建てられる。

◇長崎オランダ商館長イサーク・ティチング(Isaac Titsingh)による浮世絵収集が始まる。

◇松前藩、ロシアの通商要求を拒否。

○大田南畝、滑稽本・風流落咄『鯛の味噌津』。

【勝川春朗を名乗る】

★勝川春朗を名乗る。師の春章の「春」と、春章の号「旭朗井」の「朗」からつけた号という（安田剛蔵『画狂北斎』 p 15）。

【絵師デビュー】

●吉原細見本『金農町』（7月。横小判。勝川春朗画。鱗形屋孫兵衛版。天理大学附属天理図書館蔵）

※北斎は1丁裏に挿絵一図を描き、同図の右下に「勝川春朗画」と書き入れている。奥付に「安政八己亥歳秋七月」とある。吉原の店の紹介を主にした内容。

図は花魁とその両脇に禿が立ち、三人の前に桶提灯を下げた若い衆が立っている。図の右には机の上に棕櫚団扇と冊子と棕櫚の葉を生けた花瓶が置かれている。近くで蝶が1匹舞っている。

『江戸吉原叢刊』（八木書店 2011年）の解題は「春朗の最初の作品としては、安永八年八月頃の細判役者絵「岩井半四郎のかしく」等が挙げられてきたが（永田生慈『葛飾年譜』より）、本書の挿図はそれよりも若干早い時期の作例である」としている。絵師として役者絵より早いデビューか。

※版元の鱗形屋は、吉原細見の版行を独占していた。

★北斎のデビューは、一般に次の4作（細判役者錦絵）「四代目岩井半四郎 敵討仇名かしく」「二代目市村門之助の小間物屋六三郎」「三代目瀬川菊之丞 正宗娘おれん」「二代目市川門之助の小間物屋六三郎」（焼失）とされている。

注）元禄期以降、役者絵については、鳥居派が芝居幕開けから10日以内に芝居絵を描くことが主流であったが、勝川派の北斎が役者絵を描いたのである。この年から寛政6年（1794）まで細判役者絵を約60点余りを描いたといわれる。寛政6年以降も数点の役者絵はある。

●役者絵「四代目岩井半四郎 敵討仇名かしく」（8月頃。細判錦絵。勝川春朗画。伊勢屋三次郎版注か。29.9×13.7 島根県立美術館：永田コレクション/北斎館/中右コレクション/すみだ北斎美術館蔵） 四代目岩井半四郎敵討仇名かしく（すみだ北斎美術館）

※安永8年8月1日から中村座（すみだ北斎美術館では市村座として）で上演した「敵討仇名かしく」（桜田治助作）に取材。

注）伊勢屋三次郎：『東京国立博物館図版目録』（浮世絵版画篇 下）では、同館所蔵「中村里好のふく清女ぼう」にある○の中に三つの点のある版元印を「伊勢三」と表記している。従来、この印は不明とされていたが、これは伊勢屋三次郎（永樹堂）を指すと思われるので、同様の印のある本図も伊勢屋三次郎とする。

※「かしく」は歌舞伎「八重霞浪花浜茨」（通称「かしく」）に出る人物。寛延2年（1749）3月18日、大坂道頓堀新屋敷油屋の抱えのかしく（本名八重）が兄殺しにより死罪となった事件を脚色したものの。四代目岩井半四郎（1747～1800）は、女形の名優。屋号は大和屋。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 正宗娘おれん」（8月頃。細判錦絵。勝川春朗画。伊勢屋三次郎版か。29.2×13.5 東京国立博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）。

※三代目瀬川菊之丞（1751～73）は、女形の名優。屋号は浜村屋。安永8年8月1日から市村座で上演した「新薄雪物語」（近松半二他作）に取材。



おれんは刀工の正宗の娘。おれんの背後の衝立に描かれた爪を立てたような波の絵は、後年の「北斎波」の原型と思われる。（八木書店『江戸の絵本 画像とテキストの綾なせる世界』所収、マティ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち一享和・文化文化・文政期に焦点を絞って」 p 265）。

三代目瀬川菊之丞 正宗娘おれん（東京国立博物館）



●役者絵「中村里好 ふく清女ぼう」（8月頃。細判錦絵。勝川春朗画。伊勢屋三次郎版か。30.2×13.8 東京国立博物館/中右コレクション蔵）。



※北斎が「勝川春朗画」とした期間に、中村里好がふく清女房を演じた記録が『歌舞伎年表』に見られないことから、デビュー作品とするには疑問視するむきがあったが、初代里好の中村座の「敵討仇名かしく」から取材した作品で、福清女房おかじを演じた姿を描いたと考証されるに至り、この絵を含めた4点がデビュー作とする説が有力視されている（安田剛蔵『画狂北斎』（p 191）。

図は、櫛を挿した鬘と前帯の姿で、松の木のある舞台に、体を少し左にくねらせて立っている様子。

※中村里好（1742～86）は安永2年(1773)8月に同名を襲名。屋号は堺屋。

中村里好ふく清女ぼう（東京国立博物館）

●役者絵「二代目市川門之助の小間物屋六三郎」（8月頃。細判錦絵。勝川春朗画。28.9×13.8）。上記中村座の「敵討仇名かしく」に取材。関東大震災で焼失したとされる。

※二代目市川門之助（1743～94）は、安永期に若手四天王（二代市川八百蔵、三代沢村宗十郎、初代尾上松助）の一人といわれる。屋号は滝野屋。

安永9（1780）庚子 21歳 勝川春朗、春朗、まりこ（方里固?）

◇相撲興行（3月深川三十三間堂境内、10月、芝神明宮）。

◇版元・蔦谷重三郎、吉原から日本橋通油町（現東京都中央区日本橋大伝馬町の一部）に移る。

◇5月17日、小野田直武（洋風画家）没（32）。

◇10月、深川茂森町（現、江東区木場4丁目辺）に無宿養育所が設置される。

◇12月17日、頼山陽生（～1832）。

○耳鳥齋（1751以前～1802または1803）の『絵本水也空』刊（戯画風役者画集。与謝蕪村等の影響を受け鳥羽絵スタイルを洗練化する。岡本一平に影響したといわれる。「鳥羽絵」

は、一般には鳥羽僧正の「鳥獸戯画」風な軽いタッチの画をいう。『北斎漫画』に影響があったか。

【黄表紙挿絵師の始まり】

●黄表紙『驪山比翼(翼)塚』(『驪比翼塚』とも。正月。角書「白井権八幡随長兵衛」。中本注二冊。作者不詳。勝川春朗画。西村屋与八版。国立国会図書館/東京都立中央図書館加賀文庫/大東急記念文庫蔵)

注) 中本: 美濃紙半裁二つ折り(約 14.0 cm×20.0 cm A5 判に近い)で、黄表紙の主流の体裁。

※北斎の黄表紙挿絵本の最初のものか(『浮世絵大系 8 北斎』所収、岡畏三郎「総説葛飾北斎」)。

※前年の安永 8 年(1779)7 月に上演された江戸肥前座で初演された義太夫世話物人形浄瑠璃「驪山比翼塚」をそのまま筋書きにしたダイジェスト版。黄表紙の場合、作者名がなく画工名のみ記してあるのは、作者を兼ねるのが通例なので、北斎(春朗)の自画作かとも考えられている。

※北斎の錦絵初作は前年 8 月上演のものからなので、それ以前の浄瑠璃に取材している点に注目されるという(『2005 年北斎展図録』解説 p 307)。

※現在の目黒不動(東京都目黒区下目黒3-20-26)の仁王門近くにある権八と小紫の比翼塚(目黒比翼塚)をモチーフとする。

※安田剛蔵『画狂北斎』では本書は北斎の入銀本(自費出版のこと)としている(p 17~19)。驪山比翼塚(国立国会図書館)



【廓遊びで幫間と知り合うか】

●黄表紙『大通一寸廊茶番』(正月。「いきちよん注1 ちよんくるわのちゃばん」とも。また『日本古典籍総合目録』によれば、「いきちよんちよんくるわのちゃばん」とも。二冊。社楽齋万里注2 作、勝川春朗画、西村屋与八版。国立国会図書館/東京都立中央図書館加賀文庫/大東急記念文庫蔵)

注 1) 「いきちよん」は、江戸通人言葉で「粋なこと」をいう。

注 2) 万里: 万里作『嶋台目正月』(天明 7 年: 1787)の山東京伝の序文では「まんり」と読んでいる。

※安田剛蔵『画狂北斎』(p 17)では本書も入銀本としている。

※作者の社楽齋万里は北斎と親しかった吉原の幫間と推測されている(森銑三『続黄表紙解題』中央公論社 p 296。安田剛蔵『画狂北斎』 p 16)。尾形光琳風の絵も描いたらしい。

※廓の相場は中等以下で 90 匁（享保以後）程度と言われる。一両は江戸中期で銀 60 匁＝5000 文。1 文は現在の相場で 25 円程度として、一両は約 125,000 円。銀 1 匁は 125,000 ÷ 銀 60 匁＝約 2,084 円。すなわち 90 匁は約 187,560 円となる。

これほどの高額を若い北斎が支払えたのは、中島家からの援助があるからであり、中島家の養子身分が続いていたのではないか、あるいはこの頃に養子に入ったとの推測もある（田崎暘之助『浮世絵の謎』 p166～167）。

●黄表紙『一生徳兵衛三乃伝』（正月。三冊。作者名・画工名無し。松村弥兵衛版）

※大久保葩雪『増補青本年表』（『新群書類従』所収）では市場通笑作、春朗画としてい
ることを、井上隆明「北斎の初期戯作と挿絵」で紹介している（1993 年『代表作シリーズ
大揃い 北斎』所収。日本浮世絵博物館。読売新聞社刊）による）。

※勝川春章や北尾重政の絵かと思うほどの画風（檜崎宗重『北斎論』 p97）であり、黒田
源次（「北斎の春朗期について 其一」『浮世絵』51 号所収）、及び、棚橋正博（『日本
書誌学大系 48(1)黄表紙騒乱前編』所収）によれば、画風から春朗の挿絵ではないとする
（『年譜』による）。

●黄表紙『日蓮一代記』（春。三冊。まりこ作。勝川春朗画）

※作者名「まりこ」は、吉田暎二によれば「方里固」とする。また万里固は北斎の戯作名
とする説もある（『年譜』による）。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 奴の小方（関の小方）」（5 月頃。勝春朗画）

※5 月 5 日より上演の市村座「女伊達浪花帷子」に取材。『歌舞伎年表』4 卷（岩波書店）
に掲載（伊澤慶治「勝川春朗の役者絵考証（一）」『北斎研究』16 号による）。

●役者絵「二代目小佐川常世 女房やばせ」（8 月頃。細判錦絵。春朗画）

※8 月朔日（1 日）より上演の森田座「紅白粉四季染分」（河竹新七作）に取材か。小佐川
常世（1753～1804）の屋号は錦屋。

●役者絵「坂田半五郎の定九郎 音羽次郎三郎の与市兵衛」（9 月頃。細判錦絵。春朗画）
東京国立博物館蔵）

※9 月 9 日より上演の中村座「仮名手本忠臣蔵」（二世竹田出雲・三好松洛・並木千柳作）
に取材。

●役者絵「四代目岩井半四郎 おかる」（9 月頃。細判錦絵。勝川春朗画。島根県立美術
館：永田コレクション蔵）。

※9 月 9 日より上演の中村座「仮名手本忠臣蔵」に取材。

●役者絵「二代目市川門之助」（役名なし。この頃か。役者絵を描き始めた初期の絵と思
われる。細判錦絵。春朗画。大国屋久兵衛版。29.2×13.3 個人蔵）

※三升紋注の着物をはだけ、左足を米俵にかけて見栄を切る図。天明 7 年（1787）にも
「市川門之助 すけつね」を描いている。

注）三升紋：市川家の紋。升を三つ重ねた図柄。

【以下、安永年間】

●武者絵「難波六郎常仁」(安永7年～10年〈1778～81〉)。縦長判着色。春朗画。版元印：屋根形に「与」。ボストン美術館蔵)

※いなづまの光る中、滝の前で岩に足を掛け、刀に手を掛けている鎧姿の武者絵。 難波六郎常仁 (https://jokky2.exb_log_jp/tags/「平家」より転載)

●錦絵「てうせんのこうけいし」(安永年間〈1772～81〉)。「朝鮮の弘慶子注」。細判。春朗画。版元不明(㊦印がある)30.8×13.5 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

注)弘慶子：安永から天明期に流行した弘慶子という飴や菓を売った行商人。

※傘をかざして朝鮮風な竹の子笠を被り、身体をよじらせて売り声を出す弘慶子を描く。画面上には「てうせんのこうけいし アッホくく」と売り声が記されている。

●「やりおどり」(安永年間〈1772～81〉)。無款。27.3×14.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。



安永10/天明1(4/2～)(1781)辛丑 22歳 勝川春朗、春朗、是和齋(戯作名)

◇相撲興業(3月、市ヶ谷左内坂長龍寺、10月、本所回向院境内)。

○鶴岡蘆水(翠松齋：生没年未詳、江戸中期)、「東都隅田川兩岸一覽」。北齋の同名の狂歌絵本『隅田川兩岸一覽』(享和3年～文化3年〈1803～06〉)に影響した。

●黄表紙『有難通一字』(正月。角書「本性銘暑」 『葛飾北斎伝』では「本性酪署」と表記する〈p37〉1月。二冊。是和齋注戯作。画工名無し。松村屋平兵衛版。東洋文庫蔵) 注)是和齋：「是和齋」を北齋の戯作名とする説があるが、『葛飾北斎伝』の校注者鈴木重三氏は「是和齋」は北齋と同一人物とする確証はないとしている(『葛飾北斎伝』p30・p37脚注、及びp340〈p29補注五〉)。

また、飯島虚心は割注で、「按ずるに、是和齋は、訓みてコレワセイ、伊勢音頭の囃子に、ヤットセイ、コレハイセイ、コノナンデモセイといへる、コレワセイを漢字にはめたるなり(略)」と述べ「是和齋」は「コレワセイ」だとしている(同p38割注)。

『日本小説年表』(朝倉無声)では、傍注に「是和齋は勝川春朗、後葛飾北斎の仮号なりといふ」と記し、画工を北尾政演(山東京伝)とする(国立国会図書館デジタル版 p130)。

※本書は、本所押上の日蓮宗法性寺(柳島妙見堂：現東京都墨田区業平5-7-7)の縁起を題材にしたもの。北齋は妙見を信仰していた。

四方山人(大田南畝)の青本評判記『菊寿草』(安永9年〈1780〉1月刊。一冊。本屋清吉版)中、「実悪之部」で「上上吉 本性銘暑 有難通一字 松村座」と表記される。松村座は版元名を指す。

●洒落本注『公大無多言』(正月。一冊。行成山房大公人〈雲中舎山蝶〉作。勝川春朗画。天理大学図書館蔵)

※序文に「丑の春」とある。北斎は、挿絵1図のみ描く。

注) 洒落本は、蒔蕪本とも呼ばれ、明和6年以前に刊行された多田翁（多田屋利兵衛）の『遊子方言』（須原屋市兵衛版）が始まり。対話の言語に江戸言葉を使うのが特徴。式亭三馬、十返舎一九、柳亭種彦、為永春水などが執筆し、歌舞伎作者の河竹新七も江戸言葉を使って脚本を書いた。寛政3年（1791）には風紀紊乱により洒落本は禁止されたが、実際には文化年中（1804～1818）まで刊行された（大正2年、成光館出版部『趣味研究大江戸 全』所収、上田萬年「洒落本と山東京伝」による）。

●洒落本『喜夜来大根』（一冊。梨白散人作。春朗画。本屋清吉の出版目録に「安永十年丑初春」と記載される。慶応大学図書館蔵）。

※堂駄先生の洒落本『奴通』（安永9年：1780刊か）の序文と本文の冒頭、および物語の場所を変えて梨白散人作として改題出版したもの。

※『洒落本大成』補巻の「洒落本写本年表」によれば、『喜夜来大根』は天明年間の刊とする。

●役者絵「三代目沢村宗十郎のしげたゞ」（細判錦絵。春朗画。6月の中村座「壇浦兜軍記」に取材〈『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』昭和55年 太田記念美術館による〉30.5×14.0 太田記念美術館：長瀬コレクション/フォッグ美術館蔵。）

※沢村宗十郎（1753～1801）。屋号は紀伊國屋。寛政3年（1791）にも同題の役者絵がある。

天明2(1782) 壬寅 23歳 勝春朗、春朗、是和齋（戯作名）、東都魚佛（戯作名）、闇雲山人（隠号）、万里
--

◇天明の飢饉始まる(天明7年：1787まで)。

◇相撲興行（2月、浅草八幡宮、10月、深川八幡宮境内）。

◇この頃より江戸に鰻の蒲焼屋が出始める。

◇3月23日、楯取魚彦没（60）。国学・歌人・画家。

○酔狂道人何必醇（曾谷学川）、料理本『豆腐百珍』。

○山東京伝、黄表紙『御存知商売物』。京伝の出世作となる（森銑三『黄表紙解題』p 246）。

○大田南畝、黄表紙『年始御礼帳』、黄表紙『源平惣勘定』（梶原再見二度の賭）(天明6年にかけて刊行)。

★この頃より勝川春章調より離れ、役者絵だけでなく、若干の美人画・風俗画も見られる。ふくよかな美人図など鳥居清長（1752～1815）の影響も見られるとする。

●黄表紙『四天王大通仕達』（正月。二冊。是和齋戯作。春朗画。松村屋弥兵衛版。国立国会図書館/ボストン美術館蔵）

※巻末の絵の右はじに「是和齋戯作」とあり、左はじに「春朗画」とある。両者が同一人物ならば「春朗自画」などの表記となるだろうから、同一人物ではないと推測する意見もある（井上隆明「北齋の初期戯作と挿絵」〈日本浮世絵博物館『大揃い北齋』〉に所収）。

※森銑三『黄表紙解題』（p 337）及び朝倉無声『日本小説年表』では天明2年の刊とする。

●黄表紙『鎌倉通臣伝』（正月。二冊。東都魚佛注戯作。春朗画。鶴屋喜右衛門版。ポストン美術館蔵）

注）魚佛：北齋の戯作名か。リチャード・レイン『伝記画集 北齋』（p 326）では「細工人

魚佛」とあり、別人としている。

※『戯作者撰集』（石塚豊芥子編。天保11年～弘化2年〈1840～45〉成立）天明二年（1782）の項で「魚佛 前北齋戴斗為一翁の事也」とある。但し『葛飾北齋伝』の校注者鈴木重三は「魚佛」を北齋と同一人物とする確証はないとしている（同書 p 340）。

一方、『古典籍総合目録』（『書名索引 著者名索引』第三巻 国文学研究資料館）では北齋の号としている。

『日本小説年表』（朝倉無声）では、傍注で「是和齋、魚佛共に画工北齋の仮号なりといふ」と記している（国立国会図書館デジタル版 p 132～133）。

●洒落本『富賀川拝見』（春頃。中本一冊。蓬萊山人帰橋注述。春朗画。上総屋忠助版。

序文に「天明二とらのとし春」とある。早稲田大学図書館蔵）。

注）蓬萊山人帰橋：生没年未詳、戯作者。一説に高崎藩士・河野通秀という。作者は洒落

本『通仁枕言葉』（天明2年：1782）など、江戸・深川を題材にすることが多く、本書では男に真心を疑われる仲町（現東京都江東区門前仲町）の遊女おたよを通して深川女の意気地が写實的に描かれている。北齋は一図のみ描く。



『富賀川拝見』（早稲田大学図書館）

【艶本処女作】

●艶本注『笑本股庫嘉里橡（元は女扁に象）志』（1月頃。墨摺。中本一冊。六話。勝春朗画。文章も北齋。序文に「寅の初春 闇雲山人書」とあり。扉絵の部屋の天袋に「勝春朗画」とある。北齋の艶本処女作）。

※「百物語」（百物語は、怪談話遊びで、最後の一人が怪談を語り終えると幽霊が出現するという遊び）をしている趣向で、怪談仕立てで、読物が主体となった艶本。癖本に分類することもある。

※「闇雲山人」は北斎の隠号とする（『芸術新潮』1989年3月号所収、林美一「北斎 艶本への挑戦」p41）

注）艶本：当時「絵本」「笑本」などと同様に「えほん」と読んだという。ただし、本稿では、一般的な「えんぼん」のふりがなを記す。溪斎英泉の『艶本恋の操』（文化10年：1813）、歌川国貞『三国女夫意志』（文政11年：1828）の内題「艶本三国一」、歌川国芳の『艶本拾壹段返』（天保3年：1832）など、例は少ないが「えんぼん」と読んでいる。

●咄本『はなし』（この頃か。黄表紙仕立て。自惚山人作。勝春朗画。西村屋与八版。島根県立美術館蔵）

※題名未詳。柱（小口部分）に「はなし」とあるので、これに従ったと『2019 新北斎展図録』（p313）で永田生慈が解説している。五つの小話が収められている。同解説では、中の「民風」は、力士の二代谷風梶之助をモデルにしている、関取とあることから、大関に昇進した天明2年頃の出版と見なされるとしている。

●役者絵「五代目市川團十郎あげまきの助六」（5月頃。細判錦絵。勝春朗画。版元印：入り山形の下に「上」、更にその下に「双」が四つ並ぶ。31.5×13.5 日本浮世絵博物館蔵）。

※5月5日より上演された中村座「助六曲輪名取草」に取材。

市川團十郎（1741～1806）：定紋は三升。屋号は成田屋。俳名は白猿、三升、男女川など。

図は、市川團十郎が蛇の目傘を右手で翳し、左手は懐から出し、左で結ぶ喧嘩鉢巻をして、高下駄を履き、刀を落とし差しにして見栄を切る。背後に防火水の桶がある。

五代目市川團十郎あげまきの助六（日本浮世絵博物館）



【初の美人画か】

●錦絵『中洲八景』（3図が確認されている。中判錦絵揃物。万里注画。平均：21.5×16.8「中洲」は大英博物館のカタログでは「NAKAZU」と表記している）

注）万里：吉原の幫間とも、北斎の偽名ともいわれ、確定しないが、安田剛造は、この年の「万里」署名の美人図は春朗の作とする（『画狂北斎』p182）。

北斎の挿絵のある安永9年（1780）に刊行された黄表紙『大通一寸廊茶番』の作者「万里」（吉原の幫間・長門万里）とは別人（同書p55～56）で、本図の「万里」は幫間の万里と親しかったことによる北斎の署名らしいと同書では推測している。詳細は不明。

☆〈浮洲の落雁〉

※若衆が竿を差して停めている舟から釣りをしている女。その背後の中洲に下りている雁の群れと飛び立つ雁の群れが描かれる。

☆〈大橋の帰帆〉

※隅田川岸辺の「筒屋」と書いた看板の下がる茶屋で、団扇を持って立っている女と座っている女。足元には朱塗りの膳に盃と料理の入った皿が置かれている。二人の芸者風の女

が涼んでいる図。図の左には大橋の一部が描かれる。大橋は、
両国橋の前称。

大橋の帰帆（大英博物館）

☆〈川岸の晴嵐〉

※島田齧に櫛を挿した二人の芸者風の女が、川岸を愉快そうに
話ながら歩いている。二人の着物の裾は歩く勢いで大きく乱れ
ている。



天明3 (1783) 癸卯 24歳 勝川春朗、勝春朗、春朗

◇英国政府と米合衆国代表が独立戦争終結のパリ条約を結ぶ。

◇天明の飢饉続く(天明7年：1787まで)。

◇相撲興業(3月、深川八幡宮境内。11月、本所回向院境内)。

◇2月4日、近松半二没(59)。

◇5月17日、柳亭種彦生(～1842)。

◇8月5日、浅間山の大噴火。

◇12月25日、与謝蕪村没(68)。

◇蔦谷重三郎、日本橋通油町に地本問屋として進出。屋号は耕書堂と称す。

○この頃、北尾政演(山東京伝)の『青楼名君自筆集』(天明3年版。着色。大判二枚続。天明4年刊の蔦谷重三郎版より以前に描かれた吉原遊女の風俗絵)をオランダ商館長イサーク・ティチング(Isaac Titsingh)が持ち帰る。翌天明4年(1784)、蔦谷重三郎が画帖仕立の『吉原傾城新美人合自筆鏡』(着色。大奉書全紙判・大判横2枚分。39.4×54.5cm)として改題版を出す。

○大田南畝(蜀山人)と朱楽菅江、『万載狂歌集』を編纂。

○9月、司馬江漢、「三囲之景図」で腐食銅版画(エッチング)の制作に成功。

★この頃、三田台町に住むか(天明4年〈1784〉1月出版の黄表紙『咸陽宮通約束』巻末文に「すとんだゆめをミたのだい町 春朗画」とあることから)。但し、この文は単なる洒落とみられている(安田剛蔵『画狂北斎』)。

「みたのだいまち」が「三田台町」と表記するかどうかは不明。下町の墨田区や台東区や江東区には古名の町は見当たらない。「台町」とすれば高台であろうから、目黒区や港区の「三田」が想像されるが、北斎の住居としては不自然である。やはり「とんでもない夢を見た」からの洒落とゴロ合わせと考えるのが妥当であろう。「恐れいりや(入谷)の鬼子母神」の類である。それにしても、後の続きの「だいまち」に全く意味がないわけではなく、言葉遊びとしても、なんらかの町名が意識されていたと思われる。

●役者絵「三代目市川団蔵 花形隼人」(1月頃。細判錦絵。勝春朗画)

※正月 15 日より上演された中村座「江戸花三舛曾我」（桜田治助作）に取材。市川団蔵（1745～1808）は四代目。屋号は三河屋。

●役者絵「岩井半四郎 長吉姉」（8 月頃。細判錦絵。勝春朗画）

※8 月 1 日よりの中村座「勝相撲団扇揚羽（双蝶々曲輪日記）」に取材。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 けいせいあづま」（細判錦絵。勝春朗画）

※8 月 1 日より上演された中村座「勝相撲団扇揚羽」（双蝶々曲輪日記）に取材。

●役者絵「中村仲蔵のてん竺徳兵衛実ハそうふくわん」（8 月頃。細版錦絵。勝春朗画。29.7×13.3 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※8 月 8 日より上演された市村座「けいせい帷子辻」の二番目大切注（笠縫専助・宝田寿来作）に取材。『長瀬武郎コレクション図録』（太田記念美術館。昭和 55 年）では、8 月市村座「江戸鹿子娘道成寺」に取材としている。

注）大切：歌舞伎の二番目狂言（世話物）の最終幕をいう。

※仲蔵の天竺徳兵衛実ハそうふくわんが、口に巻物をくわえている。足元には大きな蝦蟇が見上げている図。

●役者絵「中村仲蔵の景清」（細判錦絵。春朗画。31.2×13.3 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

中村仲蔵の景清（太田記念美術館）



※3 月の中村座「寿万歳曾我」に取材。

●役者絵「市川團十郎の大星由良之助」（細判錦絵。春朗画。29.0×13.8 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※5 月の中村座「忠臣蔵」に取材。二刀を差し、黒地に袖が白い鋸歯文様の羽織を着て「い」と書いた采配を手にして立つ大星由良之助。足元には「忠」と書かれた提灯が置かれている。

天明4（1784）甲辰 25 歳 勝川春朗・勝春朗・春朗

◇諸国に大飢饉。

◇若年寄田沼意知（田沼意次嫡男）が旗本佐野善左衛門（佐野政言）に江戸城中で斬殺される（35 歳。墓：勝林寺：現東京都豊島区駒込7-4-14）。

オランダ商館長イサーク・ティチング（Isaac Titsingh）は、佐野善左衛門は、井の中の蛙状態の幕府の中でただ一人世界を見ていた人物で、この事件で開国は完全に閉ざされたと嘆いたという（「ウイパディア」より）。

◇司馬江漢、覗くと立体感のある視眼鏡器具を制作。

◇相撲興行（3 月、本所回向院境内、11 月、本所回向院境内）。

◇この頃、磯田湖龍斎（1735～1790）、石川豊信（1711～1785）、勝川春章（1743～1792）、

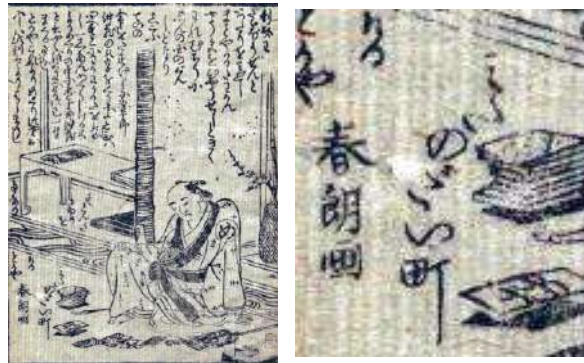
北尾重政（1739～1820）、歌川豊春（1735～1814）、鳥居清長（1752～1815）らが活躍。

◇この頃、喜多川歌麿（1753？～1806）のデビュー期でもある。

●黄表紙『咸陽宮通約束』(1月。二冊。著者名なし。春朗画。伊勢屋幸七版。東洋文庫/国立国会図書館蔵)

注)北斎が天明2年(1782)に三田台町に住んだとされる根拠として、天明4年に出版された『咸陽宮通約束』の巻末図、㊦の模様のある着物を着た男が座っている図の脇に「すとんだゆめをミたのだい町 春朗画」とあることが挙げられている。但し、前述したように単なる洒落と思われる。

※国立国会図書館デジタル版の表紙の題簽には、「勝川春朗画」とある。最終丁に「春朗画」とある。文溪堂作といわれるが、作者名はない。黄表紙評判記『江戸土産』(天明4年:1784。一冊。同穴野狐作。前川庄兵衛版)に本書名がある(永田生慈『年譜』による。以下『年譜』と表記)



『咸陽宮通約束』(国立国会図書館)右:拡大図

●黄表紙『野會喜伽羅久里 義経辿』(1月。『覗伽羅久里義経山入』とも。三冊。井久治(幾治)茂内作。勝春朗画。岩戸屋喜三郎版。東京国立博物館蔵)

※この年刊行の黄表紙評判記『江戸土産』(一冊。同穴野狐作。前川庄兵衛版)に本書名がある(『年譜』による)。

●黄表紙『運開扇之花香』(春。表紙に『円通誓大通光/運開扇子花』。二冊。作者名なし。春朗画。松村屋弥平衛版。立命館大学ARC蔵)

※巻末の図の右下に「春朗画」とある。

●黄表紙『鶴頼政名歌芝』(南仙笑楚満人(1749~1807)作。春朗画。村田屋治郎兵衛版。東京都立中央図書館蔵)

●談義本注『教訓雑長持』(1月。中本五巻。合一冊。伊藤単朴作。右十葉勝川春朗画。竹川藤兵衛版。宝暦2年(1752)、『今様下手談義』(静観房好阿作。辻村勘七版)の再刻版。北斎は各巻に2図、計挿絵10図を描く。弘前市立弘前図書館蔵)

注)談義本:宝暦(1751~1764)から安永(1772~1781)にかけて多く刊行されたもので、談義僧(仏教の教義を面白く教える僧や講談師の口調をまね、おかしみの中に教訓を交え社会の諸相を風刺した。滑稽本の先駆(『デジタル大辞泉』より)。

●相撲絵「渦ヶ淵勘太夫 高寄市十郎」(この頃か。天明3年~4年(1783~84)とも。間判錦絵。勝春朗画。シカゴ美術館蔵)

●相撲絵「鬼面山谷五郎 出羽海金蔵」(この頃か。天明4年~寛政2年(1784~90)とも。縦間判注錦絵。勝春朗画。東京国立博物館蔵)

鬼面山谷五郎 出羽海金蔵(国立国会図書館)

※「勝春朗画」の落款のある間判相撲絵二枚の内の一枚。



注) 間判は、大奉書の大判 (約 39.0 cm×26.5 cm) と中判 (大判の2分の1、約 19.5 cm×26.0 cm) の中間の大きさ (約 33.0 cm×23.5 cm)。

※春朗期の相撲絵は間判2枚、細判3枚の計5枚が確認されている。寛政初期と思われる細判相撲絵に「高根山与一右エ門 千田川吉五郎」(細判)、「花頂山五郎吉 和田ケ原甚四郎」(細判)、「雷電為右衛門 盤井川逸八」(細判)がある。

●役者絵「五代目市川團十郎の悪七兵衛景清 二代目市川門之助の畠山重忠」(1月。細版注錦絵。春朗画)

注) 細版：横小奉書の縦3分の1。約 33 cm×15 cm。

※1月、市村座「若紫江戸子曾我」に取材。

天明5 (1785) 乙巳 26歳 勝春朗、春朗、春朗改 群馬亭、(可笑門人雀声)

【第二期春朗期】

◎天明5年～6年(1785～86)を第二期春朗期とする。勝川派の画風を消化した時期とされる。

◇この頃、江戸で寿司、天麩羅、蕎麦、鰻蒲焼の屋台が増える。

◇相撲興行(江戸場所は不景気のため開催されず)。

◇5月25日、石川豊信没(75)。浮世絵師。

○前野良沢、『蘭日辞典』。

○山東京伝、洒落本『令子洞房』。黄表紙『江戸紫 艶気樺焼』。

○大田南畝、狂歌撰集『徳和歌後万歳集』。

○鳥居清長、絵本『絵本物見岡』(江戸名所絵)。

【勝川派から距離を置き、群馬亭と称す】

★この頃、勝川派から距離を置き、群馬亭と称す。

※寛政6年(1794)の「砧図」(寅南呂注。8月頃。摺物)には、妻の死を悲しみ「君馬亭春朗画」と表記して、「群馬」ではなく特別に「君馬」を用いている。「群馬亭」は今年と翌6年の2年間だけ使用し、「春朗」が正式な号とされる。

注) 寅南呂：寅の年、南呂は8月の異名。

【貧窮で唐辛子や柱暦を売る】

★群馬亭と改名する事で、一旦勝川派から離れたと思われる。そのため貧窮生活となり、唐辛子売りや柱暦売りをしたとされる。

※「此の頃、小伝馬町(筆者注：(現東京都中央区日本橋小伝馬町)に住し、専ら狂歌の摺物を画く。従来摺物(筆者注：版元の企画によらず個人的に依頼されて描くもの)は錦絵とことなり別に画法ありて、風趣賤しからざるを旨とす。宗理の摺物もとより超凡にして、乗り請ふ者多しと雖、未だこれを専業とし、口腹を養ふに足らざるなり、貧困殊に甚しかりし。よりにて業を転じ活計をなさんとすること屢なり。宗理一日七色蕃椒(筆者注：

七色唐辛子) を売りあるきしが注1、売れずして止む。(本文割注) 七色唐がらしは、陳皮、胡麻など、七種と唱へ、食物の味を助くる料なり。些少の資本にて、調整し得るものなれば、これを売るものは、大抵貧窮人なり。又歳晩(筆者注：年の暮れ)に際し、柱曆注2をうり歩行きしが、浅草蔵前へ来りし時、先師春章夫婦に行き逢い、面目を失ひしと。(本文割注) 此のこと、北斎嘗て地本問屋山藤に語りしよし(『葛飾北斎伝』p46 句読点・ルビは筆者による)。

注1) 江戸の唐辛子売りは。売り物の入った六尺(180cm)ほどの大きさの張ぼての唐辛子を背負って「とんぐたうがらし ひりゝとからいはさんしよのこ すわくからいはこしようの粉 けしの粉 胡麻のこ ちんひの粉 とんぐたうがらし」(「近世流行商人狂哥絵図」より)のような口上を述べながら売り歩いたという。



著作堂(曲亭馬琴)「近世流行商人狂哥絵図」(国立国会図書館デジタルコレクションより)

注2) 柱曆：柱などに貼る曆。

※引用文中「宗理」とあるが、春章存命中の記事であるので寛政4年とする。「宗理」は後の名を引用したものか。

※「群馬亭」：「群」の「君」は夫人、「羊」は美の意味。「馬」は「午」、「亭」は「至る」とも訓む。故に「美しい妻が馬に乗って来る」の意。丙午に生まれた女子は、気が強く男を食い殺すという迷信があり、その前年の結婚を控える風習があることから、翌年の丙午での結婚を意識した署名だという(安田剛蔵『画狂北斎』p41)。

群れる馬のイメージから子ができた喜びからの改名という見方もある(瀬木慎一『画狂人北斎』p43)が、年代が合わない。

●黄表紙『怨念宇治の螢火』(二冊。作者不明。勝春朗画。松村屋弥兵衛版。国立国会図書館蔵)

※第2巻末尾の絵に描かれた葛籠の脇に「勝春朗画」とある。北斎の自画作とも言われる。

『怨念宇治の螢火』最終丁(国立国会図書館)



【雅号の推移】

芥川龍之介は「雅号」において次のように述べている。北斎の落款号の推移について考察する上で示唆的である。

「僕は昔の文人たちの雅号を幾つも持つてみたのは必ずしも道楽に拵へたのではない。彼らの趣味の進歩に応じておのづから出来たものと思つてゐる」(『続澄江堂雑記』四「雅号」大正14年11月12日条)

【「改」は「あらため」 改号は約30】

※北斎はたびたび号を変え、前号の後に「改」を入れることが多い。本稿では「かい」とは読まずに「あらため」と読む。ちなみに北斎は生涯に号を改めること約30回といわれる。更にいくつかのヴァリエーションを加えると非常に多くの落款となっている。

●黄表紙『親譲鼻高名』(正月。中本三冊可笑門人雀声(北斎の戯作名か))

作。春朗改群馬亭画。松村屋弥兵衛版。島根県立美術館：永田コレクション/国立国会図書館蔵)

※本書に勝川春章の「団十郎の暫図」を写す。享和元年(1801)、『下界驪鼻落天狗』と改題・再摺される。
親譲鼻高名：最終丁(国立国会図書館)



●役者絵「三代目瀬川菊之丞 白酒売」(2月頃。細版錦絵。春朗画)2月、桐座「五変化の一 初代菊之丞十三回忌」に取材。寛政3年(1791)3月中村座「助六縁牡丹」に取材か。

●錦絵「茶の湯」(「茶席二美人」とも。この頃か。中判錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版。21.0×15.7 フランス国立図書館/日本浮世絵博物館蔵)

※茶室の茶釜の脇で亭主の女と客の女が手をついて挨拶している図。松斎沙明(江戸後期に陶工で茶道に通じた人物がいたが当人か不明)の狂歌「茶にあらず/われは狂歌のすき屋より/にぢりあからん御一席まで」、宿屋飯盛(石川雅望)の狂歌「炉の釜の/音に/きこへし/よみ人の/うたは/格別/たぎり/たるもの」が添えられる。

天明6(1786)	丙午 27歳	勝春朗、春朗、春朗改群馬亭、群馬亭、(白山人可候)、
(白雪紅)：きみ(19歳)		

◇全国飢饉。

◇1月22日、江戸大火。

◇2月9日、日光山大火。

◇5月19日、歌川国貞(三代豊国)生(～1864)。

◇7月12日～18日、集中豪雨で利根川が氾濫により隅田川洪水。本所・深川地区浸水。

◇9月8日、将軍徳川家治没(50)。

◇8月27日、老中田沼意次失脚。

◇相撲興行(3月、浅草八幡宮、11月、浅草八幡宮)

◇深川の無宿養育所、地続きのため逃亡者が多く廃止。寛政2年(1790)、佃島沖に人足寄場を設置。

◇烏亭焉馬(1743～1822)、晰の会を始める。狂歌等を通じ大田南畝(蜀山人)らと親交あり。五世市川團十郎の後援者。江戸落語中興の祖といわれる。大工の棟梁で、住まいのある本所相生町(現東京都墨田区緑1-3-4)にある堅川から「立川焉馬」や、市川團十郎をもじって「立川談州楼」「談州楼焉馬」なども名乗った。

【北齋結婚する】

★きみ（19歳）と結婚。（この頃か。安田剛蔵『画狂北齋』（p41）での推測）。

●黄表紙『二一天作二進一十』（1月頃。中本三冊〈合本一冊〉。通笑^{つうしょう}注門人^{つうしょう}道^{みち}笑^{しょう}作。群馬亭画。松村屋兵衛門版。天明8年(1788)と寛政12年(1800)に『人間万事二一天作五』（群馬亭画。として改題再摺される。島根県立美術館：永田コレクション/立命館 ARC 蔵）

二一天作二進一十（島根県立美術館）

注）通笑：黄表紙作者市場通笑（元文2年～文化9年：1737～1812）のこと。日本橋通油町の表具屋。

●黄表紙『蛇腹紋原之仲町』（正月。二冊。春朗改群馬亭画。白雪紅（詳細不明）注作。榎本屋吉兵衛版）

注）白雪紅：『日本古典籍総合目録データベース』（国文学研究資料館）及び『国書総目録』（岩波書店版）によると「白雪紅」は北齋としている。



檜崎宗重『北齋論』（アトリエ社）では、黒田源次の「作者は白雪であって白雪紅ではない。同時に画工も春朗改群馬亭画となつてゐる。そうして序文を両国広小路住人前銭志門といふのが書いてゐる。年表の記者に従ふと『白雪紅 群馬亭が一時の仮号なるべし』といふことであるが、此筆法から言ふと前銭志門も群馬亭の異称であらう」という記事を紹介している（p32）。『黄表紙総覧』（棚橋正博）では北齋としていない。

●黄表紙『我家楽之鎌倉山』（正月。中本二冊。「わが家楽の釜盥」の意。作者名なし。群馬亭画。榎本屋吉兵衛版 島根県立美術館/東洋文庫蔵）。『年譜』では「群馬亭画作」は誤りとする。

●黄表紙『新蛇腹細見臍』（二冊。可笑門人雀声作。画工群馬亭画。榎本屋吉兵衛版。島根県立美術館蔵）

●黄表紙『前々太平記』（。中本五卷五冊。最終丁に「自惚山人戯作」とある。勝春朗画。花押。榎本屋吉兵衛版。島根県立美術館：永田コレクション/立命館大学蔵）

※正徳五年（1715）刊の軍記物語、『前々太平記』（平住専安作。号：橘墩）を下敷きにしたものとされる。聖武天皇からの歴史を扱ったもの。自惚山人は、日本橋横山町一丁目の煙管屋・池田屋久三郎。北齋の弟子で浅野（朝野）北水と号す。天文学を学ぶ。

【天明年間の北齋自身の黄表紙著作はない？】

●黄表紙『大仏左捨』（白山人可候注作。画工名無。三冊。国立国会図書館蔵。寛政5年〈1793〉に『東大仏楓名所』と改題再刊されている）

注）白山人は北齋とする説があるが、疑問視もされている。「可候」は寛政10年（1798）『化物和本草』で用いられ、他所で自身「そろべく」とし、その由来を述べてい

るが、本稿では一般に称される「かこう」と読む。但し、白山人可候と寛政10年からの可候が同一人かは疑問師されている。

「柵橋(正博)氏はこれを(筆者注:白山人を北斎とする説)否定して、可候を石山人(物蒙堂礼、狂名 盪 雨盛)と同一人とし、併せて、北斎作、『竈將軍勘略之巻』(寛政十二年:1800刊)の跋文に『初而之儀ニ御座候得ば(云々)』(筆者注:黄表紙の著作は初めてなので)とあることから、天明年間の北斎自身の黄表紙著作はないとする」(柵橋正博『黄表紙総覧 中編』日本書誌学大系48〈昭和61年〉の説を、WEB「浮世絵文献資料館」天明六年の項で紹介)。

すなわち寛政12年の『竈將軍勘略之巻』を以て黄表紙の初作としている。また、安田剛蔵「北斎の黄表紙 その四」季刊『浮世絵芸術』43号)も同様に白山人=北斎を否定している(『年譜』による)。

曲亭馬琴『近世物之江戸作者部類』(岩波文庫版)に「可候 文化中の臭草紙に、この作者名見えたが、久しからずして身まかりしといふ。何人なるをしらず。没年月は『墓所一覽』に見えたり」(p72)とある。馬琴が可候を知らないはずはないので、白山人可候は、北斎ではないと思われる。

●役者絵「団十郎と菊之丞」(正月。細判錦絵。春朗画。奈良県立美術館蔵)

※画中に「かげきよ市川団十郎 女ぼうあこや瀬川菊之丞」とある。五代団十郎は天明6年、景清役で大当たりをとったという。

●役者絵「四代目松本幸四郎 よどや手代新七」(9月頃。細判錦絵。春朗画。松村弥兵衛版か。29.5×13.6 すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション蔵)

松本幸四郎 よどや手代新七(すみだ北斎美術館)

※9月9日より桐座で上演「室町婦文章」の二番目大話、浄瑠璃「高麗菊浮名色入」に取材。松本幸四郎(1737~1802)は四代目。屋号は高麗屋。

●役者絵「市川八百蔵 つか元ぎつね」(細判錦絵。春朗画。ホノルル美術館蔵)

※腕組みをして見栄を切る八百蔵。

●錦絵「天神図」(この頃か。幅広細判。勝春朗画。島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※礼拝用に表具装にして販売された図。図は、梅と松の木を背後にして、杓を持って座る正装した菅原道真を描く。

●錦絵「両国の水茶屋」(細判着色。春朗改 群馬亭画。島根県立美術館蔵)



天明7(1787) 丁巳 28歳 春朗、勝春朗:きみ(20歳)、富之助(1歳)

【第三期春朗期】

※天明7年(1787)～寛政4年(1792)までを第三期春朗期とする。勝川風を残しつつ、春朗自身の特徴が出る時期。

◇天明の大飢饉。全国打ちこわし始まる。

◇相撲興行(5月、浅草八幡宮(米価高騰のため中止)、11月、浅草八幡宮)

◇4月15日、徳川家斉、第11代将軍となる。

◇5月20日、深川、四谷、青山辺で米屋が襲われる。深川では六間堀(現東京都江東区常盤辺)の者たちが森下町の米屋を襲う。5月21日、本芝、高輪、新橋、京橋に広がり、夕方には神田、日本橋、本郷にも広がる。5月24日に鎮静化。

◇6月19日、松平定信(陸奥白河藩第三代藩主)、老中に就任。

◇松平定信による寛政の改革(寛政5年:1793まで)。緊縮財政。重商主義。思想統制。

庶民の儉約。幕府批判の禁止。厳しい統制に対し、狂歌に「白河の清きに魚も住みかねて元の濁りの田沼恋しき」と、以前の田沼時代が恋しいとさえ詠まれた。白河は、定信が陸奥白河藩の養子であったことからこう呼ばれた。

◇11月9日、新吉原角町仲之町より出火。吉原全焼。

○森島中良(宝暦6年～文化7年(1756?～181))『紅毛雑話』(オランダについての知識を書いたもの。第4巻にはオランダの画法が述べられているので、北斎の幾何学的描法を示す『略画早指南』(文化9年:1812)に影響を与えたとする見方がある(リチャード・レイン『伝記画集 北斎』)。

【長男誕生】

★北斎の結婚2年目なので、この頃長男富之助生まれると推定。『画狂北斎』(安田剛蔵)では天明7年(1787)～寛政元年(1789)の間としている(p31)。

★この頃、日本橋小伝馬町に住むか(現東京都中央区日本橋小伝馬町)。(大久保純一『北斎の富嶽百景』p67による)。

●芝居絵本『大銀杏根元曾我』(1月頃。二冊。春朗画。沢村庄五郎版。ボストン美術館蔵)。※1月15日より上演の中村座「大銀杏根元曾我」に取材。

【絵暦・摺物を描く】

●絵暦・摺物「五代目市川団十郎の暫」(1月。色紙判着色。春朗画。独・ケルン東洋美術館蔵)

※前年の冬、桐座の顔見世に団十郎が三浦荒次郎役で演じたものに取材。面取した団十郎の上半身の絵は春朗が描く。他、勝川春英、歌川豊国、歌川国政らが担当。

図の右に「焉馬相生町松寿読」(相生町に住んだ烏亭焉馬:号松寿庵の詞書)とある。焉馬は団十郎の後援会「三升連」(団十郎の紋「みます」から命名)を主催していて、団十郎に関わる絵入りの暦を毎年制作した。図左の丸枠に大小月が描かれる。

※「絵暦」は、月齢により毎年的大小月が変わることから、当該年の大小月を示す暦をいう。絵入りで描かれるものであるが、後年は判じ絵風の描き方が主流となる。⇒明和2年(1765)「絵暦・錦絵誕生」の項参照。

※「摺物」は、商業的販売と異なり、金銭的余裕のある個人や狂歌グループなどからの注文により制作する画図等をいう。

五代目市川團十郎暫(ケルン東洋美術館:『2005北斎展図録』より転載)

●役者絵「五代目市川團十郎 大星由良之助」(8月頃。細判錦絵。春朗画。太田記念美術館蔵)。

※8月1日より上演の桐座「仮名手本忠臣蔵・九段目」に取材。天明3年(1783)に同画題の絵(討ち入りの姿)がある。

●役者絵「二代目市川門之助 すけつね」(1月頃。細判錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版)。※1月15日より上演の桐座「雪齋幸曾我」に取材。

●役者絵「嵐村治郎 せうく(少将)」「嵐村治郎 国行むすめ おれん」(1月頃。細判錦絵。春朗画。57.0×46.0 中右コレクション蔵)。

※1月15日より上演の中村座「大銀杏 根元曾我」に取材。

●役者絵「岩井半四郎 戸無頼」(8月頃。細判錦絵。春朗画。ボストン美術館蔵)。

※8月1日より上演の桐座「仮名手本忠臣蔵」に取材。

●役者絵「顔見世新狂言絵尽」(11月頃。細判錦絵。落款不明。中村座上演に取材)があるという(井上和雄『浮世絵標準画集 北斎』に〈天明七年十一月、中村座に出演せる「顔見世新狂言絵尽」と題する細版役者絵を描く〉(p25)とある。

●役者絵「三代目佐野川市松 けいせい大よど」(細判錦絵。春朗画。島根県立美術館:永田コレクション)

【浮絵を描く】

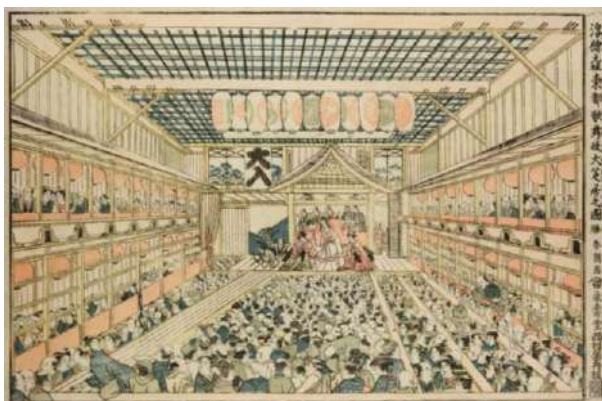
●錦絵「浮絵元祖東都歌舞伎(マ)大芝居之図」(11月。横大判。勝春朗画。西村屋与八版。26.3×38.5 大英博物館/すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション/ケルン東洋美術館/太田記念美術館/島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※舞台上の演目や提灯に書かれた役者の定紋から、11月1日よりの桐座(市村座の控櫓注2)の顔見世「三庄陸花姫」に取材したもの(『秘蔵浮世絵大観別巻』解説)とされるが、一方で、葺屋町(現東京都中央区日本橋堀留1丁目)にあった市村座の場内風景(『北斎クローズアップⅢ』p84)ともいわれる。

浮絵元祖東都歌舞伎大芝居之図(大英博物館蔵)



注 1) 「浮絵」：西洋画の遠近法を取り入れ、浮き出して見える画法で、奥村政信（1686～1764）が「近江八景」「吉原大門図」などの浮世絵に採り入れられたのが初めという。その後、歌川派の祖・歌川豊春（1735～1814）や北尾重政（1739～1820）がより正確に透視画法を取得した。歌川派のみならず北斎の師・勝川春章なども取り入れた。



注 2) 控櫓：興行権のある江戸三座（中村座・市村座・森田座）が負債その他の事情で興業が出来なくなったときに代わって興行する権利を持つこと。仮櫓ともいう。中村座は都座、森田座は河原崎座と控櫓は決められていた。

※当時の芝居は二本立てで、明六つ（朝5時～7時頃）から始まり夕七つ（夕方3時～5時頃）まで及ぶ。夏季・冬季により時間のずれがある。

天明8(1788) 戊申 29歳。群馬亭、春朗：きみ(21歳)、富之助(2歳)

◇相撲興行(4月、本所回向院、11月、本所回向院)。

◇7月24日、田沼意次没(70歳)。

○喜多川歌麿、絵本『虫撰』(昆虫の写実絵)。

●黄表紙『人間万事二一天作五』(通笑門人道笑作。群馬亭画。松村屋兵衛門版。天明6年：1786の『二一天作二進一十』の改題再摺本)

●役者絵「三代目市川菊之丞おそめ」(細判錦絵。春朗画。30.5×13.3 北斎館蔵)

※2月、桐座「おそめ久松浮名の初霞」に取材。黒の蛇の目傘を広げて肩にし、黒の御高祖頭巾を被り、岸边に立つおそめ役の菊之丞。久松との道行きの場面。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 久米之助」(1月頃。細判錦絵。春朗画)

※1月15日より上演された桐座「けいせい優曾我」に取材。

●役者絵「五代目市川團十郎 松王丸・市川門之助 桜丸」(春朗画。島根県立美術館：永田コレクション)

※立膝で門之助が持ち上げる米俵に、米俵を抱えた団十郎が上から右肘を掛けている。

●錦絵『俳諧秀逸』(この頃か。縦中判揃物。春朗画。西村屋与八〈永寿堂〉版)

※全何図かは不明。『北斎美術館3 美人画』(集英社)では版元不明としている。

☆〈かつこ鳥〉(22.5×15.6 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※白の穀物を杵で突きながら郭公の声を聞いている女と、隣で機織りをする手拭を被った女が描かれる。

☆〈秋の風〉（東京国立博物館蔵）※棧橋で、杖を突き「生」の字のある提灯を持って立っている女と、舟の中の芸者風の女とが何かを話している。「物いゑバ口びるさむし秋の風」の句が記される。舟に置かれたたばこ盆に「●村屋」と版元を思わせる書込みがある。

秋の風（東京国立博物館）



☆〈日に濡れて〉（45.0×60.5 すみだ北斎美術館/江戸東京博物館蔵）



※黒塗りの傘を小脇に抱える女と、団扇と虫籠のようなものを持つ女房が橋を渡る。二人の着物は背後からの風で前に靡いている。「日に濡れて月にミをさす涼みかな」とある。

日に濡れて（すみだ北斎美術館）

☆〈つきの友〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※川を行く舟が見える座敷で、座って顔を上げていた女と、立って右手で襟を触っている女。「川かみとこの川しもやつきの友」とある。

☆〈水うてや〉（21.8×16.3 すみだ北斎美術館蔵）

※桶の水を撒いている若衆を見ている美人。宝井其角の俳句「水うてやせみも雀も濡れるほど」が添えられる。

●錦絵『中山王来朝図』（間判。「琉球使節来朝図」とも。この頃か。2点確認されている。春朗画。はりまや（播磨屋）新七版）

※この頃の琉球使節来朝（江戸上り・江戸立ち）は明和元年（1764）の将軍家治襲職の祝いのための使節（慶賀使）、寛政2年（1790）の将軍家斉の襲職祝いの使節（慶賀使）が記録されているが、明和元年（1764）時の北斎は5歳であるので、あるいは寛政2年（1790）、31歳頃の作品か。または、来朝使を描いた従来多くの絵などを見て描いたものか。

☆〈楽童子 虎旗 跟伴〉（32.3×21.8 太田記念美術館：長瀬武郎コレクション蔵）

※楽童子（琉球語で「やつとんつう」と発音する）は、琉球来朝使節の中で、音楽や舞踊を担当する15歳から18歳の少年たちをいう。江戸に上った際に、座って演奏する室内楽「御座楽」（「おさがく」とも）を演奏した。きらびやかな綸子や縮緬の琉球衣装や、びらびら簪をつけた美少年たちが評判であったという。

図は、二人の少年が、虎を描いた幟旗（虎旗）の下、一人は馬に乗り、一人はその後ろにつき、琉球風の衣装の男たちに囲まれて進んでいる。跟伴は、役人の従者で、漢名で言う。

☆〈中山王親雲上 衣家 跟伴〉（本図はフォッグ美術館注にあるという。『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』より）

注) フォッグ美術館：アメリカ・ハーバード大学附属美術館。

※中山王は、中山（琉球）の王の意味。中国から中山王の冊封（古く中国で、天子が臣下や諸侯に冊という詔をもって爵位を授けた）を受けるのを慣わしとしていた。親雲上は、最上位の位階。

【以下、天明年間】

春朗、勝春朗、勝川春朗、印：春朗、（花押）

●錦絵「浮絵 源氏十二段之図」（天明5年～寛政2年〈1785～90〉）。横大判。勝春朗画。西村屋与八版。25.8×38.0 ポストン美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館/オランダ国立民族学博物館蔵

※牛若丸と三河国矢矧宿の長者の娘浄瑠璃姫との恋を語った御伽草子『浄瑠璃十二段草子』四段目「外の管弦」を主題にしたもの。

遠近法で描く。図は、庭先で牛若丸が吹く横笛の音を、座敷の奥で浄瑠璃姫が聴いている場面。



浮絵 源氏十二段之図（ポストン美術館蔵）



パブリックメイン美術館（『名品揃物浮世絵 9 北斎II』ぎょうせいより）

【春朗期の最も早い肉筆画（版下絵）】

●墨絵『風流東都方角』（天明5年～天明7年〈1785～1787〉）。10図。墨摺。西村屋与八版。ウイクトリア・アンド・アルバート美術館蔵

※扇形枠やハート形枠に描き、周りに画題が大きく記されている。この図案は、鳥居清長（1752～1815）「江戸八景」（細版錦絵。安永〈1772～81〉後期）で既に試みられている。版下絵ではあるが、春朗期の肉筆画として20代の直筆で、最も早い時期の絵。江戸の名所シリーズを企図したもの。「東都方角」は、「江戸の名所あちこち」くらいの意味と思われる。

☆〈柳蔭法性寺妙見堂の図〉（春朗画。18.9×25.7）

※妙見堂の松の側の休み所で若衆とくつろぐ女二人。妙見堂（現東京都墨田区業平5-7-7）は、柳島妙見山法性寺 といひ、「柳島の妙見さま」と親しまれている寺。隣には料亭「はしもと」があり、日本橋方面から屋形船や猪牙舟で参詣に来て、その後料亭で遊興する客が多かったという。

図左の 影向松に本尊が降臨し、白蛇が住んでいたといわれる。白蛇を描いた絵馬が柵に掛けられている。



柳島法性寺妙見堂の図（ヴィクトリア&アルバート美術館）

【印号・辰政と雷震の由来】

北斎はこの寺の「開運北辰妙見大菩薩」（北斗七星を祀る菩薩）を信仰していた。後に勝川門を離れた北斎は生活に窮し、筆を折ろうとまで考えたが、妙見様へ21日間参詣し、満願の日の帰り道、落雷に遭って失神。そこから雷震注の号を得たという。また、寛政8年（1796）頃から使い始めた印号「辰政」は「北辰」（北極星）から得たものともいわれる（『葛飾北斎伝』p54）。

「雷震」の「震」も「辰」（北辰）のもじりで、雷に震えたことに掛けていると思われる。

☆〈吉原〉（春朗画。17.7×25.1）

※花魁三人の側に立つ男。それを見ている二人の男の図。吉原は「遊女三千」といわれた（大正2年成光館出版部『趣味研究 大江戸 全』所収、佐々醒雪「江戸の俗謡と上方」より）。

☆〈隅田川木母寺注の図〉（春朗画。18.2×25.0）

※煙管を吸う女と傍にいる男。男に手を差し伸べる女。遠景には侍と女の二人連れの図。
注）木母寺：現東京都墨田区堤通2-16-1。天台宗の寺で、能「隅田川」の梅若山王権現の舞台であるところから古くは梅若寺ともいわれた。木母寺は「梅」の字を二つに分けてつけられたものという。

能楽では、吉田少将惟房の子、梅若丸は5歳の時に父を失い、7歳の時に比叡山で修行していたが、山僧の争いから逃れて大津に行ったところ、信夫藤太という人買いに欺かれて隅田川まで来た。ここで病に倒れ「尋ね来て問はば応えよ都鳥 隅田川原の露と消えぬ」との歌を詠み、3月15日、12歳で亡くなった。たまたま天台の僧、忠円がこの地を訪れ、梅若のために塚を築き、一株の柳を植えた。翌年の命日に里人が吊っているときに、梅若を探し、悲しみ狂いながらたどり着いた母親が里人と共に供養していると、その夜、塚の中に我が子の姿が現れたというもの。

☆〈無題〉（無款。17.7×25.3）

※二頭の獅子像の前の三人の女と三人の男が参詣する図。背後に石燈籠の図。

☆〈神田明神注〉（春朗画。18.1×25.0）

※鳥居の脇の休憩所で休む男の子。鳥居の所に立つ二人の女。下の階段から上ってくる男の図。

注) 神田明神：現東京都千代田区外神田2-16-2。江戸三大祭の一、神田祭で知られる神社。神田・日本橋・秋葉原・大手町・丸の内・旧神田市場・築地魚市場など 108 町会の総氏神で

ある（「ウイキペディア」より）。

☆〈無題〉（無款。寺の前の広場に立つ二人の女に向き合う坊主。女の後ろに侍とお供の男。寺の正面入り口に二人の人。

☆〈貴船明神社注〉（無款。17.8×24.5）

※頭巾の端を口にくわえる女。侍が二人。右側に参詣する男女。絵の中に筒井筒と竹が描かれる。

注) 貴船明神社：現東京都品川区西品川3-16-31。品川(旧三ツ木村)の産土神（その土地の鎮守神）。この頃は目黒川の南側にあったといわれるが、現在は川の北側に建っている。

☆〈根津権現注の図〉（春朗画。17.5×24.7）

※図は、権現社の脇の小川に手を入れる女と、その脇に立つ若侍と揚帽子（角隠し）を被った二人の女。その前で跪く伴侍を描く。

注) 根津権現：現東京都文京区根津1-28-9。根津神社と呼ばれる。江戸期には「権現」と称していたが、明治期に神仏分離政策で「権現」が禁止となった。社殿は 5 代将軍綱吉による造営。門前に根津遊郭があったが、東京大学が近くに移転したことに伴い深川の洲崎に移転した。

☆〈目黒不動注〉（無款。17.1×25.1）

注) 目黒不動：現東京都目黒区下目黒3-20-26。瀧泉寺の通称名で関東最古の不動霊場。大同3年（808年）、この地に立ち寄った慈覚大師・円仁の夢に顔面が青黒く、右手に剣を持ち、左手に魔を縛る縄を持った恐ろしい形相の神人が現れたので、その姿を彫刻して安置したのに始まると縁起にある。大師が敷地を定めるにあたり、持っていた仏具の独鈷（筆者注：密教の法具。両端が尖った短い棒状のもの）を投げた所から流れ出た滝が「独鈷の滝」と呼ばれ、枯れることなく流れ、また、五色不動（目黒・目白・目赤・目黄・目青）の一として江戸名所となったという。

※図は、独鈷の滝に打たれる二人の男や、同じく禊ぎのために裸でいる男二人と、その様子を見ている女。滝の脇の部屋で刺青をした裸の男と話す女等を描く。

☆〈無題〉（無款。17.6×24.7）

※屋敷門前の二人の女と一人の男。女の一人は扇子を持つ。側に供の女。後ろの垣根の側には女が歩く姿。左上にかけて川が描かれる。

●錦絵『東都方角』（天明 7 年～9 年〈1787～89〉。横中判。春朗画。西村屋与八版。各平均 19.0×25.6）

※『風流東都方角』（天明 5 年～7 年〈1785～87〉。ヴァクトリア・アント・アルバート美術館蔵）と題された版下絵（10 図）の着色版。現在 4 図確認されているという。

☆〈東叡山之図〉（東京国立博物館蔵）

※「両大師」と書かれた立札の側で、女たちが宴を楽しんでいる図。一人は敷いた莫座に座り、二人の女は立って、頭巾を被った男と話をしている。「両大師」は、東叡山輪王寺（別称：開山堂。現東京都台東区上野公園14-5）の通称。東叡山の開祖天海（慈眼大師）と、天海の崇敬する良源（慈恵大師）の二人の大師をを祀ることに由来する。



東叡山之図（東京国立博物）

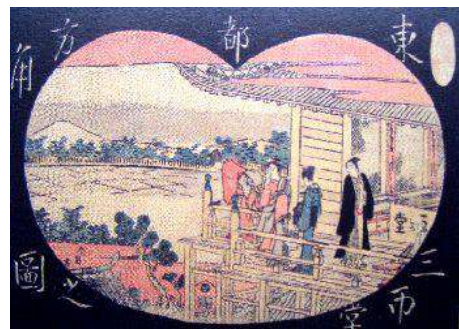
☆〈梅屋舗之図〉（すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※扇面図の体裁を採る。梅屋敷に観梅に来た人々。娘二人と煙管を持つ男、その後に風呂敷の荷物を背負った小奴が立つ。垣根の側には若衆が扇子をかざして梅を見て居る。

☆〈忍か丘之図〉（東京国立博物館蔵）

☆〈三匠堂之図〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※三匠堂は、天恩山五百羅漢寺（現東京都江東区大島3-1）の 3 階にあった展望台。さざみ堂。明治 41 年（1918）に目黒区に移転した。



三匠堂之図（島根県立美術館）

【春朗期唯一の大型美人画】

●錦絵「花くらべ弥生の雛形」（天明 3 年～5 年〈1783～85〉。大判着色。無款。37.5×22.9 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※磯田湖龍斎の「雛形若菜の初模様」に影響を受けたものとされる。吉原の丁子屋庄蔵抱えの遊女錦戸と扇屋宇右衛門抱えの夕栄、それに振袖新造が、筆と硯を入れた箱を持っている。桜の花咲く木の枝にぶら下げる短冊に句などの文字を書きつけようと筆を持つ遊女の図。現存する春朗期唯一の大判美人画とされる。

花くらべ弥生の雛形（島根県立美術館）



●錦絵『風流男達八景』（天明年間〈1781～89〉中判錦絵揃物。春朗画。西村屋与八版）。芝居によく登場する男伊達八人に景色を結びつけた揃物。6 図のみ確認されている。

☆〈荒五郎の暮雪〉（21.5×15.5 太田記念美術館：長瀬武郎コレクション蔵）

※荒五郎茂兵衛は、江戸木挽町に生まれ、堺町の奴の治兵衛と争った侠客。芸子風の女と対岸の待乳山を望む雪の大川端を道行する荒五郎は、裸足で裾を端折り、長どす（長い刀）の落とし差しの粋な姿。女は傘を閉じ左手に持って立っている、裾から高下駄を履いた右足が覗いている。

図の背景は全体に下絵風に簡略化された描き方になっている。

☆〈文七の落雁〉（22.0×16.2 シカゴ美術館蔵）

※恋人の遊女清水が舶来物のガラスの手鏡を持つ文七の髪を梳かす図。窓の外には雁の群れが描かれ、文七の渾名「かりがね」を暗示している。元禄5年（1692）に獄門に処せられた大坂のならず者「雁金五人男」の一人「雁金文七」に取材。

五人男の他の四人は、庵の平兵衛、布袋の市右衛門、極印千右衛門、神鳴庄九郎。

文七の落雁（シカゴ美術館）



☆〈綱五郎の帰帆〉（22.8×15.9）

※二人の女を乗せ、船縁に右足をかけ手拭いを被り、竿を突き立て舟を操る綱五郎。

☆〈弥左衛門の晩鐘〉

※頭に手拭を四角に畳んで乗せ、着物の左足の裾を引き上げ、下駄を履いて鯔背に見栄を切る弥左衛門を、手拭の端を口にくわえて片膝を折って見つめる女。

☆〈伝吉の晴嵐〉（22.8×15.9 すみだ北斎美術館/大英博物館蔵）

※壇の前で袖を口にあてる女に話しかける伝吉。その足元に片膝をついて煙管を使う男がいる。

伝吉の晴嵐（すみだ北斎美術館）



☆〈濡髪放駒の夕照〉（22.3×15.9 すみだ北斎美術館蔵）

※歌舞伎「双蝶々曲輪日記」二段目「堀江相撲小屋の場」から取材。濡髪長五郎と放駒長吉の二人の力士が茶屋で睨み合う図。側に茶屋の娘が茶を持って立っている。

●錦絵「新板浮絵化物屋舗百物語の図」（天明年間〈1781～89〉）。横大判。春朗画。西村屋与八（永寿堂）版。23.6×35.4 ポストン美術館/奈良県立美術館蔵）

※百物語は、怪談話遊びで、最後の一人が怪談を語り終えると幽霊が出現するという遊び。

図は、最後の話が終わり、部屋中に奇怪な化け物が現れ、頭を抱えて俯したり、手を合わせて拝んでいる様子が描かれる。



新板浮絵化物屋敷百物語の図（ポストン美術館）

※鳥山石燕（安永 5～天明 4 年〈1776～84〉）の妖怪画集『画图百鬼夜行』（安永 5 年〈1776〉3 卷）を参考にしたか。また、後年、歌川国芳が「百物語化物屋敷の図 林家正蔵工夫の怪談」（天保 10 年～12 年〈1839～41〉）頃。横大判錦絵。山口県立萩美

術館・浦上記念館蔵）で、同様の絵を描いている。

歌川国芳：百物語化物屋敷の図 林家正蔵工夫の怪談（山口県立萩美術館浦上記念館）

●錦絵『江戸近郊八景』（仮題。天明年間〈1781～89〉）。中判。シリーズ名は不明。春朗画）

※揃物と思われる。他の絵は不明。歌川広重に同題の揃物がある。



江戸見坂夜雨（島根県立美術館）

☆〈江戸見坂夜雨〉（島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/東京国立博物館蔵）

※蛇の目傘をさした男女二人連れ。男は手拭いを被り、荷物を背負い、着物の裾を端折り、左手に草履を持ち、裸足のまま。芸者風の女は男に寄り添い、これからの行く先を眺めているのか、来た道を振り返っているのか。道行きの場面。「月の下の屋根からさきの夜の雨 ぬれじとさすやひとつ松かさ」が左から右に記される。

☆〈飛鳥山暮雪〉（21.8×15.4 東京国立博物館蔵）

※図の右上に狂歌「あすかやま 狐の尾久の王子まで 花や見にこん 雪や見にこん」が記される。雪景色の中で母親と娘がふり返っている。

注) 飛鳥山：徳川吉宗が享保の改革の一環として整備し、上野寛永寺の桜に次ぐ桜の名所とした。現在でも飛鳥山公園（東京都北区王子1-1-3）として桜の名所になっている。この図では雪景色が描かれる。

飛鳥山暮雪（東京国立博物館）



☆〈両国夕照〉（20.6×15.6 東京国立博物館/日本浮世絵博物館蔵）



※矢場の床几に左足を折って腰掛け、雪駄を下に投げ出し、刀を腰から引き出して粹に煙管をくわえている男。その脇で髪櫛に手をやり、団扇を手にした女が立っている。図の上には「弓」の字と的が描かれた吊り看板がある。富士帆波の狂歌「玉をふたつにたちわりし みせの西瓜の色も夕照」が記される。

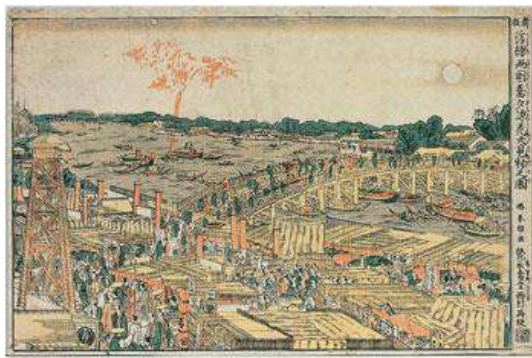
両国夕照（日本浮世絵美術館）

●錦絵「風流宇治の道の記 平等院」（天明7年～9年〈1787～1789〉。中判着色。春朗画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※振袖の娘と女の二人が平等院の前の、川岸の道をそぞろ歩いている。

●錦絵「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」（天明2年～9年〈1782～89〉。大判錦絵。勝春朗画。西村屋与八版。24.4×37.3 島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館/神戸市立美術館/日本浮世絵博物館蔵）

※色版を変えた後摺再版の「江都両国橋夕涼花火之図」（天保中期。萬屋吉兵衛版）がある。西村屋版の花火は、打ち上がる軌跡の上に花のように開いているが、萬屋版は、星のように10個の火の玉が開き、西村屋与八版にあった火の上の跡と右上の月が削られている。



新板浮絵両国橋（橋）夕涼花火見物之図（島根県立美術館）



江都両国橋夕涼花火之図（島根県立美術館）

●錦絵「浅草金龍山観世音境内之図」（天明2年～7年〈1782～87〉。横大判。勝春朗画。西村屋与八再版。24.7×37.1 ベルリン東洋美術館/太田記念美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/日本浮世絵博物館/ホルン美術館蔵）

※浅草寺の正面にある観音堂を、垂直・水平の細い線で正確に描いている。「浮絵」の表記はないが、浮絵の描法で描かれる。



浅草金龍山観世音境内之図（ベルリン東洋美術館）

境内には大勢の参詣客、観音堂の左側には屋根に掛かる梯子、観音堂の右奥には水茶屋が描かれる。

●錦絵「**新板浮絵金龍山二王門之図**」(天明2年～9年〈1782～89〉)。横大判。勝春朗画。西村屋与八版。25.2×38.0 奈良県立美術館/島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※浅草寺の山門を進むと二王門があり、その門前と門後に賑わう人々を描く。左に地主稲荷の石の鳥居が描かれ、右奥には五重の塔が見える。門の両脇に二王を描く。好評のため玉川舟調(一筆斎文調門下で寛政から享和にかけて錦絵と黄表紙挿絵を手掛ける。生没年不詳)と二代喜多川歌麿(文化3年〈1806〉、初代歌麿没後、その妻の夫となり二代目を称する。生没年不詳)が同構図の作品を発表している。

●錦絵『**湯治場八景**』(天明3年～5年〈1783～85〉)。あるいは天明3年(1783)頃か。揃物と思われる。中判。印春朗。蔦屋重三郎版。すみだ北斎美術館蔵)

☆〈しゅぜんじのばんせふ〉(「修善寺の晩照」)25.0×18.6)



※女がしゃがみ込んで上がり框から手を伸ばして三和土の下駄を揃えている。隣で上半身はだけた女が団扇を立膝で煽いでいる。着流しの男が部屋の開き窓の棧に肘を掛けてしゃがみ込んだ女を見ている。

湯治場八景 しゅぜんじのばんせふ(すみだ北斎美術館)

●錦絵「**風流四季の月**」(天明3年～5年〈1783～85〉)。春朗画。中判錦絵。)

※「あき」「ふゆ」を含めた4図



の揃物と思われる。

☆〈はる〉(慶応大学メディアセンター 22.0×15.5)

※籬に囲まれた梅の木の前で、若衆と娘が立っている図。

風流四季の月 はる(慶応大学デジタルコレクション)

☆〈なつ〉(アレンモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵)

※柳の下で涼をとる二人の女性の図。

●錦絵「**青面金剛図**」(天明4年～9年〈1784～89〉)。幅広細判着色。勝川春朗謹図之(花押)。40.6×14.1 太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/ホノルル美術館/日本浮世絵博物館蔵)



※庚申待注で祀られるため表具装にして販売された図。青色の金剛童子は病魔を除く力を持つという。足元に見ざる、聞かざる、言わざるの三猿を配し、鬼を踏みつけて立つ六手の青面金剛。猿の前には鶏の親子が描かれる。その前に番の鶏と二匹のひよこもいる。

注) 庚申待：庚申の日、仏家では青面金剛、または帝釈天神道では猿田彦の神を祭り、徹夜をする行事。この夜眠ると、そのすきに三戸（道教で、人の体内にすんでいるという三匹の虫）が体内から抜けだして天帝にその悪事を告げるといい、またその虫が人の命を短くするともいわれる。村人や縁者が集まり、江戸時代以来、次第に社交的なものとなった。庚申会。（「デジタル大辞泉」より）。

青面金剛図（太田記念美術館）

●錦絵「不動明王図」（「不動明王と二童子」とも。天明4年～9年〈1784～89〉。幅広細版錦絵。勝川春朗画謹図之（花押）。礼拝用に表具装にして販売された図。38.0×14.3 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※蓮の花や棒を持った守護神を足元に配し、右手に剣を持ち、火炎を背にして立つ不動明王の図。秋田の旧家に伝わったもの。

●錦絵「浮絵一ノ谷合戦坂落之図」（天明8年～9年〈1788～1789〉。横大判。勝春朗画。西村屋与八版。24.3×37.5 日本浮世絵博物館/島根県立美術館：永田コレクション/バウアー財団東洋コレクション/ジェノヴァ（キヨッパネ）東洋美術館蔵）

※治承8年（1184）2月、図の右に、一ノ谷の城に陣を構えた平氏の軍勢に源義経の軍が、一ノ谷の裏の断崖絶壁である鶴越を、麓の城まで逆さ落としに下る場面を小さく描く。城の外には船団が無数に描かれる。

浮絵一ノ谷合戦坂落之図（ボストン美術館）

●錦絵「浮絵東叡山中堂之図」（天明8年～9年〈1788～1789〉。

横大判。勝春朗画。西村屋与八版。24.5×37.1 太田記念美術館：長瀬コレクション/ホノルル美術館/島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館蔵）

※中堂の入り口の上の、緩い太鼓橋風の渡り廊下と屋根を中心に、

左右対称に中堂全体を描く構図。渡り廊下の入り口から奥の中堂まで遠近法で建物と人々を描く。中堂は、根本中堂のことで、元禄11年（1698）に、現在の上野公園大噴水の所に



建立されたが、慶応4年(1868)の彰義隊の戦で焼失、その後、現在の境内である東京都台東区上野桜木1-14-11に移された。

浮絵金龍山中堂之図 (ホノルル美術館)



●錦絵「見立忠臣蔵 七段目」(天明年間〈1781~89〉)。着色表装仕立。春朗画。59.0×11.5 太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館蔵)

※祇園一方の場。大星由良之助は、敵を欺くため、京都の茶屋一方で遊興の日々を送る。ある日、長男力弥からの師直方を偵察した手紙を読んでいると、二階にいたお軽が鏡で写し読みをし、縁の下で師直側の斧九太夫が下に垂れた巻き手紙の部分を読んでしまう。

図は、縁の下に師直側の斧九太夫がおり、縁側に力弥が立っていて、二階にはお軽が下を見ている場面。

●錦絵「忠臣蔵義士夜討」(「忠臣蔵義士夜討」とも。天明年間〈1781~89〉)。大判三枚続。春朗画。西村屋与八版。右 38.0×25.6 中 38.0×25.3 左 38.0×25.1 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館/二階堂浮世絵文庫/江戸東京博物館蔵)



忠臣蔵討入 (すみだ北斎美術館)

※「仮名手本忠臣蔵」十一段目に取材。右一枚目の討入りから左三枚目の高師直までの連続した図。春朗時代の三枚続の大判。

【右図】屋敷の門に梯子を掛け、門の屋根の上から槍を構えたり、弓を射ったりしている。奥では師直方と浪士が刀を合わせている。その前を提灯を持ち、上半身裸の女が逃げている。

【中図】屋敷の屋根にいる禪姿の男に槍を下から向けている赤穂浪士。その側で禪姿の男が四つん這いになって逃げようとしている。手前では裏木戸から逃げる禪の男に槍を向ける浪士。図左上には、師直方に使える女が槍を持って縁側に立っている姿が描かれる。

【左図】炭俵小屋にいた高師直（吉良上野介）を槍で突き討ち取る場面。小屋の屋根には、弓を構える浪士たちがいる。桶を被って裸で逃げる男が描かれる。

※春朗時代の三枚続きの絵は、本図と「西王母」（寛政6年：1794頃）のみ確認されている（2005『北斎展図録』解説）。但し、「西王母」（春朗期の作品）は墨絵である。

●錦絵「浮絵忠臣蔵夜討之図」（天明2年～9年〈1782～89〉）。横大判。勝春朗画。西村屋与八版。24.1×37.6 ベルギー王立美術歴史博物館/ミネアポリス美術館/日本浮世絵博物館蔵

※遠近法を使った浮絵で、吉良邸（現東京都墨田区両国3-13-9 本所松坂町公園）内での戦いを描く。前面に描かれた、天井の梁に下帯（禪）のみ身につけた侍がしがみついて難を遁れている姿がユーモラスに描かれる。 浮絵忠臣蔵夜討之図（日本浮世絵博物館）



●錦絵『子ども遊び揃物』（仮題。天明年間〈1781～89〉）。中判。春朗画。何図出版されたかは不明という）

☆〈釣り竿を持つ子と亀を持つ子〉（カナダ・オンタリオ美術館/すみだ北斎美術館蔵）

※釣り竿を肩にかけ魚籠をつけて座る芥子坊頭の子と、頭を剃った子が亀を持って寄り添っている図。

釣り竿を持つ子と亀を持つ子（すみだ北斎美術館）



☆〈水出し遊び〉（「水出し」とも。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※二人の子どもが噴水の玩具で遊んでいる。一人は団扇で口元を隠している。

●柱絵「女礼」（天明2年～9年〈1782～89〉）。柱絵注判着色。勝春朗画。版元不明。65.4×11.4 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）。

※絵部分と表装部分を分けて摺り込みにした図。女礼は、正月四日以降の女性の年始回りをいう。梅の花咲く雪道を高下駄を履いて、新年に年賀の挨拶に向かう武家の奥方の図。書き入れに「見かへりぬ梅が笑顔の女礼」とある。

注) 柱絵：柱に飾るための細長い判。柱隠し、柱掛けともいう。時代により異なるが、この頃は77.0 cm×13.0 cm前後のサイズ。

●柱絵「富士見西行図」（天明4年～5年〈1784～85〉）。柱絵着色一枚。勝春朗画。島根県立美術館/ホノルル美術館/太田記念美術館蔵）

※笠を持ち、墨染の衣をまとい、杖を突いている西行^{さいぎょう}の背後に、裾野に雲がかかった富士山が描かれる。文化11年～15年（1811～15）にもほとんど同構図の柱絵「富士見西行図」がある。但し、西行の向きが反転し、富士山は全容が描かれている。

注) 西行^{さいぎょう}：元永元年～文治6年（1118～1190）。平安時代末期から鎌倉時代初期の人。北面^{きたへ}の武士（警護の武士）で、俗名は佐藤義清であったが、出家し法名を西行と称す。歌人として全国を旅する。21代勅撰集に265首入撰。私家集に『山家集』がある。晩年に「願はくは花の下にて春しなんそのきさらきの望月のころ」と詠み、願いどおり陰暦2月16日の釈迦涅槃^{しやくわねはん}の日に入寂^{にゅうじやく}したといわれる。 富士見西行図（2012年ホノルル美術館所蔵北斎展より）



●柱絵「宝船の七福神」（天明年間〈1781～89〉）。柱絵着色一枚。春朗画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※縦長に、船上の七福神を描き収めたもの。当初は掛幅の表装であったらしい。図の上から、祝いの文字を書きかけた白い長布を持つ大黒天^{だいこくてん}。筆を持って、その長布に字を書きかける弁財天^{べんざいてん}。長布の端から顔を覗かせる恵比寿^{えびす}。怖い顔で酒を飲む毘沙門天^{びしゃもんてん}。烏帽子を被る福祿寿^{ふくろくじゆ}。軍配団扇を頭にかざす寿老人^{じゆうろうじん}。一番下の布袋^{ふてい}は船から手を出して海中の瑞亀^{ずいき}を捕まえている。大黒天の頭上には鶴が舞っている。

●錦絵「金太郎に熊」（天明年間〈1781～89〉）。細判。春朗画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※滝の前で、鉞^{まさかり}を担いだ金太郎と立った熊が手をつないでいる。熊は法被^{ほっぴ}のようなものを着ている。

●錦絵「熊に団子をやる金太郎」（天明年間〈1781～89〉）春朗画。着色。西村屋与八版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※鶴の絵柄の着物を着た金太郎が、櫛に刺した団子を小熊に与えている。足元には、籠の中に正月遊びの玩具がある。その側には二匹の小熊が伏せている。三頭の小熊は法被^{ほっぴ}のようなものを着ている。



●錦絵「豆まきをする金太郎」（天明年間〈1781～89〉）。細判着色。春朗画。32.0×14.2 すみだ北斎美術館：ヒーター・モース・コレクション蔵）

※烏帽子を被り、刀を腰に挿し袴^{はかま}を履いた金太郎が、着物の右肌を脱ぎ、左手に豆を入れた升を持って豆を撒いて、足元の三匹の鬼を退治している図。北斎の描く金太郎図は鳥居派の影響を受けているという（『ヒーター・モース・コレクション北斎図録』による）。

豆まきをする金太郎（すみだ北斎美術館）

●錦絵「二人若衆」(天明年間〈1781～89〉)。春朗。着色。30.8×13.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※隅田川沿いの、堀の中に松の木がある家の前で立ち話をしている若衆が二人。一人は羽織を着て 懐手をしている。一人は羽織なしの着流しの男。川の向こう岸には材木が林立しているので本所の豎川の辺りだろうか。



●錦絵「当世宮戸川十景」(天明4年～9年〈1784～89〉)。細判着色。揃物。春朗画)

☆〈こまかた〉(「駒形」島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※槍持ちの毛槍の先に子どもの尻糸が絡まっている図。

☆〈しゅひの松〉(「首尾の松」島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※対岸の首尾の松が見える座敷に立つ朱色の帯を締めた女が、鬘に差した櫛に簪を当てている図。

首尾の松は、隅田川の西岸にあり(現東京都台東区蔵前1-3)、吉原へ行く男が、この松を見ながら吉原で首尾よくいくようにと祈ったとか。

しゅひの松(島根県立美術館)

天明9/寛政1(1/25～)(1789) 己酉 30歳 春朗、勝春朗、(たけ光さや南利)：きみ(22歳)、富之助(3歳)、阿美与(1歳)
--

◇7月14日(太陽暦)、フランス革命起る(1795年8月まで)。

◇相撲興行(3月、浅草八幡宮、11月、深川八幡境内)。

◇11月19日、二代目谷風梶之助(1750～95)が小野川喜三郎(1758～1806)とともに横綱となる。

◇棄捐令(俸禄米〈切り米〉を現金化する札差への武家等の借金を棒引きにする)発布。

◇恋川春町、黄表紙『鸚鵡返文武二道』(北尾政美画〈鋏形蕙斎〉)で寛政改革の文武奨励を風刺。松平定信の著作『鸚鵡詞』(「鸚鵡言」とも)をもじった題名であり、作中で「九官鳥のことば」としたことで幕府の忌諱に触れ、召還されたが出頭せぬまま7月7日に没す(45)。自殺説あり。

◇石部琴好、寛政元年(1789)佐野政言が田沼意知を殿中で刺した事件を風刺した黄表紙『黒白水鏡』により、手鎖・江戸追放。画工北尾政演(山東京伝)は科料となる。

○喜多川歌麿、「潮干のつと」(魚介の写実画)。

【長女・阿美与誕生】

※この年阿美与誕生か。

【戯作の草紙を描く】

★北斎は「初年、専通笑注、および京伝、馬琴等戯作の草紙を画く」(飯島虚心『葛飾北

齋伝』 p 48)。

注) 通笑：市場通笑 (1737～1812)。京伝：山東京伝。馬琴：曲亭馬琴。

【日千両・市村座の芝居絵本を描く】

★本年より寛政5年(1793)2月まで市村座の芝居絵本を描いたとされる(『年譜』による)。美人画・武者絵も開拓する。

※市村座は江戸三座の一つで、江戸日本橋葺屋町(現東京都中央区日本橋人形町3丁目2～7番地辺)にあった。座紋(ロゴマーク)は丸に橋を描くので、俗に「橋」と呼ばれた。

三座は他に、日本橋境町の中村座(現東京都中央区日本橋人形町3丁目2～7番地辺)。座紋は角切角に銀杏を描くので、俗に「銀杏」と呼ばれた。両座の由来は地下鉄人形町駅の北側の人形町通りの歩道に案内板がある。木挽町五丁目の森田座(現東京都銀座6丁目の昭和通り西側に案内板がある)を入れて三座という。『誹風柳多留』の川柳に「橋と銀杏で分る日千両注」と詠まれた(小池章太郎『考証江戸歌舞伎』 p 24)。

天保の改革により、天保13年(1842)から14年(1843)にかけて猿若1丁目～3丁目(現東京都台東区浅草6丁目辺)に移された。

注) 日千両：魚河岸(朝千両)・芝居小屋(昼千両)・吉原(夜千両)の三箇所は一日千両の金が動くといわれるほど繁盛した。

●芝居絵本『花御江戸将門祭 市村座』(11月頃。墨摺。無款。松本屋万吉版。国立国会図書館蔵)

※増山金八他8名による画。芝居で演ずる役者群を描き紹介する。11月1日に上演の市村座「花御江戸将門祭」に取材。どの役者を描いたのか明確でない。江戸神田明神の将門祭は、5月の神田祭りでの神輿渡御や、9月の三の宮の将門塚例祭として現在も催される。

●黄表紙『福来留笑顔門松』(1月。小本二冊。市場通笑作。勝春朗画。伊勢屋治助版。画題篆(印章)に「酉春」とある。東京都立中央図書館加賀文庫/大東急記念文庫五島美術館蔵)

※最終丁図左隅に「通笑作 勝春朗画」とある。

『福来留笑顔門松』最終丁(新日本古典籍総合データベースより)

●黄表紙『六歌仙虚実添削』(1月。二冊。たけ光さや南利作。春朗画。秩父屋庄右衛門版。東京都立中央図書館加賀文庫/大東急記念文庫五島美術館蔵)

※棚橋正博(『日本書誌学大系48(2)黄表紙総覧 中編』)によれば作者名は春朗の仮の名の可能性があると(『年譜』による)。

最終丁図左隅に「春朗画」とある。





『六歌仙虚実添削』最終丁（新日本古典籍総合データベースより）

- 黄表紙『流行謡混雑唱舞』（1月。二冊。美足齋象睡作。春朗画。秩父屋庄右衛門版。序文に「酉の春」とあり。国立国会図書館蔵）
- 黄表紙『平治太平記』（1月。三冊。市場通笑作。西村屋与八版。春朗画）
- 黄表紙『臭気摩方屁倉栄』（1月。二冊。錦林堂軒東戯作。春朗画。西村屋与八版。国立国会図書館蔵）
- 役者絵「二代目小佐川常世 月小夜」（1月頃。細判錦絵。春朗画）。

※1月より上演の中村座「江戸富士陽曾我」に取材。

- 役者絵「五代目市川團十郎 男達荒五郎茂兵衛」（1月頃。細判錦絵。春朗画）。

※1月15日より上演の市村座「恋便仮名書曾我」に取材。

- 役者絵「三代目瀬川菊之丞 鬼王女ほう月さよ」（1月頃。細判錦絵。春朗画。27.5×12.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※1月15日より上演の市村座「恋便仮名書曾我」に取材。鬼王の女房月さよの役。

- 役者絵「五代目市川團十郎 景清」（春朗画。島根県立美術館：永田コレクション）

※松ノ木の前で、刀を抜きかけている図。

- 役者絵「三代目大谷広次 濡髪長の長五郎」（細判錦絵。春朗画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※丸に十字の紋のある着物の前をはだけ、米俵に右足を掛けて見栄を切る大谷広次。

- 絵暦「すごろくの子供」（「十六むさしで遊ぶ子ども」とも。1月。春朗画）

※「津和野藩伝来摺物」にあり（島根県立美術館：永田コレクション蔵）。

- 絵暦「鶏に餌をやる母子」（1月。春朗画。『年譜』による）

【以下、天明末～寛政初期】

勝春朗、春朗

- 役者絵「中むら里好の女だてしまのおかん」（天明7年～寛政4年〈1787～92〉細判錦絵。勝春朗画。北九州市立美術館蔵）

- 役者絵「三代目市川高麗蔵 宗盛」（天明7年～寛政4年〈1787～92〉細判錦絵。落款不明：春朗または勝春朗か。）

●錦絵「宝船」(天明7年～寛政4年〈1787～92〉)。1月。大判。春朗画。永寿堂〈西村屋与八〉版。東京国立博物館蔵)

※龍頭の宝船に所狭しと乗りあう七福神。図の上から、槍を持つ毘沙門天、飛んでいる鶴を指差す弁財天、巻物を持つ寿老人、団扇をかざす福祿寿、烏帽子を被り釣竿を持って鯛を釣る恵比寿、船べりから手を差し出す布袋、同じく船べりから手を差し出し、吊り上げられた鯛を網で救い上げようとする大黒天。大黒天に向かって船べりをよじ登ろうとしている亀がいる。回文の狂歌「ながきよのトラノネフリノミなめさめ なみのりふねの をとのよきかな」(永き世の遠の眠りの皆目覚め 波乗り船の音のよきかな)が記される。宝船(東京国立博物館)

春朗画。永寿堂〈西村屋



●錦絵「風流子供遊五節句」(間判。天明7年～寛政4年〈1787～92〉)。無款。近江屋与兵衛版。各平均34.2×22.9 東京国立博物館/島根県立美術館蔵)

※五節句は、人日の節句(1月7日。七草の節句)、上巳の節句(3月3日。桃の節句。ひなまつり)、端午の節句(5月5日。菖蒲の節句)、七夕の節句(笹の節句。たなばた)、重陽の節句(9月9日。菊の節句)をいう。

☆〈風流子供遊五節句 無題〉

※人日の節句の祝い事の絵か。鼻の上に棒を立て、その先に鞆を乗せて笛を吹く子供。その前で小太鼓を叩いて拍子をとる子どもたち。家の窓から曲芸を見ている二人の子供。

無題(島根県立美術館)



☆〈風流子供遊五節句 ひなまつり〉

☆〈風流子供遊五節句 さつき〉

※端午の節句の日、長刀を持つ子ども、刀を抜く子ども、鞆に挿した刀を脇に構える子たちが、勇ましい姿勢をとっている。

五月幟と鯉のぼりが立てられている。地面には菖蒲刀が置かれている。



さつき(東京国立博物館)

☆〈風流子供遊五節句 ふみ月〉

☆〈風流子供遊五節句 きく月〉

※赤子を背負って、菊に水をやる子ども二人を見ている母親の図。

きく月(東京国立博物館)



寛政2(1790) 庚戌 31歳 春朗、勝春朗：きみ (23歳)、富之助 (4歳)、阿美与 (2歳)

◇相撲興業 (3月、深川八幡境内。11月、本所回向院境内)。

◇御免関東上酒製造始まる。従来、江戸での酒は下り酒 (関西からの酒) がほとんどで、関東の地廻り酒は安酒でまずいとされていたが、幕府の監督のもとに江戸でも上質な酒の製造を始めた。

◇この年よりオランダ商館の江戸参府は、毎年春一回から、4年に一度となる。小倉の大坂屋、下関の伊藤屋、大坂の長崎屋、京の海老屋、江戸・日本橋本石町三丁目 (現東京都中央区日本橋室町4-3と室町3丁目交差点辺。日本銀行近く) にあった長崎屋 (長崎屋源衛門の宿) が宿泊所となっていた。これらの宿を阿蘭陀宿と総称した。通常20日の宿舎滞在であったが文政9年 (1826) 頃、シーボルトらの画策で33日の滞在、旅程日程を3カ月から5カ月にし、日本での見分期間を延ばしたという。

◇寛政異学の禁。蘭学の否定。朱子学を公認学問とし、聖堂学問所 (現湯島聖堂。東京都文京区湯島1-4-25) を昌平坂学問所と改める。陽明学・古学の講義を禁止。

◇旧里帰農令 (地方で没落した農民が多く江戸に流入したことを受けて、定職を持たない地方の農民を農村に帰す奨励策)。

◇奢侈禁止令。好色本禁止令。

◇江戸三座の一つ、森田座 (木挽町。現東京都中央区銀座 4-12-15 の歌舞伎座周辺) が経営破綻で天明8年以来休座であったが、控櫓の河原崎座に興行権を譲る。

【出版統制令により極印制度等が始まる】

◇9月、出版統制令。10月以降、改印注制度となる。出版物は町奉行の管轄下になり、時代によりそのあり方が変わっていった。

製版前に版下を提出し許可印 (「極」印) を画中に受け、更に、地本問屋が当番制で検閲を行ない改印注を捺す形を取る。



「極」印「WEB 浮世絵ギャラリー」より

注) 改印注：時期による印章や検閲者の違いはあるが、この年より明治4年 (1871) まで続いた。以下、参考のためにその変遷を見る。

【第1期】「極」印が使用された時代。

①寛政2年 (1790) : 寛政3年説あり～文化2年 (1804) : 文化元年説あり (極印単独使用時代) : 地本問屋による当番制の「行事」が検閲し、変形字「極」を○で囲んだ印を絵の隅に捺した。

②文化 2 年 (1805) : 文化 3 年説あり～文化 7 年 (1810) (極印と年月印併用時代) : 「極」印と「年月」印 (干支と許可した月を上下にデザインした印) の二つ捺す。

③文化 8 年 (1810) ～文化 11 年 (1814) (極印と行司印併用時代) : 「極」印と錦絵の版元から選ばれた地本問屋による「仲間」 (交代制) の名を刻した行司印の二つが捺される。

④文化 12 年 (1815) ～天保 13 年 (1842) (極印単独使用時代) : 「極」印の一つが捺される。①に同じ。

【第 2 期】

⑤天保 14 年 (1843) ～弘化 4 年 (1847) (名主印単独使用時代) : 「仲間」の廃止。地本問屋以外の、町年寄配下の町名主による改掛印 (行事印) ^{あらためがかり} が一つ捺される。

【第 3 期】

⑥弘化 4 年 1 月 (1847) ～嘉永 5 年 (1852) 2 月 (名主印双印時代) : 二人の名主による印が捺される。

【第 4 期】

⑦嘉永 5 年 2 月 (1852) ～嘉永 6 年 11 月 (1853) (「年月」印と「改」印の組み合わせ時代) : 二つの名主印と年月がデザイン化された印 (当該年の干支と次を組み合わせた印) の三つが捺される。

【第 5 期】

⑧嘉永 6 年 12 月 (1857) ～安政 4 年 (1857) (「改」印と「年月」時代) : 「名主」印はなくなり、「改」印と「年月」印に二つを捺す。

【第 6 期】

⑨安政 5 年 1 月 (1858) ～安政 5 年 12 月 (1858) (「年月」印単独使用時代) : 「改」が無くなり、「年月」印のみになる。

【第 7 期】

⑩安政 6 年 1 月 (1859) ～明治 4 年 12 月 (1872) (「年月」印と「改」印の 3 文字一印時代) : 「年月」印と「改」印を一つの班に刻印した印を一つ捺す。

【第 8 期】

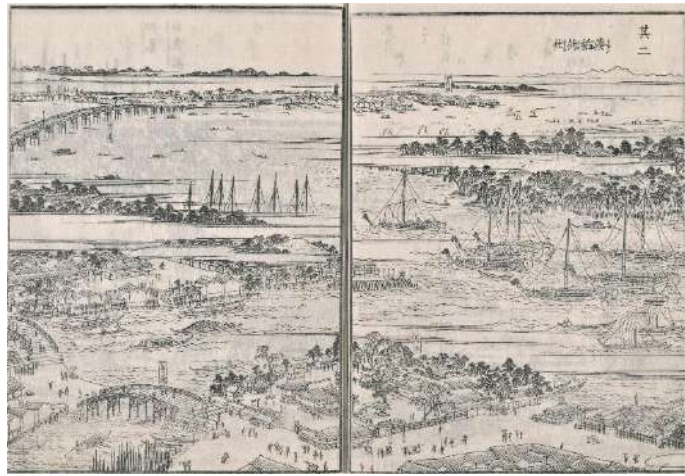
⑪明治 5 年 (1873) 1 月～明治 8 年 (1875) (「年月」印単独使用時代) : 「年月」印のみを捺す。

以上、石井研堂『錦絵の改印の考証』 (芸艸堂。初版は昭和 7 年、伊勢辰商店版) 及び、高橋克彦『浮世絵鑑賞事典』 (平成 28 年 角川ソフィア文庫) 及び酒井好古堂「浮世絵学」 (極改印ほか一覧表) 及び小林忠・大久保純一『浮世絵鑑賞基礎知識』 (至文堂 平成 6 年) を参照した。

※その他、出版統制令では、政治的内容を一枚絵にすることを禁止。好色本の禁止。体制に批判的な書物及び間接的に風刺する内容の禁止。風評を題材にしたかな書き本の禁止。本の奥書に著者名と版元名の記載を義務づけるなどが科せられた。

◇人足寄場設置。

※松平定信が火付盗賊改方、長谷川平蔵注に命じ隅田川河口の石川島（現東京都中央区佃2丁目付近）に設置した、軽い犯罪人や真犯者の自立支援施設。敷地1万6千坪（約52,896平米）。入所3年。赦免時に仕事道具や労働の手当の一部を積立金として支給した。職業技術の習得、心学者の講和の教育も行った。後に「ドラ孫」と呼ばれる北斎の放蕩孫がここに送られる。



注) 長谷川平蔵は、旗本親子三代の通称で、火付盗賊改方の平蔵は長谷川宣以(1745~1795)。池波正太郎の小説『鬼平犯科帳』の主人公のモデル。

人足寄場：斎藤長秋編『江戸名所図会』佃島 其二（国立国会図書館）右中央のやや右上の島

◇曲亭馬琴（24歳）、山東京伝（30歳）に弟子入り志願するも許されず。但し、親しく出入りすることは許される。

○山東京伝（北尾政演）、洒落本『教訓読本』。滑稽本『小紋雅話』（着物生地・小紋の面白デザイン集。余白に滑稽な短い説明を書き込んで読物の体裁をとっている。戯画風デザインは北斎に影響したか）。

○大田南畝、『浮世絵考証』（『浮世絵類考』の原題）。

○本居宣長、『古事記伝』刊行始まる。

★この頃、葛飾に住むか(翌年の絵暦「弓に的」落款より)。

※この頃の「葛飾」は本所・向島地区もこのように呼称されていた。居住地の詳細は不明。

●将棋本『駒組童観抄』（『将某童観抄』とも。一冊。高久隆作。春朗画。鶴屋喜右衛門（仙鶴堂）版。北斎は、見返しに「孟子と母」（孟母断機）の一図を描く。島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/立命館大学 ARC 蔵）

※寛政2年の序文がある、安永8年（1779）刊行された同本に北斎の絵を加えたもの。孟母断機とは、孟母が織布を裂いて、学問を途中で辞めるとは、このようなことだと孟子を諷めた故事。図は、機織りをする孟母の脇で書物を読む幼い孟子を描く。寛政9年（1797）正月の再訂版（鶴屋喜右衛門版。国立国会図書館蔵）では、北斎の画は削られる（奥付に〈寛政九歳丁巳正月再訂〉とある）。



『駒組童観抄』（島根県立美術館）

●浄瑠璃富本『恋癖仮妻菊』（11月頃。瀬川如臯述。春朗画。蔦屋重三郎版）

※11月1日に市村座で初演の『恋癖仮妻菊』（瀬川如臯・曾根正吉・河竹文次・玉巻蕙助作）に取材。

注）富本：浄瑠璃の一派、富本節のこと。

●黄表紙『新作徳ばなし』（勝春朗）

※漆山天童（又四郎）「葛飾北斎改名考（其二）」〈書物展望 2ノ6〉による（『年譜』所収）。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 大とうの宮れいこん」（細判錦絵。春朗画。28.9×13.5 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※11月1日からの市村座顔見世公演「岩磐花峰桶」の浄瑠璃「恋癖仮妻菊」から取材。

沢村宗十郎演が大塔宮の亡霊・巫女お弓を演じた。図は、大塔宮の亡霊が巫女お弓に乗り移り、大塔宮の最後の場面を描く。

●役者絵「初代尾上松助のすもふとり牛か瀬」（1月頃。細判錦絵。春朗画。30.5×14.0 太田記念美術館：長瀬コレクション/ボストン美術館蔵）

※1月15日より上演の中村座「春錦伊達染曾我」に取材）

●役者絵「市川男女蔵 男達日出の五郎」（1月頃。細版錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版。シカゴ美術館蔵）

※1月15日より上演の中村座「春錦伊達染曾我」に取材した錦絵といわれるが所在不明。この絵がそれに相当するか不明。シカゴ美術館蔵では「Women with disheveled」（乱れ髪の子）としている。

市川男女蔵 男達日出の五郎(シカゴ美術館)



●役者絵「四代目岩井半四郎 やまぶきひめ」（「やまぶき御せん」とも。1月頃。細版錦絵。春朗画）

※1月15日より上演の市村座「卯しく存曾我」に取材。

●役者絵「五代目市川団十郎 ともへ御せん」（1月頃。細版錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版）

※1月15日より上演の市村座「卯しく存曾我」に取材（『津和野葛飾北斎所蔵品撰』平成12年 津和野葛飾北斎美術館〈2015：平成27年に閉館〉）では、寛政4年正月の市村座「若紫江戸子曾我」に取材としている。島根県立美術館：永田コレクション蔵）。

●役者絵「五代目市川団十郎 鳴カミ上人」（2月頃。細版錦絵。春朗画）

※2月15日より市村座（『歌舞伎年表』伊原敏郎、岩波書店）の、大坂の中山座上演の四代目市川団十郎十三回忌追善「鳴神雲絶間」に取材。「鳴カミ上人」は歌舞伎の演目。世継ぎができるよう天皇から依頼された上人は、寺院建立の約束と引き換えに願いを実現させたが、天皇が寺院建立の約束を果たさないことに怒り、雨の龍神を滝壺に封印し、干ばつ

の災害をもたらした。天皇の策略で美女・雲の絶間姫を上人に使わし、色仕掛けに負けた上人の隙に姫が竜神の封印を解き、雨を降らせることに成功したというもの。

●役者絵「初代中山富三郎のせき女」（7月。細版錦絵。春朗画）

※7月19日市村座「腰越状」に取材。

●役者絵「三代目坂田半五郎 廻国修行者実ハ藤辺伊賀守」（細版錦絵。11月頃。春朗画）

※11月、市村座「岩磐花峰 楠」に取材。

●役者絵「三代目大谷廣次 新がた二郎」（細判錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版。24.8×12.8 北斎館蔵）

※1月、市村座「卯しく存曾我」に取材。新瀉二郎は曾我兄弟の敵・工藤祐経方の武士。図は、右脇に鉄砲を抱え、丸に十字紋の羽織を着て、左手を刀の柄に置いて、右方向を睨み付けている様子を描いている。

●錦絵『壬生狂言注』（この頃か。春朗画。小型中判錦絵。揃物。13図が確認されているという（『2019 新北斎展図録』p312による）。各図に狂歌が添えられる。各平均21.4×15.6 蔦屋重三郎版）

注）壬生狂言：壬生大念仏狂言とも呼ばれる。現在でも京都壬生寺（京都市中京区坊城仏光寺北入）で4月と10月に演じられている。全30演目ある。仮面を付けた壬生の郷氏が鰐口（神社の堂前に吊された大きな鈴）、締太鼓、横笛だけで無言で仏の教えを説く演劇。

☆〈女夫酒〉（「みょうとざけ」とも。日本浮世絵博物館蔵）

※「壬生狂言 女夫酒」と書いた扇子を左手に、「大念仏」と書いた扇子を右手に手に持って踊る芸者と、「壬生絵」と書いた扇子を右手に持って踊る男の図。

☆〈節分〉（日本浮世絵博物館/ミネアポリス美術館蔵）

※節分の豆を入れた箱を持つ女の腰にしがみついた鬼の図。「みの笠の雨とうち出す●よきにぬれかかりたる鬼も十七」とある（『大揃北斎図録』日本浮世絵博物館刊p99による）

節分（日本浮世絵博物館）

☆〈座頭川渡〉

☆〈釣狐〉

☆〈花折〉

☆〈湯立〉（日本浮世絵博物館蔵）※湯立は神前に釜をすえ湯をわかし、巫女が笹の葉束にこの熱湯をつけ、参拜者にふりかけて清める神事。注連飾りの下で大釜に湯を沸かし、その脇で烏帽子の男が、座って居る女に葉束をかざしている。女は両手に鉦を持って鳴らしている。二人の後から頭巾を被った年寄りが覗いている。



☆〈桶取〉（島根県立美術館：永田コレクション/ミネアポリス美術館蔵）

※唐傘をさして腰をかがめて片足を上げて女に近づく大旦那と、笠を被って立つ女。



桶取（島根県立美術館）

☆〈棒振り〉（ミネアポリス美術館蔵）

※赤い被り物で口を布で塞ぎ、棒を背中に回して踊る姿。

棒振り（ミネアポリス美術館）



☆〈猿回〉

※座っている猿回しの膝に猿が乗って抱かれている。猿を見ながらその臭いを気にして袖で鼻を覆う女は傍らの男と手を繋いでいる。

猿廻（Yajifun 貼交帳より転載）



☆〈鳩〉

※烏帽子の二人の武士が仰向けの鳩にまたがり刀を突刺そうとしている。後の武士は松明を左手に掲げている。

鳩（Yajifun 貼交帳より転載）



☆〈愛宕詣〉（日本浮世絵博物館蔵）

※丸頭巾を被る一本差しの男の袖を引いているお多福顔の女。狂歌師の浅草市人名が画題の下に書き入れてある。

愛宕詣（Yajifun 貼交帳より転載）



☆〈性悪坊主〉

※箒を逆さに持って、赤子を背負った坊主を取り押えている鉢巻姿の男。側で丸頭巾を被った二本差しの侍が見ている。性悪坊主（Yajifun 貼交帳より転載）

☆〈花盗人〉（ミネアポリス美術館蔵）



※山岡頭巾注に鉢巻をして頭に被った花盗人を、丸頭巾を被った二本差しの武士の姿をした男が捕え、その傍らで下男らしい男が盗人を縛る縄を編んでいる。田原船積「盗人を見てなふ縄の長き日のはれにハあかぬみぶの狂言」の書込みがある。

注) 山岡頭巾：長方形の布を二つ折りにしてかぶり、後頭部のところを縫い合わせ、肩にかかるところにあきを作った頭巾（「デジタル大辞典」より）。
花盗人（ミネアポリス美術館）



●錦絵「新板おどりづくし」（縦細判一枚。春朗画。蔦屋重三郎版。31.7×15.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）



※一枚を16分割して、女たちがそれぞれの役柄に扮した姿で踊る所作を16図描く。一般に「つくし絵」と呼ばれるもので、北斎には他に「武田二十四将絵尽新板」（寛政2年～4年：1790～92）がある。

新板おどりづくし（島根県立美術館）

●錦絵「新板浮絵 御大名御参勤御登品川の図」（この頃か。無款。岩戸屋喜三郎版 ポストン美術館蔵）

※いわゆる「新板浮絵」シリーズの一と思われるが、無款で岩戸屋版であるのでこの頃に入れておく。

新板浮絵 御大名御参勤御登品川の図（ポストン美術館）

図は、品川の海岸沿いの宿場前の道



が、右下から図の中央に向けて湾曲し、その道を大名行列が通っている。左側の海には帆を降ろして停泊する船に向かって舳が三艘向かっている。街道の先には富士が描かれる。

●錦絵『唐子遊び』（縦大判二枚続。春朗画。西村屋与八版。以下3点は揃物か）

☆〈唐子の花車ひき〉（「花車を引く唐子」とも。37.9×24.7 ホノルル美術館/東京国立博物館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アレンメモリアル美術館：マリ・エイズワース・コレクション蔵）

※天蓋を持つ子、春駒（馬の玩具）に跨る子、旗を持つ子、花車の綱を引く三人の子の図。花車は図中に描かれない。

唐子の花車引き（東京国立博物館）

☆〈唐子の囲碁〉（「碁盤の周りの六人の唐子」とも。34.3×24.1 ベルギー王立美術館蔵）

※唐子が数人囲碁盤の周りで大騒ぎをしている図。勝負のいざこざでもめているか。

☆〈唐子書画〉（36.6×25.2 東京国立博物館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※唐の子どもが六人、座り机で文字を書いたり、書き上がった巻紙を披露したり、立って本を広げたりしている。東京国立博物館では画題を「唐子遊び」（『東京国立博物館図版目録 浮世絵版画篇下』による）としているが、同画題の「唐子遊び」と混同するので、一般的には「唐子書画」とする。

唐子書画（東京国立博物館）

※この絵の校合摺（彫刻用に墨で縁取りした下絵）はシカゴ美術館蔵。

●錦絵『風流見立狂言』（この頃か。寛政元年頃説あり。小判揃物。7図確認されているという。春朗画。蔦屋重三郎版）



※狂言の各場面を子どもの遊びに見立てたもの。

☆〈すゑ広〉（クラクフ美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）
※紐に掛けた布を幕にして、芝居のまねごとをする子どもたち。一人は下半身が裸で踊る。太鼓や団扇や玩具等が部屋に散らばっている。幕の向こう側からもう一人の子どもが覗いている。

すゑ広（島根県立美術館）

☆〈入間ことば〉（22.5×16.4 クラクフ国立美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※二人の子どもが座って向かい合い入間言葉遊びをしている。入間言葉は、言葉の順序を逆に言ったり、反対の意味の言葉を言ったりすること。「花の雲」を「雲の花」、「深し」を「浅し」というなど（「デジタル大辞泉」による）。間に立って行事をしている子どもは日の丸の絵柄の扇子を持っている。

☆〈しゅろん〉（22.5×16.8 日本浮世絵博物館/クラクフ国立美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）



※二人の子どもが相撲をとっている。行司役の子どももいる。狂言「宗論」の、二人の宗派の違う僧が互いの宗派の優位を言い争う内容から、二人の子どもの争いを相撲に見立てたもの。

☆〈うちさま〉 (22.5×16.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※縁側にいる二人の子どもと、縁側の下にいる子どもが楽しげに話している。小さな玩具の馬が踏み石の脇に置かれている。

☆〈三本柱〉 (クラクフ国立美術館/アレンメモリアル美術館：マリ-エイズワース・コレクション蔵)

※狂言からの取材。金蔵を建てるに当たり、三本の柱を一人が二本ずつ運ぶよう知恵を試された太郎・次郎・三郎冠者たちの話。三本の棒を三角形に組み合わせ、その中に顔を入れて遊んでいる図。

☆〈しとう方角〉 (「しどう方角」とも。ドレスデン国立版画館蔵)

※三人の子どもが、張り子の馬(春駒)や玩具の刀で、狂言「しどう方角」遊びをしている図という。狂言では、伯父に借りた馬が咳払いをすると暴れ出す癖があり、日頃からの鬱憤を晴らすつもりで太郎冠者が咳払いをすると、主人は落馬してしまう話からの図。

しとう方角 (ドレスデン版画館)



☆〈蚊すまふ〉 (日本浮世絵博物館蔵)

※太郎冠者が連れてきた者が、実は蚊の精であり、大名がその者と相撲をとり、針に刺されて失神する話からの図。軍配を持つ行事役の子ども、その前で相撲をとる子どもが描かれる。

☆〈柿山伏〉 (20.4×15.6 北斎館蔵)

※狂言「柿山伏」からの取材。出羽羽黒山の山伏が、修行の帰りに柿を盗み食いしたところ、柿の木の持ち主に見つかり、細い木の陰に隠れて猿や鳥の真似をする。見破られるとの知らず「鶯だ」と言われ、鳴き真似をしながら木から飛び降り怪我をするというもの。図は、踏み台を木に見立て、それ乗って手足を上げている子どもと、その前に座って見ている二人の子どもの描く。

●錦絵「新版(ママ)浮絵浦島龍宮入之図」(この頃か。天明年間説あり。横大判。勝春朗画。佐野屋喜兵衛版、岩戸屋喜三郎版(東京国立博物館蔵)の2種あり。26.2×38.7 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館/東京国立博物館/出羽桜美術館/ホノルル美術館蔵)

新版浮絵浦島龍宮入之図 (東京国立博物館)

※遠近法を強調した格子模様の天井の下の所から龍宮に入る浦島太郎を、亀を頭に乘



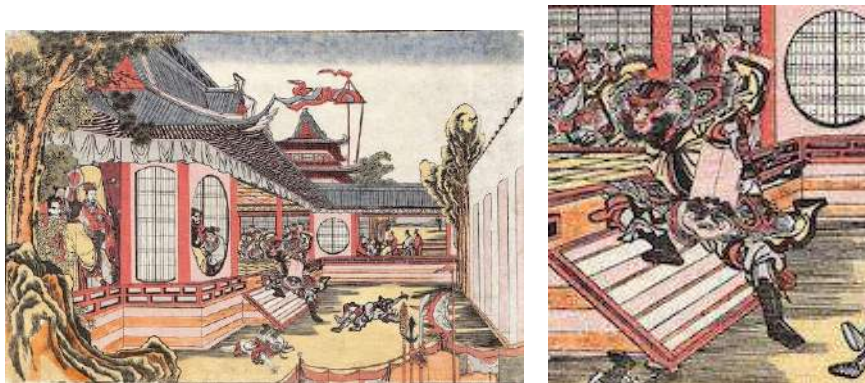
せた老人（亀の化身）が案内し、奥で乙姫様が迎えている。奥の海が建物より浮き上がって描かれているが、龍宮城が海の中であることを象徴した描き方。

【春朗時代唯一の中国歴史画】

● 錦絵「新板浮絵樊噲鴻門之会ノ図」（この頃か。横大判。勝春朗画。24.6×37.0 佐野屋喜兵衛版。ボストン美術館/ホノルル美術館/大英博物館/本間美術館/日本浮世絵博物館蔵）

※楚の王項羽と漢の高祖劉邦が鴻門で会見した際、項羽は范増の進言により劉邦を殺そうとしたが、劉邦は張良の策により逃げる事が出来たという『史記』に記された故事に取材したもの。遠近

法によって描かれた屋敷を中心にした構図で、庭から屋敷に掛けられた小階段に足を掛けた武人を描く。春朗時代唯一の中国



歴史を題材にした作品。

新板浮絵樊噲鴻門之会ノ図（ボストン美術館）

寛政3(1791) 辛亥 32歳 春朗、葛飾住春朗（津和野藩伝来摺物より）：きみ（24歳）、富之助（5歳、）阿美与（3歳）、阿鉄（1歳）
--

◇1月25日、男女入込湯（混浴）禁止令。

◇相撲興業（4月、本所回向院、11月、本所回向院）。

◇12月5日、モーツアルト没（35）。

◇この頃、更科蕎麦（細切りの白蕎麦）の布屋万吉、芝増上寺に開業する。

◇3月、北尾政演（山東京伝）の洒落本『教訓読本』『仕懸文庫』『娼妓絹籠』『錦之裏』等により、山東京伝は手鎖50日、出版元の葛屋重三郎は財産半分没収（身上半減）の罰を受ける。

◇喜多川歌暦、この頃より大首絵注を発表。

注) 大首絵：役者や女性などの上半身を画面に大きく描いたもの。

◇初代・歌川豊国（1769～1825）、この頃和泉屋市兵衛より美人画を出しデビューする。

◇8月9日及び9月4日暴風。曲亭馬琴、講釈師や占い師になって神奈川宿辺を遍歴中、洪水で深川の家を失い、約半年山東京伝の食客となる。

○正月、曲亭馬琴、山東京伝門人として、大栄山人名で処女作、黄表紙『廿日余四十両つかいばたしてにぶきょうげん』を刊行。

【次女誕生】

★次女阿鉄注誕生。

※飯島虚心『葛飾北斎伝』（p308）では「次女注、名は、詳ならず。一説に、阿鉄、画をよくし、他へ嫁せしが、夭死す。一説に、幕府の用達某に嫁せし」とあり、その根拠として鈴木重三の脚注では「他へ嫁ス 画工ニアラズ 早世 御鏡御用ノ家ニ嫁ス」とある『続浮世絵類考』（溪斎英泉増補）の文を紹介している。但し、鏡師の家に嫁いだかは不明。

注) 次女名は、あるいは「阿鉄」を「おかね」と呼ぶか。また「阿辰」ともいわれる(井上和雄『北斎』p31)。

●黄表紙『芋蛸の由来』（1月。角書注「龍宮洗濯斬」。二冊墨摺。作者不明。自作か。春朗画。西村屋与八版。国立国会図書館蔵）

※表紙見返しの題簽に「春朗画作」とあり、最終丁に「春朗画」とある。

注) 角書：浄瑠璃の名題、歌舞伎の外題、書物の題名などの上に、その主題や内容を示す文字を2行または数行に割って書いたもの（「デジタル大事典」より）。

同書は春朗の挿絵かどうか疑問視されている。下巻最終丁裏に“画ハ凌雲斎”とあるという（棚橋正博『日本書誌学大系 48(2)黄表紙総覧 中篇』：

『年譜』により紹介）。 『芋蛸の由来』（国立国会図書館）



●黄表紙『名代振袖心中』（角書「壬生里声色」。二冊。内新好注作。画工名無し。『日本小説年表』では春朗画。西宮新六版。国立国会図書館蔵）

注) 内新好：生没年不詳。俳諧宗匠。通称は内田屋新太郎。別号に魚堂など。

●浄瑠璃富本注1『百千鳥蝶羽根書』（1月。瀬川如臯注2述、内新好作。春朗画。蔦屋重三郎版。ボストン美術館蔵）。

※正月15日、市村座で上演。歌詞を版木印刷にした正本（筆者注：歌舞伎の脚本）。

注1) 浄瑠璃富本：浄瑠璃の一流派。富本節とも。常盤津小文字太夫（1716～64）が寛延元年（1748）に富本豊志太夫（翌年に富本豊前掾を受領）と改名して創始した。

注2) 瀬川如臯：1739-94。役者の三代目瀬川菊之丞の兄。役者から作者に転身し、長唄や常盤津の作詞も手がけた。

●浄瑠璃富本『袿裏躰振袖』（2月。瀬川如臯述、春朗画か不明。下巻最終丁裏に、「画〈凌雲閣〉」とあるとされるが不明。蔦屋重三郎版）。

●浄瑠璃富本『道行桂川連理柵』（3月。瀬川如臯述、春朗画。蔦屋重三郎版）

※3月、市村座で上演。

●浄瑠璃富本『女夫合愛相鉄槌』上・下（11月。富本豊前太夫直伝。瀬川如臯述。春朗画。蔦屋重三郎版。21.0×29.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※富本節正本。正本とは、音曲の詞を木版摺にして2・3丁に閉じたもの（脚本）。11月1日、市村座で上演。上巻は、中山盾蔵の多田蔵人と瀬川菊之丞の針売りが万歳をする様子を描く。下巻には、盾蔵と菊之丞と嵐龍三の舎人の仕丁が立回りをする様子を描く。

●正本『市村座絵本番付 岩磐花峯楠』（中本一部着色。無款。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※市村座の顔見世を描いた絵本番付（歌舞伎のあらすじを絵と文字で表した本）。見開き2ページ（ロ丁表とイ丁裏）に所狭しと歌舞伎役者が描かれる。寛政2年（1790）説あり。

●役者絵「初代中山富三郎 団三郎女ぼう十六夜」（細版錦絵。春朗画）

※正月、中村座「春世界艶麗曾我」に取材。

●役者絵「市川八百蔵そがの五郎ときむね 岩井半四郎の春駒手越の芸者お蝶」（1月頃。細判錦絵。春朗画。29.3×13.4 日本浮世絵博物館蔵）

※市川八百蔵は3代目。岩井半四郎は4代目。

※1月25日より上演の中村座「春世界艶（花）麗曾我」（桜田治助作。二番浄瑠璃・百千鳥子日初恋）に取材。図は、春駒で遊ぶ芸者お蝶を見下ろすように左袖を托しあげて見る五郎ときむねが描かれる。

●役者絵「二代目市川門之助 そがの五郎とき宗 三代目沢村宗十郎 そがの十郎すけなり」（1月。細判錦絵。春朗画。1月15日より上演された中村座「七種粧曾我」（桜田治助作）に取材したもの。28.9×13.8 日本浮世絵博物館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※寛政3年(1791)1月15日より市村座で上演された「春色江戸絵曾我」を描いたものともいわれるが（『2007 北斎展図録』東京新聞他）、『歌舞伎年表』（伊原敏郎）によれば、寛政3年1月15日の演目では、門之助は鹿原軍兵衛実は赤沢十内を演じ、宗十郎は十郎を演じていて、本図の画題と役名が合わない。要検討。

※歌舞伎の「曾我物」は関東で広く根付いていた曾我兄弟の御霊信仰を基にして、仇討めでたさを正月の出し物として、様々な筋立てにした「曾我物」を興行するのが習慣となっていた。宝永年間(1704～11)頃から縁起物として行われ、享保期(1716～36)以後は、正月の定例の狂言となった。



二代目市川門之助 そがの五郎とき宗 三代目沢村宗十郎 そがの十郎すけなり（早稲田大学絵演劇博物館）

図は、巻き上げられた簾のある部屋で、三升紋の袴を着けた市川門之助が、閉じた扇を右手で持って見得を切り、その足元で○に「い」の字の定紋が染められた袴を着た沢村宗十郎が片膝をついて同じく見得を切っている。鴨居の上には三羽の鳥の絵が掛けられている。

●役者絵「そがの五郎ときむね 二代目市川門之助」（1月頃。細版錦絵。春朗画。29.1×13.9 オランダ国立民族学博物館蔵）上記役者絵と同取材・同画材。

※寛政元年（1789）中村座「江戸富士陽曾我」からの取材説あり。

●役者絵「三代目市川高麗蔵の大日坊 二代目小佐川常世あこや」
（3月頃。細判錦絵。春朗画。すみだ北斎美術館蔵）

※3月、河原崎座「初緑幸曾我」二番目に取材。高麗蔵が腕まくりをし、常世がその側に立っている図。

●役者絵「市川門之助の冠者太郎と嵐龍蔵のゆりの八郎」（3月頃。細判錦絵。春朗画。ホノルル美術館蔵）

※3月3日よりの市村座「筆菱菱壺碑」に取材。

市川門之助の冠者太郎と嵐龍蔵のゆりの八郎（ホノルル美術館）

●役者絵「三代目市川門之助 奴たて平実は義経」（3月頃。細判錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版）

※3月3日よりの市村座「筆菱菱壺碑」に取材。

●役者絵「三代目沢村宗十郎しけたゞ」（3月頃。細版錦絵。春朗画。太田記念美術館蔵）

※3月3日より上演の市村座「筆菱菱壺碑」に取材。天明元年6月に同題の画がある。

●役者絵「岩井半四郎 傾城あげまき」（3月。細判錦絵。春朗画。千葉市美術館/オーバリン大学アレン・メモリアル美術館蔵）

※3月11日より中村座「助六縁牡丹」に取材。

●役者絵「三代目森田勘弥の白井貞光」（7月頃。細判錦絵。春朗画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※7月中村座「二代源氏押強弓」に取材。長袴を履き、右手に巻物を持ち、左手で刀に手をやる森田勘弥。

●役者絵「市川団十郎と坂田半五郎の鳥羽恋塚」（細版錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版。東京国立博物館蔵）

●役者絵「市川団十郎と坂田半五郎の金目貫源家角罈」（細判錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版）

※11月1日よりの市村座「金鞆源家角罈」に取材。

●役者絵「市川男女蔵 奴たゞ平」（11月頃。春朗画。蔦屋重三郎版。立命館大学蔵）

※11月1日よりの市村座「金鞆源家角罈」に取材。

●役者絵「市川蝦蔵実は文覚上人
三代目坂田半五郎の旅僧実は鎮西八郎為朝」（11月頃。細版錦絵。二枚続。春朗画。蔦屋重三郎版 各30.2×13.9 東京国立博物館蔵）

市川蝦蔵実は文覚上人 三代目坂田半五郎の旅僧実は鎮西八郎為朝
（東京国立博物館）



※11月1日より市村座上演「金鞆錘源家角鐺」に取材。春朗落款の作で代表作といわれる。

左図は、市川蝦蔵が鉞の端に左足を掛け、左手で鉞の柄を持って見得をきる。右図は、三代目坂田半五郎が、髑髏を持って見得をきる。

●役者絵「市川高麗蔵 平井権八 松本幸四郎 幡随長兵衛」(11月頃。春朗画。鳶屋重三郎版。ボストン美術館蔵)

※11月1日よりの中村座「二代源氏押強弓」に取材。右図は、三代目市川高麗蔵が、横笛を持って眺めながら、抜き身の刀を持っている平井権八を演じる。着物の三升紋に「高」の字が書かれている。左図は、四代目松本幸四郎が尻端折して、刀の柄に手を掛けている幡随長兵衛の図。

●役者絵「三代目沢村宗十郎 から木まさ右衛門」(細判錦絵。春朗画。ホノルル美術館蔵)

●玩具絵「新板七へんげ 三階伊達の姿見 三代目沢村宗十郎」

(細版錦絵。春朗画。西村屋与八・伊勢屋利兵衛版。日本浮世絵博物館/東京国立博物館/ベルリン東洋美術館蔵)

※春朗時代の数少ないおもちゃ絵。顔のない六種の芝居姿を切り取り、絵の右上の枠内に描かれた宗十郎の絵に乗せて遊ぶもの。一種の着せ替え遊びの趣向。「三階」は、立役者注の部屋が芝居小屋の三階にあったことによる。宗十郎は、9月に大坂に上ったとされるので、この歳の正月の刊か(2019『新北斎展図録』p 311)。

注) 立役者：芝居の一座で中心となる役者。

新板七へんげ 三階伊達の姿見 三代目沢村宗十郎 (日本浮世絵博物館)

●玩具絵「新板七へんげ 三階伊達の姿見 三代目市川八百蔵」

(この頃か。細判錦絵。春朗画。鳶屋重三郎版。32.5×14.5 名古屋テレビ放送蔵)

※沢村宗十郎の「三階伊達の姿見」と同様の玩具絵。小栗判官の衣装を描いている。八百蔵は寛政2年(1790)11月に大坂から下っていて、それ以後の作と考えられて。沢村宗十郎の江戸にいた時期と合わせ考えて、寛政3年の正月の刊とされる(2019『新北斎展図録』p 311)。

●絵暦「弓に的」(1月。句と弓の握り部分が紅で着色。葛飾住注春朗画 16.1×12.0 「津和野藩伝来摺物」として島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※〈寛政三弓始〉とあり。霞的(白と黒の縞が交互に丸く描かれた弓の的)の端がめくれ、その上に弓が置かれている。一手(二本)の矢がその側に置かれている。「大的を亥の年なれば七つ掛」の句が添えられる。



注) 画中に「葛飾住」とあるが、この頃は本所・向島なども葛飾(南葛飾郡)と称されていた。「葛飾住」がどこかは不明。この年「葛飾住春朗画」の落款のある絵巻が2点あるという(『年譜』による)。

寛政4(1792)	壬子	33歳	春朗	勝川春朗	鉄棒ぬらぬら(偽名)	きみ(25歳)	富之助
助(6歳) 阿美与(4歳) 阿鉄(2歳)							

◇ヘイスベルト・ヘンミー(Gijsbert Hemmij)、長崎商館長に赴任(寛政10年:1798まで)。

◇相撲興行(3月、神田明神、11月、浅草八幡宮)

◇3月、蔦屋重三郎が山東京伝を訪ね、京伝の食客であった曲亭馬琴を番頭にしたいと申し出、日本橋油町の蔦屋重三郎の手代になる。ここで通称瑠吉、諱を解にする。

◇9月30日、江戸日本橋横山町辺より出火。40町(約4平方キロ)ほど3日間燃え続け、当時人形町付近にあった吉原まで延焼する。

◇10月20日(陽暦)、ロシアのラクスマン(Adam Laxman)が根室に来て通商を求める。乗組員は翌年6月15日迄、根室に家を建て滞在する。同行の大黒屋光太夫、ロシアより帰国。

【北斎の師・勝川春章没】

◇勝川春章、12月8日没(50歳。通説では67歳とされていた)。辞世「枯ゆくや今ぞいふことよしあしも」。別句「風を画にかく時ならば柳かな」。(墓は『浮世絵類考 別本』では浅草西福寺(現東京都台東区蔵前4-16-6))。飯島虚心『葛飾北斎伝』では12月11日没、浅草本願寺葬とあるが誤り(p38)。

※絵師・観嵩月(1755~1830)の『画師冠字類考』に字形と俳号を改めた年齢が45歳であり、享年が50歳と記されていることから没年年齢が証明された(神谷勝広同志社大学教授(近世小説研究家)の調査による。2016/02/11「読売新聞」記事)。

従来は1894年の関根只誠の『名人忌辰録』(明治29年:1896)に記された没年齢67歳を通説とし、そこから生年を享保11年(1726)としてきた。新説に従えば生年は寛保3年(1743)となる。

○林子平、『海国兵談』『三国通覧図説』(地理誌)が発禁となる。

【世界一の画工を志すも春好の悪意のおかげ】

※「(略)一説に、(本文割注)露木氏注の話。春朗、春章の高弟春好と善からず」(『葛飾北斎伝』p40)とある。北斎は同門の兄弟子春好と仲が悪かったというのである。

注) 露木: 露木為一(孔彰)のこと。生年未詳~1893。北斎門。

※両国の絵草紙問屋某の招牌(筆者注:看板)を書くも勝川春好が引裂いたというエピソードがある。

前『葛飾北斎伝』の引用文に続き、次のように記される。

「春朗菅両国辺の絵草紙問屋某の招牌を画く。問屋の主人喜びて、これを店さきに掲げんとす。時に春好来りて、大に其の画注の拙を笑ひ、これを掲ぐるは、即師の恥を掲ぐるなりとて、春朗の面前におきて、引き裂き打ちすてたり。春朗憤怒堪へがたかりしが、おのれ後学（筆者注：後輩）のことなれば、止むを得ず。此の時、春朗の心中に、他日世界第一（筆者注：日本一をいう）の画工となりて、この恥辱を雪がんものと、勉強忍耐の真意、始めて此に発し、遂に狩野某に就き、窃に画法を学びたるなり。北斎晩年人に語りて曰く『我が画法の発達せしは、実に春好が我をはづかしめたるに基せり』と」（『葛飾北斎伝』 p 40～41。句読点・ルビは筆者による）。

注) 画：この字は、当時は「が」と読むこともあるが、単独の場合は、本稿では以下「え」と読むこととする。

※春好に招牌を破られたエピソードは、高橋省三（大華）『少年雅賞』（明治26年）所収「葛飾北斎」にも記される（国立国会図書館デジタルコレクション：コマ番号46～74）。

※北斎が兄弟子にいじめられた理由を、安田剛蔵は「春朗は入門して日が浅いにもかかわらず、役者絵にあまり意欲を燃やさず、ひそかに清長（筆者注：鳥居清長）の画風に追従してその風を描いたり、絵の方はまだまだというのに、戯作に筆を染める、浄瑠璃には凝る、吉原遊び注はつもの、という行状では、自らは絵修業に熱心のつもりであっても、兄弟子の目からみれば心よく思われる筈はない」（『画狂北斎』 p 39）としている。

注) 吉原遊び：北斎が吉原遊びをしていたという根拠は不明。但し、社楽齋万里という幫間とは親しかったらしい（本稿安永9年〈1780〉の項参照）。織田一磨『北斎』（大正15年 アルス）では、「官能生活に就ては全く小説的に創作したものである」（序）としつつも、この頃の北斎を一貫して吉原に遊ぶ遊蕩の者扱いをしている。

【勝川派に固執せず。狩野融川に入門したか】

★この年から寛政6年（1794）頃の間、江戸、浜町の狩野派の当主狩野融川（1778～1815。奥御用。若年寄支配。侍待遇。五世寛信。号：法眼）に入門したとされているが、寛政4年時の融川の年齢（14歳）から考えて疑問視されている。また、高名な春章の弟子と知りながら、融川が入門を許す事に疑問視するむきもある（織田一磨『北斎』 p 20）。

【春章による破門はなし】

「後、窃に狩野某に就き、画法を学びしが、春章これを聞き、他家の画法を学ぶを憤り、遂に春朗を破門せり。これより春朗勝川を称するを得ず、改めて叢春朗といふ」（『葛飾北斎伝』 p 40 句読点・ルビは筆者による）。

但し、飯島虚心の記事は疑問視される。勝川春章はむしろ北斎の才能を買っていて、異例の早さで勝川春朗を名乗らせたことから勘案すると、勝川派から離れたのは春好の嫌がらせによるもので、春章の死を機会に勝川派を離れたとするのが妥当であろう。

※狩野派では、同派の「永字八法」を学んだか（本稿筆者の憶測）。

※永字八法とは、漢字の「永」には、書に必要な技法八種がすべて含まれていることをいう。点、横、縦、縦線のはね、右斜め上に向かうはね、左はらい、右斜め上に向かうはらい、右斜め下に向かうはらいを指し、狩野派特有の、筆の腰を使わず、筆圧がほとんどない筆法。手首の力を抜いて肘を基点とするような滑らかな動きで自由に楽々と線を引く描き方という（『芸術新潮』2001年2月号より）。

●黄表紙『女莊子胡蝶夢魂』（1月。二冊。黒木作〈伊藤蘭洲説あり〉。春朗画。坂本屋版。早稲田大学図書館蔵）

※山東京伝の序文末尾に「本屋の応需て明（朋）友馬琴子の筆をかり」とある。末尾には、文机に寄りかかり胡蝶の夢を見ている女を描き、脇に「春朗画」とある。袋には「山東京伝識 女莊子胡蝶夢魂 板元（商標）東叡山坂町坂本屋」とある。

女莊子胡蝶夢魂（早稲田大学図書館）



●黄表紙『鶴頼政名歌芝』（1月。中本二冊（合一冊）。南柚笑楚満人作。勝川春朗画。村田屋次郎兵衛版。東京都立中央図書館蔵）

●黄表紙『昔々桃太郎発端説話』（中本三冊。合一冊。山東京伝作。春朗画。蔦屋重三郎版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※第三冊末尾に図に「春朗画」とある。

●黄表紙『実語教幼稚講釈』（春。中本二冊。山東京伝作。勝春朗画。蔦屋重三郎版。早稲田大学図書館蔵）

※見返しに「壬子春」とあり、最終丁に「春朗画」とある。実際には曲亭馬琴の代作。

実語教幼稚講釈：最終丁（早稲田大学図書館）



【曲亭馬琴と幻の初提携か】

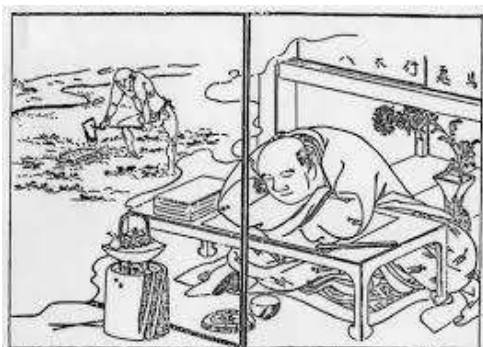
●黄表紙『花春風道行』（中本二冊。京伝門人馬琴作。勝春朗画。蔦屋重三郎版。曲亭馬琴と提携した初作）。

※山東京伝の随筆『蜘蛛の糸巻』（弘化3年：1846）および『日本小説年表』（朝倉無声）に書名が見えるが、実在しない著作とする説あり（WEB浮世絵文献資料館）。

●黄表紙『塩焼文太都物語』（この頃か。寛政9年頃：1797説もある。三冊。勝川春朗画。桜川慈悲成注写。西村屋与八版。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）
注）桜川慈悲成：1762～1833or1839。戯作者・落語家）

●艶本『閨女畑』（正月。墨摺小本。一冊。勝川春朗画。序文に「鉄棒ぬらぬら筆」（北斎の偽名）とある。序文の次の見開きに、文机にうつ伏して、男が農作業をしている夢を見ている北斎の自画像を収める。

全 27 話の艶笑小咄と 11 図の春画で構成(『芸術新潮』1989 年(平成元年)3 月号「北斎」特集号所収、林美一「北斎 艶本への挑戦」p42)。同書では寛政4年(1792)頃としている。天明元年(1781)説(尾崎久弥「北斎肖像の研究」。1932 年『浮世絵研究』第6号所収。及び『年譜』より)もある。また、『噺本大系 第12 卷』(昭和 52 年、東京堂出版)では天明頃の作としている。



※中に「湯屋」(混浴での色事)の絵があり、松平定信により、寛政3年(1791)正月27日に混浴禁止令が出ているので、その直前の刊行と思われる、寛政3年正月の作とする説もある。

間女畑(口絵見返し:自画像)

※「吸もの」の題の一丁(2 ページ)が落丁で、実際は 26 話(『好色江戸小咄集』による)。

※『艶本年表』には見えず。『俗談 今歳花時』(内題には『落咄 今歳咄』とある。安永2年:1773 書苑武子編)の中の艶色咄を基にしているが、一部自作もある)。

※咄本に分類されることもあるが内容は艶本。「御乳母」「御利生」「人まね」「ねぼけ」「ひとりげい」「田舎娘」「針医」「湯屋」「馬鹿娘」「夫婦けんくわ」「けつ」「大地震」「額文字」「女郎」「くらべ」「一ツきよく」「地口しなん」「虫ぼし」「松茸」「赤がい」「ちん」「猪」「ふられ」「風」「御びく尼」「行合」「吸もの」(欠落)の 27 話。

☆「馬鹿娘」(『噺本大系 第12 卷』より)

〈うつくしいが、とんだばかな娘を、隣の鉄ぼう、いろくだまして、とふくあらばちをわつた。年ごろなれば、いたみもせず、気のゆく事覚、とんだ嬉しがつて二親の前へ行、モシエ、私ハとなりのてつさんに、よい事をしてもらひやした。アノ御こう箱へね、アノてつさんの大きな物入てね、モウくくとんだ面白事しなさるよ。かゝさん。御まへもおしへてもらいなさへといふ。お袋、にがく敷顔で、お主もトウくきづが附たハエ。√むすめいへ。疵がつけば、ちが出るはずだが、ナゼカしろひ物が出やした〉(ルビは筆者による)

●絵暦「教え子と先生」(1 月。「子字教示の図」とも。春朗画。小判着色摺物。国立国会図書館蔵)

教え子と先生(国立国会図書館)

※袴姿の若侍に、畳に広げた縦長紙に上から一列に書かれた12の「子」の字を指し示して謎解きを教える武士の図。部屋の襖に、先生と若侍のやり取りの台詞が書かれ、先生が「ねこの子の子猫、ししの子の子獅子」と読んで、「子」の字の大小で月の大小を表すことを説いてい



る。1月は大文字で小の月、2月は大文字で大の月を表す。平安時代の小野篁が12の「子」の字を読み解いたという伝説に基づくものといわれる。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 大いそのとら」（1月頃。細判錦絵。春朗画。29.0×12.5 北斎館蔵）

※1月23日より市村座「若紫江戸子曾我」に取材。曾我兄弟の仇討ちを題材にした正月興行の定番「曾我物」。曾我十郎を慕う虎御前は大磯の遊女。千鳥模様の打掛を両手を通さずに羽織って工藤祐経の屋敷の部屋に立つ姿。背景の長押に、曾我十郎・五郎の仇である工藤祐経の紋所「菴木工」が五つ描かれている。源頼朝の富士の巻狩の総奉行となった工藤の屋敷に虎御前などが祝いに駆けつけた場面を描く。

●役者絵「市川門之助 そがの十郎」（細版錦絵。春朗画）

※1月23日より市村座「若紫江戸子曾我」に取材（『年譜』による）。

●役者絵「市川男女蔵 そがの五郎ときむね」（細版錦絵。春朗画。蔦屋重三郎版）

※1月23日より市村座「若紫江戸子曾我」に取材（『年譜』による）。

●役者絵「五代目市川ゑび蔵かけきよ」（1月頃。細版錦絵。春朗画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※1月23日、市村座「若紫江戸子曾我」に取材。笹紋の描かれた二つの提灯の前で、抜き身の刀を立てて持ち見栄をきる蝦蔵。前年に五代目団十郎を改名。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 女講釈師岸柳文栄」（4月。細版錦絵。春朗画）

※4月、市村座「花揚櫃白髪岸柳」に取材。

●役者絵「二代目小佐川常世 なるかみびく」（4月頃。細判錦絵。春朗画）

※4月、河原崎座「常磐浄瑠璃 恋衣縁り初桜」に取材（『年譜』による）。

●役者絵「瀬川富三郎 十内いもうと」（5月。細判錦絵。春朗画）

※5月（4月か）6日より市村座「四十七士染井鉢植」に取材（『年譜』による）。『北斎世界を魅了する浮世絵師と弟子たち』（芸艸社）では天明8年桐座「けいせい優曾我」に取材とする。

●役者絵「二代目市川門之助 穴生村の桃太郎」（8月頃。細判錦絵。春朗画。版元不明）

※8月5日より市村座「むかしく掌白猿」に取材（『年譜』による）。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 宇賀の阿玉の神霊」（8月頃。細版錦絵。春朗画）

※8月16日、市村座「七瀬川最中桂女」に取材（『年譜』による）。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞 さだか」（9月頃。細判錦絵。春朗画）

※9月15日より市村座「妹背山女庭訓」に取材（『年譜』による）。

寛政5(1793)	癸丑	34歳	春朗、叢春朗、(白山人可候)	(時太郎可候)	: きみ (26歳)
富之助 (7歳)、阿美与 (5歳)、阿鉄 (3歳)					

【第四期春朗期】

※この頃より春朗独自の画風といわれる。

◇相撲興行（3月、浅草八幡宮、10月、本所回向院）。

◇6月21日、林子平没（56）。

◇7月23日、松平定信、老中解任され寛政の改革終わるも、改革は文化14年（1817）まで続く。

◇7月下旬、曲亭馬琴、元飯田町中坂（現東京都千代田区九段北一丁目）世継稲荷（現、筑土神社下）の会田家・下駄商伊勢屋の未亡人お百（30歳）に入婿。瓊吉清右衛門と称す。京橋の豪商小林勘助が持つ元飯田町の長屋の家守注となる。

注) 家守：いわゆる大家のこと。

◇11月から、江戸三座が控櫓の芝居小屋での興行となった。中村座（塚町）は地代滞納請求の訴訟により休座となり、控櫓の都座の代興行となる。市村座（葺屋町）も経営破綻で休座となり、控櫓の桐座の代興行となる。森田座（木挽町）も控櫓の河原崎座の代興行となる。

◇一枚絵中の一般の女の名前を記載することの禁止令。この類の禁止令は寛政8年（1796）にも出される。

○山東京伝、草双紙『堪忍袋緒メ善玉』（京伝と元遊女菊園で妻のお菊に葺屋重三郎が執筆依頼に来ている図あり。東京都中央図書館加賀文庫蔵）。

【長男富之助を中島伊勢の養子に出すか】

★長男富之助を中島伊勢の養子に出す（7歳か。但し年代不明）。『葛飾北斎伝』では、この長男は放蕩であるとの関根只誠の説を紹介しているが不明。あるいは放蕩の孫（長女阿美与の子）と混同しているか。

「長男は、其の名詳ならず。一説に、名は、富之助、中島氏を継ぎ、用達の鏡師たりと。又一説に、（割注：関根氏。）長男は、放蕩無頼にして、家にあらず。終りを詳にせず。翁は、常に此の長男の為に、心を痛め、屢負債を償ひしことありと」（『葛飾北斎伝』p306 ルビは筆者による）。

★この頃の評価は、美人画では喜多川歌麿、鳥文斎栄之、窪俊満、勝川春潮、栄松齋長喜など、役者絵では勝川春英、歌川豊国、東洲斎写楽、勝川春章、勝川春好など排出し、春朗の一枚絵は影の薄いものであったという（安田剛蔵『画狂北斎』p48）。

【狩野融川の怒りを買う】

★「同（寛政）五六年頃、日光神廟（徳川家康公の廟）の再修ありて、狩野融川其の門人および町絵師数名を随え、廟中の絵事に従事せり。宗理又随ひ行き、宇都宮に到りしが、旅亭の主人画を融川に請ふ。融川即筆を採りて、一童の竿を持ちて柿をおとすの図を画く。宗理これを見て、窃に評して曰く、『何ぞ画理に疎きや。竿の端、既に遙かに柿の所を過ぐ。然るに童子猶足をつまだつ。果して何の意ぞ。』同行これを融川に告ぐ。融川怒りて曰く、『此の図はもと童子の智あどけなきを示せるなり。彼の知る所にあらず。然るにこれを誹る。甚だ憎むべし』とて直に宗理を追ひ出だせり。宗理独江戸に帰る。」（『葛飾北斎伝』p49。ルビは筆者による）

同書では『浮世絵類考 別本』および『絵画叢志』によるとしているが、鈴木重三の校注では『東洋絵画叢誌』（明治18年刊）の誤りかとしている。

※『浮世絵年表』（漆山天童著、昭和9年刊）によれば寛政6年（1794）のこととする。

※この工事は寛政8年（1796）正月から10年（1798）5月まで（日光東照宮の『修築加番日記』等による）であること、また、寛政5・6年（1793・4）の狩野融川はまだ16歳であるので、この記事に疑問視する旨あり（瀬木慎一『瀬木慎一の浮世絵談義』）。

※北斎は狩野融川の弟子としてではなく、画工として付き添ったという見方もある（田崎暘之助『浮世絵の謎』 p174）。

※由良哲次「北斎と狩野融川」（『日本浮世絵協会会報 36』）によれば、北斎は融川入門していないし、融川も日光には行っていないという（『年譜』による）。

●黄表紙『智恵次第箱根詰』（1月。三冊。春朗画。春道草樹作。坂本屋版。18.0×12.7 北斎館/国立国会図書館蔵）

※渡舟則の序文に「うしの初春」とある。最終丁に、文机に臂を突いて窓の外に海に浮かぶ舟を眺めている作者と思われる男の絵の右に「春道草樹作」、左に「春朗画」とある。

智恵次第箱根詰（国立国会図書館）



●黄表紙『貧福両道中之記』（1月。中本三冊。合本一冊。山東京伝作。春朗画。蔦屋重三郎版。すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/国立国会図書館/島根県立美術館：永田コレクション/東洋文庫/早稲田大学図書館蔵）



※序文に「癸丑の年 はつ春」とある。最終丁に、「寿」と書いた紙と筆を持った大黒帽子の男の前には、小判が乗せられた三方が置かれている。背後には櫛立てが二つある棚がある。図の右に「春朗画」、図左に「京伝作」とある。隣の同日に生まれた子が、貧家の子は金持ちになり、金持ちの子は貧乏になるという話。

貧福両道中之記（国立国会図書館）

●黄表紙『東大仏楓名所』（三冊。天明6年の黄表紙『大仏左拾』の改刻改題再摺本と言われるが真偽不明。版元不明）

※画工名がないが、『大仏左拾』の作者とされる白山人可候の作か。但し、天明6年（1786）は群馬亭の時期であるので、白山人可候は北斎ではないとする見方が有力である。Web「浮世絵文献資料館（浮世絵事典）」では「棚橋氏は白山人可候を北斎一時の戯号とする説を否定し、石山人（物蒙堂礼、狂名 盃雨盛）と同人とする」と紹介している。

※『浮世絵派画集・第5冊』（p77 大村西崖）には「全交^{ぜんこう}注^{ちゆう}作^{さく}、時^{とき}太^た郎^{らう}可^か候^{こう}即^{すなは}ち^ち北^{きた}斎^{さい}画^が」
とある（『日本浮世絵博物館所蔵 大揃い北斎』（北斎資料 757 p172 所収）が疑問視さ
れる。

注) 全交：芝^{しば}全^{ぜん}交^{こう}。1750～93。本名：山^{やま}本^{もと}藤^{とう}十^{じゅう}郎^{らう}。戯^ぎ作^{さく}者^{しや}。能^{のう}楽^{らく}狂^{きやう}言^{げん}師^し）

※同本は数種の異本が存在し、作者及び画工を決定することができない。

※『日本小説年表』（朝倉無声）によれば、品川^{かいかんじ}海^{かい}晏^{えん}寺^じ開^{かい}帳^{ちやう}に際^きし、境^{きやう}内^{ない}に高^{たか}さ16丈^{じやう}（約40
呎）の合^あ羽^は大^{だい}仏^{ぶつ}（雨^{あめ}合^あ羽^はを着^きせ^せた大^{だい}仏^{ぶつ}）を作^{つく}ったとい^いう。

※安田剛蔵「北斎の黄表紙-4-白山人可候と合羽大仏の研究」（1975『浮世絵藝術』43）
によれば、斎^{さい}藤^{とう}月^{げつ}岑^{そん}『武^ぶ江^{かう}年^{ねん}表^{ひょう}』や大^お久^く保^ぼ芭^ば雪^{せつ}『増^{ぞう}補^ぼ青^{せい}本^{ほん}年^{ねん}表^{ひょう}』の説^{せつ}等^{とう}から合^あ羽^は大^{だい}仏^{ぶつ}が作^{つく}
られたのは寛^{かん}政^{せい}4年^{ねん}としてい^いる。

Web「浮世絵文献資料館」（みせもの）が紹介している『きゝのまに^{まに}く』（未刊随筆。
喜多村信節記）によれば、寛^{かん}政^{せい}10年^{ねん}（筆^{ひつ}者^{しや}注^{ちゆう}：誤^ごり^か）2月^{げつ}のこ^こと^として、海^{かい}晏^{えん}寺^じ境^{きやう}内^{ない}の
銀^{ぎん}杏^{ぎやう}の大^{だい}木^{ぼく}を中^{ちゆう}に^にし^て、色^{いろ}々^々の桐^{きり}油^{あぶら}紙^しで覆^{おほ}い、白^{びやく}毫^{ごう}（白^{しろ}い^い卷^{まき}毛^げ）は大^{だい}胴^{たう}の盥^{らん}、螺^ら髪^{かみ}（右^{みぎ}
巻^{まき}のらせん状^{じやう}の頭^{あたま}髪^{かみ}）は蜜^{みつ}柑^{かん}籠^{かご}を並^{なら}べ、指^{さし}爪^{づめ}は菅^{すげ}笠^{かさ}で作^{つく}ったとい^いう。対^{たい}岸^{がん}の洲^す崎^{さき}か^から^らも遠^{とほ}
眼^{がん}鏡^{きやう}で見^みえ^えた^たとい^いう。

●芝^{しば}居^い絵^え本^{ほん}『桐^{きり}座^ざ芝^{しば}居^い絵^え本^{ほん}（表^{へい}題^{だい}不^ふ明^{めい}）』（秋^{あき}上^{かみ}演^{えん}。1991：永^{なが}田^た生^{せい}慈^じ『北^{きた}斎^{さい} 世^せ界^{かい}を魅^め了^{りょう}
した絵^え手^て本^{ほん}展^{てん}』 p117 によ^よる）

●芝^{しば}居^い絵^え本^{ほん}『市^{いち}村^{むら}座^ざ芝^{しば}居^い絵^え本^{ほん}（表^{へい}題^{だい}不^ふ明^{めい}）』（秋^{あき}上^{かみ}演^{えん}。1991：永^{なが}田^た生^{せい}慈^じ『北^{きた}斎^{さい} 世^せ界^{かい}を魅^め
了^{りょう}した絵^え手^て本^{ほん}展^{てん}』 p117 によ^よる）

●役^{やく}者^{しや}絵^え「岩^{いわ}井^い半^{はん}四^し郎^{らう} 下^げ女^{によ}のはつ」（1月^{げつ}頃^{ころ}。細^こ判^{ぱん}錦^{きん}絵^え。春^{はる}朗^{らう}画^が。版^{はん}元^{げん}不^ふ明^{めい}。ホノルル
美^び術^{じゆつ}館^{かん}蔵^{ざう}）

※鳥^{とり}居^いの前^{まへ}で女^{によ}装^{しやう}して立^たつ半^{はん}四^し郎^{らう}。1月^{げつ}13日^{にち}（あるいは15日^{にち}）よ^より^の河^{かわ}原^{はら}崎^{さき}座^ざ「御^{おん}前^{まへ}掛^{かけ}
相^さ撲^{ぶく}曾^{そう}我^が」に取^と材^{ざい}（『年^{ねん}譜^ぷ』によ^よる）。

●役^{やく}者^{しや}絵^え「岩^{いわ}井^い半^{はん}四^し郎^{らう} 八^{やち}百^{ひやく}屋^やお七^{しち}」（5月^{げつ}頃^{ころ}。細^こ判^{ぱん}錦^{きん}絵^え。春^{はる}朗^{らう}画^が）

※5月^{げつ}1日^{にち}よ^より^の河^{かわ}原^{はら}崎^{さき}座^ざ「潤^{じゆん}色^{しよく}八^{やち}百^{ひやく}屋^やお七^{しち}」に取^と材^{ざい}（『年^{ねん}譜^ぷ』によ^よる）。

●役^{やく}者^{しや}絵^え「三^{さん}代^{だい}目^め瀬^せ川^{がわ}菊^{きく}之^の丞^{じやう} と^とな^なせ」（5月^{げつ}頃^{ころ}。細^こ判^{ぱん}錦^{きん}絵^え。春^{はる}朗^{らう}画^が）

※5月^{げつ}13日^{にち}よ^より^の市^{いち}村^{むら}座^ざ「仮^か名^な手^て本^{ほん}忠^{ちゆう}臣^{しん}蔵^{ざう}」に取^と材^{ざい}（『年^{ねん}譜^ぷ』によ^よる）。

【叢号を用いる】

★「叢^{くさむら}」号^{ごう}を用^{もち}い^る。「叢^{くさむら}」は叢^{そう}豊^{とよ}丸^{まる}（後^{のち}に春^{はる}朗^{らう}の門^{かど}人^{ひと}に^なり、寛^{かん}政^{せい}6年^{ねん}〈1794〉に春^{はる}
朗^{らう}号^{ごう}を譲^{ゆづ}り受^うけ二^に世^{せい}春^{はる}朗^{らう}と^なる。?～文^{ぶん}化^か14年^{ねん}：1817）が既^{すで}に用^{もち}い^てい^た号^{ごう}で、「そ^{そう}う」
と読^よんでい^るので、あるいは春^{はる}朗^{らう}も「そ^{そう}う」と読^よむか。但^{たゞ}し、「Weblio 英^{えい}和^わ和^わ英^{えい}辞^じ典^{てん}」
で^の読^よみ^{かた}は「KUSAMURA SYUNNROU」とな^なっ^てい^る。

式^{しき}亭^{てい}三^{さん}馬^まの『浮^う世^{せい}絵^え類^{るい}考^{かう} 補^ほ記^き』（文^{ぶん}政^{せい}元^{げん}年^{ねん}～4年^{ねん}頃^{ころ}〈1818～1821〉著^{しやく}）に「後^{のち}年^{ねん}破^は門^{もん}セ
ラ^せレ^れテ^てヨ^よリ叢^{くさむら} 春^{はる}朗^{らう}ト^と云^いふ、其^{その}後^{のち}俵^{たわら}屋^や宗^{そう}理^りガ^が跡^{あと}ヲ^を続^{つづ}テ二^に代^{だい}目^め宗^{そう}理^りト^とナル」とあり「く^くさ^さむ^むら」
と読^よんでい^る（岡^{おか}畏^い三^{さん}郎^{らう}「総^{そう}説^{せつ}葛^か飾^{しやく}北^{きた}斎^{さい}」、『浮^う世^{せい}絵^え大^{だい}系^{けい}8北^{きた}斎^{さい}』所^{しよ}収^{しゆ}）。本^{ほん}稿^{こう}で^も「く^く
さ^さむ^むら」と読^よむ。この時^{とき}点^{てん}で^すで^に勝^{かつ}川^{がわ}派^はか^ら離^り脱^{だつ}し^てい^たの^ので^は、とい^いう見^み方^{かた}が^ある。

【落款「春朗」を記した唯一の肉筆画】

●肉筆画「鍾馗図」（この頃か。絹本一幅。叢春朗画。花押。朱書の疱瘡除の図。53.6×26.7 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※全身朱色の鍾馗が剣を魔鬼の口に突き刺す図。「春朗」の落款のある唯一の肉筆画。弘化3年（1846）など「朱鍾馗図」を何図か描いている。

鍾馗図（島根県立美術館）



【「鍾馗図」が貧窮を救い画業に精進する】

「（略）時に人あり。五月幟の画を請ふ、（邦俗五月五日ハ男児の祝日にして、此の日幟太刀など飾るを例とす）、宗理直に朱をととき、鐘（ママ）馗の図を画き与えしに、其の人天に喜び、謝礼として金二両注1を贈る、此の二両の金は、貧困せる宗理の身にありては、実に無上の宝貨にして、他日画名を一世にならすも、此の贈金あるによりてなり。さて、宗理は日々生計に苦しみが、此の金を得しより、忽志を一転し、妙見注2を祈り、生涯画工をもて世を終らんことを誓ひたり。これより日々朝まだきより筆を採り、小夜ふけて人の寝静まる頃に至り、夫より更に己が志す所を学び、腕萎へ眼疲れて、漸く筆を止め、蕎麦二碗を喫して臥す。或は曰く、北斎死に至るまで、寝に就く前には、かならず蕎麦を喫するを例とせしとぞ。三世豊国の妻の話」（『葛飾北斎伝』p47～48 ルビは筆者による）。

注1 金二両：約20万円～26万円位か（2017年現在）。

注2 妙見：柳島妙見菩薩（現東京都墨田区業平5-7-7にある日蓮宗：妙見山法性寺の菩薩）。北斎が信仰していた寺。北斗七星を主神とする。

※永田生慈によれば、飯島虚心はこのエピソードを宗理時代（寛政7年～享和4年：1795～1804）のことと混同しているとする（「北斎の画業と研究課題」：2005『北斎展図録』所収）。『浮世絵画人伝』（関根黙庵著。明治32年）にも同様の記事あり（p108）。この金により画業に精進することを柳島妙見菩薩に祈願したという。

【絵暦以外の最初の摺物】

●摺物「冷水売り」（「白玉売図」とも。夏頃。横長版着色。絵暦以外の初の摺物。叢春朗画。18.2×49.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※同名の歌舞伎の所作事を絵にしたもの。上半分が確認されているが、ゴンクール『北斎』によれば、奉書全紙判の下半分に口上書きがあり、常盤津文字太夫（二世か）の襲名披露会の案内状であったという（安田剛蔵『画狂北斎』p46）。

披露会は7月4日、巳の刻（午前10時頃）、両国京屋で催されたという。図は、冷や水売りの若い男が、老木の下で商売の荷を下ろし、二つの桶に渡した天秤棒に腰掛け、手拭で脇の下の汗を拭いながら休んでいる様子を描く。

摺物は、文化期より色紙判が主流となる。

冷水売（島根県立美術館）

注）冷水売り：「水屋」とも呼ばれた商売で、夏に冷水に白玉と砂糖を入れて売る行商人をいう。また、良質の井戸に恵まれない所に神田・玉川の余剰水を飲み水として売る人もいた。一荷（天秤棒の前後の二



つおけの桶)を四文(筆者注:約100円。一文=25円で換算)程度で売ったという(「資料館ノート」第113号 江東区深川江戸資料館)。

【摺物の名手北斎 生涯に949点】

※摺物は、版元を通さず個人的に絵師に依頼して制作してもらうもので、絵暦・狂歌摺物・催物案内ひきだ(引札)など多様な形態をとる。

久保田一洋が海外のものも含めて調査したところによると、全4,000点弱の摺物中、北斎のものは949点あり、その内訳は、春朗期21点、宗理期197点、北斎期610点、戴斗期6点、為一期111点、卍期4点あるという(2011年11月現在の資料。島田賢太郎氏「台東区生涯学習浮世絵講座『葛飾北斎』第二回:知られざる北斎壮年期の活動と摺物作品」による)。

北斎は、現存する全摺物の約23.7%(4分の1近く)を描いているという(以上の資料の詳細については未見なので、紹介に留めたい)。

●狂歌摺物「手毬と羽子板図」(正月。春朗画。花押。朱染菅江らの狂歌あり。2005年『北斎展』図録所収:永田生慈「北斎の画業と研究課題」p12による)

●摺物「菊籬」(この頃か。横長判。叢春朗画)

※菊が籬一杯に乱れ咲く図(安田剛蔵『画狂北斎』p48による)。

●摺物「大川端夕涼」(「隅田川納涼」とも。この頃か。春朗画。花押。横長判。着色。

21.0×51.1 日本浮世絵美術館蔵では「花火」と題している)

※花火見物の舟が多く浮かぶ大川端で、団扇を持って床几に座る女と花火を指さす赤子。その脇に団扇を持って立っている女。もう一台の床几にも女が座り、袖を口に当てて花火を見ている。二台の床几の間に前帯の女と赤子を抱いた女がいる。図左には花火の打ち上げ軌跡が糸のように赤く描かれる。川に浮かぶ舟、川面、対岸の風景はシルエットのように薄く描かれる。全紙判の下半分の図か。

現在の隅田川の下流、特に吾妻橋から新大橋までを大川端と呼んでいた。

●絵暦「牛車図」(あるいは「ぎっしゃ」と読むか。正月。丑年にちなむ。叢春朗画)

※永田生慈「北斎の画業と研究課題」(日本経済新聞社『2005 北斎展 図録』所収 p12による)。「春朗」の落款があるものもあるという。

寛政6 (1794) 甲寅 35 歳 春朗、叢春朗、勝川春朗、君馬亭春朗、紫色鷹高 (隠号)、宗理 (年末より) : (きみ:27 歳)、(富之助:8 歳)、阿美与 (6 歳)、阿鉄 (4 歳)

【この年までを春朗期とする。年末より宗理と号す】。

◇1月10日、麴町平河町より出火(桜田火事)。浅草・新吉原全焼。

◇相撲興行(3月、深川八幡宮、11月、本所回向院)。

◇4月2日、夜の12時頃、吉原江戸町二丁目(大門口左側の地区)より出火、廓内が焼失し仮住まいとなる。

【写楽登場】

◇5月、東洲斎写楽、役者大首絵(雲母摺大判28枚)を刊行(蔦屋重三郎版)。寛政6年5月(1794)~寛政7年(1795)1月まで閏11月を含めた10ヶ月程度で「江戸三座役者似顔絵」など蔦屋重三郎から145点(肉筆画2点及び相撲絵を含む)を刊行したという。

※「写楽 是また歌舞伎役者の似顔を写せしか、あまりに真を書んとてあらぬさまに書きなせしかは、長く世に行はれず。一兩年にして止む。(以下、式亭三馬による補記) 三馬按、写楽号東洲斎、江戸八丁堀二住ス。僅ニ半年余行ハルノミ」(『浮世絵類考』大曲駒村による校訂底本。昭和16年:1941)と記録されている(ルビは筆者による)。

注) 岩波文庫版『浮世絵類考』(仲田勝之助編校 p118)では、「これは哥舞伎役者の似顔をうつせしが、あまり真を画かんとてあらぬさまにかきなせし故、長く世に行はれず一両年に而止ム」と記事に大差ない(ルビは筆者による)。

※写楽は、八丁堀地藏橋辺に住むか。瀬川富三郎『諸家人 江戸方角分』注の八丁堀に住む人名一覧に、×印(死亡の印)として「号写楽斎 地藏橋」と記載されている(国立国会図書館デジタルコレクション)。『新增補浮世絵類考』(龍田舎秋錦)には「俗称斎藤藤十郎兵衛、八丁堀に住す。阿州侯の能役者也」とある(岩波本『浮世絵類考』(p118)。注) 同本は、寛政期～文化期までの江戸の文人の住所録。

◇オランダ商館江戸参府。

◇十返舎一九、大坂にいたが秋に再び江戸に戻り、蔦屋重三郎の食客となる(31)。

◇6月12日、一筆齋文調没(寛政3年～4年<1791～92>年とも。実際は生没年不明)。

○歌川豊国、『役者舞台之姿絵』刊行開始(東洲齋写楽を追い越す人気)。

○式亭三馬、黄表紙『天道浮世出星操』(式亭三馬の黄表紙初作)。

【春朗期の作品数と挿絵数】

★「春朗期」の作品数(1984年『浮世絵八華5 北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」より)。

柱絵7点、縦大判16点、横大判13点、縦間判4点、縦中判45点、細判約120点、幅広細判1点、他掛物絵・小判・中判の絵巻数点。うち最多は細判の役者絵(約120点)、次いで縦中判の美人画(約30点)。

※「春朗期」の挿絵(1984年『浮世絵八華5 北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」より)。

黄表紙46種全110冊(図数約660図)。芝居絵本4種以上。洒落本3種3冊(図数3図)。噺本2種2冊。談義本(教訓本)1種5冊(図数10図)。他(知られるもの1種1図)。

【妻きみ没す】

★妻きみ没(27)。

★この年、有坂五郎八(御家人。後の蹄齋北馬)が入門する。その時の様子が記されている。

「(略)その入門せし頃は、恰も北斎が妻を喪ひて、一人娘(長女阿美与)と暮し居りたる頃なれば、北馬は北斎の家へ書生のやうに入込みて、画法を学び、傍ら家事の手伝ひなどもしてありしが(略)」(香雨楼主人「北馬と文晁と北斎」<前田香雪翁の談話に拠りて記す)の文を田崎暘之助『浮世絵の謎』(p180)で紹介)

これによれば、北斎は妻の死後、6歳の阿美与と二人暮らしをしている。阿鉄については夭逝とされているが、いつかは不明。

★この頃、勝川派の大首絵、喜多川歌麿、歌川豊国の大首絵の登場や蔦屋重三郎による写楽の絵等が評判で、春朗の役者絵は見いだされなかったという。

★堤等淋(生没年不詳)と親交する。後、娘お栄は等琳の門人南沢等明に嫁している。

【勝川門から離れ、年末に宗理と号し、俵屋一門の頭領となる】

★年末に俵屋宗理(二代目)を襲名。春朗号を門人の叢豊丸(生年不詳～文化14年<1817>前豊丸春朗・二世勝川春朗)に譲る。

※「俵屋」は俵屋宗達や本阿弥光悦らによって開かれた琳派の様式を目指した俵屋と称した一門の頭領が用いたもの。俵屋一門は俳諧との繋がりが深い。雪門の大島完来(雪中庵

三世、1748～1818) や岩波午心(葎雪庵?～1817) などと提携した俳諧摺物が多くある。俵屋風は酒井抱一(1761～1822) に影響したといわれる(永田生慈『もっと知りたい葛飾北斎』p11)。

※安田剛蔵は『画狂北斎』で「宗理時代に描いたものをみると、琳派の没骨法注をとりいれ或はその効果を打出していることに注意させられる」と述べている(p60)。

注) 没骨法: 輪郭を描かず、初めから画面に形と色を同時にあらわすという技法(「ウキペディア」による)。

※式亭三馬の『浮世絵類考補記』(文政元～4年頃)に「後年破門セラレテヨリ勝川ヲ改メ叢春朗ト云。其後俵屋宗理ガ跡ヲ続テ二代目宗理トナル(略)」とある(岩波文庫『浮世絵類考』仲田勝之助編校 p142。ルビは筆者による)。

※永田生慈は「(北斎は)4年近くそこの(江戸琳派)の棟梁になる」(『北斎美術館2風景画』所収・加山又造×永田生慈対談より p142)と述べている。勝川一門から離れ、俵屋一門の頭領となったのである。

【菱川宗理は門人宗二】

※『増補浮世絵類考』(斎藤月琴)には「(略)古俵屋宗理の跡を續て、二代目菱川宗理となりたる比、画風をかへたれど(宗理の頃は狂歌の摺物多し錦画はかゝらず)未だ一派をなさず(堤等琳を慕ふ)」(岩波文庫『浮世絵類考』仲田勝之助編校 p143。ルビは筆者による)とある。

一方、式亭三馬の『浮世絵類考補記』には「三馬按三代目宗理ハ初メニ宗二ト呼ベリ、後年菱川宗理ト名ノル」(岩波文庫『浮世絵類考』仲田勝之助編校 p143。ルビは筆者による)とあり、「菱川宗理」は北斎の弟子の「宗二改菱川宗理」を指している。『葛飾北斎伝』には「菱川宗理、割注:此の名、門人俵屋宗理の後孫、宗二に譲る」とある(p29)。

以上のことから、菱川宗理は、弟子の宗二としているのが一般的である。⇒寛政9年【菱川宗理は北斎にあらず】の項参照。

【曲亭馬琴と初の共作か】

●黄表紙『福寿海无量品玉』(1月。三冊。馬琴戯作。画工名なし。葛屋重三郎版。国立国会図書館蔵)

※画風から春朗と認められている。馬琴の序文に「とら初春」とある。春朗の挿絵とすれば、初の馬琴作の挿絵制作となる。馬琴と北斎(勝川春朗)の共作は、寛政4年(1792)の黄表紙『花春風道行』があるが、実在しない著作ともされ、通説では、享和4年(1804)正月の『小説比翼文』が馬琴との共作の初めとされる。

福寿海无量品玉(立命館ARCより)



●黄表紙『覗見喩節穴』(1月。二冊。本膳亭坪平(坪比良とも。生没年不詳。戯作者)戯著。画工名なし。榎本屋吉兵衛版。国立国会図書館蔵)

※画風から春朗と認められている(『年譜』による)。

●黄表紙『七々里富貴』(1月。角書「小人じま」。二冊。作者名、画工名なし。村田屋治郎兵衛版。早稲田大学図書館蔵)

※安田剛蔵「北斎の黄表紙-4-白山人可候と合羽大仏の研究」(1975『浮世絵芸術』43)では画工は春朗とし、『年譜』でも追認している。北斎による自画作か。

WEB「見世物興行年表」によると、寛政4年～寛政6年条の「参考文献」に「『小人じま・七々里富貴』黄表紙・勝川春朗（北斎）画・寛政六年刊。（ネット）早稲田大学図書館古典籍総合データベース」とある。

【初の狂歌本を手がける】

●狂歌本『狂歌聯合女品定』（4月。角書「回向院奉納」一冊。三陀羅法師（赤松正恒）撰。細工叢春朗、同立川船朝。板木屋鉄次郎版。九州大学附属図書館蔵）

※回向院（現東京都墨田区両国2-8-10）開帳奉納の千穉連狂歌集。「聯」とは、書や絵を描いて柱や壁などに掛ける細長い板をいう。狂歌グループの千穉連の狂歌をまとめたものである。「聯合」と呼ぶ。板による聯に見立てて北斎が短冊状の枠内に人物を描き、狂歌が添えられる画趣となっている。奥付に細工立川船朝（詳細不明）の名があるので、北斎が全図を描いたのではない。

また、細工とは、一般に彫刻を指すが、時に版下画工をいうこともあるという（檜崎宗重『北斎論』p65 アトリエ社）。一方で、同書では細工を彫刻の意味と取れば、「幼時ならつた板木師の業を復活してみたことになるであらう」とも記述している。

注) 千穉連：三陀羅法師（1731～1814）が主宰する狂歌グループ。

※北斎の初の狂歌本。天保2年（1831）まで狂歌本に関わり、狂詩本・狂句本・俳書・発句集などの関連ジャンルを含めると45点以上があるという（八木書店『江戸の絵本 画像とテキストの綾なせる世界』所収、マティ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち一享和・文化・文政期に焦点を絞って」p266）。

※狂歌隆盛の頃を反映し、狂歌本は私的出版物の狂歌集として流布した。有名絵師による景物等の絵に、自作やグループの狂歌を添えて同好の者に披露したりした。印刷、紙、装丁等に懲り高価なものも少なくなかった。

●墨絵「西王母」（この頃か。大判板絵墨画三枚続き。各37.9×74.9 立命館大学蔵）

〈右図〉桃を入れた籠を天秤棒で担ぐ二人の子。甕を頭に乘せた男。その後ろにも男がいる図。

〈中図〉長い柄の扇を立てている女二人と、その間にいる西王母。お付きの女と子どもも描かれる。

〈左図〉荷車に手をかけ右の方を見る女。柄杓で小川の水を掬おうとしている女の図。



西王母（立命館大学）

●艶本『會本松の内』（この頃か。墨摺半紙本。三冊。但し、中巻一冊だけが確認されている。紫色鷹高（北斎の隠号）の落款。

※リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p337、及び白倉敬彦『絵入り春画艶本目録』平凡社より）

【役者絵から離れる】

この年以後、役者絵から離れる。但し、享和3年（1803）正月、暦絵摺物「初代中山富

三郎と初代岩井彥三郎、文化4年(1807)3月に「沢村源之助 梅のよし兵衛」と「瀬川路之助の女房こむめ」の対、文政7年(1824)正月に摺物「色紙判五枚揃役者絵」〈三代目市川門之助と七代目市川團十郎〉などを例外的に描いている。

●役者絵「岩井半四郎 月さよ」(1月頃。細判錦絵。春朗画。島根県立美術館蔵)

※1月3日よりの河原崎座「御曳花愛敬曾我」に取材(『年譜』による)。

●役者絵「三代目瀬川菊之丞のげいしゃ小菊」(細判錦絵。春朗画。松村屋弥兵衛版)

※2月1日よりの都座「初曙観曾我」に取材か。天明5年1月15日よりの桐座「重々々詞曾我」に取材したものとする説あり(伊澤慶治「勝川春朗の役者絵考証(未定稿)について」:『浮世絵芸術』79号)〈『年譜』所収資料)。

図は、窓から石燈籠の見える部屋に立つ菊之丞演じる小菊。屏風の前には盆に乗せた食物碗と湯差しが置かれている。

●役者絵「浅尾為十郎と五世市川團十郎」(細判錦絵。春朗画。版元不明。30.4×13.7 ミネアポリス美術館蔵)

●役者絵「中村のしほ」(細判錦絵。春朗画。版元:山に善)

※「中村のしほ」は、歌舞伎役者の二代目中村野塩(1759~1800)。戸口のある板塀の前で、打掛を着て、刀を背に挿し、両手で尺八を持つ姿を描く。



●摺物「砧図」(8月。「砧打図」とも。寅南呂注。摺物。君馬亭春朗画)

注)寅南呂:南呂は8月の異名。寅年の8月を示す。

※「君馬亭春朗画」とあり、「羊」を削除して「君」のみとしたのは、妻の死を悲しんだ付則的なもので「春朗」が正式な号とされる。「群馬亭」は天明5~6年(1785~86)にのみ用いられた。

●絵暦「拳相撲」(1月。叢春朗画。「絵師叢春朗」の落款もあるという)

※拳相撲は、小さな土俵を作り、行事を置き、東西に分れて拳を争う遊び。「狐拳」「藤八拳」とも。両手を前に出して狐の真似をする「狐」は、膝に手を置く「庄屋」に勝ち、「庄屋」は、鉄砲をかまえる「獵師」に勝ち、「獵師」は「狐」に勝つ。お互いにそれぞれの手真似をして勝敗を表す。図は、櫓仕立ての土俵上に座り拳相撲をする二人の女を描く。

寛政7(1795)乙卯 36歳 勝川春朗(黄表紙のみ)、宗理、北斎宗理 印:完知、完

(津和野藩伝来摺物より): (富之助:9歳)、阿美与(7歳)、阿鉄(5歳)

【浮世絵一枚十六文~十八文】

◇「番ひ絵」(「笑絵」とも。春画のこと)禁止令。浮世絵一枚絵の値を16文(約400円)から18文(約450円)の間に制限(1文=250円で換算)。

◇相撲興行(3月、本所回向院、11月、浅草八幡宮)。

◇江戸の女髪結を禁止。贅沢禁止の一環。

◇富士講禁止町触。安永4年(1775)の講禁止令に続くもの。「近年富士講と唱え」と講名を明確にして禁止した(『大江戸万華鏡 ひとつづくり風土記』13 48)より)

◇4月29日、曲亭馬琴の義母没。以後、馬琴は履物屋を辞め文筆に専念する。

◇7月17日、丸山心拳没(63)。

○本居宣長、随筆『玉勝間』刊。

【宗理期始まる】

★この頃、浅草大六天榊脇町注に住む。『浮世絵類考』（岩波文庫版 p141）に「(割注：二代目宗理元春朗 上手) 狂哥はいかみ等の摺物画に名高く、浅草大六天榊の脇町に住」とある。注) 大六天榊神社（現東京都台東区蔵前1-4-3）が近くにある。

★正月、「大筒射図」で宗理の落款を初めて使用(前年8月以降に宗理を襲名したか。寛政10年(1798)8月頃まで使用)。但し、黄表紙にはしばらく「春朗」が用いられる。

※初世宗理は大和絵の住吉派より出る。この一門は、江戸で琳派様式を広めた画派で、俳諧との繋がりが深い。北斎も俳諧や狂歌に親しんだところから「宗理」（二代）を襲名したか。

●黄表紙『しわみうせ薬』（1月。角書「才布の紐」。三冊。本膳亭坪比良（平）戯作。画工名なし。榎本屋吉兵衛版。国立国会図書館蔵）

※画風により宗理と認められている。『世界を魅了した鬼才絵師葛飾北斎』（河出書房新社 2016年）では「勝川春朗画」としている（p49）。しわみうせ薬（国立国会図書館）



●黄表紙『マ平（手）前漬赤徳塩辛』（1月。角書「无世界忠臣蔵」。「塩辛」は辛+塩の

合成文字一字となっている。二冊。本膳亭坪平述。画工名なし。榎本屋吉兵衛版）

※画風により宗理と認められている。

【この年より狂歌絵本に意欲】

※寛政7年～享和年間まで狂歌絵本に携わる。狂歌は、江戸初期は上方で流行したが、江戸では明和6年(1769)、唐衣橘洲(1743～1802)が江戸の自宅で開いた狂歌会から流行し、四方赤良(太田南畝：1749～1823)により更に隆盛した。天明3年(1783)以降は、橘洲の四谷連より、滑稽諧謔風の四方赤良の四方連と朱楽菅江の朱楽連の山手側と呼ばれるグループが主流となり、天明ぶりとして、俳諧での摺物が狂歌界でも狂歌絵本として刊行されるようになった。詠まれた狂歌の内容に添った画を絵師に依頼し、帖仕立てにしたものが一般的である。

注) 側：狂歌グループで大きな集団を「側」、小さな集団を「連」という。

●狂歌絵本『狂歌歳旦 江戸紫』（1月。墨摺摺物。万亀亭花江戸住〈江戸花住〉（筆者注：？～1805）撰。宗理画。印完。松山堂版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

☆〈年礼の図〉一図を描く。

※河井物梁〈ゆつたりと春の日あしも長袴 田雀（田鶴）のあゆみと見ゆる年礼〉の狂歌に添えて、年始挨拶の長袴に袴姿の侍の後姿を描く。年礼の図（島根県立美術館）

他に、鹿都部真顔（四方歌垣）、森羅万象注（万象亭）、喜多川歌麿、歌川豊国、鳥文斎英之、溪斎英泉、篠原女等が描く。



注) 森羅万象：1754～1810。狂歌名。他に、竹杖為軽。本名：森島中良。通称：万蔵。

※ここで前年の末に改号した宗理号が「大筒射図」などと同様に用いられた。

●狂歌絵本『桜杜鵑狂歌集（仮題）』（この頃か〈1990 講談社『秘蔵浮世絵コレクション』による）。着色摺絵入り狂歌本一冊。摺物。宗理画。後補題簽には「狂歌摺物本宗理」とある。南海堂（伝不詳）の私家版。全14丁半。22.0×15.8）

※桜を画材にした36人36首と、杜鵑を画材にした36人36首を集めた狂歌集。

●狂歌絵本『四方の巴流』（1月。『四方の春』とも。折本一帖。四方側狂歌本。鹿都部（狂歌堂）真顔（四方歌垣）編。北斎宗理画。鳥文斎栄之、溪斎英泉、山東京伝等も描く。鳥屋重三郎版。島根県立美術館：永田コレクション/立命館大学図書館蔵）

※宗理の狂歌がある。「霞ひく筆のちからのふニ筑波 かくも長閑きけふの書初 完智宗理」（『年譜』による）。

図は、柳のある岸边から出る渡し舟に、馬・駕籠・漫才師・娘や男たちなどが乗って、船頭が力一杯棹を差している「初春の渡し舟図」一図が描かれる。

※『年譜』では、この年と寛政8年（1796）にも『『四方の巴流』』の記載がある。文政11年（1828）正月刊の狂歌絵本『四方廻巴流』（北斎は描かず）とは別本。

●絵暦「大筒射図」（「鉄砲（大筒）を担ぐ武士」とも。1月。淡彩摺物。宗理写。印完知。10.5×13.7 日本浮世絵博物館蔵）

※図に「大筒正目三百八十一貫九百●（六か）十二文目 寛政七乙卯年正月吉辰」「稲葉喜三郎承休」の書き込みがある。「大筒」の「大：で、大の月を表し、「正目」（筆者注：目方）の「正」が正月を示す。以下、三・八・十一・九・六・十二が大の月で、それ以外が小の月を示している。稲葉喜三郎・

印承休という人物がこの摺物を配ったものと考えられている。袴姿の侍が左膝を立てて大筒を構えている図。



大筒射図（日本浮世絵博物館蔵）

同図は、「津和野藩伝来摺物」として島根県立美術館：永田コレクションにも所蔵されている（本稿「寛政年間」を参照）

※明和5年（1768）、北尾重政『絵本吾妻の花』（『日本風俗図会 11講』所収。国立国会図書館デジタルコレクション）の浅草寺図の左上に、稲葉六郎太夫として同図柄に似た絵馬が描かれている。

●絵暦「ざしき万ざいの大小」（「座敷万歳図」とも。正月。横長判摺物。着色。宗理画。印完。アムステルダム国立美術館蔵）

※同図は「津和野藩伝来摺物」の一図として、島根県立美術館：永田コレクションにも所蔵されている。落穂庵小金厚丸の文の後に「寛政七 乙卯のはる」とある。本稿「寛政年間」項を参照。

寛政8 (1796)	丙辰	37歳	北斎、百淋宗理、俵屋宗理、北斎宗理、宗理、	印：百林、
完、知、完知	(津和野藩伝来摺物より) : こと (26歳)、(富之助: 10歳)、阿美与 (8歳) 阿鉄 (6歳)			

◇相撲興行 (3月、本所回向院。10月、本所回向院)。

◇11月、市川海老蔵（五代市川團十郎）、都座の公演で引退。

◇稲村三伯ら、フランス人フランソワ・ハルマ（François Halma）の『蘭仏辞書』から初の和蘭辞書『波留麻和解』を完成。

◇寛政5年（1793）の禁止令に続き、一枚絵の中に、評判の水茶屋の女や芸者などの名前を判じ物にして書き入れることを禁ず。

◇琉球使節来朝。寛政7年（1795）即位した尚温王の謝恩使（琉球王に即位した報告）。

【曲亭馬琴の読本第一作】

○曲亭馬琴（30歳）、読本第一作『高尾船字文』

○烏亭焉馬、『喜美談語』（主催する「嘶の会」による小咄）

○桑楊庵（俗称：頭光）、春興狂歌本『百さへつり』

○司馬江漢、「相州鎌倉七里浜凶」（「寛政丙辰夏六月二十四日」「西洋画士 東都江漢司馬峻注 描写」の書込みあり。

注）江漢司馬峻：「峻」は、司馬江漢の本名：安藤峻からのもので、西洋式に名前・姓の順にしたものか。

※洋風画のこの絵から北斎は寛政10年～13年頃の洋画風「江の島図」（「江の島風景」とも。ほくさみうつす）を着想したといわれる。相州鎌倉七里浜凶（神戸市立博物館）



【「こと」と再婚】

★後妻こと女（小兔？）と結婚。

※北斎の墓のある誓教寺の過去帳、文政11年（1828）6月5日条に「性善院法屋妙授信女 文政十一年戊子歳 六月五日」とあるという。「妙」の字が名を表すものであり、「信女」は女性の戒名の通例であるので、「信」を「こと」と読んで名とする従来の呼び方を否定して、名は「たえ」であるとする説がある（1993『大揃い 北斎 日本浮世絵博物館所蔵』（p139）読売新聞社）。

【住吉広行に土佐派を学ぶか】

★この頃、狩野派、土佐派およびその江戸の分派である住吉行広（1755～1811 通称：内記）の住吉派（土佐派注）などを学び、その後にも、司馬江漢の洋画風、南画（文人画）、京都の若沖・蕭白などに関心を持ったことは指摘されている（リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p22）。

但し、司馬江漢につき西洋画・油絵画法を学んだとされるが、実際についたのではなく、私的に江漢の絵を学んだということか。それは他の画家についてもいえよう。

注）土佐派：平安時代以来の大和絵の伝統を受け継いだ画派。室町前期、宮廷の絵所預であった藤原行光が祖とされ、行広が土佐を名乗って成立。室町後期の土佐光信によって隆盛をみた。漢画の狩野派と並ぶ画派として江戸末期まで続いた（「デジタル大辞泉」より）。大和絵の伝統を継承して、もっとも長くその主流を占めた画派（小学館『日本大百科全書』より）。

【摺物にも意欲】

★宗理期には役者絵などの錦絵を描かず、主に狂歌、俳諧の摺物、絵暦の分野に活躍。『浮世絵類考』（大曲駒村の校訂底本。岩波文庫版p144）では「（二代目宗理）これま

た狂歌、摺物の画に名高し。浅草に住。すべて摺物の絵は錦絵に似ざるを貴ぶとぞ注」と評している。

注) 錦絵に似ざるを貴ぶとぞ：錦絵のように売り物を主眼としないということか。それとも錦絵のように派手な絵柄や色彩を用いないということか、本意不明の文。

※天明3年(1783)には狂歌師は350名～360名程いたらしい(1984 平凡社『浮世絵八華5 北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」p127)。天明以降の狂歌の隆盛にともない、北斎に狂歌師による狂歌本摺物注の依頼が増えていった。

注) 「摺物」とは、狂歌や俳諧の作品発表、襲名披露、開店案内、年賀挨拶、長唄・浄瑠璃の開催案内(プログラム)などのための私的出版物(私家版の入銀本)で、浮世絵などを添えて出すもの。特に新作狂歌を添えた年賀用(歳旦摺物)が多い。

●黄表紙『朝比奈御髭の塵』(二冊。桜川慈悲成(芝楽亭)注作。画工名なし。西村屋与八版。国立国会図書館蔵)

注) 桜川慈悲成：1762～1833 または 1839。戯作者・落語家。

※宗理の挿絵かどうか不明とされる。

●狂歌絵本『繪馬合女仮名手本』(4月。墨摺半紙本一冊。三陀羅法師(千秋連)撰。画工名なし。松山堂版。20.8×15.0 東京国立博物館/初瀬川文庫蔵)

※人形浄瑠璃や歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵」全十一段を、狂歌と女性の姿で見立てて描く。初段～十一段まで、いろは順に各一丁に4首、最後に「十一丁切」として3首を載せ、忠臣蔵四十七士にあやかり計47首で纏めている。各丁の上または下半分に北斎の画が載せられる。寛政8年の芝泉岳寺の開帳に合わせて制作されたとされる。北斎は、百琳宗理名で「つ」の段の狂歌「つれもなき恋の山路のかへるさに 跡より声をかけてくどかん」を詠んでいる。

※第二版が寛政11年(1799)に刊行され、宗理・百林画、江戸松山堂とある(檜崎宗重『北斎論』p146)。

●狂歌絵本『春の曙』(折本着色一帖。摺物。芍薬亭長根撰。百琳宗理画。北斎館/東洋文庫ミュージアム蔵)

※芍薬亭長根らの菅原連による歳旦狂歌集。「枕草子」の冒頭文「春はあけぼの」を意識したもの。喜多川歌麿と一図ずつ描いている。この本、現存3例のみという)

☆〈春の曙を見る貴婦人〉(着色。17.1×38.3)

※開け放した部屋から外を眺める二人の娘と禿髪の子ども。図の右の文箱に「春曙抄」と書かれて、北村季吟の「枕草子」注釈本を意識したものと思われる。喜多川歌麿も〈やつし枕草子〉で御簾を巻き上げる女と、外を見る娘を描いている。



春の曙を見る貴婦人(東洋文庫ミュージアム)

●狂歌絵本『春興帖』(森羅亭万象編。北尾政演(山東京伝)及び北斎宗理画。四方側版。島根県立美術館：永田コレクション)

※寛政10年(1798)版もある(2010 八木書店『江戸の絵本』所収、マティ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち」p288)。寛政10年の項参照。

●狂歌絵本『帰化種』(春。半紙本墨摺一冊。9図全図描く。清涼亭菅伎撰。百琳宗理画。東洋文庫ミュージアム/シカゴ美術館蔵)

※万象亭（森羅万象）の序文に「寛政たつの春」とある。想像上の異国風俗を描く。
 〈崑崙国〉〈小人国〉〈女国〉〈長脚国〉（文化3年：1806『風俗狂歌摺物帖』でも描いている）
 〈聶耳国〉〈穿胸国〉〈手臂国〉〈擔汲国〉〈羅刹鬼国〉（この図のみ見開きの墨摺）

【副号としての北斎現る】

※宗理号に付けられた「北斎」が登場した。この号は、「前」「改」などを付したヴァリエーションはありながらも、なんらかの形でほぼ生涯にわたって用いられる。
 ※この年正月版の数種の摺物に「北斎」の署名が初めて用いられる（『もっと知りたい葛飾北斎』永田生慈監修）。

●肉筆画「梅樹図」（この頃か。紙本墨絵淡彩一幅。北斎宗理画。印知。116.5×34.0大英博物館蔵）

※掛幅仕立ての図。縦長の画面の右下から図の中央に向けて枝が左に伸び、幹から垂直に上に向けて枝が伸びている。薄墨で描いた梅の木に白梅が蕾を付れたり咲いたりしている。四方歌垣真顔の賛には「うぐいすのはつ音は 親の異見より きけハ身にしむ 春の朝起」とある。

【この年より画風一変、宗理型美人も登場】

★宗理期では、宗理型美人図（瓜実顔〈瓜の種のように白くて面長の顔〉、小さな目、おちょぼ口、細身で背が高く不自然なほど首を傾げる）が特徴。宗理様式は宗理号を離れても文化初期にまで続く。

●肉筆画「遊女図」（この頃か。北斎宗理戯画。印知。紙本着色一幅。70.9×24.0フリーア美術館蔵）



※床入れ後の遊女の姿。襟や裾が乱れ、急いで着物を着た様子。浴衣の上に着た黒地の仕掛 注の襟の一部を口にくわえて放心した表情で立っている。裾が乱れ白い足が覗いている。だらりと下げた右手には手紙らしきものが握られている。

注) 仕掛：着物の打掛のこと。着物の上に更に羽織るもので、裾に綿が入る。遊郭では仕掛という。

遊女図（フリーア美術館）

●肉筆画「花魁立姿図」（紙本淡彩一幅。北斎宗理画。印知。94.3×27.6 ミネアポリス美術館蔵）

※誰哉行燈（吉原で妓楼の戸前にかかげ往来を照らした木製の行燈）を背にして立つ遊女。森羅亭（森羅万象）の賛あり。

※寛政10年～12年（1798～80）の「花魁図」同様に、横向きの花魁図は北斎の得意とするところ。享和元年～文化2年（1801～05）にも横座りの「花魁図」（紙本淡彩一幅）がある。
 花魁立姿図（ミネアポリス美術館）

●肉筆画「夜鷹図」（寛政9年～10年〈1797～1798〉説あり。紙本淡彩一幅。北斎宗理画。印辰政。99.7×28.0 細見美術館蔵）

※古くは「柳下辻君」と称された図。垂れた柳は川辺の木陰を暗示し、二羽の蝙蝠は夜を象徴するという（『原色浮世絵第百科事典』第八巻）。傘を持ち、吹き流しに被った手拭の端を噛み、髻に結んだ紅裂を見せて後ろ向きに立つ夜鷹の図。



※夜鷹は一転び24文(約600円。蕎麦一杯16文なので、二転びで蕎麦三杯分といわれた)。



一日10人(240文=約6000円)といわれる(1文=25円で換算)。

「夜鷹番屋の事、駒止橋の際に草鞋を売つて居た番屋があつたが、妙な習慣で本所の吉田町から稼ぎに来る辻君即ち夜鷹連は此番屋の空地へ集合て、各自にお化粧をして夫から稼ぎ場所へ出掛たのである、乃で夜鷹番屋と異名を取つたとやら」(大正2年成光館出版部『趣味研究 大江戸 全』所収、元晋一「両国の面影」)。

※夜鷹番屋が本所の吉田町(現東京都墨田区石原4丁目一带)にあり、そこで筵、衣装、傘などを借り、両国薬研堀注辺りに出かけた。四谷鮫河橋にも番屋があり、ここからも 四谷堀橋、牛込桜ノ馬場、愛宕辺りに出かけたという。縞模様の綿の着物、後帯・前垂姿という。

注) 両国薬研堀: 両国及び両国橋西側の薬研堀(現東京都中央区東日本橋2丁目辺を指すか)。

夜鷹図(細見美術館)

●扇面肉筆画「布袋図」(北斎宗理画。朱文手書「百林」(寛政8年~9年(1796~97)に使用)の落款があるので、この頃か。紙本扇面着色

一幅 16.7×47.8 島根県立美術館蔵)

※布袋が「寿」の字を書き終えた図。「寿」の紙中に落款がある。

●肉筆画「中国武人図」(「漢武一人立図」とも。絹本着色一幅。北斎宗理画。印完知。52.4×20.6 東京国立博物館蔵)



※この武人は『三国志演義』に登場する趙雲とみられている。趙雲は、中国後漢末から三国時代の蜀漢にかけての将軍。口髭を生やした恰幅のよい武人が兜を被り武装して、上下に刃のついた槍を左の小脇に抱え持ち、右手を胸の前に置き、左前方を見据えている。兜や体に巻く装着は赤い色で描いている。

中国武人図(東京国立博物館)

●肉筆画「涼をとる美人図」(絹本淡彩一幅。北斎宗理画。印完知。95.2×31.2。個人蔵)

※蚊帳から出て、暑さをしのぐため、団扇を持って涼む女は、浴衣の胸をはだけ、帯も締めずに立っている。藍色の模様の浴衣の裾からは右足の脛が覗いて、典型的な宗理様式の美人図といわれる。

涼をとる美人図(m.blog.daum.netより転載)

●肉筆画「黄石公と張良図」(紙本着色一幅。栄齋宗州応需 北斎宗理画。印辰政。114.5×47.0 日本浮世絵博物館蔵)





※謡曲等の「黄石公と張良」の話からの取材。張良が土橋の上で黄石公から太公望の兵書を授けられている場面。この兵書により張良は漢の軍師となった。

黄石公と張良図（日本浮世絵博物館）

●肉筆画「馬上農夫図」（「帰農図」とも。紙本着色一幅。北斎宗理画。印辰政。83.3×26.1 日本浮世絵博物館蔵）

※農夫が仕事を終え、馬に乗って家に帰る図。手綱を取らず、両手を鞍の背に回して身体を反らせて馬に乗っている。杭の挿し並べてある道筋は右に大きく弧を描いている。図上部には稲葉華溪（1745～99）の賛「清風一襟邨前夕 長流萬里濯馬蹄 華溪老人」（訓下し及び筆者意識：清らかな風が襟をなでる村里の夕べ、遙かな川の流れに馬の蹄を洗う）の句が記される。

馬上農夫図（日本浮世絵博物館）



●摺物「花鳥図」（1月。横大判。北斎宗理画。ホノルル美術館：クラブホン・コレクション蔵）

※右半分は二羽の鳥と梅の木に咲く花。左半分は二代目北斎、丙子、高長、斗石、戴雅堂、戴財、斗円、戴斗の狂歌あり。

●摺物「猩猩舞の図」（1月。宗理画。『年譜』による）

●摺物「子供雪遊びの図」（1月。印完・印知。図中に「辰のとし」とある。〈『年譜』による〉）。

【初の俳諧摺物】

●摺物「花卉図」（春。横長判着色摺物。北斎宗理画。20.2×37.2 島根県立美術館蔵）。
※現在のところ、北斎初の俳諧摺物とされる（2018年『永田生慈 北斎コレクション 100選』展図録p202）。

※花卉とは、鑑賞するための美しい花をつける植物の総称。図右に葉を多くつけた茎と小さな花を描き、図左に、雪中空華（完来）と清霞楼馬吟の句を記され、更に「寛政辰年春」とある。

●摺物「庭掃除の三美人」（春。宗理画）

※図中に「寛政八丙辰春」とある（『年譜』による）。宗理型美人の典型とされる。

●摺物「茶人手前図」（10月。北斎宗理画）

※図中に「辰かみな月」（辰の年の神無月）とある（『年譜』による）。

●絵暦「玉とりの図」（1月。宗理画。『年譜』による）

●絵暦「豆まき図」（1月。法橋宗達図俵屋宗理写。『年譜』による）

※法橋宗達は俵屋宗達。琳派の祖。法橋は、僧位の第三位。正四位の官位に相当し、僧以外の仏師・絵師などにも与えられた。依然、琳派の様式の画風と言われる。

※他に、この年の宗理落款の絵暦は13図あるという〈檜崎宗重「絵暦雑感（一）」：『浮世絵界』六の六〉（『年譜』所収）。

●絵暦「龍の玩具を持つ子と母娘」（1月。宗理画。『年譜』による）

●絵暦「鳥居下の娘と子供」（1月。着色。宗理画）

※娘の着物に大小月が示される（『年譜』による）。川辺に立つ鳥居の前に座り、小さな子供を抱いている娘。川には、鳥帽子を被った男を乗せた躰こぎの船が行く。

※同図は「津和野藩伝来摺物」の一図として島根県立美術館：永田コレクションに所蔵されている。本稿「寛政年間」項を参照のこと。

●絵暦「七福神図」（1月。宗理画）

※画中に「辰春 竹田口上」とあり（『年譜』による）。

●絵暦「懐通辰己楼」（1月。着色。横九つ切版摺物。百淋宗理画。印百林。小金厚丸作。13.4×17.8。すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/ベルリン東洋美術館蔵）

※蓮の花に立っている菩薩が傘を広げて担いでいる。開いた光背に大小月が示される。すみだ北斎美術館のツイッターでは、厚丸の蜃気楼についての文を「永代島遊船に乗ったときに蜃気楼をみた。蛤町の口もとから（蜃気楼が）出て、洲崎の沖にどまった。その輝きは阿弥陀の光のようで、人の目を悦ませた…」と意識している。

「辰巳」は深川の別称で「しんき」と読んで「蜃気楼」と掛けている。図左下の扇子の後の蛤焼きの鍋から蜃気楼のような気が立ち上っている。

右枠の表題が書かれた紙が表紙になり、折って懐中物とした絵暦と思われる。印の「百林」は、北斎の号「百琳」をこのように刻印している。



懐通辰己楼（すみだ北斎美術館）

●絵暦「碁盤人形」（1月。着色。摺物。宗理画。12.8×8.8 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※碁盤の上で花笠をまとった人形を袴姿で操っている図。操る男の袴に「辰」、袖に「松」とあり、江戸中期の辰松八郎兵衛という人形遣いを表しているという。人形の帯に小の月が示される。

※本図は「津和野藩伝来摺物」の一図として島根県立美術館：永田コレクションとしても所蔵されている。本稿「寛政年間」条を参照。

●摺物「瑞亀図」（この頃か。紙本着色摺物一幅。北斎宗理。印辰・印政。34.9×49.4 奈良県立美術館蔵）

※湧き出た醴水から亀が現れ、老夫婦が長命のしるしと喜んで瑞亀（尾が房のように広がっているの亀）に酒を飲ませている図。金箔を付した豪華な摺物。華溪老人注の賛「醴泉湧出 亀銜玉杯 福鐘有兆 寿門了開」。

注) 華溪老人：稲葉貞隆。号：華溪。書家。寛政12年(1800)没(51)。



瑞亀図 (奈良県立美術館)

●摺物「元結い造り図」(春。色紙版着色。宗理画。18.9×18.0。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※元結は、髪の毛の髻を結び束ねる紐をいう。江戸時代には糊でかためたこよりを用いた。江戸言葉では「もっとい」と発音した。図中に「たつの春」とある。図は、元結いの紐を纏る手回しの道具の前で作業する女が描かれる。狂歌は春興と題して、友垣増人・鳴滝音人・銭屋金埒が詠む。

●摺物「縁側の婦人」(7月。北斎宗理画。印不明)

※「たつはつ秋」とある(『年譜』による)。

寛政9(1797)丁巳 38歳 春朗(版元によるか)、北斎宗理、宗理、百琳宗理(津和野

藩伝来摺物より) 辰、政、宗理、北斎、完知、「完、知、百林」(津和野藩伝来摺物

より)：こと(27歳)、(富之助：11歳)、阿美与(9歳)、阿鉄(7歳)

◇相撲興行(3月、浅草八幡宮、10月、芝神明宮)

◇湯島聖堂(孔子廟：現東京都文京区湯島1-4-25)が昌平坂学問所(昌平黌)と改称、幕府直臣だけでなく他藩士にも門戸を広げた官学校となる。

◇1月1日、歌川一勇齋国芳生(～文久元：1861)。

◇5月6日、初代蔦屋重三郎没(48歳。幽玄院義山日盛信士。墓：正法寺：東京都台東区東浅草1-1-15)。以後の蔦屋重三郎は二代目となる。

◇歌川一立齋広重、定火消同心安藤源衛門の長男として江戸八代洲河岸(現東京都千代田区丸の内2丁目辺)に生まれる。幼名：徳太郎(生年月日不明～1858)。

○烏亭焉馬、「詞葉の花」(晰の会)。

○鋏形蕙斎、『鳥獣略画式』(北斎に影響したか)

●黄表紙『塩焼文太都物語』(正月か。三冊。桜川慈悲成作。画工名なし。すみだ北斎美術館：ピーターモースコレクション)

※現在のところ、宗理かどうか不明。

●狂歌絵本『柳の絲』(歳旦集。全5図。折本一帖。浅草市人(浅草庵市人)撰。堤等琳、鈴木鄰松、細田栄之(鳥文斎)、花藍(北尾政演)とともに、北斎宗理が洋画風に「江島春望」一図を描く。蔦屋重三郎版。大英博物館/島根県立美術館：永田コレクション/慶応義塾大学/日本浮世絵博物館/東洋文庫：岩崎文庫蔵)

※「北斎他に抜きんず」と評せられる(『画狂人北斎の実像』小林忠p220)。

☆〈江島春望〉(着色。北斎宗理画。印北斎 印宗理 見開き24.7×37.7)

※江ノ島まで続く干潟に打寄せる波。浜辺で天秤の荷物に棒を立てて支え、横棒に腕を掛けて休み、笠を持ちあげ側にいる女たちを見ている男。参詣に来たらしい二人の女の一人は赤子を背負った女の子に何か話しかけている。側にはその妹が姉の後ろに隠れている。遠くの干潟には4名の人物がいる。左の背景には富士山が描かれる。



江島展望(東京国立博物館)

●狂歌絵本『春のミヤひ』(『春のみやひ』とも。紙本着色折本一帖。芍薬亭長根編。北斎宗理画。菅原連版。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※浅草庵市人や三陀羅法師など151首を収める。北斎は2図を描く。

☆〈舟のおんなたち〉船で櫓を漕ぐ女。その後ろに乗る二人の女の図。

☆〈川辺を行く一行〉揚帽子(角隠し)を被った武家の女房に供をする二人の女と男、子どもの一団が、春の川辺を歩く図。

●狂歌絵本『さんたら霞』(春。着色一帖。三陀羅法師撰。北斎宗理画。大英博物館蔵)

※歳旦集。北尾重政らと描く。寛政10年『さんたらかすみ』の豪華本に引き継ぐ。

●狂歌絵本『百さへずり』(着色一帖。北斎宗理画)

※文化2年(1805)、同名の『百囀』が刊行されているが、内容は別物。

●詠句集『白・萩・雀』(大奉書全紙版。摺物。北斎宗理画。印辰・印政。シカゴ美術館蔵)

※俳人雪中庵完来(1748~1817)社中による月を主題にした詠句集。上下折りで、句は逆さに記載。上部の図は、大きな石の引き臼が二つ、横と縦に置かれ、横に置かれた臼に二羽、萩の木に立てかけられた臼に一羽の雀がとまっている。萩を支える竹柱には白い衣が掛けられている。

【菱川宗理は北斎にあらず】

●花道書『遠州流挿花四季詠』(墨摺四卷四冊。森一訓編。菱川宗理写。大田蜀山人序。早稲田大学図書館蔵)

※北斎は寛政10年(1798)に門人宗二に宗理号を譲っていることと、宗理期に「菱川」を用いた号は無いという説がある。門人宗二は菱川宗理を名のっているので、この花道書の刊行年と画工名については考証の余地がある。寛政6年(1794)の「菱川宗理は門人宗二」の項参照。

※梅本麿山『浮世絵備考』(明治31年)「北斎辰政」(P59)の項に「北斎辰政 通称、橋本庄兵衛、為一の最初の門弟にて、初名、宗二、後に宗理の名を譲られ、菱川宗理(三世)となりぬ。『浮世絵類考』に、為一が、はじめ菱川宗理と名乗りしとあれども、全く此の三世宗理と混じて誤れるものなり。為一は菱川と呼ばず、俵屋宗理といへり。三世宗理、のち再び師の号を譲り受けて、二代目北斎辰政となる。浅草山谷に住みて、狂歌摺物の絵を多く画けりと云ふ」とある(「国立国会図書館デジタルコレクション」より。ルビは筆者による)。

花道の遠州流は小堀遠州を祖とし、その美意識を花道に継承したもので、この時期江戸で流行した。文化13年(1816)に『新遠州流挿花四季詠』、文政元年(1818)に『遠州流挿花四季詠』、嘉永4年(1851)に『遠州流挿花四季詠』としても出版された。図は、江戸の遠州流各門人名と挿花が描かれる。

●肉筆画「梅樹図」(絹本一幅。着色。百琳宗理画。印完知。81.8×31.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※金色の無地の背景。図の右下から左上に梅樹が伸び、図中央で右上に向かってくの字に伸びる幹。枝には白梅の蕾が点苔のようについている。画面中央には枝の向こうに薄く満月が描かれる。図上部には、朱楽菅江他二人の狂歌が記される。 梅樹図(島根県立美術館)



●錦絵「紀ノ名虎と大伴義雄」(この年に成稿。前北斎為一筆。21.4×18.8 フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション)

※二人の武将が組み合う図。落款の「為一」は文政3年(1820)頃から用いているので、プルヴェラー・コレクションの作品はそれ以降に刊行されたものと思われる。

●摺物「結納」(この頃か。紙本着色。菱川宗理画。東京国立博物館蔵)

※「結納品々 甲子屋忠兵衛」と書かれた大看板がある店先に袴姿の侍と供の男が来ている。上がり座敷で二人と応対している店の女。奥にはするめが干してあり、その他の結納品が置かれている(『東京国立博物館所蔵目録』による)。北斎に菱川宗理の落款使用はないとされるので門人宗二の作か。

●絵巻「琵琶を弾く弁天」(紙本着色。宗理画。秋長堂(物築)版 11.5×16.7 北斎館蔵)

※水辺の岩に腰掛け琵琶を弾く弁天。弁天は水の神でもある。岩に月の大小を示す漢数字が書かれている。この年は丁巳の蛇の年で、弁天の使いの蛇に因んでの摺物。図の左に「佐保姫は霞王女は琵琶の曲 いずれひくともひけはとらまじ 古梅亭難波華住」、「春霞今朝ひく琵琶にあわせてや うたひ出しけん初鶴の声蓬萊亭宝篋亀」、「此神のつかへるへびにのまれつゝ よめぬ蛙の哥袋から 東都 万亀亭花江戸住」の三種の狂歌が記される。

琵琶を弾く弁天（北斎館）



●絵暦「美人小松引の図」（1月。宗理画。『年譜』による）

●絵暦「帆柱に日の出」（1月。摺物。宗理画。『年譜』による）

※佐野行道の狂歌あり。

●絵暦「乙福面の図」（1月。摺物。宗理画。『年譜』による）

※この年、宗理の絵暦は19図あるという（長谷部言人『大小暦』による。『年譜』に所収）

●絵暦「醤油屋店頭」（1月。摺物着色。宗理画。17.8×25.4 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※醤油屋の店内にはいくつもの樽が積み、主人は帳場の火鉢の前で算盤を立てて、肘掛けにしながら煙草を吸っている。背後に「改 年徳 亥子の間 金神 とら卯 いぬ亥」と書かれ、末尾に「丁巳年」とある。大小月と節季が詳しく記されている。

「鶯の大極上ハ醤油ほど きゝし初音を賞翫そする 常陽下館 荒川亭貴達」、「醤油見せはるたつ四方の山うろこ 味よく霞む今朝の長閑さ 末広庵長清」、「春立と醤油の割のきゝもよく けさ呑口をひらく鶯 浅草庵市人」、「三丁のミつの朝よりはしまりて 山中ハミな霞なりけり 先大家裏住」の狂歌が記される。

醤油屋の店頭（すみだ北斎美術館）



●絵暦「年始の武士」（1月。着色摺物。宗理画。10.1×8.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※手あぶりに肘をかけながら書物を読む老翁に、袴の武士が刀を右脇に置き、年始の挨拶をしている図。老翁は脇に置いた書物の方に顔を向けている。四角志面人の狂歌「巳のとし春」に続けて「新玉の盃事のしけゝれハ 自然とかたの春をしりけり」が記される。老翁の背後の壁面の扇の図に、大の月を示す行事や、月にふさわしい植物の文字が書かれている。

●絵暦「年礼」（1月。着色摺物。宗理画。9.6×11.7 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※麻^{あさ}袴^{かほ}を着て脇差^{わきざし}を差した主人^{しゅじん}が、大きな門松^{かどまつ}のある家^{いへ}に新年^{しんねん}の挨拶^{あいさつ}に行く。荷物^{にもの}を持った小僧^{せうそう}が後に着^きいて行く。門松^{かどまつ}の根元^{ねもと}に大小^{だいせう}月^{つき}が記^しされる。小松亭^{こまつてい}家^け住^{ずみ}の狂歌^{きやうか}の前書^{まへがき}きに「丁巳^{ちやうし} 立春^{りつしゅん}」とある。「佐保^{さほ}姫^{ひめ}の霞^{かすみ}の衣縫^{ころもぬい}ひのハシ けさゆつたりと春^{はる}ハ来^きにけり 小松亭^{こまつてい}家^け住^{ずみ}」、「浪^{なみ}たゝぬひたひの皴^{かむ}も若水^{わがみず}に うつり替^からぬ春^{はる}は来^きにけり 唯我^{ゆいが}堂^{どう}川^{がわ}面^{めん}」の狂歌^{きやうか}が記^しされる。

●絵曆^{えにち}「羽子^{はこ}板^{いた}遊^{あそ}びをす^{する}る二人^{ふたり}の禿^{かぶろ}」(1月。宗理^{そうり}画)

※禿^{かぶろ}の帯^{おび}に大小^{だいせう}月^{つき}あり。琴興^{きんきやう}舍角^{しゃかく}道^{みち}の狂歌^{きやうか}あり(『年譜^{ねんぷ}』による)。

●絵曆^{えにち}「正月^{しょうげつ}餅^{もち}と娘^{むすめ}図^ず」(1月。宗理^{そうり}画)

※図^ず中の浪^{なみ}面^{めん}成^{なり}考^{こう}の戯^{あそ}文中^{ぶんちゆう}に大小^{だいせう}月^{つき}あり(『年譜^{ねんぷ}』による)。

●摺物^{すりもの}「白馬^{あおうま}節^{せち}会^え」(1月。着色^{しやくしき}。宗理^{そうり}画。13.8×12.7 すみだ北齋^{きたさい}美術^{びじゆつ}館^{くわん}:ピーター・モース・コレクション)

※正月^{しょうげつ}七日^{にち}に行^いなわ^なれる朝廷^{てうてい}の行^{ぎやう}事^じ注^{ちゆう}で、白馬^{あおうま}の引^ひきはじ^めを描^えいたもの。たてがみ^{たてがみ}を飾^{かざ}った白馬^{あおうま}の手綱^{てづな}を引^ひく男^{おとこ}の図^ず。狂歌^{きやうか}に「三味^{さんまい}線^{せん}のうたにひとしく春^{はる}駒^{こま}の けふひきそめを 夢^{ゆめ}にミのとし 藤^{ふじ}蔓^{つる}人^{ひと}」とあり、「夢^{ゆめ}にミのとし」でこの年^{とし}を洒^し落^れている。また「巳^み春^{はる}」ともある。

注)白馬^{あおうま}節^{せち}会^え:正月^{しょうげつ}7日^{にち}、天皇^{てんかう}が豊楽^{ほうらく}殿^{でん}(のちに紫宸^{ししん}殿^{でん})に出^い御^ごして邪^{じあ}気^きを祓^{はら}うとされる白馬^{あおうま}を庭^{にわ}に引^ひき出^だし、群臣^{ぐんしん}らと宴^{えん}を催^{もよほ}す(Wikipediaによる)。この日^ひに白馬^{あおうま}を見^みると邪^{じあ}気^きを避^さけるとい^う中国^{ちゆうごく}の風^{ふう}習^{じゆつ}に因^よんだもの。

●摺物^{すりもの}「新^{しん}春^{しゅん}の渡^{わた}し船^{ふね}」(1月。着色^{しやくしき}。宗理^{そうり}画。12.9×17.6 すみだ北齋^{きたさい}美術^{びじゆつ}館^{くわん}:ピーター・モース・コレクション)

※浅草^{あさくさ}川^{がわ}の新^{しん}春^{しゅん}の渡^{わた}し船^{ふね}に、三河^{みかわ}万^{まん}歳^{ざい}の二人^{ふたり}や梅^{うめ}の小^{せう}枝^えを持^もつ揚^{あげ}帽^{ぼう}子^し(角^{かく}隠^{かく}し)の女^め、長^{なが}い棒^{ぼう}の先^{さき}に輪^{りん}をつけた物^{もの}を立てた大^{だい}道^{だう}芸^ぎの男^{おとこ}たち^{たち}が乗^のっている。狂歌^{きやうか}の次^{つぎ}に「巳^みのとし」と記^しされる。「海^{うみ}苔^{こけ}さらす浅草^{あさくさ}川^{がわ}の川^{がわ}かせに すきて色^{いろ}よき青^{あお}柳^{やなぎ}の髪^{かみ} 上^{かみ}毛^け貢^{きん}梭^さ磨^ま」、
「初^{はつ}夢^{ゆめ}に見^みたや茄^{なす}子の駿^{すま}河^{がわ}より またそのさきの三河^{みかわ}万^{まん}歳^{ざい} 同^{どう}萌^も黄^{わう}浦^ぼ人^{ひと}」、「いてつきて てこてもゆかぬ氷^{こおり}さへ うこき出^だしたる春^{はる}ののどけさ 吳^ご藍^{らん}蘇^そ丸^{わん}」、「たをや女^めのつくる かいこのまゆよりは くり出^だすらん青^{あお}柳^{やなぎ}の糸^{いと} 潜^{せん}亭^{てい}裏^{うら}成^{なり}」の狂歌^{きやうか}が記^しされる。

●摺物^{すりもの}「栈^{さん}橋^{きやう}の芸^ぎ妓^ぎ」(1月。宗理^{そうり}画。12.4×17.0 すみだ北齋^{きたさい}美術^{びじゆつ}館^{くわん}:ピーター・モース・コレクション)

※柳^{やなぎ}のある栈^{さん}橋^{きやう}から屋^や形^{がた}船^{ふね}に乗^のろうとする芸^ぎ妓^ぎの図^ず。狂歌^{きやうか}「鶯^{うぐいす}のうたにあ^あはせて風^{かぜ}の手^ても ひく三味^{さんまい}線^{せん}の糸^{いと}柳^{やなぎ}かな 色^{いろ}気^け内^{ない}子^し」、「三味^{さんまい}線^{せん}をひくや霞^{かすみ}の高^{たか}調^{てう}子^し 梅^{うめ}見^みの船^{ふね}に 鶯^{うぐいす}のうた 競^{けい}馬^ば行^{ぎやう}」、「是^{これ}もまたしつけの谷^{たに}のふとこ^ころに おとなし山^{やま}の鶯^{うぐいす}の声^{こゑ} 少^{しょう}女^{によう}道^{だう}頼^{らん}」とあるように、これから客^{きやく}を相手^{あいて}に梅^{うめ}見^みで三味^{さんまい}線^{せん}を弾^ひくか。「巳^み孟^{もう}春^{しゅん}」とある。

●摺物^{すりもの}「梅^{うめ}と官^{くわん}女^{によう}」(1月。中判^{ちゆうぱん}。宗理^{そうり}画。東京^{とうきやう}国立^{こくたつ}博物^{ぶつ}館^{くわん}蔵)

※柵^{さく}の中^{なかに}の梅^{うめ}が咲^さいて、その前^{まへ}の床^{しやうぎ}机^こに座^まって首^{くび}を傾^{かたむ}ける垂^{すい}髪^{はつ}の官^{くわん}女^{によう}と、床^{しやうぎ}机^この脇^{わき}に座^まっている垂^{すい}髪^{はつ}の官^{くわん}女^{によう}。

●摺物^{すりもの}「花^か魁^{けい}と禿^{かぶろ}」(1月。中判^{ちゆうぱん}。宗理^{そうり}画。東京^{とうきやう}国立^{こくたつ}博物^{ぶつ}館^{くわん}蔵)

※横^{よこ}兵^{へい}庫^この髻^{まげ}の花^か魁^{けい}と羽^は子^こ板^{いた}を持^もつ禿^{かぶろ}の図^ず。図^ず中に「丁巳^{ちやうし}はつ春^{はつしゅん}」とある。

- 摺物「**三美人の図**」(1月。中判。北斎宗理画。東京国立博物館蔵)
※右から横兵庫の花魁、振袖の娘、芸者風の女の図。「**丁巳はつ春**」とある。
- 摺物「**若菜摘みの三美人**」(1月。北斎宗理画)
※「**丁巳はつ春**」とある。足利桐生連の狂歌七首あり(『年譜』による)。
- 摺物「**日の出の図**」(1月。北斎宗理画。図中に「**寛政九丁巳**」とある。『年譜』による)
- 摺物「**日の出を見る貴人**」(1月。北斎宗理画)
※「**丁巳初春**」とある。海辺で昇りつつある日の出を見る立烏帽子の貴人。後ろでは小姓が控えている。貴人の側には折烏帽子を被った男が座って控え、更に白衣の仕丁が二人控えている。朝日の前を掠めるように三羽の白鷺が飛んでいる。分銅重記、浅草庵市人の狂歌あり。
- 摺物「**梅下外出の二婦人図**」(1月。宗理画)
※「**丁巳初春**」とある。花月友成、浅草庵の狂歌あり(『年譜』による)。
- 摺物「**鳥さし**」(1月。宗理画。印百林。『年譜』による)
- 摺物「**梅樹**」(1月。宗理画。13.3×18.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)
※額取りされた図の右半分に、太い梅の老木の幹が墨絵風に描かれる。左半分に狂歌が記される。「**梅か香の匂ひくるまを風の手におしてゆくとも袖にとめてし 安喜人亭堅儀**」、「**鷺の一夜もとまれはつこへに ねかへりさせし床の梅かへ 毛呂利館客人**」、「**名ふたほと柳の糸ハよりそへて 紅白に咲むめかかとゝれ 大亭可成**」などの狂歌がある。
- 摺物「**新春の日本堤**」(1月。「**初春の日本堤**」とも。着色。宗理画。13.4×18.4 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)
※日本堤から吉原の家並みを俯瞰した図。堤には鍬を担いだ農夫が歩き、遠くの家並み前には、六人の人が小さく描かれる。空には雁の群れ。野辺亭廣道の狂歌あり。また、「**丁巳の春 東書堂主人書**」の賛あり。
- 摺物「**木馬に乗る童子**」(1月。宗理画)「**寛政九巳春**」とある。雪中庵ほか三名の句(五句)あり(『年譜』による)。
- 摺物「**神馬曳初図**」(1月。宗理画)「**巳春**」とある。藤蔓人の狂歌あり(『年譜』による)。
- 摺物「**巳待**」(着色。宗理画。13.5×19.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)
※旧暦で60日に一度おとずれる己巳の日の弁財天の祭りに、「**巳巳待御祈禱御礼 別当福寿堂**」の文字を書いた札をかざしている御殿女中の大首絵。前髪に簪を差している。不忍弁財天・深川八幡弁財天・深川冬木弁財天・深川洲崎弁財天・本所石原弁財天などに前日より籠もる。「**不忍の池ハ恵方のかたはつし 霞のおくの女かみなる 小柄高彫**」、「**まつとしの封しをきつてミよの春 あら玉筥の文の書初 末程吉**」、「**代参にたつや霞**」

のおく女中 春に向ひか岡の曙 競馬行」の狂歌が記される。「津和野藩伝来摺物」にも同図がある。

巳待（すみだ北斎美術館）



●摺物「渡しの茶屋」（着色。北斎宗理画。18.0×24.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※渡し場のある丘の茶屋の床几に置かれた人形に興味を示し、床几に上ろうとする男の子。その帯をひっぱって留めようとする女の子。その様子をほほえましく見ている揚帽子（角隠し）の母親。桜が咲く丘の下では客を乗せた渡し舟が出て行く。

●摺物「上野花見帰り」（この頃か。着色。北斎宗理画。20.4×58.3 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「両大師 執事」とかかれた札が立っている、桜咲く寺社境内で花見をする人々。竈に薬缶をかけ、火吹きで火をおこして茶を沸かす男の側で三人の男が休んでいる。「両大師」とは、上野・東叡山寛永寺（東京都台東区上野公園 14-5）の開山堂（慈眼堂とも）。創建者慈眼大師（天海）と、天台宗中興の祖慈恵大師（良源）の像も祀っているので「両大師堂」とも呼ばれた。

●摺物「飛鶴を見る貴人」（北斎宗理画。紙本着色。19.1×52.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※衣冠束帯姿の貴人が岸辺で遠く海上に舞飛ぶ三羽の鶴を眺めている。貴人の側には三人の供人が座して控えている。「寛政九丁巳」とある。

●摺物「座敷狂言春駒」（この頃か。応需北斎宗理席上画。29.6×56.0 太田記念美術館：長瀬コレクション/北斎館：19.7×33.8 蔵）

※全体に素描に淡彩の雰囲気。遊郭の座敷で春駒の踊り注を見ている多くの遊女や禿たち。奥の柱の側には袴を着た男と幫間と思われる男が座って見ている。四方連の狂歌が添えられる。北斎館蔵では、左約三分の一が切り取られ、春駒の所作事が見られない。四方連の生網屋生網の狂歌が記される（北斎館蔵にはない）。



座敷狂言（部分：北斎館）

注) 春駒の踊り：正月の祝いに、玩具の春駒を操りながら踊る。

●摺物「舟上水汲み」（紙本着色。北斎宗理画。印北斎 印宗理。22.0×56.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/北斎館蔵）

※隅田川の夜景で、屋形船では男が客の炊事のためか、舟端から身を乗り出し桶で水を汲んでいる。

●摺物「新春の外出」(九つ切判着色。宗理画。12.9×17.3 フリーア美術館：フルヴェラー・コレクション蔵)

※遊女らしき女と、包みを抱えたお付きの女。正面左に「丁巳はつ春」とある。

●摺物「太夫の鶏合わせ」(「太夫闘鶏」「太夫相撲」とも。横長判。着色。北斎宗理画。21.7×56.2 東京国立博物館蔵)

※部屋の中で遊女が二人、それぞれ鶏を脇に抱え、闘鶏の準備をしている。中に立って軍



配を持っている行司役の遊女。部屋の右には折り屏風に「瀧川画」と書かれた滝の絵が描かれる。図左には、楽山亭嵐長の狂歌が書かれている。

太夫の鶏合わせ (東京国立博物館)

●摺物「講釈」(宗理画。『年譜』による)

●摺物「弁天に座頭図」(北斎宗理画。印完知)「丁巳のとし」とあり(『年譜』による)。

●摺物「福祿寿と弁天」(北斎宗理画)「丁巳のとし」とあり(『年譜』による)。

●摺物「夜の梅」(着色。宗理画。9.7×13.9 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※狂歌師らしき男が文机に頬杖をついて、障子を開け放した窓辺から梅花を眺めている図。

「春の夜の闇ハあやしく白壁と たとれハ高く匂ふ梅か香 丁巳のとし 嵯峨道改竹真蔭」とある。同図は津和野藩伝来摺物(島根県立美術館：永田コレクション)にもある。本稿「寛政年間」項を参照。

●摺物「見立七福神図」(着色。応儒北斎宗理席上画)

※「夷曲注 四方垣本」と書かれた掛福のある部屋で、七福神に見立てた七人が、皿に乗った鯛や亀型の酒入れ等を置いて、楽しげに正月の宴を開いている。図の左には鶴と松が描かれた衝立があり、その前では扮装のための眉と目が描かれたあて物を目にあて、三味線を持っている。その姿を頭巾を被った男が二人、面白そうに見ている。

注) 夷曲：ひなぶり。狂歌を指す。

寛政10 (1798) 戊午 39 歳 北斎辰政、北斎宗理、宗理改北斎、完宗理、宗理改北斎辰

政、時太郎可候、可候、宗理、完知、北斎完知、かつしかの北斎宗理、二世宗理、印：

三径、師造化、完、知、北、斎、百林、かつしか、北斎宗理、(花押)：こと (28 歳)、

(富之助：12 歳)、阿美与 (10 歳)、阿鉄 (8 歳)、阿栄 (1 歳)

◇ナポレオン、エジプト遠征。

◇相撲興行（3月、芝神明宮、10月、本所回向院）。

◇この年、宝暦暦から西洋天文学を踏まえた寛政暦（天保14年：1843まで）に改める。

◇オランダ商館江戸参府。

◇5月2日、俳人高桑蘭更没（73）。

◇7月27日、近藤重蔵、択捉島に「大日本恵土呂府」の標柱を立てる。

◇朱楽菅江没（60）。生没年については明確でなく、元文3年（1738）又は元文5年（1740）12月24日に生まれ、寛政10年（1798）或いは寛政11年（1799）又は寛政12年（1800）12月12日（又は1月17日）に没したとされる。本稿では元文5年生～寛政10年没とした）。

○本居宣長、『鈴屋集』『古事記伝』（全44巻完成）。

○烏亭焉馬、落咄『無事志有意』（寛政の改革により最後の噺の会となる）。

○式亭三馬、江戸の遊里、深川古石場を舞台に描いた洒落本『辰巳婦言』（角書「石場妓談」。喜多川歌麿画）が絶版を命じられる。宮武外骨『舌禍史』（p91）に「其地に於ける妓女の痴態を写せるものにして、所謂蒟蒻本注なり、此書亦風教に害ありとして絶版の命を受けたりといふ、されど著者には何等の累を及ぼさざりしが如し」（ルビは筆者による）とある。

注）蒟蒻本：半紙四つ折りの小型本で、形と色が蒟蒻に似ているので、洒落本をこう呼んだ。

【娘・阿栄誕生の謎】

★この年、阿栄生れたか。北斎は寛政8年（1796）に後妻「こと」と結婚しているので、2年後の本年には阿栄が誕生していると推測する。また、応為（阿栄）の結婚時期や北斎の創作への協力（特に艶本）等の年齢を勘案し、本稿では寛政10年（1798）の誕生が妥当とした。

キャサリン・ゴビエ『北斎と応為』（彩流社2014刊）では北斎40歳（寛政11年：1799年）の子とする。また、鈴木由紀子『浮世絵の女たち』（幻冬舎2016刊・p188）では寛政12年（1800）頃とする。また、『葛飾北斎伝』（p312）の「一説に、阿栄、加瀬氏の家を出で、加州金沢に赴きて死す。年六十七」の記事から類推して、寛政13年（1801）前後の生まれとする見方もある。

※『葛飾北斎伝』では、四方梅彦談として、次のように記している。

「余が初めて北斎翁の所に到り、一面せしは、実に二十歳の時にして、其の頃、阿栄は、四十歳前後なりし」（p313）。

梅彦の生没年は文政5年（1822）～明治29年（1896）であるので、天保12年（1841）が梅彦の20歳の歳となる。このとき阿栄が40歳（前後）と仮定すると、その生年は寛政12年（1800）前後となる。お栄は辰女（「朝顔美人図」等）と号しているので「辰」の年である寛政8年（1796）生まれと推測する説もある。

阿栄の生年時期については謎が多いが、今後の検証を待ちたい。

★この頃、本所林町三丁目家主甚兵衛店に住むか（嘉永4年、浅岡興禎編『古画備考』による）。両国駅から地下鉄都営新宿線森下駅の間辺か。

【カピタンからの注文に北斎の心意気】

★北斎と阿蘭陀のカピタン注1のエピソードが隣家の鍼医某による話として『古画備考』注2(三十一「浮世絵師伝」の「北斎」の項〈天保十年六月十八日針医某話〉朝岡興禎編)に記された内容を、飯島虚心も『葛飾北斎伝』で記している。

「此の頃（割注：年月詳ならず。北斎本所林町三丁目家主甚兵衛店に住せし頃なり）江戸に乗りし和蘭の加比丹某、我国町人の小児出産の体（様子）を始として、年々成長の体、筆算稽古（勉強や稽古）の体、又年たけて遊里などへ通ふ体、又年老ひて死去し、葬礼を行ふの体を図し、男子女子と一卷づゝ、二巻に画かんことを北斎に依頼し、金百五十円注3の謝礼にて、約定せり。加比丹附属（ついて来た）の医師注4某も、亦同図二巻を画かんを乞ふ。北斎諾して、数日間にこれを画き、さて四巻の図を携へて、旅館（カピタンの定宿の長崎屋）に到りしに、加比丹は、約のごとく百五十金を出だし、二巻を受納せり。夫より医師の許に到りしに、医師の曰く、予は加比丹と異なり薄給の身なれば、同等の謝礼はなし難し、半減即七十五金にて、二巻を与へ給ふべし。北斎少しく憤りて曰く、何故に最初に、其の事を明し給はざるや。画は同じくても、彩色其の他を略すれば、七十五金にても画かるるなり。既に画きたる上は、今更なすべきなし。又これを七十五金にて進ずるときは、加比丹に対し余り高価を貪りたることに当たり、心苦しき限りなり。医師の曰く、されば二巻の中、男子の図一卷を七十五金にて与へ給へと。此の時尋常の画工ならば、諾して一卷を与ふべきに、赤貧洗ふがごとき北斎、其の約に背きたるを憤り、二巻共に懐にして、直に家に持ちかへれり。家婦其の故を聞き、諫めて曰く、日夜丹精を凝らし画き給へる画巻なれど、此の図我邦にては珍しからぬものなれば、売らんとするも、買う者なかるべし。時間と費用を算すれば、損失なれども七十五金にて、医師に与へ給ふが、得策なるべし。今七十五金を得ざれば、貧苦の上に、貧苦をかさぬるの道理ならずや。北斎黙して辞なく、暫ありて曰く、予も亦其の貧苦の日に迫るを知らざるにあらざるなり。されど外国人の約に背きしを、其の通りになしおく時は、自分の損失は、免るゝとも、我邦人は、人によりて掛直をいふとの嘲は、蓋し免るゝ能はざるなり。故に予は深く其の所を考へて、持ち帰りしなりと。後に訳官某此の事を聞き、加比丹に語りければ、加比丹も深く感じて、直に百五十金を出だし、かの二巻をも請ひ得て、本国に持ち帰りしとぞ。（割注：此の一条は、『古画備考』にも出づ）其の後和蘭より画を請ふ者多く、毎年数百葉を画きて、長崎に送り、海外に輸出せしが、後に幕府国内の秘事を漏すをおそれ、これを禁止せり注5」（p 62～65。ルビ・句読点・（ ）内の書き込みは筆者による）。

※「ハーグの博物館（王立骨董陳列室）を調査した（ルイス・）ゴンス氏によれば、これらの絵巻はハーグの博物館には収蔵されていないということである〈ルイス・ゴンスは、たしかに日本コレクションを見るために、当時ハーグとライデンを訪れている（略）〉」（『2017 北斎展図録』所収。マティ・フォラー「葛飾北斎とシーボルトの出会い」 p 16）。

【北斎の大和魂】

※『古画備考』では「サスガ俗画ニ致セ、都下ニ雷鳴致程ノ画師ハ、気性格別ノ事也。ト、某深感候。其後、カピタン聞之、以ノ外ノコト也トテ、自分ヨリ金子ヲ出シ、定価ニテ調、国ニ持参候由、末世ト申セドモ、我邦ノ人気、大和魂侍り候事、予モ又深くコレヲ感称シテ記置了」と結んでいる(ルビは筆者による)。

注1) このときのオランダ商館長はゲイスベルト・ヘンミー (Gijsbert Hemmij 寛政4年:1792年11月13日から赴任)で、江戸から長崎に帰る途中の掛川で「渴病」(筆者注:のどの乾き。流動食を欲し、尿が通じない病気)にかかって急死した。

※マティ・フォラー「葛飾北斎とシーボルトの出会い」『2007年北斎展図録』東京新聞社所収では「1822年、ブロムホフから北斎に絵画の発注があったことは確かである。そして、1826年にその支払いをめぐる問題が起こったとき、北斎とヘンミーではなくデ・ステューレル商館長が医師シーボルトとともに居合わせたことも確かといえよう」としている(p18)。

※『葛飾北斎伝』割注(p66)には「明治二十三年八月三十日の『朝野新聞』に、寛政十年四月廿四日、阿蘭陀の船将以思別尔辺米(イースベルヘンメル=ゲイスベルト・ヘンミー)といふ者、幕府へ伺候の途、渴病に罹り、遠州掛川の客旅に死亡し、翌廿五日同所天然寺に葬ると、寺記に見えたり云々。此の人或はかの画を北斎に依頼せし加比丹か猶考ふべし」とある(ルビ・書込みは筆者による)。天然寺過去帳の4月24日項に「通達法善居士 阿蘭陀かびたん七旅人」とあるという(永田生慈「北斎とカピタン 遠州掛川天然寺を訪ねて」:『北斎研究』5号)。

注2) 『古画備考』は、朝岡興禎による画人伝(弘化2年~嘉永3年<1845~:1850>頃の執筆)。

注3) 織田一磨『北斎』では、150金を150両としているので一両10万円として約150万円となる(p61)。

安田剛蔵『画狂北斎』では、『葛飾北斎伝』の150金ではなく「揮毫料三百金と伝えられている」とし、「無造作に金三百両と解することは当を得ていない」ので、「単位を金壹歩とみて三百金が金七十五両となるから、まずこの辺を最高と解するのが妥当ではあるまいか」としている(p57~58)。

75両であれば約750万円となり、これまた途方もない高額となる。江戸貨幣の換算は一樣ではなく、この換算が妥当かどうかは碩学の士の判断を待ちたい。本稿ではこの頃1両約10万~12万円で換算している。ただし、江戸中期と後期では一両の換算は変化している。

注4) 「医官某」はレツケか。

注5) 其の後和蘭より画を請ふ者多く、毎年数百葉を画きて、長崎に送り、海外に輸出せしが、後に幕府国内の秘事を漏すをおそれ、これを禁止せり:『新增補浮世絵類考』(竜田舎秋錦編。慶応4年<1868>刊)に以下の記事があるが、この頃のものか。

「香具師の看板絵より芝居操の看板、油絵蘭画に至迄、往々新規の工夫を画き、刻本の細密定規引の奇巧、類すべきものなし、紅毛よりも需に応じて、二三年間数百枚を（オランダへ）送りしかは蘭人も大いに珍重す、後是を禁せられたり」（檜崎宗重『在外秘宝 葛飾北斎』 p10。ルビは筆者による）

※看板絵や西洋画風の油絵や、定規を引いたりした幾何学的な絵などに優れているので、オランダ人の求めに応じて2、3年のうちに数百枚を渡したが、絵を国外に持ち出すおそれから、後に売り渡しが禁じられたというのである。このことで北斎も役人からの嫌疑を恐れたともいわれる。

★寛政 8・9 年の宗理の摺物はかなり人気があった（安田剛蔵『画狂北斎』 p59）のでカピタンも北斎に注目したと思われる。

【歌麿、北斎らの所業を非難する】

オランダ人に絵を大量に売る北斎らに対して、浮世絵界の大御所喜多川歌麿は「錦織歌麿形新模様」（寛政 8 年～10 年〈1796～98〉）の「文読み」図の左に非難の文字を記し、自分の美人画により、木っ端絵師に絵師の有りようを示そうとしている。

喜多川歌麿「錦織歌麿形新模様」（文読み：大英博物館蔵）

「夫レ吾妻錦絵ハ江都の名産なり、然ルを近世この葉絵師専ら蟻のごとくに出生し只紅藍の光沢をたのしみ、怪敷形を写して、異国迄も其恥を伝る事の嘆かはしく、美人画の写意を書て世のこの葉どもに与えることしかり」（ルビ・句読点は筆者による）



【宗理号を譲り北斎辰政と号し俵屋から独立】

★8 月頃、「宗理」号を門人宗二（淋齋）に譲り北斎辰政を名乗る。俵屋宗理を家元に返す。但し、文化 3・4 年頃までは「宗理風」「宗理型」の絵様式時代とされる。副号「北斎」は文政 2 年まで使用。

「辰政」は、妙見（北斗星=北辰星）信仰より名づける。妙見堂は本所柳島（現東京都墨田区業平5-7-7）にあり（先述、天明 8 年〈1788〉項を参照）。

※「一説に、北斎翁名を門人に譲りて、若干の報酬を得るを常とす。故に貧困極まれば即名を譲る。門人窃かにこれを厭ひしとぞ」（『葛飾北斎伝』 p55。ルビは筆者による）。

【北斎流確立 明画の筆法を以て、浮世絵をなす】

★寛政 10 年（1798）『新增補浮世絵類考』（竜田舎秋錦編）記事では、「北斎流」と号し、明画の筆法を以て、浮世絵をなす、古今唐画の筆意を以て浮世絵を工夫せしは、此翁を以て開祖とす」「其頃は東都に明画の風大に行われ、画心有ものは唐画を学ぶ事専ら流行す、俗に従ひて画風を立しは世に出るの時なり」とある（「国立国会図書館デジタルコレクション」より。句読点・ルビは筆者）。

※「北齋」を使い始める。北極星の化身である妙見菩薩（本所柳島の妙見山法性寺）を信仰しているところからつけた号。

※この期の「北齋宗理」の「北齋」は副号とみなす説がある（『在外秘宝 葛飾北齋』所収「北齋改名考」 p21 学習研究社）。

●狂歌絵本『さんたらかすみ』（『左武多良加寸見』とも。1月。狂歌歳旦集。半紙本折本一帖。着色。千穂菴三陀羅法師撰。北尾紅翠齋（北尾重政）・巖岳齋（長谷川）雪旦等とともに北齋宗理が「峠の茶屋」一図を描く。千穂連版。すみだ北齋美術館・ヒーター・モース・コレクション/大英博物館/ベレス・コレクション/日本浮世絵博物館蔵）

※北齋の絵は好評で、翌年一枚摺にされる。千穂庵の序文に「午初春」とある。唐衣橘洲、浅草庵市人、十返舎一九、式亭三馬など狂歌師や戯作者など280首の狂歌を集めている。

☆〈峠の茶屋〉（各21・5×15・7の二枚続き）



※初春の峠の茶屋の風景。図の左には富士山が見える。茶屋で轆轤鉋を回して挽物作業する男女。側で手伝う姉さん被りの女。立って茶を出す女と腰を折って煙草盆から煙管に火をつけようとする旅人。

峠の茶屋（日本浮世絵博物館）

●屏風絵「玉卮弾琴図」（この頃か。寛政8年：1796 説あり。紙本着色双幅。北齋宗理画。印師造

化。各125・0×54・8 雲龍寺〈長野県上水内郡信濃町柏原1320〉蔵。2017年『北齋富士を超えて展図録』では「個人蔵、ニューヨーク」としている）

※太真王の夫人玉卮（西王母の三女）が琴を弾ずると百羽の鳥が飛来し、また白龍に乗って四海を廻ったという話に取材。当初は二曲屏風で、その裏書の林忠正注の書に「寛政十年戊午春筆干時北齋三十八歳也」とあるという（『北齋美術館5物語絵』P49）。

玉卮弾琴図（「2005北齋展図録」より転載）

右図は唐女が立っている図。左図は龍が天空で琴に巻きつく図。

注）林忠正：1853～1906。越中・高岡出身。明治時代の美術商。明治11年（1878）にパリ万国博覧

会に参加する起立工商会社の通訳として渡仏。そのまま滞在し、美術商となり多くの浮世絵などを売りさばく。ジャポニズムの高まりもあり、印象派の画家たちとも親交を結んだ。

●狂歌絵本『男踏歌』（1月。大本彩色。折本一帖。浅草庵市人撰。北齋は一図のみ描く。他に、北尾紅翠齋（北尾重政）、堤等琳、喜多川歌麿、鳥文齋（細田）栄之、



白峯易祇（「えきし」とも）が描く。鳶屋重三郎版。メトロポリタン美術館/すみだ北斎美術館/大英博物館/東京国立博物館/千葉市美術館蔵

注) 浅草庵市人：「せんそうあんいちんど」と読む解説書あり。1755～1820。浅草田原町で質屋を営む傍ら、浅草側や壺連と呼ばれる狂歌グループを率いて、狂歌摺物を多く北斎に依頼した。

☆〈田園行楽〉（「田舎道の往来」とも。北斎宗理画。25.5×18.8：見開き 25.5×37.6）

※藁ぶき屋根の茶店を囲むように小川が流れ、橋が掛かっている。橋の下では男が川に入って笊で魚を捕ろうとしている。橋の上では男が鍬を持って、手をかざしてどこかを見ている。小奴が欄干に手を掛けて向こうむきに川の流れを見ている。その脇で荷物を背負った女が訳ありげに小奴の横顔を見ている。橋の手前では、簪を挿した後ろ帯の女が欄干に寄りかかって小奴と荷物の紐を引き合っている。その側で灰色の手拭を被った年増と、赤子を背負った女が小奴を見ている。



田園行楽（メトロポリタン美術館）

●狂歌絵本『深山鶯』（1月。折本一帖。流霞窓広住撰。朱楽連版。大英博物館蔵）

☆「梅樹図」（法橋光琳之図北斎宗理写。花押 19.2×13.2）の二図を描く。

法橋は第三位の僧位。正四位相当の官位。僧侶だけでなく絵師などにも与えられた。光琳は（1658～1716）は、尾形光琳のこと。

淡墨一色で図の左下から右上に梅の枝を描き、「法橋光琳之図」を写したものとする。また、この宗理は二世北斎または三世ともいわれる。見開き13か所中2図があり、北尾紅翠斎（北尾重政）がもう1図を描いている。流霞窓の序文に「寛政十年むま睦月」とある。



梅樹図（大英博物館）

●狂歌絵本『春興帖』（1月。寛政8年〈1796〉に続く第2冊目。大本一冊着色。森羅亭万象編。北尾紅翠斎〈北尾重政〉、北斎宗理画。北斎は「母と子供の機織図」の一図を描く。他、芝蘭斎、北尾紅翠斎も描く。森羅亭万象版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

☆〈母と子供の機織図〉

※図は、小さな祠がある戸外で、手拭を被った母親が座って小さな機織機を操り、子どもが縦糸を整えている様子。湖面の向こうに薄く雪を被った富士山が薄く描かれる。四方歌壇の序文に「歌番匠注寛政十年午の春」とある。

注) 番匠：大工を指す言葉だが、歌の作り手くらいの意味か。

※寛政8年(1796)版や、喜多川歌麿、歌川豊広とともに描いた寛政年間末の版の同題のものや、更に宗理と山東京伝が挿絵を描いた同題のものもあるという。(リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p327) 母と子の機織図(島根県立美術館)



●狂歌絵本『狂歌初若菜』(1月。半紙折本一帖。宗理改北斎画。印三径。一覆庵笛成らによる出版。他の絵師も描く。島根県立美術館/すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション蔵)

※北斎は「母と子の若菜摘の図」一図のみ描く。

☆〈母と子の若菜摘の図〉

※遠く初日の出を指差す子ども。手をかざして日の出を見ながら手拭を被って初若菜を摘む母親。笛成の序文に「午のむつミ月」とある。

母と子の若菜摘の図(すみだ北斎美術館)



【黄表紙『化物和本草』で号・可候を用いる】

※「可候」の号は「候ふ可く」(そうありたい)という北斎の願望から付けたものという(リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p24)。

※「可候」は、「時太郎可候」の形で、文化3年(1806)頃まで用いられたと思われる。

※飯島虚心『葛飾北斎伝』には、画号について「同(寛政)十三年、時太郎可候画作とあり。『青色年表』に、〈文軒翁云く、竈将軍注は北斎の画作なり。可候は、仮に設けたる名なり。これより二三年続きて出る〉」(『青本年表』より。『葛飾北斎伝』p302所収)とあるが、12年の誤り。

注)竈将軍:寛政12年(1800)黄表紙『竈将軍勘略之巻』(時太郎可候画)を指す。

「可候」は、寛政13年(1801)の『児童文殊稚教訓』の本文中に「風雅でも洒落でもなく、せうことなしの山下へんに、借家住まひの世間知らず。自ら、そろべく(筆者注:可候)となのり、何一つ、とりえのなき坊主ありてふと、草紙の戯作を綴りしが(略)」とあるので、可候は「そろべく」と読むか。但し、一般的には「かこう」と読むことが多い。

●黄表紙『化物和本草』(1月。三冊。山東京伝戯作。画工可候(宗理時代唯一の署名)。山東京伝と組んだ四作目。山口屋注(江戸馬喰町)版。島根県立美術館:永田コレクション/すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション/国立国会図書館蔵)

注)「西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベース」によれば、馬喰町山口屋版となっている。馬喰町二丁目の山口屋忠右衛門を指す。

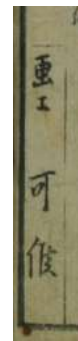
※この作で始めて可候を用い、最終丁に「画工 可候」と記す。山東京伝の序文に「寛政十歳 戊午孟春」とある。平家蟹をもじった平気蟹や、煙管と煙草入れを持ち、口から煙



『化物和本草』平気蟹



最終丁：早稲田大学図書館



を吐きながら空を飛ぶ人頭の怪鳥に向かって、漁師が鉄砲を向けているなど、妖怪の図などが描かれる。

●俳句絵本『楽流活花図』（墨摺。「北斎宗理画。印完印知」の落款のある生け花の画が『北斎大全 第二巻 宗理期』（Kindle 版）で紹介されている。画には「正風古流花道の自在軒宗匠より別号を譲り受けて大サガミ三代目捨庵 一楽図」の書き込みがある。

●錦絵「お染久松 春花」（この頃か。中判。可候画。版元不明。23.4×17.4 ウースター美術館蔵）

※風呂敷包みを背負い、前髪の若衆姿の久松と、扇を顔に当てながら久松を見るお染が、桜咲く木の側に行く図。

お染久松 春花（『名品揃物浮世絵 9』北斎Ⅱより：web パブリック・ドメイン美術館転載）



【忠臣蔵シリーズの開始】

●錦絵『新版浮絵忠臣蔵』（この頃か〈北斎館『北斎・東西の架け橋 1998』による〉。享和元年（1801）説。享和3年（1803）～文化2年（1805）説あり。横間判錦絵揃物。11枚1組〈初段鶴ヶ岡～第十一段目まで〉。可候画。伊勢屋利兵衛（江戸・下谷池の端仲町）版。太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館・ピーターモースコレクション/江戸東京博物館/大英博物館/神戸市立美術館/江戸東京博物館蔵）

※遠近法による画法（透視画法）で描く。寸法は所蔵館により異同あり。

☆〈初段 鶴（鶴）ヶ岡〉（21.0×31.8）

※足利直義の饗応役の大名若狭之助が高師直（吉良上野介）から殿中で凌辱を受ける場面。

☆〈第貳段目〉（21.0×31.4）

※若狭之助が師直に対する殺意を家老の加古川本蔵に明かす。主人の意を汲み本蔵は松の枝を切り落として賛同の意を示す「松切りの場面」。

☆〈第参段目〉（21.0×31.4）

※本蔵は師直に進物を送り、主人と師直の仲を取り持つ。師直は代わりに同じ饗応役の伯耆国藩主・塩治判官高定（浅野内匠頭）を凌辱する。ついに判官が師直に刃傷に及ん

だが、加古川本蔵に止められる。このとき判官の供侍の星野勘平は、腰元お軽と密会していて、主人の大事な時にいなかったことを恥じて切腹しようとするも、結局は女の里に隠れる。図は、お軽と勘平が城の石垣の側に立って、これから逃げようとしている場面。

☆〈第四段目〉(21.1×31.4)

※判官に切腹が申しつけられ、腹を切る直前まで「由良之助は」と繰り返し、家老の大星由良之助(大石内蔵助)に会うことを願ったが、由良之助の息子力弥は「未だ参上つかまつりませぬ」を繰り返す。急ぎ駆けつけた由良之助は、主人の仇をとることを決意しながらも屋敷を明け渡す。図は、座敷で判官が切腹する場面。

☆〈第五段目〉(20.8×30.9)

※勘兵は、お軽の里で猟師になっていた。お軽の父与市兵衛は、娘の身売りで得た金を持ち帰る途中、山崎街道で悪党斧定九郎に殺され金を奪われる。その定九郎は、勘兵が猪を撃った弾に当たり死亡し、金は勘平の手元に戻る。

図は、与市兵衛が定九郎に殺される場面と、千崎弥五郎と早野勘平が会おう二場面を同時に描く方法は、寛政中期の北尾重政「浮絵仮名手本忠臣蔵」からの影響があるとされる(『ピーターモース・コレクション北斎図録』作品解説より)。

新板浮絵忠臣蔵五段目(島根県立美術館)



☆〈第六段目〉(20.8×30.9)

※身売りにしたお軽が家を出ようとしたとき勘平が戻り、舅の与市平衛を自分が殺したと思いきり切腹する。絶命の直前に与市平衛の傷が鉄砲の弾によるものでないことが分り、敵討の仲間の連判に加わる。図は、お軽が身売りで家を出ようとした時、勘平が戻ってきた場面。

☆〈第七段目〉(21.0×31.5)

※大星由良之助は、敵を欺くため、京都の茶屋で遊興の日々を送る。ある日、長男力弥からの師直方を偵察した手紙を読んでいると、二階にいたお軽が鏡で写し読みをし、縁の下で師直側の斧九太夫がそれを読んでしまう。由良之助はお軽に九太夫を殺させ、折りしも訪ねてきたお軽の兄で塩治家に仕える足軽の寺岡平右衛門を仲間に入れる。図は、縁の下に師直側の斧九太夫がおり、そこに寺岡平右衛門が訪ねて来た場面。

☆〈第八段目〉(21.2×31.7)

※加古川本蔵の妻戸無瀬が、娘小浪を大星力弥に嫁入りさせるために山科へ向かう二人の道行の場。

八段目 (島根県立美術館)



☆〈第九段目〉(21.0×31.2)

※山科の大星邸について戸無瀬親子は、来意を由良之助の妻お石に告げるが、本蔵が師直に進物を送り主人との仲を取り持ったことを理由に二人を受け付けない。そこに本蔵が現れ、わざと由良之助を罵り、怒った力弥に槍で刺される。このとき本蔵は本心を告げ、師直邸の凶面を渡して娘を託す。凶は、戸無瀬親子と由良之助の妻お石が会う場面。

☆〈第十段目〉(21.0×31.6)

※堺の回船問屋天川屋義平は、由良之助から依頼された武具の調達と輸送引き受け、その心意気を示す。凶は、天川屋の座敷で義平が見栄を切っている名場面を、子どもが真似をしている。



☆〈第十一段目〉(20.5×30.9)

※師直邸に討入った義士たちは、中庭で戦い、ついに炭小屋に隠れていた師直を討ちとる。凶は、義士たちが屋敷に討ち入った場面。

十一段目 (島根県立美術館)

※「忠臣蔵」は天明年間に一枚絵「浮絵忠臣蔵夜討之凶」や三枚続き絵「忠臣蔵討入」や「見立忠臣蔵 七段目」があるが、他には、享和元年(1801)洒落本『仇手本』(忠臣蔵をもとにした話で、挿絵を描く)、享和2年(1802)『画本忠臣蔵』(狂歌本。享和2年:1802)、享和元年~3年『仮名手本忠臣蔵』、文化3年(1806)『仮名手本忠臣蔵』などがある。

※他に、享和元年~3年(1801~03)作と思われる横小判の『仮名手本忠臣蔵』(全揃12凶)がギメ美術館に所蔵されているという(根岸美佐『北斎研究』56号)。

【落款と印の使い分け】

●生花教本『抛入花の二見』(冊子中に記載されている『楽門瓶花譜』とも。墨摺半紙本一冊。十楽坊鬼丸編。十楽坊社中版。他に完斎知道などが描く。島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※天明・寛政の序文があり、この頃から企画があったと思われる(『年譜』による)。

67 凶中、北斎は14 凶描く。それぞれに落款を使い分けている。「完知画 印完・印知」「北斎完知画 印完・印知」「北斎宗理 印完・印知」「完宗理画 印完・印知」「北斎宗理画 印完・印知」「完知画 印北・印斎」「北斎画 印完・印知」「印百林」など。

落款については、伊藤めぐみ「宗理研究の再検討（一）（二）」に詳しい（『北斎研究』23号・24号所収・葛飾北斎美術館編 東洋書院）

●肉筆画「猿図」（この頃か。絹本着色一幅。かつしかの北斎宗理ならひにつゝす。印かつしか印北斎宗理。個人蔵）

※図の右には猿という言葉にことよせた北斎の文が記される。猿が身をかがめて前を見ている図。

●肉筆画「三美人図」（絹本着色一幅。宗理改北斎画。印三径。164.5×46.0 エドアルド・キオッツオーネ記念ジェノヴァ東洋美術館蔵）



※立っている娘・袖を顔に当てる婦人・立膝でのけぞる花魁の三人を描く。

天龍王瑾注（天龍道人）の賛「紅粉写成画入真却疑巫峡浚 降神長留雲雨可憐色暮々朝々思殺人 嬌態如花々不及今都春色欲 競妍秀紅李白薔薇紫那箇枝 頭不可憐 白暫容光花鬪妍含情殊態媚 床前可憐雙手千人枕春色不 知落執辺 八十叟天龍王瑾題書 印 印」

三美人図（ジェノヴァ東洋美術館）

注）天龍王瑾：？～1810。日本画家。

●肉筆屏風画「風俗三美人図」（絹本着色掛幅。三幅対。各北斎画。印辰政。各93.0×24.9 太田記念美術館蔵）

※右図は左を向く高位の花魁図に、朱楽菅江の狂歌、中図は正面を向く芝居見物の御殿女中の図に、淮南堂（朱楽）菅江の漢詩、左図は右を向いて、浴衣を持って風呂へ行く（あるいは風呂帰りの）町家の女図に、朱楽菅江の狂歌の書き入れがある。

図の左にある朱楽菅江の狂歌は「ふりむけば浴衣のままの夕化粧 雪をあざむくはだ（肌）涼しき」と左から右に書かれている。 風俗三美人図（太田記念美術館）

●肉筆画「張良」（絹本着色一幅。寛政十戌午歳中秋丹齋辰路応需 北斎辰政画。82.0×31.1）

※霞む月の下、赤い衣服を着て峨々たる山中で笙を吹く張良。麓には軍勢の赤い幟旗がはためいている。



●肉筆画「柳に牛図」（この頃か。紙本淡彩一幅。北斎画。印辰政。117.6×28.1。島根県立美術館：永田コレクション蔵）



※もと三幅対で左右二幅にはそれぞれ大原女が描かれていた。図は、黒牛が鞍を乗せてこちらを向き、赤牛が向こうの柳の方を向いている。柳も含め水墨画風の描き方となっている。太田南畝の賛「非桃 非牡丹」がある。
柳に牛図（島根県立美術館）

●肉筆画「大原女図」（この頃か。紙本淡彩一幅。北斎画。印辰政。118.1×28.4）

※元「柳に牛図」と三幅対。大原女は黒木売りとも呼ばれ、京都の八瀬（比叡山の山麓）辺から薪の黒木や木工品などを頭に乗せて売り歩いた。図は、大原女が黒木の束の上に腰を下ろし、履き物の紐を直している。朱楽菅江の賛がある。文政2年（1819）の『画本早引』後編にも「京」と題して、二人の大原女が黒木に腰掛けて休んでいる様子を描いている。

●肉筆画「大原女図」（この頃か。紙本着色一幅。北斎画。印辰政。118.1×27.5 ウェストン・コレクション蔵）

※元「柳に牛図」と三幅対。手拭を被った大原女が、黒木の束を脇に置いて、立って煙管を吹かしながら休んでいる。左手には煙草入れを持っている。唐衣橋洲の賛。

大原女図（部分：シコ・ウェストン・コレクション）



●錦絵「極印千右衛門大坂侠客五人の内」（着色。宗理改北斎画）

※袖の長い着流しを着て、頭巾を被り刀を落し差しにして、尺八を帯の



背に差し、下駄を履いている千右衛門。その隣には芸者風な女が「染松」と読める赤い提灯を持っている女が寄り添って歩いている。

極印千右衛門は、雁金五人男と呼ばれた大坂の無頼者五人の一人。元禄15年（1702）8月27日に23歳で刑死。

極印千右衛門大坂侠客五人の内（nail.aflo.comより）

●錦絵「月見の座敷」（宗理改北斎。横長判。着色。河出書房新社『図説浮世絵に見る江戸の一日』による）

※花魁や禿や新造たちが七人、大川を臨む座敷に集まっている。一人は窓辺から川を見ているが、月は描かれない。部屋の左隅に立てられた屏風に狂歌が書かれている。

【北斎辰政改名通知の亀】

●摺物「亀図」（「三匹の亀」とも。中判着色。北斎辰政画。印師造化 17.9×15.3 すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※宗理号を俵屋に返上し北斎辰政になったことを知らせるために、6月までに自費で刊行し知人に配布した摺物。

三匹の亀が折り重なるようにしている。二匹は首を伸ばし、一匹は背中にもう一匹の亀を乗せて首を引っ込めている。

稲葉華溪の図中の賛に「宗理ぬしの改名に北辰の光りいよいよましなん事を 蒼む花こや衆生のもてはやし友人華溪題」とある。

亀図（島根県立美術館）



※「玉扨弹琴図」（寛政10年頃）を屏風装にしたときの林忠正（1853～1909）の裏書には、「寛政十年戊午春筆

于時北斎三十八歳（筆者注：満年齢か。数え年では三十九歳）也。是ヨリ先ハ単ニ宗理トノミ書スモノ多シ。此年門人宗ニ俵屋宗理ノ名ヲ譲リ、庚申（1800）、先ノ宗理北斎又ハ、己未（1799）、宗理改北斎ト記ス。享和元辛酉（1801）之春ヨリ画狂人北斎ト落款ス。明治二十三年四月十一日、林忠正識ス」とある（句読点・ルビは筆者による）。

※この年、古宗理（注：先代宗理）の17回忌（事項の摺物〈茶花図〉参照）が営まれたのを機に俵屋宗理名を離脱して北斎辰政と改名する決意を固めていたとする説がある（『国文学研究資料館学術情報リポジトリ紀要』文学研究編37号所収「稲葉華溪筆譜」鈴木淳）。

●摺物「茶花図」（この頃か。二世宗理。古宗理十七回忌追善摺物）

※図の右に「華溪老漁写」とあり、図左には「古宗理ことし十まり七めくりの忌にあたり侍るを懐旧して 夢と過し年やねふれる花につけ 二世宗理」とある。華溪（稲葉）は北斎と親しい書家。古宗理は、初代宗理で明和・安永年間に活躍し、安永末～天明初年（天明2年前後とも）に没したといわれる。この図は、二世宗理の絵と文を華溪が写したものか、絵は華溪が描き、二世宗理の文を華溪が写したものか不明。さらに、二世宗理が北斎宗理であるのか、寛政12年に宗理号を譲った門人宗二が名乗った菱川宗理なのか不明。また、二世宗理が誰なのかも諸論あるが、現在では二世宗理は北斎とされている（以上、伊藤めぐみ「宗理研究の再検討（一）」『北斎研究 23号』葛飾北斎美術館編 p7～27）。

●摺物「舟に橋」（紙本淡彩。宗理画。13.3×17.6 北斎館蔵）

※川辺の村の数軒の屋根、太鼓橋、一艘の舟などが山水画のように描かれる。狂歌の後に「戊午とし」とある（寛政10年）。「ゆきどけにあらひ上げてハひとしほに 水ぎハの たつきしの若草 所ニ雪成」、「うたをよむ蛙注のつらへかけてみん 野沢の水をくみ題にして 流霞窓（山家広住）」の狂歌が記される。

注）うたをよむ蛙：『古今和歌集』序で紀貫之が「花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」と記した一節を踏まえる。蛙ではないが、その面に野沢の水を汲んでかけてみよう（狂歌のグループ「連」を「つら」と読んで、「野沢の水」を組題にして出そうか）と詠んでいる。

●摺物「霧景色図」（「霧にかすむ村風景」「霞む吉原」とも。紙本墨淡彩。北斎宗理画。13.0×18.0 北斎館蔵）

※湾曲した街道沿いの家並みが続く図。手前の日本堤に駕籠かきが空の駕籠を独りでかっいで歩いている。吉原の家並みが遠景で描かれる。堀川亭石丸「春風のくるは通ひのおもしろや 梅か禿か袖にしたふて」、源氏巻文「風の手も有てふ春のよし原に 梅か隙々通ふ夕暮」、浅草庵市人「いかのぼり揚屋の子らが手くだにも 巻糸筋のはりのつよさよ」の狂歌が記される。あるいは狂歌本の一図が独立した絵か。

●絵暦「唐美人の水あび」（1月。宗理画）

※画中の金盥に干支と大小月あり。画面右の枠中に「御あらひこ（御洗粉）」とある。『年譜』による）。

●絵暦「炬燵の二美人」（1月。宗理画。11.2×13.6 島根県立美術館蔵）

※炬燵に入ってる二人の婦人が、格子障子を開けて雪景色を見ている図。「午春興」とあり。

●絵暦「大道芸人」（1月。宗理画）画中の団扇に「寛政十戌午」とあり（『年譜』による）。

●絵暦「あやつり人形で遊ぶ二人の童子」（1月。宗理画）子どもの着物に大小月あり（『年譜』による）。

●絵暦「玩具を選ぶ母子」（着色。摺物。宗理画。9.8×13.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※大の月を表す馬（本年を示す）、狐（2月・初午）桜（3月）、刀（5月・端午の節句）、山王（現：日枝神社）の祭礼の山車を表した万灯（8月）、暫（11月の顔見世で演じられる）、雪玉（2月）などの月を表す玩具を二人の女性と子どもが選ぶ図。

●摺物「馬乗り初め」（この頃か。宗理画。着色。24.6×20.5 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※武家の若君が木の初駒に乗り、左手をかざして背後の屏風の富士の絵を眺める様子を描く。木馬の後ろには刀を捧げ持つ女たち。脇には男が立ち、木馬の前には母親らしき女が立っている。「春もけふ江戸入すゝめ若駒に 霞の絵府（符）をあてゝ見ゆるハ 増本楼呑義」、「二ツなきものとおもひし梅か香ハ こちらの袖にもこちらの袖にも 四方歌壇」などの狂歌が記される。在原業平の東下りの見立てという推測もある（『ピーター・モース・コレクション北斎図録』解説 p115）。

●摺物「石なご遊び図」（小判着色。琳斎宗二画。北斎宗理校合。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※門人宗二の作画で北斎が修正した体裁をとるが、実際には北斎が宗二のために描いたとされる（『新北斎展図録』 p 315）。

石なご遊びは、石をばらまき、その内の一つを放り上げ、落ちて来る間にばら撒かれた石を多く拾うという遊び。図は、二人の女が向き合って遊んでいる様子を描く。図に「戌午」とある。堪忍吾綾の狂歌が添えられる。

●絵暦「露店」（着色摺物。宗理画。10.5×18.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※広げた莫産の上に小さな玩具人形等を並べて商売をする男と、それを見る男二人と子ども一人の図。商売の男の持つ団扇に「寛政十戌午」の書き込みがある。

※「此人に一首よませてこまら小 ナニ獅子ヲ犬ニしてか ヤツハリ三助てヨマツセイ三助日一三か三助を見て三人か 一首をよめと三九の歌 露庵月曆」の書き込みで月の大小を示している（ルビは筆者）。

●絵暦「活け花」（1月。九つ切判。宗理画。13.7×18.5。フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵）

※正面左に「午のはつ春」、床の間の掛け軸には馬の文字絵が描かれ、落款に「寛政十年」とある。娘が紅梅と福寿草の盆栽に水をやる図。浅草庵市人の狂歌が添えられる。

【見立とやつし】

※「見立」と「やつし」については、以下の定義がなされているので、これに従う（新藤茂「『見立』と『やつし』の定義」。『図説「見立」と「やつし」日本文化の表現法』p 112 所収。国文学研究資料館編。八木書店。2008年3月）。

「見立」：異なるものを連想で結びつけた絵。

「やつし」：古典的な題材を当世風に姿を変えた絵。

同本の「はじめに」では次のようにも述べている。〈「見立」「やつし」を一言で定義することは難しいが、あえて言えば、「見立」はあるものを別のものになぞらえること、「やつし」は昔の権威あるものを現代風に卑近にして表すことと言えよう。わかりやすい例をあげれば、落語家が扇子をくわえてキセルにするのが「見立」、平安朝の小野小町が江戸の娘になって登場するのが「やつし」である（略）〉

●摺物「見立六歌仙」（1月。絹本着色。宗理画。印完知。73.3×50.7。板橋区立美術館蔵）

※菱川宗理画とする図録等がある。

※六種の階層の女性を六歌仙に見立てる。右図から時計回り、僧正遍昭は御殿女中に、在原業平には矢場の女に、喜撰法師は下女に、大伴黒主は商家の妻に、文屋康秀は禿に、小野小町は花魁にして描く。

見立六歌仙（板橋区立美術館）



●絵暦「見立近江のおかね」（十八切判注。無款。14.6×9.3 東京国立博物館蔵）



注) 十八切判：大判を縦に三等分し、さらにそれを横にして三分分した大きさ。大奉書を十八に切った大きさ。

※荒馬の手綱を下駄で踏み押さえた近江の女おかねの「見立図」。柳の下で、湯桶に手ぬぐいを入れて持つ女が、高下駄で馬の絵のある凧の紐を踏んでいる図。

見立近江のおかね（東京国立博物館）

●摺物「朝比奈三郎の鏡割り」（1月。十二切判。宗理画。10.4×18.6 フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵。『美術品所蔵レファレンス事典』より）

※朝比奈三郎は、木曾義仲の子息・朝日奈三郎義秀。母は巴御前だという伝説がある。大力であった。浅草庵の狂歌の後に「午はつ春」とある。

図は、朝比奈三郎が、鶴の模様のある着物を上半身脱ぎ、毛深い両腕をひびの入った大きな鏡餅に手をかけ、口に扇子を銜えて割ろうとしている。背には長刀があり、背後の天上からは藁やウラジロが下げられている。朝日奈三郎は「朝日奈三郎平義秀」（寛政3年～5年）でも描いている。

●摺物「母と児」（1月。宗理画）

※図中に百林の印と、「午のはつ春」とあるという（『年譜』による）。

●摺物「二見ヶ浦」（1月。「二見ヶ浦と旅人」とも。横大奉書全紙判。北斎宗理画。40.6×55.2 フランス国立図書館蔵）

※馬に乗り旅する女、馬の背に振り分けに掛けた両脇の籠に乗る二人の子ども。馬の後ろで銚み箱の荷物を担ぐ男の図。図の右に注連縄で結ばれた夫婦岩と朝日が描かれる。海は空色の空摺り。添えられた狂歌の末尾に「午はつ春」と記されている。二見ヶ浦（フランス国立図書館）



●摺物「万歳図」（1月。宗理画）「午初春」とある。玉川里人、浅草庵市人の狂歌が記される（『年譜による』）。

●摺物「初春の女蛤売り」（1月。宗理画）「午はつ春」とある（『年譜』による）。

●摺物「駒牽き」（1月。九つ切判。宗理画。14.0×18.7 フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵）

※若衆風の馬子が千両箱を積んだ荷馬を牽く。歳旦の摺物で、浅草庵市人のグループが配ったものといわれる。細かい毛描きが特徴。「午はつ春」とある。

●摺物「舟上の二人の漁師」（1月。宗理画）「午はつ春」とある（『年譜』による）。

●摺物「檜扇を持つ官女」（1月。宗理画）「午はつ春」とある（『年譜』による）。

●摺物「神馬と神楽巫女」（1月。宗理画）「午初春」とある（『年譜』による）。

●摺物「宮大工」（春。宗理画）。「寛政十年春」とある。『年譜』による）。

●摺物「杓子と水引」（春。宗理画）。「午のはる」とある（『年譜』による）。

●摺物「群馬図」（春。宗理画）。「戌午春」とある（『年譜』による）。

●摺物「娘と子供と花鉢」（着色。宗理画）

※縁側に置かれた盆栽の花に興味を示し掴み取ろうとする子供を、部屋の中から両肩を掴んでとめようとしている娘。部屋には、小さな馬の玩具が置かれている。

●摺物「高砂島台」（この頃か。紙本着色一幅。九ツ切判。宗理画。12.6×16.1 北斎館蔵）

※婚礼などのめでたい飾り物を置く島台（島の形に切り取った板を組み合わせた台）に、三つ重ねの盃、松竹梅、能「高砂」に登場する翁と媼の人形などが置かれている。三方には熨斗の上に銀色の馬が置かれているので「午年」の作品と思われる。

●摺物「里芋ときりぎりす」（8月頃。宗理改北斎画。『年譜』による）

※画中に「うまの葉月」とあり。これにより秋の8月までに宗理を改名したと思われる。

●摺物「時計の図」（宗理改北斎画）。寛政十年の記があるという。『年譜』による）

●摺物「女淡島」（この頃か。ホノルル美術館蔵）

●摺物「首尾の松」（着色。宗理改北斎画）

※隅田川の首尾の松の所で屋形船を停めてくつろぐ二人の男と芸者。芸者は船端から身を乗り出して布を川面に晒している。船尾では船頭が煙草入れを腰に挿し、櫂を操っている。紫色庵蓑人、貢庵則次などの狂歌が記される。

●摺物「舞納め」（この頃か。着色角判。宗理改北斎画。日本浮世絵博物館蔵）

※小面風の女面と怪士風の鬼神の能面が描かれる。雪斎辰盧の賛「せわしなき去年ハ昨日に舞納め のうのうとする今朝の初春 小原女の心づかしや ●梅」と書入れがある（日本浮世絵博物館所蔵『大揃え北斎展図録』p101 読売新聞社による）。

●絵暦「娘と鏡磨職人」（この頃か。着色。摺物。無款。

9.4×9.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※職人が磨いている手鏡を覗いている娘の図。背景にウラジロ等の注連縄の正月飾りが張られている。二人の間に置かれた荷物の風呂敷にこの年の小の月が記され、一、六、七、九と判読できるので、該当する寛政10年の絵暦であるという（『ピーターモース・コレクション北斎図録』解説による）



娘と鏡磨職人（すみだ北斎美術館）

寛政11 (1799) 己未 40 歳 北斎、宗理改北斎、俵屋宗理、宗理、不染居北斎、前宗

理北斎、北斎辰政、北辰辰政、先ノ宗理北斎、先宗理北斎、宗理改北斎辰政、北斎、

北斗一星高、辰、政、辰政、完知、画狂人：こと（29歳）、（富之助：13歳）、阿美与（11歳）、阿鉄（9歳）、阿栄（2歳）

◇正月5日、式亭三馬の黄表紙『侠太平記向鉢巻』で御用火消しを誹謗したとして、よ組の火消しが三馬宅と版元西宮新六宅の打ち壊しをする。その騒動を起こしたとして、人足は出牢赦免。三馬は手鎖50日、版元は過料の罪を受ける（曲亭馬琴『近世物之本 江戸作者部類』「式亭三馬条」による）。

◇相撲興行（2月、本所回向院、11月、本所回向院）。

◇5月13日、六代目市川団十郎没（22）。

◇6月8日、円山派の絵師長沢盧雪没（45）。

◇高田屋嘉兵衛、択捉航路を開く。

◇大小暦の取締強化令。

◇華美、好色、実名入りの錦絵は全て没収・絶版にする命令がでる。

【江戸読本登場】

○山東京伝、読本『忠臣水滸伝』（11月。前編五卷五冊。蔦屋重三郎版。後編は享和元年：1802刊。後期読本注の初めとされる）。

注）後期読本：一般的には読本は『忠臣水滸伝』から始まるとされるが、文学史的には寛延2年（1749）に都賀庭鐘が中国白話小説の翻訳を中心にした『英草紙』や、安永5年（1776）の上田秋成『雨月物語』の上方中心のものを前期読本とし、山東京伝以降の江戸読本を、後期読本と呼ぶ。

○本居宣長、『源氏物語玉の小櫛』。

○司馬江漢、『西洋画談』。

○正月、蹄齋北馬（北齋門人、1770～1844）、読本『席上怪話 雨錦』（七話四冊。流霞窓広住撰）

○鋏形蕙齋、『人物略画式』

【北齋期・不染居北齋と号す】

★この頃、不染居北齋と号す。この号について『江戸の画家たち』（小林忠 ペリカン社）は「北齋にとってみれば、世間が押しつけてくるとかく固定した評価がわずらわしく、それにながみがちに己れを叱咤し励ます自覚的な行為（筆者注：多く改号、転居を指す）だったのであろう。そうした多くの号の一つに不染居という、いかにもこの人にふさわしい号がある。「居ることに染まらず」、レットルはがしの自己変革に終生つとめた北齋であった」と述べている。

※この号は文政5年（1822）にも使われている。

【三囲神社の箱提灯と扁額を見事に描く】

★2月17日、三囲稲荷（現東京都墨田区向島2-5-7）の開帳に12張の箱提灯と扁額（「白雨雷鳴の図」）を描く（現存せず）。箱提灯は12カ月を題材にした絵柄だったという。扁額は、蚊帳の中で雷鳴に怯える数人の女性が描かれていたという。ポストン美術館

に提灯絵の実物が残されているという（安村敏信「北斎の生涯と画業」。2019年『北斎視覚のマジック』展図録、p7）。

※『武江年表』では2月15日の開帳とする。「（略）開帳の飾物に美をつくすの始なり。参詣人群衆することおびただし」とある。

※『天明紀聞・寛政紀聞』（吉田重房の随筆。三田村鳶魚校訂本。天明元年：1781～寛政11年：1799までの記事。臨川書房：昭和44年〈1969〉）の〈三囲稲荷開帳〉寛政11年4月1日参詣記事には次の記載があるという（「WEB浮世絵師総覧」による）。

（前略）提灯十、絵絹にてはり、色々之浮世絵をかく、北斎之筆にて、其巧ミに見殊なる譬ふべき物なし、台ハ皆黒びろうどにて縫ぐるみ、金物は金糸にて縫出せり、此外に提灯壺対、北斎之筆にて、極綵色之画なり。其他色々様々の提ちん、思ひぐの行燈数不知駿河町三井店よりとして米式百俵、又諸方より奉納之青銅五十貫ツ、積立し処、三十箇所程もあり、白狐式疋、丈三尺余、毛ハ白絹糸にて植、眼ハ是も水晶なり、此壺対手際といへ格好といへ誠に靈狐之姿備はり尊く、身ノ毛も動く計り也、狂哥或ハ俳諧連中ノ額数々有り、ふちハ多分雲形又は唐草、金之高ぼり、口絵色々有ル内、夫人之驚きしに蚊帳を釣りし体至ておかしく、また見殊なり、此分都て北斎の画、（以下略）」（句読点・ルビは筆者による）。

文中に「白狐」とあるのは、同神社を僧源慶が改築した折、土中から白狐に跨る老翁の像が出てきて、その周りをどこからともなく現れた白狐が三度回って消えたところから神社名がつけられたという由来に因んだもの。

【全図北斎号による最初の狂歌本】

●狂歌絵本『東遊』（角書「狂歌」。正月。大本墨摺三冊29図。浅草庵市人撰。奥付に画工注北斎 筆工六蔵亭 彫刻安藤円紫とあり。鳶屋重三郎版。26.2×18.0 国文学研究資料館/東京芸術大学附属図書館/立命館 ARC/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/江戸東京博物館/国立国会図書館/早稲田大学図書館/日本浮世絵博物館/フリーア美術館：ブルグエラー・コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵）。

注）画工：「浮世絵師」の呼称はこの頃は余り用いられず、一般的にはもっぱら「画工」と称された。幕府お抱え絵師以外の絵師は、画工の呼称が示すように、単に絵を描く職人として認識されていた。なお「浮世絵」の語の初出は延宝9年（天和元年：1681）の俳諧書『それぞれ草』に出る「浮世絵や下にはえたる思ひ草」とされる（赤城治績『完全版 広重の富士』集英社新書 p31）

※俵屋宗理の号を返却し、全図北斎号による最初の狂歌本。全67丁29図を描く。狂歌は全国的に471首収める。ちなみに寛政10年（1798）狂歌絵本『初若菜』に北斎号で「母子の若菜摘み」一図のみ描いている。

※巻末に「王維か山水ハ見ぬもろこしの京ものかたりになんありける こゝに北斎は四里四方の毫細をふるへば、居ながら名ところをしることもくぜん（目前）たり」とあり「う

つし絵のすみからすみへ江戸雀 とひあるき見る花心地すれ 千種庵霜解」の狂歌が記される。

※享和 2 年（1802）に狂歌を削除し、絵のみの『画本東都遊』（三冊）として改題色摺で刊行される。

☆〈芝神明宮春景〉

※神明宮境内を俯瞰し、背景に芝浜の海を描く。芝神明宮は現在では芝大神宮（東京都港区芝大門1-12-7）と呼ばれ、伊勢神宮の内外宮を祀る。芝増上寺の近く。

☆〈三囲神社〉

※広い田圃を前にした三囲神社（現東京都墨田区向島2-5-17。当時は現在地より北の田圃の中にあつた）を中央に描き、図の右端に、神社に続く湾曲した道を行く参詣の人を配している。三囲神社は、近江の僧源慶が改築したとき、土中から白狐にまたがる老翁の像を発見、その像の周りをどこからともなく現れた白狐が三度回って消えたところから名づけられた神社だという（「三囲神社」由来より）。



三囲神社（国文学研究資料館）

※図左に隅田川堤より下にある二門の鳥居が描かれる。左上に「芸者集 鳥居半出大川端 遥指三囲稻荷檀 葦葉刈来盛洗鯉 蒲焼食尽割長鰻 葛西号掛太郎鼻 晋子句翻百姓肝 向晚船頭呼不起 屋根舟裏只聞鼾」の七言律詩が記される。

☆〈隅田川春雪〉

※隅田川を行く二艘の船。手前の船には大傘を広げた人が乗っている。手前の家の屋根や対岸は春の雪を被っている。

☆〈今戸里〉



※焼物作りが盛んな今戸の職人が、川辺の作業場で棟瓦のようなものを作っている。今戸は、東京都台東区北東部に位置し、南部は浅草に接し、隅田川の西側に沿った地（現在の東京都台東区今戸1丁目～2丁目辺り）。今戸焼という焼物作りが盛んで、特に招き猫が名物となっていた。

今戸里（国文学研究資料館）

☆〈待乳山〉

※待乳山聖天（正式には待乳山本龍院。浅草寺の子院。現東京都台東区浅草7-4-1）があり、小高い場所は風光明美を楽しむ人でにぎわった。図は、院前の隅田川支流に掛かる橋

を渡って桜見物に行く人々を描く。図左に待乳山、図右に今戸橋(現在はない)、図左上の富士山を配置。英一蝶の書入れあり。

待乳山 (東京芸術大学附属図書館)



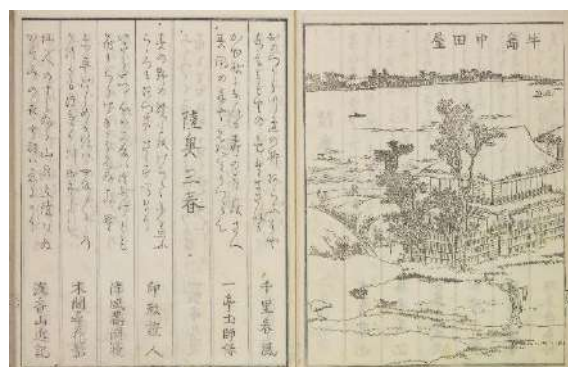
☆〈請地松師〉

※盆栽の松の枝を、口にくわえた糸でゆわえている男。請地は、南葛飾請地にあった地名(現東京都墨田区押上付近)。鎮火の神を祀り、紅葉で有名な秋葉大権現社が近くにある(現東京都墨田区向島4-9-13)。

☆〈牛島中田屋〉

※隅田川沿いの牛島の仲田屋注の前の道を、鋤を担いだ農夫歩いていく。牛島は牛島神社(当時は牛御前と呼ばれた。現東京都墨田区向島1-4-5)で有名な所。貞観年間(859~79)に慈覚大師の建立といわれる。現在地より少し北にあった。社名は、慈覚大師が須佐之男命の化身である老翁に出合い、「自分の為に神社を建てよ、そして、もし国土に騒乱があれば首に牛頭を戴き、悪魔が降伏する形相を現して天下安全の守護となれ」と託宣を述べたことに由来するという。社名に因んだ恐ろしい形相の牛像が置かれている。他に自分の具合の悪い箇所を撫でると治るという「撫牛」も置かれ親しまれている。

注) 仲田屋：飯島虚心『葛飾北斎伝』(p.73)の脚注に「隅田堤下、現牛島神社(旧牛の御前)の旧地(墨田区向島五丁目)の前にあった川魚料理の中田屋。鯉調理で有名」とある。葛西太郎とも称された料理屋。



牛島中田屋 (立命館 ARC)

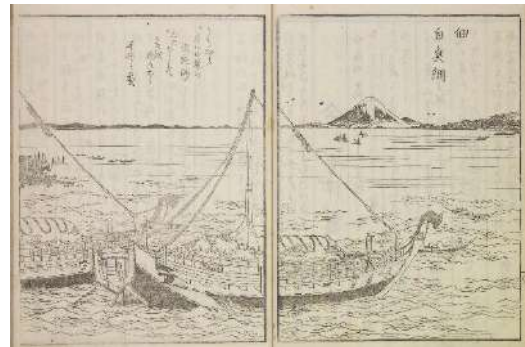
☆〈梅屋舗〉

※斜めに降りつける雨に、傘をすぼめて顔を隠す女、笠を被り天秤棒を担いで急ぎ足の農夫と、雨の向こうに霞む梅屋舗(梅屋敷とも)を描く。梅屋敷は、呉服商の伊勢屋喜右衛門別荘「清香庵」の梅が見事で、江戸中から観梅の人々がやってきたところから、亀戸梅屋舗と呼ばれるようになった。歌川広重の『名所江戸百景』にも描かれ、フィンセント・ファン・ゴッホがそれを模写したことで有名になった。数十丈(約150m)にわたり枝が地中に入ったり地上に出たりする一本の梅の木が評判で、評判を聞いて訪れた水戸光國が、龍が伏せているようだと「臥龍梅」と名づけたという。八代將軍徳川吉宗も鷹狩の帰りにこの地を訪れたという。安政六年の須原屋茂兵衛版地図には、亀戸天満宮の東北(現東京都墨田区亀戸3-40、50~53辺)にあり、「名木臥龍梅」と記されている。明治43年(1910)の大雨で隅田川沿岸の亀戸・大島・砂村の全域が浸水し廃園となった。現

在、東京都江東区亀戸4-18-8 に観光イベント施設「梅屋敷」があるが、場所も往時のものではない。

☆〈佃白魚網（網か）〉

※佃島で獲れた白魚は將軍家に献上されていた。図は、佃島沖に五大力船が浮かび、その周辺に白魚獲りの舟が数隻浮かんでいる。背景に富士山が描かれる。 佃白魚網（立命館ARC）

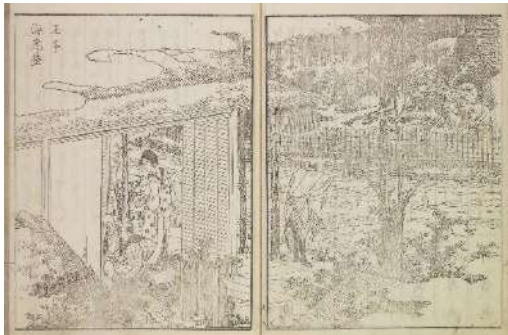


☆〈王子稻荷社〉

※赤塚に囲まれた王子稻荷の参道の階段を上り下りする人、門前の往来を行き来する人々。境内には「正一位」と書かれた多数の幟が見える。王子稻荷神社（現東京都北区岸町1-12-26）は、毎年大晦日の夜、あちこちから社地にある古い榎の辺りに集まり、装束を改めるといわれ、狐火で有名であった。狐火は晩に現れたり明け方に現れたり年ごとに違い、一時（2時間程）程現れるという。

☆〈王子海老屋〉

※有名な茶屋「海老屋」でくつろいで酒を飲む客と立ち姿の女。外には尻はしよりした男としゃがんだ男が店の前の川に流れる玩具の紙舟を眺めている。



王子海老屋（立命館 ARC）



享和2年〈画本東都遊〉（すみだ北斎美術館）

☆〈鑑匠〉

※店先で鎧や甲冑などの武具を売る主人と客の姿。主人の後ろでは木槌を振るって鎧を作っている職人を描いている。

☆〈日本橋〉

※人々の日本橋での雑踏。図右の背景には江戸城が描かれる。日本橋は、文化3年（1806）の記録では、長さ28間（約51m）、幅4間2尺（約8m）であった（『大江戸万華鏡』人づくり風土記¹³¹⁴ 農文協）。

☆〈駿河町越後屋〉

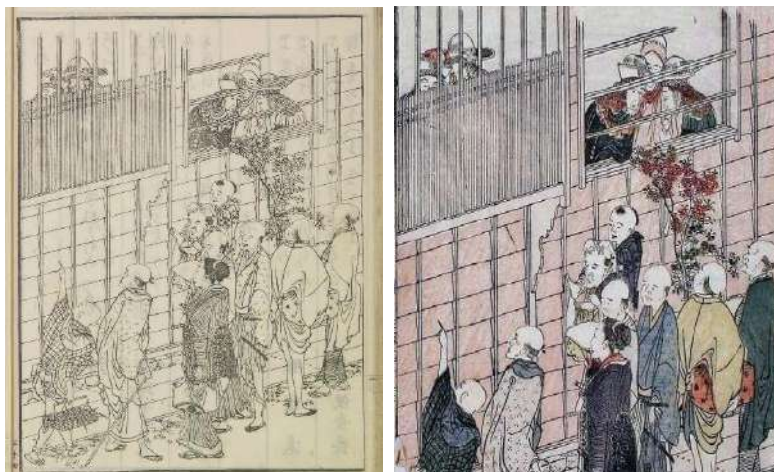
※日本橋駿河町の道を挟んで両側に店舗を構える呉服商越後屋と、その間の道を往来する人々。越後屋の瓦屋根を修理している職人たちもいる。

☆〈無題（長崎屋）〉

※カピタンの江戸参府の際に宿泊する日本橋の長崎屋にオランダ人を見に来た人々と、窓の格子から見物人を見るオランダ人の様子を描く。長崎屋は日本橋本石町（現東京都中央区室町4-2）にあった。この絵は、見開きの右ページに描かれた〈鑑匠〉と並んで左ページに描かれた図。無題だが、仮に〈長崎屋〉と題した。

『狂歌東遊』より長崎屋：墨摺（立命館 ARC） 享和2年〈画本東都遊〉（早稲田大学図書館）

☆〈十軒店雑市〉十軒店（現東京都日本橋室町3-2-15に跡碑がある。2丁目と3丁目の間辺の地名）は人形市場で有名。3月の雑市で雛人形を買い求める人々の混雑を、側から描く。店の階段後ろでは人形を入れる箱を作る職人がいる。5月には端午の節



句の前の兜市、12月には歳暮市が建ち、破魔矢や羽子板などが売られた。

☆〈無題（神田紺屋）〉藍染屋（紺屋）の職人が盥で布を染め、その布を物干しから垂らして干している男。それを見上げる犬がいる。神田は染物屋が多く、ここで染められた手拭や浴衣は特別なものとして扱われたという。JR神田駅近くに紺屋町という地名が残る。画題は仮題である。

☆〈新吉原〉吉原は、日本橋葺屋町の東京都中央区日本橋人形町2・3丁目から日本橋富沢町にかかる辺りにあったが、江戸市中拡張にともない明暦2年(1656)に日本堤への移転を命じられ、翌年の明暦の大火（振袖火事。明暦3年1月18日から3日間続いた大火）後に、浅草寺裏の日本堤に移転した。新吉原と呼ばれ、日本橋にあった遊郭は元吉原と呼ばれた。図は、桜の花咲く仲見世の往来に、大勢の人々が行き来して賑わっている様子を描く。

☆〈品川汐干〉品川海岸の干潟に打ち上げた船と錨。その傍で遊ぶ三人の子ども。干潟では貝などを漁る人々が小さく描かれる。

☆〈元結匠〉元結は、髪を結び束ねるための紐や糸をいう。江戸では「もっとい」という。外で二人の男が元結の紐を道具を使って擦っている。

☆〈絵草紙店〉日本橋の地本問屋蔦屋重三郎（耕書堂）の店頭風景。客の側で判切の職人や棚に摘まれた摺紙が描かれる。店頭の箱看板に「通油丁 紅画注問屋 蔦屋重三郎」と書かれ、格子に架けられた縦看板には「東都名所一覽」などの出版物の宣伝が記されている。

注)「紅画」は、多色摺の錦絵以前の、紅を主色にした筆彩版画をいうが、ここでは紅・緑・黄程度を版彩する安価な色摺版画の紅摺絵を指しているか。あるいは錦絵を指すか。



『狂歌東遊』より絵草紙店：墨摺（国文学研究資料館）

☆〈佃住吉社〉佃島の住吉神社の石燈籠や石碑のある境内の背景には、帆かけ船が浮かぶ。住吉神社（東京都中央区佃1-1-14）は、徳川家康が関東に入る際、大坂の住吉社の分霊を漁夫とともにこの地に移したものだ。佃島が江戸湊注の入口に位置しているところから海

上安全の守護神として信仰を集めている。

注) 江戸湊：亀島川が隅田川と合流する地点。江戸時代にはここが隅田川の河口であり、そこに江戸湊が開かれた。現在の東京都中央区湊1丁目近くの河口。

☆〈飛鳥山〉桜の花咲く飛鳥山の様子を描く。徳川吉宗が享保の改革の一環として整備し、上野寛永寺の桜に次ぐ桜の名所とした。現在でも飛鳥山公園（東京都北区王子1-1-3）として桜の名所になっている。図の左には吉宗を顕彰する「飛鳥山碑」が描かれている。

☆〈日暮里〉日暮里の丘の間の坂道を往来する人々。全体に日暮里の鄙びた風景を鳥瞰的に描く。日暮里は武蔵の国豊島郡日暮里村（現東京都荒川区日暮里）で、武蔵野台地と荒川沿岸の低地に挟まれ、起伏の激しい地域。

☆〈上野〉寛永寺の舞台から遠望する人々。その先に不忍池が広がり、池畔には桜が咲いている。

☆〈浅草海苔〉人屋根（Λの形）の下に「平」の字を記した商標を染め抜いた暖簾が掛けられた海苔屋の店先を描く。縦看板には「御膳御海苔所 浅草小田原町三丁目 中寫屋平右衛門製」と書かれている。

☆〈浅草祭〉この頃の浅草祭は、3月19日に隔年で行なわれていた。手前の護岸の茶屋の前には「三社」と書いた幟が二本立てられている。隅田川には祭りを祝う舟が多数浮かんでいる。

☆〈無題（小町桜）〉「小町桜」と書かれた石塔の脇に桜の老木が花を咲かせている。この老木が、歌舞伎「重々人重小町桜」の顔見世狂言の大詰め所作事として上演された「積恋雪関扉」（天明4年〈1784〉11月、桐座で上演）に登場する小町桜の精を意識したのか、あるいは老いた小町を桜の老木に譬えたものかは不明。歌舞伎では小町桜の精は、小野小町の化身として登場する。

☆〈浅草蕨市〉蕨市見物で浅草寺の雷門を出入りする人の雑踏を描く。旧暦3月19日（浅草祭が行われない年は3月18日）と12月19日に開かれた市。近郊の農家が蕨や笠・臼・杵などを持ちより商売にした。

●狂歌絵本『今日歌白猿一首』(11月。立川(烏亭)焉馬編。俵屋宗理画。三陀羅法師の賛あり。北斎は挿絵〈中村座櫓図〉を描く。上総屋利兵衛版。国立国会図書館蔵)

※11月、中村座の顔見世興業で21歳の六代目団十郎が初めて座頭を務めた時、寛政8年(1796)に引退し成田屋七左衛門と称していた五代目が復歸して市川白猿の名で口上を述べた。これを歓迎した人々が狂歌を詠んで祝意を表した。これらの狂歌や白猿の口上、白猿自身の狂歌などで編集したもの。

宗理(北斎)は「白猿はとしのこうより亀の甲 竜宮までの嘶つたへに」と詠んだ。狂歌と画を寄せた浮世絵師は、勝川春英、勝川春好、歌川国政など。



『今日歌白猿一首』櫓図 (国立国会図書館デジタルコレクション)

●狂歌絵本『狂歌梢の雪』(『こずゑの雪』とも。角書「菅江追善」12月。一冊。朱楽菅江一周忌追善集。不染居北斎画。印辰印政。口絵に「牛島図」を一図描く。二世菅江(菅江門人)編。淮南堂版)〈『日本古典籍総合目録』、『江戸の絵本』所収マティ・フォーラー「葛飾北斎と初期門人たち」p.289による)

※朱楽菅江は寛政10年(1798)12月12日没。「不染居」号で何事にも染まらぬ独流の気概が示される。

●狂歌絵本『花の兄』(2点描く。着色。一図に前宗理北斎の落款。一図に北辰辰政の落款。ボストン美術館蔵)



※他の花に先駆けて咲くので梅を「花の兄」と呼ぶという。美しく飾った簪を挿した娘二人と、日傘を抱えた御高祖頭巾の女が川の岸辺を散歩している。娘の一人は繭玉などをつけた正月飾りを肩にしている。女たちの後ろからは主人らしい男が長羽織姿でついて行く。その後ろに風呂敷包を担ぐ小奴がいる。遠景には城が小さく描かれ、手前には風が三本上がっている。正月の風景。

花の兄 (ボストン美術館)

●錦絵『略十二段図』(正月。横大判。宗理改北斎画。江崎屋辰蔵版?。東京国立博物館蔵)

※「浮絵源氏十二段之図」(天明5年~寛政元年(1785~89))の主題である「浄瑠璃十二段草子」と同じ場面を描くが、浄瑠璃姫の御殿から聞こえる管弦の音色に義経が屋外で笛を合わせる場面を「やつし」(古典的な題材を当世風に姿を変えた絵。寛政十年「見立てとやつし」項参照)て、義経を女性にし、籬のある庭先で笛を胡弓にして立っている。



その横では、犬の親子が三匹描かれる。三味線
を手にした女が縁先に立ち、屏風のある部屋で
は、横兵庫鬘の花魁が琴を弾じている。後世の
手直しが入っているとの見方もある。

略十二段図（東京国立博物館）

●錦絵「加藤清正公図」（紙本着色一幅。不染
居北斎画。印北斗一星高。個人蔵）

※床几に座り、厳しい顔つきで赤鞘から刀を引き抜く様子。印号が珍しい。

加藤清正公図（「刀剣ワールド浮世絵」より転載）

●扇面図「見立文殊図」（「獅子に乗った
遊女図」とも。この頃か。雲母紙淡彩扇面。不
染居北斎。印辰。印政。18.2×49.0 すみだ北
斎美術館蔵）

※獅子に乗る遊女。獅子に乗った女は文殊菩薩
の見立となる。白像に乗った遊女の図「江口の
君図」（文化5年：1808）もある。

●絵暦「炬燵の美人」（着色。無款。8.0×
13.1 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション
蔵）



※炬燵に入ろうと、左手で掛け布団を上げる女性の図。炬燵は置炬燵で、火鉢を檜で囲ん
で布団を掛けたもの。奥の襖に「正小 五六 八 十 十一 寛政 十一歳」「己未」
とこの年の月の大小が書かれる。

●絵暦「風呂上りの母子」（小判着色一枚。無款。島根県立美術館蔵）

※全裸の母親が風呂上がりの赤子を布に包んで他の女に渡している。後方の荷物入れの箱
に「巳」「未」とあるので寛政11年の絵暦と分る。

●絵暦「女房餅やき図」（1月。宗理改北斎画 『年譜』による）

※「北斎宗理」と「北斎画」印政の落款を持つ絵暦があるという（『年譜』でこのことが
記された長谷部言人『大小暦』昭和18年・宝雲社、及び檜崎宗重『北斎論』昭和19年・
アトリエ社を紹介している）。

●絵暦「市川團十郎 六十六部」（1月。宗理改北斎画。図中に「寛政十一 巳 未年」とあ
る。『年譜』による）

※六十六部とは、法華経を66部写したものを全国六十六ヶ所の霊場に収める修行者を「い
う。略して六部ともいう。

●絵暦「年礼図」（1月。着色。宗理画。「己のとし春」とある。四角志面人の狂歌があ
る（『年譜』による）。

寛政9年(1797)にも絵暦「年礼」がある。落款の宗理は昨年未までの制作なのでそのまま使用している。

●絵暦「七草図」(1月。着色。北斎画。「未春興」とある。森羅亭などの狂歌がある。狂歌中に大小あり(『年譜』による)。

●絵暦「大小暦をとり合う茶屋の男女」(1月。宗理改北斎画。画中の大小暦に大小月が示される。霞春網の狂歌がある(『年譜』による)。

●絵暦「三美人の合奏」(横細判。着色。13.4×27.0 ベルギー王立美術館蔵)

※左に胡弓を持つ女、中央に琴を立てて持つ女、右に三味線を抱える女の図。

●絵暦「鶯と金太郎」(着色。宗理改北斎画。13.8×16.8 すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション蔵)

※「金」の字のある前かけをした金太郎がすり鉢で鳥籠の鶯の餌を搗っている。金太郎の後ろには、鳥籠があり、中に鶯がいる。狂歌「鶯の歌の徳にハやはらくや 鬼をもひしく力瘤まで 三星亭 都千賀江」が添えられる。鶯の鳴き声に鬼のような力瘤まで和らぐようだの意。斧の根元に「小」とあり、刃に「正、五、六、八、十、十一」とある。

●摺物「若菜つみの美人」(この頃か。紙本着色一幅。先ノ宗理北斎画。12.8×18.6 すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション蔵)

※川辺で若菜を摘み、根を小刀で切ろうとしている姉さん被りの女の図。月澄改紀若人「うす化粧ほとどのつらにもきえのこる 雪まに自たつきハすみれ草」、日新舎「ちゝはゝの目にハいかにも小さくて 孫嬢なともつミはやすからん」の狂歌が記される。

●摺物「舟宿図」(紙本着色一幅。先ノ宗理北斎画。18.6×51.2 太田記念美術館:長瀬コレクション蔵)

※「八幡宮」の額の掛かる鳥居の下を通る女の先には松林の境内があり、鳥居の内側の広小路には、板塀一杯に錨の模様を描いた小屋や、「大叶」の箱看板がある舟宿が俯瞰して描かれる。鳥居前には天秤を担いだ男や、行商の男たち、供を連れた侍など、多くの人が往来している。図の右端の太鼓橋には男女が渡っている。

●摺物「垣の内」(「家の中を覗く女」とも。宗理改北斎画。18.7×20.0 北斎館蔵)

※「寿連」と書かれた額のある萱門の先のこけら葺きの部屋で、扇を持った師匠の男が文机を前にして座り、脇に女が右袖を口元に当てながら近づいている。門の前では、だらりの帯をした娘が芝垣の所に立っている。

紀満々人「湯のたぎる外にこそあれ待合に 春をしらせのうぐひすの声」、杉壺女「初鶏の声にうれしく門の戸を ひらけばひらく庭の梅がえ」、和泉水清女「冬の日のみじかき枝も此頃は 次第にのびる春の青柳」などの狂歌が連記される。

垣の内(北斎館)



●摺物「鶴と福祿寿」（春。紙本着色一幅。宗理改北斎画。13.2×18.2 すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション蔵）

※子どもが大きな盆に入れた餌を鶴が嘴で突いている。それを福祿寿が笑顔で見ている。その後ろの垣根には松の木と梅の木が描かれる。

「未立春」と題して鶴を詠んだ狂歌と福祿寿を詠んだ狂歌が添えられる。「千年も替らて立や春かすみ つるも羽をのす山のこし帯 小松亭家住」、「福祿寿揃ふや春の三つの朝 つるも千とせの餌飼のとけき 唯我堂川面」

●摺物「梅と二美人」（「庭先の二美人」とも。九つ切判。紙本着色一幅。宗理改北斎画。13.2×17.6 北斎館蔵）

※垣根の梅が咲いている。振袖の女性が留袖の女に寄り添うようにして、秘密めかした手紙を渡そうとしているように見える。図左に、「文好む梅がかしくのみそがごと 垣の袖から袖へ うつせり 機音高」、「女ならあだめくものよ 植木屋が かついできたる庭の青柳 浅草庵市人」の狂歌に続き、「未初春」とある。



梅と二美人（北斎館）

●摺物「伊勢暦を見る娘」（「本読む女」とも。紙本着色一幅。宗理改北斎画。13.3×18.5 北斎館蔵）

※従来「本読む女」と題されていた。伊勢暦を見ている娘の図。畳の上に糸切り鋏が置いてある。娘の右にはたと紙に包まれた着物が置いてある。正月の晴れ着か。娘が手にする暦の題簽に「寛政十一年」と読める。狂歌「佐保姫もかすみの衣たちそめて のどけき春のはれ着にやせん 太平庵尾佐丸」が記される。



伊勢暦を見る娘（北斎館）

伊勢暦とは、江戸時代に伊勢神宮の門前である宇治および山田の暦師が製作し頒布していた暦であり、今日の神宮暦の前身である（「ウィキペディア」より）。

●摺物「遊郭の芸妓」（紙本着色一幅。二枚続き。宗理改北斎画。21.4×53.2 北斎館蔵）

※料亭の座敷の窓辺から隅田川と思われる風景を眺めている。図の左には禿がいる。

●摺物「大黒酒宴図」（紙本着色一幅。宗理改北斎画。14.7×18.1 すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション蔵）

※大黒天が遊女にやる纏頭（心付け）の紙を差出し、受け取る男は紙をさしあげている。男の隣では、やり手の年増が手を差し出している。大黒の側には花魁二人と禿がいる。

千歳松成の狂歌「福神ハすかせたまへるかミはなを
わけてひつしの春やまくらん」が記される。

大黒酒宴図（すみだ北斎美術館）

●摺物「社前の綱引き」（紙本着色一幅。図左の幟旗
に「寛政十一巳未年 北斎」とある。17.8×52.9
すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※小さな鳥居のある社前で、太い綱を両方で引き合う
男たち。左右の組みの横では、扇子を広げて応援する
男が描かれる。



●摺物「舟から降りる芸妓」（「二美人 船から棧橋」「舟から降りる深川芸者」とも。
色紙判着色一幅。宗理改北斎画。19.8×18.2 北斎館/日本浮世絵博物館蔵）

※棧橋で舟から棧橋に降りた芸妓が、これから降りる芸妓の手をとって手助けをしている。

船頭が芸妓の荷物を渡そうとしている。二人の芸妓
は、狂歌に記された深川の富岡八幡宮の二軒茶屋に行く
ようである。二軒茶屋は八幡宮鳥居の内側にあった

「いせや」と「松本」の二軒の料理屋。そのほかにも
料理屋が並んでいたが、この二軒が特に賑わった。あ
るいは門前仲町にあった料理屋「梅本」に行くのか。
「千金の春はのどけき富が岡 まづ船つけよ二軒茶屋
まで 閑々斎春磨」、「是からは狂歌よませんうぐい
すの 糸は梅本をすりものにして 便々館湖鯉鮒」の
狂歌が記される。

舟から降りる深川芸妓（北斎館）



●摺物「新年屠蘇図」（1月。「元日屠蘇図」「元旦屠蘇図」とも。着色。宗理改北斎画。
19.4×25.8 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※床の間を前にして刀を腰に挿し、袴を付けて座る武士が盃で屠蘇を飲む。妻と子がそ
の脇に控え、正月用の重箱が置かれている。床の間には海老やウラジロや松の正月飾りが
置かれている。浅草菴の狂歌の次に「未初春」とある。

●摺物「己未美人合之内」（揃物。1月。紙本小判着色。宗理改北斎画。図中に「未初春」
とある。）

※大首絵半身像の揃物。狂歌グループ（浅草連）の依頼で刊行。

☆〈屠蘇持つ官女〉（「屠蘇を運ぶ婦人」とも。13.4×18.0 すみだ北斎美術館：ピーターモ
ース・コレクション蔵）。

※富士額で瓜実顔、宮廷官女風の天上眉注、鬢の後ろ髪を垂らした宗理型美人が、三方に
乗せた屠蘇を運んでいる。大首絵風の図。「さは姫のさけ髪なれや青柳の 延たる裾ハ
しよゐんまで引 雲龍亭」、「こね墨のねすみ柳のまゆつくる 野辺に霞のうすけしやう

して「千代喜飛乗」、「色めきてめたつ柳の髪かたち ひまなくなでる門の春風 万歳逢義」などの狂歌が記される。

注) 天上眉：眉を擦り落とし、額に近い所に眉墨で点または楕円に塗る眉。高眉とも。

☆〈若菜摘みの美人〉（「若菜の籠を負う美人」「梅の籠を負う美人」「つみ草」とも。狂歌の脇に「未初春」とある。個人蔵）

※図は、籠の柄に手拭を結わえ肩に担ぐ娘。籠には若菜と梅と思われる小枝が入っている。

以下の図は、ピーター・モース・コレクション図録の永田生慈解説（p 116、図録番号 319）による。

☆〈布を噛む美人〉

☆〈扇を持つ美人〉

☆〈本を持つ美人〉

☆〈柳下の平安風美人〉

●摺物「三囲土手の男女」（1月。着色。宗理改北斎画。「未のはつまつ」とある。

※三陀羅法師他の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「座敷万歳」（1月。宗理改北斎画）

※画中の衝立に、この年を表す未の絵がある。紀更利他 2 名の狂歌がある（『年譜』による）。

但し、『永田生慈北斎コレクション展』（2019）図録の年譜では、寛政 7 年（1795）に絵暦「座敷万歳図」（宗理画）の記載がある。

●摺物「常磐津本を見る美人」（1月。宗理改北斎画。小川清志ほかの 1 名の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「山水図」（1月。宗理改北斎画）

※「未初春」とある。浅草庵他 2 名の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「隅田川」（1月。横大奉書全紙判。狂歌歳旦物。宗理改北斎画。39.0×53.0 フランス国立図書館蔵）

※長い羽織を着た男が右手で何かを指差し、その脇には羽織を脱いで肩に掛けた男と鼈甲の簪を着けた二人の芸者、その供と思われる下男が堤重（行楽等の外出用重箱）を背負って立っている図。下男の足元に

は、堤の下にある三囲神社の鳥居の笠木が描かれる。対岸には木立の中に浅草寺の五重塔と、遠くに富士山を描く。この年の元旦の景と思われる。



る。絵の下半分には 21 首の狂歌が添えられる。隅田川（フランス国立図書館）

●摺物「江ノ島の海辺」

（江之島図）「海浜の図」とも。1月。宗理改北斎画。「歳旦」「寛政己未（寛政 11 年）元旦試筆」の書き込みがある。19.9×27.3 ハーバード大学サグラー美術館蔵）

※江の島に渡る人々。遠近画法。光琳波（尾形光琳が描いた波）のような干潟に打寄せる波のうねりが北斎風で、寛政9年（1797）の「江島春望」にも描かれた。右の浜辺から江の島までの干潟を人々が行く。葎雪菴午心「日ハ草にあそひてとしの野面かな」などの句が記される。

●摺物「面と箱」（春。宗理改北斎画）

※図中に「ひつしの春むかへ」とある（『年譜』による）。

●摺物「文机脇の娘」（春。宗理改北斎画）

※「未春」とある。浅草庵、芳春亭の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「ほととぎすを見る縁側の娘」（春。宗理改北斎画。「未春」とある）

※外山花盛、浅草庵の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「雁金五人男注 安の平兵衛」（着色。宗理改北斎画。13.8×18.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

注）雁金五人男：元禄年間、大坂での五人のならず者。雁金文七、極印千右衛門、布袋市右衛門、安（庵）の平兵衛、神鳴庄九郎の五人。いずれも刑死となった。雁金文七は、天明年間の「風流男達八景」で描いている。

※座っている男が脇に尺八を置いている。着物に「安」と読める字があるので安の平兵衛であろう。そこに女が背で寄り添うように立って、首を回して平兵衛をいとおしげに見ている。

「霞より外にあやなきものをまた すめぬ顔なる春の夜の月 山手仲住」、「明ぬれハ安にたかハす春かすみ たて引のある男山の端 大平楽住」の狂歌が記される。

●摺物「雪景山水」（この頃か。紙本着色。宗理改北斎画。印辰政。19.5×35.9 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※一面雪景色の中、雪を被った民家と、遠くの橋を渡る人が漢画風に描かれる。背景の山の上には、雁が数珠つなぎになって飛んでいる。

●摺物「砧打ち図」（8月。宗理画。印完知。東京国立博物館蔵）図中には「未初春」とある。『年譜』では、「羊仲秋」としている。北斎は宗理を改名しているので門人宗二の作と思われる。

●摺物「貴人髪結」（錦絵。横八切り判。花巻市美術館「浮世絵に見る青の変遷展」2011/7 及び岐阜市歴史博物館 2012/10 展覧会出品リストによる）

●摺物「合わせ鏡」（着色。宗理改北斎画。13.8×18.8 すみだ北斎美術館蔵）

※座って合わせ鏡をする娘と、立ってそれを見る年増。花瓶の梅の枝に紙を括りつけている。

●摺物「蛸籠と団扇」（6月頃。宗理改北斎画。印画狂人）

※「巳未とし」とある。三朝ほかの句がある。寛政10年6月19日没の、振付師吾妻藤蔵の一周忌追善摺物という（『年譜』による）。

●摺物「千石船を見る母子」（この頃か。紙本着色。宗理改北斎画。13.9×18.6 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※沖に浮かぶ千石船や小舟を手をかざして眺める女と男の子。その脇にしゃがんで赤子を背負う母親も沖を見ている。小舟の上では万歳をした両手に扇を持ちあげている男がいる。「はるの夜のあたへのしれぬ江戸の海や 千石ふねの二三万艘 松風台●」の狂歌が添えられる。

●摺物「雪かきをする美人」（紙本着色。宗理改北斎画。13.2×13.6 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※高下駄を履き、鋤を持ち、腰をかがめて雪かきをする女の図。睦月若持の狂歌「うすほとにまるめし雪も（以下不明）」が記される。

●摺物「朝日の佃島」（この頃か。紙本着色。先ノ宗理北斎画。18.9×51.9 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※遠くに佃島が望める橋の上には、天秤を担ぐ魚屋や鉢植えを売る男、小奴を連れた女などが往来する。欄干に手をかけて、額に右手を翳して何やら島と反対方向を見ている、上半身裸の男もいる。海には荷を満載した千石船や舢舨の小舟が停泊している。他にも猪牙舟や屋根舟、帆を下ろした舟等が停泊している。水平線には巨大な朝日が上り始めている。

●摺物「橋のある山水画」（紙本着色。狂歌摺物。宗理改北斎画）

※玉川亭友呼や浅草庵らの狂歌が記される。図は、手前に、水辺に掛かる石造りの太鼓橋と、森に囲まれた家並み、その前の広場数名の人物が小さく描かれる。橋の上には横にすやり霞が引かれ、遠景に薄く山容が描かれ、麓から山に沿って糸の様に無数の雁が連なって飛び、山の向こう側に飛んでいく。

●摺物「官女と娘」（紙本着色。無款）

※簾のある部屋で、二人の官女と娘が草花や船や木が書かれた紙を持って、お互いに見比べている図。背後の板襖には細い線で人物と山羊のような動物が描かれている。

●摺物「二人の娘と梅樹」（紙本着色。北斎画）

※梅樹の側で、振袖の娘と縦縞模様の着物の女が寄り添っている。縦縞模様の女は年増風。図の左半分には数種の狂歌が記される。

●摺物「菊籬」（全紙判着色摺物。先ノ宗理北斎画）

※籬の中に育てられた菊が飾られ、女三人と小奴が鑑賞している。図の下半分に、逆さに「千種萬歳」「催主 繁太夫改 松邑繁八」とあり、繁太夫改名披露として、深川芸者衆による種蒔三番叟などの披露案内であることが分る。

●摺物「洗張り」（「染物乾し」とも。中広奉書全紙判着色。宗理改北斎画。41.5×55.7 北斎館蔵）

※薄黄に染めた布を伸子張りにして、柳に紐を張って乾す。その下には大きな盥に布が入れてある。燕が飛び黄色の梅花が咲く屋外の風景。下半分は、深川芸者の長唄の会の番組表であり、末尾に「二月」とある。

洗い張り（北斎館）

- 短冊「猿橋」（この頃。明治期の複製のみで確認される。大短冊・長大判。宗理改北斎画）〈リチャード・レイン『伝記画集 北斎』 p 308 による〉
- 不明「風流倭二色」（この頃。1 点のみ確認される。小判。先宗理北斎画）〈リチャード・レイン『伝記画集 北斎』 p 308 による〉



寛政12 (1800)	庚申	41 歳	時太郎可候、	(群馬亭)、	北斎辰政、	北斎、	(助兵衛
山人)、	(雁高庵)、	宗理改北斎辰政、	宗理改北斎、	先ノ宗理北斎、	画狂人北斎、	東陽	
北斎、	三径、	辰、	政、	: こと (30 歳)、	(富之助 : 14 歳)、	阿美与 (12 歳)、	阿鉄

(10 歳)、阿栄 (3 歳)

◇庚申 (こうしん) の年に限り、6 月 1 日の山開きから 9 月 30 日まで女性の登山が許可された。

◇相撲興行 (4 月、浅草八幡宮、11 月、本所回向院)

◇4 月、伊能忠敬、蝦夷地測量に出発 (56)。以後、3400 日 (約 9 年半) の測量後「大日本沿海輿地全図」(伊能図) を文政 4 年 (1821) に完成。

◇9 月 10 日、伊藤若冲没 (85)。

◇12 月 12 日、朱楽菅江没 (61)。

◇稲葉華溪没 (月日不明。51)。

◇「女大絵」「面体を大造に画」く絵が禁じられる。

○大田南畝『浮世絵類考』完成。

○曲亭馬琴、黄表紙『備前播盆一代記』、黄表紙『胴人形肢體機関』、滑稽本『化競丑満鐘』。

○正月、曲亭馬琴、唯一の艶本『艶本多歌羅久良』(喜多川歌暦画。色刷り半紙三冊。二代目蔦屋重三郎版。曲亭馬琴は序文と上巻の主文を書く)。

○鋏形蕙斎『山水略画式』

※「略画」の語は、溪斎以前にはないと溪斎自身の話として紹介されている (八木書店『江戸の絵本 画像とテキストの綾なせる世界』鈴木淳・浅野秀剛編・所収「葛飾北斎の絵手本にみる『略画』—北斎の絵画教育者としての一側面」日野原健司。p 245)。

★この頃、西洋画法が伝えられ遠近法、色彩、陰影の扱い、構図など北斎らに影響。

★この頃、山の手 (小石川伝通院前か。東京都文京区小石川2-14-6 辺) (「葛飾北斎の隅田」及び『葛飾北斎伝』p 30 より) に住むか。

【宗理様式美人の評価】

★「宗理」号は既に寛政10年に門人宗二に譲っているが、文化年間前期までを「宗理様式」の時代として考えられている。その宗理様式について、寛政12年に刊行された笹浦鈴成の『大通契語』（国文学研究資料館デジタル判）32丁目には「（略）一躰きりやうもよくたおやかにして宗理もこれが為に筆をたち、かの京橋注がたくミもこれが為に筆をなげ（略）」とある。

注) 京橋：京橋に住んでいる山東京伝のこと。

新宿岡場所の遊女梅歌の美貌を描写したもので、宗理（北斎）も山東京伝も描ききれない美人だという。逆に、当時美人画の代表が宗理、文筆の代表が山東京伝だとしているのである。いわゆる宗理風美人は、細身で長身、瓜実顔の富士額、首を曲げ、柳腰の体を少しよじったたおやかな姿とされている。

★戯画「文鳳画」（河村文鳳?~1843）の画風（漫画風のコマ絵の集成）を北斎も見たか。

●黄表紙『人間万事二一天作五』（1月。二冊。通笑門人道笑作。群馬亭画注。山口屋版）

※天明6年（1786）の『二一天作二進一十』の改題再摺本。題簽に「庚申新板」とある。

注）「群馬亭」号が使われているが、天明6年（1786）に使用したものをそのまま継続したもので、この年まで使用したものではない。

●黄表紙『竈將軍勘略之巻』（正月。儉約と古兵法書『三略の巻』注のもじり。中本三冊。時太郎可候自画作。北斎の自画作。曲亭馬琴の手直しあるか。蔦屋重三郎版。慶応義塾図書館/国立国会図書館蔵）

注）三略：中国の兵法書「武経七書」一つ。『黄石公記』『黄石公三略』とも。

※巻末の北斎の蔦屋重三郎宛ての舌代（口上書きのこと）には、曲亭馬琴を頼りにしている文言がみられる。

「舌代 不調法なる戯作 仕 差上申候。是にて御間に合候はゞ、何卒御覧の上、御出板可被下候。初而之儀に御座候得ば、あしき所は、曲亭馬琴先生へ御直し被下候様、此段よろしく奉願候。又々当年評判すこしもよろしく御座候へば、来春より出精仕、御覧に入れ可申候。右申上度、早々不具。十月十日 蔦屋重三郎（筆者注：婿養子勇助が継いだ二代目）様参らせ候」（句読点・ルビは筆者による）

棚橋正博は上記舌代に「初而之儀」とあることから「竈將軍勘略之巻」が北斎の黄表紙挿絵の初めであり、天明年間に使用された戯作名の「是和齋」「魚仏」「白雪紅」は北斎ではなく（筆者注：「白山人可候」も含むか）、従って天明年間での北斎作の黄表紙はないとする（『黄表紙総覧 中編』・『日本書誌学大系 48』に所収：WEB「浮世絵文献資料館」より）。

北斎が黄表紙に関わったのは安永9年『驪比翼塚』からである。従って、天明年間では北斎の黄表紙挿絵はないと主張しているものと思われる。このことについて、飯島虚心は「按ずるに『初而之儀云々』、戯作をなすは、初めてにあらず。現に是和齋といへる頃の

戯作注あり。蓋し鳶屋の注文にて出板するは、初めてなれば、謙遜してかくいへるなるべし」と述べている（p 60）。

注）戯作あり：天明元年の黄表紙『本性銘暑 有難通一字』を指している。

安田剛蔵「北斎の黄表紙(一)是和齋、魚佛の研究」（1971『浮世絵芸術』29巻 p 17-26）では、是和齋と魚佛は同人異名で、北斎の別号としている。

【北斎の最も早い時期の自画像】

※下巻最終に、巻紙などを乗せた机の前で、羽織を着て両手を突いた坊主頭の人物が描かれている。この頃の自画像といわれる。



鳶屋重三郎宛舌代及び自画像（竜將軍勸略之巻 国立国会図書館）

●狂歌絵本『東都名所一覽』（1月。色摺大本。乾・坤の二冊。浅草庵市人撰。全21図。画工北斎辰政。鳶屋重三郎版。乾巻各冊25.0×17.8、坤巻各冊26.0×17.5 国立国会図書館/大英博物館/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/フリーア美術館：プルヴェア・コレクション/メトロポリタン美術館蔵）春夏秋冬に配列して、各図の上部に数名の狂歌が記される。

※『東都勝景一覽』（上下二冊。奥付に、画工北斎辰政 彫工安藤円紫とある。25.7×17.3 大英博物館/ボストン美術館/フリーア美術館：プルヴェア・コレクション蔵）題で、文化12年(1815)に、鳶屋重三郎から版を譲り受け、菱屋金兵衛版（須原屋伊八合梓）として改題再摺される。天保11年（1840）9月に須原屋茂兵衛版でも改題再摺される。出版事情には考証の余地がある。

浅草庵その他の狂歌が全ページに記される。

乾巻（見開き2ページの図）

☆〈品川〉

※海辺で「千種」と大書きした凧を頭上に上げる子ども。袷姿の侍に袴を履かせようとしている女。その前で腰をおろして煙管で一服している男の図。



☆〈梅屋舗〉

※亀戸・梅屋敷の景。梅の木側の休み処で腰掛けて煙管で一服している男。揚帽子（角隠）を被った武家の女房と女中、お供の男が二人の図。一人は荷物を担いでいる。

梅屋敷（日本浮世絵博物館）

☆〈三囲〉

※雪を被った大傘をかざして何かを話す男と女の足元に三囲神社の雪を被った石の鳥居が見える。鳥居は隅田川の堤より下にあったことで有名。遠景に待乳山が描かれる。

☆〈王子〉

※右側に「西ヶ原」左に「左おうじみち」と書かれた道標のある分かれ道で、荷物を持ち合う旅姿の二人武士。大小二本の刀を差している。その前を行く御高祖頭巾の女と連れの男が振り返っている。腰をおろして草鞋を履こうとしている百姓。その傍らに籠と鍬が置かれている。

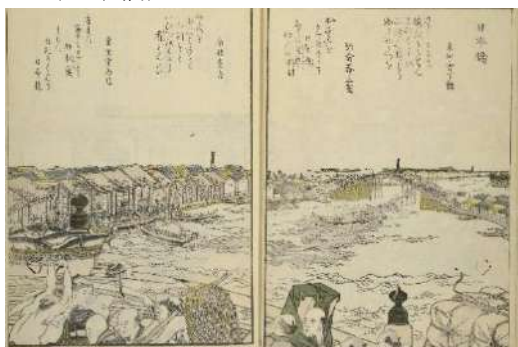
☆〈飛鳥山〉

※桜咲く木と緑の松の間に敷いた毛氈の上でくつろいで花見をする男女。大きな碑文注の文字を読む三人の男。桜の木の前の水売りから買おうとしている男。肩に箱を担いだ寿司売りの男等が描かれる。注) 碑文：元文 2 年 (1737)、飛鳥山の桜を名所とした将軍吉宗を顕彰するために立てられた石碑。幕府儒臣の成島道筑(錦江)の詩文を刻したもの。



飛鳥山 (日本浮世絵博物館)

☆〈日本橋〉



※前景に、魚河岸からの魚を両手で支え挙げて運ぶ男など、日本橋を渡る人々の一部を描く。日本橋は擬宝珠のある部分のみ描く。近景から遠景の江戸橋にかけて、隅田川の流れと川岸に並ぶ蔵を配置した図。

日本橋 (日本浮世絵博物館)

☆〈亀井戸天神〉

※藤棚のある天神の中庭の落葉を掃き集める男と、何かを指示する烏帽子を被った神官の図。

☆〈隅田川〉

※隅田川べりに突き出した舟乗り場で、女将と芸者が舟に乗った客を見送っている。芸者の着物の胸がはだけ、二人の着物の袖と裾が風に靡いている。

隅田川 (日本浮世絵博物館)



☆〈両国〉



※橋桁の間を

行き交う舟。飛沫除けの傘を開いて舟に乗っている男女と櫓を操る船頭。女の袖が船べりにかかっている図。屋根舟と大きな船の舳先も見える。

両国 (日本浮世絵博物館)

☆〈山王祭〉

※唐装束で馬に乗り、天秤量を操る男と、旗をかかげている男たち。右手前には「御祭礼」と書いた幟の半分が描かれている図。山王祭は、江戸城鎮守の山王社（日枝神社：現東京都千代田区永田町2-10-5）で6月15日に行われる大祭。神幸行列は将軍の上覧のため城内渡御が行われた。

坤巻（〈湯島天満宮〉を除き見開き2ページの図）

☆〈湯島天満宮〉

※天満宮と書かれた額を掲げる鳥居の下にいる男、鳥居に向かう石段を上る僧侶たち。右に本社の一部が描かれる図。湯島天神（現東京都文京区湯島3-30-1）とも称され、学問の神様菅原道真を祀る。1ページの図。

☆〈不忍池〉

※池に舟を浮かべ、蓮を取る親子。それを弁天堂の欄干から眺める男女の図。

☆〈新吉原八朔〉

※旧暦8月1日、三人の花魁が純白の着物で遊郭内を道中している。格子際に立つ按摩や、そぞろ歩く男たちの図。白装束なのは、徳川家康を偉勲を祀る際、大名、御家人、旗本たちが城内で白装束を着たことに因んでいる。

新吉原八朔（日本浮世絵博物館）



☆〈芝神明〉

※「神明宮」と大書きした横断幕を掲げた門前の群衆を鳥瞰画法で描いた図。門の両脇には武官の像がある。

☆〈深川八幡祭礼〉

※「祭礼 仲町 氏子中」が左右反転して描かれた幟を括りつけた柱の脇から蔵出しされた神輿と、それを担ぐ男たち。それを見る芸者衆の図。深川八幡宮（東京都江東区富岡1-20-3）は、富岡八幡宮と称され、寛永4年（1627）に創建。例祭は8月15日に行なわれ、3年ごとに本祭となる。日枝神社の山王祭、神田明神の神田祭と共に江戸三大祭りといわれる。

深川八幡祭礼（日本浮世絵博物館）



☆〈目黒〉

※目黒不動尊（現東京都目黒区下目黒3-20-26）境内に参詣する人々、石段を上る二人の男。寺社の屋根上からの視点で描かれる。

☆〈堀之内雑司ヶ谷会式詣〉

※干し柿の吊るされた休み処前を行き交う人々。左には馬が桶から水を飲んでいる図。会式は一般に御会式と呼ばれ、日蓮上人の忌日 10 月 13 日を中心に雑司ヶ谷法明寺（東京都豊島区南池袋3-18-18）や堀之内妙法寺（東京都杉並区堀ノ内3-48-8）で行われる法要儀式。図中の狂歌に「雑司ヶ谷」とあるので雑司ヶ谷の茶店の風景か。

☆〈愛宕山〉

※左ページに急な男段を上がる四人の男、右ページに女段を降りる女二人と、風呂敷包みを背負う男の図。

☆〈塚町〉

※塚町の芝居小屋で演じる歌舞伎役者たちの背中が描かれ、役者の前では立錐の余地なく見物している観客の頭が描かれた図。塚町は、現在の東京都中央区日本橋人形町3丁目付近。中村座があった。

塚町（日本浮世絵博物館）



☆〈神田明神〉

※神田明神の石段を上り、鳥居の下に上半身を現わした赤子を背負う母親。着飾った娘たちが七歳の帯締めめの祝いのため鳥居の脇に立っている。左側の休み処では三歳の祝い用に子供に袴を着せている母親と娘。狛犬がこちらを睨んでいる図。

神田明神（日本浮世絵博物館）



☆〈浅草年市〉浅草寺境内の年の市の賑わい。だるまや年始飾りを買った人々や、寺から群衆を眺める男たちの図。

●狂歌絵本『春帖』（1巻。北斎画。鸚鵡齋

貢撰。桂林堂序。淮南堂行澄編。東北大学附属図書館蔵）

●狂歌絵本『あなた四方の春』（この頃か。撰者不明。北斎、鳥文齋榮之等画。版元不明）（八木書店『江戸の絵本』所収・マティ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち」p 289より）

●狂歌絵本『狂歌三十六歌仙』（着色 36 図大本一冊。画工名なし。宗理様式の特徴を有しているところから北斎と認められる。千穂庵三陀羅法師〈赤松正恒〉編。西村屋与八版。葛屋重三郎版、西村新六版説あり。すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/国立国会図書館蔵）

※序文末尾に「はつ春」とある。千穂連の狂歌作者の仮装した像を描く。刊行は、寛政 9 年（1797）、10（1798）年の説（安田剛蔵『画狂北斎』p 242）や文化元年（1804）説あり（『年譜』）。

●絵本『屋方田の穂並』(一冊。漆山又四郎(天童)『木版挿絵本音順目録』坤の部には「北斎 榎本珍盈編 寛政十二」とある。「早稲田大学図書館古典籍データベース」より)

●艶本『好色堂中』(色摺六ツ切判 12 枚組一冊。助兵衛山人。国際日本文化研究センター蔵)

※画師については、礮川亭永理説(浅野秀剛)説がある(『絵入春画艶本目録』p137)。

※序「それ陰陽和合の事は、千早振神代のいにしへ、天の浮橋のころび寝に、男女女神のちよんの間より、貴きもすき、賤しきも好む事とはなりけらし。御れば春にひらく花よりも、秋に清き月よりも、この道ほど楽しきはあらしかし。茲に、或好人が、筆をふるひし、四季おりおりの、絵すさみの一卷の、冊子となしぬ。見る人涎を流して、閨の睦言の種にし給へと、助兵衛山人、股くらをむしつかえて、好色堂中に序す。かのへさるのむつまじ月ひつ書く」(跋「雁高庵題」ルビは筆者)。

跋文の「雁高庵」は、北斎が後に艶本に使用した隠号「紫色鴈(雁)高」を思わせる。

●俳諧本『俳諧四時句草紙』(一冊。宗理改北斎辰政画)「北斎版本リスト(下)溝口康麿〈「日本浮世絵協会会報」39号〉北斎は一図のみ描くという。『年譜』所収)。

●不明『初笑い』(一冊。宗理改北斎画)北斎は一図のみ描くという(「北斎版本リスト(下)溝口康麿〈「日本浮世絵協会会報」39号〉『年譜』所収)。

●不明『花の上』(一冊。宗理改北斎画および北斎辰政画)北斎は二図描くという(「北斎版本リスト(下)溝口康麿〈「日本浮世絵協会会報」39号〉『年譜』所収)。

●肉筆画「白梅図」(着色一幅。北斎筆。印辰印政)

※横判の画面の左下から右上に梅の木が伸び、小枝に白梅が咲いている。漢画の趣。

【画狂人北斎号登場か】

●扇面画「富士図」(夏頃。紙本墨絵扇面。画狂人北斎。印辰印政。太田記念美術館：鴻池コレクション蔵)

※太田章(蜀山人)の賛に庚申夏日とある。鋭角的な白い富士山の手前に松と思われる墨の書き込みがある。

※『年譜』では「この頃、画狂人北斎を号すという見解あり」として、「北斎肉筆画における「亀毛蛇足」印時代」浅野秀剛『肉筆浮世絵大観 東京国立博物館Ⅱ』所収 講談社〈平成7年〉の記事を参照している。そのうえで「ただし、作画は(蜀山人)の賛よりも後年になされたものとみられ、更に検討を要する」としている。

寛政11年(1799)の摺物「蛸籠と団扇」では印号で「画狂人」を使用している。

●絵暦「三美人図」(北斎画)

※黒い三味線箱の横にある風呂敷の冊子に「庚申」(寛政十二年)の干支が描かれる。寛政10年(1798)の「三美人図」とは別画。

●絵暦「土農工商」(小判墨摺4図。北斎。リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p308による)

☆〈銀を計る婦人図〉

※図右上に「商」と書かれている。帳場で天秤てんびんを使って銀を計っている女。「定小判六十目」とある。

※明治26年に鎌田善次郎版「士農工商」（北斎）もある。

※他に年代不詳の「士農工商」（4図。無款）がある（「士」と題された画は、烏帽子姿の侍が座って書を読む図。「農」と題された画は、刈り取った草の束の上に腰をおろした農

夫が書を読んでいる図。「工」と題された画は、版木を彫っている彫師の図。「商」と題された画は、店の帳場で算盤を使って計算している二人の男の図）。

●絵暦「楊枝屋店先」（着色。先ノ宗理北斎画。13.2×18.2 すみだ北斎美術館：ピーター・ターナー・コレクション蔵）

※木の台の上で房楊枝の先を木槌で叩き柔らかくしている女。製品の楊枝が立てて並べてある棚の後ろでは、大きな楊枝を持って座っている人形が置いてある。盃の中に浮かぶ桜の花弁と数字が大の月（一、三、四、五、七、九、十一）を表している。「あさくさの餅ハ喰すと侍の高楊枝から春の買初め羽金鉄人」、「楊枝屋の猿丸太夫奥山にもみち袋も妹か縫ひそめ岩井有常」、「名物に自慢の髭を撫ながらかみそりつかふ浅草の海苔四方歌壇」の狂歌が添えられる。浅草寺境内には楊枝屋が多くあったといわれる。

●絵暦「猿廻し」（十八切判。無款。12.7×8.2 東京国立博物館蔵）

※猿回しの女が肩に猿を乗せ、布を頭から被っている。手には猿を操る棒状の道具を持っている。側で子どもが右手を上げてはしゃいでいる。

●絵暦「子供に猿面かぶせ」（十八切判。無款。13.0×8.6 東京国立博物館蔵）

※母親が子どもに猿の面をかぶせ、頭の後ろで紐を結んでいる。梅の木に登った猿が娘を見下している。猿の着た半纏に大の月、娘の帯に小の月が示される。

●摺物「源氏三ヶ伝/ねのこの餅」（小判着色。宗理画。日本浮世絵博物館蔵）

※梅の木が描かれた屏風を背にして小上がりの畳に座る男と遊女。その前で男が指差して話しかけている。「姫小松けふの子の日にひかる君、千代もつきせず、ちぎる若餅洒落人」「●初の蒲団も三つが一ツ夜着、ねのこのもち注と明る春の宵四方真顔」の狂歌が記される。

注) ねのこの餅：子の子の餅。

『源氏物語』（葵）に子の子餅に関わる場面がある。陰暦10月最初の亥の日に食べる「亥の子餅」は、万病を防ぎ子孫繁栄が叶うと言われる。光源氏と紫の上が一夜を過ごし、翌日の亥の日に「亥の子餅」が振る舞われたが、翌日は一夜を過ごしてから三日目で、三日通うと「三日の餅」を食べて初めて結婚が成立する習慣を念頭に入れた源氏は「この餅は明日の餅に残してほしい」と惟光に命じる。惟光は、明日は「子の日」なので、「子の子餅」で、源氏が三日目の結婚を意識していることを察したという内容からの着想した絵。遊女との親密な関係を正月の日に設定した絵にしている。

●摺物「狂言韃猿」（着色摺物。画狂人北斎画）

※狂言「^{うつぼ}鞆猿」からの着想。矢を入れる筒に動物の皮を巻いた^{うつぼ}鞆を作るため、大名が猿引きに小猿を求めるが、小猿の無心さに心を許す。猿引きはお礼に小猿の舞を披露するという筋書き。図は、立烏帽子を被った大名の前で、小猿に棒を持たせて躍らせる^{かみしもすがた}袴姿の猿引きがいる。浅草庵音芳の賛が記される。

●摺物「^{うま}帰農図」（「^{うま}馬を牽く農夫」「^{くさか}草刈りの帰途」とも。横長判着色一枚。先ノ宗理北斎画。20.0×55.0。島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館蔵）

※親子だろうか。農夫の男が馬を牽き、子どもが馬に乗って、小さな板橋を渡っている。農作業の後にのんびりと帰る様子。図右の遠景に描かれた山と、塔及び大きな笠のようなものが何かは不明。

帰農図（東京国立博物館）



●摺物「^{つばにお}坪庭の鶯」（この頃か。着色。先ノ宗理北斎画。14.0×20.3 北斎館蔵）

※開け放した座敷の柱によりかかり、^{かんざし}簪に手をやりながら外を見

ている娘。畳には三味線と撥と教本らしきものが重ねて置かれている。庭には梅の枝に鶯がとまっている。縁側に片足を掛けて上ろうとしている^{はしほうず}茶子坊主頭の子どもが凧を手にして鶯の方を指さして見ている。「我耳へたこの入ほど聞まほし つぼのうちへもきなく^{うぐいす}鶯 八筭舎兼一」の狂歌にある「耳にたこ」に凧をかけている。

●摺物「^{かんじよ}官女の宮詣」（「^{みやもろ}宮詣の官女図」とも。1月。着色。先ノ宗理北斎画。林季亭面吉の狂歌に「^{あみ}甲孟春」とある。20.0×13.3 島根県立美術館蔵）

※長い髪を垂らした官女が供の女を連れ、鳥居をくぐろうとしている。黒々とした松の幹の陰に石燈籠が描かれる。

●摺物「^{せつちゆうにびじん}雪中二美人」（この頃か。横中判着色。先ノ宗理北斎画。12.4×16.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館蔵）。

※雪が止み、大きな傘を広げて立つ女と、その脇で着物の裾を片手で引き上げ、左手を上げていた女。「梅かゝをやりすこすともうしろ髪 ひきかへしてよさそふ^{はるかぜ}春風 楽聖庵光丸」、「^{じようもん}定紋のかたはミ草も傘に うけたる雪の下に生ふらん 楽聖庵光丸」の狂歌が記される。

※本図は三枚続きの中央の図。左図は縁側の男女を描き、右図に傘をたたむ男を描いているという（『ピーターモース・コレクション北斎図録』による）。



雪中二美人（すみだ北斎美術館：@HokusaiMuseum より）

●摺物「佃住吉の図」（春。先ノ宗理北斎画）図中に「申の春」とある。「●時之相場」と書かれた札が下がっている。同図は、「津和野藩伝来摺物」（島根県立美術館：永田コレクション蔵）にある。本稿「寛政年間」項を参照。

●摺物「門前の往来」（横長判。先ノ宗理北斎画。東京国立博物館蔵）

※長唄の秋の発表会の案内。図は、松の木のある寺社の門前で、揚帽子を被り傘を持つ女と、子どもの両手を持ってあやしている母親と目を合わせている。側には「富士」と染め抜いた風呂敷包を首から掛け、閉じた傘と土産物らしいものを持っている男がいる。



門前の往来（東京国立博物館）

●摺物「絵馬堂」（3月。大奉書全紙判。先ノ宗理北斎画。38.3×51.5 エドアルド・キオッツオーネ記念ジェノヴァ東洋美術館蔵）

※深川八幡宮か。錦屋喜三郎主催の、深川芸者を中心とした長唄の会の案内状。上半分に、松の老木のある絵間堂見物の男二人、女二人と子ども一人を描く。子どもは女の後ろにすがりついている。堂の上には大黒点の絵馬、梅の木の絵馬、牛車の絵馬などが掲げられている。



絵馬堂（ジェノヴァ東洋美術館）

下半分に、錦屋喜三郎主催、三番叟の番組が逆さに記される。

●摺物「松風台七賢之内」（1月。〈杯を持つ女〉の前掛けに「庚申」（寛政12年）を示す書き入れがある。小判縦着色。北斎画。21.5×8.5 すみだ北斎美術館とターモス・コレクション蔵）

※朱楽菅江側の判者鶴立亭々（松風台亭々）一門による歳旦物。七人の美人を竹林の七賢人に見立てる。『原色浮世絵大事典』8巻（大修館書店）では、『北斎漫画』十編に竹林の七賢人があるので、それとの近似により誰に見立てたか推定できるとしている。

『伝記画集 北斎』（リチャード・レイン）では全8図とする（p305）。

図右より、

- ☆〈杯を持つ女〉（阮咸）杯を持って立っている女。前掛けに「庚申」と描かれている。
- ☆〈文を隠す女〉（阮籍）揚げ帽子を被った娘が手紙を背に隠して立っている。
- ☆〈本を頭に立てる女〉（山濤）振袖の娘が右手で本を頭の上に持ち上げて立っている。
- ☆〈文を読む女〉（向秀）手拭いを被り、端を銜えて巻紙の手紙を立ちながら読んでいる。

☆〈羽織を畳む女〉（不明）立兵庫のような鬘に櫛と簪を一本挿した女が、白地に模様のある羽織の襟を銜え、両手を広げて立ちながら畳もうとしている（立命館大学蔵）。

☆〈本を持つ女〉（菘康）

☆〈箒を持つ女〉（不明）箒を持って、左手を簪に手をやりながら、少し前屈みに立っている。

●摺物「遊亀図」（春。「亀の図」「遊亀と水に映す梅」とも。大奉書着色。東陽北斎画。

印三径。画部分 19.1×51.2 全体 38.2×51.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※四匹の亀が重なって甲羅干しをしている。右にはこれから陸に上がろうとしている一匹



の亀。水面には梅の花が咲く木が映っている。下半分は折り返す仕様で、狂歌が逆書きとなっている。狂歌部分の末尾に「庚申春」とある。

遊亀図（太田記念美術館：blog.goo.net.jp より転載）

●摺物「扇屋店先」（紙本着色一枚。先ノ宗理北斎画。14.1×28.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※鹿津部真顔率いる四方側の春興摺物。巻頭の狂歌の中に「さるのとし玉」（寛政12年）とある。図は、扇屋の店先で店の女が、骨に挿す前の折った扇の地紙を持っている。その脇には、折る前の地紙を入れる黒い扇型の箱が置いてある。客の女が小上がりに腰を下ろして、それを見ている様子を描く。店先の神棚の下にある大きな看板には、狂歌の四方側の紋である「扇巴」が描かれている。

●摺物「海辺の社前」（全紙判着色。先ノ宗理北斎。19.2×52.4 東京国立博物館蔵）

※享和元年～文化2年に再摺される。再摺版では「先ノ宗理」が削られ、男が担ぐ風呂敷包の様子が、桐から桜草に変えられて、富本節の演奏会案内となっている（日本経済新聞社2005『北斎展図録』より）。

※深川芸者の舞踏上演

番組を記したもの。図

は、海辺の社前で煙管

を使いながら歩く二人

の芸者と、風呂敷の荷

物を棒に結んで担ぐ男

がいる。その前には釣

竿を持った二人の子どもが描かれる。



海辺の社前（東京国立博物館）

●摺物「目かくし」（すみだ北斎美術館蔵）

●摺物「新春の手習い」（すみだ北斎美術館蔵）

●摺物「針仕事」(1月。「人形を縫う美人」とも。十二切判着色。先ノ宗理北斎画。18.7×10.0 日本浮世絵博物館蔵)

※正月を迎え、面長の女が、何かの玩具を縫う様子。右手に持った針に髪の毛の油をつけようとしている。「明ぬれハ はや縫そめの 針仕事 さても手まめに 申の初春 龍致堂 袴裏成」の狂歌が記される。

●摺物「三方と屠蘇を持つ二人の官女」(先ノ宗理北斎画)

※「申ノ春」とある。千穂亭の狂歌が記される(『年譜』による)。

●摺物「女刀鍛冶」(先ノ宗理北斎画。島根県立美術館蔵)

※「申のとし」とある。水亭行也ほかの狂歌が記される(『年譜』による)。

【以下寛政年間】

勝川春朗、紫色鷹高、春朗、勝春朗、宗理、北斎宗理、叢春朗、不染居北斎、東陽北斎、北斎、可候、歩月老人北斎、絵師北斎、画狂人北斎、ほくさゐうつす、先ノ宗理北斎、

宗理改北斎辰政、印辰、政、完知、師造化、北斎、宗理、百林、画狂人、三径、辰政

●艶本『繪本 春の色』(寛政4年～6年〈1792～94〉。勝川春朗画)〈リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p337による)

※『絵入春画艶本目録』(白倉敬彦著、平凡社 平成11年:2007)には記載なし。

●艶本『會本 色の嫩』(寛政5年～9年〈1793～97〉。紫色鷹高注画)〈リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p337による)

注)紫色鷹高:北斎の隠号。

※『絵入春画艶本目録』(白倉敬彦著、平凡社 平成11年:2007)には記載なし。

●狂歌絵本『掛合狂歌問答』(寛政4年～6年〈1792～94〉。小本。勝川春朗画。版元不明)

※一首の狂歌の中で江戸と京都が争い、そこに風俗画を添えるというもの(2010/1/23～3/8 西尾市:岩瀬文庫平成悉皆調査中間報告展7『こんな本があった7』特別講座「今年度の調査から分かったこと」塩村耕氏:名古屋大学大学院教授/岩瀬文庫資料調査会会長による)。

●錦絵「風流江戸百日の出」(寛政元年～2年〈1789～1790〉。縦中判錦絵。揃物か。春朗画。57.0×46.0 中右コレクション/ベルギー王立美術館蔵)

※「百」と題しているが(愛宕)1点のみ確認されている。

「江戸百日の出」愛宕(ベルギー王立美術館)

●狂歌絵本『題名不明』(寛政9年～10年〈1797～98〉。宗理画)





☆〈太郎月〉のみ確認。着色。折烏帽子を被り扇子を持ち、長袴の衣裳を着て踊る男と、蛇の目傘をかざし、足を上げて踊る男の萬歳図（『北斎大全宗理期』Kindle版による）。

●相撲絵「高根山与一右エ門 千田川吉五郎」（寛政2年～5年〈1790～93〉）。細版。春朗画。版元未詳。メトロポリタン美術館蔵）

高根山与一右エ門 千田川吉五郎（メトロポリタン美術館）

図は、高根山が千田川の右肩から腕を回し、左手で千田川の右手首を握り、千田川は左上手を取っている。

●相撲絵「花頂山五郎吉 和田ヶ原甚四郎」（寛政2年～5年〈1790～93〉）。細判。『在外秘宝 葛飾北斎』所収「葛飾北斎作品目録」ピターモース編による。制作年は筆者の推測）

●相撲絵「雷電為右衛門 盤井川逸八」（寛政2年～6年〈1790～94〉）。細判。『在外秘宝 葛飾北斎』所収「葛飾北斎作品目録」ピターモース編による。制作年は筆者の推測）

●錦絵「武田二十四将画尽新版」（寛政2年～4年〈1790～92〉）。間版。春朗画。蔦谷重三郎版。32.2×21.2 エト・アルト・キョツオ・ネ記念ジェノヴァ東洋美術館蔵）

※一枚絵を分割して24将を収める。

〈秋山伯耆守〉 〈穴山梅雪〉 〈真田源太左エ門〉 〈曾根下野〉 〈原隼人〉 〈法性院信玄〉
 〈武田勝頼〉 〈武田逍遥軒〉 〈高坂弾正〉 〈穴山梅雪〉 〈馬場美濃守〉 〈土屋右衛門〉
 〈山縣三郎兵衛〉 〈三坂勘解由〉 〈内藤修理〉 〈多田淡路守〉 〈武藤喜兵衛〉 〈甘利左衛門〉
 〈真田兵部〉 〈小山田兵部尉〉 〈横田備中守〉 〈原美濃守〉 〈小畑山城入道〉 〈山本勘助入道〉（順不同）

●錦絵『仁和嘉狂言注』（寛政2年～4年〈1790～92〉）。「吉原仁和嘉」とも。縦中判揃物。16図が確認されている。春朗画。蔦屋重三郎版。各約21.5×15.3

注）俄狂言は、吉原の廓内で八月に九郎助稻荷の祭礼として、芸者や遊妓などが様々な狂言を披露しながら練り歩く。この日は花代を割増にする。

☆〈正月 禿万歳〉（すみだ北斎美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※烏帽子を被って踊る二人。禿は片足を上げて鼓を打っている。

正月 禿万歳（すみだ北斎美術館）

☆〈二月 ゑま売の所作〉（すみだ北斎美術館:ピターモース・コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）





※三人の若衆が扇子を持って踊るような所作をしている。

二月 ぬま売の所作 (すみだ北斎美術館)

☆〈三月 赤坂やつこぎやうれつ〉 (島根県立美術館：永田コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※刀を差した奴と小奴が、人形の男が担いでいる花飾りをした駕籠を手で支えて行列している。それに付き添うように揚帽子(角隠し)を被った女が二人歩いている。

三月 赤坂やつこぎ



やうれつ (すみだ北斎美術館)

☆〈三月 万度 ひな道具〉 (島根県立美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※万度祓注の祓串を立てて支える頬かむりの男と四人の男たちが揃って立っている。

注) 万度祓：中臣の祓の詞を神前で何度も読み、汚れを祓い清める神事。祓をした串を神職などが家々に配り歩いた。

☆〈三月 花すまふ うつくしきしゅこう〉 (すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※三人の芸者が花の枝を持って、足を上げて踊っている。

三月花すまふ (島根県立美術館)



☆〈四月 しゃかたんじやう〉 (すみだ北斎美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※釈迦の誕生。



☆〈五月の部 三番叟の所作立て〉 (島根県立美術館蔵：永田コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※三番叟を踊る三人の男。三番叟の日の丸の付いた烏帽子を被る中央の男が、立って見得を切っている。

五月の部 三番叟の所作立て (島根県立美術館)

☆〈五月 花笠踊〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

☆〈五月の部 すゞめおどり〉 (島根県立美術館：永田コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※三人の芸者が長い花束を肩に担ぎ、花笠を被って踊っている。

〈五月 花笠踊〉と同一作品とする見方もある (『ピーターモース・コレクション北斎図録』による)。

☆〈六月 御こしあらひ〉

※丸杵に三の字が書かれた荷物箱を支える天秤棒に両腕を掛けて顎を乗せている男、天秤の左の桶に手を掛け、傘を閉じて持っている男、その後ろで天秤棒を担いでいる男、更に手拭を下げて持っている男などが描かれる。

☆〈七月 盆おどり きれいなりに〉（島根県立美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※四人が鈴輪を持って踊っている。

☆〈八月 びくに〉（島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※一文字笠を被った比丘尼の女二人と三味線を弾く女。その間に柄杓を持つ寄進集めの子ども。

☆〈八月 しゝのきやり 大いさみ〉（すみだ北斎美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※獅子頭を扱う五人の遊女。半天の背には「俄」の文字が染められている。

八月 しゝのきやり 大いさみ（すみだ北斎美術館）

☆〈九月 じどうのおとりやたい〉（島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）



※菊の花が飾られている舞台上、袴をつけた若衆姿の男が蝋燭を立てた燭台を持ち、その前で足を挙げて踊る子ども。菊慈童を描く。おどり「慈童の やたい きれいきれい 長うた、萩江藤四郎、藤八」の書込みがある。長唄の案内となっている

九月 じどうのおとりやたい（島根県立美術館）

☆〈同 秋のこま〉（すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※遊女五人が秋の農作業姿で働いている。二人は麦や大豆などを脱穀する唐棹を操っている。側に馬が繋がれ顔を覗かせている。

☆〈十二月 もちつき〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

●錦絵「俳諧おだ巻」（寛政元～2年〈1789～1790〉。縦中判着色。春朗画。蔦屋重三郎版）

※題名は、元禄4年(1691)『俳諧をだまき綱目大成』（溝口竹亭著。俳諧連句の解説書。早稲田大学図書館蔵）からのものという

☆〈植物の部〉（21.3×15.2 すみだ北斎美術館蔵）

※片膝をついて長い髪を梳る女。その側に立って着物を着ようとして紐を持っている女。朝の身支度をする二人の女。

「俳諧おだ巻」植物の部（早稲田大学図書館）



☆〈生類の部〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※洗濯ものを干す婦人と、縁台に腰掛けながらそれを見る婦人と子ども。

【以下三作は揃物か】

●武者絵「梶原源太景季」（寛政3年～5年〈1791～1793〉。中判着色。春朗画。蔦屋重三郎版。20.5×15.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※梶原源太景季は、平安末期～鎌倉初期の武将。源頼朝に従って、治承・寿永の乱で活躍した。図は、能「籬の梅」に取材。寿永3年（1184）、生田の森での源平の戦いで、景季が梅の枝を籬（矢を入れる具）に差して戦った故事によるもの。兜を脱ぎ、ざんばら髪で刀を振りあげる鎧姿の景季の背後には梅の木が描かれる。

●武者絵「朝比奈三郎 平ノ義秀」（寛政3年～5年〈1791～1793〉。中判着色。春朗画。蔦屋重三郎版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）



※「蔦重新板」と書かれた酒の菰樽に両肘をかけ、隈どりの顔をして大煙管を銜えた三郎と、その側にいる青鬼の図。朝比奈三郎は、鎌倉時代初期の武将。

朝比奈三郎 平ノ義秀（島根県立美術館）

●武者絵「能登守教経勇力」（寛政3年～5年〈1791～1793〉。中判着色。春朗画。蔦屋重三郎版。アダチ伝統木版画保存財団蔵）

※船の上で、鎧姿の教経が二人の武者を抱え込んでいる図。

●柱絵「瀧を潜る虎」（寛政元年～5年〈1789～93〉。柱絵判着色。勝春朗画。ホノルル美術館蔵）

※瀧水を浴びながら正面を見据える虎の図。



●錦絵「金太郎に鷲と熊」（寛政元年～4年〈1789～92〉。大判。春朗画。西村屋与八版 37.1×25.0 ベルリン東洋美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※左手で熊の首を押さえつけ、右手で鷲の足を文字通り鷲づかみにしている図。

金太郎に鷲と熊（太田記念美術館）

【春朗期の最も早い肉筆画か】

●肉筆画「婦女風俗図」（寛政4年～6年〈1792～94〉。紙本着色二幅。無款。右：

107.0 × 52.8 左：

107.1 × 52.6 島根県立美術館蔵）

※各一面に4人ずつの婦女を描く。右幅図には、赤い着物の振袖新造、白い着物で前帯の花魁、茶の着物で片膝を立てた町家の女房、黒の着物に赤と緑の襦袢見せて後ろ向きの女。

左幅図には、花柄の着物の御殿女中、横縞の着物の町家の女房、座っている茶と白の着物の娘二人が描かれる。 婦女風俗図（島根県立美術館）



※「春朗」の款はないが、「鍾馗図」とともに春朗期の最も早い肉筆画（本画）と見られている。版下絵としての肉筆画は『風流東都方角』（天明5年～天明7年）がある。

●錦絵「恵比寿と大黒の万歳図」（寛政5年～6年〈1793～94〉）。団扇絵。墨摺。叢春朗画。伊場屋仙三郎版。次期「宗理」を想起させる画風といわれる。東京国立博物館蔵）

※正月の注連飾りの下がる前で、恵比寿が扇を口に当て、桐の模様の上掛けを着て足を上げて踊る。その横で大国天が、打ち出の小づちを鼓代わりに叩いて拍子を取っている。

「春風に雪も氷もとくわかの 御万歳にハ笑ふ山く 松風友成」の狂歌が記される。 恵比寿と大黒の万歳（東京国立博物館）



●錦絵「女見立八橋」（寛政7年～11年〈1795～99〉）。横長判着色。宗理画）

※烏帽子を被った花魁二人が板を渡した八橋に立っている。近くで烏帽子姿の振袖新造が、アヤメの咲く水辺に下りている。『伊勢物語』「八橋」の場面を見立てている。鈴木春信も「見立伊勢物語（八つ橋）」（明和4年頃：1767）を描いている。

●肉筆画「蛤売り図」（寛政9年～10年〈1797～98〉）。紙本縦長判淡彩一幅。北斎宗理画。印辰印政。94.3×27.9 すみだ北斎美術館蔵）

※平成31年（2019）4月24日「読売新聞」（朝刊）で、新たな肉筆画の発見が報じられた。すみだ北斎美術館が平成30年（2018）に画商から購入したもので、それ以前に保管されていた経緯については不明という。

画題は画材からつけたものという。蛤を入れた箆を下げた棒手振りが、笠を持ち腰蓑を付けた姿で杖をつき、立ちながら休んでいる図。

図上部に月が薄く描かれ、大田蜀山人の賛「蜆子かと思ひの外の蛤は げにくりはまな思ひつき影」が記される。「ぐりはま」とは、貝合わせで蛤の貝を使った遊びからできた言葉で、食い違うことやあてが外れることをいい、「蜆かと思ったら蛤だなんて、まさに〈ぐりはま〉と、思いついたよ」の意だと「北斎のなりわい大図鑑」展(2019年4月23日～6月9日 すみだ北斎美術館)で説明している。なおこの賛は、享和元年(1801)に大田南畝が大坂で蜀山人を名乗り、翌2年4月に江戸に帰っているところから、享和2年以降の着賛と推測されるとしている。

また、文化7年（1810）頃の南畝の狂歌集『あやめくさ』にある記述には「月のもとにて蜆子和尚がはまぐりすくふかたかきたるに 蜆子かと思ひの外のはまぐりは げにくりはまに思ひつき影」とあり、月が描かれる点で一致しているところから、本図は、唐(618～907)末の禅僧・蜆子和尚からのモチーフを示唆しているとされる。蜆子和尚は、居所を定めず常に同じ法衣をまとい、川辺で海老や蜆をとって食べたという。

「本図は表具を修復していますが、修復前の表具の題簽には「蜆売り」との記載があり、これまで「蜆売り」と思われてきたことが分ります。しかし、絵の描写からは北斎は



「蛤売り」として描いたと推測されます」（「北斎のなりわい大図鑑」展説明）と説明されている。蛸は黒だが本図では白っぽく大きいのもその根拠としている。

蛤売り図（すみだ北斎美術館）

●肉筆画「花魁と禿」（寛政7年～11年〈1795～99〉）。紙本着色一幅。宗理画。印宗理。85.7×33.0 ポストン美術館：ウリアム・スタージス・ビッグロー・コレクション蔵）

※典型的な宗理型美人像。細身で体をくねらせ首をかしげる花魁と、その後ろにつき添う二人の禿の図。花魁の着る打掛は、表面に飾り糸が無数に仕付けられ、前帯も黒地に縦線が強調されたものになっている。背景は黄色で塗りつぶされ、佩香園蘭丸（生没年不詳）の狂歌が添えられる。

花魁と禿（ポストン美術館）



●錦絵「四つ手網漁をながめる美人図」（寛政7年～11年〈1795～99〉か。宗理画。25.0×38.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

●巻物「鎌倉勝景図巻」（寛政5年～6年〈1793～94〉。絵半切注。木版着色紙本一卷。叢春朗画。21.0×893.0 島根県立美術館：永田コレクション）

注）絵半切：奉書を横に二つ切りにした横長のもの。本図は、約9mの長さに紙をつないだもの。厚手の奉書に、俳書の点取り用に描かれたものとされる、

※杉田（現在の横浜市磯子区）から鎌倉を経て江ノ島までの30図を巻物で描く。「文字や絵の描線部分は、後に墨で文字が描き込まれることを考慮して藍摺になるが、北尾蕙斎政美（鋏形溪齋）の『江戸名所図会』と同じく筆彩色が施され、黄、茶、緑、紅色が用いられている」と解説される（2019年『新北斎展図録』p48）。

「鎌倉勝景図巻」大仏：部分（島根県立美術館）

巻末に、松濤庵の漢文の序文が記され、朱色の丸枠の中に画工叢春朗 彫工山口東川と記されている。同図録によれば、杉田・六浦・切通・文学屋敷・土牢・大町村・いも神・北條屋敷・鷺搭・光明寺・大助城地・横手原・



建長寺・阿仏屋敷・化粧坂・円学寺・新井・稲瀬川・松岡・人丸姫搭・大仏・虚空蔵・

星井・見越嶽・長谷町・長谷寺・稲村崎・片瀬・七里浜・江嶋の順に流れるように描かれる。

●肉筆画「若衆図」（寛政7年～9年〈1795～97〉）。縦長紙本淡彩一幅。50.8×21.1 宗理画。印完知。フリーア美術館蔵）

※墨画に淡彩を施した画。傘を持ち、鹿の子絞りの着物に墨で描かれた羽織と黒下駄の姿で横を向いて立つ若衆。髪は、たばが突き出し、後ろ髪を結んで突き出した若衆髷の変形と思われる。賛があったという。

●肉筆画「巻物の亀」（寛政8年～9年〈1796～97〉）。紙本墨絵風着色一幅。北斎宗理画。

印師造化。32.4×22.8 北斎館蔵）

※巻物に乗りかかる亀の図。巻物の紐の朱色、巻物の裏側の薄い青以外は墨の濃淡で描く。

●肉筆画「寿亀図」（寛政8年～9年〈1796～97〉）。紙本墨絵風着色一幅。北斎宗理画。

95.1×27.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※北斎館蔵「巻物の亀」と同画趣。巻物に乗りかかる房の尾の瑞亀が吐く息の先に「寿」の字が霧のように描かれる。不断七持の賛「万代の亀の口からふく禄寿 みつそろひつる家そめでたき」が記される。

●肉筆画「娘図」（寛政7～11年〈1795～99〉）。紙本淡彩一幅。宗理画。印完知

24.5×39.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※横判いっぱいはこちらがわに寝そべて左足を投げ出し、右肘を突いて顔を左に向けてくつろぐ娘の図。



娘図（島根県立美術館）

●肉筆画「文福茶釜図」（寛政7年～11年1795～99）。紙本淡彩一幅。宗理画。印北斎印宗理 89.7×27.1 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※茂林寺（現群馬県館林市掘工町1570）の老僧守鶴の愛用の茶釜の湯がなくなることを見破られ、寺から逃げたという伝説に由来する。

図は、狸が墨染の法衣を着て、湯気の立った茶釜の前に立っている様子を描く。全体に墨画風な描き方。四方真顔の賛「しもつけの国とかやいとけふかく 茂りたる林しのうちに一ツ乃 宝物有是をのはすも自在にしてまたちゝむるも自在●● 嗚呼奇なる哉妙なるかな 文福の茶釜にはよき かなけありもとか 狸の金でつくれば」がある。

●錦絵「梅見の官女」（寛政7年～享和1年〈1795～1801〉。横長判着色。北斎宗理画。13.9×28.4。東京国立博物館蔵）

※柵に囲まれた梅の老木の脇で、娘が指差す方向に二人の官女が目を向けている。官女の着物の長い裾元には仕丁（雑役の男）が二人平伏している。

●錦絵「夜の往来図」宗理期（寛政7年～10年〈1795～98〉か。着色。北斎宗理画 29.5×13.6）

※図の右から、大きな魚を風呂敷からはみ出して持つ女、手拭の端を口に銜え、風呂敷包みを小脇に抱える女、手拭を被り芥子房の髪をした赤子を背負う母親、縁台の木杵を担ぐ頬かむりの職人、長半纏を着て手拭を頭から顎に結んだ若衆、烏帽子を被り、刀をさして大きな鈴を首からぶら下げ、「歳越」書かれた長提灯を持ち下駄を履いた男、山形の下に三の字が描かれた提灯を持ち、飲物を入れた箱を持つ男、帽子を被って正月飾りの枝を持って、向こうむきに歩く狂歌師らしき男、袋を肩にして「貸餅通」と書かれた帳面を持ち、「春」と書かれた提灯を下げて行く男等が描かれる。

●扇面画「寿の字を書く布袋図」（寛政7年～10年〈1795～98〉。

紙本扇面一面墨、一部着色。北斎宗理画。印百林。22.0×47.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※扇の右半分に、布袋が筆を持って、紙に「寿」の字を書いている図。筆と硯台と落款の印のみ朱色が施される。「寿」と書いた紙には小さく「北斎宗理画」と書かれ朱印が記されている。

印は判読が困難。2019年『新北斎展図録』では「百琳」としているが、北斎が用いた印は「王」偏がない「百林」が認められる。

画面左が空いているのは、後に賛を入れるためと思われる。扇面画（扇に描く絵）としては最も早い時期のものとされている。北斎は数種の「布袋図」を描いている。

●肉筆画「芋茄子と赤蜻蛉図」（寛政8年～文化10年〈1796～1813〉北斎画。印辰印政 サミュエル・ヒング・コレクション）

※元は画帖の一図。

●肉筆画「糸織りの母と子図」（「絹を紡ぐ女図」とも。寛政7年～10年〈1795～98〉。絹本着色一幅。北斎宗理画。印 印 85.1×31.1 メトロポリタン美術館蔵）

※椅子に腰掛け、手回しの絹の紡ぎ機を回す手拭を被る女。足元には土釜があり、繭を煮ている。赤い着物を羽織る子どもが釜の焚口の前にしゃがんで小枝をくべている。空にはほととぎすが三羽飛んでいる。



糸繰りの母と子図 (メトロポリタン美術館)

●扇面図「梅樹図」(寛政8年～10年〈1796～98〉)。紙本墨絵淡彩。扇面一面。宗理画。印北斎印宗理。上弦 46.2、下弦 21.3×17.3 フリーア美術館蔵)



※扇面右下から上部中央へ伸びる白梅咲く幹を描き、下に落款を記す。扇面左に鴻台彭卿の漢句の賛が記される。「北斎」「宗理」と印が並ぶのは寛政9年(1797)頃か。

●肉筆画「花魁図」(「おいらん道中図」とも。寛政11年～12年〈1798～1800〉)。紙本一幅。不染居北斎画。印画狂人。156.0×53.5 中右コレクション蔵)

※寛政8年の「花魁図立姿図」同様、横向きの花魁図は北斎の得意とするところ。横兵庫の髷を結った花魁が桶形提灯の側に立って何かを見ている図。狂歌が添えられる。打掛の裾に「寿」「福」の字。

※寛政10年頃の「風俗三美人図」(三幅対、北斎画。印辰政)の右幅図も殆ど同じ画趣。



花魁図 (中右コレクション)

●肉筆画「京伝賛遊女図」(紙本着色一幅。寛政10年～12年〈1798～1800〉無款。132×49.6 シカゴ・ウエストン・コレクション蔵)

※上記「花魁図」とよく似た画趣。違いは落款の有無、前帯の模様、提灯の模様と数ぐらい。二つの桶形提灯の側に立って何かを見ている図。山東京伝の狂歌が添えられる。



京伝賛遊女図 (ウエストン・コレクション)

●肉筆画「小野小町図」(寛政10年～享和元年〈1798～1801〉)。紙本着色一幅。北斎画。印辰政。110.1×38.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※十二単姿の小野小町が憂い顔で立って上空を見ている。図の上部には賛が書かれ、墨絵風に山に咲く桜が淡く描かれる。

小野小町図 (島根県立美術館)

●肉筆画「人を待つ美人図」(「くつろぐ芸妓」とも。寛政10年～享和元〈1798～1801〉)。紙本淡彩一幅。北斎画。印辰政。39.0×48.8 島根県立美術館：永田コレクション)



※白寿坊(1741～1817)の画賛に「弾き飽きて 月よりも人待宵か」とあるところからの画題。左膝を立てて扇子を持って、左手をついている芸妓の前には、三味線と詞書きがある。夏の宵の趣。

人を待つ美人図(島根県立美術館)



●肉筆画「芭蕉図」(寛政10～12年〈1798～1800〉)。享和年間説あり。紙本一幅着色。北斎画。印三径。31.2×47.6 林原美術館蔵)

※芭蕉の葉の表裏を墨の濃淡で描き分け、その間から薄い朱色の花が覗く。鹿津部真顔賛「世の中をさらりとさけしはせを葉は音つるゝ風にこたえたにせず」の狂歌が記される。

●屏風絵「鍋冠祭図」(「御祓い図屏風」「鍋祭」「筑摩祭」とも。寛政12年～享和元年〈1800～01〉)。紙本着色金彩。二曲屏風一隻。東陽北斎画 印画狂人 166.5×162.5 フリーア美術館蔵)

※頭に土鍋を乗せた三人の女と、その前で狩衣・烏帽子姿の神主が、大幣でお祓いをしている。女の一人は腕白小僧を連れ、子は嫌がって母の手を引っ張っている。不妊症を含む病気の

御祓いの図。土鍋の数は、前年に関係を持った男の数という。図左の巨木は、苔が緑青の点描で描かれ。墨で枠どりという狩野派の特徴が出ているという。日本三大奇祭の一といわれる筑摩神社(滋賀県米原市朝妻筑摩1987)の祭。



鍋冠祭り図(フリーア美術館:綴プロジェクト複製)



●肉筆画「大仏詣図」(「大仏殿図」とも。寛政10年～享和元年〈1798～1801〉)。紙本着色一幅。北斎画。印辰政。118.4×26.4 島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※御堂の下は霞がかって見えないほど、超縦長版を生かした空間構成になっている。京都方広寺の窓から覗く大仏の顔を下から見上げる二人の参詣人を描いている。ただし、方広寺は寛政10年(1798)にすでに焼失している。絵の上下に杏花園(大田蜀山人)賛が書き込まれている。



大仏詣図(島根県立美術館)

●肉筆画「門付芸人図」(寛政10年～享和元年〈1798～1801〉)。縦長紙本着色一幅。無款。

フリーア美術館蔵)

※門松の前を門付の二人。折烏帽子を被る男が扇子を持っている。同じく折烏帽子の子どもが小鼓を持って風呂敷包みを背負っている。ついて来た犬が子どもを見上げ、子どもも犬を見ている。北斎門人の作という見方もある。

●肉筆画「潮干狩図」〈舳先の下の子どもと亀判〉（寛政 12 年～享和 1 年〈1800～01〉）。絹本着色一幅。画狂人北斎。印辰印政。個人蔵

※裾をはしょって箆を持って立つ女。舟の舳先の下で亀と遊ぶ子ども。箆で貝を掬う女。箆を持って指さす女。図左では禪姿の男が二人箆で貝を漁っている。北斎は文化年間等にもいくつかの「潮干狩図」を描いている。この頃の摺物にも「汐干狩図」（しがみつく子ども判）がある。



「潮干狩図」〈舳先の下の子どもと亀判〉

●摺物「汐干狩図」〈しがみつく子ども判〉（寛政 7 年～10 年〈1795～1798〉）。全紙判。摺物。北斎宗理画。19.2×45.0 島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/日本浮世絵博物館/ヴィクトリア・アルバート博物館蔵

※遠くに貝を漁る人々。その手前で箆を持ち貝を獲る男と女二人。その手前に箆を持って別の場所に行く母親の腰にしがみつく子どもがいる。その側にしゃがんで子どもを見ている女がいる。遠くに富士山が描かれる。図の右に屋根の連なりが見え、品川近辺の潮干狩とされる。

下半分に、藤間流の舞踊発表会次第が逆さに記される。下半分の発表会案内が切りとられた図もある。大坂市立美術館蔵の「潮干狩図」（重文）とほぼ同じ構図で、重要文化財の絵（文化 4 年～7 年）より 10 年ぐらい前の作ではないかと見られている（『秘蔵浮世絵大観四』所収解説〈永田生慈〉 p 254）。大久保純一『北斎』（岩波新書。2012 年）では寛政後期（1789～1801）としている（p 52）。



東京国立博物館蔵の作品は「北斎」名が消されて「宗理画」となっている。

「汐干狩図」しがみつく子ども版（国立博物館所蔵品統合検索システム）

●錦絵「浮絵忠臣蔵」（寛政 10 年～享和 3 年〈1798～1803〉）。小判 11 枚揃。可候画。伊勢屋利兵衛版）

※織田一磨『北斎』（p 68）による。

●錦絵「新板浮絵両国橋夕涼夜見世之図」（寛政 8 年～文化期〈1796～1818〉）。大横判錦絵。絵師北斎画。伊勢屋利兵衛版。日本浮世絵博物館蔵

※天明8年～9年(1788～89)に「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」(勝春朗画 西村屋版)があり、画趣もほぼ同じで、「北斎」期に新板浮絵を描いていることに、今後検討を要する。図は、右端に縦書きで「新板浮絵両国橋夕涼夜見世之図 絵師北斎画 版元の商標 下谷池ノ端仲町伊勢屋利兵衛板」と書かれる。右上に「両国橋」、左上に「両国広小路」、左下に「北斎画」と記される。隅田川西岸から東岸に架かる橋の上を多くの夕涼みの人々がいる。広小路の先には本所堅川の木場が見える。図の右上と左下にすやり霞が描かれる。⇒天明年間「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」参照。

●錦絵「杜若」(寛政8年～9年〈1796～97〉)。横長判着色。北斎宗理画。17.3×48.7 日本浮世絵博物館蔵)

※朱塗りの角盆に杜若の束が横に置かれている図。元は全紙判で下半分に文字が書かれていたものか。

●錦絵「小間物売りと貴婦人」(寛政12年～文化5年〈1800～1808〉)。横長判着色。画狂人北斎画)

※屋敷の庭先の縁側に小間物と染め抜かれた大風呂敷に包まれた重ね箱を置き、縁側に立っている女に品物を勧めている行商人の男。部屋の奥では貴婦人と仕えの女二人が手にした品物を眺めている。

【津和野藩伝来摺物】

※2019年1月17日～3月24日まで開催された「新北斎展」(東京：森ギャラリー)で永田生慈コレクション「津和野藩伝来摺物」(島根県立美術館：永田コレクション蔵)が初めて公開された。

「津和野藩伝来摺物について」(岩切友里子『新北斎展図録』p301)によると、津和野藩主の亀井家には多数の摺物が年代ごとに帖装され寛政9年(1797)「観美集」としてまとめられた。その内、北斎の摺物も寛政9年(1797)のものが最も多い。その後1点ごとに切り離され、この内の北斎の作品が永田コレクションに収蔵されたという。津和野藩に多くの摺物が所蔵された経緯は不詳。

寛政元年(1789)～12年(1800)にわたり描かれた着色摺物。ほとんどは小判である。画題及び表記は永田生慈によるもの。ただし、「」の付いた表題は原画に記されているもの。詳細の図は、『新北斎展図録』(2019 森ミュージアム)を参照されたい。

本稿では制作年に幅があるが、便宜上寛政9年の項に記載する。

☆〈表紙〉「観美集」と題僉された脇に「寛政九年」「摺物帖込畧壺百九拾八枚」と表記されている。

☆〈十六むさしで遊ぶ子ども〉春朗画。絵暦。着色。寛政元年(1789) 12.8×9.0

※十六むさしは、親役と子役の二人が、三角形と正方形を組み合わせた盤の上に駒を置いて争う遊び。十六武蔵・十六六指とも表記するが、名称の由来は不明。図は、二人の子供が十六むさしの盤を前にして遊んでいる。盤上の駒に月の大小が示される。

☆〈鷹狩〉春朗画。花押。絵暦。着色。寛政2(1790) 9.1×13.5

※二本差しの侍二人が鷹狩に行く様子。一人の肩に鷹がとまっている。一人は犬を連れて

いる。鷹を背負った男の頭巾に月の大小が示される。

☆〈「寛政三弓始」弓矢と的〉葛飾住 春朗画。花押。絵暦。着色。寛政3年：1792。16.1×12.0

※寛政3年「弓に的」条を参照。書き込みの文字中に月の大小が示される。

「寛政三弓始」弓矢と的

☆〈大筒図〉宗理写。印完知。絵暦。着色。寛政7（1795）10.4×13.8

※寛政7年「大筒射図」条を参照。書き込みの文字中に月の大小が示される。

☆〈ざしき万ざいの大小〉宗理画。印完。絵暦。着色。寛政7（1795）11.0×28.8

※図の右に、座敷の中、松の書かれた屏風の前で漫才師が一人、三つ葉葵の紋のある羽織を着て、扇子を掲げている。その前で男が鼓を持って立っている。図左に、「ざしき万ざいの大小」「床の大小」「中の丁の大小」と題した文が書かれ、月の大小を説明している。末尾に「寛政七 乙卯のはる」と書かれ、「落穂庵 小金厚丸作」と書かれた提灯が描かれる。

☆〈新年の子供の膳〉宗理画。狂歌。着色。寛政8（1796）10.4×17.8

※吊るし棚にウラジロを敷いた上に鏡餅などの正月飾りが置かれ、その下で母親が芥子房髪の子供に箸を差し出して食べさせている。朱塗りの膳には椀や皿が置かれている。

☆〈大福茶〉百琳宗理画。印完知。狂歌。着色。寛政8（1796）17.6×20.5

※大きな茶釜から椀に湯を受けて座っている女の横では、三方に松の小枝を挿したものを乗せて立っている女。大福茶は、一年の邪気を払い、新年を祝福して飲む茶を称している。遊々館長気、釣雪堂双鯉、森羅亭の狂歌が添えられる。

☆〈二階の欄干による遊女と客〉宗理画。狂歌。着色。寛政8（1796）14.0×18.8

※民家の屋根を見下ろす妓楼の欄干から三人の遊女と、その間に居る小紋の羽織を着た客が指を挿して外の何かを見ている。禿もいる。

☆〈年礼〉宗理画。狂歌。着色。寛政8（1796）15.3×17.8

※女主人と思われる女の前で、袴姿の男と女が手をついて新年の挨拶をしている。奥の座敷では二人の女が様子を見るように立っている。

☆〈碁盤人形〉宗理画。絵暦。着色。寛政8（1796）13.2×8.8

※袴姿の人形遣いが、碁盤の上で花笠踊りの人形を両手で操っている。人形の帯に月の大小が示される。寛政8年条を参照。

☆〈富士に注連飾り〉宗理画。狂歌。着色。寛政8（1796）10.3×13.8

※表題に「富士」とあるが富士は描かれない。注連縄にウラジロと伊勢海老が飾られ、松の葉の繁ったものが側に描かれる。登鯉亭漣島、森羅亭の狂歌が書かれる。

☆〈梅樹と円窓の文机〉宗理画。狂歌。着色。寛政8（1796）13.5×25.1



※横に伸びた梅樹の枝の向こうに、庵室らしき部屋の円窓の前に置かれた赤い文机があり、上に筆立てと硯、小さな盆栽が置かれている。図左に、秋田庵萬作、野邊春道、森羅亭らの狂歌が書かれる。

☆〈遊女の更衣〉宗理画。狂歌。着色。寛政8（1796）10.3×19.0

※春の始め、白襦袢姿の花魁が立って春の着物を選んでいる。側で女が別の着物を持って手伝っている。部屋の奥には冬ものと思われる着物が掛かっており、その下では火の起された火鉢（湯缶）が掛けられている。

☆〈書初めをする少女〉宗理画。狂歌。着色。寛政8（1796）9.9×13.5

※注連飾りの下で、娘が書初めをしている。脇には大きな筆立てに入った数本の筆、背後には朱塗りの台に白紙の巻紙が三本乗せられている。菅原連の狂歌がある。

☆〈遊女の軸を掲げる福祿寿〉宗理画・鄰松画。着色。寛政8（1796）12.9×8.1

※遊女の立ち姿を描いた掛け軸の背後から、福祿寿が大きな顔と身体を覗かせている。脇では、後ろから男が手で掛け軸を支え持つて顔を覗かせている。掛け軸に小さな瑞亀が向かって歩いている。掛け軸を宗理が描き、それを持つ男と背後の福祿寿と瑞亀は鄰松が描く。図右に、「寛政八稔丙辰陽春旭堂羽欣」と書かれている。

☆〈正月の膳〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政8（1796）10.8×18.9

※狂歌師の夫婦らしき二人が掛け軸を背にして膳の前に座っている。二人に下女らしき女が、正月料理の黒まめを皿に乗せて差し出している。庭には竹垣の梅が咲いている。掛け軸の文字中に月の大小が示される。如蘭、千鶴庵の狂歌が書かれる。

☆〈龍宮城〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政8（1796）10.9×18.5

※頭に魚の作り物を乗せている数人の眷族（従者）が、龍宮城の門前で向きあっている。右向きの眷族が小の月、左向きの眷族が大の月を示している。

☆〈かくれもない大小〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政8（1796）12.0×17.0

※花魁に大きな傘を差し出す若衆。二人の衣裳に月の大小が隠れもなく示されている。

☆〈鳥居前で子どもを抱く女性〉宗理画。絵暦。着色。寛政8（1796）13.6×7.9

※本図は「鳥居下の娘と子ども」と題して本稿寛政8年条に記されている。子どもの着物に月の大小が示される。



鳥居下の娘と子ども

☆〈遊女と爺〉宗理画。狂歌。着色。寛政8（1796）12.3×15.7

※横兵庫髷の花魁を横に侍らせ、胡坐をかきながら寛いでいる爺の前で、眼鏡を差し出す新造と思われる女。女の前に本が二冊置かれている。

☆〈芝居櫓〉宗理画。狂歌。着色。寛政8（1796）13.2×17.9

※芝居を見にいくところか、角隠を被った娘と母親らしき女と供の小奴が、注連飾りを付

けた芝居小屋の櫓の近くを歩いている。図左に「辰春」とある。

☆〈見立七福神〉宗理画。狂歌。着色。寛政8(1796)13.7×17.9

※細竹の枝に鯛(恵比寿)がぶら下げられ、根元に打出の小槌(大黒)が置かれている。他に琵琶(弁財天)、巻物と筆(寿老人)、軍配(布袋)、宝塔(毘沙門天)、棒に付けた紐に結わえられた鶴の玩具(福祿寿)などが七福神に見立てて描かれる。常盤松門、四方歌壇(真顔)の狂歌が記される。

☆〈道を教える武士〉宗理画。絵暦。着色。寛政8(1796)11.8×19.8

※本が置かれた文台の横で、座布団に座った袴の武士が、左手に眼鏡を持ち、右手で指を指して何かを説いている。その前で平伏している侍も指さす方に首を向けている。指さす先に説くべき文言が示され、その中に月の大小が示されている。

☆〈拳をする遊女〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政8(1796)10.3×14.0

※縁側に立つ遊女と、部屋の中の女と、半開きの障子の間から拳遊びをしている。部屋の女の姿は影になっているが、手の先は障子の隙間から出ている。書き込みの文言に月の大小が示される。

☆〈房楊枝〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政8(1796)12.3×16.1

※数本の房楊枝の房の部分が赤い楊枝入れの袋から出ている。房の部分は、白く空摺となっている。添えられた紙縫りに月の大小が記される。杉板赤實の狂歌が記される。

☆〈台に暦〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政8(1796)11.7×14.9

※朱塗りの台に「寛政八丙辰年」と書かれた題僉のある折帖が置かれている。書き込みの文言に月の大小が示される。

☆〈「辰春 竹田口上」七福神の傀儡師〉宗理画。絵暦。着色。寛政8(1796)14.7×17.2

※図中央に大きく書かれた大黒天に抱かれた寿老人と弁財天。その左に雲の乗った毘沙門天、右に、雲の上を行く龍頭船に乗っている福祿寿・恵比寿・布袋が描かれる。口上の文言に月の大小が示される。

☆〈富士詣の帰り〉宗理画。絵暦。着色。寛政8(1796)13.7×9.0

※娘と母親と思われる二人と、富士詣の象徴の、竹の細竿に結わえた龍の飾り物を持った芥子房頭の子どもが立っている。子どもの着物に月の大小が書かれている。

☆〈からくり人形の書〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政8(1796)10.2×18.3

※台の上で唐子の人形が大きな筆を持って、立ちながら紙に文字を書こうとしている。その前に袴姿の人形遣いが座り、閉じた扇子で人形を指し示しながら口上を述べている。口上に月の大小がしめされる。末尾に「辰のはる」とある。

☆〈見立三弁天〉北斎宗理画。狂歌。着色。寛政9(1797)14.0×19.1

※横兵庫髷の花魁、麻呂眉の女、町家の娘の三人が座って向き合っている。麻呂眉の女の着物の裏地は朱塗りの桁のある屋敷の廊下が描かれている。松葉繁留、百川海成、門前市成、浅草庵の狂歌が記される。

☆〈「呉竹の七賢」〉北斎宗理画。狂歌。着色。全紙判。寛政9（1797）19.3×17.5

※上半分に呉竹の林の前に立つ七人の狂歌師。図左から、向秀（一流斎太平時風）、嵇康（記都甘人改扇風芳）、劉伶（一嘗舍酢甘）、王戎（吾々軒薰也）、阮籍（岩田月守）、山擣（長閑舍春風）、阮咸（鳥夜亭月夜釜主）が描かれる。図下半分に各人の狂歌が反転して書かれ、末尾に「丁巳のとし 日新山人」とある。七賢人は、中国魏時代末期に、飲酒や清談（哲学的な話）をして交遊した七人の賢人をいう。

☆〈「呉竹の七賢」袋〉19.3×17.5 着色。

※立てた巻物に「呉竹の七軒」の題簽が張られた図。

☆〈元禄の往来〉俵屋宗理画。俳諧 着色。全紙判。寛政9（1797）41.8×56.2

※下半分に雪中庵完来主催の25名の俳諧が記される。図は、按摩、行商の男、扇子を掲げる脇差しの男。頭巾を被り杖をついた腰の曲がった老婆の子ども連れ、手拭いを被った二人連れの女、腰をかがめた奴、扇子を口元に当てた浪人風の男、深編笠の侍、背中に荷物を背負った男、肩に重ねた箱を担ぐ男などが描かれる。

☆〈海辺の梅に鶯〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）8.9×20.8

※海辺に枝を突きだして咲く梅の花。枝に鶯がとまっている。水平線には赤く朝日が頭を覗かせている。大樹庵と浅草庵の狂歌が書かれ「巳のはつ春」とある。

☆〈白梅〉北斎宗理画。印完印知。狂歌。着色。寛政9頃（1797）21.1×7.8

※三本の幹に白梅が咲く。左の幹は途中で折り返すように下に伸びている。中の幹は真っ直ぐ上に伸び大きな花をつけている。右側の幹は細く伸びている。浅草庵市人の狂歌がある。

☆〈武蔵野の富士と筑波〉北斎宗理画。花押。俳諧。着色。寛政9（1797）20.2×28.2

※図左に筑波山、図右に雪を抱く富士山が、いずれも薄く描かれる。図の手前には草花の咲く野原が広がる。

☆〈手妻〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）14.5×19.0

※手妻は、手品のこと。富士を描いた赤い枠の衝立の前に座り、湯のみの中から蛇を出し、蛙を捕えさせようと操る手妻師。衝立の中に宗理画と書かれている。望月芦雁、清猷館倉光の狂歌が記される。図左に「寛政九巳秋」とある。

☆〈笠に若菜〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）12.7×17.3

※若菜の上に裏返された笠。その中の、赤い当て布と赤い紐が描かれる。一日庵、四方歌壇の狂歌が記される。図左に「丁巳首春」とある。首春は、初春の意。

☆〈初日の出を眺める貴人〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）9.8×18.1

※本稿「寛政9年」条に「日の出を見る貴人」（摺物。北斎宗理画）があるが、本図とは別。図は、海辺で扇をかざして、水平線に頭を出し始めた日の出を眺める立烏帽子の貴人を描く。分銅重記、浅草庵の狂歌が記される。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈官女〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）10.5×18.0

※官女が板襖を半分開け、立膝で外の景色を眺めている。緑の山や木々が遠景に描かれる。

浅草菴、他の狂歌が記される。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈紅梅〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）10.0×18.8

※樹洞のできた老木の根元から別に伸びた細い幹に紅梅が咲いている。図の左半分に三人の狂歌が書かれ、「巳のとし」とある。竹永折女、松節成ら三人の狂歌が記される。

☆〈やつし巢父許由〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）12.0×20.4

※「やつし」とは、故事の人物等を別時代の人物や事柄等に当てはめること。「巢父許由」は、「許由巢父」の表記が通例。許由も巢父も、中国古代の高士。聖天子と仰がれた堯帝が、許由の高士であることを聞いて天下を譲ろうと言うと、許由は、汚れたことを聞いたとして、潁水で耳を洗い、箕山に隠れた。また、巢父も、堯から天下を譲られようとして拒絶した高士であったが、耳を洗っている許由を見て、そのような汚れた水は牛にも飲ませることができないと言って、引いていた牛を連れて帰った、という故事。榮貴を忌み嫌うたとえ（「精選版 日本国語大辞典」より）。

図は、一人の女が滝で朱塗りの盃を洗っている。その側で牛を連れた女が酒を入れた瓢箪の紐を肩にして立っている。水魚亭仲良の狂歌が書かれる。図左に「巳のとし」とある。

☆〈羽根つき〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）10.5×18.2

※雪のある外で、高下駄を履いて羽つきをする二人の娘。二人は交差するように寄り添い、羽根の先は描かれない。東雲鐘成、浅草菴、他の狂歌が書かれる。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈盃を運ぶ官女〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）9.9×18.0

※垂髪、緋袴の官女が三方に乗せた盃を捧げ持って廊下に行く。下女が酒を入れた長柄銚子を持って仕えている。浅草菴、他の狂歌が記される。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈初日の出と江の島〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）10.3×13.9

※由比ヶ浜からの干潟と緑に繁る木々の江の島の先に、顔を出した初日の出。空には鳥が三羽飛んでいる。秋仲町の狂歌が記される。図左に「丁巳のとし」とある。

☆〈三方の盃〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）10.0×13.5

※朱塗りの三方に注連飾りが敷かれ、その上に三つ重ねの盃が置かれている。桜木彫方、唯我堂 宮戸川面の狂歌が記される。図左に「丁巳とし」とある。

☆〈見立毘沙門天とむかで〉宗理画。狂歌。着色。

寛政9（1797）13.2×17.9

※小さな宝塔と長柄箒を持つ女の後ろに、ぞろぞろと子どもがムカデのように連なっている図。倉部行燈の狂歌が記される。図左に「丁巳首春」とある。

見立毘沙門天とむかで（島根県立美術館）

☆〈若水を汲む女〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃（1797）10.2×14.0



※元旦の若水を水汲み桶に汲んで、両手で柄を持って腰をかがめて運ぶ女。後ろに薔のあ
る梅の木が描かれる。水魚亭仲良、他の狂歌が記される。

☆〈梅樹に初日〉宗理画 印百林。狂歌。着色。寛政9頃(1797) 10.1×14.0

※樹洞のある梅の老木の小枝に白梅が咲き、背後に赤く丸い初日が大きく描かれる。長閑
舎 木芳春風の狂歌が記される。

☆〈やつし草摺引〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃(1797) 14.6×19.3

※草摺引は、歌舞舞踊系統の一つ。親の仇敵工藤祐経ありと聞いた曾我五郎が、鎧を小脇
に駆けこむのを、小林朝比奈が草摺を捕え、引き止めて意見忠告する筋。これを舞踊化し
た作品の全てを〈草摺引物〉という(「世界大百科事典 第2版」による)。「草摺」は、
鎧の裾に垂らして下半身を防御する部分。「下散」「垂れ」とも。

図は、紅梅の画かれた衝立の前で、長柄箒を小脇に抱えた子どもと、芥子房頭の子
どもが紙に書いた草摺を引きあって遊んでいる。衝立の後ろでは母親が楽しそうに座っている。
揚柳亭●元の狂歌がある。

☆〈見立高砂〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃(1797) 10.7×19.1

※松の木のある海辺で、日の出を望んでいる男と垂髪すいほつの女。金砂亭如蘭きんさていじょらんの狂歌がある。

☆〈橋の上の母子〉宗理画。狂歌。着色。寛政9(1797) 13.7×10.2

※土手に柳の木のある小川の板橋を、鋏くわを手にした農婦と背中に寄り添っている子どもが
渡っている。毛呂利館 長井客人ながいきゃくじんの狂歌が記される。

☆〈見立寿老人〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃(1797) 13.3×18.5

※寿老人と花魁が寄り添って巻手紙まきでじを読んでいる。貢菴則次みつざんのりつぐの狂歌が書かれる。

☆〈洲崎の初日の出〉宗理画。漢詩。着色。寛政9頃(1797) 12.7×16.8

※石燈籠と松の木のある岸辺の向こうから初日の出が上っている。洲崎は、「すさき」と
発音し、現東京都江東区東陽1丁目辺をいう。元禄期に埋め立てられた地で、海を望む景
勝地として賑わった。「深川洲崎十萬坪」(現江東区木場公園辺)と称され、歌川広重も
「江戸名所百景」で描いている。

図には右草亭鴉下道の漢詩が「波静滄海外 雲晴洲崎東 望恭大門客 爛酒頭上連
遊 遙品川宿 道近八幡宮 四方輝初日 ●(穎か) 是龍燈紅 異地佳妓聚 弁天翠娥
(筆者注:美人のこと) 同 御膝元老若 太平樂無窮」が記される(暫定の読み下しは
筆者による)。絵暦や狂歌・俳諧の摺物ではない図。

☆〈歌かるた〉宗理画。狂歌。着色。寛政9(1797) 14.8×19.5

※衝立の前で、カルタ入れに箱の上に置いたカルタを取り上げて読む母親と、その脇で腹
這いになって開いた本を見ている子ども。清風亭いさ子、山陽堂、芝菴光交、万亀亭、
四方歌壇の狂歌が記される。図左に「丁巳のとし」とある。

☆〈硯師〉宗理画。狂歌。着色。寛政9(1797) 12.9×13.4

※注連飾りの下がる部屋で衝立を背にして、台の上に置いた硯のりに鑿つちを当て槌すずりしを打つ硯師。
相場保高の狂歌が記される。衝立には樹木鬱蒼とした海辺の島が描かれる。

☆〈七種たたき〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃（1797） 12.3×12.5

※正月七日の七草の節句の前夜と当日の朝、俎板に七草を乗せ、包丁やすりこぎで叩きながら「ななくさなずな、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに、ストントンとたたきなせえ」などとはやしながら包丁やすりこぎで叩く（「デジタル大辞泉」より）。

はやし言葉は「ななくさなずな、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに 七草なずな手に摘み入れて 亢鶯斗張」「ななくさなずな、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに なずな七草 はやしてほとゝ」などいくつかのバリエーションがある。豊穰と無病息災を願う。

図は、「寿」と書かれた樽の上に置いた俎板の七草を、しゃがんですりこぎで叩いている女を描く。

☆〈力石〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃（1797） 20.6×9.4

※柵に囲まれた梅の木の前で、柵に着物を掛け、裸になって膝を折り、地から石を持ちあげようとしている旅人。●花春芳の狂歌が書かれる。

☆〈桃太郎と雉〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃（1797） 20.5×9.3

※松の木の前で、雉に黍団子を差し出そうとしている桃太郎。千秋菴、他の狂歌が記される。

☆〈紅梅〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃（1797） 20.3×6.7

※縦長に伸びた幹に多くの紅梅が咲いている。浅黄裏成の狂歌が記される。

☆〈白梅〉宗理画 印完印知。狂歌。着色。寛政9頃（1797） 21.3×7.8

※縦長の細い幹に数弁の白梅が開いている。真砂菴の狂歌が記される。

☆〈木馬遊び〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃（1797） 13.0×13.2

※注連飾りのある部屋で、木馬に乗っている子どもと、木馬を支えている子ども。

☆〈年礼の武士〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃（1797） 13.0×17.4

※松飾りのある門前で、向こうむきで腰を少し屈めて新年の挨拶をする袴姿の武士と、その後ろで屈んで控えている小奴。好文と森羅亭の狂歌が書かれる。

☆〈小松を引く子ども〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政9（1797） 13.0×17.5

※小松を引き抜こうとする子どもと、後ろで見守る娘。空也の狂歌が書かれる。背後の松の大きさが月の大小を示している。

☆〈「巳のとし 小松引」〉宗理画。絵暦。着色。寛政9（1797） 14.0×18.6

※腰を屈めて小松を引く娘と、立ってそれを見ている娘。遠景に雪を被った富士山。書き込みの文字に月の大小が示される。

☆〈楊貴妃・小野小町・蓮華女〉北斎宗理画。狂歌。着色。寛政9頃（1797） 25.2×22.0

※図左から、胸をはだけた楊貴妃、檜扇をかざす小野小町、右手を胸の前に置く蓮華女。蓮華女は、釈迦の女弟子（蓮華色とも）。砂邑亭好文、呑口捻、俵杵成、花月庵後濱邊黒人の狂歌が記される。

楊貴妃・小野小町・蓮華女（島根県立美術館）

☆〈節料理の用意〉北斎宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797）
22.2×27.7

※屏風の前で、手拭を被った母親が朱塗りの盆から食材を箸で土鍋に移している。側でそれを見ている娘。外に柳が描かれる、図の上半分に、家建古住、巖苔成、墨染ゑもん、山鳥長尾、五月庵晴兼、四方歌壇の狂歌が記される。図左に「丁巳とし」とある。



☆〈琴を弾く官女〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃（1798） 21.0×18.6

※几帳のある部屋で、琴を弾く官女と、それを聞いているもうひとりの官女の背中が描かれる。雪下亭呉明、浅草庵ら四名の狂歌が記される。

☆〈巳待の御礼〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797） 13.8×19.0

※同図は、寛政9年、摺物「巳待」（着色。宗理画。13.5×19.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）にある。本稿「寛政9年」条を参照。

☆〈妓楼の節分〉北斎宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797） 22.1×26.2

※妓楼の一階で鬼に豆を投げる袴姿の男が遠くに描かれる。図の手前には、二階からそれを見ている花魁たちと子どもや、部屋に散らばった豆を拾う子どもが描かれる。妓楼の広さが遠近法で描かれる。増本楼呑義、雀掛升子、福寿窓笑丸、芝庵、山陽堂、四方歌壇の狂歌が記される。

☆〈「曙艸」吉野山花見〉（「吉野山貴人の花見」とも）北斎宗理画。狂歌。着色。全紙判。寛政9（1797） 42.8×57.2



吉野山花見（上図部分：島根県立美術館）

※吉野山の花見に出かけた貴人たちの一行。牛車の周りには垂千の男たちや築を背負った武人等がいる。絵の上下に朱のすやり霞が描かれる。

図の下半分は、逆さに、曙興兼の狂歌が大きく記され、続いて末程吉、常盤松成、浅草市人など16名の狂歌が列記される、図左に「丁巳の春三月」とある。曙草は、「リンドウ科の越年草で、中国および日本各地の山間湿地に生え、花は9月～10月頃開く」

(『ブリタニカ国際大百科事典』による) とあるが、曙興兼に因んだ命名か。

☆〈「曙艸」吉野山花見袋〉寛政9(1797) 着色。21.5×19.6

※「曙艸」と書かれた紐付きの物入れのようなものが描かれ、脇に「本町連」と記されている。

☆〈雪中の庵〉全紙判。北斎宗理画・花押。俳諧。着色。寛政9(1797) 41.8×56.6

※庵の門、竹垣、屋根、木々に雪が積もりひっそりした鳥瞰の風景が全紙判上部の右半分に描かれる。上半分の左側、及び下半分に逆さに雪中菴完来などの俳諧が記される。末尾に「寛政九巳冬」とある。

☆〈若水を運ぶ娘〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政9(1797) 14.8×20.1

※若水を汲んだウラジロを巻いた桶の柄を両手で持ち、庭先に立つ娘。竹垣の側に松飾りが見える。部屋には、笹の小枝に福面等を付けた正月飾りを持って立っている娘と、炬燵に入っている娘が描かれる。徒然織唐、紀ノ志丸、山水舎音成の狂歌が記される。



若水を運ぶ娘

☆〈煙管と煙草入れ〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政9(1797) 14.6×19.5

※煙管、朱色の煙管入れ、根付けのついた朱色の煙草入れが寄り添うように置かれている。煙草入れには巳(蛇)が描かれている。岩井有常、清猷館倉光、四方歌垣 真顔の狂歌が記される。煙管の雁首と吸い口に月の大小が示される。

☆〈鶯を眺める官女〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃(1797) 14.8×25.8

※庭先の梅の枝先にとまった鶯を、縁側から眺める二人の官女と下働きの娘。室常春、花染袖也、延田白羽、玉樹軒千枝人の狂歌が記される。

☆〈布袋と唐子の角兵衛獅子〉宗理画。狂歌。着色。寛政9(1797) 9.4×18.2

※撥を持ち平太鼓を叩く布袋の脇で、逆立ちをする角兵衛獅子。紅梅が咲いている。文屋次丸の狂歌が記される。図左に「巳のはつ春」とある。

☆〈小松引〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃(1797) 16.1×28.3

※小松を引く上半身裸の男と、引き抜いた小松の束を担ぐ仕丁。それを見ている二人の官女と子ども。紀立芳輔、三陀羅法師の狂歌が記される。

☆〈汐干狩り〉宗理画。絵暦。着色。寛政9(1797) 10.1×13.3

江の島と思われる寺社のある島に続く干潟で汐干狩りをする人々。人々の大きさと月の大小が示される。図の上下に朱色のすやり霞が描かれる。

☆〈綿帽子売り〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政9(1797) 21.5×11.4

※「わたほうし」と書いた大きな箱を背負い、「杉野壽見」の表札のある門口に立つ綿帽子売りの男。男の煙草入れと、背負箱の上に乗せた丸めた布を縛る紐が赤く着色され、それ以外は墨摺の画。梅樹には鶯がとまっている。温故堂七持の狂歌が書かれる。綿帽子は、

真綿を広げて作った女性の被り物。外出時の防寒用だったが、現在では花嫁の被り物の一つ。

☆〈新年の雪中遊女道中〉宗理画。狂歌。着色。寛政9頃（1797） 14.7×28.3

※雪を被った小松の見える所を、禿の肩に手を置いて歩く花魁。その後ろで、長柄の大傘を差し掛ける傘持ちの男。家杉船主、千秋菴 三陀羅法師の狂歌が記される。

☆〈梅の匂い袋〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797） 12.8×26.1

※梅柄の匂い袋と紐が描かれる。仙菓苑紫文、正月堂、俵和歌女、菊花街、凸凹庵賢丸、山東京伝、黒羽亭金持、一日菴、四方真顔の狂歌が記される。図左に「丁巳のはつ春東書堂主人書」とある。

☆〈梅樹と元禄二美人〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797） 14.1×18.9

※梅樹の側に立つ、元禄鬘（下げ髪を輪のようにして元結いで結ぶ）の遊女二人。一人は市松模様の帯。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈初春の日本堤〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797） 14.0×18.8

※遠くに吉原の家並、図左に小さく豎川の木材置き場が描かれる。手前には日本堤の道を行く鋤を担ぐ農夫が一人。野邊亭廣道の狂歌が記される。図左に「丁巳の春 東書堂主人書」とある。

☆〈夜の梅〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797） 11.3×14.4

※同図は、寛政9年にある。同年項を参照。赤い部机に両肘を立て、拳に顎を乗せて窓外の梅を眺める男。嵯峨道改竹真蔭の狂歌が記される。末尾に「丁巳のとし」とある。

夜の梅



☆〈床几に座る官女〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797） 13.9×18.6

※梁で囲った紅梅樹の側に置いた床几に座る官女と、床几の下で盆を持って控える女。丸山戸成、浅草菴の狂歌が書かれる。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈縁側の官女〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797） 12.9×17.8

※竹垣に囲まれた梅樹の見える縁側に座り、箱を包んだ緑の袋の紐を結んでいる官女。浅草菴、他の狂歌が書かれる。図左に「丁巳はつ春」とある。

☆〈注連飾りと羽根〉宗理画。狂歌。着色。寛政9（1797） 10.9×14.7

※注連飾りと松飾りのある風景の上に羽根が描かれる。下手横好の「巳歳旦」「春輿」と題された狂歌が記される。

☆〈鼠と弁財天と猿〉宗理画。日の干支。着色。寛政9（1797） 11.2×23.1

※扇面画の形をとる絵。中の弁財天を挟んで白鼠と三番叟の日の丸烏帽子を被った猿が、日の干支の月日を書いた巻紙を広げている図。日の干支は、十干と十二支を組み合わせた六十干支。日にちごとに戌辰、己巳などと付けられる。

☆〈^{ひのとみ}檜扇〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政9(1797) 13.0×17.8

※開いた檜扇に^{たんぽぽ}蒲公英が描かれている。周りに梅の花びらが散らされ、「^{はつだいとなす}発為大
^{ふはつしようとなす}不発為小 ^{おうはつろうとなす}央発為閏 ^{しこうしてねんじゅうのだいしょうをしる}而年中知大小」と説明している(読み下しは筆者)。開いた花が大の月、蕾が小の月、半開きは閏月を表している。布流瀧津の狂歌が記される。

☆〈^{ふくまめ}福豆と^{さんしょう}山椒〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政9(1797) 10.6×14.2

※黒い福豆が大の月、茶色の^{さんしょう}山椒の実が小の月を示している。森羅亭の狂歌が書かれる。図左に「^{ひのとみ}丁巳のとし」とある。

☆〈^{ことぶき}寿の字を吹き出す^{かめ}亀〉宗理画。絵暦。着色。寛政9(1797) 9.1×13.0

※車の軸模様の甲羅の亀が、首を伸ばして吐く息の先に「寿」字が浮かび上がっている。「寿」字の中に月の大小が示される。

☆〈^あ明け^{がらす}鳥〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政9(1797) 9.9×13.2

※朝日の出る空に舞う鳥の群れ。鳥の大小が月の大小を示している。宝倉主、唯我堂川面の狂歌が書かれる。図右に「^{ひのとみ}丁巳 立春」とある。

☆〈^{ぼし}母子と^{うめ}梅の^{はなもち}花餅〉宗理画 印完。絵暦・狂歌。着色。寛政9(1797) 12.6×17.2

※枕屏風に布が掛かり、その前で母親が子どもに箱に入った梅の花餅を高く差し上げている。子どもは両手を合わせて^{ちやうだい}頂戴の仕草をしている。箱の中の菓子と、母親の持つ菓子に月の大小が示される。光柿亭赤蒂の狂歌が書かれる。

☆〈^{ゆきま}雪間の^{わかさ}若菜 ^{ななくさ}七草〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政9(1797) 10.6×14.1

※雪の中から緑の七草が出ている図。伊勢濱荻の狂歌の中に月の大小が示される。図左に「^み巳のとし」とある。

☆〈^{てんびんぼう}天秤棒を持って^{はし}橋を渡る^{おとこ}男〉宗理画。俳諧。着色。寛政10(1798) 20.9×28.2

※図右に、高い^{けた}桁の橋を渡る^{てんびんぼう}天秤棒の男が小さく描かれる。その向こうには山の頂と朝日が描かれる。「^{せつじやうい}淑景」と題して、^{かんぎ}雪常亭 ^{ぼこう}完義、^{いっしやう}馬紅、^{いもん}一樵、^{ばんかん}夷門、^{せつちやうあん}馬肝、雪中菴の俳諧が記される。図左に「寛政十年春」とある。

☆〈^{うま}午の^{かなもの}金物〉宗理画。狂歌。着色。寛政10(1798) 12.7×16.1

※「^{うまのおかなもの}午之御金物」と書かれた三段重ねの箱の蓋が開き、中に赤地に並べられた馬を模った小さな金物などが置かれている。守静館芦雁、^{せいじやうかんくろみつ}清猷館倉光の狂歌が記される。寛政10年は^{つちのえうま}戊午の年。

☆〈^{あおうま}白馬の^{せつえ}節会〉宗理画。俳諧。着色。寛政10(1798) 40.0×18.6

※本稿寛政9年条にも同題の摺物がある。正月七日に行なわれる朝廷の行事^{あおうま}注で、白馬の引きはじめを描いたもの。

注) 白馬節会：正月7日、天皇が^{ぶらぐでん}豊楽殿(のちに^{しんんでん}紫宸殿)に出御して邪気を祓うとされる白馬を庭に引き出し、群臣らと宴を催す(ウイキペディアによる)。この日に白馬を見ると邪気を避けるという中国の風習に因んだもの。

図上半分は、門前で、^{くつわ}轡部分と首を赤い^{ひもなわ}紐縄で飾った数頭の白馬を操っている男たちが描かれる。図下半分に、^{りつせつあん}葎雪菴^{ごしん}午心の俳諧が逆さに記される。左に「^{つちのえうま}戊午春」とある。

☆〈釣りと漁師〉北斎宗理画・印師造化。俳諧 着色。全紙判。寛政 10 (1798) 42.0 × 56.5

※向こう岸で竿を差し釣りをしている男、川のこちら側では長柄網を担ぐ男と、腰蓑を付けた漁師がいる。全紙判の下半分に雪中菴など 33 名の俳諧が逆さに列記される。

☆〈水祝い〉宗理画。俳諧。着色。寛政 10 (1798) 20.0 × 27.8

※水祝いは、婚礼の際や婚礼後の最初の正月に、新郎や新婦に水を浴びせて祝う儀礼。注連飾りや松飾りがある部屋に向かう烏帽子・長袴の侍に向けて、ウラジロを付けた手桶の水を掛けようとしている男たち。全紙判の下半分に、曲傘更響美、葎雪庵午心等 5 名の俳諧が記される。図右に「寛政うまのとし」とある。

☆〈鉦始め〉宗理画。俳諧。着色。寛政 10 (1798) 20.4 × 28.3

※鉦は、まさかり・ちょうな・かんなど大工道具の類をいう。鉦始めは、番匠と呼ばれる建築の匠が正月に 1 年の安全を祈る儀式。図は烏帽子を被り盛装した匠の二人が指矩や墨壺を手にして祝っている。孤仙、馬肝、雪中菴完来の俳諧が記される。図左に「寛政十年春」とある。

☆〈塀の前を行く貴人〉宗理画。俳諧 着色。横長判。寛政 10 (1798) 21.0 × 56.5

※図右端に塀の前を歩く貴人が小さく描かれる。雪中菴完来など 6 名の俳諧が記される。図左に「寛政十年春」とある。

☆〈島台と三方と銚子〉宗理画。絵暦・狂歌。着色。寛政 10 (1798) 12.7 × 16.0

※蓬萊の島型に切り取った台の上に松の盆栽が置かれる。三方の下には大きな銚子が置かれている。銚子に飾られた紙に月の大小が示される。盤井有常、羽金鐵人、宝倉光の狂歌が記される。

☆〈屠蘇を飲む福祿寿〉宗理改北斎画。狂歌。着色。

寛政 11 (1799) 13.2 × 18.6

屠蘇を飲む福祿寿

※紅梅の見える部屋で、女の注ぐ屠蘇を朱塗りの大盃に受けている福祿寿。盃の底に「寿」が書かれている。部屋の掛け軸には、この年の巳未の字が書かれ、三方には正月飾りが乗せられている。雀脛永喜、浅草庵の狂歌が記される。



☆〈元結作り〉宗理改北斎画。狂歌。着色。寛政 11 頃 (1799) 10.2 × 18.5

※部屋で元結いの紐を手をしている女を描く。

☆〈小松を持つ官女〉宗理改北斎画。狂歌。着色。寛政 11 頃 (1799) 12.7 × 18.0

※小松を持って座る官女。積薪亭黒成、淇水堂の狂歌が記される。

☆〈烏帽子〉宗理改北斎画。狂歌。着色。寛政 11 頃 (1799) 13.3 × 17.8

※竹を敷いた台の上に、赤い紐のついた黒い烏帽子が置かれている。千穂菴、他の狂歌が記される。

☆〈清書双紙を持つ子供〉北斎画。狂歌。着色。寛政 11 (1799) 20.1 × 14.2

※梅と松の木がある家の塀に架けられた大きな額には「梅」と書かれた紙等が貼られている。その前を歩く子どもは硯箱と清書の双紙を持っている。屋寿高の狂歌が記される。

☆〈**凧を持つ娘**〉北斎画。狂歌。着色。寛政 11 (1799) 10.5×19.0

※竹垣に囲まれた梅樹の前で、黄色の凧を手をしている娘。足元には凧紐が垂れている。梅の枝の先には鶯が飛んでいる。清見亭浪関盛、千穂菴の狂歌が記される。

☆〈**梅を眺める官女**〉先ノ宗理北斎画。狂歌。着色。寛政 12 (1800) 13.8×28.3

※縁側から紅梅と、枝にとまろうとしている鶯を見ている官女。手にした短冊を離している。官女の足元に座る小侍は硯台を持っている。大倉金満、銭屋金持、四方歌垣等 5 名の狂歌が記される。

☆〈**見立女三宮**〉先ノ宗理北斎画。狂歌。着色。寛政 12 (1800) 14.2×18.8

※柳と梅の木のある庭先を部屋の戸を少し開けた間から覗く官女。庭にいる貴人と目を合わせている。貴人の側には鞠を手にした男がいる。四方真顔等、3 名の狂歌が書かれる。女三宮は、光源氏と結婚するが、強引な柏木との間に薫を生んだ後出家する女性として『源氏物語』に描かれる。本図は「若菜上」の、猫が庭に逃げて、つないでいる紐が引張られ御簾が少し開き、中にある女三宮の姿が庭の柏木に見られる場面を見立てる。

☆〈**小鍛冶**〉先ノ宗理北斎画。絵暦・狂歌。着色。寛政 12 (1800) 14.0×19.0

注連飾りのある作業場で刀鍛冶の様子を描く。二人で台に乗せた刀を槌で叩いている。注連飾りの太さで月の大小が示される。清猷館倉光、紀重長、四方歌垣等、3 名の狂歌が記される。

小鍛冶



☆〈**羽織裏の絵を見る遊女**〉北斎画。狂歌。着色。寛政 12 (1800) 7.3×9.8

※三人の遊女が羽織を広げて、裏地の、猿が木からぶら下がっている絵をみている。岩井有事、四方歌垣等 3 名の狂歌が記される。

☆〈**文机に猿の硯**〉北斎画。狂歌。着色。寛政 12 (1800) 12.6×8.1

※文机に筆挿しと猿を模った硯、文鎮、短冊等が置かれ、下には巻紙や諾の臺が入った鉢等がある。四方歌垣、他の狂歌が記される。

☆〈**鹿島踊りの猿**〉北斎画。絵暦。着色。寛政 12 (1800) 9.5×12.1

※烏帽子を被り扇子や御幣を持って踊る二匹の猿。扇子には富士山が描かれている。猿の着物に月の大小が示される。鹿島踊りは、鹿島神宮（現茨城県鹿島市宮中2306-1）に発祥した疫病封じの祈願の踊りと言われる。

☆〈**「商」（天秤で計る美人）**〉無款。絵暦。着色。寛政 12 (1800) 9.3×12.3

※同図は寛政 12 年の摺物「士農工商」の一図にある。「定」の文字中に月の大小が示される。本稿「寛政 12 年」項を参照。

☆〈**顔を洗う美人と猿**〉無款。着色。寛政 12 (1800) 13.6×18.6

※縁側で、盥の水に左手を入れ、右手で洗顔用の刷毛を顔に当てている、上半身裸の女。隣に女の着物を羽織っている猿がいる。女の腰に下ろした着物の梅の模様が月の大小を示している。狂歌・俳諧・絵暦ではない摺物。

☆〈猿曳きの衝立と手鞠を作る娘〉無款。絵暦。着色。寛政12(1800) 13.9×18.7

※猿廻しの男が芸に使う道具を持って立っている図のある衝立を背にして、座った娘が手鞠と糸を通した針を持っている。その前で子どもが手を差し出している。猿曳きの持つ道具に月の大小が示される。

☆〈金太郎の書初め〉先ノ宗理北斎画。絵暦・狂歌。着色。寛政12(1800) 13.8×14.1

※赤い顔と身体の子金太郎が書き初めの文字を書いている。図左に「庚申春」とある。都●賀江の狂歌が書かれる。

☆〈玉虫と子安貝〉先ノ宗理北斎画。絵暦・狂歌。着色。寛政12(1800) 13.9×18.7

※箱に玉虫に二疋並べて入れてある。箱の外には子安貝が二つ置かれている。玉虫も子安貝も安産のお守りとされている。箱の蓋には白梅が描かれ、花の開き具合で月の大小が示される。四方歌壇、他の狂歌が書かれる。

●摺物「花魁と振袖新造図」(寛政7年～10年〈1795～98〉)。狂歌摺物着色。北斎宗理画)

※図の上部に大勢の狂歌師の歌が並べて記される。図は、柵の前に立つ三人。蛇の目傘を閉じて持つ横兵庫齋の花魁、傘を広げて持ち赤い着物に格子縞の帯の振袖新造、その後ろにも傘を閉じかけた振袖新造がこちらを向いている。この振袖新造の顔は、文化元年～4年の「振袖新造図」(紙本淡彩一幅)の顔と似ている。

振袖新造は、近世、江戸吉原で、禿から新造になった若い遊女。部屋を持たず、振袖を着ていた。振り(『大辞林』第三版による)。

●摺物「顕微鏡に蝶」(寛政12年～文化2年〈1800～05〉)11切判。着色。北斎画。20.0×13.9。フランス国立図書館/カンサス大学スペンサー美術館蔵)

※浅瀬庵永喜の狂歌「めのさめた やうなる花の 菜に遊ぶ蝶は大かた 生粋の夢」が記される。荘子「胡蝶の夢」になぞらえたもの。顕微鏡に蝶がとまっている図。

顕微鏡に蝶 (フランス国立図書館)



●摺物「飛鳥山桜題」(寛政7年～10年〈1795～98〉)。横長判摺物。着色。北斎宗理画。20.3×53.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※「飛鳥山桜題」と刻された石碑には、萬亀亭 花江戸住、日頭菴 錢屋金埒、狂歌堂 四方真顔の狂歌が記されている。側の桜の老木が咲き誇り、色幕が張られた桜の時期の飛鳥山が描かれる。

●摺物「春庭三美人」(寛政7年～寛政11年〈1795～1799〉)。横長判摺物。着色。宗理画。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※松の木の根元にしゃがんで落ち葉を掃いて塵取りに入れている下女。側で手桶を下げて
いる女と、梅の木の前の緋毛氈を引いた床几の前で、鳥籠を手にした娘が向き合っている。

●摺物「**視機関**」(寛政7年～11年〈1795～99〉)。着色。宗理画。11.3×24.4 すみだ北斎
美術館：ヒーターモース・コレクション蔵)

※正月の大道で視機関を見せている男。子ども二人が視機関を覗いている図。機関の絵柄
について永田生慈は「(略)一際目をひくのは、視機関上の透視画法を用いた西洋風な画
面であろう。実は、北斎は後年『北斎漫画』三編(文化12年・1815)で「三ツワリの法」
と題して透視画法を図解しており、その図とほぼ同工図だからである。すでに春朗時代には、
浮絵作品を発表していたであろうが、『北斎漫画』三編より約20年も前に、同工な図

を描いていたという点に
今更ながら驚かされるの
である」と述べている
(『ヒーターモース・コレクション北斎
図録』による)



視機関 (すみだ北斎美術館)



右：拡大図

●摺物「**子供をからかう**」(寛政7年～11年〈1795～99〉)。中判着色。宗理画。東京国立博
物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※母親が立膝で、菓子箱から出した菓子を左手で頭上
に上げ子供に向けている。子供は両手を突き出して頂
戴をしている。⇒『津和野藩伝来摺物』にある「母子
と梅の花餅」(寛政9〈1797〉宗理画。印完。12.6×
17.2 光柿亭赤帯の狂歌が記される)と同図。

子供をからかう (島根県立美術館)



●摺物「**恵比寿と美人**」(寛政7年～11年〈1795～
99〉)。中判着色。宗理画。東京国立博物館蔵)

※花魁がぼっくり下駄を履き、大きな蛇の目傘をさし、そこに寄り添うように傘に入っ
ている恵比寿天。朱楽菅江らの狂歌が添えられる。

●墨摺版画「**成身院童子経曼荼羅**」(寛政7年～11年〈1795～1799〉)。無款。島根県立美
術館：永田コレクション蔵)

※色紙判か。図の上部が破損。図の中央の枠に毘沙門天風の神将が描かれ、その周囲に裸
体の童子が猿・馬・猪・猫・鼻・蛇・雉・鳥・犬や女人と戯れる図。

●摺物「**楼上ほととぎす聴く遊女**」(寛政7年～11年〈1795～99〉)。大奉書着色。宗理画。
京伝写。39.5×55.5 アイランド・チェスター・ビューティ図書館：東洋美術ギャラリー蔵)

※上半分に妓楼の二階で、大勢の遊女や禿が窓の格子に集まって何かを眺めている図を描
き、下半分には逆さ向きに多数の狂歌を書き込む。縦半分のところで二つ折りにし、文字

のほうを内側にして、さらにそれを三つ折りすると、いちばん上の表紙にあたるところが主な遊女三人と二人の禿を描いた絵が見え、内側を広げれば、狂歌の文字列の上に空を飛ぶほととぎすが見えるように工夫されている。ほととぎすの絵は山東京伝による（小林忠『浮世絵ギャラリー2 北斎の美人』）。主な狂歌は、司馬竈光交・銭屋金埒・先大屋裏住・四方歌壇真顔など。

●摺物「あやとり」（寛政7年～11年〈1795～99〉。紙本着色。九ツ切判。宗理画。13.2×18.1 北斎館蔵）

※綾取りをする横兵庫髷の花魁と禿。背後の台に松の盆栽があり、正月の雰囲気を出す。

●摺物「歌留多持つ美人」（寛政7年～11年〈1795～99〉。宗理画。12.1×17.1 太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館蔵）

※衝立の前で箱から出した歌留多を持つ女の図。

●摺物「神馬」（寛政7年～11年〈1795～99〉。宗理画。13.8×23.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。

●摺物「春駒」（寛政7年～11年〈1795～99〉。宗理画。20.1×53.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。

●摺物「松下三美人」（寛政7年～11年〈1795～99〉。宗理画。19.0×51.8 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。

●摺物「黒頭巾の二美人」（寛政7年～11年〈1795～99〉。紙本淡彩。九ツ切判。宗理画。11.9×16.6 北斎館蔵）

※「両大師」と書かれた表札の前にいる御高祖頭巾の二人の女を描く。両大師は、上野寛永寺境内の輪王寺（現東京都台東区上野公園14-5）のことで、寛永寺開祖の慈眼大師（天海）と、慈眼大師（良源）が崇敬する慈恵大師を祀るので「両大師」と称せられた。

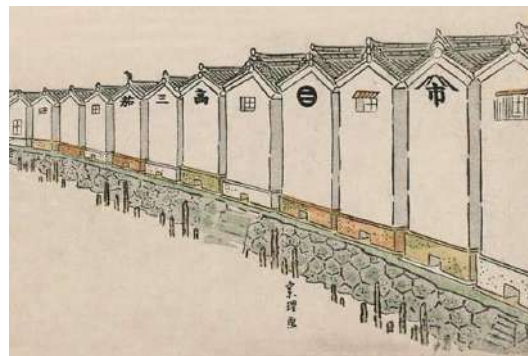
●摺物「宝船の入港と市富士二高三茄子の蔵」（寛政7年～11年〈1795～99〉。宗理画）

※海から河口に入港した宝船が正面を向いて描かれる。張られた帆には大きな文字のようなものが描かれているが不明。



宝船の入港と市富士二高三茄子の蔵

拡大図



図の右には、遠近法で描かれた蔵が並んでいる。蔵の白壁には、手前の二つ目の蔵に、山形の下に「市」の商標、四つ目の蔵には「二」の商標、六つ目の蔵には「高」の商標、七つ目の蔵には「三」の商標、「茄」の商標が描かれ、「一富士二鷹三茄子」のめでたさを表している。水平線からは朝日が頭を出し、空には黒く数羽の鳥が描かれる。

●摺物「短冊持つ女」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。紙本着色。宗理画。14.2×16.3 北斎館蔵）

※梅見の茶屋でくつろぐ二人の女。振袖の女は短冊を持ち、側の男は「の」の字が大きく染め抜かれた羽織を着ている。

●摺物「煙草を吸う人と芸者」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。紙本着色。宗理画。12.5×16.6 北斎館蔵）

※梅見の茶屋で、縁台に腰を下ろし、片足を台に乗せて、煙管で一服して休んでいる男に、芸者風の女が何かを話しかけている。男の側には供の小僧が座っている。

●摺物「古梅」（「梅樹」とも。寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。紙本淡彩。宗理画。9.9×13.3 北斎館蔵）

※岸边に立つ、枝に花を咲かせる梅の古木の図。図の左に「春なれやおのがきまゝな野良梅の華にひかれてまはるのらもの 上部堅面」の狂歌が記される。

●摺物「大黒と娘」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。紙本着色。宗理画。13.9×18.8 北斎館蔵）

※娘が、吉原を案内する「細見」といわれる本を読んでいると、大きな袋を背負った大黒天が同じくその本を覗き込んでいる。「北斎館」資料では「菱川宗理画」とある。

●摺物「糸まき」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。紙本着色。宗理画。13.0×18.6 北斎館蔵）

※振袖の娘が糸をほぐし、男の子が糸を両手に巻きつけている図。「北斎館」資料では「菱川宗理画」としている。

●摺物「振り返る黒犬」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。紙本着色。宗理画。10.1×14.2 北斎館蔵）

※立派な仕様の巾着を前にした狽と思われる黒犬が、何かの気配に振り返っている。

●摺物「三味線の稽古」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。紙本着色。宗理画。13.2×16.8 北斎館蔵）

※三味線を弾く娘の前の楽譜に「門松」や「七夕」の文字が書かれているので、あるいは絵暦であったか。「北斎館」資料では「菱川宗理画」としている。

●摺物「桃太郎」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。紙本着色。宗理画。22.0×9.4 北斎館蔵）

※松の木の下で雉に黍団子をやる桃太郎を描く。

●摺物「綿帽子売り」（寛政 7 年～11 年〈1795～99〉。紙本着色。宗理画。21.4×11.6 北斎館蔵）

※「わたぼうし」と書いた背負い箱を背負い、家の門の前に立つ行商の男。梅の枝に鶯がとまっている。

●摺物「**金時と美人の屠蘇**」（「**金時酒宴**」「**金時飲酒**」とも。寛政7年～10年〈1795～98〉。横中判着色。四方歌壇連撰。北斎宗理画。22.0×26.9 秋長堂版。北斎館/島根県立美術館蔵：永田コレクション/大英博物館蔵）

※大刀を身につけ、腹が突き出て頭の禿げた年配の金時が、遊女の注ぐ酒を大盃を受けて飲んでいる。側に「四方」の字が記された角樽を抱えている遊女と、金時の前で片膝で座る遊女がいる。「真赤なる金時山のはつ日影 四方に霞をくめるさかづき学志亭公面」、その他、芝庵（光交）、山陽堂（山陽）、四方歌壇の狂歌が図の上部に記される。



金時と美人の屠蘇（島根県立美術館：永田コレクションでは林忠正の所蔵印がある）

●摺物「**三田圃園**」（寛政7年～11年〈1795～1799〉。横長判着色。宗理画。印完知。17.0×48.5 東京国立博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※横長画面に三田神社前に広がる田んぼの風景を描く。絵の右には隅田川堤の下に建つ三田神社の石の鳥居が描かれ、その前に鋤を肩に担ぐ農夫と、その子どもがいる。田んぼでは稲の苗を植える三人の人。土手の上には数人が歩いている。本来は全紙判で、半分には、深川芸者中の舞踊の番組が逆さに記されている。



三田圃園（島根県立美術館）

●摺物「**機織図**」（寛政7年～10年〈1795～1798〉。全紙判着色一枚。北斎宗理画。42.0×56.3 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※戸外で、大きな機織り機で三人の女が機織りをしている図。下半分は、中村座や森田座での長唄等の発表会の参加者名と次第が、逆さに記されている。



機織図（島根県立美術館）

●摺物「**奥座敷遊興図**」（寛政7年～10年〈1795～98〉。応需北斎宗理席上画。19.8×56.7 太田記念美術館/北斎館蔵）

※元は大奉書判で、四方垣連の生網屋生網の狂歌が記される。蠟燭台を三本立てた座敷で踊る女たちと、それを見ている男や女たち。手前に観客の美人の顔。その後ろから背伸びをしている人。北斎館所蔵は左約三分の一が切り取られているが、太田記念美術館所蔵で

は、春駒の所作事が演じられているという（2019『北斎 視覚のマジック展図録』 p 152）。

●摺物「六美人」（寛政7年～10年〈1795～98〉。着色。北斎宗理画。18.9×25.2 北斎館蔵）

※商人の妻、見習い新造、矢場の女、女中と思われる女性たち6人が車座に集まっている。一人は本を頭上に掲げ、一人は揚弓を持っている。

六美人（北斎館）



●摺物「百物語」（寛政7年～10年〈1795～98〉。紙本着色一幅。応需北斎宗理席上画。19.7×33.8 北斎館蔵）

※百物語は怖い話を一人ずつ語り、語り終わると百本の蠟燭の明かりを一本ずつ消していく集い。図は、大勢の女性のいる部屋に蠟燭がとり、怖い話に顔を見合わせている図。

「百物語」は、鶴屋喜右衛門版・中判錦絵（天保2年～4年）揃物や、「新板浮絵化物屋鋪百物語の図」（天明年間。大判錦絵。西村屋与八版）などでも扱っている。

●摺物「三囲神社を望む」（寛政7年～10年〈1795～98〉か。着色。北斎宗理画。30.5×43.8）

※隅田川岸の茶屋の見晴らしの欄干に手をかけたり、寄り添って坐り、茶屋下に咲く桜を眺める3人の女。川には四つ手網を広げた漁船が浮かび、対岸には土手の下から鳥居の天井を見せている三囲神社が小さく描かれる。

●板絵「七福神図」（寛政8年～12年〈1796～1801〉。板絵着色一枚。無款。117.0×182.0 清安山板橋不動尊〈清安山願成寺不動院：現茨城県つくばみらい市板橋2370-1〉蔵）

※大黒天と恵比寿が腕相撲をしている。その間に行司役の毘沙門天が軍配を立てている。他の神もその周りに集まっている。

●板絵「唐子舟遊び図」（寛政8年～12年〈1796～1800〉。板絵着色一枚。無款。117.0×182.0 清安山板橋不動尊〈清安山願成寺不動院：現茨城県つくばみらい市板橋2370-1〉蔵）

※舟の中で思い思いの楽器で演奏している唐の子どもたちの図。遠景に大きな朝日。舟端に上ろうとする瑞亀、舟の上には鶴が羽ばたく、めでたい図。

●摺物「不忍の池畔」（「不忍池」とも。寛政8年～12年〈1796～1800〉。北斎画）
※不忍池の畔を歩く三人の女。右の女は傘を閉じて持ち、中の女は揚帽子を被っている。左の女は振り返りながら二人の女に何かを話している。その前には頭巾を頭から覆って、女たちに振り返り手を差し出している男。男の前では風呂敷の荷物を肩にしている小奴が振り向いている。池には中島の弁財天が描かれ、水上に小さな舟が一艘浮かんでいる。

●摺物「扇屋内の図」（寛政7年～10年〈1795～98〉）。横長判着色。北斎宗理画。19.3×36.5)

※部屋の中で3人の女が立て膝で仕事をしている。一人は扇の骨に紙を当てている。一人は台の上の紙に手を当てている。その後で簪をした女が扇入れの黒い箱を持っている。部屋の外には松が見える。

●摺物「遊女の座敷」（寛政7年～10年〈1795～98〉）。横長判注。北斎宗理画。東京国立博物館蔵

注)横長判摺物は、大奉書を横に二つ折りにしたもの。下半分に諸稽古の発表会の演目や出演者を逆さに書くが、下半分を切り取り絵だけを独立させることが多い。

※図は、火鉢と煙草盆が置かれている部屋で横兵庫鬘を結った遊女と、煙管を銜えた客が寄り添って、鬘間と禿が戯れているのを見ている。その側に新造が盆に乗せた何か(香か)を持って立っている。開け放した障子の向こうには梅の花が咲いている。部屋の中央には大きな箆笥が置かれた、華やかな遊女の座敷の様子が描かれる。



遊女の座敷 (東京国立博物館)

●摺物「江の島風景」（「江の島図」「江ノ島海岸」とも。寛政10年～13年〈1798～1801〉。中判錦絵。ほくさみうつす。13.6×17.3 神奈川県立金沢文庫蔵）

江の島風景 (神奈川県立金沢文庫)

※洋風画の趣で額枠の中に描かれたもの。右上にひらがなの署名がある。図の右側に山裾の干潟を渡り江の島に向かう人々を描く。画面左には波が打ち寄せ、遠景に江の島弁天が小さく赤く描かれる。北斎は「江の島」を画題にしたものを数葉描いている。



●摺物「かまくらの里」（寛政10年～13年〈1798～1801〉。中判錦絵。ほくさみうつす。13.6×17.3 東京国立博物館蔵）

※上記「江の島の風景」と同シリーズ。洋風画の趣で額枠の中に描かれたもの。右上にひらがなの署名がある。入江の山裾に沿った海岸沿いの道を数名の旅人が歩いている。遠景に富士が描かれ、空には雁の群れが飛んでいる。水平線には帆掛け船の帆が多く見える。

●摺物「助六と揚巻」（「助六と遊女」とも。寛政12年～享和2年頃〈1800～1802〉。紙本着色。すみだ北斎美術館蔵）

※煙管を持つ遊女と、その前の助六の、紫の喧嘩鉢巻をした頭部のみ描かれた図。

●摺物「椿と美人」（寛政12年～享和2年頃〈1800～1802〉）。紙本着色。画狂人北斎画。
18.5×12.5 すみだ北斎美術館蔵）

※四方歌壇等によるもの。吊るした花入れに椿の花を生けようと、手に椿の切り花を持っている女。

●摺物「髪飾り図」（寛政年間〈1789～1801〉）。着色。21.9×18.5 すみだ北斎美術館蔵）

※梅花の銀の簪、黒と赤の手絡注、鶴紋の平打ち簪など、髪飾りだけを描く。

注) 手絡：丸鬘などの根本に巻きつけたりする飾り布。

●摺物「稲扱」（寛政10年～13年〈1798～1801〉）。紙本着色。北斎画。19.9×54.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※農家の庭先で稲の脱穀をする農婦と、その側で座って稲を整えている農婦。脱穀した米を箆に受けている農夫。稲を背に乗せた牛を操る子どもなどが描かれる。

●摺物「雪の訪い」（寛政11年～享和1年〈1799～1801〉）。九つ切判。揃物の内二枚確認される。先ノ宗理北斎画。12.5×32.5）

☆〈女の訪い〉（下駄の女二人が、二人の女のいる部屋を訪れる図。ベレス・コレクション蔵）

☆〈男の訪い〉男が傘を閉じようと斜めに構える図。大英博物館蔵）

●摺物「遊客の図」（寛政8年～享和2年〈1796～1802〉）。紙本着色。無款。20.1×10.9 北斎館蔵）

※遊郭の座敷で横兵庫鬘の花魁と寛ぐ男。花魁は男に横座りに寄り添っている。図の左では踊っている禿に何かを差し出している髷間と思われる男と、立ちながらお盆の物を運ぶ前帯の女が描かれる。座敷の正面にある黒塗りの箆箆に描かれた霞模様から、狂歌グループ・千秋庵三陀羅法師の千秋連による摺物と思われる。北斎が三陀羅法師の撰で狂歌本に関わったのは主に寛政8年（1796）の『狂歌聯合女品定』から享和2年（1802）『五十鈴川狂歌車』あたりなので、その頃の作品と思われる。

●摺物「凧を持つ子ども」（寛政11年～13年〈1799～1801〉）。紙本着色。先ノ宗理北斎画。14.0×20.3 北斎館蔵）

※三味線と撥や楽譜を畳に置いて休んでいる女。右手で簪を触っている女の側で、子どもが凧を持ちながら、花の咲く梅の枝を指差している。

●掛幅図「砧図」（寛政11年～13年〈1799～1801〉）。紙本淡彩掛幅。北斎画。印画狂人。88.2×41.0 北斎館蔵）

●摺物「雪と美人」（寛政11年～13年〈1799～1801〉）。横中判着色。先ノ宗理北斎画。東京国立博物館蔵）

※上半身裸の女の脇の湯船に、逆様に落ちて足をばたつかせている雷。雷太鼓も落ちてきている。画題については『東京国立博物館図版目録』（昭和38年）の表記だが、「雷と美人」の誤記か。

●摺物「二美人図」（寛政7年～13年〈1795～1801〉）。九切判着色。宗理画。13.6×18.7 日本浮世絵博物館蔵）

※梅の木の前に立つ二人の遊女。二人とも前帯で、一人は格子縞で、もう一人は無地の帯。二人とも顔はふっくらしている。同画題で享和元年から4年に重要文化財の掛幅絹本一幅（MOA美術館蔵）、文化前期に絹本着色一幅（北斎館蔵）にも描いている。

●摺物「裁縫の母子」（寛政年間〈1789～1801〉）。着色。宗理画。11.0×14.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション

※部屋の中で片膝を立てて裁縫をする母親と、座ってそれを見ている子ども。「佐保姫の霞の衣ぬいあけを おろすやよほど延た日のたけ 分銅重記」の狂歌がある。

●合作摺物「雪道」（寛政7年～10年〈1795～98〉）。長判着色。北斎宗理画・花押。山東京伝画。シカゴ美術館蔵

※図右に北斎が描く。雪を被った松の老木の手前で、母娘と下働きの女が遠くを眺めている。図左には山東京伝が、柴木の束を背負った馬の横で、柴木を馬に乗せようとする農夫と、馬の鼻面で柴木を持ち、煙管を銜えて、遠くを眺める農婦を描く。

●摺物「伸子張」（寛政10年～享和2年〈1798～1802〉）「洗い張り」（「二美人、洗い張り」とも。横大判着色。宗理改北斎辰政画。24.5×35.1 日本浮世絵博物館/シカゴ美術館/ハーバート大学サックラー美術館蔵）

※袋には、人屋根形「へ」の下に「三」の字が書かれている。

物干し台で朱色の反物を伸ばして風に晒している二人の女。その下で芥子坊髪の子どもが布袋と細い棒を持って遊んでいる。物干し竿の先には鯀が吊るされている。物干し台の下には家の瓦屋根が見え、傍には梅の花が咲いている。川向こうの家並みからは、凧が三つ上がっている。



伸子張は、染色や洗い張りの前に、反物の縦の上下を手棒で挟んで引っ張り、更に布幅を伸子と呼ばれる竹ひごの両端に真鍮の針を付けた道具で横に引っ張る作業をいう。 伸子張（サックラー美術館）

●摺物「折鶴を持つ美人」（寛政年間〈1789～1801〉）。着色。北斎画）

※梅の咲く庭のある縁側に座り、折鶴の羽を広げている娘。

●摺物「手紙を取り合う母子」（寛政6年～13年〈1794～1801〉）。着色。宗理画。21.9×18.8 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※娘の持つ巻紙の手紙を、娘に覆いかぶさるようにして取ろうとする母親。二人の前には盆に乗せた椀が傾き、その縁に鉢が置かれている。「山をなす長者か庭の梅の花 もつたほどある風のふくなり 花鳥庵春道」などの狂歌が記される。

●摺物「士（正月の準備をする武家婦人）」（寛政年間〈1789～1801〉）。着色。無款。12.3×8.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※「士」と図の左上に書かれているが読み方不明。「さむらい」と読むか。『ピーターモース・コレクション北斎図録』では副題として「正月準備をする武家婦人」としている。図は、鎧や三方にウラジロ等を飾った部屋に、三方を持って立つ婦人が描かれる。

●摺物「歳の市帰り」（寛政年間〈1789～1801〉）。紙本着色。無款。12.9×7.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※歳の市は歳末に、寺社の境内で、正月用の飾りや日用雑貨などを売る市。浅草寺の歳の市が賑わった。図は、正月用の品物が入った籠を背負い、俎を持って歩く男。鉢巻に正月飾りを挟んでいる。隣に御高祖頭巾の女がいる。

●摺物「近郊宮詣子供達」（寛政 11 年～12 年〈1799～98〉頃か。横長判着色。先ノ宗理北斎画）

※松の大木の脇の家の窓から、宮参りから帰ってきた子供達を見ている婦人。子供達は狐の面を付けたり、御幣の付いた棒を担いだりしている。手拭を被って扇子を手にした男もいる。

●摺物「母娘」（寛政 11 年～12 年〈1799～1800〉頃か。横長判着色。先ノ宗理北斎画。18.3×50.2）

※松のある高台で床几に腰を下ろしている母親が遠くを指さしている。その前に立つ振袖の娘。その先では小奴が高台下に咲く花を取ろうと前屈みになって母娘の方に振り向いている。

●摺物「越後獅子」（寛政元年～文化 15 年〈1789～1818〉。色紙判着色。無款。21.0×16.6。ベレス・コレクション/フリーア美術館蔵。『美術品所蔵レファレンス事典 日本絵画篇』より）

※鼓を打つ獅子、笛を吹く男、扇で顔を隠す男、二人で獅子を踊る男。

●摺物「梅に笹」（寛政 12 年～文化 9 年〈1800～1812〉。横長判着色。画狂人北斎画）

※右下から中央上に向かって太い幹が三本伸び、根元付近に笹が生えている。その向こうに細い梅の幹が中央下から左上に伸び、枝に花を多く咲かせている。

●摺物「柳の下の籠 午の春」（寛政 8 年～文化 7 年〈1796～1810〉。横長判紙本着色。北斎画。20.7×33.6 北斎館蔵）

※しだれ柳の下に、笠などが天秤の籠に乗せられて置いてある。「午の春」と書かれた下戸茂和頼（不明）の狂歌が添えられる。この絵は「北斎画」の落款のみなので、一応北斎期の作品とした。

●摺物「大子稲荷社」（寛政 8 年～文化 7 年〈1796～1810〉。横長判着色。北斎画）

※「奉納王子」と読める長提灯の下には「富本連中」と書かれた横板が下げられている前に行く女性二人と、赤子を背負う母親がいる。その後ろには風呂敷包を背負う小僧が、鳥もち棹を持った人形を捧げ持って歩いている。女性の前には「御神燈」と彫られた石灯籠があり、その先には桶から流れ出る御手洗がある。この絵は「北斎画」の落款のみなので、一応北斎期の作品とした。

寛政13/享和1 (2/5～) (1801) 辛酉 42 歳 時太郎可候、へたさくしや可候、北斎、画

狂人北斎、北斎宗理、(可笑門人雀声) 画狂人、ほくさゐ、北、斎：こと (31 歳)、

(富之助：15 歳)、阿美与 (13 歳)、阿鉄 (11 歳、) 阿栄 (4 歳)、多吉郎 (1 歳)

◇相撲興業 (3 月、深川八幡宮、11 月、本所回向院)。

◇7 月 12 日、小沢蘆庵没 (79)

◇7 月 19 日、百姓・町人に名字帯刀を禁ずる。

◇9 月 25 日、本居宣長没 (72)

○8 月、志筑忠雄、ドイツ人、エンゲルベルト・ケンペル (Engeldert Kaempfer, 1690 来日) の『日本誌』のオランダ語第二版の巻末付録最終章を抄訳し『鎖国論』とする。

○小林一茶、『父の終焉日記』。

【次男誕生・父没か】

★次男多吉郎誕生か（年代不明。翌享和2年（1802）頃、本郷竹町（現東京都文京区本郷2・3丁目付近）の商人勤助の養子となったか。さらに御家人加瀬氏の養子となり、名を崎十郎と改めた。娘は白井多知女、孫は白井孝義）。

※「北斎の裔一幕臣白井家の系譜と、その遺品」（2019年。内藤正人『浮世絵芸術』177巻所収）の注3によると「加瀬家が幕府に提出した由緒書の記載によれば、文久元年（1861）5月15日病死とされるが、今回閲覧が許された白井家過去帖には、その前年万延元年（1860）5月9日に51歳で没し、青山千駄ヶ谷の慈光寺に葬られたとある。後者に従えば、北斎息子の崎十郎は文化7年（1810）生まれとなる」と記されている。文化7年の生まれとすると既に妹の栄（本稿では12歳）も生まれていると考えられるので、白井家過去帖の記載は疑問視される。

★9月27日、北斎の血縁（あるいは父か。宝暦10年：【北斎の父母・兄妹】条参照）と思われる川村市良衛門（石工・仏師。号佛清）の墓碑が、誓教寺（浅草八軒町。現東京都台東区元浅草4-6-9。北斎の埋葬寺）に建つ。墓碑の表には「元祖佛清」と彫られ、裏面には「享和元年辛酉九月二十七日」とある。同寺過去帳には「忍精信士 九月二十七日 佛師屋清七」とあるという（『年譜』、及び『北斎の研究』p164〈福本和夫 昭和19年7月 北光書房の記事を『日本浮世絵博物館所蔵 北斎』平成5年12月〈読売新聞社〉により転載紹介。p161～162）

なお、北斎の末裔については、内藤正人「北斎の裔一幕臣白井家の系譜と、その遺品」（web）に詳しい。末裔については本稿末尾に整理記述する。

★この頃、上野の山下辺（現在のJR上野駅を含む駅前一带辺り）に住む。

※黄表紙『児童文殊稚教訓』に「ふうがでもなくしやれでもなくせうことなしのやましたへんにしやくやずまい」（後述参照）とある。

※洒落本『仇手本』（小金厚丸作）前編第一回（白拍子）図の左下にも「風雅でもなく洒落でもなくせうことなしの山の手に 画狂人北斎筆」とあり。山の手は、山下を指すか。

【白猿との交流】

★五代目市川団十郎、引退し白猿と名乗り秋葉神社（現東京都墨田区向島4-9-13）辺りにあった向島庵崎に隠居。北斎この頃より白猿の依頼で摺物や狂歌本の挿絵を描き交流する。

※随筆『古今雑談思出草紙』（「戯場役者市川団十郎家伝の事」の項）には以下のように記される（栗原東随舎著。天保十一年序。『日本随筆大成 第三期』所収 吉川弘文館）。

「（略）享和元年酉年七月、或人、三囲閑居（筆者注：先の五代目市川団十郎白猿の隠居を指す）の心をたはれ歌（狂歌）に読とて、三囲の絵、浮世絵師北斎が書しに讚を望みぬれば 七年以前に世の勤めを捨て、廣さきに遁れたる草の庵に、或日、何某の君の普信給ひて、此絹、汝じが隠遁の心を狂歌によめとの仰せに、頓に書付て奉るのみ 芝居事遁れても又かしましや（筆者注：芝居をやめても忙しいことよ）松が琴ひく竹の笛 行年六十一歳 反故菴注白猿越書鼻」

注）反故菴：本所牛島（三囲）の団十郎の隠居所。隠居後は成田屋七左衛門と称した。

※この年、引退した白猿（市川団十郎）に、北斎が「三囲」の絵を描き、白猿の隠居の心を読んだ狂歌の賛を請うたというのである。

●黄表紙『**児童文殊稚教訓**』（1月。自画作。莊子「胡蝶の夢」に題材。三冊。画作時太郎可候注。上巻の絵題箋には「辛酉北斎画」とあり、最終丁に「画作時太郎可候注1」とある。鳶屋重三郎版 大英博物館/東洋文庫：岩崎文庫注2蔵）

注1) 時太郎可候：「可候」の前に「時太郎」を付した号は、黄表紙『**化物和本草**』（寛政10年：1798）、黄表紙『**鼈將軍勸略之巻**』（寛政12年：1800）、黄表紙『**両面出世姿鑑**』（享和4年：1804）、黄表紙『**年男笑種**』（文化元年：1804）、咄本『**はなし亀**』（文化元年：1804）などにも用いられている。

注2) 岩崎文庫：東洋文庫は岩崎文庫とモリソン文庫から構成されており、東洋文庫岩崎コレクションという呼称は用いていない。



『児童文殊稚教訓』「へたさくしや可候」の図

※本文中に「へたさくしや可候」と書いた紙を貼った障子の敷居に肘をかけて、頭巾を被って俯く自画像と次の文を載せる。「可候」を「そろべく」と称している。

「ふうが（風雅）でもなくしゃれ（洒落）でもなく、せうことなしのやました（山下）へんにしゃくやずまひ（借家住まひ）のせけん（世間）しらず、ミずから（自ら）そろべく（可候）となのり（名乗り）、なにひとつとりえ（取柄）のなきぼうづ（坊主）ありて、ふとそうしのげさく（草紙の戯作）をつづり（綴り）しが、もとよりいろはのいのじはみしりごし（見知り越し）なれど、ちりぬるちあく（智恵）もなくならむ、うみのらち（埒）のあかぬうまれ（生まれ）つきないふんべつ（分別）のそこゝをかきぬみて（書き抜いて）、やうやく（漸く）にこしら（拵）へかけがつくりと、きくたびれ（気草臥）しておもはず（思はず）とろとろやらかすおりふし（折節）以下（略）ごろうじまし、ねたかおつきの（寝た顔つきの）やぼな（野暮な）ことを へたさくしや可候」

（ルビ・句点・解釈は筆者による）

●狂歌本『**女三十六歌僊絵尽**』（春。角書「**新版錦摺**」。「寛政九丁巳仲冬」とあるが、刊行は本年と見られている。着色折本一帖。花形義融編。西村屋与八版。24.7×37.4 大英博物館/国立国会図書館/キョツソーネ・コレクション/ブルヴァエー・コレクション/日本浮世絵博物館蔵）

※女流歌人三十六人は鳥文斎栄之が描き、女流三十六歌仙の和歌を書道教師の花形義融の門下生の少女三十六人に書かせて一冊に仕上げた書画帖。北斎は見返しに〈公卿と下部〉一図を描く。

☆〈**公卿と下部**〉（画狂人北斎図。各25.1×18.7の二枚続き）

※三人の公卿たちが板橋を渡り、四人の下部が後に付いている。一人は鉄箱を担ぎ、一人は赤子を背負っている。それを三人の子どもが指差して見ている。 公卿と下部（大英博物館）



●狂歌絵本『**麓の石**』（角書「**浅間山**」）。『**布毛等濃夷詞**』とも。一冊。曲木正墨・尚左堂（窪）俊満・北斎宗理画。芝の屋山陽編。和泉屋市兵衛版 フリーア美術館蔵）

※ARC 古典席ポータルでは菱川宗理となっている。

●黄表紙『下界驪鼻落天狗』(三冊。『親譲鼻高名』〈天明5年:1785〉の改題再摺。春朗改群馬亭画注¹。可笑門人雀声注²作。山口屋忠右衛門版)

注1) 春朗改群馬亭:『親譲鼻高名』の落款をそのまま使用したもの。

注2) 「雀声」は北斎の戯作名かどうか諸説あり。

●洒落本『仇手本』(前編角書「仕懸幕莫」。後編角書「通神蔵」(享和2年刊)。一冊。小金厚丸作。画狂人北斎筆。早稲田大学図書館蔵)。

※『洒落本大成』二十二巻解題では「本書は、刊記・奥付を欠き、序の年季もなく、刊年を決定することが困難であるが(略)、北斎が画狂人を号したのは寛政十二年から文化五年の間であり、北斎号は寛政九年から文政二年までである。小金厚丸の洒落本が寛政末年から享和初年に集中していることとあわせて、ここでは従来の説にしたがって、いちおう享和元年刊としておく」としている。

『年譜』では「棚橋正博氏は、本書の版元を藤白屋太兵衛と推定される」とし、『日本書誌学大系 48 (3) 黄表紙総覧 後編』棚橋正博(青裳堂書店 平成元年)を資料としている。

※「忠臣蔵」を題材にしたもの。前編は初段～六段までを扱う(各段は回と表記)。後編(享和2年:1802刊)は七段から十一段までの内容を扱う。

※北斎は以下の挿絵を描く。

前編 第一回〈白拍子・香保世〉(この挿絵に「画狂人北斎」の落款あり)。第二回〈若狭屋助七〉第三回〈遠州屋半兵衛〉。第四回〈大星屋由良之助〉。第五回〈舟宿・早野屋勘平〉。第六回〈狭通左佐〉。

後編 第七回〈香留川〉(この挿絵に「画狂人北斎」の落款あり)。



後編「通神蔵」第七回香留川(早稲田大学図書館)

第八回〈女中・於奈勢〉

第九回〈魚作・多古川〉。第十回〈妓子屋・儀平〉。第十一回〈高野屋・直右衛門〉。

●錦絵『摺物風江戸名所絵』(〈亀井戸開帳〉の画があり、亀戸天満宮開帳が享和元年という考証があるので、享和元年頃の作と考えられる。従来は享和年間と幅があった。横大判錦絵揃物。無款。版元不明)

※13図以上存在すると考えられている。従来、各画は独立して扱われていた。

☆〈上巻〉(印画狂人。24.6×38.4 太田記念美術館:長瀬コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館/すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション蔵)

※不忍池を南岸からとらえた図。蓮の広がる池の端を木綿売り注の行商の若い男が扇を手にして一家の前を通り過ぎ、それを振り返る娘と傘を持つ母親。さらにそれを見る笠を被った小奴の図。

注) 高荷木綿売りと思われるが、寛政末年には見られなくなったという。「モウメンヤ、モウメン」の売り声で、化政期には一反五匁～12匁、銭では400文～1000文(約10,000円～25,000円)で売っていたらしい(『浮世絵八華5北斎』)。高荷木綿売りは、一反の木綿を高く積み重ねて背籠を背負い売り歩いた。

☆〈王子〉(印)ほくさゐ。26.7×39.0 シカゴ美術館/ベルギー王立美術工芸博物館/島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※杉の木の下で藁束に挿した名物の暫狐注を売る女と、子を背負った婦人ともう一人の女。その前には魚獲りの網と笊を持つ子どもと、水を入れた桶を持つ子どもが描かれる。

注) 暫狐注：王子稲荷の土産物で、紙で狐の顔を象ったものを細い棒に付けた縁起物。

☆〈両国夕涼〉 (印画狂人。25.5×38.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※河口に突き出した板の上で遊ぶ二人の子ども。その側で年増と若い女と娘が団扇を持って、稲妻（花火の軌跡とする説あり）を指差している。側の年増は団扇を下げ持って、右手を口元に宛てている。図左に両国橋。対岸に材木が林立しているのは豎川辺りか。

両国夕涼み (島根県立美術館)



☆〈今戸川〉 (24.9×35.9 島根県立美術館：

永田コレクション/東京国立博物館/メトロポリタン美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモースコレクション蔵)

※今戸は、現東京都台東区山谷掘の今戸橋から法源寺辺までの隅田川沿いの地。瓦や今戸焼きと呼ばれる土器の人形を造る職人が多くいた。図は二人の職人が瓦や獅子を乾かしている様子を描く。⊕と焼かれた瓦も干されている。背景に隅田川に浮かぶ舟。

☆〈亀井戸開帳〉 (印画狂人。24.9×35.9 ベルギー王立美術歴史博物館/すみだ北斎美術館：ピーターモースコレクション/オランダ国立民族学博物館蔵)

※亀戸天神開帳を示す赤い提灯が掲げられている池のほとりを、見物の主従が通りすぎている。揚帽子（角隠し）をかぶる武家の母娘たちの後から付き従う者のうち、こちらを向いている下女がいる。池の上の藤棚から藤が咲き垂れている。

※斎藤月岑の『武江年表』に享和元年条に「三月十八日より十五日の間、浅草寺観音開帳○亀戸天満宮開帳○目黒不動尊開帳」とある。

亀井戸開帳 (すみだ北斎美術館)



☆〈江之島〉 (25.5×37.0 太田記念美術館：長瀬コレクション/シカゴ美術館蔵)

※前方に江ノ島を見る海岸を、手綱を牽く牛飼いと牛に乗った女旅人と天秤の荷物を運ぶ供の男たち。その側を笠を被った女旅人が二人並んで歩いている。

☆〈すみたかハ 渡の雪〉 (仮題。印北印斎。24.0×36.6 すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館蔵)

※三囲稲荷下の竹屋の渡しといわれる栈橋に立つ二人の女。一人は大きな蛇の目傘を開き、もう一人の女と傘に入っている。側に立っている供の男も大きな傘を開いて立っている。川には船が二艘浮かび、遠景に続く土手には雪が積もっている。

☆「蟻通神社」 (「蟻通明神」とも。25.4×38.1 ベルギー王立美術歴史博物館/島根県立美術館/ミネアポリス美術館・ゲールコレクション蔵)

※謡曲「蟻通」に取材。紀貫之が和泉国蟻通明神前を通ったとき、馬が突然倒れたのは明神の祟りと告げられ「かき曇りあやめもしらぬ大空にありとほしをば思ふべしやは」と詠んで神を慰めて無事に通ったという話に取材したもの。図は、大きな傘で雨を防いで馬に乗る貫之とその周りの供の者たちが、明神の前を通りしようとしている。



蟻通神社（島根県立美術館）

※『秘蔵浮世絵大観 9 ベルギー王立美術館』では、この作品も（摺物風）『江戸名所絵』（享和1年）に含まれているが、この絵だけが古典に取材しているので、あるいは他の摺物かとしている。

●摺物「鶏に餌をまく神人」（寛政13年1月。北斎画）「とりの初春」とある。玉樹軒千枝人の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「笠に摘草」（正月。「笠 蕨 土筆」「笠に蔬菜」とも。全紙版着色。画狂人北斎写。全体36.0×52.2。画部分18.0×52.2。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵。画部分のみは東京国立博物館蔵）

※上部に画、下部に狂歌が反転して書かれる。裏返した笠に摘み草が乱雑に置かれ。笠の外にも土筆などがこぼれ出ている。図中に「辛酉春」とある。「辛酉」の年は「辛酉革命説」と言われる迷信から享和に改元された。

本図は「画狂人北斎」の落款の初出と言われる。一方、寛政12年（1800）「扇面 富士図」に画狂人北斎の落款が記されているが、作画は寛政12年以降とも見なされている。また、本年の洒落本『仇手本』前編一回と後編七回の挿絵に「画狂人北斎」の落款がある。

●摺物「月を見る母子」（「月夜の母子」とも。横中判着色。画狂人北斎。八人の狂歌集。東京国立博物館蔵）

※松の木の下で子どもを抱きあげ月を見る親子。子どもは月を指差している。側には萩の花が咲いている。図の左半分には、浅草庵市人を含む八人の狂歌が記されている。



月を見る母子（部分：東京国立博物館）

●絵暦「床几の男女」（紙本着色摺物一幅。北斎画。9.2×12.7 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※床几で休む男は煙管を銜え、女は立膝で休みながら足元の鶏を見ている。中国語で「鶏」(ji)と「吉」(ji)の発音が似ていることから、鶏は縁起のよい動物とされる。提灯に描かれた松（正月）、桜（三月）、柏（五月）、七つ星（七月）、月（八月）、十字型のかすり（十月）、雪（十二月）などで大の月を表している。

●摺物「十千の内」（紙本着色一幅。小判。画狂人北斎（「画」字なし）。すみだ北斎美術館蔵）

☆〈小松引き〉（14.5×19.2 すみだ北斎美術館蔵）小松引き注をする女の後ろから抱きついて一緒に引く子ども。その側の松の木に抱きつきながらその様子を見ている二人の女。注）小松引き：平安時代、正月最初の子の日に野山に出かけ、小松を引いて長寿を願った。

☆〈千金の春〉（14.0×18.7）千両箱の重なる部屋で、男女の前に千両箱を差し上げる袴の男。

●絵暦「年中行司 木娘小之月」「年中行司 北之方大関」「年中行司 辰巳ノ方大関」(1月。小判錦絵三枚続き)があるという(『日本版画美術全集 第五巻』檜崎宗重)〈『年譜』による〉。

●摺物「黒塀」(「子供に乳を飲ませる母図」とも。春。無款。細判)



※母親の帯に「酉春」(享和元年)とある。泉楼のと女と近江楼三義の狂歌が記される。子を抱いて乳を飲ましながら黒塀の前に立つ若い母親。原画が着色かは未見。

右図「子を連れて梅見ル空の～」の句のある絵は、俵屋宗理・ハーバード大学蔵とされるが、句は後から書き加えたものか。享和元年は宗理号を譲った後なので宗二の作との見方もある。黒塀(立命館大学 ARC より)

●摺物「牡丹図」(11月頃。画狂人北斎画)

※市紅(四代目市川団蔵の俳名。1745～1808)の大坂・河原崎座顔見世興行(10月予定)をやむを得ない事情で延期することを告げた摺物。

「枀からの顔見せにけり紅牡丹 市紅」の句が記される。団蔵は主に上方で出演したが、寛政10年(1798)から享和2年(1802)までは江戸で出演、その後は上方を中心に活躍した。「枀」は市川家の三升紋を指す。

享和2(1802)	壬戌	43歳	画狂人北斎、北斎辰政、北斎、 印 北斎、辰政：こと(32歳)、(富之助：16歳)、阿美与(14歳)、阿鉄(12歳)、阿栄(5歳)、多吉郎(2歳 養子に出る)
-----------	----	-----	--

◇1月1日、江戸大火。

◇2月26日(西洋暦)、ビクトル・ユゴー生(～1885)。

◇5月9日、曲亭馬琴、江戸を出発、山東京伝の紹介を持って京都・摂津を遊歴。

◇6月27日、四代目松本幸四郎没(66)。

◇7月24日、アレクサンドル・デュマ生(～1870)。

◇7月18日、唐衣橋洲没(60)。

◇相撲興行(2月、神田明神、11月、本所回向院)。

◇オランダ商館江戸参府。

◇富士講禁止令(禁止令は寛保2年(1742)、安永4年(1775)、寛政7年(1795)、享和2年(1802)、文化11年(1814)、天保13年(1842)、嘉永2年(1849)と何度も出されている)。

◇江戸山谷に料理店八百善が開店(現神奈川県鎌倉市十二所33-2)。

○春、十辺舎一九、『東海道中膝栗毛』(初編。文政5年(1822)までシリーズ化)。妻「民」を迎える。

○山東京伝『浮世絵類考』に追考を加筆。

★式亭三馬『又焼直鉢冠姫 稗史億説年代記』下巻(西宮新六版)に「北斎独流の一派をたつる」と記される。

※同書で当時の浮世絵界を图示（倭画功名尽）している。北斎は図中央上部に「北斎辰政」として、独立して記される。



浮世絵界図（『又焼直鉢冠姫 稗史億説年代記』所収）

- ★この頃、次男多吉郎、本郷竹町の商人勘助の養子となる。後に御家人加瀬氏の嗣子となり、名を崎十郎と改め跡目を継ぐ。俳号：椿岳庵木峨。
- ★この頃よりオランダ人に素描を売っていたといわれる。

●洒落本『仇手本 通神戯』後編（七段目～十一段目）。あるいは享和元年に同時刊行か。各一冊。小金あつ丸作。画狂人北斎筆。大阪大学/国立国会図書館：前後合冊判蔵）⇒享和元年（1801）『仇手本仕懸莫幕』初編条参照。

※藤白屋太兵衛版か（『日本書誌学大系 48(3)黄表紙総覧 後編』棚橋正博〈『年譜』出典文献〉で紹介）

●狂詩本『潮来絶句集』（正月か。文化元年：1804 説あり。中本彩色二冊 33 丁。合本一冊。全 16 詩 16 図。北斎唯一の全て見開きの美人画集である。後、一冊に合本され、後半に曲亭馬琴の『潮来曲後集』（著作堂馬琴述）が収められた。富士唐麿（藤堂良道）・柳亭陳人による五言絶句編。画工の署名なし。但し『世界を魅了した鬼才絵師葛飾北斎』（河出書房新社 2016 年）では「葛飾北斎画」としている（P60）。二代蔦屋重三郎版。19.4 × 13.7 北斎館/早稲田大学図書館/仏・ベレス・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/東京文化財研究所/日本浮世絵博物館蔵）

※潮来節注に合わせた狂歌と、それを五言絶句の漢詩にし、北斎が美人画（潮来の遊女）を描いたもの。わらい絵に似て彩色摺のため出版取締令により版木は壊して絶版となり、残本は焼き捨てられた。現在ではの稀観書の一つという（『浮世絵八華 5 北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」）

※文化 13 年(1816)『老婆心話』藤堂良道著（富士唐麿・如蘭亭主人）に次の記事がある（石川巖「『潮来絶句集』の絶版と其作者」〈「浮世絵」33 号〈大正 7 年 2 月刊〉に所収の藤堂良道の記事を『年譜』資料 10 で紹介）。

「此潮来歌の詩を作りしは余が至って若かりし時のことなり、此をもてすれば早廿五六年の昔しなるべし。或時新吉原仲の町難波屋とかいへる茶屋に於いて、歌妓共多く集め遊べり。其冠たる妓には重妓遊妓など頗るみめもよきあり、潮来歌を代る代る唄ふ。其時東堤割注：谷文晁の弟安五郎と云、東江門人にて書を善くす 席にありて申さく、今歌妓の唄ふ潮来節てふものを、君、詩に作り給へ、やつかれ筆を執るべし、余も興に入て作り出しぬ、（略）其頃、書肆蔦屋重三郎早くも聞て、北斎といへる画工に美人の姿を其歌に寄せて描せ、其の新板に売出し、数千（割注：千は百の誤か）部の本を估りひろごりて、利益を多く取りし由、然れども其頃は彩色摺、笑ひ画に似よれるものは禁じられぬ。かく美しき彩色なせる本は如何と御答め割注：蔦屋の番頭忠兵衛召し出され、誰か此作を成せるとの御答に、私こと作り申候と申上たれば、役人申さるゝには、その方は本屋の番頭ほどあり、かくまで詩を作

りしそと被申けると也。余が作と言はぬ故に夫なりにして、忠兵衛手かねにて事済みたれば、余が名包みかくれしなり。夫より断然として戯作を止めるなり。（略）文化十三年九月十日夜半灯火に誌す 如蘭亭主人」

これによれば、漢詩は藤堂良道（如蘭亭）が作ったが、華美な本のため御咎めがあり、鳶屋の番頭忠兵衛が呼び出されたが、詩は自分が作ったとし、藤堂良道の名は出さなかったというのである。

注）潮来節：常陸国潮来村（現茨城県潮来市）で歌われたものが、遊里でも唄われるようになり、全国に流行した。

※見開き一図で左右のページに潮来節が七・七・七・五音（都々逸の旋律に同じ）で以下のように図とともに記される。



☆右図「あふたゆめみてわろふてさめる あたりみまはしなみだぐむ」
☆左図「しばしあはねばすがたもかほも かわるものかよこゝろまで」

☆右図「ぬしはわしゆえわしやぬしゆゑに 人にうらみはないわいな」
☆左図「そらとぶとりがものいふならば たよりきゝたやきかせたや」



☆右図「なんぼおまへがうわきじゃとても しんにほれたがしれぬかへ」
☆左図「くるかくとゆふつげどりの とぶをながめてしあんがほ」

☆右図「ゆふしごげんでうれしいけれど なまじあしたのものおもひ」
☆左図「ぬしのこぬよははやねてゆめに おふておもひをはらしたや」




●狂歌絵本『春の戯歌』（享和元年とも。1月。私家版。一冊。北斎は「福寿草に扇」一図のみを描く。画狂人北斎画。便々館湖鯉鮒編。琵琶連版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※他に、武川亭永鯉（鳥橋斎永理）や北溪（表紙画）が描く。

☆〈福寿草に扇〉横長見開き2丁の画。染付の花器に植えられた黄色の福寿草と扇の図。『肉筆画帖』（天保5年頃：1823）にも同題の絵を描いている。

●狂歌絵本『**画本忠臣蔵**（内題：忠臣蔵役割狂歌）』（1月。二冊。桜川慈悲成作。北斎辰政画。西村屋与八版。島根県立美術館蔵）

※フリーア美術館：フルヴェラー・コレクションに多色摺で、図帖最後に「画狂人北斎画」とある同題の絵本がある（20.8×15.5「フリーフリーア美術館ゲルハルト・フルヴェラー・コレクション日本絵本コレクション目録稿」による）。狂歌が巻末に収められている。

※本書下冊の最終挿絵中に「画狂人北斎戯画 」とあり、また、慈悲成の序文には「画狂人北斎」とある。本書は文政7年(1824)の墨摺本もあるという（『年譜』による）。

☆〈松切り〉（仮題）「仮名手本忠臣蔵」二段目。桃の井若狭之助が師直に対する殺意を家老の加古川本蔵に明かす。主人の意を汲み本蔵は松の枝を切り落として賛同の意を示す場面。「松切りの場面」。隣の部屋で様子を窺う本蔵の娘こなみ。

☆〈母娘道行〉「仮名手本忠臣蔵」八段目（道行旅路の嫁入）の場面を描く。山科に住む大星力弥に嫁入りするため、加古川本蔵の女房戸無瀬が娘小浪をともなつての道行場面。角隠を被った母親と振袖姿の娘が手を繋いで歩いている。この画趣は、寛政10年頃の『新板浮絵忠臣蔵』（横間判。伊勢屋利兵衛版）や文化3年（1806）の『仮名手本忠臣蔵』（横大判。鶴屋金助版）でも描いている。

●絵本『**北斎忠臣蔵**』（『画本忠臣蔵』の狂歌部分を削除し絵だけを抜き出して再編集したもの。半紙本一冊。画狂人北斎戯画。西村屋与八版。国立国会図書館蔵）

【全図を描いた唯一の帖装狂歌絵本】

●狂歌絵本『**美やこ登里**』（『美やこどり』『都鳥』とも。着色半紙本折本一帖。全23図。見開きの図。朱楽管江の流れをくむ春江亭梅麿らの狂歌師による撰。画狂人北斎。彫刻：安藤鍋次郎。各平均見開き24.0×37.0丸屋甚八版。全23図の完本は、島根県立美術館：永田コレクションとシカゴ美術館。他は、オランダ：ライデン国立民族学博物館/ベレス・コレクション蔵）

※奥付に「享和二壬戌歳正月」「画工画狂人北斎」とある。

※『伊勢物語』の第九段「東下り」で詠まれた和歌「名にし追はばいざ言問はむ都鳥 わが思ふ人はありやしやと」に因んで、隅田川を挟んで、浅草・本所界隈の風俗を題材にする。

全23図全てを北斎が描いたのは帖装の狂歌絵本として唯一のもの。『絵本 隅田川兩岸一覽』とともに狂歌絵本の佳作とされる。全体に黄味がかかった地の色に淡く彩色されている。

画題は記載された狂歌の意味からのもの。

☆〈洲崎〉「洲崎弁財天」の道標のある場所から、水平線に朝日が昇るのを眺める婦人や男達。洲崎弁財天は品川と深川にあるが、深川洲崎の図であろう。「すさき」と読む。初日の出には前夜から人が出て、境内には飲食の屋台が出て賑わったという。

☆〈佃島〉碇の置かれた浜辺で箆を持った婦人たちと子どもが、漁船の底に付いた貝類を火であぶって取ろうとしている漁師を見ている。

☆〈梅屋舗〉亀戸の梅屋敷の茶店で休む男と女。梅を見に来た旅姿の武士が二人。一人は頭に手をやり梅に感心している。

☆〈螺堂〉曹洞宗の羅漢寺（現東京都江東区大島3-1-8）の螺旋階段の三階の螺堂からは富士山が眺められる名所であった。図は、堂の見晴らし台から富士山を眺める男女や、疲れて座り込む僧が描かれる。富士山は描かれない。明治42年に目黒に五百羅漢寺（現東京都目黒区下目黒3-20-11）として移転した。

☆〈三圃〉三圃神社（現東京都墨田区向島2-5-17）の土手の下に見える石の鳥居の屋根の側でくつろぐ男女や子ども。空になった酒の角樽をかつぐ侍と、扇子を口に当ててなにかを唄う侍。その後ろから荷物を背負った小僧がついて行く。

三圃（島根県立美術館）



☆〈首尾の松〉蔵前の隅田川のほとり（現東京都台東区蔵前1-3 辺）にあった松で、枝が川面にかかるように垂れていた。吉原通いの舟の目

印となったという。寛永年間（1624～43）、隅田川が氾濫したときに、に、謹慎中の阿部豊後守忠秋が、三代将軍家光の見ての前で進み出て人馬もろとも川に入り、対岸に辿りついたので、家光から謹慎を解かれたという伝説から首尾の松と呼ばれるようになったという。吉原通いの客がこの松を見て、妓楼で首尾よくいくようを祈ったという俗説もある。現在も七代目の首尾の松が、蔵前橋の西詰め下流側のたもとに碑とともにある。図は、対岸の首尾の松を眺めながらそぞろ歩く三人の婦人と供の男が描かれる。

☆〈両国〉隅田川の岸辺の縁台でくつろぐ女と、台の上ではしゃぐ子ども。その側に立っている女。何かを唄っている侍二人と、肩に折り箱を重ねて担ぐ男。

☆〈関屋の里〉関屋の鄙びた家の前で馬の足を盥で洗う農夫の側で、子どもと一緒に蚩狩りをする農婦は、鍬を手にしている。関屋は、現在の東京都足立区千住仲町から千住関屋町付近を指す。隅田川に接し桜も美しい場所として知られた。

☆〈真崎稲荷〉浅草寺北の隅田川沿いにあったと思われるが、現在では真先稲荷として、大正 15 年（1926）に、白髭橋西側の石浜神社（現東京都荒川区南千住3-28-58）に移されている。図は、茅の輪くぐりをする親子を祀る御幣を手にした折烏帽子の男や、赤子を背負って参詣しようとする婦人と娘を描く。茅の輪くぐりは 6 月に夏越の祓として、無病息災を祈願して行われる神事。

☆〈浅茅ヶ原〉秋風に着物の裾を靡かせ、手で押さえながら歩く婦人が二人。その先には笠を被り鉦叩きの男の僧衣も靡いている。浅茅が原の往来の風景。背景には富士山が見える。

浅茅が原は、一般的には荒れ果てて淋しい場所の総称だが、ここでは浅草寺北東部の橋場町辺りと思われる。近くの鏡が池には、遊女が悲恋の末に身を投げた池ともいわれ、姥ヶ池には、娘を遊女に仕立てた母親が、娘の相手を殺して金品を奪って生計を立てたことを娘が悲しみ、自ら男装して母親に殺されたが、そのことを悔やんだ老母はこの池に身を投げたという伝説もある。いずれにしても、茅の広がるもの寂しい場所であったようだ。姥ヶ池は、現東京都台東区花川戸2-4（花川戸公園内）にあった。



浅茅が原（島根県立美術館）

☆〈中洲三股〉中洲は、日本橋中洲のことで、日本橋南東に位置する。隅田川の清州橋の西詰で、元は川が三方に分れていた地点で三股（三つ股・三俣・三派とも）と呼ばれた。

江戸中期には埋め立てられ中洲新地として遊興客で賑わったが、洪水の影響で寛政元年(1789)に取り壊され、元の浅瀬に戻った。月の名所としても有名。

図は、月を鑑賞する屋根船の客が船端から桶の中のを川に流して、もう一人が手を伸ばして紐に付けた箱を川面に下げている。河岸では夕涼みを楽しみ、そぞろ歩く二人の女と、酒徳利をぶらさげた供の男がいる。

☆〈あや瀬村〉鄙びた綾瀬村の畑に、手桶から水を撒く農夫。鍬を担いで手桶を持つ農婦。天秤の桶を担ぐ農婦と通りかかる旅の男。夕暮れに雁が群れて飛んで行く。綾瀬は、現東京都足立区綾瀬一帯及び、隣接して葛飾区にも南葛飾郡綾瀬町があった。

☆〈待乳山〉隅田川を眺望する夕暮れの待乳山の茶店で、縁台に腰掛け煙管を銜えてくつろぐ旅人に、茶を盆に乗せて運ぶ娘。紅葉が咲く向こうには、川に浮かぶ舟が二艘描かれる。待乳山は、待乳山聖天(現東京都台東区浅草7-4-1)の周辺の地を指す。小高い丘で、風光明美な所として人気があった。

☆〈駒形堂〉駒形堂(現東京都台東区雷門2-2-3)は、隅田川の駒形橋の傍らにある。浅草寺の本尊である観世音菩薩が推古天皇36年(628)にこの地に現れたことで、天慶5年(942)建てられた堂といわれる。この側の船着き場に着いた参詣人は、まず駒形堂の本尊を拜んでから浅草寺に参拝した。4月19日に、年一回の大祭が行われる。

図は、駒形堂の船着き場から渡し舟に乗っている人々を描く。艀を操る船頭と舵をとる船頭の横には、波しぶき除けに大きな蛇の目傘を開き、その陰にいる女が二人。隣には笠に手をやり女と顔を見合わせていると思われる男。舳先には畳んだ傘を肩にして立ちながら進む先を眺めている男などが描かれる。

☆〈秋葉〉秋の落葉を熊手で描き集める母子と、繋がれて台の上にいる猿に餌をやる神官の図。秋葉は、火除けの神として信仰された秋葉大権現社(現秋葉神社：現東京都墨田区向島4-9-13)と思われる。紅葉でも有名。

☆〈梅若〉梅若は、梅若伝説に縁のある隅田川沿いの木母寺辺りを想定した図。京都の比叡山で修行中の梅若が人買いに騙されて隅田川の木母寺(現東京都墨田区堤通2-16-1)辺りまで来て夭折し、この地に葬られたところ、後に梅若を捜していた母親が、ここで我が子の弔いに遭遇したという。図は、雪の隅田川沿いの路を笠を被って鍬を天秤棒の先に付けて行く農夫と、笠を被り合羽を着て、藁に包んだ魚を手にした男の側に、御高祖頭巾の女が傘を閉じて立っている。

梅若(島根県立美術館)



☆〈浅草歳の市〉年の市の賑わいを描く。老木に立て掛けるように積まれた祝い酒の樽がある高台の下には、「寿」と書いた酒樽を担ぐ男や、正月の縁起物を持つ人々でごった返している。

☆〈妙見の松〉柳嶋の妙見山法性寺(現東京都墨田区業平5-7-7)は、北辰妙見大菩薩により北斗七星を祀る開運の寺として信仰された。妙見堂の前には妙見が降臨したと伝えられる周囲2m余りの影向松がある。日蓮宗の寺で、北斎が信仰していたことで知られる。

図は、根元を丈の低い柵で囲まれた太い影向松。その柵には白蛇を描いた絵馬が掛かっている。その脇には鍬を抱えてしゃがんでいる男がいる。松の手入れでもした後だろうか。松の垂れた枝の側には、婦人と娘と子どもが立っている。

☆〈一の橋〉隅田川から入って、^{たてかわ}堅川に掛かる一つ目の橋なので一の橋と名づけられた。一の橋弁天があり、参拝者で賑わった。

図は、一の橋の下で釣りをする二人の女と、桶を抱える子ども。両手に竿を持って釣りをする男と、竿を置いて小さな樽に腰掛けている男。^{はしげた}橋桁が太く描かれ、その向こうに富士山が見える。

☆〈今戸〉今戸は、瓦等の焼き物が有名な所。図は、^{かまど}竈に杉の葉をくべてこれから火を起し、焼き物を焼く準備をしているところ。鋏を持って^{かまど}竈を塞ぐ用意をする男や、これから焼く瓦を肩にして持っていく子どもと、職人に茶を持っていく女がいる。

☆〈日本橋〉図の手前には、擬宝珠のある日本橋の上を、魚河岸からの魚を入れた^{ざる}笊を担ぐ男や、天秤棒の先に下げた^{ざる}笊に入れた魚を運ぶ男。荷を背負った行商の男や職人の側で、欄干から隅田川を見る^{かみしも}袴姿の侍などの上半身が描かれる。遠景も樽と屋並みが小さく描かれる。



日本橋（オランダ：ライデン国立民族学博物館）

☆〈石場新地〉深川の花町（岡場所）七場所注の一つ。^{なな}越中島の一部で、幕府の石置き場があった。図は、三味線箱を抱えた芸者ともう一人の女が、路上で魚をさばっている魚屋の前を通ろうとしている。図の右側には、四角く切り取った石がかさねてあり、^{ほりわり}掘割に置かれた竿にかけた^{ぎょうま}漁網の先が見える。

注）七場所：深川花街の七つの^{おかげしよ}岡場所。仲町、新地（大・小）、^{いしば}石場、（古・新）、^{やぐらした}櫓下（表・裏）、^{すのえ}裾継、^{どぼ}土橋、^{ひをいう}佃をいう。

☆〈吉原〉妓楼の廊下に行く、仕懸け（打掛け）を着た二人の花魁を、同じ廊下で品定めをするように見る^と旦那と^{はこちやうん}幫間。箱提灯を持つ案内の男もいる。

●狂歌絵本『五十鈴川狂歌車』（1月。角書）
「五拾人一首」内題は「風流五十人一首
五十鈴川狂歌車」。大本一冊。画工北斎辰政。千鶴庵三陀羅法師撰。富士唐丸（唐曆：藤堂良道・如蘭亭）編。蔦屋重三郎版。国立国会図書館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館/大英博物館蔵



『五十鈴川狂歌車』屋職堅丸・金砂如蘭（立命館 ARC より）

●狂歌絵本『同風集』（一卷。画狂人北斎・礪川亭永鯉（鳥橋齋栄里）画。節松嫁々注序）
注）節松嫁々：朱楽菅江の妻。本名ちか。菅江没後、その社中をまとめ指導した。文化7年（1810）没（66歳）。

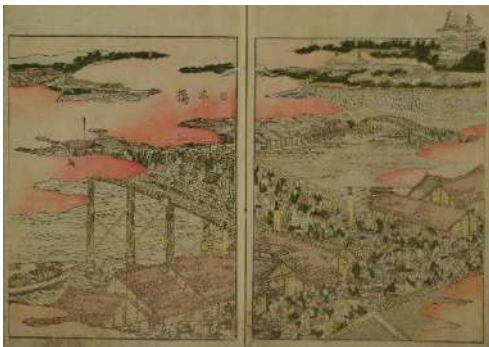
●狂歌絵本『狂歌萩古枝』（4月12日の桑楊庵頭光七回忌追善集）（六巻。浅草庵市人編）

「月 俵屋宗理（あるいは二世宗理か）花とちれ雪をしらけよ秋の夜は ちからまかせの米のつき影」とある。

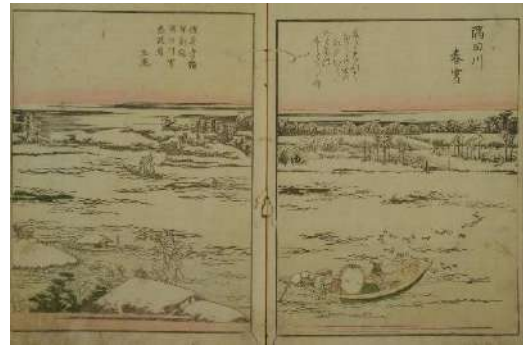
●狂歌絵本『^{えほんあづまあそび}画本東都遊』(大本三冊。合本は一冊。寛政11年(1799)の『^{あづまあそび}東遊』〈大本一冊。墨摺〉の北斎挿絵を抜き出し、北斎の監督のもと彩色した改題・改修本。絵の順番は変えてある。見開き20図と半丁(1ページ)9図。奥付には「画工北斎 筆工六蔵亭、彫刻安藤円紫」とある。袋には「画狂人北斎筆 印北斎」とある。浅草庵市人撰。オランダ人の江戸宿泊所「長崎屋」の画あり。葛屋重三郎版。早稲田大学図書館/大英博物館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/国立国会図書館/東洋文庫：岩崎文庫/オランダ国立民族学博物館蔵)。河内屋茂兵衛(大坂心齋橋通)の後摺がある。版木はボストン美術館に所蔵されている。

☆上巻 〈芝神明宮 春景〉 〈日本橋〉 〈飛鳥山〉
 〈隅田川春雪〉 〈待乳山〉 〈請地松師〉 〈梅屋舗〉
 〈牛島 中田屋〉

芝神明宮(早稲田大学図書館)



日本橋(早稲田大学図書館)



隅田川春雪(早稲田大学図書館)



待乳山(早稲田大学図書館)



梅屋敷(早稲田大学図書館)

☆中巻 〈浅草海苔〉 〈無題(新吉原)〉 〈王子海老屋〉 〈駿河町 越後屋〉 〈十軒店雑市〉
 〈無題(長崎屋)〉 〈元結匠〉 〈三囲神社〉 〈無題(神田紺屋)〉 〈今戸里〉 〈絵草紙店 耕書堂〉



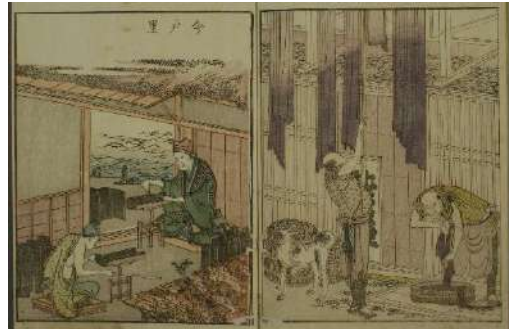
新吉原 (早稲田大学図書館)



十軒店雑市 (早稲田大学図書館)



三囲神社 (早稲田大学図書館)



今戸里・無題：神田紺屋 (早稲田大学図書館)

☆下巻

〈小町桜〉 〈日暮里〉 〈上野〉 〈佃住吉社〉 〈佃白魚網〉 〈品川品川〉 〈品川汐干〉 〈浅草祭〉 〈新吉原〉 〈浅草葦市〉 〈鑑匠〉



品川汐干 (早稲田大学図書館)



佃白魚網 (早稲田大学図書館)



新吉原 (早稲田大学図書館)



鑑匠 (早稲田大学図書館)

●肉筆画「富士図」（「富士と老松」「松に富嶽図」とも。絹本着色一幅。北斎画。印辰政。29.4×53.7 日本浮世絵博物館蔵）

※図右に松の老木が富士の右側の稜線に沿うように、墨絵風に描かれ、その遠景に富士を描く。富士の中腹には青が縦に引かれて着色される。

「遠く眺にこころ深く ちかき響きに耳を洗うと たとき（貴き）をしえも 夏にありて 寿しさや 山うこかして 松風 七十老 文来庵」の賛がある。文来庵（雪萬：俳諧師）の七十歳の新年を祝う図。



富士図（日本浮世絵博物館）

●肉筆画「立美人図」（着色一幅。無款）

※後ろ帯を下げている娘の着物は墨絵風に描く。帯の下に朱色の横線が引かれている。背をそらすように立つ娘の体を包むように、白色が描かれているのが特徴的。

●肉筆画「傘持ち美人図」（着色一幅。無款）

※島田髷で前帯の女が、閉じた蛇の目傘を左手に持ち、高下駄を履いて雪道に佇む。背後に雪を被った柳が描かれる。山東京伝の狂歌がある。「柳下傘持ち美人図」（寛政8年頃：1796）や「雪中傘持ち美人図」（文化10年：1813～文政2年1819）などもある。

傘持ち美人図（Kindle版「北斎大全 第二巻 宗理期」による）

●錦絵「傘持ち美人に小姓図」（着色。画狂人北斎画。印不明）

※柳のある道で、だらりの帯を締め、高下駄を履き、蛇の目傘を閉じて持ち、肩に布を巻き、端を首の前でつまんでいる。側に風呂敷包みを背負った小僧が立っている（Kindle版「北斎大全 第二巻 宗理期」による）。



●摺物「角隠しする芸妓」（紙本着色一幅。摺物。画狂人北斎画。

13.9×18.7 北斎館蔵）

※芸妓たちが佇んでいる。左の芸妓は振袖姿で角隠しを被っている。右の芸妓の後ろには風呂敷の荷物を持った小僧がいる。図右上に「戌」の文字が記されているので、この歳作品と思われる。

●絵暦「大晦日掛取の図」（1月。小判絵暦一枚淡彩。画狂人北斎。

10.4×14.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※大晦日の夜、数人の掛取りが来ている様子が、閉めた障子に影となって映っている。庭先には梅が咲いている。掛取りとのやり取りの台詞が書かれ、その終わりに「戌のとし」とある。台詞中に大小月が示される。

●摺物「七小町」（十二切判注。紙本着色。画狂人北斎画。各21.1×8.8）

注）十二切判：大奉書（約39×約53）の12分の1。横大奉書2分の1（大判。39×26.5。実際には縦35.0～39.0、横21.5～26.5の範囲。B4判〈36.4×25.7〉に近い大きさ）にし、大判を横2分の1にし、更に縦三等分したサイズ。

※千鶴庵三陀羅法師の狂歌グループによるもの。小野小町にまつわる七つの伝説を基にした謡曲や浄瑠璃・歌舞伎等からの画題。文化4年～10年にも「屏風七小町図」（北斎改戴斗）を描いている。

☆〈きよみつ〉（日本浮世絵博物館蔵）

※立札のある石段の下に松の木が二本あり、その側に立つ清水小町。
 小野小町が清水寺に参詣した折に、修行中の僧正遍照に逢い「岩の上
 に旅寝をすればいと寒し 苔の衣をわれにかさなむ」と歌を贈ったと
 ころ、遍照は「世をそむく苔の衣はただ一重 かさねばうとしいぎ
 二人寝む」と返歌したという話からの取材と思われるが、それらしい
 図柄ではない。富多板貫、千穂菴三陀羅の狂歌が記される。



きよみつ

☆〈あまこひ〉（日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館蔵）

※立って閉じた蛇の目傘を持っている雨乞い小町の後ろには、三囲神
 社の石の鳥居の上部と「三囲神社」と書かれた額が見えている。鳥居
 は土手より下にあった。鳥居より高く梅の木が伸びている。俳人宝井
 其角が、ここで雨乞いの句「夕立や田を三囲の神ならば」を詠んだと
 ころ、雨が降ったという伝説を踏まえた図。小野小町が勅命で雨乞い
 の歌を詠んだところ雨が降ったという伝説も踏まえる。蝶々亭春友の
 狂歌が記される。



あまこひ

☆〈そとハ〉（日本浮世絵博物館蔵）

※「左 恵方みち」と彫られた道標と柳が立つ
 道に、笠と杖を持って立つ卒塔婆小町。能の四
 番目物では、高野山の僧が都に上る途中、卒塔
 婆に腰掛けた老女に出会う。老女は小野小町と
 名乗り、話しているうちに、小町に思いを寄せ
 る深草の少将の怨霊が取り付いて物狂いになる
 という話。有雅亭琴魚の狂歌が記される。

そとハ

☆〈かよひ〉（日本浮世絵博物館/立命館大学蔵）

※柳の木の側に大八車が置かれ、そこに傘を閉
 じて持ち、高下駄を履き、左の袖を口に当てて
 立つ通い小町。能の四番目物では、比叡山の麓
 の僧の所へ、毎日薪と木の実を持って来る里の女がいる。僧が名を聞
 くと、市原野に住む姥で、小野と応えて消えてしまう。小町の幽霊だ
 と知った僧は、市原野に行くと小町の幽霊が出てきて受戒を願う。す
 ると深草の少将が現れ、小町一人が成仏すれば、自分一人が苦しむこ
 とになると受戒を受けさせまいとする。小町から離れまいとする深草
 の少将に、僧はそれならば、かつて小町のところにした百夜通いを再
 現するように言うという話。布子●丸、一瓶活安の狂歌が記される。

かよひ

☆〈阿ふむ〉（日本浮世絵博物館蔵）

※柵に囲われた梅の木の脇で短冊の和歌を読む鸚鵡小町。能の三番目
 物では、陽成天皇が、小野小町が百歳になって落ちぶれて関寺辺りに
 住んでいると聞き、「雲の上はありし昔にかわらねど 見し玉だれの
 内やゆかしき」という哀れみの歌を新大納言行家に持たせたところ、





「内やゆかしき」を「内ぞゆかしき」と一字だけ直して返歌とした。これは、鸚鵡返しという歌道の一つだと小町が説明したという話。馬耳風、三番窓初丸の狂歌が記される。阿ふむ

☆〈せきてら〉（日本浮世絵博物館）

※梅の老木の脇で、蓑を着て手には春の草を入れた籠を持って立つ垂髪の関寺小町。足元には鎌が立てかけてある。能の三番目物では、近江国の関寺の僧が、和歌の話を書くため稚児を連れて老女の荒れ果てた庵を訪れる。老女の話から、老女は落ちぶれた小野小町だと知る。老女は華やかだった宮中の昔を語り、現在の落剥ぶりが比較されるという話。千種元方の狂歌が記される。



せきてら

☆〈艸帚あらひ〉（日本浮世絵博物館）

※衣桁には着物が掛かっている。その脇で大きな水盆を前に紙と椀を持っている垂髪の草子洗い小町。水盆の前には巻物が一部開いて置かれている。能の三番目物では、歌合せて小町の相手になった大伴黒主が、小町の下詠みの歌を盗み聞いて万葉集に書き入れ、小町が詠ったものは万葉集の古歌の盗作だと主張したが、小町が草子を洗うと、書き入れた小町の歌が消えたという話。小男黒面、萬能煉安の狂歌が記される。艸帚あらひ

●摺物「神功皇后と武内宿祢」（九つ切判。画狂人北斎画。13.5×18.1 北斎館蔵）

※神功皇后が鉢巻を締め、太刀を佩き、弓の裏弭（先端）で岩に文字を書き付けている。岩にはこの年の「享和二壬戌（みずのえいぬ）」の文字が記されている。側で武内宿祢が鎧姿で膝まづいて控えている。狂歌「戌 立春 のどけさよ風もなげたりわだつ海の今朝はしほみつ玉の初はる 松風音成」が記される。弘化4年頃（1847）にも「神功皇后」を描いている。



『日本書紀』によれば、神功皇后は14代仲哀天皇の皇后で、朝鮮の新羅を滅ぼせという神の託宣により、崩御した天皇に代わり、武内宿祢の助力を得て新羅を攻めて従わせた。

●摺物「雪月花 天地人」（中判着色：十二切 3点続き。摺物。各図に画狂人北斎画。18.3×25.2 日本浮世絵博物館蔵）

※恵方参り（元日に、居住地から見て、その年の恵方にお参りする。恵方とは歳徳神のいる方向で、十干により年毎に変わる）の図。

☆〈地の月〉右図。

※注連縄の下がる朱塗りの鳥居と石灯籠の側の「はつむめ 御休処」と書かれた箱看板の前で、櫛に手を当てお盆を持っている女。店先の台の上には更に盛られた団子のようなものが置かれている。石灯籠には「享和二 戌春」と書かれている。狂歌は「生粋の礼者ハかへる足もとも おほろに見たる灯籠の月」（白髪年成）。

☆〈天の雪〉中図。

※右図からの続き。鳥居の前に、角隠しを被り傘を閉じて持ち、茶店の女と向き合いように立つ女。狂歌は「下駄懸に恵方参りの鳥井さき ひらく笠木に積るあわ雪」(役柄堅木)。

☆〈人の花〉左図。

※中図からの続き。うっすらと雪を被った石垣の向こうには梅の老木が花を咲かせている。前帯の女が錠前を付けた板を持って佇んでいる。狂歌は「星人に折らせはせしと錠まへを ひんと御せし梅の花守」(蛙可成)。

雪月花 天地人 (日本浮世絵博物館)



●摺物「中山道深谷駅」(「中山道深谷駅の小僧と美人」とも。着色。画狂人北斎画。18.9×25.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/フランス国立図書館/太田記念美術館：長瀬武郎コレクション蔵)

※旅の女性たちが、「中山道深谷駅」と書かれた道標の側の茶屋で休んでいる図。一人は床几に腰掛け煙管を使い、もう一人は揚帽子(角隠し)を被り小奴に向かい手を上げている。小奴は、木の枝に吊るされた二匹の亀を指差している。道標の下に「画狂人北斎画」と書かれている。

※本図は当初横長判摺物であって、中央二ツ折の左半分に千庵庵ほか八名の狂歌が載せられたもので、フランス国立図書館所蔵の摺物アルバム中には完品があり、図に「いぬのとし」とあるという(『ピーターモース・コレクション北斎図録』による)。



中山道深谷駅 (すみだ北斎美術館)

●摺物「忠臣蔵」(1月。小判揃物。2図確認。画狂人北斎画)(『年譜』による)。

●摺物「梅花の婦人と小僧」(春。画狂人北斎画)

※便々館湖鯉鮒ほか16名の狂歌が記される。「戌のとし春日」と記される(『年譜』による)。

●摺物「三保松原図」(無款)「享和二壬戌」とあり(『年譜』による)。

●摺物「高砂の相生の夫婦」(着色。歳旦摺物。画狂人北斎画)

※老夫婦が松の木と箒の絵のある衝立の前に座っている。翁が差し出している盃に媼が酒を注いでいる。二人の前には丸い重ね鉢があり上に熨斗をつけた箸袋がおかれている。衝立に「画狂人北斎画」とある。

●摺物「若菜摘み」(着色。画狂人北斎画)

※雪降る日に、供の者に大きな傘をささせ、衣冠束帯姿の貴人が、大きな笠を被り、蓑を着て籠を持って若菜摘みに来た女に話しかけている。重ねた細い板のようなものを差し出しているが、何かは不明。七埋酒利の狂歌が記される。

●摺物「花相撲 東の方大関 西の方大関」(三丁掛。着色。三丁とも画狂人北斎か。18.5×25.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※図中央に軍配を持った行司役の女性が立つ。図右には、桜の小枝を挿した花瓶を台に乗せて持つ「花个住」の四股名の女、図左には、同じく花瓶に挿した花を持つ「千代松風」の四股名の遊女が優雅に立っている。

●摺物「狂歌五色摺」（着色。北斎画）

☆〈関羽と遊女〉（13.6×18.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※狂歌「けさははや花の春とて儀理ことも かた山里に咲る梅かえ 山里亭東士」が記される。図は、盃を持つ関羽の前で、青竜刀のような刃を持つ長刀の柄を肩にして、立膝で座る花魁を描く。

☆〈鉄棒を磨く美人と漢武人〉（13.4×18.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※盤の上で、錫杖のような鉄棒を藁で磨いている美人。その後、長煙管を銜えて立っている中国武人。この武人が誰かは不明。

☆〈張良〉（日本浮世絵美術館蔵）

※秦末期から前漢初期の政治家・軍師。劉邦に仕えて多くの作戦の立案をし、劉邦の覇業を大きく助けた。蕭可、韓信と共に漢の三傑といわれた（「ウイペディ」による）。

☆〈項羽〉（日本浮世絵美術館蔵）

※項羽は、秦末期、楚の武将。秦を滅ぼしたが、漢の劉邦に敗れた。

☆〈養由基〉（日本浮世絵博物館蔵）

※養由基は春秋時代・楚の武将で弓の名人。

享和3(1803)	癸亥	44歳	画狂人北斎、北斎辰政、時太郎可候、可候、北斎、穿山甲
(戯作名か)、画狂老人北斎和泉橋辺、 印辰・政 、亀毛蛇足：こと(33歳)、(富の助：17歳)、阿美与(15歳)、阿鉄(13歳)、阿栄(6歳)			

◇相撲興行(3月、浅草八幡宮、10月、本所回向院)

◇7月、米国船、長崎に来航。通商を求める。

◇9月、イギリス船、長崎に入港。

◇10月17日、前野良沢没(81)。

◇叶福助人形が流行。随筆集『甲子夜話』(松浦清<1760~1841>肥前国平戸藩題9代藩主)に「睦まじう夫婦仲よく見る品は 不老富貴に叶う福助」とあるという(「ウイペディ」による)。いわゆる福助人形で、正座して両手をついたちょんまげの大きな頭が特徴。願いが叶うお守りとされた。

○松平定信『花月草紙』。

○鋏形蕙斎「江戸名所之絵」(江戸全体を鳥瞰した絵)。北斎の「東海道名所一覽」(文政元年：1818)に影響する。

○山東京伝、読本『小幡小平次死霊物語 復讐奇談安積沼』。北斎「百物語」の〈こはだ小平二〉のモチーフとなる。

○高井蘭山『絵本 三国妖婦伝』(蹄斎北馬(北斎の弟子)画。享和3年~文化2年<1802~05>にかけて刊行。文化4年<1807>の北斎の「三国妖狐伝」刊行の火付け役になったか)。

★閏1月19日、大田南畝や名和氏に招かれ席画をする。

※『細推物理』(岩波書店『大田南畝全集』8巻)の享和三年閏一月十九日条の記述。
「名和氏注1にて、北齋をむかへて席画あり。山道高彦注2なども来れり。島氏の女注3、な
らびに赤の歌妓注4お久来れり」

注1) 名和氏：大田南畝と交流した人物とされるが、不明。

注2) 山道高彦：狂歌師。山口彦三郎。馬蘭亭と称し、毎月25日に席画会を催した。

注3) 島氏の女：大田南畝の妾。お香。

注4) 赤の歌妓：赤坂の芸者。

★3月15日、大田南畝と烏亭焉馬に招かれ亀沢町の竹垣柳塘氏別荘で席画を描く。
竹垣柳塘と南畝は古書画などで同好の士。

※『細推物理』(岩波書店『大田南畝全集』8巻)の享和三年三月十五日条の記述。
「烏亭焉馬はとくより別荘にして、北齋をよびて席画あり」

★山東京伝(北尾政演)の戯画「奇妙図彙」(文字絵)を北齋も見たか。

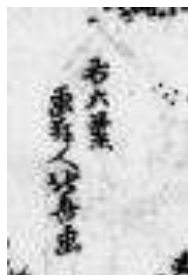
★双鳩子(斎藤秋圃)の戯画「葵氏艶譜」(別称「廓中艶譜」)を北齋も見たか。

【読本初の挿絵】

●読本『蚕捨草』(角書「古今奇譚」)。1月。北齋の読本挿絵の初作。全六冊の全図(六
図)を描く。右六葉画狂人北齋画。流霞窓広住(山家人広住。生没年不明)

作。丸屋甚右門版。島根県立美術館/函館市中央図書館蔵)

※広住の読本『席上怪話
雨錦』(寛政12年
(1800)正月刊)の挿絵
を門人蹄齋北馬(1770~
1844)が手掛けたのが刺
激になったか。6図描く。



蚕捨草(函館市中央図書館)

●狂歌絵本『はるの不尽』(『春の富士』とも)。1月。歳旦集。折本一帖。末広庵長清撰。
画狂人北齋画(三図を描く)。奥付に「末広庵蔵(浅草連)板」とあり。21.7×15.8
フリーア美術館/アサー・M・サッカー美術館蔵)

☆〈三保松原と富士図〉(〈春の富士〉とも)白雪を被る富士の雄大さを描く。

☆〈梅花に旭日〉(〈日の出と梅〉とも)図の右上から左下に向かっての梅の枝に紅い蕾
と白梅がついている。背後には大きな朝日が描かれる。

☆〈若菜摘みの夫人と娘〉(〈若菜摘み〉とも)母親らしい年増と娘が膝まづいて若菜を
摘んでいる。もう一人の娘が立ちながら振り向いて、その様子を見ている。葵の模様の風
呂敷包みが置いてある。

●狂歌絵本「狂歌五十之歌見」(一冊。北齋辰政画。頭の光注編。鳥屋重三郎版。21.3×
15.2 フリーア美術館/たばこと塩の博物館)

注) 頭の光：1754~96。江戸後期の狂言作者。四方赤染、大田蜀山人の門下。寛政に入り
狂歌集団・伯楽連を率いた。

※『狂歌書目集成』(菅竹浦著 星野書店 昭和11年：1936)の記載を『江戸の絵本 画
像とテキストの綾なせる世界』(p290 八木書店)で紹介している。

●狂句本『**絵本 小倉百句**』（1月。半紙本一冊。墨摺。反古庵白猿（五代市川団十郎）作の狂句集。奥付に享和三 癸 歳孟春 画工北斎辰政とある。西村元六・今福屋勇助合版。島根県立美術館：永田コレクション/跡見学園女子大学図書館蔵）

※1 ページを縦に二分した枠の中に2名の歌人を割り当て、それぞれに狂句と挿絵が書きこまれた白猿作の小倉百人一首のパロディ集。

順徳院の「ももしきや古き軒端のしのぶにも なほあまりある昔なりける」を「あさ漬けや古記入歯の志のぶにも」のように戯句にする。平兼盛の「しのぶれど色に出でにけりわが恋は ものや思ふと人の問ふまで」を踏まえて、「大晦日物や思ふと問いて人肌く」の句にして、大晦日の夜、提灯と箱物を包んだ風呂敷を下げる商人の女房は、物思いの様子で首を垂れている。荷物の上には正月用の新巻鮭を乗せている。春道列樹の「山川に風のかけたるしがらみは 流れもあへぬ紅葉なりけり」の歌を踏まえて、「蜻蛉や流れもあえぬ濤標」の句を添え、トンボ獲りの棹を手を持つ二人の子どもが描かれる。

【「亀毛蛇足」印初出か】

★『**夷歌 月微妙**』の一図「松島に「亀毛蛇足」印が用いられている。この印の使用された上限とされる。

「亀毛蛇足」は「亀毛兎角」（亀の毛や兎の角は、ありえないもののたとえ）から取った戯号。実在せず、役にも立たない男の作品という洒落か。あるいは、誰も真似できないという自負か。文化10年（1813）4月まで使用する。同年の「鯉魚図」（埼玉県立博物館蔵）に、「年来持伝候亀毛蛇足之印御譲り申上候 御出精可致候以上 文化十 癸 西四月廿五日」とあり、印を弟子の北明に譲っている。

●狂歌本『**夷歌 月微妙**』（半紙本一冊。右三葉画狂人北斎画。印辰・印政。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※裏表紙の裏に「画工画狂人北斎 彫工 浅草田原町 朝倉清左衛門」とある。『江戸の絵本』所収・マティ・フィラー「葛飾北斎と初期門人たち」p290より）

※本書には〈三保浦〉〈松島〉（亀毛蛇足の印あり）〈隅田川〉の三図を描く。

●黄表紙『**不厨庖即席料理**』（1月。三冊。自戯作。時太郎可候画作。鳶屋重三郎版。天理図書館/国立国会図書館蔵）

※自序（お盆を捧げ持つ自画像あり）

「口上、当年も相不替、青本注1新作の儀被仰候所、御存知の不調法、何事も埒明キ兼候上、御急ぎ被成候間、画より先キへしたゝめ候て、跡より趣向をつけ候得者、嘸々訳もなき事のミ書ちらし候半、是にて御間ニ合ヒ候ハ者御出板可被下候。猶延引之申訳旁、明朝参上花顔ニ可申上候。以上 九月廿七日 時太郎 重様注2御使」奥書「時太郎可候画作」（「西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベース」より。句読点・ルビは筆者による）。※様々な食材や台所道具を擬人化して描き、そこに北斎風のコメントを添えたもの。

注1) 青本：草双紙の一。表紙が浅黄色に染められた草双紙。時代とともに滑稽・諧謔的なものが増え、後に文芸的な内容のものを黄表紙と呼ぶようになった。ここでは、黄表紙と同意で用いている。

注) 重様：鳶屋重三郎のこと。

不厨庖即席料理（国立国会図書館デジタルコレクション）



●黄表紙『胸中算用嘘店卸』（角書「塵劫記由来三五十五張」。1月。三冊。画作時太郎可候。20.4×13.2 鶴屋喜右衛門版。天理大学図書館蔵）

※草稿本は、享和2年（1802）に西村屋与八版として出版されている。

●黄表紙『和漢蘭雑話』（春。角書「三国昔噺」。三冊。可候画。曼亭（感和亭）鬼武作。山口屋忠右エ門版か。加賀文庫蔵）。序文に「癸亥春日これを序す」とある。

●黄表紙『苦貝十念 嗚呼蜃気楼』（正月。三冊。曼亭（感和亭）鬼武作。北斎画。山口屋忠右エ門版。早稲田大学図書館蔵）

※帆立貝、鮑、蛤などに擬した人物の挿絵などを描く。

●噺本『はしか落噺』（秋。一冊。穿山甲〈葛飾北斎の戯号か不明〉天理図書館蔵）

※井上和雄『北斎』（昭和7年 高見澤木版社）では北斎の自画作の小咄本としている。一方、文も挿絵も北斎を疑問視するむきもある。

●狂歌絵本『諸芸三十六のつゞき』（九ツ切判。紙本着色揃物。摺物。浅草菴市人撰。画狂人北斎画）

※狂歌集団浅草側による春興狂歌全 36 枚の揃物。門人宗二に（菱川宗理）よる「将棋」「舞人」「拳」「枕拍子」の絵もある。

☆〈茶湯〉（14.1×18.5 フランス国立図書館/すみだ北斎美術館蔵）

※「梅」「鶯」の字のある打掛けで座って茶を立てる年増と、それを待つ娘の図。

「あしやかた釜のけふりのあさかすみ 立初にけりはるの口切 天鶯堂張兼」、「其羽も茶の色なれはめつるなり 囿の窓に来なく鶯 陽彦亭舌高」、「鶯の音を待合の軒にさく利久のこのミのねち梅の花 方寸斎長磨」の狂歌が記される。

☆〈狂歌〉（14.0×18.8 フランス国立図書館蔵）

※竹の図がある枕屏風の前で、筆先を口に含んで扇子を持ちながら狂歌を考えている遊女。膝の前の文机に短冊が置かれている。側で禿が墨を摺っている。「春風に枝もされ歌よミ初 題にもむすふ糸柳とて 三味角製」、「ひなふりのひなのあら野のことの葉のミちかへりにけり春の若道 力足文」、「鶯のひなふり歌そおもしろき よミ古巢よりなれてはいてゝも 文蔵亭守舎」の狂歌が記される。

☆〈小笠原礼式〉（14.0×18.9 フランス国立図書館蔵/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※正月の屠蘇を飲もうとする袴姿の若侍が、小笠原流の礼式に則り、朱塗りの盃を持ちあげている。その前には食べ物を入れた黒い重箱がある。床の間には三方に乗せた海老や松の正月飾りが置かれている。小笠原礼式に則った屠蘇酒の飲み方を描く。「おひさきハ下戸か上戸か女の手にもちそへて呑む兒のとそ酒 浅草庵」などの狂歌が記される。

小笠原礼式（すみだ北斎美術館）



☆〈揚弓〉（フランス国立図書館蔵）

※矢場の台に置かれた矢立には短い矢が入れられ、小さな弓が立て掛けてある。その前の女は口元に手を当てて、立っている女と何かを話している。

揚弓は、楊製の小弓（長さ2尺8寸：約85cm）で7間半（約13.5m）先の的を射る遊びで、神社の境内や盛り場などに設けられた。矢取り女を置いて、ひそかに色を売らせた店もあったという。

☆〈笛〉（14.1×18.9 フランス国立図書館蔵/北斎館蔵）

※女の持つ灯りの下で若侍が腰を下ろして笛を吹いている。「浄瑠璃十二段草子」（「浄瑠璃姫物語」とも）で、浄瑠璃姫たちが管弦の催しをしているのを聞いた牛若丸が笛を合わせたところ、不審に思った侍女の十六夜が門まで出て来た場面を描く。「笛井のあなたこなたへ梅か香のかほるも風のふくにまかせて青雲亭業丈」、「春の夜の火ともす花のあかるさはやみをけしたる庭の梅か香 末広庵」野狂歌が記される。



笛（北斎館）

☆〈書〉（14.0×18.9 フランス国立図書館蔵/北斎館/名古屋市博物館/すみだ北斎美術館蔵）

※文机の前で男の子が何かを書こうとしている。側で垂髪の母親が子どもの右手を取って字の形を教えようとしている。机の側には字の練習をした紙がある。



書（北斎館）

※他に菱川宗理の作品がある。寛政10年（1798）、門人宗二は北斎から宗理号を譲られ菱川宗理を名乗っている。

☆〈将棋〉（菱川宗理画。14.1×18.7 フランス国立図書館蔵）。

☆〈舞人〉（菱川宗理画。14.1×18.9 フランス国立図書館蔵）

☆〈拳〉（菱川宗理画。13.9×18.9 フランス国立図書館蔵）

☆〈枕拍子〉（菱川宗理画。13.7×18.6 フランス国立図書館蔵）

●由来記『三国伝来記』（この頃か。折小本。北斎画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※長野・善光寺の由来を記した本で、本中の、難波（現大阪市）の堀江で、のちに善光寺の本尊となる阿弥陀如来が本田善光（寺の建立者）を呼びとめる場面の図が有名（「すみだ北斎美術館ニュース 北斎かわらばん」による。平成25年（2013）6月発行）。如来の右手指先から善光に向けて光が放たれている。



三国伝来記（島根県立美術館）



●肉筆画「花魁図」（この頃か。「亀毛蛇足」印の初出は享和3年といわれる。絹本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。29.2×44.8 個人蔵）

※横兵庫鬻の花魁が、火鉢の縁に右ひじを突き左足を折って横たわり、前方を見ている図。醒々斎京伝（山東京伝）の題賛「吸付煙草の雲となり居続日和の雨となる 夜着のうち蒲団の上 一生の歡会是一般」が記される。

花魁図 (tamegoro.exblog.jp より転載)

●肉筆画「若衆図」（この頃か。画帖『蜀山人圍繞名蹟集』より。絹本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。本紙33.9×20.3 千葉市美術館蔵）

※左を向いて歩く前髪の若侍の図。背景はなし。画帖は、大田蜀山人が長崎奉行所詰めの時に、豪商中村氏に贈った書画・書簡をまとめたもの。絵には蜀山人の狂歌「をみなえしなまめきたてる前よりも うしろめたしや藤はかま腰 四方山人」を添える。四方山人は大田蜀山人のこと。

若衆図 (千葉市美術館)



●肉筆画「上山氏肖像画」(着色。画狂人北斎画。印 亀毛蛇足。北斎館蔵)



※2020年7月27日朝日新聞朝刊に掲載。群馬県の所有者から北斎館に寄贈。北斎の肉筆肖像画は数点しか伝わっていないとする。算盤の裏側を前に向けて左手で立て、右手を左腕に添えて胡坐で坐る男。前に「金銀出入帳」と書かれた縦長の帳面と、墨壺の様な筆入れが置かれているところから両替商とみられる。図上方に「上山氏」(「かみやま」と読むか)であることが記されているというが、人物については不明。

上山氏肖像画 (北斎館)

●摺物『隅田川兩岸九つ切シリーズ』(仮題。着色揃物)

※永田生慈氏によれば七枚以上のシリーズとする(『秘蔵浮世絵大観8』p311)。『絵本隅田川兩岸一覽』の土台になった揃物と思われる。

☆〈横網〉(画狂人北斎画。14.0×18.9 フランス国立図書館蔵)

※隅田川の横網町に行く船に乗る二人の女と船頭の図。「朝日影光を添て川面に ひくや霞の横網のはる 三番叟初丸」の狂歌が記される。横網町は本所地区南西部の町(現東京都墨田区



横網町1丁目と2丁目)。隅田川の対岸は柳橋や蔵前。

横網 (フランス国立図書館)

☆〈柳橋〉(画狂人北斎画。14.1×18.8 フランス国立図書館/ベルギー王立美術館蔵)

※柳橋の棧橋に立つ二人の女の図。遊客を迎えに出てきた柳橋の芸者といわれる。向こう側に山谷掘をめざす客を乗せた猪牙船が滑りだそうとしている。狂歌が添えられる。「水のおもにうかめる春の柳橋ふねかくとあやまたれぬる 蝶々亭春友」の狂歌が記される。

柳橋 (フランス国立図書館)



☆〈駒形〉(「川辺の人物たち」とも。14.2×18.8 フランス国立図書館/北斎館蔵)

※「亥」(享和3年)の字の凧を持つ女と、被り物をした女が通りすぎる。その後ろに置いた鉄箱に腰掛けた侍。川に向かって右手を差し出す小奴の肩には正月祝いの飾り物がある。駒形の河岸から宮戸川(隅田川下流)を眺めた図。川の流れる手法は空摺注の手法である。「若草の中に雉子のさをどるも よいとやまうす春の駒形 千金亭如藍」の狂歌が記される。

注)空摺:浮世絵版画などで、凸版に絵の具を塗らず、刷り圧だけで、紙面に凹凸模様を造り出す技法(三省堂『大辞林』による)。

駒形 (フランス国立図書館)

●摺物『踊盡』 (正月。全何図か不明。九ツ切判摺物揃物。画狂人北斎画。フランス国立図書館蔵)
※よく知られた踊りの演目に見立てて女の所作を描く。狂歌が添えられる。

☆〈手習子〉 (「手拍子」とも。13.6×18.4)
※三味線を弾く女と「享和三年正月吉日」と書かれた紙と、蛇の目傘を持ち、左手には「清書双帯」と書いた帳面を持って踊りの仕草をする女の図。二人の背後には梅を描いた衝立がある。「手習子」は、春の日に傘を差して蝶を追いかける無邪気な娘が登場する長唄の演目。「春風の手習子かもしどけなくふりをつけたる庭の梅かえ 和蘭物成」、「朝日影あかるもはやき手習の 一段見事むめか書初め 権柴道」の狂歌が記される。手習子 (フランス国立図書館)



☆〈見立草摺曳〉 (13.9×18.8)
※右手に刀を持ち、左手で着物を抱える女と、座って鶴丸 (日本航空のマークに似る) の大紋を染め抜



いた布を広げた女が顔を見合せている。歌舞伎の舞踊「草摺曳」を模したものという。親の仇敵工藤祐経ありと聞いた曾我五郎が、鎧を小脇に駆けこむのを、小林朝比奈が草摺を捕まえ、引き止めて意見忠告する筋 (平凡社『世界百科大事典』第2版より)。「朝比奈ひちをもはるの草摺に ちからためしの松やひくらん 勝々亭山人」の狂歌が記される。「草摺」は、鎧の前に下ろし大腿部を守る胴の附属部。

見立草摺曳 (フランス国立図書館)

☆〈踊二美人〉 (14.2×18.8)
※緑の折れ頭巾をつけた二人の女、一人の扇子に「寿」の字が描かれ、一人は福寿草の盆栽を持つ。「今朝ハはや霞か関もすミた川 庭の梅若門の松若寿菊人」、「七くさのはやしかた迄揃ふてハ 梅かえに來てをとる鶯 鈍々亭和樽」の狂歌が記される。



踊二美人 (フランス国立図書館)

☆〈花売りと娘〉 (13.9×18.5)
※梅の小枝などの花売りの男と、梅の小枝を持って立っている女が眼を合せている図。「春雨のふりつけて咲梅かえに ふしおもしろきうぐいすの声 蠣壳仲丸」、「口紅粉をさしつゝ風の手をとりも かたいなかなる梅のふりよさ 宵闇くらき」の狂歌が記される。

☆〈見立娘道成寺〉 (14.0×15.6 すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション蔵)
※被り物を被って口元に袖を当てて立つ女と、座っている小奴。小川の脇には梅の木が花を咲かせている。その枝に掛けられた大凧には鐘の絵が描かれている。小川の中に立つ木札には「定一この鐘を鳴らすべからず 月日」と書かれている。「たをや女の野かけかてらの年札に すゝむたはこも舞のひとさし 山里亭東士」の狂歌が記される。

☆〈見立羽根の禿〉 (13.7×18.6)

※桶の柄に手をかけてしゃがむ女と、新年の松飾りの門に羽子板を持って立つ女と、天秤棒に渡した桶を置いてしゃがむ白酒売りに扮した女の図。正月の吉原の店先で禿が羽根つきをして遊ぶ長唄「羽根の禿」の見立という。

「かむろ子のしなもよき手につくはねの はつミてあかる春の色客 花木亭根丸」、「山川をこゝにうつして霞ひく 妹かひたいひの雪のしろ酒 難波亭●風」の狂歌が記される。

☆〈見立二人椀久〉(14.0×18.8)

※枕屏風の前で長煙管を持って座る女と、棒を持つ女が粹な格好で立っているもう一人の遊女と顔を見合わせている図。人形浄瑠璃や舞踊の演目「椀久末松山」を見立てているという。大坂の豪商椀屋久右衛門が大坂新町の太夫松山に入れ込み、家業を傾け発狂して水死した事件による。「ひきそむる霞のまゆの松山に 見とれてをとる春の椀久 猪牙早行」、「おもかけをうつして二人わん久に 若水をくむ門の松山 倚松亭岡成」の狂歌が記される。

【寛政6年以降久々の役者絵】

●絵巻「錦車楼」(「初代中山富三郎と初代岩井半四郎」「歌舞伎役者二人図」とも。縦判着色摺物。画狂人北斎画。19.0×12.6 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/ベレス・コレクション蔵)

※紫帽子(髷の前で額を覆う紫の布)をつけた初代中山富三郎(安永5年～弘化4年<1776～1847>)と初代岩井半四郎(宝暦10年～文化7年<1760～1819> 五代目岩井半四郎)を描く。図上部の額に初代中山富三郎の俳名「錦車楼」とある。もう一人は、扇の紋が見えるところから五代目岩井半四郎とされる。

図左に、五足斎丈布の賛「汲そむる 岩井のみづの 金化粧 あらふ笑顔や 千両の春」が記される。左の役者が手にする本の題僉には、正二五七八十一大」と享和3年の大の月が記される。

※寛政6年(1794)以降、北斎は役者絵から離れているが、この作品はその後に描かれた三点の二図。他に文化4年(1807)「初代沢村源之助 梅のよし兵衛」と「初代瀬川路之助 女房こむめ」の二枚組、文政7年(1824)「三代目市川門之助と七代目市川團十郎」がある。

●扇面画「桜花魁図」(着色一幅。画狂人北斎筆。印辰印政)

※扇面の右側に、前帯で赤い襦袢を覗かせた花魁が黒塗りの下駄を履いて、柵に囲まれた桜の老木の前に立っている。

●摺物「夢見る女」(紙本着色一幅。画狂人北斎画。13.2×18.0 北斎館蔵)

※振袖姿の女性が紙や硯・筆などが置かれた文机にうつ伏して眠って、夢を見ている様子が描かれる。中国の故事「邯鄲の夢注」の見立てか。文鎮が猪を象っているので亥年の作品と思われる。着物や花の部分に光を当てると反射する雲母摺がほどこされている。

注) 邯鄲の夢：「盧生の夢」「邯鄲の枕」とも。中国戦国時代、趙の国の盧生という若者が、呂翁という仙人から夢が叶うという枕を与えられ、眠ったところ立身出世し栄華を極めた夢を見た。しかしそれは、目覚めれば寝る前に煮た粥がまだ炊き上がらないうちのことだったという故事。唐の沈既濟の『沈中記』による。



夢見る女(北斎館)

●摺物「文を考える花魁」（紙本着色一幅。摺物。画狂人北斎画。13.7×18.4 北斎館蔵）
※藤の花が描かれた掛け軸と琴が置かれた床の間のある座敷で、花魁が机の前で手紙の文を考えている。側で禿が墨を摺っている。左側の女は、書いた文を火鉢に入れて燃やそうとしている。

●摺物「手土産 亥」（亥年の享和3年辺りか。着色。摺物。画狂老人北斎和泉橋辺写。13.8×27.1 北斎館蔵）

※筍の皮に包まれた手土産に葱が添えられる。包皮に「亥」の字が記されているので、猪肉が包まれ、更に亥年の作品であることを示したのか。

●絵曆「女の年礼」（九ツ切判着色。摺物。画狂人北斎画。13.9×17.8 東京国立博物館蔵）

※新春の年礼風景。赤い小階段の上に飾られた注連縄の垂れたウラジロの太さで月の大きさを表している。奥には猪の置物があるので亥年の作と分かる。

●摺物「女の年始」（横中判着色。画狂人北斎画。東京国立博物館蔵）

※御高祖頭巾の女と花魁の二人が年始に行く様子。後ろに荷物を首に巻いた供の男がいる。訪問先の入り口の奥に猪の置物が見えるので、亥年の作と分る。

●絵曆「綱引き」（1月。着色。画狂人北斎画。9.8×19.1 すみだ北斎美術館：ヒーターモースコレクション蔵）

※神社の境内で男たちが大綱を抱えるようにして綱引きをしている。見物人の傘に「亥春」と大の月を示す数字が書かれている。賛に「歳旦 このうへの宝あるまし玉の春」、「歳暮 種蒔て花の春見んとしの豆 円亭喜鶴」、「日の筋に負しとひくや朝霞 仏外」などと記されている。寛政11年（1799）にも摺物「社前の綱引き」図がある。

●摺物「衝立に屠蘇図」（春。色紙判着色。画狂人北斎画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「亥春」と書かれた衝立の前に屠蘇を入れた酒器と膳に乗せられた盃が描かれる。

【以下、享和年間】

画狂人北斎、北斎、可候、東陽画狂人北斎、不染居北斎、歩月老人北斎、宗理 印 亀毛

蛇足、辰政、画狂人

●狂歌絵本『砧の聲』（「砧の峰」とも。享和2年～3年〈1802～03〉。初編・二編。半紙本墨摺。画狂人北斎画。22.5×16.0 日本浮世絵博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※野外に莫蔭を敷き、姉さん被りの母親と子供が向かい合って槌を振り上げて砧を打っている図。

●肉筆画「魚介図」（享和元年～2年〈1801～02〉。絹本着色一幅。画狂人北斎画。印 亀毛蛇足。66.2×32.7 すみだ北斎美術館蔵）

※画面手前から、宿借、蜆、鮑、烏賊、種類不詳の魚、海老、玉珧を描く。

魚介図（すみだ北斎美術館）

●肉筆画「かわいいに海老図」（享和3年～文化1年〈1803～04〉北斎画。印 辰 印 政 元麻布美術工芸館寄託）

●肉筆画「来燕帰雁図」（享和年間〈1801～04〉。絹本一幅。画狂人北斎画。印 亀毛蛇足。82.7×26.0 吉野石膏コレクション蔵：すみだ北斎美術館寄託）





来燕帰雁 (すみだ北斎美術館寄託)

※天空から垂直に降りるように首を下に向けて飛ぶ二羽の雁。その下を交差するように飛ぶ三羽の燕。加藤千蔭 (1735~1808。国学者。歌人) の賛「はる秋の契り たかへすとりに 来るも帰るも こゝろ有けり 千蔭」

●肉筆画「化粧美人図」(「けわいびじんず」とも。享和年間〈1801~04〉。紙本淡彩一幅。無款。132.9×49.4 MOA美術館蔵)

※遊女の持つ鏡は斜め後方の帰る客に向けている。鏡には遊女の横顔と鏡に映っていない客の視線が交差していることだろう。この構図はベラスケスの「ラス・メニーナス」を彷彿させ、いわゆる視点の移動を示した注目すべき図となっている。

化粧美人図 (MOA美術館)

●肉筆画「柳下傘持美人図」(享和年間〈1801~04〉。絹本着色一幅。画狂人北斎画。印辰政。84.3×25.4 北斎館蔵)

※享和末期~文化初期の「柳下美人図」とは別物だが画趣は同じで、柳下に裸足で高下駄を履き、閉じた蛇目傘を左手に持ち、首をかしげて土手の間の道を歩く遊女の図。八本の簪、髷の後に赤い花簪があしらわれる。柳の木の下には赤い躑躅の花が咲いている。

柳下傘持美人図 (北斎館)



【東海道シリーズ始まる】

●錦絵『吉野屋版 東海道五十三次』(「東海道五十三次」物の一。享和年間〈1801~04〉。横小判錦絵。全56図。「金谷」のみ欠落。「京」が2図ある。宿駅名は横書き。各図に画狂人北斎画。吉野屋徳次郎版。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※確認されている揃物中、最も早い時期の出版か(『名品揃物浮世絵9北斎II』ぎょうせい)。

☆〈日本橋〉(8.6×13.2)



※擬宝珠のある日本橋上の賑わい。魚介を入れた籠を持ちあげている魚屋。荷物を担いだ行商人や旅人たち。右端に大名行列の長槍の先だけが見える。遠くに江戸城の櫓。その先に富士山が描かれる。

日本橋 (部分：島根県立美術館)

☆〈品川〉(8.7×13.4)

※「祇園御祭禮」の幟が立つ宿場の屋根。海の向こうには富士山。

☆〈川崎〉(8.5×13.2)

※多摩川の渡し船が行く手前の岸では、首に風呂敷の荷物を括って立つ男と、その脇で草鞋の紐を結び直している男。

☆〈神奈川〉(9.1×13.2)

※遠くに箱根山を望み、手前には森の中の家がぼつんと描かれる風景画。

☆〈程ヶ谷〉 (9.1×13.2)

※杉並木の間から富士山が見える道を、馬子が牽く馬に乗って行く旅人。その後ろには、下に置いた荷物を担ごうとする男。

☆〈戸塚〉 (9.0×13.1)

※煙管をくわえて笠を被って歩く侍と、天秤の荷物を担いでついていく男。

☆〈藤沢〉 (8.7×13.0)

※江の島へ渡る人々。島の向こうには富士山。図の手前には松林。

☆〈平塚〉 (9.0×13.2)

※宿の入口の前で馬から荷物を下ろし、しゃがんで馬の脚の世話をする男。

☆〈大磯〉 (9.0×13.4)

※風の吹く中、僧侶と思われる男が笠に手を当てて海上に飛ぶ鳥を眺めている。

☆〈小田原〉 (9.2×13.3)

※「うみらう 元祖とら屋」と書かれた衝立を背に、客にお茶を差し出す店の小僧。

☆〈箱根〉 (8.9×13.2)

※紐を引いて回す轆轤の端につけた木を、もう一人の男が削って細工をしている。箱根は寄木細工で有名。

☆〈三島〉 (9.1×13.3)

※三島神社の石の鳥居をくぐって参詣する男。その前で境内の中を眺める旅人。鳥居の両脇には赤い塀が続く。

☆〈沼津〉 (9.2×13.3)

※入り江の岸の茶屋で休む人々。入り江には二艘の渡し船が浮かぶ。

☆〈原〉 (9.1×13.3)

※富士山の裾野が、すやり霞に隠れて半分だけ見える道を、駕籠に乗って行く旅人と徒歩の男。駕籠は一旦ここで休み、駕籠かきの前の男は頭に手をやっている。

☆〈吉原〉 (8.5×13.2)

※侍二人を先頭に、朝鮮通信使の一行が富士のすそ野を見ながら、図の左から右に移動している。

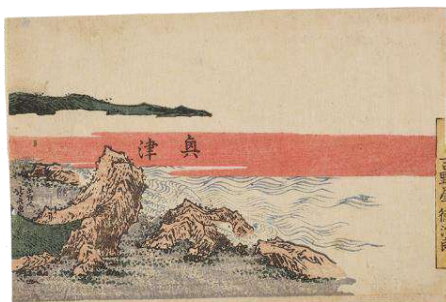
☆〈蒲原〉 (8.6×13.4)

※海の上を二艘の渡し船が行く。手前の岸边には松の緑と赤い紅葉。

☆〈由井〉 (8.9×13.4)

※海浜には塩を含んだ砂を集める男が二人。手前には、塩焼小屋二棟と塩水を入れる桶が四つ置かれている。沖には帆掛け船が五隻浮かんでいる。由井 (島根県立美術館)

☆〈奥津〉 (8.7×13.4)



※一般に「興津」と表記する。遠くのそそり立つ岩のある海辺に小さく二人の男が描かれる。図の中央には赤いすやり霞。右側に版元の「吉野屋徳次郎」名が記されている。

奥津 (島根県立美術館)

☆〈江尻〉 (8.2×13.4)

※海辺の山中に寺社があり、その先に山が見える。海には帆掛け船が二隻浮かぶ。図右に「吉野屋徳次郎」の版元名が記される。

☆〈府中〉 (8.6×13.3)

※集落の屋根が鳥瞰的に描かれる。遠くの囃子の中に見えるのは駿府城か。図右に「吉野屋徳次郎」の版元名が記される。

☆〈鞠子〉 (8.8×13.3)

※名物のとろろ汁食べる旅人と、お盆を差し出す女給。痩せた行商の男が上半身裸で旅人の食べる様子を見ている。

☆〈岡部〉 (8.6×13.2)

※険しい山間の道を行く旅人たち。鳥瞰的画法で、版元名が記される。

☆〈藤枝〉 (9.0×13.4)

※「根元 名代」と書かれた襖の脇から店主が外を見ている。その前で旅人が店先に並べられた商品（餅のようなものか）を見ている。藤枝に向かう瀬戸の立場では「染飯」と呼ばれる、くちなしで染めて黄色にしたおこわを、平たくして焼いたものが名物とあるが、それだろうか。

☆〈島田〉 (8.6×13.4)

※柴木の束を縛っている子どもの側を行く笠を被った道中差しの男と、上半身裸の供人。その脇には天秤棒を担ぐ男たち。図に版元名が記されている。

☆〈金谷〉 (欠落)

☆〈日坂〉 (8.1×13.5)

※松並木の道に置かれた岩を持ち上げようと両手を上に伸ばして意気込む男が二人。それを見ている旅の女がいる。

☆〈懸川〉 (8.4×13.0)

※空に上がっている凧が四つ。これから上げようとする男たちもいる。

☆〈袋井〉 (8.2×13.3)

※天狗の面がある箱笈を担ぐ修験者の男と、御幣が付いた神社形の箱笈のようなものを担いでいる修験者の男が行く。側の松の木には馬が繋がれている。

☆〈見附〉 (8.8×13.4)

※松の木の側に紅葉もある山道を旅人が行く。その向こうには富士山。

☆〈濱松〉 (8.7×13.0)

※入り江に浮かぶ渡し船には大勢の客が乗っている。荷物を背負った馬も二頭いる。舳先の船頭は腰をかがめて竿を海に差し入れ、船尾の船頭は力を込めて竿さしている。

☆〈舞坂〉 (8.7×13.2)

※大きな碇の先に乗って海を指さす子ども。碇の根元に足をかけて海を見る子ども。海には一隻の渡し船が浮かぶ。

☆〈荒井〉 (7.8×13.3)

※荒井宿の門から出てきた旅人たち。天秤の荷物を確認するかのような男。

☆〈白須賀〉 (8.0×13.4)

※山道を登る旅人が、遠くの帆掛け船を手をかざして見ている。後ろには笠を被った供人がいる。さらに天秤の荷物を担ぐ男。

☆〈双川〉 (8.1×13.5)

※旅道具を置いて、大きな岩に手を回している男と、両手を挙げてはやしている男と、しゃがんで見ている男。

☆〈吉田〉 (8.2×13.4)

※紅葉の木の側で食事をしている二人の旅人。

- ☆〈御油〉 (8.7×13.1)
 ※松並木の街道を馬に乗って行く旅人や、徒歩で行く旅人を小さく描く。版元名がある図。
- ☆〈赤坂〉 (9.0×13.1)
 ※手洗いの鉢を前にして歯を磨く遊女と、髪を梳いている遊女。これからの勤めの準備をしている。図に版元名が記される。
- ☆〈藤川〉 (8.5×13.2)
 ※山の上の、小さな松の木に挟まれるような鳥居のある祠を鳥瞰的に描く。図に版元名が記される。
- ☆〈岡崎〉 (8.5×13.3)
 ※雪を笠に被った旅人たちが橋を渡る。岡崎の入口になる矢作橋であろう。
- ☆〈池鯉鮒〉 (9.2×13.6)
 ※松の木のある庭先で、手行燈を掲げて立っている女。
- ☆〈鳴海〉 (8.8×13.3)
 ※口にくわえた紐で布を絞っている女。鳴海は絞りの名産地。
- ☆〈宮〉 (8.6×12.6)
 ※帆かけ船が三隻浮かぶ海。手前の岸と向こうの島には松林が見える。
- ☆〈桑名〉 (8.8×13.4)
 ※桑名城が描かれる。図に版元名が記される。
- ☆〈四日市〉 (8.5×13.3)
 ※茶屋で休んでいる男二人の前で蛤を焼いている男。団扇であおった煙が顔にかかっている。図に版元名が記される。
- ☆〈石薬師〉 (9.0×13.3)
 ※寺の屋根が足元に見える坂の上で、柄杓の水を差し出す子どもを合羽を着た旅人と供の男が振りかえる。
- ☆〈庄野〉 (9.2×13.5)
 ※川岸に行く長持を担ぐ男と長槍を持つ男たち。
- ☆〈亀山〉 (8.6×13.2)
 ※鈴鹿川の橋を渡る旅人たちと、川岸で釣りをする男。土手には駕籠を置いて休む男。
- ☆〈関〉 (8.6×13.2)
 ※杉林に囲まれた山道を馬子の牽く馬に乗って登って行く旅人。
- ☆〈坂の下〉 (8.5×13.3)
 ※細い山道に添うように流れる川の風景。
- ☆〈土山〉 (8.6×13.3)
 ※土坡に挟まれた細い道に行く旅人。その先には海がある。図に版元名が記される。
- ☆〈水口〉 (9.1×13.5)
 ※「名物ど志やう汁」と書いた縦看板の店先に、荷物を振り分けに背負った馬と柴木を背負った馬がいる。図に版元名が記される。
- ☆〈石部〉 (8.7×13.2)
 ※荷物を置いて、街道の大杉の幹に両手を回して太さを計っている二人の旅人を描く。
- ☆〈草津〉 (8.9×13.5)
 ※宿で三人が酒を飲んだり食事をしている。男二人は上半身裸。
- ☆〈大津〉 (8.8×13.4)

※大きな松の老木の下には赤い小さな祠。その傍の海辺には小さな船が三艘停まっている。

☆〈京〉 (8.8×13.3)

※公家が右近の橋の脇に立っている。版元の「吉野屋徳次郎」の名が右脇に囲みで記される。

☆〈京〉 (9.1×13.5)

※一面の紅葉の赤が、雲のように御所の屋根を覆っている。

※北斎は「東海道五十三次」を、この吉野屋徳次郎版のほか次のシリーズを描いている。

『春興五十三駄之内』(享和4年〈1804〉画狂人北斎。版元不明)、『横小判 東海道五十三次』(文化元年～5年〈1804～08〉。北斎画。54図。版元不明)、『彩色摺五拾三次』(文化元年～5年〈1804～08〉。縦小判。無款。56図。版元不明)、『東海道五十三次 絵本駅路鈴』(文化3年～7年〈1806～10〉縦中判。無款。56図。伊勢屋利兵衛版)、『五十三次江都の往かい』(文化元年～10年〈1804～13〉中期横小判。北斎画。56図。伊勢屋利兵衛版)、『東海道五十三次 絵尽』(文化7年〈1810〉。無款。57図。鶴屋金助版)。他に、弟子の柳川重信が〈鳴海〉など8図を書き加えて無題で文政年間(1818～30)に改編再刊された『春興五十三駄之内』がある。

●錦絵『横小判 仮名手本忠臣蔵』(享和元年～3年〈1801～03〉。文化初期説あり。横小判着色12図揃。画狂人北斎筆〈題箋による〉。題は「忠臣蔵」。絵の中では「仮名手本忠臣蔵」とあるが、他の『仮名手本忠臣蔵』と混同を避けるため『横小判 仮名手本忠臣蔵』とした。各12.5×16.7 ギメ美術館蔵)

※横小判着色の「忠臣蔵」は、ギメ美術館に12図の全図が所蔵されていて、画帖仕立に装丁されているという。

落款は、初段(画狂人北斎画)、二段(画狂人北斎画)、三段(北斎画)、四段(無款)、五段(北斎画)、六段(無款)、七段(画狂人北斎画)、八段(画狂人北斎画)、九段(画狂人北斎画)、十段(画狂人北斎。「画」はない)、十一段(画狂人北斎画)、大尾(揃の最後。画狂人北斎。「画」の字はない)。以上は、根岸美佐『北斎研究』56号〈2016/3/31:p10～13〉による)。

※忠臣蔵物は、寛政10年(1798)〈可候画。享和末～文化初年説あり〉『新板浮絵忠臣蔵』、文化元年～5年(1804～08)『仮名手本忠臣蔵』(北斎画。平仮名表記あり)、文化元年～10年(1804～13)『仮名手本忠臣蔵』(横小判。北斎画。平仮名表記あり)、文化3年(1806)『仮名手本忠臣蔵』(横大判。無款)など数種がある。

☆〈三段目〉(島根県立美術館:永田コレクション蔵)裏門の段の図。鷺坂伴内が勘平を捕えに来たところ、首を掴まれ投げ飛ばされた。勘平が伴内を切ろうとするが、お軽がとめようとする場面。

☆〈四段目〉屋敷を遠景に、三人の武士を描く。左右の二人は中央の武士に向かって刀を抜く様子。

☆〈十段目〉天河屋義平が義士たちに協力していると疑われ、獲り手に囲まれるが、一歩も引かずに義士への忠誠心を示す有名な場面の後日を描く。義平は仇討ちの援助を悟られまいと奉公人を解雇し、妻のお園も実家に帰すが、離縁状を戻そうと儀平を訪ねるお園と、それを拒否する儀平の様子が描かれる。

☆〈十一段目〉(島根県立美術館:永田コレクション蔵)吉良邸内で、二刀流の清水一角と戦う二人の義士。清水のうち下ろす刀を、のけぞりながら横にした刀で受ける義士。清水の背後で切掛かるもう一人の義士。庭先でも義士と吉良家家臣が戦っている。

●肉筆画「日月龍図」(享和年間〈1801~04〉。紙本墨絵淡彩三幅対。画狂人北斎。印辰政。各 103.1×17.5 光ミュージアム蔵)

※右図は、三日月が画面中央に描かれる。中央の図には、奥からこちら側に弧を描くように向かってくる龍の顔が大きく描かれる。左の図には、画面下に大きく朱色の日が描かれる。

日月龍図(光ミュージアム)

【北斎作品の重要文化財指定の第2号】

●肉筆画「二美人図」(享和年間〈1801~04〉。『肉筆浮世絵大観4』では文化年間)。大大判絹本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。110.6×36.7 MOA美術館蔵。重要文化財)



※三つ葉葵の紋のついた表装から、將軍家またはその周辺からの依頼による作品という指摘があるという(『肉筆浮世絵 美人画の世界』田辺昌子監修・宝島社)。

二美人図(MOA美術館)

※立ち姿は吉原の遊女、横座りは廓の女芸者といわれる(『肉筆浮世絵大観4』)。また立ち姿の女は遊女で夜を象徴し、横座りの女は若女房で昼を象徴して、それぞれを対比させた試みだともいう(2005年『北斎展図録p324』)。文化年間にも「二美人図」がある。

※2001年6月22日、重要文化財に指定。第1号は、文化年間の「潮干狩図」(大阪市立美術館蔵)。

※文化庁の「国指定文化財等データベース」には次の記載がある。

「(略)浮世絵美人画中でも吉原の遊女は最も多く描かれた題材である。本図は無背景にひとりの高位の遊女が物憂げな表情で立ち、前方に向かって右向きにかがんだ女性がこれを振りかえるのみの簡潔な図様である。立ち姿の女性は、やや俯き加減で視線を下に落と

し、下方におろした左腕で小袖の端を持っている。肩から足許にかけて身体は大きな弧を描き、向かって斜め左を向いている。頭髮には簪を多く挿し、白い花びら模様のあるうす青色の着物に細い帯を前で結ぶ。寛いだ姿で羽織った小袖は鼠色地に扇散らしの文様で、金泥(筆者注:金粉をにかわで溶いた顔料)の輪郭線で括られた桧扇からは実際に赤と緑の飾り糸が垂れ下がっている。裾には葵の模様もみえる。

かがんでいる女性は膝を横座りに折り、腰をやや前方にかがめて肩を後方にねじる。右肘を曲げて膝の上に置き、左肘は、手首を折り曲げて、手の甲をやや開いた口元にあてがい、首をねじって背後に立つ女性のほうを見やる。菖蒲草の褌模様の赤地の小袖を着し、茶色のうすものを上に重ね、背で結んだ青地の帯を垂らしている。

すらりとした長身の前者と、体を折り畳んでねじり、指先にも緊張感を漂わせる後者の対比が、人物としても充実した表現を実現している。(略)

本図の丹念で上品な出来映えは、特別の注文に応じた渾身の作と思わせるものがある。伝来は不明であるが、表装裂の一文字に三つ葉葵紋があることは、示唆的といえよう。葛飾北斎の代表作として、また、浮世絵師たちが競って健筆を揮った華やかな肉筆美人画にあって、勝川春章、喜多川歌麿に伍して独自の地位を占める美人画として、高く評価される」(ルビは筆者)



●肉筆画「二美人図」（享和3年～4年〈1803～04〉。重要美術品。絹本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。76.5×41.2 北斎館蔵）

※重要文化財の「二美人図」（享和元年～4年 MAO美術館蔵）とは別作だが、ほとんど同構図。前帯で首をかしげて立つ女。燈籠鬢の島田髷で赤い元結いの髪に六本の簪をして、右手を上げ、黒地に松と鶴の模様の着物に赤い前帯をだらりと下げた姿。その横で、黒地に花模様の着物を着て、片膝を立てて座る垂髪の遊女も六本の簪を挿している。二人の遊女が店に出る前の様子を描いているとも。

二美人図（北斎館）



●錦絵『風流無くてななくせ』（享和年間〈1801～04〉。大判錦絵雲母摺。可候画。蔦屋重三郎版）

※大判錦絵雲母摺の美人大首絵はこのシリーズ2枚のみが確認されて

いる。いずれも背景は白キラ（雲母）が使われている。「ななくせ」とあるので七図が予定されていたものか。

※リチャード・レイン『伝記画集 北斎』では、初代蔦屋重三郎の死により、二図のみで打ち切られたと推測している。

※この後は摺物や版本の挿絵以外、美人画をほとんど発表していないという（『浮世絵八華5 北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」）。

☆〈ほおずき〉（36.3×24.7 メトロポリタン美術館/ホノルル美術館/神戸市文書館/山口県立萩美術館・浦上記念館蔵）



山口県立萩美術館・浦上記念館蔵）

※髪を洗い終わった後、ほおずきを口先で遊ぶ女と、手鏡を見ながら歯についた口紅を拭おうとする島田髷の女を描いた図。

ほおずき（メトロポリタン美術館）

☆〈遠眼鏡〉（38.6×25.8 私立津山郷土博物館/神戸市立美術館/クラブホン・コレクション/ホノルル美術館/山口県立萩美術館・浦上記念館/サンタフェリー・ダークスコレクション蔵）

※仏参の途中、揚帽子の母親と、遠眼鏡を覗いて何かを見る娘の図。この絵について、薄藍の唐傘をさした奥女中と島田髷の腰元が片目を細くして



遠眼鏡で見る図という解釈もある（『浮世絵聚花ホノルル美術館』）

遠眼鏡（神戸市立美術館）

●肉筆画「恵比寿大黒図」（享和年間〈1801～04〉。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。75.6×28.1 個人蔵）

※大黒と恵比寿が並んで歩いている。大黒は小槌をぶら下げ、その右で恵比寿が釣り竿を肩にしている。

●錦絵「道行八景」（享和年間〈1801～04〉。中判錦絵。二丁掛。揃物。可候画。版元不明。心中事件の男女だけを集めたシリーズ）

※数少ない一枚風俗画。歌舞伎や浄瑠璃で知られた男女を描いたもの。「八景」とあるが六図だけ確認されている。

☆〈伊達与作せきの小方 夕照〉（23.5×17.4 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※歌舞伎「恋女房染分手綱」の原作、近松門左衛門の『丹波与作待夜小室節』の、由留木家の家臣で落ちぶれて東海道の馬方となった与作と、恋仲の関の小方が心中を覚悟して千貫松まで道行きの途中、休み茶屋で二人が煙管を使っている場面。脇の松の背景に富士山が描かれる。

左図：伊達与作せきの小方 夕照

右図：あづま与五郎の残雪（すみだ北斎美術館）



☆〈あづま与五郎の残雪〉（23.5×17.4

W・アマチュウツツ・コレクション/ボストン美術館：スポル

ディング・コレクション/鎌倉・二階堂浮世絵文庫蔵。以上『美術品所蔵レファレンス事典』より。

すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション〈二丁掛のまま〉蔵

※食事後、遊女部屋の格子窓の前で腰掛けている男にもたれかかる女の図。上記〈伊達与作せきの小方 夕照〉とともに横中判二丁掛（一枚に二図）で摺られ、後に縦二図に切断された。

☆〈おはつ徳兵衛 秋月〉（23.2×17.5 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ベルリン東洋美術館蔵）

※川端の柳の木の前で、「徳」の字のある提灯を下げた徳兵衛が、思案げに首をかしげて立つおはつの背に寄り添っている図。

近松門左衛門が実際の心中に取材した「曾根崎心中」による。おはつは天満屋の遊女、徳兵衛は醤油屋の手代。

おはつ徳兵衛 秋月（すみだ北斎美術館）



☆〈お梅糸之助 晩鐘〉（23.8×18.2 ベルリン東洋美術館/ボストン美術館蔵）

※高野山の山道で、お梅の後帯を糸之助がしゃがんで整えている図。

お梅糸之助 晩鐘（パブリックドメイン美術館）

☆〈お花半七 落雁〉（23.5×17.3）

※歌舞伎や人形浄瑠璃（『長町女腹切』など）の題材。京都で起きたお花と半七の心中事件を扱う。

☆〈お染久松 春花〉（23.2×17.5 ウースター美術館：バンクフト・コレクション蔵）



※菅専助の浄瑠璃「染模様妹背門松」や鶴屋南北の歌舞伎「お染久松色説販」等の取材。大阪で起きたお染と久松の心中事件を扱う。

お染久松 春花（パブリックドメイン美術館）

●肉筆画「養老の孝子図」A（享和年間〈1801~04〉。絹本着色一幅。東陽画狂人北斎。「画」字はない。印亀毛蛇足。96.0×32.1 日本浮世絵博物館蔵）

※能の「養老」から。光頭の樵が左手で酒になった瀧の水を瓢箪に汲みとっている図。浅草庵市人の賛「孝行の心を天も水にせず酒とくまする養老の瀧」がある。

●肉筆画「養老の孝子図」B（享和年間〈1801~04〉。絹本淡彩一幅。東陽画狂人北斎。「画」字はない。印亀毛蛇足。浅草庵市人の賛。101.3×29.4 個人蔵）

※同年作で同画趣のもの。頭巾を被った樵が右手で酒になった滝の水を汲みとっている図。浅草庵市人の賛は図Aと同一である。「養老の孝子図」A Bは対であったか。

養老の孝子図：右 A 図 左 B 図 (2005 北斎展図録より転載)

※上記二図の「東陽(江戸)」の落款から、地方からの依頼と思われる。浅草庵市人の賛から浅草側の三陽三河擣衣連に関わる人物からの注文と考えられている。

●肉筆画「六玉川」(享和年間〈1801~04〉)。紙本淡彩揃物。各一幅。文化初年頃の『秀逸 六玉川』『六玉川』と同画題だが、本図は肉筆画であり絵の寸法も大きく違う)

※元来六曲一隻の屏風の「六玉川図」であったが、現在では掛幅として確認されている。

☆〈井出の玉川〉(「山吹の玉川」)とも。紙本一幅。北斎画。印画狂人。101.0×41.4 千葉市美術館蔵)



※京都府綴喜郡井出町の玉川。藤原俊成の和歌「駒とめてなほ水飼はん山吹のはなの露添ふ井出の玉川」(新古今和歌集)からの着想。兩岸に山吹が咲く川を、公家の少年が背負われて渡る図。古歌では「山吹」の花が象徴となる。井出の玉川(千葉市美術館)



☆〈萩の玉川〉(「野路の玉川」「近江の玉川」「秋の土橋」)とも。紙本一幅。不染居北斎画。印画狂人。122.8×42.7 板橋区立美術館蔵)

※滋賀県草津市野路町にある玉川。源俊頼の和歌「あすもこむ野路の玉川萩こえて色なる波に月宿りけり」(千載和歌集)からの着想。小さな流れに架かる土橋と萩を配した図。古歌では「萩」が象徴となる。この図のみ不染居北斎の落款。萩の玉川(板橋区立美術館)



☆〈千鳥の玉川〉(「野田の玉川」)とも。紙本一幅。画狂人北斎画。印画狂人。123.0×42.0 すみだ北斎美術館/塩とたばこの博物館蔵)

※宮城県塩竈市大日向から多賀城市内を通り砂押川に注ぐ小川。能因の和歌「夕されば潮風越してみちのくの野田の玉川千鳥鳴くなり」(新古今和歌集)からの着想。飛来する二羽の千鳥と激しい流れの川の図。古歌では「千鳥」が象徴となる。千鳥の玉川(すみだ北斎美術館)



☆〈調布の玉川〉(「武蔵手作」)とも。紙本一幅。北斎画。印画狂人。126.5×44.0 北斎館蔵)

※東京都と神奈川県の間を流れる多摩川。藤原定家の和歌「調布やさらす垣根の朝露をつらぬきとめぬ玉川の里」（拾遺愚草）からの着想。川辺の垣根のそばで、布を干す男と側で打ち終わった布を駕籠に入れて持っている母親。大きな臼で棒の杵で砧後の布を取り出す二人の子供。布を打つ古歌では「晒布」が象徴となる。

☆〈三島の玉川〉（「濤衣の玉川」「砧の玉川」「摂津の玉川」とも。紙本一幅。北斎画。印画狂人。88.2×41.0 北斎館蔵）

※他の5図に比べ、上下が切り詰められている。大阪府高槻市南部を流れる川で、源俊頼の和歌「松風の音だに秋はさびしきに衣うつなり玉川の里」（千載和歌集）や、相模の和歌「見渡せば波のしがらみかけてけり卯の花咲ける玉川の里」（後拾遺和歌集）からの着想。茅屋の脇で砧を打つ夫婦と子どもの図。背後に卯の花（ウツギの花）が描かれ「打つ木」と掛けている。掛軸装の同図もある。古歌では「卯の花」が象徴となる。

☆〈高野の玉川〉（「紀伊の国 毒の玉川」とも）

※この図は現存せず。この川は、和歌山県高野山の奥院の大師廟近くを流れる川。古歌では「氷」「旅人」が象徴となる。

●肉筆画「鶏竹図」（北斎を名のる40代の作。印号の「亀毛蛇足」の使用は享和3年頃からとされているので、享和3年～文化4年〈1803～1807〉の間か。着色一幅。太田錦城の賛。歩月老人北斎。印亀毛蛇足。110.0×51.0 個人蔵）

※平成26年（2004）11月、東京の美術商がデンマークの競売で落札し、新発見となった。ジョサイア・コンドル（1852～1920）の旧蔵品といわれる（「朝日新聞デジタル」2016/12/30より）。中国南嶺派の描写で、竹を背景に、石灯籠の上にとまる鶏の図。

鶏竹図（2016/12/30「日本経済新聞」より転載）



●肉筆画「郭子儀」（享和年間〈1801～04〉絹本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。74.9×27.7 すみだ北斎美術館蔵）



※郭子儀は、唐の武将。後に汾陽王となった。家人三千人ともいわれ、皆栄達し、郭子儀も長寿であったため、めでたい画材として取り上げられる。図は、立っている郭子儀の後ろに多くの子供たちが描かれる。真筆を疑問視する向きもある。弘化4年（1847）に「郭子儀子孫繁栄図」も描いている。

郭子儀（すみだ北斎美術館）

●肉筆画「擬宝珠に白鷺図」（享和年間〈1801～4〉。紙本淡彩一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。85.5×25.4）

※擬宝珠の先端に白鷺がとまっている墨絵風の図。

●錦絵「不式之峰」（享和年間〈1801～04〉。大判着色。無款。24.7×37.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※富士の見える峠で馬の背に横座りよこざりで乗り、煙管きんぱんを使いながら富士山を見て休んでいる馬子うまこ。天秤てんべんの荷物を担ぐ男が馬子の方を向いている。その側で笠を被って杖を立てている男。図左には、赤子を背負くわって鋤くわを手にして煙管を使っている農婦。

不弔之峰（すみだ北斎美術館）



●錦絵「丸柰まるな画題名所」（仮題。享和年間：1801～04。図上の丸柰の中に画題が記されているのが特徴）

☆〈飛鳥山あすかやま〉（無款。12.7×18.7 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※飛鳥山の桜見物の人々や、休み茶屋の前や大きな案内石の前に行く人々が小さく鳥瞰ちうくわんで描かれる。

☆〈王子おうじのせいらん〉（画狂人北斎画。12.8×18.6 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※王子稻荷おうじいなりに参詣さんぎする人々が門をくぐっている。門の先には社やしろに続く登り道と、空には雁かりの群れが描かれる。

☆〈隅田川すみだがわの秋の月あきづき〉（画狂人北斎画、12.8×18.7 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※隅田川の岸かたの樹木鬱蒼うげそうとした中なかの家々。岸かたには数艘いくばくの舟が浮かんでいる。

●扇面画「都鳥図みやとどりづ」（享和年間〈1801～04〉扇面画。着色一面。画狂人北斎画。

花押 7.7×51.3 滴水軒記念文化振興財団蔵：すみだ北斎美術館寄託）

●摺物「一筆斎文調いっぴつさいぶんてう」（享和元年～2年か〈1801～02〉）

※6月12日、文調七回忌が柳橋やなぎばしの万八楼まんぱちろう注で行われ、出席しゅっせきした歌川豊広うたがわとよひろ・堤孫二つづみそんじ（堤等琳ついでらうりん）・春秀蝶はるしゆてつ・寿香亭目吉じゆかうていめきち・歌川豊国うたがわとよくに・画狂人北斎かきやうじんほくさい・喜多川歌麿きたがわうたまろ・長谷川雪旦はせがわせつたん・勝川春英かつかわしゆんえいらが摺物すりものに絵や文を添そえる（早稲田大学演劇博物館蔵『芝居画図録1』による）。

注）万八楼まんぱちろう：万屋八郎兵衛よろずやはちろうべゑが柳橋やなぎばしの隅田側すみだがわがわ沿いに建てた高級料亭かんじやうりやう。神田川が隅田川に合流する角地かくちにあった。

●摺物「伊沢いざわの富士ふじ」（享和年間〈1801～04〉。着色。画狂人北斎画。

16.2×46.9 ハーバード大学アーサー・サッラー・美術館蔵）

※春霞はるあさの向こうに残雪のこりゆきの富士山ふじさんが描かれる。澄あやんだ青色あおいろの雲うみと海面うみが春はるの暖あたたかさを醸かし出だしている。『富嶽三十六景』でも「甲州伊沢こうしゆいざわ暁あかつき」（天保2年：1831）で富士を描いている。

●摺物「のろまのろま狂言きやうげん」（享和2年～4年〈1802～04〉。小判着色摺物。画狂人北斎画）

※「のろま狂言」は、人形浄瑠璃にんぎやうじやうるりの間狂言まきやうげんとして行われ、野呂松勘兵衛のろまつかんべゑやのろま次兵衛のろまじべゑが名手なでうとして知られた。江戸後期には衰退さいたいした。現在は佐渡島さどじまに郷土芸能きやうとげいぶとして残る。

『滑稽諧謔能間狂言全集』（大正7年3月。大日本教育書院。伊東喜一郎編輯。国立国会図書館デジタルコレクションより）に以下の作品の基となった狂言が収録されている。図のサイズは一定でない。

☆〈犬山いぬやま伏ふし〉（14.0×15.2 すみだ北斎美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション）

※口論する山伏と僧侶が、茶屋の仲裁で、人食い犬を祈り鎮めた方を勝ちとする話。図は、山伏と僧侶の人形をそれぞれ持つ二人の女を描く。

☆〈たら福大じん〉（18.5×15.6 太田記念美術館：長瀬コレクション）

※妓楼でいくら金を使っても太夫に嫌われてばかりの大尽（遊郭で遊ぶ金持ち）を、茶屋の男が面白みに欠けるからだと言ったので、判じ物の面白い言葉のやり取りの末、漸く太夫の心をつかむことができたという話。たら福大尽の人形を持つ女と、横兵庫鬻の花魁の人形を持つ女の図。

☆〈小鍛冶〉（21.7×16.6 フランス国立図書館/太田記念美術館：長瀬コレクション）

※狂言の「小鍛冶」の人形を操る二人の女の図。寝てばかりで仕事をしない京都三条の刀工の小鍛冶宗近が、童子姿の氏神の稲荷大明神の狐に助けられ、勅使より依頼された剣を鍛え上げるという話。左の女が狐の化身の人形を、右の女性が滑稽な表情をした宗近の人形を操っている。「先春の夢にも一寸寝てみたし いつれ狐の鍛冶か合槌 向山彦」、「さくものと鶯もけさ梅が門 ひらけは御慶三条の小鍛冶 花田袖廣」の狂歌が記される。



小鍛冶（フランス国立図書館）

☆〈かゝミとき〉（13.5×18.4 日本浮世絵博物館蔵）

※二人の女人形使いが額の広い侍と頭巾を被った男を、手を差し出して操っている。

☆〈たぬきつか〉（18.5×15.6. 日本浮世絵博物館/サタフェリー・タークスコレクション蔵）

※二人の女が、角頭巾の人形と立烏帽子を被り素襖姿の人形を操っている。

●摺物「駒遊びの子と母」（享和年間〈1801～04〉）

※春駒（玩具の馬）にまたがる子と、立ってそれを見ている母親の図。

●摺物「鯉の滝登りを眺める貴人」（享和年間〈1801～04〉）。紙本全紙判着色。応需画狂人北斎画。42.8×57.0 すみだ北斎美術館蔵）

※鍵型に曲がる廊下に立って、立烏帽子の貴人が手をかざして滝の鯉を眺めている。庭先の老松の近くで、裾の長い下襲を着た貴人も滝を見ている。

●摺物「西王母」（享和年間〈1801～04〉）。画狂人北斎画。16.6×7.3 フランス国立図書館蔵）

※西王母の前で拱手のように両手を顔の前で結んで礼をする女の図。背後には桃の実のなった木が描かれる。

西王母（フランス国立図書館）



●摺物「観桜」（享和年間〈1801～04〉）。横大々判着色。摺物。宗理画。38.6×52.5 名古屋テレビ放送蔵）

※上半分に、毛氈を敷いて桜を楽しむ狂歌師二人、その前に立つ華やかな髪飾りと衣装の娘と、笠に短冊や正月の飾り物をつけたものを肩にした年増、供の小奴を描く。下半分に、逆さ文字で「千穂萬大々叶」と書かれた長唄の番組を記載する。

※2007年12月『北斎展』図録（東京新聞刊）では、「宗理画」（「宗理」号は寛政6年～13年〈1794～1801〉）に使用）とある本図を享和年間の作としている（p 231）。

●摺物「見立二十四孝」（享和年間〈1801～04〉）。紙本着色。画狂人北斎画。伊勢屋利兵衛版。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵

☆〈楊香〉（20.5×14.2）揚香は晋の魯国の人。14歳の時、栗を取ろうとしていた父を襲ってきた虎に向かって自分が身代りになって父親を助けようとした話からの取材。虎の屏風絵の前で弓矢を持っておどけているのを、屏風の陰から母親が見ている図。

☆〈田毎月丸〉（22.8×18.0）仏像の掘られた石碑の前に立つ二人の女。

●摺物「菖蒲池児戯」（享和年間〈1801～04〉）。紙本着色。画狂人北斎画。26.0×39.0 太田記念美術館蔵

※くの字に渡した板の橋のある菖蒲の咲く池に入って菖蒲を刈る子どもと、池の亀を捕まえて持ち上げる子ども。橋の手前ではその様子を見ている子どもの腰紐を引く女と、扇子をかざすダラリ帯の女。

●摺物「江の島詣」（享和年間〈1801～04〉）。横長判着色。摺物。画狂人北斎画。19.3×54.0 千葉市美術館蔵

※元は全紙判下半分に狂歌が書かれていたものと思われる。潮が引いた江の島への中州の道に行く二人の女に何かをせがむ二人の子ども。側では荷物運びの男が、荷物を下ろしている。図の右には江の島に続く中洲に行く参詣の人々が小さく描かれる。

●摺物「忠臣水滸伝 八番ノ内 速勘平」（享和年間〈1801～04〉）。着色。画狂人北斎画。19.3×8.6 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵

※読本『忠臣水滸伝』（前編：寛政11年〈1799〉、後編：享和元年〈1801〉）。山東京伝作の前編に登場する八人に見立てた美人絵の揃物の一。蓑を着て右手に松明を持ち、左手で卒塔婆を担いだ「速勘平」の姿を、本図では糸を多く垂らしたものを羽織り、右手に手燭を持ち、左手に聯注を持つ美人の姿で表されている。「野あそひに持し火繩は消なから四五間さきにもゆる陽炎 陽家浜道」、「土筆かりさくらかりよとかりくらす さつおにあらぬ春のかり人 松風台」の狂歌が記される。

注) 聯：書や絵を書き、または彫刻して、柱や壁などの左右に相對して掛けて飾りとする細長い板（「デジタル大辞泉」による）。

●摺物「羽子板の娘」（享和年間〈1801～04〉）。紙本着色。画狂人北斎画。13.6×27.8 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵

※横長判の図の右三分の一に絵が描かれ、図左三分の二に狂歌が連記される。図は、羽子板に興じる二人の娘。梅が咲き、後ろでは鶯が飛んでいる。四方歌壇のなど14名の狂歌が記される。

羽子板の娘 (すみだ北斎美術館)

●摺物「合筆所作事尽」(享和年間〈1801～04〉)。「見立所作事尽」とも。横長判着色。画狂人北斎画他。22.3×58.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)



※六人の合筆。図右から、勝川春英、泉守一、初代歌川豊国、雪峰、画狂人北斎、喜多川歌麿。北斎は、牡丹の花笠を被り立て膝に座り、手に持つ牡丹の枝を前に投げ出している姿を描いているところから、石橋物の舞踊の後シテの姿と見られる(『新北斎展図録』 p 316)。

横長判の下半分には、舞踊発表の目録が逆さに書かれていたと思われる。

注) 石橋物：歌舞伎舞踊等で獅子を題材とするもの。能の『石橋』の系統に属する(『ブリタニカ国際題百科事典』による)。

享和4/文化1 (2/11～) (1804) 甲子 45 歳 北斎辰政、時太郎可候、北斎主人、北斎

老人、北斎、画狂老人北斎、画狂人北斎、ほくさゐのふで、辰政：こと (34 歳)、

(富之助：18 歳)、阿美与 (16 歳)、阿鉄 (14 歳)、阿栄 (7 歳)

◇相撲興行 (3 月、神田明神、10 月、本所回向院)。以下、相撲興行掲載を略す。

◇武内確齋、『絵本太閤記』で、初代喜多川歌麿、初代歌川豊国らは手鎖の刑。

◇2 月 12 日 (西洋暦)、イマヌエル・カント没 (81)。

◇5 月 18 日、ナポレオン皇帝に就く。

◇5 月、歌川豊国・喜多川歌麿、筆禍に遭う。大坂で出版された『絵本太閤記』(一編十二冊。法橋〈岡田〉玉山筆)に取材した「太閤五妻洛東遊観之図」の歌川豊国「明智本能寺を囲む処」、喜多川歌麿「太閤、五妻と花見遊覧」、その他勝川春英、喜多川月麿の錦絵などが、寛政 2 年 (1790) の出版禁止令により、太閤時代の武者一枚絵を新たに出版したことや、武将の名前・紋所・戦地名を記入したことなどで絶版となる。板木・錦絵は没収。歌麿は三日入牢、手鎖五十日。他の画工は手鎖五十日。版元の絵草紙屋辰右衛門、山口屋忠兵衛は所払い・五貫文以上の罰金となる。

注) 五貫文：商人が使用した銀貨で換算すると、江戸中期から末期は、1 両=5 貫文=5000 文。1 文は、現在の価格 (2017 年現在) に照し合せると約 25 円が相当と思われるので、約 12 万 5 千円以上の罰金だろうか (あくまでも筆者による換算である)。

◇この年の、十返舎一九の黄表紙『化物太平記』(二冊。山口屋忠兵衛版)も同様に、織田信長、明智光秀、豊臣秀吉を茶化し、一九は手鎖 50 日の刑となる。

※この件により規制が強まり、天正年間 (1573～1593) 以降の武将 (およそ織田信長や豊臣秀吉の時代) の名前・紋所等を用いることを禁じ、一枚絵に和歌・地名以外の詞書を禁じ、大顔之絵及び版本の色刷りを禁止とした。

◇9月7日、ロシア使節レザノフ、漂民を護送して長崎来航、通商を要求。

◇佐藤鞠塙、寺島村(現東京都墨田区東向島3丁目)に百花園を開く。

○曲亭馬琴、読本『月氷奇縁』。馬琴の読本第一作となる。

○北尾政美(鋏形蕙斎)肉筆函巻「職人尽絵詞」。北斎に影響したか。

★北斎の黄表紙挿絵はこの年までで終了と考えられる。これまで45作以上の挿絵を描いたとされる(萩書店『江戸の絵本 画像とテキストの綾なせる世界』所収、マティ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち一享和・文化・文政期に焦点を絞って」p265)

【絵入読本此人よりひらけたり】

★この頃、浅草に住む。

「(略)専ら画狂人北斎と書名して雷鳴す。画風錦絵草双紙等の尋常にあらず、繡像注読本の差画(挿絵)を多くかきて世に行はれ、絵入読本此人よりひらけたり(此頃絵入読本世に流行す。画法草双紙に似寄らぬを以て貴しとす。(略)浅草に住す)」(『増補浮世絵類考』岩波文庫版『浮世絵類考』p144より)

注)繡像：読本に登場する人物の似顔絵の意味で用いている。

【読本と肉筆画に意欲、曲亭馬琴との読本コンビの始まり】

●読本『小説比翼文』(享和4年(1804)正月。中本二冊墨摺。曲亭馬琴作。北斎辰政画。鶴屋喜右衛門版。国立国会図書館蔵)

※鳥取藩士平井権八と吉原三浦屋の妓女小紫(濃紫)を題材にしたもの。

この年、曲亭馬琴とのコンビが始まり、文化2年(1805)より本格的に読本挿絵を手がける。但し、黄表紙では、寛政6年(1794)(正月の『福寿海无量品玉』三巻(唐山人跋。無款。耕書堂版)の挿絵は無款ながら、画風から春朗の挿絵と認められているので、この作品が馬琴と北斎(春朗)との初のコンビとなる。



『小説比翼文』見返し画：平井権八と濃紫(国立国会図書館)

●黄表紙『両面出世姿鑑 後編 娘敵討陸友綱 合巻』(1月。『両面出世姿鑑 前編 恩愛猿仇討』の後編として刊行。前編との合作解題版。もとは二巻二冊。虚呂利作。時太郎可候画。岩戸屋源八版。国立国会図書館/東京都立中央図書館蔵)
※『両面出世姿鑑 前編 恩愛猿仇討』には歌川豊国の挿絵で北斎は描かず。

『娘敵討陸友綱』最終丁(国立国会図書館)



●狂歌絵本『画本狂歌 山満多山』（正月。美濃判注¹色摺大本三冊。全 32 図。大原亭主人撰。便々館湖鯉鮒閑。袋に「北斎主人画」とある。〈『ピーターモース・コレクション北斎図録』では無款とするが、『浮世絵大成 8 北斎』では北斎老人画、『2005 北斎展図録』では北斎画としている。蔦屋重三郎版。大英博物館蔵下巻の最終丁に「享和四 甲子 初春 東都書房 蔦屋重三郎梓」の書込みがある。各約 26.3×17.3 国立国会図書館/すみだ北斎美術館/大英博物館/ベレス・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館/フリーア美術館：プルヴァー・コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵。名古屋の菱屋善兵衛の後摺版あり）

注1) 美濃判：9 寸 (273mm) ×1 尺 3 寸 (393mm)。ほぼ現在の B4 判に近い大きさ。大本とも呼ばれる。

※朱楽管江七回忌追善として刊行されたか（『秘蔵浮世絵大観ベレス・コレクション』で鈴木重三の説を紹介している。p 277）。

跋文に「あし曳の山の手なる景地をさぐり画は北斎老人が例のふんてをふるはしたはれ歌はをのれ炭方便々館（略）」とあり、山手辺の景観と風俗を描く。大半は 2 ページ見開きの図だが、上巻の〈玉川上水〉、中巻の〈駒塚橋〉〈聖堂〉、下巻の〈母子の遊び〉は 1 ページの図となっている。画題は記された狂歌の中からのもの。

※国立国会図書館版の上巻は、大英博物館版と絵の配置が若干違っている。

【上巻】13 丁

☆〈袋〉（すみだ北斎美術館蔵）

※いわゆる袋状のものではなく、紙製のブックカバー状のもの。

山姥が持つ板に金太郎が筆を持って「狂歌絵本 山満多山 北斎主人」の文字を描いている図。

山満多山「袋」



☆〈市谷八幡〉

※階段を上って来て鳥居の下に顔を出す参詣人。鳥居の前には母親が赤子を抱き、娘があやしている。その側には凧を背負い、正月飾りを持った子どもがいる。



※市谷八幡は、市谷

亀岡八幡宮（現東京都新宿区市谷八幡町15）で、文明11 年(1479)、太田道灌が、東の鎌倉・鶴岡八幡宮に対して、「亀岡」と称して、鎌倉の鶴岡八幡宮の分霊を祀って西方の守護神としたもの。

市谷八幡（大英博物館）

☆〈妙法寺道〉

※妙法寺への参詣人の饅頭笠には、それぞれ「妙」の字が書かれている。煙管をくわえて歩く男や、駕籠に乗っている女、その側に立って男たちを見ている女の側には「南妙法蓮華経」と書かれた幟旗が立てられている。「道」は、目的地までの道の意味であらう。妙法寺は（現東京都杉並区堀ノ内3-48-8）、日蓮宗の寺で「堀之内のおそっさま」と呼ばれ厄除け寺として、全国からの参詣人で賑わった。

妙法寺道（大英博物館）

☆〈王子道〉

※「右に にしがはら」「左に おうじみち」と書かれた道標のある分かれ道で、子どもを引あげてぶらんこをする母と娘。その側を通る旅人と供の男。



王子道（大英博物館）



王子道（国立国会図書館）

注：左ページの二人の女が子どもの手を引き揚げていた絵は、国立国会図書館版では〈護国寺〉の左ページに挿入されている。

☆〈王子海老屋〉

※下働きの男が大樽に溜めた水を盥に受けて洗っている。仲居たちも箆や薄手の鍋を持って待っている。海老屋は、寛政 11 年（1799）、扇屋とともに江戸郊外の王子に開業した侍向けの高級料理屋。扇屋は町人向けの料理屋で、玉子焼きで有名。

王子海老屋（大英博物館）



☆〈飛鳥山〉

※桜咲く飛鳥山の茶屋で二人の婦人が休んでいる。その前で酒の角樽を担いで陽気に歩く二人の侍。飛鳥山の桜は八代將軍吉宗が植えて以来、桜の名所となった。

飛鳥山（大英博物館）

☆〈白山神社〉

※「**箕桜**」と書かれた立て札と。木枠に囲われた桜の老木を眺める二人の婦人と男。その周りで箒で落葉を履く神社の下働きの男。白山神社（現東京都文京区白山5-31-26）は、五代将軍吉宗と生母桂昌院の親交を受けて、小石川の鎮守となる。箕桜は境内の八幡神社の御神木、江戸三大桜の一つに数えられた。紫陽花神社としても有名。

白山神社（大英博物館）



☆〈護国寺〉

※農作業が終わったのか、頭に葉缶と茶碗、弁当の包みを入れた**盥**を乗せ、子どもの手を引いて細い板橋をわたる農婦と、鋤を背負って煙管を加えながら歩く農夫注。背後に小さく護国寺の屋根が見える。護国寺（現東京都文京区大塚5-40-1）は、真言宗豊山派の大本山。天和元年(1681)、五代将軍綱吉が、生母桂昌院の願いにより、彼女の祈願寺として建立した。江戸三十三か所の観音霊場 13 番札所。境内には富士塚がある。

護国寺（大英博物館）

注：国立国会図書館版では、見開き左ページの農婦の絵は、〈王子道〉の左ページに挿入されている。

☆〈高田〉

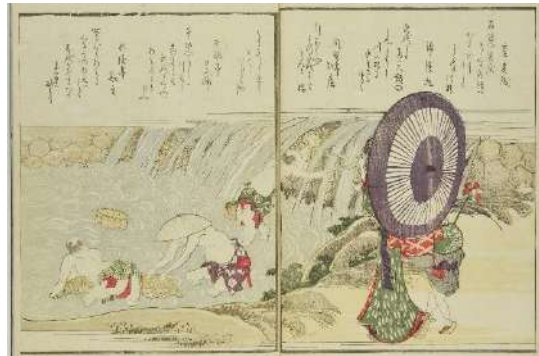
※高田馬場に近い高台から富士山を眺めている武家の女性三人。木の幹の二股に遠眼鏡をかけている**図**。高田は、現東京都新宿区高田馬場1 丁目から 4 丁目を指すが、当時は北の豊島区高田や、西の中野区上高田も含めた一帯を「高田」と呼んだ。本図がどこかは詳らかでない。

高田（日本浮世絵博物館）



☆〈どんど橋〉

※激しく流れ落ちる滝下で、^{ふる}箒を手にして魚を獲る男たちと、蛇の目傘を日傘にしてそれを見ている婦人と供人。どんど橋は、現在のJR飯田橋駅近くの六叉路付近に流れていた神田川と外堀の合流する所に、飯田橋と隣り合わせに掛かっていた^{ふながわらばし}船河原橋のこと。この橋の下に堰があり、常に水が流れ落ちる音がしたので、その音から通称「どんど橋」とよばれたという。ここで魚を獲ったり釣りをする人も多かったという。 どんど橋 (大英博物館)



☆〈江戸川〉

※高札(判読不能)の立っている川端で、扇子を使いながら蛸を狩っている武家の婦人と、蛸を入れる袋を持つ婦人。傍らでは、地上に落ちた蛸を見ている犬と、しゃがみ込んでいる^{ともぎわらい}供侍。江戸川は、利根川水流の分流で、茨城県、千葉県、埼玉県、東京都を流れる一級河川。当時は現在の江戸川本流(放水路)ではなく「旧江戸川」と呼ばれる川であった。



江戸川 (大英博物館)

☆〈玉川上水〉

※1 ページの図。橋桁にしがみついて舟を停める男と、竿で踏ん張る男。玉川上水は、江戸市中へ飲料水を供給していた江戸六上水の一つ。上水とは、上水道として利用される人工の溝渠(土を掘った溝)をいう。羽村から多摩川の水を取り、武蔵野台地を通り、四谷大木戸(現東京都四谷四丁目交差点付近)の水番所まで、標高差93m、約43kmを流れた。そこから地下を通して江戸市中に分配された。慶安6年(1653)に作られた。

玉川上水 (大英博物館)



【中巻】10丁

☆〈駒塚橋〉

※1 ページの図。板橋の上に、蛇の目傘を畳んで持ち、立っている二人の婦人。傍で草鞋の紐を直している男。背後に関口芭蕉庵らしき建物が見える。駒塚橋は、東京都文京区関口1丁目付近の神田川に掛かる橋。橋の北側に老松があり、ここに旅人が馬を繋いだので駒繫橋といわれ、それが訛ったものという説や、源頼朝がここで駒を引き返した所からという説など諸説ある。橋を渡った山の麓に、神田上水堰の鎮守である水神社がある。神社の傍らの胸突坂と呼ばれる急な坂の登り口には、江戸に出てきた松尾芭蕉が3年間住んだことを記念して、芭蕉を慕う人々によって建てられた関口芭蕉庵がある。

駒塚橋（大英博物館）



☆〈大木戸〉

※四谷大木戸の石垣の前で、突然の夕立に慌てる人々。傘を差した番傘には「岩」の文字が大きく描かれている。四谷大木戸は、現在の東京都新宿区四谷交差点付近に、甲州街道から江戸市中に



入る人々の取り締まりのために設けられた。石畳の道に石垣の壁が設けられた。寛政4年(1792)に木戸が廃止になり、人々が楽に行き交うことができるようになった。近くには玉川上水の四谷水番所が設けられた。

大木戸（大英博物館）

☆〈愛宕山〉

※愛宕山の休み処で、くつろぎながら団扇を使って市中や芝浦の海などを眺める婦人たちと子ども。遠くに五隻の帆掛け船の帆が見える。愛宕山（現東京都港区愛宕1丁目）は、江戸市中の最高峰で、市中や芝浦の海が一望でき、観光の名所となった。

愛宕山（大英博物館）



山上には愛宕神社があり、急な石段は、三代将軍家光の所望により、讃岐丸亀藩の曲垣平九郎が馬で駆け上がって山上の梅を取ってきた逸話で有名。北斎は、「新板浮絵芝愛宕山遠見之図」（文化7年頃：1810 伊勢屋利兵版横大判シリーズの一）でも愛宕山からの景観を描いている。

☆〈祇園会〉

※宿の門前から祇園会に出かける男や、赤緋の提灯を手にして子どもに向き合っている女、その傍に立っている女の姿。図左の幟に「享和三 癸」とあるが、刊行はこの年正月。祇園会は、京都八坂神社の大祭だが、江戸でも行われた。江戸大伝馬町二丁目の乾（北西）に祇園会御旅所があったという。歌川広重には、日本橋一丁目の呉服商・白木屋前で祇園の神輿を担ぐ『江戸名所道化尽』十七〈老丁目祇園会〉の絵がある。



祇園会（大英博物館）

☆〈内藤新宿〉

※引手茶屋の座敷に正月飾りを置く男と、それを見ている二人の遊女。一人は団扇を手にして立ち、一人は長煙管を立てて片膝を立てて座り、振り向いて見ている。足元には盆に乗せた茶碗と箱枕が置いてある。内藤新宿は、甲州街道の日本橋からの最初の宿場。甲州街道と青梅街道の分岐点（新宿追分）辺り一帯（現東京都新宿区新宿1丁目～3丁目辺）。信濃国高遠藩内藤家の中屋敷があったので、この名がついた。遊郭も盛んで、享保3年（1718）に一旦廃止になったが、文化5年（1808）には再開、旅籠屋50軒、引手茶屋80軒、遊女150人程（再開時に新宿に割り当てられた遊女数の上限数）はいたと思われる。



内藤新宿（大英博物館）

☆〈目白山〉

※目白台の茶屋から外の景色を眺める婦人二人と子ども。夕方の月が出ている。目白台の崖の上には目白不動があり、下には大洗堰が流れ、高田の森を望む名所で、境内には茶屋や料理屋もあった。目白不動は元々、文京区関口にあったが、戦災で焼失、目白不動を示す石碑と本尊は、現在の金乗院（現東京都豊島区高田2-12-39）に移された。

目白山（大英博物館）



☆〈穴八幡〉穴八幡宮に参詣に行く二人の女。一人は奉納の箱を抱えている。二人の前には大きな藁座を天秤にかけ、奉納箱を乗せて持ち上げようと腰をかがめている男がいる。



穴八幡宮（現東京都西早稲田 2-1-11）は、虫封じ、商売繁盛、出世・開運に利益があるとされる。旧称は高田八幡宮。

穴八幡（大英博物館）

☆〈関口〉※稲を干した田舎道を、鋤を担いで行く農夫が、鼻をつまんで婦人たちのほうを振り返る。婦人たちは口元に手を当てる仕草。干された麦藁の臭いだろうか。関口は、現東京都文京区関口1丁目～3丁目付近。目白台から続く高台。松尾芭蕉が二度目の江戸入りの後、この地に3年間住んだので、芭蕉を慕う人々によって、神田川に掛かる駒塚橋の北側に関口芭蕉庵が建てられた。神田川の南側一帯は早稲田田圃が一面に広がって



女と坊主が踊るような仕草をしている。着物の裾が風で揺れている。山王は、現東京都大田区山王1丁目～4丁目付近の高台。平間街道（現池上通り）沿いの宿場で新井宿があった。山側は將軍家の御狩場で、山下には田が広がっていた。

山王（大英博物館）

☆〈十二社〉

※神社の鳥居を下に見る高台に、参詣がてら立ち寄った趣の侍と奥方。松の木の下には、木につかまりながら崖下に足を投げ出す供の小奴。



十二社は、現東京都新宿区西新宿付近で、角筈と呼ばれていた。紀州出身の鈴木九郎が、この地に故郷の熊野三山から十二所権現を勧請した熊野神社（現東京都新宿区西新宿2-11-2。当時は熊野十二所権現社と呼ばれていたという）がある。近くに十二社池があり名所として賑わい、茶屋や料亭も立ち並んでいた。

十二社（大英博物館）

☆〈聖堂〉

※1 ページの図。湯島聖堂の見える部屋から外を見ている婦人と坊主頭の小奴。窓の向こうには木々のなかに聖堂の屋根が見える。聖堂は、湯島聖堂（現東京都文京区湯島1-4-25）のこと。元禄3年（1690）五代將軍綱吉によって建てられた孔子廟。後に幕府の学問所、昌平坂学問所（昌平齋）となった。針葉樹林や広葉樹林などの丘の上に建てられた。寛政11年（1799）に大改築された。

聖堂（大英博物館）



【下巻】10丁

☆〈母子の遊び〉

た（平成26年：史蹟関口芭蕉庵保存会『関口芭蕉庵案内記』p13掲載写真による）。

関口（大英博物館）

☆〈山王〉

※山王の高台で僧侶が雁の群れ飛ぶ空に向けて手を差しだし、まるでその指先から雁が飛び出しているかのように描く。傍で二人の巫





※1 ページの図。屋根を下に見る高台で、独楽遊びをする子どもを見て母親の手に、別の子どもがぶら下がっている。

母子の遊び (大英博物館)

☆〈雑司ヶ谷〉※寺の入り口の石造りの金剛力士像を見る男と、松の木の側に立つ参詣の二人。日蓮の御会式に訪れたのだろうか。雑司ヶ谷は、現在の東京都豊島区雑司ヶ谷1丁目～3丁目付近。元来は北豊島郡雑司ヶ谷村。北斎の信仰する日蓮宗の寺が点在する地域。参道からの桜並木で有名な法明寺（東京都豊島区南池袋3-

18-18）、太田蜀山人の狂歌碑がある本納寺（東京都豊島区雑司ヶ谷3-19-14）、雨乞いと皮膚病の祈願寺の清立院（東京都豊島区南池袋4-25-6）などがある。また、子授けや子育ての神で、大銀杏で名高い鬼子母神堂（東京都豊島区雑司ヶ谷3-15-20）もある。

雑司ヶ谷 (大英博物館)



☆〈西向観音〉

※紅葉咲く丘の上に立つ僧侶と二人の婦人。丘の下方には社殿の屋根が見える。

西向観音（現東京都新宿区新宿6-21-11）は、社殿が西に向いているのでこの名がある。三代将軍家光が鷹狩の際、黄金の棗を下賜したという伝説から棗の天神とも呼ばれる。太田道灌の山吹の伝説で、太田道灌に山吹の花を差し出した紅血という女性の墓といわれる板碑がある。寺の前の石段は山吹坂と呼ばれる。小高く西向きなので、富士山がよく見えたという。

西向観音 (大英博物館)



☆〈赤城大明神〉

※「赤城大明神」の額が掛かる赤い鳥居の上方から境内に立つ人を描く。袴を着た子どもの手を引く母親は、子どもの成長の祝いだろうか。手水場の前では、揚帽子（角隠し）を被った女性の人形を担いでいる人形遣いが、こま犬の張りぼてを頭上に掲げている子どもと一緒にいる。

赤城大明神 (大英博物館)

赤城大明神（現東京都新宿区赤城元町1-10）は、群馬県の赤城神社の分霊を祀ったのが始まり。数度の遷宮を経て弘治元年（1683）現在の所に遷ったといわれる。幕府により牛込の総鎮



守に位置づけられ、日枝神社と神田明神と共に江戸三社と称された。

☆〈諏訪明神社〉

※船に乗った三人の婦人が、船跡で割れた川面の薄氷に興味を示している。諏訪明神社は、信濃国諏訪の諏訪大社の分霊社だが、江戸には現在の東京都台東区駒形1-4-15の神社と、東京都荒川区西日暮里3-4-8の神社などがある。北斎がどちらの神社を念頭に置いていたのか不明。このシリーズは江戸郊外を描いているので、あるいは荒川区の諏訪明神とも考えられるが、川のある所とすれば駒形だろうか。川面の氷の図は、諏訪湖の氷渡りのイメージであろう。



諏訪明神社 (大英博物館)

☆〈牛込毘沙門天〉

※境内の露店で飴細工を作りながら売る男を、御高祖頭巾を被った年増と娘が見ながら歩く。後ろに縁日で買った植物を持っている男がいる。牛込毘沙門天（東京都新宿区神楽坂5-36）は、日蓮宗の善国寺のこと。毘沙門天は、仏教で四天王の一人で、仏法と帰依する人々を守る仏神。境内で露店が出たのは、この寺が始まりという。近くに赤城大明神がある。



牛込毘沙門天 (大英博物館)

☆〈植木屋〉

※男が如雨露で植木に水をやっている。それを盆栽の置いてある部屋から、反物を手にしながら見ている奥方がいる。

植木屋 (大英博物館)



☆〈魚板橋〉

※雪道を頭巾を被って傘を半分閉じて持ちながら歩く女と、笠を被った女が歩く。向かいから傘を広げ、顔を隠して来る二本差しの男。魚板橋がどこか不明。魚板橋 (大英博物館)



☆〈朱楽菅江の碑文〉

※朱楽菅江の辞世の狂歌の碑文の拓本を取った後、墨を塗る刷毛を持って碑文に向かって

いる僧侶。その脇でしゃがんで墨箱を持っている女。図の右には写し取った拓本の紙を持って立っている女。

朱楽菅江の辞世の狂歌碑は、三囲神社（東京都墨田区向島2-5-17）と関口芭蕉庵（東京都文京区関口2-11-3）とにある。関口芭蕉庵については〈駒塚橋〉〈関口〉の項を参照。

三囲神社と関口芭蕉庵のどちらを念頭に置いた絵なのか不明だが、関口芭蕉庵の碑は、朱楽菅江の没した翌年の寛政11年（1799）に建てられていることや、このシリーズでは関口の地の景観を多くとり上げていることから、関口芭蕉庵を念頭に置いたものか。辞世狂歌は「執着の心や娑婆に残るらむ よしのの桜さらしなの月」

朱楽菅江の碑文（大英博物館）



☆〈獅子舞〉

※杉の葉で作った衝立を背にして、太鼓と笛による囃子方と獅子舞を踊る男。正月用の鮭を風呂敷の重箱の上に乗せて歩きながら、獅子舞に振り返る婦人。縁台の杵と提灯を持って歩く職人。荷物を肩に乗せた行商人など、正月のめでたさを描いてこのシリーズを締めくくる。

獅子舞（大英博物館）



●版木「山満多山 墨版木」（桜材5枚。各24.2×37.8 オランダ国立民族学博物館蔵）

※この年正月に売り出された「山満多山」の版木で、蔦屋重三郎から菱屋金兵衛に売り出されたものがシーボルトの手に入ったもの。このうち一枚の裏面に「東都勝景一覽」の一図が彫られているという（1988年『シーボルトと日本展』図録p176）。

●錦絵摺物『春興五十三駄之内』（着色摺物。1月。「東海道五十三次」物の一。「狂歌入東海道」とも。正月。この年2月11日に文化元年に改元される前の刊行であるので、享和4年の刊行とする。画狂人北斎画。版元不明。ボストン美術館/すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/島根県立美術館/永田コレクション/プーシキン美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション/ホノルル美術館蔵）

※北斎摺物中最大枚数のシリーズ。浅草庵市人が率いる浅草側の三河擣衣連の依頼による正月の摺物。初摺は極めて少ないとされる。

横小判51図と横長判8図の全59図。絵の脇に宿場名と次の宿場までの距離、及び「画狂人北斎画」が記されている。「藤沢」と「石薬寺」図中に「享和甲子春」とある。

〈鞠子〉〈藤枝〉の図の枠外に画題の「春興五十三駄之内」の書き込みがある。

〈日本橋〉〈原〉〈鞠子〉〈藤枝〉〈秣（秋）葉山之春里（里は「戸の下に里」の字）〉〈鳳来寺春景〉〈岡崎〉〈宮〉は横長判（横二倍の大きさ）。

※「京」図が描かれたかは不明。

※当初、狂歌入りであったが、後に狂歌が削られて、弟子の柳川重信が〈鳴海〉など 8 図を書き加えて無題で文政年間（1818～30）に改編再刊された（掲載図で狂歌のないもの）。

柳川重信により加えられた図は、〈日本橋〉〈六江（ママ）渡〉〈原〉〈鞍子〉〈藤枝〉〈鳴海〉〈宮〉〈京〉。いずれも「柳川画」の落款あり。一方で削られた画は、〈日本橋〉〈品川宿〉〈原〉〈鞍子〉〈藤枝〉〈秣（秋）葉山之春里（戸の下に里）〉〈鳳来寺春景〉〈岡寄〉〈宮〉の 9 図。「柳川画」も比較のために掲載する。

更に北斎没後（刊行年不明）には同画集が「北斎翁之志遠里」名として再再刊された（以上、永田生慈監修・解説『葛飾北斎 東海道五十三次』岩崎美術社。1994 年。P158 による）

※人物中心のシリーズだが〈鳳来寺春景〉のみ人物が描かれない。

※東海道五十三次の風物を題材にし、大半に女性風俗が描かれ、北斎の美人画集の趣となっている。以下、比較のため柳川重信の図も掲載する。

※すみだ北斎美術館蔵版は、折帖装一帖に貼り込まれている。

☆〈日本橋〉（横長判〈横二倍〉）

※黒く長い御高祖頭巾を被った家の女房と、荷箱の柄を担ぐ者、供の者等が日本橋を渡る。



日本橋（狂歌入り：和泉市久保惣記念美術館蔵）



日本橋（ボストン美術館）

日本橋（柳川重信の後摺図 フランス国立図書館）

☆〈品川〉※手拭を被った三人の女が浅草海苔を漉いて作っている。



品川（ボストン美術館）



六郷渡し（柳川重信の後摺図：フランス国立図書館）

☆〈品川宿〉

※藁で作った市女笠や煙管など、藁細工が描かれる。人物は描かれない。

☆〈川崎〉（11.8×16.7 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）



※川で布を晒している女。晒した布を棒を使って干している男。

川崎（ボストン美術館）

☆〈神奈川〉

※二人の芸妓風の女が宿の中から体をひねって窓の外の世界を見ている。

☆〈程ヶ谷〉

※小川の側で、馬から鞍を下ろし、盥で馬の足を洗っている農夫。その後ろには鍬が置かれている。

☆〈戸塚〉

※宿の女が通りがかりの二人の旅人を玄関先で呼び込んでいる（島根県立美術館：永田コレクション蔵）。

☆〈藤沢〉

※道標に「享和四甲子年 正月吉日 藤沢宿 これより忍のしま」と書かれている。道標の側の鳥居をくぐる、菅笠を手に持つ女旅人と天秤棒の荷物を担ぐ供の男。その前で姉さん被りの女が、腰をかがめて煙管の灰を捨てようとしている。

☆〈平塚〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※鎌を持って砥石で研ぎながら木の下で休んでいる農夫の隣で、首に風呂敷の荷物を巻いた旅人が煙管を銜えながら、同じように休んでいる。木の陰に草を入れた箆が置かれ、中には刈り取った草が入っている。

☆〈大磯〉

※大きな「虎が石注」を抱えようとする男。それを見る御高祖頭巾の女が二人。一人は頭巾を脱ぎ首に巻いている。

注) 虎が石：虎御石、虎子石とも。曾我十郎祐成を敵の矢から防いだ石で、祐成の妻であった虎御前に因んで名づけられた石（図は狂歌入り版）。

大磯（和泉市久保惣記念美術館）



☆〈小田原〉（すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「本家 うみらう」と書かれた黒く大きな背負い箱を下ろして、腕きながら扇子を仰いでいるいろいろ売り。その側で、口元に手を当てて立っている女。左の背景には小田原城が描かれる。

☆〈箱根〉

※箱根路を駕籠で行く人、歩いている男女など。馬の背の荷物の上に乗っている男もいる。

☆〈三島〉

※二頭の牛にそれぞれ乗っている二人の子どもが松のある街道を行く。

☆〈沼津〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）。

※松並木の道で熊手を引いて落ち葉を集めている二人の子ども。背には落ち葉を入れる籠を背負っている。松の木の間から富士山が見える。図は、狂歌入り判。

沼津（和泉市久保惣記念美術館）



☆〈吉原〉

（ポストン美術館蔵）

※名物の

白酒を轆轤で絞り出している家族を描く。

吉原（島根県立美術館）

☆〈原〉（12.0×33.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※横長判二枚続き。右半分の図には、梅の咲く山道を黒い御高祖頭巾を被った女や、煙管をくわえながら歩く、菅笠を被った女。側に振り分け荷物の男。左半分の図には大きな富士山を背景に、坂道を下る笠を被った男たち。



原 (ボストン美術館)

原 (柳川重信の後摺図：フランス国立図書館)

☆〈蒲原〉 (11.7×16.2 すみだ北斎美術館蔵)

※地引網を引く人々。遠くにも同じように地引網を引く人々。海上には漁をする小舟が数艘浮かぶ。

☆〈由井〉

※塩田で塩を含んだ砂を鋤で掻き集めている

男二人。右手前には塩屋が描かれ、ここで塩水をかけたものを焼く。

☆〈奥津〉※名産のサザエと鮑と甘鯛 (興津鯛) を重ね合わせて描く。人物は描かれない。



奥津 (太田記念美術館)



☆〈江尻〉

※合羽を着て笠を被った旅人二人。一人は背中に荷物を背負っているの、合羽が箱型にせり出している (島根県立美術館：永田コレクション蔵)。

☆〈府中〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※竹細工を作っている男に、女が盆に載せた茶碗を差し出そうとしている。女は左手に薬缶を持つ

ている。庭には梅の木がある。

☆〈岡部〉

※宿の入口で草鞋を脱ぐ旅人に、口に手を当てながら茶を差し出す宿の女。

☆〈鞠子〉 (12.0×33.8 太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※横長判二枚続き。名物のとろろ汁を食べる三人の男と、給仕をする二人の女。女の一人が、盆を持ったまま、もういいという仕草の男の袖を引いている。



鞠子 (ボストン美術館)

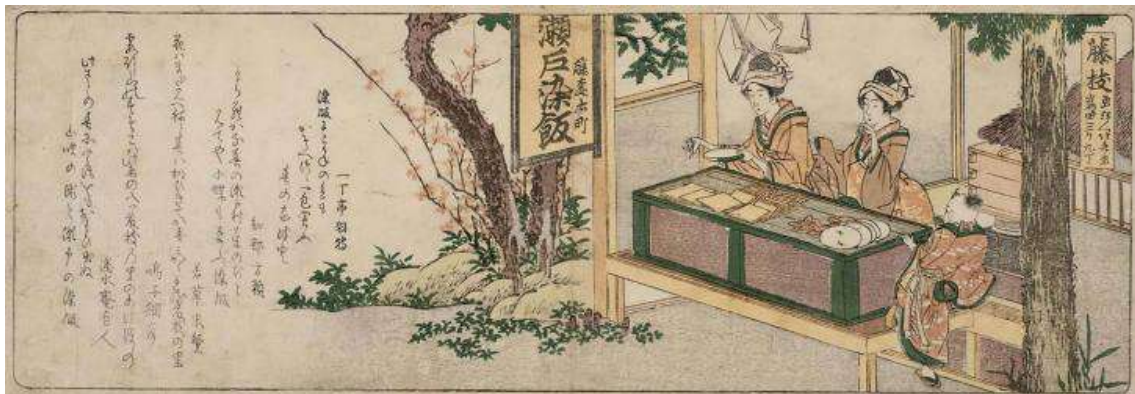
鞠子 (柳川重信の後刷図：フランス国立美術館)

☆〈藤枝〉 (11.5×34.3 太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/ホノルル美術館蔵)

※横長判二枚続き。「富士枝本町 瀬戸染飯」と書かれた看板のある店先で、名物の染飯注を売る二人の女。その横には売り台に手を掛けてよじ登ろうとする子ども。



注) 染飯：もち米を蒸し、梶子で黄色に染めたものをすり潰し、小判形にしたものを干した食べ物。道中食であった。図左に五人の狂歌が記されている。



藤枝 (ボストン美術館)

藤枝 (柳川重信の後摺図：フランス国立美術館)

☆〈島田〉

※大井川の川渡しの人足が侍を肩車して川を渡っている。向こう岸近くには輦台に乗せた駕籠のそばを長槍を持った供人が付き従う。



島田 (ボストン美術館)

☆〈**金谷**〉 (11.3×16.2 太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※名物の餛飩の餅注を作る二人の女と、入口で餅袋に口を入れて餌を食べている馬。「小夜の中山 餛飩の餅」と書かれた看板がある。

注) 餛飩の餅：水餛飩を使った餅で、関ヶ原の戦いの際、山内一豊が当地の名物の餛飩の餅を献上したことで有名になった。竹の皮に五個並べ、5文(約100円)で売ったという。



☆〈**日坂**〉 (12.0×16.7 太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※鳥居の細工物を肩にかけて、ぶら下げたいくつかの鉦を鳴らす男と、座って小太鼓を叩く年配の男。

☆〈**掛川**〉 (11.7×16.6 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※葛布や花蓑蓑を商う店で商品を扱う女と品定めをする女

☆〈**袋井**〉

※大黒天の格好をした男が連れてきた馬には「吉」の腹掛けが付けられ、背には打出の小槌が置かれた大きな袋が乗せてある。馬の尻には「萬」の字が染められた布が置かれている。入口で盆に乗せた茶をさし出す女。正月祝いの風景。

☆〈**秋葉山之春里注**〉 (11.9×34.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※横長版二枚続き。梅の咲く山道できのこ狩りをする女二人と子ども。一人は手をかざして遠くの神社を眺めている。

注：「厘」は戸の下に里が用いられている。



秋葉山之春里 (ボストン美術館)

☆〈**鳳来寺春景**〉 (11.9×34.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※二枚続き。画面中央に鳳来寺山注の間に建つ寺を小さく描く。図の右下には「新城」と地名が記され、城を描く。人物は描かれない。

注) 鳳来寺山：愛知県新城市鳳来寺にある695mの岩山で、古くから霊場としてあった。

☆〈見附〉（11.8×16.4 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※旅人が茶屋で蕎麦を食べている。店先の看板に「（挽）抜きそば 十六文」とある。蕎麦はこの辺りの名物として知られていた。挽抜きそばは、精製した上等の白いそば粉を使ったそばであるという。十六文は約400円（一文=25円で換算）。

☆〈浜松〉（11.8×16.7 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※高くそびえる松の木の下に小さな茶店があり、そこに向かう徒歩と馬上の旅人。松の左には波の寄せる海が描かれる。

☆〈舞坂〉（11.7×16.8 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※客と荷物を乗せた大型帆船が二隻船出をしている。

☆〈荒井〉（12.8×17.6 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※笠を被った三人の旅人が山道を行く。後ろには手拭いを被った旅人が重い荷物を背負っている姿が一部見えている。

☆〈白須賀〉（11.9×16.6 太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※この宿駅近くの茶店で売った名物の柏餅の粉を練っている男と、傍でそれを見ながら柏餅づくりを手伝っている女房。看板には「かしハ餅 根元名代」とある。



二川（ボストン美術館）

☆〈二川〉（11.9×16.6 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※梅の木と松の側にある茶店で休む女旅人。縁台に腰かけ足と杖を投げ出している。

☆〈吉田〉（12.1×16.7 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※「吉田本宿 合ほくち注 甲子屋」と書かれた袋には海老の絵も描かれている。この袋に、おかめの面、薫細工の平たい箆などを重ねて描く。縁起物の図で、人物は描かれない。注) ほくち：火打石の火を受ける火種。火口は吉田の名産。「忍びや」の火口が有名で火口のトレードマークになったという。この頃（享和2年）、吉田には6軒のほくち屋があったという（山本祐子・名古屋市博物館調査研究員の「中日新聞」2016年9月2日の記事による）。



吉田（ボストン美術館）

☆〈御油〉（12.0×17.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※梅の見える窓辺で、鏡を見ながら長い髪を梳いている遊女。

☆〈赤坂〉

※柱に糸を括り付け、それを紐に編みながら、側でハイハイする赤子を見ている母親。

赤坂（ポストン美術館）



☆〈藤川〉（12.3×17.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※遠くの赤坂大明神を見て行く馬上の旅人二人と荷物持ち。

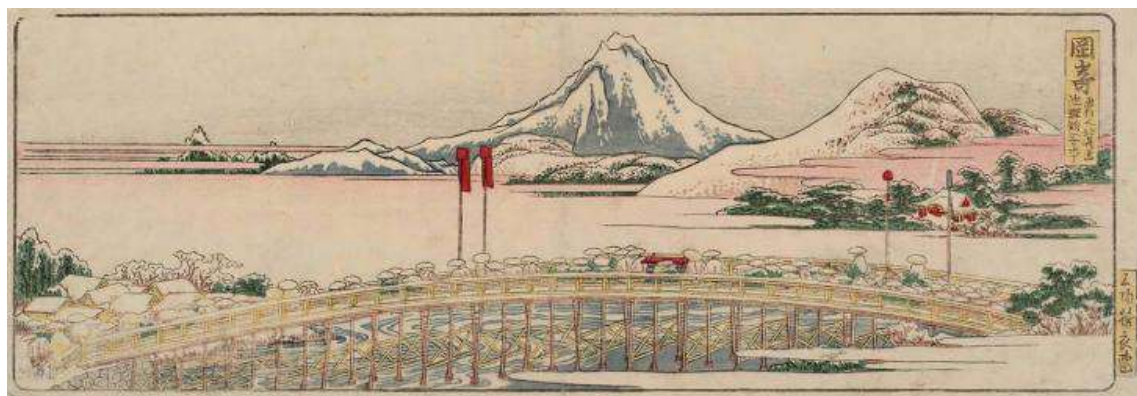
☆〈岡崎宿 其二〉（12.7×18.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※図の右に岡崎城を描き、遠景の山々を描いた風景画。「其二」が〈岡崎〉の前に配置されている。

☆〈岡崎〉（12.0×34.2 太田記念美術館：長瀬コレクション/ホノルル美術館蔵）

※横長判二枚続き。矢剥の橋注を行く大名行列の人々の背や笠には雪が被っている。

注) 矢剥の橋：東海道中で最も長い橋。208間（378m）ある。



岡崎（太田記念美術館）

☆〈岡崎池鯉鮒之間〉

※「八橋 四丁半」の道標のある道を行く旅人。八橋は、杜若の名勝地。平安の歌人在原業平が、「からころも きつつなれにし つましかれば はるばるきぬる たびをしぞおもふ」と、句頭に「かきつばた」の5文字をいれた折句で「旅の心」を詠んだことで有名。

☆〈池鯉鮒〉

※図の左に池鯉鮒明神の五重塔と寺社の屋根が描かれ、図の右端に八橋神社を描く。手前には民家の屋根を鳥瞰的に描く。

☆〈鳴海〉（11.8×16.5 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館蔵）

※布を絞るために、口に糸をくわえている角隠しを被っている女の前には白い布が広がっている。その左に、畳んだ絞りの布を持って立っている女。鳴海は鳴海絞りで有名な地。



鳴海 (ボストン美術館)



鳴海 (柳川重信の後摺図：フランス国立図書館)

☆〈桑名〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※ 蛤 (はまぐり) を団扇 (うちわ) であおり、煙にむせながら焼いている女と、蛤のに入った籠 (かご) を手にする女。側で見ている子どもがいる。

☆〈宮〉 (12.1×34.4 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※ 横長判二枚続き。梅の咲く道を御高祖頭巾 (お高祖頭巾) を被った女や、笠 (かさ) を手にして歩く女など三人が行く。その後ろには荷物を担ぐ供人。図左には城が描かれる。



宮 (ボストン美術館)

宮 (柳川重信の後摺図：フランス国立図書館)

☆〈四日市〉 馬の背の両側につけた格子の箱にそれぞれ乗っている女は、ともに煙管 (たばこ) をくわえている。馬の鼻先には、しゃがんで草鞋 (わらじ) の紐を直している馬子。

☆〈石薬師〉 (13.4×18.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※ 石薬師寺 (いしやくしじ) に参詣 (まじり) する旅人。「奉獻 (ほうけん)」と書かれた手洗水 (てうせんすい) の脇 (わき) に「享和 (きやわ) 甲子 (かしのね) 春」と書かれている。

注) 石薬師寺 (いしやくしじ)：三重県 (みえ) 鈴鹿市 (すずか) 石薬師町 (いしやくしじ) 1 番地にある。参勤交代 (さんきんこうたい) でこの宿 (しゆく) を通る大名 (だいみょう) は、必ずこの寺 (てら) に参詣 (まじり) して旅 (たび) の無事 (むじ) を祈 (いの) ったことで有名 (めいじゆう)。



☆〈庄野〉

※宿の部屋の行燈の側で二人の女が、荷物を膝に乗せて座っている。後ろにも柳廬と風呂敷に包んだ荷物がある。

☆〈亀山〉

※「春」と書かれた提灯が下がる茶屋の店先で、一人の女は座って休み、一人の女は笠に手をやり立っている。足元には棒を渡した風呂敷包が置かれている。遠くには亀山城が見える。

☆〈関〉 (11.8×16.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※旅人がほうと息を吐き、遠くを眺めている。側で子どもがしゃがんで向こうの「夷岩注」「大黒岩注」と書かれた岩山にいる猿を指さしている。

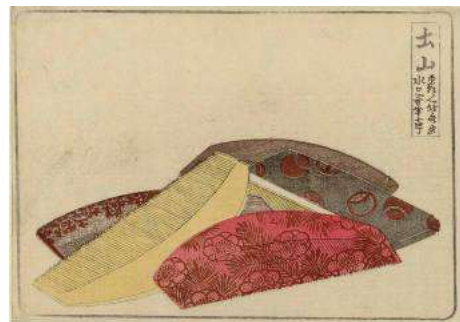
注) 夷岩・大黒岩：関宿の地蔵町からの山道には鈴鹿川が左右に流れ、右の山の中腹に蛭子に似た夷岩に続いて大黒岩が現れる。大黒岩は「形やゝ夷にハおとれり」と、太田南畝は紀行日記『改元紀行』（下巻。享和元年三月八日条。「国立国会図書館デジタルコレクション」より）で述べている。

☆〈坂ノ下〉 (13.1×17.8)

※主人と供人が、松の木の下で荷物を下ろし休んでいる。供人はかなたの奇岩（夷岩）を指さしている。

☆〈土山〉

※櫛がいくつか重なって描かれる。人物は描かれな
い。土山は「お六櫛」という櫛の生産が有名。元禄
年間に土山の藪原宿に住んでいたお六という娘が、
みねばりの木注で作った櫛が由来といわれ、土山宿
の名産となった。 土山（ボストン美術館）



注) みねばりの木：峰榛の木。成長が非常に遅い貴重
な木で、非常に硬く、斧が折れるほどであるので「斧折樺」といわれる。鳥居峠近くの
藪原に多く産した。

☆〈水口〉 (13.2×18.1)

※母親が酒の入った手桶に手を掛けている。側で赤子が片足をあげてはしゃいでいる。その
後ろでは赤子を支えるようにしている女がいる。「桜川」と書かれた酒樽が部屋の脇に
置かれている。滋賀県甲賀市水口は酒造りで有名。

☆〈石部〉 (11.8×16.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※「和中散注」と書かれた標章が図の中央に大きく描かれ、図の右には柵に囲まれた梅の
木が描かれる。人物は描かれない。

注) 和中散：腹痛などに効く道中薬。徳川家康の腹痛に効いたという。この地の和中散
本舗で製造された。

☆〈草津〉

※画題の脇に「女川の里」とある。草津の東方にある地名で、菜飯と田楽が有名。図は、女が菜飯用の菜を俵板の上で刻んでいるところを描く。

草津（ポストン美術館：狂歌入り）



☆〈大津〉

※画題の脇に「走井」とある。走井は大津から京都に向かう途中の逢坂大谷町茶屋の軒場であり、



大津（ポストン美術館）

後ろの

山中から走り下って湧き出る水であると『東海道名所図会』（秋里籬島著 寛政9年）に説明されている（「国立国会図書館デジタルコレクション」より）。湧き出る走井で食べ物や食器などを洗っている男女を描く。宿駅名の下に「京へ三里」とあるが「京」は未発見である。

京（柳川重信の後摺図：フランス国立図書館）

※大津の後に狂歌だけの3ページと見返しが続く。

●絵暦「見立芝居絵看板」（1月。八ツ切判摺物。北斎画。19.6×13.7 島根県立美術館：永田コレクション/フランス国立図書館蔵）



※芝居の看板は主に鳥居派の絵師が描いたが、北斎も看板絵を描いたことが知られている。芝居小屋の正面に架けられた大名題看板の構図となっている。看板の上には役者の役を描く。左手で刀を持つ大黒天（三升紋の市川團十郎）が中央に座り、弁財天（丸に東ね熨斗紋の瀬川菊之丞）が右側に立つ。腰に刀を差して、隈どりをした毘沙門天が左側に描かれ、右下には「北斎画」とある。絵の下には「語り」と「大名題」（狂言の題）を書く。大名題には「歳徳寅卯間 きのえね四」注とある。芝居小屋（暖簾の座紋から市村座と分る）の文字看板には「松本八 十一 三 六 山下万 十二 十」と大の月が記されている。

注)「歳徳」は歳徳神のいる所を指す。恵方。「寅卯間」は寅と卯の方向の間をいう。東北東。「きのえね」（甲子）は享和4年を指す。即ちこの年の恵方は東北東を指す。

見立芝居絵看板（フランス国立図書館）



- 絵暦「**台所の母子**」(1月。無款) 画中の竈に大小月が示される(『年譜』による)。
- 絵暦「**金毘羅詣の二美人**」(1月。無款) 美人の帯に大小月が示される(『年譜』による)。
- 絵暦「**美人爪切り図**」(「爪切る美人図」とも。縦小判着色摺物。洋風版画。額枠に描く。横書きひらがなの落款で「ほくさゐのふで」。13.1×8.7 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館蔵)

※和鋏で左手の爪を切る女性の上半身を大首絵のように、額装のデザインにして描く。図左上に大小月が示され、享和4年(文化元年)用の暦となる。


美人爪切り図(島根県立美術館)



- 摺物「**鳥かごと梅鉢の図**」(春。狂歌摺物。横中判着色。画狂老人北斎画。19.6×27.4 千葉市美術館蔵)

※図左に「甲子春」とある。山水風の絵付けのある三脚の鉢に梅が咲いている。その脇に紐のついた四角い鳥かごが置かれ、なかに白い十姉妹らしい鳥がいる。「きのふまたてあハせたる障子さへ 明れハ匂ふ春の梅かゝ 渚玉頼」、
「霞みたる春のゆうべに月のかさ めすよりひらく梅の花笠 布泉法師」、
「見るほとなものに笑ふかくせなれや としも善木の梅のはつ花 三東亭浦舟」他3名の狂歌が記される。

【以下享和末～文化前期】

画狂人北斎、北斎辰政、画狂老北斎、北斎、画狂老人北斎老夫、北斎、亀毛蛇足、辰、

政

- 狂歌絵本『**木賊刈**』(享和元年～文化2(1801～05)。横長判摺物。画狂人北斎画。東京国立博物館蔵)

※三河岡崎の狂歌連・三陽擣衣連の依頼。同連の10人と浅草庵市人の狂歌連作を載せる。能「木賊刈」からの着想。同画題は『詩歌写真鏡』(天保4～5年：1833～34)の「木賊刈」にも反映している。

- 狂歌絵本『**絵本隅田川兩岸一覽**』(享和3年～文化3年(1803～06))。『隅田川兩岸一覽』とも。大本三冊。美濃判着色。鶴屋喜右衛門版。前川善兵衛の後修版に記された狂歌師壺十郎成安の序には、巻末に北斎辰政画とあるが、初版にはなし。各平均見開き18.5×27.2 国立国会図書館/太田記念美術館/ボストン美術館/フーリア美術館：プルヴェラー・コレクション/オランダ国立民族学博物館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション(後摺：前川善兵衛版)/日本浮世絵博物館/東洋文庫蔵)

※ボストン美術館には版木の墨板と色板240枚が所蔵されているという(国立民族博物館『錦絵はいかにつくられたか』p75)。

※刊行年については、享和元年(1801)説、享和3年(1803)説、文化2年～3年(1804～05)説、文化3年(1806)説、文化元年頃(1803)に作画し、文化5年頃(1808)に刊行したとする諸説がある。

※天明2年(1781)の鶴岡蘆水の絵「隅田川両岸一覽」(二帖)から発想と題名を得たものとされる(『原色浮世絵大事典 第8巻 作品三 写楽一北斎』p75)。

※ほとんどが各ページにわたる続絵の構成であるので、一枚一枚の解説は困難であり、ここでの説明はあくまで便宜的である。隅田川西岸から東岸を眺めた景観を描く(本稿は「すみだ北斎美術館」の当該作品パネルの解説を参照した)。

【上巻】

【以下6図の続き絵】

☆〈高輪の暁鳥 不峯の積雪〉2枚続き。

※右頁の狂歌「佐保姫のめした霞の袖のうら 一ばんからす墨をつけたり 壺墨楼奈良輔」

図は、東海道を目指して出発すると、高輪辺りで夜明けになり、暁鳥が鳴くといわれ、高輪の先の品川宿の夜明けの空に鳥が群れ飛んでいる。手前の高輪の茶店では、馬上の旅人たちを女が呼び込んでいる。

※左頁の狂歌「不二山のおろしだいこにさゞ波の さしみ作れる海の大鉢 歌船亭千綱」

図は、舳先に注連縄の松飾を付けた五大方船に、扇をかざして万歳の祝いをする小舟が近づいている。沖には積雪の富士山が小さく描かれ、手前には積み上げられた石垣がある。

高輪の暁鳥 不峯の積雪 (ボストン美術館)



☆〈旭 元船乗初 房総春暁〉2枚続き。

※右頁の狂歌「見渡せば霞の網のひきはへて 千万艘のけさの乗初 遊友館春道」

※左頁の狂歌「遠つ帆は蝶ともみえてうつつ浪のはなの中ゆく千ふね百船 壺玄楼万盃」

図は、渡し船に乗る頭巾の侍や、御高祖頭巾の女や女房、荷物を担いだ行商人たち。船の前と後ろで竿刺す船頭。沖には帆掛舟が多く停泊している。

旭 元船乗初 房総春暁 (ボストン美術館)



☆〈佃住吉恵方 筑地の風〉

※右頁の狂歌「船つくだてうと恵方に真住よし 巳午注1の間よろづ藤棚 甲羅千人」

左頁の狂歌「春風に来る帆とも見ゆるなり 筑地の沖にあぐる袖風 巖亀子」

図は、手前の橋の上には、折烏帽子を被った二本差しの三河万歳の男がおり、その隣に女が立っている。二人の後ろには荷物を担いだ才蔵の男が控えている。橋の中央では「綿ぼうし」と書かれた背負い箱を背負う男が二人に向き合っている。橋の左では二人の子どもが凧を揚げ、その一つは市川團十郎の三升紋注2が描かれ、もう一つの凧は前頁の左上に掛かって描かれる鳶凧となっている。

住吉恵方 筑地の凧 (ボストン美術館)



注 1) 巳午：12 月の巳の日や午の日に、その年に亡くなった人のための正月を迎えさせて祝う儀式。「みうま」とも。

注 2) 三升紋：市川團十郎は代々「三升」を名乗り、その紋は、「暫」の図柄に似て、枡が三層に重ねられた形。

【以上 10 図の続き絵】

☆〈三侯の白魚 永代春風〉2 枚続き。

※右頁の狂歌「水の面に糸の白魚あつまれば 浪にかゝりをみつまたの川 金門守」

※左頁の狂歌「にぎはへる永代橋にやり梅の かほりもたへずわたる春風 鶴毛衣」

図は、手前に、二月の初午祭りに叩く太鼓を、天秤棒の両端にぶら下げて売る男。その後ろには子供の手を引く母親。図の左には母娘と思われる二人の女と供の男。左手奥には永代橋が描かれ、隅田川から別れる三侯には、白魚漁の四つ手網船と、「正一（位）」の字の職が立つ住吉神社（現東京都中央区佃 1-1-14）の社殿の一部が見える。

三侯の白魚 永代春風 (ボストン美術館)



☆〈市中の花 新寺の新樹〉2 枚続き。

※右頁の狂歌「家づとの桜の枝は手折しと あとづけがほに蝶のおひ来る 桐政女」

※左頁の狂歌「日の影のもらぬ木立はふくろうの 目も見ゆるかとおもふまくらさ 京唐橋村雄」

図は、手前の岸辺に桜の花をあしらった揚帽子（角隠し）を被って花見に来た二人の婦人と、供の男が食べ物を入れた箱を持って立っている。その後ろには、願人坊主注が四月八日の灌仏会のための甘茶の道具をぶら下げている。対岸には、右から仙台堀の上之橋、小名木川に掛かる万年橋と、下総国の嶺雲院が深川に移転して新寺として霊雲院（現東京都江東区清澄 1-7 にあった）と改称した所の新樹が茂っている。その左には隅田川に架かる新大橋に多くの人が往来している。

注) 願人坊主：家々を回って、軽口や阿呆陀羅經（時事風刺の滑稽な俗謡）等を唱え、米や銭をもらう乞食坊主。

市中の花 新寺の新樹 (ボストン美術館)

☆〈大橋の綱引 元柳橋の子規〉2枚続き。

※右頁の狂歌「波風のなかずのかたはかすみにも 手伝はせたるはるの綱引 竹女」

※左頁の狂歌「やよ親の音をまなべかし二声と なかずのかたへ行ほとゝぎす 壺鶯楼可知輔」

図は、手前の元柳橋辺に設けられた縁台で、新大橋手前での投網漁を眺める母子。子どもの着物の背中には市川団十郎の三升紋が染め抜かれている。柳橋の中央の欄干に腰を下ろして休んでいる行商人。大きな傘を日除けにしている婦人たち。欄干に手を掛けて対岸を眺める男、橋の左詰めには、物乞いをする羅漢風の光頭の男が座っている。橋の脇には釣竿を肩にした男もいる。花見土産の桜の枝が「家づと」（家への土産）となる。

大橋の綱引 元柳橋の子規 (ボストン美術館)



☆〈御船蔵 広小路の群衆〉2枚続き。

※左頁に二首の狂歌「水うちて涼しき門へ笛売の 秋を告たる日ぐらしのこゑ 京 俵藤子」「両国の橋のたもとの夕風は そでから袖へぬけるすゞしさ 貢計舎升盛」

図は、手前の岸側の両国広小路の水茶屋などでにぎわう風景を描く。対岸には幕府の御船蔵が並び、その前の川ではシジミをとる人たちが小さく描かれる。図の左には「和漢諸軍談 はなし 立川」と書いた幟を立てた小屋で軍談を話す男などの様子が、次の「其二」につながって描かれる。左端には、天秤棒に御幣を詰めて運ぶ職人の姿も見える。

御船蔵 広小路の群衆 (ボストン美術館)



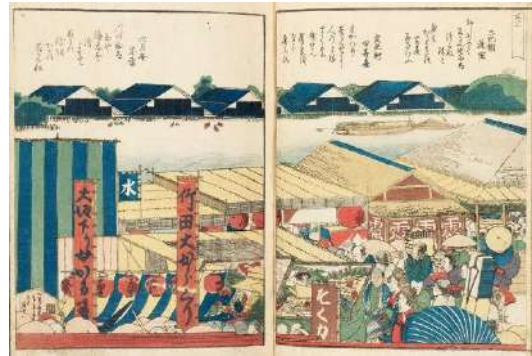
☆「其二」2枚続き。

※右頁の狂歌「おしおふて足さへ地にはつかぬほど 身もかるわざの芝居にぎはふ 三巴園逢室」、「立かはり茶見せに人のよるまでも 幾せん群集をなす広小路 貢光軒宇寿喜」

※左頁の狂歌「川の面は玉や鑪屋注を漕まぜて 夜るの錦をなす花見船 六日庵峯雪」

注) 玉や鑪屋：玉屋も鑪屋も江戸花火の二大花火師。

図は、「大坂下りの女かるわざ」や「竹田大からくり」とかいた幟の立つ芝居小屋が描かれる。
其二 (ボストン美術館)



【中巻】

【以下 10 図の続き絵】。

☆「両国納涼 一の橋弁天」2枚続き。

※右頁の狂歌「不^ふ二^にの雪筑波のしげみ両がけに 夜^よふくすずし両国の橋 半月楼鹿毛麻呂」

※左頁の狂歌「江のしまをこゝにうつせし貝屏風 宮の扉をつたふでむし 嘘言皮成」

図は、人々で埋め尽くされた両国橋。川には納涼の屋形船・屋根船や猪牙船が多く航行している。橋の中央には高札と橋検番の屋根が見える。橋の右側の対岸には材木が立ち並ぶ豎川（立川）辺が見え、その手前には一の橋、更に右には杉山和一検校が江の島弁財天を勧請した江島杉山神社（現東京都墨田区千歳1-8-2）が描かれる。手前の両国広小路には「江戸じまん」の幟が立ち、その右には大山参りで奉納する「奉納大山石大権現」注と書いた板で作った大きな木太刀を持つ人もいる。木太刀は奉納後、他の人が奉納した物をお守りとして持ち帰る習慣があったという。



注) 大山石大権現：大山石尊大権現のこと。大山山岳信仰と修験道が融合した神。

両国納涼 一の橋弁天 (ボストン美術館)

☆「無縁の日中」2枚続き。



※左頁の狂歌「生滅の時^{しょうめつ}はわかたし^{ひと}人の花^{はな}さて両^{りやう}ごくの日^{にち}中の鐘^{かね} 無^む心^{しん}亭^{てい}」

図は、「両国納涼 一の橋弁天」からの続き絵。

標題は歌意を踏まえる。

無縁の日中 (ボストン美術館)



「両国納涼 一の橋弁天」と「無縁の日中」の連続図（すみだ北斎美術館）

☆「新柳橋の白雨 御竹蔵の虹」2枚続き。

※右頁の狂歌「袖笠をかぶる間もなく柳ばし みどりの髪もぬるゝ夕だち 梅子」

左頁の狂歌「竹蔵の堀にも虹の影見えて はや両ごくの橋かとぞおもふ 壺山楼高喜」

図は、手前の神田川に掛かる新柳橋の上で、突然の雨に慌てて番傘を開いている男。着物や布を被って走る男たち。蛇の目傘をすぼめて飛ばされないようにして急ぐ女たち。

左端の男の広げた番傘には「新鳥越」
 （浅草新鳥越町にあった料理屋・八百善のこと）と書かれている。向こう岸には幕府御蔵米を貯蔵した御竹蔵（現両国国技館や江戸東京博物館辺り）の側の御蔵橋（隅田川と御竹蔵をつなぐ入り堀に掛かった橋。現在は無い）が描かれる。



新柳橋の白雨（ボストン美術館）

☆「首尾松の鉤船 椎木の夕蟬」2枚続き。

※右頁の狂歌「美しさ松は千とせを延あがり 延あがり見る舟のたおやめ 千歌園序文」

左頁の狂歌「時まだき見あぐる椎の青空に ところ定めず蟬のしぐるゝ 全詠」

図は、椎の木屋敷（本所の平戸藩松浦家上屋敷。現東京都墨田区横網1-12-9 旧両国公会堂、現刀剣博物館辺）に植えられた松で「落葉無き椎の木」といわれ、本所七不思議の一つであった。その松の下で、船に乗って釣りを楽しむ二人の婦人や笠を被った男たち。船首には供と思われる男も釣り糸を垂れている。

首尾松は、現東京都台東区蔵前1丁目（蔵前橋西詰）の説明板には「この碑から約百メートル川下に当たる。浅草御蔵の四番堀と五番堀のあいだの隅田川岸に、枝が川面にさしかかるように枝垂れていた『首尾の松』があった」とあり、その由来について諸説の一つとして「1、寛永年間（1624～43）に隅田川が氾濫したとき、三代将軍家光の面前で謹慎中の阿倍豊後守忠秋が、列中に伍している中から進み出て、人馬もろとも勇躍して川中に飛び入り見事対岸に渡りつき、家光がこれを賞して勘気を解いたので、傍らにあった松を「首尾の松」と称したという。2、吉原に遊びに行く通人たちは、隅田川をさかのぼり

山谷堀から入り込んだものだが、上がり下りの舟が、途中この松陰によって「首尾」を求め語ったところからの説。」と丁寧に説明している。その他、吉原通いの船の道しるべでもあったという。

首尾松の鉤船 椎木の夕蟬 (ボストン美術館)



☆「**榎寺の高灯籠** 御馬屋川岸乗合」2枚続き。

※右頁の狂歌「しげりあふ色も萌黄のかや寺に 大燭と見ゆる灯籠の影 嘘言皮成」

※左頁の狂歌「ろのおとに雁こきまぜてわたし船 あとのが先へあがるのり合 蜀錦園蔓人」

図は、**榎寺注1**の榎の大木が寺の屋根越しに描かれ、盂蘭盆会に屋根から突き出すように立てられた高灯籠が図からはみ出して描かれる。寺の前の厩河岸の渡し船には、**鳥刺注2**の長い竿を立てた男や僧侶などが乗っている。

船尾では船頭が竿を振り上げるようにしている。図の左上の空には雁が群れ飛んでいる。

注 1) 榎寺：現東京都台東区蔵前3-22-9。榎の大木が、守護神の秋葉大権現により寺の火事を防いだといわれる。

注 2) 鳥刺：鷹匠に仕え、鳥もちを付けた長い竿で鷹の餌になる鳥を捕まえた。



榎寺の高灯籠 御馬屋川岸乗合 (ボストン美術館)

【以下5図の続き絵】

☆「**駒形の夕日榮** 多田薬師の行雁」2枚続き。

※右図の狂歌「むらしぐれはれ行あとの夕ばへに いさむ月毛の駒がたの舟 歌子」

※左図の狂歌「ものゝふの多田の本尊の名にめでて つらをみたさずわたるかりがね 貢船窓春風」

図は、**方形の馬頭観音**を祀る**白い駒形堂**の側の渡し場で、米俵を担ぎあげる人足がいる。駒形堂では二人の参詣人が線香に火をつけて拝んでいる。対岸の空には秋を思わせる雁が前図からの続きで群れをなして飛んでいる。図の手前左には、男女の二人連れが描かれる。

駒形の夕日榮 多田薬師の行雁 (ボストン美術館)



☆「**大川橋の月** 小梅の泊船」2枚続き。

※右図の狂歌「香に匂ふ小梅の里の名にめではしのたもとにとまる苦舟 延齡堂愛人」

「三谷^{さんや}ぼりさしてこぐらし月の船^{おおかわ} 大川^{おおかわ}ばしの秋のよなく^{よなく} 霞楽亭花鳥

図は、隅田川に最後に掛けられた大川橋（現吾妻橋のこと）の橋詰のにぎわいを描く。御休処で旅人が床几に腰を下ろして休み、接客と思われる女が立っている。橋の番屋の前で、長い竿の先で盥を回している芸人の足元には、三人の子供が付きまどっている。対岸には横十軒川の一つの源森川にかかる源森橋が小さく見え、水戸藩の下屋敷の小梅別邸の塀が描かれる。その岸边には帆を下ろした苦船が繫留されている。



大川橋の月 小梅の泊船（ボストン美術館）

☆「其二」1枚。



狂歌「大江戸の自由は月の桂木も 材木がしへよする秋の夜^よ
壺^{つぼ}十郎成安

図は、手前の岸边に木挽き途中の材木が斜めに掛けられ、その脇には石材が無造作に置かれている。近くで塵を掃いている男もいる。

其二（ボストン美術館）

【下巻】

【以下 15 図の続き絵】

☆〈浅草寺入相〉1枚。

狂歌「よしはらの里のわかれのはじめぞと つく浅くさの入あ
ひの鐘 蜀雞園広道

図は、浅草寺本堂の大屋根の先端を描く。三角の構図の先端の鬼瓦の上に、入相の赤い空に逆光で黒く見える鳩（永井荷風は鴉としている）が無数に羽ばたき、妻飾りは真赤な天邪鬼が描かれる。入相の鐘の音で吉原へ出かける人々が想像される。

浅草寺入相（ボストン美術館）



☆「向島の時雨 花川戸の冬籠」2枚続き。

※右頁の狂歌「村時雨雫を木々につたはせて 秋葉の猿は蓑ほ
しげなり 松斎千代住」

「鶯も花かと雪の冬ごもり 江戸ぶし注1うたふ助六が宿注2 壺鶯楼可知輔

注1) 江戸ぶし：歌舞伎「助六由縁江戸桜」で唄われる河東節。江戸浄瑠璃の一つ。

注2) 助六が宿：花川戸のこと。

※左頁の狂歌「真乳山紅葉の日和見定めて 居続はせぬ朝がへりぶね 貢筆庵都世喜」

「紅葉はのあかりをたてゝタぐれは 客をまつちの山の下茶屋 貢章庵穴丸」

図の左には、対岸に小さく三囲神社の鳥居が見え、近くに火除けの神を祀る秋葉権現、その前には待乳の渡しの船着き場にある船が描かれる。秋葉権現の門前には鯉料理の武蔵屋などがあつた。土手沿いには料理屋平吉（葛西太郎とも呼ばれた）の大きな料亭が描かれる。

向島の時雨 花川戸の冬籠（ボストン美術館）



☆「待乳山の紅葉」2枚続き。

※「向島の時雨 花川戸の冬籠」との4枚の続き絵。狂歌は記されない。待乳山聖天は浅草寺分院で、隅田川西岸の小高い丘に建ち、紅葉の名所でもあり、対岸の風景を楽しめる場所として賑わつた。前ページの狂歌に詠まれたように、麓の聖天町には茶屋があつた。図は、小高い丘に建てられた待乳山の赤い鳥居と社殿に向かう二人の男が描かれる。大木が桧をはみ出して描かれる。



待乳山の紅葉（ボストン美術館）

☆「白髭の翟松 今戸の夕烟」2枚

※右頁の狂歌「十かへりとうち詠めても十八の君とは見えぬしら髭の松 瑞籬久世」

※左頁の狂歌「たえまなき瓦煙に淋しさもしらぬ今戸の秋の夕ぐれ 壺琴楼道成」

図は、対岸の白髭神社のこんもりした有名な松の樹が夕焼け空の下に描かれる。手前の今戸辺では名産の瓦を作る二人の職人がいる。川には一羽の都鳥がたゆたう。



白髭の翟松 今戸の夕烟（ボストン美術館）

☆「橋場の田家 隅田の都鳥」2枚

※右頁の狂歌「すめばまた都鳥とて草の戸も 春秋を見る月花の門 青々園」

※左頁の狂歌「夜なくになれてやとにもすみだ河 隈なき月のみやこ鳥まで 緑亀鳥」

図は、『伊勢物語』第九段の「名にしおはばいざ言問はむ都鳥 わが思ふ人はありやなしやと」に因んで、前図に都鳥と白髭の渡し（橋場の渡し）の舟を描いている。橋場辺は田園風景が広がり文人等に好まれたという。束ねた藁を下から受け取って積み上げる男や、

屋根に雪を被った家の前を歩く二人の女と
 供の男、舟の櫓を担いでいる男、鍬や箒を
 担ぐ男たちが描かれる。

橋場

の田家 隅田の都鳥 (ポストン美術館)

☆「真崎の神燈 木母寺の鉦太鼓」2枚

※右頁の狂歌「小夜しぐれふりさけ見れば
 神壇を ほのかにもれるみつのもし火
 和歌浦汐」



左頁の狂歌「音も氷るばかりにけふはすみだ川 雪にうづみし木母寺注1のかね 遊友館
 春道」

注1) 木母寺：梅若伝説に因む寺。京で人買いにさらわれた梅若丸が江戸にまで連れてこ
 られてこの地で夭折し、村人によって弔われた。探し求めて来た母親はわが子の死を知り、
 剃髪して菩提を弔ったという。謡曲「隅田川」でも扱われる。

図は、雪降る中で、橋場村の鎮守である真崎稻荷注2の門をくぐり参詣しようとする男た
 ちや、社殿の屋根をしのぐ大榎が描かれる。
 この木の中間に大きな空洞があり、そこに湧
 き出る水を飲むと靈験に預かるといわれ、そ
 の木の前には高下駄を掃き、笠をかざし、神
 火を持って参詣する男がいる。

注2) 真崎稻荷：石浜神社内（現東京都荒川
 区南千住28-58）に祀られている。真崎は
 橋場の渡しより北の隅田川西岸一帯。

真崎の神燈 木母寺の鉦太鼓 (ポストン美術館)

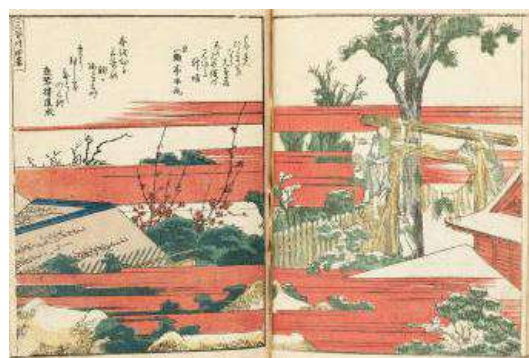


☆「三谷の田家」2枚

※左頁の狂歌「はや春へひとまたぎなる大鳥居 しりくめ縄注の見ゆる神壇 京 一瀬亭
 平丸」

注) しりくめ縄：注連縄のこと。尻久米縄。
 「春をちる三谷の賤が梅ごよみ 雪に対して
 置としのくれ 壺琴楼道成」

図は、真崎稻荷の木製の大鳥居に正月用の
 注連飾を飾っている禰宜（神官）が描かれ
 る。隣の朝日明神と思われる境内の梅が咲い
 ている。冬から春の風景。



三谷の田家 (ポストン美術館)

☆「吉原の終年」の2枚

※右頁の狂歌「たをやめもめでたく越る年の夜にかしくといけし梅の一とえだ 京 寿ののふ子」

左頁の狂歌「太（マ）神楽笛や太鼓の音をそえて 豆まく声のよしはらの里 壺山楼高喜」
図は、吉原の大晦日の行事で、狐の面をつけて踊る狐踊りの門づけの男が御幣と扇を持って、笛や太鼓に合わせて踊っている。側には「御祭礼・氏子中」などと書いた紙を貼った箱状のものに柄をつけた「万度」注を持つ男もいる。図の左には妓楼の入口からそれを見ている男や花魁たちがいる。狂歌にある豆まきも吉原の大晦日の行事。

注) 万度：中臣の祓えの詞を神前で何度も読み、穢れをはらい清める万度祓をした祓串をいう。神職が家々に配り歩いた（「デジタル大辞典」参考）。



吉原の終年（ボストン美術館）

【永井荷風の絵解き】

※永井荷風「浮世絵の山水画と江戸名所」（『江戸芸術論』所収）では同作を以下のように紹介している（「三田文学」大正2年7月1日 第4巻第7号より。岩波書店『荷風全集第十巻』所収の同文とは若干の異同あり）。

「(略)『隅田川兩岸一覽』は三巻より成る。その画面は絵巻物を繰りひろぐるが如く上巻より下巻まで連続して春夏秋冬の四時に渉る隅田川兩岸の風景を一覽せしむ。開巻第一に現れ来る光景は高輪の夜明なり。淋し気に馬上の身を旅合羽にくるませたる旅人の後よりは、同じやうなる笠冠りし数人の旅人相前後しつつ茶汲女のイみたる水茶屋の前を歩み行けり。水茶屋の葭簀は幾軒となく見渡すかぎり半円形をなしたる海岸に連り、その沖合遙なる波の上には正月の松飾りしたる親船、巍然として晴れたる空の富士と共にその橋を聳かしたり。第二図は頭巾冠りし袴の侍、町人、棟梁、子供つれし女房、振袖の娘、物担ふ下男など渡舟に乗合たるを、船頭二人大きな煙草入をぶらさげ舳と艫に立ち棹さしめるの渡しなり。第三図は童児二人紙鳶を上げつつ走り行く狭き橋の上より、船の橋茅葺屋根の間に見ゆる佃島の眺望にして、彼方に横はる永代橋には人通賑かに、三股の岸近くには（第四図）白魚船四ツ手網をひろげたり。桜の花さく河岸の眺め（第五図）は直ちに新緑滴る元柳橋の夏景色（第六図）と変じ、ここに包を背負ひし男一人橋の欄干に腰かけ扇を使ふ時、青地の日傘携えし女芸者二人話しながら歩み行けり。その傍に尻端折の男一人片手を上げて網船賑ふ河面の方を指さしたるは、静かに曇りし初夏の空に時鳥の一声鳴過たるにはあらざるか。時節はいよいよ夏の盛となれり。

中巻第一図と第二図とは本所御船蔵を望む両国広小路の雑踏なり。日傘菅笠相重りて葭簀を張りし見世物小屋の間に動きどよめきたり。さて両国橋納涼の群衆と屋形船屋根船の往来（中巻第三図）を見て過れば、第四図は新柳橋に夕立降りそそぎて、艶しき女三

人袖吹き払ふ雨風に傘をつぼめ跣足の裾を乱して小走りに急げば、それと行違ひに薄べりと浴衣を冠りし真裸体の男二人雨をついて走る。首尾の松の釣船涼しく椎木屋敷の夕蟬(中巻第五回)に秋は早くも立初め、権寺の高燈籠を望む御馬屋河岸の渡船(中巻第六回)には托鉢の僧二人を真中にして桃太郎のやうなる着物着たる猿廻し、御幣を肩にしたる老婆、風呂敷包背負ひたる女房、物売りの男なぞ乗合ひたり。駒形堂の白壁に日脚は傾き、多田薬師の行雁(中巻第七回)に夕暮迫れば、第八回は大川橋の橋袂にて、竹藪茂る小梅の里を望む橋上には行人絡繹たり。岸の上なる水茶屋には赤き塗盆手にして佇立む茶汲みの娘もろとも、床几に憩ふ人々面白げに大道芸人が子供集めて長き竹竿の先に盥廻しゐるさまを打眺めたり。中巻ここに尽く。

下巻は浅草観音堂の屋根に群鴉落葉の如く飛ぶ様を描き、何となく晩秋暮鐘の寂しきを思はせたるは画工が用意の周到なる処ならずや。第二回三圃の堤を見れば時雨を催す空合に行く人の影稀に待乳山(下巻第三回)には寺男一人落葉を掃く処、鳥居際なる一樹の紅葉に風雅の客二人、小紋の羽織にふところ手して逍遙するを見るのみ。冬枯の河原はますます淋しく、白鷺一羽水上に舞ふ処流れを隔てて白髭の老松を眺むるは今戸の岸にやあらん(下巻第四回)。ここに船頭二人瓦を船に運べるあり。やがて橋場の渡に至るに、渡小屋の前(下巻第五回)には寮にでも行くらしき町風の女づれ、農具を肩に煙管銜へたる農夫と茅葺屋根の軒下に行きちがひたり。遙かなる木母寺の鉦鼓に日は暮れ、真崎稲荷の赤き祠に降る雪の美し(下巻第六回)と見るも間もなく、神明の社に來れば(下巻第七回)烏帽子の主神三人早くも紅梅の咲匂へる鳥居に梯子をかけ注連飾にいそがはし。かくて年は暮れたり。画工は正月の松飾整ひたる吉原の廓に看客を導き、一夜明くれば初春迎ふる色里の賑を見せて、ここにこの絵本を完了す

●狂歌絵本『逸題狂歌本』(享和元～文化2(1801～05)横中本一冊。墨摺。画狂老(「人」なし)北斎画。印北斎。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※「逸題」とは、特に表題を付さないものや表題不明をいう。巻頭1オ(筆者注：1ページの表：袋綴じ左側の頁)「松曳にあしを野へにやふみ出さん けふは子日と人の申せは節松嫁々注」の1首があり、続く1ウ・2オの見開きに、北斎による小松を担ぐ仕丁が描かれる。春興の狂歌集で、伯楽側、本町連、三河擣衣連などの狂歌が寄せられている(『新北斎展図録』p325)。

注)節松嫁々：朱楽菅江の妻(1745～1810)。菅江没後、同門を率いた。

●肉筆画「漁師図」(享和2年～文化2年(1802～05)。紙本淡彩一幅。掛幅。北斎画。印亀毛蛇足。73.8×28.4 北斎館蔵)※磯辺の岩に腰を下ろし、釣竿を立てて潮時を待つ漁師。竿の先には白い折り鶴を括りつけている。漁師の横には赤い布で包んだものがある。

漁師図(北斎館)





●肉筆画「美人愛猫図」(享和3年～文化元年〈1803～04〉)。文化中期。絹本着色一幅。画狂老人北斎。印亀毛蛇足。72.5×28.5 シゴ：ウエストン・コレクション蔵)

※立って猫を懐に抱いている女。女の首は前に傾き、襟元から首にかけて着物がはだけている。全体に灰色系統の色合い。襦袢や口紅、猫の首輪は赤色となっている。

美人愛猫図(ウエストン・コレクション)

●肉筆画「野馬」(享和3年～文化2年〈1803～05〉頃か。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。33.2×50.7 北斎館蔵)

※柳の木の際にいる二頭の馬と一頭の子馬を描く。輪郭のない付立と呼ばれる画法で墨画風に描く。酒井抱一の賛「はる駒や柳にならふ麻こゝろ」がある。

●肉筆画「振袖新造図」(享和3年～文化2年〈1803～05〉)。紙本着色一幅。画狂人北斎画。花押。98.5×27.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※吉原で俗に振新と呼ばれる13歳～15歳頃の見習い遊女で、客はとらない。振袖を着て花魁道中の供などをして、客がつくようになると留袖新造となった。

図は、前帯で吉原独特の三ツ歯の下駄を履き、前帯の中に手を入れ、小首を傾げて正面に向く姿。吉原には、年季が開けた30歳前後の番新(番頭新造)もいた。

四良真顔の賛は「汝瀬川か番新ならば 三百両の見うけやあらむもし市川か新造ならば 苦界の幕もしはらくなるへし わか松に額の寿の字を ねひきとは客とねのひに よみはしめけむ」とある。

振袖新造図(島根県立美術館)



●肉筆画「見立三番叟図」(享和3年～文化4年〈1803～07〉)。紙本淡彩三幅対。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。各97.8×27.8 太田記念美術館蔵)

※狂言「三番叟」に登場する千歳・翁・三番叟注の三人を美人に見立てる。図右は千歳の被る侍烏帽子を手にする千歳役の町娘、図中央は「翁」の字を書いた扇を手にする花魁。持った扇の柄から、吉原遊郭扇屋の高級花魁・花扇と分かる。図左は三番叟が舞う時に手にする鈴を持つ商家の若女房という見立てである。

注)「三番叟」：天下太平・五穀豊穰を願う狂言の演目「翁」(式三番)の後半で、本来は「父尉」「翁」の舞に続き三番目に舞うので「三番叟」と呼ばれたが、「父尉」が省略されて二番となっても、呼称はそのまま「三番叟」としている。「千歳」は「翁」の舞に含まれるので、実際は二番である。尉面をつけて鈴を振りながら舞う。

見立三番叟図（太田記念美術館）

●肉筆画「美人立姿」（享和3年～文化4年〈1803～07〉）。紙本淡彩一幅。画狂人北斎画。印 亀毛蛇足。118×30・5 エドモンド・ゴンクール



旧蔵/個人蔵)

※水墨画の趣に、^{かんざし}簪に僅かな朱が加わる。片足を裾から出して立つ美人。着物には鶴と松の模様が描かれる。

図上部には、沢庵の作とされる語と和歌「^{たかあん}仏ハ法をうり ^{そし}祖師はほとけを売り ^{まつ}末世の僧ハ ^{そし}祖師をうる ^{たんじ}汝は五尺のからだを売て衆生の煩惱を休んず ^{しき}色即是空 ^{くう}空即是色 ^{やなぎ}柳はみどり ^{はな}花はくれなみのいろく」と、^{めじろ}目白白山の歌「^{いけみず}池水によなく ^{よなつき}月はかよへとも ^{こころ}心もとめず影ものこさす」が記される。

美人立姿 (https://m.blog.naver.com/より転載：個人蔵)



●肉筆画「ほととぎす聴く遊君図」（享和2年～3年～文化2年〈1802～03〉）。紙本淡彩一幅。北斎画。印 辰印 政。88.7×27.6 すみだ北斎美術館蔵)

※太田蜀山人の賛「君ハゆきわが身ハのこる^{みつあんとん}三蒲団 四ツ手をおふてなく郭公」

「蜀山人」号は享和元年に大坂で初めて使用され、翌年4月に江戸に戻っているところから制作年を推定。

※花魁特有の横兵庫という髷に結った遊女が三つ布団^{注1}に肘をつき、もたれて中空のほととぎすを眺め、その声を聞いている。ほととぎすは、四ツ手駕籠^{注2}に乗って帰った客を暗示しているか。「郭公」と書いてほととぎすと読ませている。

注1) 三つ布団：三枚重ねの敷布団。最高位の遊女が用いた。

注2) 四ツ手駕籠：4本の竹を四隅の柱とし、割り竹で簡単に編んで垂れをつけた駕籠。江戸時代、庶民用の簡素なもの（「デジタル大辞典」による）

ほととぎす聴く遊君図（すみだ北斎美術館）

●肉筆画「見立浅妻舟図」（享和3年～文化2年〈1803～05〉）。紙本淡彩一幅。画狂人北斎画。印 亀毛蛇足。34.8×56.4 日本浮世絵美術館蔵)



※浅妻舟（朝妻舟とも）は、近江国入江村朝妻（現滋賀県米原市朝妻筑摩）の琵琶湖にそそぐ息長川河口に浮かぶ舟に乗っている遊女を指す。

この主題を描くときは、柳下の舟に金烏帽子と水干姿の白拍子が鼓を手前に置いている構図が普通とされるが、この図は三つ布団（高級遊女の蒲団だが、ここではみすぼらしい薄い布団の三枚重ねにしている）を舟に、枕を鼓に見立て、床柱に柳を活けて、柳下の遊女に見立てている。

大田蜀山人の賛は「あたしあなミ よせてはかへる まくら昏君が一筆かきなかつすゝりの海も飛鳥川アイノテキのふの床に岡本のひく手あまたの 客さんが鷺といふ鳥の



それならで 名もむつまじき妹いもと 小鳥にかへし十姉妹 これハ岡本楼のうかれめ 朝妻 何かしかかけるもの一幅と十姉妹といへる鳥に換えしときのはうたとなん 蜀山人書」とあり、新吉原（京町一丁目）の岡本楼の朝妻という遊女に頼まれて記したものとされる。

見立浅妻舟図（日本浮世絵美術館）

●肉筆画「月下歩行美人図」（享和3年～文化2年〈1803～05〉。絹本着色中判一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。98.4×26.3 出光美術館蔵）



※振袖を着た新造が満月の夜にそぞろ歩いている。麻の葉の模様の襟と黒地に藤の花の着物。山東京伝の賛は「なか秋の月にめてゝハ今川の をしえも破る酒宴遊興」とある。

月下歩行美人図（出光美術館）

●肉筆画「富嶽図」（「富士図」とも。享和3年～文化2〈1803～05〉。縦長判。紙本墨絵一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。95.0×29.0 日本浮世絵美術館蔵）

※鋭角的な富士の左側を中心に描く。山頂に雪はなく、墨の濃淡の点苔が特徴的な絵で、席画と思われる。落款の書体や印の暮字部分の欠損の具合が「朝妻舟」とほぼ等しいので、「朝妻舟」と同時期の作と見られる（日本浮世絵博物館所蔵『北斎』p4 読売新聞社 1993年）。

富嶽図（日本浮世絵博物館）

●肉筆画「道成寺図」（享和3年～文化2〈1803～05〉。紙本着色一幅。北斎画。印辰印政。82.3×26.3 個人蔵）

※緋色の長袴と白の上衣を着て、般若の面を着けて舞台上で舞う役者。舞台の柱を抱きつき、打杖を振りあげ、柵に片足を掛けた姿の図。



●肉筆画「行楽帰り図」(享和3年～文化2年〈1803～05〉)。紙本淡彩一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。92.7×34.1 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※享和元年～文化3年(1801～06)説もある(2019年『永田生慈北斎コレクション100選』展図録p40)。同じ永田生慈コレクションの2019年『新北斎展』図録では享和3年～文化2年(1803～05)としている。

※二人の武士が一杯機嫌で陽気に歩いている。一人は扇子を広げ、頭に手をやりながら唄っている。黒い着物は付立注の技法で墨の濃淡を表している。一人は空になった酒の角樽を肩にして、底を鼓のように打つ仕草をしている。背後に紅葉が描かれているので、紅葉狩りの帰りか。享和4年(1804)の『画本狂歌 山満多山』上巻の〈飛鳥山〉にも同様の図を描いている。行楽帰り図(島根県立美術館)右図：拡大図注)付立：日本画で筆にふくませた墨



または絵具と水の加減で、一筆の中に濃淡が生じて種々の効果があがるように、筆をねかせて筆の腹で描くこと。円山派・四条派などの花鳥画に多く見られる(「精選版 日本国語大辞典」より)。

●肉筆画「旭日山水図」(享和3年～文化2年〈1803～05〉)。絹本墨絵淡彩一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。25.5×28.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※画面中央の断崖の向こうに上半分が霧に隠れた朱色の朝日が昇る。付立の手法で墨の濃淡で描いた断崖の背後の山は、霧に消されるように薄く描かれる。断崖の下には帆船が三隻小さく浮かぶ。

※本図は、フランスのジャポニズムを牽引した美術商・サミュエル・ビングの旧蔵品という(『永田生慈北斎コレクション展図録』(p195)。



旭日山水図(島根県立美術館)

●扇面画「波に燕図」(享和3年～文化5年〈1803～08〉)。紙本着色扇面一幅 北斎筆印辰政。23.9×51.1 氏家浮世絵コレクション蔵)

※薄い藍色の波の上を、淡墨で描かれた燕が飛んでいる。

波に燕図（部分：氏家コレクション）

●肉筆画「玉子に蔬菜図」
（享和3年～文化5年〈1803～08〉）。絹本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。24.0×27.0 すみだ北斎美術館蔵



※図の右下から左上に向けて棒状の独活が置かれ、下にぜんまいの茎が三本と玉子が三つ、山椒の葉が置かれている。文政元年（1818）にも「蔬菜と撫子図」で独活を描いている。
玉子に蔬菜図（すみだ北斎美術館）

●屏風絵「獅子図屏風」（享和3年～文化5年〈1803～08〉）。紙本金地墨画。四曲一隻屏風。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。54.0×96.0 東京国立博物館蔵

※金地の四曲の屏風に墨で二頭の唐獅子を描く。左の獅子は蹲って正面を見据え、右の獅子は天空を見上げるように顔を上げる。折られた際に向き合うように描かれる。

獅子図屏風（東京国立博物館）



●肉筆画「吉田駒曳銭」（享和3年～文化5年〈1803～08〉）。紙本着色一幅。摺物。画狂人北斎画。10.2×13.7 すみだ北斎美術館蔵

※五つの吉田銭（馬の絵を描いた穴開きの玩具の銭）が布のようなものの上に置かれている図。

●肉筆画「葡萄」（享和3年～文化12年〈1803～15〉頃か。紙本着色一面。北斎。印亀毛蛇足。26.2×38.0 北斎館蔵）

※墨絵風で僅かに葡萄の実と葉に淡色が僅かに施されている。

葡萄（北斎館）



●肉筆画「葡萄と小鳥と蜘蛛図」

享和3年～文化12年〈1803～15〉頃か。軸装着色。葛飾北斎。印亀毛蛇足。個人蔵

※葡萄の蔓に向かっている雀。葉の下の葡萄の房に向かう蜘蛛の図。

葡萄と小鳥と蜘蛛図

●屏風絵「立美人図」（享和3年～文化5年〈1803～08〉。紙本淡彩一幅。北斎画。印亀毛蛇足。51.9×18.1 フリーア美術館蔵）

※ダラリの帯をして左に横向きで立つ美人（フリーア美術館蔵 『2005 北斎展図録』 p 35 より）。

●錦絵「七福神の獅子舞」（享和3～文化6年〈1803～09〉頃か。横長判着色。かつしか北斎画）

※七福神が大きな獅子舞を担いでいる。獅子頭の左側に毘沙門天が「赤」と書かれた扇を持ち、右側には大黒天が「安」と書かれた扇を振りかざし、前では弁財天が「和」と書かれた扇を持って音頭をとっている。

●錦絵「鱗彌引札」享和元年～文化2年〈1801～05〉。紙本着色。画狂人北斎画。35.6×24.2 東京国立博物館蔵）

※鱗彌（江戸本町三丁目横丁）で作られた化粧品や菓子などの商品の宣伝ポスターと思われる。「代人銅」「鱗彌製」の書入れがあるので、八文（約200円。一文=25円で換算）の商品と思われる。桜や山吹の咲く庭に面した部屋で、盆に菓子を入れ、右手で持ち上げる女の裾元に座る二人の女たち。その側で跪く男の腹がけには㊦の字が染め抜かれている。歌舞伎の「恋女房染め分手綱」の「重の井子別れ」の段で、江戸への輿入れを嫌がっていた姫の気持ちを変えた馬子の三吉に、姫の乳母である重の井が褒美の菓子を与える場面を擬しているという。



鱗引札（国立国会図書館）

●錦絵「花見」（享和元年～文化5年〈1801～08〉頃か。無款。横大判錦絵。24.8×37.0 ベルギー王立美術館蔵）

※物見台で花見をする三人の女と二人の子ども。右に仁王像が描かれる。

●錦絵「女管弦 見立佐保姫」（享和元年～文化5年〈1801～08〉。画狂人北斎画。13.9×28.3 フランス国立図書館蔵）

※左から、部屋の中で尺八を吹く女、琴を弾く女、三味線を弾く女の図。尺八を吹く女は眉を剃っているのが女房と思われる。佐保姫は、奈良の東にある佐保山の女神で、春霞を生み出すといわれるので、この絵も春の趣を描いたもの。

女管弦 見立佐保姫（フランス国立図書館）

添えられた三種の狂歌は、「若水をくミにかゝれる玉琴に かすみ引たす糸遊のそら 高根常雪」、
「佐保姫のふく尺八に鶯も てうし合る春のうた口 有賀亭琴成」、
「佐保姫のけふ引初るさみせん



糸も霞にミゆる春の日 ● (手偏に箴)屋簷成」とあるので、狂歌の内容からの作画である。

●錦絵「風流隅田川八景」(享和3年～文化5年〈1803～08〉)。小判着色8枚揃物。北斎画。版元不明。すみだ北斎美術館蔵

☆〈両国の夕照〉(11.7×17.5)

※両国橋側の料理屋の欄干に手をかけて休んでいる二人の芸者。川には一艘の舟が浮かぶ。図の左には橋が見える。手前の芸者は木の葉模様の帯を後ろでだらりにしている。



両国の夕照 (すみだ北斎美術館)

☆〈待乳の紅葉〉(11.6×17.6)

※待乳山の茶店で、揚帽子(角隠し)を被った二人の女。床机に横座りの女と腰掛けている女。

☆〈ミめぐりのせいらん〉(「三囲の晴嵐」11.5×18.0)

※三囲神社の鳥居脇で、隅田川の堤からの石段の下にある「御休処」で休む二人の女。突然の嵐に傘をすぼめて茶屋にいる女と、床机に腰掛けて空を指差す女。

ミめぐりのせいらん (すみだ北斎美術館)



☆〈梅若の秋月〉(11.4×17.6)

※木母寺の梅若伝説を題材にしたもの。伝説では行方知れずの梅若を探し歩いた母親が、この図では隅田川に浮かぶ舟の中で、頬をついて横になる女と側に寄り添うようにしている子どもを描く。



梅若の秋月 (すみだ北斎美術館)

☆〈しゅびのまつ夕立〉(「首尾の松の夕立」11.3×17.8)

※首尾の松は、浅草蔵前の隅田川沿いにあった松。吉原通いの舟の目標にもなった松という。二人の女が大きな傘に入って、裸足のまま川岸を急ぐ。

☆〈こまかたののうりう〉(「駒形の納涼」11.5×17.8)

※船着場に停めた舟から二人の女が釣りをしている。水面に竿差す女と、竿を上げて釣り針の餌を確かめる女。これから釣り糸を垂らすところか。

☆〈浅草の晩鐘〉(11.5×17.5)

※今戸焼きの土を叩きこねている女が、何かを指差す子どものほうを向いている。

☆〈真崎さんせつ〉(「真崎残雪」11.4×17.7)

※川岸を歩く二人の遊女。一人は扇子を使い、一人は袖を口に当てながら雪道を歩く。

●錦絵「藤下の常磐津稽古」（享和3年～文化5年〈1803～08〉。横大判錦絵。無款。25.2×38.4 ギメ美術館蔵）

●錦絵「茸狩」（享和3年～文化5年〈1803～08〉。横大判錦絵。無款。24.9×38.4 ギメ美術館蔵）

●錦絵「山水図」（「村落図」とも。享和3年～文化5年〈1803～08〉。紙本墨画淡彩一面。画狂人北斎画。印 亀毛蛇足。28.0×59.3 フリーア美術館蔵）

※薄墨を軽く引いたような松林の前の民家。手前の土手に掛け渡した橋。背景の薄く描かれた山など、全体に漢画風の趣のある描き方。

●摺物「鏡餅をさしだす婦人」（享和2年～文化1年〈1802～04〉。紙本着色一幅。画狂人北斎画。13.8×18.6 北斎館蔵）

※花魁に鏡餅を差し出す女性。「千金の春」と狂歌に詠まれている。

●摺物「見立天拝山」（享和2年～文化1年〈1802～04〉。紙本着色一幅。画狂人北斎画。13.9×18.7 北斎館蔵）

※菅原道真が大宰府に流された際、無実を訴え、たびたび山に登り天を拝したという故事に見立てる。図は、縁側で女性が右手を上げて遠くの山を見上げている様子を描く。

天拝山は、現福岡県筑紫野市にある標高257.4mの山。

●摺物「海辺の社前」（「ピーター・モース・コレクション北斎図録」では「行楽帰り」（18.8×51.3）としている。享和元年～文化2〈1801～05〉。寛政12年（1800）の「海辺の社前」の再摺判。横長判着色。北斎画。19.2×52.4 東京国立博物館蔵）

※寛政12年判では「先ノ宗理北斎画」の落款だが、この絵は「北斎画」となっている。二



海辺の社前（東京国立博物館蔵）

人の女が海辺の社前を歩いている。一人は煙管を銜えている。女たちの後ろには荷物運びの男、前には釣り竿を持った二人の子供が描かれる。深川の洲崎弁天の描写。

●摺物「外を見る遊女」（享和2年～文化6年〈1802～09〉。紙本着色。北斎画。14.0×18.8 北斎館蔵）

※遊郭の窓から、遊女が吉原に続く日本堤の土手を歩く人々を見ている。狂歌に「むこふの人を呼子鳥かな」とあるので、客を誘っているとも思われる。

●摺物「潮干狩図」（巨大な朝日判）（享和3～文化2〈1803～08〉。享和4年（文化元年：1804）説あり。横長判着色。画狂人北斎画。19.0×50.8 東京国立博物館/エド・アルト・アソト・キョウネ記念ゾエウヴァ東洋美術館蔵）

※画面左に狂歌の書き入れ、図中央に巨大な朝日、図右に潮干狩り用の籠を持って朝日を眺める女と、箆を海水の中に入れながら箆を持つ子供を見ている女が描かれる。「潮干狩り図」は同画題でいくつか描かれているので、区別のために本図は仮に「巨大な朝日判」とする。



潮干狩り図（巨大な朝日版 北斎大全宗理期より）

●摺物「目黒不動尊詣」（享和3年～文化5年〈1803～08〉。画狂人北斎画。横長判着色。20.2×53.1 すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション蔵）

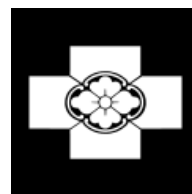
※義太夫の案内に作られたと見られる。「目黒不動」と染め抜いた幟の前には石段があり、その下には親と娘がいる。母親は傘を持ち娘は長振袖。その後ろに中津木瓜注1の紋を染め抜いた風呂敷包を背負った小僧がいる。石垣の前では二人の子どもが独鈷の滝壺注2に入り亀を手をしている。天蓋のついた幟には「目黒不動」と染め抜かれている。



目黒不動尊詣（すみだ北斎美術館）

注1) 中津木瓜：胡瓜や南瓜の切り口をデザイン化したといわれる。図の四方を十字形の太棒で囲んだ紋。この紋から『ピーターモース・コレクション北斎図録』では、おそらく義太夫の案内のために制作されたものとみなされるという。

中津木瓜（ウイキペディアより）



注2) 独鈷の滝壺：目黒不動を創建した慈覚大師が、堂塔の建設地を占って独鈷を投げたところ、たちまち泉が湧き出したといわれる。滝の水は怪我除けのご利益があるという。

●摺物『五大力』（享和3年～文化5年〈1803～08〉。九つ切判。横小判着色揃物。狂歌が添えられる。全5図。画狂人北斎画。揃物5枚はフランス国立図書館所蔵）

※「五大力」とは、女が書いた手紙の封じ目に書き、男への貞操を誓ったり、三味線や煙草入れなどの裏面に書いて厄除けにした。五大力菩薩信仰によるもの。

☆〈難波梅〉（「詠歌美人」とも。14.2×19.0 ベルギー王立美術館蔵）

※難波梅と札に書かれた梅の木の下で歌を詠む遊女二人。「げに花の大將なれやおしなべて まねかぬ客もしたふ梅か香 千猿亭業枝」の狂歌が記される。

難波梅（フランス国立図書館）

☆〈爪弾き〉（14.3×18.9）





※眉を剃った年増の女が立って琴を持ち、その琴を立膝で腕を伸ばして爪弾く娘の図。「吉例はおもき石よりかわらけを かるくうけたるとそのさか盛三番窓初丸」の狂歌が記される。

爪弾き（フランス国立図書館）

☆〈見立源為朝〉（摺物。14.2×18.9 ホノルル美術館蔵）

※弓を引く子と、それを支える年増。日の丸の扇子を持って腰掛けにかけてそれを見ている母親の背後には矢を入れた箆がある。大島に流された源為朝の弓は島人が何人でも引けなかったという伝説の見立て図。「春風にくしらうなりの弓勢も 五人張ほとつよき大風 蝶々亭春友」の狂歌が記される。

見立源為朝（フランス国立図書館）



☆〈見立箆の梅〉（14.1×18.9）

※羽子板の羽根が梅の木に引掛かったのか、刺股を持って取ろうとする女、羽子板を持ち上げて取ろうとする女、坐って左手で羽根の方向を示す女の図。源氏の梶原源太景季が生田の森の合戦で梅の箆に挿して戦った話（『源平盛衰記』37巻）を典拠とする「箆」を劇化した「箆の梅」の見立てという（『秘蔵浮世絵大観 8』p 316）。「春の日を忍びらのむねのさきかけに 名のるハ一の谷のうくひす千林亭面吉」の狂歌が記される。



見立箆の梅（フランス国立図書館）

☆〈見立景清〉（14.1×18.9）

※雪の庭に出て、雪かきのために草箆を持つ女と、首に巻いた頭巾を引っ張る塵取りを左手に持つ女の図。平景清が八島の戦いで三保谷十郎と兜を引き合った故事の見立て。「春またき雪かとはかり三保の谷の しろう咲きたる花の梅かえ 松風亭守人」、「神のミか梅は頭巾のしころ迄 匂ひをとめる花のかけ清 千金亭如蘭」の狂歌が記される。



見立景清（フランス国立図書館）

●摺物「布袋と唐子」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。紙本着色。画狂人北斎画。13.4×28.2 フランス国立図書館蔵）

※布袋の行司で相撲をとろうとする二人の子ども。土俵の外で四人の子が取組を待っている図。5首の狂歌が記される。

●摺物「婦人と小僧図」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。中判着色一枚。画狂人北斎画。20.3×27.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※浅草側の狂歌師・宝市丸の名披露目に配られた摺物。図は、婦人が小僧を連れて歩いている様子を描く。小僧は背中に升を背負い、畳んだ蛇の目傘を肩にしている。青草庵春人、宝市丸、板屋棟成、末廣庵、浅草庵などの狂歌が記される。

●摺物「芸者」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。十二切判着色。画狂人北斎画。20.8×11.0 フランス国立図書館蔵）

※「富岡八幡宮」の額の掛かる鳥居の前にいる立兵庫齧の芸者は妻を持ち上げ、口元に手を当てている。隣の女は三味線箱を抱えている。参詣後、茶屋に向かうところか。「子曰する松のはをりをひきつれて 富か岡辺の春の賑ひ 神葵堂」の狂歌が記される。

富岡八幡宮（現東京都江東区南砂7-14-18）は、深川の富岡八幡宮を最初に勧請した所で、寛永年間（1624～43）に、門前仲町の富岡八幡宮（東京都江東区富岡1-20-3）に遷されたので、元八幡とも呼ばれる。砂村の海が前に広がり、風光明媚な場所であった。但し、富岡八幡宮（深川八幡宮）を念頭に置いている可能性もある。



芸者（フランス国立図書館）

●摺物「絵馬堂の茶屋」（「絵馬堂」とも。享和元年～文化2〈1801～05〉。但し、寛政12年（1800）頃の「絵馬堂」（先ノ宗理北斎画）と別作品。横長版着色。画狂人北斎画。東京国立博物館蔵）

※全紙判もあり、それによれば松岡吉五郎が主催した深川芸者等による舞踊の案内である。

本図は全紙判の半分が残ったもの。大きな絵馬が掛けられた堂で芸者たちが休んだり立ち話をしたりしている。男の首に巻いた風呂敷包みには正月飾りが挿してある。



絵馬堂の茶屋（東京国立博物館）

●摺物「都伝内改名摺物」

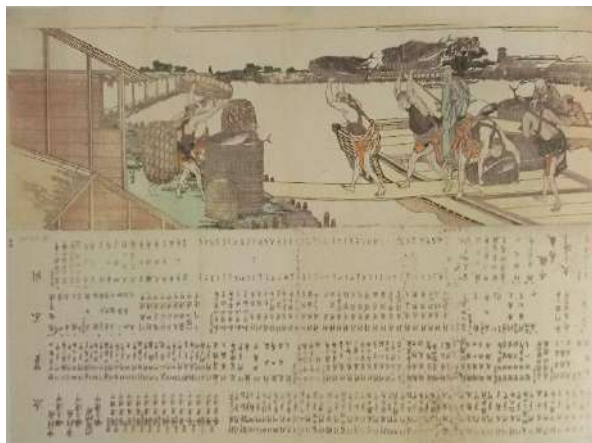
（「都伝内名披露目舞台」とも。享和元年～文化2年〈1801～05〉。全紙判着色。近藤何某ノ図寄而画狂人北斎老夫画。島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館蔵）

※都伝内（歌舞伎座元。都座主宰。都座は中村座の控櫓）が祖父の都伝内小祥忌（一周忌）に臨み、父の名の小伝に改名した挨拶の摺物。老松と竹を描いた鏡板の前に三方に乗せら

れた御神酒が置かれ、その前に「寿」を記した木札を持つ男、烏帽子を被った白拍子や、膝まづいて鉦を鳴らす男役者たちを描く。

●摺物「初鯉の荷揚げ」(享和元年～文化2年〈1801～05〉。『秘蔵浮世絵大観別巻』(講談社)では寛政12年～文化5年〈1800～05〉としている。大奉書全紙判着色。画狂人北斎画。東金屋版か。42.6×57.2 ベルリン東洋美術館蔵)

※図の上半分に、船から荷揚げした鯉を箆に入れ、頭上に掲げて運ぶ男たち。その脇で帳簿に仕入れを記録する男や、鯉を入れた箆を抱え上げようとしている男。船の中にも鯉を入れた箆が見える。日本橋の魚河岸の荷揚げの風景。初鯉一本三両注(約37万5千円)といわれた。



初鯉の荷揚げ (ベルリン東洋美術館)

図の下半分には、折り返して読めるように逆様に参加者の名前が記される。参加者名と共に「セワ(世話)犬のし富八」とあるので柳橋の料亭「犬のし富八」(歌川広重「江戸高名会亭尽 両国柳橋犬のし」に描かれる)で催されたの長唄の会の案内と推測される。

注) 1両=5貫文=5000文=125000万円。1文=25円とした。

●摺物「妙見宮」(「妙見宮参拝」とも。享和元年～文化2〈1801～05〉。横長判着色。画狂人北斎。東京国立博物館蔵)

※北斎が信仰した柳島の妙見堂(柳島妙見山法性寺。現東京都墨田区業平5-7-7)の図。全紙判もある。「東都方角」(天明7年～寛政元:1787～89)の「柳寫法性寺妙見堂の図」にも描かれる。柵に囲まれた「影向の松」の側に立つ女二人と男と子ども。竹馬に乗る子どももいる。右の鳥居に「妙見宮」の額が掛かり、手水舎には「大願成就」と紋を染め抜いた暖簾が掛かっている。紋は、常磐津の木瓜紋(瓜を輪切りにした形という)という。



妙見宮 (東京国立博物館)

●摺物「**桜花に富士図**」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。横長判着色。画狂人北斎画。20.1×55.4 アムステルダム国立美術館蔵）

※図の中央の富士山を包み込むように図の両脇から咲き誇る桜。元は下半分に文字が記されていたものという。



桜花に富士図（アムステルダム国立美術館）

●摺物「**座敷舞踊**」（「**座敷狂言**」とも。享和元年～文化2年〈1801～05〉。大奉書全紙判着色。画狂人北斎画。38.2×53.0〈半裁 19.1×53.0〉 アムステルダム国立美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※深川惣芸者中と川岸山本町芸者中の合同演目案内。上半分に絵、下半分に踊りの演目を逆さに書き、上下二つ折りにする仕様。座敷で立烏帽子を被り、扇子を手に袴を着た客の前で踊りを披露する芸者。三味線を弾く二人の女、唄手の女、鼓を打つ女が座って演奏をしている。障子には、その様子を窺う三人の女の影が映っている。



座敷舞踊（すみだ北斎美術館）

●摺物「**花魁と猿**」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。紙本着色。画狂北斎画。12.7×8.4 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※杭の先に取りつけた板に鎖に繋がれた猿がいる。その鎖の先をつかんで猿を見あげる横兵庫髷の花魁。頭巾を被った狂歌師らしき男も背を向けて猿を見ている。

花魁と猿（すみだ北斎美術館）

永田生慈は「（略）本図は研究者から極めて貴重な一図と見なされるものである。というのは、明治期に入り一般に明石版と呼ばれる複製の摺物が多数版行されており、本図もまた周囲に二重の円窓を記したコピーが作られているからである。彫や色調などの比較研究の材料として、欠くことので



きない一点というべきであろう」と述べている（『ピーター・モース・コレクション北斎図録』より）。

●摺物「菊の花納」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。横長判着色。画狂人北斎席画。日本浮世絵博物館蔵）

※「画狂人北斎」の落款は主に享和から文化期に使われるので、本図は仮にその頃としておく。図は、菊の花と葉をつけた小枝が、画面に横たわるように描かれる。「日の夏に恵むや菊の花納」の句が記される。

●摺物「大黒 弁天 忍びす」（享和元年～文化2年〈1801～05〉。横長判着色。画狂人北斎画。日本浮世絵博物館蔵）

※「画狂人北斎」の落款は主に享和～文化期使われるので、が、本図を仮にその頃としておく。図は、手拭いをかぶって搔卷風の布を背負い、小槌を手にした男を大黒に見立てる。隣には弁天に見立てた遊女がいる。その二人を恵比寿に見立てた男が、嬉しそうに見ている。男は扇子を頭に当てている。前には笹の上に鯛が置かれ、三人の背後には藤を描いた屏風が置かれている。「大黒と弁てん太夫 行連れて 忍びすの宮に遊ぶ春の日 野道喜三二」の狂歌が記される。

●摺物「仏像鍍金」（享和元～文化5〈1801～08〉。紙本淡彩。長判。北斎席画。14.8×32.5 日本浮世絵博物館蔵）

※横になって手で頭を支える仏陀の涅槃像に金箔を貼り付ける三人の職人。細い線によって描かれている。作業用の箱には山形に三の文字が描かれている。

席画とあるところから鍍金現場に北斎がいたのではないかと、また北斎の父とされる仏師の仏清との関係があるとする見方もある（『代表作シリーズ大揃い 北斎 日本浮世絵博物館所蔵』 p 103）。

●摺物「天神シリーズ」（享和元年～文化5年〈1801～08〉。仮題。菅原道真伝説に見立てたもの。各図に狂歌が添えられる。九ツ切判着色揃物。画狂人北斎画。フランス国立図書館蔵）

☆〈渡唐天神〉（14.0×18.9）



※膝をつく男と、梅の小枝を持ちながら立って男を見る女（実は天神）の図。天神（道真）が配流先の太宰府から中国・南宋に渡り禅僧・撫順師範に学んだという説話から、室町時代以来「渡唐天神」図が多く描かれたという。「咲みつる梅かかん家や春風に 匂ひのわたるもろこしか原 桜枝鞠」の狂歌が記される。

渡唐天神（フランス国立図書館）

☆〈童子天神〉（14.1×18.7）

※梅の花を取ろうとする子を抱き上げる女。その後ろに坊主頭の供の奴がしゃがんでいる。「筆学ふ子等も一枝折はやと ミな手のあかる梅の木のもと 蜀江亭綾丸」、「はる風のこちのよい子と手をだして花に指さす庭の梅かえ 酒蔵人」の狂歌が記される。

童子天神（フランス国立図書館）



☆〈ざくろ天神〉（13.9×18.7）

※火鉢を挟んで話す禿と、煙管と煙草盆を持つ遊女の図。遊女の髪は洗髪後か、髷に結われていない。ざくろ天神は、菅原道真の怨霊が、食べた柘榴を吐くと炎になったという伝説を踏まえたもの。遊女は長煙管を持ち、口から炎ならぬ煙を長く吐いている。赤々とした日にかけてられた薬缶もある。「とりあけて天神わけ注に結てまし 風にみたるゝ青柳の髪 山里亭東士」の狂歌が記される。

ざくろ天神（フランス国立図書館）



注) 天神わけ：髪を左右に束ねた天神髷のこと。

☆〈●●天神〉（13.8×18.6）

※前帯で長煙管を持ち立て膝の年増に、手拭いを被った女が盆に乗せた鏡餅を跪いて差し出している。正梅亭芳輔「長閑なる風の手習する子等の 学ぶ一じは千金の春」、蘭奢亭香保留「榮花をば自由自在につくし瀉 さいふのうちの千金の春」の狂歌が記される。

●摺物「二十四孝 文帝事賢母」（享和元～文化 6〈1801～09〉）。紙本着色。画狂人北斎画。13.0×18.4 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/大英博物館蔵）

※『二十四孝』は、中国において後世の範として、孝行が特に優れた人物 24 人を取り上げた書物（ウイキペディアによる）。

※女が盆に乗せた椀を差し上げて、客間の男に持ってきたところ。男は座敷で煙管を使いながら三味線を弾く芸妓を前にしている。芸妓は障子越に背中がシルエットで描かれる。

床には大盆三つに食べ物の入った椀が置かれている。狂歌「門松のうちときよめて 神主も冠 かつむけ祝ふいせ海老 袖香楼床世」「給仕して御膳あけはや年徳も 八将神の母とこそきけ 千秋庵」が記される。

●摺物「六歌仙」（享和 2 年～文化 1 年〈1802～04〉）。横長判紙本着色一幅。画狂人北斎画。19.9×38.4 北斎館蔵）

※高台の板張りの舞台に六歌仙が集まって、扇や紅葉の飾り物を作っている。右後ろに立つ小野小町は檜扇を翻し、左の喜撰法師は、眼鏡をかけて筆を縦にして両手でつかんでいる。他に、在原業平、大伴黒主、文屋康秀、僧正遍照がいる。

●摺物「大工道具と娘」（「大工道具」とも。享和 2 年～文化 6 年〈1802～09〉）。紙本着色。北斎画。13.3×18.2 北斎館蔵）

※振袖姿の娘が墨壺を持って腰掛けている。その前に手斧と木槌が置かれている。新年の大工の仕事始めを表した。

●摺物「桜花の掃除」（享和3～文化2〈1803～05〉。3月。紙本着色。無款。38.4×54.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※常盤津門弟中と岸沢門弟中の合同稽古案内のもの。桜が咲く中、三人の官女が掃除をする仕丁を眺めている図。図の下半分に逆さに常盤津の案内文が記されている。

●摺物「柳下美人図」（享和年間～文化年間〈1801～18〉。十二切判着色。画狂人北斎画。21.3×9.3 フランス国立図書館蔵）

※柳の下で高下駄を履き、蛇の目傘を持ち、右手で肩掛けを握る女と、「の」の字を染め抜いた緑の風呂敷を担ぎ、蛇の目傘を畳んで肩に掛けた坊主頭の小奴の図。「春雨のをとなしやかにミる女ハ しつとりものゝこふりまでよし 紀画閑多」の狂歌が記される。

柳下美人図（フランス国立図書館）



●摺物「定家文庫と広蓋」（享和年間～文化年間〈1801～18〉。九つ切判着色。画狂人北斎画。13.7×19.1 フランス国立図書館蔵）

※懐紙と熨斗に松の枝を配した正月の飾り物を入れた広蓋（衣服などを入れる蓋）を置き、その右に、底に厚紙を敷き織物で包んで紐を付けた、持ち運び用の蓋をした箱のある文庫（定家文庫という）を描く。正月を寿ぐ絵。「結ひにし定家文庫のひもかゝミ 今朝とけとより明けの初春 三條明足」、「広ふたの松に習はて鶯は ねをつゝますにはりあけてなけ 月の屋成文」の狂歌が記される。

●摺物「三都美人 京・江戸・大坂」（享和年間～文化年間〈1801～18〉。九つ切判着色。各平均 13.5×18.5 画狂人北斎画。フランス国立図書館蔵）

※右図から、三方に紙幣を持つ十二単衣の京都の官女の趣の女、中の図は、紙を鋏で切ろうとする江戸の武家の奥方の趣の女、図の左には、尺八を腰に挟み、梅の小枝を持つ大坂の町娘の趣の三人の女を描く。「次第く日あしものひて七五三なわのよりもあまる大江戸の春 古今テイ由良人」、「引初る霞のミすやむらさきの庭そのとけき春の日扇 千箱指方」、「難波津の梅のかをりも高麗のはしくまでも匂ふ春風 万度亭免丸」の狂歌が記される。



三都美人 京・江戸・大坂（フランス国立図書館）

●摺物「六女草紙合」（享和年間～文化年間〈1801～18〉。九つ切判着色摺物。画狂人北斎。すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/ベレス・コレクション）

※『狭衣物語』『蜻蛉物語』『更級日記』などを含んだ全 6 図であったか（『秘蔵浮世絵大観ベレス・コレクション』による。p263）

☆〈土佐日記〉（13.9×18.4）※屋根船に乗った二人の女性が、懐紙が舞って海へ落ちていくのを手を伸ばしてつかもうとしている図。紀貫之『土佐日記』元日条の、元日に新年の健康を祝って飲む白散注を舟屋形（注：舟に作った屋根付きの部屋）に挟んでいたところ、風で飛ばされて海に落としてしまった話を題材にして、白散ならぬ懐紙に見立てた図。記された歌に「佃島」とあるので、背景の島は佃島である。「初日影納む佃島の屋ね舟に去年とことしのにき（二季）もかけたり 昔堅人」、「はなかミを出すと湊の春風に 吹ならされて白く散せり 千首楼」の狂歌が記される。

注）白散：新しい年の健康を祈って、屠蘇酒などとともに元日に服用する散薬。白朮・桔梗・細辛などを刻み、等分に調合したもの（「デジタル大辞林」による）。

☆〈狭衣〉※袴を着た男装の女性が正坐している姿と、それを見ている女たちの図。

●摺物「七遊女」（享和年間～文化年間〈1801～18〉）。九つ切判着色揃物。かつしか北斎画。フランス国立図書館蔵）

※全国の有名な廓の遊女を描く。狂歌が添えられる。

☆〈京 嶋原〉（13.5×18.5）

※遊女が朱塗りの盃で酒を飲みながら、やり手婆に朱書きで手紙を代筆させている。「千金の花のすかたの風俗に こかなものなる志ま原の君 神葵堂藤人」の狂歌が記される。

京 嶋原（フランス国立図書館）



☆〈江都 吉原〉（13.5×18.5）



※横兵庫髷の遊女と年若い遊女が絵草紙を読んでいる。

「客人の噂いふまに早春の きたにハ向ふよしわらの里 絵意閑多」の狂歌が記される。

江都 吉原（フランス国立図書館）

☆〈大坂 新町〉（13.5×18.6）

※遊女が尺八を吹

き、禿が側で胡弓を弾いている。

「古さとのつとになしたや難波津の 名におふ梅の袖のうつりが 涼窓亭裏風」の狂歌が記される。

大坂 新町（フランス国立図書館）



☆〈駿河 二丁町〉（13.6×18.3）

※遊女が扇を逆様に持って投扇遊びをしている。富士山を描いた扇を逆さに持って富士山を暗示する。「白妙に可笑するかのふしひたひ 霞たな引春の色里 九霞亭明輔」、「傾城のもてる扇を不二のねと おみたてなされ春の若もの 紀津々丸」の狂歌が記される。



駿河 二丁町 (フランス国立図書館)

☆〈伏見 色里〉 (13.6×18.4)

※遊女がうつむき加減で膝の上の三味線を爪弾いている。長唄の本のようなものが前に置いてある。「門松に千代をこめたるくれ竹の ふしみのさとにかさるよそほひ 亀吹亭寿」、「千代をへる竹のふしみの傾城に のひる日あしの春のうらゝか 陽有亭繁喜」の狂歌が記される。

伏見 色里 (フランス国立図書館)

☆〈奈良 木辻〉 (13.8×18.1)

※鹿と紅葉が鮮やかに描かれた打掛けに見入る遊



奈良 木辻 (フランス国立図書館)

女。立田姫と紅葉を暗示しているか。「よそほえる春の木辻の



全盛も 梅のか禿のさきたちて見ゆ 廣沢館光丸」、「傾城の雪のはたにハ大和人 こころもとける春の長閑さ 聖賢堂守道」の狂歌が記される。

☆〈長崎 丸山〉 (13.7×18.4)

※出島での遊女とオランダ人の出会いを描く。椅子に腰掛けて蛇皮線を弾く蘭人と、それを聞く遊女。オランダ人相手の遊女は蘭館行き (出島行きとも) と呼ばれたという。「この国のなミやしたはんから人も やはらくはるのゆふし御けんに 山水舎里近」の狂歌が記される。

長崎 丸山 (フランス国立図書館)



●摺物「薪採り」 (享和年間～文化年間〈1801～18〉。横長判彩色。かつしか北斎画)

※五頭の牛のうち、四頭の背中に薪の束が乗せられている。一頭の背に女が乗っている。五人の薪採りの女性が牛を操っている。二人の女性の頭には薪の束が乗せられている。図左の小山の陰にも四人の女性が薪を頭に乗せている様子が小さく描かれている。

●摺物「生け花の材料」 (享和年間～文化年間〈1801～18〉。横長判彩色。かつしか北斎)

※三輪の荷車の置き台に花瓶が乗せられ、その脇にも挿花用の花瓶が置かれている。図左には、花鉢と花と小枝が置かれ、水差しが盆に乗せられている。

●摺物「水鳥と鮑」（享和年間～文化年間〈1801～18〉）。九つ切判着色。摺物。画狂人北斎画。13.9×19.3 フランス国立図書館蔵

※仰向けて首を曲げて置かれる水鳥と傍らの鮑。青菜と桜の花びらが添えられる。西洋画風の静物画となっている。「水鳥のひつこむ頃は雪解して 岸のあしをも洗ふしら波 雪の屋鳥兼」の狂歌が記される。寛政12年（1800）にも摺物「鴨と鮑」（無款）を描いている。



水鳥と鮑（フランス国立図書館）

●摺物「凧」（享和年間～文化年間〈1801～18〉）。九つ切判着色。摺物。画狂老人北斎於而天王橋之辺ニ写。14.0×17.3 フランス国立図書館蔵

※鳶凧のような羽のある凧と操り具の図。依頼主の峯巒堂柱仲住の狂歌が添えられる。天王橋は浅草橋から浅草への通り（現江戸通り）が鳥越川と交わる所に架けられた小さな橋で、正式には鳥越橋という。この橋の側は天王町と呼ばれる一角があった。依頼主が住んでいた所か。「青柳のいとけなき子も春くれハ 凧になひける風の手遊び 峯巒堂柱仲住」の狂歌が記される。

文化1年（1804）2月11日～ 甲子 45歳 葛飾北斎、画狂人北斎、錦袋舎、勝春朗（版

元が以前の号を使用）、時太郎可候、北斎、画狂老人北斎、印：亀毛蛇足、花押、辰、

政：こと（34歳）、（富之助：18歳）、阿美与（16歳）、阿鉄（14歳）、阿栄（7歳）

【音羽護国寺で大達磨を描く】

★4月13日、音羽護国寺（現東京都文京区大塚5-40-1 五代将軍徳川綱吉の生母桂昌院の願いにより創建した祈願寺）の3年に一回の本尊開帳の最終日、120 畳大の達磨半身像を描く。四斗の酒樽に入れた墨汁を藁箆に先につけ、麦藁を敷いた上に置いた大厚紙に、柄を肩に掛けて描く（中村文蔵〈子寅〉がその様子を記録したものを大田南畝が『一話一言』寅〈巻四十一〉に書写し〈文化一年四月十三日条〉、それを飯島虚心が『葛飾北斎伝』で紹介している。p 68～69）。

※中村文蔵の「北斎大達磨紀事」

「文化甲子三月。護国寺観音大士啓龕。縦人瞻拜。士女雲集。率無虚日。四月十三日。画人北斎、就其堂側之地、画半身達磨、接紙為巨幅、下鋪烏麦稻、以襪紙底、紙大百二十筵、画者壞腎褰裳、縦横斡旋、意之所向、筆亦随之、盖胸中已有成局、不持擬議而為也、画成、觀者環立、嘖々賞歎、然唯見一斑、未能尽其情状、登堂俯瞰、

所見始全、口大如弓、眼中可坐一人、其所用四斗酒榼一、銅盆二、皆以貯墨、水桶一、以貯水、為筆者凡六、而藁箒居三、大者如疊、小者如瓶、棕箒二、地膚箒一、皆以代筆（右中村文蔵所記）」（『葛飾北斎伝』の引用文に付された訓点に従った仮の訓読は筆者による）

筆者訳：文化甲子の年の三月、護国寺観音大仕の厨子の開帳があった。うやうやしく拝み、人々が多く集まり、皆心をむなしくして精進する日。四月十三日、画人北斎が、護国寺の境内で、半身の達磨を画いた。紙を継ぎ足し大きくして、麦藁をきちんと下に置き、それに紙を置く。紙は百二十畳、腕をまくり袴をたくしあげ、縦横に動き、心に思うところ、筆もそれに従う、心にすでにイメージがあるのか、なんの疑いも持たずに描いた。絵が出来上がり、観音が出現した。人々がそれぞれ賞歎の声をあげる。だが一部しか見ていないので、全体の姿が分らない。そこで堂に登って上から見ると、ようやくその全体が見えた。口は大きく弓のようであり、目はその中に人が一人座れるようである。使ったのは、四斗の酒樽を一つと、銅盆二つに、墨を溜め、水桶一つに、水を溜め、筆は全部で六本で、藁箒が三本おいてある。それは大きなもので一斛の酒樽ぐらいで、小さなものでも酒を入れる瓶ほどだ。棕櫚の箒が二本、地面を掃く箒が一本である。以上、（中村文蔵の記すところの）代筆。

※『増訂武江年表』（斎藤月岑著・嘉永元年脱稿・同年三年刊の『武江年表』を、朝倉無声が増訂版としたもの。大正元年。国書刊行会）の文化元年条では、「三月より護国寺観音開帳あり。四月十三日画人北斎本堂の側に於いて、百二十畳敷の継紙へ半身の達磨を画く」とある。

※ボストン美術館蔵「護国寺達磨略図」（紙本墨画一幅。文化元甲子四月十三日席上 画狂人北斎画）は、俳人涼雲斎抱山により縦長紙（84.6×27.2）に貼り付けられ、「文化改元の初夏 護国精舎の庭上に於て百七十畳の仏像を筆せり 精神海洋をも渡りぬべし」と記されている。更に色紙の下には、「豎十壺間（約20m）幅八間（約14.5m）凡百七十六畳 筆三俵の藁を以し 墨を斗る事三斗余 隅に稷欄を用」と書いた紙が貼られている。伝えられる120畳ではなく170畳であったのだろうか。堤等琳（三代目）がこの様子を見ていて驚愕したという逸話がある。



護国寺達磨略図（ボストン美術館）

【米一粒に雀二羽と大紙に大馬と布袋の大画を描く】

★「其の後本所合羽干場（現東京都墨田区錦糸2丁目～3丁目辺）に於きて、前のごとき大紙に、馬を画き、又両国回向院にても、布袋の大画を画く。此の時仮に名を改めて錦袋舎といふ」（『葛飾北斎伝』 p 69。ルビ、句読点は筆者による）。また、その時に、米一粒に雀二羽を描くという（『葛飾北斎伝』 p 71）。

★『鍾馗乗馬の大画』（年代不詳。井上和雄『北斎』p22で小林文七の旧蔵として紹介している。

●黄表紙『御伽山崎合戦』（角書「真柴久吉 武地光秀」中本二冊。合本一冊。勝春朗画。西村屋与八版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※豊臣秀吉を称揚する内容のため、文化元年に絶版処分に遭い、記録上でのみ知られた黄表紙と言われ、近年発見されたものという。また、序文によると、挿絵は「画狂人北斎のむかし春朗なる頃試毫」したものとしている（2019年『永田生慈北斎コレクション展図録』p203）。

『御伽山崎合戦』（島根県立美術館）



※本能寺の変で、武地光秀が小田春永を討ち、真柴久吉が主君の仇を取るといふもの。題箋には、「御伽山崎合戦 三冊 勝春朗」とあると

いう。また、棚橋正博『黄表紙総覧 後編』（青裳堂書店 1989年）によれば、文化元年の黄表紙『前編仇報孝行車』（南柚笑楚満人作。歌川豊国画。西村屋与八版）に載る広告には「『真柴久吉/武地光秀/御伽山崎合戦』全二冊 勝川春朗画」とあるとされる（『新北斎展図録』p314）。

●読本『石言遺響』（角書「小夜の中山」。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。全10編。国立国会図書館蔵）

※馬琴の自序に「文化新元甲子年暑月龍生日注書於飯頼山之東翠竹深処」とある。

注) 龍生日：旧暦5月13日で大安の日をいう。飯頼山は、李伯がこの山で杜甫を嘲った伝説がある。中国唐代の長安付近の山といわれる。

●狂歌絵本『晦日葛籠』初編（一冊。画狂人北斎画。方六庵白水撰）狂歌本説、俳諧本説あり（『年譜』による）。

●黄表紙『娘仇討陸友綱』（二冊。虚呂利作。時太郎可候画。岩戸屋版。国立国会図書館蔵）

※『恩愛猿仇討』（文化元年。虚呂利作。歌川豊国画）の後編。『猿仇討』と『陸友綱』の合巻『両面出世姿鑑』がある。

●咄本『年男笑種』（角書「落嘶」。時太郎可候画。紀尾佐丸作。版元不明。書名は「落咄福寿草」という説あり）

●咄本「はなし亀」（角書「新板流行」。一冊。時太郎可候画。十口舎富久助作。鶴屋金助版）

●肉筆画「七夕図」（この頃か。紙本着色一幅。北斎画。印亀毛蛇足。95.8×28.0。清明会館蔵）

※若い女房が懐紙に桔梗を乗せ、誰かにさし出すように持ちながら、すらりと立っている図。賛は「穂に出よ こよひ ねかひの いとすゝき 万葉注」とある。七夕の日には、和歌に梶の葉を添える風習があるが、桔梗が描かれているので、画題の「七夕」は適当でないとの説もある（『2005 北斎展図録』 p 330）。

注) 万葉：二世皐月平砂（1736～1813）。俳人。江戸二十歌仙の一人。
七夕図（清明会館）



●肉筆画「東方朔と美人図」（紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。37.1×37.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）



※東方朔は、中国前漢の武帝に仕えた文人。長寿をたもつという西王母の桃を三つ盗んで食べて仙人になったという。図は東方朔が、恐縮そうに頭に手をやり、右手で大きな朱塗りの盃をさしだしている。娘が銚子をかたむけ、酒を注ごうとしている。二人の間には皿に桃が三つ乗っている。菅原長根（芍薬亭長根：1767～1845）の賛が記される。

東方朔と美人図（島根県立美術館）

●肉筆画「福助図」（この頃か。紙本一幅着色。画狂人北斎画。花押。26.2×42.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※享和3年2月頃より浅草田圃（現東京都台東区千束2丁目あたり）の太郎稻荷への参詣が流行し、ここで「叶福助」の泥人形が造られたことから、一般に招福の縁起物として人気を呼び、知られるようになったと、『北斎クローズアップⅢ』（永田生慈 東京美術 P83）で述べていることから、あるいは一応享和3年の作か。

図は、頭が非常に大きく、目も大きく描かれた福助が、「叶」の紋を染めた袴を着て、扇子を持って神妙な顔つきで座布団に座っている。

大田蜀山人の賛「叶に休詳 福不可量 御番衆注の頭も高く太平の時に逢たり叶福助 蜀山人」とある。

「吉祥叶い、福多く、御番衆のお役目めでたく、太平の時をよぶ叶福助」といった意味か。

注) 御番衆：幕府・朝廷・大名家などで、殿中や館に交代で宿直・勤番して警備や雑務に当たった者（『大辞泉』による）。
福助図（島根県立美術館：永田コレクション）



●肉筆画「柿本人麿図」（紙本着色一幅。画狂人北斎画。印辰印政。37.4×44.4 エドアルト・キヨッソーネ（ジェノヴァ）東洋美術館蔵）

※折鳥帽子を被って口ひげを生やした人麿が、右手に赤い柄の筆を持って右膝を立てて構想を練っている様。足元には、赤い硯台に黒い硯が置かれている。便々館湖鯉鮒が人麻呂の歌「ほのくとあかしのうらの朝きりにしまかくれ行く船をしそ思ふ便々館湖鯉鮒書」を記している。

柿本人麿図（エドアルド・キヨッソーネ東洋美術館）



●扇面肉筆画「猿丸太夫」（扇面着色一面。葛飾北斎筆。印辰印政）

※猿丸太夫の「おくやまにもみぢふみわけなくしかのこゑきくときぞあきはかなしき」（百人一首）の歌を踏まえた図。二本の太い幹の向こう側に腹ばいになって、頬杖をついて何か思案している様子の猿丸太夫。その周りには紅葉が散り敷いている。

●肉筆画「菊之図」（この頃か。2016/9月 MAINICHI オークションに出品されたもの。紙本淡彩。軸装一幅。北斎図。印辰印政 91.9×25.7 個人蔵）

※刷毛で墨を薄く摺ったように描いた岩に、菊の花を配している。花の花芯には薄い朱色を施す。真贋不明。

※北斎は、他にも「菊之図」を弘化4年（1847）に描いている。同じように応為も弘化5年に「菊之図」を描いている。

●摺物「休茶屋」（「御休所 越前屋」とも。7月23日頃。横長判着色。画狂人北斎画。19.3×52.7 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館蔵）

※大山詣の一行を描く。馬上に島田髻の娘。笠を被った旅人。馬子が茶を飲んでいる。馬の後ろでは荷物を整える男。図の左には「御休所 越前屋」と書いた看板のある茶店で、腰掛けて店の女から茶の給仕を受ける男の背中には大山詣に奉納する大きな木太刀がある。木太刀は奉納後、誰かの物をお守りとして持ち帰る習慣があったので、参詣の帰りだろうか。

※画中の口演書き（公演案内と出演者名の書込み）により、七月二十三日に常磐津美代太夫を催主とした浄瑠璃床開き注を両国尾上町中村屋平吉方で五ツ時より催す案内と分かる。左隅に文化元年甲子とある。上下反転の図で口演は下半分に書かれる（口演の文字を取った後摺もあるという）。本図の墨摺下絵がある（19.5×53.3 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

注）床開き：浄瑠璃で太夫が語ったり、三味線を演奏したりする舞台上の場所を床という。すなわち、浄瑠璃開催をいう。ちなみに、太夫が語るための義太夫本を床本という。

●摺物『鼠シリーズ』（仮題。九つ切着色揃物。画狂人北斎画。フランス国立図書館蔵）

※鼠の語に因んだ風俗を描いたシリーズ。狂歌が添えられる。

☆〈鼠木戸〉（14.1×18.8）

※鼠木戸は、屈まなければ入れない芝居小屋の小さな入口をいう。この入り口で芝居の口上や役者名を語って客の興味を引く男が、赤い提灯の下がる入口の床几しとうぎの上に座っている。男の口に当てている扇子には「大入」と書かれている。その前で二人の娘が面白そうに立っている。一人は袖を口に当ててほほ笑んでいる。「門松の太夫おおいり棧敷も人の手にわたるをいそぐ鼠木戸 吳機捌」、「皆人もはめをはつしていはふなり 戸さゝぬ春の福鼠木戸 茄子種数」の狂歌が記される。



鼠木戸 (フランス国立図書館)

☆〈鼠ごっこ〉 (13.4×18.9)

※梅の木に見える料亭の座敷で芸者と男がくつろいでいる。芸者の一人は三味線を弾き、もう一人の芸者と男が鼠ごっこをしている。鼠ごっこは、手の甲をお互いにつまんで重ねる遊びで、男は相好を崩している。三人の背後に屏風が置かれ、右下に「画狂人北斎」の落款が記されている。「鼠こつこいたちこつこと早蕨さわらびの手を出したる四方よもぎの山やまく 勝々亭山人」の狂歌が記される。



鼠ごっこ (フランス国立図書館)

☆〈鼠なき〉 (13.4×18.5 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※鼠なきは、遊女が客を招くときに口をすぼめて鼠の鳴き声をまねることをいう。遊郭の座敷で、花魁の一人が襖ふすまに寄りかかって、客からの手紙と思われるものを読んでいる。もう一人の横兵庫よこひら髻まげの花魁は、簪かんざしを畳の上に放り出している。側の禿かむろが、それを見ている。起きぬけの三つ布団があるので、客がまだ上がらない明け方の風景という。

「初はつふみを開くや庭の梅うめか枝えに 繰くり返かえしきく鶯うぐいすのこゑ 和薬物成」、「今朝春けさハ来きへきしらせのたゝみさん かそへる門かどの松葉まつばかんさし 椎柴道」の狂歌が記される。



鼠なき (フランス国立図書館)

☆〈鼠とらず〉 (13.8×18.8)

※遊女お遊びばちが大火鉢おほひらの灰を火箸かぢで掻き混ぜている。その遊女の肩を両こぶしで叩いている男。部屋には注連飾しめ飾りが下がり、火鉢の脇には双六すごろくの紙が広げられている。側で子どもが猫を抱いているが、猫は鼠を獲る気もない表情で抱かれている。正月の風景。「金蔵きんぞうの番につけはや年男 鼠とらずねずみとらずのかたき御備おごない 山里亭東士」の狂歌が記される。

鼠とらす (フランス国立図書館)

☆〈しろ鼠〉 (13.3×18.9)

※しろ鼠は、大黒天の使いである福の神をいう。注連飾りの下がる遊郭の部屋で、一人の遊女が硯箱と大福帳を前にして、後ろの遊女に何かを話しかけている。禿も側にいる。福を運ぶ客が置いていった大福帳はしろ鼠の象徴か。

「大黒の鼠やはりのきせるまで 今朝年玉につかはしめなり 緑亭玉峨」、「おいらんの白狐出てよろこはむ 大黒舞をまはすたびにハ 千首桜」の狂歌が記される。 しろ鼠 (フランス国立博物館)



●摺物「隅田川」 (この頃か。横長判着色。画狂老人北斎写。25.8×70.8 ハーバード大学サッケー美術館蔵)

※超横長判の俯瞰図。図の中央に隅田川を大きく横に描き、東岸から西岸を眺望する。

図左には両国橋が描かれ、その先に富士山が見える。橋の対岸の右には浅草寺の五重の塔も見える。中央には今戸の瓦焼きだろうか、白煙が二筋上がっている。図の右には凧が二つ空に上がっている。図の此岸には田圃が広がっている。川には船が数艘浮かんでいる。



隅田川 (ハーバード大学サッケー美術館)

●摺物「鶏図」 (11月。画狂老人北斎画。大大判着色摺物)

※二匹のひよ子と親鳥の図。

●摺物「梅と鶏図」 (11月。画狂老人北斎画)

※五代目岩井半四郎 (俳名：杜若) の中村座顔見世での襲名に配られたもの (『年譜』による)。

●摺物「太郎稻荷の図」 (画狂人北斎画) 図中の幟に年記があるという (『年譜』による)。

●摺物「正月の台所」（無款。着色。13.6×18.2 すみだ北斎美術館蔵）

※図左の壁に新巻鮭が下げられている。湯を沸かしている茶釜から湯気が立っている。その前で柄杓を持って茶の用意をしている女に子どもが茶碗を差し出している。子どもの左には年増が立っている。図左には狂歌が記されている。

●摺物「三田初春の渡し舟図」（春。画狂人北斎画）画中に「甲子春」とある（『年譜』による）。

●摺物「蹴鞠の二美人」（画狂人北斎画）「子のとし」とある。実亭真盛ほか1名の狂歌がある（『年譜』による）。

●素描「髪すき」（この頃か。墨絵。井上和雄『北斎』による）

※立ちながら腰を折り、両手で長い髪をすいている図。髪は地面まで届いている。

髪すき（井上和雄『北斎』より転載）



●画帖「万歳図」（この頃か。画帖着色。画狂人北斎画。印辰印政。見開き 26.9×39.8 東京都江戸東京博物館蔵）

※同画題は、寛政10年1月の摺物（宗理画）にもある。本図は『風流勸化帳』の表題を持つ二冊の画帖の一冊に収められていて、北斎の画は本図のみ。『勸化帳』は、寺院の修復を願って文人や画工の作品を集めたものとされるが、実際は趣味人が冊子を回して書画を乞うたものと推測される。

序文に、文化元年3月付の勸化の趣旨が描かれているという。それ以後6年間にわたり二冊で約140名の書画が収められて、北斎の画は、収められている画帖の17番目にあるという（以上（『新北斎展図録』p319より）。図は、見開きページの左に扇子をかざした太夫が正面を向き、右に才蔵が横に太夫に向いている。

万歳図（東京都江戸東京博物館）



文化2 (1805) 乙丑 46 歳 北斎、東都画工画狂人北斎、画狂老人北斎、画狂人北斎、画狂人、葛飾北斎、紫色鴈高（隠号）、鴈高信士、俗名助兵へ、九々蟹北斎、九々蟹北斎

老夫、俵屋宗理、印 亀毛蛇足、画狂人、九々蟹：こと(35 歳)、(富之助：19 歳)、阿美

与(17 歳)、阿鉄(15 歳)、阿栄(8 歳)

◇アンデルセン生(～1875)。

◇花岡青洲、乳がん手術に始めて麻酔を使用。

◇2月16日、江戸芝神明で勸進相撲があり、町火消「め」組の辰五郎と相撲の四ツ車大八の喧嘩。これを題材に二代目瀬川如皐が「御撰曾我閏正月」（文化四年）を執筆。

◇百姓が浪人から武芸を習うことが禁止される。

◇5月3日、喜多川歌麿没（53）（斎藤月岑『武江年表』より）。享和4年（文化元年）に色摺り絵本が禁止されたが、『青楼絵本 年中行事』（十辺舎一九作。紫屋歌麿画）等を出版し、歌麿は三日間の入牢をしていた。一方で、文化3年9月20日、54歳没説あり。墓：浅草新堀端の専光寺（浅草北松山町）。

◇9月、女浄瑠璃を禁止。

【文化2年頃の浮世絵等の価格】

◇文化2年、山東京伝の黄表紙『荏土自慢名産杖』（早稲田大学図書館蔵）に次の記載がある（15丁裏の図左下に記載）。

「（略）二八十六でやくしやゑ（役者絵）二まい、二九の十八文でさうし（草紙）が二さつ、四五の廿なら大にしき（錦）一まい（略）」。

※役者絵1枚200円、草紙1冊450円、大判錦絵1枚500円（1文=25円で換算）

●狂歌絵本『狂歌百人一首 千年松笠』（『狂歌師像集』とも。着色。摺物。北斎画。三河の国岡崎の三陽擣衣連の依頼によるもの。各平均12.5×8.5 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/MOA美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※宝尽しの模様の赤い縁取りをした黄土色の地に、三河地方を中心に活動した「三陽擣衣連」に関係する狂歌師の名とその肖像画、狂歌を描く。百人一首の絵札の趣。百図確認されているという。落款は、北斎画。勝山結女（「ゆめ」か）の図のみ「九々屋北斎画」。八声明近、千代栄光、淡月亭走涼、九十二翁元冬至の図は無款。浅子亭一成の一図のみ二代宗理の落款。ピーター・モース・コレクションは72図の確認という（『ピーター・モース・コレクション北斎図録』による）。

※〈夷歌守〉〈棚珎厚丸〉〈三條小判志〉〈山寶亭長尉斗〉〈太羅多欄油小壳安方〉〈八声明近〉〈柏古枝〉〈一丁亭羽狩〉〈勝山結女〉などの図。

●狂歌絵本『百囀』（正月。大本墨摺一冊7図。東都画工画狂人北斎画。桑楊庵（浅草）干則編。西村屋与八版。26.4×18.2 北斎館/ボストン美術館/国立国会図書館蔵）

※寛政8年（1796）『百さへつり』とは別本。色摺間判の後版もある。

※序文に「（略）あか翁（桑楊庵一世の頭光のこと）のもとつふみの名よ（元の狂歌絵本の題名）、かの百さへつりとしもふたゝひかうむらすことになんありける」（「国立国会図書館デジタル・コレクション」による）とあり、桑楊庵二世の干則が、桑楊庵一世の頭光（1754～96）撰による絵入り春興狂歌本『百さへつり』（寛政8年）を追慕して刊行したものであることが分る。

☆〈深川八幡宮〉

※背後に海辺の洲崎弁天。図の右下から左上に向かって、反り橋、石造りの二の鳥居、反り橋、隨身門、本殿と順に描かれる。門前には見世や露店が並び人々で賑わっている。背景に海辺の洲崎弁天が見える。図の左下から右上にかけて鷹の丸紋を描いた凧が上がっている。正月の風景。

☆〈駿河台春景〉

※図の右の駿河台の坂道に往来する人々が描かれ、背景に富士山、中央に神田の外堀が溪谷のように流れ、橋が掛かっている。

☆〈新吉原年礼〉

※吉原の新年の挨拶廻りの図。新造6名、禿4名、遊女6名、遊女屋夫婦の人々に、万歳の二人と頭巾を被って荷物を担いだ男などがぞろぞろと歩いている。袴姿の侍と茶坊主が行列を見物している。

新吉原年礼（国立国会図書館）



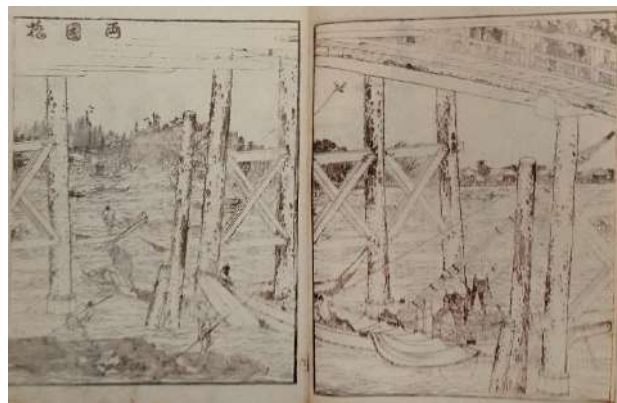
☆〈浅草観世音〉

※図右側に雷門が描かれ、その前の広小路には人々が往来し、左奥には火の見櫓、大神宮と東本願寺の屋根が描かれる。この画は、後に一枚摺り錦絵「浅草観音雷神門」として西村屋与八から刊行された。

☆〈両国橋〉

※両国橋下の橋桁の間を通り抜けるため帆を畳んだ船を中心に描く。右上部に僅かに橋が描かれ、橋上には往来の人々の雑踏が見える。背景には小さく浅草橋と、その前の数艘の船が小さく描かれる。

両国橋（北斎館）



☆〈葺屋町〉

※葺屋町にあった市村座の正面を描く。

手拭を被った木戸番が木戸札を売っている。番付を手にして示す男や、扇子で口元を隠して芝居の名題や役割を声色を使って読立をする二人の男たちの前では、人々がごった返している。図中左の市村座の看板に「亥の初春 したゆづりはほうらいそが」（信田樺蓬菜曾我）と書かれ、享和3年（1803）正月に上演された曾我狂言の演目が示される。但し、談洲楼焉馬（烏亭焉馬）の『花江都歌舞伎年代記』注によれば、この年正月の演目は「年男徳曾我」であるという（鈴木淳「北斎画『百轉』考」より）。

注）『花江都歌舞伎年代記』：文化8年。鶴屋喜右衛門版。江戸歌舞伎上演年表。談洲楼焉馬は正編を執筆。寛永元年～文化元年（1624～1804）までを記録する。続編（安政6年刊）は石塚豊介子の執筆で、文化2年～安政6年（1805～59）までを記録する。

☆〈御殿山〉

※御殿山での花見の宴が描かれ、桜樹越しに海が広がり、数隻の帆船が帆を下ろして浮かんでいる。桜の木の下では子どもが逆立ちをして遊び、図左の茶屋では遠眼鏡を覗く男な

どがいる。この図は、一枚絵として後摺されている（北斎画。22.0×33.4 西村屋与八版）。

●狂歌絵本『狂歌俳諧摺物帖』（この頃か。紙本着色摺物）

☆〈鶯合〉（北斎宗理画。東洋文庫蔵）六歌仙に見立てた男五人と女一人が、鶯合の準備をしている。一人がすり鉢で鳥の餌を擦っている。

☆〈万歳〉（九々屋北斎画。東洋文庫蔵）花瓶に梅の小枝が生けてある部屋で、手をかざした女が二人いる。

●読本『絵本東嫩錦』（角書「復讐奇話」正月。半紙本五卷五冊。小枝繁作。画狂老人北斎画。見返しは画狂人北斎画。印画狂人。角丸屋甚助（衆星閣）他版。すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/広島大学図書館蔵）

※北斎の読本挿絵初本といわれる（織田一磨『北斎』p 88 による）が、『小説比翼文』（享和4年：1804）が読本挿絵初本である。

●咄本『筆はじめ』（葛飾北斎画）「日本古典籍総合目録データベースより」より。

●艶本『艶本婦他美賀多』（「会本二見瀉」とも。墨摺半紙本。三冊）

※かつて百川子興（後の栄松斎長喜）や歌川豊廣作と考えられた本。紫色鷹高（画）。中巻第四図の画中の墓石に「雁高信仕 俗名助兵へ」の隠し落款がある。墓石に俗名を記すことで、厳しい出版統制の時勢に艶本から手を引く方向を示したもののか。まもなく、この隠号（鷹高）は、溪斎英泉に譲る（『芸術新潮』1989年3月号「北斎」特集所収・林美一「北斎 艶本への挑戦」）。

※喜多川歌麿の後期の画風を模倣しているとして北斎の作品ではないとする説がある（リチャードレイン『伝記画集 北斎』p 337）。

※『絵入春画艶本目録』（白倉敬彦 平凡社）では、歌川派の作とし、甚亭大好人（朱楽菅江か）の序とする一方、礪川亭永理・喜多川歌麿・北斎の画とする説もあるので検討を要するとしている（p 96）。初版は墨摺判だが、色摺判もあるという（同著）。 艶本婦他美賀多 (<https://aucfree.com> より転載)



●肉筆画「大原女図」（掛幅額装。絹本着色。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。94.5×30.3 ジェノヴァ東洋美術館蔵）

※永田生慈は「大原女が黒木注を頭にのせ、牛を引きながら売り歩く様子を描く。手は、享和年間の肉筆画「柳に牛図」や享和3年（1803）正月刊行の読本『古今奇譚 蛋捨草』六冊中に見いだせるものと共通。宗理型美人から文化年間へ移行しつつある時期のものと思見なすことが可能であろう」とする（『秘蔵浮世絵大観 10 ジェノヴァ東洋美術館 I』p 222）。

注) 黒木：約 30 cmの長さに切った生木を、かまどで黒く蒸し焼きにして薪としたもの。京都の八瀬・大原でつくられ市中を売り歩いた（『大辞泉』による）。大原女は黒木売りと呼ばれた。

全体に色彩鮮やかに描かれる。女の頭上の黒木の束には、桜の小枝が挿されている。

大原女図（ジェノヴァ東洋美術館）



●錦絵「市川團十郎の暫」（この頃か。大判着色。鳥居清満筆意 画狂人北斎写之）

※目を剥き、口をかみしめて見栄を切る団十郎が、大首絵のように描かれる。

【この年のみ画号九々屋を用いる】

※九々屋：永田生慈『葛飾北斎』（吉川弘文館 2000 年）では、北斎門人府川北岑の子孫の故府川俊氏談として、「北岑も九々屋を号しており、言い伝えでは『生活にきゅうきゅうしている』の戯号で『キュウキュウシン』と呼んでいたと筆者に語られたことがある」（p 99）としているが、本稿では「くくしん」と読む。意味不明。この落款は文化2年だけに用いられる。

●肉筆画「雁を見る茶筌売り」（着色一幅。九々屋北斎画。印亀毛蛇足。152.0×46.0 ボストン美術館蔵）

※法衣を着た茶筌売りが茶筌を挿した藁苞を持ち、空行く雁の群れを眺めている図。

●肉筆画「円窓の美人図」（「まるまど」と読むか。この頃か。絹本一幅。九々屋北斎席画。印亀毛蛇足。直径約 30・5 シンシナティ美術館蔵）

※〈2005『北斎展図録』解説では「きゅうきゅうしん」と読んでいる。p 330〉

※赤い髪飾りをした島田髷の町家の娘が、唄の本と思われる冊子を開きながら読んでいる。ほおずきを口にしている大首絵。同画題「円窓の美人図」は歌川豊国が得意としたもの。

円窓の美人図（シンシナティ美術館）



●肉筆画「中国武人図」（この頃か。絹本着色一幅。画狂老人北斎画（花押）。81・6×17・6 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※『水滸伝』に登場する李逵といわれる。梁山泊の序列 22 位の暴れ者。針のような髪と顔を覆う髭の武人が、弓矢を背負い、右手にまさかりを持って、左足を前にして立っている図。

中国武人図（島根県立美術館）

●肉筆画「**達磨図**」(紙本淡彩一幅。九々齋北斎席画。印亀毛蛇足。90・4×33.2 元麻布美術工芸館寄託・個人蔵)

※耳飾りをつけ、眼を見開いて座禅を組む達磨の図。全身を墨線で縁取りし、着物を薄い紅色で彩色している。

達磨図 (模写: Web「画像借景」より転載)



●肉筆画「**菊慈童**」(紙本着色一幅。九々齋北斎画。印九々齋。個人蔵)

※罪により深山に流罪となった少年が、菊の霊力を得て不老不死となる中国魏の説話から取材。図は、長い垂髪すいはつの少年が、両手を袖の中で重ねる拱手姿きょうしゅで立っている。文化初期にも同題の摺物がある。

菊慈童 (小樽芸術村 HP「今週の1点」より)

●肉筆画「**鏡見美人図**」(「**鏡面美人図**」とも。絹本着色一幅。九々齋北斎画。138.7×57.5 ポストン美術館蔵)



※立ったまま下に置いた鏡を見て、左手で後ろ髪を整えている女。鏡に映る顔は、笹紅ささべにの唇にほおずきをくわえている図。



鏡見美人図 (ポストン美術館)

●摺物「**三囲花見茶屋図**」(この頃か。横長判着色。九九齋北斎画。21.5×57.9 ハーバード大学サッガー美術館蔵)

※三囲神社境内の茶屋で、休んでいる花見客たち。部屋の棧きんに手をかけて外を見る女。その後ろに立って、袖口を口元に手を当てている女。部屋の中でむこう向きに座っている男。部屋に上がろうとしている荷物を持った小僧。茶屋の前の桜の木の側に立つ二人の女。茶屋の葭簀よしすの陰から隅田川の堤より低い鳥居を背にして、石段を上ってきた男の頭が覗く。境内の石彫いしまいぬの狛犬の背中に乗る子どもと、その側で紐につけた亀を引いて遊ぶ子どもがいる。狛犬の石台には「世話」「●中連」とあるので、元は全紙判で、下半分には狂歌連の歌が記されていたと思われる。

●摺物「**王子のみち**」(「**王子稻荷詣図**」とも。横長判着色。この頃か。九九齋北斎画。20.0×55.5 ハーバード大学サッガー美術館/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション蔵)

※図の右に「左り 王子みち」と書かれた石標のある船着き場に船頭が竿を突き立てて着けている。その前の道に傘と風呂敷包を肩にした小奴を引き連れた女が二人。図の中央から左にかけて田圃の風景が広がり、畦道あぜみちには数人の旅人がいる

●摺物「王子稻荷詣図」（この頃か。北斎画。19.1×51.0 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※王子稻荷門前の様子を描く。縦長の吊し提灯に「奉納王子稻荷」とあり、その下に横書きで「常磐津連」とある。「御神燈」と書かれた石燈籠の前に行く母娘。その後ろには赤子を背負った母親と付き従う小奴。遠くに鳥さしの棹を突きあげる男が小さく描かれる。図の左には、梅の木の背後に、水があふれている樽が描かれる。

●摺物「座敷狂言長柄二階傘踊図」（1月。着色。画狂人北斎画。尾崎松四郎主催の歌舞音曲のおさらい会の番組表。下半分に逆さ文字を記す。画部分 18.7×51.2 全体 40.0×53.4 ポストン美術館/みだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/江戸東京博物館/島根県立美術館蔵）

※画中に「文化二乙丑」の書き入れのある同図があるという。図は、蠟燭をともした座敷で二重の天蓋の傘の柄を肩にして踊る少女と、その後ろで立烏帽子など着替えの準備のために座っている女。御簾の向こうで見物の婦人たちや、出番を待つ人たちが透けて見える。



図左には富士と松と瑞龜の描かれた屏風の陰から、見物する袴姿の男の半身が見える。

座敷狂言長柄二階傘踊図（ポストン美術館）

●摺物「五月の景」（横長判着色。摺物。画狂人北斎画。19.3×52.5 ハーバード大学アーサー・M・サッガー美術館蔵）

※鍾馗の絵を描いた五月幟や鯉のぼりの向こうには富士山。部屋には、団扇を持って縦膝の母親、その側には子どもが玩具の菖蒲太刀を持っている。それを見ている縁側に立つ女。縁側には団扇の上に菖蒲打ちに使う菖蒲が置かれている。端午の節句の図。

●摺物「隅田川兩岸景色図巻」（烏亭焉馬應需於談州楼九々屋北斎席画。巻末の書き込みに「文化二年」とある。烏亭焉馬の依頼で焉馬の家で描いたもの。28.5×716.0 すみだ北斎美術館蔵）

※明治25年11月12日～13日に催された「古代浮世絵展」の出品目録には、この図の所有者は山形県坂田の豪商の出身で本間耕曹とある。その後、明治35年(1902)、浮世絵商・林忠正がパリから帰国する際に開いたコレクションの競売目録に写真でこの図を掲載している。その後誰の手に渡ったのか不明のまま、「幻の絵巻」とされていたが、平成27年(2015)に再発見され、墨田区が100年ぶりに1億4900万円で購入し、平成28年(2016)11月22日に開館した「すみだ北斎美術館」で公開した。

両国橋

※隅田川を両国橋から遡り、吉原に至る構図となっている。川の東岸には、川上に向かって、両国橋、回向院、大川橋、三囲神社、牛御前、弘福寺、長命寺、水神社（隅田川神社）、木母寺などが描かれる。



同じく川の西岸には、川上に向かって、柳橋、首尾の松、御米蔵、駒形堂、浅草寺、待乳山聖天、日本堤、吉原大門が描かれ、最後に吉原室内でくつろぐ男たちの様子が描かれる。



「隅田川兩岸景色図巻」吉原室内（巻末：すみだ北斎美術館）

●摺物「梅樹図」（春。小判着色。九々齋北斎画。島根県立美術館蔵）

※「丑の春」とある。左青寮甲岳の狂歌が記される（『年譜』による）。

●摺物「海鼠と独活図」（春。着色。九々齋北斎老夫画）

※「乙丑春」とある。花楽庵他の狂歌が記される（『年譜』より）。

●摺物「休み茶屋」（着色。北斎画）

※「丑ノ春」とある。千穂庵他の狂歌が記される（『年譜』による）。文化元年（1804）にも同題の摺物がある。

●扇面図「垣根のそばの遊女」（扇面。雲母紙に淡彩。画狂人北斎。山東京伝賛）

●絵暦「福助と美人年始の図」（1月。北斎画。『年譜』による）

●絵暦「福助と牛に乗る遊女」（1月。無款）

※遊女の帯に大小月がある（『年譜』による）。

●絵暦「福助とお多福の秘戯図」（1月。無款）

※画中の戯文に大小月が示される（『年譜』による）。

●摺物「飲中八仙」（紙本着色。九々齋北斎画。各約 21.5×9.3 すみだ北斎美術館/島根県立美術館蔵）

※杜甫の「飲中八仙歌」に詠まれた酒豪八人の文人（賀知章、汝陽王李璣、李適之、崔宗之、蘇晋、李白、張旭、焦遂）を題材にした見立図。飲中八仙図は古くから画題として好まれた。

☆〈跋〉（太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※程赤城注1・湖趙新（医師）が袷姿で正座する大田南畝の前で、扇の地紙に自らの名と大田南畝の名を記して書する図。図の上には「寄南楼香保留注2」として「飲中莫数

はちにんのきやく にほんのすいおうしほうにたかし こいみとがらんちやうきんしやくのち がん かいにおとすとそをほらう
八人客 日本酔翁高四方 請見元朝三酌後 眼花落井屠蘇裏」七言絶句が記され、「於崎陽かほる写」とある。

注1) 程赤城：中国明の船主・医師・文人。長年にわたり長崎に来航。日本語に堪能で日本の酒と料理を好んだという。

注2) 南楼香保留：大田南畝の別号。

☆〈焦遂〉御高祖頭巾の女が提灯を下に下げ、酔った様子で棧橋の上を歩いている図。

☆〈汝陽〉屏風に着物がかけられている部屋で、箱車に肘をかけ何かを見やる女の図。

☆〈宗之〉風を左手を翳して見上げる垂髪の女の図。

☆〈蓑晋〉棚に福助人形とウラジロが飾られている部屋で杯を手にしている角隠しの女の図。

☆〈知章〉神棚に鏡餅とウラジロが飾られた部屋で、机の上の本を読む女の図。

●摺物「千代紙を貼る二美人」（この頃か。着色。九々屋北斎画。20.3×27.3 太田記念美術館蔵）

※千代紙を缺で切って、壁紙に貼っている二人の婦人。床の間には花木を生けた花瓶がある。襖には富士の絵の脇に「九々屋北斎画」の文字が書き込まれている。図右上部と左半分に浅草庵他の狂歌が記される。

●摺物「山吹に桜」（「桜に山吹図」とも。4月。横長判着色一枚。九々屋北斎画。21.4×57.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※ゆったり流れる水面の上で、桜と黄色の山吹の花が垂れるように咲いている。長唄の二代目杵屋弥十郎(享和3年4月1日没)の三回忌追善のために配られたものとみられる。図左に、錦為他、17名の句が列記される。

●摺物「神田明神休茶屋」（横長判着色。九々屋北斎画。19.1×56.9 すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション蔵）

※神田明神の赤い鳥居から階段を上った所にある休み茶屋で花見をする女性たちや子ども。茶屋の下には神田川が流れる。鳥居をくぐり石段を上ってきた男たちの頭だけが見える。図右の狛犬には子どもが乗って、亀を紐で引いている幼い子を見下ろしている。図左には遠くに富士山が描かれる。



神田明神休茶屋（すみだ北斎美術館）

●摺物「角隠しの女性たち 番組」（「女行列」とも。紙本着色。大奉書判。九々齋北齋画。38.2×51.0 北齋館蔵）

※荷物を持つ二人の女性を先頭に、揚帽子（角隠し）を被ったおびただしい数の女性が、土手のある田舎道を行列している。図の右には松のある小山から滝が流れ落ち、麓には桜が咲いている。



角隠しの女性たち 番組（北齋館）

図の上に、「番組」「四十八手恋所訳」「蝶衛春姿見」「女鳴神瀬川帽子」「思ひのはぐるま」「妹背の柱建」の富本節の演目が横に併記され、図の中段と下段に記された文字から、富本豊初一門の深川芸者によるお濠い会の案内であることが分かる。文字の部分と絵の摺の具合が違うことから、それぞれ別版と推測されている。

●摺物「菅原の上」（紙本着色一幅。九々齋北齋画。14.2×18.9 すみだ北齋美術館蔵）

※牛車の両横に立つ烏帽子を被った二人の官女。一人は梅の小枝を持っている。慈列亭の狂歌が記される。

●摺物「不動詣」（紙本着色。九々齋北齋画。19.5×52.2 すみだ北齋美術館蔵）

※横長の摺物。「不動明王」と書かれた提灯が下がる入り口を出入りする人々。「河原崎座」と書かれた小さな幟が下がっている入り口の前では、水売りが桶から柄杓で水を掬い、客に差し出している。図の右では、盆栽を置いた前で煙管を銜えながら売っている男がいる。

●摺物「生花図」（この頃か。紙本横長判。摺物。東京国立博物館蔵）

※書物を積んだ台のある部屋で、角型の盆栽の前で、花瓶に梅の小枝を生ける女。浅草庵市人等の狂歌が添えられる。

●摺物「生花図」（この頃か。中判。紙本着色。東京国立博物館蔵）

※前記横長判摺物の「生花図」とは別作。福寿草が生けてある丸い盆栽を囲んで、横兵庫髷の花魁が、床の間の花瓶に梅の小枝を生けながら盆栽の方を見ている。中に禿、左に年増がいる。（「丑九月」とあり、東都里松庵一寿（生け花作家）の門人三名の名披露に作られたものと『年譜』で説明しているが、横長判のものか、本図なのか不明）

●摺物「金魚すくいの子図」（この頃か。紙本着色。北齋画。18.9×51.2。すみだ北齋美術館：ヒーターモース・コレクション/ホノルル美術館蔵）

※生簀の金魚を網ですくい取ろうとしている年増。縁台に立膝で座り、団扇を持ってその様子を見ている女。水を張った盥を持って年増の方へ行こうとしている男の子が描かれる。

●摺物「鐘衝堂の図」（11月。画狂人北齋画）

※錦賀（市川染五郎改松本武十郎）の、市村座顔見世での襲名披露に配布。「乙丑霜月」とある（『年譜』による）。

文化3（1806）丙寅 47歳 画狂人北斎、葛飾北斎、葛飾北斎主人、東陽画狂人北斎、

北斎、かつしか北斎、印之、印、画狂人、亀毛蛇足：こと（36歳）、（富之助：20歳）、

阿美与（18歳）、阿鉄（16歳）、阿栄（9歳）

◇3月4日、芝車町の明店より出火（車町火事・丙寅の大火）。死者1200人といわれる。

◇琉球使節来朝（尚瀨王即位の謝恩使）。

◇3月15日、長野小布施の高井鴻山生（～1883）。

◇9月20日、喜多川歌麿没（生年1753か。54）。文化2年（1805）没（53）説あり。

◇10月29日、五代目市川団十郎没（66）。屋号・成田屋。俳名：梅童、男女川、白猿、三升。定紋：三升。

◇ポルトガル使節団、江戸参府。

◇十返舎一九、鈴木牧山と上州草津、越後を旅する。

○曲亭馬琴、読本『墨田川梅柳新書』。

【合巻注時代に入る】

注）合巻：江戸時代後期に行われた草双紙の一種。黄表紙が寛政の改革以後、風刺や諧謔を失い、かたき討ち物に転じると、筋書が複雑化して冊数が増し、3～6冊を1部に合冊して売ることになり、これを合巻と称した。形のうえでは式亭三馬作『雷太郎強悪物語』（1806）が前編5冊、後編5冊の合巻として出たのを初めとする（『ブリタニカ国際大百科事典』より）。

○式亭三馬、『雷太郎強悪物語』（初代歌川豊国画。合巻の初め）。

○山東京伝、『昔話稲妻表紙』。

○3月頃、「唐土名勝図会」（岡田玉山、熊岳文暉、大原東野民声画。名古屋・玉華堂版）

★この頃より浮絵を離れ遠近法に関心を持つ。

【馬琴宅に寄宿中、母の年忌の香典で馬琴と争う】

★春から夏にかけ3か月から4か月曲亭馬琴宅に寄宿する（飯田町中坂下。現東京都千代田区九段北1-14-21 世継稲荷〈筑土神社〉下）する。読本『苺萱後伝玉櫛笥』（曲亭馬琴作。北斎画。翌年正月出版予定）の馬琴序文に「丙寅年画工北斎、わが著作堂に遊ぶこと、春より夏のはじめに至て三四箇月」とある。

★北斎の母の年忌に当たり、馬琴が北斎に香典を与えたところ、北斎はその香典の包み紙で鼻をかんで投げ出したので、馬琴が怒ったところ、親の香典を腹のたしにして長生きするのが本当の親孝行だと言い放ったという。

「嘗て北齋が母の年回注1に、馬琴其の困窮を察し、香奠許千金を紙に包みて与へたり。其の夕、北齋帰り乗りて、談笑の間、袂より紙を出し、鼻をかみて投げ出しけるを、馬琴見て大に憤りて曰く、これはこれ今朝与へし、香奠包の紙にあらずや、此の中にありし金円は、かならず仏事に供せずして、他に消費せしならん。不孝の奴めと罵りければ、北齋笑て曰く、『君の言のごとく、賜ふ所の金は、我これを口中にせり。かの精進物を仏前に供し、僧侶を雇ひ、読経せしむるが如きは、これ世俗の虚礼なり。しかず父母の遺体、即ち我が一身を養はんには。一身を養ひ、百歳の寿を有つは、是れ父母に孝なるにあらずや』と。馬琴默然たりしと。加藤氏の話注2」（飯島虚心『葛飾北齋伝』 p 100 ルビは筆者による）

注1) 母の年回：母は小林平八郎の孫娘か、詳細不明。また、没後何回忌かも不詳。

注2) 加藤氏：脚注で、この人物不明としている。

この記事に続けて、飯島虚心は「これ親密なる朋友間の一時の戯言にして、交情の厚きは却て、この一条にて知らるゝなり」（p100）と述べている。

【木更津に逗留】

★6月頃、上総国木更津の豊が池（現千葉県木更津市朝日3丁目辺）の名主水野清兵衛宅に逗留する。

また、当地の日枝神社に1mを越える大絵馬「富士の巻狩図」を奉納（画狂老人北齋旅中画。印之印。139.3×180.4 千葉県立上総博物館蔵）した。

※永田生慈が次のエピソードを紹介している。

水野清右衛門は、ある日、村の日枝神社に通るかかると、乞食のような男が境内の芝生に座り何か絵を画いているので、覗いてみると見事な富士山を描いていた。清右衛門はこの神社に絵馬を奉納したいと考えていたので、この男を自宅に招き、絵を依頼したところ、「唐仙人の楽遊」（九尺2枚の襖絵）などを描いたという（それらの作品は、明治時代に清右衛門の子が、数十銭で屑屋に売却したという）。さらに6月には日枝神社に大絵馬を奉納したという（『北齋美術館2 風景画』所収、「逸話にみる北齋の人間像」 p 154）。

【行元寺の波に感銘を受ける】

また、行元寺（現千葉県いすみ市荻原2136）を訪れ、制作中の武志伊八郎注（通称：波の伊八）の欄間「波」を見て感銘を受けたという。

注）：武志伊八郎：宝暦元年（1751）～文政7年（1824）。現在の鴨川市に生まれる。



行元寺の欄間「波」（いすみ市観光ポータルサイトより）

【人体の骨格をしらざれば真を得ること能はず】

この頃の北齋の様子を『葛飾北齋伝』では、次のように記す。

「翁老年に至りても、勉強刻苦、画法を研究して、これ日も足らざるが如し。田辺氏の話に、予が父石菴^{せきあん}脚注1は、翁と交はりしが、翁のことにつき、最も感服すべきは、翁が画道に熱心なること、是なり。翁人物を^{えが}画くに、人体の骨格を、しらざれば、真を得ること能はずとて、接骨家名倉弥次兵衛^{なぐらやじへい}脚注2の門に入り、接骨の術を学び、筋骨の究理をなし、しかして始めて人物を^{えが}画くの真法を得たりと。翁が画法に、注意すること、概此の類なり。関根氏曰く、翁、板下^{いたした}を^{えが}画くに、一筆一画といへども、謹々として苟^{いやくも}せざるなり。かならず精細に下図をつけて、然る後に^{えが}画きたり。もし少しく意に^{かな}適はざる所あれば、何回にてもかき直したり。故に他の画工と異なり、画料甚だ貴し。これ、意匠と時間とを費すこと多ければなり。一説に、翁壮年の頃は、俳優の似顔画、および猥褻なる男女の画などもかきたりしが、中年画法を一変し、^{こころざし}志を立て、北斎と号してより、天地間の物、何にても^{えが}画かざることなけれども、唯俳優の似顔絵および猥褻の画は、決して^{えが}画かざりしと」(p 215～216 ルビは筆者)。

脚注 1) 石菴^{せきあん}：田辺石菴は徳川中期の儒者。天明元～安政三年(1781—1856)、七六歳。名は誨輔、字は季徳、通称新二郎。

脚注 2) 名倉弥次兵衛^{なぐらやじへい}：徳川中期の接骨医。寛延三～文政一〇(1750—1827)。名は直賢。素朴と号す。柔術に長じ子弟に教授する傍ら、武備心流整骨を研究、明和年中に接骨医を開業。

【読本に傾注し始め、落款の北斎に葛飾を冠し始める】

※享和4年(1804)より関わり始めた読本の挿絵に、この年よりさらに傾注する。

●読本『新編水滸画伝』初編初帙(半紙本六冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印画狂人。一卷見返しには、葛飾北斎主人画とある。馬琴の序文は前年9月の稿。江戸麹町角丸屋甚助注(衆星閣)/前川弥兵衛(盛文堂)版。後摺版は、英平吉/河内屋茂兵衛(大坂心斎橋)版。22.4×15.4 早稲田大学図書館/島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館/オランダ国立民族学博物館蔵)。

注) 角丸屋甚助：江戸書肆。衆星閣。

※初編後帙は、文化4年1月に刊行。各編は前帙(10巻)と後帙(10巻)に分かれ、全9編90巻という膨大な読本である。初編十巻十冊は曲亭馬琴訳。二編以降、版元角丸屋甚助と馬琴の間で訴訟沙汰があり、馬琴が降り高井蘭山(1762～1838)の翻訳となる。北斎は初編から九編まで挿絵を担当した。

以下二編～六編は文政12年(1829)～天保9年(1831)に刊行されたとされる(詳細不明)。初編の奥付には文化二年九月とある(飯島虚心『葛飾北斎伝』及び脚注 p 99、p 287)ことから一般的には文化2年からの刊行とされているが、見返しに「丙寅発兌」(文化3年刊行)とあるので、実際の刊行は文化3年と思われる。

【馬琴、北斎の挿絵が気に入らず、二編以降は高井鴻山の翻訳】

※北斎の挿絵が気に入らず、馬琴は「北斎が挿絵をなさば、予は後篇を翻訳せずといひ、北斎は馬琴が翻訳をなさば予は挿画をかゝらずといひ」版元が困って江戸の書肆が集まり評議の結果、「当時馬琴の作、北斎の画、並び行はれて、何れも優劣なしといへども、此の書既に絵本といへる題号あれば、画工の意に従ふべしといへるに決したり」（『葛飾北斎伝』p88）ということであった。

翻訳を高井蘭山にさせたが「北斎後編(文政12年、英平吉版)を閲し、嘆じて曰く、馬琴が翻訳に及ばざること遠し」という（『葛飾北斎伝』p82～83）。

※飯島虚心は自身の感想も付け加えている。

「細に『水滸伝』の挿絵を閲するに、中に人物の衣服、室内の装飾、日本にあらず、支那にあらず、一種の風を画き、又其の挙動は、酒宴の席に卓子(筆者注；テーブル)をおき、数人の客、椅子により、しかして芸妓は、地板に列座し、蛇味線(補注：「蛇皮線」のこと)を弾くなど、其の凶美に和漢錯雑、抱腹に堪へざるもの、往々これあり。北斎翁此の図をもて、自ら足れりとするか。挿絵中に、酔中筆と記さんを欲するなり。馬琴の痛論、措かざるも又宜ならずや。嗚呼『画伝』九編は、蓋し北斎一世の失策なるべし」（句読点・ルビは筆者による。『葛飾北斎伝』p85）

●狂歌絵本『耳目集』（一冊。口絵に北斎の絵。北斎画：扉の落款。浅草庵市人撰。壺側社中版 「浮世絵文献資料館：絵入り狂歌本年表」及び『年譜』で紹介する『狂歌書目集成』より）

【北斎の勧めで馬琴の執筆】

●読本『石堂丸刈萱物語』（五巻五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画 東洋文庫：岩崎文庫/広島大学図書館/早稲田大学図書館/国文学研究資料館蔵）

※後編は文化4年正月に『刈萱後伝玉櫛笥』（葛飾北斎筆）として刊行される。説経節注「刈萱」では、高野山で出家した刈萱を追って来た妻は山中で病死、刈萱は子の石堂丸にも父と名乗らず突き放して善光寺に向かったという展開。

注) 説経節：仏教の内容を分かりやすく、節をつけて語ったもの。

※馬琴の自序によれば、この本は北斎の勧めで書かれたという。

馬琴自序「丙寅年(文化3年)畫工北齋子。わが著作堂に遊ぶこと。春より夏のはじめに至て三四箇月。一日(筆者注：ある日)余に謂て曰。嘗聞刈萱記は。五説経の一にして。今なほ人口に膾炙す。(略)主翁設彼後傳を作らば。かならず閱者の快事ならんといふ(略)」(読点・ルビは原文のまま。但し、ルビの読みは現代仮名遣いとした)。

『石堂丸刈萱物語』（国文学研究資料館）



●読本『絵本壁落穂』前編（角書「春宵奇譚」。1月。前編五冊墨摺。小枝繁作。葛飾北斎画。一卷見返しに画狂人葛飾北斎画。印画狂人。角丸屋甚助版。すみだ北斎美術館/広島大学図書館蔵）。下記『新田義統功臣録』と同本。後編は文化5年（1808）刊。

●読本『新田義統功臣録』前篇五卷、（『新田功臣録』とも。角書「知神霊」。小枝繁作。葛飾北斎画。角丸屋甚助（衆星閣）版。早稲田大学図書館/関西大学図書館蔵）



※『絵本壁落穂』改題本。後編は文化5年（1898）刊。読本における独自の細密描写と薄墨の巧みな表現が見られる。天保12年（1841）には『箭口神霊感得奇聞新田義統功臣録』として改題後摺される（小枝繁作。葛飾北斎画。岡田茂兵衛・河内屋孫三郎版）

『新田義統功臣録』前篇「義興の霊江戸兄弟を亡す」（早稲田大学図書館）

●読本『絵本西遊全伝』（『絵本西遊記』『通俗西遊記』『繡像真詮三蔵西遊全伝』とも。四編四十冊。岳亭定岡（岳亭山人）訳。岡田群玉堂（岡田屋茂兵衛）版。早稲田大学図書館/国立国会図書館（後摺）/上田市立図書館（後摺）蔵）。二編：文化3年刊、三編：天保4年（1833）刊、四編：天保6年（1835）刊。

※北斎は三編・四編に描く（北斎戴斗画）。

●絵手本『遠州流挿花百瓶図式』（「遠州流挿花百瓶之図」「挿花百瓶図式」とも。墨摺二冊。文化2年の序文と跋文があるが、刊行は奥付に文化3年正月とある。一冊。如月庵馬丈著。菱川宗理画。野田七兵衛・小林新兵衛版。高知県立図書館/早稲田大学図書館蔵）。

※宗理を用いた時期に菱川宗理の号はないとの説あり。あるいは俵屋宗理か。いずれにしても宗理号は寛政10年（1798）に門人宗二に譲っているので、考証が必要。

※遠州流は、小堀遠州を祖とし、その美意識を花道に継承したもの。寛政期に初世貞松斎一馬（明和元年または6年～天保9年〈1764又または1767～1838〉により正風遠州流として完成したといわれる。武家や公家のみならず、江戸庶民にも受け入れられた。盆や花瓶に生けた花や枝などの図案集。文化2年記の立川談洲楼焉馬の序文と式亭三馬の跋文がある。各地の遠州流門人の号が各図に記されている（早稲田大学図書館蔵に画号はない）。

●錦絵『仮名手本忠臣蔵』（4月。初段～十一段段目までの11枚揃シリーズ。横大判錦絵揃物。11枚揃。無款。鶴屋金助版）

※この忠臣蔵以前にも『新板浮絵忠臣蔵』（寛政10年。可候画）がある。後に版木が和泉屋市兵衛に移り、後摺もされた。

※『仮名手本忠臣蔵』は、浄瑠璃芝居として寛延元年（1748）が初演。

☆〈初段〉（25.7×37.5 太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館/バーナー・コレクション/太田記念美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※「鶴岡八幡宮社頭の間」。海辺の神社境内で恋文を、塩冶判官（浅野内匠守）の妻顔世に差し出して言い寄る高師直。海に向こうに富士が描かれる。図中右下に「寅四」の

改印がある。

☆〈二段〉（25.5×37.9 太田記念美術館：長瀬コレクション/ハヴァー・コレクション/東京国立博物館/国立国会図書館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※「建長寺 書院の場」。加古川本蔵が松の枝を切り落とし、仇討ちの誠意を見せる「松切り」の場面。

☆〈三段目〉（25.2×37.4 太田記念美術館/東京国立博物館/ハーバード大学サグラー美術館/山口県立萩美術館/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※「足利城外の場」。鷺坂伴内が手下を率いて勘平を捕らえに現われ、伴内は勘平に斬りかかるが、首をつかまれ投げ飛ばされた場面。お軽は伴内の刀をつかみ、手下の首に紐をかけている。夜明けの月が描かれる。

☆〈四段目〉（25.7×37.3 太田記念美術館蔵：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※「扇ヶ谷 塩治館の場 花籠の段」。顔世御前が塾居中の夫塩治判官を慰めるため、八重桜を鉢に詠えているところに、原郷右衛門と斧九太夫がやって来る場面。

☆〈五段目〉（21.4×32.7 太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館/ミネアポリス美術館/山口県立萩美術館/国立国会図書館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※「山崎街道 鉄砲渡し場の場」。斧定九郎に切られるお軽の父親与市兵衛の傘に「寅新板（文化3年の新板）」と書き込みがある。

☆〈六段目〉（25.9×38.4 太田記念美術館：長瀬コレクション/ハヴァー・コレクション/国立国会図書館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※「与市兵衛内 勘平腹切りの場」。大星由良之助が祇園の茶屋で遊興しながらも、師直の偵察の手紙を読む図。

☆〈七段目〉（25.7×36.7 太田記念美術館：長瀬コレクション/大英博物館/ホノルル美術館/ミネアポリス美術館/ハーバード大学/ボストン美術館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※「祇園 一力茶屋の場」。一力茶屋の由良之助のもとに呼ばれた遊女お軽が、秘密の密書を読んでしまったので、由良之助はお軽を殺そうと企むが、それを知ったお軽の兄寺岡平右衛門が、自分がお軽を殺して由良之助の信を得て仇討ちに加わりとうとする。由良之助は縁の下に隠れていた斧九太夫を引きずり出し、お軽の父の仇を取らせようとする場面。

☆〈八段目〉（25.3×37.1 太田記念美術館：長瀬コレクション/ギメ美術館/国立国会図書館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※「道行旅路の嫁入の場」。海辺の坂道を下りる旅人と駕籠。画面手前に若衆と女の二人連れ。画面左に三人の町人の旅人と天秤棒を担ぐ物売りの図。桃井家の家老加古川本蔵の妻戸無瀬と娘小浪の母子二人が小浪の許嫁で由良之助の息子大星力弥のもとに行く「道行き」の場面。同画題は、寛政10年（1798）の『新板浮絵忠臣蔵』、享和2年（1802）の『画本忠臣蔵』でも先行的に扱っている。

☆〈九段目〉（24.7×37.2 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「山科閑居の場」。加古川本蔵の妻戸無瀬は、由良助の妻お石に娘小浪の力弥との祝言を断られた絶望から、母娘ともども自害しようと刀を小浪に振り上げる。そこへ加古川本蔵が現れたので、お石は恨みのある本蔵を切ろうとするが、逆にお石がやられそうになったので、力弥が出てきて槍で本蔵を突こうとしている。その後ろで力弥の腰に抱きつき、父本蔵が殺されるのを止めようとするお軽。

☆〈十段目〉（25.2×37.0 太田記念美術館/ハヴァー・コレクション/山口県立萩美術館/国立国会図書館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「天川屋義平内の場」。堺の廻船問屋天川屋義平が武具を調達し、義士たちに渡す場面。長持ちの上に乗って見得をきる義平。仰向けになっている子供の足元に、版元の鶴屋金助を示す「金」が書かれた板が置かれている。

☆〈十一段目〉（26.0×38.7 ハヴァー・コレクション/山口県立萩美術館/国立国会図書館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「討入 泉水の場」。義士たちの師直邸に討入りする図。大槌で門を叩き、門の屋根に梯子をかけて侵入しようとしている。

●狂歌本『風俗狂歌摺物帳』二帙（摺物。1月。紙本着色。魚屋北溪、岳亭春信、柳川重信、勝川春亭らの絵とともに画帖仕立てにしたもの。東洋文庫ミュージアム蔵）

※北斎は、二帙に中国五山（霊山とされる五山）になぞらえたものと、想像上の国を描いたものがある。「五岳」とあるので全5図と思われるが、3図が知られる。「寅はつ春」とある。

※以下の3図は、いずれも美人を大首絵風に描いたもの。

☆〈五岳の内 南岳衛山〉（東洋文庫蔵）

※芸者風の女が、右手に脚付きの膳に化粧瓶を乗せて持ち、左の袖を口元に当てている図。

☆〈五岳の内 北岳恒山〉（島根県立美術館蔵）

※花瓶の前で琴を弾く女の図。

☆〈五岳の内 中岳嵩山〉（島根県立美術館蔵）

※一挺天符掛時計（釣り下がっている小鍾のある掛け時計）の前で尺八を吹こうとする女の図。

☆〈長脚国〉（かつしか北斎画。13.2×18.6 太田記念美術館：長瀬コレクション/東洋文庫蔵）

※座敷の中で、着物の裾をはだけ、両足の間にでんでん太鼓を挟み、撥を持って炬燵の布団に脚を入れながら赤子をあやしている。もう一人の女は、炬燵に腰掛けて赤子を抱いている。

『和漢三才図絵』（正徳2年：1712。百科事典）からの画材と見られている。

長脚国（太田記念美術館）

☆〈三首国〉（かつしか北斎画）

※横兵庫髷の花魁と禿が座っている部屋の敷居の側で、大黒と見立てられる頭巾を被った男が二人、その後に赤い小槌を持った男がいる。背後にウラジロなどの注連飾りが飾られている。『和漢三才図絵』（正徳2年：1712。百科事典）からの画材と見られている。



☆〈長臂国〉（かつしか北斎画。太田記念美術館/長瀬コレクション蔵）

※藤の掛け軸が架かる床の間には珊瑚とウラジロの飾られた部屋で、棒を持って臂を振り上げている宗匠らしき男に、盆に乗せた碗を差し出す男。その脇に顎に手をやる女がいる。床の間の前には横兵庫髷の花魁もいる。

●屋台幕図「虎図」（都留市八朔祭下町屋台注後幕図。横長判着色。東陽画狂人北斎筆。印不明。208.0×588.0）

注）都留市は、栃木県東部の市。八朔祭は、旧暦8月1日、生出神社（現山梨県都留市四日市場1066）例祭の行事。この頃は二百十日前後で、秋の実りを、台風の影響から免れるように神に祈った祭。市内の下町などいくつかの町から屋台が繰り出される。現在では毎年9月1日に行なわれる。



都留市八朔祭下町屋台後幕図（都留市HPより）

北斎は屋台後部を飾る後幕（見送り幕）の下図を描く。「金糸・黒糸のだんだらで縫いとられ、あしらった緑の竹も影が薄いほど猛（マ）い獣王の姿である。虎の爪、牙は鋳銀された真鍮で、爛々たる両眼はガラスを光らしたものである。『東陽画狂人北斎』の落款がある」と都留市の説明がある。

※北斎が山梨県（甲斐国）にいつ行ったのかは不明。あるいは依頼されたものか。「東陽画狂人北斎」の落款は享和年間の使用と思われるが、「東陽北斎」の落款は寛政後期～文化初期にも使用されている。

永田生慈の『年譜』（文化3年）では、檜崎宗重『北斎論』（p294）の記事を紹介して、甲州都留市谷村の飾幕絵「龍虎図」（東陽画狂人北斎筆。印不明。現存不明）と「竹林猛虎図」（東陽画狂人北斎画。印不明）は「本年頃制作されるか」とある。「竹林猛虎図」が上記「虎図」を指すとすれば文化3年頃の作となる。

●錦絵『小判 六玉川』(11月。小判錦絵六枚揃物。北斎画。版元未詳。すみだ北斎美術館蔵)

※「寅十一」の改印があるという(リチャード・レイン『伝記画集 北斎』の記事を『年譜』が紹介)。

☆〈山吹 大和井出〉(12.7×18.5)

※床几に座る二人の女。緑の葉の山吹を眺めている。床几には湯飲みが一つ置かれている。

山吹 大和井出(すみだ北斎美術館)



☆〈手作 武蔵〉(12.7×18.8)

※二人の女が大きな鉢で布を洗い、男がそれを干している。

☆〈近江 野路〉(12.6×18.5)

※二人の女が紅葉の木の下で眺めている。左の女は右手をかざしている。

☆〈ちどり 陸奥〉(12.7×18.5)

※千鳥の舞う川辺に立つ二人の女。空には九羽の千鳥。

ちどり 陸奥(すみだ北斎美術館)



☆〈とうみ 摂津〉(12.7×18.6)

※砵を打つ二人の女。側の犬が。女の振り上げた槌を見上げている。

☆〈どく 紀の国かうや〉(12.6×18.0)

※屋根形の高札のある所に立つ二人の娘。手に羽子板のようなものを持っている。側の小奴が右手で何かを指し示している。

どく 紀の国かうや(すみだ北斎美術館)



●板絵「富士の巻狩図」(6月。板に彩色。画狂人北斎旅中画。印之印。139.3×180.4 木更津市日枝神社蔵)

※馬琴宅に逗留中、木更津の上総長須賀村を訪れ、その名主の家で描いたといわれる作品。木更津の日枝神社(現千葉県木更津市長須賀2444)に奉納した絵馬装のもの。図左上に「文化三丙寅六月」とある。

※建久4年(1193)、源頼朝による富士の裾野での巻狩りの図。仁田四郎が猪に刀を振るって刺し殺そうとしている。その傍で二人の武士が形相険しく刀を構え、松の木の後ろでは槍を構えた武士がいる。背景には裾に雲がたなびく富士山、その手前には巻狩りの陣の幟等が描かれる。

富士の巻狩図（木更津市日枝神社）

●肉筆画「**釣狐図**」（紙本墨絵淡彩一幅。6月頃に木更津から江戸に帰る直前に見送りの人々を待たせて即席に描かれたもの。画狂人北斎画。印 亀毛蛇足。79.5×27.5）

●襖絵「**唐仙人の楽遊**」

※6月頃、木更津の逗留先、水野清兵衛宅の襖に描いたものという（『年譜』による）。

●肉筆画「**蚊帳美人図**」（着色一幅。北斎画。印 不明）

※薄緑の蚊帳の中で、虫除けだろうか、細い棒状の先に火をともしている寝巻姿の女。赤い箱枕の引き出しが少し開いている。掻巻の夜具が敷かれている。女は眉を剃っているので年増と思われる。膝もとには大きな団扇が置かれている。

蚊帳美人図（www.pinterest.jp より転載）

●絵暦「**朝妻舟の図**」（1月。葛飾北斎画。『年譜』による）

●摺物「**西王母**」（中判摺物一枚。着色。無款。19.4×27.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※西王母は、信仰を集めた仙女。姓は楊、名は回。漢の武帝が長生を願ったとき、西王母が天から降りてきて、長寿の象徴の桃を七個贈ったという伝説に取材。

羽団扇を持って立つ西王母の横で、桃を描いた絵を捧げ持つ女と、絵の下をしゃがんで支える女の図。「寅春」と制作年が示される文字が千栄松笠などの狂歌に続いて記されている。

※西王母の絵は他にも「西王母」（享和年間。摺物。16.6×7.3）、「西王母」（寛政6年頃。大判錦絵三枚綴。春朗画。37.9×74.9）がある。

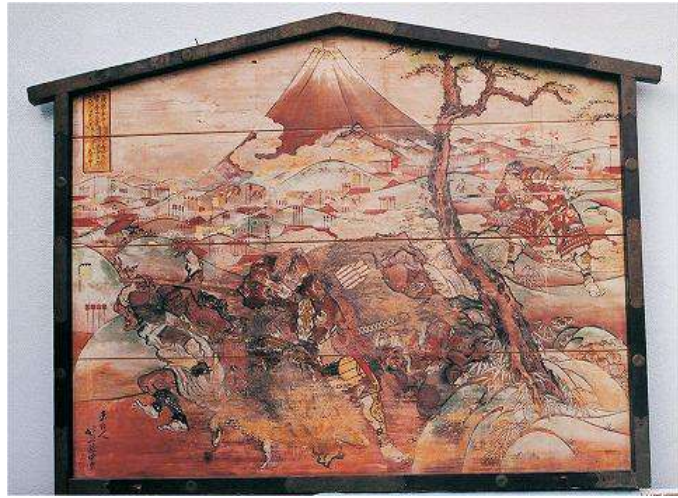
●摺物「**煙草入れに暦図**」（1月。四つ切判彩色一幅。かつしか北斎画。名古屋市立博物館蔵）

※毛皮の煙草入れの下に「文化三丙寅暦」の書き入れがある。浅瀬菴永喜（浅草庵市人門人）の狂歌「梅暦開けばなんとかながきに 安くよめたる山里の春」。

●摺物「**耳を搔く男女**」（北斎画）「寅春興」とある。つくし筆成の狂歌が記される（『年譜』による）

●摺物「**梅樹の図**」（かつしか北斎画）図中に「文化三丙寅春」とある（『年譜』による）。

●摺物「**唐子と川を渡る虎**」（紙本着色一幅。画狂人北斎画。14.6×19.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）



※川を渡る母虎は子虎を銜え、背中に一頭の子虎を乗せている。向こう岸には渡り終えた父虎がいる。こちらの岸には二人の唐子が虎の川渡りを見ている。「水をおよく虎より先へさく梅のかハ向ふまでわたす春風 山郷亭村路」、
「虎の威をからても梅ハものゝふの 四方に匂へる春のきよ正 新玉亭年波」、
「唐竹にとらをよかける大凧も ひやうくとふく風に嘯く 芝の屋山陽」の狂歌が記される。

●摺物「雛飾り」（紙本着色。かつしか北斎画。26.1×38.8 北斎館蔵）

※庭先に松ノ木のある座敷で、振袖姿の女性たちが桃の節句で雛飾りの準備をしている。幕の内側の雛壇には、恵比寿と大黒天、五人囃、菱餅などが飾られている。お神酒徳利に紙幣を挿したものを黒塗りの三方に載せて運ぶ女もいる。

●摺物「潮干狩り」（花見判）（着色三枚続き。かつしか北斎画。19.4×52.8 北斎館蔵）

※桜の咲く海辺の丘で花見をしている五人の女。一人は揚帽子（角隠し）を被っている。

莫塵を担いだ男や、扇を振り上げている男、女の子を肩車している男たちもいる。海辺では、舟の浮かぶ中州で潮干狩りを



している多くの人々が小さく描かれる。

潮干狩り：花見判（北斎館）

●摺物「和藤内」（着色。かつしか北斎画。12.2×17.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※和藤内は、近松門左衛門作『国性爺合戦』の主人公。実在した明国の鄭成功をモデルにした人物で、中国人を父に、日本人を母に持つ。明国が鞏鞏国に責められたとき、父母とともに大陸に渡り明国の復興を図る。千里ヶ竹で虎を伊勢神宮の御札の威徳で従わせる。母の命を掛けた行動もあり、異母姉の錦祥女やその夫甘輝を味方にして鞏鞏軍と逆臣李諂天を討つ。図は、和藤内と母親と錦祥女がお互いに顔を向き合う姿を描く。賛に「とらの年」とある。狂歌「呉竹の八千代の春の遊ひとて 七人ほども寄ん虎けん 成三楼手酌酒盛」、
「千里有藪もうちこすとの年 もろこし迄も東風の手はしめ 梅月堂棍人」が記される。

●摺物「仙人」（紙本着色。18.8×12.6 すみだ北斎美術館蔵）

※崖の上に立ち、柴木の束を背負って、鉞を立てて振り返っている男。樵友亭 川瀬音常の狂歌が記される。

文化4 (1807) 丁卯 48 歳 葛飾北斎、北斎、画狂人北斎、北斎辰政、かつしか北斎、

印：北斎、亀毛蛇足、画狂人：こと(37 歳)、(富之助：21 歳)、阿美与(19 歳)、阿鉄

(17 歳)、阿栄(10 歳)

- ◇4 月 25 日、ロシア船、樺太・択捉に侵入。
- ◇4 月 27 日、アメリカ船、長崎に来航。
- ◇5 月 1 日、ロシア人、利尻島に侵入し幕府の船を焼く。
- ◇8 月 19 日、深川八幡祭礼の人出で永代橋が落ち多数の溺死者が出る。
- ◇12 月、幕府、ロシア打払い令。
- ◇菊川英山(21 歳)、歌麿風美人画で登場(ポスト歌麿)。
- ◇上方で大判錦画が増加。

★文化4年～7年にかけて読本挿絵を多作する(153冊に及ぶ)。

●読本『新編水滸画傳』初編後帙(1月。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印北斎。五冊。角丸屋甚助(衆星閣)/前川弥兵衛(盛文堂)版。東洋文庫/早稲田大学図書館/島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館蔵)。

※奥付に「文化四丁卯年春正月吉日」とある。以下、二編以降は高井蘭山翻訳となる。二編～四編初帙は文政11年(1828)～天保6年(1835)刊。四編後帙～六編までは天保9年刊(1838)。

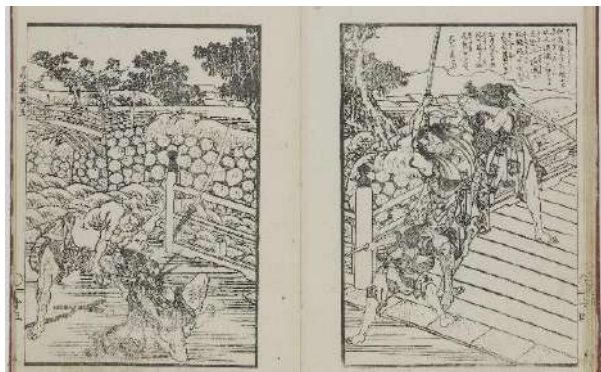
●読本『敵討裏見葛葉』(1月。五卷五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。平林堂庄五郎版。奥付に「文化四年丁卯春正月発販」とある。早稲田大学図書館/立命館大学ARC蔵)

『敵討裏見葛葉』五巻最終図(早稲田大学図書館)

●読本『新累解脱物語』(1月。『巷談因果経』とも。五卷五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印北斎。大坂の河内屋太助(文金堂)版。下総国羽生村にまつわる「累ヶ淵」伝説注をもとにした怪談。すみだ北斎美術館/神奈川県立歴史博物館蔵)

注)「累ヶ淵」伝説：累ヶ淵は、茨城県常総市羽生町の法蔵寺裏手辺りの鬼怒川沿岸の地名。江戸時代、この地を舞台とした累(るい、かさね)という女性の怨霊とその除霊をめぐる物語は広く流布した(ウイキペディアによる)

※五巻末尾に北斎画による馬琴像がある。



● 読本『椿説弓張月』（1月。角書「鎮西八郎為朝外伝」。前編。（半紙本六卷六冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。見開き 22.7×28.5。平林（平林堂）庄五郎版。馬琴の序は文化2年11月の稿。群玉堂（松屋善兵衛）の後摺がある）。

※後編六卷六冊（文化5年1月刊）・続編六卷六冊は文化6年刊。拾遺五卷五冊は文化7年刊。残編五卷六冊は文化8年刊。全二十八卷二十九冊を刊行。国立国会図書館/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館蔵）

『椿説弓張り月』前編第一巻「源為朝」（島根県立美術館）

【馬琴に低姿勢】

※同本執筆中の馬琴に宛てた手紙が『人間北斎』（p48 鈴木重三、昭和38年、緑園書房）に記されている（平成5年『日本浮世絵美術館所蔵 大揃北斎』p128で紹介）

「其節、為朝の写本三丁計り持参被致候間、是又御差図可被下候。御遠慮等欠而無用に御座候」（ルビは筆者）

前日馬琴が不在であったため置いて来た下絵について、校合が済んだならば受け取りたいということ、明朝は書肆平林堂の主人が来るので、その時「為朝之写本」を三丁分程度渡すことを述べている。

● 読本『墨田川梅柳新書』（1月。文化3年正月の稿。同7月の校正。墨摺半紙本。六卷六冊（初編欠）。曲亭馬琴作。葛飾北斎筆。印北斎。鶴屋喜右衛門（仙鶴堂）版。22.6×15.6 早稲田大学図書館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※奥付に「文化四年丁卯春正月発行」とある。

● 読本『そのゝゆき』前編（1月。『園の雪』とも。角書「標註」。半紙本墨摺。五卷五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。序文は前年夏の稿。印画狂人。角丸屋甚助（衆星閣）版。22.6×15.6 すみだ北斎美術館/早稲田大学図書館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※河内屋茂兵衛（群玉堂）の後摺がある。

※出版準備中、角丸屋と馬琴の間でトラブルがあり注、馬琴は以後角丸屋と絶交する。後まもなく本の版木が京都の版元に売り出されるということもあり、後編は翌年春に刊行する予告のみで出版されず。挿絵には巨大な蜘蛛や鯉が登場する。



注：前年（文化3年）夏、馬琴が彫師の米助の困窮を聞いて、鶴屋喜右衛門に『墨田川梅柳新書』の彫りを依頼したことで、米助が前金を貰って引き受けていた角丸屋甚助の『園の雪』の彫刻が遅滞する事態となり、秋になって角丸屋が町奉行所に訴えたため、馬琴も米助の彫刻遅滞の原因ありとして召喚・吟味を受ける。立腹した馬琴は角丸屋と縁を切る。10月、角丸屋甚助、榎本平吉とともに謝罪に訪れて『水滸伝』『園の雪』の次編の稿を要請したが、馬琴は断り続編は杜絶。数年後、角丸屋は『園の雪』の板木を京の近江屋治助に売り渡す（『曲亭馬琴日記 別巻』



（「馬琴年表」文化3年条より）。 『そのゝゆき』「第一園部薄雪姫」（早稲田大学図書館）

●読本『刈萱後傳玉櫛笥』（中本三冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印北斎。榎本屋平吉（木蘭堂）版。18.9×13.4 国文学研究資料館/東洋文庫：岩崎文庫/広島大学図書館/早稲田大学図書館蔵）

※文化3年（1806）『石童丸刈萱物語』（鶴屋金助版）の改題再刊されたもの。

●読本『遊君操連理餅花』（五冊。曲亭馬琴作。仙鶴堂（鶴屋喜衛門）版の表紙に「画狂人北斎筆」とある。大英博物館蔵）

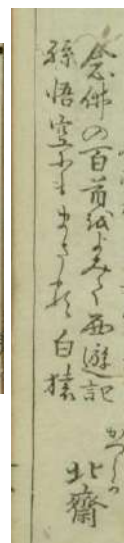
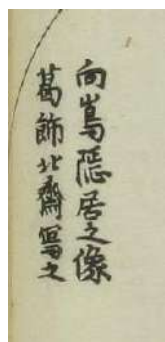
※享和4年（文化元年：1804）1月刊読本『小説比翼文』の改題再刊本とされる（高木元著『江戸読本の研究』第三節「馬琴の中本型読本」）

●読本『忠孝潮来府志』（談洲楼焉馬作。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。衆星閣・桂林堂合梓版。早稲田大学図書館蔵）

●追善狂歌集「市川白猿念仏百首追善数珠親玉」（1月。内題に「念佛百首市川寺白猿和尚述 自筆独吟」とある。烏亭焉馬撰。葛飾北斎写之。石渡利助版。早稲田大学図書館/愛知教育大学図書館蔵）

左：落款 中：「市川白猿念仏百首追善数珠親玉」（早稲田大学図書館）右：北斎の狂歌

※文化3年（1806）10月30日に没した市川團十郎を偲び、各狂歌師が念仏百首を書き、北斎は、白猿の「向鳥隠居之像」（葛飾北斎写之）一図を描く。



菱川宗理（宗二）は、白猿が「助六」で傘を振りあげて見栄を切った後ろ向きの姿を描く。他に、歌川豊国、鳥居清長、勝川春好、柳々居辰斎、北鷺らも描く。また、「かつ

しか北斎」号で「念仏の百首をよみて西遊記 孫悟空にもまさる白猿」の歌を詠んでいる。他に、山東京伝、石川雅望などの多くの文人も狂歌を寄せている。同書の前半には、白猿が病中に詠んだ「市川寺白猿和尚述 自筆独吟狂歌」の「念仏百首」も収める。

●肉筆画「釜に絵馬図」（絹本淡彩一幅。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。87.0×28.6 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※釜に雌雄の鶏を描いた絵馬が立て掛けてある図。図の上部に「東都滑稽作者 立川談洲楼 六十五翁焉馬」の落款のある長文の賛が記される。

談洲楼は寛保3年（1743）に生まれているので65歳は文化4年（1807）となる。但し、文化4年～10年（1813）の作と幅を持たせた解説もある。

釜に絵馬図（島根県立美術館）

●肉筆画「東方朔と美人図」（この頃か。文化3年～13年〈1806～16〉説あり。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。37.1×37.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※東方朔（前154頃～前93頃）は前漢の人で、武帝に仕えた学者。1つで3000年長寿を保つという西王母の桃を三個盗み食いをして命を長らえたという伝説の人。島田髻で振袖の娘が東方朔に酒を注いでいる。東方朔は額に手を当て朱塗りの杯を差し出している。盆に乗せた三個の桃も描かれる。



東方朔と美人図（島根県立美術館）

●肉筆画「酔余美人図」（この頃か。絹本着色一幅。裏彩色注の技法を施す。26.5×32.3 葛飾北斎画。印亀毛蛇足。鎌倉国宝館内・氏家浮世絵コレクション蔵）

注）裏彩色：絵絹の裏側からも彩色する技法。

※酔いに苦しんで三味線箱に伏せる芸妓の図。右手でこめかみを押さえている。箱の傍らには紅色の杯。

酔余美人図（氏家浮世絵コレクション）

●錦絵「三国妖狐伝」（2月。大判錦絵二枚続。北斎画。鶴屋金助版。各約37.8×24.6 東京国立博物館/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション蔵）



☆「第一斑足王後てんのだん（段）」

※天竺（インド）、唐（中国）、本朝（日本）の三国で絶世の美女になりすまし国家滅亡を謀る九尾の狐の物語。能「殺生石」に取材。市村座で高井蘭山作『三国妖婦伝』（享和3年～文化3年〈1803～06〉）にかけて刊行が文化4年6月に歌舞伎上演される。この主題がブームとなる中で直前の3月の刊行と思われる。

図は、西域インドの耶竭陀国の王子斑足の婦人となった華陽（九尾の狐の化身）が、正体を現し逃走する場面を描く。日本の伝説では、玉藻前（鳥羽上皇の寵愛を受けた伝説上の姫で、妖狐の化身）の前身とされる。



三国妖狐伝 第一斑足王後てんのだん（すみだ北斎美術館）

☆「第二唐土紂王館のだん（段）」

※妲己が紂王一家に残虐な行為をする場面を描く。

●錦絵「江戸八景」（中判。8枚。無款）

※天保初期の「江戸八景」（小判錦絵額装。前北斎為一画。赤松屋版）とは別図。

☆〈隅田川の暮雪〉

☆〈佃のあきの月〉

●団扇絵「雨乞小町」（この頃か。着色。無款。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※短冊を手にしている小野小町に長柄傘を差し出している仕丁たち。小野小町が勅命を受けて雨乞の和歌「千早ふる神もみまさば立ちさわぎ 天のとがはの樋口あけたまへ」、または「ことはりや日のもとなればてりもせめ さりとてはまた天が下とは」を詠んで雨を降らせたという伝説に基づく。歌舞伎等の七小町のひとつ。



雨乞小町（島根県立美術館）

【最後の役者絵か】

●役者絵「瀬川路之助の女房こむめ」（左図）と「沢村源之助の梅のよし兵衛」（右図）の二枚組（3月。縦大判錦絵。北斎画。版元不詳。各 38.7×25.4 キヨッソーネ美術館/ボストン美術館蔵）

※文政7年（1824）正月に「色紙判五枚揃の役者絵」の摺物「（三代目）市川門之助と（七代目）市川團十郎」があるが、本格的な役者絵としては、この作品が最後と見られる。

※歌舞伎「隅田春妓女容性」に登場する侠客梅の由兵衛の女房小梅に扮した瀬川路之助(後の四世路考)を描く。この頃の町家の女の帯は既婚・未婚を問わず年増は前帯、若い娘は後帯であったらしい。



左：瀬川路之助の女房こむめ（ボストン美術館） 右：沢村源之助の梅のよし兵衛（ボストン美術館）

※文化4年3月頃に路之助と源之助の二人によって演じられた記録はないことから、依頼されて架空の舞台を絵画化したものともいわれる。二人が出演した市村座は3月4日からの「橘盤代曾我」の二番目狂言「住昔元吉原」かもしれないが、『歌舞伎年表』によれば、源之助は「明石志賀之助」、路之助は「芸者こずえ」となっているという（『原色浮世絵大事典』8巻）。

●摺物「子供遊び図」（この頃か。大奉書全紙横長判二つ折一枚。着色摺物。葛飾北斎画。38.5×53.2（全図） 島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館蔵）

※俳人不易菴吾丸の古稀祝いに俳諧仲間が祝句を寄せたもの。二つ折りの下部分に天地逆に俳句を摺り、折り返して読めるようにしたもの。不易菴吾丸、雪中菴完来、神田菴小知など七人の狂歌が記される。

※家の外で、独楽を空中に回しあげる子ども。鯛の引き車の玩具を引く子ども。地面に「寿」の字を書く子ども。亀を手にして魚獲りの網を担ぐ子ども。木馬車（春駒）に跨る子ども。池で竿で魚を掬う二人の子どもたち。



子供遊び図（島根県立美術館）

●摺物「神楽面」（1月。「神楽面の図」「卯のはつ春」とも。着色。かつしか北斎画。13.8×26.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館蔵）

※神楽面と面を入れる箱が画面いっぱい描かれる。「旧年の雪につけたる面影も 残りて笑ふ春は来にけり 愛樹園樽明」、「玉琴のおりてと裏の組かざり 夫にも通ふ内の

松風 茅の屋賤女」、^{こんとん}「渾沌の昔を春のうつし画や すめるお内 濁るお外 庭訓舎」などの狂歌が添えられる。末尾に「卯のはつ春」とある。

文化5 (1808) ^{つねのえだつ} 戊辰 49 歳 北齋 ^{ほくさい}、葛飾北齋 ^{かつしかほくさい}、葛飾北齋主人 ^{かつしかほくさいしゅじん}、北齋辰政 ^{ほくさいとしまさ}、かつしか北齋 ^{ほくさい}、

画狂人北齋 ^{がきやうじんほくさい}、俵屋宗理 ^{たわらやそうり} ^{ほくさい} 印北齋、亀毛蛇足：こと (38 歳)、(富之助：22 歳)、(阿美与：^{おみよ}

この年嫁すか) (20 歳)、(阿鉄：この年夭死か。18 歳)、阿栄 (11 歳)

◇2月2日、初代並木五瓶没 (62)。

◇8月15日、フェートン号事件。オランダ船拿捕のためイギリス海軍のフェートン号がオランダ国旗を掲げて長崎港に入り、出迎えたオランダ人 2 名を連行。長崎警護が手薄であることが露見した。

◇9月2日、加藤千蔭没 (74)。

◇10月、「椿説弓張月」が新浄瑠璃となり大坂で上演される。

◇12月4日、森羅万象没 (55)。

◇この年、江戸の貸本屋は 650 軒、顧客 10 万人といわれる。

◇この頃、合巻が流行。

○3月、上田秋成『春雨物語』成稿。

【長女嫁ぐ】

★長女阿美与、柳川重信^注に嫁ぐ (20 歳)。文化 10 年 (1813) 頃説あり (中右瑛「北齋九十年、波瀾万丈の生涯」『北齋 世界を魅了する浮世絵志と弟子たち』所収)

注) 柳川重信：俗名、鈴木重兵衛。喜多村信節『武江年表補正略』の天保 3 年 1 月 28 日条によれば、北齋は一旦重信を養子としたが、後に絶縁する。以後、重信は独立して版下を描くも北齋は拒否する。柳亭種彦が仲介をしてから阿美与を嫁がせ婿とした。(『葛飾北齋伝』p 307～308)

【次女没す?】

★次女阿鉄 (阿辰) 没か。阿鉄の死亡時期は不明だが、この頃と推定する。『葛飾北齋伝』では「次女、名は、^{つまびらか}詳ならず。一説に、阿鉄、画をよくし、他へ嫁せしが、夭死す。一説に、幕府の用達某に嫁せし」とある (ルビは筆者による)。

一方で鈴木重三による脚注では、「他へ嫁ス。画工ニアラズ。早世。御鏡御用ノ家ニ嫁ス」と蕙斎英泉増補の『続浮世絵類考』の記事を紹介している (p 308。句読点・ルビは筆者による)。またリチャード・レイン『伝記画集 北齋』では 20 代で死亡としている (p 97)。

★5月23日 (文化5年と推定)、^{きよくていぼきん}曲亭馬琴宛北齋の書簡朱筆貼紙 (川瀬一馬編『曲亭来簡集』〈月の巻〉所収。「国立国会図書館デジタルコレクション」より)

「北齋、はじめは奇刷（版刻）をまなびしが、捨て画（売り絵か）を勝川春章にまなびて、画名を春朗といへり。後に俵屋宗理が名氏を冒し、又その名氏を弟子にゆづりて北齋に更め、又これを弟子にあたへて載斗と更む。只北齋のミ世にあらはれたり。居を転ずると名ヲかゆるとは、このをとこほどしばくなるハなし。壮年、その叔父御鏡師中嶋伊勢が養子になりしが、鏡造りのわざをせず、この子をもつて職を嗣せしが、そハ先だちて身まかれり」⇒安永2年条参照。

★同書簡表書「曲亭先生 机下 かつしか北齋拜」

「尚々、大坂之儀注、参上御面談にて可申上候。以上昨日は京橋へ御出之由、御空庵へ下画（筆者注：『椿説弓張月』のもの）差上申候。今日御校合相済候へば、何卒此ものへ被進可被下候。当年中出来之積りニ相認メ可申候。明朝は平林主人（筆者注：版元平林庄五郎）被参候間、其節為朝之写本三丁斗り持参被致候間、是又御差図（筆者注：馬琴の画稿上の指示）可被下候。御遠慮等、決而御無用ニ御座候。以上 二白（追伸）。御家内様へもよろしく御寄声奉願上候。以上 五月廿三日 曲亭先生 かつしか北齋拜」（「国立国会図書館デジタル・コレクション」より）。

注）「大坂之儀」：「文化五年十月に、大阪で『椿説弓張月』が興行された時に、それに関して何らかの打ち合わせに、馬琴のもとに改めて赴くという意だと思われます。その摺物が残っており、そういった類の打ち合わせと推測されます」（久保田一洋〈WEB「浮世絵文献資料館」による〉）

【亀沢町に新居をかまえ、書画会を催す】

★本所亀沢町（現東京都墨田区亀沢）に新宅を構える。現両国3丁目35・36番、4丁目30番の狭い地域で、豊後府内藩下屋敷跡辺を本所亀沢町と呼ばれていたが、現在の「亀沢」は、江戸東京博物館前の北齋通り両側1～4丁目、大横川親水公園までをいう（Web: amebaownd.com「江戸町巡り」による）。北齋誕生地の南割下水（本所亀沢町二丁目辺。現墨田区亀沢2-15-10、両国東あられ本舗両国本店辺）近く。

※新築披露として8月24日、柳橋の河内屋半次郎の楼にて書画会を催す。

北齋新築報状（文化五年八月二十四日条）

「こたひ、やつかれとし浪の五十路ちかく、亀沢町にさゝやかなる庵をむすひ、いのちなかうせむ事をほつするの折から、ねもころにかたらひつる諸君子のさまくに風流を尽くして、新宅を賀し玉わること楽くて、露けき葉月末の四日、柳はし河内や半二郎か楼をかりて、四方八方の名家をあつめ、終日祝ひの盃をめぐらして、恩をしやせん（謝せん）とす。乞ねかはくハ、晴雨を言す、いと賑々しく枉駕あらむ事をねこふのミ。諸名家画賛かけ物、六十。北齋自画之絹地、五ツ。画讚扇、七十。会主 葛飾北齋 補助 扇面亭折主」（句読点・ルビは筆者）

この会で北齋は絹本肉筆画5図を出している。

注）河内屋半次郎：両国柳橋にあった会席料理屋。河半と呼ばれた。二階で書画会が多く催された。書画会は、書画を揮毫し希望者に販売する会。

※亀沢町には83歳、88歳にも住んだか（『和楽』2017年9月。10・11月号 p71掲載の「嘉永 新鐫 本所絵図」による）。

★8月8日、17日、柳亭種彦と交流する。『柳亭種彦日記』文化5年8月8日条には〈北斎老人北雲（北斎の門人）会ふれにきたる〉とある。国文学研究資料館『日本古典籍総合目録』によると弟子北雲は文化13年（1817）から文政9年（1826）にかけて、絵本が一点、読本六点で、著名はすべて東南西北雲である。種彦作品に挿絵は描いていない。北斎は弟子のために画会の宣伝もしたのであろうか（WEB「浮世絵文献資料館」による）。

☆同上八月十七日条

「北斎老人の許を訪ひ、あけ巻（読本『総角物語』後編、柳亭種彦作・葛飾北斎画。文化六年刊）かんばん袋へうし（看版袋表紙）をたのむ」

●合巻『敵討身代利名号』（1月。前三冊、後三冊。全六冊。曲亭馬琴作。表紙：葛飾北斎画。絵題簽：馬琴作。北斎画。鶴屋喜右衛門（仙鶴堂）版。早稲田大学図書館蔵）

※『合巻年表』補注では北斎が馬琴の合巻に挿絵を描いた唯一のものとする（Web「浮世絵文献資料館：版年表一覧」より）。

『敵討身代利名号』第1図（早稲田大学図書館）



●読本『椿説弓張月』後編（1月。角書「鎮西八郎為朝外伝」。半紙本六冊（続編六冊は12月）。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。平林堂庄五郎（平林堂）版。国立国会図書館/京都大学文学研究科図書館書館/すみだ北斎美術館蔵）奥付には「文化五年戊辰正月吉日発販」とある。前年3月の序。9月の跋。

●読本『椿説弓張月』続編（12月。半紙本六冊。平林堂庄五郎版。国立国会図書館/京都大学文学研究科図書館蔵）序文は6月。

●読本『頼豪阿闍梨恠鼠伝』前編（1月。半紙本五卷五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印北斎。四谷怪談をもとにした作。宝善堂（丸屋徳造）版。大英博物館/名古屋市蓬左文庫/早稲田大学図書館/国立国会図書館蔵）

※馬琴の序文末尾には「文化丁卯（文化4年）暑月甲子」（早稲田大学図書館版）とある。奥付には「文化第五載戊辰正月」（国立国会図書館デジタルコレクション）とある。河内屋茂兵衛（群玉堂）の後摺がある。
頼豪阿闍梨恠鼠伝 前編見返し（大英博物館：立命館 ARC より）

●読本『頼豪阿闍梨恠鼠伝』後編（10月。四冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印北斎。仙鶴堂：鶴屋喜右衛門版）



※奥付には「文化第五載^{きのえわたつ}戊辰十月吉日発販」とある。序文は前年12月。

●読本『三七全伝南柯夢』(1月。半紙本六卷六冊。墨摺。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印^亀毛蛇足。榎本平吉版。東洋文庫蔵)

※奥付には「文化五年^{きのえわたつ}戊辰正月吉日発販」とある。前年4月の序。10月の跋「江戸出版書目」には、「板元売出須原や市兵衛」とある。「江戸作者部類」には、「戊辰三月下旬製本発販、初日は二百部のみにて板元榎本平吉色を失えど、初秋頃迄に貸本屋等に千二百部売る」とある(以上、『曲亭馬琴日記 別巻』〈p 339〉の年譜による:中央公論新社)。河内屋茂兵衛の後摺版がある。

歌舞伎と人形浄瑠璃『艶容女舞衣』の美濃屋三勝と茜屋(赤根屋)半七による大阪千日の墓所での心中事件(元禄8年〈1695〉12月7日)を題材にしたもの。『南総里見八犬伝』『椿説弓張月』と合わせて曲亭馬琴の三大奇書とされる。

【挿絵で馬琴と争う】

☆「この本、末段三勝半七が情死に赴く所に於て、北斎、野狐の食をあさる体^{てい}を画^{えが}きて、寒夜の景物とす注。馬琴この板下をみて曰く、此の如く蛇足を添ふるが為に、情死の男女は、恰野狐に誑惑(人を惑わすこと)さるゝものゝごとし。速に削除すべしとて、板下をかへしければ、北斎大に憤り、彼は余が挿画によりて、著作の意を補ふを知らざるなり。強て削り去らんとならば、前回より画きし挿画を返還せよ。余は自今馬琴が著作の挿画には、筆を下さずといふ。版元甚迷惑し、百方奔走して、漸く和解を結びたりと」(『浮世絵類考』別本:『葛飾北斎伝』p 86所収 句読点・ルビは筆者による)。

注)初編七の十丁目の図。情死に行く二人の背後遠くの道で「みのや」と書かれた提灯を持つ男と、「寒中修行」と書かれた提灯を持つ男が行き交う。その更に遠くに、七匹の野狐が小さく描かれている。

※飯島虚心は上記のエピソードを『浮世絵類考』別本からの引用としているが、鈴木重三の脚注では、『浮世絵類考』の諸本にこの記事は見当たらないが、『只誠埃録』式百三所収「倭絵誌伝浮世絵之部」の「葛飾北斎」の項の「三七全伝南柯夢」に甚だ類似した文章があるとしている。



三七全伝南柯夢 (早稲田大学図書館)



拡大図

●合巻『狂訓己が津衛』(五冊。十辺舎一九作。画狂人北斎画)

※『改定日本小説書目年表』（ゆまに書房 1977 年）によると「Web 浮世絵文献資料館：浮世絵氏名一覧」で紹介している。

●合巻『敵討報之蛇柳』（1 月。角書「夫高野山是八木噉」または「高野山矢木噉」。六冊。

松下井三和（唐来参和）作。北斎画。蔦屋重三郎版。専修大学図書館蔵）

●合巻『北畠女教訓』（1 月。五冊。十返舎一九作。画狂人北斎画。岩戸屋喜三郎版。国立国会図書館蔵）。序文には「文化戊辰春正月」とある。翌文化 6 年（1809）に改題再摺版『勇略女教訓』（五冊）が出る。

●読本『阿波之鳴門』（1 月。半紙本五卷五冊。柳亭種彦作。奥付に「画工 葛飾北斎」とある。村田治郎兵衛・榎本屋惣右衛門・平吉版。文政 7 年（1810）に後印本が出る。島根県立美術館：永田コレクション蔵）奥付には「文化五戊辰年正月吉日」とある。

●読本『春宵奇譚 絵本壁落穂』後編（1 月。五冊。小枝繁作。葛飾北斎画。見返しには「北斎辰政画」とある。印亀毛蛇足。角丸屋甚助版。立命館 ARC/広島大学図書館蔵）前編は文化 3 年（1806）1 月刊。奥付に「文化五戊辰年春正月発行」とある。

●読本『新田功臣録』後編（『箭口神靈感得奇聞新田義統功臣録』とも。角書「知神霊」。五卷。小枝繁作。葛飾北斎画。衆星閣版。早稲田大学図書館蔵）

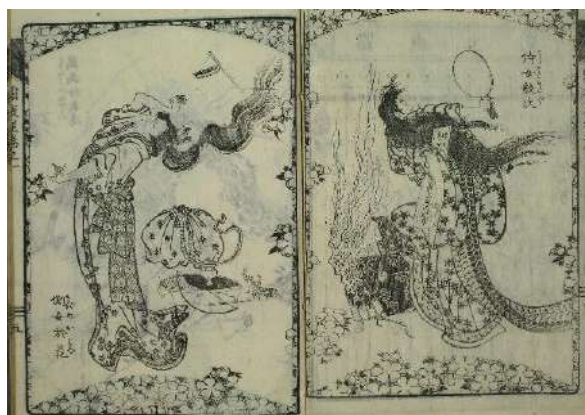
●読本『由利稚野居鷹』（1 月。五冊。万享叟馬の戯編。奥付に「画工 葛飾北斎」とある。河内屋茂兵衛・河内屋藤兵衛・榎本屋平吉の合梓。早稲田大学図書館/国文学研究資料館）※叟馬の序文は文化丁卯（4 年：1807）正月。奥付には「文化戊辰正月吉日」とある。後年、『由利稚一代記』と改題再摺される。

●読本『鳩物語』（1 月。角書「国字」。五冊。芍薬亭長根作。葛飾北斎画。西村宗七・柏屋忠七版。島根県立美術館蔵）

※鳥羽上皇時代の三姉妹が霊となって復讐するという話。奥付には「画人葛飾北斎 文化五戊辰年正月」とある。

●読本『霜夜星』（1 月。角書「近世怪談」。墨摺半紙本五冊。柳亭種彦作。五卷末尾に「かつしか北斎画」とある。大坂の河内屋太助、江戸の山崎平八・若林清兵衛、京都の植村藤右衛門の合梓版。22.5×15.9 国立国会図書館/早稲田大学図書館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/名古屋市蓬左文庫/日本浮世絵博物館蔵）

※柳亭種彦の読本初作といわれる。本文は文化 3 年（1806）に完成していて、歌舞伎「四谷怪談」の元になったといわれる。奥付に「文化五年戊辰春正月吉日」とある。北斎は、巻一に 13 図、巻二に 7 図、巻三に 7 図、巻四に 6 図、巻五に 5 図を描く。



『近世怪談 霜夜星』侍女歌次（右）と側女於花（左）（早稲田大学図書館）

●読本『復讐快事駟路春鈴菜物語』（前編二巻二冊。節亭琴驢注作。俵屋宗理・歌川豊広画。柏屋半蔵：柏栄堂版）

注) 節亭琴驢：後に岡山鳥を名のる。弟子を取らなかった曲亭馬琴の弟子といわれる。後に式亭三馬の門に入る。見返しに「曲亭門人節亭琴驢著」とある（高木元『江戸読本の研究』「第二章 中本型の江戸読本 第二節 中本型読本書目年表稿」より）。

●読本『安褥多羅賢物語』（五冊。振鷺亭作。北斎画。西村屋源六版）

※この年は、西村屋にトラブルがあり、文化6年1月に刊行されたという説あり（リチャードレイン『伝記画集 北斎』p330）。画工が北斎かどうか不明。現在稀観本という。

●俳諧本『ひとり発句』（『独発句』とも。この頃か。二冊。とも。亀台（恵厚尼亀台）吟。安宜（高橋安宜）編。画狂老人北斎画。和泉屋五郎兵衛版。国立国会図書館/大英博物館蔵）

※多くの俳人の句と多くの絵師の絵を集めたもの。北斎は下巻の亀台の句に「落雁」（花の上に落下する雁の絵）一図のみ描く。左ページに発句、右ページに北斎の画。

●屏風図『江戸名所図』（1月。六曲一双。着色。百琳宗理画。伊勢屋喜右衛門版）

※檜崎宗重『北斎論』（p168）による。左隻に真乳山、右隻に洲崎を描く。漢画風の筆法。

●肉筆画「江口の君図」（「象に乗る遊女」とも。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。26・9×21・4 島根県立美術館蔵）



※江口は、大阪府東淀川区の神崎川が淀川の本流から分れる辺りをいう。遊郭の栄えたこの地に西行法師が雨宿りをした折、普賢菩薩の化身である遊女の妙と和歌を詠み交わしたという謡曲「江口」からの取材。

この頃は「江口の君」とは、俗に舟饅頭（舟で春を鬻ぐ女）を指した。一般に、白象に女性が乗る図は普賢菩薩の見立である。国宝「普賢菩薩蔵」（平安時代。東京国立博物館蔵）に先駆的な絵がある。

江口の君図（島根県立美術館）

※右下に衣冠束帯の男が座っている姿が書き加えられている本図の画稿がフリーア美術館にあるという（紙本墨絵。26.3×17.8 『2005 北斎展』図録より）。

●摺物「巳春屋」（1月。葛飾北斎画）

※図中に「初春に妙儀いのりし正直の うらべにかみの札そやどれる」とある（『年譜』による）。

●摺物「天の羽衣」（この頃か。着色。かつしか北斎画。全紙版 18.9×52.0 ボストン美術館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※謡曲「羽衣」に取材した図。三河国三保の松原で、松にかけられた天の羽衣を漁夫が持ち帰ろうとすると、羽衣が無いと帰れないと天女が懇願する。漁夫は羽衣を返すかわりに舞を披露してもらうという筋書き。

図は、太い松の木にかかった羽衣が優雅に靡き、その下に漁師が右手をかざして憂い顔で立っている天女を見ている。沖の方には三保の松原が続いている。図の左端に「落款」がある。図下半分に長唄の番組が逆さに書かれている。 天の羽衣（部分：ポストン美術館）



●摺物「三美人の揮毫」（横大判二枚。葛飾北斎画。花押。着色摺物。国立国会図書館蔵）

※左の一人は筆の先を嘗め、座って扇子に文字を書こうとしている。中の一人は立って二曲一双の左面に文字を書いている・国立国会図書館の解説では、「夷」と読める次の「口」部分は「毘」を書こうとしている途中で、狂言の「夷毘沙門」を正月の祝言として書こうとしている図としている。もう一人は文机の硯に墨を摺っている。屏風の他の一面には、「日本三筆」や「葛飾北斎画」の落款が書かれている。浅遊庵夢人と浅草庵市人の狂歌が記される。

●摺物「為朝と汐汲」（着色。葛飾北斎燈下画。38.7×52.4 平林堂（平林庄五郎）版。すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※『椿説弓張月』を大阪の佐藤太が浄瑠璃「鎮西八郎 誉弓勢」にして11月13日に興行した際に出された案内。下半分は二つ折りを顧慮して、「あづまぶり新曲弓はりつき」と題して曲亭馬琴の案内文が逆さに記されている。

「(略)余が著述の稗本弓張月に振りて、浪花中の芝居の顔見せ、今茲仲冬十三日より新に場をひらくと聞えしに贈るとて、かつしか翁の画るまゝに書肆平林堂の需に応じて 曲亭馬琴のぶ並書」とある。

上半分の右側に天秤を担ぐ汐汲みの女二人の前で、剛弓を立てて、日の丸の扇を持って片膝をついて見得を切る為朝を描く。図上半分の左には「祝言 為朝の名題芝居にあくるかな 弓はり月のいるあたにとて 簑笠隠居注」とある。とある（ルビは筆者による）。



為朝と汐汲（すみだ北斎美術館）

注) 簑笠隠居：狂句亭馬琴の剃髪・隠居後の号。

●摺物「神僧歌人図」（合作。着色。画狂人北斎画）

※旅の僧侶、役者、大黒天、羅漢、僧正、比久尼、達磨などが描かれ、北斎は「達磨」を描く。歌川国芳は「羅漢」を、喜多川歌麿は「袈裟を着た僧侶」を描く。

●摺物「八はん続 辰巳の里」（紙本着色。13.8×18.6 すみだ北斎美術館蔵）

※箱枕に右手を置いて体を投げ出して寛いでいる芸妓。その右にも打掛が着崩れたままの前帯の女も体を投げ出すようにして寛いでいる。

文化6 (1809) 己巳 50 歳 葛飾北斎、北斎、画狂人北斎、東陽北斎、かつしか北斎 印

亀毛蛇足、画狂人、花押：こと(39 歳)、(富之助：23 歳)、(阿美与：21 歳)、阿栄(12 歳)

- ◇1月1日、江戸日本橋・本所が大火。
- ◇6月、幕府、権太を北蝦夷と改称する。
- ◇8月23日、江戸大風雨。
- ◇2月12日(西洋暦)、ダーウィン生(～1882)。
- ◇5月31日(西洋暦)、ハイドン没(78)。
- 曲亭馬琴、『松染情史秋七草』(お染久松)。
- 1月、式亭三馬、『浮世風呂』初編刊。
- 楸形蕙斎、俯瞰図「江戸一目図屏風」(6曲1隻)

★この頃、本所両国橋辺に住むか。翌文化7年(1810)1月刊の読本『陔馭妹背山』の奥付に「江戸本荘(本所)両国橋辺隠士」とある。尾上町と元町の境辺注(『和楽』2017年9月。10・11月号 p.71掲載の「嘉永新鑄 本所絵図」による)。

注：現東京都台東区両国1丁目辺か。

【柳亭種彦との親交】

★この頃、柳亭種彦の日記に北斎がしばしば登場、7月24日、9月4日、その他親交あり。

※以下、朝倉次彦『柳亭種彦日記』古典文庫より(ルビ、注は筆者)。

☆〈文化六年六月四日条〉

「今曉八ツ頃(注：午前2時頃)、三筋町西町(注：現東京都台東区三筋1丁目・2丁目辺)に火事あり、火事見まひに三筋町へゆく、それより北斎方へゆき、日めもす(注：一日中)あそぶ」

※種彦は下谷御徒町に住む。火元の三筋町は近い。北斎はこの頃には蔵前浅草近辺に住むか。

☆〈十二月十一日条〉

「梭江(注：柳川藩留守居・西原新左衛門)君子え手紙遣す、北斎主より宝船板(注：七福神宝船)来る」

☆〈十二月廿二日条〉

「蝶々(注：蝶々庵百花か)許一寸訪ひ、桃川子訪問にゆき、雪ふり出せしまゝ傘かり来る(中略)北斎歳暮にきたるよし、あわず(後略)」

☆〈十二月廿四日条〉

「空はれたり、北齋子の許を許（おとな）ひ、北嵩子（筆者注：北齋門人）とともに西村（注：版元西村屋与八か）へよる」

★牧墨僊の絵本『狂画苑』（文化6年、東壁堂版。顔の運動、手長・足長の絵）を北齋は見たか。

【北齋の看板絵は中評でも鳥居派に並び描く】

★『街談文々集要』注p167（石塚豊介子編・文化六年「三朝之改名」）の記事に、「（略）此節二番目狂言招牌（注：看板のこと）一枚、北齋画キたり、中評なり。看板は鳥居ニとゞめたり。」とある。（WEB「浮世絵文献資料館」より）。

注）街談文々集要：文化文政期（1804～29）の巷説を集めたもの。「文々」は文化・文政の略。文化8年にも文化7年のこととして、北齋の看板絵についての記事がある。

※本年の顔見世に絵看板を一枚描くと『我衣』（加藤曳尾庵）に記載ありとして、『年譜』では次の記事を紹介している。

「画看板は、代々鳥居家にて画く処、文化六冬顔みせの時、葺屋町の看板、東の入口の上壹枚、葛飾の北齋画く。又当午の春（文化7年：1810）狂言には、二枚画く。鳥居は四枚画く。依之、両方共画看板に画名を筆せしは、去年より始り也」（ルビは筆者による）

この年に画看板を1枚、翌年に2枚描き、本来は鳥居派が芝居の画看板を描いていたものが、文化6年からは鳥居派と並んで北齋も描くようになったというもの。

●読本『石堂丸刈萱物語』（五冊。曲亭馬琴作。葛飾北齋画。鶴屋金助版）

※文化4年（1807）1月の読本『刈萱後傳玉櫛笥』の改題再摺版。題簽は勝川春亭が描く。

●読本『後日之文章』（角書「仮名手本」。1月。五冊。忠臣蔵の異作。鳥亭（立川談洲楼）焉馬作。葛飾北齋画。印亀毛蛇足。角丸屋甚助版。立命館大学 ARC/島根県立美術館蔵）〈『葛飾北齋伝』p33では文化5年刊としている〉奥付には「文化六年己巳正月発行」とある。

※焉馬の自序（文化5年初夏の記事）には、文化5年に土佐掾座で上演した忠臣蔵の後日譚の浄瑠璃を讀本仕立てにして出版した旨が書かれているという（『北齋クローズアップ I』p99 東京美術）。

また、同自序の末尾には「信友、葛飾北齋の画図にあらはし、今仮名手本後日之文章と題する而已 干時文化五年戊辰初夏 東都滑稽作者 六十五齡立川談州楼焉馬著述」とある。『仮名手本 後日之文章』巻之一（立命館大学 ARC）



●読本『新板 飛驒匠物語』（1月。半紙本。墨摺六冊。六樹園飯盛〈石川雅望・狂歌名：宿屋飯盛〉作。序文には北齋の勧めで筆をとったとある。画匠葛飾北齋画（36 図）

扉・口絵を含む)。印亀毛蛇足。彫工：宮田吉兵衛・中藤留吉。角丸屋甚助版。22.4×15.4 早稲田大学図書館/国立国会図書館/東京都江戸東京博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵）奥付には「文化六己巳年正月発兌」とある。

※序文「かゝるふみつくり出んは、おとなげなくほいなき人まねにこそとて、たびぐ人のそゞのかしつれど、うけひかをやみにしを、此ごろ北斎のぬしふりはへとぶらひきて、せちにすゝめ物せらるゝに、すまひいなまんもなかくにほこらはしくや、となまじひに筆をとりつ（略）」（国書刊行会『石川雅望集』p204）

文を作るのは人真似のようで人に頼まれても久しく断っていたが、北斎が訪ねて来て、強く執筆を勧めたので、やむなく筆を執ったというのである。

※『画人読本外題作者画工書肆名目集』には、「（文化五年）閏六月七日校合本来ル廿七日出来本来ル 八月十五日売出シ」とあり、実際には文化五年の秋には市中に出回っていた（『石川雅望集』解題p434）。

『新板 飛騨匠物語』第五回「墨繩がつくれる木の鶏へまことのはとりに来たりて蹴る所」（早稲田大学図書館）



●読本『繪角物語』後編（1月。二冊。中版。柳亭種彦作。扉には北斎画。奥付には画師葛飾北斎とある。越前屋長右エ門版 国立国会図書館蔵）奥付には「文化六己巳年正月吉日」とある。

※前編（優遊斎桃川画）は文化5年（1808）刊だが、北斎は描かず。天保14年（1843）4月に前後編合冊で『江戸紫三人同胞』として改題再刊される。

●読本『忠孝潮来府志』（1月。角書「忠孝美談」。五冊。談州楼焉馬（烏亭焉馬の戲号）作。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。衆星閣（角丸屋甚助）、桂林堂（石渡利助）合梓版。早稲田大学図書館/島根県立美術館蔵）

※1月刊とあるが、実際には前年の8月の発売。奥付には「文化六己巳年春正月発兌」とある。焉馬の序文には「干時文化四年 卯仲秋」とある。

【彫刻頗る鮮明なり】

●読本『恋夢魘』（春。角書「於陸幸助」前篇〈色之巻・声之巻・香之巻の三冊。全8冊〉。見開き墨摺半紙本。楽々庵桃英作。葛飾北斎画。篠屋徳兵衛版。見開き約23.0×28.5 国立国会図書館蔵。彫工：菊池茂兵衛・好静堂綱之の二人）「彫刻頗る鮮明なり」（『葛飾北斎伝』p291）奥付には「文化六己巳春」とある。 『恋夢魘』（国立国会図書館）



※後編は大須賀(栗杖亭)鬼卯作・一峯齋馬田画で文化11年(1814)刊。北齋は描かず。

●読本『山榊太夫栄枯物語』(1月。五冊。梅暮里谷峨作。表紙に「葛飾北齋画 楽養堂史籍堂梓」とあり、五冊奥付には「文化六己巳歳正月吉日発販 麴町平河丁二丁目 書肆河内屋太助 村田屋次郎兵衛 大坂屋茂吉 関口平右衛門 梓」とあり、前頁に「画工葛飾北齋 印亀毛蛇足」と記されている(立命館大学ARC版)。

早稲田大学図書館版奥付には「画工葛飾北齋 印亀毛蛇足 大坂心齋橋通南本町 書林浅井龍章堂 河内屋吉兵衛」とある。島根県立美術館：永田コレクション/早稲田大学図書館/立命館ARC蔵)

●肉筆画「墨堤三美人図」(この頃か。横長判絹本着色一幅。葛飾北齋画。印亀毛蛇足。52.9×114.7 個人蔵)

※縁台に腰を下ろす女二人。もう一人の女は手拭を被り、その端を口に加えて側の川に足首まで入り、箆を持って魚を掬おうとしている。



墨堤三美人図(朝日新聞デジタルより転載)

●肉筆画「猿と蟹図」(3月1日。柳塘(不明)の書画会で描く。随筆『我衣』(文政12年。加藤曳尾庵著「かとうえいびあん」とも)による。(『浮世絵八華5北齋』所収、永田生慈「北齋の生涯」の記事から)

●錦絵「風流源氏うたかるた」(8月。大判縦絵4枚揃。葛飾北齋画。野田七兵衛版。日本浮世絵博物館蔵)

※『源氏物語54帖』をカルタにしたもの。縦大判一枚に30枚の札を描き、四枚目の大判には、20枚の札と、下8枚分のスペースに、硯を乗せた文机に肘を乗せている貴女を描く。実際に厚紙に貼って使用した。和泉屋市兵衛の後摺版がある。

●看板絵「芝居看板絵」(11月。顔見世の芝居看板を描く。随筆『我衣』による。『浮世絵八華5北齋』所収、永田生慈「北齋の生涯」の記事から)

●扇面画「時鳥図」(紙本墨絵淡彩。扇面一面。東陽北齋画。下弦22.8×17.8 上弦50.4) ※扇右に時鳥図。扇左の川面に狂歌が記される。

●扇面画「禅機図注」(この頃か。紙本墨絵淡彩。扇面一面。北齋。十面の扇面画帖の一。上弦46.2、下弦19.8×18.1)

注) 禅機図：禅の悟りの契機や、禅僧応答の機微を象徴的に表現した禅宗独特の絵画をいう。

※白梅の枝を燃やす僧の図。傍らに斧が置かれている。

●摺物「鞠と玩具」(「鞠と蛇の玩具」とも。紙本着色一幅。葛飾北齋画。13.3×18.4 すみだ北齋美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※鞠に正月を示す羽つきの羽根、本年の干支を示す蛇の玩具が重なるように描かれる。

「風の香ハゑふた礼者の跡おふて となりへはひる
わかやとの梅 浅雨庵疎喜」、「草や木のかそいろ
のミか玉ミその 花も珍しはるさめのやと 浅湖庵
照景」、「めをふけは青犬しやうの垂柳 かぜにそ
うねる枝も長むし 浅倉庵 巳巳(己巳か)」とあ
る。他に、浅雨庵疎喜・浅湖庵照景の狂歌が記され
る。

鞠と玩具(すみだ北斎美術館)



●摺物「遠眼鏡」(紙本着色摺物。葛飾北斎画。14.0×18.7 北斎館蔵)

※遠眼鏡の形と覗いた風景を同時に描いている。覗
いた景色は、橋を渡る人々や洞窟が描かれる。「巳
巳の初春」とある。「長閑なる春をみまちの滝の川
つちのとひらく岩屋弁天 秋風涼」の狂歌が記さ
れる。瀧の川(瀧野川)と岩屋弁天が記されている
ので、その辺りの景色か。岩屋弁天は、現在の
真言宗金剛寺(現東京都北区滝野川3-88-17)で、
紅葉の名所であった。

遠眼鏡



(北斎館)

●摺物「羽二枚」(1月。「二枚の羽根図」とも。横六つ切り摺物(大奉書を縦に二つ、横
に三つに裁断したもの)。春興狂歌摺物。葛飾北斎画。花押。ベルリン美術館蔵)。

※庭訓舎(綾人)の狂歌の後に「巳のはつ春」とある。図は、根元を飾り紐でくくった花
羽根が二枚、交差するように置かれている。三首の狂歌の末尾に、それぞれ「つるのもと
白」「鶴の羽」「鷺の羽」とあるので、鶴と鷺の羽を描いたものか。

●摺物「七福人図」(1月。「七福神の正月準備」とも。横中判着色。かつしか北斎画。島
根県立美術館：永田コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※画中左に「つちのとの己」(文化6年)とある。恵比寿が盆に鯛を乗せ、弁財天が紙を
手に持ち思案げな顔をし、大黒天が盆に餅を乗せて立っている。毘沙門天は床の間の像を
整え、福祿寿と寿老人と布袋は三宝に乗せた祝い物を物色している。床の間には桑楊庵
(頭光)、浅草庵(市人)、浅倉(朝倉)庵(三笑)の狂歌がそれぞれ幅装されて掛け
られている。

※辺仁之元子(浅草側の三河擣衣連の領袖朝倉庵三笑の妻)が軒白梅に改名する際の改
名披露の春興狂歌摺物。擣衣連は享和4年(1804)の『狂歌入東海道』(『春興
五十三駄之内』)と文化2年(1805)の「狂歌百人一首」の作画を依頼している。

●摺物「還城楽図」(中判。着色。葛飾北斎写。20.8×13.8 島根県立美術館：永田コレク
ション蔵)

※「還城楽」とは、雅楽の中の唐楽(唐朝の宮廷の娯楽音楽や中国を経て渡来した東南ア
ジアの音楽など)の曲名。蛇を好んで食べた西域の人が、蛇を見付けて喜び勇んで持ち帰

るといふ舞。己巳の年を念頭に置いた摺物。襦袢（平安中期以降の武家の女子の正装。打掛とも）とよばれる装束に朱色の奇怪な面を付け袴と金色の蛇を持つ（「デジタル大辞泉」による）。図は、奇怪な面を付けて、袴ととぐろを巻いた蛇の作り物を持ち、幅広の襦袢を纏って踊る姿を描く。桃の屋漫歳の狂歌が書かれる。

●摺物「**幟を縫う女たち**」（「**幟織りぬい**」とも。着色横長判。画狂人北斎画。東京国立博物館蔵）

※座敷で六人の女たちが長い幟旗を縫っている。ふすまには富士山の絵が描かれ、その前には傘が開いて置かれている。図左の床の間に「文化六年己巳」と書かれている。『年譜』に記載されている「**奉納幟作りの図**」（画工名なし。幟に「芸者中」とあり）と同図。

●摺物「**開帳の支度**」（横長判。摺物。画狂人北斎画。東京国立博物館蔵）

※この年の江の島開帳に合わせて摺られたか。享和3年(1803)にも開帳されているので、その頃に制作されたともいわれる。

●摺物「**茶屋の図**」（1月。葛飾北斎画。『年譜』による）図中に「文化六」とある。

●摺物『**三弁天**』（この頃か。一図未見。着色。横小判錦絵揃物。北斎画）

☆〈**洲崎**〉（12.8×17.9 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/ヴァクトリア・アルバート博物館蔵）

※弁天社に続く海辺の道で、立っている女と腰をかがめている年増の図。明石亭浦人の狂歌「鶯を芸者になして三味せんの さつさすさきにいさむ弁天」が記される。狂歌のないものもある。洲崎弁天は洲崎神社の通称（現東京都江東区木場6-13-13）。

☆〈**はねた**〉（12.8×18.7 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※羽田弁天（現東京都大田区羽田 6-13-8）の鳥居の前で、箒で掃除をする寺男。遠くに帆かけ船が数隻見える。羽田弁天は、要島弁天・玉川弁天とも称される。

●摺物「**冠と檜扇**」（着色。北斎画。13.4×18.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※檜扇に巻縷が描かれている。狂歌「ふゑんりよ（不遠慮）な女 せたい（世帯）の青柳へ とまりに来ぬる春の燕 上毛富岡 温古亭文通」、「酒呑みてゆつくり引ん千代ふると おもへはさきの長い小松を 浅草庵 己巳」が記される。

●素描「**半裸の女**」（この頃か。墨絵。井上和雄『北斎』による）

※簪を挿し、顔のふくよかな女が、襦袢を解き、上半身裸で立っている図。

半裸の女



文化7 (1810) 庚午 51 歳 葛飾北斎、葛飾北斎辰政、両国橋辺隠士葛飾北斎、

式部源蔵門人涎練、北斎、画狂人北斎、かつしか北斎、江都画狂人北斎 印 亀毛蛇足、

之印：こと(40歳)、(富之助：24歳)、(阿美与：22歳)、(孫：1歳)、阿栄(13歳)

◇4月1日、曲亭馬琴、日暮里の青雲寺(現東京都荒川区西日暮里3-6)に自分の筆塚を建てる。

◇11月30日、歌川国政没(38?)。

◇オランダ商館江戸参府。

◇烏亭焉馬の狂歌碑が牛島神社(東京都墨田区向島1-4-5)に建てられる。

○式亭三馬、『浮世風呂』(第二編)。

○曲亭馬琴、『常夏草紙』(お夏清十郎)、『椿説弓張月』拾遺(8月)。

★この年、葛飾(どこを指すか不明)にも住むか。翌年1月刊『蘭菊の幣帛尾花の幣帛勢田橋竜女の本地』の見返しに「新武蔵国葛飾住藤注北斎戴斗画」とあるところから推察。注)藤：藤原氏の意。北斎は弘化4年(1847)頃から藤原為一などと名乗り、藤原姓を意識している。

★正月16日、曲亭馬琴宅を訪れたか(『森銑三著作集 第4巻 p468』中央公論社 昭和45年)。同日、両国三河屋で曲亭馬琴が催した書画会に出席する。

【馬琴・北斎、文化七年に団円す】

※文化5年(1808)、読本『三七全伝南柯夢』の挿絵で馬琴と争っていたが和解した。

「(略)文化七年に至て結局団円す。八年の春、板元平林庄五郎、作者に報ふに潤筆の外に金十両注1を以す。且北斎に為朝の像注2を画かせ、曲亭に賛を乞ふて、これを懸幅にして祭れり。その贏余(利潤)多きをもて徳とする所也」(曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』岩波文庫版 p216 による。ルビは筆者による)。

注1) 金十両：この頃としては割高の金十両(筆者注：約1,250,000万円～1,500,000万円。1両=5000～6000文、1文=25円で換算)の稿料であつたらしい(大正2年成光館出版部『趣味研究 大江戸 全』所収、饗庭篁村「作者の作料及び出版部数」)。

注2) 為朝の像：文化8年(1811)「為朝図」を指す。

★この頃より次第に読本挿絵から遠ざかり絵手本の作成に移る。「独流開祖」の印を使い始める(『芸術新潮』1989年3月号特集「北斎」初輯・永田生慈「北斎の才能」)。

★この年も柳亭種彦との交流が盛ん。

※『柳亭種彦日記』

☆〈正月十日条〉

「北斎年初ニきたる。種彦道ニてあふ、来年の大小(暦)もらふ、北嵩子(北斎の弟子)晴山子(不明)夜五ツ半時(午後9時頃)迄物語ル」

☆〈正月十二日条〉

「一昨日北齋主来、辛未年（文化8年）大小（暦）もらふ、なくしそふなる故かきつけおく 大 二四六七八九十十二 小 正二（閏）五八十一 凡三百八十四日也」

☆〈正月十六日〉曲亭馬琴『滝沢家訪問往来人名簿』に「正月十六日 両国三河や 北齋」とあり、この日の両国三河屋での書画会に北齋が出席したことが分かる。

【北齋子へゆきおらんだの十露盤けいこなす】

☆〈二月朔日条〉

「廻状来ル、石井氏え順達、昼前北齋子の家へ行、北齋子へゆきおらんだの十露盤（注：単なる算盤ではなく洋風の計算器か）けいこなす、夜こりう子とひ留守、玉冢子（柏庵）とふるす、晴山子これもふるす、ついに繩人許ニ而晴山子ニあふ」

☆〈二月十二日条〉

「北齋子八代衆蔵殿より使来ル。石原へ刀をかへす、少し風たつ 今日もしやくけにて筆をかます 夜石原酔水亭へ行、駒人来ル」

☆〈二月廿六日条〉

「南江子政吉飯島氏来ル、種彦北齋主知道（筆耕石原知道）ぬし訪ふ、知道ぬし留守にてあわず」

☆〈三月廿六日条〉

「種彦屋頃より北齋子知道子の許をとふ、（中略）書画および三味線花の会、なにゝもあれ会となのつきたるハ、ミナ法度となるよしきく、又北齋之弟子北周名をあらためて雷周とかよぶ者、祖母孝行にて銀三枚一せう一人ふち、御ほうびにくだしおかれし由きく、いまにはじめぬことながらありがたき御代なり、雷周住居ハしんばざいもく丁とをり（注：新場材木町通り）松屋橋とかいふかたハラ也」

☆〈四月朔日条〉

「此頃北齋門人北周改名して雷周といふ者、祖母ぎんに孝行ゆへ、白銀三枚注ぎんへ一人ぶちくださる、住居ハ本材木町七丁目なり、此孝行之次第北齋かたよりのミ来り、梅塙（注：如美道人。荻野梅塙）主人とゝもにさくをなしけるが、北齋かたよりに着たらず、一九がさくにて先へねがひにいでたる由、これらの故ニや」

注）白銀：銀 43 匁（約 161 g）を長円形の紙一枚に包んだものが白銀一枚とされる。褒美・儀礼・贈答用に用いられた。ちなみに一両は銀60匁とされたので、白銀一枚は約0.72両。三枚で約2.15両相当と考えられる。一両は現在の約12～13万円程といわれるが、時代背景で変化するので特定することはできない。2.15両×13万円で28万円ほどであったか。

※北齋が依頼した雷周の孝行次第は、その計画を取りに来ないので十辺舎一九の原稿が先になったということ。

☆〈四月廿六日条〉

「北齋子とふ」

【どら孫誕生】

★長女阿美与に息子生（この頃か。後、放蕩となって北斎を悩ます）。幼名不明。

【看板絵は苦手】

★春、狂言の看板絵二枚描く（随筆『我衣』（文政12年。加藤曳尾庵著「かとうえいびあん」とも）による。永田生慈『北斎の絵手本 二』所収）。

★11月、市村座顔見世（翌一年演ずる予定の役者の顔見世）狂言『四天王 櫓 礎』の看板を描くも、人物は瘦せて見苦しく、人々も歌舞伎の画看板は鳥居風に限るとの評判であった。北斎も悔いる。（『浮世絵類考別本』の記事を飯島虚心『葛飾北斎伝』で紹介 p 88～89）。但し、鈴木重三の補注では、『浮世絵類考』の諸本には見当たらないとしているが、『歌舞伎年表』文化八年十一月の項に大田南畝の日記を引いて「去年、市村座、顔見世の看板一枚、北斎がかきしと共に珍し云々」とあることを紹介して、看板絵を描いたことは事実としている。

※『近世庶民生活史料 街談文々集要』（石塚豊介子著 鈴木棠三校訂 三一書房）の文化八年「天民翁書幕」（p 243）には、北斎が市村座の看板絵一枚を描いたが、本来、看板絵は鳥居派が描いてきたもので、時の流れか近頃は色々な者が看板絵を描くと記している。この記事が、鈴木重三のいう『歌舞伎年表』の記事と一致するのは明らかだが、『我衣』の記事との関係は不明。

「（略）去年注も当座（筆者注：市村座）の顔ミセに看板一枚ハ、葛飾北斎が画し也、是も昔より鳥居家にて画き乗りしに、時うつりかハれば、いろくさまくになりゆくものなり、末々にハ二八そばや・煮うりミセのかんばんなども、諸家某が書て、奸坊の印など押すやうにもなりゆくべし（略）」とある（WEB「浮世絵文献資料館」による。ルビは筆者による）。

注）去年：文化8年の記事なので文化7年を指す。

※本来、芝居看板は鳥居家が描いていたものだが、北斎などの他派の者も描くようになったのは時の流れなのか、そのうち二八蕎麦屋や煮物売りの店の看板をそれらしい人が描いて適当な印を押すようになるのではないかと皮肉っている。

●合巻『勇略女教訓』（文化6年『北島女教訓』の改題再刊版。十返舎一九作。画狂人葛飾北斎画。国立国会図書館/西尾市岩瀬文庫蔵）

●読本『椿説弓張月』拾遺（8月。角書「鎮西八郎為朝外伝」。五冊。半紙本六冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎図画。印 亀毛蛇足。平林堂庄五郎版。国立国会図書館/浦上満/京都大学文学研究科図書館蔵）

※奥付には「文化七年庚午八月発販」とある。序文は前年5月。

● 読本『双蛺蝶白糸冊子』(『雙蛺蝶白糸冊子』)とも。正月。角書「梅川忠兵衛赤繩奇縁伝」。五冊。芍楽亭長根作。奥付に「出像注 葛飾北斎辰政 文化七載庚午正月吉日 発販 角丸屋甚助・河内屋太助・伏見屋作兵衛」とある。早稲田大学図書館/酒田市立光丘文庫蔵)



注) 出像：繡像に同じ。登場人物の絵。本文の前に描かれる。

『雙蛺蝶白糸冊子』(出像：早稲田大学図書館)

● 読本『隊妹背山』(『婦女庭訓隊妹背山』『陰陽妹背山』)とも。1月。六冊。六巻。振鷺亭作。表紙に「葛飾北斎画」。内表紙には「江都浅草金龍山下隠士 著述士 振鷺亭主人/縦画生 江都本荘(本所) 両国橋辺隠士葛飾北斎 印 亀毛蛇足」とある。石渡利助版。15.6×22.4 早稲田大学図書館/オランダ国立民族学博物館/メトロポリタン美術館蔵) 奥付には「文化七庚午正月発販」とある。

【絵手本の初作。この頃より戴斗号を用いるか】

● 絵手本『己痴羣夢多字画尽』(1月。中本二冊。前編33図、後編36図。武部源蔵注門人 涎操(北斎の偽名)著。葛飾北斎戯画。二代目蔦谷重三郎版。島根県立美術館：永田コレクション蔵) 題簽に「庚午」とある。

注) 武部源蔵：生身天満宮(現京都府南丹市園部町美園町1-67)の始祖。菅原道真の別荘跡地の京都園部で代官を務め、道真を祀る生祠として天満宮の礎石を創始した。道真没後は生祠を靈廟として祀った。武部源三は、歌舞伎『菅原伝授手習鑑』第四段「寺子屋の段」にも登場する。北斎が武部源三を持ち出した理由は不明。

※北斎の絵手本の初作。脇に添えられている狂歌に従って、文字を数字の順で書いていくと自然に絵が完成するという文字絵の趣向の本。「布袋の宝珠の上に鼠を描く」や「蝙蝠を描く」などがある。『古典籍総合目録』では滑稽本に分類している。

※前編巻末に「葛飾北斎戴斗画本目録」があり、『己痴羣夢多字画尽/同 後編』の書き込みに続き、「略画早字引 此道にこゝろざしある幼童のその意を得やすからしむのさうしなり」とある。ここで「戴斗」号が記されているので、この頃から「戴斗」を用いたか。但し、「戴斗」改名は文化11年に「北斎」号を門人に譲った翌年の文化12年からとする説もある。

※後編は『己痴羣夢多字画尽』(文化7年：1810)の改題再摺判として同年に『略画早字後編』(一冊。鶴屋金助版)と題して刊行されたとされる(永田生慈『北斎の絵手本』p271)。

※二代蔦屋重三郎による前編序文。

「書画は曆支の羽異にして、書につくさざる処、其かたちを因して、是をたすけ、画注に及ばざる所、書をくわえて、是を補ふ。書は入やすく学びがたし。画は入易きより引入て、まなびやすきに至らしめんとす。一時の戯れといへども此道に志ある幼童の助に

せむと乞得て、桜木に花さかする事（筆者注：桜に花が咲くことと、桜木板に字画を彫って出版する事を掛ける）とはなりぬ。文化庚午孟春 耕書堂蔦唐丸注2誌

注 1) 画：この字は本稿では単独で用いられた場では「え」と読んでいるが、当該序文のルビでは「が」と読んでいるので、それに従う。

注 2) 蔦唐丸：蔦屋重三郎の狂歌号。

※柳亭種彦による後編序文。

「(略) 此書独幼稚の為に益あるのみにあらず、狂歌俳諧を翫ふ人々席上需に応ずるの一助にして実に略画初学の楷梯ともいふべし」(句読点・ルビは筆者)



『己痴羣夢多字画尽』（『略画早学』島根県立美術館）

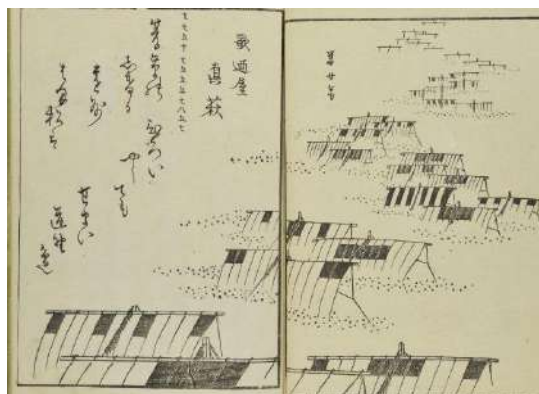
【娘阿栄が初めて挿絵を描く】

●狂歌絵本『狂歌国尽』（半紙本 1 冊。墨摺。巴泉堂：瀬川路蝶編。見開きに「画工北齋先生」とある。印之印。島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館蔵）

※娘の阿栄が帆掛船の挿絵（無数の帆掛船の帆だけを、図の手前から後方に向かって、遠近法で描く）を描いた。「栄女筆」の落款がある。これが、阿栄の初筆といわれる。表紙には「初会催主 瀬川路蝶」とある。浅草側が中心になって刊行された。

狂歌のみ記された 15 丁と狂歌と絵の入った 16 丁で構成される。

栄女：帆掛船（大英博物館）



北齋は最初の 1 丁の絵（貴人が鏡を見ながらお歯黒を塗っている図）のみ描く。他は北



齋の葛飾派の弟子 15 人（雷川・北溟・雷洲・北岱・斗雷・北政雷英・北斗改戴雅・北恵・北鳴・栄女・震索・竹紫戴輔・北専・寸松改北輝・酔月壺龍）が一枚ずつ描いている。

北齋：貴人鏡見図（大英博物館）

●狂歌絵本『富士見十三景 狂歌登遠眼可彌』（この頃か。一冊。宿屋飯盛(石川雅望)・鈍々亭・千桜亭撰）

※画狂人北齋他 12 名の画（『年譜』による）。

●錦絵『東海道五十三次絵尽』（1月。「東海道五十三次」物の一。角型小判(ほぼ正方形)の着色折帖判。全57図6冊。その内3図(〈日本橋〉〈鳶田〉〈京〉)は二枚続き。表紙に「葛飾北斎画 鶴屋金助梓」とある。〈吉田〉〈御油〉に鶴屋金助の商標がある。「袋」に「東海道五十三次絵尽」の画題と「文化七年新春板 葛飾北斎画」とある。鶴屋金助版。各約12.1×11.4 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※人物中心に描かれ、ほとんど名所絵の面影はない。

☆〈日本橋〉

※見開き二枚続き。手前に橋を渡る大名行列。図左には材木場。遠景に富士山。

日本橋 (すみだ北斎美術館)



☆〈品川〉



※入の下に二を書いた紋が染められた布で覆われた旅の駕籠が乗りつけた遊女屋。その店先に遊女が二人座っている。

品川 (すみだ北斎美術館)

☆〈川崎〉

※六郷から川崎への多摩川の渡し舟に男女五人の旅人が乗っている。船頭が力いっぱい竿をさしている。

川崎 (すみだ北斎美術館)



☆〈神奈川〉



※笠を被り合羽を着た旅人二人。上半身裸で天秤棒の荷物を担いでついて行く供の男。その脇に石段が描かれる。

神奈川 (すみだ北斎美術館)

☆〈程ヶ谷〉

※「右 かまくらみち」と刻まれた石の道標の前で、馬の荷を直している馬丁と、その前で笠の紐を調べている旅の男。

保土ヶ谷 (すみだ北斎美術館)



☆〈戸塚〉

※宿の風呂に入っている男と、火吹き竹で火をおこしている宿の女。側の部屋では風呂上りの男が上半身裸で団扇で涼んでいる。

☆ 〈藤沢〉

※荷物運びの人足が箱を下ろして休む様子を描く。長持ちの前で、上半身裸の男が二人煙管をくわえてお互いに火をつけようとしている。箱の上に乗って疲れた足をさすっている男とそれを見ている男もいる。

藤沢（すみだ北斎美術館）



☆ 〈平塚〉

※橋の所ですれ違いざまに振り向き合う虚無僧と柴木を背負った農婦。側を旅姿の男が通る。

☆ 〈大磯〉

※松ノ木の側の「虎が石」と書かれた立札の前で、旅人が上半身裸で石を持ち上げようとしている。それを見ているもう一人の旅人。

大磯（すみだ北斎美術館）



☆ 〈小田原〉

※宿でくつろぐ二人の男。その客に茶を差し出す宿の女。

☆ 〈箱根〉

※右手に芦ノ湖が見える山道を、駕籠に乗って行く女と上半身裸の駕籠かき。

☆ 〈三嶋〉

※独鈷の杖を持って箱を背負い、深編笠を被った修験者に出会い、杖を放り出し驚いて腰を落としている旅人。図の左には三島城が見える。

三嶋（すみだ北斎美術館）



☆ 〈沼津〉

※男女の旅人が堰に流れる水流を眺めている。

☆ 〈原〉

※海辺の街道の民家の前を行く旅人たち。絵の中央に赤いすやり霞がかかる。

☆ 〈吉原〉

※富士の裾野を行く旅人たち。馬には大吉と染め抜いた背当てと腹当てがある。

☆ 〈神原〉

※富士川の急流を行く三艘の渡し舟。

☆ 〈由井〉

※駿河湾沿いの街道を行く旅人たちと民家が鳥瞰で描かれる。絵の中央に赤くすやり霞がかかる。

☆ 〈沖津〉

※海辺の山道を行く旅人たち。街道の崖下には波が打ち寄せている。

☆ 〈江尻〉

※馬子の牽く馬に乗る旅人と、すれ違う大小の二本差しの男。遠くに山並みがみえる。

☆〈府中〉

※川で布を晒している男女。晒した布を干している男。

☆〈鞠子〉

※宿の部屋でとろろ汁を食べている二人の旅人。おかわりに応じるためにお盆を差し出す宿の女。 鞠子 (すみだ北斎美術館)



☆〈岡部〉



※松などの木々のある急な宇津ノ谷峠を往来する旅人。天秤の荷物を担ぐ男もいる。

岡部 (すみだ北斎美術館)

☆〈藤枝〉

※茶屋で休む旅人と、茶を飲んでいく行商の男。店の外には天秤棒の荷物が置かれている。

藤枝 (すみだ北斎美術館)



☆〈寫田〉

※見開き 2 枚続きの図。大井川の急流の中を荷物や人を渡す川越人足。肩車で渡したり、荷物を持ちあげている。遠くにも侍の長棒の駕籠を数名の男が担いで渡している。

☆〈金谷〉

※二つの長持を下に置いて休む上半身裸の三人の人足。側にはお供の三人が片膝をついて控えている。刀を腰にした二人が何かを話している。

☆〈西坂〉

※一般に「目坂」と表記される。大道で羯鼓踊りのように、腰に鉦を多く括りつけ、叩きながら踊る女芸人と、座って太鼓を叩いて調子をとる男。それを見ている男たち。



西坂 (すみだ北斎美術館)

☆〈掛川〉

※山の湧水を汲もうとしている旅の男と、側に立っているもう一人の男。

掛川 (すみだ北斎美術館)



☆〈袋井〉

※朱色の鳥居の足元で馬の背から荷物を下ろそうとする馬子。馬の顔先に道中笠が転がっている。近くの秋葉山に秋葉権現社があり、その鳥居であろうか。

☆〈秋葉〉

※尻はしよりして二瀬川を渡る旅人たち。天秤の荷物を担いで渡る男もいる。遠景の山は秋葉権現社のある秋葉山か。

☆〈鳳来寺〉

※笠を手にして山道を行く三人の男。図の左に鳳来寺の屋根が見える。

☆〈見付〉

※天秤棒を担ぐ男と何かを話す旅の男。荷物のない空馬の側に立つ馬子もいる。

☆〈浜松〉

※松の巨木に覆われるように茶屋が鳥瞰で描かれる。茶屋の前には馬が休み、旅人が数人行き来している。巨木は、足利義教（1394～1441）がこの松のもとで、「浜松の音はざざんざ」と謡ったといわれ「ざざんざの松」と呼ばれる浜松名物の松の群生を思わせる。

☆〈舞坂〉

※荒井宿までの浜名湖の「今切の渡し」船に旅人たちと荷物が乗り、船尾で船頭が力一杯竿をさしている。

☆〈荒井〉

※新居宿関所（今切関所）。「御関所」の書き込みがある。役人が証文を読みあげ、その前で三人の旅人が正座して畏まっている。

☆〈白須賀〉

※上半身裸で駕籠を担ぐ駕籠かき。眼下に遠州灘が広がる。

☆〈二夕川〉

※岩穴に賽銭箱が置かれた祠を見ている三人の旅人と天秤棒を担ぐ男。

☆〈吉田〉

※松林の道筋で、馬に乗った旅人。その脇で熊手で落ち葉を集めた籠を背負う女。その傍に僧衣の旅人が一人いる。馬の腹掛けに版元の鶴屋金助の商標がある。

☆〈御油〉宿の前で荷物を下ろした馬の世話をする馬丁。その前の縁側で客を待つ様子の遊女二人。馬の腹掛けに鶴屋金助の商標がある。

☆〈赤坂〉

※「庚申供養」と彫られた石碑の前で、旅人二人が荷物を置いて話している。

☆〈藤川〉

※外に蓑を敷いた休み処で、煙管を銜えて休む男や饅頭を食べている男に茶を差し出している女。その前には茶を沸かす竈に薪がくべられている。

藤川（すみだ北斎美術館）

☆〈岡崎〉

※城へ向かうのであろうか、矢作橋を渡る侍たちの行列。合羽や蓑を着た侍たちの先では長槍を持つ男が振り向いている。





岡崎（すみだ北斎美術館）

☆〈池鯉鮒〉

※松並木の道にしゃがんで草鞋の紐を整える馬子と、側に立っている二人の馬子。この地では馬市が多く開催されたというが、馬は描かれない。池鯉鮒（すみだ北斎美術館）



☆〈鳴海〉

※絞り染用の白い反物を畳んでいる男や、それを運んで積み上げる女たち。部屋には染めた反物が吊るされている。この地では「有松紋」や「鳴海絞」と呼ばれる藍に染めた布が有名。

☆〈宮〉

※熱田神宮の門前町。ここから桑名に向けて海上を渡る。七里先、約 2 時間余りの船旅で、旅人を乗せた帆船を描く。

☆〈桑名〉

※荷物を脇に置いて、茶店の縁台に座って名物の焼蛤を食べている二人の旅人。縁台の下では、店の女が団扇で仰ぎながら蛤を焼いている。

☆〈四日市〉

※石灯笼と鳥居の前で旅人が筒から水を飲んでいる。もう一人の男が柄杓を差し出して水をもらおうとしている。天秤棒を担ぐ男もいる。四日市は伊勢神宮への参詣路の分岐点。

☆〈石薬師〉

※石薬師寺の屋根の向こうに街道を往来する旅人たちが俯瞰で描かれる。

☆〈庄野〉

※宿で上半身裸で、酒と肴を囲みながらくつろぐ三人の男。

☆〈亀山〉

※亀山城から出掛ける、長持ちを担ぐ従者を連れた侍たちの一行。

☆〈関〉

※戸外で箱状の道具を使って縄状のものを作っている親子。桶作りが有名なので箍だろうか。

☆〈坂の下〉

※「水あめ卸」の看板のある店先で、大釜の水あめを描き回している男。大きな盆を台に腰掛けている男と、水飴の受け渡しの作業をしている女房。

☆〈土山〉

※鈴鹿峠の西北山麓にあり、鈴鹿越の宿駅。「いちぜんめし」「どちやう汁」と書いた箱看板の下で寝ている犬の脇を通る男二人を描く。

土山（すみだ北斎美術館）

☆〈水口〉



※「そばきり うどん」の看板のある店先の床几に腰掛け休んでいる旅人二人。一人はどんぶりからうどんをすすっている。

水口（すみだ北斎美術館）

☆〈石部〉

※山間の街道を行く旅人たちを鳥瞰で描く。図の中央には朱色のすやり霞が描かれる。

石部（すみだ北斎美術館）



☆〈草津〉

※琵琶湖沿いの松の老木のある街道を往来する旅人。琵琶湖には湖面を渡る帆かけ舟が二艘描かれる。

☆〈大津〉

※走り井と呼ばれる湧水の前に来た三人の旅人。

☆〈京〉

※見開き二枚続き。左頁には、石段に向かう垂干を被る二人の貴人の姿。後ろに矢を背負った武人が控えている。右図には、折烏帽子の男と赤衣着物の少年や、地べたに腰を下ろしている仕丁たちを描く。

●錦絵『伊勢屋利兵衛横大判新板浮絵シリーズ』（この頃か。横大判錦絵揃物。13 図。北斎画。伊勢屋利兵衛版）

※江戸名所図。全図、紅色のすやり霞をかけた鳥瞰図画法。

☆〈新板浮絵浅草金龍山之図〉（24.2×37.8 図右に「金龍山」、図左に「浅草観世音」の書入れがある。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※五重塔を背景に描く。本殿と仁王門の提灯には「卍」の字が書かれている。

☆〈新板浮絵愛岩（岩）山遠見之図〉（図右に「芝愛岩（岩）」、図左に「芝浦」の書込みがある。26.5×38.6 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東洋文庫：岩崎文庫蔵）



※境内には多くの参詣の人々。図の左下には、出世階段が描かれる。図左上には「芝浦」と書かれ、遠くには帆かけ船が数隻描かれる。遠くに富士山が見える。

新板浮絵愛岩山遠見之図（すみだ北斎美術館）

☆〈新板浮絵八ツ山花盛群集之図〉（図右に「八ツ山」、図左に「羽根田」の書入れ。
25.9×38.1。ホノルル美術館/すみだ北斎美術館：ヒーター・モース・コレクション蔵）

※桜見物の人々と、羽田沖に浮かぶ数隻の船。

☆〈新板浮絵亀井戸天満宮之図〉（図右に「梅屋敷」、図左に「亀井戸」の書入れがある。
25.0×37.4。島根県立美術館：永田コレクション/江戸東京博物館/すみだ北斎美術館：ヒーター・モース・コレクション蔵）

※梅屋敷には梅の花が咲き、亀井戸天神の太鼓橋には参詣の人々が渡っている。

☆〈新板浮絵三芝居顔見世大入之図〉（図右上に「堺町 ふきや町」、図左下に「木ひき町」の書入れがある。24.7×37.2。太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館・ヒーター・モース・コレクション蔵）

※「下谷池の端仲町 伊勢利板」の大看板を掲げた芝居小屋の前の雑踏。版元の伊勢屋利兵衛の出版広告をさりげなく書きいれている。

新板浮絵三芝居顔見世大入之図（すみだ北斎美術館）



☆〈新板浮絵神田明神お茶の水ノ図〉（図右に「神田明神」、図左に「聖堂」の書入れがある。24.7×38.0。島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ヒーター・モース・コレクション蔵）

※神田明神の鳥居をくぐる参詣人たち。図の左の湯島聖堂につながる道を往来する人々。

新板浮絵神田明神お茶の水ノ図（すみだ北斎美術館）



☆〈新板浮絵王子稻荷飛鳥山之図〉（図右に「飛鳥山」、図左に「王子」の書入れがある。
25.2×38.6 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ヒーター・モース・コレクション）

※桜の花咲く王子稻荷前の飛鳥山の賑わい。

☆〈新板浮絵三囲神社牛御前両社之図〉（図右に「三囲」、図左に「牛御前」の書入れがある。23.6×36.3 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ヒーター・モース・コレクション蔵）

※三囲神社と牛御前に通じる道を往来する人々。三囲神社（現東京都墨田区向島2-5-17）は、弘法大師が祀ったといわれる田中稻荷が始まりという。当時は現在地より北の田圃の中にあった。文和年間(1352～56)に、近江の三井寺の僧・源慶が改築した際、土中から白狐にまたがる老翁の像を発見、その像の周りをどこからともなく現れた白狐が三度回って消えたという縁起から「三囲」の名がつけられた（「三囲神社」案内より）。

牛御前は、現在の牛島神社（現東京都墨田区向島1-4-5）のこと。もとは、本所区向島須崎町（現東京都墨田区小梅3丁目、向島2丁目から3丁目辺）にあった。貞観2年（860）に創建されたとされ、天文7年（1538）に後奈良院より「牛御前社」との勅号を賜ったと案内にある。北斎の頃はこのような呼ばれていた。この辺りの旧本所一帯を牛島と呼んでいたため、明治初年から牛島神社と称するようになった。



新板浮絵三囲神社牛御前両社之図（すみだ北斎美術館）

☆〈新板浮絵富岡八幡宮之図〉（24.6×37.2。島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美術館：ピーター・モース・コレクション）

※深川の富岡八幡宮（現東京都江東区富岡1-20-3）を描いているが、本来、富岡八幡宮といえば、現東京都江東区南砂7-14-18にある八幡宮を指し、深川（富岡）八幡宮より古く、元宮とも元八幡と呼ばれる神社であるので混同した名称になっている。石の鳥居の下に大勢の参詣者があり、深川八幡宮と海の側の洲崎弁天のある地が霞の向こうに描かれる。

※洲崎（現東京都江東区東陽1丁目一帯）は、元禄年間に埋め立てられ、深川洲崎十萬坪と呼ばれた景勝地で、東京湾を一望できた。現在「洲崎」名は「洲崎郵便局」「江東信用組合洲崎支店」名に残すのみ。歌川広重も「名所江戸百景」〈洲崎十萬坪〉に描いている。



新板浮絵富岡八幡宮之図（島根県立美術館）

☆〈新板浮絵新吉原大門口之図〉（図右に「新吉原」、図左に「仲の町」の書入れがある。25.7×38.1。日本浮世絵博物館/江戸東京博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/パウアー・コレクション蔵）

※新吉原の大門口をくぐり仲の町に行く人々の雑踏を俯瞰して描く。図の右上に「新吉原」の字があり、門を挟んで図の左上には「仲の町」の字が記されている。図の右には狩野屋の暖簾が描かれる。

新板浮絵新吉原大門口之図（すみだ北斎美術館）

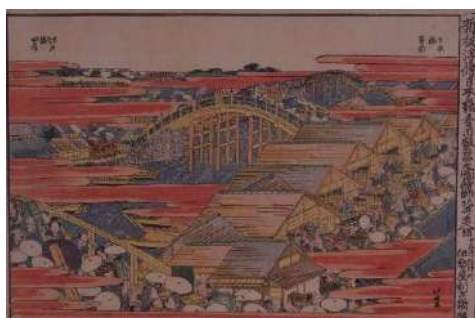
注) 大門：一般的には「だいもん」と呼ぶが、遊郭では「おおもん」と呼ぶ。



☆〈新板浮絵日本橋肴市繁昌之図〉（図右に「日本橋肴市」、図左に「江戸橋 四日市」の書込みがある。24.4×36.3。北斎館/太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館蔵）

※図の手前に江戸橋を渡る人々を描き、図の中央に日本橋を渡る群衆を描く。橋の北詰の東に位置する魚河岸の賑わいを図の右側に描く。

新板浮絵日本橋肴市繁昌之図（太田記念美術館）



☆〈新板浮絵東叡山花盛之図〉（図右に「東叡山」、図左に「不忍弁天」の書込みがある。26.2×38.5。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/江戸東京博物館蔵）

注）東叡山：東叡山寛永寺。関東の天台宗本山。

※蓮の葉が一面に生えた池に舟が浮かび、太鼓橋を渡って弁天に参詣する人々。遠く東叡山の屋根が見える。

☆〈新板浮絵両国橋夕涼夜見世之図〉（図右に「両国橋」、図左に「両国広小路」の書入れがある。25.7×37.8 太田記念美術館：長瀬コレクション/日本浮世絵博物館蔵）

※両国橋を往来する人々。対岸は両国広小路。

●文字絵『六歌仙』（この頃か。文化6年～10年〈1809～13〉説あり。大判紙本着色揃物。かつしか北斎画。江崎屋吉兵衛版。各平均38.8×26.2）

※全図とも、歌仙の輪郭線がその人物の名前となっている文字絵として描かれる。図の上部に各歌人の歌が記される。文化中期にも『六歌仙』あり。

☆「在原業平」（太田記念美術館：長瀬コレクション/山口県立萩美術館：浦上記念館/洛東遺芳館/平木浮世絵美術館蔵）

※ 薬の矢を背負い、巻纏で両脇に綯のある冠を被っている。

「在ハラのなり平」の文字で構成。 在原業平（平木浮世絵美術館）



☆〈僧正遍照〉（中右コレクション/島根県立美術館蔵）



※赤い法衣を着て、袂で口を覆いこちらを向いて座っている図。

僧正遍照（島根県立美術館）

☆〈喜撰法師〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※墨染の法衣を着て扇子を持ちこちらを振り返る法師。「きせんほう志」で構成。

喜撰法師（島根県立美術館）



☆〈大伴黒主〉（島根県立美術館：永田コレクション/山口県立萩美術館：浦上記念館蔵）

※垂櫻を被り、坐って前を向いている図。

大友黒主（島根県立美術館）



☆〈文屋康秀〉（山口県立萩美術館：浦上記念館蔵）※烏帽子を被り、髭を蓄えた康秀が座って前方を見ている図。「ふんやのやすひで」で構成。

文屋康秀（山口県立萩美術館）

☆〈小野小町〉（太田記念美術館：長瀬コレクション/中右コレクション/リッカー美術館/落東遺芳館/平木浮世絵財団/ケンブリッジ・フィッツウィリアム美術館/島根県立美術館蔵）

小野小町（島根県立美術館）



※長い髪を束ね、桧扇を持ってこちらを振り向いている図。

●肉筆画「夏の朝 鏡見美人図」（この頃か。文化10年説あり。絹本大判着色一幅。葛飾北斎。印 亀毛蛇足。86.1×32.4 岡田美術館蔵）



※夏の朝、鏡に向かって髪を整えながら顔を映す立ち姿の女の図。足元には鏡の蓋の上に朝顔を入れた茶碗と、歯磨き用の房楊枝に歯磨きの袋が置かれている。女の左には藻草と金魚が泳ぐ金魚鉢がある。吊るされた衣桁には男物の着物が掛けられている。

本図には同じ構図の弟子の北鼎と北溪の絵がある。

夏の朝（岡田美術館）

●肉筆画「七福神図」（合筆。絹本着色一幅。「文化庚午歳 甲子夜」とある。北斎は「布袋図」を描く。北斎画。印 亀毛蛇足。67.7×81.2

西村屋与八（永寿堂）版 エトアルト・キヨツツネ記念ジェノヴァ東洋美術館蔵）

※外に、鳥居清長（毘沙門天）、歌川国貞（弁財天）、歌川豊春（寿老人）、歌川豊国（大黒天）、勝川春英（福祿寿）、歌川豊広（恵比寿）が描く。

※絵上部の賛に「一幅に千両箱を七ツまでよくあつまりし江戸の名筆 応永寿堂主人需 山東京伝 印 山東京山書」とある。三東京山は、山東京伝の弟。七福神図（『2005年北斎展図録』より転載）



●肉筆画「朝日に鳥」（この頃か。紙本淡彩一幅。北斎。25.0×36.0）

※画面いっぱい鳥の図。その背後に朝日が描かれる。

●肉筆画「鯉図」（着色一幅。江都画狂人北斎画。印 亀毛蛇足 101.9×44.0 群馬県立近代美術館蔵）

※水中に立っているように泳ぐ鯉。水底に水草が揺らいでいる。図上部は水面に近く、明るい色彩となっている。

鯉図（群馬県立近代美術館）



●絵暦「注連縄に馬の絵馬」（1月。北斎画。『年譜』による）

●摺物「梅の鉢と扇」（1月。着色。北斎画。18.3×17.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※鉢植えの梅と本年の干支を示す馬の絵柄の扇が描かれる。図左の浅紅園の狂歌の左に「午初春」とある。「いとけなき春の霞にこもりうたあ
の山こえて来なくうぐいす みちのく音羽瀧子」、「諸人のこゝろもいさむうまの春
ひんからよりそまつかすみひく 狂歌庵 四方白壁倉持 別称 山中鹿住」、
「初夢に見えしはうつゝうつゝには ゆめのやうにそかすむ不二の根 浅紅庵」の
狂歌が記される。

●摺物「日本式筆」（1月。葛飾北斎画）

※画中の屏風に表題と干支がある（『年譜』による）。三筆とは、平安時代、能筆の空海、嵯峨天皇、橘逸勢をいうが、その後時代により他の三筆が称せられた。

●摺物「福寿草に短冊と筆箱」（「硯箱に福寿草」とも。春。色紙判着色。かつしか北斎画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「午春」とある。筆箱に硯と墨と筆が置かれ、開いた蓋の側に、福寿草と松の小枝を活けた鉢と短冊が置かれている。図の上部に狂歌が書かれる。

文化8 (1811) 辛未 52 歳 時太郎、葛飾北斎、新武蔵国葛飾住藤北斎戴斗、北斎戴斗、

かつしか北斎、北斎、葛飾北斎戴斗、葛飾北斎辰政、北斎燈下、前俵屋宗理北斎注 印 亀

毛蛇足、雷辰、北、斎、花押：こと (41 歳)、富之助：25 歳、(阿美与：23 歳)、(孫：2 歳)、阿栄 (14 歳)

【戴斗期】

◇この年より文化 11 年 (1814) まで極印と行司印（版元で出版物の行司役の印）の併用となる。

◇ゴローニン事件（「ゴローニン事件」とも）。国後島で測量中のロシア人ゴローニンを松前藩の役人が捕らえ、2 年 3 ヶ月幽閉する。

◇最後の朝鮮通信使来貢（12 回目）。

◇江戸大火（2月11日。一ヶ谷谷町より出火。四谷・赤坂辺、一里半の類焼。大名屋敷約三十箇所、寺社その他を焼く（文化8年「御上屋敷 御中屋敷。御下屋敷 るいせう道しるべ 上」東京大学情報学環図書蔵）。

◇2月13日、村田春海没（66）。

◇幕府天文方に「蛮書和解御用」（蘭学研究機関）設置。

◇刺青禁止令。

◇大田南畝の碑が牛嶋神社に建てられる。

◇この頃、歌川広重が歌川豊広に入門。

○式亭三馬、『浮世風呂』（第三編）。

○司馬江漢、随筆『春波楼筆記』（『伊曾保物語』の紹介）。

○烏亭焉馬、『花江戸歌舞伎年代記』刊行始まる。

【辰政ト云シ頃ノ門人】

この年まで「北斎・可候・辰政期」とし、同時に前年より戴斗期が始まる。

★辰政ト云シ頃ノ門人（『浮世絵類考：補遺』岩波文庫版 p221より）

注：無印または「増」は『増補浮世絵類考』、「新」は『新增補浮世絵類考』を示す。

（ ）内は割書を示す、ルビは筆者による。

※辰斎一雷斗（柳川重信ト云）一雷洲（青山ニ住ス、ヨミ本アリ 銅板ノ紅毛画ヲヨクス）
一重山（「新」二世重信）

【北斎と号してからの門人】

★北斎と号してからの門人（『浮世絵類考：補遺』岩波文庫版 p221より）

※北馬（「新」有坂氏俗称五郎八 「増」狂歌摺物多シ、別記アリ、画入ヨミ本数十冊ヲカケリ、後一家ノ画風ヲナス、蹄齋ト云、「新」浅草「増」下谷三スジ町ニ住ス）

※算亭北寿（両国ヤゲンボりに住ス、錦絵山水ノ遠景多シ）

※拱斎北溪（別記アリ赤坂ニ住ス、スリ物ヨミ本多シ一岳山）

※北岱（浅草ニ住ス、スリ物ヨミ本多シ 「新」盈齋ト号ス）

※北鷺（スリ物ヨミ本アリ、「新」抱亭ト号ス）

※蘭齋北嵩（「新」島氏 閑々楼ト号ス「増」本郷ニ住ス、ヨミ本草双紙多シ、後唐画師トナル「新」東巨ト号ス、名重宣）

※東南西北雲（大工久五郎トアリ、スリ物錦絵アリ、画本アリ）

※戴岳北泉（別記ス、ヨミ本、画本多シ、二代目戴斗「編年史」）

※北口注（広「編年史」 大坂ノ人、別記アリ、後画狂人「編年史」）注）北口：北広。

※斗図楼墨僊（名古屋ノ産画本ヲ出ス）

※北洲（大坂ノ産、錦絵ヨミ本アリ）

★この年より戴斗号を用いる。但し副号としての使用で、主号は「北斎」とする説もある。

★この頃より挿絵減少、錦絵が多くなる。

★甲州へ旅するか（井上和雄『浮世絵師伝』〈渡辺版画店 昭和6年不詳）を『年譜』で紹介）。

★3月、秩父長泉院の絵馬「桜花の図」を描く（『浮世絵八華5北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」より）。

●読本『椿説弓張月』残編（3月。角書「鎮西八郎為朝外伝」。六冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎図画。印亀毛蛇足。全28巻29冊完結記念に平林庄五郎（平林堂）が依頼した版。国立国会図書館/京都大学文学研究科図書館蔵）

※奥付に「文化八年辛未三月発販」とある。序文は前年12月。

●狂歌絵本『瀬川仙女追善集 露の淵』（12月頃。着色一冊。遠桜山人（太田蜀山人）序。四方歌垣跋。瀬川路蝶撰。北斎筆。花押。西村屋与八版か。『江戸の絵本』所収・マレイ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち p292」より。国立国会図書館/大阪大学附属図書館/西尾市瀬川文庫蔵）

※文化7年（1810）12月4日に没した三世瀬川菊之丞（仙女路考）一周忌追善本。北斎は一図のみ描く。他に、歌川豊国、鳥居清長、勝川春亭、蹄齋北馬、昇亭北寿、柳々居辰斎、抱亭五清、勝川春英、ちよ菊などが描く。



『瀬川仙女追善集 露の淵』（北斎筆：大阪大学附属図書館）

●合巻『新編月熊坂』（1月。前篇三冊。後編は刊行されず。時太郎画作。表紙は歌川国丸画。蔦屋重三郎版。ポストン美術館蔵）

※北斎自画作のため「時太郎」名を使用したか。

『新編月熊坂』（ポストン美術館）

●読本『勢田橋竜女本地』（1月。角書「蘭菊の幣帛尾花の幣帛」。墨摺半紙本。三冊。柳亭種彦作。葛飾北斎。印雷震。見返しには、三井寺の釣鐘に「新武蔵国葛飾住藤北斎載斗画」とある。西村屋与八版。22.6×15.6 北斎館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）



※浄瑠璃本と読本の折衷的な本。『日本小説年表』（朝倉無声）では「これは読本と浄瑠璃本を折衷せんとせしもの新式浄瑠璃読本ともいふべきものなり」（p36）と評されている。文化10年（1813）、文政6年（1823）にも再刊される。



勢田橋竜女本地 見返し (大英博物館：立命館 ARC)

●滑稽本『串戯二日酔い』(1月。内題『滑稽二日酔い』。文政8年(1825)に再刊される。二冊。十辺舎一九作。葛飾北斎画。北斎は後編に挿絵を描く。前編は弟子の北嵩が挿絵を描く。西村屋与八版。国立国会図書館蔵)

※十返舎一九の序文に「文化八年辛未猛春」とある。

●滑稽本『宮島参詣 続膝栗毛』(1月。二冊。十辺舎一九作。北斎画。口絵一枚を描く。江島伊兵衛版か。国立国会図書館/早稲田大学図書館蔵)

●艶本『東にしき』(大判着色12枚組み折本。各平均36.0×25.0)

女好軒主人(溪斎英泉)序は付文とともに『絵本つひの雛形』と同じ。

※「北斎が最初に制作したこうした「折本」は、たぶん、今回新見の1810年代初期の『東にしき』であろう」(『縁結出雲杉』定本『浮世絵春画名品集成①』「北斎 中判錦絵秘画帖」所収、リチャード・レイン「北斎の春画、そして『縁結出雲杉』より)。この『東にしき』が『つひの雛形』(文化11年)に継承されたとしている。

※『つひの雛形』は、現在では、溪斎英泉の絵とされている。

●錦絵「吉原大籠の図」(「扇屋の新年」「吉原妓楼の図」「遊郭座敷内部」とも。この頃か。縦大判五枚続き錦絵。北斎唯一の五枚続き。かつしか北斎画。伊勢屋利兵衛版。各38.7×25.5(全38.7×127.5) 静嘉堂文庫/洛東遺芳館/山口県立萩美術館・浦上記念館/メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館蔵)



吉原大籠の図(日本浮世絵博物館) 下図(拡大図:神戸市立博物館「浮世絵名品展」: <http://hofuku.jugem.jp> より)

※新吉原の大見世「扇屋」の一階内部を描いた図。大籠は、吉原で最上級の店(大見世・総籠とも)をいう。図右から、「火の用心」の貼り紙のある台所。竈には絵馬があり、火吹きで火をおこす男や料理人がいる。階段の側に数人の花魁や禿。部屋の中央奥には張見

世があり、楼主とその女房の前には数人の花魁が座っている。楼主の背後の神棚の横に大福帳が四冊ぶら下がっている。図左には、版元伊勢屋の定紋（商標）が記された酒樽が積み重ねられ、その側に階段があり、小上がりの上と下にも数人の花魁がいる。



●錦絵『銅板近江八景』（この頃か。文化元年～文化13年〈1804～18〉と幅を持たせた説もある。横小判錦絵八枚揃物。北斎画。印北印齋〈落款は袋のみ〉。総州屋与兵衛版。袋以外は各8.5×11.3 埼玉県立博物館/神戸市立博物館/アムステルダム国立美術館蔵）
 ※袋には「近江八景 銅版 北斎画 印印文不明」とあるが、実際は木版の摺物。全図遠近画法を用いる。

我が国における八景図は中国の伝統的な山水画「瀟湘八景」の画題を引き継いでいる。湖南省長沙市の洞庭湖と流入する瀟水と湘江の合流するあたりの風景を北宋の宋迪が描いたのに始まるとされる。瀟湘夜雨・平沙落雁・煙寺晚鐘・山市晴嵐・江天暮雪・漁村夕照・洞庭秋月・遠浦帰帆など（ウキペディアによる）。

☆〈袋〉18.5×19.9

※縦長。軍配を緑色の波で縁取り、中に「銅板」と書き込む。右に「北斎 印北印齋」とある。 袋（アムステルダム国立美術館）

☆〈あはづのせいらん〉

※粟津は大津市の南部。京阪電鉄石山坂本線粟津駅近くの海岸線。粟津原の松並木は晴れた日の強風にざわつくので「晴嵐」と称され名所として描かれる。図の前方に城（膳所城か）の見える海岸線を行く旅人たちが小さく描かれる。





あはづせいらんの (アムステルダム国立美術館)

☆ 〈かたゝのらくがん〉

※水面に突き出した堅田にある浮御堂（満月寺浮御堂。現滋賀県大津市堅田1-16-18）から飛び出したような一連の雁の様子。JR 琵琶湖線堅田駅近く。琵琶湖大橋の南側。

かただのらくがん (アムステルダム国立美術館)

☆ 〈やばせのキハン〉

※矢橋（現滋賀県草津市矢橋町に帰帆島がある）の広がる遠くの水面に、これから帰る帆船が数隻浮かぶ。矢橋帰帆公園がある。JR 琵琶湖線南草津駅からバス。



やばせのキハン (アムステルダム国立美術館)

☆ 〈せたのせきしやう〉

※瀬田の唐橋（現滋賀県大津市瀬田2丁目）の夕照。唐橋の向こうには白雲が靡く。唐橋は勢田川に架かる全長260メートルの



橋。京都の宇治橋、山崎橋と並び日本三名橋と呼ばれる。京阪電鉄唐端前駅近く。

せたのせきしやう (アムステルダム国立美術館)



☆ 〈石山の秋月〉

※山上の石山寺（現滋賀県大津市石山寺1-1-1）の向こうに、秋の夕空に出ている月が描かれる。遥か向こうには白雲が立ちあがっている。JR琵琶湖線石山駅からバス。

石山の秋月 (アムステルダム国立美術館)

☆ 〈からさきのよるのあめ〉

※唐崎神社（現滋賀県大津市唐崎1-7-1）と松の老木に夜の雨が降り注いでいる。JR湖西線唐崎駅近く。





からさきのよるのあめ (アムステルダム国立美術館)

☆〈ひらのぼせつ〉

※比良山系（滋賀県の琵琶湖西岸に連なる山地）に雪が積もり、図の右には夕暮れに坂道を往来する人々。JR 琵琶湖線比良駅と北小松駅の間辺りか。

ひらのぼせつ (アムステルダム国立美術館)



☆〈三井のぼんせう〉



※三井寺、別名園城寺（現滋賀大津市園城寺町

246）前の往来を行く人々。晩方の鐘の音が聞こえるか。京阪電鉄石山坂本線別所駅近く。

三井のぼんせう (アムステルダム国立美術館)

●額絵「桜花の図」（3月。秩父の長泉院注のための板絵額。北斎燈下筆。印雷震。62.0×200.0）

※長泉院による見解（令和元年10月18日）

「当院では当時の記録が残っておりませんので正確なことはわかりかねます。言い伝えでは、秩父札所寺院が江戸の出開帳した際にお礼として奉納されたものと言われています。

「桜花の花」は文化八年作とされております。同時期に護国寺様に於いて出開帳が行われたという記録がございますのでその際に奉納された

ものと思われます」

注）長泉院：現埼玉県秩父市荒川上田野557。曹洞宗・秩父札所29番。

本堂正面の法樂和歌（紙に奉納する和歌）の板額に、江戸で描かれた北斎の絵が掲げられている。垂れ桜で有名な寺。



桜花の図（秩父市 HP より）

●肉筆画「蛸図」（紙本着色一幅。葛飾北斎筆。印雷震。102.5×29.2 氏家浮世絵コレクション（鎌倉国宝館内）蔵）

※正面を向く蛸のみを描いて背景はない。図の上辺に空間があるので、賛が書かれる予定であったと考えられている。蛸の肌には点苔と呼ばれる、細かい点が無数に描かれ、皮膚の質感が強調される。

蛸図（鎌倉国宝館：氏家コレクション）



●肉筆画「鍾馗図」（文化八年辛未五月五日天水點筆前依屋宗理北齋画 印雷震。ボストン美術館蔵） 鍾馗図（ボストン美術館）

【前～は「さきの～」】

※この頃の「前宗理」や、文化12年頃からの「前北齋」など、号の前に「前」をつけることが多くなる。文政6年『今様櫛撿雛形』の柳亭種彦の序文に「前北齋為一」とルビが振ってあり、天保中期の『山水花鳥図』（森屋治兵衛版）では印に「さきのほくさゐ」を用いているので、本稿でも「前」は「まえ」「ぜん」とは読まず「さきの」と読む。他に「先ノ北齋」という表記もある。

【戴斗号登場】

●肉筆画「鎮西八郎為朝図」（「為朝図」とも。曲亭馬琴の賛により12月大晦日の作。絹本金砂子地一幅。葛飾北齋戴斗画。印雷震。平林庄五郎版。59.3×81.9 大英博物館蔵）

※為朝の剛弓を一人が弓を押さえ、二人が弦を引くが、引ききれない。側で鬼が見ている図。図中に七言絶句の後に続けて「雲のまどふ 心の鬼か罵 はれて弓はり月の影あふくなり 文化辛未隆冬除夜 曲亭馬琴題」とある。

※文化8年に完成した『椿説弓張月』を祝い、版元の平林庄五郎は文中の名場面を北齋に描かせ馬琴に賛を依頼したという。「八年の春、版元平林庄五郎、作者に報ふに潤筆注1の外に金十両注2を以てす。且北齋に為朝の像を描かせ、曲亭に賛を乞ふて、これを懸幅にして祭れり。その贏余多きをもて徳とする所也」（曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』天保5年(1834)1月6日条 岩波文庫版。p216)

注1)潤筆：書や絵を書くこと。

注2)金十両：約100万円～150万円。

図は『椿説弓張月』後編卷之二、第十八回の一場面である（2005『北齋展図録』）。同図と同じ場面を『椿説弓張月』前編卷之一の口絵にも描いている。但し、為朝と鬼の位置が左右逆転している。

鎮西八郎為朝図（大英博物館）



●肉筆画「日蓮上人像」（「日蓮上人図」とも。紙本着色一幅。葛飾北齋戴斗画。花押。40・6×20・3 光ミュージアム蔵）

※日蓮が坐して経典を広げている図。

※画中右上に「南妙法蓮華経 日蓮大菩薩」とあり、下に「安立山日羊（「羊」は、二点しんにゆうに羊）（花押）」とある。安立山は長遠寺（現東京都台東区元浅草2-2-3）のことで日蓮はこの寺の僧でもあった。北齋は日蓮宗を信仰していた。飯島虚心の『葛飾北

斎伝』の草稿には、長遠寺にかつて北斎筆の奉納した額絵「日蓮上人小松原御難の図」があったと記されているという(2005『北斎展図録解説』p336)。

日蓮上人像 (光ミュージアム)



●肉筆画「**杣人春秋山水図**」(この頃か。絹本着色三幅対。葛飾北斎戴斗。印 亀毛蛇足。各約 99.0×38.9 福井県立美術館蔵)

※中国絵画や南蘋派(「なんぴんは」とも)注から学んだことを思わせる作品。

注)南蘋派:沈南蘋(康熙21年(1682年?)は、中国清代の画家。1731年(享保16年)来朝、長崎に2年間弱滞在し写生的

な花鳥画の技法を伝えた。弟子の熊代熊斐が南蘋派を形成。円山応挙、伊藤若冲など江戸中期の画家に多大な影響を及ぼした(ウイキペディアによる)。

〈右図〉春景の図。雲の上まで伸びる山岳の道に沿うように家が立ち並び、その前の道を多くの人が往来している。山岳の先には更に峨々たる岩山が真直ぐ聳え立つ。図上部の岩山は、弘化4年(1847)の「渡船山水図」にも描かれている。雲下には白鳥が連なるように飛んでいる。



〈中図〉薪と子どもを背負った杣人(樵夫)が、斧を杖にして山道を行く。子どもは何かを指差している。空には五羽の雀が飛んでいる。

〈左図〉秋景の図。山岳の村里や山肌や遠景の村里に紅葉が咲き、白屋根の家並みの前の道には多くの人往来している。

杣人春秋山水図(福井県立美術館)

文化9(1812) 壬申 53歳 葛飾北斎辰政、葛飾北斎雷震、北斎老人、鏡裏菴梅年、葛飾

北斎、北斎、紫色鴈高 印 亀毛蛇足、雷震、葛飾:(こと:42歳)、(富之助:26歳)、

(阿美与:24歳)、(孫:3歳)、阿栄(15歳)

【絵手本の時代】

- ◇4月6日、松平定信、隠居して楽翁と号す。
- ◇8月14日、商人高田屋嘉兵衛が樺太でロシア船に捕らえられカムチャッカに連行される。
- ◇10月28日、勝川春好没(70)。
- ◇安藤広重、歌川姓を名乗る。

◇清元延寿太夫により浄瑠璃の清元節始まる。

○曲亭馬琴、柳橋たもとの料亭万八楼で書画会を催す。

【長男没し、後妻と別居か】

★長男、富之助没（26 歳）。これにより富之助の養子先の中島家からの北斎への資金援助がなくなるとする説あり（リチャード・レイン『伝記画集 北斎』 p96）。

★富之助の没後、中島家は別の養子を入れ、その養子に北斎の次女阿鉄が嫁し、間もなく没したとされる（田崎暘之助『浮世絵の謎』 p183）。

この説に従えば、阿鉄はこの年 22 歳で没したことになる。文化 5 年（1808）に 18 歳で没したともされる。

★「五十三歳の頃より、独居して、婦人を近づけざりしと。」（『葛飾北斎伝 pP306』）とあり、この頃より後妻ことは、妹の家に住み北斎と別居したともいわれる。

【第一次関西旅行、『北斎漫画』の下絵を描く】

★第一次関西旅行。名古屋、伊勢、吉野、紀州、大坂など。大坂では弟子の春好斎北洲（生没年不詳）、その弟子春梅斎北英（生没年不詳）らが活躍中。

★秋頃、門人牧墨僊（月光亭）（1775～1824。元尾張藩士）注の南鍛冶屋町下新道北西角（現愛知県名古屋市中区栄一丁目）宅に招かれ、約半年滞在し『北斎漫画』の下絵 300 余図を画く。墨僊が北斎を知り合いの名古屋の東壁堂（永楽屋東四郎）に紹介する。文化 6 年墨僊の戯画本『狂画』『狂画苑』刊を北斎も見て影響されたか。

注）牧墨僊：初め喜多川歌麿の弟子であったが、文化 3 年（1806）、師の没後に北斎の弟子を希望していたといわれる。文化 14 年（1817）条参照。

【名古屋滞在の様子】

永田生慈『葛飾北斎』（吉川弘文館 p161～162）では、永楽屋佐助（本名、中川佐助。明治に永楽屋東明堂という書肆を名古屋末広町で営む）の、北斎の名古屋滞在の思い出話を記録した武田酔霞の「葛飾北斎尾張名古屋の生活」（『浮世絵』10号 大正 5 年：1916 浮世絵社）を紹介している。

「（略）又北斎の名古屋へ行しは、文化年間の頃とか、此地に臻（至）りし節は、鍛冶屋町、牧墨遷の家に行て草鞋の紐を解きたるとぞ、其後の事でもありましたか、同所花屋町に住居せしといふ、此事は北斎伝にはなし、私がまだ青年の頃、弊屋へ出入せし、末広町の書肆永楽屋佐助といふは、彼北斎漫画同画譜等の出版元、永楽屋東四郎方の、子僧上りの別家にて此佐助の咄しに、わたくしの未だ子僧の時分に、北斎さんの花屋町（割書：花屋町は本町通り、元大久保見町と末広町の境界の町にて、至て幅狭き町なり）住吉町寄りの南側中程、元は誰かの隠居所にてもありましたか、奥の間が六畳敷、次が四畳半、上り口が二畳、表の壁が円窓でありましたが、私が知人が少しの間住居せし故、度々此家へ行たればよく存じて居ましたが、小闇く日当りのよくない、いかにも陰気な家でありましたが、佐助のいふには、調度此節は漫画其他画本類の出来る時分で、版下の画や、又下画直

しを取に行たり持て行たりお使にゆきて、北齋さんとは近付にてよく知て居りましたが、奥の六畳に寝所は不斷敷ばなしで、其儘終に夜具蒲団はたゝみたることなく、土鍋で飯は煮捨て、茶碗皿小鉢はつひに洗ひたることなく、衣類とても、垢染たる、ぼろぐしたるものを着て、男世帯の独居ではありますが、私は子供心にも、いかにも穢ひ家きたなひ先生と思ひました。(略) 又ある時に私が、先生はいつごろ江戸へお帰りですかと尋ねましたれば、己はもふ江戸へは帰らぬよ、此名古屋は洵によひ所で、己の身体には時候も飲食物もよくかなつて居るから、名古屋は死場所などゝいはれましたれば、私もなんとなく心嬉しく思ひましたが、其内俄に伊勢とか京大阪へ、旅立たれたと跡で聞まして、大きに落胆いたしましたと、佐助がいひました咄を、私は覚えて居りました故に、今茲に記しておきます。(略)」(一部ルビ：筆者による)

【谷文晁 北齋の先触れとなる】

★北齋の関西旅行は文化9年(1812)と文化14年(1817)の2回。そのどちらかは特定できないが、北齋関西行きに先駆けての谷文晁注1のエピソードを香雨楼主人が「北馬と文晁と北齋」(『浮世絵 19号』p27所収 酒井好古堂 大正5年11月の記事を、更に『日本浮世絵博物館所蔵 大揃え北齋』〈読売新聞社〉所収p125~126で転載)で紹介している。

「(略)また嘗て文晁、北馬を介して、尺五の絹本に三十両といふ大金を添えて、龍図の揮毫を北齋に囑したる事あり。当時三十両といへば方外の潤筆なり。殊に文晁からの注文とあれば、北齋も一生懸命にて健腕を揮ひたるなれば、其の画頗る見事なり。文晁もひそかに其妙技に感じたるも、一切人に示さず。直に之を美麗なる装を加へ、携えて京師に赴き、其途すがら旅宿につけば、必ず先づ此幅を床にかけてうちながめ、訪ひ来る人毎に之を示して、北齋が雄腕絶世の妙技なる所以を吹聴したり。

而して後、北齋が名古屋より大坂に往きし時は、既に文晁が海道筋に先触せしこととて、北齋の名、直に聞えて、到る処で持囃されしと云ふ。此事蓋し北齋が文晁の希望を容れて北馬を借したる寛量大度に注2、文晁大に感ずる処ありて、聊か之に酬るんと志したるに依るなるべし。当時文晁は田安家の御絵師、北齋は板下書きの町絵師なれば、格式は雲泥霄壤の差異あるなかにして、かかる美談の伝はるは、いささか英雄同志の狂言めきたるに似たるあり。又文晁が自ら下つて浮世絵師たる北齋を担ぎたるは、文晁が敵本主義注3のポリシーなるなからんかも知らざれども、兎に角共に一代の大家たる風を漂はしたる佳譚と称すべし。(以上、前田香雪翁の談話に拠りて記す)」(ルビは筆者による)。

注1) 谷文晁：1763~1841。江戸下谷根岸の生まれ。江戸時代後期の画家。別号は写山楼。30歳になるまで日本全国を旅し、文化9年(1812)に『日本名山図絵』を刊行した。

注2) 北齋が文晁の希望を容れて北馬を借したる寛量大度に：文晁が北齋の弟子北馬の才能を見出し、自分の弟子になるよう勧めたところ、北齋に許しを得るために文晁から手紙を出して欲しいと言われ、早速手紙を出したところ、北齋は快く承諾したというエピソードを指す(『日本浮世絵博物館所蔵 大揃え北齋』p125)。

注 3) 敵本主義：目的が他にあるように見せかけて、途中から急に本来の目的に向かうやり方。「敵は本能寺にあり」の故事から（『大辞泉』より）。

※同内容を『葛飾北斎伝』（p132）では次のように記している。

「(略) 彫刻家勝友の話に、嘗て聞く北斎翁京師に到りし時、佐伯岸駒脚注の画、盛に行はれて、画を翁に請うふ者、一人もなし。頃しも写山楼文晁、松平越中侯の命を奉じ、畿内の神社仏閣にある古画を検閲し、京師にあり。窃に翁を招きて、先づ竜を画かしめ、美麗なる袷装をなし、翁を促し、江戸に帰らしめ、しかして文晁かの竜の一軸を、おのが旅宿の床の間にかけておき、人あり来れば、翁が筆力の非凡なるを賞誉せり。これより北斎の名、大に京師に顕はれ、人々争ひて画を購ひしとぞ」（ルビは筆者による）。

脚注：江戸後期の画家。宝暦六一天保九年（1756－1838）。金沢の人。岸派の祖。独学で絵を習得。有栖川家、のち朝廷に仕え、越前守に進む。沈南蘋や円山派の影響の見られる画風。

★この頃より絵本出版に情熱を注ぐ。

【またまた馬琴と口論・絶交か】

※文化 5 年（1808）の口論、文化七年（1810）の団円に続き、再び曲亭馬琴と挿絵のことで口論、絶交する。あるいは文化 8 年（1811）のことか。

「曩に馬琴著作、北斎挿画の『南柯夢』、大に行はれ志をもて、書肆其の続編を著作せむ事を請ふ。かの『南柯夢』は、既に全く局を結びたる（筆者注：完結した）ものなれど、強て請ふにより、編を続きたるなり。北斎又この挿画をかきしが、再び挿画のことより馬琴と議論を生じ、二人終に交りを絶ちしといふ。一説に、後記巻一、六丁裏、刀屋同樹が、立廻りの所に於きて、馬琴同樹をして、口に草履を含み、裳を褰ぐるのさまを画かんを請ふ。北斎笑て曰く、此の汚穢物、誰かこれを口にすべき、若し然らずとせば、君先づこれを口にせよ。馬琴大に怒る。これ二人が交りを絶ちし原因なりと」（『絵画叢誌』20 卷〈明治 21・11・29〉所収「画家畸談」。『葛飾北斎伝』 p 93～94 で紹介）

※飯島虚心は、『竈将軍勘略之巻』（寛政 12 年：1800）の巻末に「あしき所は、曲亭馬琴先生へ御直し被下候云々」とあることや文化 3 年（1806）に北斎が馬琴宅に食客となっていたこと、馬琴自身が謹厳な人柄であることなどから「又按ずるに、北斎馬琴と交りを絶ちしといふは、甚疑ふべし」（ルビは筆者による）としている（p 97～98）。

この争いについては、鈴木重三の『三七全傳南柯夢』の校合本調査（『人間北斎』（緑園書房 昭和 38 年：1963）により事実ではないとされる（永田生慈『葛飾北斎』 p 112 吉川弘文館）。

●読本『占夢南柯後記』（1 月。角書『三七全傳南柯夢 第二編』。『三七全傳南柯夢』（文化 5 年）の続編。四卷〈三編四卷と合わせ八卷十冊〉。曲亭馬琴作。葛飾北斎辰政画。印雷震。榎本惣右衛門・榎本平吉（木蘭堂）版。国立国会図書館/早稲田大学図書館/国文学研究資料館/八戸市図書館蔵）。

※奥付には「文化九年壬申春正月良節発販大吉利市」とある。序文は前年 7 月。



占夢南柯後記 第二編 卷一（早稲田大学図書館デジタル版より）

●読本『占夢南柯後記』（2月。角書『三七全傳南柯夢 第三編』八冊。『三七全傳南柯夢』（文化5年）の続編。曲亭馬琴作。葛飾北斎辰政画。印雷震。榎本惣右衛門・榎本屋平吉（木蘭堂）版。国立国会図書館/国文学研究資料館/早稲田大学図書館蔵）

●読本『青砥藤網模稜案 前集』（1月。半紙本五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎雷震絵画。平林堂庄五郎・鶴屋金助合版。立命館大学 ARC/早稲田大学図書館蔵）奥付には「文化九年壬申春正月吉日発販」とある。序文は前年10月。

●読本『青砥藤網模稜案 後集』（9月。半紙本五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎。平林堂庄五郎版。立命館大学 ARC/早稲田大学図書館蔵）奥付には「文化九年壬申冬十二月吉日発販」とある。序文は6月。

●絵手本『略画早指南 前編』（1月。題簽には「前編」の文字はなし。墨摺。中本一冊。全26丁。北斎老人。蔦屋重三郎・越前屋吉兵衛版。鶴屋金助・河内屋茂兵衛の後摺版がある。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館/国文学研究資料館/フリーア美術館：ブルヴァー・コレクション/大英博物館蔵）

※絵手本の広告が蔦屋の出版物に見られる。ここで、あらゆる物の形状は定規とぶんまわし（コンパス）による方と円という基本的形態に還元されるという「規矩方円説」を説く。後編は文化11年（1814）刊。

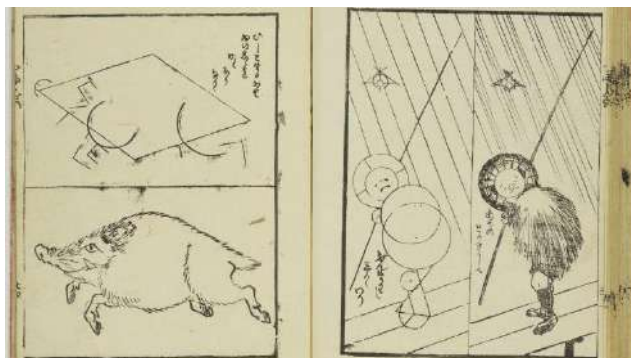
※「フレデリック・デ・ヴィト『絵画の光明』（1600年）が森島中良の『紅毛雑話』に引用され、そこから円と四角で顔などを描く方法を北斎流にいつそう発展させてできたものと思われる」（安村敏信「北斎の生涯と画業」〈『北斎 視覚のマジック』p6 2019年平凡社）

【規矩方円説】

※序文「丈山尺樹寸馬豆人なぞいへる画に、儘く其法あり。ざれど起る処は方円を出ず。今北斎老人是を基として規矩（「ぶんまわしひでうぎ」注1のルビあり）の二つを以諸の画をなすの定位を教ふ。かの焼筆を用て形をとるに同じ。是を見是を学びて、よく規矩の

ふたに自在ならバ 細密の画といふとも、此工夫をもてなる可しと。略画指南の巻首に贅す。鏡裏菴梅年 文化壬申春 鏡裏菴梅年注」(句読点は筆者)

「略画早指南」前編(すみだ北斎美術館)左:ひしとまるにて むのししをかきほうなり 右:ぶんまわし三かくわり あめのとりさし也



〈附言〉「一 此書ハひでうぎ(楯定規)とぶんまハしをもつて、絵をかくの法にして、是より入るときハ、絵のわり谷をはやくしりて、かつかうつり谷おのづから出来る也。

一 此外に、略画の一筆書、又、筆意、筆あたり等を早く教へて直に絵のかける書ハ、来西の春差出申候」(句読点は筆者)と来春に続編を予告している。

注1)「ぶんまわしひでうぎ」:コンパスと楯定規をいう。

注2)鏡裏菴梅年:北斎の戯号。

※〈ぶんまわしにて子犬を画くの法〉

〈三角と四角と丸と三つを重ねて猿の暫くを画く法〉〈四角にて鶏を画く法〉などで、○と□に分解された下書きと、それをもとにした完成図がともに示される。



左:おにのわりかた しほふきのかきかた おかめのわりやう
右:ひしとまるにて せきぞろをしたてる

●読本『松王物語』(1月。角書「経嶋履歴」。半紙本六冊。小枝繁作。見開き表紙に葛飾北斎画とある。印)亀毛蛇足。河内屋嘉七(文栄堂)・角丸屋甚助(衆星閣)版。すみだ北斎美術館/国立国会図書館/国文学研究資料館蔵)奥付には「文化壬申年春正月発行」とある。

平清盛が福原に移り住み、人工島経が島(現神戸市兵庫区築島)を造成するに当たり人柱となった少年松王丸の物語。

●説話集『北越奇談』(9月。六冊。橘崑崙(橘茂世)作。葛飾北斎補画。印)雷震。

柳亭種彦校合。須原屋茂兵衛他版 22.2×15.3 早稲田大学図書館/島根県立美術館:永田コレクション/浦上蒼穹堂/すみだ北斎美術館蔵)

※読本に分類されるが、橘茂世が越後の寺泊生まれであるので、北陸地方(おもに越後)に伝わる奇談や珍奇な物産などを紹介した随筆。中に橘茂世の自画像も挿入する。凡例の末尾に「画は北斎翁の筆なれど画翁の盤多をたすけんと崑崙子のした絵のまゝに彫するもの四枚 かたわらに茂世の印をおしたり 印なき悉く北斎翁の画なり 辛未秋注」とある。

注)辛未秋:文化8年の秋。前年に書かれたもの。北斎の版下が多いのを助けるために、

茂世の下絵をそのまま彫ったものが四枚あり、脇に茂世の印を押してある。印のない画はすべて北斎の描いたものだというのである。

※口絵に〈雪中の旅人たち〉を描く。雪道の街道を馬に乗って行く人、荷物を担いで行く人。遠景にも多くの旅人が行く。人々は皆、笠を被り俯いて行く。

『北越奇談』口絵「雪中の旅人」(早稲田大学図書館)



●地誌『勝鹿図志 手操舟』(8月。勝鹿図志

てくりふね)とも。二冊。一部薄墨刷彩色刷入り挿画入り。北斎筆。印葛飾(2019「新北斎展」解説p326による)。22.0×15.0 行徳金堤(鈴木清兵衛)著。島根県立美術館:永田コレクション/大英博物館/西尾市岩瀬文庫蔵)巻末に「文化年秋八月壬申」とある。文化(1813)説あり。

※葛飾浦(現千葉県船橋・市川・行徳辺り)の名所記。後半は諸国俳人発句集となっていて、夏目成美・谷川護物・鈴木道彦・其堂・鶴田卓池・井上士朗・小林一茶・建部巢兆・岩間乙二等が発句を寄せている。

北斎は「行徳金堤」編に挿絵一図のみ描く。他に三世堤等琳、鈴木金堤・長塩雪山・谷文晁・鈴木南嶺・建部巢兆等が描く。編者は行徳の人で新井の里正(村長)にして俳人。

●艶本『絵本つひの雛形』(1月。色摺大判折帖一冊。12図1丁の組物。落款:紫色鴈高。「つひ」は「つび」で「女陰」の意味だという。27.0×39.0 国際日本研究センター/浦上満蔵(折本))

※「文化八辛未稔晩冬中旬飯田書林藤倉より価百疋注にて調之」の書入れ本があるという(『年譜』による)。これによれば前年の暮れの制作で文化九年1月頃の刊行となるか。注)金百疋:1疋=25文。100疋=2500文。1文=約25円で換算すると、約62,500円位か。

※隠号は「雁高」「鴈高」とも表記されるが、本稿では「鴈高」で統一する。

※序文は『東にしき』(文化8年・1812)に同じ(『浮世絵春画名品集成』13所収)。序文末に「女好軒主人しるす」(制作年は白倉敬彦『絵入春画艶本目録』平凡社2007による)とある。「女好軒」は、溪斎英泉の隠号。

一方、娘の阿栄の手が入っている説がある。表紙に「陰陽和合玉門榮(改行)紫色鴈高作・女性陰水書」とあり、「陰陽和合」は男性と女性の交合を示し、「玉門榮」は阿栄を指すとする。「女性陰水書」の「書」は「画」の誤記あるいは誤刻であり、女性も描いたとする。

また「紫色鴈高」は、この名を北斎から譲り受けた溪斎英泉(二代目紫色鴈高)の号であり、阿栄と英泉によるものとする説もある(林美一「春画を描いた女浮世絵師 葛飾應

為と「陰陽和合玉門榮」『プリンツ 21』1993年10月号所収。Wikipedia「葛飾北斎より」。

同様の説は、第6図の画中の炬燵布団に投げ出された和本の題簽に同様の書き込みが「紫色鷹高作 女悦淫水書 陰陽和合玉門榮 太郎助兵衛板」とあり、「榮」が阿榮の隠号であるところから阿榮が関わった書であると、『芸術新潮』1989年3月号所収「北斎艶本への挑戦」(p43)でも述べている。また、北斎工房と阿榮と溪斎英泉の関わりがあるともいわれる。

『絵本つひの雛形』(部分：国際日本研究センター)



●狂歌本『狂歌一会大相撲』(北斎)

※リチャード・レイン『伝記画集 北斎』(p331)による。

●狂歌本『堀河太郎 百首題狂歌集』(この頃か。文化8年説あり。二冊。六樹園飯盛撰。葛飾北斎補画。印雷震。他に北尾重政、窪俊満らが描く。西村屋与八版。後摺に鶴屋金助版がある。22.1×15.8 島根県立美術館：永田コレクション/藤女子大学図書館蔵)

※平安時代後期の『堀河院太郎百首』(『堀河院百首』とも)や寛文11年(1671)『狂歌本『堀河太郎百首』を意識して「堀河太郎」としたか。100の題で1821首を掲載。挿絵は北斎を含む8名による9図。北斎は「桜花」(桜の老木の画)を描く。

●絵暦「神猿の鹿島踊り図」(1月。北斎画)猿の着物に文化9年を示す「壬」の文字と、輪郭線に大小月が示される(『年譜』による)。

●絵暦「絵暦の内」

☆〈猿回し〉(仮題。艶画絵暦。仕掛付。小判。無款。12.3×8.8)

※猿回しがいる背後の部屋での情交を描く。左下の風呂敷にこの年の「壬」が描かれている。仕掛とは、伏せられた紙を開くと隠された春画部分が現れるように細工されたもの。

☆〈屋形船〉(仮題。艶画絵暦。仕掛付。小判。無款)

※船の屋根に乗って手をかざして遠くを見る船頭。川の向こうに初日の出。船頭の半纏と船の中の提灯に「申」の字が描かれている。船の中では男女の情交がなされている。

屋形船(部分：<https://media.thisisgallery.com/>より転載)



☆〈無題〉(艶画絵暦。仕掛付。小判。無款)

※大きな荷物箱の上に仰向けになった女の側にいる男。

文化10(1813) 癸酉 54歳 葛飾北斎、北斎辰政、北斎、印臥遊、亀毛蛇足、雷震：こ

と(43歳)、(阿美与：25歳)、(孫：4歳)、阿榮(16歳)

◇相撲興行（浅草寺場所）

※正月 28 日初日から 3 月 18 日の千秋楽まで 47 日かかる。晴天 10 日間興業だが、雨と社寺の行事で中止もあったため。

◇6 月、イギリス船、オランダ商館乗っ取りのため長崎に来航。

○式亭三馬、『浮世床』（初編）。『浮世風呂』（第四編で完）。

○山東京伝、『双蝶記』。

★2 月、名古屋から江戸に戻る。すぐに墨僊へ礼状を出す。

「新春之御吉慶萬々御目出度ふ奉存升。御両所様益々御機けんよう御越年被遊恐悦至極に存升。御縁者様方は申に不及、御地に罷有候節、御馳走に罷成候、諸君子へも乍憚宜敷御伝声可然被下様、偏に奉願上升。当地家内不残無事に加年仕、只々其節々々御高情のみ御噂申上升。へいへいへい、エゝゝ亦永日（筆者注：いずれの意）上り升と恐々謹言 二月六日 かつしか北斎(印) 月光亭墨僊 様 人々参る」（安田剛蔵『画狂北斎』p85）

★2 月刊行の「作者画工見立番付」で、北斎は行事の部に載り、門人では、小結に北馬、前頭に柳川重信、その他、北岱、北嵩、辰斎、北寿、北溪、雷川、北鷺などの名が見えるという（『年譜』による）。

★この頃より読本の挿絵から遠ざかり絵手本に向かい、葛飾派を広める。

★文化元年からこの年まで 38 編 192 冊 1100 図の読本の挿絵を描いたとされる。

●読本『小栗外伝』初編（角書「寒燈夜話」正月。六冊。内六図は安田雷洲画。北斎辰政画。印臥遊注。絳山（小枝繁）作。角丸屋甚助版。早稲田大学図書館/後摺版：国立国会図書館蔵）奥付には「文化十癸酉年猛春新板」とある。

※『世界を魅了した鬼才葛飾北斎』（河出書房新社）では、文栄堂版（河内屋嘉七）としている。

※小栗判官の物語をもとに創作された伝奇物語。二編は、文化 12 年（1815）1 月出版。全三編十五冊）

注）臥遊：永田生慈『北斎の絵手本 五』（岩崎美術）年譜による（p276）。

『小栗外伝』初編四丁（早稲田大学図書館）



【印・亀毛蛇足を譲る】

●肉筆画「鯉魚図」（4 月 25 日作。「鯉亀図」とも。横長紙本着色一幅。北斎。印亀毛蛇足。27・6×92・4 埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵）

※鯉が二匹と亀が二匹、水中で泳ぐ図。水草が透けて見える。

※左端の直筆添書に「年来持伝候亀毛蛇足之印御譲り申上候 御出精可致候以上 文化癸酉年四月廿五日」（ルビは筆者）とある。文化10年4月25日に亀毛蛇足の印を門人・葛飾北明注に与えたのである。北明は文政7年（1824）『月桂神話』奥付に「東都葛飾北明」の落款と「亀毛蛇足」の印を用いている。



鯉魚図（埼玉県立歴史と民俗の博物館）

注）葛飾北明：生没年不詳。北斎の用いた九々屋や画狂人の号も用いる。女流絵師と目されるが不明。『浮世絵類考』（故法室本。岩波文庫版 p 181）には「北斎門人なり。氏俗称共に未詳。画狂人と号する読本を画けるもの多く有」とあり、その脚注に「『北明子画品』（文化十三年版）に『井上氏女北明子筆』とあり」と記されている。「女」は「娘」の意。

●肉筆画「扇を持つ立美人図」（この頃か。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印雷震。82.4×30.5 フリーア美術館蔵）

※扇を持ち、黒の夏着に兵児帯風の赤い帯を大きく巻いて後ろに結んでいる姿。

扇を持つ立美人図（フリーア美術館）



●摺物「手紙を読む乙福」（1月。歳旦狂歌。葛飾北斎画）「酉の春」とある（『年譜』による）。

●絵暦「雪の送り」1月。（葛飾北斎筆）

※女性の帯に大小月が示される。春待の狂歌がある（『年譜』による）。

文化11（1814）甲戌 55歳 葛飾北斎、戴斗、月癡老人、山水天狗末弟天狗堂熟鉄、鉄棒

ぬらぬら、北斎改戴斗、北斎改为一、北斎改たいと、北斎 印雷辰、臥遊、辰、政、

一人人形：こと（44歳）、（阿美与：26歳）、（孫：5歳）、阿栄（17歳）

◇この年諸国が旱魃で飢饉となる。

◇1月12日、歌川豊春没（80）。

◇10月4日（西洋暦）、ジャン・フランソワ・ミレー生（～1875）。

◇伊能忠敬、「日本沿海実測全図」完成。

◇長崎オランダ商館江戸参府。

◇富士講禁止令。

◇蕎麦屋「砂場」、大坂より麴町七丁目に進出(砂場藤吉)。

○式亭三馬、『浮世床』(第二編)。

○曲亭馬琴(48歳)の長男鎮五郎、宗伯と称す(後に医師となる)。この年より生薬屋を家業とし、自作の本に広告を出す。

○曲亭馬琴、『南総里見八犬伝』第一輯(柳川重信画。天保13年：1842まで刊行)。

○烏亭焉馬の咄の会禁止令。

【北斎号を門人に譲り翌年より戴斗号を使用】

★12月、「北斎」号を門人の亀屋喜三郎(吉原の引手茶屋「亀屋」主人)に譲り、北斎は翌年より「戴斗」号を使用したか(安田剛三『画狂北斎』p115)

【尾上梅幸に媚びず・おじぎ無用、みやげ無用】

★「この頃注俳優尾上梅幸(三世菊五郎)の技芸、世に名高し。最幽霊に扮するに巧にして、殊に賞せらる。梅幸嘗て北斎を招き、幽霊を画かしめ、其の凶果して真に逼らば、これにならひ、扮装をなし、愈其の技を巧にせんとす。北斎来らず。梅幸一日輿に乗り、北斎の家を訪ふ。其の家もとより貧しければ、茶、煙草盆の設もなく、室内あれはて、菅掃除せしことなければ、不潔いはんかたなし。梅幸このありさまに驚き、再び戸外に出で、輿丁を呼び、輿中の毛氈を出だし、これを室内に敷かしめ、さて室に入りて座し、一礼を述べんとせしが、北斎其の挙動の不敬に亘れるを憤り、机によりて顧みず。梅幸も亦憤然、一語を交へずして立ちさたり。北斎意を枉げ、世に媚びることなき此のごとし。されど平常は、謙遜辞讓にして、門には、百姓八右衛門とかきたる名刺を貼り、室には、おじぎ無用、みやげ無用の壁書をかゝぐ。関根氏の話 按ずるに、北斎が、幽霊の画に妙なるは、当時の人既にこれを知る。故に梅幸其画を請ひしなり。(略)後に梅幸不敬の罪を謝す。夫より相交はること甚深し」(『葛飾北斎伝』p89~91 ルビは筆者による)

後に仲直り、親交を結ぶ。弘化4年(1847)には蚊帳を売った金で梅幸(梅寿)の舞台を見に行っている。

注)この頃：「本所石原の家」(現東京都墨田区石原町1丁目から4丁目)に住んでいた頃には間違いない。文化5年頃に、亀沢町(現東京都墨田区亀沢町)に新居を構え、文化6年ごろには、本所両国橋辺に住み、文化7年には、葛飾に住むとも思われるが、本所石原町も「葛飾」一帯と称されるので、このエピソードがいつかは明確には不明。『葛飾北斎伝』(p89)では文化7年の記事の後に「この頃」と記されているが、「梅幸」名は、文化11年~12年に名のっているので、文化11年頃の話とした。

【北斎はとかく人の真似をなす】

★『武江年表』(国立国会図書館デジタルコレクションp173)では次のエピソードを紹介している。

「(政美注は) 語りて云、北斎はとかく人の真似をなす、何でも己が始めたことなしといへり、これは略画式を蕙斎(筆者注: 鋏形蕙斎・寛政9年<1797>の『鳥獣略画式』、寛政11年<1799>の『人物略画式』など)が著して後、北斎漫画をかき、又紹眞(筆者注: 更に改名して蕙斎のこと)が江戸一覧図(享和3年<1803>)を工夫せしかば、東海道一覧の図を錦絵にしたりしなどいへるなり」(斎藤月岑『武江年表』巻七 寛政年間記事。ルビは筆者による)。

注) 政美: 北尾政美(1764~1824)。浮世絵師。狩野派に転じた後、鋏形蕙斎と名乗る。「北斎嫌いの蕙斎」の評判があったという。

【この頃の弟子 230 名以上】

※この頃には、孫弟子まで含めると 230 人以上が北斎門下にあったという(『江戸の絵本画像とテキストの綾なせる世界』所収、永田生慈『北斎漫画』考(三) p258)。

※鋏形蕙斎(北尾政美)の「略画式」の真似か(斎藤月岑『武江年表』の寛政年間の記事による)。

【北斎漫画初編刊行】

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 初編』(1月。半紙本。一冊。葛飾北斎筆。「伝神開手」は絵の神髓を学ぶ者の手本の意。同本は全15編まで刊行(平均60頁)される。初編は239図。図版総数は3600余。平均22.8×15.8で15編まで同じ。島根県立美術館: 永田コレクション/すみだ北斎美術館: ヒーターモース・コレクション/東京国立博物館/山口県立萩美術館: 浦上記念館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/フリーア美術館: プルヴァエー・コレクション蔵)。

※文政12年(1829)春に再刻版あり(『年譜』)。

注) 所蔵館等の『北斎漫画』図版は、初摺・後摺を限定していない。

※1月(孟春)刊行の初編の奥付には、「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋交門人: 北亭墨僊、東南西北雲。文化十一甲戌孟春。書林: 永楽屋東四郎(尾州名古屋本町七丁目)」初摺本には、各丁の折り目部分に「初版」を示す版心書名がない。

※これ以降、北斎と関わる永楽屋東四郎は、二代目である。初代は寛政7年10月23日に没している(55歳)。

☆半洲散人注の序文「(略) 今秋、翁たま(西遊して我府下に留り、月光亭墨遷と一見相得て、驩はなはだしく、頃、亭中に於て品物三百余図をうつす。仙仏仕女より鳥獣草木にいたるまで、そはなさざることなく、筆はぶいて神なせり。夫近世の画家、真をうつす者は必ず風致に乏しく、意を画く者は檢格なし。その図する所、疎淡にして明整式あり、韻あり。物々佐生動せむと欲す。喜ぶべく楽しむべし。嗚呼、たれかよくこれに加へ、翁真に画を学ぶもの開手となすべきかな。如夫題するに漫画を以てせるは、翁のみづからいへるなり 文化壬申(文化9年: 1812) 陽月 尾府下 半洲散人題」(『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による)

注) 半洲散人^{はんしゅうさんじん}：1772～1853。神野世猷^{かんのせゆう}。字は文徽^{ぶんき}。号松篁軒^{しょうおうけん}。尾張藩士（『葛飾北斎伝』脚注 p 128）。

墨遷^{ぼくせん}の家に逗留しながら、絵の手本として下絵を描いたというのである。「漫画」の語は北斎自らつけた名称で、気ままに書いた絵というほどの意味。

※この年発刊された『北斎漫画』には「初編」の記載がないが、これを十編までのシリーズ化する計画を角丸屋甚助^{かどまるおじんすけ}が立て、他の版元と合梓^{ごうし}の形で、以後角丸屋から出版された。

※「初編のカテゴリーと数」（若松謙二「『北斎漫画』で江戸時代を読む」より〈平成 28 年 3 月葛飾区教育委員会『平成 27 年度かつしか区民大学ゼミ 調べて書く葛飾』第 6 集所収〉

「神祇」7 「釈教」7 「鬼神」0 「霊獣」1 「怪異」2 「公家神官」2 「武士」5 「文人」5 「中国人物」8 「庶民」29 「仕事」45 「武芸兵馬」1 「芸能」9 「子供」9 「遊び」3 「風俗」2 「鳥類」7 「獣類」15 「蟲類」19 「水棲類」17 「草木」31 「山水」0 「名所」1 「社寺」2 「家屋」2 「建造物」1 「交通」1 「道具」0 「岩石」0 「物語」8 「里謡」0 「群像」0 計 239 図

※オランダ国立民族学博物館には『北斎漫画』全 15 編が所蔵されているが、そのうち初編から 10 編までは、シーボルトが持ち帰ったものという（浦上満『北斎漫画入門』p 33 文藝春秋社 2017 年）。



初編（島根県立美術館）

【『北斎漫画』一冊 銀二匁八分】

※版元の永楽屋に一冊「銀二匁八分」という記録が残っていて、今の 3000 円から 5000 円くらいという（浦上満『北斎漫画入門』p 30 2017 年 文藝春秋社）。

●絵手本『北斎写真画譜』^{ぼくさいしやうしんがふ}（3 月頃。淡彩摺。折本大本一帖。序文平由豆流^{たいらゆづり}。15 図全て見開き図。無款。各平均 25.7×17.0 近江屋与兵衛・鴨伊兵衛合梓版。刊記のない版も多くある。大英博物館/メトロポリタン美術館/東洋文庫/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/フリーア美術館/アーサー・M・サックラー美術図書館/チェスター・ビーティ図書館/フリーア美術館：ブルヴァー・コレクション/国立国会図書館蔵）

※序文の末に「文化とせあまりひとせやよひついたちの日」（文化 11 年 3 月 1 日）とある。「文政二年己卯年 東都書林 通油町 鶴屋喜衛門」とある後摺版が文政 2 年

(1819)に刊行された。北斎存命中に後摺本をシーボルトがオランダのライデンに持ち帰る。

※「写真」は、実物からのスケッチの意味だという（リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p145）。

※序文を書いた国学者・平田豆流（岸本由豆流。号：やまぶき（木扁に在）園1789～1846 村田春海の門人）が私家版として刊行したといわれる豪華出版物。風景、人物、動植物などを見開きで収める。

※（ ）の表題は、国立国会図書館デジタル・コレクションに付けられたもの。

☆〈布袋〉（布袋）

※長煙管で一服する布袋の脇に大きな袋。足元には包丁とまな板がある。



布袋（大英博物館）

☆〈脇息による公卿〉（好士蝶を詠す）

※脇息に両肘をつき、頬杖をして二匹の蝶を眺める公卿。



脇息による公卿（大英博物館）

☆〈塗師〉（侍丁）

※寺社の柱に刷毛で色を塗る職人。

塗師（大英博物館）



☆〈龍に乗る観世音〉（龍頭観音）

※縦判。龍に乗っている観世音菩薩。

龍に乗る観世音（大英博物館）



☆〈雪景山水〉「山水雪景」とも（雪景）。

※背景に小高い山。手前の海には数隻の船。家と松にも雪が被っている。見開き一丁の図。

雪景山水（大英博物館）



☆〈梅樹の蕾〉（梅小月）

※梅の枝につく蕾の図を墨絵風に描く。国立国会図書館デジタル・コレクションでは、月の明かりの中に小枝が描かれる。

梅樹の蕾（大英博物館）



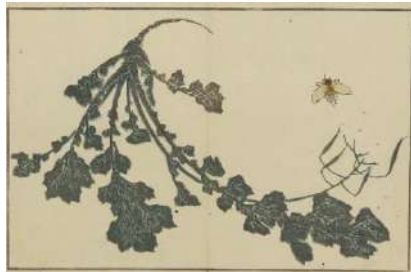
☆〈桜樹〉「桜花」とも（白桃）。

※開いた桜花を枝の数か所にバランスよく配している。

桜樹 (大英博物館)



☆〈油菜に蜂〉 (蘿蔔の花小虻) ※油菜の花に飛んで近づく蜂。



油菜に蜂 (大英博物館)

☆〈牡丹〉 (牡丹) ※大きく開いた牡丹花が二輪切りとられて箆に置かれている。

牡丹 (大英博物館)



☆〈燕子花〉「菖蒲」「杜若」「あやめ」とも。



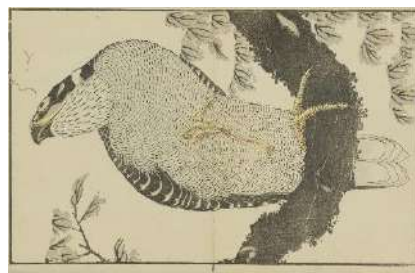
※赤と思われるかきつばたが生き生きと咲いている様子。

燕子花 (大英博物館)

☆〈鷹〉

※縦見開き図。木にとまり首を上突き出し、ものを狙うような鷹。

国立国会図書館蔵にはなし。 鷹 (大英博物館)



☆〈雉子〉「山鳥」とも (雉子)。



※尾長を突き出して

目を見開いて蹲る山鳥。周囲には足跡が楓の落葉のように乱れて描かれる。国立国会図書館デジタル・コレクションでは足跡が消されている。

雉子 (大英博物館)



☆〈鴛鴦〉 (つかひ鴛)

※二羽の鴛鴦が曲線を描くように寄り添っている。同年の摺物「鴛鴦図」を転用したもの。

鴛鴦 (大英博物館)

☆〈狸〉（月小狸）



※空中を飛んでいるような狸。国立国会図書館デジタル・コレクションでは背景に月が描かれる。

狸（大英博物館）

☆〈二疋のうさぎ〉



※二匹の兎が寄り添っている。二疋のうさぎ（大英博物館）

※文政2年（1819）に鶴屋喜右衛門版の後摺本がある（オランダ国立民族学博物館：シーボルト・コレクション蔵）。初摺判とは図の配列が異なる（『北斎の絵手本 四』p269）。

※国立国会図書館（明治24年。目黒伊三郎・目黒十郎版）のデジタル・コレクションは画の配置や表題が大きくことなり、〈鷹〉〈燕子花〉が削られ、新たな図（※印）が他の絵師により加えられている。「目録」に示された表題と順序を参考のために以下に示す。

〈好土蝶を詠す〉〈梅小月〉〈※小鷲〉〈龍頭観音〉〈蘿蔔の花小蛇〉〈侍丁〉〈雉子〉
〈白桃〉〈布袋〉〈二疋うさぎ〉〈つかひ鴛〉〈※獅舞〉〈雪景〉〈月小狸〉〈※蝶々とまれ売〉
〈※鯉〉〈※雪中の獅子〉〈※大津絵の鬼〉〈※七福神の戯〉〈※同つつき〉

〔新たに加えられた図〕

☆〈小鷲〉老木にとまる一羽の鷲。

☆〈獅舞〉扇子と御幣を持って右足を挙げて踊る獅子。

☆〈蝶々とまれ売〉子供たちの前で、棒につけた紐で結わえたおもちゃの蝶を揺らしながら売り歩く男。

☆〈鯉〉水の中を悠然と泳ぐ鯉。水面には光が反射している。

☆〈雪中の獅子〉雪の中でうずくまってこちらを見ている獅子。

☆〈大津絵の鬼〉一升徳利を下げ、傘をさした赤鬼が中空をまなざしている。

☆〈七福神の戯〉布袋が大きな袋に肘を掛け、その横で大黒天と弁財天がこちらを向いている。

☆〈同つつき〉前図の続き。恵比寿と寿老人が碁を打ち、その周りで福祿寿、毘沙門天が碁を見ている。

●絵手本『略画早指南』後編（8月。中本一冊。全28丁。著名無。葛屋重三郎（二代目）版。すみだ北斎美術館：檜崎宗重コレクション/島根県立美術館/大英博物館/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション）。

※『葛飾北斎伝』（p263）によれば後編の自序に「文化十一戌の中秋、山水天狗末弟、天狗堂熱鉄述」とある「天狗堂熱鉄」は「翁戯れに自号けたるなり」としている。また、「山水天狗」も偽名だが、実際に用いたものではない。

※前編(文化9年:1812)の奥付の広告に「此書ハ人物山水鳥獸虫魚草木のたぐひを一筆書にして早く筆意を教ゆるの法なり」とある。

※前編序文に続く附言には「一 此外に略画の一筆書、又、筆意、筆あたり等を早く教へて直に絵のかける書は来西の春差出申候」とあり、略画の一筆書を続けて刊行する意図が述べられている。文化10年春に刊行の予定だった。

※巻末では、筆の持ち方、動かし方を図解している。花魁の絵では、書込みの「けいせい」のすがたはゆふべ〈につくって千人の心をミんとかくなり(傾城の姿は『夕、可、作、千人、心、ミン』と描くなり)に従って、「夕」「可」「作」「千人」「心」「ミン」の変わり文字が配置され、それを辿れば

「花魁」の絵が完成する仕組み。

※二代目葛屋重三郎は、文化10年か11年に『己痴羣夢多字画尽』(文化7年)と『略画早指南』の版木を売却した形跡があるので、『略画早指南』が二代目葛屋重三郎から刊行されたかは不明であるとする説がある(永田生慈『葛飾北斎の本懐』角川選書p84)。

『略画早指南』後編(すみだ北斎美術館)



●読本『寒燈夜話 小栗外傳』二編(1月。四冊。小枝繁作。葛飾北斎画。印臥遊。衆星閣(角丸屋甚助版)、文金堂(河内屋金助)合梓。奥付には「文化十一甲戌年猛春辰板」とある。初編は文化10年1月刊。早稲田大学図書館/国立国会図書館(後摺版)蔵)

【艶本名作『喜能会之故真通』】

●艶本『喜能会之故真通』(1月頃。色摺半紙本三冊。隠号:鉄棒ぬらぬら。22.1×15.7日本浮世絵博物館/国際日本文化研究センター/浦上満氏/フリーア美術館:プルヴェア・コレクション蔵)

※題名は「甲子子祭」の文字変え。「甲子子祭」は、甲子の夜、大豆と黒豆と二股大根を供え、子の刻(23:00~1:00)まで起きて語り合い、大黒天を祀る行事。大黒天は子孫繁栄・男女和合の神。

※序文に「紫雲庵鴈高」とある。また「つるんでぬけぬ戌のはつ春」とある。北斎から隠号を譲り受けた溪斎英泉(紫雲庵鴈高)が序文を、本文は北斎、絵は、娘の阿栄ないし北斎一門の誰か、もしくは北斎と阿栄との合作とする説が有力。あるいは、上巻は北斎、中・下巻は阿栄(応為)等の作とする説もある(『美術手帳』「葛飾北斎」特集。2016年12月増刊号)

☆〈上巻〉1、口絵(恥じらう女の顔) 2、殿様と新参の腰元 3、後家と養子 4、昼の情事 5、男の浮気封じ 6、人妻の浮気 7、餅つき屋と町娘 8、婚前交渉 9、女陰図

☆〈中巻〉1、口絵（恍惚境の女の顔） 2、船頭と若い女との情事 3、夫婦 4、児のできた妾との性交 5、中国人の男女 6、奥女中と供 7、人妻との情事 8、不破伴左衛門と阿国御前 9、女陰図

☆〈下巻〉1、口絵（行為の後の女の顔） 2、炬燵に入った夫婦 3、湯治先での人妻と供 4、蛸と海女 5、男と遊女 6、屋形船のなかの情事 7、男と遊女 8、女陰図

※北尾重政『謡曲色番組』（天明元年：1781）下巻の挿図「海士」に描かれた海女と大蛸の絡みの図を、北斎も見たか。

※「蛸と海女」図は、パブロ・ピカソ「性愛の描画：女と頭足類」（1903 13.2×8.9 個人蔵）やオーギュスト・ロダン「蛸」（32.6×24.9 ロダン美術館蔵）などに影響している。



蛸と海女（日本浮世絵博物館）

北尾重政『謡曲色番組：海女（ARC 古典籍ポータルデータベースより）

●扇面図「敗荷に蛙図」（文化12年：1815 説あり。紙本墨画淡彩扇面一面。北斎改たいと筆。印辰印政。二曲一隻。扇面貼交屏風中の四面の一。上弦48.4 下弦20.9×17.5）

※敗荷は、「やれはず」とも言い、強風に吹かれて破れた蓮の葉をいう。敗荷にへばりつく蛙の図。

●摺物「山姥と金太郎」（この頃か。色紙判。摺物着色。北斎改戴斗筆。20.0×18.3 島根県立美術館蔵：永田コレクション蔵）

※金太郎と家来の猿が御幣の付いた烏万度注1を肩にし、猿・兎とともに、鹿島踊り注2をしている。金太郎の母の山姥は鉞に手をつき笑っている。背後に大きな朝日が霧の中から現れている。狂歌の賛は「宝船はさみてなみは踊れども かしまうらにはなんなかりけり 秩廼屋楯成」とある。

注1) 万度：万度祓のことで、神の前で祓の詞を何度でも読んで穢をはらうことをいう。図では、その際に用いる神具を担いでいるが、烏の絵が描かれているので烏万度といい、金摺となっている。

注2) 鹿島踊：鹿島神宮（茨城県鹿嶋市宮中2306-1）より発して関東沿岸部に流布した踊り。主に成人男子たちによる集団の踊りで疫病払い、五穀豊穰を願う。

●摺物「駕鴛図」（全紙判摺物着色一枚。北斎改戴斗。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

鴛鴦図（島根県立美術館）

※『北斎写真画譜』の「鴛鴦」に転用された画。雌雄の鴛鴦が、梅の蕾を付けた木に見える土手の上に止まっているように描かれる。二代目北斎の句が先頭に記され、丙子、高長、斗石、戴雅堂、戴財の句に続き、八句目に北斎改戴斗の署名の句が記されている。更に、對斗、斗文の句が続く。北斎画号を亀屋喜三郎（二代目北斎）に譲った記念の摺物。



●絵暦「雪玉遊び」（1月。「雪遊びの母子」とも。着色摺物。北斎画。9.3×12.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※大きな雪玉を作る三人の子どもたちと、赤子を抱きながらそれを見ている女。赤子は雪玉を指差している。雪についた子供たちの高下駄の跡の「二・四・五・六・八・十一」が小の月を表している。



●絵暦「目黒詣」（「目黒まゐり」とも。1月。北斎改戴斗筆。21.3×14.2 太田記念美術館蔵）

※『年譜』では文化10年（1813）としているが、落款から文化11年が妥当か。「正月屋」などと寄進者の名を記した大提灯の掛かる前で参詣する娘と婦人。ほおずきを手にした小奴が大提灯を指さしている。提灯に大小月が示される。埴生庵侘住の狂歌が記される。

目黒詣（2012 大阪市立美術館「北斎展図録」より転載）

文化12 (1815) 乙亥 56歳 葛飾北斎、東都葛飾北斎先生、東都画工葛飾北斎、葛飾北斎翁、北斎辰政、前北斎載（戴）斗、北斎改葛飾戴斗、前北斎、葛飾前北斎翁、かつしかお

やち、東都画工北斎改葛飾戴斗、画狂人北斎、葛飾親父戴斗 印 雷震、臥遊、亀毛蛇足、

ふしのやま、北斎：こと(45歳)、(阿美与：27歳)、(孫：6歳)、阿栄(18歳)

- ◇1月15日、歌川豊広没（65）。
- ◇3月19日、狩野融川没（38）服毒自殺か。
- ◇5月21日、鳥居清長没（64）。
- ◇幕府、落語を禁止とする。
- 4月、杉田玄白『蘭学事始』成稿。
- 5月21日、鳥居清長没（64）。
- 6月6日、鹿津部真顔（鹿津部真顔・四方真顔・四方歌垣）没（77）。
- 牧墨僊『写真学筆 墨僊叢画』（『北斎漫画』風絵手本）。

○柳亭種彦『修紫田舎源氏』初編。

★この頃、蛇山(本所中之郷原庭町。現東京都墨田区吾妻橋1丁目、東駒形2・3丁目辺)に住むか。この年夏刊行の『踊独稽古』の市川団十郎の序文に「(略)蛇山の主人、葛飾の癡老が筆を借て(略)」とあるところからの推測。

※本所中之郷原庭町は、牛島地区の中心地で、竹藪が多く、『四谷怪談』の舞台となった蛇山がある。

●絵本『絵本浄瑠璃絶句』(1月。墨摺。半紙本一冊。元『絵本長生殿』(文化11年:1814頃。色摺本二冊)の改題後修して薄墨本にしたもの。表紙に「葛飾北斎画」とあり、版元の松屋善兵衛の住所「本町拾丁目」と書かれた傘を持つ男が描かれる。序文は月光亭墨遷。表紙には「東都葛飾北斎先生筆」、奥付には「東都画工葛飾北斎筆」とある。印雷震。校合門人北亭(牧墨僊)。名古屋・松屋善兵衛版(薄墨摺本。墨僊の序文あり)と萬屋東平(名古屋本町1丁目)の後摺版(墨摺本)がある。江戸の角丸屋甚助(墨摺大本)も連版。浄瑠璃名場面集。後編は予告あるが未刊。15.5×22.3 メトロポリタン美術館/大英博物館/島根県立美術館:永田コレクション/名古屋市蓬左文庫/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション(後摺版)蔵)

※各頁に人形浄瑠璃の54題の場面を描く。上部には浄瑠璃のさわり文句が書かれ、図中にはそれを五言の漢詩にしたものが書かれる。



『絵本浄瑠璃絶句』(最終丁:メトロポリタン美術館 ARC 古典席ホークハースより)

●読本『寒燈夜話 小栗外伝』三編(1月。五冊。小枝繁作。葛飾北斎翁画図。見返しには「北斎辰政画」とある。烽山翁(小枝繁の別号)の序文。角丸屋甚助版。早稲田大学図書館/国立国会図書館(後摺)蔵)奥付には「文化十二乙亥年猛春発行」とある。

●読本『橋供養』(1月。角書「文覚上人発心之記」。五冊。北斎は初めの三図を描き、「右三葉前北斎画」と記す。葛飾前北斎翁画。他は門人の安田雷洲の筆。烽山翁(小枝繁の別号)戯編。角丸屋甚助版。国立国会図書館蔵)

【馬琴との連携終わる】

●読本『皿々郷談』(1月。半紙本六冊。曲亭馬琴作。前北斎載斗筆。朝倉伊八彫刻。榎本平吉版。曲亭馬琴との連携最後の作品。15.8×22.5 国立国会図書館/早稲田大学図書館/高知県立高知城歴史博物館/オランダ国立民族学博物館蔵)

※序文は文化 10 年（1813）10 月の稿のため、その年まで使われていた印「亀毛蛇足」が使われている。文政 12 年（1829）の大火で、版木が焼失し、文政 5 年（1822）に再刻再刊されている。

※曲亭馬琴は『三七全伝南呵夢』（文化 5 年：1808）の稿本を殿村篠斎に譲渡した。篠斎は版本と稿本を比較し、人物の位置や数が違うことを指摘し、北斎の作為に猜疑心を抱き、その旨書簡を送った。馬琴も北斎の作為を計算に入れ、右に配置したい人物を予め左に置いて稿本を描いていたのである。画工任せにできない馬琴と、作者の意を汲まず我が道を行く北斎が並び立つことは難しく、文化十年（1813）注の「皿皿郷談」が最後の共作となったのもやむを得ないという（WEB「浮世絵文献資料館」から）。

注）文化十年：実際は文化 12 年（1816）刊行である。

※曲亭馬琴との連携は、読本に限れば享和 4 年（1804）正月の『小説比翼文』を初めとして、文化 12 年 1 月（1815）の『皿々郷談』までの 11 年間となるが、寛政 6 年 1 月（1794）の黄表紙『福寿海无量品玉』（春朗画）からの連携とすれば 21 年間となる。



『皿皿郷談』坂戸の神前人身御供の図（巻 2）（オランダ国立民族学博物館）

【北さいも筆自由ニ候へ共、己が画ニして作者ニ随ハジ】

※上記の馬琴の書簡。

『馬琴書翰集成』天保十一年八月二十一日 殿村篠斎宛（第五巻・書翰番号 56）

「文化五年稿本といん本（印本）と御引くらべ被成御覽候処、ほく斎さし画稿本とは同様ニハ候へども、人物之右に有ヲバ左リニ直し、或ハ添もし、へらしも致候。此心じつヲ以云々被仰示候御猜之趣、少しも無違、流石ニ是ハ君なるかなと甚堪心仕候。小生稿本之通りニ少しも違はず画がき候者ハ、古人北尾并ニ豊国、今之国貞のミに御さ候。筆の自由成故ニ御座候。北さいも筆自由ニ候へ共、己が画ニして作者ニ随ハジと存候ゆへニふり替候ひき。依之、北さいニ画がせ候さし画之稿本に、右ニあらせんと思ふ人物ハ、左り絵がき（ママ）遺し候へバ、必ず右ニ致候。実ニ御推りやうニ相違御座無候」（ルビは筆者による）。

刊本の挿絵は先ず作者が下絵を書き（筆者注：それを稿本という）、それを画工が挿絵図にするのだが、北斎は馬琴の下絵のように描かないというのである。

【主号としての戴斗号現る】

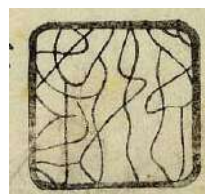
※戴斗号は文化 7 年（1810）の絵手本『己痴羣夢多字画尽』に「葛飾戴斗画」の落款があり、既に用いられていたが、これは副号であり、『北斎漫画 二編』の落款「北斎改葛飾戴斗」と「改」の字が入ってから「戴斗」が主号と認められるとする説を『画狂北斎』（安田剛蔵）で展開している（p 114）。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 二編』(孟夏：4月。半紙本一冊。22.7×15.7 東京国立博物館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館/山口県立美術館/早稲田大学図書館/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵)

※序文には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。序文：六樹園主人(石川雅望)。奥付には「葛飾北斎筆 書林：英屋平吉(江戸本石町十軒店)、竹川藤兵衛(江戸日本橋四日市)、角丸屋甚助(江戸麹町平川二丁目)、永楽屋東四郎(名古屋本町七丁目)、校合門人：魚屋北溪、斗田北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十二年 孟夏」と記されている。

※二編より十編まで印影「ふしのやま」が用いられる。同印影は「よしのやま」と誤読されたこともある。

印影：ふしのやま



※初編の版元永楽屋東四郎に名を連ねた角丸屋甚助の企画で、『北斎漫画』を全十巻とし、相合版(共同出版)の形をとりながら、二編以降は実質角丸屋甚助によって刊行された。

※後摺版奥付には、「葛飾北斎。印雷震。校合：北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉、竹川藤兵衛、角丸屋甚助、永楽屋東四郎」となっていて、刊行年は記されていない。

一般的には実質の版元は、奥付の版元並記の最後に表記される。

☆序文「おのれことさらに物めでするくせはあらねど、此さうし(草紙)の絵をうち見るより、てうちたゝきて(手打ち叩きて)、ふしあふぎ(ふし仰ぎ)、あさみおどろくこと、おほかたならず。さるは野山をかけるけだもの、鳥、むし、樹草のたぐひ、すべてこゝろゆくばかり、きはごとにかきなしたる、げにになき(二無き)上手のしわざとぞ見えたる。(略)この絵師をたれぞととふに(問ふに)、此ころの上手にすめる北斎の翁なり。(略)六樹園主人注」(『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による)〈()の語句は筆者〉。注)六樹園主人：宿屋飯盛(石川雅望)。



『伝神開手 北斎漫画 二編』(すみだ北斎美術館)

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 三編』(4月。22.8×15.8 すみだ北斎美術館/島根県立美術館/山口県立萩美術館/ホノルル美術館/ライデン国立民族学博物館/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵)

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合門人：魚屋北溪、斗
 田楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十二年孟夏。書林：竹川
 藤兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町）、
 角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）」と記されている。

後摺版の奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 交 門人：北亭墨僊、
 東南西北雲。書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（同日本橋四日市）、角
 丸屋甚助（同麹町平川町）、永楽屋東四郎（尾州名古屋本町七丁目）」とあり、刊行年の
 記載なし。

☆序文「（略）こゝに葛飾の北斎翁、目に見、心に思ふところ、筆を下してかたちをな
 さざる事なく、筆のいたる所、かたちと心を尽さざる事なし。これ人々の日用にして、
 偽をいるゝ事あたはざるもの、目前にあらはれ、意表にうかぶ。しかれば、馬遠郭熙注1
 が山水も、のぞきからくりの三景にをとり（劣り）、千枝つねのり注2が源氏絵も、吾妻錦
 の紅画に閉口せり。見るもの、今の世の人の世智がしこきをしり、古の人のうす鈍なる
 を思ふべし。

蜀山人注3」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による）

注1）馬遠は、生没年未詳。中国南宋の画家。郭熙は、中国北宋の画家。

注2）千枝つねのり：千枝と飛鳥部常則。ともに平安時代の宮廷画家。『源氏物語』など
 に絵の名手として取り上げられる。「この頃の上手にすめる千枝、常則などを召して、作
 り絵仕うまつらせばや」（須磨）とある。

注3）蜀山人：大田南畝。

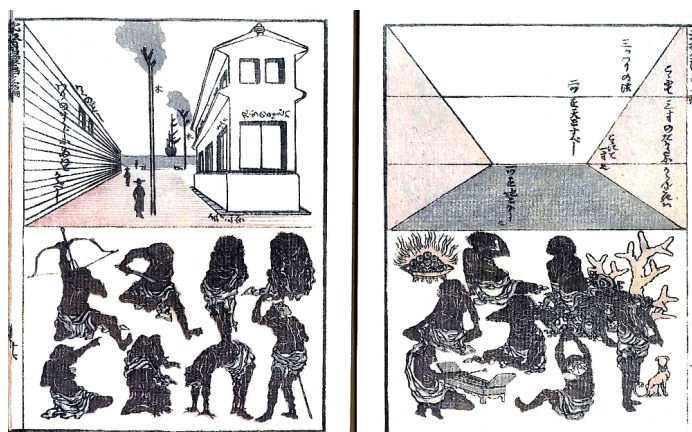


『北斎漫画』三編（島根県立美術館）

【三つ割の法を説く】

※この巻で「三つわりの法（遠近法の構図）」を説く。右絵中の書き込みに「こゝにて三寸
 のたかさにかゝるときは」「こゝにて一寸也」「三つわりの法」「二つを天とすべし」
 「一つを地となす也」とある。左絵中には「九分のまどは」「三分」「木」「わりのすじ
 にあはせかくべし」「かくのごとし」とあり、洋風の家と和蘭陀船と和蘭陀人が立っている
 図が描かれている。

※地面の部分を1、空の部分を2にして、地平線を低くしたり、近くのを大きく、遠くのはその3分の1に小さくするよう、建物や木、人の立ち姿を例にしている（小林忠『浮世絵ギャラリー2 北斎の美人』）。



『北斎漫画』三編 頁の上半分が三つ割の説明（島根県立美術館）

【北斎翁、割出しに精しかりし】

※いつの頃のの記事か不明だが、幾何の術による「割り出し」という画法で絵草紙屋依頼の「きりこ灯籠」注1の絵を描いたエピソードが、『葛飾北斎伝』に記されている。「三つ割」とも関係あるものと思われる。

「或画工談『浮世絵の専門語に、割出し、一に割物といふあり。即角物と丸物の割合にして、幾何の術によらざるを得ざるものをいふ。これは名手にても、腕と筆との工合のみにては、画き難きものなり。北斎翁は、よくこの割出しに精しかりし。絵草紙問屋某が、或人の囑托にて、一世豊国注2の許に至り、絹地へきりこ灯籠を画かんと請ふ。豊国諾して直に画き始めしが、暫くありて筆を投じて曰く、容易に似て、容易にあらず、緊急の需に応じ難しと。某止むを得ず、去りて北斎の許に行き、画かんと請ふ。翁直に答へて、割物なれば、明日来るべしといひ、約の如く画きたり。後に豊国これを聞き、嘆じて曰く、北斎に及ばざること遠しと。又翁嘗一商某の家に来り、紙鳶を画くべしといひ、大なる鯰、大なる瓢箪など、筆にまかせて画き出だし、これを切り抜き、骨を貼付し、糸目をつけてあげるべしといふ。某其の言の如くしてあげたるに、中心其の所を得て、左右に傾くことなかりしと。これ割物に精しきにあらざれば、なす能はざる業なりと」（p 218 ルビは筆者による）。

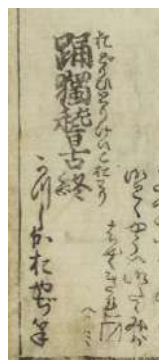
注 1) きりこ灯籠：立方体の各かどを切りそいだ形に枠を組み、紙や布を飾り垂らした灯籠。盂蘭盆会などに用いる（鈴木重三：脚注）

注 2) 豊国：初代豊国（1769～1825）。一陽斎。本名：倉橋熊吉。後：熊右衛門。役者絵に優れる。

●絵本『踊独稽古』（夏。中本一冊。序文：三升（七代目市川團十郎。定紋は「みます」）と秀佳（三代目坂東三津五郎）。最終丁に、かつしかおやぢ筆。歌舞伎舞踏の振付師・藤間新三郎補正。鶴屋金助版。18.5×12.3 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/名古屋市蓬佐文庫/国立国会図書館：フーリア美術館：プリウエアー・コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵）

※踊りの独習書。〈登り夜舟〉〈気やぼうすどん〉〈あくだまおどり〉〈団十郎冷水売〉の四曲の振り付け。天保6年(1835)夏に『おとり独稽古』(大島屋伝右衛門版)題で改

彫・再摺本が刊行される。



「踊独稽古」団十郎冷水売 (島根県立美術館)

最終丁左下の署名

悪玉踊り (大英博物館)

※番号順の振り付けで踊るようにコマの連続で描かれる。〈あくだまおどり〉では(悪)と書いた面をつけて踊る。「悪玉踊り」は歌舞伎舞踊の一つで、文化8年(1811)に初演され、坂東三津五郎も踊ったという(棚橋正博校註『江戸戯作草紙』小学館(P210))。

〈団十郎冷水売〉では、団十郎の格好をした男が、両天秤の桶に水を入れて担ぎ、見栄を切りながら踊る格好などが描かれる。

●絵手本『画道独稽古』(『己痴羣夢多字画』(文化7年:1810)を改題。三巻一冊。北斎画。葛屋重三郎版)落款「北斎」は文化7年当時のものを用いている。

※後に『略画早指南』の第三編『略画早指南三編画道独稽古』としてシリーズ化した

●狂歌本『東都勝景一覽』(9月。色摺。乾と坤の二冊。北斎辰政画(袋)。印北斎。寛政12年(1800)刊の『東都名所一覽』再摺版。菱屋金兵衛版。26.4×17.3 すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション/オランダ国立民族博物館/東北大学付属図書館蔵)

※天保11年(1840)9月、河内屋茂兵衛の後摺版が出る。

※『東都名所一覽』と同時期に既に二つの題名で売りだしていたらしいとの説もある(『シーボルトと日本』展図録。p174。東京国立博物館編・朝日新聞社。昭和63年:1988)。

●摺物「六歌仙」(この頃か。着色。一枚絵合作。葛飾親父戴斗筆。38.8×26.2 日本浮世絵博物館蔵)

※北斎は喜撰法師を描く。他に北溪(僧正遍照)、勝川春英(大友黒主)、鈴木春信(文屋康秀)、歌川豊国(小野小町)、歌川豊広(在原業平)が描く。

文化13(1816)丙子 57歳 葛飾北斎、葛飾戴斗、北斎改葛飾戴斗、東都画工葛飾北斎、

前北斎戴斗 印雷震、ふしのやま、辰、政:こと(46歳)、(阿美与:28歳)、(孫:7

歳)、阿栄(19歳)

◇2月3日、河竹黙阿弥生(～1893)

◇2月、落語を、昔物語・忠孝を説く事を条件に許可する。

◇烏亭焉馬「咄の会」が制限付きで解除される。

◇4月、江戸に疫病流行。8月まで続き多数の死者が出る。

◇9月7日、山東京伝（北尾政演）没（56）。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 四編』（夏。半紙本一冊。22.8×15.8 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/ホノルル美術館/山口県立萩美術館/フリーア美術館：フルヴェー・コレクション蔵）

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗田楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十三年 子夏 書林として、竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町）、角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）」と記されている。

※後摺版の奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 校 門人：北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（同日本橋四日市）、角丸屋甚助（同麹町平川町）、永楽屋東四郎（尾州名古屋本町七丁目）」と記されている。

☆序文：「（略）古人の風姿、古物の雅品、今知るものは、凶画の妙也 今や葛飾戴斗先生、画に堪能にして其名高く、其画を乞ふもの多く、都下の紙これが為に貴し。爾れば、閣筆に違なく 門人臨本に乏しきを患ふ 先生これを憐みて、邂逅閑ある毎に山水人物をはじめ、動物器財に至るまで、随筆してこれを写 梓（筆者注：板木）彫て以門人に授 初学の梯楷（ママ）注1たらしむ。（略）縫（之繞がない字）山漁翁注2識」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎による。ルビは筆者）

注1) 梯楷：階梯の誤り。手本のこと。

注2) 縫山漁翁：未詳。



北斎漫画 四編（島根県立美術館）

★四編巻末にある広告

初編：興に乗じ心にまかせてさまざまの堅を写す編を続で全部に充を・・かるなり

二編：初編におさめざる人物草木山川鳥獸魚鼈（魚とすっぽん）虫に至るまでことごとくあつむ

三編：二編にのせ洩れたるを拾ひ新羅万象のおとしをのせざるハなし

- 四編：草筆を加へ席上の臨本にしからしむることを要とす
 五編：花表堂塔伽藍月卿雲客館齋房舎を委しく写して尚つきざるハ編々に洩すもらすことなし
 六編：剣法槍法弓馬炮術等けいこの像を写して詳也もつとも武徳の尊きを表せる一書といふべし
 七編：国々名勝の地風雨霜雪のけいしよくをうつす
 八編：前編に洩れたるを補ひ且錦繡養蚕の業をゑがく
 九編：和漢の武者および貞婦烈女のたぐひを載す
 十編：神仏並に貴僧高僧幻術外風流の人物等を紀す



『北斎漫画』四編巻末広告（ARC 古典籍ポータルデータベースより。筆者による編集）

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 五編』（夏。半紙本一冊。22.8×15.8 すみだ北斎美術館/ホノルル美術館/山口県立萩美術館/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵）



北斎漫画 五編（島根県立美術館）

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合門人：魚屋北溪、斗
 円楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十三年子夏 竹川藤兵衛
 （江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）、
 角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）と記されている。

※後摺の奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 校 門人：北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（同日本橋四日市）、永楽屋東四郎（尾州名古屋本町七丁目）、角丸屋甚助（同糞町平川町）」とある。

☆序文「梅の屋のうめ、すだづみ（隅田堤）のさくら、かめど（亀戸）のふぢ、やなぎしま（柳島）の萩、てらしま（寺島）のきく、此いつところ（五所）は、かつしか（葛飾）のなごころにて、春秋のさかりのころは人ゆきつどひて、みちもさりあへぬまで、見のゝしるめり。北斎のおきなは、はやうより、このわたりにすめる人にて、その名たかく聞えぬことは、猶このいつところ（五所）の花のほひにもまさりぬべし。ちかごろ、漫画となづけしふみ、木にゑりて（彫りて）物せられたるが、人のもてはやすまゝに、こぞ、ことしと数そひて、終にいつゝ（五つ）の巻となりて、かのかつしか（葛飾）にかぞふめる花どものありどころと、かず（数）ひとしくぞなりにたる。げにたくみことなるふでつかひには、さかりあらそう木草の花も、おもてをやふせ（伏せ）つべからむ。そは、ひらきたるとぢふみの花々しきを、見たらん人ぞ、こよなきいろかは、しりぬらんかし。六樹園注」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎による。ルビ、補注は筆者）

注）六樹園：宿屋飯盛（石川雅望）。

☆表紙：「五編 規矩準繩（物事の基準となるもの。手本）」と書かれた背景に、雲型の屋根らしき所に麒麟が描かれる。

●絵手本『三体画譜』（春。墨摺。大本一冊 30 丁（序文と扉を含まず）。大田南畝〈蜀山人〉の序文では『三体画法』とある。奥付に「東都画工 北斎改葛飾戴斗画。印ふしのやま 同校合門人・魚屋北溪・斗田楼北泉・尾陽名古屋校合門人・月光亭墨遷・東南西北雲 文化十三年 子春 江戸日本橋四日市 竹川藤兵衛 同本石町十軒店 英屋平吉 同糞町平川二丁目 角丸屋甚助」とある。15.4×18.8 島根県立美術館：永田コレクション/浦上蒼穹堂/すみだ北斎美術館蔵）菱屋久兵衛の後摺版がある。

※大田南畝の私家集『七々集』（文化十二年十一月記）に「戴斗子三体画法序 書に真行草の三体あり。画も又しかり。（略）文化乙亥のとし雪のあした 蜀山人」とあり。

注）文化乙亥は、文化 12 年であり、序文は前年に書かれたもの。



三体画譜（すみだ北斎美術館）

「袋」には「前北斎戴斗先生筆 三体画譜 文化乙亥新彫 東都衆星閣（角丸屋甚助）」とあるので、当初は文化 12 年の刊行予定であったと思われる。

※図中、同一画材を、真は■、行は▼▲を上下に組み合わせた記号、草は●の記号を付けて描き分ける。

●摺物「節分豆煎り図」（色紙判着色。前北斎戴斗筆。19.8×18.2 日本浮世絵博物館蔵）

※図は、長火鉢の縁に両腕を乗せている子どもと、右手に灰ならしのようなものを持って火鉢の上にかざして豆を煎っている女。その脇で湯を入れる鉄瓶を持って火鉢を見ている



女。背後には梅の木と三河万歳みかわまんざいの絵が描かれた屏風が立て掛けてある。

「東隣亭徳馬とうりんていとくま きのみまでにない手桶ておけのあけほのに ひとよこし茶もけふの若水わかみづ」、「六歳亭宝馬むつきやうほうま 神壇かみだんや朝日のうつる亀井戸かめいどの そこまで匂ふふかき梅うめか香か」、「七十四翁ななじゅうしよん 談洲楼焉馬だんしゅうろうえんば かはらずに福茶ふくちやのなかの寿老人じゆろうじん まめにさんせう梅干うめぼしおやち」の狂歌が記される。（掲載図は東隣亭徳馬と談洲楼焉馬の狂歌が削られている）。

節分豆煎り図（日本浮世絵博物館）

●摺物「寿老人図」（「寿老と唐子」「寿老図」とも。全紙判。摺物着色。前北斎戴斗筆。

京橋の星野寿徳の米寿祝の摺物。38.3×52.0 日本浮世絵博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※寿老人が衝立に朝日と鶴の絵とともに、大きく「寿」の字を書き入れたところの図。寿老人は鹿皮を背に巻き付け、前に硯と筆洗いが置かれている。背後に団扇と巻物を括りつけた棒を捧げ持つ童子が座っている。図左に「八十八歳翁 寿徳」の落款と印が捺されている。図左に狂歌堂真顔きやうかどうまがお（鹿津部真顔しかつべまがお。別号：四方歌壇・四方真顔）の賛には、寿徳の米寿祝いによることが記されている。



寿老人図（日本浮世絵博物館）

文化14 (1817) 丁丑 58 歳 北斎戴斗、東都画工葛飾北斎、東都画工北斎 改 葛飾戴斗、

葛飾前北斎戴斗老人、東陽画狂人北斎戴斗、前北斎戴斗、 印画狂人、雷震、ふしのや

ま、ふもとのさと、花押：こと(47 歳)、(阿美与：29 歳)、(孫：8 歳)、(阿栄：20 歳)

◇4月17日、杉田玄白すぎたげんぱく没(85)。

◇5月～7月、諸国早魃かんぼつ。

◇9月、イギリス船、浦賀に来航。

◇11月3日、オランダ商館長ズーフ (Hendrik Doeff 享和3年：1803着任) 離日。

【阿栄嫁ぐか】

★この頃、阿栄、南沢等明^{みなみさわとうめい}に嫁ぐ。嫁ぐ前は栄女（阿栄）と号し、嫁ぎ後は、辰女^{たつじよ}と号す。北斎が用いた落款「北斎辰政」や印影「辰政」「辰」「政」に因んだか。

※文政7年（1824）頃に嫁いだとも言われるが（鈴木由紀子『浮世絵の女たち』p188。幻冬舎）、その時阿栄は27歳、婚期としては遅い印象がある。

注）南沢等明：堤等明。生没年不詳。東神田橋本町二丁目、水油屋庄兵衛^{しみずあべ}の息子。幼名：吉之助。長じて北斎と交流のあった画師・三代堤等淋^{つづみとうりん}の門に入り等明と号す。北斎工房の弟子。

★この頃、石原片町に住む（『諸家人名 江戸方角分 〈本所〉 〈画家・浮世絵〉』瀬川富三郎著〈文化14年～15年成立〉に「戴斗 先北斎 石原片町 中島鉄蔵」とある。現墨田区石原1・2丁目辺）

※『北本所大川ヨリ横川辺石原北割下水迄』「天保十一年八月ノ形」に「石原片町」とある（国立国会図書館デジタルコレクション）。

★この年正月の角丸屋甚助版『千紅萬紫』の巻末広告に「略画早指南 初編」（『略画早指南 前編』）に該当。文化9年：1812に刊行済）、「同二編 早稽古」（『略画早指南』の後編に該当。文化9年：1812に刊行済）、「同三編 早稽古」（『略画早指南 独学』）に該当。文化11年1814刊行済）、「同四編 早引」（『絵本早引 前編』）に該当。この年刊行）「同五編 早引」（『絵本早引 後編』）に該当。文政2年：1819に刊行）とある。新たな企画があったか（『年譜』による）。

【第二次関西旅行】

★第二次関西旅行。途中、再び名古屋の墨僊^{ぼくせん}注宅に半年滞在。暮れには更に大坂・紀伊・吉野へ旅をする。

注）墨僊：安政4～文政7（1775～1824）。門人。尾州名古屋鍛冶町下新道北西角（現名古屋市中区鍛冶屋町）に住む。通称：牧助右衛門、名：信盈。知行百五十石の尾張藩士。江戸詰のとき喜多川歌麿^{きただがわうたまたま}に入門。歌政と号す。後、文化9年（1812）秋、名古屋を訪れた北斎の門に入る。

【二度目の大達磨を描く】

※10月5日、名古屋西掛所（本願寺別院〈西別院〉）。現名古屋市中区門前町1-23）の東庭境内において120畳（厚紙1880枚を繋ぐ）の達磨半身像を描く。米俵5個文の藁を使った大筆^{おおふで}を用いる。翌日6日、作品は櫓^{やぐら}から吊り下げて披露する。『北斎漫画』刊行中「小さな絵しか描けないやつ」の風評が立ったのに対して、取り巻きが北斎をけしかけたためのパフォーマンスといわれる。

引札（『北斎大画即書細図』：名古屋博物館）

※文化 14 年、高力猿猴庵(1756～1831、種信。名古屋の浮世絵師)の『北斎大画即書細図』（合本一冊。名古屋博物館蔵）により北斎のその時の様子が画・文で再現された。

それによれば、北斎パフォーマンス事前の引札（配布宣伝ポスター。木版墨摺り。47.2×35.3 永楽屋東四郎版）には「文化十四丁丑年十月五日大画席上 東都ノ旅客 北斎戴斗筆 印画狂人」「尾州名護屋本町通り 門前町大地に於て来ル 十月五日席画 たゝみ百二十畳敷 達磨大師の尊像を画ク 目六尺 はな九尺 口七尺 みみ老丈二尺 面テ三丈二尺 ふで米俵 五ひやう 同志ゆるはうき 同竹はうき」とある。



※『北斎大画即書細図』の頁に従って見ると、先ず、書店の店頭引き札が掲げられ、それを見た人々が門前に多く並び、これからのパフォーマンスを見ようとしている。門前には、引き札が掲げられている。次に、境内で敷地を箒で掃いている男がいる。正面には既に大達磨図を掲げる木桁が組まれている。120 畳の周りは柵がめぐらされ、その周りには観客が詰めかけている。次に、墨を入れた入れ物を持つ男の脇で、紋付き袴姿で襷をした北斎が大筆で描き始める。顔の輪郭を二人の弟子とともに描く。次に、弟子とともに大筆を二本持って次の作業に取り掛かろうとしている。側には墨を入れた大樽が置かれている。



高力猿猴庵『北斎大画即書細図』（名古屋博物館）



北斎大画即書細図（名古屋博物館）

次に、手桶から柄杓で赤絵の具を汲み、黒の輪郭線に沿って流していく。側では、跳ねた絵の具を拭いている男がいる。夕方には絵が完成。木桁に架けた絵を群衆が見ている。

「追加」として「書林より配り出せし板行之写 代物十二銭」と記されている。コピーを12銭で売ったのだろうか。

※本図は、昭和20年の名古屋大空襲で、西掛所本堂とともに焼失したという（『年譜』による）。

【屁くさいの芝居がかった借金申し込み状】

★大達磨絵を描いた12日後の10月16日、北斎は永楽屋東四郎に借金を申し出ている。二両二分の借金を、奉行所に申し出て借りる形にしている。更に番頭の藤助（永楽屋東四郎のこと）宛てに借用書まで書いています。

永楽屋東四郎宛て北斎書簡（名古屋市博物館）

「コレハ永東子（永楽屋東四郎のこと）より之御使御苦労。しかし/手前屋敷より申込ミ之金子でハござらぬ/此方役所なれば、役人共ヲ以而申入升。



/コレハせん日大洲（大須）西かけ所ニ而カノ/大だるまをかいた、ア、何サソレ、へくさみとか申た画師か/此せつ甚差つかえると/承ったが、そやつが今日/御無心申渡とい、居ったて。/此文面でハ定而きやつ/かりぬときやつも一向つまらず、ハテどふか仕方/がありそうナものだ/イヤ、しばらく御待ち被成、今へくさみを呼ニやつて/受取ヲさせて御使へ進上致そう。コレ、小遣イ/チョットへくさみを呼でコイヨ。（筆者注：ここまで奉行所の役人の言葉）



ハイクサで △リ升（北斎が低頭している図）

屁クサイ段々有難こさり升。金子貳両貳分槩ニ/拜受仕ました乍恐御役所より右之段/永楽屋へ御達被下ませうならありかたふ存ます/則受取書者左之通りニ仕差上升。

覚

一 金貳両貳分

右之通り槩ニ時借仕候。為念如此ニ彼座候。/則自筆受取左ニ御覽可被下候以上。

十月十六日 己（巳）ノ中刻

永楽屋御店 北斎戴斗拜

藤助様

（役人の言葉）コレ/藤之字で/ないてや。/東ノ字（永楽屋東四郎のこと）で/△ルゾ。/年に/不足もなく/不調法ナ/おやじめだ。/ハ、ハ、ハ、ハ、（『北斎大画即書細図』による。ルビは筆者）。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 六編』（正月。半紙本一冊。22.8×16.0 すみだ北斎美術館/ホノルル美術館/山口県立萩美術館/フリーア美術館：プルヴェアー・コレクション蔵）

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗
 円楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十四年丑孟春 竹川藤
 兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁
 目）、角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）と記されている。

※後摺版奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 校 北亭墨僊、東南
 西北雲。書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、角丸屋
 甚助（江戸麹町平川）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）」とある。

☆序文「絵にかける馬、よなく出て草餅を喰ひ、絵にかける鹿、よなく出ておはぎをくひ
 しといふは、実に馬鹿くしきためしなれど、其妙を得るに至ては、素人了簡の及ばざる所
 にして、そこがかの餅はもちやの場なるべし。ここに戴斗翁の画における、気韻、生動、
 骨法を得て、其真を写すに及びては、飴で餅くふうまみありて、一切万物写形の細密には、
 魔話李思訓も天窓をかきもちなるべし。されば此漫画、世に行はれしより、書肆のために
 は大福もち、猶あたゝかなる炉びらきのそれは、みの子、ねの子の餅みつがひとつのそれ
 ならで、みつをふたつの六編に至りて、予が序を乞ふ。こはれて是を餅につきしが、口か
 ら出るまゝ筆にまかせて、餅好の酒ぎらひ、下戸の食山人注文宝堂にしるす。」（『北斎
 漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による） 注）食山人：大田蜀山人。

☆表紙：弓の字形をかたどった弓の上下に二頭の龍が居り、上の龍が矢を番えて弦を引き
 絞っている図。「漫画 六編 東壁堂（永楽屋東四郎） 衆星閣（角丸屋甚助） 谷梓」と書かれている。



伝神開手 北斎漫画 六編（山口県立美術館）

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 七編』（正月。半紙本一冊。22.8×15.8 すみだ北斎美
 術館/東京国立博物館/ホノルル美術館/山口県立萩美術館/フリーア美術館：プルヴェー・コク
 ション蔵）

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗
 円楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十四年丑孟春 竹川藤
 兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁
 目）、角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）と記されている。

※後摺奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 校 北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉(江戸本石町十軒店)、竹川藤兵衛(江戸日本橋四日市)、角丸屋甚助(江戸麴町平川)、永楽屋東四郎(名古屋本町七丁目)」とある。

☆序文は、式亭三馬によるもので、『漫画』に描かれた諸所の画に寄せて「枕にせしは、このふみなりけり」と結んでいる。

☆表紙：「芭蕉之像 七篇」と書かれ、芭蕉が老木の下で杖を抱いて座って休んでいる図。名勝巡りの趣の巻。



伝神開手 北斎漫画 七編 (東京国立博物館)

●絵手本『画本早引』前編(墨摺。一冊。後編は文政2年(1819)7月版。鳥羽絵。葛飾前北斎戴斗老人。十辺舎一九の序に「文化丁丑晩夏日」とある。角丸屋甚助(衆星閣)・鶴屋金助(雙鶴堂)谷梓(版木所有)版。島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/名古屋市蓬左文庫蔵)

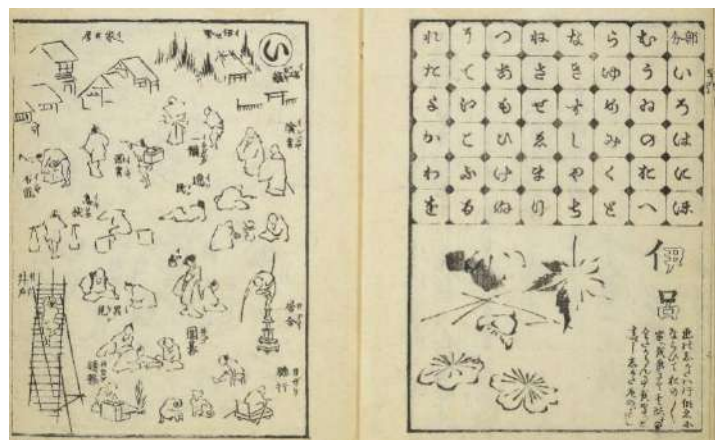
※いろは48文字順にまとめ、人の感情に伴う動きを描いた絵手本。単なる名詞ではなく、感情等の抽象名詞の画材を多く扱っているのに特徴がある。

※初編761図(い～む)。二編588図(う～す)あるという(『北斎の絵手本 四』)。

※巻末古代に「当年先生この一編を著され候処、急に旅行(二回目の名古屋行きを指す)の催有之候故、全冊満尾致し不申候(略)」とある。

※この編の出版予告に『略画武者鑑』があるが、刊行はされなかった。

※後に『略画早指南』(文化9年：1812)前編を初編に、後編(文化11年：1814)を二編に、『己痴羣夢多字画』(文化7年：1810)を『画道独稽古』に改題して三編に、『画本早引』前篇を四編に、後編を五編として改編し、一連のシリーズ物にした。



『画本早引』前編「い」の部(メトロポリタン北斎美術館：ARC古典籍ポータルベースより)

【い】の部(例)

〈陰者〉 〈居合〉 〈膝行〉 〈伊勢〉 〈家居〉 〈一僕〉 〈逸民〉 〈医者〉 〈石匠〉 など。

●肉筆画「月下竹林の虎図」(着色一幅。北斎戴斗筆。印ふしのやま。キヨッソネ・ジエノヴァ 東洋美術館蔵)

※二本の竹の脇で腰を下ろして満月を見る虎。天保15年(1844)にも同画趣の「月を見る虎図」がある。

●肉筆画「芋の図」(東陽画狂人 北斎戴斗筆 〈花押〉)

※10月6日以降、名古屋で「大達磨」を描いた北斎の様子を記録した高力猿候庵の『北斎大画即書細図』に描く(『年譜』による)。

●肉筆画「孕女」(着色一幅。前北斎戴斗筆。印ふもとのさと)

※「文化十四丁丑年六月」の書込みがある。着物から上半身をはだけ、腹帯をした大きな腹を突き出して座っている女。乱れた着物の裾から左の足裏が見える。脇には黒い帯が投げ出されている。

●扇面画「茶筌売図」(紙本着色。扇一面。北斎戴斗筆。花押。島根県立美術館蔵)

※茶筌売は、もと京都の空也堂の僧たちが、歳末に自家製の茶筌を売っていたが、後に江戸でも真似て、白衣に墨染の十徳(筆者注:腰から下にひだを付けた僧衣)を着て口上を述べながら、茶筌を挿した筒の竹棒を担いで売り歩いたという。正月の初釜用に売る。図は、茶筌売が、風呂敷の荷物を背にして座っている様子を描く。横に置いた竹棒の先に茶筌が数本挿してある。

●絵暦「遊女と三浦団の客」(1月。前北斎戴斗画?)

※画中の羽子板に大小月が示される。「おもふ事心に叶ふ福茶より わか身をいつそ撫うしの春 春尾待兼」の狂歌が記される。

【以下、文化年間】

北斎、戴斗、葛飾北斎、北斎先生、ほくさみゑかく、ほくさみうつす、東陽北斎、画狂人

北斎、歩月老人北斎、東陽画狂人北斎、かつしか北斎、画狂老人北斎、東陽葛飾北斎辰政、

北斎戴斗、戴斗逆筆、総州葛飾郷前戴斗、北斎改戴斗、東都葛飾北斎戴斗、独流北斎、

戴斗房中写、画狂人北斎醉中、ホクサイ、前北斎戴斗、向岳北斎、九々屋北斎、不染居

北斎、北斎爪画、画狂老人卍、印亀毛蛇足、北斎、ひとり人形、花押、花押(北)、ふも

とのさと、ふしのやま、かつしか、たいと、らいしん、ときまさ、ときまさ、かつしか

●狂歌本「風流勸化帳 万歳図」(文化元年～5年〈1804～08〉。紙本淡彩二冊。中挿絵に画狂人北斎画。印辰印政 東京都江戸東京博物館蔵)

※約140名の様々な分野の人物による寄せ書きがある図。

※『狂歌書目集成』菅竹浦編(臨川書店 1975)及び『江戸の絵本』(八木書店)所収・マティ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち」による。p 293)

●狂歌本『狂歌大つとみ』(文化年間〈1804~18〉一冊。萩の屋、花の屋、千秋庵編。北斎・蘭溪画。『狂歌書目集成』によると「浮世絵文献資料館」で紹介)

※『日本古典籍総合目録』(国文学研究資料館)によれば北斎は一点のみ描く。

●狂歌本『日本歳時記狂歌集』(文化年間(1814~18)。一冊。文々舎(蟹子丸)撰。葛飾連。戴斗。『狂歌書目集成』によると「浮世絵文献資料館」で紹介)

●狂歌本『狂歌三愛集』(文化年間〈1804~18〉。文化12年〈1815〉説あり。浅草庵市人撰 壺側版。北斎画。「日本古典籍総合目録」データベースで紹介)

※北斎は3図のみ描くという。一図は、「月」と題する狂歌が三首記載され、料理屋の座敷の開け放した窓辺に芸妓らしき女が座って、三味線箱を抱えている店の女の方を向いている。窓の外には海の上空に満月が出ている(大和文華館『北斎展図録』昭和62年に掲載)。

●読本『茶店墨絵艸紙』(文化4年~6年〈1807~09〉この頃か。『茶店墨江艸紙』とも。半紙本1冊。栗杖亭鬼卯作。葛飾北斎画(扉に「岡造酒頭像」のみ描く)。挿絵は、浅山盧国画。酒田市立光丘図書館/島根県立美術館:永田コレクション蔵)

●艶本『富久寿楚子』(文化12年~14年〈1815~17〉無款。大錦横判折帖一冊12枚揃。25.5×35.8 浦上満/ミカエル・フォーニツコレクション蔵)

※殆どの絵が画面から体の一部がはみ出しているので「はみ出しの春画」と言われる。淫水亭女好序注がある。

注)淫水亭女好:溪斎英泉の隠号。

※艶本『波千鳥注』の原本。この本の書入れを省き、添景を省いて雲母摺にして、恥毛の毛彫を省いてぼかした改板本が『絵本佐勢毛が露』と題して文政年中に刊行される。

注)波千鳥:文政3年(1820)、『富久寿楚子』を白雲母摺にした上製本として再刊される。



『富久寿楚子』(部分:<https://media.thisisgallery.com/>より転載)

●肉筆画「花魁図」(文化元年~2年〈1804~05〉。着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足)

※赤い元結いをした花魁が薄茶の打掛けを肩からずらして羽織っている。前帯を垂らし、黒塗りの下駄を履き、思案げに首を少し傾けている。背景は秋を思わせる色合いの細木などが描かれる。

【文化初期から西洋銅版画に関心を示す】

●錦絵『阿蘭陀面鏡 江戸八景』(文化8年~11年〈1811~14〉か。横小判錦絵8図揃物。全図縁取りの遠近法で描く。銅版画風の木版画。画題の地名は図の上部に横書き。袋に北斎先生図とある。総州屋与兵衛版。日本浮世絵博物館/ボストン美術館/東京都江戸東京博物館/神戸市立博物館/北斎館/島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※刊行年については、寛政9年(1797)、享和元年(1800)、享和3年(1803)、享和末～文化初期(1802～04)、文化7年(1810)、文政2年(1819)等、多くの説があるが、本稿では文化中期とする。天保初期の『江戸八景』とは別作。

☆〈袋〉 (18.4×22.5)

袋 (日本浮世絵博物館)

※縁取り内に顕微鏡の絵。裏に「日本橋南え通二丁目 板元



総州屋」の書込みあり。

☆〈観音〉 (8.7×11.1)

※図左の浅草寺観音堂には梯子が掛けられている。門まで続く境内の参道は遠近法が強調される。



観音 (ボストン美術館)

☆〈吉原〉 (8.4×11.3)

※吉原へ続く堤をぞろぞろと歩く人々。図の左には吉原の家並が描かれる。遠景に立ちのぼる白雲。

吉原 (ボストン美術館)



☆〈堺町〉 (8.5×11.5)

※日本橋堺町の賑わい。道の左に市村座、その奥に中村座、右に人形座と、芝居小屋を両側に配し、間の往来に歩く人々を描く。

堺町 (ボストン美術館)



☆〈高縄〉 (8.8×11.4)

※湾曲した海辺の宿場町の街道を行く人々の向こうに富士山が描かれる。

高輪 (ボストン美術館)



☆〈駿河早〉 (8.7×11.6 アムステルダム美術館蔵)

※日本橋駿河町の越後屋に挟まれた道の向こうには富士山が描かれる。

駿河早 (ボストン美術館)



☆〈日本橋〉 (8.7×11.6)

※手前の日本橋から、家並に挟まれた湾曲した道を行く人々。遠くに富士山と三日月を描く夕暮れの風景。

日本橋 (ボストン美術館)



☆ 〈不忍〉 (8.7×11.6)



※太鼓橋をわたる人々。その先の不忍の池の弁天堂の背景に白雲（入道雲）が立ちのぼっている。

不忍（ボストン美術館）

☆ 〈両国〉 (8.3×11.4 北斎館蔵)

※画面中央に描かれた隅田川に架かる両国橋。湾曲した橋のこちら側だけを描き、そこを渡る多くの人々。広小路には多くの人々にぎわう。川には猪牙舟が行き交う。

両国（ボストン美術館）



●錦絵『横中判洋風画シリーズ』（文化1年～3年〈1804～06〉）。横中判錦絵5図。ひらがな横書き落款：ほくさみゑかく。版元不明。額縁風の枠を描く。銅版画をまねた木版画）。

☆ 〈ぎやうとくしほはまよりのぼとのひかたをのぞむ〉 (17.4×23.4 東京国立博物館/日本浮世絵博物館/ヴァクトリア・アルバート博物館/ボストン美術館/中右コレクション/ギメ美術館蔵)

※画面中央に小さく描かれたの二つの鳥居は「富嶽三十六景登戸浦」（天保2年）に見えるものと同じ。画面左隅にわらぶき屋根が二つ見える。海辺の道には馬に乗った旅人が行く。千葉県行徳にあった製塩の場所からの図。現在の平井地区。



ぎやうとくしほはまよりのぼとのひかたをのぞむ（日本浮世絵博物館）

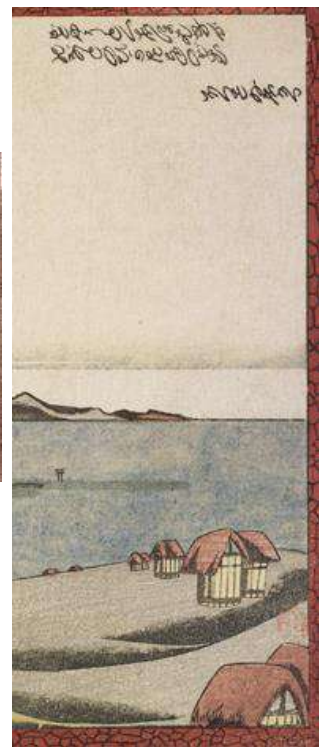
☆ 〈よつや十二そう〉 (17.2×23.4 島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/日本浮世絵博物館蔵)

※「十二社」は、元角筈と呼ばれた地域で、現在の新宿区



西新宿。溪谷に滝が流れ、渡された板橋上で滝を見ている男が三人いる。右岸の松の根元からも滝を眺める男が二人いる。一人は松の幹に手を回しながら、身を乗り出して滝を指差している。

よつや十二そう（日本浮世絵博物館）



☆ 〈くだんうしがふち〉（版画で唯一の影絵。17.2×23.4 東京国立博物館/フランス国立図書館/すみだ北斎美術館/中右コレクション/日本浮世絵博物館蔵）

※急な坂なので大八車を押す事を仕事とする「立ちん坊」が車を押している図。人物の影が描かれている。「牛ゲ淵」は、千代田区の九段坂の南側の田安門から清水門までの江戸城の堀の名。銭を積んだ馬が堀に落ちて上がらなかったという

伝説があり、曲亭馬琴が、この話から「牛ゲ淵」の名がついたと随筆『燕石雑志』で述べ、車を引くことが禁じられたとしている（『2005 北斎展図録』作品解説）。



くだんうしがふち（東京国立博物館）

☆ 〈たかはしのふじ〉（17.4×23.4 名古屋テレビ/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/房総浮世絵美術館蔵）。

※「高橋」は、「たかばし」と読む。小名木川の常盤町と大工町に架かっていた橋。兩岸に掛かる橋が極端に橋桁の高い太鼓橋風に描かれる。高橋の橋桁の向こうには隅田川近くの橋が小さく描かれ、その先に富士が見える。『富嶽三十六景』「深川万年橋」につながる絵。



現江東区高橋にその地名が残る。長さ 18 間(約 32.4m)、幅 2 間(約 3.6m)の橋で、洪水から崩壊するのを防ぐため家の棟程高く掛けたもの。『御府内備考』注に「本所深川の橋は洪水の時失せざる為に皆兩岸より石を畳みて平地より或は五六尺、或は七八尺も高く掛渡して、橋上は街並みの楼屋の棟にもひとしければ、高橋とも名付けしなるべし」とある（『原色浮世絵大事典』第 8 巻）。

注) 御府内備考：文政 12 年(1829)、江戸市内の地誌としてまとめられたもの。これを元にして『御府内風土記』が編纂された。

たかはしのふじ（東京国立博物館）



☆ 〈おしをくりはとうつうせんづ〉（17.2×23.4 東京国立博物館/日本浮世絵博物館/名古屋市博物館蔵）

おしをくりはとうふうせんづ (東京国立博物館)

スーラ「とがったオック岬、グランカン」 (テート・ロンドン)



※『横間判洋風画シリーズ』の〈賀奈川沖本奎之図〉を反転させたもので『富嶽三十六景』の構図が出来上がっている

と思われる。「おしをくり」は、櫓を押して進む船で「押送船」と呼ばれ、房総から江戸に魚を運ん

だ足の早い船のこと。但し、押送船は帆があるが、あえて帆を描かず、波濤を越えて行く船を印象つけている。この図は、ジョルジュ・スーラのフランス・ノルマンディー地方の海景色を描いた「とがったオック岬、グランカン」(1885年 テート蔵)に影響しているといわれる。

●錦絵『横間判洋風画シリーズ』(文化元年～3年〈1804～06〉)。横間判。5図確認されている。無款。遠近法を用いた洋風表現で額枠図に描かれたもの。画題は図上部に横書き。いずれも板ぼかし注の技法。(総州屋与兵衛版か)

注)「板ぼかし」は、ぼかす範囲よりも少し大きく周りを彫っておき、その部分を斜めに削って木賊や棕の葉で面を滑らかにしておいた版木を用いて、自然なぼかしを出す技法。

☆〈羽根田弁天之図〉(23.0×35.4 神奈川県立歴史博物館蔵)

※技芸財福の神である弁財天に続く道に架けられた板橋の図。橋は二等辺三角形の構図で描かれている。沖には帆船が数隻浮かぶ。

羽田弁天之図 (山田書店：復刻版)



☆〈日本堤ヨリ田中ヲ見ル之図〉(22.2×34.2 神奈川県立歴史博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※日本堤を往来する人々。田が右側に広がり、背景には隅田川が描かれる。日本堤は吉原へ通じる道でもある。

日本堤ヨリ田中ヲ見ル之図 (復刻版)



☆〈吾妻橋ヨリ隅田ヲ見ル之図〉(23.1×25.4 島根県立美術館：新庄コレクション蔵)

※橋桁の間から見た舟が浮かぶ隅田川の風景。図の右には川沿いの土堤が描かれる。遠景に入道雲が出ている。

☆〈賀奈川沖本奎之図〉(21.0×33.9 すみだ北斎美術館蔵)

賀奈川沖本奎之図 (すみだ北斎美術館)



※「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」に似た構図。大波に挟まれるように揺れる帆船。覆いかぶさる波の向こう側にももう一隻の船尾が見える。

☆〈滝の川岩間之図〉

※滝の川に掛かる細い板橋を渡る親子。川の両岸には巨大な樹木が描かれる。紅葉寺（現東京都北区滝野川3丁目）と称される金剛寺下にある松橋弁財天の岩間を描いたものとされる。

●錦絵『横小判東海道五十三次』（「東海道五十三次」物の一。文化元年～5年〈1804～08〉。横小判彩色。全54図。地名はほぼ横書きで振り仮名が付けられている。全図に北斎画の落款あり。版元不明。各平均12.2×16.4。慶応大学図書館/太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館蔵）

※吉野屋徳次郎版（享和元年～4年）の「東海道五十三次」とは別物で、題名が紛らわしいので、本稿では仮に「横小判東海道五十三次」とした。

☆〈日本橋〉

※風呂敷の荷物を肩にして橋の欄干から富士山の方を見る男。頭に乘せた箆に魚を入れて運ぶ男。天秤棒を担ぐ男など、多くの人で賑わう日本橋の上。遠くに西河岸橋が見える。

日本橋（慶応大学図書館）



☆〈品川〉



※品川宿の茶店の側で休む旅人。遠くには富士山。沖には数隻の船が浮かんでいる。

品川（慶応大学図書館）

☆〈川崎〉人と馬を乗せた渡し船。船頭が竿を差し、船首ではもう一人の船頭が棒を水面にさしている。手前の岸には柳の木がある。

川崎（慶応大学図書館）



☆〈神奈川〉



※山形に葉の字が染めてある背当てをした馬に乗る旅人。首を下げた馬の顔に手をやって休ませる馬子。馬の側には芸者風の女が立っている。

神奈川（慶応大学図書館）

☆ 〈程ヶ谷〉



※松並木の街道を駕籠で行く旅人や歩く人々。松の間から富士山が描かれる。

程ヶ谷（慶応大学図書館）

☆ 〈戸塚〉 ※茶店で休む旅人。宿の前の縁台に荷物を下ろし、足を掛けて



て草鞋を整える男。その背後に富士山。

戸塚（慶応大学図書館）

☆ 〈藤沢〉

※丸に五つ星の家紋のある長持を担ぐ二人と、その側に付き添う笠を被った侍がいる。

藤沢（慶応大学図書館）



☆ 〈平塚〉

※水辺から飛び去る鴨を、手をかざして見る女旅人と供の男。同じよう上半身裸の旅人が



立って見ている。旅人たちの荷物は下に置いてある。

平塚（慶応大学図書館）

☆ 〈大磯〉



※松の木の根元にある大石（虎が石）を上半身裸の旅人が持ちあげようとしている。同じように上半身裸の男がわきの下の汗をぬぐいながらそれを見ている。

大磯（すみだ北斎美術館）

☆ 〈小田原〉

※「うみらう」と書いた箱を置いてセン



スを仰ぎながら売り口上を述べる売人。男の着物には

三升紋が染め抜かれている。後方に小田原城が描かれる。

小田原（慶応大学図書館）

☆ 〈箱根〉

箱根（慶応大学図書館）

※関所で吟味される二人の旅人が土下座している。



☆ 〈三寫〉

※石垣の横でうずくまる男。その前を通りすぎる二人の旅人。

三寫 (慶応大学図書館)



☆ 〈沼津〉



※休み茶屋で休む脇差しを持つ旅人と、今着いた僧に、盆に乗せた茶を差し出す店の女。

沼津 (慶応大学図書館)

☆ 〈原〉

※富士山に驚いて手を差し上げている馬上の朝鮮使と徒歩の二人。

原 (慶応大学図書館)



☆ 〈吉原〉



※富士山を背景に、海浜で塩を含んだ砂をかき集める三人の男たち。図の右には塩焼小屋がある。

吉原 (慶応大学図書館)

☆ 〈蒲原〉

※乗合船が二艘。



船首と船尾で船頭が竿さしている。

蒲原 (慶応大学図書館)

☆ 〈由井〉



※岩場に生える松の老木。その下にはうねる波。人物は描かれない。

由井 (慶応大学図書館)

☆ 〈奥津〉 ※大きな碇の先にぶら下がって遊ぶ二人の子ども。

背後に松の老木。

奥津 (慶応大学図書館)



☆ 〈江尻〉



※松の木の下で駕籠を置いて、頭の汗をぬぐって休む駕籠かき。駕籠の中には人がいる。

江尻（慶応大学図書館）

☆ 〈府中〉

※歯を磨き、鏡の前で化粧をする勤めの前の遊女二人。

府中（慶応大学図書館）



☆ 〈鞠子〉



※とろろ汁をうまそうに食べる旅人二人。荷物を包んだ大風呂敷には「叶」の字が染め抜かれている。

鞠子（すみだ北斎美術館）

☆ 〈岡部〉

※街道を往来する四人の旅人。主人らしい男は道中差しを腰に、右手に大きな笠を、左手に杖を持っている。

供の男が他の旅人の供の男を指差して何かを言っている。

岡部（慶応大学図書館）



☆ 〈藤枝〉



※松の木の前に置かれた縁台に腰かけて休む女二人。その脇でしゃがんで縁の縁に手を置いて女を見

ている男。この三人の旅人の方に向かう禪姿の人足が二人。

藤枝（慶応大学図書館）

☆ 〈島田〉

※肩車されて渡る男が二人。その後ろに荷物を担いで渡る三人の人足。デッサンのような描き方。

島田（慶応大学図書館）



☆ 〈金谷〉



※大井川を渡る武家の駕籠を担ぐ人足たち。肩車されて渡る供の男たちが二人。デッサンのような描き方。

金谷（慶応大学図書館）

☆ 〈日坂〉

※「名物わらび餅」の看板のある茶店で休む馬子は

◎と染め抜かれた腹がけをしている。馬にも◎と染められた背当てがしてある。

日坂（慶応大学図書館）



☆ 〈懸川〉



※莫塵を敷き、太鼓を叩く男と、両手に撥を持ち、腰に付けたいくつもの鼓を叩いて調子をとる芸人。その前には投げ銭があり、見物人がいる。

懸川（慶応大学図書館）

☆ 〈袋井〉

※「大吉」と染め抜かれた腹掛けをした馬の横座りに乗って、振り分け荷物を背負った旅人に話しかける馬子。傍に笠を被り、背中に荷物を掛け、道中刀を差した旅人がいる。

袋井（慶応大学図書館）



☆ 〈見附〉



※関所の門を通る数名の旅人。一人は「叶」と書かれた大きな荷物を背負っている。

見附（慶応大学図書館）

☆ 〈浜松〉

※浜松の街並みを俯瞰して描く、人物は描かれない。

浜松（慶応大学図書館）



☆ 〈舞阪〉



※松の木のある山道を継ぎ飛脚が二人急いでいる。藁包みと桶を天秤にして担ぐ農夫。末～亀が紐に結ばれぶら下がっている。その下を虚無僧が歩く。

舞阪（慶応大学図書館）

☆ 〈荒井〉

※松の木のある船着き場近くに帆掛け船が二隻停泊している。

図右には幕の向こう側に違い毛槍が五本立ててある。大名一行が宿泊している屋根が見える。

荒井（慶応大学図書館）



☆ 〈白須賀〉



※振り分けの荷物を載せた馬に乗る旅人。馬子は厚手の布を身体に巻いている。馬の後ろには供人が二人いる。

白須賀（慶応大学図書館）

☆ 〈双川〉

※木の根元に腰を下ろし、盥に入れた馬の足を洗っている馬子。

馬の横には下ろした鞍があり、男の背後には旅人の大きな笠と荷物が置かれている。

双川（慶応大学図書館）



☆ 〈吉田〉

※強大な朝日が登る海の見える山道を旅人二人と天秤の荷物を担ぐ供人が行く。

吉田（慶応大学図書館）



☆ 〈御油〉



※客の前で強引に客引きをする宿の留女二人と、迷惑そうな旅人の男が二人。

御油（慶応大学図書館）

☆ 〈赤坂〉

※雪を被った屋根が

連なる村の風景。人物は描かれない。

赤坂（慶応大学図書館）



☆ 〈藤川〉

※宿の土間で風呂桶に入り背を手拭いで拭く男と、土間の前の部屋からそれを見ている男や、休んでいる男。

藤川（慶応大学図書館）



☆ 〈岡崎〉



※雪を被りながら橋の上を行く大名行列。

岡崎（慶応大学図書館）

☆ 〈池鯉鮒〉

※「右ち里ふ」と彫られた石の道標の脇で、三頭の馬を休ませながら客を待つ馬子たち。一頭の背には「吉」と染め抜かれた背当てがある。

池鯉鮒（慶応大学図書館）



☆ 〈鳴海〉

※布を晒し乾している職人二人を、座敷の小上がりから眺めている婦人。鳴海紋りで有名。

鳴海（慶応大学図書館）



☆ 〈宮〉



※帆船が二隻が浮かぶ海の向こうには小さく城画描かれる。次の桑名まで東海道唯一、七里の海上路を船で渡る。

宮（慶応大学図書館）

☆ 〈桑名〉

※松の木のある店で女が団扇を持って蛤はまぐりを焼き、旅の男が立ったまま繋がった蛤を上を向いて飲み込んで食べている。その側でもう一人の男が座っている。



桑名（慶応大学図書館）



☆ 〈四日市〉

四日市（慶応大学図書館）

※旅人二人に柄杓を出して物乞いする二人の女。

☆ 〈石薬師〉

※山の上にひっそりと建つ石の祠を囲むように松が聳える。人物は描かれない。

石薬師（慶応大学図書館）



☆ 〈庄野〉



※雪道を合羽を羽織り歩く多くの旅人。反対方向に行く馬の背に柴木を乗せた農夫たち。

庄野（慶応大学図書館）

亀山城を俯瞰して描く。

☆ 〈亀山〉

※家並みの向こうに

亀山（慶応大学図書館）



☆ 〈関〉

※板橋を柴木を背負って渡る柚人が、柴木を背負った馬の手綱を取って水の中を歩かしている。

天秤の荷物を肩に担ぐ男は反対方向に歩いている。

関（慶応大学図書館）



☆ 〈坂の下〉

※険しい山道を行く旅人が小さく描かれる。正面の遠方には険しい山がそそり立つように描かれる。

坂の下（慶応大学図書館）



☆ 〈土山〉



※蓑を頭から被った男が馬の背に乗り、四人の男が警護しながら歩いている。一人は長槍を抱えている。道端の松の木から紐に結わえられた亀が吊されて居る。

土山（慶応大学図書館）

☆ 〈水口〉

※田村神社と思われる屋根の向こうにうねうねと曲がった堤に旅人が多く歩いている。



水口（慶応大学図書館）

☆〈石部〉

※腰を屈めて芝木を束ねている農婦と馬の轡を取っている子供。

石部（慶応大学図書館）



☆〈草津〉 〈大津〉



※一枚の図の下部

に草津の屋並みが描かれる・図の上部に大津の橋と屋並みと城が描かれる。

大津・草津（慶応大学図書館）

☆〈京〉

※垂冠を被り笏を手にした束帯姿の

二人の貴人。後には折烏帽子の男と侍童が控えている。

京（慶応大学図書館）



●錦絵『彩色摺五拾三次』（「東海道五十三次」物の一。画題は袋の題簽による。文化1年～10年〈1804～13〉。縦小判彩色。全56図。無款。鶴屋金助版。各8.8×5.7。ボストン美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/神奈川県立博物館蔵）

※地名はほとんど、ひらがなの縦書きである。ピーターモース・コレクションでは〈かなや〉と〈かけ川〉が欠落して全54図となっている。

※〈おかべ〉図中の旅人の腹がけに「金」の字があり、〈よしだ〉の図中の馬の腹がけに「鶴」の字があるところから版元が推定される（『ピーターモース・コレクション北斎図録』による）。

※「東海道五十三次」物の最小判。簡略化した画風で描く（以下の図版はボストン美術館蔵）。

☆〈表紙〉

表紙（ボストン美術館）



☆〈日本橋〉

※冒頭図。「ふりだし」の文字が添え書きされているので双六を意識したのではないかと考えられている。これから旅に出る男と伴の者を日本橋で見送る二人の男を描く。

日本橋



☆ 〈志な川〉

※遊女が二人、立膝で座って、これからの出番を待っているか。一人は巻紙の手紙を読んでいる。

志な川



☆ 〈川さき〉



※渡し舟が二艘、客と荷物を乗せて多摩川を行く。

川さき

☆ 〈かな川〉

※馬に乗る人、手綱を取る人、その脇を行く人。

かな川



☆ 〈程がや〉



※茅葺屋根の家の前の道を行く二人の旅人。

程がや

☆ 〈戸つか〉

※「名物 やきもち」と書いた看板のある茶屋でやきもちを食べる二人の旅人。その側で犬が物欲しそうにしている。

戸つか



☆ 〈ふぢ沢〉



※徒歩や馬で行く旅人たち。

ふぢ沢

☆ 〈ひらつか〉

※荷物を背負って川を渡る二人の旅人。

ひらつか



☆ 〈大いそ〉

※「虎が石」と呼ばれる大きな岩を抱え上げようとしている旅人と、両手を挙げて応援している旅人。遊女が石になった伝説があり、美男だけが持ち上げられるという。

あり、美男だけが持ち上げられるという。

大いそ

☆ 〈おだはら〉



※「うみらう」と書かれた背負い箱の横で、扇子と外郎うしろを持って見栄を切って売っている男。背景に小田原城が見える。

おだはら



☆ 〈はこね〉

※関所で二人の旅人が、座って調べを受けている。その側に棒を持った役人がいる。

はこね

☆ 〈みしま〉



※三島神社の鳥居をくぐろうとしている二人の旅人。鳥居の先に石の太鼓橋が見える。

みしま



☆ 〈ぬまづ〉

※女の旅人を乗せた馬の脚の様子を見ている馬子。木の枝から亀が吊り下げられている。

ぬまづ



☆ 〈はら〉

※遠景の富士と手前の松原の景観が描かれる。人物はいない。

はら

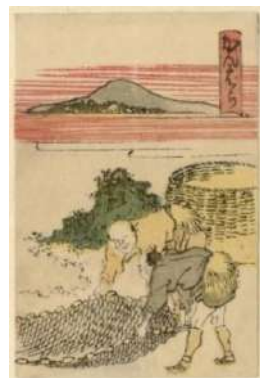
☆ 〈よしはら〉

※名物の白酒の臼を挽く男二人と女。

よしはら



☆ 〈かんばら〉



※網を広げる漁師二人と、大きな駕籠かごが描かれる。

かんばら

☆ 〈ゆる〉

※巖頭いがんとうの松と、その下の波の景色を描く。人物はなし。

ゆる



☆ 〈おきつ〉



※あきつに敷いた笹の上に並べられた三匹の鮎あきつの図。

おきつ

☆ 〈ゑ志り〉

※宿場前の街道を行く旅人。遠くに紅葉が大きく描かれる。

ゑ志り



☆ 〈ふちう〉



※竹細工で籠を作る職人と、竹ひごを叩く職人。

ふちう

☆ 〈まりこ〉

※とろろ汁を食べる二人の旅人と、給仕をする女。

まりこ



☆ 〈おかべ〉



※「即席御料理御好物肴 江戸屋」と書かれた看板のある店先で休む二人の旅人。旅人の腹がけに版元鶴屋金助を示す「金」の字がある。

おかべ

☆ 〈ふじゑだ〉

※城の櫓やぐらの向こうに旅人が小さく二人描かれる。

ふじゑだ



☆ 〈志まだ〉

※荷物を頭上に持ち上げ大井川を渡る人足や肩車で渡る人夫たち。

志まだ

☆ 〈かなや〉



※ピーター・モース・コレクションでは欠落。曲がりくねった宿場間の路を行く旅人たち。

かなや



☆ 〈につさか〉

※「名物わらびもち」の看板のある店で食す

旅人二人。奥に蒸籠がある。

につさか



☆ 〈かけ川〉



※姉さんかぶりの母親が赤子を背負いながら蓑を編んでいる。子どもも側で手伝っている。

かけ川



☆ 〈ふくろい〉

※背負い籠を背負い、独鈷の杖を持っていく六十六部の修行者とすれ違う三度笠と合羽姿の旅人二人。

ふくろい



☆ 〈みつげ〉

※「新そば 代十六文」の看板のある店で蕎麦を食う旅人と、その側で両手をついて休む男。

みつげ



☆ 〈はまゝつ〉

※遠くに浜松城。手前の川には渡し船が二艘。

はまゝつ



☆ 〈まへさか〉

※海辺の巨大な松が二本。その下の茶屋で休む人々。

まへさか

☆ 〈あら井〉



※松林を挟んで手前と向こうの海に帆かけ船が数艘浮かんでいる。

「今切の渡し」は舞阪と荒井の間を結ぶ。

あら井

☆ 〈しらすか〉

※「名物柏餅」の看板のある店先で、餅をこねる男と女。

しらすか



〈ふた川〉

※旅人を乗せた駕籠かきが、駕籠を下ろし向こうの大きな観音像を指差している。



ふた川

☆ 〈よしだ〉

※朝鮮来朝使が長煙管をふかしながら馬に乗り、馬子も煙管を銜えながら馬を牽いている。馬の腹がけに版元の鶴屋金助を示す「鶴」の字がある。

よしだ



☆ 〈ごゆ〉

※宿の女が通りがかった旅人を呼び入れようとしている。

ごゆ



☆ 〈あかさか〉

※赤坂宿を行く旅人を鳥瞰で描く。

あかさか



☆ 〈ふじ川〉

※「三枿屋」の暖簾のある店先で休む女と、た男が行く。

ふじ川



☆ 〈おかざき〉

※橋の上を行く大名行列の図。

☆ 〈ちりう〉



※白馬や栗毛馬四頭を品定めする二人の男。この地では馬市が多く開かれた。

ちりう

☆ 〈なるミ〉

※衣が干してある部屋で、女が絞りの布を持ちあげている。鳴海絞で有名。

なるミ

☆ 〈みや〉



※帆掛け船が二艘海を行く。人物は描かれない。ここから桑名まで東海道唯一の海路。

みや

☆ 〈くわな〉

※蛤を焼いている女と、その前で注文する旅人。

くわな

☆ 〈四日市〉

※木の鳥居の前の旅人。伊勢神宮への道との分岐点の宿場。横には「まんぢう」と書かれた幟のある店の屋根。

四日市

☆ 〈石やくし〉

※石薬師の堂を鳥瞰で描く。その前に参詣人たち。

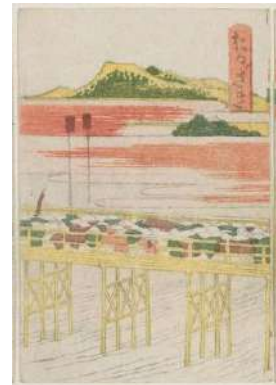
石やくし

☆ 〈せうの〉

※継ぎ飛脚が二人走っている。遠景の山間からは日が昇っている。

せうの

おかざき



なるみしぼり



☆ 〈か免山〉

※亀山城を描く。人物は描かれない。

か免山



☆ 〈せき〉



※大きな樽の風呂に入る男が二人。「ふろや」と書かれた店。

せき

☆ 〈さかのした〉

※山間に挟まれた街道を行く旅人たち。

さかのした



☆ 〈つちやま〉

※雨の中、合羽や蓑を着た旅人が三人行く。

つちやま



☆ 〈みなくち〉

※茶屋で休む人々と馬が一頭。

みなくち



☆ 〈いしべ〉

※暖簾のある店先で、包丁で高菜を切る女。石部は高菜飯が名物。看板と暖簾に記された「女川」は、浅草広小路の菜飯で有名な店の屋号で、有名店にあやかっただろう。

いしべ



☆ 〈くさ津〉

※「和中散」の看板のある店先の旅人たち。和中散は道中薬で、この地で生産された。

くさ津



☆ 〈大津〉

※鬼の大津絵を描く画工。大津絵は、人物や動物などを教訓的にデフォルメして描き、旅人の土産としていた。

大津





☆〈京一〉

※衣冠束帯の貴人が、笏を持って行く。
側には供人たち。

京一

☆〈其二〉

※仕丁が二人座って平伏している。

其二



●錦絵『東海道五十三次 絵本駅路鈴』（文化3年～7年。「東海道五十三次」物の一。人物中心に描かれる。縦中判彩色2丁掛。無款。全56図。各平均22.8×17.0 伊勢屋利兵衛版。東京富士美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション/国立国会図書館/名古屋市博物館/島根県立美術館：永田コレクション/東洋文庫：岩崎文庫蔵）

※画面上部中央に隸書で横書きの駅名が記され、ふりがなが付けられる。画面右側に小さく「東海道五十三次」と駅番が縦に記されているものとなないものがある。人物中心の図。最終図の「大内山」に北斎の落款のあるものがあったという（『北斎美術館2 風景画』P71 及び『名品揃物浮世絵9 北斎II』所収「北斎の東海道（二）『浮世絵界』第五卷六号 昭和15年6月刊 浮世絵同好会」による）

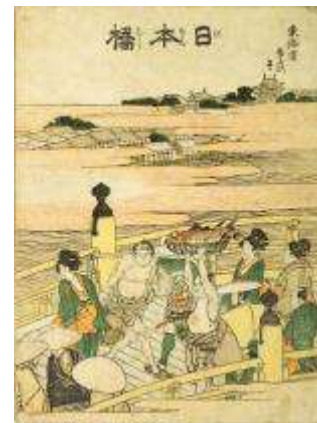
※完結後に帖仕立て（一冊本と二冊本）にして販売。この本の最後が〈京都〉と〈大内山〉となっているが、その他は初摺判に同じ。

※「北斎画」の落款があり、最後の〈大内山〉がない版もある。

☆〈日本橋〉

※魚を入れた大きな籠を頭上に掲げて歩く男。上半身裸で天秤棒を担ぐ男。袴姿で笠を被った侍や女たちが橋を渡る。遠くに江戸城が望まれる。

日本橋（島根県立美術館）



☆〈品川〉（23.1×17.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）



※遊郭の部屋から格子窓を通して海を眺める遊女と、その傍で立ち話をする二人の遊女。その脇では仲居が盆に椀を乗せて遊女たちを見ているが、極端に小さく描かれている。遠くに帆船が浮かび、富士山が見える。

品川（島根県立美術館）

☆〈川崎〉※川辺で馬に乗っている男や、荷物に腰を下ろして多摩川を渡る舟の着くのを待っている旅人たち。

川崎（東京富士美術館）

☆〈神奈川〉（22.7×17.1）



※窓から海に見える部屋で、二人の芸妓たちと食事をしている二人の男。芸妓の後ろには黒い三味線箱が置かれ、衣桁には着物がかかっている。

神奈川（東京富士美術館）

☆〈程ヶ谷〉（21.9×15.7）

※「仕合」と染め抜いた腹がけをした馬の鞍に左手を置いて乗っている男と、向かい合わせに来る二人の旅人。男の腹

がけには「三」の文字が記されている。砂浜には大きな桶が三つ並び、その上に筵が掛けられている。

程ヶ谷（東京富士美術館）

☆〈戸塚〉（22.4×16.6）



※巨大な観音像の上半身が松林の背後に見える街道を行く男女の旅人。手前の屋根越しに「大仏」と書かれた看板が見える。

戸塚（東京富士美術館）

☆〈藤沢〉（22.8×17.0）

※二頭の牛が浜辺に行く。一頭に子どもが乗り、一頭に牛飼いが棒で牛を操って

いる。旅人が背を向け歩いて行く。

藤沢（藤沢浮世絵美術館）

☆〈平塚〉

※石の鳥居と松の木のある街道を行く侍と、荷物箱を担ぐ二人の従者。その脇で「吉」と染めた腹掛けをする馬を休ませている馬子がいる。

☆〈大磯〉

※「とら子石注」と彫られた大きな石碑を見る旅人や、天秤棒を担ぐ行商人たち。

大磯（慶応大学図書館）

注) とら子石：虎子石、虎石、虎御石とも。延台寺（現神奈川県中郡大磯町大磯1054）の虎が石が有名で、曾我十郎祐成を賊の矢から防いだところから、身代わり石と呼ばれ、曾我十郎祐成の妾であった遊女虎御前に因んで「虎子石」といわれたとも伝えらる。その他いくつかの伝説がある。当時、図のような大きな石碑があったかどうかは不明。



☆〈小田原〉 (22.7×17.0)

※莫座を日除けにした茶屋で腰掛けて休む三人の旅人に向かって、手を上げて挨拶する男。

☆〈箱根〉 (22.8×17.0)

※二台の駕籠にそれぞれ乗る婦人と、前を行く旅姿の男が山道を行く。



☆〈三島〉 (22.8×17.0)

※三島神社の鳥居前を行く侍と供人たち。石垣を丸く組んだ台が描かれる。

☆〈沼津〉 (22.5×16.9)

※千本松原沿いの街道を女旅人が山駕籠注に乗っている。その後ろには鬚を手拭いで覆って、刀を差した共の男が煙管で一服し、松の木陰では駕籠かきが暑さをしのいでいる図。

注) 山駕籠：駕籠の両脇に簾がない駕籠。

旅人が道中で乗る一般的な駕籠。

☆〈原〉 (22.8×17.0)

※江戸参府の朝鮮通信使の一行が真近な富士山の裾野を見ながら進む図。

原 (島根県立美術館)

☆〈吉原〉

※名物の白酒つくりで、臼を挽く男と子ども。臼を回す棒に括りつけた紐の先の横棒を引く二人の女。

☆〈蒲原〉 (22.0×15.3)

※砂浜で桶に海水を汲む男女。後ろには塩焼の窯に火が燃えている。海岸は白浜が続き塩作りに適していた。

☆〈由井〉 (22.0×15.3)

※袴姿の二人の侍の前で、扁額に文字を書く異国風の男。その側で墨を摺る小坊主。

☆〈奥津〉 (22.9×16.6 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※二人の旅人が話をしながら街道を行く。対岸には松林が続いている。

☆〈江尻〉 (22.9×17.2)

※馬子が馬の背で煙管をくわえて休んでいる隣では、折りたたんだ駕籠の背負い棒を肩に担いでいる駕籠かき。

☆〈府中〉 (22.9×17.2)

※部屋で談笑する二人の遊女。廊下ではもう一人の遊女が猫を抱いている。

☆〈鞠子〉 (21.8×15.5)

※「御泊屋」の看板のある縁側で、宿屋の主人が名物のとろろを力を入れて擦っている。女がすり鉢を両手で支えている。側でもう一人の女が、おろし金で長芋を擦っている。とろろ汁は鞠子の名物。店先には版元の伊勢屋利兵衛の定紋が染められた布を背に掛けた馬と、そこから荷物を下ろそうとしている旅人。



☆〈岡部〉 (22.8×17.2)

※「い勢屋」と染め抜いた暖簾の掛かる宿場の縁台に、団扇を持って胡座をかいて休む二人の旅人。その前で馬が荷物を下ろされて休んでいる。

☆〈藤枝〉 (23.2×17.4)

※「二十三夜供養塔」と彫られた石碑のある街道を、手拭いを被った女と箱を背負った男が行く。そこにすれ違う旅人の男が二人。遠くには紅葉が咲いている。

注) 二十三夜供養塔：庚申講と同様、民間信仰のひとつ。人々が集まって月を信仰の対象として「講中」といわれる仲間が集まり、飲食をし、お経などを唱えて月を拝み、悪霊を追い払うという月待行事を行い、その記念や供養のあかしとして建てられたもの（「ウィキペディア」より）

藤枝（慶応大学図書館）



☆〈嶋田〉

※川越しの人足四人が焚き火で暖を取っている。もう一人の人足が旅人に川越を誘っている。

☆〈金谷〉 (22.8×17.2)

※雄大な富士山を背景に、図の下に、坂道を往来する旅人が描かれる。

☆〈日坂〉 (23.0×17.2)

※笠を被り、うつむいて馬の背で煙管をくわえて休む馬子。その側を坊主と侍が通りかかり、馬に乗ろうかと思案している。

☆〈掛川〉 (23.2×17.3)

※空には三本の遠州凧が揚がり、馬の背で煙管をくわえて休む侍と槍持ちの男。馬の脇には笠を被ったもう一人の旅姿の男が立っている。

☆〈袋井〉



※荷物を担ぐ行商人や僧侶、先を行く侍など。前方に老松の大木がある。

袋井（山星書店 Web より）

☆〈見附〉 (23.0×17.2)

※大名行列の先頭を行く槍持ちと、荷物を背負った馬が松の木の側でやすんでいる。

☆〈浜松〉 (22.8×17.1)

※柴木の束を置いて休む女が二人。一人は草鞋の紐を直そうとしゃがんでいる。後ろの土手の上でも三人の旅人が休んでいる。

浜松（「名品揃物浮世絵9北斎Ⅱ」より転載）

☆〈舞坂〉 (23.0×16.7)



※荒井との間の「今切の渡し」の船着き場で舟に乗せる荷物を点検しているのだろうか、刀を差した旅人が何かを指示している。沖には松林の小島。更に水平線には帆掛け船の帆が並び、朝日が昇ろうとしている。

☆〈荒井〉 (22.9×16.5)

※関所の調べ所の前で土下座している男が二人。部屋では役人が書類を見ている。土下座している後には二頭の馬が荷を下ろして待っている。

☆〈白須賀〉 (22.0×15.5)

※海辺の道で笠を差し上げて遠くを見ている旅人と、天秤の荷物を下ろしている供の男。道端に座り、釣り糸を垂れる旅の途中の男。その隣に腰掛けて遠くを指さす男。遠く水平線には四隻の帆が見える。

☆〈双川〉 (22.8×17.1 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※川のこちら側で休む旅人。一人は馬に乗り、一人は荷物に腰を下ろし煙管をくわえている。一人は立って、全員が川の向こうを見ている。馬の足元には馬子がしゃがんでいる。

☆〈吉田〉 (22.9×17.1)

※豊川橋を渡る四人の旅人。合羽に笠の男について行く荷物を担いだ人足。その後ろには道中差しの二人の男が歩く。

☆〈御油〉 (22.8×17.0)

※「庚申塔」と彫られた石碑のある路に立つ旅人と、天秤棒の荷物を担ぐ人足。旅人の前には腰を下ろして荷物の整理をする男。

☆〈赤坂〉 (22.8×17.1)

※「うんどん」の文字のある看板のある茶店で茶を飲む手拭いを被っている男と、同じく手拭いを被って立っている女旅人。

☆〈藤川〉 (22.8×17.0 太田記念美術館：ピーター・モース・コレクション)

※馬に乗り、来た方向をふり返る女と、笠を被って馬の世話をする馬子。

藤川 (島根県立美術館)



☆〈岡崎〉 (23.2×17.3 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※雪降る中、長い矢作橋を埋めるように渡る大名行列。遠くの岡崎城に向かっている。

☆〈池鯉鮒〉 (23.2×17.5)

※柄のついた大きな網を立てて持ち、捕まえた大きな鯉が路で跳ねている様子を、もう一人の子供と腰蓑を着けた漁師とともに見ている。この地にあった殺生禁断の池に鮒や鯉が多く生息していたところからつけられた地名という。現在は、知立と表記する。

☆〈鳴海〉 (22.8×17.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※名産の絞り染(鳴海絞)を造るため、糸で布を括る作業をしている婦人の前に布を差し出す客。手前には柱に紐を結わえ、強く引いて布を括る職人。鳴海は、現在の名古屋市。

☆〈宮〉 (22.8×17.1) ※二艘の五大力船が沖に向かっている。桑名と宮の間には「七里の渡し」があった。

☆〈桑名〉 (22.9×17.1)

※道筋で蛤を団扇で扇ぎながら焼いている女。その前で二人の旅人が腰を下ろして焼き上がるのを待っている。女の脇には箆に入れた蛤を持ってきた子どもがいる。

☆〈四日市〉 (23.3×17.6 四日市市立博物館蔵)

※日永(現三重県四日市市日永)の「追分 参宮みち」の道標のある追分の図。東海道と伊勢神宮への伊勢街道との分岐点。小さい鳥居の側の饅頭屋。その前に立っている、三度笠を被り縞の合羽姿の旅人の後ろ姿に向け、伊勢参りの二人の旅人が柄杓や笠を差しだして施しを求めている図。



☆〈石薬師〉 (23.3×17.3)

※「うなぎ」の箱看板が置かれた店の前の小さな板橋の上に立つ二人の旅人。橋の脇には桜が咲いている。 石薬師(尾道市立美術館)

☆〈庄野〉 (23.0×16.6)

※「左 大神宮道」と彫られた石の道標の横には小さな祠があり、その前で牛に乗った子どもと、牛を牽く牛飼い。

☆〈亀山〉 (23.3×17.2)

※茶店でくつろぐ旅姿の男にお茶を差し出す店の女。縁台の脇では跪いて足回りを直す男。

☆〈関〉 (22.8×17.1 すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション蔵) 雪景色の寺社の境内を行く四人の男の合羽にも雪が積もっている。

☆〈坂の下〉 (23.3×17.3)

※寺の縁側で天蓋を脱いで脇に置き、腰を下ろして休む虚無僧。縁側の下では女が煙管を手にして虚無僧を見つめ、その脇で子どもが横笛を吹いている。



☆〈土山〉 (22.8×17.1)

※紅葉の咲く山道の途中に岩を掘り抜いて格子を填めた洞があり、その前を行く旅人と駕籠かき。

土山(島根県立美術館)

☆〈水口〉 (22.8×17.2)

※「東海屋 水口宿」と書かれた道標の前の店には「ところてん」と書かれた看板がある。店の中では畳に胡坐をかいて休む旅人と、手拭を被った女たちが仕事をしながら店先を見ている。店先には旅装束の男が歩き、その後ろには天秤の荷物を担ぐ、上半身裸の人足がついて行く。

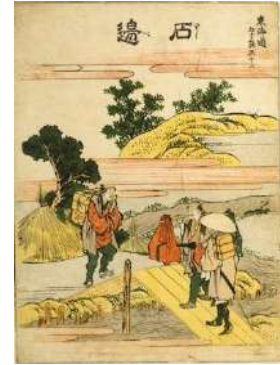


水口（東京富士美術館）

☆〈石部〉（22.9×17.2）

※狭く小さな山形の板橋を渡る旅人。一人は振り分け荷物を担ぎ、一人は天秤の荷物を担ぐ。橋の向こうには背中に荷物を背負っている男が橋の空くのを待っている。

石部（東京富士美術館）



☆〈草津〉（23.2×17.3）

※「本家 和中散注」と書かれた釣り看板のある店の前を馬子に牽かれた馬が行く。その前を歩く旅人と、立っている虚無僧。

注) 和中散：腹痛などに効く道中薬。この地の和中散本舗の生産。

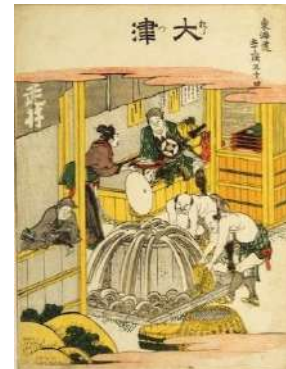
草津（東京富士美術館）

☆〈大津〉（23.2×17.4）

※逢坂大谷町の茶店にあった走井から吹き出す水を使って採ってきた野菜などを洗ったりする男たち。「寿」の文字が染

められた暖簾が掛かる茶店でくつろぐ男に饅頭を差し出す店の女。走井は、水が枯れることなく甘味があったという。

大津（東京富士美術館）



☆〈京都〉（22.9×17.2）

※貴人の行列の後ろ姿を描く。胡籙を背負った警護の武士の後ろに牛車の屋根が見える。画面の上部には、いわゆる「源氏雲」（すやり霞）がかかる。

京都（酒井好古堂）

☆〈大内山〉（22.8×17.0）

※このシリーズの最終図。衣冠束帯の貴人が二人、御所の庭先に立って談笑している図。

●錦絵『五十三次江都の往かい』（文化元～10（1804～13）。「東海道五十三次」物の一。画題は袋による。横小判着色。56 図。無款（但し、神奈川・程ヶ谷・戸塚・藤沢・大磯・箱根・藤枝に「北斎画」とある。伊勢屋利兵衛版。各約 11.2×17.4 太田記念美術館/オランダ国立民族学博物館/ギメ美術館/ボストン美術館/島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※画面右上の丸枠の中に「五十三次 東海道 駅名」が書かれ、その近くの別枠に駅番を記したもの。ほとんどの絵に朱色のすやり霞が描かれる。「蒲原」「桑名」「石薬師」は二図描かれる。最終図は「都」。

※「別図」12 図（〈四十六 石薬師〉も含む）による『五十三次江都の往かい』版がギメ美術館、ボストン美術館、東京国立博物館、名古屋テレビ放送、すみだ北斎美術館ら：ピーターモスコレクション、島根県立美術館にあるという。別図を描いた後に、北斎自身が気に入らずに描き直したか、版元の伊勢屋利兵衛の要望かは不明だが、別図のほうが先行して描かれたと推測している（吉田和子「東海道江都の往かい」について『北斎研究 23 号』所収葛飾北斎美術館編 東洋書院）。

☆〈袋〉※図の手前に日本橋、奥に江戸橋。左岸には蔵が立ち並ぶ。中央の遠景に富士山。

☆〈日本橋 老〉

※日本橋脇の魚河岸の賑わい。魚を売る者、籠に入れた魚を運ぶ者たち。左隅に橋の擬宝珠が描かれる。

☆〈しな川 弐〉

※天狗の面と三つ巴紋のある神輿を担ぐ男たち。扇を開いて囃している男も数人混じる。遠くに祭礼の幟が数本立っている。

☆〈川崎 三〉

※野外の作業台で、桶に入れた物を並べて作業する男と女たち。台に手をかけて作業を見ている子ども。側に立てかけた葦簀を支えている男がいる。

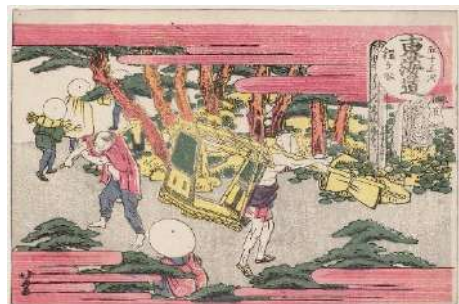
☆〈神奈川 四〉（落款：北斎画）

※海に投げ入れた網を引き寄せる漁師と、舵を取る男。遠くにも同様の船が浮かぶ。

☆〈程ヶ谷 五〉（落款：北斎画）

※空駕籠を一人で担いでいる駕籠かき。鋤を担ぐ農夫。傘を被った旅人たちが松並木の街道を行く。

程ヶ谷（すみだ北斎美術館）



☆〈戸塚 六〉（落款：北斎画）

※宿で煙草盆を囲んでくつろぐ四人の旅人。部屋の前の廊下に茶を持ってきた宿の女が立っている。

☆〈藤澤 七〉（落款：北斎画）

※大山詣での奉納の神事か。「月」と書かれた笠を被る神事の月番の人々。切長の弓張提灯を掲げて先頭を行く二人。「奉納 大山石尊大権現」などと書かれた奉納用の長い長く大きな木刀を持つ男の後には男たちが続く。家の門前には「月番替」と書かれて提灯が掲げられ、天秤に据えられた御幣の付いた屋根型の作り物を担ぐ男もいる。シーボルト・コレクションの「大山講山帰り」（文政9年項参照）も同画趣。

藤澤（すみだ北斎美術館：Jiji・COM より）



☆〈平塚 八〉

※石灯籠のある朱塗りの寺社門を通ろうとする天秤の荷物担ぎの男。女旅人と振分けを肩にした供の男。傘を被り合羽を着た道中姿の旅人。平塚には平塚八幡宮などがあるが、この絵の寺社は不明。

☆〈大磯 九〉（落款：北斎画）

※「とらが石」と書かれた立札の前で、思い石を持ち上げようとしている男。休み処の床几に腰掛けそれを見ている旅の女や男たち。「虎が石」は、山下長者の妻が子に恵まれず虎池弁財天に祈願したところ、夢に弁財天が現れ、翌朝目を覚ますと大きな美しい石が置かれていた。妻はこの石を日夜拝んだところ子を授かったと言われる。子供は「虎」と名づけられ、成長するにつれ石も大きくなっていったという。その後、曾我十郎の敵・工藤祐経の使者が十郎に矢を放ったところ、この石が十郎を救ったとも言われる（「大石町ホームページ」より）。

☆〈小田原 十〉

※馬の背から荷物を下ろして餌箱の前で休ませている馬子。側で二人の侍が立ち話をしている。遠方に小田原城が見える。

小田原（すみだ北斎美術館）



☆〈箱根 十一〉（落款：北斎画）

※箱根路を急ぐ合羽を着た道中姿の旅人と、笠を被り荷物を背負う供人。後ろから女を乗せた駕籠が付いて行く。

☆〈三島 十二〉

※鉢箱を担いで道を急ぐ飛脚と、一緒に走る同行の仲間。二人にすれ違う旅人の後姿。

☆〈沼津 十三〉

※海岸に沿った街道を行き交う侍、天秤棒の荷物運び、虚無僧など。海岸の砂浜では何かを釣で漁る男が小さく描かれる。

※別図：海上に帆かけ船がある。

☆〈原 十四〉

※富士の見える松林に腰を下ろして景色をスケッチする男や旅人。馬の背の荷物の上に乗って行く旅人もいる。原からの富士の眺めは東海道随一と言われた。

※別図：鰻料理店が描かれる。 原（すみだ北斎美術館）



☆〈吉原 十五〉

※「名物 山川白酒」と書いた箱看板のある茶店で休む人たち。店の前では柴木の束を背負った樵が杖を立てて立ちながら休んでいる。山川白酒は、山に流れる水が泡立つと白くなり、白酒に似ているところから付けられ、この地の白酒を称するようになったという。

※別図：川と富士山を望む風景。

☆〈蒲原 十六〉

※休み茶屋の前では笠に格子縞の合羽を着た旅人の前には、柄杓を持った男の子たちがいる。太い松の幹の陰には天秤棒の先に風呂敷包みを下げた男もいる。

☆〈蒲原 十六〉

※浜辺で海水を天秤棒で塩釜に運ぶ女と男。砂を箆に掬う女。

☆〈由井 十七〉

※日照り続きの中、雨が降り注ぎ、蓑を着た農民たちが喜び踊っている。差した傘には「くらさか」と書かれている。西倉沢村の風俗を描いたといわれる。

☆〈奥津 十八〉

※一般に「興津」と表記する。松林の中で細木の束の上に腰を下ろし、煙管で一服する女。側で熊手で落葉を集める子どもと、籠に落葉を入れる子ども。松林の向こうには富士山が見える。

☆〈江尻 十九〉

※浜辺で吊るした網を修理する二人の漁師。沖には沼津へ向かう帆かけ船が浮かぶ。

☆〈府中 二十〉

※廓の前の道を道中する二人の花魁。側に笛を吹く按摩の男。その後ろには、料理を乗せた大きな盆を担ぎあげて運ぶ男。

☆〈鞠子 廿一〉

※鞠子宿の街道を行き来する旅人を小さく鳥瞰図で描く。

☆〈岡辺 廿二〉

※立ち止まる馬の背の荷物の上に乗っている旅人。荷物を整えている馬子。馬の先には、刈り取った草をいれた籠を置いて草鞋の紐を整えている農夫。

☆〈藤枝〉（落款：北斎画）

※茶屋の前で荷物を振り分けに背負った馬の背に乗る女と、轡をとる馬子。馬子に話しかける旅人。茶屋で笠を被ったまま背を向けて休む旅人。

☆〈寫田 廿四〉

※大井川を輦台に乗って渡る二人の女。それぞれ七人の人足が台を担いでいる。

☆〈金谷 廿五〉

※富士山の見える峠で休む旅人。はさみ縛りで立てた三本の杭の下に置かれたものを見る三人の旅人。『富嶽三十六景』に〈金谷の不二〉がある。

☆〈につさか 廿六〉

※「日坂」をひらがなで表記している。荷物運びの二人の人足を従えた侍が、山道の小屋の前に着いた様子。急な佐夜の中山峠がある。

につさか (lp.p.pia.jp より)

☆〈掛川 廿七〉



※名物の遠州風を揚げる準備をしている三人の子ども。大風を上げている三人の男。風紐を整えている男。

☆〈袋井 廿八〉

※笠を被り、振り分け荷物を背にした馬に乗る女。その両脇に付き添う男と女。馬子は煙管をくわえて馬を牽いている。

袋井 (すみだ北斎美術館)



☆〈見附 廿九〉

※天竜川を渡る舟には、多くの旅人ともに人を乗せた駕籠も乗っている。船首と船尾には二人の船頭が竿を差している。

☆〈浜松 三十〉

※蓮の葉の浮かぶ池の前で休む二人の女と二人の男。

☆〈舞阪 卅一〉

※三味線を担いだ女や男たちが茶店にたどり着いた様子。門付け芸人の一行か。

☆〈荒井 卅二〉

※遠州灘の数艘の渡し舟が浮かぶ。街道には宿場の家並みが続く。遠景に「秋葉山」と記された山が見える。全体に鳥瞰で描かれる。

☆〈白須賀 卅三〉

※「鏡岩」の書き込みがある。大きな鏡のように立つ岩の前で二人の人足が手を広げて、その大きさを計るような仕草をしている。それを休みながら見ている他の旅人たち。

☆〈二川 卅四〉

※松の木の側にある二つの人形の岩を指差す男や、岩を眺めている旅人たち。

☆〈吉田 卅五〉

※停泊する船に乗るために、人足に背負われて浅瀬に行く二人の女。荷物を差し上げている男と、荷物を背負う男もいる。

☆〈御油 卅六〉

※天然記念物の松並木が有名だが、それを描かず、御油宿の室内で客を迎えるために掃除をしている男や、口紅を塗ったり髪を整えたりして女たちを描いている。

☆〈赤坂 卅七〉

※縄をなえている男。その先で杭を支えている女。脇でできた縄を丸めている子供と男がいる。

☆〈藤川 卅八〉

※柵の中に高札が立っている。その前で、荷物を下ろした馬が暴れるのを馬の轡に手をかけ鎮めている馬子。

☆〈岡崎 卅九〉

※二人の宿場女がそれぞれ道行く旅人の荷物を引っ張って呼び込んでいる。いわゆる「留女」が描かれる。

☆〈池鯉鮒 四十〉

※「庚申塔」と刻された塚の前で旅人たちに馬を勧めている男。旅人は手を上げて困った様子。側には五頭の馬がいる。この地では馬市が多く開かれた。

☆〈なるミ 四十一〉

※「鳴海」を平仮名とカタカナで表記している。絞り染めの反物を竿に掛ける職人。腰を下ろして休みながらそれを見ている職人。鳴海は藍の絞りが有名で「鳴海絞」や「有松絞」などと呼ばれる。

なるミ（すみだ北斎美術館）



※別図：染物屋の風景のものがある。画題も「鳴海」。

☆〈宮 四十二〉

※次の桑名まで船で渡り、七里の渡しと呼ばれた。石垣脇の海には「宝」と染め抜いた帆かけ船や、版元の伊勢屋利兵衛の定紋を染め抜いた帆かけ船が浮かんでいる。宮は熱田神宮の門前町。

※別図：宿の中、三味線を弾く芸者など。

☆〈くわな 四十三〉

※「桑名」をひらがなで表記している。名物の蛤を団扇であおりながら焼いている男。その隣に腰掛けて扇子を使っている女。床几の前に焼き蛤を指差している旅人や、それを見ている男たち。

☆〈桑名 四十三〉

※伊勢屋利兵衛の定紋を染めた帆を張った船や、荷物を積み込んだ帆掛け舟が沿岸に浮かぶ。宮から桑名まで「七里の渡し」が使われた。

☆〈四日市 四十四〉

※雨降りの中、合羽や蓑を着た男たちや、笠で雨をしのぐ男。

別図：鳥居の前を歩いている旅人。

☆〈石薬師 四十五〉

※「一ぜんめし」の箱看板のある店の前で、馬に乗った旅人や、合羽を着た旅人たちがいる。全員がうつむき笠の中の顔が見えない。別図あり。

☆〈石薬師 四十五〉

※「牛若 はち桜」（不明）と書かれた立札のある桜の木の下で、腰を下ろして花見をする旅人や人足たち。僧侶や荷物運びの男も立って見ている。石薬師寺には源範頼が鞭にしていた桜の枝を武運を占うために地面に刺したところ、そこから育ったという蒲桜が名所となっている。

☆〈庄野 四十六〉

※山道を行く旅人が遠くの庄野城と思われる城を指差している。

※別図：寺の中で経をあげる人々。

☆〈亀山 四十七〉

※「道祖」と刻された道標の前の道を往来する旅人。柴木の束を運ぶ農夫もいる。

※別図：宿の台所の風景。

☆〈関 四十八〉

※天狗の面を付けた笈を下ろして休む金比羅参りの男の前に行く合羽を着た男と、振分けを背負った旅人たち。

※別図：有名な夷岩や大黒石を驚いて眺める旅人。

☆〈坂の下 四十九〉

※滝を眺めながらくつろぐ旅人たち。

☆〈土山 五十〉

※琵琶湖のほとり、雨降りの中、鳥居の前で「栗林」と記された傘をさす男女。馬の荷の上に乗る旅人は傘を被りうつむいて雨を避けている。鈴鹿馬子唄に「坂は照る照る 鈴鹿は曇る あいの土山雨が降る」と歌われ、雨の多い地域として有名。「栗林」は現滋賀県大津市栗林町か。

☆〈水口 五十一〉

※「名物ところてん」の看板のある茶店の床机に腰掛けてところてんを食べている旅人と人足。その前に立つ柴木の束を背負った男と荷物を背負った旅人。

☆〈石部 五十二〉

※「いちぜんめし」「高菜飯」の看板のある店の座敷で、荷物を脇に置いて食事をする旅人たち。

☆〈草津 五十三〉標灯のある琵琶湖の船着場から船に乗り込む天秤棒を担ぐ人足。その後ろで乗船を待つ二人の旅人。すでに乗っている男が手を上げて招いている。

☆〈大津 五十四〉

※「大津絵」の看板のある店先で絵を描く二人の絵師。後ろで紙を用意している女。後ろの屏風には描かれた絵が掛けられている。大津絵は江戸時代初期からこの地で描かれてきた民俗画。神仏や動物が教訓的に戯画化され、旅の土産として人気があった。



大津（すみだ北斎美術館）

☆〈京 五十五〉

※幕を張った野外で雅楽の「胡蝶楽（胡蝶の舞）」の舞いを踊る二人。それを見ている衣冠束帯の貴人と、矢を背負った武人。

☆〈都 終 五十六番〉

※左下に「了」の字。庭先に控えている貴人たち。帝か高貴な人を迎えるのだろうか。

●錦絵『仮名手本忠臣蔵』（文化元～4年〈1804～07〉）。北斎画。錦絵揃物。伊勢屋利兵衛版。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵

※次項の文化初期『仮名手本忠臣蔵』とは別種のもの（『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』昭和55年 太田記念美術館編 p105による）。内容は寛政10年『新板浮絵忠臣蔵』、文化3年『仮名手本忠臣蔵』を参照のこと。

☆〈かなでほん忠臣蔵 二だん目〉（23.2×17.3）

☆〈仮名手本忠臣蔵 四だん目〉（22.8×17.5）

☆〈仮名手本忠臣蔵 五だん目〉（22.7×17.3）

●錦絵『^{かなでほんちゆうしんくら}仮名手本忠臣蔵』（文化元年～4年〈1804～07〉）。中判。北斎画。伊勢屋利兵衛版。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※「十二段」あることと、段により表記がひらがなになっている。内容は寛政10年『新板浮絵忠臣蔵』、文化3年『仮名手本忠臣蔵』を参照のこと。

☆〈仮名手本忠臣蔵 初段 つるがおか〉（「鶴ヶ岡」23.0×17.5）

☆〈かなでほん忠臣蔵 二段 松きり〉（「松切り」22.9×17.3）

☆〈かなでほん忠臣蔵 三段目 けんくハのまく〉（「喧嘩の幕」23.0×17.5）

☆〈仮名手本忠臣蔵 四段め あふぎがやつ〉（「扇が谷」23.0×17.5）

☆〈仮名手本忠臣蔵 五段目 山さきのたん〉（「山崎の譚」23.0×17.5）

☆〈かなでほんちゆうしんくら 六段め ミう里〉（「身売り」23.1×17.5）身売りの段。京の一字屋に身売りすることになったおかるを迎えの駕籠が屋敷の外で待っている。枕屏風の前で悲しみくれるおかる。側に帰って来た勘平が腕組みをして立っている。

☆〈仮名手本忠臣蔵 七段目 あけ屋〉（「揚屋」23.0×17.5）

☆〈かなでほんちゆうしん蔵 八たんめ 道行〉（「道行」23.2×17.4）

☆〈仮名手本忠臣蔵 九段目 山しな〉（「山科」23.1×17.4）

☆〈かなでほん忠臣蔵 十段目 天川屋〉（「天川屋」23.1×17.1）

☆〈仮名手本忠臣蔵 十一段目 ようち〉（「夜討」22.7×17.1）討入乱闘の場。

☆〈仮名手本忠臣蔵 十二段目 ようち〉（「夜討」22.6×16.8）炭小屋・^{こうのもろのう}高師直の場。

●錦絵「^{みたてちゆうしんくら}見立忠臣蔵」（文化元年～8年〈1804～11〉）。色紙判丸枠に画。北斎画）

※丸枠の中に描かれているのが特徴。落款の「北斎」から文化初期～中期の作とした。

北斎は、他に「^{みたてちゆうしんくら}見立忠臣蔵」（中判摺物。画狂人北斎画。東京国立博物館蔵）、「^{みたてちゆうしんくら}見立忠臣蔵 七段目」（天明年間。縦長判摺物。春朗画。太田記念美術館蔵）などがある。

☆〈初段〉物入れの箱の蓋を開け、中の包を見る三人の女。一人は三味線を持って立っている。

☆〈三段目〉部屋の中で、女を打擲しようと、立って手紙を持った手を振りあげる女を、後ろから腰に手を回して止めようとする女。

見立忠臣蔵三段目（ARC ホータルゲータース）

☆〈五段目〉海辺の松の木の下で、貝殻などを^{ざる}箆に入れて売っている女の前で、蛇の目傘を閉じて持ちながら紐付きの袋を差し出している女。



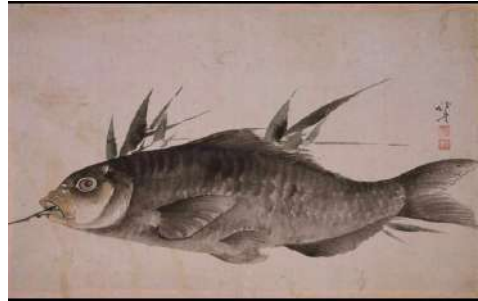
- ☆〈八段目〉母親と振袖の娘が道標のある道を歩いている。母親は藁蓑を下げている。
- ☆〈九段目〉雪を被った笹の絵のある屏風の前で、座って身をよじる娘と、その後で筭のようなものを持って立っている年増。
- ☆〈十段目〉長持に左膝を乗せ、注連縄のある神棚に手を伸ばしている女。その脇で赤子を抱いてしゃがみながら女の様子を見ている女。神棚には大福帳が下げられている。
- 錦絵『かな手本忠臣蔵』（文化元年～10年〈1804～13〉）。北斎画。伊勢屋利兵衛版
- ※北斎は本図を含めて「忠臣蔵」を7種類描いているという。本図はシンシナティ美術館所蔵だが、六段目と七段目が所蔵されていないという（『新北斎展図録』p323）。また十一段目が2枚ある。
- ☆〈初段〉鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮で、塩谷判官の妻顔世が新田義貞の兜を鑑別していると、高師直が言い寄っている。そこへ若狭守が現れた場面。
- ☆〈二段目〉松切りの場合。若狭守が加古川本蔵に高師直を討つ決意を語る。本蔵はその決意を受け取った証拠に、縁先のまつの枝を切り、自分の意志を表す場面。
- ☆〈三段目〉主人塩谷判官の身を案じ、早野勘平が館の裏門に来る。そこへおかるが来て勘平と会う。鷺坂伴内が来ておかるを渡せと迫るが、勘平に投げ飛ばされる場面。
- ☆〈四段目〉塩谷判官の切腹後、妻の顔世の身を案じる家来たちの様子。
- ☆〈五段目〉山崎街道の場合。おかるの父与市兵衛、おかるの身売りで得た50両を斧定九郎に奪われ殺される。遠景に勘平が千崎弥五郎に逢い、怪しいものではないと鉄砲を渡し、同じ家臣であることが分る場面が描かれる。
- ☆〈八段目〉道行きの場合。大星力弥の許嫁、加古川本蔵の娘小浪と母親の戸無瀬が、京都・山科の方弥のもとに行く場面。
- ☆〈九段目〉山科閑居の場合。山科の方弥宅に着いた戸無瀬と小浪。父親である加古川本蔵は、若狭守が高師直を討つという本懐を止めた男であり、高師直にへつらった男のため、小浪と大星由良之助の息子の方弥との結婚は許されぬと、由良之助の妻お石から拒否される。恥辱の末、戸無瀬は小浪を殺して自分も死のうとするところへ、加古川本蔵が門口に現れる場面。
- ☆〈十段目〉天川屋の場合。仇討ちに協力し、武具などを調達した堺の天川屋義平の家に浪人たちが出入りして妻の身が危ないので妻のおそのを離縁する。その後、おそのが去り状を持って義平の家の門に来る場面。
- ☆〈十一段目〉討ち入りの場合。浪士たちが高師直の屋敷に押し入ると、「前」とかいてある葛籠の蓋を開けて男が出てきた場面。
- ☆〈十一段目〉炭部屋本懐の場合。炭小屋にいた高師直を三人の浪士が取り囲んでいる場面。一人は「忠」と書かれた提灯で高師直を照らしている。
- 錦絵「放屁する仕丁」（「放屁する神人」とも。文化元年～4年〈1804～07〉）。短冊判。北斎画。伊勢屋利兵衛版。島根県立美術館：永田コレクション蔵
- ※賽銭箱の後ろに付けられた灯り皿の火に尻を突き出して放屁する男の図。

●肉筆画「茶摘図」(文化元年～10年〈1804～13〉)。絹本着色一枚。東陽北斎席画。印亀毛蛇足。19.5×26.1 太田記念美術館蔵)

※襷がけをして姉さんかぶりの女が、摘んだ茶を入れた茶笥を持った上半身の図。

●肉筆画「鮒図」(文化元年～文化10年〈1804～13〉)。紙本淡彩一幅。北斎。印不明印不明。26.2×38.0 千葉市美術館蔵)

※笹の枝を鰓から口に刺された鮒。体全体は墨の濃淡で描くが、口には薄い朱を添える。もとは『肉筆面帖』の一図であったかという考察もある(「千葉市美術館収蔵品検索システム」より)。



鮒図(千葉市美術館)

●肉筆画「鶏竹図」(「竹鶏図」とも。文化元年～5年〈1804～08〉)。絹本着色掛軸一幅。歩月老人北斎画。印亀毛蛇足。110.0×51.0 個人蔵)

※2016年12月30日、デンマークでの競売で東京の美術商が落札。イギリスの建築家・ジョサイア・コンドル(明治期に来日し建築を指導)の所蔵していたもの。石灯籠の上に竹や豆を背景に二羽の鶏がとまっている図。儒学者太田錦城(1765～1825)の賛がある。

※内藤正人・慶応大教授(江戸絵画)は「落款、印、画風、どれも北斎作と疑う余地はない」と話す。印の状態などから、「北斎」を名乗って数年ごろの40代の作品とみる。

「鶏と竹を描いた北斎の肉筆画は初めて見た。竹の葉の色の変化などは浮世絵にはないもので、中国系の(花鳥画を得意とする)南蘋(なんびん)派の描写を消化した写生画といえる。新鮮な作風で、まさに鶏の飛躍のごとく上向きに脂の乗っている時期。できは非常によく、貴重な発見だ」と評価する(「朝日新聞」より)。

※「歩月老人」の号は他では未見。

鶏竹図(太田記念美術館)



●肉筆画「猿図」(文化6年～10年〈1809～13〉)。紙本着色小型掛物一幅。北斎。印亀毛蛇足。37.2×25.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※烏帽子を被り御幣を持って踊る猿の図。陰陽五行説で鬼門を守る比叡山の日枝山王権現の使いとして描かれる。寛政10年(1798)頃にも同題の「猿図」がある。

●肉筆画「海老図」(文化6年～10年〈1809～13〉)。紙本淡彩一幅。北斎筆。印亀毛蛇足。22.6×29.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※墨と薄い朱色を用いて描く。長い二本の髭が弧を描くように細く描かれる。余白部分が広くあるので、賛を入れる予定があったと考えられている。

●扇面画「朝比奈図扇面」(文化6年～10年〈1809～13〉)。紙本淡彩扇面。北斎。印亀毛蛇足。17.7×51.3)

※布袋のような裸の腹を出して、箱に右肘をかけて頬杖をしている朝比奈三郎。背中には長い刀が置かれている。朝比奈三郎を扱ったものは、黄表紙『朝比奈御髭の塵』(寛政8年：挿絵)、錦絵「朝日奈三郎平ノ義秀」(寛政3年～5年)、摺物「朝比奈三郎の鏡割り」(寛政10年)などがある。

●肉筆画「ほととぎすを聞く読書美人図」(文化元年～10年〈1804～13〉)。紙本着色一幅。無款。116.4×49.7 北斎館蔵)

※ほぼ直角に首をかしげて読書をする女。着物の胸がはだけている。脇には冊子が数冊積まれている。図上にはほととぎすが一羽飛んでいる。浅草庵市人の賛が記される。

ほととぎすを聞く読書美人図(北斎館)



●肉筆画「西瓜と包丁」(文化7年～15年〈1810～18〉)か。紙本着色。北斎画。印 葛しか。北斎館蔵)



※天保10年(1839)にも「西瓜図」がある。

西瓜と包丁(北斎館)

●錦絵「東都品川御殿山」(文化2年～5年〈1804～08〉)。紙本着色。北斎画。22.4×33.4 西村屋与八版。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※文化2年『百轉』の八丁の一枚を錦絵にしたもの。額縁取りの絵。図中央に桜の大木があり、木の下では敷物を敷き、三人の男が花見をしている。そのこちら側では三人の子どもが逆立ちをしたり海老反りをして遊んでいる。図右下からの桜の大木に向かう道にはこれから花見に向かう親子連れや男たちがいる。図左にも花見用の仮小屋に数人の男女が品川沖を眺めている。海には帆を畳んだ船が七隻浮かんでいる。

●錦絵「隅田川」(文化3年～8年〈1806～11〉)。横大判着色。かつしか北斎画。25.0×36.6 日本浮世絵博物館蔵)

※図右に支え木のある橋脚を大きく描き、その下を二人の女を乗せた猪牙船が行く。船頭は艀を踏ん張って漕いでいる。女の一人は船端から手拭いを水に晒しているもう一人の女は大きな日傘を背にしている。夏の夕暮れだろうか。空にはすやり霞のように茜雲が横にたなびいている。遠くの土手には数人の人物がいる。川の先には屋根船が一艘浮かんでいる。



●錦絵「源氏物語図」(文化6年～7年〈1809～10〉)。絹本着色。葛飾北斎。印 亀毛蛇足。84.5×36.5 cm 太田記念美術館蔵)

※光源氏が御簾の中の女性(朧月夜といわれる)を覗いている図。部屋の中では官女が扇子を開いて口元に当てている。大和絵の吹抜屋台注の構図で描く。 源氏物語図(太田記念美術館)

注) 吹抜屋台：鳥瞰図的画法で、屋根を取り払って天井から家の中を描く。

●錦絵『風流東都八景』（あるいは「東都」は、そのまま「とうと」と読むか。文化5年～7年〈1808～10〉。縦中判錦絵。北斎画。伊勢屋利兵衛版。各23.1×17.3 ハーバート大学ウッラー美術館/名古屋テレビ放送/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※すやり霞をかけた鳥瞰図風画法。画題は横書きでふりがながある。

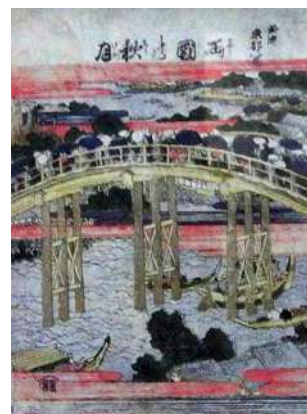
☆〈品川の帰帆〉（北斎画）

☆〈上野の晩鐘〉（無款）

※桜に囲まれた東叡山寛永寺と不忍の池を俯瞰している。池の中央にある弁財天へ渡る太鼓橋を歩く人々や、池で舟遊びをする人などが描かれる。

☆〈両国の秋月〉（高い橋桁の間を抜けるように進む屋形船などが数隻。反り橋風の両国橋の上には傘を開いて渡る人々で埋め尽くされる。すみだ北斎美術館蔵）

両国の秋月（すみだ北斎美術館）



☆〈飛鳥の夕照〉

☆〈待乳の落雁〉（無款）

※待乳山と、その前の今戸橋などを鳥瞰画法で描く。

☆〈隅田川の暮雪〉

☆〈吉原の夜雨〉

☆〈浅草の晴嵐〉

●肉筆画「花魁図」（文化6年～10年〈1809～13〉。紙本淡彩一幅。葛飾北斎筆。印雷辰。112.8×26.0 太田記念美術館蔵）



※北斎は寛政から文化期にかけて多くの花魁図を描いている。本図は落款と印号から文化8年頃と思われるが、一応文化中期頃としておきたい。図は、横兵庫髷の花魁が小首を傾げて足元を見ている。裾から高下駄を履く足が見える。亀甲模様の前帯と仕掛（打掛のことを吉原ではこう呼んだ）の◎を散らした裾模様が特徴的。仕掛けの背は墨絵風に描いている。

花魁図（太田記念美術館：tamegoro.exblog.jp より）

●錦絵『東都十二景』（文化元年～5年〈1804～08〉。横小判錦絵揃物。北斎画。伊勢屋利兵衛版。各約11.2×16.9 ヴィクトリア・アルバート博物館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/一部太田記念美術館蔵）

※北斎は〈かんだめうしん〉〈しのはす〉〈五百らかん〉〈おちやのみつ〉〈りやうごく〉〈すみだ川〉〈みめぐり〉を描き、勝川春亭が〈たかなハ〉〈すみだ川：北斎と別図〉〈あすか山〉〈あさくさ〉

〈よしはら〉〈さかい丁〉〈りやうごく：北斎と別図〉（『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』p100より）を描いている。

☆〈おちやのみつ〉（11.5×17.5 北斎画。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※お茶の水の右側の昌平坂を往来する人々。神田川には一艘の船が浮かぶ。その先には玉川上水の分岐水道橋の樋が描かれる。ボストン美術館に本図の画稿があるという（『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』 p 100）。



おちやのみつ（すみだ北斎美術館）

☆〈くりやうごく〉（11.4×17.3 無款。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※両国橋を往来する多くの人々。隅田川には屋形船や緒牙船などが数艘行き来している。ボストン美術館に本図の画稿があるという。同題の春亭の絵もある（『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』 p 100）。

☆〈すみだ川〉（11.5×17.4 無款。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※雪景色の隅田川堤の風景。釣形に曲がった土手の上を歩く人々。同題の春亭の絵もある（『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』 p 100）。

☆〈かんだめうじん〉（無款）

☆〈しのはす〉（無款）

☆〈五百らかん〉（無款）

☆〈ミめぐり〉（無款。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

●錦絵？「目黒不動」（横大判 文化3年～8年〈1806～11〉か。かつしか北斎画。25.2×38.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。

●錦絵『（中判）近江八景』（文化5年～7年〈1808～10〉。享和元年～文化7年〈1801～10〉説あり。中判錦絵8図揃物。『銅板近江八景』（文化8年）と同画趣だが、描き方やサイズ違いのもの。全図俯瞰描写。北斎画。伊勢屋利兵衛版）

※画題は図の右に縦書きで示され、図の上部に和歌が記される。

☆〈瀬田の夕照〉（23.2×17.4 太田記念美術館：長瀬コレクション/ハーバート大学サッカー美術館/ヴィクトリア・アルバート美術館/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館蔵）

※図中央に小さく瀬田の唐橋を往来する人々。手前の山間を歩く人々。海上には手前に二艘の舟。夕照の趣を朱色のすやり霞で表す。

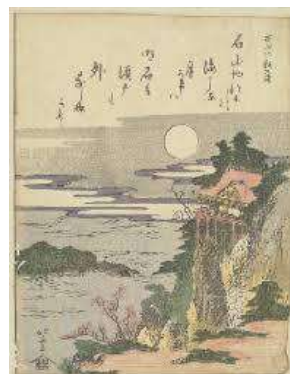
瀬田の夕照（すみだ北斎美術館）

☆〈石山の秋の月〉（22.7×16.9。太田記念美術館/ハーバート大学サッカー美術館/ヴィクトリア・アルバート美術館/神戸市立博物館/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館蔵）



※崖の上に立つ石山寺の先に満月が描かれる。崖下には琵琶湖が広がる。寺の舞台と参道に小さく参詣人が描かれる。図の上部に「石山や にほの海てる 月かけハ 明石も須磨も 外ならぬかは」の和歌が記されている。

石山の秋の月（すみだ北斎美術館）



☆〈粟津の晴嵐〉（23.2×17.5 太田記念美術館：長瀬コレクション/ウイクトリア・アルバート美術館/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※瀬田から膳所にかけて松並木が続いていたという。強風に松の枝葉がざわめくのを晴嵐と称した。膳所城が彼方に見える道を旅人が数名向かっている。

☆〈唐崎の夜雨〉（23.2×17.6 太田記念美術館：長瀬コレクション/ウイクトリア・アルバート美術館/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※唐崎神社境内の松の老木に図左上から斜め右下に激しく雨が降りそそぎ、岸边には数艘の舟が舫っている。

☆〈比良の暮雪〉（23.1×17.3 ウイクトリア・アルバート美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※三井寺に参詣する人々が門の所にいるのを俯瞰して描く。中央にすやり霞を配している。

注) すやり霞：大和絵の手法で、画面の中に横にたなびく霞を挿入するもの。

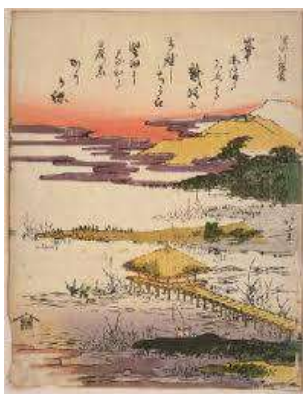
比良の暮雪（慶応大学図書館）



☆〈堅田の落雁〉（23.2×17.5 島根県立美術館：長瀬コレクション/ウイクトリア・アルバート美術館/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/太田記念美術館蔵）

※琵琶湖の岸边から湖上に突き出た橋の先には浮御堂（満月寺）がある。空飛ぶ雁ではなく、岸边に舞い降りた雁の群れが小さく描かれる。

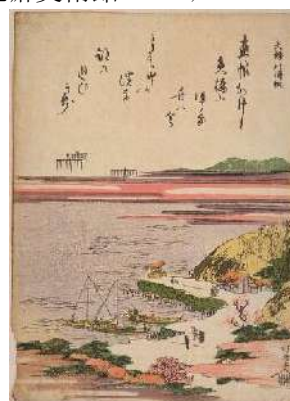
堅田の落雁（すみだ北斎美術館）



☆〈矢橋の帰帆〉（22.6×16.9 すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館蔵）

※全体に夕方の色合いの中、帆を下ろした船が数隻船着き場に帰ってきている。

矢橋の帰帆（すみだ北斎美術館）



☆〈三井の晩鐘〉（23.1×17.4 島根県立美術館：長瀬コレクション/ウイクトリア・アルバート美術館/太田記念美術館すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ボストン美術館蔵）

※三井寺を俯瞰して描く。山門には数名の人がいる。奥には鐘楼が描かれる。

●錦絵『新板近江八景』(文化6年~10年<1809~13)。中判着色。北斎画。版元名記載なし)

※画題は図上部に「新板近江八景」とあるが、『近江八景』と同画趣。全図に朱色のすやり霞が挿入される。

☆〈瀬田の夕照〉(23.2×17.4 太田記念美術館/島根県立美術館:永田コレクション蔵)

☆〈栗津の晴嵐〉(23.2×17.6 太田記念美術館/島根県立美術館:永田コレクション蔵)
栗津の晴嵐 (ARC 古典籍ポータルベース)

☆〈唐寄の夜雨〉(23.2×17.6 太田記念美術館/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション蔵)

☆〈比良の暮雪〉(22.8×17.2 太田記念美術館/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション蔵)



比良の暮雪 (すみだ北斎美術館)

☆〈堅田の落雁〉(23.2×17.5 太田記念美術館蔵)

☆〈矢橋の帰帆〉(22.6×17.2 太田記念美術館/島根県立美術館:永田コレクション蔵)

☆〈三井の晩鐘〉(23.1×17.1 太田記念美術館/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション蔵)

三井の晩鐘 (すみだ北斎美術館)

☆〈石山の秋月〉(22.8×17.2 太田記念美術館:長瀬コレクション/すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション蔵)



※本図と上記〈三井の晩鐘〉は二枚続きで、切断されないままの二丁掛であったという(『ピーターモース・コレクション北斎図録』より)。

石山の秋月 (mail.aflo.com より)

●錦絵『(横小判)近江八景』(文化6年~10年<1809~13)。横判着色。「あはづのせいらん」「からさきのよるのあめ」のみ北斎画。伊勢屋利兵衛版。各平均 11.5×17.4。すみだ北斎美術館

ピーターモース・コレクション蔵)

☆〈せたのせきせう〉(無款)

※瀬田の唐橋を望む湖に二艘の渡し船が浮かぶ。手前の土堤には駕籠に乗る人や荷物を背負う行商人などがいる。





せたのせきせう

☆ 〈いし山のあきの月〉 (無款)

※崖に建つ石山寺の下には紅葉が咲いている。

いし山のあきの月



☆ 〈あはづのせいらん〉 (北斎画)

※城に向かう湖を渡る道を行く旅人たちが。馬に乗る男もいる。



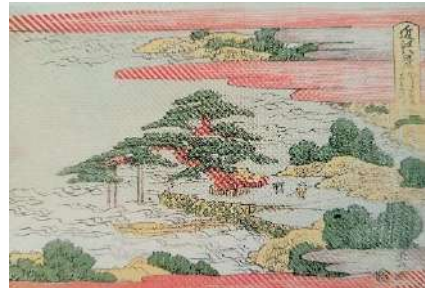
あはづのせいらん

☆ 〈からさきのよるのあめ〉 (北斎画)

※巨大な松の前の小さな鳥居。その前で

掃除をしていると思われる男がいる。岸边には二艘の舟が浮かぶ。

からさきのよるのあめ



☆ 〈ひらのぼせつ〉 (無款)

※雪の積もった道を行く旅人の笠や蓑にも雪が被っている。



ひらのぼせつ

☆ 〈かたゝのらくがん〉 (無款)

※多くの雁が岸边から飛び立っている。

かたゝのらくがん



☆ 〈やばせのきはん〉 (無款)

※三隻の舟が船着き場に戻っている。手前の街道には馬に乗る旅人などが描かれる。

やばせのきはん



☆ 〈みるのばんせう〉 (無款)

※三井寺に向かう二人の男や荷物を担ぐ男。寺の庭から伸びる木からは赤い葉が茂っている。

みるのばんせう



●錦絵『秀逸 六玉川』注(文化元年～5年〈1804～08〉。文化4年頃とする説あり。中判錦絵六枚揃物。北斎画。伊勢屋利兵衛版。東京都江戸東京博物館/ヴィクトリア・アルバート博物館蔵)

注) 平安から鎌倉期に和歌に詠まれた玉川の総称をいう。

☆〈陸奥 千鳥〉(23.3×17.4「野田の玉川」「千鳥の玉川」とも。太田記念美術館:長瀬コレクション蔵)

※川辺に立つ二人の娘。側に傘を閉じて小脇に抱えた供の男。川辺から飛び立つ千鳥の群れ。

陸奥 千鳥 (https://blog.goo.ne.jp/より)



☆〈近江 はぎ〉(22.2×16.9「萩の玉川」「近江の玉川」とも)



※うねるように流れる川の岸边に立って右手をかざして何かを眺める娘。側には縦縞の着物を着た使いの女が弁当の包みを手にして跪いている。岸边の群生している萩に向かってこちらに背を向けている供の男。

近江 はぎ (https://blog.goo.ne.jp/より)

☆〈山城 井出〉(22.5×16.9「山吹の玉川」「井出の玉川」とも)

※大きな琵琶を抱えている男、子どもを背負っている男とその様子に顔を向けている男。馬の手綱を引いている男。仕下らしき男たちが川に足を入れて渡ろうとしている。

山城 井出 (ボストン美術館)



☆〈津の国 打衣〉(22.5×16.9「擣衣の玉川」「三島の玉川」「砧の玉川」「撰津の玉川」とも。すみだ北斎美術館:ピーターモースコレクション蔵)



津の国 打衣 (江戸東京博物館)

※野外に敷いた藁座の上に立膝で座り、道具に巻きつけた布を叩く角隠しの女。側で畳んだ布を持って立っている角隠しの女。その女のほうへ子どもが向かっている。

☆〈紀伊の国 毒の玉川〉(23.3×17.7「高野の玉川」とも)

※滝の様に流れる対岸には「毒の玉川」と書かれた高札が立っている。こちら側の岸边には長袴の官女風の二人の女。一人は袖を

口元に当て、一人は桧扇の様な物を持って横の女を見ている。二人の後で茶坊主が両手をあげている。

紀伊の国 毒の玉川 (https://blog.goo.ne.jp より)



☆〈武蔵手作〉 (23.0×17.8「調布の玉川」とも)



※岸辺にしゃがんで布をさらしている角隠しの女。側で干し竿に白布を干している角隠しの女。後ろで臼に入れた布を両頭の堅杵で叩いている男。

武蔵手作 (ボストン美術館)

●肉筆画「六歌仙図」(文化3年～5年〈1806～08〉)。紙本着色六幅対。もと押絵貼六曲一双屏風か。左端の犬伴黒主にのみ葛飾北斎印亀毛蛇足の落款あり。131.1～131.4×53.1～55.5 フリーア

美術館蔵)

※全図の上部に、薄い朱色を垂らしたような「うち曇り」といわれる画法が使われている。右図から、

- ☆〈喜撰法師〉墨染の法衣に袈裟を羽織り、後ろ向きに赤い杖をついて歩く姿。
- ☆〈文屋康秀〉折烏帽子・狩衣姿で、赤い巻鞘を帯びた顎鬚の康秀が、遠くを眺めている。
- ☆〈在原業平〉梓弓を背負い、縹色の袍(中将の地位を表す)を着るのは、業平図のパターン。本図では扇形に広がった箆に入れた矢を背負っている。
- ☆〈小野小町〉紅の打袴姿、檜扇を持つのは、小野小町図のパターン。
- ☆〈僧正遍照〉朱の僧衣で袈裟を腕に掛け、中啓と呼ばれる扇を持って立っている。
- ☆〈大友黒主〉黒の衣冠束帯姿で、笏を膝に立てて何かを考えている姿。この絵にのみ図左下に北斎の落款がある。

●錦絵「道の踊り」(文化3年～7年〈1806～10〉)。掛物。かつしか北斎画。45.5×25.5 プーシキン美術館蔵)

※プーシキン美術館では落款を「勝川しの北斎」としているが、この落款を使用した例はないと思われる。「かつしか北斎」の崩し字を読み間違えた可能性があると考えられる。

ひょっとこの面をつけた男が扇子と紙幣をつけた播粉木を持って踊りながら歩く。後ろから深編笠を被った男が太鼓で拍子を取っている。笠にはウラジロが飾られている。その脇では高下駄を履き笠を被った女が三味線を弾いている。正月の風景。

道の踊り (プーシキン美術館 Web より)



●肉筆画「竹に昼顔図」(文化5年～10年〈1808～13〉)。紙本一幅着色。北斎。印亀毛蛇足。27.0×37.4 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※擦ったような筆使いで、図の左下から右上に一気に薄墨を生かして描いた竹に、蔓をからませた昼顔の花が白と薄紅色に咲いている。竹の根元近くと節は墨を少し濃く色づけている。

竹に昼顔図（島根県立美術館）



●屏風絵「春秋美人図」（文化7年～15年〈1810～18〉）。他に文化7年～9年〈1810～12〉説、文化3年～10〈1806～13〉年説あり。絹本着色双幅。葛飾北斎筆。

印雷震。82.9×33.8 出光美術館蔵

※右一幅には、扇子を持つ体を左によじる武家の夫人。背景に緑と黄色を横に引いている。

緑の着物に葵花模様がちりばめられ、裾は赤い無地。帯は赤く花模様で後に垂らしている。左一幅には、青い縞模様の打ち掛け、白地に赤い花模様の着物をまとい、花模様のある赤い帯を背に大きく結び、虫籠を持ち右を向く町家の夫人を描く。二幅とも鮮やかな色使いの図。

※落款の「葛飾北斎筆」は二代目北斎注の落款であるので、同人の作とする説あり。初代北斎は「葛飾北斎」に続く字は「画」とするという（日本浮世絵博物館所蔵『北斎』p14 読売新聞社）。

注）二代目北斎：文化11年（1813）に亀屋喜三郎に北斎号を譲っている。

春秋美人図（出光美術館）



●肉筆画「千野兵庫肖像」（文化7年～9年〈1810～12〉）。掛幅絹本着色。東陽葛飾北斎辰政写。印雷震。

78.9×40.8 個人蔵

※文机の前に端坐して書物を読む袴姿の武士・千野兵庫。机の右脇には和時計が置かれている。机の右には孔雀の羽根と筆を入れた筆筒が置かれ、兵庫の右腕には鷹がとまっている。兵庫の背後には刀置きに大刀が置かれ、その上に布が掛けられている。背景は黄色地の塗りつぶし。

千野兵庫(1736～1812)は、信州諏訪藩の家老。三の丸様と呼ばれ藩の政治を取り仕切ったといわる。

※この絵は、文政9年（1826）頃にオランダに渡った北斎工房の数種の作品同様の画趣であるので、あるいは落款は後に加えられたものとも考えられている。

千野兵庫肖像（部分：『北斎 東西の架け橋展図録』より転載）



●肉筆画「梅樹図」（文化元年～13年〈1804～18〉）。「白梅図」とも。紙本淡彩額装。北斎。印辰印政

26.2×37.9 千葉市美術館蔵

梅樹図 (千葉市美術館)

●肉筆画「梅樹図」(文化7年~11年:1810~14 絹本着色一幅。北斎。印雷震。115.0×41.5 ネルソン・アトキンス美術館蔵)



※白梅の古木が画面右下から左上に伸び、画面中央から右上に弧を描くように伸びて多くの花を咲かせている。

梅樹図 (ネルソン・アトキンス美術館)

●掛軸墨絵「墨竹図」(文化4年~10年:1807~13。紙本墨絵。北斎。印亀毛蛇足。38.0×26.2 フランス国立図書館蔵)

※「松・竹・梅・蘭を南画では四君子と称し、習画の手ほどきにその筆法を学ぶが、この絵もそうした習作か」といわれる(檜崎重宗『秘蔵浮世絵大観8』図録解説p270)。

図は、竹の幹が太いものと細いものが二本並べて描かれる。節は濃い墨で、幹と根元の葉は濃淡のグラデーションで描かれる。

●肉筆画「花魁と禿」(「桜花美人図」とも文化3年~7年。絹本着色一幅。北斎。印亀毛蛇足。117.3×33.3 静嘉堂文庫美術館蔵)

※花魁の両脇に立つ二人の禿の図。横兵庫の花魁が小首をかしげて立っている。花魁の右側に飾りのついた角隠しのようなかぶり物を被って立っている禿と、花魁の左に芥子房のような頭に飾り物を付けて立っている禿。図の上部には房のように集まった桜の花が、浮いているように描かれる。

花魁と禿 (静嘉堂文庫美術館)



●肉筆画「夏粧美人図」(文化7年~12年<1810~15)。掛装絹本着色一幅。北斎戴斗。印亀毛蛇足。72.0×29.9 東京芸術大学芸術資料館蔵)



※制作年不明だが、従来、亀毛蛇足印を使い始めた早い時期の作といわれる。但し、亀毛蛇足印は享和2年(1802)から文化12年(1815)頃まで使用しているが、北斎戴斗の落款は文化7年(1810)から文政2年(1819)頃の使用であるので文化7年から文化12年頃の作とする。

※膝を立て体を左にねじり、左腕を畳みについて座り、団扇を手にする女。足元には金魚鉢がある。

夏粧美人図 (東京芸術大学芸術資料館)

●屏風絵肉筆画「鶴鶴図」(「鶴鶴図」とも。文化7年~15年<1810~18)。絹本着色二

曲一雙屏風図。北斎筆。印雷震。25・1×155・8 鎌倉国宝館：氏家浮世絵コレクション蔵)
 ※右図に五羽の鶴、左図に二羽のコウノトリの飛翔を描く。



鶴鶴図（氏家浮世絵コレクション）

●団扇絵「菖蒲に鯉図」（文化6年～10年〈1809～13〉。団扇絵着色。北斎画。ボストン美術館蔵）

※水垣の側に咲く菖蒲を横に、水草の浮かぶ水面を泳ぐ一匹の鯉。

菖蒲に鯉（ボストン美術館）



●肉筆画「糸瓜に雀図」（文化6年～10年〈1809～13〉絹本着色一幅。北斎。印亀毛蛇足。35.5×25.0 摘水軒記念文化振興財団：府中市美術館寄託）

※図右に水墨画の様に縦長の糸瓜を描き、図左に雀を描く。

糸瓜に雀図（府中市美術館寄託）

【「潮干狩図」の謎】

※北斎の「潮干狩（図）」は文化期にいくつか描かれているが、資料が混在しているので、更に検討を要する。寛政5年～9年（舳先の下の子どもと亀判）と、寛政5年～9年（摺物：しがみつく子ども判）、享和～文化（摺物：巨大な朝日判）、文化3年（摺物：花見判）、文化3年～10年（掛幅判）、（摺物：亀と舟の後部判）、文化4年～7年（重文判）、文政3年～天保5年（多人数判）、年代不詳（摺物：手を引かれる子ども判）、「先ノ宗理北斎画」の落款（シカゴ美術館）のある摺物（文化庁の「国指定文化財等データベース」の解説による）など「潮干狩図」を描いている。各図の区別のため、その特徴を示す（～判）を仮に付した。

●肉筆画「潮干狩図」（掛幅判）（文化3年～10年〈1806～13〉。掛幅一幅。絹本着色。葛飾北斎。萬野美術館蔵）

※干潟で多くの男女が潮干狩りをしている光景。図の手前では、男が箆を頭上に持ち上げ、もう一人の男は貝の入った箆を抱えるように持っている。水辺に男の子が二人入り、貝を漁っている。そばには三人の女たちが立っている。画面奥の干潟でも多くの人が潮干狩りをしている。背景には富士山が描かれる。

●摺物「潮干狩図」〈亀と舟の後部判〉（文化3年～10年〈1806～1813〉）。横長判。紙本着色。摺物。かつしか北斎画。19.4×52.8 北斎館/東京国立博物館蔵

※図の左に三隻の船が浮かび、手前の干潟では禪姿の男と、尻はしよりをした男が腰をかがめて貝を漁っている。その右では手拭を被った女が箆を砂に入れて貝を漁っている。さらにその右では、左手に箆を持ち、右手を上げて何かを指し示している。その横には箆を両手に持って立っている女と、亀を手にしてしている子どもがいる。図の右端には浜に打ち上げた舟の後部が描かれる。

●摺物「潮干狩図」〈手を引かれる子ども判〉（年代不明。横長判。摺物。東京国立博物館蔵）

※箆の貝を持ちあげようとしている二人の男。子どもの手を引く母親。裾をはしょって右手を口元に上げ立っている女。その右では、尻端折りをした下男が屈んで貝を掬っている。さらにその右では腰まで水に入って両手を突き出している男がいる。沖には数艘の舟が浮かぶ。



潮干狩図（手を引かれる子ども判：東京国立博物館）

【北斎作品の重要文化財指定第1号】

●肉筆画「潮干狩図」〈重文判〉（文化4年～7年。『日本美術全集15』では文化10年頃（1813）としている。絹本着色一幅。葛飾北斎。印 亀毛蛇足 54.7×86.5 大阪市立美術館蔵。重要文化財）



潮干狩図（重文判：大阪市立美術館）

※近景の土坡は墨による漢画法で、円形の富士山、山、雲、空は油彩式と明暗法による西洋画法を用いている。品川の光景といわれる。箆を持って角隠し風に手拭を被った女三人の側で、腰を屈めて貝を掘る子ども三人。図の右には、棒に笠をくくりつけて船尾に立っている。三人の女の背後では盥に貝を入れた桶を頭上に掲げている男がいる。真ん中の女の背後で、貝を漁る子供たちを指差している子供もいる。沖の干拓地でも潮干狩りをする男たちと女たち。沖には帆を降ろした船が数隻浮かんでいる。背景には雪に覆われた富士山が描かれる。

※「(略) 齋藤月岑編『東都歳時記』春・下・三月条(天保3年:1832刊)では、深川洲崎の汐干狩の絵に続けて、当時の潮干狩の様子を紹介している。

「汐干狩は三月から四月、其内三月三日を節とす。(略) 芝浦・高輪・品川沖・佃島沖・深川洲崎・中川の沖、早旦(朝)より船に乗じてはるかの沖に至る。卯の刻(午前6時ごろ)過より引始めて、午の半刻(正午ごろ)には海底陸地と変ず。ここにおりたちて蛎蛤を拾ひ、砂中にひらめをふみ、引残りたる浅汐に小魚を得て宴を催せり」(ルビ・句読点・注は筆者による)。

※平成9年(1997)9月17日、本図が北斎作品中初めての重要文化財に指定された。文化庁の「国指定文化財等データベース」には次の記載がある。

「本図の『亀毛蛇足』印は、上限は享和三年(一八〇三):狂歌絵本『夷歌月微妙』にあるので、少なくともこの年以前に遡る。

同印(「亀毛蛇足」印)を門人北明に譲るといふ墨書のある『鯉魚図』(埼玉県立博物館)が文化十年(一八一三)の作であることから、この頃までは確実に用いていたと推測できる。同印を有する作品は少なくとも五十点余が知られており、印の周囲の長方郭が次第に欠損していくことが指定されている。(略)

三人のうちには眉をそり落した年輩の女、桜の模様の小袖を着た年長の娘、黒地の振り袖を着た若い娘と、衣装風俗に巧みに年齢の差が表現されており、裕福な町方の母親と子どもたちが三月三日の潮干狩に興じる様子を表したものとみえる。女たちを含めた右側の人物群が一様に砂の上の貝に注意を向け、左側の少年たちは砂を掘る手元に関心を集中することにより画面に緊張感がもたらされている。

北斎は摺物や版画で同様の主題を何度か制作しており、本図よりさかのぼる『宗理画』(東京国立博物館)あるいは『先ノ宗理北斎画』落款(シカゴ美術館)のある摺物等には同種の図様が見いだされる。(略)

北斎はあらゆる日本人画家のうちで世界的に最も知られており、外国での研究も盛んに行われているが、本図は、北斎の美人画、風俗表現および風景表現の特質が融合した希少な作例として、数ある北斎の肉筆画中でもことに高い評価を得ている作品である」

●扇面肉筆画「猪口とほおずき図」(文化5年~10年<1808~13)。紙本中判着色扇一本。北斎筆。印辰印政。山城屋版。17・6×46.0 太田記念美術館蔵

※白地の扇面に、山水画風に家並みと森、遠景に山並みの絵付けがされた茶碗を描く。茶碗の上に赤く日の丸が描かれている。 猪口とほおずき図(太田記念美術館) 拡大部分



●肉筆画「大黒に二股大根図」(「二股大根と大黒図」とも。文化5年～10年(1808～13)。紙本着色一幅。葛飾北斎筆。印 亀毛蛇足。58.4×25.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※二股大根は、甲子待ち(甲子の日に商売繁盛を願って大黒天を祀る)の日に供される。図は、巨大な二股大根に首を挟んで担ぎあげている大黒天を描く。本図はフランスの作家・エドモ・ド・ゴンクールEdmond de Goncourtの旧蔵品という(『永田生慈北斎コレクション展図録』p195)

大黒に二股大根図(島県立美術館)



●扇面肉筆画「桔梗図」(文化7年～11年(1810～14)。紙本着色扇面一面。掛幅。北斎戴斗筆。印 ふもとのさと。55.6×26.8 北斎館蔵)



※扇を縦にして描いた図。二本の茎が長く上に伸び、その先端に蕾も含めて花が咲く。茎の根もと近くでも薄藍の花と白い花を咲かせている。

桔梗図(北斎館)

●扇面肉筆画「箱にもたれる美人図」(「芸者図」とも。文化5年～10年(1808～13)。紙本着色扇面一面。北斎画。印 辰 印 政。22.3×47.3 東京国立博物館蔵)

※団扇を持ったまま、大きな黒い箱(三味線箱か)に肘をついてもたれている美人。鶯の声を聞いている常套的なポーズという解説もある。

箱にもたれる美人図(部分：東京国立博物館)



●肉筆画「宝尽し図」(文化5年～10年：1808～13。紙本一幅。北斎。印 辰 印 政。37.0×25.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵)



※隠れ蓑を着、宝珠を転がし、鉤を背負い、隠れ笠(市女笠)を被るように、めでたいものを組み合わせて人物のように描く。蓑笠で災厄から身を隠し、鉤で宝の蔵を開け、宝珠で願いをかなえる事を象徴する。めでたい宝物を描くのを「宝尽し図」という(永田生慈『北斎クローズアップI』東京美術 p30)

宝尽し図(島根県立美術館)

●扇面肉筆画「布袋図」(文化5年～10年(1808～13)。紙本着色扇面一面。葛飾北斎筆。印 辰 印 政。23.0×48.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※身長より大きな袋の上で仰向けに太った腹を突き出して眠る布袋の図。

●肉筆画「布袋図」（文化 5 年～10 年〈1808～13〉。絹本着色一幅。葛飾北斎。印 亀毛蛇足。115.2×29.7 すみだ北斎美術館蔵）

※大きな袋に腰掛けて笛を吹く上半身裸の布袋の図。袋の側に墨摺の笹。図の上部の薄い墨摺りの山には、小さく一匹の鹿が描かれる。

布袋図（すみだ北斎美術館）

【為一翁は曲画を善す】

●肉筆画「逆筆布袋図」（文化 7 年～11 年〈1810～14〉。淡彩紙本一幅。戴斗逆筆。33.6×46.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「逆筆」とは、書道では一般的に「起筆における筆の入り方の一種で、進行方向とは反対の方向に筆を入れ、進行方向に対して穂先を押ししていくように軸をやや反対に傾ける気持ちで書くこと。軸ではなく毛の方を先行して書く方法」と説明される。但し、北斎がどのように描いたかは不明で、通常きよくがきの描く位置と逆の位置から、全て逆さかに筆を進める描き方をしたのかもしれない。曲描まがえの一種。

『浮世絵類考』（仲田勝之助編校 岩波文庫）には斎藤月岑の増補版の記述を載せている。

「伝いづくに曰、為一翁は曲画まがえを善す。（升玉ますたま子徳利ごどくり管ぼこすべて器財きざいに墨をつけて画をかく）、左筆さひつも妙たえなり、下より上へ書き上ぐる逆画さかえをかけり、中にも爪つめにて墨をすくひかく画は勝れて妙たえなり、筆にて画かきたるが如し、画えがく処をみざればその実じつをしるべからず」（p 147 ルビは筆者）



布袋が大きな袋に寄りかかるようにして、団扇うちわの柄で背中かを搔かいている。団扇に付けた布だけが薄朱色で、全体は薄墨色で描かれている。北斎は弘化元年（1844）にも「逆筆布袋図」を描いている。

逆筆布袋図（『真北斎展図録』より転載）

●錦絵『鳥羽絵集會』（「鳥羽絵集」とも。文化 8 年～11 年〈1811～13〉。横中判錦絵揃物。北斎画。山城屋藤右衛門の行事印。伊勢屋利兵衛版）

※全 21 図。現在 19 図が確認されているという（2018 年『江戸の戯画展』図録 P244）。

鳥羽絵は、鳥羽僧正とぶせうじょうの「鳥獸戯画ちようじゆうぎが」のような絵を指すが、一般的には江戸中期に京都で画かかれ始めた滑稽洒脱こっけいしやだつな絵を指している。手足が異常に長い人物が特徴。いくつかの絵は『軽筆鳥羽車けいひつとぶぐるま』（大岡春卜画おおおかしゅんぼくか。享保 5 年：1720。三卷一冊）からの影響が指摘されている。後年の『北斎漫画』に繋がる。



北斎より少し前に耳鳥齋（筆者注：大坂の浮世絵師。享和3年：1803没）が鳥羽絵を描いて評判を取ったが、北斎の鳥羽絵は余り評判とならなかった。また太った人物戯画を描いて「狂画葛飾振」と名づけたが、これも評判とならなかったという（『北斎美術館3美人画』p107）。

☆〈くつろぐ中間〉（22.6×16.5 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※中間三人が店の床几に腰掛け大あくびをしている。その内の一人は両手を挙げて背伸びしている。店の側の立看板には「鳥羽絵集會」と画題が記されている。

くつろぐ中間（「名品揃物浮世絵9 北斎II」パブリックドメイン美術館より）



☆〈久米仙人〉（22.7×16.8 島根県立美術館：永田コレクション）

※盥で洗濯をしている女の着物の裾を持ちあげようとしながら、空から逆様に落ちて来る久米仙人。持っていた軍配が手放されて空中に浮かんでいる。

☆〈道成寺〉（22.4×16.9 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※道成寺の釣鐘の下でおどけた格好の二人の小坊主。その前の格子門の外側に立つ娘。

☆〈助六の股をくぐる男〉（22.2×16.1 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※蛇の目傘を広げ、白い越中襷を前に垂らして足を広げる助六の股をくぐる脇差を差した男。

☆〈身づくろい〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※衝立のこちら側で、鏡の前に坐り長い髪をといてもらう女と、櫛をくわえてその女の髪をとく女。その脇でカミソリで顔を剃っている女がいる。

身づくろい（ベルギー王立美術歴史博物館）

〈出語り〉（22.9×16.9 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）



※三人の唄い方の男の声に合わせて、刀を落とし差しにした男と、膝をついて反り返って踊る女。「歌舞伎」で、竹本（義太夫語り）は、舞台上手の上の「床」と呼ばれる場所で御簾を下ろして演奏するのが一般的だが、特別に舞台に出て演奏することを「出語り」という。

出語り（ベルギー王立美術歴史博物館）

出語り（ベルギー王立美術歴史博物館）

☆〈お稽古〉（22.8×16.8 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※三味線を弾く女師匠の前で、扇子で拍子を取りながら唄の稽古をする男たち。壁には弟子の名を記した札が掛けられている。

お稽古 (ベルギー王立美術歴史博物館)

☆〈魚頭観音〉 (ベルギー王立美術歴史博物館蔵)



※鯛の頭も信心からの図。大きな魚の頭を拝む人たち。『軽筆鳥羽車』の影響あり。

魚頭観音 (ベルギー王立美術歴史博物館)

☆〈鉦叩き〉 (「戸塚宿」とも。22.4×16.9 ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※「戸塚宿 右かまくらみち」の表記のある道標の前で鉦叩きに銭を寄進する男たち。一人は銭縲(穴あき銭に紐を通して纏めたもの)を上を差し上げている。



☆〈見立礼拝〉 (ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※結跏趺坐の形に坐る女を仏像に見立て、盆の上に塩を盛り、数珠を持って有難く礼拝する男たち。賽銭に見立てた銭やおひねりが置かれている。

☆〈転ぶ駕籠舁〉 (22.7×16.8 ベルギー王立美術歴史博物館/中右コレクション蔵)

※前の駕籠かきが柱にぶつかりバランスを崩し、後ろの駕籠かきが転び、傾いた駕籠の客侍が落ちそうになっている。

転ぶ駕籠 舁き (「名品揃物浮世絵9 北斎II」パブリック・メイン美術館より)



☆〈柱くぐり〉 (「胎内くぐり」とも。22.9×16.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵)



※柱くぐりは、柱の穴などを潜り、蘇生を願う禊祓などの信仰。図は、踏み台になっている男の背に足を掛けて大柱の穴を潜り抜けようとしている男が、うまく抜けられなくなっている様子を描く。傍らでは同行の男があきれ顔で立っている。

柱くぐり (「名品揃物浮世絵9 北斎II」パブリック・メイン美術館より)

☆〈川渡し〉 (23.1×16.8 ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※太った女を背負って川を渡る人足と、それを肩で後押しする人足。その向こうでは、荷物を肩に担いで川を渡る人足。

川渡し (「名品揃物浮世絵9 北斎II」パブリック・メイン美術館より)



☆〈夫婦の団欒〉 (「一家の団欒」とも。22.8×16.7 ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※「鳥羽」と大書した屏風に着物が掛かり、その前に布団が畳んである。それを背にして、行燈の陰から顔をのぞかせる子を両膝を抱えて楽しそうに見ている夫婦。

☆〈酒盛り〉（「酒宴」とも。22.7×16.8 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）



※刺身の皿を前にして酒盛りをしている三人の男。女房が茶碗で辛子を懸命に練っている。男の一人は辛子が効いたのか、鼻をつまんでいる。周りには、伊勢屋利兵衛の定紋が記された三本の徳利と「鳥羽」と書かれた屏風がある。

酒盛り（ベルギー王立美術歴史博物館）

☆〈門付の瞽女〉（22.6×16.8 ベルギー王立美術歴史博物館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※伊勢屋利兵衛の、山形に「林」の伊勢屋の定紋のある店先で、三味線を持つ二人と、杖を突いて歌う瞽女たち。側では犬が吠えている。

☆〈喧嘩〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※上半身裸の女の髪を引っ張り、棒で叩こうとする男を止めに入る二人の男。後ろでうろたえている男は間男か。床には茶碗が割れて転がっている。

●錦絵『風流おどけ百句』（文化8年～11年〈1811～14〉。滑稽な画で描かれる。横小判淡彩。北斎画。伊勢屋利兵衛版）

※現在39図報告されているという（2018年『江戸の戯画展』図録p245）。

謎かけのある絵を分類し『謎かけ戯画集』として別本とする説が有力だが、画集や所蔵館によっては、両本を区別せず『風流おどけ百句』に全ての絵を所収しているものもある。全何図かは不明だが、題名から100句が予定されていたか。

☆〈井戸替〉（11.5×17.4 北斎館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※井戸の底の泥などを汲み出す網を滑車を使って引き揚げる二人の男と、井戸に垂らした網を両手で操る男。狂句「井戸替えに下女くれぐれも銀ながし」は、井戸に落とした銀流しの簪などもくれぐれも探してほしいの意。「銀流し」は、水銀に砥粉を混ぜて金属に擦りつけて銀色に仕上げ、装身具に利用した。はがれやすいところから、見かけだおしの意味でも用いる。

☆〈かたつむり〉（11.5×17.5 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※巨大な蝸牛を「色」の字が記されている提灯を差し出して恐る恐る見ている男。側で独鈷の杖を立てて眺めている男。文化7年の『己痴羣夢多字尽』にも同様の絵がある。狂句はない。

☆〈あんまとり〉（11.8×17.5 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※按摩に頭を揉ませる男。その男に煙管を差し出す宿の女。「盃を手渡しにするあん満と里」

あんまとり (www//osaka-art-museum.jp

より)

☆〈御慶〉 (大英博物館蔵)



※正月の酒宴の後、泥酔して歩けない袴姿の侍が供の男に腰を支えられ、もう一人の小奴が前で支えられながら門松に向けて挨拶している。

「酒呑ハ御慶に節をつけている」。「御慶」は祝いの挨拶のこと。

「酒呑ハ御慶に節をつけている」。「御慶」は祝いの挨拶のこと。

御慶 (大英博物館)



☆〈むかい酒〉 (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※手足の長い男女が向かい酒をする図。亭主が女房に酒徳利を差し出している。「一升の女房ねがふむかい酒」

☆〈若い信女〉 (〈つつはらみ〉とも。11.5×16.4 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※「信女」とは、仏教で、五戒を受けた在家の女性の信者。優婆夷とも。着物をはだけ、孕んだ腹を突き出している女のまえで、両手を突き出して驚いている男。「とんだ事若いしん女がつつばらみ」

つつばらみ (島根県立美術館)



☆〈妊婦〉 (11.4×17.3 北斎館蔵)

※大きな腹に腹帯をした妊婦が悲しそうに右袖を顔に当てて座っている。側で老婆が長煙管を持って妊婦を見ている。呆れたような、困った様な表情で額に手を当ててのけぞっている男もいる。「其様に誰にされたと下女がやど」。

☆〈いくじなし〉 (〈夫婦〉とも。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※搦り鉢ごと回して搦っている胸のはだけた女を、後ろで煙管を持って笑いながら見ている男。「搦り鉢をおつけまわすいくぢなし」

いくじなし (島根県立美術館)



☆〈瓜の皮〉（11.0×16.9 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）



※莫座の上に瓜を並べて売る男。側で買った瓜を丸ごと食べている男。その前ですべて仰向けにひっくり変えている男。「炎天にすべるをみれば瓜の皮」
瓜の皮（すみだ北斎美術館）

☆〈玉簾〉（〈まっばだか〉とも。11.5×17.4 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※向こうむきで裸で三味線を弾く男。その横で、台本を見て禪一枚で浄瑠璃を歌う男。「玉簾の内にぞゆかしきまっばだか」



玉簾（www/osaka-art-museum.jp より）

☆〈天竺浪人〉

※天竺浪人とは、住所不定の浮浪人のこと。図は、雲に乗る浪人と二人の中間（実は雲助）。

☆〈皮きり〉（〈見せられず〉とも。島根県立美術館：永田コレクション蔵）



※女に灸を据えられる男の情けない表情。「皮きり」とは、最初に据えるお灸のこと。「皮切りの顔わ女にみせられず」

皮きり（島根県立美術館）

☆〈ひざがしら〉

※髪結いに髪を整えさせる男と鏡を見る男。

☆〈芋〉（〈大つくね芋おろし〉とも。島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館蔵）

※巨大なおろし金で巨大な山芋を男が二人がかりで擦りおろしている。側では、擦られた芋に足を取られて仰向けに転んでいる男がいる。「とや切らん斯や切らんとつくね芋」

芋（大英博物館：Snorql for Japan Search より）



☆〈下手のまり〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※男が鞆を蹴り上げたが、履いていた右足の草履が脱げ、鞆は侍の顔に当たっている。二人の間で小奴が驚いて両手を上げている。「下手のまりはやくよこせとせがまれる」

☆〈万能膏〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※「紅毛伝法 万能膏」と大書きした衝立の前に、ひっくり返って足を上げ、万能膏の入った鍋を引っ掛けている男。火鉢の前では両手を差し出して驚いている女。「馬鹿なげが万能膏で焼けどなり」とあり、何にでも効くという万能膏をつけたら、かえってやけどになったの意。

☆〈夜鷹に旦那〉（すみだ北斎美術館）

※材木の立てられている側で手拭を被った夜鷹が、通りすぎようとする男の着物を引っ張って呼び込もうとしている。夜鷹の足元には、煙管を銜え巾着を手にした男がしゃがみこんでいる。「商売に武士つき合と夜鷹いゝ」

☆〈きつねつき〉（すみだ北斎美術館）

※男が膝をついて鉦と数珠を持って囃している前で男が狐憑きになったように足と腕を振り上げて踊っている。「きつねつききぬけのされてつねのひと」

☆〈いやな下女〉（すみだ北斎美術館蔵）

※下女が二人、朝の化粧をしている。一人はお歯黒をしている最中で、もう一人はひざまず跪いて鏡の前で化粧をしている。下品な額つくりをしているので上品な富士額ならぬ浅間額になっているというもの。「いやな下女あさま浅間びたひにつくるなり」

☆〈にくみ口〉（大英博物館蔵）

※女房が座敷ぼうき箒を抱えて夫らしき男を部屋から掃き出そうとしている。男は仰向けになって股の間から両手を出して手を合わせている。脇には化粧箱が倒れ櫛が転がり出ている。「にくみ口はき出すやつやつく(?)しゅろぼうき箒」。しゅろ箒は、棕櫚の葉を束ねて作った箒。

にくみ口（大英博物館）



☆〈編み笠の男と奴二人〉（すみだ北斎美術館蔵）

※編み笠を被った侍が手にした扇の先を土下座する二人の奴に向けて何か言っている。狂句はなし。

☆〈やすもの〉（すみだ北斎美術館蔵）

※太鼓腹の男が飯を食べている。その側で女房が空になったお櫃を持って立っている。「やすものゝめしうしないは喰いぬけ」。

☆〈乳母こまり〉（すみだ北斎美術館蔵）

※乳母の背中の子どもを風車であやす男。座ってそれを見ている子ども。「朝はどうからお智徳不能乳母こまり」。

☆〈縛られる泥棒〉（すみだ北斎美術館蔵）

※藁笠を被った泥棒が盗んだ着物を抱えて逃げようとするが、蒲団にくつき跪きながら泥棒の禪の先を掴んで逃がさないように引っ張っている亭主。その側で、何も気づかない女房が灯りに火をつけようとしている。「泥棒もしばって置けば咄する」。

☆〈評判の悪さ〉（すみだ北斎美術館蔵）

※旨をはだけて開いた手紙を持ち、片方の長煙管を下女に差し向けている女房。ひざまず跪く下女は袖を顔に当てながら右手で女房の持つ手紙を指さしている。「評判のわるさ女房と下女が論」。

☆〈糸目〉（すみだ北斎美術館蔵）

※太い尻糸を引っ張っている男。その下の糸を寝転びながら引っ張る男。側で子どもが尻を見上げているが尻は描かれない。「貧ながき糸目をもって呵しかられる」。

☆〈不承知ぶしょうち〉（すみだ北斎美術館蔵）



※枕屏風の脇に蒲団の敷いてある部屋で、立ち上がった下女の寝間着の紐を引っ張って言い寄る男。下女は頭に二本の人差し指を立てて拒否をしている。

「不承知な下女はひたいに二本あて」

不承知（すみだ北斎美術館）

☆〈色事いろごと〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

☆〈武道ぶどう道〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

☆〈月見つきみ〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※三人の男が部屋で食べ物の皿の周りに車座になって酒宴をしている。

☆〈頼朝よりとも〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

☆〈唐崎のまつからさきのみつ〉（中右コレクション蔵）

●錦絵『謎かけ戯画集』（文化8年～11年〈1811～13〉）。謎かけの内容なので『風流おどけ百句』と分ける傾向がある。。32図が確認されているという。横小判。各平均 11.5×17.5 着色。北斎画。伊勢屋利兵衛版）。『新北斎展図録』では、文政元年～天保2年（1818～31）としている。（一部、謎かけ不明あり）

☆〈おあしが八本おあしはちほん〉（島根県立美術館：永田コレクション/名古屋テレビ放送）

※「算盤不能（たご）とかけて三貫二百文ととく 心ハおあしが八本」

大蝸が座布団に座って頭の布にの足を当て、他の足で算盤を持って玉を弾いている。膝の前に紐に通した銭が八本置かれている。その前で小僧の蝸が盆に乗せた茶碗を差し出している。

☆〈下手の将棋へたのしょうぎ〉（島根県立美術館：永田コレクション）

※「かみなり雷とかけて下手将棋ととく、心ハ●●ニで逃にげる」（新北斎展図録）



雷に驚いて、将棋盤をひっくり返してのけぞって怖がる三人の男。

下手の将棋（島根県立美術館）

☆〈下手の鞠へたのまり〉（ベルリン東洋美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※二人のやせた男が鞠を蹴っているが、鞠に当たらず下にある（謎かけ不明）。

☆〈下手な碁へたな碁〉（名古屋テレビ放送/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「下手な碁とかけてよい娘ととく 心ハ誰も一もくおしたがる」

男と碁を打つ娘を見つめる男の図。

☆〈鍋の中〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「鍋の中の氷とかけてなぞときの坊主 心ハかければとける」

囲炉裏に掛けた鍋が沸騰し、女と男が驚いてのけぞっている。

☆〈手習子〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「手習子とかけて田植ととく 心ハきじ●●戻る」（新北斎展図録）

三人の子ども。一人は傘を広げて向こう向きにしゃがんでいる。下駄の足だけが見える。一人は風呂敷の荷物を持ち上げている。一人は蛇腹状の紙束を広げている。

☆〈ばばさまの小言〉（名古屋テレビ放送蔵）

※「ばばさまの小言とかけて九月卅日ととく 心ハ秋はてた」

孫に肩を叩かせながら、嫁に小言を言っているばばさまの図。 ばばさまの小言（名古屋テレビ放送）



☆〈桂馬〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※「桂馬とかけてのみととく 心ハはねだしてとらるゝ」

枕のある部屋で、上半身裸の夫婦らしき男女が、畳の上や着物に出てきた蚤を潰そうとしている。

☆〈孕んだ男〉（すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/名古屋テレビ放送蔵）

※「孕んだ男とかけて落た青梅ととく 心ハうむ事がならぬ」

孕んで大きくなった裸の腹を突き出して座る男の前で、ばばさまが腕を組んで困った顔つきをしている。その間にうつ伏して僧侶が頭を抱えている。

孕んだ男（すみだ北斎美術館）



☆〈鬼ころし〉（〈金時〉とも。名古屋テレビ放送蔵）

※「金時とかけて地酒ととく 心は鬼ころし」

恐ろしい形相で片膝を立てた金時が、面前でしゃがんでいる鬼を見ている。

☆〈囲炉裏端〉（〈鍋の中の氷〉とも。名古屋テレビ放送蔵）

※「鍋の中の氷とかけてなぞときの坊主ととく 心はかければとける」

囲炉裏にかけた鍋が噴きこぼれ、囲炉裏端にいた向かい合わせの男女が驚いてのけぞっている。

☆〈本蔵が娘〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※「本蔵が娘とかけてさいの河原ととく 心は大石こいし」

本蔵とは、「仮名手本忠臣蔵」に登場する加古川本蔵で、その娘小浪は大星由良之助（大石内蔵助）の息子大石力弥と許婚の仲である。図は、白無垢の着物に白の綿帽子を被った娘が、右袖を目に当て泣いている。その前で両手両膝をついて慰めている母親。

☆〈雷〉（〈一の富〉とも。名古屋テレビ放送蔵）

※「一の富とかけて雷ととく 心はどこへ落るともしれぬ」

雷に驚き、蚊帳から出て耳をふさいで怖がる娘と年増。

☆〈陰乱男〉（〈秋口の蛇〉とも。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/名古屋テレビ放送蔵）

※「陰乱の男とかけて秋口の蛇ととく 心は穴計見付て歩行」

蔵の土台に開けられた鼠除けと空気通しの穴を、箒と塵とりを放り出して、腰をかがめて覗く二人の掃除人。

☆〈茶碗拍子〉（〈月夜鳥〉とも。名古屋テレビ放送蔵）

※「月夜鳥とかけて茶碗ひやうしのいたことととく 心はうかれて出る」

三味線の女師匠の前で、茶碗を箸で叩いて拍子をとる男と、その隣で手踊りをする男。

☆〈鑄かけ〉（名古屋テレビ放送蔵）

※「鼠猫鳥とかけて鍋釜鑄かけととく 心はちっふうかあ」

寺の釣鐘が下に横に置かれ、その前で僧侶が台に腰掛けて鑄掛屋に話しかけている。鑄掛屋はどうしたものかという顔をしている。

鑄かけ（ボストン美術館）



☆〈五合徳利〉（〈馬鹿〉とも。名古屋テレビ放送蔵）

※「馬鹿とかけて五合徳利ととく 心は一せう（一生・一升）つまらぬ」

太った芸者が長煙管で煙草を吸っている。その横で三味線を膝にして、頭の右側で結ぶ馬鹿鉢巻をして、うれしそうに芸者を見ている男。脇に徳利が転がっている。

☆〈唐辛子〉（名古屋テレビ放送蔵）

※「唐辛子とかけて秘蔵娘ととく 心は色づくほどきびしくなる」

図は、食事をした男があまりの辛さに、皿の唐辛子を指差して顔をゆがめている。それを見て笑う芸者の姿。

☆〈鰻〉（ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※「鰻とかけて儘ならぬ恋路ととく 心ハさかれてのちに身をこがす」

大きな魚籠から逃げ出した大鰻を両手で捕まえようとしている男と、その様子を驚いて見ている男。

鰻（ベルギー王立美術歴史博物館）



☆〈湯屋の桶〉（すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「湯屋の桶とかけて年男ととく 心ハ明を尋る」

☆〈両国の名物〉（名古屋テレビ放送/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「唐寄のまつとかけて両国の名物ととく ころろはいくよ久しい」

遊女に肩を叩かせ、胡坐をかいて薬缶から椀に茶を注いでいる男の前で、牡丹餅を食べ
ている小奴。

☆〈江戸子〉（〈呉服屋の商〉とも。島根県立美術館：永田コレクション/名古屋テレビ放送蔵）
「江戸子とかけて呉服屋の商 ととく 心はちつとでもまけねへ」

上半身裸の二人の男が胡座を組んで酒宴の様子。脇に大徳利と鶴徳利があり、一本が転
がっている。男の背後に伊勢屋の定紋が描かれた書き付けの紙が広げられている。

●錦絵『狂句入り戯画』（文化 11 年～15 〈1814～18〉。「風流おどけ百句」に似ているが、
全て無款で画題がない。横小判淡彩錦絵）

※天保元年～5 年 〈1830～34〉にも「狂句入り戯画」がある。

☆〈悪い酒〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※菰を巻いた大樽酒の前で泥酔した男の腕を肩に回して連れて行く男。「悪い酒くだを巻
いたりからんだり」とある。

☆〈刎つるべ〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※井戸から水を汲む男と、桶の柄を片手で持つ太った女。「汲分けて御らんと下女の刎つ
るべ」とある。

☆〈桶や〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※横になった籬の外れた大きな桶に手を掛け、空を見上げる桶やの男。遠くで槌を放り出
してひっくり返る男がいる。「井戸がハの中から桶や空を見る」とある。

☆〈下女ヒンビン〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※桶に入っている瓜を取り出して男に向かって投げつける胸もあらわな女。落書きの相合
い傘に「長松/おはん いろくぐ」と書かれている。「御馬なき（？）下女ヒンビンとはね
つける」とある。

☆〈薬研形〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※前をはだけた半裸の太った女の前で、薬研で薬をひいている男。「薬研形 たを拵へ
る道具也」とある。

☆〈嘘の川〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※煙管を銜えてほらを吹いているような男と、その前で包丁を研いでいる男。「嘘の川
一夜ぐに深くなり」とある。

●肉筆画「注連縄に鶏の絵馬図」（文化 4 年～10 年 〈1807～13〉。紙本着色一幅。北斎
画。花押。25.0×32.5 誓教寺蔵）

※薄紅で描かれた注連縄に寄せ掛けられた雄
鶏が描かれた絵馬。焉馬名が記される。

●錦絵「浅草観音雷神門」（文化元年～10 年
〈1804～13〉。横大判着色。北斎画。版元不
明。国立国会図書館蔵）

浅草観音雷神門（国立国会図書館）



※いわゆる「新板浮絵」風な描法だが、その表題はなし。大提灯の掛かる雷門が図の右に描かれ、その前の広場に往来する人々が小さく描かれる。図の左には火の見櫓の先に浅草寺近くの本願寺本殿の大屋根が見える。

●肉筆画「**墨堤三美人**」(文化6年~10年〈1809~13〉)。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印 亀毛蛇足。52.9×114.7 嵯峨嵐山福田美術館蔵)

※隅田川に涼を求めに来た女性たち。一人は手拭を被り裾を端折って、**箆**で浅瀬の魚を獲ろうとしている。堤の縁台に、絹の着物の二人の女性のうち、若い娘がその様子を楽しげに見ている。眉を剃った**年増**は、片膝を立てて煙管を手にしている。画面上に、風にそよぐ柳の葉が描かれている。



墨堤三美人 (嵯峨嵐山福田美術館)

●肉筆画「**五美人図**」(文化5年~10年〈1808~13〉)。横長絵。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印 亀毛蛇足。40.8×78.9 細見美術館蔵)



五美人図 (細見美術館)

※二人の婦人が反物に物差しを当てて広げ、裁断しようとしているのか。下に鋏が置かれている。側で娘が様子を見ている。近くで黒の羽織の女将が長い煙管をくわえて、そ

の隣で座っているもう一人の女と何かを話している。賛に「画中群女 顔催 靨 画外一夫 口出涎 君かため目に正月はしたれ共 こゝろに起す 盆々煩惱 能舞亭三鞠題」とある(読み下し・ルビは筆者)

●肉筆画「**五美人図**」(文化元年~10年〈1804~13〉)。縦絵。絹本着色一幅。葛飾北斎画。86.4×34.3 シアトル美術館蔵)

※上から、筆をくわえて手紙を書く武家の奥方、鉢の花に水をやる町娘、外出姿の黒い着物の御殿女中、鮮やかな色の着物を着た花魁、本を読む町人の女房が描かれる。 五美人図 (シアトル美術館)

●扇面肉筆画「**縁台の三美人図**」(文化5年~10年。紙本着色扇一本。葛飾北斎筆。印 亀毛蛇足。18.7×47.0 太田記念美術館蔵)



※三人の婦人や娘が。花で飾られ、山水画が描かれた箱行灯が吊るされた縁先に敷かれた赤い毛氈の上で涼をとっている。



縁台の三美人図 (太田記念美術館)



右 (部分拡大)

●肉筆画「立美人図」(文化7年～8年〈1810～11〉)。縦長絹本一幅。葛飾北斎筆。印雷震。82.3×30.6 フリーア美術館蔵



※紗の打掛を背中を抜いて羽織り、赤と茶色地で片輪車と呼ばれる文様の帯をしめ、白地の扇子を広げて小首をかしげる遊女。髷の前と元結いには赤い飾り布がある。赤草色の襦袢の襟をチリチリに描くのはこの頃の北斎の特徴とされる。



※落款の「葛飾北斎」に続く字は「画」とされるので、「葛飾北斎筆」とあることから、北斎自筆か疑うむきもある。
立美人図 (フリーア美術館 : amazon.co.jp より)

●肉筆画「美人夏姿図」(文化3年～10年。掛幅。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。85.3×29.4 個人蔵)

※弓なりに体をひねって、白いしごき帯を締める女の図。首を極端に傾けて立っている。薄い着物の下に透けて見える紅色の下着が淡く描かれる。典型的な宗理型美人図。

美人夏姿 (obikake.com より転載)

●肉筆画「雉子図」(文化5年～10年。絹本着色一幅。北斎画。印亀毛蛇足。32.1×55.4 MOA美術館蔵)



※薄墨で描かれた薺の葉に真直ぐ伸びた尾を乗せるようにして、首を背の方に向けている雉子。目の周りの赤色や、首から背にかけて緑から青のグラデーションが印象的。



雉子図 (MOA美術館 : 『2005 北斎展図録』より転載)

●肉筆画「柿本人麿呂図」(文化元年～2年 : 1804～05。紙本一幅。画狂人北斎画。印辰印政。34.7×44.4 エドアルド・キオッツオーネ記念ジェノヴァ東洋美術館蔵)

※赤い軸筆を持ち、折れ烏帽子を被り、肩膝をついて和歌の構想を練っている姿。足元に赤い台に乗せられた硯が置かれている。

●肉筆画「化粧美人図」（「けわいびじんず」とも。文化7年～8年〈1810～11〉。文化10年頃説あり〈井上和雄『北斎』〉。絹本着色一幅。葛飾北斎。印 亀毛蛇足。95・7×33・2 城西大学水田美術館蔵）



※脇の黒塗りの鏡台に左肘を掛けたまま柄鏡を手にして、右手に化粧筆を持っている女の図。衣桁には帯が掛けられ、女の前には鏡の蓋があり、その上に鼈甲の簪が置かれている。

化粧美人図（城西大学水田美術館）

※享和元年～文化元年〈1801～04〉に描かれた「化粧美人図」（MOA美術館蔵）の絵とは別のもの。宗理美人と違い若干ふくよかな顔つきである。

●肉筆画「羅漢図」（文化7年～14年〈1810～17〉。紙本墨画淡彩一幅。北斎戴斗筆。印 ふもとのさと。100×41・5 東京国立博物館蔵）

※この図と同様のものが『北斎漫画』二編に、半諾迦尊者が掲げた鉢から出る煙の中に龍が描かれているので、それを描いたといわれるが、鉢を掲げて毒龍を制する伐那婆斯尊者ではないかという説

もある。『北斎漫画』では、半諾迦尊者と並んで伐那婆斯尊者が描かれているが、こちらは座って煙の中の龍を見ている。同画題の「羅漢図」は弘化3年（1846）にもある。

（東京国立博物館）



羅漢図

●掛幅肉筆画「野人对瓶花」（文化6年～10年〈1809～13〉。紙本着色。掛幅。画狂老人北斎筆。印 一人人形。113.5×49.0 北斎館蔵）



※腰に蓑をつけた農夫が、地面に座り岩の上に置かれた破れ鍋に生けられた白牡丹を見上げている図。

野人对瓶花（北斎館）

※「牡丹鍋と男」（文政元年～4年〈1818～21〉紙本着色一面。もと掛幅。北斎改葛飾為一筆。印 葛しか。127.3×54.5 フリーア美術館蔵 『2005 北斎展図録』 p 36 所収）と同一画であるが、制作年・落款・印・寸法・所蔵館が違うので、検討を要する。

●扇面画「芋の図」（文化7年～11年〈1810～14〉。扇面着色一面。北斎戴斗。印 辰印政。17.5×48.5 個人蔵）

※長芋を扇の右下から左上に描き、図右に里芋を二つ描く。北斎自賛「鱈となりてまつたからんより屁となりてわらひを催すべし」、浅草庵市人の賛「謡はず舞はず狂歌よみ芋の煮るも知らぬたのしさ」がある。



芋図（『2019 新北斎展図録』より転載）

●肉筆画「舟まんじゅう図」（文化 11 年～15 年〈1814～18〉）。絹本着色一幅。北斎画。

印辰印政 24.0×30.0 個人蔵

※夕暮れから箱崎辺りや、日本橋浜町河岸に、大きめの泊り船の近くで小舟を漂わせ、客を取った私娼。天明の頃、隅田川の船中で饅頭を売るのが表向きにしていたのでこう呼ばれる。32文（約800円）であつたらしい。船虫、船君、船狐とも呼ばれた。『色里名所鑑』

（安永年間）には「船饅頭といふ浮草あり、少しの古石場の上に横根さし、（略）花の数は三十二に極まる、入相の頃より中洲箱崎の辺に多く漂ふ、また所々泊り船のほとりをちらちら流れありて」とある（「ウイキペディア」より）。

※小舟の上で、御高祖頭巾を被り、火鉢を足で挟んで、籠にもたれてうつろなまなざしで暖をとる女。背後の籠には正月飾りのウラジロが入れられている。



舟まんじゅう図（2012年大阪市立美術館『北斎一風景・美人・奇想 一』展図録より転載）

●肉筆画「雪中傘持ち美人図」（「雪中美人図」とも。文化 10 年～文政 2 年〈1813～19〉）。

絹本着色一幅。前北斎戴斗筆。印ふしのやま 99.5×34.7 個人蔵

※太田南畝（蜀山人）の賛「たおやめの あたゝか さうに見えたるハ 空に しられぬ雪の はたえ（肌）か」



※雪中に客を迎える花魁の姿ともいわれるが、そのような迎えを花魁はしないともいわれる。宗理風美人から抜けて、ふっくらした顔立ちの美人図となっている。

※本図は「大坂三越呉服店肉筆浮世絵展」（大正 8 年：1919）に「雪中少婦の図」名で出品され、図録（大正 9 年：1920）によれば、「松江・桑原羊次郎氏所蔵」となっている。

雪中傘持ち美人図（個人蔵 2005年『北斎展』図録より転載）

●肉筆画「浅妻舟」（文化元年～10 年〈1804～13〉）。紙本着色一幅。北斎。印亀毛蛇足。84.0×26.5 光ミュージアム蔵

※金の烏帽子に水干姿で白拍子姿の女性が鼓を足元にして、琵琶湖に浮かぶ小舟の中で遠くを眺めながら浪にたゆたう図。朝妻舟は琵琶湖の朝妻と大津間の渡し船の名称だが、都落ちした平家の女房が船上で春を

売った柳の下の舟として描いている。藍亭青藍の賛「人夜かふねに あふみちの あさつまやめは ふかくならぬひとのちに ふの名たふれやなれにしこの山嵐に ねみたれ髪かみの 柳かけ つなつなかぬふねの うきてよにつひのよるへは いさや かはいさ しらすちも こゑそへて うつや つゝみの うつゝたふや」が図の上部に記される。

浅妻舟（光ミュージアム）



●肉筆画「大竜巻図」(文化 11 年～文政 4 年〈1806～21〉)。絹本淡彩一幅。葛飾戴斗筆。印不明(ふしのやま?) 北斎館蔵)



※竜巻の中心の目を通して地上を見ているのか、天空を見上げているのか。常識を超えた視点による図。

大竜巻図(北斎館)

●扇面画「なまこ図」(文化 11 年～文政 2 年〈1814～19〉)。紙本彩色扇一面。北斎改戴斗筆。印ふしのやま(永田生慈北斎コレクション展図録による)。20.4×43.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※扇に二匹のなまこだけを明清画風に描く。骨組みの扇に直接描いたものと思われる。なまこの表面は、付立(日本画で、筆に含ませた水と絵の具の加減で濃淡の効果を出すために、輪郭線を描かず、筆の腹で描く)の点苔(苔のように点を要所に打つ描法)で描かれる。



なまこ図(島根県立美術館)

●肉筆画「読簡美人」(文化年間〈1804～19〉)。縦画一幅。総州葛飾郷前北斎戴斗筆。印不明)。

※「大坂三越呉服店肉筆浮世絵展」(大正 8 年)の図録(大正 9 年)によれば、「京都広岡伊兵衛氏所蔵」となっている。

※首をかしげて巻手紙を読む女。手紙の端は女の右に垂れている。眉を剃っているので既婚の女か。袖からは肘まで出ている。着物の裾からは右足首が出ている。中着の襟と袖はチリチリが強調される。

●画稿「花魁図」(文化 11 年～文政 2 年〈1814～19〉)。無款。114.2×54.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※墨画稿で、6枚の紙を貼り合わせて描かれる。多くの簪を差し、顔が着物の襟に埋もれるかのように首を前に傾けて歩いている花魁図。花魁特有の三齒の下駄の歯が見えていて、足を踏み出した直後の姿となっている。前帯の亀甲模様や、打掛の花模様など細密に描かれる。完成された作品は発見されていないという。

花魁図画稿（島根県立美術館）



●錦絵「雪の隅田川」（文化年間〈1804～18〉）。横大判。北斎旅中画。24.9×38.0 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※午前の隅田川に二艘の船。遠くに一艘の船も見える。右下に一羽の鴨が泳ぐ図。

●錦絵「桜花」（文化年間〈1804～18〉）。横中判。かつしか北斎。18.8×24.2 ギメ美術館）

●提灯絵肉筆画「龍虎」（文化年間〈1804～18〉）。無款。40.6×30.5）



※墨摺風の地に龍虎が睨み合っている図が描かれる。提灯の上部に

稲妻が朱色で横に引かれている。龍虎（ビゲロー・コレクション：muian.com 及び 令始ブログより転載）

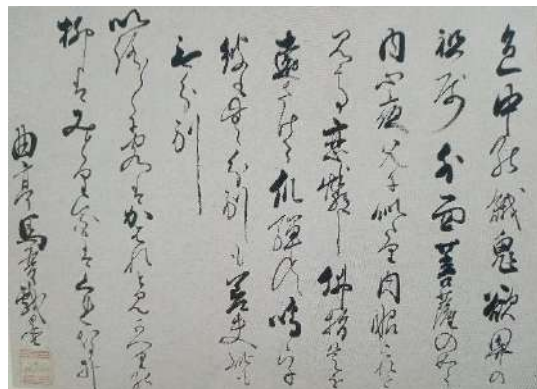
●肉筆画「桜花海浜図」（文化7年～文政2年〈1810～19〉）。絹本淡彩一幅。前北斎戴斗筆。印葛しか。91.3×32.7 岡田美術館蔵）

※緑の葉繁る木々の幹に桜の花が咲き、遠景には小さく舟が胡粉で描かれる。図の上部は空が薄青く広がっている。

●肉筆画「美人図・賛」（文化11年～文政4年〈1814～21〉）。紙本淡彩一幅。前北斎筆。印辰印政。美人図 25.7×26.7 賛 26.8×36.2 個人蔵）

美人図・賛（『2007 北斎展図録』より転載）

右：馬琴の賛



※全体に淡い墨絵風で、横座りの女の点描模様の帯と髻の結綿には藍色

を用い、襦袢と髪飾りには赤が使われる。着物の枠は取らず、筆を摺るように描く。曲亭

馬琴の賛の後半には「いろくに客はかはれど見かへりの 柳はみどり花はくれない」とある。

●肉筆画「鮫鱈図」(文化元年～文化10年〈1804～13〉。絹本着色一幅。北斎画。印 亀毛蛇足。30.5×55.5 すみだ北斎美術館蔵)

※箆に敷いた笹の葉の上に、腹を上にして置かれた鮫鱈を見るように見開いた大きな目と全身の点苔が生々しい。



鮫鱈図(すみだ北斎美術館)

●掛幅肉筆画「新年の行事図」(「新年風俗図」とも。文化3年～8年〈1806～1811〉。絹本着色。掛幅二幅。「若水の用意」と「初夢」の対。北斎画(花押)。115.8×44.2 フリーア美術館)

☆〈若水の用意〉(〈朝化粧〉とも)

※ねずみ色の着物を着ている遊女が、漆塗りで蒔絵の湯桶を持って、朱塗りの三方に乗せた青白磁の椀に若水を入れようとしている。椀の脇には杓が入れ物の上に乗せられている。三方の脇には湯桶の蓋が紙の上に置かれている。図左の衣桁には着物が掛けられている。



☆〈初夢〉

※髷の前と元結いに赤い飾り布を付けた遊女が首を直角に曲げ、坐って宝船の絵を見ている。膝の上で蒔絵の箱枕に敷く髪油除けの紙を巻きながら、初夢の用意をしている。背後には屏風が立てられ、黒い着物が掛けてある。

新年の行事図(フリーア美術館; 綴プロジェクト複製)

左図: 若水の用意 右図: 初夢

●肉筆画「茶筌売図」(文化5年～10年〈1808～13〉。紙本一幅。墨摺淡彩。不染居北斎画。印 辰政。46.1×23.6 島根県立美術館: 永田コレクション蔵)

※墨染の衣が風に靡き、白い頭巾を被り袈裟をまとった茶筌売り。茶筌は、正月の初釜用に売られた。棒の先の藁苞に挿した茶筌を担いで、歯を見せてこちらを見ている。全体に墨絵風に刷毛を使って描いた趣の画。

茶筌売り図(島根県立美術館)



●肉筆画「茶筌売図」(文化7年～8年〈1810～11〉。紙本着色一幅。北斎戴斗筆。印 雷震。島根県立美術館: 永田コレクション蔵)



※墨をさっと引いて描く墨染の着物。長い棒の先の藁包わらづとに挿した茶笥。図の上には月の下半月が薄く描かれる。「茶笥売図」(扇面)は文化14年にもある。

茶笥売図(島根県立美術館)

●扇画「物想う美人」(文化6年～10年〈1809～13〉)。紙本着色扇一本。北斎画。17.9×46.5。太田記念美術館蔵)

※首をかしげ両手を合わせ、座って何かを想う女。藍色の波模様の帯が印象的。

●肉筆屏風絵「屏風七小町図」(文化4年～10年〈1807～13〉)。紙本着色。八曲一隻屏風。北斎改戴斗。印亀毛蛇足。各62.5×45.5(第二扇～第七扇)。62.5×42.5(第一扇)。北斎館蔵)。

※小野小町を扱った能の「七小町」に基づいた七図。享和2年頃にも「七小町」(画狂人北斎画)がある。文化10年(1813)4月25日に「亀毛蛇足」の印を弟子の北明に譲っているの、それ以前の作と思われる。八曲の屏風だが図は七図。小野小町の一生の伝説を描いている。第一扇は、六樹園雅望(石川雅望)の詞書。それに続いて右から、

☆〈雨乞小町〉

※白無垢の着物に蓑を着て、右手に雨乞いの起請文おまごを台に乗せ持ち上げる小町。長い髪が蓑の流れる線描と同化している。

雨乞小町(1図)



☆〈草子洗小町〉



※着物を脱ぎ、下着姿の小町が草子くさこを洗い鉢で丁寧に汚れを落としている。

草子洗小町(2図)

☆〈鸚鵡小町〉

※百歳の老婆になった小町を帝が憐れみ「雲の上はありし昔にかわらねど見し玉だれの内やゆかしき」の歌を贈ったところ、彼女は「内ぞゆかしき」と一文字だけ変えて、鸚鵡返しに返歌したという話に由来する。但し、図では若い小町が、赤い襦袢じゆばんに白無垢の着物を着て首をかしげて座っている。周りには桜の花弁が舞っている。

鸚鵡小町(3図)



☆〈清水小町〉

※小野小町が清水寺に参詣した折に、修行中の僧正遍照へんじょうに逢い「岩の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣をわれにかさなむ」と歌を贈ったところ、遍照は「世をそむく苔の衣はただ



一重さねばうとしいざ二人寝む」と返歌したという話。図は、車の前で蓑傘姿の二人が向き合っている。顔は見えない。

清水小町 (4 図)

☆〈通小町〉

※比叡山に毎日木の実と薪を持って通ってくる里の女に僧が名をたずねると、「小野とは言はじ薄生ひたる市原野辺に住む姥ぞ」と言って消えたが、実はいまだ成仏しない小野小町の幽霊だったというあらすじ。図は、薄の生えた道

辺に、白装束の小町が首を傾けて座っている。 通小町 (5 図)



☆〈卒都婆小町〉(誓教寺蔵)

※乞食の老女が卒塔婆に腰掛けているのを高野山の僧が見咎めて説教を始めたが、逆にやり込められる。驚いた僧が名を聞くと小野小町だったという。図



は、傘を背負った老女が卒塔婆に座ってぼんやりしている姿。

卒都婆小町 (6 図)

☆〈関寺小町〉

※関寺の僧が、近くに住む老いた小野小町から歌の道を教わるとい話。図は、杖を肩に架け、傘を持ち俯く白髪頭の老女。

関寺小町 (7 図)



●掛幅肉筆画「八朔注太夫図」(「吉原遊君八朔の行事」とも。文化4年~10年<1807~1813>)。紙本着色掛幅。葛飾北斎。印亀毛蛇足。115.5×45.6 北斎館蔵)



注) 八朔：旧暦8月1日に農民の五穀豊穰を祈る祭り。江戸城ではこの日に、徳川家康が天正5年8月1日に江戸城入りをしたことを記念し、旗本や御家人・大名たちが白帷子に長袴姿で将軍に祝辞を述べた儀式もあった。吉原では「物日」又は「紋日」と呼ばれる年中行事の一つ。旧暦8月1日、吉原の遊女は、江戸城の儀式に因んで白無垢の小袖を着て客を迎えた。

八朔太夫図 (北斎館)

※図は、8月朔日、白無垢の着物で遊郭の中を道中する花魁を描く。着物の縁取りは墨絵風に筆を擦るように描く。横兵庫髷に八本の簪と櫛を差す。前帯と襟元は朱色。平原商涼曇把山「一筋の黒髪能く

大象をも繋ぐへく/半点の朱唇轍く千金をも擲しむへし/植させてさとの榮花や桜狩」（ルビは筆者）と、花魁の美しさに千金も厭わないという賛が記される。

●肉筆画「相撲玩具で遊ぶ童子」（文化5年～10年〈1808～13〉。紙本一幅。着色。北斎画。印辰印政。42.8×38.5 東京黎明アートルーム蔵）

※団扇を軍配に見立てて紙相撲の行事をしている立て膝の芥子坊主頭の子ども。紙力士の背に「●多川」と四股名が書かれている。杏花園（大田南畝）の賛に「すてられぬものは団扇よ 草相撲」の句が書かれる。

●肉筆画「山部赤人図」（文化9年～12年〈1812～15〉。絹本着色金砂子地。葛飾北斎筆。印雷震。59.0×77.0）

※印の「雷震」は文化9年～12年の使用と思われる。

※丘の上に立つ赤人。折烏帽子を被り、口ひげを生やした束帯の袖は風に煽られ前方にたなびいている。赤人の前には子供が正装して膝まづき、赤人と同じ方向に顔を向けている。

●肉筆画「吉原土手夜景図」（「日本堤夜景」とも。文化元年～10年〈1804～13〉。紙本淡彩一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。96.7×26.3）

※吉原に続く土手を行く駕籠かきと往来二人の人物をシルエットのように小さく描く。背景に薄く山の稜線が描かれているが、全体に墨絵画風のアクセントとして描かれたものか。図上に杏花園（大田蜀山人）の賛「心ゆくかたへの山路ふみわけて 花ハひとりぞ見るべかりける」がある。

●肉筆画「時鳥と獅子図 双幅」（文化元年～10年〈1804～13〉。紙本淡彩双幅。北斎。印亀毛蛇足。各36.8×25.3 個人蔵）

※左図：細い三日月を背後にして鳴きながら飛ぶホトトギス。右図：首を上に向けて膝まづく獅子。太い筆で右足と左膝、背の丸みを一気に描いた趣。

●肉筆画「煙管持つ立美人図」（「煙管を持つ遊女図」とも。文化11年～12年〈1814～1815〉。縦長絹本着色一幅。北斎改戴斗筆。印ふもとのさと 71.7×26.7 フリーア美術館）

※図上部に太田蜀山人の賛「埋火のしたにさわらで和らかに いいよらん言の葉煙草もがな」がある。左手で長煙管を持って立つ遊女。茶の打掛を着て、着物の裾の間から両足先が見える。遊女の下唇は笹色紅（紅を何度も塗って緑色にする）である。襦袢の襟のチリチリは、この頃の北斎の特徴とされる。遊女と長煙管は付き物である。

煙管持つ立美人図（フリーア美術館）

●肉筆画「雪の信濃路」（文化7年～13年〈1810～16〉。縦長着色一幅。前北斎戴斗筆。印葛しか。北斎館蔵）





※縦長の画面の上下に雪を信濃路を行く旅人達を描く。図上部には降りしきる雪の中、屋並みの連なる湾曲した街道を二人の男が行く。街道に続く山並みには駕籠や数人の男が描かれる。図下には同様に天秤棒を担ぐ行商人や駕籠が描かれる。上下のどの人物も笠を被り顔は描かれない。



雪の信濃路（北斎館蔵）

●肉筆画「**白紙に熨斗水引と銀熨斗付図**」（文化8年～12年〈1811～15〉。絹本着色一幅。北斎戴斗。印一人人形 26.8×55.6 北斎館蔵）

斗。印一人人形 26.8×55.6 北斎館蔵）

※熨斗と紅白の水引と二つ折りの奉書。紙の真ん中に、子どもの養子入りや嫁入りの幸福を願う「仕付銀」と呼ばれる銭が置かれている。

る。

●肉筆画「**鶏図**」（文化11年～15年〈1814～18〉。絹本淡彩一幅。前北斎戴斗筆。印ふしのやま。97.0×34.0 個人蔵）

※鶏一匹。鶏冠のみ朱色。体は墨色。くの字に立って首をこちらにひねっている鶏。

鶏図（個人蔵 <https://www.exblog.jp> より転載）

●肉筆画「**鶏図**」（「ひよこと朝顔」とも。文化6年～10年〈1809～13〉絹本着色一幅。北斎戴斗。印ふもとのさと。27.0×35.1 北斎館蔵）

※鶏の親とその前にいる二羽のひよ子。三羽のとさかの赤と親鳥の羽根の墨色。朝顔の藍色の淡彩の絵。



●扇面画「**鶏図**」（文化6年～10年〈1809～13〉紙本淡彩。扇面一面。前北斎戴斗筆。印縦長方印：ふしのやま 16.6×48.0 大英博物館蔵）

※ひよこと親鳥の扇面図。親鳥の腹と尾羽は墨色。ひよこの体と親鳥の頭と鶏冠は朱色。図には扇の骨の痕が残る。

●肉筆画「**矢細工師**」（文化年間〈1809～18〉。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。20.0×28.2）

※矢の細工師が、タメ直し（矢の曲がり直す）をしているところを描く。炭火に矢を焙りながら矢を修正している。細工師の前にはタメ直しの道具が置かれている。

矢細工師 (<https://tamegoro.exblog.jp> より転載)



●肉筆画「列子図」(文化6年～10年〈1809～13〉)。絹本一幅。東都葛飾北斎戴斗筆。印 亀毛蛇足。94.3×37.1 ミネアポリス美術館蔵



※エビのように体を曲げて風に任せて浮遊する列子。紅葉の葉が散り舞っている。列子は、中国戦国時代の鄭の哲学者、列禦寇の尊称。仙人風の趣があり唐代に道教で神格化されたという。風を意のままに操る仙人として「列子御風図」が雪村(1504～?)により先駆的に描かれている。

列子図(メトロポリタン美術館)

●肉筆画「擣衣美人図」(「砧図」とも。文化11年～15年〈1814～18〉)。文化8年:1811説、文化14年:1817説あり。絹本着色一幅。北斎戴斗筆。印 葛しか。97.5×34.5 個人蔵)

擣衣美人図(個人蔵<https://www.facebook.com>より)

※藍の手拭いを口にくわえ、両手で白い布を折りたたんだ布を重ねて持ち、高下駄を履いて立つ娘。背後に衣を巻いた砧の道具と木槌が置かれている。着物や帯の縁は、北斎の特徴のチリチリの線で描かれる。



●錦絵「達磨図」(文化8年～12年〈1811～15〉)。紙本着色。北斎画。印 雷辰。28.1×19.8)



※赤い僧衣を纏い、耳飾りをした達磨が、胸をはだけて瞑想している図。

達磨図(<https://www.pinterest.jp>より転載)

●墨絵「達磨図」(文化年間〈1804～18〉)。紙本墨画。画狂人北斎画。108.5×38.5 誓教寺蔵)

※落款の「画狂人北斎」は、寛政後期～天保まで用いられているので年代は特定できないが、一応文化期とした。白の僧衣を頭から被り横向きに立ち、何か見つめている図。僧衣は濃い墨で縁どられている。 達磨図(誓教寺)



●肉筆画「面壁達磨図」(文化6年～文政4年〈1809～21〉)。絹本着色一幅。北斎改戴斗筆。印 ふしのやま。太田蜀山人賛「渡江一韋面壁九年依然 柏樹独立庭前」。30.0×48.4 個人蔵)



面壁達磨図(web:ameblo.jpより転載)

※壁の割れ目から面壁の達磨が見える。頭から赤い法衣を被り、目を開けて前方を見ている。

●屏風絵「四季耕作図」（文化6年～10年〈1809～13〉）。紙本着色六曲一隻屏風。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。107.0×292.0。個人蔵



四季耕作図 (http://totemokimagure.cocolog-nifty.com より転載)

●肉筆画「韓信の股くぐり」（文化6年～10年〈1809～13〉）。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。93.0×33.6 個人蔵

※三人の男が縦に並んで足を広げている。その前にうつ伏して男たちの股をくぐろうとする韓信。その様子を見ている人たち。図上半分は、近くの松の先に山が山水風に描かれる。

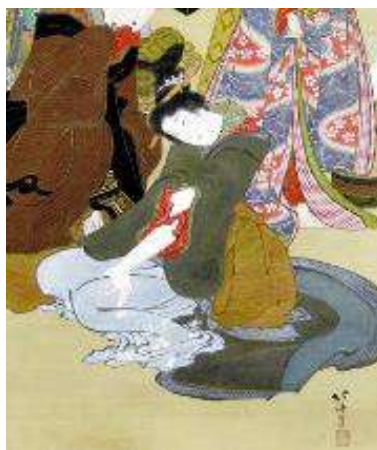
●肉筆画「花籠図」（「花籠に蝶図」とも。文化6年～10年〈1809～13〉）。紙本着色一幅。北斎。印辰 印政 35.1×24.1 個人蔵

※花籠には白い牡丹と緑の葉。その花籠の上を紋黄蝶が舞っている。

●肉筆画「青楼美人繁昌図」（文化9年～11年頃〈181～14〉）。縦長版着色一幅。北斎筆。印亀毛蛇足。個人蔵

青楼美人繁昌図（読売新聞より転載）

※令和3年（2021）1月14日「読売新聞」夕刊に新発見として掲載された。縦長画面に6人の妓楼の女が描かれる。図上から勝川春好の幫間、勝川春翁の花魁、勝川春周の三味線箱に寄りかかる芸者、歌川豊国の肩に犬を乗せた振袖新造、勝川春英の年増、北斎の女将など。西日本の個人が所蔵していた物を東京の美術商が入手したという。



内藤正人・慶応大教授が、落款や線描や色使いから真筆と鑑定。すみだ北斎美術館は、落款の摩耗具合などから1800年前後の作と推定されるという。勝川派から離れた後も、不仲と言



われた春好などと交流があったことが分かる絵という。

●屏風絵「**雑画屏風**」（文化7年～文政3年〈1810～1820〉）。二曲一隻屏風。紙本着色。無款。各70.3×79.9 フリーア美術館蔵

※二曲の中に各図を散らして描く。絵手本風であるが、各図は素描ではなく、完成された絵の趣となっている。

☆「**左曲**」左から、〈梅の枝にとまる鴛鴦〉〈刈り取った稲の束を下に置き、笠を被ったまま地に腹這いになって両肘をついて、左足を折り曲げて休む農夫〉〈鳥居の柱を朱色に塗っている職人〉

☆「**右曲**」左から、〈黒雲の中の龍〉〈対座する僧侶と紙に文字を書きつける男〉〈紐の解けた止まり木の側から顔をのぞかせる赤い頭の雉のような鳥〉〈青白磁の絵付けのある椀の水に投げ入れた桜の小枝〉〈太い墨の描線で描いた、駆ける馬〉〈黒の着物の胸をほだけ、長煙管を指先で持つ遊女〉

※全体に黄色がかかった絵。五月の田植えから秋の刈取りなどの農家の風景を描く。鹿鳴館の設計者・イギリス人ジョサイア・コンドル（1852～1920）の旧蔵品であったが、1942年デンマークで落札されたという。

●肉筆画「**山鳩図**」（文化年間〈1804～18〉）。紙本着色一幅。北斎爪画注。花押「北」。個人蔵

※注）爪画：筆を用いず、指先や爪に直接絵の具をつけて描く絵。『増補浮世絵類考』（『浮世絵類考』岩波文庫版所収 p147）に「伝に曰く、為一翁は曲画を善す。（略）中にも爪にて墨をすくひかく画はすぐれて妙なり、筆にて画たるが如し、画く処をみざれば其実をしるべからず」とある（肉筆画「**逆筆布袋図**」（文化7年～11年〈1810～14〉）の項参照）。

●肉筆画「**九天玄女図**」（文化年間〈1804～18〉）。紙本額装。一部着色。無款。個人蔵

※九天玄女は、道教の仙女。人面身鳥の姿で黄帝に仕えた七天女の一人。黄帝に兵法を伝えたとされる戦いの神。板下絵の一部に彩色した趣の図。団扇を持ち身体をくねらせて立つ仙女。袖の周りのピンク色、打掛け風の着物の黒、袖から覗く下着の黄色のみ着色してある。

●肉筆春画「**閨中交歓図**」（文化12年～文政2年〈1815～19〉）。戴斗房中写。印ふしのやま（?）。個人蔵

※「週刊ポスト」（2020/2/7号）掲載。2019年1月発見され即売され個人蔵となったと報道された。落款のある肉筆画は極めて珍しく、「房中写」とあるところから、実際の交接を前にした写生ではないかとしている（国際日本文化研究センター名誉教授：早川聞多氏の解説）。落款の戴斗は文化7年（1810）から文政2年（1819）まで使用され、印の「ふしのやま」は文化12年（1815）から文政2年（1819）の56歳から60歳まで使用されていると考えられているので、この時期の作とした。但し、本図の真贋は今後の究明を待ちたい。

関中交歓図（部分：https://shoto-museum.jp/より転載）

●肉筆画「**傾城図**」（文化11年～文政2年〈1814～19〉）。絹本着色一幅。前北斎戴斗筆。107.0×41.2 朱方印：判読不能。岡田美術館蔵）



※大きな鬘甲の簪を髪に挿し、青い前帯に松の葉模様の仕掛（打ち掛け）を着て、三つ歯の高下駄を履いて八文字で歩く花魁道中の姿。仕掛の裾が丸く広がっているのは、八文字の歩きかたによるもの。印号は、「総州葛飾郷前北斎戴斗筆」の落款時にも使用。



傾城図（岡田美術館）右：落款拡大図



●肉筆画「**大原女図**」（文化12年～文政2年〈1815～19〉）。掛幅絹本着色一幅。北斎改为一筆。94.5×30.3 ポストン美術館蔵）

※三束の柴木を頭に乗せ、黒い手巾をして頭上の束を支えて立つ大原女。袖からは赤い襦袢が覗き、着物を腰に巻き付け、裾からは白い下着が覗いている。白足袋で草鞋を履いている。柴木の束に桜の小枝が挿され、赤い小さな包みが結びつけられている。

大原女図（ポストン美術館）



●扇面画「**腕相撲**」（文化7年～文政10年〈1810～27〉）。紙本着色扇一面。北斎戴斗筆。印辰印政 太田記念美術館）

※男二人が鉢巻をして腕相撲をしている図。

●肉筆画「**花魁立図**」（文化6年～7年〈1809～10〉）。着色一幅。葛飾北斎。印亀毛蛇足）

※赤い着物の上に黒い仕掛（打掛）を肩からずらして羽折り、前帯を垂らし首を傾けて立っている花魁。少し開いた裾からは赤い襦袢と足袋の先が見える。

●校合摺「**扇に桜図**」（文化6年～10年〈1809～13〉）。墨絵。葛飾北斎筆。20.5×25.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※半開きの扇と全開の扇が重なっている上に、桜の小枝が乗せられている。扇の左にも桜の花びらが散らされている。

●肉筆画「**源氏物語 早蕨図**」（文化11年～文政4年〈1814～21〉）絹本着色一面。もと掛幅。北斎戴斗筆。印ふもとのさと。102.6×40.5 フリーア美術館蔵）

※御簾を上げた部屋から桜が見え、杉の板戸のある板の間では二人の女が座っている。側に几帳が垂れ下がっている。一人は手紙を手を持ち、二つの脚付き籠を前にして、首を傾けている女を見ている。二人とも笹色紅（下唇が緑色）の唇をしている。図の右下には画面を断ち切るように松景色が描かれる。『源氏物語』48帖宇治十帖〈早蕨〉からの画材。桜咲く山荘で、中の君に送られた寺の阿闍梨からの手紙を読む女性と、一緒に贈られた蕨や土筆などを入れた籠を前にする女性。

源氏物語 早蕨図（原画フリーア美術館：綴プロジェクト複製 すみだ北斎美術館）



●肉筆画「立美人図」（文化11年～文政4年〈1814～21〉）。絹本着色一幅。北斎改戴斗筆。印ふしのやま。108.0×40.5 個人蔵）

※登龍の描かれた打掛を着て、櫛を左耳の上に差した垂髪の花魁が身体をひねらせて立っている。裾からは花魁特有の三つ歯下駄が覗いている。

立美人図（toricorollより）



●肉筆画「時鳥図」（文化11年～文政4年〈1814～21〉）。葛飾北斎改戴斗筆。印ふしのやま。100.0×26.4）

※薄雲を背にして時鳥が一羽鳴きながら飛翔している。図の上半分に大田蜀山人の賛が記される。

●扇面画「亀と金魚図」（文化2年～7年〈1805～10〉）。着色扇面一本。北斎画。印なし）

※茶地に亀と金魚を描く。足元には笹の枝が横たわっている。

●扇面画「山水図扇面」（文化6年～11年〈1809～14〉）。着色扇面一本。独流北斎画。印辰印政。17.8×47.5 個人蔵）

※小高い丘の上に東屋が立ち、巖頭の向こうには小島が描かれる。

●扇面画「筍」（文化11年～15年〈1814～18〉）。着色扇面一本。北斎戴斗。印辰印政。17.6×50.0 個人蔵）

※葉を付けた筍が交差するように描かれる。

筍（個人蔵 web:「愚意鑿」BINBOU コレクションIIより）



●団扇画「芥川」（文化5年～10年〈1808～13〉）。団扇絵一枚着色。かつしか北斎画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※『伊勢物語』第六段「芥川」の場面を描く。ある男が高貴な女性を盗み出し、女を背負って芥川の川べりを逃げる途中、雷が鳴り、あばら家に逃げ込んだが、女は鬼に食べられ

るといふ筋書き。図は、烏帽子を被った裸足の男が女を背負って逃げる途中、女が草葉の夜露を指差して、あれは白玉かと尋ねる場面。芥川は高槻市を流れ淀川に注ぐ川。

●扇面画「桔梗図」（文化7年～11年（1810～14）。文化12年、15年説あり。紙本扇面一面。掛幅。北斎戴斗筆。印ふもとのさと。下弦21.5×上弦55.5 北斎館蔵）



※扇を縦にして描いた図。二本の茎が長く上に伸び、その先端に蕾も含めて花が咲く。茎の根もと近くでも薄藍の花と白い花を咲かせている。没骨描写の図。

桔梗図（北斎館）

●扇面画「太夫の図」（文化年間（1804～18）。北斎改戴斗筆。花押）

※「大坂三越呉服店肉筆浮世絵展」（大正8年）の図録（大正9年）によれば、「京都 広岡伊兵衛氏所蔵」となっている。

※図は多くの簪を指した花魁の後ろ姿が描かれ、扇面の右半分に十辺舎一九の賛が記されている。関西では花魁を太夫という。

●扇面画「烏賊に山椒図」（文化10年～文政2年（1813～19）。紙本着色扇一面。北斎戴斗。印辰印政。23.0×48.2 すみだ北斎美術館蔵）

※透明感のある薄鼠色の紋甲烏賊と白色の鯛烏賊が並んで描かれる。紋甲烏賊の側に緑色の山椒の葉が添えられる。浅草庵市人の賛「幽斎もしらぬ伝授の三鳥は鶯とからすと甲の白鷺」。

●扇面画「生首図」（文化7年～11年（1810～14）。紙本扇面淡彩一面。北斎戴斗筆。23.3×48.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※扇の中央に上下逆様に描かれる。歯を食いしばり、唇を少し開け上目づかいに目を開いた男の首。月代部分は剃らないまま小さな鬘を結っている。「生首図」は、天保13年(1842)、嘉永元年(1848)にも描いている。



生首図（島根県立美術館）

【「北斎筆」の落款は二代目北斎か】

●肉筆扇面画「水恋鳥図扇面」（文化年間（1804～18）年間。紙本着色一面。額装。葛飾北さゝ。印葛飾。下弦20.8×上弦44.2 北斎館蔵）

※水恋鳥は、赤翡翠（カワセミ）の異名。赤いくちばしを上に向けて笹の茂みの上を羽ばたく翡翠。背中が藍色、羽根は墨色で描かれる。印が「葛飾」という二代目北斎のものであるので、同人の作とする説もある（日本浮世絵博物館所蔵『北斎』p14 読売新聞社）。

また、本図とは別だが、二代目北斎は落款に「筆」と記しているのが特徴で、北斎自らが「北斎」とした場合は「画」が続くとしている。二代目北斎は亀屋喜三郎と考えられる。弘化3年（1846）条の「犬北斎」の項参照。



水恋鳥図扇面（北斎館）

●扇面画「風景図」（文化11年～文政2年〈1814～19〉）。扇面着色一面。戴斗筆。印辰政。23.0×50.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※小高い山のある島の間を棹さす小舟が一

艘、全体に墨絵風に淡彩で描かれる。

●掛幅「年始まわりの遊女図」（文化12年～文政2年〈1815～19〉）。絹本着色一幅。前北斎戴斗筆。印ふしのやま。110.4×41.8 フリーア美術館蔵）

※横兵庫髷に多くの簪と笄を挿した高位の花魁が八文字で歩く図。黒地に松葉文様で茶の線を強調した注連縄の刺繍をあしらった打掛を背抜きで羽織り、数枚重ねた白地で市松模様の掛下の裾を右手で持ちあげ、三つ歯の黒下駄を履いた裸足の右足を突きあげた姿。花魁の唇は、笹色紅と呼ばれる、下唇が緑色である。紅花からの紅を何度も塗ると玉虫色に発色し緑色となる。襟など着物の輪郭のチリチリはこの頃の北斎の特徴。



年始回りの遊女図（高精細複製画：すみだ北斎美術館〈原画：フリーア美術館〉）

●点印譜「於之波奈嘉々美」（文化10年～文政2年〈1810～19〉）。大本4帖。墨印。北斎筆・北斎改戴斗。27.4×20.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「点印譜」は、俳諧で、点者批評により得点を競ったが、その点者の印が捺されたものを集めて貼り込んだもの。本譜は5帖の仕立てとなっていて、北斎の印も10数点収められているという（『新北斎展図録』p327～328）。

円印に、弓矢姿の武人が馬に乗って、竹垣の陣屋を見ている印（北斎改戴斗）や、千鳥が飛ぶ下で、筏に竿さしている男の印（北斎筆）、岩山の麓を流れる川の印（北斎筆）などがある。

●柱絵「富士見西行図」（文化11年～15年〈1814～18〉）。北斎画。江見屋吉右衛門版。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※天明4～5年（1874～75）に同題「富士見西行図（柱絵。北斎画）」がある。構図はほとんど同じだが本図は西行の向きが反転している。墨染めの衣を着て、笠を手に持ち、杖を突き、肩に風呂敷に包んだ物を巻き付けて立っている。図の上部に雲を抱いた富士山が描かれるが、西行は左を向いて見ていない。「富士見西行」は、日本画の画題の一つ。

●菓子袋「弁慶図」（文化5年～10年〈1808～13〉）。着色。無款。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※菓子袋の絵。円枠の中に鎧姿の弁慶が「御菓子」と書いた高札を支え立てている。北斎の描いた菓子袋は、他に「江戸八景」（天保初期。赤松屋庄太郎版）などの2種が知られているという（『新北斎展図録』p323）。

弁慶図（島根県立美術館）

●組上げ絵「しんはん石橋山合戦組上ケとうろうゑ」（文化4年～12年〈1804～15〉）。大判錦絵玩具絵2枚揃。無款。島根県立美術館：永田コレクション/国立国会図書館美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵

※「組上げ絵」は、関西では「立版古」と呼ばれることが多い。切り取り、組み上げて楽しむ玩具絵。本図は、石橋山の合戦の様子を組み立てる玩具絵。



☆〈上の巻〉（25.4×37.9）陣容の組上げ絵

☆〈下の巻〉（25.3×37.9）石橋山の地形の組上げ絵。

●組上げ絵「しん板くみあけとふろふ ゆやしんミセのづ」（文化4年～12年〈1804～12〉）。「新板組上燈籠湯屋新店図」。大判錦絵。5枚組。北斎画。丸屋文右衛門版。各38.0×25.7 太田記念美術館：長瀬コレクション/ボストン美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵

※各部分を切り取り、糊しろに糊をつけ、指示通りに組みあげると、二階建ての立体的な風呂屋の作品になるというもの。

●組上げ絵「しんはんくみあけとうふろふゑ 天の岩戸神かぐらの図 上」（文化4年～12年〈1804～12〉）北斎画。丸屋文右衛門版。26.5×38.3 ボストン美術館蔵

※天の岩戸伝説を題材にしたもの。

●組上げ絵「王子いなりこりとりばの図」（文化4年～12年〈1804～15〉）。無款。25.2×37.8 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵

●組上げ絵「新吉原仮宅繁盛の図」（文化4年～12年〈1804～15〉）。無款。25.5×37.4 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵

●組上げ絵「江戸中しん板はやり升屋みよ」（文化11年～15年〈1814～18〉）。大判着色。北斎老人画。丸屋文右衛門版。26.5×38.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

本図は、吉原の「升屋」の組上げである。

●校合摺「茶汲み美人」（文化12年～文政2年〈1815～19〉）。校合摺注。紙本。前北斎戴斗筆。26.1×31.0 アムステルダム国立美術館蔵

注)「校合摺」は、色板作成のために、主板上で摺った輪郭の黒線だけの摺物をいう。絵師はその一枚一枚に一色ずつの色名を文字で書き、凸版として残す部分に代赭墨を塗る。この色ざし様の校合摺が彫り師に渡されて色板が作られる(国立民族博物館『絵師はいかにつくられたp79』)。

版画を制作するだけに必要な消耗品なので、校合摺が残るのは珍しいとされる。

※茶托に載せた湯呑みを持つ女。眉を剃りお歯黒にしているので人妻か。

●摺物「小松引き」（文化元年～5年〈1804～08〉）。紙本着色一幅。画狂人北斎画。19.2×51.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

※小松引きは、平安時代、正月初の子の日に、長寿を願い野に出て小松を引抜く遊びで、図では三人の官女が扇をかざし、下働きの二人の男が小松を引抜く姿を見ている。その近くでも男女の子どもが見ている。遠景には大きな日の出が描かれる。

●摺物「横九つ切り判銅板面風摺物シリーズ」（文化元年～7年〈1804～10〉。着色。横九つ切摺物3図。ほくさみうつす（画面右上に横書き）。銅版画風。額枠内に描かれ。狂歌が添えられる）

☆〈金沢八景〉（日本浮世絵博物館/ボストン美術館蔵）

※海に架かる瀬戸橋と呼ばれた二つの連続した橋を渡る人々や、沖に浮かぶ帆船等を描く。橋は西洋のように石橋風に描く。

☆〈江の島遠望〉（「江の島風景」「江ノ島海岸」とも。藤沢市教育委員会/ボストン美術館蔵）

※七里が浜から江の島を望む風景。島に渡る人々が小さく描かれ、その脇には波のうねりが描かれる。

☆〈かまくら之里〉（すみだ北斎美術館/ボストン美術館蔵）

※入江になっている由比が浜から西を望む風景。海辺の道を行く人々。空には雁の群れ。水平線には帆船の帆が多く見え、遠くに雪景色の富士山が描かれる。

●摺物『三夕』（文化元年～5年〈1804～08〉。横小判錦絵。北斎画 各平均 13.2×18.1）

☆〈三夕の内 まきたつ山〉（北斎館/東京国立博物館/ヴィクトリア・アルバート博物館蔵）

※寂蓮法師「さびしさはその色としもなかりけり 真木立つ山の秋の夕暮れ」を踏まえる。川辺の入り江に渡した小さな板橋の前に立ってどこかを見ている振袖の娘。傍らには、若年増らしき女が片膝を立てて座り、その横には供の男も風呂敷の荷物を抱えて座っている。背後には二本の松の幹が描かれる。



三夕の内まきたつ山（北斎館）

☆〈三夕の内 うらの苔屋〉（北斎館蔵）

※藤原定家「見わたせば花も紅葉もなかりけり 浦の苔屋の秋の夕暮れ」を踏まえる。水辺に立つ二人の女。供の男が河岸で風呂敷の荷物を整えている。背景に三軒の苔屋が描かれる。二人の女が松の木側に立ち、真木の繁る遠くの小山を眺めている。女の後ろには腰を下ろしている供の男がいる。

☆〈三夕の内 しき立さわ〉（北斎館蔵）

三夕の内 しき立さわ（北斎館）

※西行法師「心なき身にもあはれは知られけり 嶋立つ沢の秋の夕暮れ」を踏まえる。水辺に立つ二人の



女。一人は傘を閉じて持っている。供の小僧が両手を挙げ、脅された鳴が飛び立っていく。

●摺物「猿」（文化元年～2年〈1804～05〉。正月。着色。画狂老人北斎画。19.5×27.4
すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※米俵の上で三番叟の烏帽子を被り、御幣を持った猿が扇をかざしている図。側に梅花がある。賛は「我年をかけハ米なり玉の春 右山川寿来翁」とある。句の作者名から米寿の祝いの摺物か。

●摺物「出世弁財天詣」（文化元年～5年〈1804～08〉。紙本着色。画狂人北斎画。19.9×54.5 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※海辺の丘の上に、参詣に来た二人の女と供使いの小僧。小僧は笹の枝に魚などをくくりつけて担いでいる。丘の下の鳥居の下には、供え物を乗せた三方を持つ娘と母親らしい女がいる。その先には狛犬と弁財天の社殿が描かれる。海辺には屋根船が浮かんでいる。

●摺物「貴人と美人」（文化元年～5年〈1804～08〉。紙本着色。画狂人北斎醉中画。12.8×18.4 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※落款に「醉中画」とある。

※二人の美人がしなやかに寄り添う間で、折烏帽子の高貴な老人が笑っている図。梅風舎喜久丸の賛は「すみれさく野にうちむれてこのころは 松や引なん若草摘なん」とある。山辺赤人の「春の野にすみれ摘みにと来し吾そ 野をなつかしみひとり寝にけむ」の歌が思い浮かび、老人は、あるいは赤人とも考えられるという見方もある（『ピーターモース・コレクション北斎図録』より）。

●摺物「千代紙を折る二美人」（文化元年～5年〈1804～08〉。紙本着色。九々屋北斎画。20.3×27.3 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※浅草庵たちの狂歌グループによる摺物。富士と松と梅の描かれた唐紙の前に座り、格子縞の着物を着た女が千代紙を折っている。その隣には筆を持ち、絵皿を前にして千代紙の様子を見ている女がいる。

●摺物「王子料亭前」（文化元年～5年〈1804～08〉。紙本着色。北斎画。19.0×50.5 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※料亭の前には「御神燈」と刻まれた石燈籠と、奉納王子（稻荷）と書かれた屋根付きの大きな立看板があり、その前にいる三人の女。その後ろには、荷物を担ぐ二人の小奴。図の左には、梅の木の後ろの柵の中に、水が流れる仕掛けが描かれる。王子には「海老屋」など有名な料理屋があった。

●摺物「箱入カルタの図」（文化元年～5年〈1804～08〉。紙本着色。九々屋北斎画。19.0×51.5 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※包布の上に置かれた箱から引き出された百人一首と思われるカルタが描かれる。図の左には竹里館直根などの狂歌が並ぶ。浅草庵連によるもの。

●摺物「盆踊り図」(文化元～2年〈1804～05〉)。倍柱絵(超縦長)判二枚続。着色。
119.2×14.0 画狂老人北斎画。しなのや版。太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館(絵のみ) すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション蔵)



盆踊り図(すみだ北斎美術館)

※浅草庵市人の浅草側による狂歌摺物。上半分に狂歌を書き入れ、下半分に七人が踊る図。上から、傘をさす老人、向こうむきの侍、笠を被って背を見せる男、格子模様の着物の男、扇子をかざす男、手拭を被る女、顔を隠して踊る女が描かれる。

●摺物「檜破子ノ図」(文化元年～5年〈1804～08〉)。橘樹園ノ図葛飾北斎写。19.1×17.1 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※檜破子は、檜の薄板で作った曲物(食物を入れる仕切りのある器)。図は、房のついた簾の前に、梅の小枝を乗せた三方と丸と角の蓋付破子が二つ置かれている。橘樹園(山田早苗)の狂歌が添えられる。

●摺物「屏風一双之内」(文化元年～5年〈1804～08〉)。揃物。画狂人北斎画。六曲一双屏風)

☆〈竹内〉(16.9×7.5 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵)

※図は武内宿禰が新羅遠征の際、幼い応神天皇を守った故事に取材。幼帝を抱く宿禰は穏やかな顔に描かれる。側に立て膝で座って乳房を突き出し、宿禰の着物の紐を握っている女がいる。狂歌「命なかき竹の内にてさゝなきを たれもすくねや春の鶯 桜枝鞠」が添えられる。

☆〈大輔〉(19.8×9.1 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵)

※大輔は、源平合戦の際、源頼朝についた三浦義明のこと。106歳の長寿を保ったといわれる。図は、海老やウラジロの正月飾りが乗せられた鏡餅の置かれた側で、烏帽子を被った長寿の大輔が、美女が持つ巻物を座って読んでいる。狂歌「門に注連ひきわたしつる弓とりのたけき心の松におひそふ 山辺道高」、「霞ひく三浦の海を見わたせば ながつきをする船の帆柱 真知亭十々也」、「もゝあまり六日の年を越ぬうち 寿命の延る千金の春 望月水面」が添えられる。

※長寿に関する人物の6図と中国周時代の六芸(礼・楽・射・御・書・数の教養)を題材にした6図の六曲一双の屏風とされる。他に〈西王母〉〈慈童〉〈東方朔〉〈楽〉〈射〉〈御〉〈書〉〈数〉があるという(『ヒーターモース・コレクション北斎図録』p123による)。

●摺物「菊をめぐる官女」(文化元年～5年〈1804～08〉)。横長判摺物。画狂人北斎画。20.8×56.1 ヴィクトリア・アルバート美術館蔵)

※庭先の菊を観る四人の女と家の中の三人。御簾の陰に二人の女の図。

●摺物「婦人と小姓図」（文化元年～10年〈1804～13〉。着色横判。かつしか北斎画）

※揚帽子（角隠し）を被った二人の夫人が大きな釣鐘が置かれた寺の門前を歩く。婦人の後ろには小姓が般若の絵柄の凧を持ち、風呂敷包みを背負っている。釣鐘にはウラジロが付けた注連縄が掛けられている。

●摺物「梅樹に鶴」（文化年間〈1804～18〉。正月。紙本着色。葛飾北斎画。38.4×52.4 すみだ北斎美術館蔵）

※上下反転の図。上半分に、初日の出を背に鶴が飛び、梅樹が右から左に伸びている。常盤津門社中、岸澤門社中の催し案内。「千穉万歳 叶」などの書き込みがある。

●摺物「井戸端の美人」（文化年間〈1804～18〉。紙本着色一幅。北斎画。13.6×18.2 すみだ北斎美術館蔵）

※井戸から若水を汲む女が、手をかざして初日を見ている。側の汲み桶にはウラジロがかかっている。近くで梅が咲いている。井戸端の美人（すみだ北斎美術館）



●摺物「見立業平東下り」（文化年間〈1804～18〉。無款。横大奉書全紙判摺物。43.2×57.4 ボストン美術館蔵）

※左奥に富士山。馬に乗る在原業平。供の者四人。右に松の木のある図。周囲を木目で刷り、鏡面は銀摺にしている。業平東下りは多くの絵師の題材になっている。

●摺物「鏡美人図」（文化6年～10年〈1809～13〉）

※鏡に映った美人の顔を大首絵のように描く。木製の折りたたみの鏡を開くと女性の顔が映っている趣向で、縦長判の下半分に顔を描き。上半分に狂歌を書いている。揃物だが全何図かは不明。

☆〈島根県立美術館：永田コレクション蔵の二図〉（着色。無款。各20.3×7.0）

※二枚揃の左図は、櫛と簪を刺した髪が口に手拭いの端を銜えている。口紅を塗っていない。額からほつれ毛が一本垂れている。野中清水他の狂歌が記される。

右図は、角隠しを被った灯籠髷でお歯黒の女。周囲を木目で刷り、鏡面は銀摺にしている。

鏡美人図（島根県立美術館：永田コレクション）

☆〈すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵の一図〉（着色。無款。20.3×6.8）



※房のある髪留めをつけた角隠しを被って外出する婦人の大首絵があり、鏡の裏蓋（図の上部）に「さほ姫の遊び道具の紅筆に ふくむや宿のむめのうす紅 白寿人」「風の手をたゞけハ近く座敷までかよひし宿のむめか香 三味盛安」の狂歌が記されている（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション）。

鏡美人図（部分：すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション）



●摺物「おかめと桜図」（文化元年～5年〈1804～08〉。着色。北斎画）

※桜咲くところで、盃の絵柄のある赤い幔幕の内側で、薄絹を頭から被り、右手をかざして楽しそうに踊るおかめの上半身を描く。

●摺物「日本堤を見る花魁」（文化元年～5年〈1804～08〉。着色。北斎画。13.5×18.4 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※花魁が日本堤（吉原の土手）を往来する人々を二階の籬窓から眺めている図。千秋庵の狂歌に「春霞たつ木もしらぬ籬より むかふの人を呼子鳥かな」とあるので、客を呼んでいる様子か。土手には小さく三人の男が描かれる。「呼子鳥」は、人を呼ぶように鳴く鳥で、一般にかっこうと言われるが、他にも説がある。他の狂歌に「長閑なる春もくるわのことはや おいてなんしにひらく梅か香 橘床世」、「目出たしや夢に見てさへよし への くつわにとむる春の駒下駄 鈍亭和樽」がある。

●摺物「唐人笛を持つ美人」（文化6年～10年〈1809～13〉。紙本着色。摺物。かつしか北斎画。林忠正の所蔵印がある。18.4×13.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※中国風の美人がチャルメラを吹く図。賛「豊とせのしるしハ東風の吹そめて なりものよき春の長閑さ 悠々館街人改湖悠」が記される。

唐人笛を持つ美人（すみだ北斎美術館）



●摺物「手紙を読む遊女」（「手紙を持つ遊女」とも。文化6年～10年〈1809～13〉。着色。かつしか北斎画 17.0×12.7 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）



※立て膝の遊女が手紙を持ち、極端に首を前に曲げ、物思いに耽っている図。の「仲の町はるの大夫の出立を 誰も見にきよ花の吉原 蛙吹亭元住」の狂歌が記される。

手紙を読む遊女（すみだ北斎美術館）

●摺物「人形図」（文化6年～10年〈1809～13〉。横長判着色。ホクサイ。19.8×51.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「大傀来面」と書かれた紙を貼った蓋を開けた箱の中で鼓を叩く女の子。箱の前では紙で作った四角い被り物を頭にして、馬になった男の子の背中に乗る男の子。箱の側面に「ホクサイ」と署名されている珍しい図。

●摺物「元結作りの母子」（文化元年～7年〈1804～10〉）。大奉書全紙判着色摺物。北斎画。36.2×48.9 エドアルド・キオッツオーネ記念ジェノヴァ東洋美術館蔵

※立っている芸者の傍で腰をかがめて元結作りの用意をする母親と、その腰にすがる子ども。下半分には三番叟を開催した出し物のプログラムが逆さで記される。

※寛政8年(1796)の「元結い造り」や、寛政11年(1799)春の「元結匠」（狂歌本『東遊』所収）同画趣がある。

●摺物「花魁と禿」（文化6年～10年〈1809～13〉）。中判着色。葛飾北斎画。19.1×26.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/島根県立美術館蔵

※大首絵風の花魁と禿の図。横兵庫の髷の花魁の髪飾りは銀摺に、帯は金摺で描く。その脇に華やかな髪飾りをした禿が花魁に寄り添う。「玉の春玉の柳のまゆにして 玉につらなる傾城の礼 一粒亭万盃」、「鉢植の梅とかむろのはこの子と ともに数つく花のよしはら 二橋亭高紀」、「初ミせのはつすかきやい音にて みねの間のよろつよし原 浅流庵清志」、「なひくなり行きかふ風のふたかへり ミかへり柳ふりのよし原 野中清水」の狂歌が書かれる。



花魁と禿（部分：すみだ北斎美術館）

●摺物「鞠に梅花」（文化6年～10年〈1809～13〉）。着色。葛飾北斎画。12.9×17.7 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

※文化6年に摺物「鞠と玩具」があるので、あるいは文化6年(1809)作か。鞠の周囲に梅花が描かれる。「去年の日にまろめし雪もまりほどに いつしかけぬる春のあたゝか大屋跡次」、「鞠よりも花の匂ひのけたかさに 爰にも梅のありとこそしれ 雪の屋鳥兼」の狂歌が記される。

●摺物「神三番之内」（文化3年〈1806〉以降。かつしか北斎画。14.1×19.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※下記「儒三番之内」を含めた「神儒仏」の三枚揃物の一図と思われる。梅の花咲く寺社の入り口の柵内に鎮座する武門の男の像。烏帽子を被り、薬の矢を扇状に広げて背負っている。その前には手水の盥と柄杓が置かれている。千秋連小男黒面の狂歌に「春くれは 武士もみなさきかちに 忽ほうくと参る神壇」とある。

●摺物「儒三番之内」（文化3年〈1806〉以降。かつしか北斎画。13.7×18.7 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※寺社の屋根の鯨銚を横切るように鳳の姿をした風が上がっている。湯島の聖堂の屋根といわれる。「所から仰げは高し聖堂の 楚々に遊べる鳳凰の風 千秋連瓢振人」の狂歌が記される。

●摺物「菊慈童」（文化元年～5年〈1804～08〉）。横長判。北斎画。18.7×51.4 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/千葉市美術館/エルヴィエム美術館蔵

※菊慈童は、靈効のある菊の下露を飲んで不老不死を得たという中国の仙人。元は書き込みがあった大奉書全紙判。完全版は米国ウイスコンシン州のウイスコンシン大学エルヴィエム美術館にあるという。

裾の長い打掛を羽織った菊慈童が、菊が多く咲いている岸边にしゃがんでいる図。文化2年(1805)にも同題の絵がある(九々屋北斎画)。

菊児童 (すみだ北斎美術館)



●摺物「花魁道中」(文化元年~15年〈1804~18〉)。着色。14.3×28.4 フランス国立図書館蔵)

※右に花魁道中の図。門松飾りの間を二人の花魁と羽子板を持つ禿が歩く。後ろに長柄の大傘を持つ男。正月二日、吉原仲之町の茶屋ごとに年礼にまわる行事を描く。

花魁道中 (フランス国立美術館)



「春くれと客人とともに鶯のをいてなん

しに梅のひらきぬ 五息斎壁塗」、「此里の宝舟とハ新艘の つくりたてたる春の売初住蝶菴百鼻人」、「ひとかへりまたふたかへりミかへりの 柳も土手のまねく春風 紀長面」の狂歌が記される。

●摺物「梅鉢に盃」(文化元年~5年〈1804~10〉)。元旦。画狂老人卍筆。色紙判着色。19.5×19.2 千葉市美術館蔵)

※山水風の絵付けのある鉢に盆栽の梅が咲き、傍に寿の字のある朱塗りの盃が置かれている。

●摺物「美人投網」(「日の出」とも。文化3年~8年〈1806~11〉)。紙本着色。かつしか北斎画。19.0×52.2 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※舟中に立って腰蓑をつけた女が網を引き揚げている。網には魚が捕えられている。もう一人の女が魚を柄のついた攪網に受け取ろうとして海面に差し出している。船頭は櫓を操り舟を安定させている。遙か沖の陸地から大きな朝日が半分顔を覗かせている。



美人投網 (部分：太田記念美術館：<https://ezumi-mit.at.webry.info> より)

●摺物「滝に薪を投げる仕丁と貴人」（文化6年～10年〈1809～13〉。紙本着色。かつしか北斎画。24.2×38.4 すみだ北斎美術館蔵）

※図左に、男が薪を抱え、滝に投げ入れようとしている様子が描かれる。その前には投げ入れられた薪の束がある。図右には、貴人が扇をかざして見ている様子が描かれる。貴人の側で二人の男が控えて座っている。

●摺物「住吉祭」（文化年間〈1814～18〉。色紙判着色。前北斎戴斗筆。20.9×18.6 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※住吉祭の衣裳を着た男と甲冑を身に着けた男を描く。空満屋楯垣真枝の賛「住吉の日、つるめそといふ者のいみじうをかしけなるさまして、さるかうことゝも舞戯れけるを見侍りて、おもしろう興ある事におもうたまへしか、同じ心の友たちにかゝる物ありとたにしらせ参らせまほしう、一ひらの絵にうつしてたてまつるなり」とある。

●摺物「狂歌扇額」（文化年間〈1804～18〉。横判。葛飾北斎画。13.4×27.9 ベレス・コレクション蔵）

※奉納直前の額の図。枠に取りつける金具と木槌が描かれる。

●摺物「貝合わせ」（文化年間〈1804～18〉。紙本着色。摺物。13.4×18.3 すみだ北斎美術館蔵）

※貝枠の内側に官女と貴人が部屋の中と外にいる図を極彩色で描く。

●摺物「日本橋霞」（文化年間〈1804～18〉。着色。向岳北斎画。13.8×18.6 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※日本橋の擬宝珠のある欄干から身を突き出して川面を見る小奴。その側で立ち話をしてい御高祖頭巾の女と松の盆栽を持つ女。遠くに江戸城が見える。「初日影さす大小の日本橋 霞の糸のひしとかゝれり 太平楽住」、「魚市のこちかいなたか引初る 霞の網に風の手こたひ 蘭奢亭香保る」の狂歌が記される。

●摺物「高輪休茶屋」（文化年間〈1804～18〉。着色。向岳北斎画。13.5×18.3 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※上記「日本橋霞」同様、江戸名所の歳旦揃物と思われる。落款の「向岳北斎」は、この二点にしか見当たらないという（『ピーター・モース・コレクション北斎図録』による）。「コウガク」と読むか不明。

高輪休茶屋（すみだ北斎美術館）



図は、休み茶屋でくつろぐ揚帽子（角隠し）で前帯の婦人と、煙草盆を差し出す茶屋の女。側で小奴が風呂敷の荷物の紐を頭に掛け、担いで笑っている。背景に、富士の見える

海に浮かぶ数隻の帆かけ船。「みてはなを雪のほうしにふしひたひ 夢よりうれし春の曙
長閑春道」の狂歌が記される。

●摺物「**屋形船羽根田丸**」（文化年間〈1804～18〉。着色。画狂人北斎画。38.8×53.5
すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※中村座・市村座・河原崎座の囃方の合同公演の番組案内。隅田川に屋形船の羽根田丸が、
大勢を乗せて、鳴り物を鳴らしながら航行している図。船の屋根で二人の船頭が竿をさし
ている。

●摺物「**見立女三宮**」（文化年間〈1804～18〉。絵暦か。着色。北斎画。12.8×7.9 す
みだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※『源氏物語』女三宮に取材。三宮は光源氏の二番目の正妻。頭の中將柏木と密通し薫
の君を生む女性。

図は御簾の陰に立ち、高蘭の手すりに寄りかかる猿を見ている女三宮。猫を女三宮に渡
す夢を見た柏木が、猫のおかげで姿を見られたことを女三宮に話す場面があり、女三宮が
猫をひきつける姿は浮世絵の人気画題であった。本図は猫の代わりに猿にしたのか。

●摺物「**行楽帰り**」（文化年間〈1804～18〉。着色。北斎画。18.8×51.3 すみだ北斎美
術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※釣りに出かけた二人の婦人と子どもたちの帰り道の風景。一人は煙管を銜えて左手に煙
草入れを持っている。もう一人も煙管を手をしている。二人の前には釣り竿と魚籠を持っ
た芥子坊主頭の子どもが二人いる。夫人の後には荷物を天秤にかけた小奴もいる。遠景に
額に「弁才天」と書かれた神社の鳥居と桜が描かれる。深川の洲崎弁天と思われる。「同
図で砂張市蔵を主催者とした全紙判や、風呂敷の柄が桜草である富元節の案内として作ら
れたものがあり、本作品はそれらの後摺作品とされる」との説明がある（『ピーターモース・コレ
クション北斎図録』解説より）。

●摺物「**行楽図**」（文化年間〈1804～18〉。着色。かつしか北斎画。38.9×52.2 すみだ
北斎美術館蔵）

※杵屋岩治による長唄番組を図の下半分に逆さに書く。図は、行楽に出かけた女性たちが
歩いている姿を描く。

●摺物「**文台**」（文化年間〈1804～18〉。着色。葛飾北斎画。12.5×17.0 すみだ北斎美
術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※螺鈿の文台に、硯と筆置きに置かれた細筆、文鎮、筆立てに差した数本の筆、孔雀の羽
根を差した細瓶などが置かれている。「鶯のはつ音聞つゝ年始状 筆はしめせむ青軸の
梅 菱花堂」の狂歌が記される。

●摺物「**七福神 大黒の傀儡師**」（文化年間〈1804～18〉。色紙判着色。葛飾北斎画。
21.6×19.3。フランス国立図書館蔵）

※大黒天の首から下げた宝船に他の五福神が乗っている図。あちこち巡回して首に下げた箱の人形を唄いながら操る傀儡師を大黒天に置き換えて、人形を七福神にしている。毘沙門天だけが、雲に乗り宝船から飛び出している。「年浪の大晦日のからくりも たちまち春と傀儡師がなく 垣生菴侘住」、「とし浪の灘を越れハ西の宮 いつも春めく傀儡師かな 穂長堂物梁」、「山猫にかませぬ箱の白鼠 子の日の興に芸やさすらむ 四方歌垣真顔」の狂歌が記される。



七福神 大黒の傀儡師 (フランス国立図書館)

●摺物「朝日連三網之内父子」(文化7年～文政2年〈1810～19〉か。戴斗筆。21.5×19.0 太田記念美術館：長瀬コレクション蔵)

※『長瀬コレクション葛飾北斎図録』所収「長瀬武郎コレクション寄贈総目録」による。

●校合摺「茶汲み美人」(文化12年～文政2年〈1815～19〉。紙本。团扇絵。26.1×31.0 アムステルダム国立美術館蔵)

※茶托に乗せた湯飲みを右手で持ち、左手で簪の端を掴んでいる女。眉を剃り、お歯黒なので年若い主婦か。大首絵風の描き方。

文化15/文政元 (1818/4/22～) 戊寅 59歳 北斎改葛飾戴斗、戴斗、東都北斎戴斗、鼻山人 (隠号)、葛飾前北斎戴斗、葛飾前北斎戴斗先生、葛飾前北斎戴斗老人、葛飾戴斗、

印 ふしのやま、雷震、たい斗、葛しか：こと (48歳)、(阿美与：30歳)、(孫：9歳)、阿栄 (21歳)

◇5月イギリス船でゴールドンが浦賀に来航。貿易を求めるも幕府は拒否。

◇ヤン・クック・ブロムコフ長崎オランダ商館長、江戸参府 (2月13日～6月19日)。

◇文政期より春画豆本が流行。

◇4月13日、伊能忠敬没 (74)。

◇10月17日、二代目柄井川柳没 (生年不詳)。

◇10月21日、司馬江漢没 (72)。

◇歌川広重、一遊斎の号でデビュー。

◇曲亭馬琴、息子興継 (宗伯) を滝沢家当主として、神田明神下 (石坂下同朋町。現、千代田区外神田三丁目、秋葉原芳林公園付近) の家を買ひ、妻の百と三女鍬とともに住ませる。

○大田南畝 (蜀山人)、狂歌集『蜀山百首』。

○瀬川富三郎、『諸家人名 江戸方角分』（寛政・享和・文化期の江戸の文化人の住所別一覧表）。

【彼人ハちとむつかしき仁故、『北越雪譜』の挿絵ならず】

★『馬琴書翰集成』（文政元年五月十七日 鈴木牧之宛「雪中奇観」画工の事）より。

「古人玉山（注：故岡山玉山・京都の人）ハ、自然と板木の画に妙を得たる人也。さして学問ハなけれど、才子なるべし。著述の事ハいざしらず、此人世にありて絵をたのみ、野生著述いたし候はゞ、尤よろしかるべし。江戸ニては北斎の外、この画をかゝすべきものなし。乍去、彼人ハちとむつかしき仁故、久しく敬して遠ざけ、其後ハ何もたのみ不申、殊に画料なども格別の高料故、板元もよろこび申まじく候。しからば、誰と耄人ニ定めず、「東海道名所図会」のごとく、唐画・浮世絵、そのムキクニて、より合画ニいたさせ可申哉。これも画師一人ならねば、諸方のかけ合、格別わづらハしく候へ共、山水などハ、江戸の浮世絵師の手際にゆく事にあらず。又、婦人その外市人の形は、うき世絵ニよらねば損也。両様をかねたるものは、北斎のミなれども、右の意味合あれバ、より合図ニ可致哉と存候事」（注・ルビは筆者による）。

※「雪中奇観」は『北越雪譜』（鈴木牧之。天保8年〈1837〉）のこと。挿絵の山水は浮世絵師の手際でなく、市中の婦人や人物は浮世絵師がよく、その両方に長けているのは北斎だが、画料も高く気難しいので、それぞれに長けた人との合作にしたらいと云うのである。しかし、結局北斎単独の挿絵も合図の挿絵も実現しなかった。

【2・3月頃、牧墨僊宅から伊勢・紀州・大坂・京都へ行き江戸に帰る】

★「一説に、北斎尾州名古屋より伊勢に行き、紀州に入り、夫より大坂京都を歴遊し、江戸に帰りしといふ。按ずるに、北斎が尾州に到りしは、文化十四年の春にして、夫より一年程滞留せしなれば、其紀州に赴きしは、明年二三月の頃なるべし」（『葛飾北斎伝』p130～131）

●絵馬図「劉備檀溪渡河図」（文政元年。無款。桐板着色。61.0×98.0 常楽寺美術館蔵：上田市指定文化財。）

※昭和45年（1970）12月、小布施の宮沢四郎氏が発見。翌年『騷友』という雑誌に発表された。図の左上に「文政元年 戊寅十月」とあり、右下に「上田原町赤羽氏」とあると瀬木慎一『画狂人北斎』（p106）で紹介している。

上田市の説明では「文政元年（1818）、上田原町の赤羽氏が常楽寺北向観音堂に奉納したことがわかる」としているが、「北斎の画であるか精査が必要」ともしている。

北斎が小布施に行ったのは、天保13年（1842）と考えられるので、北斎の画であれば、何らかの関係で依頼されて江戸から送ったものが奉納されたのだろうか。あるいは、この年の京都から江戸へは中山道を使い、途中上田に立ち寄ったか。常楽寺は長野県上田市別所温泉2347。

図は、劉備が激流を愛馬で檀溪の激流渡り、難を逃れる姿を描いている（『三国志』）。

劉備檀溪渡河図（常楽寺：『北斎 東西の架け橋展図録』より
転載）



●絵手本『伝神開手 北斎漫画 八編』（1
月。半紙本一冊。22.8×15.8 島根県立美術
館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/ホノルル美
術館/山口県立萩美術館：浦上記念館/フリーア
美術館：プルヴェアー・コレクション蔵）

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふ

しのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗円楼北泉、尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、
東南西北雲。文化十四年丑孟春注 竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本
石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）、角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）
と記されている。

※後摺奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 校 北亭墨僊、東南西北
雲。書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、角丸屋甚助
（江戸麹町平川）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）」とある。

注）丑孟春（文化14年）：袋には「戊寅（文政元年）」とあり、実際にはこの年の刊行
である。



伝神開手 北斎漫画八編（山口県立萩美術館）

【翁は葛飾一族の画祖なり】

☆序文「戴斗翁、幼きより画癖あり。唯食、唯画而已。遂にもて葛飾一風を興し、画名世
に高し。於茲、其門に入て伎を学ふ者多し。翁これに教て曰、画に師なし、唯真を写事
をせば、自ら得べし。門人これを愁ふ。或人翁が言を聞て翁を諫て曰、翁は葛飾一族の
画祖なり、翁が風を慕ふ徒は、これが風たらん事を欲す。然れば、何も他に師を索むべけ
ん。離婁の明、公輸子の巧注も規矩を以てせざれば、方円を成事能はず。翁の門に遊ぶの
徒、翁の臨本を得ざれば、葛飾風たるを不得。何ぞこれを察せらるやと。翁、この言を爾
りとし、山水、人物、鳥獸、草木、堂宇、器財に至るまで閑ある毎に写し出し、上木し、
以て門人に授く。漸々として八編に逮、これか序辞を予に議る。予、画を知らざれば、画を
論すること能はず。こゝにおゐて此編の成る所以を記し、以て序辞に換こと爾り。縫
（之繞がない）山題」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による。ルビは筆
者による）

注）離婁の明、公輸子の巧：離婁は離朱のこと。中国黄帝時代の伝説上の人物。視力にす
ぐれ、百歩離れた所からでも毛の先まで見ることができたとされる。公輸子は名巧とい

われた。『孟子』(卷第七離婁章句上 六十二節)に、離婁の目の良さでも公輸子の巧みさでも、定規やコンパスがなければ正しく四角や円を描くことが出来ないとの孟子の言葉があり、これを踏まえた記述である。

☆表紙：「八編 北斎漫画」と書かれた背景に、蝶と木の葉が風に舞っている趣の図。

●絵手本『伝神開手北斎画鏡』(春。大本注墨絵一冊。全29丁。内題は『伝心画鏡』とある。戴斗。名古屋・菱屋久兵衛、京都・菱屋治兵衛、大坂・河内屋太助、江戸・角丸屋甚助、名古屋・永楽屋東四郎の合梓版。25.5×17.0 島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館/大英博物館/フリーア美術館：フルヴェラー・コレクション蔵)

※和漢の故事古典や動植物、風俗などを集める。1 ページ(半丁)を分割して多くの絵を挿入している。後、『秀画一覽』(色摺判。一冊。文政2年：1819)、『北斎画鑑』(淡彩摺本。一冊。安政5年：1858 永楽屋東四郎版)として改題再摺される。

注) 大本：美濃判紙を二つ折りにした大きさ。約26.0×18.0。普通、絵手本は半紙本(半紙を二つ折りにした大きさ。約23.0×16.0)が多い。

☆〈猩々舞〉猩々が酒宴を開き、一人が棒柄杓と扇子を持って踊り、一人が撥で三弦を弾く。背中合わせで酔ってもたれ合う二人もいる。右端に「寿」の字のある大盃に瑞亀が描かれる。猩々舞

☆〈牛飼〉川を渡る牛と手綱をとって細い板橋を渡る牛飼いの図。

他に、〈唐子遊〉〈三福神〉〈布袋〉〈耕作〉〈伊勢参〉〈旅中の雨〉〈雪中〉〈其二〉〈風〉〈其二〉〈月下〉〈盲人の喧嘩〉〈琴碁書画〉〈婦人子愛〉〈子供戯〉〈村老評議〉〈野来〉〈猪の番屋〉〈仁田の四郎〉など。

●絵手本『萍水奇画』(2月。二冊。着色。暮雨巷三世帯梅撰。袋に「東都北斎戴斗画」とある。人物を北斎が、山水を流光斎注が描く。後半は俳句集となっている。末尾には「文化十五年戊寅仲春刻成」とある。岡口屋弥四郎・永楽屋東四郎版。大英博物館/東京国立博物館/名古屋市蓬左文庫蔵)。文政4年(1821)1月に『狂歌画譜 藐姑射山』に改題後摺、更に文政年間に『絵本両筆』(一冊本)と改題後摺される。

※享和3年(1803)に刊行された流光斎如圭注の役者絵本『劇場画史』の改版。その中の人物を削り、新たに北斎の絵を入れたもの。

注) 流光斎：流光斎如圭。生年不明～文化7年(1810)頃に死去。上方の浮世絵師。

●絵本『遠州流 挿花四季詠』(半紙本。4巻4冊。蓬生亭森一訓撰。大田蜀山人の序。菱川宗理注写。西村元六〈浅草田原町〉・和泉屋庄次郎〈浅草新寺町〉版。早稲田大学図書館/お茶の水女子大学蔵)

注) 菱川宗理：宗理号は既に寛政10年(1798)8月頃に門人宗二に譲っていることから、二代目宗理(宗二)の図であろう。

●艶本『津満嘉佐根』(序題は「津間佳左寝」の表記。色摺半紙本。三冊。口絵の書入れは北斎。序文と本文は鼻山人で「看板に偽なし然も大キナ 鼻山人誌」とある。

娘・阿栄の代作もあるか（『芸術新潮』1989年3月号「北斎」特集所収、林美一「北斎 艶本への挑戦」）。

※「大キナ 鼻山人」は北斎の鼻が大きいことを自嘲した偽名か。

津満嘉佐根：口絵（ARC 古典籍ポータルデータベースより）

【初の大判鳥瞰図】

● 錦絵鳥瞰図「総房海陸勝景奇覧」（この頃か。「総房一覽図」とも。横大奉書全紙判（大判）錦絵。葛飾前北斎改戴斗画。印文不明。蔦屋重三郎（耕書堂）・鶴屋金助（双鶴堂）・角丸屋甚助（衆星閣）の合梓。鳥瞰絵図。袋（19.6×14.0 神戸市立博物館蔵）には、北斎改葛飾戴斗先生筆とある。38.4×52.8 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション/船橋市立図書館/東洋文庫：岩崎文庫蔵）



※ 蔦屋重三郎の画中左の枠内広告に「後編板東図 八ヶ国の名所古跡且神社 仏閣温泉の地に至る目前にのぞみ見るかごとく工夫せし絵図なり」とある。

「総房」とあるが、日本橋、品川、藤沢、江ノ島、鎌倉など江戸から三浦半島が中心に据えてある（『原色浮世絵大事典』第8巻p77 大修館書店）。



総房海陸勝景奇覧（すみだ北斎美術館）

【北斎、蕙斎の一覽図を窃かに笑う】

※ 鋏形蕙斎（1764～1824 北尾政美）の俯瞰一枚絵「江戸一目図屏風」（袋は「江戸名所の絵」とある。文化6年（1809）刊）などを北斎も見たか。

「蕙斎嘗て京師の人、黄崑山脚注が「花洛一覽図」に倣ひ、「江戸一覽図」を画き、世人を驚かす。これ江戸八百八町を一紙の中に縮めたるを賞するなり。北斎窃かにこれを笑ひ、武蔵、相模、伊豆、安房、上総、下総を一紙に縮図して「総房一覽図」と名づけ、刊行せり。世人又其の巧妙、蕙斎の上に出づるに驚く」（飯島虚心『葛飾北斎伝』p72 ルビは筆者）。

脚注）黄崑山：のち松村呉春（1752～1811 四条派の始祖）にもつく。天明4～天保8年（1784～1837）。

※ 大判鳥瞰図は、本図の他「東海道名所一覽」（文政元年：1818頃）、「木曾名所一覽図」（文政2年：1819）「奥州塩竈松島之畧図」（文政7年頃：1810）、「唐土名所之絵」（天保1年：1839）などがある。

☆〈袋〉（北斎改葛飾戴斗先生筆。書林 耕書堂 衆星閣 双鶴堂 合刻。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

●錦絵鳥瞰図「東海道名所一覽」（大大判鳥瞰図注錦絵一枚。葛飾前北斎戴斗筆。印たい斗。袋（46.2×32.6）には、文政 戊寅新鐫 葛飾前北斎戴斗老人画とある。須原屋茂



兵衛（千鐘房）・小林新兵衛（嵩山房）・角丸屋甚助（衆星閣）合梓。43.2×58.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/ライデン大学図書館/品川区立品川歴史館/島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館/神戸市立博物館蔵）

注）鳥瞰図：鳥目絵と呼ばれた。
東海道名所一覽（すみだ北斎美術館）

※一枚の絵に東海道全図を鳥瞰的に

描く。鋏形蕙斎（北尾政美 1764～1824）の「江戸一覽図」（文化7、1810）の真似か（斎藤月岑『武江年表』〈寛政年間の記事〉より）。

図は、右下の江戸・日本橋から図の左に向けて東海道名所が描かれ、図の右上に京都が配置される。

☆〈袋〉（葛飾北斎戴斗老人画。東都書林 衆星閣蔵。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

●扇面図「蔬菜に撫子図」（紙本着色扇面。北斎戴斗筆。印ふしのやま。17.8×49.6 ホノルル美術館蔵）

※蔬菜は青野菜をいうが、図は葉付の山葵、蓮根、独活、茄子が描かれ、茎の先に咲く撫子の花が添えられる。

文政2（1819）己卯 60歳 北斎改葛飾戴斗、東都画工葛飾北斎、葛飾戴斗、葛飾北斎、

葛飾前戴斗、前北斎戴斗、前北斎戴斗老人、（月痴道人）印ふしのやま、雷震、たい

斗：こと（49歳）、（阿美与：31歳）、（孫：10歳）、（阿栄：22歳）

◇この頃、江戸で料理茶屋が繁盛する。

◇10月26日。勝川春英没（58）。

○十辺舎一九『清談峯初花 初編』。中判読本のバリエーションとしての「人情本」の初め。後編は文政4年（1821）刊。

○12月、小林一茶、俳文集『おらが春』成稿（一茶没後、嘉永5年（1852）に白井一之が自家本として刊行）。

【戴斗を北泉に譲り、為一号を翌年から用いる】

★「戴斗」号を門人の斗田楼北泉に譲る(本名：遠藤注伴右衛門)。二代戴斗となるにもかかわらず、落款には二代と記さず「戴斗」とあるので、初代戴斗(北斎)作との区別には注意を要する。

注) 遠藤：近藤とも。『増補浮世絵類考』(『浮世絵類考』岩波文庫版 p158)に「戴斗(文化文政の人)俗称伴右衛門 遠藤氏(小笠原家浪人なり)始は北泉」とある。『森銚三著作集第四卷』(p474)には「麴町平川町天神前京極殿家臣、画名、後ノ北斎戴斗、近藤伴右衛門」とある。

★「為一」と改名(天保4年頃まで使用)。還暦を迎えて「もう一度」の意味を込めたか。ただし、実際に使用したのは翌年からか。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 九編』(春。半紙本一冊。22.7×15.8 ホノルル美術館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/フリーア美術館：ブルグエー・コレクション蔵)

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗田楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、月斎哥政。文政二年 卯春 竹川藤兵衛(江戸日本橋四日市)、英屋平吉(江戸本石町十軒店)、永楽屋東四郎(名古屋本町七丁目)、角丸屋甚助(江戸麴町平川二丁目)」と記されている。

※後摺奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 校 北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉(江戸本石町十軒店)、竹川藤兵衛(江戸日本橋四日市)、角丸屋甚助(江戸麴町平川)、永楽屋東四郎(名古屋本町七丁目)」とある。

☆表紙：軍配に篆書体で「漫画 九編」と書かれ、七星が描かれる。

☆序文「漫画となづけたるふみ、次てにこゝのたび木にゑりぬとか。こたびはことさらにめづらかなるさまをとて、もろこし、やまとをいはず、ふるきよのいくさ物語どもを、こゝかしことえりとうでゝ、例のたへなる筆に

ものせられつ。(略)六樹園注」

注) 六樹園：宿屋飯盛(石川雅望)

☆〈近江国貝津ノ里・傀儡女金子カ力量〉

※平安末期、近江の国貝津の遊女お兼は川で洗濯の帰り道、あばれ馬の手綱を足駄で踏み押さえたという伝説を描いた画は歌川国芳「近江の国の勇婦於兼」(洋画風)に影響を与える。



九編 傀儡女金子カ力量(すみだ北斎美術館)

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 十編』(春。半紙本一冊。ホノルル美術館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/フリーア美術館：ブルグエー・コレクション蔵)

※末尾（29 丁裏）に、亀甲模様の着物を着た寿老人が、筆を持ち、「大尾」（最終）と書いた紙を持っている図がある。以上で一応完結としたが、好評により続刊される。



※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗円楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、月齋哥政。文政二年 卯春 竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）、角丸屋甚助（江戸麴町平川二丁目）」と記されている。十編末尾（ARCポータルページより）

※後摺奥付には、画工名はなく「京都書林 伏見屋藤衛門（堀川通）、大坂書林：柏原屋与右衛門（心齋橋通）、同清右衛門、同河内屋木兵衛、同敦賀屋九兵衛、東都書林：角丸屋甚助（糴町四丁目）、大坂屋茂吉（日本橋砥石店）、前川六左衛門（同新右衛門丁）、尾陽書林：永楽屋東四郎（名古屋本町通七丁目）」と記される。

☆序文「おのれざえなくて、よろづのわざにあたはざること多かり。されど、囲碁、蹴鞠などすぐれたる上手の物するを見ても、あなめでたとおもふばかりにて、人をうらやみ、みづからをくゆるこゝろうごかず。たゞ、絵こそ堪ざる身をつみて、よくする人のうら山るゝ物はあれ。さるは読書するにも、殿舎、調度、こゝはかくあるぞ、それはしかあるしと、文字に書きとりては、おぼぐしくのみあるを、絵にうつし出しては、こよなくさとやすし。北斎漫画十編まで梓（版木）にゑりて（彫って）、世に行はる。おのれこれを見て、堪ざるくひは、千度にあまれり。あはれ世上の君子たち、翁にならひて、堪ざるくひし給ふな、ゆめぐ。文政二年十月 榊欄台老人（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎より）



十編 累の怨恨 祐天和尚 三日月上人菊女ケ霊



大人遊びの百面相力持 猿引 夢の浮橋 手妻師

☆表紙：「漫画 十編」と書かれた下に「文昌星」が描かれる。「魁」ともいい、「魁」を分解すると「鬼」と「斗」（升）となるので、鬼が龍に乗り片手に升を持ち、片手に筆をもっている図。筆は古代中国の科擧の試験に臨むことを象徴し、龍は星を象徴しているという。北斎の北斗星信仰からの着想。

●絵手本『北齋画式』（4月。大本淡彩摺。画題のない図が多い。大本一冊。25.7×18.3。46頁の多くが見開き一図の構成。全23丁、扉半丁と序文1丁半は含まず。葛飾戴斗筆。印ふしのやま。大英博物館/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/フリーア美術館：プロヴァンサール・コレクション/メトロポリタン美術館蔵）

奥付（メトロポリタン美術館）

※奥付に「東都画工北齋先生 葛飾戴斗筆 印ふしのやま 板木工 大坂 山崎庄九郎 文政二年卯四月」とあり、書林は須原屋茂兵衛（江戸）・和泉屋庄治郎（江戸）永楽屋東四郎（名古屋）・秋田屋太右衛門（大坂）・伏見屋藤右衛門（京都）・和泉屋利兵衛（京都）が連記されている。

「フリーア美術館プロヴァンサール・コレクション日本絵本コレクション目録稿」では文政元年9月序としている。

※初めの図の前に「臥遊」と表記している。

※動植物、宗教画、風俗などを描く。関西の版元からの刊行なので文化14年(1817)の大達磨のパフォーマンス時に制作したものかとの見方あり。

『北齋画式』（蛭子）（大英博物館）

※文政3年の『良美瀟筆』からも図を追加挿入して、『北齋画譜』（半紙本。三冊。永楽屋東四郎版）と改題。初巻は天保初年に、中巻と下巻（嘉永2年）は北齋没後7ヶ月後にも刊行された。

※八隅景山（東都景山処士）の序文。

「（略）爰を以、今年浪華宋榮堂（注：秋田屋太右衛門のこと）の主人、此画式を乞、山水人物禽獸草木、初心の規矩となるべきものゝ、尤勝たるを求て梓（注：板木）に鏤、名て北齋画式といふ。画に志有の輩及諸職百工の徒、此画式によって出入せば、其図を伸縮左右し、且画法得こと師に随て学が如し（略）」（『秘蔵浮世絵大観プロヴァンサール・コレクション』p270による。注・句読点・ルビは筆者による）

〈蛭子〉〈梅松桜に白太夫〉〈釈迦と羅漢〉〈雪景山水〉〈大塔の宮を窺う淵辺伊賀守〉〈花籠〉〈不動明王と役小角〉〈街道風景〉〈蟹〉〈海上群仙〉〈月夜山水〉〈相撲〉〈鉦花に交魚〉〈木こり〉〈藤に鷹〉〈落雁と雀〉〈雨中人物〉〈雨後の日〉〈梅に鶴〉〈在郷風景〉〈毘沙門天〉の図などが描かれる。『北齋画式』（鉦花交魚）（大英博物館）



※明治15年4月に再刻版『北斎図式』（横型二つ切判一冊。東京武田殿右衛門版）が出版されている。

●絵手本『秀画一覽』（『北斎画鏡』（文化15年：1818）の改題再摺判。着色。東都画工葛飾北斎画。袋には北斎戴斗。自家出版か）

●咄本『落咄福寿草』（1月。中本一冊。紀尾左丸作。葛飾北斎画。丸屋文右衛門版。東大文庫蔵）

●絵手本『画本早引』後編（7月。墨摺。二編中本一冊。前北斎戴斗筆。和泉屋市兵衛版。島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/名古屋市蓬左文庫蔵）

※前編は文化14（1817）年刊。

※自書解題には「節用集にならひ、画図をいろは引にして、其品をさぐりやすく、画風もまた初学の上達しやすきやうに、工夫せしものなり」とある。様々な画題の絵を「いろは」順に配列したもの。

※後編は「う」から「す」までの語句に関わるコマ絵を描く。末尾には「京」と題して、大原女が煙管を加えて休んでいる絵に続き、「市(一)」（市場の賑わい）、「荷(二)」（雨中に天秤棒の荷物を担ぐ男）、「算(三)」（算盤で計算する商人）、「士(四)」（侍が二人座って向かい合っている）、「碁(五)」（囲碁盤と碁石）、「禄(六)」（禄を納める男と吟味をする役人）、「七(七)」（北斗七星）、「蜂(八)」（蜂の姿）、「苦(九)」（苦しみ悩む女）、「重(十)」（重箱）、「百」（火鉢の前の翁）、「扇」（扇の絵）、「万」（一万年の瑞亀）の絵が描かれる。



『画本早引 後編』（メトロポリタン美術館：ARC 古典籍ポータルデータベースより）

●読本『逆櫓松』（1月。角書「高麗若全伝」。六冊。南里亭其楽作。前北斎戴斗画（門人北雲の画もあり）。雷震。京都和泉屋利兵衛版。立命館大学 ARC 蔵）

※逆櫓松は、大阪府大阪市福島区福島地区付近にあった老松。源平合戦において、この老松の下で源義経と梶原景時が軍議の評定を行ったとされる（Wikipediaによる）。

●俳書『うめわさん』（月痴道人）

※『年譜』で「葛飾北斎改名考（其三）」（漆山天道「書物展望」2ノ7 書物展望社 昭和7年）を引いて紹介している。

●錦絵「木曾路名所一覽」(1月。大判一帖。葛飾前北齋戴斗筆。印たい斗。角丸屋甚助(衆星閣)・河内屋金助(文金堂)・亀屋甚助(千鐘房)合梓。42.0×56.3 岐阜県図書館/日本浮世絵博物館/神戸市立博物館/東洋文庫/ライデン大学図書館蔵)



木曾路名所一覽 (岐阜県図書館)

※「袋」(47.0×32.7)には「前北齋戴斗老人筆 文政二卯孟春 東都書林衆星閣蔵」(神戸市立博物館蔵)とある。

●摺物「因幡の白兔」(前北齋戴斗筆。ポーランド・クラクフ国立美術館蔵)

※『古事記』の神話を題材にした図。大黒天(大国主命)が毛をむしられた兔の傷の治し方を教えているところか。



因幡の白兔 (クラクフ国立美術館)

●肉筆画「鵜飼図」(絹本一幅。葛飾戴斗筆。印ふしのやま。96・8×36・1 MOA美術館蔵)



※蛇行する川面に松明をかざしながら、綱で鵜を操っている。流れる川の曲線、水面に出た鵜の羽根の藍色。谷素外

注 87歳の賛「おのか火に てらすや 皐月 闇の業 玉池 八十七翁素外」が記される。素外 87歳は文政2年である。

注) 谷素外：1733～1823 俳人。江戸談林派七世。

鵜飼図 (MOA美術館)

●肉筆画「寄書き十三図」(仮題。一幅。この頃か)

※檜崎宗重『北齋論』(p 327～328)に次の記事がある。参考に記す。「北齋の甲州旅行(文政八年頃。「浮世絵師伝」による)に関係があると考へられるが、甲府松林軒百貨店に貴重な作画ある。それは粗末な唐紙にかゝれたもので、北齋の一幅と、横に長くついだ紙に門人が画をかいている」として、第一に形工亭北一の図、第二に昇亭北寿の図、第三は岳亭春信の図、第四は戴月の図、第五は戴一の図、第六は北溪の図、「第七は辰女筆印よしのやま(筆者注：「ふしのやま」か)、第八は北泉戴岳ではじめ北泉、改めて戴岳、文政二年より二代戴斗となった人、これは署名だけあり、第九に猿引図に戴斗筆とあつて「ふもとのさと」と印を捺してある。この一巻は寄せ書風で同時にかゝれたもので」とし、更に第十に北岱の図、第十一に戴振の図、第十二に森島氏の図、

第十三に貫亮と署名一明の図があると記している。「これは文政二年頃の作と考えられる」としている。

文政3 (1820) 庚辰 61 歳 葛飾戴斗、東都画工葛飾戴斗、北斎戴斗改葛飾為一、葛飾

為一、北斎改葛飾為一、東都北斎戴斗改葛飾北斎為一、前北斎為一、北斎改為一 印 葛

しか、一人人形：こと (50 歳)、(阿美与：32 歳)、(孫：11 歳)、阿栄 (23 歳)

【為一前期】

◇1月24日、北尾重政没 (82)。

◇3月7日、写楽没 (58)。『2011 年 写楽展図録』（東京国立博物館）では以下の様に説明している。

「写楽は安房藩の喜多流の能楽者斎藤十郎兵衛であることが実証されており、能役者名簿『重修猿楽伝記』と『猿楽分限帳』の記述から、文化7年(1810)、十郎兵衛が49歳で実在していたことが内田千鶴子氏により確認された。さらに平成9年、徳島市の歴史愛好会「写楽の会」により、埼玉県越谷市の法光寺が斎藤家の菩提寺と確認された。同寺の過去帳に「辰三月七日 釈大乘院覚雲居士 八町堀地蔵橋 阿州殿御内 斎藤十良兵衛事行年五十八歳 千住ニテ火葬」とあり、辰年に当たる文政3年で没したことになる」(p17)。

◇9月4日、浦上玉堂没(76)。

◇12月29日、浅草庵市人没 (66)。

【この頃より為一号を用いる】

★「江戸ゑいりよみ本戯作者画工新作者番付」に歌川豊国と同格で最上位に載る（『年譜』による）。

★この頃、本所緑町に住むか（この年の手紙に、「みどり町為一拝」とある由、檜崎宗重『北斎論』による）。緑町2丁目（堅川脇）（『和楽』2017年9月・10・11月号 p71掲載の「嘉永 新鐫 本所絵図」による）か。

★この頃より摺物が増加する。

★正月、両国東広小路での見世物(造り物・虎)での摺物「千里嶽 虎あそび」を描く。

★2月、浅草奥山興行の麦藁細工注の見世物絵を描く。

注) 麦藁細工：実際には籠細工で、細竹を組み合わせて北斎の下絵に従って細工師が作った。

【阿栄、夫の絵を笑い離縁】

★この頃、阿栄、離縁して実家に戻るか。

鈴木由紀子『浮世絵の女たち』（2016・幻冬舎・p188）では文政10年（1827）頃とする。文政11年とする説もあり。

※『武江年表』（斎藤月岑）文政二年条には、浅草竹細工の見世物に触れ、阿栄の離別にも触れている。

「それよりまた一兩年すぎて、浅草奥山に同じ細工人の作、其みせ物の看板は山姥と金太郎なり。是もいと花やかにて、細工は前前と同じく、顔手足籠目あざやかに透、指など細かなる所いと能作れり。此細工の彩色は、橋本町の水油屋庄兵衛が倅幼名吉之助といひしが、成長して画師等琳が弟子となりたれども、画は又一風なり。北斎が女を妻としたりしが離別したり、其故は北斎が女（筆者注：お栄のこと）絵をよくかき、芥子人形など作るに巧みなり、されど吉之助画を手伝はせず、其外にはこの女針わざ縫物などはよくせず、かれこれ心になわずして別れたりとぞ、右かご細工はこれ（南沢等明のこと）が彩色なり、下絵も同じ」（「国立国会図書館デジタルコレクション」p208）。「水油屋の倅吉之助」は南沢等明のこと。

この年に離縁と仮定するのは文政2年から「一兩年」を文政3年とする説に従っている（2011年3月16日、島田賢太郎「台東区生涯学習浮世絵講座『葛飾北斎』第六回 没個性の画派・北斎派と娘お栄の活動」より）。引用文末の「下絵も同じ」は、葛飾北斎の誤りか。

※20歳で嫁ぎ23歳で離縁となるが、嫁いだ年と離縁の年はあくまで仮説である。

※「関根氏曰く、阿栄の挙動、北斎翁に似たれば、其の離別せらるゝも、亦宜ならずや。且かの等明は、画を嗜みて画きたれど、阿栄よりは拙し。故に阿栄は、常に其の画の拙所を指して、笑ひしと。」（『葛飾北斎伝』p308。ルビは筆者による）

【阿栄、応為（オーイ）と号し、美人画に長ず】

※阿栄が応為と号した時期については明確でない。北斎の為一号から「為一に応ずる」として「応為」と名付けたという説が一般的なので、北斎が為一号を用いた期間には間違いないと思われる。

「阿栄家に帰りて再嫁せず。応為と号し、父の業を助く。最美人画に長じ、筆意或は父に優れる所あり。」（『葛飾北斎伝』p309）

「按ずるに、応為の名、何に拠るを知らず。一説に、応為は、訓みて、オーイ、即呼ぶ声なり。阿栄父と同居、故にオーイ、オーイ親父ドノといへる。大津絵節注より取りたるならん。蓋し別に意味あるにあらずと。或は然らん。」（『葛飾北斎伝』p309。ルビは筆者による）。

北斎が阿栄を「オーイ」と呼んだというのが一般的だが、この記事によれば、阿栄も北斎に対して「オーイ親父ドノ」と呼んでいたらしい。

注) 大津絵節：近世の俗曲の一。近江の戯画大津絵の画題を読み込み節付けした「げぼうのはしごすり」を本歌としたらしく、文化・文政期に江戸で種々替歌が出来、全国的に流

行した。本書で引用する歌詞は「忠臣蔵五段目山崎街道」の定九郎が与一兵衛を呼び止める「オイオイおやじ〈爺どの、其金そのかね此方こちらへ貸して呉れ」をさすものと思われる（同書脚注）。

★7月、両国回向院での見世物で瀬戸物細工に下絵を描く。

●艶本『波千鳥』（この頃か。大錦横判。折帖一冊 12 図。「富久壽楚宇」〈文化 12 年:1815〉の改題版『會本佐勢毛が露』（文政初期）を更に白雲母摺判とし、彩色の豪華本に仕立てたもの）

※浪に千鳥の蒔絵のある黒漆塗の桐板表紙を付けているところから、通称『浪千鳥』と呼ばれる。他に紅雲母摺本や普通の紙表紙本、あるいは着物や肌、陰毛などに手彩色（肉筆。阿栄によるものか）を加えた豪華本など、弘化頃まで制作を続け、いくつかのヴァージョン本がある。「富久壽楚宇」にあった序文や書き込みはない（1989 年『芸術新潮』3 月号「北斎」特集所収、林美一「北斎 艶本への挑戦」による）。



波千鳥（部分：Amazon.co.jp より転載）

●絵本『陰隠文絵抄』（角書「和語」。1 月。2 冊。秋田屋太右衛門版）

※画風から、前年に号を譲った二世戴斗の絵とする説がある（リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p333）。

●絵手本『良美灑筆』（5 月か。大本一冊。淡彩。奥付に「東都画工葛飾戴斗筆。校合門人 月光亭墨仙 戴瑛・北鷹・月斎哥政 書林 角丸屋甚助・永楽屋東四郎・美濃屋清七・美濃屋伊六」とある。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※後に『北斎画譜』（3 冊。永楽屋東四郎版）に収録された。

「良美」とは、良い日がらで、美しい景色の意味だと、序文にある。「灑」はさっぱりした、ものにこだわらないという意味から、全体として「これらを併せて表題を考えると、良い日の美しい景観を気取ることなくさわやかに描いたもの、と解釈して許されるのではないだろうか」と永田生慈は述べている（『北斎の本懐』角川新書 p106）。

☆〈雪中の万歳〉

※雪降る中、漫才師の一行が傘をさして歩いている。他にも傘をさして行き来する人々。全体に楕円の構図。雪中の万歳 (<https://www.bakumatsuya.com/>より)



☆〈雪解川〉

※全体に S 字の構図。六頭の牛（角は水牛のように見える）が川の中を S 字形に連なって行く。



雪解川 (<https://www.bakumatsuya.com/>より)



野分 (<https://www.bakumatsuya.com/>より)

☆〈野分〉

※「風の強い日」とも。吹き付ける強風に体を支えるようにしている旅人たち。笠が飛びそうになり、着物の裾は激しく靡いている様子を描く。

☆〈蛇雉子を巻く〉



※雉子に絡みつく蛇の目と雉子の目が合っている。

蛇雉子を巻く (<https://www.bakumatsuya.com/>より)

☆〈盲人の川越〉

※雪の夜、多くの盲人が裸

足で、手を繋ぎながら歩いている様子を描く。

盲人の川越 (<https://www.bakumatsuya.com/>より)



他に☆〈初日影〉☆〈汲古閣にて書を嚮ぐの図〉

☆〈落梅花〉☆〈春雨の往来〉☆〈隅田川遠桜〉☆〈狂女蝶に戯る〉☆〈目に青葉山郭公初松魚〉☆〈鐘馗〉☆〈蔓菊・蜂・石竹〉☆〈山吹・文鳥〉☆〈夏の往来〉☆〈晩夏の山水〉☆〈夕立〉☆〈秋の七草〉☆〈蓮切〉☆〈山家の月〉☆〈水辺の月〉☆〈月下の往来〉☆〈悟道〉☆〈郭子儀〉☆〈雪の曙〉☆〈餅椿〉☆〈福ハ内〉☆〈青陽〉

●絵手本『北斎麓画』（5月。大本墨絵一冊。全29丁。25.6×17.9 奥付には「東都画工葛飾戴斗筆 書林 角丸屋甚助（江戸）・永楽屋東四郎（名古屋）・美濃屋清七（名古屋）・美濃屋市兵衛（名古屋）・美濃屋伊六（名古屋）」とある。島根県立美術館：永田コレクション/フリーア美術館：フルヴェラー・コレクション蔵）

※1年12カ月の風景を中心に動植物や中国の故事を描いたもの。

※『良美瀧筆』（美濃屋伊六版）の改題・再版本。後、『北斎画式』と『良美瀧筆』の絵を合わせ『北斎画譜』（半紙本。三冊。永楽屋東四郎版。国際日本文化研究センター蔵）と改題し、下巻が北斎没後の7か月後に出版された。

●案内チラシ「**麦藁細工絵番付**」（墨摺番付2枚綴り。島根県立美術館：永田コレクション/大田区立郷土博物館蔵）

※**麦藁細工興行**の案内チラシ。実際の麦藁細工の下絵と別絵となっている。

●錦絵「**麦藁細工報条**」（2月。「**麦藁細工報状**」とも。大判彩色四枚続。下絵校合北斎戴斗改葛飾為一。鶴屋金助版。東京国立博物館蔵）

※文政3年（1820）2月、浅草奥山で興行された麦藁細工制作のための下絵。北斎の下絵によって造られた麦藁細工を示す。

※「**麦藁張細工 同所〈浅草奥山〉へ出、七丈余りの青龍刀、十二支の額、其の外北斎の下絵にて見事なり。大森の職人これをつくる**」（『増補武江年表』巻之八 国立国会図書館デジタルコレクション p 210）

〈**青龍刀**〉 〈**孔明**〉 〈**丹頂鶴**〉 〈**十二支額面**〉 〈**周蒼**〉 〈**龍頭**〉 〈**蜀の勇士**〉等の図。

「江戸浅草金龍山境内にて御覧に奉入恨」との書き入れがある。

●錦絵「**麦藁細工見世物**」（3月。「**麦藁細工の図**」とも。大判彩色4枚続き。但し、左の一枚は欠。葛飾為一。鶴屋金助版。38.7×77.2 東京国立博物館/太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※「**麦藁細工報条**」とはかなり変化している。

●肉筆画「**白拍子図**」（この頃。絹本着色一幅。北斎戴斗改為一筆。印葛しか。98.9×41.9 北斎館蔵）

※**白拍子**は平安末から鎌倉初期にかけての歌舞を業とする遊女。この絵では、白い直垂、朱色の長袴、立烏帽子を被り柄巻拵太刀（柄と鞘が同じ組紐で巻かれた太刀）を腰に帯び、右手に半開きの扇を持った男装の**白拍子**を描く。

一説に、源義経の愛妾の静御前が、義経との別れを余儀なくされ、源頼朝の妻、北条政子の前で舞う姿という。「しずやしずや賤のおだまき繰り返し昔を今になすよしもかな」と謡う場面。衣服の輪郭をちりちりに描く描法は、戴斗と号した50歳代以降の美人画に顕著とされる。

白拍子図（北斎館）



●摺物「**空満屋連和漢武勇合三番之内**」（色紙判着色。摺物。三図。北斎戴斗改葛飾為一筆。各約20.6×18.3）

※四方側の**空満屋**（「くまや」とも）連の春興狂歌摺物。和漢の武勇を二人組み合わせさせた図。

☆〈**伍子胥と巴御前**〉（スペンサー美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館/仏・ユグット・コレクション蔵）

※**甲冑姿**の**巴御前**が**空満屋**楮垣真枝の狂歌を書いた縦紙を持ち、その脇で椅子に座る**伍子胥**が机に乗せた紙に筆で字を書く図。**伍子胥**は、中国春秋時代、楚の武人。策略に遭い父と兄を楚の平王に殺されたので、復讐を誓い、呉を助けて楚を討った人物。**巴御前**は、

『平家物語』では、木曾（源）義仲に仕える女武者だが、『源平盛衰記』などでは義仲の愛妾としている。木曾義仲が源義経に追われ最後に残った七騎の一人。

☆〈弁慶と唐婦人〉（スペンサー美術館/仏・ユゲット・コレクション）

※婦人は『水滸伝』の顧大嫂といわれる。顧大嫂は、『水滸伝』に登場する女性で、108人の梁山泊の内、101位で地陰星の生れ変りといわれる女傑。弁慶は、比叡山の僧だったが、乱暴者で追い出された。武蔵坊弁慶と名乗り、乱暴を繰り返し、京都で太刀を999本奪い、千本目を五条大橋で牛若丸（源義経）から奪おうとしたが、返り討ちに逢い、降参して義経の従者となった。

狂歌は「やうくと今朝ハ霞を引あひて あそふやうなる春のやまぐ 径」、「春霞たつに習ひておのつから 引はりのよきうぐいすの声 亀峰」、「春くれハ蝦夷か千島の外までも にはへる梅や猛きいさをし 真柄」、「空満屋楯垣真枝の「たつ春の色を競ひてはつ霞 引あふさまや畝火耳梨 真枝」が記される。



弁慶と唐婦人（『ピーターモース・コレクション北斎図録』より転載）

☆〈大井子と樊噲〉（スペンサー美術館/フォッグ美術館/仏・ユゲット・コレクション蔵）

※大井子が菰樽から樊噲に酒をついでいる図。大井子（「おおおいね」とも）は、滋賀県高島市に伝わる伝説の力持ちの女性。水争いで自分の田に水を止められたのに対抗して、闇夜に六・七尺四方の大石を担ぎ水門まで行き、自分の田にだけ水が行くように大石を置いたという。



大井子と樊噲（<http://tiiibikuro.hatenablog.com/>より）

樊噲（？～紀元前189年）は、中国の秦末から前漢初期にかけての武将。漢の高祖・劉邦に生涯仕えた。

狂歌は「谷の戸をひらきて出る鶯の こうもゆたかな春の酒盃出る 杉廼屋末枝」、「紫の露の眉をひき立てて 力もつよく見揺る佐保姫 春恥女」、「花笠を盃にしてうぐいすも 露を汲める春の生酔 空満屋真枝」



●摺物「碁盤人形の図」（1月。着色。北斎改葛飾為一筆 すみだ北斎美術館蔵）

※碁盤の上で、毛槍を抱えて踊る元禄風の髪形をした女の人形を操る 袴姿の人形遣い。男の背後の枠内に、三人房美津丸の狂歌「みつ垣のみつ木といはん梅の花 それしも春が辰之助とて」が記される。水木辰之助注の槍踊りを碁盤人形に仕立てたものという（安田剛蔵『画狂北斎』p124）。

碁盤人形の図（すみだ北斎美術館）

注) 水木辰之助：1673～1745。元禄歌舞伎の代表的な女形。槍踊りなどで有名。

●摺物「酒樽と橘中の仙」(1月。東都北斎戴斗改葛飾北斎為一筆)

※「橘中の仙」とは、橘の実を割ると仙人が碁を打っていたという中国の故事から、碁を楽しむ老人のことをいう。「文政三庚辰」とある。森羅亭万象他の狂歌が記される(『年譜』による)。

●摺物「舞台道具の図」(前北斎為一筆)

※「文政庚辰」とある。画中に坂東秀佳(三世坂東三津五郎)の名がある(『年譜』による)。

●摺物「船着場二美人図」(着色。無款。34.8×60.8)

※屋形船が船着き場に着き、先に上がっている女に手を差し伸べて舟から上がろうとする女の手前には、傘が2本ある。船着き場の明かりに「文政三」の文字が記されている。寛政11年(1799)に同画趣の摺物「舟から降りる芸妓」(宗理改北斎画)がある。

●肉筆画「獅子図」(絹本着色一幅。北斎改為一筆。46.2×69.5 日本浮世絵博物館蔵)

※文政末期説あり。

左図には三頭の子獅子が描かれ、右図には大きな獅子が描かれる。別々の二図をつなげて親子のような図柄になっている。金潰しの背景に墨による太い輪郭線で獅子の形を描き、その体は金地をそのまま生かした描き方。

獅子図 (日本浮世絵博物館)



●扇面画「恵比寿と大黒図」(扇面着色一枚。前北斎為一筆。印一人人形)

※ウラジロや幣を下げた細い注連縄の下で、並んで座り、恵比寿が鼓を打ち、大黒が何かを歌っている。二人の前には鏡餅が置かれている。

文政4(1821)辛巳 62歳 前北斎為一、前北斎先生、北斎戴斗、月癡老人為一、和合堂

主人(隠号)、行年六十二翁葛飾為一燈下席上画、かつしか為一、不染居北斎老人 印さ

きのほくさい、北斗一星高：こと(51歳)、(阿美与：33歳)、(孫：12歳)、阿栄(24歳)

◇2月30日、江戸市中に風邪大流行。窮民29万7千人に施銭が行われる。

◇5月5日(西洋暦)、ナポレオン・ボナパルト没(52)。

◇9月12日、『群書類聚』の編者塙保己一没(76)。

◇長崎に駱駝の雌雄二頭が送られて来る。

◇この頃の寺子屋の様子(文政4年、村上帰旭『筆道師家人名録』より)。

師匠479人（男310人、女139人。但しこれは上記出版の協賛金を出した人数であるので、他の群小寺子屋を含めると7・800人位か）。子が6・7歳になった二月初午の祭礼の翌日から寺子屋入りをする。束修（月謝）は予め決められる。机・弁当持参。四つ上がり（午前10時～11時）、八つ下がり（午後2時～3時）。家でお八つを食べる。

○谷文晁「日本名山図絵」。

○松浦静山『甲子夜話』執筆始める。

○7月、伊能忠敬没後「大日本沿海輿地全図」（大日本沿海実測地図）完成。

【四女 阿猶没か】

★「女子（四女・阿猶か）没」（2019『新北斎展図録』「北斎略年譜」p308より）。

但し、北斎墓碑の側面に「浄運妙心信女 文政四年辛巳歳十一月十三日」とあるのを『浮世絵派画集・第5冊・77頁』（大村西崖）では、長女阿美与の墓碑としている。誰の墓碑かは不明。文政8年条（1825）を参照。

【北斎の挿絵 一枚金一分二朱】

★山崎美成（随筆家。1796～1856）の『海録』巻三に、文政4年のこととして「此比坊間（世間）に行はるゝ敵討よみ本のさしゑ、北斎、豊国（歌川）などの絵がけるは、一枚金一分二朱注位なり、作者へ料を以て謝礼せしも、近比まで五冊物にて五両づつ也しが、今は京伝、馬琴など七両に至れり、十五両と迄なりしと云、古今の変之にてみるべし」（ルビは筆者による）とある（国立国会デジタル・コレクション。コマ番号61。大正4年：国書刊行会版）。

注）金一分二朱：この頃は一両6貫（6000文）程度と思われる。一両=4分、一分=四朱を当てはめると、一両=6000文、一分=1500文、一朱=375文であり、一分二朱は2250文となる。一文25円で換算すると、2250文×25円=56,250円となる。北斎や豊国は挿絵一枚56,250円程度という。山東京伝や曲亭馬琴も相当な稿料だと述べている。一般には大判錦絵一枚が32文から38文（約875円から950円。1文=25円で換算）といわれる。ちなみに、天保13年（1842）には一両は6貫500文に公定価格改定が行われた。

●洒落本『東海探語』（一冊。三芳野（美芳埜）山人戯撰。前北斎為一筆。青州楼版）

※序文に「文政のよつのかのとゝいへるとしの春」（文政四辛と言へる年の春）とある。北斎は口絵に永代橋・石垣・川波及び隅田川岸辺の人家など深川の遠景をスケッチ風に一図描く。挿絵は北秀が描く。

●絵本『藐姑射山注』（1月。角書「狂歌画譜」。墨摺。合本一冊。前北斎先生画。（浪華）立好斎（流光斎）如圭筆。北斎戴斗筆。六樹園編。永楽屋東四郎（東壁堂）版。すみだ北斎美術館蔵）

※『萍水奇画』（文政元年2月：1818）の改題本。更に『萍水奇画』の俳句を削除して絵数を増やした同題の色摺本と、『藐姑射山』の序文と奥付を変えた『画本両筆』（刊年未定。墨摺本と色摺本がある）や、『画本両筆』と同じ序文と奥付を持ち狂歌が削除された

『両筆画譜』(刊年未定。墨摺本と色摺本がある)などの改題本が出る(『ピーター・モース・コレクション北斎』図録 p509 による)。

注) 藐姑射山: 不老不死の仙人が住むという伝説の山。姑射山(『莊子』「逍遙遊」篇)。

【連想遊びの狂歌本・月癡老人為一号を用いる】

●狂歌本・摺物『元禄歌仙貝合』(1月。色紙判〈角判〉全36図。月癡老人為一筆。鹿津部真顔の四方方の狂歌摺物。各約20.0×17.6 千葉市美術館/ジェノヴァ東洋美術館/アムステルダム国立美術館蔵。各作品に付けられた所蔵館は前記3館に加えた所蔵館を示す)

※『馬尽』(文政5年:1822)とともに北斎の揃物としては最大量のもの。鹿津部真顔が率いる四方側の狂歌師による揃物。

※「月癡老人」号はオランダ語の Maanziek (狂人) から創作されたものという。この号の使用は、『元禄歌仙貝合』(文政4年)、「梅に鶯」(「月痴」と表記。団扇絵判錦絵。文政4年頃)、狂歌本『花鳥画賛歌合』(「月痴」と表記。文政11年)に見られ、また『絵本庭訓往来』(文政11年)の六樹園宿屋飯盛の序文で、北斎を指してこの号を用いている(『秘蔵浮世絵大観7 ギメ美術館』p253)。

※各画の隅に画題の貝が扇面のコマ絵で描かれる。

☆〈あこや貝〉(20.7×17.8 すみだ北斎美術館蔵)

※浄瑠璃「壇浦兜軍記」の「阿古屋の琴責め」からの発想。秩父重忠が、阿古屋に夫の景清の居所を問いただしたところ、行方を知らないという阿古屋に琴、三味線、尺八を弾かせ、その音色の陰りの無さに、阿古屋の言葉を信じたという話から、琴と尺八を描き、更に三方に海老と松等を乗せた宝来飾りを描く。『平家物語』巻二の「阿古屋の松」からの連想と考えられている。

☆〈あさり貝〉

☆〈あし貝〉(19.9×17.7 シカゴ美術館蔵)



※脚の長い鶴が六羽が水辺で休んでいる。その足元に二匹の子鶴がいる。水辺には葦が生えている。

☆〈あわび〉

☆〈いたや貝〉(19.8×17.6)

※俎板で餅を小さく切り、正月の用意をする女房と、それを見ている娘。後ろには、橙やウラジロを乗せた鏡餅や、海老に松の正月飾り、玩具の二張りの弓等が飾られている。

☆〈いろ貝〉(20.1×17.7)

※「いろ」は化粧を意味するところから、「京御おしろひ」と書の白かれたおしろい粉の袋、伏せて置かれた紅猪口注、懐中鏡、元結いい紐などが描かれる。

注) 内側に紅を塗り付けた猪口の形をした茶碗。「べにちょこ」とも。

☆〈うつせ貝〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※文政4年の絵暦になっていて、画中の鏡に蛇と大小月が示される。

うつせ貝（島根県立美術館）

☆〈梅のはな貝〉（20.7×18.0）

※梅の花が咲く枝を背景に、漆塗りで飾り紐のついた柄杓と、縄で作った亀が描かれる。

☆〈うらうつ貝〉（19.3×17.8 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※紙の裏打ちをする女。断裁する前の長い紙を棒に巻きつける男。



☆〈かたし貝〉（20.3×17.8 すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館/プルヴェラー・コレクション蔵）

※二張りの大きな蛇の目傘を前にして、子ども二人が片足でケンケンをして、草履隠し遊びをしている。傘の横で腰をかがめる男二人。開いた傘の一つに「寿」「千六百番歌合」の文字が書かれている。松壽菴年益の狂歌「春もまだかたし立て（片足立ち）して遊ぶ子の ざうりかくしや庭のあわ雪」が書かれる。

☆〈かたつかい〉（18.3×17.6 ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※「片貝」から、山鳥の雌雄は、夜は山を隔てて別々に寝るということを連想し、部屋で鳥かごの鳥を眺める二人の官女を描く。

☆〈きぬた貝〉（20.1×17.8 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※「砧」からの連想で、図は砧を打っているように、二人の女が海苔を打っている姿を描く。傍では海水に浮かべた箆に海苔を入れて、棒でかき混ぜている子どもがいる。

☆〈こかい〉（20.0×17.6 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※書き込みの狂歌「青柳のいとひの引音もはる風の 手ふりになれし籠の鶯」（檜曲亭）を基に、籠の鶯にすり鉢で擦った餌をやる二人の女を描く。

☆〈さくら貝〉（19.7×17.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※女の乗った駕籠を下ろして休む駕籠かきたち。天秤の荷物を担ぐ男。頭巾を被り合羽を着た二人の男。街道の風景。遠くに馬が四頭放牧されている。

☆〈さゞへ貝〉（19.1×17.7 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※本所五ツ目の五百羅漢寺（現東京都江東区大島）の三匠堂（三階建てでさざり堂と呼ばれた）を俯瞰して描く。富士山を眺望する場所として有名。

☆〈しほ貝〉（20.2×17.8）

※「しほ（塩）」から赤穂を連想している。塩の入った箱の蓋には「名物 華しほ 播州赤穂本町 高砂屋浦右衛門」と書かれている。高砂屋から高砂の松注を想わせる松の盆栽や、煙草入れの根付けに松を描いている。

注) 高砂の松：兵庫県高砂市の高砂神社（現兵庫県高砂市高砂町東宮町190）境内にある、黒松と赤松が根本で結合した相生の松。謡曲「高砂」で有名な松。

☆〈しじみ貝〉(20.1×17.7)

※道端で莫塵を敷き、首が動く獅子の玩具を売っている男の前で、「鶯」と書いた凧と破魔矢を持った子どもたちが獅子を見てはしゃいでいる。「獅子見」で「しじみ」に結びつけたか。

しじみ貝（千葉市美術館）



☆〈白貝〉(20.0×17.6 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※画を描く白い巻紙の側に梅の小枝が描かれたものが立て掛けられている。硯に置かれた墨、扇、孔雀の羽根を挿した瓶などが描かれる。

☆〈すぢめ貝〉(20.2×17.8 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館蔵)

※鳥籠から抜け出した二羽の雀と宝箱から宝珠・珊瑚・小槌・隠れ蓑・巻物・小判などの宝があふれ出している図で、舌切雀の話(したきりすずめ)を連想させている。

☆〈すだれ貝〉(19.9×17.7 千葉市美術館/プルヴェラー・コレクション/アムステルダム国立美術館/大英博物館蔵)

※姉さん被りの女三人が縁の赤い簾の各部分を作っている図。

☆〈ちくさ貝〉

※裏返された笠の中に紐付きの袋が置かれ、側につくしが懐紙に置かれている。千種が笠の近くに添えられている。

ちくさ貝



☆〈ちどり貝〉(20.6×18.0)

※記された狂歌から、源義経が静御前と吉野で別れる際に与えた初音の鼓が描かれる。ちどり(千鳥)貝から鼓への連想は、千鳥は波千鳥の語もあるように波に縁が深く、波の音は鼓の音に譬えられるところから、鼓の絵に結びつくとする見解がある(2005『北斎展』図録 p 355)。

☆〈なでしこ貝〉

☆〈なみまかしハ〉(20.0×18.0)

※文化6年(1809)の柳々居辰斎の『歌仙貝』にある〈浪間かしは〉からの影響が指摘される。首尾の松の下に停めた猪牙舟から松を眺める飄客(遊郭などで遊ぶ客)を描く。『歌仙貝』に描かれた猪牙舟は浅妻舟(春を売る女がいる舟)を暗示していることから、「浪の間の柏餅」、すなわち、浪間の舟の上で、柏餅のように蒲団を二枚重ねての秘め事に関連付けているか。

☆〈にしき貝〉(19.6×17.8)

※柳の木に囲まれるように家並が描かれる。狂歌の中に吉野の六田が詠まれているところから柳で有名な六田の風景と考えられている。

☆〈はな貝〉 (21.4×17.5 北斎館蔵)

※図右に小さく貝が描かれ、松などが花器に生けられ、盆に水仙や椿の花が置かれている。

☆〈はまくりかい〉 (20.8×17.8 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※二つの蛤と熨斗紙などが描かれる。

☆〈ほら貝〉 (20.5×17.0 東京国立博物館/オランダ国立民族学博物館蔵)

※小高い丘に立って松の木にいる鳥を吹き矢で捕らえようとしている男。

ほら貝

☆〈まくら貝〉 (20.6×18.1)

☆〈ますほ貝〉 (19.7×17.4)

※盆台に砂富士が飾られ、その前の松の盆栽には扇が添えられる。



☆〈みぞ貝〉 (19.9×17.6 ベルギー王立美術歴史博物館蔵)

※「みぞ」を敷居の溝に見立て、敷居で遊ぶ子どもを描く。背中に男の子を乗せて馬になった女の子が、敷居の上でうつ伏せになり、もう一人の女の子と遊んでいる。縁側には鞠や羽子板が置かれている。

☆〈みなせ貝〉 (19.8×17.8)

※名所の六玉川で、井出の玉川（「山吹の玉川」とも）を想わせる、川を馬で渡る貴人が描かれた屏風の手前には、籠の中に盆石の蛙が置かれ、その傍らに三冊の本がある。太田道灌が雨に遭い、民家に立ち寄り蓑を借りようとしたところ、家の娘が山吹の花を差し出し「実の（蓑）一つだになきぞ悲しき」と詠んだ故事からの着想で、「みなせ」は「みなし（実無し）」から「山吹」を連想し、更に「山吹の玉川」の図を屏風に描いたものと思われる。柳々居辰斎の『歌仙貝』の〈みなし貝〉からの影響が指摘されている。

☆〈みやこ貝〉 (20.2×17.9 オランダ国立民族学博物館蔵)

※渡し舟に乗る人々。野菜売り、行商の男、笠を被って鳥刺しの棹を立てている男、漫才師などを乗せて、船頭が船尾で棹をさしている。

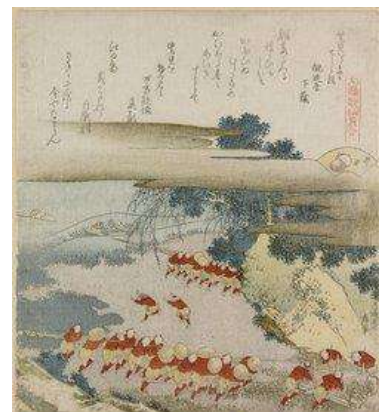
☆

〈紫貝〉 (20.1×17.8 オランダ国立民族学博物館蔵)

紫貝 (千葉市美術館)

※地曳網を引く集団が二組描かれる。「紫」は鰯を指す女房詞であることからの鰯漁の連想。

狂歌賛「紫貝をよめるせとう歌 瀬酒屋下蔭 朝霞たつる
ねかひもしほまかなひぬむらさきのかひあら春にあひきす



るとて」「紫貝を物の名に 四方歌垣真顔 江の島霞わたれる片瀬村さきの干潟に今やなるらん」

☆〈ものあら貝〉（20.1×17.6 ベルギー王立美術歴史博物館/クラクフ国立美術館蔵）

※上野不忍の池の太鼓橋を渡り図の右に描かれた弁財天へ参詣する人々。池には数羽の鴨が泳ぎ小舟が一艘浮かんでいる。

☆〈わすれ貝〉

●摺物『栞垣連五番之内和漢画兄弟』（「さるがきれん」とも。色紙判摺物。5枚揃物。月癡老人為一筆。各平均 20.6×18.1 東京国立博物館/ウイーン国立工芸美術館/千葉市美術館蔵）

※空満屋栞垣真枝の率いる狂歌師連による歳旦摺物。「画兄弟」とは、無関係の画題を奇抜な趣向で結びつけるもので、和漢の人物を結びつけて描く。

☆〈司馬温公と柴田勝家篠塚伊賀守〉

※司馬温公は司馬光（1019～1086）のこと。中国北宋代の儒学者・歴史家・政治家。『資治通鑑』（1065 編年体の歴史書）の著者。幼少より神童といわれた。子どもの時、庭で遊んでいたところ、仲間の子どもが水がめに落ちたが、誰も助けなかった中、温公は石を投げて甕を割って水を抜き、子どもを救ったという。柴田勝家は、織田信長の武将。元亀元年（1570）の6月、長光城を守備した時に水攻めに遭い、残った水甕を割って覚悟を示し、その後、佐々木承禎軍を破ったことで「甕割り柴田」と呼ばれたという。

図は、鎧姿の柴田勝家が長槍の柄の先を大甕の割れ目から出る水に突き立てている。側で幼児姿の温公が石を抱え上げている。

☆〈諸葛孔明と牛若丸〉

※諸葛孔明（諸葛亮。181～234。蜀・漢の建国者劉備を補佐した政治家）が琴を弾き、牛若丸（源義経の幼名。1159～1189）が笛を吹く図。楽器に拠って結びつけた図。「武侯（諸葛孔明）弾琴して仲達（司馬懿）を退く」（『三国志演義』巻95の文言）からの図。仲達は敵の諸葛孔明を苦しめた武将。

☆〈蘭相如と児島高德〉

※蘭相如（生没年不詳）は、中国戦国時代、趙の名臣で「刎頸の交わり」で有名な人物。児島高德（生没年不詳。南北朝時代の武将）は、捕えられた後醍醐天皇を励ますために、在所の庭に忍び込み、桜の木に「天莫空勾踐 時非無范蠡」（天よ、敗れた国王の勾踐を見殺しにしないように。国王を救った忠臣の范蠡がいないわけではないから）を描きつけた故事が『太平記』にある。

図は、橋の欄干に文字を描きつけようとする蘭相如と、桜の幹に詩を書きつけようとする筆先を舐める鎧姿の児島高德を描く。

蘭相如と児島高德（東京国立博物館）



☆〈趙雲と武内宿禰〉

※趙雲（?～229。後漢から蜀漢時代の将軍）が、槍を小脇に抱え、鎧を着た子どもを背負った武内宿禰（「たけうちのすくね」「たけしうちのすくね」とも。景行天皇14年～?）と対峙している。『日本書紀』によれば、宿禰は神功皇后の新羅遠征の際に功労があった。

☆〈劉備と佐々木高綱〉

※劉備は（161～223）後漢末期から三国時代の武将、蜀漢の初代皇帝。佐々木高綱は（1160～1214）平安末期～鎌倉時代にかけての源氏側の武将。宇治川の戦いで梶原景時との先陣争いで有名。

●狂歌本『草のはら』（一冊。畑零餘子（不詳）の追善本。六樹園（石川雅望）撰。320名の狂歌を掲載。北斎の他、北溪、酒井抱一等による挿絵。彷徨亭版。22.6×15.8 大妻女子大学図書館蔵）

※「Web 浮世絵文献資料館：絵入り狂歌本年表」及び「大妻大学図書館和本カード・データベース」による。

●艶本『艶本多満佳津良』（この頃か。色刷半紙本。三冊。口絵の構成と書き入れは北斎。絵は阿栄と思われる）。序文に「はいかゝれる。女好きの隠人たはむれに誌」とある。「女好きの隠人」は、「女好軒」などの隠号を使った溪斎英泉の号と思われる（有光書房『北斎』第12刷、及び『芸術新潮』1989年3月号「北斎艶本への挑戦」林美一 p40より）。一方で、溪斎英泉の自画作との見方もある（『絵入春画艶本目録』p166）。

●艶本『萬福和合神』（1月。色刷半紙本。三冊。序文は和合堂主人（北斎の隠号）記。全編北斎の作画。22.5×15.7 国際日本文化研究センター/浦上蒼穹堂蔵）

※金銀摺や紅雲母摺まである豪華本もあるが初摺本は稀で、一般には改板した粗摺本が流布しているという（『芸術新潮』1989年3月号「北斎」特集号）。

おさね（富家の娘）とおつび（貧家の娘）の人生を描く物語仕立ての艶本（国際日本文化研究センター蔵）。

※序文「腎命帳（注：腎命は腎水〈精液〉を意識したもので、神名帳〈神社名や神名を記した名簿のもじり）曰、両脚山中小池（注：女陰のこと）有り。一眼（注：男根のこと）ノ毒龍又出入ス。時アリテ山谷ノ神ト現シテ、臍下（注：女陰のこと）ニ鎮座ス。出没自在ニシテ、能ク人種（注：子種のこと）ヲ降タス。神力ヨク雲雨（注：男女の交合のこと）ヲ施シ、深情ヨク英雄（注：好色のこと）ヲ拉ク。男ハ女ヲ待テ悦ビ、女ハ男ヲ迎テ行ク（注：気をやること）。若シ一枕ノ（注：枕を共にすること）信アラハ、靈宝ノ徳、其ノ掌ヲ指スカ如し（注：掌を指すように明らかである）。和合堂主人記」（注・ルビ・句読点は筆者による）。



『萬福和合神表紙』（国際日本文化研究センター）

●肉筆画「寿老人」（絹本着色一幅。不染居北斎老人画。印北斗一星高。84.8×29.3 北斎館蔵）

※松の木の下で佇む寿老人の図。「北斗一星高」の印は珍しい。寛政11年(1799)肉筆画「加藤清正公」でも用いている。

●団扇画「梅に鶯」(この頃か。団扇絵判錦絵。月痴老人為一筆。印「さきのほくさみ」。
23.5×31.5 有田屋清右衛門版。ギメ美術館蔵)

※開き始めた花や蕾の多い梅の木をめぐって飛んでくる一羽の鶯。印に、この年のみに用いられたと思われる「さきのほくさい」が捺される。

有田屋から出した団扇絵は他になく、月痴老人為一筆と署名した団扇絵も他に例がないという(2017年『北斎 富士を超えて展図録』p155による)。



梅に鶯 (ギメ美術館)



印号「さきのほくさみ」

【落款に年齢を記す】

●摺物「桃園三契」(「玄德 関羽 張飛」とも。角判摺物。行年六十二翁葛飾為一燈下
席上画。ウイーン国立工芸美術館蔵)

※『三国志演義』の中の、桃園において劉備、関羽、張飛が義兄弟の契りを交わす場面を描く。書画会での作。狂歌「青柳の糸を結ひてとかせしと みつあひによる春の初風空満屋楯垣(「さるがき」とも)真枝」が記される。北斎の年齢が落款に示される。

●摺物「葛飾玄武二番続 蛇」(色紙判。淡彩一幅。かつしか為一筆。葛飾連による。
19.3×18.5 オランダ国立民族学博物館/すみだ北斎美術館：
ピーターモース・コレクション蔵)


※玄武は、北方を支配する水神。東西南北を支配する四神(東の青龍、西の白虎、南の朱雀)の一。色紙判の四つ角に沿うように、画面いっぱいにとぐろを巻く白蛇。狂歌「蛇はまた穴にひそめる春の野にとぐろをまいて出る早蕨 訓和齋」が記される。北斎は妙見を信仰し(北極星と七星の神格化)、その守り神である亀や蛇を多く描いている。



葛飾玄武二番続 蛇 (『2007 北斎展図録』より転載 オランダ国立民族学博物館)

●摺物「亀」(色紙判。着色一幅。かつしか為一筆。19.9×18.1 オランダ国立民族学博物館蔵)

※文々舎蟹子丸の葛飾連による。図の右下に顔を向けた一匹の亀。狂歌「浮きたちし亀の模様に万代のよはひかさぬる屠蘇盃 文々舎」が記される。

文政5 (1822) 壬午 63 歳 不染居為一、葛飾北斎、葛飾北斎戴斗、画狂人北斎、

簞の形、葛しか、一人人形、(画狂人北斎) : こと (52歳)、阿美与 (34歳)、孫(13歳)、
阿栄 (25歳)

◇この頃、江戸でにぎり寿司が作られる。

◇春より江戸葺屋町河岸で唐人踊りの興業するも2月に禁止となる。

◇閏1月6日、式亭三馬没 (47)。

◇4月29日、イギリス船、浦賀に入港。薪水を要求。

◇6月8日、烏亭(談洲楼) 焉馬没 (80)。

◇8月、流行していた投扇遊びが禁止となる。

◇版元・角丸屋甚助、営業不振のため、この頃までに『北斎漫画』初編版木(永楽屋東四郎所収)以外の二編から十編までの版木を永楽屋東四郎に売却する(永田生慈『葛飾北斎の本懐』平成29年月。角川選書 p93)。

○横山崱山「花洛一覽図」

○間宮林蔵「蝦夷全図」。

○十返舎一九、初編(1802)から21年かけた『東海道中膝栗毛』が完成。

★長崎オランダ商館長ヤン・コック・ブロムホフ (Jan Cock Blomhoff) 二度目の江戸参府(2月6日～6月4日。江戸滞在3月27日～4月21日)。このとき同行の河原慶賀を通してブロムホフは、北斎にオランダ製の紙を何枚か渡して絵を発注したといわれる。絵は文政9年(1826)に次の商館長スチュレルレル (Joan Willem de Surler) に渡った。

【長女阿美与、離婚して孫と同居する】

★この頃、阿美与、柳川重信と離婚(『北斎美術館3美人画 p154)。北斎の元に戻り、息子(北斎の孫)とともに同居する(文政元年説あり)。

※『曲亭来簡集』(川瀬一馬編)に所収されている「曲亭記」には次の記載がある。

「北斎為一ハ一男一女あり。長男名ハ富ハ短命なりき注1。女子ハ柳川重信に嫁したるが、不縁にて帰りしより父の許にをり又嫁せず。この女子の生みたる外孫注2を北斎寵愛して養育したるが、人となるに及びて放蕩なり。依って之を重信に返せしに、鳶の者に成らん事を欲して、実父の家をもあらずなりにき」(「国立国会図書館デジタルコレクション」より)。

注1) 一男一女あり。長男名ハ富ハ短命なりき：一男一女は事実に合わないが、『曲亭来簡集』記載の年代を考慮する必要がある。また、長男の富之助は文化9年(1812)26歳で没しているとの説(リチャード・レイ『伝記画集 北斎』p96)もある。

注2) 外孫：この孫は後に北斎を悩ますことになる。名は不明。

★春頃、根岸御行松注にあつた友人の三世堤等琳宅に寄宿するか(北斎の『北斎骨法婦人集』序文による。〈関口政治郎臨写『北斎骨法婦人集』で紹介(明治30年刊)〉)。

「去文政五年●かつしか北斎翁。根岸御行松雪山等林宅に同居せし時」とある。

注) 根岸御行松：現東京都台東区根岸4-9-5 西行院不動堂内。根岸の大松として親しまれた。この辺りに寄宿したか。

●読本『遠の白波』（十返舎一九作。画工名なし。鶴屋金助版。国立国会図書館蔵）

※見返しに角書「一本駄右衛門東海横行記」とある。画工名がないが、画風、広告から北斎と認められているという（『年譜』による）。序文末に「文政五 壬午孟春 十返舎一九誌」とある。

※文政五年刊『太田道灌雄飛録』巻四の巻末広告に「葛飾北斎戴斗」とある由（「Web 浮世絵文献資料集」による）。

また、鶴屋金助の「文政 壬午春新冊子目録」に「一本駄右衛門横行雑話 遠の白波 全三冊 十返舎一九著 葛飾北斎画」とあるという（『年譜』による）。

●絵手本『北斎骨法婦人集』（大本墨絵。表紙の図を入れ全 17 図。表紙に画狂人北斎画（関口政治郎による）。24.9×17.8 国立国会図書館/大英博物館蔵）

※出版は明治 30 年（関口政治郎臨写版）。文政 5 年（1823）、根岸の御形松近くの堤等林宅に寄宿したときに描いたもの。婦人の様々な仕草を墨一色でスケッチ風に描く。

国立国会図書館デジタル・コレクション版の序文。

「此絵ハ去文政五午年の春、かつしか北斎翁、根岸御形の松、雪山等林(琳)の宅に同居せし時、婦人画をば種々かけり。其下画を等林弟子何某、翁より申請、後日一卷となせり。其後或る金満家の宝蔵に入、それをまた（エンヤラヤツト）で我が手にいれたり。ひして楽しむこゝろねに、さすが翁の骨法をひろく世界へみせばやと、しあんなかばへつけ智へハ。かの北斎の画卷より美人ひとりぬけ出て（モシアナタ）ネエーいつそ版にしなましナ。はやく世に出しておくんなんし。後生ザますよ。またみなはんも見世へ出次第（キツトザマスヨ）ト云ふ。此きつとぎますよと云ふ事は、多分買に来てくれといふ事なるべし

明治廿八年未の初春 廓津通書」（ルビ、読

点は筆者による）

北斎骨法婦人集（国立国会図書館・部分）



表紙は鼠がねずみ取りに足を掛け、棒を担ぐように両腕を背中に回している図。扉には二人の婦人の座礼の姿、次には子どもが三味線を弾くのに驚く婦人の様子、二人の婦人が対面して三味線を弾く様子、思案気に巻紙に手紙を書く様子、花魁と禿の立ち姿、団扇を持って涼む二人の婦人の立ち姿、裸で背中を手いで洗う婦人の後ろ姿と裸の老婆が桶を持って立っている姿、花笠を被り両手に花笠を四つ手に持って踊る婦人の様子などが続けて描かれる。

●肉筆画「餅搗き図」（この頃か。絹本着色一幅。不染居為一筆。印葛しか。54.3×85.0 フリーア美術館蔵）

※餅搗きをしている男の杵に餅が粘りつき、悪戦苦闘の様子。女も必死に臼を押さえている。その様子を指を指して笑っている男と、手桶を持っている男がいる。桃本雛麻呂狂歌「若なりし 顔見る春に 移るとて 餅は鏡に とらせけるかな」が記される。

餅搗き図 (フリーア美術館 : livedoor.blog より転載)



●扇面画「紅葉に鳥図」(この頃か。紙本墨画淡彩一幅扇面一面。不染居為一筆。印一人人形。上弦 45.9、下弦 20.7×16.5 フリーア美術館蔵)

※羽を膨らませた一羽のカラスの前に紅葉が三枚描かれている。

●錦絵「重箱に煮干」(不染居為一筆。21.3×18.6 太田記念美術館蔵)

※狂歌に「うまやき」とあるので、『馬尽』の一つか(『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』より)。重箱の中に丸い食べ物が入れてあり、くくりつけた煮干が側に置かれている。

●摺物『馬尽』(1月。色紙判着色。不染居為一筆。印：瓢箪の形)

※午年にちなみ四方側の狂歌師により刊行した摺物だが馬の絵はない。秋長堂物梁(二世)、森羅亭万象(二世)、不染居为一らの撰。全30図。瓢箪形の印は、瓢箪から驢馬を出す中国の仙人、張果老注に因んだものとされ、刻印ではなく捺印である(2005年『北斎展図録』解説)。摺物名と副題の入った瓢箪形印のない絵もあり、「駒形堂」「駒鳥」「馬除」「鞍馬牛房」「馬貝」「駒曳銭」がそれである。

注) 張果老: 張果。「老」は敬称。中国の代表的な仙人である「八仙」の一人。則天武后や玄宗に招かれ二度の死後にそれぞれ息を吹き返したという(Wikipediaによる)。白い驢馬に乗り一日に数万里を行き、休息時には驢馬を畳んで腰の瓢箪に収め、乗るときには瓢箪に水を吹きかけると再び驢馬が現れたという。

☆〈轡町〉(20.8×18.2 すみだ北斎美術館: ヒーターモース・コレクション/島根県立美術館: 永田コレクション/アムステルダム国立美術館/千葉市美術館蔵)

※図は、「吉原細見注1」と書かれた正月祝いの紙札と、若侍の名古屋山三郎注2が遊郭を訪れるところを描いた巻物(「名古屋山三郎絵巻」)を組み合わせる。轡町は、遊郭を轡屋ともいったところから遊郭を指す。画中に「文政五壬午年正月改」とある。

注1) 「吉原細見」は、江戸の吉原遊郭のガイドブック。主に店ごとの遊女名を記し、年2回発行された。

注2) 名古屋山三郎は、安土桃山時代の武将で、妻は出雲阿国といわれる。共に歌舞伎の祖と伝えられる。戦国の美少年として有名。

☆〈竹馬〉(20.6×18.1 すみだ北斎美術館: ヒーターモース・コレクション/島根県立美術館: 永田コレクション/アムステルダム国立美術館/大英博物館/千葉市美術館蔵)

※この竹馬は、肩に担いで荷物を運ぶために竹を組んだもので、天秤棒のようなもの。その竹馬の前には脇息のような箱に煙管入れ、煙草入れ、煙草盆など。竹馬にかけた左の敷

物には梅の花が染められ、右の敷物に染められた卍印は、森羅亭万象率いる卍連のマークを示す。梅見の遊興を思わせる図。

☆〈駒鳥〉 (21.0×18.6 アムステルダム国立美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/島根県立美術館/千葉市美術館/馬の美術館蔵)

※餌入れをつけた止まり木に止まる駒鳥の足に赤い紐がつけられている図。瓢箪形印無し。蹴毬亭諸房、千亀萬亀、秋長堂物梁、森羅万象の狂歌が添えられる。「ことし七ツ目の午の春を祝ひて」とあるので誰かの七歳の祝い物と思われる。

駒鳥 (千葉市美術館)



☆〈駒菖蒲〉 (20.7×18.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館/千葉市美術館/中右コレクション/馬の博物館蔵)

※木の枝にとまった赤い鳥の図柄のある根付けの付いた駒菖蒲柄の煙草入れと、とじた扇子を組み合わせた図。

側には、紙入れと思われる螺鈿の小箱がある。菖蒲は勝負や尚武に通じ、武士が好んだもの。「富士霞む腰明き熨斗目注提ものも 雪解に見ゆる春の駒形 鹿寿庵蝠磨」、「正月も余慶目出たき見徳の 富は潤ふ千金の春秋長堂物梁」の狂歌が記される。

駒菖蒲

(すみだ北斎美術館)



注) 熨斗目：元は武士の正装。無地で袖、腰の辺りに大柄な縞模様がある。現代では七五三の男子が着たりする。

☆〈将棋駒〉 (20.5×18.0 千葉市美術館/アムステルダム国立美術館/日本浮世絵博物館蔵)

※将棋盤の上に将棋駒と盆栽の梅鉢が置かれている図。「いさみたつ将棋の駒に梅の鞭勝色みつるはなの魁 若松亭美鳥」および秋長堂物梁の狂歌が記される。

☆〈絵馬〉 (20.7×18.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/千葉市美術館/アムステルダム国立美術館蔵)

※「奉納」図は、「大願成就」の文字と、五重塔が描かれた絵札、梅の花をつけた枝を組み合わせる。

☆〈初午詣〉 (20.7×17.8 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/千葉市美術館/アムステルダム国立美術館/馬の博物館蔵)

※初午詣は、旧暦 2 月最初の午の日の稲荷神社での祭事。図は、正月らしく、王子稲荷に供される三番叟の被り物を被り、狐の面を付けた人形が藁苞の中にある。酒を入れ腰に当てて持ち歩ける水筒、藁に包んだ供え物に梅の一枝を添えたものなどを組み合わせた図。

斤葉廼芦人「さしさかす王子ミやけのはる駒に はたらしそする風の梅が枝」、森遊亭人成「友とちと王子戻りの梅が枝も さいつさゝれつ吸筒の酒」、寝覚庵興兼「家つとにかざしてもとる王子道 ゆきゝの袖もにほふ梅が枝」、新羅亭万象「梅そへて王子ミやけの春駒にひきつれ霞む袖も匂へり」の狂歌が記される。

初午詣（すみだ北斎美術館）



☆〈駒下駄〉（21.0×18.0 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/東京国立博物館/千葉市美術館蔵）



※駒下駄、手拭いをかけたおかめの面、暴れ馬の絵柄の凧、山椒の摺りこぎ棒、扇子などの正月の景物を集める。狂月亭真晴「新玉の春にあふみの和合薬 ふんでとめたる馬の書そめ」、四方歌垣真顔「若菜つむ春にあふみのかねてはく 雪間のあし駄踏とめてけり」の狂歌が記される。近江の大力女お兼注の物語に正月の景物を集めた図という。注) 近江のお兼：『古今著聞集』には、近江国梅津の遊女お兼ねは、放たれ暴れる馬の手綱の端を高下駄で踏んで鎮めたという話がある。

駒下駄（すみだ北斎美術館）

☆〈駒形堂・御厩川岸・駒止石〉（すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/シカゴ美術館/アムステルダム国立美術館/日本浮世絵博物館蔵）



駒止石 (DNP アートコミュニケーションズ より)

御厩川岸 (JAPAN SERCH より)

駒形堂 (JAPAN SERCH より)

※駒形堂（20.8×18.1）三枚続きの右図。隅田川の対岸に描かれる。瓢箪形印は無い。

※御厩川岸（20.6×18.1）三枚続きの中図。大勢の人を乗せた船が浮かび、手前の岸边には二人の武士が乗る馬が描かれる。対岸に凧が一つ上っている。

※駒止石（20.6×17.4）三枚続きの左図。手前の道に大きな駒止石が描かれ、見物の人がいる。背景に雪を被った富士山が見える。駒止石は、寛永8年（1631）、隅田川が洪水となり、旗本の阿部豊後守忠秋が隅田川を渡り被害状況を調べたときに、馬を繋ぎとめた石。現在は、本庄氏の大名庭園（旧安田庭園。現東京都墨田区横網1-12-1）に移設されている。

☆〈木馬〉（すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

☆〈競馬香〉（20.5×18.2 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/アムステルダム国立美術館アムステルダム国立美術館/神奈川県立歴史博物館蔵）

※加茂の競馬になぞらえて、赤黒に分かれて聞香をし、香を聞当てた者が赤あるいは黒の駒を進め、先に決勝点に辿り着いた者が勝ちとなる遊び。図は、乗馬している公家、団扇、盆の上に置かれた香壺の画を組み合わせる。



競馬香（神奈川県立歴史博物館）

☆〈馬瑠石〉（20.6×18.0 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/アムステルダム国立美術館アムステルダム国立美術館/神奈川県立歴史博物館/太田記念美術館：長瀬コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

※盆栽の鉢に珊瑚が生けられ、その前に水晶の塊と球形の瑠璃が置かれている。

☆〈馬除〉（20.6×18.3 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/アムステルダム国立美術館/神奈川県立歴史博物館/大英博物館蔵）

※洗面用の湯桶、盥、手拭い掛けに掛けられた手拭い、「三井石山 比良 右三景」と染付された鉢に植えられた松と福寿草が描かれる。染付の文字は、三井晩鐘、石山秋月、比良暮雪を表していると思われる。文化4年（1807）～7年（1810）の中判「新板近江八景」（伊勢屋利兵衛版）や文化8年（1811）の横小判「銅板近江八景」（総州屋版）を念頭に置いた作品である。瓢箪形印無し。

「初日影鴉てる春にあふみのや かづみの山を見るもまばゆき 三星亭真湖」の狂歌が記される。

☆〈三弦駒〉（20.9×18.3 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/アムステルダム美術館蔵）

※柄が継げる継棹の三味線が、稽古本を包んだ風呂敷に寄せかけてある。棹の先には弦を張る駒がある。

「春霞ひく三味せんの佐保姫の 心のこまもつなくいとゆふ 若松亭美鳥」、「ひとしきり眠たき春の夜も日に 継三味せん注のさほの川風 秋長堂物梁」、「弾初のうた三味せんやいと竹に ミつのあハする鶯のこゑ 秋長堂物梁」の狂歌が記される。

注) 継三味せん：継三味線。持ち運びに便利のように棹を繋ぐことのできる三味線。

☆〈綿繰馬〉 (20.5×18.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※綿花を布の上に乗せ棒を二本組み合わせ合わせた間にくぐらせて種子を取り除く綿繰車と、馬の鞍が置かれている。浄瑠璃「源平布引滝」で、斎藤実盛が手塚太郎と再会を約して馬に乗ると太郎は綿繰車に跨って「ヤアヤア実盛」と相対するくだりで、図の鞍は実盛を、綿繰車は太郎を暗示すると推定される（『2005 北斎展図録』p 357 より）。

「真白まる梅の臥龍や作りけん 流馬注に似たる綿くり馬ハ 相什楼真榎」、「去年つミてけのこる雪か白妙に わたくり馬の春の詠ハ 花月亭イ」、「咲梅のにはほひハ風にのりかけの 綿くり出す午の初はる 松廼屋其成」の狂歌が記される。

注) 流馬：諸葛孔明が発明したという車。木牛流馬。

☆〈馬蘭〉 (すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵)

☆〈春駒〉 (すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵)

※着物を入れる漆塗りの盆に、玩具の春駒や白鳩の置物、熨斗、小槌などが置かれ、上から宝の模様の袱紗をかぶせた図。

☆〈馬のす〉 (20.6×18.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵)

※異国風の雲の模様の木琴の共鳴箱に、皮張りの胡弓と弓が寄せかけてある図。「馬のす」は、馬の尾の毛をいい、胡弓の弓の弦に使われる。蓋を広げた共鳴箱は馬の鞍に似た形である。

☆〈海馬〉 (20.2×17.5 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/アムステルダム国立美術館蔵)

※海馬は、タツノオトシゴのことで、媚薬として珍重された。手前には折り目のついた紙があり、その中にタツノオトシゴが置かれている。側の箱には玉虫が二匹入れてあり、これも安産の守りとされたという。

☆〈有馬産〉 (すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館/ハンブルグ美術コレクション蔵)

※有馬温泉の西方の三木は刃物の製造が有名で土産に売った。図は、和鋏、小刀、筆に矢立、刃物の包装紙（一の字の下に菊が描かれ、左下に「文殊 四角作」と書かれる。鋼を扱う株を持っていて、最高級品を示す書き入れ）が組み合わせたもの。

有馬産 (すみだ北斎美術館)



☆〈駒曳銭〉 (すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵)

※漆の盆に笹の模様が染めつけられた蓋つきの茶碗が置かれている。その前に瓢箪の根付けに紐で括りつけられた袋から、鍵や銭がこぼれ出ている。銭は駒曳銭と呼ばれ、人が馬

を曳いている模様の銭で、民間で作られ、財布に入れ、金が増えるまじないにしたという。瓢箪形印は無い。

☆〈馬貝〉（20.8×18.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

※馬貝は、二個の赤貝の殻に紐をつけ、それを手綱に見立て足で踏みながら歩く玩具。屏風を巡らせた板の間に燭台の蝋燭がとまり、華やかでめでたい衣装の童子が、足で踏んだ紐を両手で引き上げている。瓢箪形印は無い。

「ことし還暦の春をむかへて をさなきに帰る春とて午貝も ふみはしめにそ筆をすゝむる 新羅亭万象」の狂歌が記される。

☆〈馬錢別〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

☆〈相馬焼〉（19.7×17.3 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※鉄瓶に布が掛けられ、相馬焼きの山水の絵付がされた徳利と、馬が絵付けされた白い茶碗に箸が乗せられている図。

「草の芽もふくかけん淡雪の 中の青ミや茶の初むかし 秋風園花主」の狂歌が記される。

☆〈馬蹄石〉（20.3×17.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/アムステルダム国立美術館/ハーバート大学サッカー美術館蔵）

※水差しに梅の小枝が差ししており、筆立てには数本の筆が立ててある。その横には硯に墨が添えられている。

☆〈馬盃〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

☆〈神馬草〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

☆〈鞍馬牛房〉（すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/アムステルダム国立美術館蔵）

※瓢箪形印は無い。

●摺物「畠山重忠」（落款から文政5年（1822）か。文政5年～8年（1822～25）説あり。着色。不染居為一筆。21.1×18.7 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション）

※畠山重忠が一の谷合戦のひよどり越えで、愛馬三日月を担ぐ姿が描かれる。文政5年（1822）『馬尽』の絵の一として描かれたのではという見方もあるが不明（『ピーターモース・コレクション北斎図録』による）。「岩陰にかくれし風を案内にて 峰よりおとす春の梅か香鉄廼屋盾成」、「春風も秩父の方ハつよくして 峰吹おろす駒鳥の声 四方真顔」の狂歌が記される。

●摺物「四姓ノ内」（この頃か。紙本角判彩色。揃物。不染居為一筆）

※四姓とは、源（みなもと）・平（たいら）・藤（ふじわら）・橘（たちばな）の四つの姓をいう。

☆〈干味満照 藤巻鎌〉（21.6×19.0 ウイーン国立工芸美術館/オランダ国立民族学博物館蔵）

※三足の盤の上に藤巻の鎌と輝く宝珠を乗せる図。大織冠（官位の最上位）藤原鎌足と海女の玉取伝説（龍に奪われた宝珠を取りもどすよう鎌足に命じられた海女がそれを果たしたものの、龍宮の龍や魚族に殺されるという伝説）にちなんだ物と狂歌を配す。

☆〈源 小鳥丸の一腰〉（21.3×18.1 ウイーン国立工芸美術館/北斎館/オランダ国立民族学博物館蔵）

※小鳥丸は、平家代々に伝わる名刀。鳥がこの刀を持って平家の始祖・桓武天皇に捧げたといわれる。図は、黒い鳥が赤い鞘の刀を背負い、背後には白梅の花が咲いている図。柳風亭待兼「しのゝめの帯のもやうの鳥たすき 霞の底にむるゝ小鳥」が記される。



源 小鳥丸の一腰（北斎館）

☆〈青葉笛 青山琵琶 平〉（21.2×18.5 島根県立美術館：永田コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵）

※袋に入った琵琶と青葉笛が置かれている図。平敦盛は笛の名手であり、祖父・平忠盛が鳥羽院より賜った『小枝』

（または『青葉』）という笛を譲り受ける。源平合戦の末期、熊谷次郎直実と一騎打ちの後、直実に組伏され首を刎ねられた。直実が敦盛の首を包もうとしたとき、一本の笛を見つつけ、平家軍は戦場にあっても、風流を忘れずに、平家の陣屋からは管絃の音色が聞こえていたが、昨夜の笛の音はこの若き敦盛であったと知り、熊谷はこの後出家し、敦盛のことを弔ったという。

「さんこしゅ（珊瑚珠）の玉の初音は海はらの みどりの竹をいつるうぐいす 五十鈴川人」、「みどりなす竹の内にも初こゑの 玉をさゝくる庭のうぐいす 千羽亭手踊」の狂歌が記される。

☆〈普門品注 菊水鎧 橋〉（21.2×17.6 北斎館/オランダ国立民族学博物館蔵）

※朱色の具足箱の上に鎧が乗せられている。鎧の胴部分には楠正成の菊水紋が施されている。その右には矢が刺さった経典「普門品」の巻物が台の上に置かれている。能の「菊慈童」では、菊慈童がこの経典の一部を書き、滴る菊水を飲んで不老長寿になったという伝説がある。「床にさく梅はかふとの鉢うゑに かざる鎧の裡もかをれり 草花園嶽丸」の狂歌が記される。



枕草子を読む娘（すみだ北斎美術館）

注) 普門品：法華経第二十五品の観世音菩薩普門品の略。

●摺物「枕草子を読む娘」（「文庫脇の女性」とも。不染居為一筆。中判着色。21.3×18.6 すみだ北斎美術館蔵）

※文箱に左腕を掛け、笹色紅の女が腕まくりをして下に置いた枕草子を読んでいる。右手の肩先からは赤い襦袢が見えている。文箱に「不染居為一筆」の書き入れがある。「はつ夢も枕ゆたかにみちのくや こかね花さく山のあけほの 竹葉菴」、「白かねの毛ぬき手にとる玉みとり 子日にもひく松の青髭 楽聖菴」の狂歌が記される。

文政6 (1823) 癸未 64 歳 大摺腎虚陰精 (隠号)、北斎改為一、武蔵北斎戴斗先生、
前北斎改注葛飾為一、前北斎為一、北斎改為式：こと (53 歳)、阿美与 (35 歳)、孫 (14 歳)、
阿栄 (26 歳)

注) 改：北斎は改号後しばらく前の号の後に「改」の字をつけることが多い。「かい」と読むことが多いが、本稿では「あらため」と読む。

◇1 月 30 日、勝海舟生 (～1899)。

◇2 月、曲亭馬琴、息子宗伯の神田宅の隣の家 (刀研ぎ師の家) を買い改築する。

◇4 月 6 日、大田南畝没 (75 歳)。

◇7 月 6 日、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebold 1796～1866)、出島に着任 (独人なるも蘭人として入国)。浮世絵収集を始める。

◇7 月 7 日、長崎商館長ブロムホフ帰国。後任商館長ヨーハン・ヴィレム・デ・スチュレル (Johann Wilhelm de Sturler) 赴任。

◇8 月、江戸大風津波。

◇諸国干ばつ。

○艶本：溪斎英泉『志の婦壽李』(「鴈高先生図」とあるところから、紫色鴈高を隠号として用いた北斎作とされたが、名古屋の尾崎久弥 (江戸文芸研究家) が、本書の文中に「淫乱斎」という溪斎英泉の隠号があることを指摘されたという (『芸術新潮』1989 年 3 月号「北斎」特集所収、林美一「北斎 艶本への挑戦」p40)。

図は、北斎の『津満嘉佐根』(文政元年：1818) の絵を反転させたものもある。

※溪斎英泉は、鴈高 (北斎から譲られ、文化 10 年頃から使用)、雁高亭、淫乱斎、女好軒などの隠号を用いた。

【川柳デビュー 俳号卍を用いる】

★この頃より川柳の会に出席、12 月 22 日の川柳の会 (柳亭種彦の判) で、画号に先駆けて俳号「卍」を用い、一句詠む。天保 4 年 (1833) 頃まで『誹風柳多留』に約 189 句 (重複撰を含む) の川柳が「卍」名で収められている (永田生慈『北斎クローズアップ風景画』p104～105 及び『北斎美術館 3 美人画』p155)。

※「六十代以降終生、毎年、江戸の川柳年鑑に寄稿し続けたことも記憶に留めおいてほしい。これらの川柳の多くは、エロチックなひねりがかかっており (略)」(リチャード・レイン『定本浮世絵春画名品集成 1』所収)

【北斎の川柳】

安永 5 年 (1776)・寛政元年 (1789) に「可候」(草双紙作者)、文化 2 年 (1819) に「錦袋」、同 2・3 年からは「万二」「万仁」「萬二」「万治」「万子」と「まんじ」と読む俳号が登場するが、いずれも北斎とは別人と考えられる。文政 8 年 (1825) の『誹風柳多留』85 篇では序文を書き、本格的に卍号を使用し始めた。作句は天保 15 年 (弘化元年：1844) まで続けたと思われる。その間、文政 11 年 (1828) に「カツシカ」、晩年には「万

字」「百姓」「百性」なども使用している（以上は田中聡『北斎川柳』2018 河出書房新社 p15～17 の記載を参照した）。

●艶本『縁結出雲杉』（『偶定連夜好』とも。「いつもすき」のもじり。中判(26×19 cm)錦の本に二つ折、見開き十二図。北斎艶本の最後の作。序文には大摺腎虚陰精序とある。序文の日付は、文政5年(1822)となっている。改題再摺本『津万廻飛奴満』（『津弓廻飛奴満』とも）があるという（『絵入春画艶本目録』による）。



縁結出雲杉（部分：http://www.ptt.co.jp/kawade/naiyou.htm より転載）

●絵手本『一筆面譜』（題簽の角書「伝神開手」。一筆画の集成。半紙本一冊。全29丁淡彩。武蔵北斎載（戴）斗先生注嗣意（北斎の意向を継いだの意味）。江戸・須原屋茂兵衛、山城屋佐兵衛、岡田屋嘉七、須原屋新兵衛、和泉屋金右衛門、大坂・河内屋喜兵衛、河内屋和助、河内屋茂兵衛、秋田屋大右衛門、京都・風月庄左衛門、俵屋清兵衛、名古屋・永楽屋東四郎版。15.8×22.8 島根県立美術館：永田コレクション/フリーア美術館：ブルゲラー・コレクション/名古屋市蓬左文庫/大英博物館蔵）

他に、別の書肆版がある（京都書林 堀川通 伏見屋藤右衛門、大坂書林 心斎橋通 柏原與左衛門、同 同清右衛門、同 河内屋木兵衛、同 敦賀屋九兵衛、東都書林 糺町四丁目 角丸屋甚助、日本橋砥石店 大坂屋茂吉、同 新右衛門町 前川六左衛門、尾陽書林 名古屋本町通七丁目 永楽屋東四郎）。

注) 戴斗先生：戴斗号は文政2年(1819)に弟子の北泉に譲っているので、文化14年(1817)名古屋滞在の折、当所の文人画家丹羽嘉言(福善斎)注の一筆画の遺稿に北斎が工夫を加え、さらに図を追加し、その時の戴斗号を用いたもの。天保13年(1842)3月に『一筆絵本』（吉田屋文三郎・藤屋宗兵衛・三河屋甚助版）と題した縮刷復刻本が出る。

注) 丹羽嘉言：福善斎。寛保2年(1742)～天明6年(1786)。南画家。

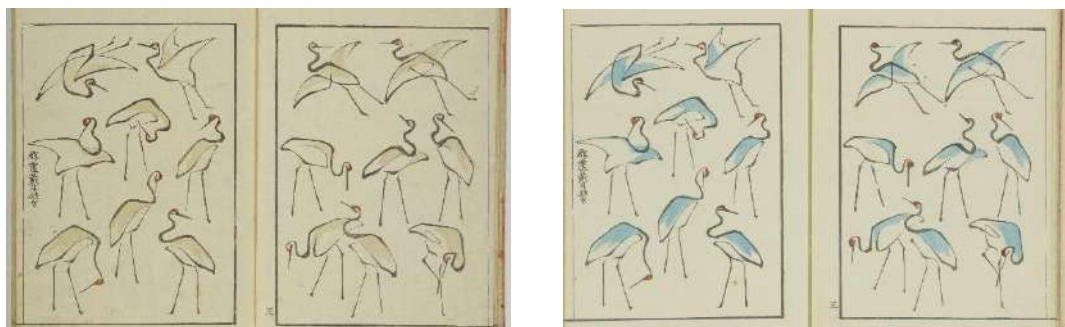
※序文「鶴のむれたち亀のうかむさまぐのすかたを一筆にかきなせしは、この春風のなご屋人福善斎彰父の筆の跡なるを、さきのとし、戴斗翁府下に遊びし時見めて、かゝる物のうつもれらむハ口をしきわきなれば、其鶴亀の長き世に伝へんとて、うつしもの(写し物)して、すりまき(摺巻)になし、又筆の意を学ひて、諸鳥の形をはじめ、くれ竹のよわたる人のまめわき戯れわき、山川家居などにいたるまで、真間の継橋かきつきて、此一まき(一卷)とはなせるなり(略)。癸未の春 尾府下申林子識」(句読点・ルビ・注は筆者による)。

※『一筆面譜』出版後、北斎は永楽屋東四郎に8月4日付で、次の書簡を送っている。

「(略) 御文面之内ニ一筆面譜後編之儀御注文被下候筆料之義者毫丁ニ付七匁五分位イニて出来候(略)」

北斎は「後編を私に依頼してください、画料は見開き一枚（2 ページ）につき七匁五分でできます」と言っているのである。絵の部分は29丁なので217匁5分（約361,906円）注の画料でどうかというのである。

注）1両＝銀60匁＝10万円。1匁＝約1667円。1分＝10分の1匁＝167円で計算。実際の貨幣値は、時代によって変動している。



『一筆画譜』（大英博物館：2種類あり。ARC デジタル・コレクションより）

●絵手本『今様櫛拵いざようせきご（旁部分は竹冠に金）雛形ひながた』（5月。横中本〈美濃本二ツ切〉墨摺。上中下の三冊。前北斎為一誌〈柳亭種彦の序文による〉。角丸屋甚助（衆星閣）・伊勢屋三次郎（栄樹堂）・西村屋与八（永寿堂）版。12.8×18.1 東京国立博物館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/フリーア美術館：フルウェラー・コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵）

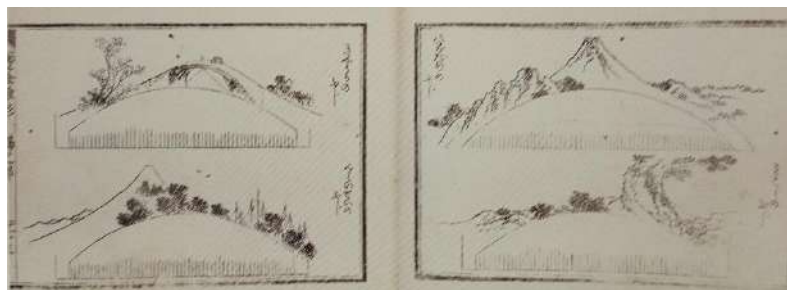
※奥付には「前北斎為一先生画図 彫工 江川留吉 東都書林永寿堂蔵板」とある（『葛飾北斎伝』p257）。

この本に北斎の「百橋一覽」の広告とともに「富嶽八体」という本の出版予告があるが未完。末に竹製の煙管の図を載せ「紀の国へこゆる時、この製作を見たり」とある。上中二冊が櫛の図案約250図（檜崎宗重『北斎論』p364では文政5年版とあり）。

下は煙管の図案約160図。実物大で描かれた職人のための図案集。弘化2年（1845）にも後摺が刊行されている。

※北斎の図案による櫛や煙管などを切り抜き、工作出来るよう工夫されている。櫛を富士山の麓に見立てた図案もあり、それぞれに季節や時間の山容の違いを現わしている。〈なつのふじ〉〈うらふじ〉

〈ふゆのふじ〉〈よあけのふじ〉〈八ツがだけのふじ〉〈ミこしのふじ〉〈きょうかのふじ〉〈くわいせいのふじ〉など。



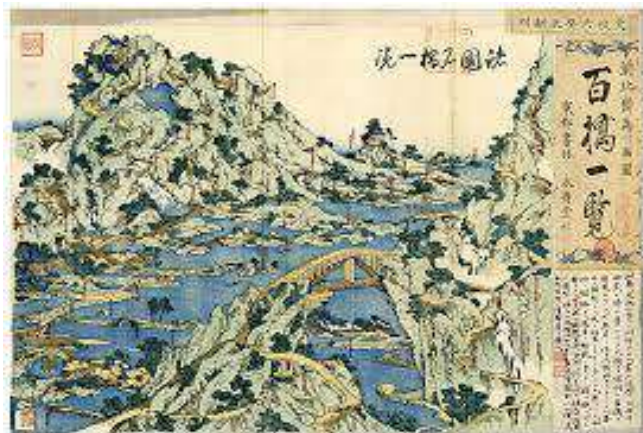
『今様櫛拵雛形』左：きょうかのふじ くわいせいのふじ 右：八ツがたけのふじ ミこしのふじ

●絵手本『版下絵 鶏肋画譜けいろくがふ』（画題は仮題。文政6年：1823の西村屋与八版『今様櫛拵雛形』の巻末広告に『為一先醒鶏肋画譜』と題した絵手本出版案内があるが、版下絵のみ

で未刊と思われる。「艫高瀬船般缸並同船海中ノ大船艇同愉瀬帚」の書き込みがある屋根船が描かれる。船の中では荷物を整える男や、モップのようなもので甲板を拭く男、船端から海水で布を洗う男などが描かれる図や、フランス国立図書館蔵の「海女図」に似た絵があるという。

●錦絵「百橋一覽」（「夢の百橋図」とも。この頃か。横大々判錦絵。後摺の方印に、「北斎改為弍筆永寿堂西邑之印」とある。包紙(国立国会図書館蔵)には「前北斎為一画図」「東都書林 永寿堂梓」「文政六癸未新刻」とある。西村屋与八版。42.6×56.4 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/太田記念美術館蔵)

※秋の一日、絵を描くことに疲れた北斎が、山の岩肌に無数の橋がかかっている幻影が壁に映るのを見たことを図の中で「去る年仲の秋一日面壁時を移すに髣髴朦朧として一条の図を現したり(略)」と説明している。図は、全体が黄色の色調で、峨々たる山間の村々に架かる多くの橋が描かれる。後に「諸国名橋一覽」（文政7年頃〈1824〉。無款。図にあった説明文が削除されている。42.7×58.2 国立国会図書館蔵）と題した改題後摺判がでる。



百橋一覽（日本浮世絵博物館）

●団扇絵「群鶏」（前北斎為一筆）『年譜』による。⇒天保4年「群鶏」参照。

●摺物「稚遊挙三番続之内」（春興狂歌色紙判着色。北斎改為一筆）

※芍薬亭長根門人の楽聖庵酒月光丸が中心になって刊行したものか。じゃんけんの紙・石・鋏を意識した三枚組の画。「鋏」に相当する画は確認されていないという。

☆〈石〉（「盆景を造る娘」とも。21.5×18.3 東京国立博物館/千葉市立美術館/アムステルダム国立美術館/チェスター・ビレイ図書館/ボストン美術館蔵）

※羊年に因んで、岩を羊に変える仙術を持つ仙人の黄初平（328?～386）が描かれた掛け軸の中に「北斎改為一筆」とある。盆石で富士山を造る娘の図。楽聖庵、石上舎三年、鵲巢庵の狂歌が壁に記されている。石（千葉市美術館）

☆〈紙〉（20.3×17.4 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/慶応大学高橋浮世絵コレクション/千葉市美術館蔵）

※蒔絵の料紙箱と硯箱の蓋には、それぞれ鶴亀が二匹ずつ





描かれている。「亀あやのせち着に鶴の黒飽きて 春にしむかふ蓬萊の山 鶴巢庵」、「料紙箱まき絵の鶴も松陰の 硯になれてあそぶ書初 北栄子捨魚」、「すみよしの松のまき絵に色香そふ 春の海辺の桜うすよう 楽聖庵」の狂歌が記される。

紙（慶応大学高橋浮世絵コレクション）

●摺物「美人カルタ図」（真行草之筆意 北斎改为一画。24.0×27.8 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※花魁・官女・年増・娘などさまざまな階層の女性六人がカルタをしている図。この期の美人画は少ないので貴重な作例という（『ヒーターモース・コレクション 北斎図録』による）。左隅に「未春」とある。蜀都園序文の狂歌が記される。

文政7 (1824) 甲申 65 歳 前北斎為一、北斎改葛飾為一、前ほくさゐ為一、葛飾前北斎

為一翁、葛飾為一、人まねする申のはつ春かつしかのおやち為一、北斎改为一 印よし

のやま、つによつてうつつ、印一人人形：こと(54歳)、阿美与(36歳)、孫(15歳)、阿

栄(27歳)

- ◇3月21日、鋏形蕙斎(北尾政美)没(64)。
- ◇4月8日、牧墨僊没(50)。
- ◇5月9日、曲亭馬琴、神田明神下(石坂下同朋町。現、千代田区外神田三丁目、秋葉原芳林公園付近)の一人息子宗伯(医師)宅に住み、隠居して剃髪し笠翁と号す(10年前より蓑笠漁隠と称していた)。
- ◇5月28日、薪水を求めて常陸・大津浜に上陸したイギリス捕鯨船乗組員を水戸藩が捕縛。
- ◇8月9日。イギリス捕鯨船、薩摩宝島に上陸し略奪。
- ◇富士講禁止令。安永4年(1775)、寛政7年(1795)に続く禁止令。
- ◇江戸で駱駝の雌雄二頭が披露される。
- ◇シーボルト、長崎で鳴滝塾を開く。
- ◇江戸の女芸者が禁じられる。
- 曲亭馬琴、合巻『金毘羅船利生纜』(中国小説の翻訳)。

★8月26日、川柳の会(秋乱題。社蝶評)に出席、3句詠む(『年譜』による)。

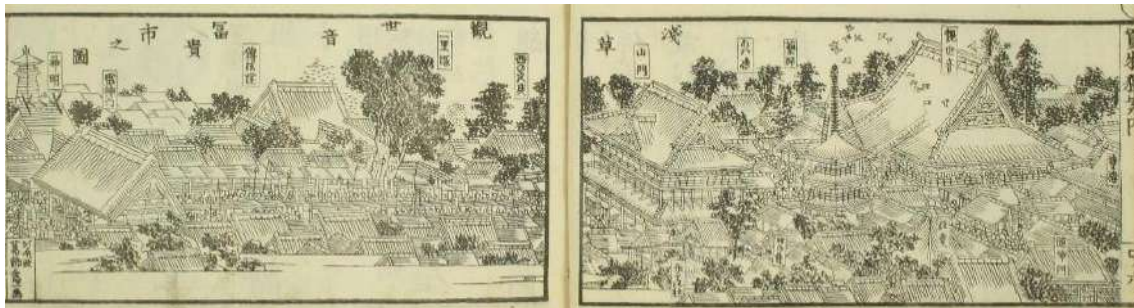
★閏8月28日、川柳の会(多之乱題。白鷺評)に出席、2句詠む。文政8年(1825)発行の『柳多留』に86句載る(『年譜』による)。

●往来物『**最明寺殿 教訓仮名式目**』（1月。一冊。北條相模守平朝臣時頼公御撰・前北齋為一。印ふしのやま。中沢庄兵衛〈北辰堂〉版。島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北齋美術館蔵）

※北條時頼が、弘長2年（1262）9月に作った92か条の教訓を画材としたものだが、「往古鎌倉御殿最明寺時頼入道遙に遠海眺望の図」（『新北齋展図録』p239の図）のように、時頼の生活なども絵画化している。

●案内書『**江戸 買物独案内**』（2月。三冊。中川芳山堂（中川五郎左衛門）撰。北齋改葛飾為一画。山城屋佐兵衛版他。早稲田大学図書館/国立国会図書館蔵）

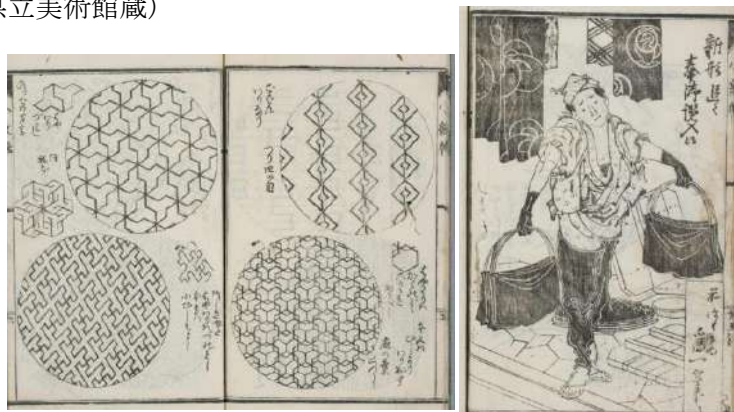
※『江戸 買物独案内』二冊と『飲食之部』一冊の構成。北齋は上巻に「東都繁栄之図」（無款）と「浅草観世音富貴市之図」（北齋改葛飾為一画）、及び『飲食之部』の見返しに「鯉 白魚 蝶（鱸か） タコ」（無款）一図を描く（『年譜』による）。



浅草観世音富貴市之図（早稲田大学図書館）

●絵手本『**新形小紋帳**』（3月。中本一冊。全27丁。柳亭種彦の序文に「文政甲申春三月雨日」とある。染色家のための小紋染め図案集。大阪屋秀八・播磨屋勝五郎他六書肆の連名版。すみだ北齋美術館/島根県立美術館蔵）

※表紙見返しに「初編 新形 染彩目 発兌 後編 植華手引 糸 近刻 葛飾為一筆 印一人人形」とあって、後編を予告している。初編・後編共に特殊な読みを付し、各図案に簡単な図案名や説明をつけている。明治17年『北齋模様画譜』に再刻改題。



新形小紋帳（すみだ北齋美術館）最終丁

最終丁に「前ほくさみ為一筆」と署名し、紺屋職人の絵に添えて「新形追々奉御覧入候」と、続編を予告している。

●狂歌絵本『**花鳥風月集**』（9月。角書「狂歌新撰」。一冊。葛飾為一。口絵に三十六人を描く。他に竜斎北泉画。六樹園撰。石川雅望（六樹園）の序文。二世浅草庵の跋文。壺月堂市住版）

●錦絵「奥州塩竈松寫之略図」（この頃か。天保初期（1830～33）説あり。横大大判。一枚摺。前北斎為一筆。印つによつてうつす。40.8×54.5 日本浮世絵博物館/パリ国立図書館/島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/メトロポリタン美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※戴斗時代に三種の俯瞰図があるが、為一期では唯一の俯瞰図。印号に「つによつてうつす」（図によって写す）とあるので、何らかの図を参照したものか。

奥州塩竈松寫之略図（『2019 新北斎展図録』

より転載：島根県立美術館）



●錦絵「諸国名橋一覽」（「百橋一覽」の改題後摺版。無款。42.7×58.2 太田記念美術館：長瀬コレクション/国立国会図書館/すみだ北斎美術館蔵）

※「百橋一覽」（文政6年：1823）にあった賛が消え、図右上に横書きで「諸国百橋一覽」が記される。

●摺物「色紙判五枚揃の役者絵」（1

月。「役者芝居図」とも。色紙判〈中判〉着色。全5枚か。署名：人まねする甲のはつ春かつしかの親父為一筆。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※文化4年（1804）以来、描かなくなった役者絵を頼まれて描いたものか。曾我狂言に取材した五枚揃の役者絵（浅野秀剛「北斎の主題 選びの法則—フリーア美術館所蔵の肉筆画調査レポート」『2005 北斎展図録』p31所収）。

各図とも歌川風で描かれているので（『年譜』による）、自ら「人まねする」というのであろう。

☆〈七代目市川團十郎と二代目岩井糸三郎〉（20.7×18.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※印を結んで見栄を切る団十郎と、横笛を持って振り返る女形糸三郎の図。落款中に「甲のはつ春」とある。七代目市川團十郎と二代目岩井糸三郎（島根県立美術館）



☆〈三代目市川門之助と七代目市川團十郎〉（ボストン美術館蔵）

●摺物「羅生門」（1月。着色。北斎改為一筆。19.7×26.4 太田記念美術館：長瀬コレクション/大英博物館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション）



※画中の高札に「申初春」とある。図は、甲冑姿の武将が羅生門の石段に片足を掛けて、両手で高札を掴み、馬の手綱を口に銜えて強く引いている図。能「羅生門」の題材。

羅生門（すみだ北斎美術館）

源 綱（渡辺綱）の羅生門に巣くう鬼の片腕を切り落として退治した話で有名。「綱」から手綱を強調したか。高札に「申初春 狂歌堂」とあり、文政7

年の春、狂歌堂真顔の四方側の依頼によるもの。狂歌「たのミある中よき類のツハものゝましはり深き春の酒宴 鉄廼屋大門」、「豆はやす東の京の鬼やらひ 羅生門まで春の来る頃 燕栗園千穎」が記される。高札には「禁礼 禁おきて 君俄ため摘若菜野に手綱取る 絡那須謝武春駒 申初春 狂歌堂」とある。

文政8（1825）乙酉 66 歳 前北斎葛飾為一述出、北斎改為一、前北斎為一述出、

前北斎為一 印 二人人形、ふしのやま：こと（55 歳）（阿美与：37 歳）孫（16 歳）阿栄

（28 歳）

- ◇1月7日、初代歌川豊国没（57）。
- ◇2月18日、異国船打祓令。
- ◇5月、イギリス船、陸奥九戸沖に来航。
- ◇シーボルト、出島に植物園を造る。
- 7月26日、四世鶴屋南北「東海道四谷怪談」初演（中村座）。
- 曲亭馬琴、合巻『傾城水滸伝』（中国小説の翻案）。

★甲信方面に旅をしたか（詳細不明）。

【長女阿美与没】

★この頃阿美与没か（37）。孫は柳川重信に預けるも、重信が大坂に行くため再び北斎の元に引き取る。

※『日本浮世絵博物館所収 大揃い北斎』（北斎資料 757. p172）で紹介されている『浮世絵派画集・第5冊・77頁（大村西崖）』では文政4年（1821）の没としている。

「（略）長女美与、門人柳川重信に嫁し、後離別して家に帰りて死す（北斎墓碑の側面に「浄運妙心信女、文政四辛丑歳注十一月十三日」とあるは即ち是れならむ）」（ルビは筆者による）とある。

注）辛丑歳：辛巳歳の誤りか。

★3月10日、川柳の会（清屎評）に出席、1句詠む。（『年譜』による）。

【『俳諧柳多留』に序文を書く】

★この年発行の『柳多留』85篇中の「女郎花連」の句集の序文を書く。

「敷島の道ハ正しうして動ず。縦バ人の立るに等し。是真と言べきや。連俳ハ前句の意を伝へて其様を異にす。巻中自歩が如し。亦行ならずや。されバ此風詠は滑稽を元とし、興を縦にす。聞人咄笑して、能世に走るを以て艸とせんか。しかも川柳の枝葉繁茂して、八十五編の著名を分つ。夫が中に女郎花と呼べる名に愛て馬喰町居る清屎の主ト年風流の筵を開き、四方の好子を勧めて、何百有余吟を集め川柳翁の撰を乞ふ。甲乙の位定て、上木(筆者注：出版)して集の末編に備ふ。僕其席に連るを以て是に序せよとなり。幼より画を好むの癩癩ハあれど文編の筵を窺ふの眼なく、烏焉馬(注：烏亭焉馬)の誤りいかにせんと再三辞すといへども赦さず。止事を不得して丹青の筆を霏ぎ鈍墨を点じ、文に似たるを記す。観る人答る事勿れ。于時文政西夏 前北斎葛飾為一述卍」(『年譜』資料20 p161。句読点は筆者による。ルビは現代仮名遣いに直した)

※烏亭焉馬(落語中興の祖。1743～1822)の勧めでしかたなく序文を書いたというのである。序文及び同集所収の北斎の19句に俳号として「卍」を用いている(『年譜』による)。

★10月2日、川柳の会(カシハ評)に出席、3句詠む。

★12月15日、川柳の会(中ノ橋納会。松鱸評)に出席、2句詠む(『年譜』による)。

★12月20日、川柳の会(葛飾納会。夢輔楽評)に出席、1句詠む(『年譜』による)。

★この年発行の『柳多留』に掲載された句(85編に19句、86編に27句・88編に1句)

※以下、本稿掲載句及び解釈は『諷風柳多留全集』(三省堂)と『年譜』及び田中聡『北斎川柳』(河出書房新社)、宿六心配(西山新平)『謎解き 北斎川柳』(河出書房新社)を参照した。

【柳多留 85 編】

☆団子屋の夫婦喧嘩は犬も喰 卍(犬も食わない夫婦喧嘩も、団子屋の喧嘩は飛び散った団子を犬が食う)

☆黄色なゑり巻和尚さまきつい好 卍(黄色の襟巻きの高僧は、襟巻き同様、男色の狭くてきついのが好き)

☆誰が嗅いで見て譬たか河童の屁 卍(屁の河童というが、いったい誰が嗅いで譬えたというのか)

☆鳥指しハ生きた雀の帯をゞ 卍(鳥指しは捕まえた雀を生きたまま腰の帯に挟み込み、後で鷹匠に渡す)

☆誰がかいで見て譬たか河童の屁 卍(他者評により前出。但し、表記に異同あり)

☆いろはへ花のちりにるハ比叡おろし 卍(比叡山に縁のある上野寛永寺の坊主が、花の散るようにぞろぞろと不忍のいろは茶屋を目指す)

☆とかく葛の葉後口からさせ勝手 卍(安倍清明の母・葛の葉は狐の化身。交接は後からのし放題)

☆大道直ふして昌平まで柳 卍(無) (浅草御門から昌平までの柳の大道は吉原通いの人出が多い)

☆新造を備後表へのり出させ 卍(経験浅い新造は、備後表の畳に船を乗り出すように頭が蒲団の上に出る)

☆気行の情を能真似るので流行 卍(いく表情や仕草が演技ながら上手なので人気の遊女だ)

☆足ながの三里手長がすへてやり 卍(足長の男の三里には手長の男が灸を据えてやる。『山海経』から)

☆頭字をひろつて夫婦ツマト呼ビ 卍(妻も夫もツマと呼ぶ。妻のツビ、夫のマラの頭文字も続ければツマ)

- ☆真直な榎木の棒を母の杖 卍 (真っ直ぐな硬い棒が母の杖になる。堅気の真面目な息子の棒も義母の棒だ)
- ☆見附物だと突合ぬ鳩仲間 卍 (口うるさい見附の番人のいる所の鳩は、互いに突つかずに、付き合わない)
- ☆雪の朝親を炬燵に呵り込ミ 卍 (雪の朝、仕事を装い遊郭に行こうとする父親を炬燵に入れと諫める子)
- ☆売居のやうに御寺の煤はらひ 卍 (売り家のように堂内をからっぽにしての寺の煤払い)
- ☆化物の息子三郎ッ首ぐらゐ 卍 (六郎っ首の息子だから三郎っ首ぐらいのものだろう)
- ☆鉄壁も通ふれと浅黄おやしてる 卍 (遊郭で、浅黄木綿の田舎侍が鉄壁も破らんと勃起して控えている)
- ☆干蛸魚苞麩となり果る口惜しさ 卍 (干蛸の足を藁で包んだようなあそこの元気も、柔らかい麩のようになった悔しさ)

【柳多留 86 扁】

- ☆御薬菌青瓢単 (たん) が多んを這ひ 卍 (小石川薬草園の療養所の縁側に青ざめた病人が寝ている)
- ☆灰小屋の出逢イ穢栗投入れ 卍 (灰を貯える小屋での密会は、覗いた男に嫌がらせて穢栗を投げ込まれる)
- ☆紅葉ふみわけぐんにやりと鹿の屎 卍 (紅葉踏み分け、なんと鹿の尿を踏む。猿丸太夫の歌を踏まえる)
- ☆御薬菌青瓢単 (たん) が多んを這ひ 卍 (他者評により前出)
- ☆鱚と唐もろこしハ又いとこ 卍 (魚の卵のつぶつぶはトウモロコシと似ていて従姉妹の従姉妹か)
- ☆紅葉ふみわけぐんにやりと鹿の屎 卍 (他者評により前出)
- ☆小当りのこたつにむすこ首ツたけ 卍 (娘と炬燵に入り、息子は相手の気持ちを探る。息子も元気)
- ☆雪かきの十のふの出る美しさ 卍 (冷たい雪かきに、炭火を運ぶ十能を持って出てくる娘の美しさ)
- ☆唐の節季候チャルメラで踊り込み 卍 (割竹を鳴らす門付けの節季候が、チャルメラを鳴らす唐人だ)
- ☆ふん付けたかとおもわれる乱拍子 卍 (能「道成寺」の足踏みの舞は踏んづけたよう。「糞」に掛ける)
- ☆二間柄の蛇皮線を弾く手長島 卍 (一間の柄を二間にして蛇皮線を弾く『山海経』にある手長国の女)
- ☆天狗の管弦簫の笛をバ吹ず 卍 (天狗は管弦も得意だが、簫は鼻が邪魔して吹くことができない)
- ☆すくはせ給へ御十夜のあづきがゆ 卍 (御十夜の日のあづき粥。私を救うように揃ってください)
- ☆惣銅壺女房と共に身をしづめ 卍 (借金で、女房は身売りし、火鉢の高価な銅の爛付けまでも売りに出す)
- ☆新道へ金のなる木をやりたがり 卍 (横町の細い新道には妾が多い。娘も妾にして裕福に暮らさせたい)
- ☆いゝのくを尻で書ク大年増 卍 (大年増は娘と違い、指ではなく「いいの」を恥じらいなく畳に尻で書く)
- ☆灸点に勇士後ろを見せる也 卍 (敵に後ろを見せない勇士も、灸を据えるときは背中を見せてやせがまん)
- ☆彫物の有るが稲荷の吾妻ツ子 卍 (浅草稲荷町の寺は彫刻が多い。彫物のある寺も男も江戸っ子の自慢)
- ☆灸点に勇士後ろを見せるなり 卍 (他者評により前出。但し、表記に異同あり)
- ☆明キ株は三郎坊に中天狗 卍 (長男・次男ならぬ三男坊や大天狗ならぬ中天狗には株がなく、一人身が多い)
- ☆六部宿千手観音背負せられ 卍 (六十六部が泊まる安宿では、千手観音と称す虱をうつされる)
- ☆ふへますに気がへりますと姑いゝ 卍 (娘に子が増えたけれど、私は白髪や皺が増えて気が減入る)
- ☆大切な尿を見に来る小児医者 卍 (もっともらしく診察で子どもの尿を見に来る小児医は胡散臭い)
- ☆我ながらくさめを笑ふ鏡磨キ 卍 (銅の鏡面を磨きながらくしゃみをした自分の変な顔に思わず苦笑い)
- ☆振袖と羽織を吃(吠え)る村の犬 卍 (村には珍しい振袖姿の娘や羽織の男。胡散臭さに犬も吠える)
- ☆其腰で夜路も竿さす筏乗り 卍 (木場のいなせな筏乗りは、そのしっかりした腰で夜も竿さすのか)

☆さめての上の御分別黒に染メ 卍 (色褪た着物はよく思案して古さの目立たない黒に染め直そうか。『仮名手本忠臣蔵』七段目「一力茶屋」の場での平右衛門の台詞「醒ての上の御分別、無理を押へて三人を」を踏む)

【柳多留 88 編】

☆猪子から櫓の下でたゝきばき 卍 (猪子の日は炬燵開きの日。炬燵の下は男女の舞台。触れた手を叩く)

●料理本『料理通 二編』(2月。角書「江戸流行」。全四編。八百屋善四郎作。北斎改为一筆。他に、酒井抱一、谷文晁等が挿絵を描く。和泉屋市兵衛〈甘泉堂〉版)

※北斎は二篇(八百前改築の図)と四編(天保6年2月:1835)に挿絵を描く。初編(文政5年:1822)と三編(文政11年:1828)には描かず。

※江戸の料理屋:八百善注の料理法の解説書。

注)八百善:享保2年(1717)に江戸の山谷で開業。文政期の四代目の当主栗山善四郎は文人墨客との交流が深く、狂歌、絵師、戯作者の大田南畝(蜀山人)は八百善で芸者小萬に「詩は詩佛(筆注:大窪詩佛。文化文政期の漢詩人) 書は米庵(筆者注:市河米庵。文化文政期の書家。幕末の三筆と唱われた)に狂歌俺れ 芸者小萬に料理八百善」と狂歌を書いて渡し、その道の随一を示したという(『頓智頓才蜀山人』ねばけ庵主人編 大正3年。「国立国会図書館デジタルコレクション」p236~237より)。



二編:八百前改築の図(早稲田大学図書館)

●錦絵『新版大道図彙』(全12図。四つ切判錦絵揃物。無款。西村屋与八・伊勢屋利兵衛版)

※この年の西村屋与八の出版広告に「新版 大道図彙 前北斎为一 袋入十二枚 此画江戸市中のにぎハひ大道の有さまを集む はりませなどにハ別て珍しき品也御求御覧可被下候」とあるという(2005『北斎展』カタログ)。広告には「前北斎为一」とあるが図は無款。

※版下絵には「東都地名の内」という題が付されている(『秘蔵浮世絵7 ギメ美術館』p251)

☆〈日本橋〉(12.7×19.4 フランス国立図書館/ギメ美術館蔵)

※旅の男二人が描かれ、「かつしかごおりのひやくせうほくろべいゑどけんぶつしてづなくうつたまげ申のふぜひをゑがく」(葛飾群の百姓黒子兵衛、江戸見物して図無くうつたまげ申すの風情を画く)と記され、日本橋の上で葛飾の百姓ほくろ兵衛が江戸の繁盛ぶりに驚いている傍らで、欄干にもたれて江戸城を指差している男がいる。十辺舎一九『東海道中膝栗毛』の弥次郎兵衛と喜多八を意識して制作されたと思われる。

☆〈本所〉(12.7×19.1 フランス国立図書館/ギメ美術館蔵)

※桶職人が桶に乗って箍を打っている。それを手伝う三人の男。大桶枠の中に入って削っている職人の図。

☆〈小田原町〉 (12.7×19.6 東京国立博物館/ギメ美術館/フランス国立図書館蔵)

※魚市場で両天秤の左右の籠に二尾の大きな鯉を入れ運んでいる男。それを見ている男たち。

小田原町は、現東京都中央区日本橋本町と室町辺り。

小田原町 (東京国立博物館)



☆〈茅場町〉 (12.7×19.6 東京国立博物館/ギメ美術館/フランス国立図書館蔵)

※大提灯に絵を描く三人の男と、墨を調合する男と、提灯を支える男の図。

茅場町 (東京国立博物館)



☆〈石町〉 (12.7×19.2 東京国立博物館/ギメ美術館/フランス国立図書館蔵)

※天狗の面を付けた箱笈を背負い、高足駄を履いている

山伏。シ



ャボン玉を吹いて売り歩く男、それを面白がって見る子どもたち。一升徳利を三本手に持っている男。蕎麦捏ね用の大盆を立てて蕎麦切包丁を持っている男たちの賑わい。

石町 (東京国立博物館)

〈外神田〉 (東京国立博物館/フランス国立図書館蔵)

※やっちゃん場(青物市場)への西瓜を船から岸の受け手に放っている図。フランス国立図書館所蔵の「西瓜の陸あげ」にも同画趣の絵がある。⇒文政9年条参照。

外神田 (東京国立博物館)



☆〈馬喰町〉 (12.7×19.1 東京国立博物館/ギメ美術館/フランス国立図書館蔵)

※「公事宿」と呼ばれる宿泊所の部屋で按摩をし



てもらう三人の男、それを見ながら旅支度をする二人の女。版元の永寿堂(西村屋与八)を思わせる「永」と染め抜かれた風呂敷に包まれた荷物が置かれた部屋の風景。

注) 公事宿：訴訟などのために宿泊する宿。訴訟手続きの事務処理に携わる人もいた。

馬喰町 (東京国立博物館)

☆〈御蔵前〉（12.7×19.1 東京国立博物館/ギメ美術館蔵）

※仁王が安置された講堂に集まり念仏を唱える信者たちのを俯瞰的に描いた図。版下絵の

大提灯に版元の伊勢屋利兵衛・永楽屋東四郎・近江屋与兵衛（？）の文字が記されるが、錦絵では永楽屋の文字が消え、「志摩や重太●」と差し替えられている（『秘蔵浮世絵大観7 ギメ美術館』p 251）。



御蔵前（東京国立博物館）

※『秘蔵浮世絵大観8』（p 262～269）では、この図を「無題」としている。

☆〈四ツ谷〉（東京国立博物館/フランス国立図書館蔵）



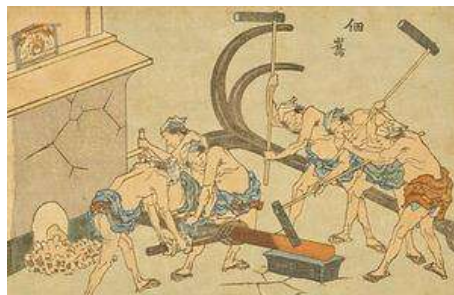
※往来で、商売物を入れた箱を担ぐ男、大傘の下で物を売る男、その前を馬で早駆けをする侍など、往来の賑わいの図。

四谷（東京国立博物館：travel.jp より）

☆〈佃島〉（12.7×19.4 東京国立博物館/ギメ美術館/フランス国立図書館蔵）

※船の錨を鍛冶のハンマーで打つ男達の図。

佃島（東京国立博物館）



☆〈通町〉（東京国立博物館/フランス国立図書館蔵）

※「大蒲焼 ゑどまへ かばやき」と書かれた箱看板のある前の台に腰を下ろす母親と、その台に上ろうとしている子ども。その傍で赤子を抱きあげて



喜ばしている母親。足萎えの男が木製の引き車に乗って移動している。その男の被る笠には「森田屋」の文字が記される。臼で米をつく男が手を休めて煙管で一服している。臼の下ではこぼれた米を漁る家鴨と鶏。米俵を背負って棚に寄りかかって休む男など、通町の賑わいの図。

通町（東京国立博物館）

☆〈無題〉（「住吉踊り」「季ぞろ」とも。東京国立博物館/フランス国立図書館蔵）

※大傘の下で踊る男たち。各人が手に持つ団扇には「新」「板」「大」「道」「囃」「臺」の一字がそれぞれ書き込まれている。版下絵には「橋本町」（馬喰町となり）とある。

無題（東京国立博物館）



●川柳本『十二評十六題 狂歌国尽』（夏。一冊。瀬川路蝶撰。序文に「干時文政酉夏 前北斎為一述刊」とある）文化7年（1810）『狂歌国尽』の改竄本といわれる（『年譜』による）。

●肉筆画「雄鶏図」（着色一幅。前北斎為一筆。印ふしのやま メトロポリタン美術館蔵）

※赤い鶏冠と黄色い両足、黒い羽根で覆われた雄鶏が首を垂れてこちらを見ている図。縁取りがない墨絵風の絵。

●肉筆画「鈿女命と猿田彦命」（絹本着色胡粉一幅。無款）
 ※天狗の顔をした猿田彦命が右手に矛を持って立ち、鈿女命が垂髪、緋袴姿で右脇に矛を抱えて向き合っている。背景は胡粉地に黄土色の地潰し。



鈿女命と猿田彦命 (http://uzumet.com より転載)

●摺物「小禽」（北斎改為一筆。印二人人形。18.9×17.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）



小禽（すみだ北斎美術館「北斎師弟対決展」ツイッターより）

※黄色の鶏の雛と思われる三羽を漢画風に描く。鳥の画材から「酉年」の今年の作と推測されている。六樹園の狂歌「普米かあたまはかりかか

すくの 筆の坊よくなるうめてたき」（歌意不明）が記される（『ピーターモース・コレクション北斎図録』による）。

●摺物「彫摺図」（正月。色紙判着色摺物。北斎改為一筆。21.2×18.7 フィッツウィリアム美術館蔵）

※新春の摺物として、長門・萩の節亭南山の依頼によるもの。烏帽子を被る男が桜木を彫っている側で、晴れ着を着た女性が馬車で色を摺っている図。二人の脇には、「南山壽」と彫られた衝立が置かれている。「桜木にことぶく春の摺ものも 南の山のかげず崩れず」の狂歌が記される。

文政9（1826）丙戌 67 歳 前北斎為一、為一、葛飾為一、为一模、为一写、（北斎）

印 葛しか、一人人形：こと（56 歳）孫（17 歳）、阿栄（29 歳）

◇江戸で疱瘡が流行。

◇4月1日、天文方の高橋景保（書物奉行）が江戸・長崎屋にシーボルトを訪ね、江戸とサハリンの地図、間宮林蔵の権太の記事を贈ると約束する。4月9日、高橋景保が再び訪れ日本地図を後日秘密裏に長崎に送ることを告げ、翌文政10年6月にシーボルトに送った（『シーボルト江戸参府紀行』（p524～525より）昭和50年改訂復刻版 呉修三訳注。雄松堂書店 初版昭和3年）。

※長崎への帰路、5月7日に大坂・道頓堀角の芝居小屋（麻尾弥三郎座）で「妹背山女庭訓」をシーボルト、スチュルレル、川原慶賀らが観劇する。市川団蔵、尾上菊五郎、尾上松助らの出演だったらしい（『2017 北斎展図録』p12、及び『シーボルト江戸参府紀行』昭和50年改訂復刻版p575～581）。

★4月8日、馬琴宅を訪れ杉浦女に扇二本を渡す。『馬琴日記』の本日条に「昼後、画工北斎来る。明後十日画会致候に付、杉浦女、柳新へ案内いたしくれ候様、申に付、お百を以て、案内致させ也。即刻帰去。杉浦方へ扇二本持参のよし」とある（ルビは筆者による）。

★4月9日、馬琴主催、柳橋満八での書画会に出席。

★4月10日、北斎自ら柳新で書画会を催す（『馬琴日記』）。

★10月23日、川柳の会（武蔵野会。水魚評。会主：風松）に出席、1句詠む（『年譜』による）。

★11月22日、川柳の会（首尾松三回目。金成評）に出席、2句詠む（『年譜』による）。

★12月10日、川柳の会（首尾松会。菊雄評）に出席、1句詠む（『年譜』による）。

★『柳多留』89編に川柳2句、91編に川柳11句載る（『年譜』による）。

【柳多留 89 編】

☆弱よく強を制しまア寐なんしよ 卍（妓楼で待たされ不機嫌な侍に、まあ寝ましよう甘い声で慰める）

☆誰のために育ツ權の切かげん 卍（墓前に供える櫛が育ったが、供養する人にはどの程度切ったものか）

【柳多留 91 編】

☆性ハ為名ハ莊字ハ郎としやれ 卍（姓は「い」名は「そう」あざなは「ろう」で「居候」と洒落る）

☆古事記いせやハ浦安の嶋を着せ 卍（伊勢屋はケチで安物の裏地・伊勢縞を奉公人に着せる。「浦安の国」（日本）を書いた「古事記伝」の本居宣長も伊勢出身）

☆婚礼を蜆ですます急養子 卍（跡継ぎがなく、急な養子貰いの祝いには、蛤の吸い物ではなく蜆ですませる）

☆加茂の祢宜鍋とり公家と呑んで居る 卍（鍋掴みに似た飾りの冠を被る貧乏公家が、加茂の祢宜と呑んでいる。鴨・葱・鍋・鳥の組み合わせ）

☆蜻蛉ハ石の地藏に髪を結び 卍（石の地藏の頭に蜻蛉が止まって、地藏が髪を結ったように見える）

☆見付たら六つにすると馬鹿亭主 卍（密通の男女は重ねて四つにするが、実は女房の相手は二人だった）

☆どつちらで年を取ふと渡し守 卍（大晦日、恵方参りの客を乗せた船頭は、どっちの岸で年を取るのか）

☆恐ろしい釘に夜宮のかけ行灯 卍（宵祭りの行灯が、丑の刻参りで打ち込まれた五寸釘に掛かっている）

☆乞食の喧嘩鶏にひろわれる 卍 (乞食の喧嘩で貰った食べ物物が散らばって、それを鶏が脇から拾う)

☆乞食の喧嘩鶏にひろわれる 卍 (他者評により前出)

☆むだきんを広げてこまる若狸 卍 (若い狸は八畳敷きに足りず、見栄で広げてはどうしてもいいやら困る)

【北斎工房の絵、大量に海外へ】

★3月15日(西暦1月9日)、シーボルト、商館長(J.W. Stuveler ヨハン・ウィルレム・ド・スチュルレル)の江戸参府に同行。長崎の若い絵師川原慶賀(1786～没年不明)を伴い、道中の様子を描かせる。4月10日(西暦3月4日)江戸着。5月18日(西暦4月12日)迄滞在。

※シーボルト、江戸滞在の4月10日から5月18日の間に北斎に会い、文政5年(1822)に前商館長ブロムホフが発注した絵を一揃い受け取る(マティ・フォラー「葛飾北斎とシーボルトの出会い」)。『2017北斎展図録』p11所収)

但し『シーボルト江戸参府紀行』(昭和50年改定復刻版)には、北斎と会ったという記事は見当たらない。江戸滞在中のほぼ毎日の記事が記載されているが、3月8日と4月4日から7日までの記事が書かれていないので、あるいはこの期間に会ったか。

※『秘蔵浮世絵大観8 パリ国立図書館』所収文には次の記事があるので要約する。

「1986年10月25日、パリ国立図書館において、檜崎宗重博士と本全集編集部は、25枚の水彩画を発見した。25図全ての様式は葛飾北斎かその一門の手と思われる。オランダ商館長ヨハン・ウィルレム・ド・スチュルレルが文政9年(1826)4月頃に江戸で入手したらしい。ほぼ同じ時期の制作と考えられる葛飾様式の水彩画15枚がフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトのコレクションとしてライデン民族学博物館(筆者注:現オランダ国立民族学博物館)に所蔵されている。これは寛政10年(1798)、商館長ゲイスベルト・ヘンミー(1748～98)と商館付医師レチケの注文したもの(寛政10年の項参照)」。

これについては、文政9年中に絵を描く約束があり、『日本風俗画』(仮称。彩色。オランダ画紙使用)として、シーボルト所蔵のものはライデンのオランダ国立民族学博物館に、オランダ商館長スチュルレルの所蔵のものはパリ国立図書館(筆者注:現フランス国立図書館)に、それぞれ買取られたという注(2007年12月13日「日経ビジネスオンライン」所収、内田千鶴子「シーボルト事件に脅えた北斎」より)。

注)1855年、J.W. Stuvelerの息子W.L. Stuvelerにより1855年にパリ国立図書館に寄贈された。

※シーボルトは『北斎漫画』初編から10編までも持ち帰っている(『北斎漫画』3「奇想天外」所収「旅する北斎漫画」浦上満 p337より。2011年 青幻舎)。但し、初摺版は2冊だけらしい(浦上満『北斎漫画入門』p32 文藝春秋社 2017年)。

【シーボルトが持ち帰ったとされる15図】

※文政7年(1824)～9年(1826)の作か。古オランダ画紙による画(オランダ国立民族学博物館:シーボルトコレクション蔵)。

ファン・ヒューリック(ワシントン・フリーア美術館長)による分析(『秘蔵浮世絵美術館 8 パリ国立図書館』 p 268~267)では、第1グループ(1~6)は「日常生活の情景」(古オランダ画紙を使用)、第2グループ(7~11)は「祭礼」(古オランダ画紙使用)、第3グループ(12~15)は「江戸市中」(古オランダ書類上質紙に和紙で裏打ちしたものを使用)に分けている。

※第1グループと第2グループはシーボルトが収集し持ち帰ったもので、第3グループは川原慶賀(魚屋北溪画ともいわれる)が北斎をまねて描いたものとしている。

※「広義の北斎作」とは、北斎工房の手が加わっているか、北斎の意匠を工房が制作したものである作品をいう。

☆1〈早駆け〉(紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定:北斎。26.7×40.1 シーボルト・コレクション)。『富嶽三十六景』(天保2年)〈隅田川関屋の里〉や「武士の乗馬」(フランス国立図書館蔵文政9年条参照)にも同画趣がある。



早駆け (オランダ国立民族学博物館)

☆2〈厩〉(「洗馬図」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定:北斎。27.3×39.8 シーボルト・コレクション)

※二頭の馬を厩で洗う二人の男。一頭は歯を磨き、もう一頭は餌袋から与えられた桶の餌を食べている。『絵本孝経』(嘉永3年:1850)に同画趣がある。

☆3〈武士と従者〉(縦紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定:北斎。39.5×27.5 シーボルト・コレクション)

※肘までの手袋をつけようとする武士と、笠と風呂敷の包み物をもつ従者の図。

☆4〈驟雨の夕立〉(「驟雨図」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定:北斎。27.2×39.8 シーボルト・コレクション)

※突然の夕立に傘をさしたり、笠をかぶったりして慌てている図。『富嶽三十六景』〈駿州江尻〉の動きのある画趣に近い図。



驟雨の夕立 (オランダ国立民族学博物館)

☆5〈漁師の家族〉(「漁村図」「初夏の浜辺」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定:北斎と応為。27.6×40.2 シーボルト・コレクション)

漁師の家族 (オランダ国立民族学博物館)

※漁師とその妻が上から吊るされた網を編んでいる側で、打ち上げられた大きな錨に乗って遊ぶ5人のこ



ども。画面右には石垣の上に家が建っていて、沿岸の海沿いの家並みも遠近法で次第に小さく描かれる。

☆6 〈呉服商〉（「商家の図」「節季の商家」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定：北斎と応為。27.8×40.1 北斎と応為の共作とも。シーボルト・コレクション）

※店の主人が炬燵にあたり、猫も丸まっている。その前で番頭が当座の帳面を脇に置いて算盤をはじいている。その脇では女将が茶を団扇で沸かしながら番頭の様子を穏やかに見ている。画中の当座の帳面に「文政七年正月」の文字がある）

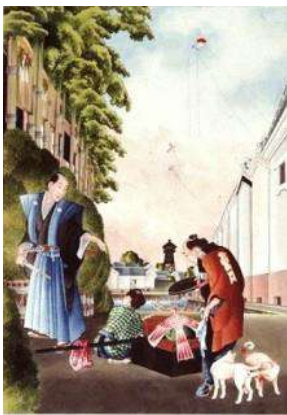


呉服商（オランダ国立民族学博物館）

☆7 〈秋祭り〉（「村祭り図」「初午祭」とも。横長判。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定：北斎。27.6×40.5 シーボルト・コレクション）

※村の祭りで子どもたちが、小川の端の先を練り歩く。狐の面をつけ扇子を広げている子がいる。先頭の子は「正一位大明神」の幟を持っている。

☆8 〈年始回り〉（「霞が関での年始回り」「年始行図」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定：北斎と応為。39.8×28.4 北斎と応為の供作とも。シーボルト・コレクション）



※袴をつけた武士が、盆を手に持つ商人と、鉄箱の上に鳶凧が置かれ、その脇でしゃがんでいる丁稚に何か話している。これから新年の挨拶廻りをする様子。商人の足元には犬が二匹、互いに臭いを嗅ぎ合っている。図の左には、新竹で作った垣に海老と羊歯（裏白）の正月飾りが飾られ、図の右の立ち並ぶ倉とともに遠近法で次第に小さくなり、その先の火の見櫓に視点が集中する。空には凧が三つあがっている。

年始回り（オランダ国立民族学博物館）

☆9 〈花魁と禿〉（「遊女と禿図」とも。無款。北斎工房。推定：魚屋北溪か二代戴斗。紙本着色一枚。40.0×27.6 シーボルト・コレクション）

花魁と禿（オランダ国立民族学博物館）

☆10 〈花見図〉（「花見見物の一行」とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。北斎と応為の供作とも。40.0×27.2 シーボルト・コレクション）

※商家の女二人が姉様被りで花見に出かける。二人の手には煙管がある。側には下男が赤い毛氈を担ぎ、弁当の入った箱を抱えている。丁稚も日傘と荷物を背負って付き従っている。図の左には細みの桜の木が三本あり、図の上全体に花を広げている。





花見図（オランダ国立民族学博物館）

☆11 〈端午の節句〉（広義の北斎作。魚屋北溪画とも。紙本着色一枚。無款。北斎工房。推定：北斎と応為。40.2×27.6 シーボルト・コレクション）

※物干し場の中で、女が赤子を抱いて、母親のほうに差し出そうとしている。母親は着物の前をはだけ、胸を出して赤子を見ている。紋が描かれた幟や、赤い鍾馭が描かれた幟が立ち、図の上には大きな鯉幟が泳いでいる。



端午の節句（オランダ国立民族学博物館）

☆12 〈七五三宮詣〉（30.4×39.8 無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。紙本着色一枚。シーボルト・コレクション）

※土手の先の神社に向かう七五三詣の一行。男性に肩車された少女は角隠しを被っている。その前を行く母親。後についていく小奴。土手の先には往来している人たち、土手下では駕籠かきがいる。図の上半分は藍のぼかしで空が描かれる。

☆13 〈大川端夕涼み〉（「大川楼上図」とも。30.4×39.8 無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。紙本着色一枚。シーボルト・コレクション）

※隅田川端の料理屋の提灯が架かっている楼上で涼む芸妓が二人。一人は立って、跪いて三味線箱を小脇に抱えた男と話している。一人は背を向けて座り大川の夜景を眺めている。そばに朱塗りの五脚の盆に料理の椀などが乗っている。

☆14 〈江戸城〉（30.4×39.7 無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。紙本着色一枚。シーボルト・コレクション）

※「玄猪」は、10月亥の日の行事で、胡麻や小豆を入れた亥の子餅を亥の刻に食べて無病息災を祈る中国の行事を江戸城でも催された。「玄猪の登城」は暮六つ（午後6時頃）に登城するので、大手門と桜田御門前で火を焚く。図は炊かれる焚き火が描かれる。火は城の櫓に向かって吹き上げられている。登城した諸侯に紅白の餅が下賜された。

☆15 〈大山講山帰り〉（「行楽図」とも。30.4×39.7 無款。北斎工房。推定：魚屋北溪。シーボルト・コレクション）

※道標のある緩やかな山道を、二人の女と、子供を背負う年増女の家族。その後ろには小僧が二人、棒に下げた荷物を肩にしてついていく。同様の右にも大山帰りの男が二人立っている。

【文政7年～9年頃。フランス国立図書館蔵の北斎にかかわる作品25図】

（紙本着色。『浮世絵大観8「パリ国立図書館」（現フランス国立図書館）』による）

※以下、北斎工房による作品。全て和紙を使用。

☆1 〈武家〉（北斎工房・推定 北斎。紙本着色 45.2×31.7）



※和綴じ本を左手に持ち、三つ巴紋の袴を着け、何かを見やる侍。

武家

町家の娘

☆2 〈町家の娘〉（「まちやのむすめ」とも。紙本着色。北斎工房。推定：北斎。45.4×31.8）

※島田の前髷に赤い飾り物、後ろの髷に青い飾り物をつけ、鼈甲の簪を挿した娘。胸元は少はだけてお守りの紐が見える。下唇は笹紅で、薄い緑色。



☆3 〈武家の奥方〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎。45.4×31.1）

※丸髷に角隠しを被り、外出姿の女房。眉は剃られ、唇は笹紅。鼈甲の簪を着け、撫子の花の模様の扇子を持っている。

武家の奥方

☆4 〈町家の男〉（「まちやのおとこ」とも。紙本着色。無款。45.5×31.8）



※着物の両袖の中で腕組みをして、うつむき顔の男の顔。

町家の男



☆5 〈凧あげ〉（紙本着色。北斎工房。推定：魚屋北溪か二代戴斗。31.8×45.4）

※「龍」の字の書かれた大凧を上げる準備をする男たちを見る町家の奥方。武士と鉢み箱を担いだ供人がいる。空には鳶凧があがっている。

☆6 〈武士の乗馬〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎。31.6×45.4）

※シーボルト収集の15図中の「早駈け」の構図に似た構図。

武士の乗馬

☆7 〈茶店と往来〉（紙本着色。北斎工房。推定：魚屋北溪。31.8×45.3）

※「御屋寿美処」の看板のある葦簾張りの茶店の風景。床机に座る尼や、赤子を背負った女に茶を出す店の女。側には天秤の両脇に下げた籠の野菜を売る男、鳥もちですずめを捕まえようと竿を持ち上げる男がいる。



☆8 〈日本橋辺風俗〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎。31.6×45.5）

※対岸には米蔵が立ち並ぶ。図の右から、臼で餅を突く男が、頭の汗に手を当て休んでいる。菰樽を担いだまま、台に腰掛けて休みながらそれを見ている搗米屋注の男。棒手振りの男がしゃがんで野菜の入った箆を下に置いている。重ねた寿司箱を肩に担いで売る男。掘割で釣りをする男。托鉢をする僧侶。奉納箱を背負い、「奉納金比羅大権現 本所

番場町 願主 金剛院」と書かれたものを持つ金比羅参りの男。鮎の箱を持つ鮎売りの男。棒の先に付けたトンボの玩具を操りながら売る男。

大英博物館にはこの絵の素描がある（墨画。27.6×39.8 『2007 北斎展図録』 p105）。注）搗米屋：玄米を問屋から買い入れ、精米して売る商売。



日本橋辺風俗

☆9 〈大山詣〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎。31.7×45.6）



※険しい山道を行列を作るように登る大山詣たち。「奉納大山石尊大権現」と書かれた大木刀を担ぐ男たち。

大山詣

☆10 〈土手仕事〉（「土手工事」とも。紙本着色。北斎工房。推定：北斎。31.7×45.5）

※土手を工事している男たち。遠くの橋には大勢の人が往来している。『伝神開手 北斎漫画』九編(文政2年)にも同画趣がある。

大英博物館には、この絵の素描がある（紙本墨画。27.6×39.1 『2007 北斎展図録』 p94）。



土手仕事

☆11 〈西瓜の陸あげ〉（紙本着色。北斎工房。推定：二代戴斗。31.7×45.5）

※河岸に着けた舟に大量に積んだ西瓜を岸の男に放り投げる男、舟から岸に渡した板の上に立ち、同じように西瓜を放る男を描く。岸の切石には子供が二人座って見ている。この図は『新板大道図彙』（文政8年）の〈外神田〉と同構図となっている。

大英博物館には、この絵の素描がある（紙本墨画。27.9×40.1 『2007 北斎展図録』 p91）。

☆12 〈大神楽〉（紙本着色。北斎工房。推定：二代戴斗か魚屋北溪。45.3×31.8）

※「大」と染めた布を被った獅子舞が踊り、笛と太鼓で囃す男たち。その周りで見物する人々。



☆13 〈神楽巫女〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎か二代戴斗。45.2×31.5）

※二階の舞台上で巫女が御幣を肩にして踊り、烏帽子の男が太鼓を叩いている。その様子を見上げて見物する人々。『絵本庭訓往来』（文政11年）にも同画趣がある。

神楽巫女



☆14 〈井戸掘り〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎か魚屋北溪。45.4×31.7）

※足場を高く組み上げ、そこに上り井戸掘りの作業をする男たち。

井戸掘り

☆15 〈今戸瓦窯〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎。45.5×34.7）

※いくつかの窯で瓦を焼く男たちに茶を出す女と、瓦を整理する女。今戸は瓦などの焼き物で

有名。『絵本隅田川両岸一覽』（享和3年：1803～文化3年：1806）、『都鳥』（享和2：1802）にも同画趣がある。今戸瓦窯



☆16 〈海女〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎。45.3×31.7）

海女

※海中で鮑を取る三人の海女。海上の船には男たちが乗っていて、一人の海女が鮑を届けようと浮き上がっている。『伝神開手 北斎漫画』初編(文化11年)、『百人一首乳母か絵と起』〈参議篁〉(天保6年頃)にも同画趣がある。



☆17 〈仏師〉（紙本着色。北斎工房。推定：魚屋北溪。45.4×31.7）

※赤く巨大な仁王像に色付けをしている職人たち。足元に寝転んで裾部分を担当する男、太い足に色づけする男、腰の部分に金箔を貼

る男たち。

☆18 〈雨中の漁〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎。31.7×45.4）

※雨の中、激しい川の流りに浮かべた舟から釣りをする三人の男。向こうの滝の上にかげられた橋には傘をさした男たちが往来する。

雨中の漁



☆19 〈海浜の漁師〉（紙本着色。北斎工房：。推定：北斎と応為。31.7×45.2）

※海浜で漁の網を修理する男と、それを指差して何かを指示している男。側で籠を持っている子どもや、弁当の包みを持ち、赤子を背負う女がいる。海辺には波が寄せ、沖には帆掛け船が浮かぶ。

海浜の漁師

☆20 〈洗張り〉（紙本着色。北斎工房。推定二代戴斗。31.7×45.4）

※盥で布を洗う男。横に渡した布に刷毛をかける男と、それを見ている赤子を背負った女。布を干すために竿で持ち上げる男たちを描く。二代戴斗画とも。

☆21 〈素麺作り〉（紙本着色。北斎工房。推定：二代戴斗。31.6×45.4）

※民家の軒先で男女が素麺を作っている。座ってこね鉢の素麺の生地をこねている男と女。細く伸ばした素麺を組んだ桁に掛け、棒で整えながら干す女。二本の棒に巻きつけた生地を伸ばす作業をしている男女。

☆22 〈漆屋 ろうそく屋〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎。31.5×45.3）

※図の右には、「山形の下に久」と書いた定紋と、「ひしや（菱屋）」と書かれた暖簾の掛かる店先で、大きな木鉢に漆を塗る三人の職人。。図の左には、「清浄三徳」と書かれた蠟燭を象った立看板があり、「三徳」と書かれた暖簾の店の中で、二人の男が蠟燭を作っている。三徳は、四谷御門外の蠟燭問屋・三徳屋治兵衛の店。



漆屋 ろうそく屋

☆23 〈提灯張り〉（紙本着色。北斎工房。推定：北斎。31.5×45.3）

※「参講中」と書き込まれた大提灯に台に乗って字を書く男。提灯の根の部分に赤い色づけをする男。側ですり鉢で顔料を擦っている男の後ろで、色付けしていない傘を竿に繋いで持ち上げている男がいる。傘屋も兼ねていた。提灯には、「江戸講中」として「武蔵屋」「江戸屋」「千代田屋」「足立屋」「埼玉屋」「児玉屋」等の屋号が書かれている。この図は『新板大道図彙』（文政8年）の〈茅場町〉と同構図である。フランス国立図書館では画題を「茅場町」としている。



大英博物館に、この絵に似た素描がある（紙本墨画。27.9×40.1 『2007 北斎展図録』 p 89）。

提灯張り

☆24 〈雪の渡し〉（紙本着色。北斎工房。推定：魚屋北溪。31.7×45.3）

※雪降る中、渡し舟には傘を差したり笠を被った人々が所狭しと乗っていて、船尾の船頭が竿をさしてこれから出発しようとする様子。

大英博物館には、この絵の素描がある（墨画。27.8×39.2 『2007 北斎展図録』 p 101）。

☆25 〈隅田川風景図〉（紙本着色・大塚八郎。24.5×40.4）

※図の右には、隅田川の百本杭が描かれ、河口には屋根船が浮かぶ。空には鳥が数羽舞っている。向こう岸には木々と家並み。全体に遠近法で描かれる。

この図だけがオランダ紙が使われ、他の24図とサイズが違う。図の下に欧文が書かれ、「江戸において、1826年4月 おおつかはちろう」とあるという。ここから作者は北斎の門人大塚八郎（道庵）であり、この人物の何らかの介在で25図がスチュルレルに渡ったと考察されている。



隅田川風景図

●肉筆画「^{こうらくず}行楽図」（文政7年～9年〈1824～26〉）。紙本着色一枚。無款。31.8×45.7 個人蔵）

※オランダ国立民族学博物館の29点はオランダ紙に描かれているが、この絵は紙に描かれているので、文政9年(1826)にヨハン・ウィレム・スチュルレルによって国外に持ち出されたパリ国立図書館の25点の系統と思われる。北斎作か不明。

商人の女二人と男二人が行楽に行く途中で、小高い丘を歩いている。後ろから赤子を背負った女中と、棒に掛けた弁当を包む荷物を担いだ^{でっち}丁稚がついて行く。



行楽図（『2017 北斎 富士を越えて展図録』より転載）

●肉筆画「^{おおかかわろうじょうず}大川楼上図」（文政7年～9年〈1824～26〉）。紙本着色一幅。無款。31.6×45.5 個人蔵）

※オランダ国立民族学博物館の29点はオランダ紙に描かれているが、上記「行楽図」同様、この絵はオランダ紙ではなく、紙に描かれているので、文政9年(1826)にヨハン・ウィレム・スチュルレルによって国外に持ち出されたパリ国立図書館の25点の系統と思われる。北斎作か不明。

隅田川沿いの料亭の部屋で芸者二人がくつろいでいる。一人は立って^{かんざし}簪に手をやって、しゃがんで三味線箱を持っている男の方を向いている。一人は、座って団扇を持ち隅田川を眺めている。芸者の前には脚付きの赤い盆に料理が乗せられている。隅田川には提灯をつけた屋形船が何隻も浮かび、図の左の両国橋には提灯を手にした群衆と、打ち上がる花火が描かれている。



大川楼上図（『2017 北斎 富士を越えて展図録』より転載）

【更に「江戸の風景」6図発見】

※平成28年（2016）10月23日「読売新聞」（朝刊）記事。

「日本に西洋医学を伝えたドイツ人医師シーボルト（1796～1866）が持ち帰り、オランダのライデン国立民族学博物館が所蔵する作者不明の絵画6点について、同博物館のマティ・フォラー・シニア研究員は22日、「富嶽三十六景」などの作品で知られる江戸時代後期の浮世絵師、葛飾北斎（1760～1849）の作品と判明したと発表した。

長崎市で開かれたシーボルト関連の国際学会で明らかにした。フォラー氏によると、日本橋や品川などの江戸の街並みをモチーフにした水彩画5点と北斎原画の石版画1点。いずれも落款はなく、遠近法や明暗法などの西洋の技法が使われている。

フォーラー氏が2年前、ドイツの城に保管されていたシーボルト直筆の目録を発見。目録には『江戸の絵師、北斎が描いた江戸図6枚』などと書かれていたという

※同日「朝日新聞」記事では、目録に「北斎が西洋画の技法で描いた」とのシーボルトの記述があったとしている。

●肉筆画「江戸の風景」(文政6年～9年(1823～26)か。仮題。水彩着色6図。無款。オランダ国立民族学博物館蔵)

※江戸の風景を描いた6枚(一枚は原画の石版画)。筆致の趣から北斎弟子たちによる工房の作品の可能性もある。画題はいずれも仮題である。

☆〈日本橋図〉

※日本橋の向こうに江戸城と富士山が見える。手前には多くの船が行き来している。遠近法による描写で『富嶽三十六景』の〈日本橋〉の構図に近い。

『江戸の風景』「日本橋図」



☆〈両国橋図〉

※両国橋西詰めに塔が建ち、岸边には料理屋等が並ぶ。川にはたくさんの船が浮かび、図の右に雪を被った富士山を描く。



『江戸の風景』「両国橋図」

☆〈隅田川の岸边〉

※鐘ヶ淵当たりの風景と思われる。船着き場の岸边には蔵が並び、その前に帆かけ船等が浮かぶ。



『江戸の風景』「隅田川の岸边」

☆〈品川夜の月〉海に面した品川宿がひっそりと描かれ、街道を行



く人もまばらで、月影に照らされている。海は手前が濃く、沖に行くに従って薄くなるグラデーション。図の左上に白い満月。

『江戸の風景』「品川夜の月」

☆〈冬景色〉図の右には、雪を被った木々の間から芝増上寺の屋根が見える。前の広い道には、雪降る中をぼつんと五人の人物が描かれる。遠近法が強調され画面中央に収束する一点描視となっている。

『江戸の風景』 「冬景色」



●肉筆画「合せ鏡見美人図」(北斎工房。94.2×33.0
シーボルトの注文によるものか。着色
一幅。無款。オランダ国立民族博物館
蔵)



※2021年2月のすみだ北斎美術館「筆
魂」展では、前北斎戴斗筆、印葛しか、個人蔵としている。くの字に反
るように立って合わせ鏡をする花魁。右手に持った手鏡に女の顔が映って
いる。袖から出た赤い襦袢や足元から見える青い着物の裾の縁取りは、チ
リチリと呼ばれる北斎の特徴的な描き方。

合せ鏡見美人図(オランダ国立民俗学博物館)

●肉筆画「花魁道中図」(文政6年～9年(1823～26)
か。北斎工房。シーボルトの注文によるものか。着色
一幅。無款。86.2×31.5オランダ国立民族学博物館蔵)

※『北斎肉筆画大全』による。白地に花模様の散らされた簪を挿した
花魁が道中をしている図。大きな牡丹模様の前帯を抱くように締め、赤
い裏地の仕掛(打掛)を肩からずらして着て、前裾を右手で少し持ち上
げて、首を前に傾けている、襟元から見える襦袢の様子は簪の様と
同じ。背景は地潰しで、花魁一人だけが描かれる



花魁道中図(オランダ国立民族学博物館)

【大英博物館所蔵の素描】

作品の所在は不明だが、大英博物館には以下の素描もある。北斎工房で仕上げ、海外売却の予定だったか。

☆〈大工〉(文化8年頃：1811 無款。紙本墨絵。27.7×39.2)

※鋸を挽く職人。『富嶽三十六景』〈遠江山中〉(天保2年)と『百人一首宇波かゑと
き』〈春道列樹〉にも同画趣がある。

☆〈橋を渡る男女〉(文化8年頃：1811 無款。紙本墨絵。28.0×40.2)

※農家の庭先で彩色等の仕事をする男女。その側の小川の小さな橋を渡る男女。

☆〈幟の柱立て〉(文化8年頃：1811 紙本着色。無款。27.6×39.2)

※幟用の太く長い柱を立てるため、梯子に柱の先頭を掛けて持ち上げようとする男たち。
柱の根元を動かさないように肩で支える三人の男。

●読本『還魂紙料』(「すきかへし」とも。随筆風。二冊。柳亭種彦作。為一写。西村屋
与八・鶴屋喜右衛門他版 早稲田大学図書館/国立国会図書館蔵)

※「千年飴売り」「若衆木偶」など北斎の画風ではなく、古画をそのまま模写した絵とな
っている。画中に、葛飾為一筆・為一模・為一写などと記している。

なお書名については「コトバンク」『世界大百科事典第2版の解説』)では「原本の版心注にある〈すきかへし〉を書名にする向きもあるが、同年刊の種彦の合巻に自身(「かんごんしりょう」と)音読している」と説明している。



『還魂紙料』若衆木偶(早稲田大学図書館)

注) 版心：和装本で各頁の折り目の余白部分(前小口)。

●狂歌本『狂歌正流百花鳥』(一冊。北斎・北溪画。全亭正直編)

※「浮世絵文献資料館」による。

●狂歌本摺物『蓮華台 万徳成翁追善集』(『万屋徳右衛門追善狂歌集』とも。6月。一冊。万徳成編輯。六樹園撰。為一筆。一図のみ描く。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※山田徳右衛門注の七周期追善として刊行された。北斎の画は、凌霄花と思われる赤い花にとまる虻を一図描く。

注) 山田徳右衛門は、万徳成の父。六樹園(石川雅望)門下の狂歌作者。本書は、狂歌の外、和歌・漢詩・画によって編まれている。

※石川雅望の序文に「徳成ぬしの父なるひと、うせ給ひてより、よつときなゝかへりにそなりにたる。けにとしつきのなかれはやきこと、いまさらにおとろかれて、そゝろになみだのみいてく。(略)」とある(句読点、ルビは筆者による)。

●肉筆画「鍾馗図」(絹本墨絵一部淡彩一幅。前北斎為一筆。印葛しか。102・2×30・4 熊本県立美術館蔵)

※表装裏書に「文政九戊年五月 戸塚弥吉 四代目弥吉」とある。図上部に太い黒の二本線が横に引かれているのは幟を意識したためともいわれる。画面のやや右方向を睨み、左足を前に出して立つ堂々とした鍾馗を墨絵風に描く。

鍾馗図(熊本県立美術館)



●扇面画「子規と萩図」(着色一枚。為一筆。印一人人形)

※扇の右半分には、萩の白い花が咲いている上を鳴きながら飛ぶほととぎすを描く。

文政10(1827) 丁亥 68歳 (葛飾戴斗先生)、東都葛飾為一、北斎為一敬画、北斎改

為一、葛飾北斎為一、印葛しか：こと(57歳)、阿栄(30歳)、孫(18歳)

◇3月26日(西洋暦)、ベートーヴェン没(58)。

- ◇5月6日、シーボルトの娘楠本イネ生。
- ◇5月16日、町芸者21名が華美の衣服・髪飾りを取り上げられ過料に処せられる。同禁止のお触れは文政7年6月19日にも出ている。
- ◇7月29日、江戸市中でみだりに日傘を使用することを禁じる。
- ◇7月、東西庵南北没(60余)。
- ◇8月13日、菅茶山没(80)。
- ◇11月19日、小林一茶没(65)。
- ◇柳島妙見寺境内に歌川豊国の筆塚が建立される。

- ★4月29日、川柳の会(桜木会。文志評)に出席、2句詠む(『年譜』による)。
- ★5月22日、川柳の会(名木月並会。克己評)に出席、1句詠む(『年譜』による)。
- ★6月5日、川柳の会(五堂随評)に出席、1句詠む(『年譜』による)。
- ★『柳多留』93篇に27句、95篇に2句、96篇に8句載る(『年譜』による)。

【柳多留93篇】

- ☆ぼんぼりで追人のかかるきりぐす 卍 (盗人の追っ手のようにキリギリスの居場所を娘が雪洞で照らす)
- ☆七日には逃れ八日につるされる 卍 (貧乏人の七草粥にはない薺が翌日には虫除けで行灯に吊される。
別解：正月七日に外す松飾りは八日に逆さに吊るし、九日の夷祭りに備える)
- ☆まじぐと馬の見て居る麦畠 卍 (麦畑の男女の交わりを、馬がまじまじと見つめている)
- ☆張ぬきの兜幟の波しずか 卍 (張り子の兜や幟でも、波静かな穏やかな世では濡れて崩れることもなし)
- ☆金魚売網代の魚や籠の蟹 卍 (金魚売りが秋には網代に魚を乗せ籠に蟹を入れて魚屋になって売りに来る)
- ☆鬼一ト口に白玉の露もなし 卍 (白玉の露もないほど鬼に食べられた姫。『伊勢物語』「芥川」を踏む)
- ☆八兵衛計畧船橋を引て逃げ 卍 (八兵衛と呼ばれる舟橋の女郎は男を誘って金を取って逃げる)
- ☆なまりぶし反りを打程安くされ 卍 (鯉の生節のように刀の反りを返して人を脅す侍の安っぽさ)
- ☆悪魔をバ除す日除の下手鍾馗 卍 (悪魔退治の鍾馗の幟も下手な絵で、色あせた日よけになった)
- ☆金魚売網代の魚や籠の蟹 (他者評で前出)
- ☆七日をバのがれ八日につるされる 卍 (他者評で前出。但し、表記に異同あり)
- ☆女夫石割れぬ先きハ転び合 卍 (夫婦岩も二つに割れる前に、抱き合うように夢中に転び合っている)
- ☆泥水でお玉いけなく成ッてみる 卍 (泥水と言われる遊郭で自分の持ち物もオタマジャクシのようになった)
- ☆花うるし吉野の紙をニタ重ごし 卍 (上質な二重に晒した花うるしの紙を蒲団の中で当てる恥ずかしさ)
- ☆染替し秋は千種の裏よし野 卍 (秋の着物の染め直しに金がなく、表は千草だが裏は春の吉野の桜のまま)
- ☆秋果て見られぬ面ラの種茄子 卍 (種を採る種茄子も秋の終わりには色あせて皺だらけ。老妻もまた同じ)
- ☆立手水嗟峨野で佛御開帳 卍 (嗟峨野の清涼寺の御開帳で水を掛けるお身拭いは、まるで立ち小便のよう)
- ☆君が代ハ旗ざほまでが寐てくらし 卍 (君が代の平和な世には戦の旗竿までも用がなしで寝て暮らす)
- ☆帰依仏と悟らで作る雪達磨 卍 (帰依仏とも知らないでやがて消えてしまう雪達磨を作っている)
- ☆灰吹に烟りの残る暮の客 卍 (吸い殻落としの灰吹き煙が消えないほど年末には来客が絶えない)
- ☆塗り桶程に駒止メの雪の朝 卍 (綿摘みの塗り桶程の高さに雪が積もり、吉原へ馬も通えぬ朝になった)

- ☆^{ももひき}股引の牡丹を探す角兵衛獅子 卍 (角兵衛獅子が股引の間を覗くような仕草。獅子に牡丹の言葉通り)
- ☆我ものを握る片手のぬくめ鳥 卍 (鷹が小鳥を使えて足を温めるように我が逸物を握って手を温める)
- ☆^{にしむらおみきみだいぶつきまおけが}西村御見舞大仏様御怪我 卍 (大仏様が怪我をして、神田鍛冶町の鋳物師西村様がお見舞いでお直しもする)
- ☆^{たごたごと}田毎く月に蓋する薄氷 卍 (姥捨山の「田毎の月」にそれぞれ蓋をするように薄氷が張っている)
- ☆^{おけ}塗り桶程に駒止の雪の朝 卍 (他者評で前出。但し、表記に異同あり)
- ☆^{なんてん}南天を水の鏡の裏もやう 卍 (「年譜」では「もよふ」。手鏡の裏の南天模様のように手水鉢に庭の南天が写っている)

【柳多留 95 扁】

- ☆七百八十文草鞋とも申されず 卍 (一足 16 文の草鞋も 47 足をさし銭にして 780 文の価値。忠臣蔵四十七士を踏まえる)
- ☆^{あいばん}相番は^{ほりべ}堀部尻^{りきま}ごみする力弥 卍 (堀部安兵衛との相宿は、美少年の大石力弥 (主税) も尻込みする)

【柳多留 96 扁】

- ☆水かげん亭主産所にきゝに来る 卍 (妻が産気づき、亭主がおどんの水加減を産所に聞きに来る)
- ☆落すなよ小僧小二朱を団子にし 卍 (小僧は小さい二朱銀を団子のように握りしめて吉原行きか)
- ☆南無ブツと異香薫ずる仏の尻 卍 (読経の最中に普通の線香と違う匂いがしたのは仏の尻か)
- ☆髭抜き鏡大きな面でかし 卍 (髭抜きのための小さな鏡を大きな顔で貸してくる)
- ☆南無ブツと異香くんずる仏の尻 卍 (他者評により前出。但し、表記に異同あり)
- ☆気違ひのとらまえたがる稲光り 卍 (気違ひが捕まえたがるほどの一瞬の稲光だ)
- ☆落すなよ小僧小二朱を団子にし 卍 (他者評で前出。但し、「落すなよ」が「落すな」となっている)
- ☆鹿のくそ奈良の晒シの式度洗ひ 卍 (高級な奈良晒の布も下に落とすと鹿の尿で二度洗う羽目になる)

【卒中を患うも自家薬で回復する】

- ★この頃、^{そつちゆう}卒中注を患うが自家製の薬で回復する。
- ※「二十四時たゝざる内に用ゐる。二十四時半時かけてもきゝます。極上々の酒菴合、ゆず一ツ、こまかにきざみ、どなべにてしづかに、につめ、水あめくらいにつめ、さゆにて二度くらいにもちゆる。たねは、につめた上にて、とりすて候。」(北斎が製法を、狂歌をよくした戸崎文志 (本所石原町の菓子商・名物：石原おこし) に伝えたものを清水晴風が写す。『葛飾北斎伝』 p133)。

注) 卒中：『葛飾北斎伝』 p133 の脚注によれば「中風」とある。

※自家薬製法の図あり (p134)。

(図中の書き込み)「竹へらにてきざみ候。庖丁、小刀、鉄、銅の類はきらひ申候」
「鍋、鉄銅はきらひ申候」(「どなべ」と書き入れた鍋が火にかけてある図あり)

※柚子は『新著料理 柚珍秘密箱』(器土堂著。天明 5 年：1785。柚子の料理本。国立国会図書館蔵)に「柚薬酒の仕方」など、柚料理の多くを書いた本が出るほど体に良いものと認識されていた。

※林綾野『浮世絵に見る江戸の食卓』（美術出版社 2014 年）には「北斎のきつちうのくすり」として、作り方を解説している（p86）。

「材料（約4杯分）酒3合、柚子3個

1、竹べらで柚子の皮をむき、細かく刻む

2、柚子の果汁を絞っておく

3、土鍋に酒と1の皮、2の果汁を入れ、弱火で3時間程煮詰める。途中、焦げつかないようにかき回しながらゆっくり煮詰める

4、白湯に3を適量入れ、かき混ぜていただく

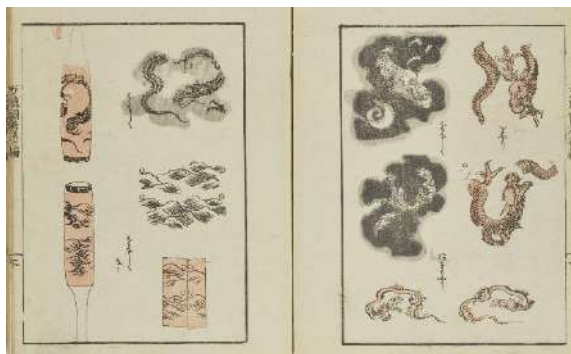
「煮詰めやすいように酒3合とした。甘みの強い酒であれば柚子の強い香りとなじみやすい」

●俳書『安詞廼比斗茂渡』（「安詞乃比斗茂渡」とも。後摺では『あしのひとつも』。内題は「芦のひと」とある。一冊。田喜庵護物輯。無款。英大助・須原屋茂兵衛等版。早稲田大学図書館蔵）

※『年譜』では、「本書中「田喜庵著述目録」に「記中名所之図 芭蕉翁肖像 北斎為一画」とあるが、画風よりみて名所図は北斎か否か未定」としている。

※松尾芭蕉の『幻住庵記』（元禄3年：1690）の注釈書）巻頭の3頁に勢多の唐橋など湖南の風景（2図）を描くが、北斎かどうか未定。

●絵手本『万職図考』初編（葛飾戴斗先生画。群玉堂：河内屋茂兵衛、須原屋新兵衛他版。大英博物館/国立国会図書館蔵）



万職図考初編（大英博物館）

※染色・根付け・煙管その他の職人のためのデザイン集。二編・三編は天保6年（1835）刊。四編・五編は没後の嘉永3年（1849）刊。為一期であるが、落款の「葛飾戴斗先生」は版元がつけたものか。

●俳諧本『繡像 俳諧三十六句仙』（淡彩一冊。吡仙斎松雨撰。東都葛飾為一画）巻末に「文政十丁亥年刻成」とある（『年譜』による）。

繡像とは、肖像画と同義。

●肉筆画「歌占図」（「新年の歌売り」とも。紙本淡彩掛物一幅。文政十丁亥正月二日筆始 北斎為一敬画。印葛しか。124.0×50.5 大英博物館蔵）

※歌占は、和歌を書いた短冊を弓に付けて、客が引いた短冊によって占いをして歩いた者。神の託宣は和歌の形を取ると考えられていた。和歌は伝統的なものではなく、民間伝承的な和歌であったという。この図は、伊勢安濃津で客死した世阿弥の長男、観世元雅（1394



頃～1432) を題材にしたものとの説あり。手に弓を持ち、和歌を書いた短冊を付けて占いをする狩衣姿の男が立っている図。

歌占図 (大英博物館蔵)

●摺物下絵「月宮殿嫦娥之遊 報条」(墨摺。北斎改為一画。森屋治兵衛版。ボストン美術館蔵)

月宮殿嫦娥之遊 報条 (ボストン美術館)

※浅草奥山〈浅草寺の裏一帯〉の見世物摺物の下画を描く。中央に、雲の上を行く牛車、その脇で、うかれ星(北斗七星か)の形を作って、傘



を被って踊る七人。中央下には、糸繰り機械と仙女二人が描かれる。

●肉筆画「花和尚図」(文政6年～9年説もある。「花和尚魯智深図」とも。絹本着色一幅。葛飾北斎為一筆。印葛しか。105.5×42.4 個人蔵)

※鉄棒を両手で振りあげ、隆々たる右足を上げ、上半身裸の男は、『水滸伝』に登場する僧魯智深である。義賊 108 人の一人。魯智深の友人の暗殺を企てた男二人を脅かすために鉄棒で松の木をなぎ倒すという『新編水滸伝』初編卷之八の一場面を描いたもの。図の上には千鳥が三羽が驚いて飛び去っている。花和尚図(『2007 北斎展図録』より転載)



文政11 (1828) 戊子 69 歳 (北斎戴斗老人)、月痴老人為一、

前北斎為一先生、前北斎為一写、前北斎、為一、印一人人形、二人

人形：こと (58 歳)、阿栄 (31 歳)、孫 (19 歳)

◇1月13日、狩野芳崖生(～1888)。

◇4月16日(西洋暦)、ゴヤ没(83)。

【シーボルト事件勃発】

◇8月9日、帰国の際、先発したオランダ船が難破、暴風で飛散したシーボルトの荷物の中に日本地図があったことにより、10月10日、シーボルトに日本地図を渡した書物奉行高橋景保ら38名が投獄となった。幕府が返還要請したが拒否したため出国停止処分になり、11月に商館長預かり、12月に長崎出島に幽閉された。翌文政12年9月、帰国命令。12月5日、退去となる。

シーボルトは、北斎から直接受け取った『北斎写真面譜』（文化11年：1814）や同時期の『北斎漫画 初版』等を持ち帰り、ウイーンとパリの図書館に4冊寄付する。これら以外にも北斎の『武器・武具帖』注（東京国立博物館鑑定）があり、北斎の信州小布施行き理由として、幕府からの追及を逃れるためという説がある（荒井勉『北斎の隠し絵』）。

注）『武器・武具帖』：北斎工房の大塚八郎によると推定されている画図帖か。

◇永楽屋東四郎、角丸屋甚助から『北斎漫画』の二編～十編の版木を購入、初編の全部を彫り直して「初編」の文字を入れ、改めて従来の十冊に更に十冊を加えた二十冊とする計画を立てる。その旨を十一編の序文で柳亭種彦が記している。

◇11月7日、本居春庭没（66）。

◇11月29日、酒井抱一没（68）。

★1・2月頃に川柳の号に「万字」を用いる（『年譜』による。⇒文政6年記事参照）。

★1月12日、川柳の会（小舟初会。金成評）に出席、2句詠む（『年譜』による）。

★1月28日、川柳の会（王子稻荷奉納額面。綾丸評）に出席、1句詠む（『年譜』による）。

★2月28日、川柳の会（吉例相撲武蔵野会。成安評。催主：風松）に出席、2句詠む（『年譜』による）

★『柳多留』97編に2句、98編に4句、99編に6句、100編に3句、101編に10句、104編に6句、105編に12句載る（『年譜』による）。

【柳多留 97 編】

☆皮切りといふ面ヲで見る遠眼鏡 卍（宿六心配『謎解き北斎川柳』では「面」。遠眼鏡を除く顔は、灸を据える時のような顔をしている）

☆明德の道捨仮名の拾ひ読み 卍（明德の道者が、実は漢文の捨て仮名だけ読んで分かった振りしている）

【98 編】

☆あつたら富士を宿なしの夢に見せ 卍（田中聡『北斎川柳』では文政10年。めでたい富士をあたら宿なしが夢にみるなんて）

☆留女金剛杖をシャにかまへ 卍（田中聡『北斎川柳』は文政10年。宿の客引き女が修験者の杖を奪い合っ
て客引きをする）

☆アツタラ不二を宿なしの夢にみせ 卍（他者評により前出。但し、表記の異同あり）

☆除夜更てなが雪隠の二年越シ 卍（田中聡『北斎川柳』では文政10年。暮れの長雪隠で年をまたぐ。掛け取り遁れか）

【99 編】

☆立ちながらこそ細布ハおつぱづれ 卍（奥州の名産・小さい細布のように立ち仕事では六尺褌が外れる。能因「錦木はたてながらこそ朽ちにけれ けふのほそ布胸あはじとや」を踏まえる）

☆摺子木をぬきたに寺の秋牛蒡 卍（寺では、すりこ木で碇打ちのように秋の牛蒡を「狙」の上で叩いている）

☆皮きりといふ面で見る遠眼鏡 卍（他者評により97編に前出。但し表記に異同あり）

- ☆附びんの綱わたりする土用干 卍 (鬢付け油の匂いがする若妻が、土用干しの綱の前を行ったり来たり)
- ☆寺の風呂敷にあはれな子もち筋 卍 (祝いで使う子持ち筋模様の風呂敷を持って亡き人の供養はあわれだ)
- ☆御宝紛失と禪 たつねてる 卍 (歌舞伎の「だんまり」の仕草同様、自分の禪はどこかと探す風呂上がり。別解：吉原帰りに、夕べの立派なお宝はどこへ行ったと禪が訊ねている)

【100 篇】

- ☆秋の蠅しきりに拝ム蓮の飯 卍 (田中聡『北斎川柳』では文政10年。盂蘭盆に備える蓮飯にしきりに手を合わせている秋の蠅)
- ☆継子ハ寐せぬ礎の片手うち 卍 (夜まで寝させずに、砦で重い木槌を片手で打たせる継子いじめ)
- ☆唐の下女ハルシヤ革ほどひゞがきれ 卍 (外国の下女はペルシヤ革の巾着のようにあかざれているか)

【101 篇】

- ☆山吹は目の一ツだになくて貸し 卍 (山吹色の小判を貸す金貸しには目のない盲人が多い。太田道灌の故事にある「七重八重花は咲けども山吹の 実の一つだになきぞかなしき」を踏まえる)
- ☆月並ハ浚ふ天狗に引ク河童 卍 (一般に、天狗は人を攫い河童は池に引きずり込む。お復習いごとも三味線など弾くものから始めるが普通)
- ☆残念だのんしと巴生捕られ 卍生 (巴御前を生け捕ったが「残念だのんし、わちきは女でありんす」と)
- ☆山吹は目の一ツだになくてかし 卍 (他者評により前出。但し、表記の異同あり)
- ☆墨壺の口も干上ル下手大工 卍 (下手な大工に仕事がなく墨壺の墨も干上がってしまう。墨壺は女陰の意)
- ☆瘡森ハ花へかけての願ほどき 卍 (梅毒から守るといふ笠森稲荷に花見にかけて鼻が欠けぬよう願掛けに)
- ☆兀ツテウ髪なしの月の余しもの 卍 (禿の者は、髪がないので神無月の利益もない余計者だ)
- ☆御法便蟹の目玉の仕舞い所 卍 (蟹の目玉の取め所は、出たり入ったりにより便利よく出来ている)
- ☆チャンパカと言ふ唐のはげあたま 卍 (意味不明。『年譜』見られる句)
- ☆真青な人形遣ふ六夜まち 卍 (田中聡『北斎川柳』は「まち」が「待」。正月と7月の26日の月に阿弥陀・観音・勢至の三尊が現れる。その日の酒宴に紺屋の職人が踊り、突き出した指が青い人形のように)

【104 篇】

- ☆秋津島とんぼてかつぐ関手前 卍 (日本一の吉原の門前まで、前二人、後一人のトンボの籠で見栄をはる)
- ☆河童の皿に豆蟹の居候 卍 (河童の皿に小さな蟹が居候のように乗っている)
- ☆つれぐに焼き芋を喰ふよし田町 卍 (場末の本所吉田町の夜鷹は暇に任せて焼き芋を食う。吉田兼好『徒然草』を踏む)
- ☆山伏の野屎梵字のやうにたれ 卍 (山伏は有難い梵字のような形の野糞を垂れる)
- ☆土佐駒も附ケ太鼓程たゝいてる 卍 (土佐馬は大きな腹を、大きな鼓のように自分の逸物で叩いている)
- ☆蛇晝寐煙筒(筒)のやうな欠びする 卍 (蛇が昼寝から冷めて煙筒：円い筒のような大あくびをする)

【105 篇】

- ☆泥水で白くそだてたあひるの子 卍 (泥水のような岡場所でも田舎娘も垢抜けた遊女に育てられる)
- ☆龍王の石癖蝟に吸ひださせる 卍 (龍王は結石を蝟に吸い出させる。蝟は遊女のも意味する。「勾踐の会稽の恥」を踏む)

☆龍王の石麻蜎に吸ひ出させ 卍 (他者評により前出。但し、表記の違いあり)

☆百人一首下女さねかづら嘘だく 卍 (「名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られてくるよしもがな」の意味も知らない下女が女性器の陰核を示す「さね」を聞いて、高貴な女性がそんなことを言うはずがない、嘘だ)

☆蔭清くその儘繪がくまどの梅 卍 (蔭さえも清く見える窓の梅をそのまま絵にしたことだ)

☆繰り出して打法蔵寺繩轆轤 卍 (法蔵寺では轆轤に使う縄を繰り出しては打って強くする)

☆人が見たなら蛇になれくすね銭 卍 (くすねた銭を藁縄に通した指し銭を、人が見つけたら蛇だと言え)

☆ヘンペンヒヤヘタ三ツ口のほとゝぎす 卍 (初夏の時鳥がヘンペンヒヤヘタと鳴くのは三ツ口だからか。宿六心配『謎解き北斎川柳』では「ヘッペン」)

☆尻でひり口でまねする鸚鵡の屁 卍 (鸚鵡は尻で屁をひり、口でその音を真似する)

☆梅若の土手を惣太の塩かつお 卍 (梅若忌には梅若を攫った惣太と同じ名の塩漬惣太鯨の切り身で供養)

☆ほんねどふしると松戸の大茂り 卍 (「ほんとにどうするの」と松戸の田舎言葉で、松戸の松の大茂りのように情深く言われても)

☆行戻り五百里虎の病ミあがり 卍 (一日千里を行く虎でも病み上がりでは往復五百里ぐらいだらう)

【妻こと没す】

★6月5日、後妻こと没す(58歳)。「性善院法屋妙授信女 文政十一年戌子歳 六月五日」と関東大震災前の北斎の墓碑銘にあるという。また、誓教寺過去帳に、施主「川村北斎」とあるという(『年譜』による)。

川村家はこと女の実家で「施主が川村北斎となっているのは、葬式を金銭的に川村家が出したために、寺の方で間違っただけで川村北斎としたのではないだろうか」(田崎暁之助『浮世絵の謎』p156)という。一方で、川村家は北斎の実家とする説もある⇒宝暦10年条参照。

★本稿では、娘阿栄は文政3年(1820)に南沢等明と離婚としているが、あるいは本年に離婚して、ことの没後北斎と同居したか。⇒文政3年条参照。

【ドラ孫を永寿堂に奉公に出す】

★ことの49日の法要後、一時預かっていた孫を永寿堂(西村屋与八)に奉公に出す。鳶の者になるといって父柳川重信の家を飛び出したドラ孫が北斎の家に住み着いていたらしい。「(長女阿美与)この女子のうミたる外孫を、北斎寵愛して養育するか、人と成るに及び放蕩によりてこれを重信に返せしに、鳶の者にならんを欲して、父の家にもあらずなりにき」(曲亭馬琴『後の為の記』「国立国会図書館デジタルコレクション」より)

●読本『新編水滸画伝』(正月。高井蘭山訳。英平吉版。文化3年:1806よりの続刊〈奥付は文化2年〉)。この年に完成か。「二編三編追次出板して、文政十一年に完成せり」(『葛飾北斎伝』p287)とある。全九編九十一冊(初編十一冊。二編～九編は各十冊)早稲田大学図書館/国立国会図書館蔵。挿絵は前北斎(二代戴斗も混じるか)。第七編六十一巻以降は葛飾戴斗とあるが、同落款の使用時期や筆致から二代戴斗の可能性あり(『葛飾北斎伝』p188注1)。

【『水滸画伝』は北斎の画で売れる】

※『馬琴書翰集成』文政十一年正月十七日 殿村篠斎宛書簡

「水滸画伝著述之事、去冬あらまし得貴意候通り、板元并ニ画工へも意味合有之、其上水滸伝ハ勸懲之為、愚意ニ応じ不申もの故、堅くことわり、繰り遣し不申候。依之、板元英や、高井蘭山ニ訳文ヲたのみ、画ハ北斎ニかゝせ、彫立候よしニ御座候。けいせい水滸伝より通俗水滸伝も引立られ候而、はやり出し候事故、出板候ハズ、画伝も多くうれ可申候半哉と存候。但し蘭山ハ、相識ニなどハ一向疎く、且戯作之才ハなき老人のよし、及承候。この人の訳文、いかゞ可有之哉、心もとなき事ニ候へ共、切落しの見物ハ、文之巧拙ニも斯拘り不申もの、多く御座候故、北斎の画ニてうれ候半と被存候」(読点、ルビは筆者による)

【挿絵は、さすがに北斎なれば評判よろしく】

●読本『新編水滸画伝』二編前帙 (1月。五冊。高井蘭山訳。北斎戴斗老人画。英平吉版)

※文化3年刊の『新編水滸画伝』初編では北斎の挿絵を非難した曲亭馬琴であったが、二編の挿絵については褒めている。二編からは馬琴に代わり高井蘭山の翻訳となる。

この年の冬に二編が完成。出版は翌文政12年(1829)正月か。

※同書について翌年の馬琴の感想(『馬琴書翰集成』文政十二年二月十一日条殿村篠斎宛)

「(略)高井蘭山あらはし候水滸画伝第二編、旧冬出版、当早春借りよせ候て、致一覽候。貴兄ハ未被成御覽候よし。如貴命、画ハさすがに北斎に候へバ、不相替よろしく候。乍去、作者より画稿を出さず、画工の意に任せ、かゝせ候と見えて、とかく画工のらくニ画れ候様にいたし候間、初編にハ劣り候様に被存候。(中略)この出像の巻ハ、さすがに北斎なれば評判よろしく、屹度売れ可申候と存候。出板之節見候て、いよく出来候ハズ、その所斗求置可申存候事ニ御座候(略)」(読点、ルビは筆者による)

※二編後帙は、天保4年(1833)頃か。

●狂歌本『花鳥画賛歌合』(この頃か。天保年間とする説もある。淡彩摺半紙本一冊。錦鳳堂永雄・春秋庵永女・秋長堂撰。島根県立美術館：永田コレクション/ボストン美術館蔵)

☆〈梅に鶯〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈桜に雉〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈藤に燕〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

※七羽の燕が藤をかすめるように飛び回っている。

☆〈垣に鳥〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈松葉に浅蜷〉(無署名)

☆〈水仙に鴛鴦〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈鷹〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈千鳥に枇杷の木〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

☆〈菊花に鳥〉(月痴老人為一筆。印一人人形)

●絵本『**絵本庭訓往来**』（前北斎為一写。西村屋与八版〈序文あり〉と永楽屋東四郎版の二種類ある。23.7×16.0 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館/フリーア美術館：ブルグエラー・コレクション蔵）

☆初編（秋。『**絵入庭訓往来**』とも。一冊。墨摺）

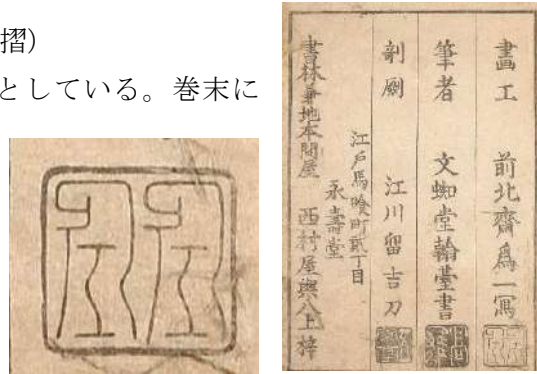
※初編の六樹園序文に、北斎を「月痴老人」としている。巻末に「画工 前北斎為一写 印二人人形」とある。54 図。

☆二編（天保期。前北斎為一先生画。53 図。

永楽屋東四郎〈東壁堂〉版。

☆三編（嘉永元年 3 月。前北斎為一先生画。

55 図。永楽屋東四郎〈東壁堂〉版）。



西村屋版・奥付と印影：二人人形（立命館 ARC）

☆〈街頭の情景〉

※僧侶、相撲取り、鈴を鳴らす占い師、獅子舞と足元の犬等が仏師の工房の前にいる。



街頭の情景（日本浮世絵博物館）

☆〈永寿堂の店頭〉

※西村屋の店頭の様子。店頭には侍や婦人、輪を転がして遊ぶ子供の側には犬。「永寿」と染め抜いた大風呂敷の荷物を担ぐ男。



永寿堂の店頭（日本浮世絵博物館）

山形に三つ巴の商標や「問屋西村与八」と書かれた大きな箱看板などが描かれる。

☆合巻（一冊。嘉永3年頃。永楽屋東四郎〈東壁堂〉版）。

※武家の生活に必要な用語を用いた往復書簡集。僧玄恵作といわれる。北斎は内容に関わらず幅広い図を描く。

●絵手本『**盆画独稽古**』（角書「**光悦正流**」。初編一冊。淡彩着色。月花永女作。口絵に為一筆。他に存斎光一筆。西村屋与八版。大英博物館蔵）

※座敷で、女先生の前で盆画で富士山の絵を描く娘の図。盆画は、砂や小石を使って、黒塗りの盆の上に山水などを描いたもの。画中の衝立に四方真顔の狂歌と「為一筆」の文字が記される。後編は未刊。

盆画独稽古（大英博物館） 右：屏風の落款



●絵手本『伝神開手 北斎漫画』初編の再版本(永楽屋東四郎版)袋に「文政戊子春再板」とある(『年譜』による)。

※初編の版木の摩耗による再版で、画中の人物に名前が入る。

●教訓書『眼前教近道』(立春。一冊。六合亭著。画稿不明。永楽屋東四郎版 立命館大学 ARC 蔵)

※考証随筆的な教訓書。種々の事物・諸制度の起源や故事、正しい語義等を示し、関連する教訓的な話を添える。漢字かな交じり。(西尾市岩瀬文庫/古典籍書誌データベースより)

『眼前教近道』(立命館 ARC:5丁裏・6丁表)




北斎は5丁裏・6丁表、9丁裏・10丁表の図を画いたか。他の絵は北斎とは思われない。巻末に「文政戊子立春」とある。弘化4年(1847)、錢屋惣四郎版の後摺がある。

●襲名披露冊子挿絵(標題不明:中本一冊着色。月痴老人為一筆)

☆〈野馬〉

※二世烏亭焉馬がこの年に襲名披露を行った折に配布した冊子の挿絵。見開きに三頭の馬が描かれ、一頭は横になって嘶いている。

文政12(1829)己丑 70歳 葛飾前北斎為一老人、葛飾前北斎為一、北斎改為一、

(北斎戴斗老人)、先北斎為一、老為一写意、葛しか、ふもとのさと:孫(20歳)。阿

栄(32歳)

◇春、永寿堂(西村屋)は三代目与八となる。

◇1月、柳亭種彦、合巻『修紫田舎源氏』(初編)。三代目歌川国貞の絵。

※徳川家斉の享楽生活、大奥の描写説が生じ、天保13年(1842)、38編の刊行後に絶版を命じられる。種彦は200俵取の旗本。本名、高屋彦九郎知久。

◇1月6日、仮名垣魯文生(～1894)。

◇3月21日、神田佐久間町の河岸の材木屋より出火。西村屋を含む下町(日本橋、京橋、芝等)は焼失。江戸芝居三座も類焼。焼死・溺死者など3000人といわれる(己丑の大火。佐久間町火事とも)。『武江年表』では焼死・溺死者1900余人。

※『馬琴日記』には「懇意の版元、つるや・西村や・もりや・山口や・大坂や半蔵等、皆、類焼なるべし」とある(『HOKUSAI 画狂人北斎』緑青 VOL2 p35)。

◇5月13日、松平定信没(72)。

◇6月2日、著作取締令。為永春水(風俗壊乱罪)処罰される。柳亭種彦(風俗壊乱罪)も注意を受ける。

◇6月6日、狂歌堂真顔(四方真顔・鹿津部真顔)没(77)

◇7月2日、鳥文齋榮之没（74）。

◇7月19日、菅江真澄没（76）

◇9月、シーボルトに帰国命令。12月5日、出帆退去。

◇11月27日、四世鶴屋南北没（75）。

◇12月21日、歌川豊広没（66?）

◇富岡八幡宮裏に小富士建立。

◇11代将軍徳川家斉、百花園注（現向島百花園。東京都墨田区東向島3-18-3）に立ち寄る。

注）佐原鞠塙が文化元年（1804）に開園した。360本もの梅の木を植えたことから亀戸の「梅屋敷」に対して「新梅屋敷」とも、「花屋敷」とも呼ばれていたが、1809年文化6年（1809）頃より酒井抱一が「梅は百花にさきがけて咲く」といい「百花園」と呼ばれるようになった（「Wikipedia」による）。

【ベロリン藍が輸入され使用される】

◇この頃よりベロリン藍が輸入され使用される。

◇溪斎英泉、ベロリン藍注で風景画の团扇絵を描く。

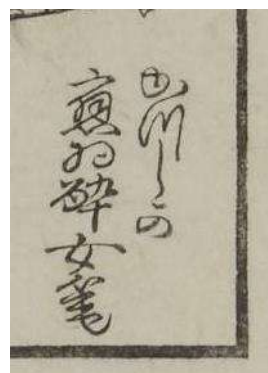
注）ベロリン藍：ペルシアンブルー（Prussian Blue）。1704年、ドイツのベルリンで、J・K・ディッペルが発明。ドイツの旧名プロシヤからベルリン青（ベロリン青）、ベロ藍と呼ばれ長崎にもたらされた。

○曲亭馬琴、読本『近世説美少年録』刊行開始（天保3年：1832まで。未完）。

○阿栄、『女重宝記』（高井蘭山著。葛しか応為酔女筆。奥付には「応為栄女筆」とある。大英博物館蔵）（刊行は弘化4年：1847）を描く。



女重宝記（大英博物館）



落款（拡大図）

★春頃、孫の放蕩の尻拭いに苦しむ。

★1月1日、「さくしやすいこでん」（作者水滸伝）という番付に「葛飾前北齋為一老人」は別格扱いとされる（『年譜』による）。

★8月4日、川柳の会（武蔵野会。魚交評。催主：風松）に出席、2句詠む（『年譜』による）。

★『柳多留』106 編に 2 句、107 編に 8 句、108 編に 5 句、109 編に 8 句載る（『年譜』による）。

【柳多留 106 編】

☆杓子めを摺子木野郎連れて逃げ 卍（飯盛り女を連れて逃げたのは、価値のない摺子木野郎だろう）

☆無理口説キ大根おろしで引こすり 卍（下女を無理に口説いても、嫌な男には大根おろしで引きこする）

【柳多留 107 編】

☆この翁とうくたたり水ッ鼻 卍（田中聡『北斎川柳』は文政 11 年。能「翁」もたたりと水ッ鼻を垂らした。「とうとうたたりたたりら。たたりあがりいらりどう」の詞章から）

☆京鹿の子娘ひのしハキイタカ 卍（田中聡『北斎川柳』では文政 11 年。京鹿の子絞りの着物に皺伸ばしに「ひのし」をかけて「効いたか、効いたか」と言っている。「京鹿子娘道成寺」での「聞いたか、聞いたか」のセリフを踏まえる）

☆浪幕の中にころりと寐左衛門 卍（舞台の後の外した浪幕に寝ている男は、土左衛門ならぬ寝左衛門だ）

☆盆カタくち、、、升てしめ 卍（盆の餌を食べようとした鼠が鼠取りで捕らえられたまでを歌舞伎の下座音楽の音色で表現。チチは鼠の鳴き声。以上は田中聡『北斎川柳』（p76）による）

☆桐山の文字はおかしく書が山 卍（「山」は図案化。桐山三了の書く字は変わった字で「山」もこんな字）

☆血汐の穢れに立去りし淋病 卍（月経の女との交接は淋病を治すという。穢れでもいいこともあるか）

☆千人の枕にくい一字命 卍（千人と枕する遊女の「一字命」の刺青は嘘っぱち。「ヒコサマ命」の類）

☆立ちかぬる鎌子へ母のギンオクリ 卍（祇園に勤める長女が未練で立ちかぬるのを、気丈に送り出す母親）

【柳多留 108 編】

☆山吹のかわせに届くかし座敷 卍（田中聡『北斎川柳』・宿六心配『謎解き北斎川柳』では文政 11 年。山吹が川瀬に届くほど咲いている貸座敷。そこで山吹色の金が届くのを待っているか）

☆背と腹とのあはひに蟹面ヲを出し 卍（蟹は背と腹の間から、目と口のある顔を出している。宿六心配『謎解き北斎川柳』では「面」）

☆山谷鳴動大イ風雨龍つるみ 卍（山や谷を揺るがす大風雨は、天空での龍の雌雄の激しい交尾のせい）

☆生国は越中としらみの由緒書（『年譜』では「生国越中と」。江戸に多い虱の生まれた国は越中禪だった）

☆びんづるのきん玉らしい木魚なり 卍（つるつる頭のびんづる尊者のキンタマに見える木魚だ）

【柳多留 109 編】

☆下々反りの鼻で離縁の婿天狗 卍（鼻の垂れ下がった婿の天狗では離縁されてもしかたがない。宿六心配『謎解き北斎川柳』では「下多反り」）

☆御老躰八十八を御荷ひ 万字（意味不明）

☆御老躰八十八を御荷ひ 万字（他者評により前出）

☆狸穴凡夫油揚二枚損ン 卍（狸は穴が二つあり、物を知らない男は油揚げを二枚あげて「損をした」と。「一を呪わば穴二つ」を踏む）

☆神力に東て四海握り無事 万字（意味不明）

☆兼好先生御在庵かと伴内 卍 (塩谷判官の妻に懸想した高師直が鷺坂伴内を通して恋文の代筆を依頼する。
『仮名手本忠臣蔵』初段を踏む)

☆耳筋が通り兎の器量よし 卍 (鼻筋を通った男前ならぬ、耳筋を通った器量よしの兎)

☆兼好先生御在庵かと伴内 卍 (他者評により前出)

●読本『新編水滸画伝 二編前帙』(1月。五冊。高井蘭山作。北斎戴斗老人画。英屋平吉版。成稿は前年冬か)

●絵本『忠義水滸画伝』(1月。内題に『百八星誕肖像』とある。半紙本一冊。全32丁。見返しには葛飾前北斎為一筆 卍ふもとのさと。自序では「葛飾前北斎為一老人 卍葛しか」とある。万極堂(英屋平吉)版 22.6×15.5 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/東洋文庫蔵)

※改題本『忠義水滸画伝』(刊年未定：永田生慈『北斎 世界を魅了した絵手本展』p 114による)

※『水滸伝』に登場する108人を集める。

☆自序「和漢ノ画図、之ヲ経験スルコト年有リ。元明ノ画最細微ニ画クト雖モ、英雄士ノ形像ヲ画クニ至リテハ、則チ其体自ラ優弱備リ、而シテ未ダ神機ニ及バズ。本朝ノ画ハ則チ田婦女子其体自ラ備ハルト雖モ、剛氣而シテ亦タ未ダ神機ニ及バズ。然レバ則チ元明ノ画、優弱ノ癖有リ。本朝ノ画剛氣ノ癖有リ。之ヲ画学ブ者、焦心殫思益スナリ、指ノ嚮オウコト悲シキカナ。今ヤ愚ヲ去ルコト過ギタルハ及バズ、癖ヲ折衷シ以テ戯レニ水滸伝ヲ画ク。載セル所ノ百八英雄ノ形象、遂ニ一小冊ト為シ、之ヲ梓(版木)ニ鑄ミ弘ク弟子ニ授ケテ、聊カ伝写ノ勞ヲ省クノミ。 文政十式歳次 巳 丑春正月 葛飾前北斎為一老人」(原文は漢文。訓下し・句読点・ルビ・注は筆者による)

【またまた馬琴の批判】

※「馬琴日記 6月21日条」

「(略)百八人像、林冲画像なし。公孫勝注1羅真人注2袈裟かけてをる処などいかに。画ハよく出来候へ共、杜撰甚し。只一覽に充るのミ」(『ピーター・モース・コレクション北斎図録』より。ルビは筆者による)。

注1) 公孫勝：『水滸伝』の登場人物。百八星の一人。修行中の道士。梁山泊の副軍師。

注2) 羅真人：『水滸伝』の登場人物。百八星の一人。仙人に達した道士で、公孫勝の師。

※林冲の画がなく、公孫勝と羅真人が坊主の袈裟を掛けている等、画はうまいが杜撰なもので、たださっと見るだけのものだ、というニュアンス。但し林冲は「豹子頭林冲」として描かれている。『ピーター・モース・コレクション北斎図録』では「馬琴の見落としであろう」として

いる。
また、同書では「二仙山に羅真人長生不死(不老か)の法を説」と題して峨々たる山の景色を描き、羅真人の描写はないとしているが、袈裟を着ているのは別図に描かれている「嗣漢天師 張真人」であるので、馬琴はこの絵を羅真人と見間違えたか。

『忠義水滸伝画本』 嗣漢天師 張真人 (新日本古典籍データベースより)

- 狂歌本『狂歌列仙画像集』 (三冊。五車亭亀山撰。見返しに、画図先北斎為一とある。北斎は一図のみ描く。他に北雅が描く。スミソニアン図書館蔵)



☆〈蝦蟇仙人〉 (北斎改為一筆)

※蝦蟇を手に乗せた少年。腰に瓢箪を結びつけている。

- 摺物「七里ヶ浜ヨリ腰越ヲ眺望」 (老為一写意。20.6×18.5 すみだ北斎美術館/ベルリン東洋美術館蔵)



七里ヶ浜ヨリ腰越ヲ眺望 (すみだ北斎美術館)

※注文主は鹿寿庵蝠麿と穂長堂。図は、牛に乗って煙管を持っている江ノ島参詣の女と牛を牽く子どもの牛飼い。その脇には煙管の筒をこよりで掃除しながら歩いている女がいる。

「我やどは黄がねの亀に鶴が岡 蓬莱山もよそならぬ春鹿寿庵蝠麿」、「江の島を霞もしきる去年ことし 行合川に春や立つらむ 穂長堂」の狂歌が記される。

【新発見の下絵集】

- 下絵集『万物繪本大全図』 (9月。葛飾前北斎為一老人画 墨絵 各ページ平均 11.2×15.3 大英博物館蔵)



『万物繪本大全図』 (大英博物館)



※2020年9月5日読売新聞記事。

「ロンドンの大英博物館は3日、江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎の未公開の下絵約100点
を入手したと発表した。(略)作品は103点で、1829年に北斎が「万物絵本大全図」とい
う本のために制作した。生き生きとした鳥や人物、風景など様々な絵が描かれたが、本は
未出版となっていた。作品は1948年にパリで競売にかけられた記録があり、昨年にパリで
再発見されていた。

作品が制作されたのは、妻の死去や体調問題で北斎の創作が滞ったとみられていた時期
で、北斎は数年後に代表作「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」などを制作している。大英博
物館は「なぜ作品が出版されなかったのかは明らかではないが、北斎の経歴では転機にな
るもので重要な発見だ」としている(略)

【為斎の作画か】

※一方で、「為一」の落款が北斎のものとは違っていることや、蓋の裏の、江戸時代にはあ
り得ないマールペーパーの装飾などから、『為斎画式』二編・三編(未刊)のスケッチを明治の
誰かが為斎注の作品を為一に偽装したものとする
見方もある(酒井雁高「浮世絵学04/外題(萬物
繪本大全圖)」による)。また、印影「ふしのや
ま」を「よしのやま」と誤読していることも指摘されている。



印影「ふしのやま」

注) 為斎：葛飾為斎。1821～1880。北斎門人。本姓：清水。酔桜軒。酔桜楼。『万物図解
為斎画式』(1864)など北斎風のスケッチ画を描く。

【以下、文政年間】

(東都北斎戴斗)、北斎為一、万字、北斎改為一席上、(前北斎戴斗)、前北斎為一、 葛飾前北斎為一、北斎改為一、北斎改葛飾為一、独流北斎為一、東都北斎為一、葛飾為一 老人、独流北斎改為一拝写、●●人為一 印：ふしのやま、葛しか、富士の形、一人人形、 二人人形、

●絵手本『絵本両筆』(文政年間〈1818～30〉)。大本一冊墨摺。人物と鳥獸部分は東都北
斎戴斗筆。山水草木部分は浪花立好斎筆。永楽屋東四郎版。国立国会図書館/大英博物館
蔵)

※絵本『両筆画譜』名の色摺版もある。文政元年(1818)の俳書『涇水奇画』(暮雨巷三
世帯梅撰、浪花立好斎、葛飾北斎画)の改摺本『藐姑射山』(文政4年：1821)に、さら
に狂歌を削り絵本化したもの。

※巻末の丸枠の中に描かれた二人の人物が対座している絵について、『涇水奇画』にはな
い絵なので、改摺に当たって新たに北斎が書き加えたのではという鈴木重三の考察がある
(「『絵本両筆』の巻末図について」)。同氏は、この絵で筆を舐めている人物は北斎自

身であるという高橋誠一郎の見解（『随筆浮世絵』昭和26年）をも紹介している。

『画本両筆』巻末図（大英博物館）

●艶本『會本佐勢毛が露』（文政10年～13年〈1827～30〉）。十二枚折帖。

『富久壽楚宇』（文化12年・1815）の書入



れを省き、絵の添景と恥毛の毛

彫を省略した改板本。恥毛は毛彫の代りに黒褐色の薄いボカシ

摺になっているが、全十二図中、三図だけはボカシの上にパラパラと太い毛を肉筆で描いている。これは北斎独自の案出という（『芸術新潮1989年3月号「北斎」特集所収、林美一「北斎艶本への挑戦」）。



『會本佐勢毛が露』（部分：<https://media.thisisgallery.com/>より転載）

●肉筆画「牡丹鍋と男」（文政元年～4年〈1818～21〉）。紙本着色一面。もと掛軸。北斎改葛飾為一筆。印葛しか 127.3×54.4 フリーア美術館蔵）

※「野人对瓶花図」（文化6年～10年〈1809～13〉北斎館蔵）と同趣図。⇒【文化年間】の同図参照。大きな鍋に植えられた牡丹の花を、漁師が片膝を立てて腰を下ろして見上げている図。

●肉筆春画「春愁図」（文政元年～13年〈1818～30〉）。絹本着色一幅。無款。個人蔵）

※『週刊ポスト』（2020/2/7号）で紹介掲載される（寸法不明）。もとは12図の巻物か画帖であったものが、一枚絵になったものではないかと評論家の言を紹介しているが、真贋は今後の考察を待ちたい。



春愁図（部分：『週刊ポスト』2020/2/7号より転載）

●錦絵「鶏図」（文政元年～4年〈1818～21〉）。前北斎戴斗筆。印葛しか。絹本淡墨一幅。27.0×35.1 島根県立美術館：永田コレクション蔵）



※雌雄の鶏が寄り添うようにしている。頭と背の羽が淡い朱色、羽先は墨摺で、全体に付立の描法である。文化元年（1804）11月の「鶏図」（摺物）もある。

鶏図（島根県立美術館：2005『北斎展図録』より転載）

●肉筆画「団扇と美人図」（文政元年～4年〈1818～21〉）。絹本着色一幅。北斎為一筆。印ふしのやま。74.0×32.4 個人蔵）

※大きくのけぞって、背中に手を回し帯を結ぼうとする女。着物のちりちりの描線と赤い襦袢は應為の特徴とも言われる。

- 摺物「漁師図」(文政5年~13年<1822~30>)。色紙判摺物。自画賛。酔・万字。20.6×17.4 すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/大英博物館蔵) ※「「此春は月のかつらをおるはかり 酔」 「はま砂に面めづらしき嫁菜かな 万字」の付け句の書き込みがあり、



り、「酔」は応為のもの、「万字」(卍)は北斎のものであるので、応為が描いて北斎の作品としたものか。波打ち際の岩に腰を下ろし煙管を銜えて休む漁師。腰蓑を付け、右手に煙草入れを持ち、釣竿を抱えている。脇には大きな魚籠が置かれている。「自画賛」と画題があるところから自画像説があるが疑わしい。

漁師図 (日本浮世絵博物館)



- 肉筆画「月下猪図」(文政3年~6年<1820~23>)紙本淡彩一幅。前北斎為一筆。印葛しか。138.4×58.9 (ボストン美術館蔵)。
- ※満月の月光に照らされて雪山をさまよう猪の図。空は琳派の「たらしこみ」注の画法が使われているという。

注) たらしこみ：俵屋宗達が意識的に用いた画法で、色が乾かないうちに他の色を垂らして滲ませる画法。 月下猪図 (ボストン美術館)

- 扇面画「嵐中茅屋図」(文政3年~13年<1820~1830>)。紙本墨画淡彩扇面一面。北斎為一筆。印一人人形注。上弦 49.5、下弦 22.2×17.2 (フリーア美術館蔵)

※嵐の中に二件の茅屋が立っている図。

注) 一人人形：縦角枠に杖をついた人形の線描が書き込まれた印。

- 肉筆画「七福神図」(文政6年~7年<1823~24>)。北斎一門の合筆。絹本着色一幅。葛飾為一筆。印一人人形 49.9×71.3 (日本浮世絵博物館蔵)

※北斎は「葛飾為一筆」の落款で人物を描かず、松の老木の枝に兜をぶらさげ、幹に槍を立て掛けて毘沙門天に見立てている。図の右から、(二代)戴斗：前北泉(大黒天)、北秀(恵比須)、北溪(福祿寿)、北山(布袋)、二代目北斎(弁財天)、北岱(寿老人)の7人の門人が描く。

- 屏風画「松下群雀図」(文政元年~4年<1818~21>)頃。紙本着色六曲一双。北斎改为一席上。印ふしのやま。85.0×256.0 (個人蔵)

※屏風の右から左に掛けて老松の枝が伸び、その下に向かって十数羽の雀が飛んでくる様子を描く。





松下群雀図（「愚意鑿」BINBOU コレクションII より転載）

●肉筆画「**巖頭の鶉図**」（「雪中鶉図」とも。文政5年～10年〈1822～27〉。文政10年～天保4年〈1827～33〉説あり。絹本着色一幅。頃。葛飾前北斎為一筆。印葛しか。41.3×71.3 林原美術館蔵）

※岩に止まり首を伸ばして前方を見る鶉。羽の一部は日の光に当たって輝いている。図の左は何も描かず薄い色合いで空の広がりを見せている。

巖頭の鶉図（林原美術館）



●肉筆画「**女三の宮図**」（文政6年～8年〈1823～26〉。絹本着色一幅。北斎改為一筆。印葛しか。98.4×36.9 個人蔵）

※『源氏物語』「若菜」の巻。蹴鞠を見ていた女三宮の手元から猫が逃げ出し、その手綱で御簾が上がり、柏木に見そめられた場面。

●肉筆画「**蓮上釈迦図**」（文政6年～9年〈1823～26〉。紙本淡彩一幅。独流北斎為一揮写。印葛しか。118.1×52.5 個人蔵）

※蓮華座の上に釈迦が線香を手にして、足裏に灸をすえるのか、小首を傾げて座っている。足元の香台には「蓮上しゃか」と画題が描かれている。席画と思われる。

●肉筆画「**蟹づくし**」（文政9年～13年〈1826～30〉。絹本着色額装一面。北斎改為一筆。印一人人形。47.6×60.1 フリーア美術館蔵）



※無数の大小の蟹が薄く描かれた水草の上を動いている。手前には甲蟹も描かれる。

蟹づくし（フリーア美術館：すみだ北斎美術館：綴プロジェクト復元）

●肉筆画「**豫讓**」（文政10年～11年か〈1827～28〉。紙本彩色軸装一幅。北斎為一筆。印葛しか印富士の形。135.7×62.5 個人蔵）

※隆々たる体軀の豫讓が刀を頭上に振りかざしている図。2016/9月の MAINICHI オークションに出品されたもの。落款印は従来「印文不明」とされていたものだが、オークションでは「葛しか」印を以前の呼称「天狗印」としている。

豫讓 (モノクロ: ARC 所蔵・寄託品 浮世絵データベースより)



●肉筆画「堀川夜討図」(文政5年~8年<1822~25>)。文政8年~天保4年<1825~33>説あり。絹本着色一幅。北斎改為一筆。印葛しか。106.3×37.6 岡田美術館蔵)



※源頼朝は文治元年(1185)、京都六条堀川の館にいる源義経を攻めた。図は応戦の準備をする義経と刀を差し出す静御前を描く。図の下では、烏帽子と直垂の中に鎧を付けた弁慶が座って刀に手を掛け、前方を睨んでいる。図の上部に国学者の本居大平の歌「鎌倉の松の末枝の山風ぞ いちの谷よりいちはやくして」が書き込まれている。

堀川夜討図 (<http://bluediary2.jugem.jp/>より)

●肉筆画「手踊図」(文政年間<1818~30>)。絹本着色一幅。東都北斎為(み)一筆。印二人人形。86.5×32.2 北斎館蔵)
 ※左足を上げ、袖から突き出した左手を前に差し出し、右手を上に向けて踊る遊女。着物の流れと女の動きがダイナミックに表現される。応為の手が入っているかもしれないともいわれる。

尾崎周道は『北斎 ある画狂人の生涯』で次のように述べている。「片足で立った女の不安定な一瞬をピタリと定て、いささかの破綻のないのは、「神奈川沖浪裏」にかよう不安定の安定であり、しかもその女の健康的な顔は内的な深さをもつものの美を描き(略)」(p167)。

※落款の「為一」「為」は「ゐ」とも読める字体。また、「東都」とあるので、地方からの注文で、北斎の代わりに応為が描き、北斎の著名をまねて北斎画として地方に送られたものではないかとの説もある(久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』p80)。

手踊図(北斎館)



●肉筆画「蚊帳を吊る美人図」(文政年間<1818~30>)。絹本着色一幅。無款。130.0×42.0 大谷コレクション蔵)

※伝北斎とされるが応為の作か。文化3年にも「蚊帳美人図」(絹本着色一幅)がある。本図は、緑の蚊帳を釣るために紐を鴨居にかけようと腕を伸ばしている女を描く。足元に



は下着と足が覗き、大きな団扇が置かれている。衾を明けた夜空には月が薄く浮かんでいる。襟元や襦袢の裾はチリチリに描かれるのは、北斎の特長でもあるが、娘の応為の特徴でもあり、女性の顔も応為の特徴が顕著である。

蚊帳を吊る美人図（大谷コレクション）

●肉筆画「お福図」（文政5年～10年〈1822～27〉）。絹本着色。北斎改为一筆。印葛しか。87.2×28.0 北斎館蔵）

※草色の大袖を着て、長緋袴を履き、ふっくらした顔で神楽鈴を持ち、御幣を担いで楽しそうに踊るお福。

お福は、天岩戸に隠れた天照大神を誘い出すために岩戸の前で踊った天鈿女命をモデルとしていて、神楽や舞踊の神とされる。『北斎漫画』五編〈天白女命〉とほとんど同じ図柄。

お福図（北斎館）



●屏風絵「海浜富士遠望図」（文政9年～13年〈1826～30〉）。紙本着色二曲一双屏風。葛飾前北斎為一画。印葛しか。各 163.2×157.2 フリーア美術館蔵）

※図の手前には海浜の砂が流れるように描かれ、松林の背後に富士が見える。

●摺物「正月料理の器」（文政元年～8年〈1818～25〉）。着色。北斎改为一筆。19.9×18.1 すみだ北斎美術館蔵）

※鶴や亀や松の絵柄をあしらった黒塗りの器が三つ。その前に黒豆とカタクチ鯛が置かれ、椀に箸入れが添えられている。

●摺物「寺島法泉寺詣」（文政5年～8年〈1822～25〉）。着色。前北斎为一筆。20.5×27.0 東京国立博物館/すみだ北斎美術館蔵・ピーターモース・コレクション蔵）

※向島寺島の法泉寺注1に参詣する人々。「開運金勢大明神」注2の幟と赤い鳥居があり、左の門から参詣に入る婦人たちの図。賛には「金勢へ春はまふてよ（詣でよ）縁遠きおとこ女の中むすふ神」、「庭守かしまんのはなと梅か香のにはほひも高き金勢の宮 蜀都園序文」とある。



注 1) 法泉寺：現東京都墨田区東向島3-8-1。曹洞宗晴河山法泉寺。

注 2) 金勢大明神：本来、現岡山県赤磐市西勢実840にある神社で、男性器を祀り、縁結びや子孫繁

栄を願う神社。

寺島宝泉寺詣（すみだ北斎美術館）

●摺物「五歌仙」（文政5年～8年〈1822～25〉）。着色。北斎改为一筆。すみだ北斎美術館蔵）

※五人の歌仙を描いた、為一期の数少ない美人画。

☆〈月〉 (21.2×18.9 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション)

※月を手をかざして見る十二単の官女の図。かぐや姫のイメージか。「朧夜も伊達な姿や
たをやめの さて色白な月の丸顔 鷺毛亭筆持」などの狂歌が記される。

☆〈香〉 (20.5×18.9 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション)



※十二単の官女が香をきいている図。「はる風にとめ木の
かをりさそひ来て きくもゆかしき鷺のこゑ 対山楼坂上
高道」、「花ひらの数にひとしき五つ衣 袖にとめ木ハ梅
かゝそする 芍薬亭」狂歌が記される。

香 (すみだ北斎美術館)

☆〈衣〉 (21.0×18.5)

※緋袴を履いた官女の垂髪が
床まで届いている。紅の紐が
からまる大きな桧扇が置かれ

ている。千羽亭手踊、芦の屋遊雀、春衣亭袖成の賛が記さ
れる。

衣 (すみだ北斎美術館)



☆〈桧扇〉 (20.9×18.5)

※垂髪の官女が桧扇を持って鳥籠の脇に座っている。流芳
清風、聚芳園の賛がある。

☆〈梅花〉 (21.0×18.5)

※垂髪の官女が、紅の紐の絡まる扇を右手で持っている。脚付きの簀の子台に梅の小枝が
数本置かれている。

●摺物「神農」 (文政年間〈1818～30〉)。角判着色。北斎改为一筆。彫工左片眼。ウイ
ン国立工芸美術館蔵)

※薬壺を前に薬草をくわえ、印を結ぶ神農の姿を描く。同画趣は『北斎漫画』三編にも描
かれる。神農は、古代中国の伝説上の天子。人身牛首の姿で、火の徳をもって帝となっ
たので炎帝とも呼ばれる。百草を嘗めて薬草を発見し、農耕を教えたとされるので、江戸時
代に漢方医や薬商などが冬至の日に神農祭を行った。

●下絵「疱瘡翁を懲らしめる為朝」 (文政9年～13年〈1826～30〉)。伝北斎とされる。下
絵。紙本墨画。38.3×26.0 英国・個人蔵)

※八丈島で為朝が弓を杖にして疱瘡翁を馬乗りに押さえつけ、被害を加えないという証書
一通に手形を捺させている図。文化8年(1811)の「鎮西八郎為朝図」や弘化2年(1845)
の「須佐之男命厄神退治之図」(牛嶋神社旧蔵)の構図に繋がる。

【以下、文政後期～天保前期】

●絵手本『^{でんしんかいしよ}伝神開手 ^{ほくさいざいまんが}北斎漫画 十一編』(文政6年～天保1年〈1823～30〉)。半紙本一冊。無款。22.8×15.8 すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/山口県立萩美術館/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション)

※十巻で終了のはずが、好評に応じて出された巻。

※奥付には、永楽屋のみが版元として記され、刊行年なし。この編から初編に続き、実質永楽屋東四郎の刊行となる。

※二十編まで継続する計画を示しているが、実際には十五編まで刊行された。



北斎漫画十一編

☆口絵：墨・巻物・扇子が描かれ「すみ・ま・せん」をもじり、10編で終わりではないことを断わっている。さらに、寿老人の頭に乗った男が筆を持って「新」の字を途中まで書いている。即ち「新北斎漫画」を表している。

【酒を嗜なまず、茶を好まず、絵に似たる絵を書す。真をはなれて真を写す】

☆序文「画論に凝て筆のうごかざるは、医案正しく匙のまはらざるにひとし。古人の説を活動し、疾を愈すぞ良医なるべき。されば、画人も亦然り。古法の縛繩をぬけいで、花を画はうるはしく、雪を画ば寒く見ゆるを、上手とこそはいふべけれ。其人は誰。独此翁にとどめたり。酒を嗜ず。茶を好ず、五十年来、画三昧風骨雅致の迹道を嫌ひて、山か雲かのわかちも知れぬ絵に似たる絵を書す。真をはなれて真を写し、実に一家の画道を開けり。往る文化その年の年より意にまかせ、筆に随ひ、何くれとなく画たるを既に十巻刊行なし。か、それにさへ飽きたらず、需者しけきにより、翁ふたゝひ筆をくだし漏たるを拾ひて、速に此巻成ぬ。当編を次て甘編をもて全部となすこと近きにあり。嗚呼、老練の奇功、前に勝れて尤興ある絵本になん。柳亭種彦」(『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎より。ルビは筆者による)

●絵本『^{えほんおんないまがわ}絵本女今川』(文政5年～天保5年〈1822～34〉)。後に『^{ほくさいおんないまがわ}北斎女今川』(弘化元年頃：1844 永楽屋東四郎版)に改題される。半紙本一冊。葛飾為一老人画。22.5×15.6 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館/東京国立博物館/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵)

※貞享4年(1687) 沢田きち著『女今川』が女の教養書として今川了俊の「今川帖」に擬して書かれたものが古く、江戸時代中期以後、同趣の教養本が普及した。北斎もそれに倣い女性の守るべきことを絵で示した教訓本。

●肉筆画「美人と
蛭狩図」（文政3年～
天保4年〈1820～
1833〉。紙本着色一面
（扇形）。北斎改为一
筆。印文不明。16.9
×46.3 すみだ北斎美
術館蔵）



※あやめの絵柄の団扇を持って、萩模様の藍染めの浴衣を着て、蛭狩の人々を思い描いている。図の左上に、蛭狩りをする人々を薄くシルエットで描き、美人の思いを表現している。

●肉筆画「品川御殿山の花見」（文政3年～天保4年〈1820～1833〉。絹本着色横長判一幅。北斎改为一筆。印文ふしのやま。23.1×151.0 北斎館蔵）

※横長判の絵。御殿山の上で花見の宴をする人々。左下の眼下には品川の海が広がる。

●肉筆扇面画「釣鐘に商人」（文政5年～天保5年〈1822～34〉。紙本墨画淡彩扇面一面。北斎改为一筆。花押（∞に似る）。上弦46.5、下弦22.6×14.7 フリーア美術館蔵）

※北斎の作か疑われる（『2005 北斎展図録』p42）。図は、下ろした釣鐘の前で、荷物を下ろして休む商人を描く。

●肉筆画「軍鶏図」（絹本着色一幅。文政9年～天保5年〈1826～34〉。前北斎为一筆。印文葛しか。134.0×46.4 MOA美術館蔵）

※軍鶏二羽の図。手前の雄の軍鶏の肩越しに、雌の軍鶏が挑むような目つきでこちらを見ている。図の上部に笹の葉を墨画風に描いている。

軍鶏図（MOA美術館）

●肉筆画「朝顔に鶉図」（文政9～天保5〈1826～34〉。絹本着色一幅。葛飾前北斎为一筆。印文葛しか。36.5×55.8 大英博物館蔵）



※一羽の鶉の向こう側に、図の左下から右上に朝顔の蔓を描く。背景は金の地潰し。文政5年～10年〈1822～27〉にも「巖頭の鶉図」を描いている。

朝顔に鶉図（大英博物館）

●肉筆画「牧童」（文政3年～天保元年〈1820～30〉。紙本着色一幅。21.0×29.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵）



※髪が豊かな子どもが二人いる。一人は片膝を立てて、一人はうつ伏せになって頬杖をして話し合っている。側に草の入った籠が置かれている。

●肉筆画「潮干狩」〈多人数判〉（文政3年～天保5年〈1820～34〉）。絹本着色一幅。前北斎為一筆。印富士の形。111.5×41.2 北斎館蔵

※干潟で多くの男女が潮干狩りをしている光景。図の手前では、男が箆を頭上に持ち上げ、もう一人の男は貝の入った箆を抱えるように持っている。水辺に男の子が二人入り、貝を漁っている。そばには三人の女たちが立っている。画面奥の干潟でも多くの人が潮干狩りをしている。背景には富士山が描かれる。

※北斎は「潮干狩」を多く描いているが、この絵はもともと人数が多い。

●肉筆画「梅樹図」（文政11年～天保元年〈1828～30〉）。紙本淡彩一幅。北斎為一筆。印二人人形 91.5×28.7 島根県立美術館：永田コレクション蔵

※たらし込み注画法で漢画風に描かれた梅の古木の所々に咲く白梅。六樹園（石川雅望）の賛には「名木の江南所無は世のたぐひ にはのうらにゆひをりの梅」とある。

注）たらし込み：絵の具が乾かないうちに他の絵の具の色をたらす技法。にじみの技法。

俵屋宗達に始まり、尾形光琳ら琳派が多く用いた。

●肉筆画「山水図」（文政3～天保5〈1820～34〉）。絹本墨画淡彩一面。北斎改为一筆。印印文不明。31.1×53.1 フリーア美術館蔵

※漢画墨画風の絵。入り江の左右の崖の間にある民家の前に小舟が数艘浮かび、遠くの山の頂上付近は薄い藍色が施される。

●肉筆画「南瓜に虻図」（文政9年～天保5年〈1826～1833〉）。絹本着色一幅。前北斎为一筆。35.0×54.4。フリーア美術館蔵

※浅黄の花と薄緑の葉。その上に羽ばたいている虻。全体に墨絵風の絵。弘化2年（1845）の「南瓜花と虻」とは別作。

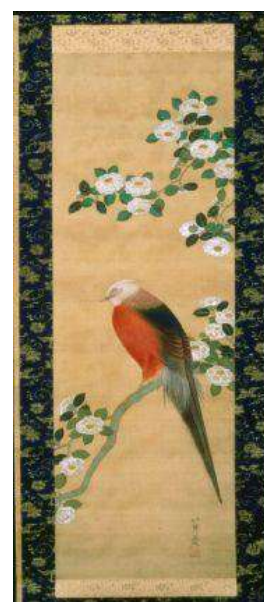
●掛幅肉筆画「白椿に錦鶏図」（文政元年～天保5年〈1818～34〉）。掛幅絹本着色。北斎为一（？）。印不明。103.0×35.3 ポストン美術館蔵

※頭部が白、腹部が鮮やかな赤、背中が緑の羽で尾羽が鋭く下を向いている金鶏が、白椿が咲いている緑の幹に止まっている。全体に色彩鮮やかな図。金鶏は、中国の岩山や竹藪などに生息する雉子の仲間。

白椿に金鶏図（ポストン美術館）

●肉筆画「六歌仙図」（文政3年～天保元年〈1820～30〉）。絹本着色一幅。縦長判。北斎为一筆。印葛しか。116.0×33.2 個人蔵

※縦長図面に六歌仙を収めている。上から、正面を向いた大友黒主、後ろ向きの僧正遍照、左を向いた小野小町、右を向いた在原業平、下を向いた文屋康秀、正面を向いた喜撰法師を流れるように収めている。図上部に六樹園（石川雅望）の賛が記される。





六歌仙図 (https://edo-g.com/より)

●肉筆画「水滸伝絵巻」(文政 12 年～天保 5 年〈1829～34〉。絹本一部着色。未完。フリーア美術館蔵)

※一枚絵に『水滸伝』の英雄 108 人を所狭しと描き、人物の側に短冊状の書き込み枠に人物名を記す。あるいは未記入や黒で塗りつぶしもある。人物も着色や無着色がある。文政 12 年 (1829)

「忠義水滸伝画本」(葛飾前北斎為一筆) を典拠にしたもので、北斎を含む数人の作とも見られている (『北斎の肉筆画』 p 149 青幻舎 2018 年)

●屏風絵「十二か月花鳥図」(文政 9 年～天保 5 年〈1826～34〉。紙本着色六曲一双押絵貼屏風。無款。第一・六扇：146.4×51.8、第二～五扇：146.4×56.5 フリーア美術館蔵)

※1 月～6 月までを六曲にした右一隻と、7 月～12 月を六曲にした左一隻に仕立てた一双屏風。1 月には木にとまる鶴、2 月は梅、3 月は狐と蝙蝠、4 月は菖蒲、5 月には泳ぐ亀、6 月は蓮に鷺、7 月は鶏、8 月は草樹にとまる雀、9 月は菊に鴨、10 月は紅葉に雉、11 月は雁、12 月は 2 匹の小犬等を描く。



十二か月花鳥図 (フリーア美術館：綴プロジェクト複製)

●下絵集『未完絵手本版下絵』(文政 6 年～天保 4 年〈1823～33〉。綴本三冊。墨摺。無款。各 14.0×21.0 ポストン美術館蔵)

※『2019 新北斎展図録』(p 336) の解説によれば、後に刻板し、版本とすることを目的とした版下絵を集めたもので、3 冊に分けられ、いずれも紙縹で綴じられただけの仮綴で、表紙などを含めると一定ではないが、上冊 38 丁、中冊 25 丁、下冊 26 丁としている。また、版元は西村屋与八ではないかと推測している。詳しくは、永田生慈『ポストン美術館 浮世絵名品展 北斎』(2013～2014) か、同書より抄録した『新北斎展図録』解説 (p 336) を参照のこと。九曜星や仕事師など、多くのジャンルを扱っている。

●画稿『日本名将伝』(仮題。文政 9 年～天保 5 年〈1826～34〉。画稿三帖。見開き 32 図。無款。23.5×16.4 ポストン美術館)

※各巻の題簽に「北齋画」と墨書され、見返し部分の表から隠された部分に「日本名将伝」、上巻扉に「北齋板下草画」「未タ此図者板ニ不成古今之名画ナリ」と墨書されているという（『2017 北齋一富士を超えて』図録 p 227）。

『大日本将軍記初輯』の画稿とされる。「義経迫つて船八艘を踊越る」の絵には義経が船から八艘跳びをする姿が動画のようにスケッチされている。

●版下絵『大日本将軍記初輯』（文政9年～天保5年〈1826～34〉）。『日本名将伝』を基にした版下絵だが1図多い33図。無款。28.0×20.0 ポストン美術館蔵

※源頼朝挙兵から奥州合戦迄の源平物だが未刊。

●摺物「鶯宿梅」（文政9年～天保5年〈1826～34〉）。色紙判着色）

※村上天皇は清涼殿前の梅が枯れたので、紀内侍の家の紅梅を掘り取らせることにしたが、紀内侍は「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ」の一首を梅の枝に添えて差し出したので、紀内侍の家の梅の木はそのままとなったという故事からの着想。紀内侍が梅の木のある庭で、座って右手を持ち上げ、和歌を盆に載せて差し出す図。「花の玉に口をあかさて鶯にものをいはする宿の梅枝 春亭服成」の狂歌が、左から右に縦書きで記される。 鶯宿梅 (plaza.rakuten.co.jp より)



●摺物「江の島詣り」（文政5年～天保5年〈1822～34〉）。横中判着色。摺物。●●人為一筆。19.2×26.5 千葉市美術館蔵



※牛の背に荷物を乗せて江ノ島詣りに来た、揚げ帽子を被った二人の女が浜辺にいる。一人はしゃがんで江ノ島のほうを指差し、一人は立って手をかざして江ノ島を見ている。江ノ島は描かれない。

江の島詣り（千葉市美術館）

●摺物「箱根芦ノ湖の富士」（文政5年～天保5年〈1822～34〉）。北齋改为一筆。21.0×18.1 チェスター・

ビーター図書館蔵)

※富士は輪郭線を用いないカラ摺。雲や砂子部分は金摺、湖面は銀摺で、北齋の木版富士中で最も豪華な作品といわれる。桂花と二橋の句が書き込まれている。

●摺物「紅の玉」（文政9年～天保5年〈1826～34〉）。北齋改为一筆。19.6×17.6 すみだ北齋美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※更紗の袋と紅の玉が描かれ、めでたい正月を表す。賛に「紅の玉なす梅にともなふてひかりに匂ふ鶯のこゑ 春亭服成」とある。「紅」は賛の語調から「くれない」と読む。

文政13/天保1 (1830/12/10～) 庚寅 71歳 北齋為一、前北齋為一、七十一翁北齋為一、 七十一翁為一、北齋改为一：孫(21歳)、阿栄(33)
--

【為一後期 錦絵の時代】

◇天保の大飢饉。

◇天保の改革（1843 迄）。江戸三座（中村座・市村座・守田（森田）座）が浅草に移される。

◇この頃（天保初期）、三輪伝次郎（元武士、山口伝次郎）の藪蕎麦が駒込団子坂に進出（三輪は親戚の名を継ぐ）。

※江戸後期の蕎麦の値段：二八蕎麦（16 文＝約 400 円、1 文＝約 25 円で計算）、あられ（旬の素材を用いる蕎麦）、天麩羅、花巻（もみ海苔を散らしたかけ蕎麦）、しっぽく（煮込んだ具材を乗せた蕎麦）、玉子とじ、鴨南蛮＝24 文～32 文（約 600 円～800 円）。蕎麦切手（必要に応じて蕎麦に引き換えることのできる商品札）＝216 文（約 5400 円）。

◇閏 3 月、おかげ詣り流行。この年、100 万人以上が伊勢参りをしたという。6 月 20 日までの間に 427 万 6,500 人が伊勢神宮近くの宮川の渡しを渡ったという。

◇閏 3 月 24 日、石川雅望（宿屋飯盛・六樹園飯盛）没（78）。

◇パリ、七月革命。

◇8 月 4 日、吉田松陰生（～1859）。

◇9 月頃、富突き（富くじの一種。箱の中の札を突いて当たりを決める）が流行。

◇十辺舎一九、文政 5 年（1822）以来の中風が重くなる。

【どら孫の尻拭いと窮乏生活】

★1 月 12 日、孫を父親（柳川重信）に引き渡し、上州高崎より奥州に連れて行かせて働かせるも、北斎の予想通り途中で逃げ帰る。

※文政 13 年（天保元年）1 月 28 日の英平吉・英文蔵宛書簡には、「（略）孫の借金の取り立てなどでひどく窮乏していて、2 月中旬にならなくては春は来ない」と記している。版元に 2 月の救済を願っているか。「北斎為一九拜」と書いている。

文政 13 年（天保元年）1 月 28 日の英平吉・英文蔵宛書簡。

「（略）去春より孫放蕩に付、数々悪法をかゝれ、殊に下品のドラもの、始末屋よりのかけ合等にて、いろく尻をぬぐひ、勘当も度々申出候処、幡随院長兵衛注、折々出現 仕、ヤレ、月迫（月末）の、今一応のと、難儀は、老人一人にて、漸々当正月十二日、当人父柳川重信へ引渡し、当時は上州高崎より奥州へ連れ参候得共、今にも余中より逃げ帰り候哉と、末不案心（不安心）に候得共、まづしばらくは、ホット息をつき罷在候、右に付曾我物語之御札にも不参候。当春ハ、銭もなく、着物もなく、口を養ふのみにて、二月中旬に不相成候てハ、春になりかね候（略）」（『葛飾北斎伝』 p 228 ルビは筆者による）

この時、孫は 21 歳ぐらいと思われる。

注）幡随院長兵衛：江戸初期の侠客。町奴の頭目で、講談・歌舞伎で有名。北斎と年代が違うので、ここでは取捌役（借金等の取立て役か）の人をこう呼んだか。

★1 月頃、浅草藪の内明王院注内五郎兵衛店に住む。

1月18日の書簡「浅草藪の内、明王院地内家主五郎兵衛店、此頃引越候。画をかく坊主と御尋可被下候。北斎にてハ如何哉」（句読点・ルビは筆者）による。尋ねるときは「画をかく坊主」と言ってください。「北斎」と言って尋ねるのは控えてくださいといったニュアンス。

注：現元浅草辺にあった明王院であろう。藪の内は「藪之内の馬市」として『新撰東京名所図会』第56編「浅草区之部」其三で次のように紹介している（『風俗画報』増刊 東陽堂。明治41年6月20日刊）。

「藪之内は昔時年毎に南部駒の市を開きし地なりしが。文化元年より止みたるよし此地俗間には単に藪とのみ唱へ居れり」（句読点原文のママ。ルビは筆者による）。

★3月6日、川柳の会（浅草奥山千代田額面会。柳亭評。催主：花菱）に出席、1句詠む（『年譜』による）。

★3月28日、川柳の会（於浅草奥山開巻。柳亭評）に出席、2句詠む（『年譜』による）。

★この頃より天保4年（1833）にかけて錦絵に傾注（風景画家の趣が形成される）。但し、この年は画作は少ない。

★『柳多留』110編に4句載る（『年譜』による）。

【柳多留 110 扁】

☆鳥さしハ生きた雀の帯をしめ 卍（85 扁に他者評で前出）

☆芋は今喉元あたりろくろ首 卍（ろくろ首が食べた芋は今喉元あたりか。吉原・三浦屋の遊女、二代高尾太夫の「君は今駒形あたりほととぎす」を踏む）

☆供にやとはれ餌（紺か。田中聡『北斎川柳』による）の形りになられた 卍（侍の供に雇われ紺の法被を着た姿になった）

☆亭主ハ麩女房がこぼす水醬麩 卍（近頃の亭主は麩のように頼りないと女房がこぼすが、お前だって水を含んだ正麩のようだ）

【北溪の絵手本を北斎名で出版】

●絵手本「北斎道中画譜」（〈戸塚〉の画中の道標に「文政十三」（天保元年）とある。淡彩一冊。高井蘭山序。前北斎為一画。永楽屋東四郎（東璧堂）版。大英博物館/国立国会図書館蔵）

※魚屋北溪の狂歌本『狂歌東関駅路鈴』（文政13年：1830）を改題し、北斎画として再摺したもの。



『北斎道中画譜』（口絵：大英博物館）。

右図：程ヶ谷・戸塚（メトロポリタン美術館）

※「東海道五十三次」の各宿駅に沿っているが、絵手本風に描線を主体に

描く。〈東壁堂書齋〉として永楽屋の店頭風景に続き、45 宿が見開き頁、または半頁、あるいは見開き頁に 3 宿（袋井・見附・浜松）が書き込まれている。〈〉は見開き頁（一丁の裏表）を示す。

☆〈日本橋〉〈品川〉〈川崎・神奈川〉〈程ヶ谷・戸塚〉〈藤沢〉〈平塚・大磯〉
 〈小田原・箱根〉〈三島〉〈沼津〉〈原〉〈吉原〉〈由井・興津〉〈江尻・府中〉
 〈鞠子〉〈岡部〉〈藤枝・島田〉〈金谷〉〈日坂・掛川〉〈袋井・見附・浜松〉〈舞坂〉
 〈白須賀・二川〉〈吉田〉〈御油・赤坂〉〈藤川・岡崎・池鯉附〉〈鳴海・宮〉〈桑名・四日市〉
 〈石薬師〉〈庄野・亀山〉〈関〉〈坂ノ下〉〈土山〉〈水口・石部〉〈草津・大津〉〈京〉

【文政4年に続き落款に年齢を記す】

●下絵集『**工芸職人用下絵集**』（着色。2 帖。七十一翁北齋為一筆（前編）。七十一翁為一筆（後編）。13.3×19.7 メトロポリタン美術館蔵）

※根付、目貫、煙草入れの金具など、職人のためのデザイン集。2 冊に 348 図が収められているという（『2019 新北齋展図録』p336）。動物・虫・植物・人物・民俗等、たくみにデザイン化した下絵を 1 ページに 4 枚～9 枚コマ割りに貼り付けたもの。

●摺物「**汐汲み**」（3 月。大奉書全紙判摺物。「一世一代会」と題されている。北齋改为一筆。42.5×55.6 東金屋版。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※長唄の唄方である芳村家の家元芳村伊三郎を中心とする常盤津発表会「一世一代会」のプログラムとして作られた摺物という。図の大半が演目と演者の指名で埋められている。謡曲「松風」を基とする歌舞伎舞踊「汐汲」を舞う図。天秤の汐汲桶を担ぎ、花簪を挿した髪に烏帽子を被り、美しい衣裳に腰蓑をつけている。天保期以降摺物は激減している中での北齋晩年の唯一の大型摺物。図の左端に「文政十三年寅年三月」とある。



汐汲み（部分：太田記念美術館）

●下絵『**下絵帖**』（紙本着色貼込帖二帖。七十一翁北齋為一筆。19.7×13.3 メトロポリタン美術館蔵）

※貼込された小判の下絵帖。工芸・根付等のデザインを描く。北齋及び工房の手が入っていると思われる。十二支を長円形風にまとめたデザインなどがある。

天保2(1831) 辛卯 72 歳 前北齋為一、七十二翁前北齋為一、北齋改为一、前北齋 印

葛しか、二人人形、為一、さきのほくさゐ、七十二翁、瓢箪の形、ふしのやま、為弍、ゐ

一のみん：孫(22 歳) 阿栄(34 歳)

◇この頃、江戸で、屋台ではない天麩羅屋ができる。

- ◇1月6日、良寛りょうかん没(75)。
- ◇2月、女浄瑠璃禁止令。
- ◇2月、江戸の米高騰にともなう窮民27万8千余人に施米せまいが5月まで行われる。
- ◇4月7日、河鍋暁斎かわなべあきさい生(～1889)。
- ◇7月26日、二世森羅万象しんらまんぼう(七珍万宝しっちんまんぼう)没(70)。
- ◇8月7日、十辺舎一九じっぺんしやいっく没(67)。辞世「この世をばどりやお暇いとまと線香せんこうの煙ともと共に灰左様はいさようなら」。曲亭馬琴きよくていばきんは「著作料で生計を立てた最初の人物」と評した。
- 歌川広重うたがわひろしげ、『東都名所とうとうめいしよ』(ベロ藍を使う)。

★『柳多留やなぎたどる』113編に川柳1句、115編に12句載る(『年譜』による)。

【柳多留113編】

☆白日鼠横町唐おんないしきの女医者おんないしき 卍(横町の唐の女医者は水子を扱うので、「水滸伝」の盗賊・白日鼠のようだ)

【柳多留115編】

- ☆御寺ごてらの万歳年若ばんざいねんわかしに御短命ごたんめい 卍(若死にが増えれば、その法要でお布施が増える。万歳、万歳)
- ☆さうづかのヲツカア撫なだと二才鬼にさいおに 卍(吉原の店先の遣り手は三途の川の鬼だと、青二才の客が言う)
- ☆御膳汁付枕飯六文屋ごぜんじゆけまくらめしるくもんや 卍(一泊二食六文の飯盛宿では、山盛りの飯に箸が刺さって仏前の飯のようだ)
- ☆お寺おてらの万歳年若ばんざいねんわかしの御短命ごたんめい 卍(他者評により前出。但し、表記の異同あり)
- ☆閻王えんおうの口へ小僧をおつばめる 卍(太宗寺の閻王は小児を食べるといふ。悪い小僧は口に入れるぞと脅す)
- ☆誰が為たれがために櫛しきみの春はるの縁ゆかりする 卍(宿六心配『謎解き北斎川柳』では「縁ゆかりする」。いったい誰のために春の櫛は育つのか)
- ☆張子はりこでも浅草紙あさくさかみの都鳥みやどり 卍(落とし紙に使う安い浅草紙で作った張り子の都鳥でも立派に見える)
- ☆抜ケと水かける犬ぬけとみづかけるいぬさぐら 卍(宿六心配『謎解き北斎川柳』では「抜ぬツと」。抜いてしまえと盛りの犬に水を掛けるように、植木の犬桜に水を掛ける。あるいは「バツと水を掛ける」か)
- ☆気違きまちひめ行平鍋ゆきひらなべへみやこ鳥 卍(江戸の名酒「都鳥」を行平鍋に入れて呑む酒好きの気違いめ。行平と弟の業平の歌を踏む)
- ☆はりこでも浅草紙あさくさかみの都鳥みやどり 卍(他者評により前出。但し表記の異同あり)
- ☆下からも屋玉やだまと読よめと田舎者いんや 卍(花火は下から上がるので「玉屋」の掛声も下からと読めと田舎者が言う)
- ☆寄よる壘丸たまたまハ伊勢いせやの銭田虫ぜにたむし 卍(ケチな伊勢屋は壘丸の皮膚病・銭田虫まで落とさぬよう禪で締める)

【この年の信州小布施行き・高井鴻山宅に寄宿は疑問】

★『葛飾北斎伝』には、

「天保二三年の頃、信州高井郡小布施村しんしゅうたかいかいぐんおぶせむら(筆者注：現長野県上高井郡小布施町小布施805-1、高井鴻山記念館)に到り、門人高井三九郎たかいかいさんくろう(筆者注：鴻山。1808～83。信州の豪商にして教育家)の家に寓し、居ること一年、遠近、画を請ふ者多し」とある(p134)。

しかし、この頃、高井鴻山は京都にいて天保3年(1832：鴻山24歳)には江戸に出ているので『葛飾北斎伝』の記述を否定する見解がある(岩崎長思『高井鴻山小伝』上高井教育

会〈荒井勉『北斎の隠し絵』所収 p 82) ）。『葛飾北斎伝』脚注 (p 134) でも「このころ鴻山は京都に居るので、誤りとされる」とある。

※『葛飾北斎伝』(脚注 p 135) では、高井鴻山は、22歳の時、2度目の京都へ行ったとあり、本文中にも「嘗て京師に学び、岸駒注に就き、画法を学びしが、岸駒一日門生を集めて、謂て曰く、当時京板の画工多しといへども、蓋し我が腕に敵するものなかるべし。唯おそるべきは、江戸の葛飾北斎なりと。三九郎(筆注：高井鴻山のこと)これを聞き、岸駒が門を去りて、江戸に来たり、北斎翁に就き、画法を学ぶ。画名を鴻台(脚注：鴻山の誤り)といふ。後信州に帰り、翁を招きて家に居らしめたり」(p 135~136 ルビは筆者による)とある。

注) 岸駒：宝暦6年または寛延2年~天保9年(1756・1749~1839)。本名・佐伯昌明。京都の絵師。岸派の祖。

●錦絵「鎌倉 江ノ島 大山 新板往来双六」(この頃か。春。大大判錦絵。袋あり。柳亭種彦撰。前北斎為一図。西村屋与八・鶴屋喜右エ門・上州屋重蔵同梓。島根県立美術館蔵)。

※北斎唯一の双六画(玩具図)。日本橋から江の島、大山までの52箇所の景勝地を柳亭種彦が選ぶ。

「鎌倉 江ノ島 大山 新板往来双六」(島根県立美術館)

☆〈袋〉(着色。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※「鎌倉 江の島 大山 新板往来双六 柳亭種彦撰 前北斎为一筆」の表題の脇に、菊・萩・蝶の図柄の屏風、「文政辛卯春 新彫」と書かれた大山参りで奉納する大きな木の納め太刀、「相州鎌倉 風流政子形御櫛所 雪の下」と書かれた袋と櫛が描かれる。「文政辛卯」は文政14年(1831)にあたり、実際には天保2年のこと。袋の裏には柳亭種彦の「誌」と、版元の「通油町 鶴屋喜衛門 馬喰町二丁目 西村屋与八 合彫」の文字が記される。

●狂歌絵本『女一代栄花集』(3月。半紙本一冊。着色。秋長堂老師・春秋庵婦人両撰。応需七十二翁前北斎为一筆 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※本書には三図のみ描く。

☆〈花見帰りの商家の女房〉

※二人の商家の女房が扇子を振りかざしながら陽気に歩いている行楽帰りの図。二人で持つ細い棒に括りつけた風呂敷には、摘んだ草花が包まれている。供の小僧が傘を持ってつき従う。堤の向こうに桜が咲いているのが薄く描かれる。



花見帰りの商家の女房（島根県立美術館）

☆〈短冊を持つ婦人〉

※短冊に歌を書こうとして、右手に筆を持っている向こうむきの女。

☆〈藤花〉

●錦絵「百物語」（この頃か。天保4年（1833）説あり。中判錦絵揃物。前北斎筆。鶴屋喜右衛門版）



※落款の「前北斎筆」の「筆」の最後が右に跳ね上がる書き方で、これは『富嶽三十六景』の天保2年に描かれた図の落款と同様である。また「しうねん」に「時于応天輔（天保）之革 御正月日待咄」とあり、天保元年は12月10日改元で10日しかないので、刊行は天保2年ことと思われる（『HOKUSAI 画狂人北斎』緑青 VOL2 日本浮世絵博物館 p56 参照）。

※明治26年（1893）、松井栄吉版の複製がある。

☆〈しうねん〉（26.0×18.9 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/中右コレクション/山口県立萩美術館・浦上記念館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「時于応天輔之革 茂間翁院無嘘信士 空 御正月日待咄」と書かれた位牌と骨壺と卍印のある茶碗に絡みつく蛇を描く。

しうねん（日本浮世絵博物館）



☆〈お岩さん〉（26.2×18.7 文政8年（1825）初演「東海道



四谷怪談」（鶴屋南北）を題材にしたもの。

ギメ美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/中右コレクション/島根県立美術館/日本浮世絵博物館/ボストン美術館/大英博物館/ミネアポリス美術館/立命館大学/中右コレクション蔵）

お岩さん（日本浮世絵博物館）

☆〈さらやしき〉（26.0×18.8 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/中右コレクション/山口県立萩美術館・浦上記念館/ミネアポリス美術館蔵）

※寛政元年（1741）、大坂豊竹座初演「播州皿屋舗」で知られた話。お菊が皿を割った琴に腹を立てた主人の青山鉄山によって斬殺され井戸に投げ入れられたが、お菊の怨念が井戸の中で皿の数を数えたという物語。図は、井戸から顔を出したお菊の体が皿を重ねるように描かれ、口から煙草の煙のような靈気を吐いている。オデュロン・ルドン「聖アント

ワームの誘惑」第一集〈V.それから魚の体に人間の頭アントワームを持った奇妙なものが現れる〉(1881年 国立西洋美術館蔵)に影響したとされる。

さらやしき (日本浮世絵博物館)

右図：ルドン：1888 「聖の誘惑」から (国立西洋美術館)



☆〈小はだ小平二〉(26.1×18.6 大英博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/

東京国立博物館/日本浮世絵博物館/中右コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/山口県立萩美術館・浦上記念館/ギメ美術館/中外産業株式会社・原安三郎コレクション/ミネアポリス美術館蔵)



※享和3年(1803)の読本「小幡小平二死霊物語 復讐奇談安積沼」(山東京伝)参照。初代尾上松助門下の役者小平二が、後妻のお塚とその密夫により安積沼で殺される話。ジャポニズムの一つとして、オデュロン・ルドン『ゴヤ讃』の〈1885 II 沼の花、悲しげな人間の顔〉などにも影響したとされる。

左：小はだ小平次 (日本浮世絵博物館) 右：ルドン：沼の花 (国立西洋美術館)

☆〈笑いはんにや〉(25.6×18.8 大英博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/中右コレクション/ギメ美術館/山口県立萩美術館：浦上記念館/日本浮世絵博物館蔵)



※般若が子どもの首を持ち上げ、左手でそれを指さしている図。鬼子母神を画材にしている。赤子を奪い食う女を諭すため、釈迦が彼女の子を隠したため、子を失うことの悲しみを知った女は、後に子供を守る鬼子母神となったといわれる。

※日本浮世絵美術館所収の図は、瞳の周囲と歯が白と青の交互に塗られている。フリーア美術館には色指定を書き込んだ校合摺がある。

笑いはんにや (日本浮世絵博物館)

【真実の虚構か、虚構の真実か、『富嶽三十六景』】

●『富嶽三十六景』(秋。横大判錦絵揃物。表富士36景〈主にベロ藍や植物の藍による併用摺〉+裏富士10景の全46枚。前北斎為一筆。三代目西村屋与八(馬喰町・永寿堂。富士講の講元)版。以後4年間刊行)

※江戸から見た富士の図は 17 景（『芸術街道』VOL. 1 花美術館 2009 年 9 月刊 小林忠談）。

※フランスのアンリ・リヴィエールは『富嶽三十六景』に刺激され「エッフェル塔三十六景」を描いている。

「エッフェル塔三十六景」1988～92 年（川船 オルセー美術館）

※河村岷雪『百富士』（明和 4 年：1767）の画趣の多くを参考にしたとされる。



河村岷雪『百富士』4 冊（明和 4 年：1767 ARC 所蔵古典籍データベースより）

※上方の絵師・春婦齋北妙が、「富嶽三十六景」を忠実に写した豆判（天保元年～5 年〈1830～34〉。平均 8.5×12.2。35 点が確認されているという）を描き「北妙写」と署名している。

【富士 36 図】（所蔵館記載のない図はメトロポリタン美術館蔵）

☆〈江戸日本橋〉（前北齋為一筆。25.4×37.7 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北齋館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/すみだ北齋美術館/ミネアポリス美術研究所蔵）

※透視図法（三ツ割の法）で早朝の江戸を描く。隅田川の西岸に魚河岸があり、図の下に描かれた日本橋上には魚売りで賑わい、兩岸には白壁の米蔵が並ぶ。遠景に日本橋川に掛かる一石橋、更に向こうに江戸城が描かれる。その背後に、本来ならここからは見えない富士山が見える。



日本橋：2020 年より日本国旅券査証欄図案

☆〈江都駿河町三井見世略図〉（前北齋為一筆。25.8×38.2 メトロポリタン美術館/すみだ北齋美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北齋館/奈良県立美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/アレン・メモリアル美術館：マリーエンスワース・コレクション蔵）

※富士や家の屋根による二等辺三角形の構図で、屋根より凧を揚げる図。越後屋（三越）は一日千両の繁盛といわれた。この店の大屋根では職人が正月飾りをしている。その動きの先には「寿」の文字が記された凧が揚る。駿河町（現東京都中央区日本橋通室町1～2丁目）には、道の両側に「現金 無掛値」の看板のある越後屋があった。



江都駿河町三井見世略図：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈東都駿台〉（北斎改为一。26.5×38.4 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/江戸東京博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：新庄コレクション蔵）

※駿台は、現在の東京都千代田区神田駿河台。中央に神田川の支流と思われる川が流れ、その岸边から左側の坂にかけて人が往来している。その地点から武家屋敷のある駿河台を見る図。遠景に富士が描かれる。



東都駿台

☆〈東都浅草本願寺〉（前北斎为一筆。25.2×36.5 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/江戸東京博物館/田記念美術館/すみだ北斎美術館/山梨県立博物館/MAO 美術館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/太田記念美術館/大田区立龍子記念館/東京国立博物館/島根県立美術館/北斎館/ホノルル美術館蔵）

※浅草本願寺は、浅草の東本願寺（現東京都台東区西浅草1-5-5）で、大屋根の上には五人の瓦職人が作業をして、そこからの視点で左側の街並みを低く描いている。家並の間には材木を高く組み合わせた建造物が描かれ、低い位置の町から鳶凧があがり、その中空の位置は大屋根の高さとなっている。



東都浅草本願寺

☆〈深川万年橋下〉（北斎改为一筆。25.1×37.1 メトロポリタン美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/太田区川端龍子記念館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/東京国立博物館/北斎館/ホノルル美術館蔵）

※太鼓橋風の万年橋の橋下の低い視点で遠くの富士を望み、橋上の人々を見上げる構図。橋下を通過する船や、橋下で釣りをする男も描かれる。万年橋は現東京都江東区常盤1丁目と清澄1丁目との間に流れる小名木川に架かる橋。小名木川河口の隅田川の向こうに富士山が見える。『洋風景画シリーズ』（文化元年～4年）の「たかはしのふじ」も同じ構図で描かれた。河村岷雪『百富士』中の〈橋下〉の画趣の影響が強い。



深川万年橋下

☆〈五百らかん寺さざめどう〉（前北斎為一筆。25.4×37.3 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館・チココレクション/プルヴェラー・コレクション/ライデン国立民族学博物館/島根県立美術館：新庄コレクション/ミネアポリス美術館蔵）

※羅漢寺の展望台から富士を見ている図。羅漢寺は江戸・本所五つ目の大島村（現東京都江東区大島3-1-8）にあり、写実的な五百羅漢像を安置していた。三階建ての螺旋状の栄螺堂（正式には三匠堂）があり、富士を見る展望台もあった（小林忠『浮世絵ギャラリー2 北斎の美人』）。その後、明治42年に五百羅漢寺は目黒区に移転した（現東京都目黒区下目黒3-20-1）。元の地には奥多摩の曹洞宗祥安寺が移転し羅漢寺と改称したという（現東京都江東区大島3-1-8）。



五百らかん寺さざめどう

図は富士を望む男女や子ども、右には荷物を背負った行商の男女が疲れたのか座りこんでいる。遠くの豎川の材木置き場と思われる先に富士がみえる。なお、本図の画題を「さざえどう」と表記しているのは誤り。

☆〈青山円座松〉（北斎改为一筆。25.1×37.0 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館/山梨県立博物館/MAO 美術館/東京国立博物館/江戸東京博物館/北斎館/大田区川端龍子記念館/島根県立美術館/ホノルル美術館蔵）

※笠松と呼ばれる青々とした巨松の葉が広がり、右手前の坂の上では三人の男が酒宴を催している。松の向こうに雄大な富士が描かれる。この松は、実際には芝・増上寺の「円座の松」との考察があるが（有泉豊明『楽しい北斎の 富嶽三十六景 富嶽百景 動植物画他』目の眼 P29）、「青山」を画題にしているところから、青山の龍岩寺（現東京都渋谷区神宮前2-3-8）の松を意識していると思われる。図左の松を支える杭から掃除人の足が見える。

青山円座松：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈^{おんでん すいしゆ}隠田の水車〉（前北斎為一筆。26.0×38.5 メトロポリタン美術館/大英博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコソコレクション/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/東京富士美術館/千葉市美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/江戸東京国立博物館蔵）



※田園を背景に、^{たまがわじょうすい}玉川上水の分流に掛けられた大きな水車が小川の流りに任せて回っている。地元産の小麦や蕎麦を粉に挽いた。その前で亀に付けた紐を手にして母親に語りかけている子ども。^{ぼろ}箆に入れた野菜を小川で洗う農婦。小川の向こうでは大きな袋を担いで坂をのぼって来る二人の男など農民の生活が描かれる。現東京都渋谷区青山・神宮前辺りの田園風景といわれる。この辺りには低地には渋谷川が流れていた。高台に描かれた水車の上から水が流れて車を回す画図は、北斎の虚構とされる。



隠田の水車：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈^{しもめぐる}下目黒〉（前北斎為一筆。25.8×38.6 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコソコレクション/島根県立美術館/アレン・メモリアル美術館：メアリー・エイズワース・コレクション蔵）

※図の両脇に高台を描き、右の高台には空に伸びる松、左の高台を登る農夫。中央の低地には農作業をする人々が描かれる。中央には二人の^{たかじょう}鷹匠が立っている。近くの上目黒には、鷹匠の目付役の家があったという。富士の見える下目黒の^{ぎょうにんざか}行人坂からの富士山ではなく、場所が特定できない農村からの風景としている。



下目黒：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈^{しもめぐる}下目黒：校合摺〉（横大判。前北斎為一筆。27.5×37.6 太田記念美術館蔵）

※校合摺が一枚残され、それには朱筆で夏雲が描き加えられている（太田記念美術館蔵）。（『名品揃物浮世絵8 北斎I』解説、及び『北斎美術館2 風景画』P64）。

※〈甲州三島越〉の校合摺同様、青色系統の彩色の部分に朱色で手彩色している。

☆〈^{こいかわゆきのあした}礪川雪ノ旦〉（前北斎為一筆。26.3×38.8 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/大英博物館/すみだ北斎美術館/太田記念

美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/大田区龍子記念館/文京ふるさと歴史館/東京国立博物館蔵)

※「三十六景」中、唯一の雪の風景。礪川は、現文京区小石川一帯をいうが、半天神（現北野神社。東京都文京区春日1-5-2）にあった茶屋からの風景を描く。降雪の翌朝、一面の銀世界を高台の座敷で男女がくつろぎながら景色を眺めている。遠景の空には鳶が三羽羽ばたき、その下には雪を抱いた富士が見える。画面左端の部屋では男が二人談笑している姿が小さく描かれる。



礪川雪ノ旦：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈御厩川岸より両国橋夕陽見〉（前北斎為一筆。26.0×38.6 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO美術館/江戸東京博物館/大英博物館/山口県立萩美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/島根県立美術館蔵)

※御厩河岸（隅田川西岸の浅草に幕府の馬小屋があった）の渡しは、現東京都墨田区本所1丁目辺と台東区蔵前2丁目辺を結ぶ船をいう。夕暮れの浅草の御厩河岸から対岸の本所へ向かう渡し船に、按摩や武士、背中の風呂敷には永寿堂の定紋（山形に巴紋）が染められた物売り、舟端から手を伸ばして手拭を洗っている男、長い鳥さし棒を立てている男などが乗っている。鳥さしは、鳥さし棒の先につけた鳥もちで鳥を捕まえ、生きていれば「離し鳥売り」に売り、死んでいれば食用として御鷹係に売るそうである（平凡社『浮世絵八華5』）。画面中央から左にかけて両国橋が流れるように描かれ、その背景には夕方の藍色の富士山が小さく描かれる。渡し船の脇に停められているもう一艘の船尾から手を伸ばして洗濯している女もいる。船の中央に乗る鳥さしの垂直に立てた棒が画面のアクセントになっている。渡し船は、「富士見の渡し」ともいわれ、町人2文（約50円）、武士は無料であつたらしい。



御厩川岸より両国橋夕陽見：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈隅田川関屋の里〉（前北斎為一筆。25.4×37.9 メトロポリタン美術館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/山梨県立博物館/MAO美術館/江戸東京博物館/北斎館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/島根県立美術館蔵)

※関屋の里は、寺島村辺から千住河原辺（現東京都足立区千住仲町から千住関屋町付近）までの隅田川一帯をいう。隅田川を挟んで北側が足立区、南側が荒川区となる地で辺鄙な地であつた。田の中の曲折する盛り上がった土手のような道を三頭の馬に乗る武士が疾駆

する。早馬のようである。道の途中には一本松があり、遠くには赤く染まる富士。右には高札が描かれる。中央の武士の羽織の衣の赤、富士の赤、松の赤とが強調される。北斎は「早駆け」（シボルト・コレクション：文政 9 年条参照）「武士の乗馬」（フランス国立図書館：文政 9 年条参照）でも乗馬図を描いている。



隅田川関屋の里：2020 年より日本国旅券査証欄図案

☆〈武州千住〉（北斎改为一筆。25.4×37.8 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立美術館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチンコレクション/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※千住は日光・奥州街道の第一番目の宿場だが、作品はそこから少し離れた荒川の水門わきが描かれる。笠を被った馬を牽く男が、遠景の富士を眺めている。あるいは釣りの様子を見ているのか。その側では釣竿をかざしている二人の男が描かれる。千住は美味な千住鮎で有名。



武州千住

☆〈武陽佃島〉（前北斎为一筆。25.0×37.3 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立美術館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/北斎館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/山口県立萩美術館・チコチンコレクション/東京国立博物館/ホノルル美術館蔵）

※佃島は、摂津国佃村の住人が移り住んだ漁師の村で、現在の東京都中央区佃一帯を指す。富士を望む江戸湾の佃の小島の周囲で荷を運ぶ舟、渡し船、乗り合いの釣り舟、魚を獲る小舟などが淡い藍色を基調に描かれる。図の前面には和船が大きく描かれる。海路で江戸に運ばれた荷物は佃島辺りで小舟に積みかえ各河岸へ陸揚げした。人家の密集した佃島を小さく描き、その左に樹木の繁った中の家並みの石川島を描いている。図の上部は一文字の藍の暈し、図の下部の海も藍の暈しとなっている。



武陽佃島

なお、本図は、天保 2 年(1831)の西村屋与八の広告に「・・佃島眺る景など・・」とあることから、ほぼ天保 2 年に描かれたとされる（『名品浮世絵揃物 8 北斎 I』解説）。

☆〈上総ノ海路〉（前北斎为一筆。25.3×37.8 メトロポリタン美術館/太田記念美術館/山口県立萩美術館・チコチンコレクション/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/日本浮世絵

博物館/大田区龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/大分県芸術会館/アレク・メリアル美術館：マリ・エイズ・ワース・コレクション蔵)

※二艘の五大力船が風を帆に受け、浦賀水道から房総方面に向かっている。円みを帯びた水平線のかなたに小さく富士を描く。五大力船は江戸湾内で米や薪炭などを積んで航行した。特に江戸日本橋本船町の河岸から上総国木更津の間の貨客輸送は、特に木更津船と呼ばれた。その名は五大力菩薩から取られ、仏教国を守る憤怒顔をした五人の菩薩のことで、海難を避けるためこのように言われた。日本では邪を除く菩薩として、封書の封じ目に「五大力」と書くと邪が入らないといわれ、また、女性の持ち物に「五大力」と書いて貞操を守る誓いとした。この図の船は弁才船（廻船の一種の大型帆船）という見方もある。



上総ノ海路：2020年より日本国旅券査証欄圖案

☆〈登戸浦〉（前北斎為一筆。26.2×38.4 メトロポリタン美術館日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/日本浮世絵博物館/蔵)

※「登戸浦」の画題から、登戸は、現千葉県中央区登戸市の海辺であったと考えられる。いくつかの『北斎展図録』では横中判洋風画シリーズ（文化初年）「ぎやうとくしほはまよりのぼとのひがたをのぞむ」と「のぼと」と読んでいる。当時は江戸湾の港町であった。画中の二つの鳥居は登渡神社（現千葉県千葉市中央区登戸3-3-8）や稲毛浅間神社ともとされる。潮干狩りをする漁夫や、その女房や子供たちを描く。手前の大きな鳥居の向こうに小さな富士が見える。



登戸浦

☆〈常州牛堀〉（前北斎為一筆。26.0×38.1 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/MAO 美術館/中右コレクション/江戸東京博物館/東京国立博物館/ベルリン東洋美術館/山梨県立博物館/山口県立萩美術館：チコチコレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ホノルル美術館/北斎館/島根県立美術館蔵)

※霞ヶ浦に面した茨城県行方郡牛堀町で、鹿島や銚子に向かう船が行きかかったという。岸辺に苦舟が、岸に後ろ部分を隠して大きく描かれ、船の縁から食事の米を研いだ水を流している男の図。牛堀の水面が富士山の背後にまで描かれているので、実際の富士山ではなく富士塚を描いたものという説がある（有泉豊明『楽しい北斎の富嶽三十六景 富嶽百景動植物 他』（p117）。

常州牛堀：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈神奈川沖浪裏〉（北斎改為一筆。25.7×37.9 メ
トロポリタン美術館・ハウマイヤ・コレクション/日本浮世絵博物
館/山梨県立博物館/MOA 術館/江戸東京博物館/太田記
念美術館/太田区川端龍子記念館/東京国立博物館/北
斎館/大英博物館/ホノルル美術館/アメリカ議会図書
館/ウイスコンシン大学マディソン校/ハーバード大学



/シカゴ美術館/ミネアポリス美術館/ボストン美術館/すみだ北斎美術館/ギメ美術館/島根
県立美術館：新庄コレクション/山口県立萩美術館/MOA 美術館蔵)

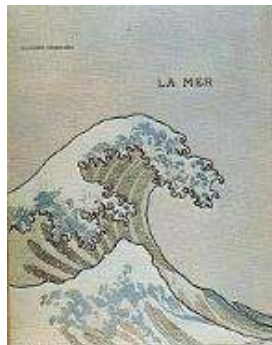
※伊豆や安房から魚や野菜を江戸に運んだ押送り船が江戸から戻るところといわれる。但し、押送り船は、帆と艫の并用の船であり、この図の船には帆が見えないため、むしろ八人による櫓だけで漕ぐ八丁櫓船の変形とも思われる。そのため小さな船が巨大な波に翻弄される様子が印象付けられた。船はそれに耐えて、波の反り上がりに合わせるように描かれ、乗船者はただ自然の荒々しさにこらえているような様子である。デフォルメされた波の構図は、フランスの印象派などの絵画に「ビッグ・ウェーブ」と称され、影響を与えた北斎の代表作として有名な作品。

※ゴッホは弟テオに送った手紙で「神奈川沖浪裏」について次のように語っている。

「君は北斎を見て『この波は爪だ、船がその爪に捕らえられているのを感じる』と手紙に書いていたが、北斎もまた君におなじ叫びをあげさせたわけだ。もちろん、北斎はその線と素描とによってだがね。

もしたただ正確な色彩とか、ただ正確な素描とかで描いただけならば、そうした感動を引き起こさないだろう」（『ゴッホの手紙』中（テオドル宛）P220 裕伊之助訳。岩波文庫）

ゴッホはここで写実を越えた美の感動を示している。影響を受けてゴッホは「星月夜」を描いたと言われる。また、ドビッシーは「交響詩 海」（1905）の初版楽譜の表紙に〈神奈川沖浪裏〉をデフォルメした絵が使われていることは有名である。また、クリストガードレッサーの錫釉を用いたファイアンス陶器「波型鉢」や、カミーユ・クロードルのブロンズ像「波」などにも影響を与えている。



ゴッホ「星月夜」（1889）
ニューヨーク近代美術館）

神奈川沖浪裏：2020年より日本国旅券査証欄図案

ドビッシー「海」楽譜表紙（1905）

※小林一茶の俳句「なの花のとつぱづれ也ふじの山」（文化9年：1812『七番日記』二月条）とよく比較される。神奈川沖の向こうの富士山と、千葉の菜の花畑の向こうの富士山を描く遠近法。北斎と一茶はほぼ同時代であるのでお互いの存在は認識していたかもしれないが、制作年代からして一茶の句が影響したとは考えにくい。

※浮世絵は、初摺200枚といわれるが、〈神奈川沖浪裏〉は増刷8000枚の大ヒットといわれる。

☆〈武州玉川〉（北斎為一筆。24.8×36.7 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/オーストリア応用美術館/すみだ北斎美術館蔵・ピーター・モース・コレクション/ミネアポリス美術研究所/島根県立美術館蔵）

※落款の「北斎為一」は「北斎改为一」の「改」が脱落したものとされる。画面は、手前の岸边、中央の波打つ川、遠景の富士山というように、画面を上中下に三分割された構図が特徴的である。手前の岸边の上方からの画家の視線で描く。岸边に行く馬を牽く農夫はその視線の下に低く描かれる。川は空摺で、船頭が竿を挿す一艘の船。三層の構図の上には、横に裾を広げる富士の図。川の向こう岸から富士山の裾にかけて白いすやり霞が描かれる。府中宿と日野宿の間の多摩川風景といわれる。



武州玉川

☆〈東海道程ヶ谷〉（前北斎為一筆。24.6×37.1 メトロポリタン美術館太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/北斎館/日本浮世絵博物館/ミンエアポリス美術研究所/蔵）

※保土ヶ谷は日本橋から四番目の宿場。本図は品濃坂とも権太坂であるとも。駕籠に乗る女旅人、馬に乗る旅人、逆方向に行く虚無僧など、いかにも東海道の要所らしい図。八本の松並木の向こうに富士が描かれる。馬の背の布に版元の永寿堂（西村屋与八）の「寿」が描かれる。八本の細く、ほぼ垂直に伸びた松の幹の向こうに風を見る構図は、サンティアゴ・ルシニョールの「丘」（1892年、油彩 73.5×100.5 バルセロナ・カタルーニャ国立美術館蔵）や、クロード・モネ「陽を浴びるポプラ並木」（国立西洋美術館：松方コレクション蔵）に影響したといわれる。



東海道保土ヶ谷

☆〈相州七里浜〉（前北斎為一筆。25.3×37.3 メトロポリタン美術館/大英博物館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東

京博物館/山口県立萩美術館/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/北斎館/千葉市美術館/島根県立美術館:新庄コレクション/ホノルル美術館蔵)

※人物が描かれない図。左に入道雲、背景に雪を被った富士、中程に描かれた青々とした木々の配置から、季節の違いを疑問視するむきもあるが、問題にする必要はない。七里ヶ浜は、鎌倉の稲村ヶ崎から腰越の小動岬に至る浜辺だが、江の島に至る砂浜は描かれず、江の島も緑の木に覆われたように描かれる。



相州七里浜

☆〈相州江の島〉(前北斎為一筆。25.4×37.6 メトロポリタン美術館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/山口県立萩美術館/東京国立博物館蔵)

※江の島は弁財天信仰の地としてにぎわったという。現在のように橋はないので舟で行くか、引潮時に歩いて渡った。弁財天に向かう人々が干潮で浮き出た砂州を片瀬海岸から歩いて渡る図。水際は点描により描き、光の反射を表現したものか。



〈相州七里浜〉と違い、江の島の典型的な描き方となっている。図の右に雪を被った富士が描かれる。

相州江の島：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈相州梅澤左〉(前北斎為一筆。25.6×37.8 メトロポリタン美術館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/北斎館/大英博物館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/山口県立萩美術館・チコチンコレクション/日本浮世絵博物館/アレン・メモリアル美術館：メアリー・エイズワース・コレクション蔵)

※「左」は「梅澤庄」または「梅澤在」の誤刻であろうという見方が有力であるが、曖昧に、その辺りを示す「左」でもよいとする見方もある。現在の神奈川県二宮町内にこの名があり、ここを描いたものとされる。手前に4羽の鶴が群れていて、空には2羽の鶴が飛んでいる。手前に矢倉山、その向こうに薄紅色を持つ左右のすやり霞を通して富士が描かれる。全体に藍の色調で統一される。人物の描写はない。



相州梅澤左：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈相州箱根湖水〉(前北斎為一筆。25.3×38.0 メトロポリタン美術館太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館：チコチンコレクション/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館蔵)

※芦の湖を描く。人物は描かれないので、静寂感がある。箱根山や湖には薄紅を含むすやり霞で覆い、背景に白色だけの富士を描く。図の右には箱根神社が描かれる。

相州箱根湖水：2020年より日本国旅券査証欄図案



☆〈甲州三島越〉（前北斎為一筆。25.3×37.6 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO

美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/北斎館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション/山口県立萩美術館・チコチンコレクション/島根県立美術館/オーストリア応用美術館/ミネアポリス美術館/ホノルル美術館/アレクサンダー・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵）

※三島越えは、籠坂峠から御殿場を通り三島へ抜ける道をいう。中央に描かれた杉の巨木の太さを手を広げて測る三人の旅人。その脇を下っていく人たちの図。巨木の左右に富士の両裾にかかる雲や頂上にかかる笠雲が印象的。

籠坂峠には、この様な巨大な杉はなく、実際には、近くの笹子峠の矢立の杉を描いたものという通説があるが、山梨県富士吉田市の富士浅間神社の太郎杉という説もある（有泉豊明『楽しい北斎の富嶽三十六景 富嶽百景 動植物画 他』P134）。

また、七代目三階屋仁右衛門（筆者注：甚右衛門とも）による『駿河国新風土記』（文化13年）の記事「駿甲ノ境ハ元禄十五年壬午年、両国ノ境ヲ定（中略）駿州須走村・甲州山中村ニテハ両村ノ間籠坂峠、往還ヨリ天神峠、天神ノ神木松古木ヨリ富士山頂中墨（筆者注：中心線）ヲ見通シ境トス」を引き、籠坂峠の南の天神峠にある「松古木」の御神木を以て駿河と甲斐の国境としていたので、この天神の神木からみた富士を描いたとする説もある（大高康正編『古地図で楽しむ富士山』p 65 風媒社）校合摺は太田記念美術館蔵。



甲州三島越：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈山下白雨〉（北斎改为一筆。25.7×37.4 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/北斎館/大英博物館/太田記念/太田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/神奈川県立歴史博物館/島根県立美術館：新庄コレクション/山梨県立博物館/江戸東京博物館/山口県立萩美術館・チコチンコレクション/ギメ美術館/オーストリア応用美術館/MOA 美術館/ホノルル美術館/アレクサンダー・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵）

※「凱風快晴」「神奈川沖浪裏」とともに『富嶽三十六景』の三役といわれるもの。俗に「黒富士」と呼ばれる。富士山頂には雪が被り、空は快晴であるが、中腹は暗茶色となり雷の稲妻が鋭く光っている。富士の自然の変化をとらえた図。静岡県富士宮・白糸の滝方面からの富士といわれる（NHK「偉人たちの健康診断」〈天才の脳 北斎〉2018年4月放映より）。



山下白雨：2020年より日本国旅券査証欄図案



山下白雨：変わり図

作者・制作年不詳の「変わり図」では、下部に松林が描かれているものもある。

☆〈凱風快晴〉（北斎改为一筆。25.4×38.0 メトロポリタン美術館/ギメ美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/江戸東京博物館/北斎館/東京国立博物館/大英博物館/太田記念美術館/太田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/ホノルル美術館/東京芸術大学芸術資料館/山口県立萩美術館・チロチコレクション/ケルン東洋美術館/MAO美術館/東京国立博物館/オーストリア応用美術館/MOA美術館/アレク・メリアル美術館：マリエンズワース・コレクション/山種美術館/アダチ伝統木版画技術保存財団蔵）

※いわゆる「赤富士」と呼ばれる作品。河口湖から見た富士といわれる。富士が赤く染まるのは夏から秋にかけてであるという。この図もフランス印象派の画家たちに影響を与えたことで有名。「山下白雨」とともに富士山そのものの存在を前面に出した作品で、当然、人物の描写はない。山肌には版木の木目跡が見える図が初摺に近い。後摺は富士の赤の色合いが濃いものや、山裾の木々が潰れていたりするものも多い。



凱風快晴：2020年より日本国旅券査証欄図案 ギメ美術館蔵（初摺）



ヴィクトリア&アルバート美術館蔵（後摺）

※藍摺の流行で、「青富士」も摺られたが、不人気で早々に摺止めとなったらしい。 茂木本家美術館（藍富士）

〈駿州江尻〉（前北斎为一筆。24.2×36.2 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/山梨県立博物館/MAO美術館/北斎館/江戸東京博物館/大英博物館/太田記念美術館/太田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館/太田記念美術館/ギメ美術館/東京富士美術館/ホノルル美術館/島根県立美術館：新庄コレクション/オーストリア応用美術館蔵）



※江尻は興津から一里ほどの所（現清水市付近）。この図は姥ヶ池（現静岡県清水市清水区迫分）回りだといわれる。曲がりくねる土手の旅人や女に強い風が吹き付け、風に抵抗する姿勢や、御高祖頭巾の女の手を持つ懐紙や、天秤の荷物を担ぐ男の笠が中空に舞い上がる図。目に見えない風の動きを巧みに描いた図。富士は描線だけで描かれる。



駿州江尻：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈東海道江尻田子の浦略図注〉（前北斎為一筆。26.2×39.1 メトロポリタン美術館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/大英博物館/江戸東京博物館/ボストン美術館/近江美術館/アメリカ議会図書館/ミネアポリス美術研究所/シカゴ美術館/ウイスコンシン大学マディソン校/山口県立萩美術館/チコチコレクション/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO美術館/オーストリア応用美術館/島根県立美術館蔵）

注) 略図：古典などを当世風に表現するという程度の意味。

※田子の浦（現静岡県富士市）から見る富士に霞がかかっているところから、大中臣能宣（三十六歌仙の一人）の歌「田子の浦に霞の深く見ゆるかな 藻塩の煙立ちや添ふらん」（拾遺和歌集）からの着想とみられている（『名品揃物浮世絵8北斎I』解説）。あるいは山部赤人の「田子浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ」も念頭にあったか。富士の雪は斑模様まじらに描かれ、裾野には、すやり霞がたなびいている。手前には船首で投網の漁をする男や、左右二人ずつ四人で櫓こしを漕ぐ男たちの乗る船を二艘大きく描く。その二艘の向こうに波小さな舟が二艘浮かんでいる。遠景の海辺には塩田と、そこで働く人々が小さく描かれる。



東海道江尻田子の浦略図

☆〈遠江山中〉（前北斎為一筆。26.0×38.4 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/大英博物館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/ベルリン東洋美術館/ミネアポリス美術研究所/ホノルル美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/北斎館/島根県立美術館：新庄コレクション蔵）

※鋏形蕙斎（1764～1824）の肉筆風俗絵巻「近世職人尺絵詞」のうち〈木挽師〉の場面を参照したとされる。遠江山中の樵が、斜めに渡した巨大な角材を大鋸で切っている。その角材の裏側からももう一人の男が鋸を引いている。木挽台の下では、男が鋸の歯の自立のこぎりてをしている。側で赤子を背負った女や、山の下から立ち上る、何かを焼いている煙を見ている向こうむきの子どもが描かれる。幾何学的構図で、左上から右下に斜めに画面を区切る画面中央の大板が印象的である。

※東京国立博物館蔵の同図は藍摺の基調が朱色となっている。

遠江山中



☆〈東海道吉田〉（前北斎為一筆。26.0×38.3 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/島根県立美術館/ハーバード大学サッカレー美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/バウアー・コレクション/ライデン国立民俗学博物館蔵)

※「不二見茶屋」の箱看板が正面天井に掲げられた茶屋の小上がりの座敷に、富士を見ながらくつろぐ揚げ帽子（角隠し）の二人の女がいる。同じく手拭を頭に巻いた男が、煙管を銜えて座敷に上がろうとしている。もう一人の男は座敷で座って煙管で一服している。正面の座敷で富士を眺める女二人に、茶屋の女が富士の様子を指差して説明している。いや、この二人の女は大柄なので、立ちあがったときに、頭をぶつけないように注意しているのだという、おどけた解釈もある。図の左には、柱の側では、木槌で草鞋を叩いて整えている瘦せた駕籠かきの男と、駕籠を置いて頭の汗を拭いている駕籠かきがいる。店の入口には「御茶漬け」と「根元吉田ほくち」の縦看板がある。「ほくち」とは火を移す「火口」のことで、この辺りの名物という。



東海道吉田

☆〈尾州不二見原〉（北斎改為一筆。26.1×38.6 メトロポリタン美術館/大英博物館/北斎館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/山梨県立美術館/MAO 美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/山口県立萩美術館・チコチコレクション//日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/島根県立美術館：永田コレクション/アレン・メモリアル美術館：メアリー・エイズワース・コレクション蔵)

※一般に「桶屋の富士」と呼ばれる図。桶の中のたがかけ（箍直し）職人の背後に富士山が描かれる。この場所は現在の名古屋市中区富士見町とされている。槍鉋を持つ職人は石垣の台地で作業をしている。図の左に石垣の一部が描かれている。円の中の小さな富士の構図が特徴的。



尾州不二見原

☆〈甲州犬目峠〉（北斎改為一筆。25.6×38.4 メトロポリタン美術館/北斎館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/日本浮世絵博物館/島根県立美術館/山梨県立博物館/MAO 美術館/東京国立博物館/江戸東京博物館/ホノルル美術館蔵)

※犬目峠の急坂を登る二人の男。その後ろには、これから登る麓の馬と旅人。右斜め上にせりあがる峠の稜線の途中から左斜め上に伸びる富士山の稜線によって構成された図。犬目峠は、甲州街道の野田尻と犬目宿の間にあり、桂川に沿った辺りは眺望が開けた所という。



駿州犬目峠：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈信州諏訪湖〉（前北斎為一筆。25.3×37.9 メトロポリタン美術館/江戸東京博物館/北斎館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/山口県立萩美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO美術館/秋田市赤れんが郷土館/弘前市立美術館/ホノルル美術館/島根県立美術館蔵）

※全体に藍色と紅色を基調にした図。諏訪湖は長野県の諏訪市、岡谷市、諏訪郡下諏訪町にまたがる湖。諏訪湖を背景に、画面中央の高台に祠のような茅葺の小屋と、その前に左右に伸びる二本の松の木が印象的に描かれる。諏訪湖には一艘の帆掛け舟が浮かび、遠くに高島城が水面に浮かぶように描かれている。諏訪の浮城と呼ばれたが、江戸期には干拓されて水辺の城ではなかったため、実際の風景ではない。その先に富士が見える。



信州諏訪湖：2020年より日本国旅券査証欄図案

☆〈甲州石班沢〉（前北斎為一筆。25.3×37.4 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/山口県立萩美術館/中右コレクション/ホノルル美術館/北斎館/島根県立美術館/東京国立博物館/ベルギー王立美術館/オーストリア応用美術館/アダチ伝統木版画技術保存財団/江戸東京博物館蔵）



甲州石班沢：初摺すみだ北斎美術館）2020年より日本国旅券査証欄図案。



後摺

※「石班」は、「石班魚」の誤記との説がある。石班沢は、富士川の鰍沢で、現在の山梨県南巨摩郡にあり、釜無川と笛吹川の合流する急流として知られている。場所は、二つの川の合流地点・禹之瀬とする見方がある。まるで海岸の荒波に立ち向かうような緊張感のある図となっている。漁師の後ろには魚籠を見る子どもが座っている。初摺は全体に藍摺

であったが、後摺では色が増やされた。

☆〈甲州三坂水面〉（前北斎為一筆。25.5×37.7 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/山口県立萩美術館・コレクション/すみだ北斎美術館/東京国立博物館/アレン・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵）

※ 鉞形蕙斎の肉筆「名所図会」の〈相州管根賽の河原〉からの発想。山梨県河口湖町の御坂峠より河口湖の逆さ富士を描く。初夏か初秋の景色と思われるが、湖面の逆さ富士は雪を被っている。湖面の舟中に二人の男が小さく描かれ画面全体に静寂さが漂う。全体に緑色系を基調とする図。



甲州三坂水面：2020年より日本国旅券査証欄図案

【追加された10図（裏不二）】

☆〈本所立川〉（前北斎為一筆。26.0×38.0 メトロポリタン美術館すみだ北斎美術館/太田記念美術館/山口県萩美術館・コレクション/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/蔵）

※立川は、現東京都墨田区両国辺を流れる掘割りの堅川で、両岸には材木屋が多くあった。多くの材木が針のように垂直に並べられ、その間から富士が覗かれる。立てられた材木には版元（西村屋与八）を示す「西村置場」の文字の他、「馬喰丁式丁目角」「永寿堂仕入」「新板三拾六木二仕入」（追加出版の広告）などの文字ががさりげなく書き込まれている。左には職人が短く切った材木を積み上げられた材木の上に立った職人に投げ上げる様子がりズミカルに描かれる。全体に縦線が強調された構図。



本所立川

☆〈従千住花街眺望ノ不二〉（前北斎為一筆。24.4×37.0 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館/島根県立美術館/ギメ美術館蔵）

※千住の岡場所（非公認の遊女屋。現東京都足立区千住柳町大門商店街辺にあった）を彼方に描き、後方には富士山。参勤交代の行列で鉄砲隊の武士たちが、遊郭や富士を振り返り見ている。鉄砲を肩に担ぐ鉄砲隊の行列には鉄砲を包む猩々緋の袋が描かれており、これは将軍より特別に許可された盛岡藩のシンボルであるところから、江戸から帰る盛岡藩の大名行列の図といわれる。左の家の屋根の陰から槍組の毛槍先も見える。遠方の田圃ではその様子を畦道に座って見ている農民夫婦を描く。花街は、岡場所のことで、飯盛女が

いる宿が多くあった。ここに描かれた花街を吉原とする見方があるが採れない。 従千住花街眺望ノ不二



☆〈東海道品川御殿山ノ不二〉（前北斎為一筆。24.9×36.7 メトロポリタン美術館/東京富士美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/東京国立博物館/北斎館/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館蔵)

※御殿山は現在の東京都品川区北品川3丁目付近の高台とされる。寛文年間(1661~73)に將軍徳川吉宗により吉野から桜が植えられ、桜の名所として定着した。小高い山の上では毛氈を敷いて花見をしながら酒を酌み交わす男たちや、そぞろ歩きで花見を楽しむ人々が描かれる。画面の中央には細く高く伸びた桜の木の先に花が咲いている。実際には、御殿山から品川沖の向こうに富士山は見ることができない。 東海道品川御殿山ノ不二



☆〈甲州伊沢暁〉（前北斎為一筆。24.6×37.2 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館（複製）/山口県立萩美術館：コレクション/すみだ北斎美術館/ミネアポリス美術研究所蔵)

※伊沢は石和で、笛吹川沿いの宿場（現山梨県笛吹市伊沢町）。朝焼けの早朝に出発する人々の様子を俯瞰した図。遠景の、空と富士山が次第に紅に染まる様子と、近景の、宿場の道を急ぐ大勢の旅人の様子が描かれる。 甲州伊沢暁



☆〈身延川裏ノ不二〉（前北斎為一筆。25.3×37.0 メトロポリタン美術館日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/蔵)

※身延川は、山梨県身延町の山中を流れる小さな谷川。身延川の脇を行く久遠寺への参詣と思われる人馬。背景の岬々たる山容の下には霧が立ちこめ、道の先には巨樹が聳えている。身延山の岩場の中から富士山が見える。 身延川裏ノ不二



☆〈相州仲原〉（前北斎為一筆。25.1×37.0 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/島根県立美術館/大英博物館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/東京国立博物館/北斎館/千葉市美術館蔵）

※現在の神奈川県平塚市中原とみられている。中原街道は大山参りへの道としてにぎわったといわれるが、作品では田圃の広がる鄙びた風景となっている。小川に架かる小さな橋を渡る赤子を背負って頭に桶を乗せて荷物を運ぶ農婦、天秤棒の荷物を運ぶ行商の男。笈箱を背負って大山参りに行く六十六部注の男たち、版元の「永楽屋」の山形に三つ巴の印を染め抜いた風呂敷に包んだ荷物の上に傘を括りつけて担いでいる男、わき目も振らず小川の中で魚を入れ、貝などを獲る男を描く。背景に雪を被った藍の肌を見せる富士。

注) 六十六分：諸国巡礼で、書写した法華経を全国 66 か所の霊場に一部ずつ収める人をいう。略して六分ともいう。



相州仲原

☆〈駿州大野新田〉（前北斎為一筆。25.8×38.2 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MAO 美術館/江戸東京博物館/東京国立博物館/大英博物館/すみだ北斎美術館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/北斎館/千葉市美術館/アレ・メモリアル美術館：マリ・エインスワース・コレクション蔵）

※大野新田は、東海道原の宿と吉原宿の間の地。点在する富士沼のある浮島ヶ原と呼ばれる湿地帯風景か。手前に刈藁を終え、四頭の牛の背に三束ずつ乗せて家路につく農夫と、背に藁を背負った二人の農婦。中央には水辺を飛ぶ鷺が5羽。正面背景に雪を抱いた富士の図。



駿州大野新田

☆〈駿州片倉茶園ノ不二〉（前北斎為一筆。25.7×38.4 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/すみだ北斎美術館/島根県立美術館/オーストリア応用美術館蔵）

※駿州（静岡県）の片倉とされる茶畑の茶摘みの風景。茶畑で茶葉を摘み取る多くの女性たち。茶葉を籠に入れて天秤棒で運ぶ男たち。茶葉を入れた籠を背にした馬を牽く男などを、全体を茶色を基調に描いた図。背景に雪を被っている富士。実際には、この茶園がどこかは不明。ここから見た富士までの構図は、ポール・セザンヌの風景画「サント・ヴィクトワール山」（フリッポ・コレクション蔵）に影響したと言われる。



駿州片倉茶園ノ不二

☆〈東海道金谷ノ不二〉（前北斎為一筆。26.3×38.8 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/中右コレクション/アレク・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵）

※金谷は、島田市の大井川の西岸の地。東海道の日本橋から 24 番目の宿場で島田宿から大井川を越えて行く。その川越えの様子を描いた図。川越人足たちが旅人を肩車で渡したり、輦台渡しで渡したり、大勢の人物が五層に描かれた水流の中で描かれる。川を渡る箱に「壽」の文字が書かれ、対岸の家の幟に「永」の文字が書かれ、版元の永寿堂を表している。対岸には何かを組んで堤防のようにしたものが描かれ、その向こうに島田宿が見える。



東海道金谷ノ不二

☆〈諸人登山〉（前北斎為一筆。25.3×37.0 メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館/山梨県立博物館/MOA 美術館/江戸東京博物館/大英博物館/太田記念美術館/大田区川端龍子記念館/ホノルル美術館/東京国立博物館/北斎館（複製）/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/中右コレクション/山口県立萩美術館・チコチコレクション蔵）

※「しよじんとざん」「しよにんとざん」とする図版もあるが、いかにも不自然な読み方であり、やはり「もろびと」と読むべきであろう。シリーズ最後に描かれたものと考えられている。富士の山容を描かず、山中の登山を描いた唯一の図。富士山の山開きは 6 月 1 日。富士講の男たちが金剛杖を手に山中を登り、途中の岩室の中では大勢の男たちが蹲って休んでいる。図の左下に梯子があり、それを上って来る男がいるので、駒が岳辺りの風景とする見方もある。ここから山頂の剣が峰を目指す人々が描かれる。山中の図であるので、富士の姿は描かれない。



諸人登山

※この図に描かれた男たちは 36 人であるので、『富嶽三十六景』の題名にかけたのではないかという説もあるという。

【落款の謎】

※大久保純一（「葛飾北斎 富嶽三十六景 神奈川沖浪裏 一線を引きたくなる絵」）、その他の研究者により、落款の書体により制作年代が類推されている。

※以下は、久保田一洋編「富嶽三十六景の推定刊行順および極印・版元印の有無調査表」（島田賢太郎「生涯学習浮世絵講座『葛飾北斎』第三回：代表作(1) 富嶽三十六景をめぐる諸問題」所収。平成 23 年 2 月 24 日）を参照している。

台東区生涯学習北斎研究会 Face Book より

※【A】グループから順に【E】グループまで制作されたと思われるが、各グループ内の制作順は不明。

【A】「北斎改為一筆」（「筆」がノーマルな書き方。「為一」の「為」が「爲」となっている。文政 13 年/天保元年頃に制作。

〈武州玉川〉のみ「北斎為一筆」の落款）。

北斎は 60 歳の時に戴斗号を弟子の北泉に譲り「北斎改為一」と号したことから、グループ【B】～【E】に用いられた「前北斎為一」号より早いと思われ、【B】よりも以前に制作されたと推定できる。版元の西村屋は文政 12 年（1829）3 月 21 日に類焼し 7 月 19 日に店舗が再建されているので（『馬琴日記』による）、それ以後の制作となり、【B】が制作・発売される前の文政 13 年（天保元年）と推定される。

〈凱風快晴〉〈山下白雨〉〈神奈川冲浪裏〉〈東都駿台〉〈青山円座松〉〈深川万年橋下〉〈武州千住〉〈甲州犬目峠〉〈尾州不二見原〉の 9 図に〈武州玉川〉を加えての 10 図。

【B】「前北斎改為一筆」（「筆」が「毛」のように終筆が右に跳ねている。これは天保 2 年の「百物語」の落款の字体に同じなので天保 2 年の制作と推定される）。「為一」の「為」が「爲」。〈武陽佃島〉〈相州七里浜〉〈信州諏訪湖〉〈常州牛堀〉〈甲州三島越〉〈東都浅草本願寺〉〈駿州江尻〉〈遠江山中〉〈甲州石斑沢〉〈相州梅沢左〉の 10 図。

【C】「前北斎為一筆」（「為」が草書体で、形がやや複雑。天保 3 年～4 年の制作）
〈礪川雪の旦〉〈下目黒〉〈東海道吉田〉〈上総ノ海路〉〈登戸浦〉の 5 図。

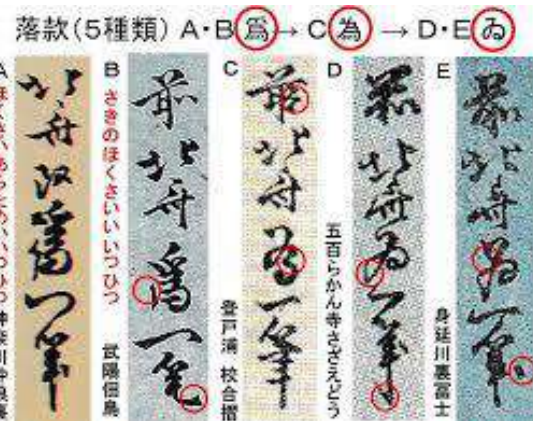
【D】「前北斎為一筆」（「為」がすっかり草書体で「ゐ」の字。天保 4 年の制作）
落款の書体が【C】に比べ落款が乱れているところから【C】より後と考えられる。

〈五百らかん寺さざりどう〉〈隠田の水車〉〈御厩川岸より両国橋夕陽見〉〈相州江の島〉〈江都駿河町三井見世略図〉〈東海道江尻田子ノ浦略図〉〈隅田川関屋の里〉〈東海道程ヶ谷〉〈江戸日本橋〉〈甲州三坂水面〉〈相州箱根湖水〉の 11 図。

【E】「前北斎為一筆」（「為」がすっかり草書体で「ゐ」の字。天保 4 年秋～末の制作）。このグループが最後の制作であることは明らか。天保 4 年中に翌年出版予定の『富嶽百景』の広告が出ているので、これまでには初めの三十六景は制作されていたと考えられる。天保 5 年に刊行予定の『百景』の前に「裏富士」十景を急ぎ制作し、天保 5 年の正月に刊行されたのではと推測されている。

〈身延川裏不二〉〈従千住花街眺望ノ不二〉〈駿州片倉茶園ノ不二〉〈東海道品川御殿山ノ不二〉〈東海道金谷ノ不二〉〈本所立川〉〈駿州大野新田〉〈相州仲原〉〈甲州伊沢暁〉〈諸人登山〉の 10 図。

【「極」印・「改」印の謎】



※46 図中、数種の版による「極」印と版元印の有無について 文政 13 年/天保元年（1830）頃に製作されたと考えられる 10 図には、両印とも無く、「下目黒」「東海道品川御殿山ノ木二」の 2 図のみには必ず両印が押されている。24 図は全く両印とも無く、20 図は両印の有無が混在しているという考察がある（島田賢太郎「台東区北斎研究会ニュース」（2016 年 11 月 5 日））。

【永寿堂の広告 富士の形、異なる事を示す】

※文政 12 年『稗史水滸伝』（山東京伝訳。西村屋与八版）及び天保 2 年（文政 14 年）『正本製』（柳亭種彦作。歌川国貞画、永寿堂：西村屋与八版）下巻にある広告。

「富嶽三十六景 前北斎為一翁画 藍摺注一枚一枚ニ一景ツゞ追々出版 此絵は富士のかたち、その所によりて、異なる事を示す、或は七里ヶ浜にて見るかたち、又は佃島より眺る景など総て追々彫刻すれば猶百にもあまるべし 三十六に限るにあらず」（天保 2 年に広告があることから、あるいは前年に刊行が始まったか）。

注）藍摺：いわゆるベロ藍によるもの。

※藍摺の B グループから発売されたか。但し、文政末頃には〈凱風快晴〉〈山下白雨〉〈神奈川沖浪裏〉などを含む 10 図が刊行されたとする浅野秀剛の説（『日本史リブレット 51 錦絵を読む』山川出版）を大久保純一は『北斎』（岩波新書）で紹介している（p 121）。

【富士講講元・永寿堂の策略】

※富士信仰の形として、江戸では毎月 5 月晦日から 6 月 1 日にかけて、先達に引率されて白衣に身を包み、金剛杖を持って富士山の山開きに参加するという。また、江戸各地の富士神社で富士禪定（修行）の神事が行われたという（平凡社『浮世絵八華 5 北斎』）。

当時富士講は 92 講あり、支講を含めると 300 講あり、1 講 10 人として 3000 人の信者がいたと思われる。永寿堂は富士講の講元で、富士講信者を目標に富士シリーズを企画したと思われる。「富嶽三十六景」に限らず、そのような永寿堂を、馬琴は『近世物之本江戸作者部類』（岩波文庫版 p 194）で「売買にさかしきものなるが（略）」と評している。

【富士の頂角、広重は 85 度、北斎は 30 度くらい】

※太宰治「富嶽百景」の冒頭には「富士の頂角、広重の富士は八十五度、文晁の富士も八十四度くらゐ、けれども、陸軍の実測図によつて東西及南北に断面図を作つてみると、東西縦断は頂角、百二十度となり、南北は百十七度である。広重、文晁に限らず、たいていの絵の富士は、鋭角である。いただきが、細く、高く、華奢である。北斎にいたつては、その頂角、ほとんど三十度くらゐ、エッフェル鉄塔のやうな富士をさへ描いてゐる。」とある。但し、『富嶽三十六景』ではエッフェル塔のような富士は描かれていない。

【ベロ藍の発見】

※1704 年～1710 年にかけて、ドイツ・ベルリンで塗料製造に従事していたディース・バッハと錬金術師ディッペルがフロレンスレーキという赤い顔料を作ろうとしたときに、偶然フェロシアンという青が発見されたという。このプルシアン・ブルー（ベロ藍）は文化 4

年（1807）に長崎に持ち込まれた記録があり、文化7年（1810）、蘭学者大槻玄沢が、ドイツ学者による製造書を訳した『蘭畹摘芳』で、ベルリンのブルーから「ベルレンブラウ」と記述している。（2007年12月13日『日経ビジネス・オンライン』所収、内田千鶴子「シーボルト事件に脅えた北斎」による）。

【ベロ藍とは】



硫酸第一鉄の水溶液とヘキサシアノ鉄(Ⅲ)酸カリウムの水溶液（撮影：アダチ版画研究所）

※硫酸第一鉄の水溶液とヘキサシアノ鉄(Ⅲ)酸カリウムの水溶液を混ぜるとベロ藍になる。（2019年6月「静岡科学館る・く・る」での実験。アダチ版画研究所 Web「北斎今昔」より）

※『富嶽三十六景』の主版は本藍（校合摺）で、多色はベロ藍（非破壊分析。松井英男・下山進・下山裕子「錦絵青色着色料の非破壊同定法に基づくベルリン・ブルー導入過程と「富嶽三十六景」を嚆矢とする浮世絵風景版画確立経緯の研究」（北斎研究37号 2005年）を日野原健司『北斎 富嶽三十六景』（岩波文庫 p216）で紹介。

【ベロ藍の絵で流行おびだしく】

※『真佐喜のかつら』（未完随筆。青葱堂冬圃著。嘉永～安政頃成立）による「ベロリン」の記述（林美一『お栄と英泉』 p97より）。

「唐藍は蘭名をへロリンといふ、この絵の具摺物に用ひはじめしは、文政十二年よりなり。（中略）藍紙の色などは光沢の能き事格別なる故、狂歌、俳諧の摺物は悉く是を用みぬ、されど未だ錦絵には用ひざりしが、翌年堀江町貳丁目団扇問屋伊勢屋葱兵衛にて、画師溪斎英泉画きたる唐土山水、（団扇の）うらは隅田川の図をへロリン一色をもつて濃き薄きに摺立、うり出しけるに、その流行おびだしく、外の団扇屋それを見、同じく藍摺を多く売出しける、地本問屋にては、馬喰町永寿堂西村与八方にて、前北斎のゑがきたる富士三十六景をへロリン摺になし出板す、これまた大流行、団扇に倍す、そのころほかのにしき絵にも、皆へロリンを用ゐる事になりぬ（略）」

●「ベロ藍団扇絵シリーズ」（？）

☆団扇絵「水辺の二羽の鴨」（北斎改为一筆。印葛しか。団扇絵判錦絵。（入山型の下に太）。22.1×28.9 ベルリン東洋美術館蔵。ベロ藍を基調とした絵）

☆団扇絵「鯉図」（「鯉魚図」とも。団扇絵判錦絵。北斎改为一筆。印葛しか。版元不明。23.2×28.7 ギメ美術館蔵）

※背後をベロ藍のグラデーションで描く。水草の前で、二匹の鯉が重なるように泳いでいる。文化 10 年 (1813) 4 月 25 日に門人に与えた肉筆画「鯉図」と似ている図。入山型の下に太の字の定紋があるが版元名は不明。



鯉図 (ギメ美術館)

☆団扇絵「鯉と石鯛」 (この頃か。団扇絵判錦絵。北斎改为一筆。印葛しか。入山型の下に太の字のある定紋があるが、版元名は不明。旧シドラー・コレクション蔵)

※笹の上に鯉が置かれ、その上に縞模様の石鯛が置かれた図。

☆団扇絵「二羽の鴨」 (この頃か。団扇絵判錦絵。北斎改为一筆。印葛しか。入山型の下に太の字のある定紋があるが、版元名は不明。ベルリン東洋美術館蔵)

●団扇絵「露草に鶏と雛」 (この頃か。団扇絵判着色。前北斎为一筆。版元不明。22.9 × 29.2 メトロポリタン美術館蔵)

※赤い鶏冠の雌雄の鶏。雌鶏の背中に雛が乗っている。三羽の鶏が楕円形のように寄り添っている構図。背後に紫の花を咲かせた露草が描かれる。入り屋根の下に太の字の商標があるが、版元明は不明。同じ商標のあるベロ藍団扇シリーズの一図か。天保 3 年頃説あり (『2017 北斎一富士を超えて展図録』 p 157)。



露草に鶏と雛 (メトロポリタン美術館)

鶏の羽先だけが朱色(のちの所蔵者の手彩色と思われる)の校合摺がある(24.4 × 30.0 ヴィクトリア&アルバート美術館蔵)。

【あれこれ印の使い分け】

●錦絵「森治版中判藍摺シリーズ」(中判錦絵揃物。前北斎筆。印各図ごとに数種の印を用いている。各平均約 22.0 × 16.1 森屋治兵衛版)

※10 図が確認されている。

☆〈さより・石鯛・海老〉(印二人人形。ジェノバ東洋美術館/ベルリン東洋美術館蔵)

※嘴を突き出すように置かれたさよりの上に縞模様の石鯛が横たわり、その腹の上に海老が長い髭を一本伸ばして置かれている。

さより・石鯛・海老 (ベルリン東洋美術館) 右: 印影拡大図

☆〈かれい・かさご・赤貝〉(印二人人形。ジェノバ東洋美術館/ベルリン東洋美術館蔵)

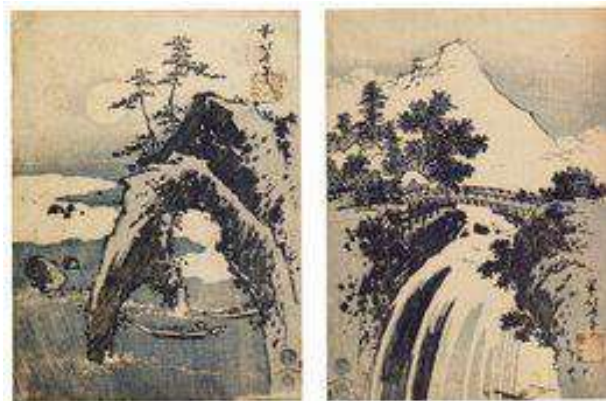


※かれいが大きな白い腹を見せている上に、かさごが置かれ、その脇に赤貝が二枚ある。鱧は、『肉筆画帖』（天保6年頃）の〈鱧と撫子〉でも同様の形で描いている。

かれい・かさご・赤貝（ジェノバ東洋美術館）



☆〈滝山水〉（印為一（？）。ジェノバ東洋美術館/ベルリン東洋美術館蔵）



※勢いよく流れ落ちる滝の上に架かる橋の先に、森の中の民家が数軒あり、その背後には峨々たる山が白く描かれる。

左：月下山水（ベルリン東洋美術館） 右：滝山水（ベルリン東洋美術館）

☆〈月下山水〉（「月下の風景」とも。印ふしのやま（？）。ジェノバ東洋美術館/ベルリン東洋美術館/太田記念美術館蔵）

※松が二本生えている断崖の空洞の海面に、人を乗せて小舟が二艘行き来している。水平線の上には満月が白く輝いている。

☆〈老人芋洗〉（「農夫芋洗い」とも。印七十二翁。印瓢箪の形。23.5×16.7 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館/ボストン美術館/ジェノヴァ東洋美術館/ベルリン東洋美術館/東京国立博物館蔵）

※桶の縁に両脚を掛け、中の芋を二本の棒をかき回して洗う老人の後ろ姿。老人の正面には大きな月が出ている。

老人芋洗（すみだ北斎美術館） 右：印影拡大図



☆〈雪中の筍掘り〉（「孟宗」とも。印ふしのやま。印葛しか。島根県立美術館：永田コレクション/ジェノバ東洋美術館/ベルリン東洋美術館蔵）



※雪中の筍掘りで巨大な筍の前で鍬を投げ出して驚く農夫の後ろ姿。弘化元年にも「雪中筍狩り図」を描いている。中国の呉の国の人孟宗を描いたものといわれる。病床の母が筍を欲しがったので、冬に竹林に行くと雪の中から筍が出現したという話を踏まえている。

雪中の筍掘り（島根県立美術館）

☆〈小禽に虻〉（印為式。23.2×17.5 太田記念美術館：長瀬コレクション/ジェノバ東洋美術館/東京国立博物館/島根県立美術館：永田コレクション/アレン・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵）



※画面上から左に掛けて茎が伸び、そこにいくつかの花が咲いている。その側に飛んでいる虻を捕まえようと口を開けて飛んで近づく雀。

虻（島根県立美術館）右：印影拡大図

☆〈雀に朝顔〉（「小禽に朝顔」とも。印一のゐん。22.3×16.4。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ジェノバ東洋美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※三羽の雀が朝顔の上で飛んでいる。そのうちの二羽は噛み合っている。印については、「為一の印」と読むか。安田剛蔵は「西西西ん」と読んで、「24（にじゅうよん）が3倍で、72歳を表現している」とする説を、台東区北斎研究会ニュース（2014年11月15日）が紹介している。

雀に朝顔（島根県立美術館） 右：印号拡大図



☆〈波に千鳥〉（印為式。22.9×16.0 太田記念美術館/ジェノバ東洋美術館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※擦るように斜めに引いた藍色の波の上を四羽の千鳥が群れ飛ぶ。波頭から千鳥の画趣は北斎の好む図柄。

波に千鳥（島根県立美術館）



●錦絵『森屋治兵衛版短冊判シリーズ』（この頃か。森屋治兵衛版。20図確認されているという。ベルリン東洋美術館蔵）

※「前北斎為一筆」と「前北斎画」の落款を使っている。

☆〈軽業〉（「曲芸」とも。前北斎為一筆）

※笛を吹きながら額に乗せた棒の先の丸物を落とさずにいる曲芸師。足元では袋を広げている男。手前に太鼓で囃す男。

☆〈仕丁〉（前北斎為一筆）

※寺の境内に落ちた紅葉を掃く仕丁。

☆〈武志士〉（前北斎為一筆）

※武志士は北宋代の仙人で、青布を橋として川を渡ったと伝えられる。図は、長い白布が縦長に伸び、その上に折烏帽子を被り、着衣を靡かせ下駄を履いて立つ武志士。

武志士（プーシキン美術館）

☆〈正月の謡〉（前北斎為一筆。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

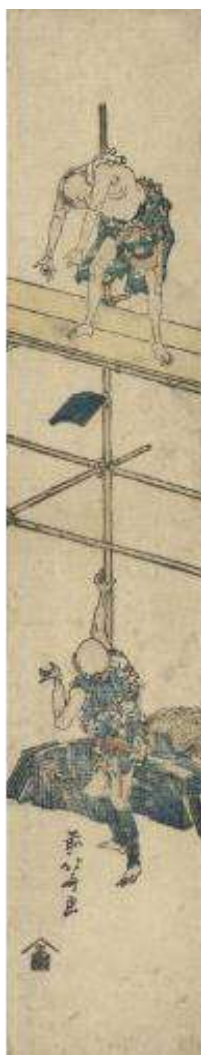
※「前北斎為一筆」と書かれた松の絵を描いた屏風を背にして、袴姿の男が謡を唄う。天井には鏡餅を乗せ、注連飾りのある棚が吊るされている。

☆〈放下師〉（前北斎為一筆）

※放下師は、田楽から転化した大道芸を演じる者。図は放下師の一人は笛を吹きながら額に立てた棒の先の玉を操る。その下でしゃがんで玉を受け取る袋を広げている男。その後で太鼓を叩いて調子をとる男。

☆〈桶屋〉（前北斎為一筆）

※縦長の桶に乗り、箍を締める男と、桶の下で箍を塗る男。



☆〈深山の鹿〉（「みやまのしか」とも。前北斎為一筆）

※藍色を基調に、山中で月を眺める鹿を描く。

☆〈瓦屋〉（前北斎画）

※足場にいる職人に下から瓦を放りあげる男。

瓦屋（プーシキン美術館）

☆〈鯛釣り〉（前北斎為一筆）

鯛釣り（ベルリン東洋美術館）

☆〈綱渡り〉（前北斎為一筆）

※綱渡りをする女曲芸師と、下からそれを見守る男。

☆年始（前北斎為一筆）未見

☆日本橋（前北斎為一筆）未見

☆本所（前北斎為一筆）未見

☆〈雀躍り〉（前北斎為一筆。島根県立美術館：永田コレクション/ベルリン東洋美術館蔵）



※図の下から上にかけて、男が雀のように踊る所作を 10 図連続して、次第に遠くに行くように描く。

☆**桜下の馬**（前北斎為一筆 プーシキン美術館蔵）

桜花の馬（縮小：プーシキン美術館）

☆**〈巡礼〉**（前北斎画）



※四つん這いの男の背に立ち、柱に字を描く男。

巡礼（縮小：プーシキン美術館）

☆**〈禁酒の猩々〉**（前北斎為一筆。

島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※猩々は中国の伝説上の生き物で、朱色の長髪で、人の言葉を理解し、酒を好んだという。図は「当分の内禁酒」と書かれた大酒甕と「船橋屋 御菓子」と書かれた箱看板の前で、菓子箱の蓋を開け、胡坐をかいて中の饅頭を口にしている猩々。前に茶の急須と茶碗、菓子を包んであった経木が置いてある。

禁酒の猩々



天保3(1832) 壬辰 73歳 前北斎為一、前北斎、北斎為一：孫(23) 阿栄(35)

◇天保の飢饉。

◇歌川広重、定火消同心職を正式に養祖父の子仲次郎（17歳）に譲る。また、幕府の八朔の御馬献上の列に加わり、東海道を京まで上る。但し、上京同行については諸説あり、疑問視もされている（参考。「司馬江漢『東海道五十三次画帖』一広重「五十三次」には元絵があった」 監修：對中如雲 ワイズ出版 1996年）。

◇1月23日、マネ生（～1883）。

◇3月22日、ゲーテ没（84）。

◇8月19日、鼠小僧次郎吉、小塚原刑場で磔刑。

◇9月23日、頼山陽没（53）。

◇11月、風邪流行、江戸窮民30万6000人に施米。

◇11月、16回目の琉球使節江戸上り（尚育王・琉球国王即位の謝恩使）

○寺門清軒『江戸繁盛記』。

○曲亭馬琴『開港驚奇侠客伝』（天保6年迄。未完）。

○1月、為永春水『春色梅児誉美』初・後編刊。

○シーボルト『NIPPON』出版。「同書の『北斎漫画』は実物ではなく、すべてシーボルトによる転写です」（橋本健一郎「北斎漫画考—その成立と影響」『北斎研究所研究紀要第五集』：千野塚子『江戸のジャーナリスト葛飾北斎』で紹介（p117～118）。

【長女阿美与の元夫 柳川重信没す】

★閏11月28日、柳川重信（北斎の長女阿美与の元夫）没（46）。

※『増補武江年表』（斎藤月岑著・嘉永元年脱稿・同三年刊）の死亡記事に続いて、以下のように記される。

「筠庭注云ふ、柳川重信は志賀理斎の子なり。師なくして画をよくせり。北斎の風なりしが、本所一ツ目弁天の前なる髪結床の障子に、午の時参りする女を野ぶせりの乞食等が犯さんとす。図を書きて、いと能く出来たり。北溪これを見て、画は社中の風なるが、かばかり書かんものを覚えずとて、其所に問ひしとぞ。夫より相知りて、北溪これを引きて北斎が弟子とす。其の後北斎これを養子とせしが、如何したりけん、義絶におよべり、夫より重信頻りに板下を書きしを、北斎これを板下に禁じて、互いに意趣を含みけるを、柳亭種彦双方をなだめて事andraげり」（p85）

注）筠庭：喜多村信節（天明3年～安政3年〈1783～1856〉国学者）。筠庭は号。

※『馬琴日記』閏11月29日条には「昼飯（筆者注：「後」か）丁子や（筆者注：丁子屋平兵衛）より老僕を以、根岸柳川重信作、昨夜中死去のよし、告来ル。明廿九日昼九半時、出棺のよし也」とある（『馬琴日記』第3巻による。ルビ・注は筆者による）。昼九時半は、13時頃。

【鶏の足跡が竜田川の紅葉に】

★十一代将軍徳川家斉（在位 1787～1837）、鷹狩りの途中、浅草伝法院で座興に北斎と谷文晁（1763～1840）に絵を描くよう命じる。北斎は鶏の足に赤墨をつけ紙の上を歩かせ「竜田川の紅葉」とした逸話がある。

※『無可有郷』（「むこうきょう」とも。3巻。詩瀑山人〈鈴木桃野〉著。天保期成立）の下巻〈画の工夫〉の項の記事より（同記事は『年譜』に資料22として紹介されている）。

「先比葛飾北斎翁御上覧の画をかきしとき、鶏尾に藍水（筆者注：藍色の水）を濡し、足に臙脂（筆者注：えんじ色）を濡し、紙上を走らせしかば、自然と龍田川を成せりといふ。何れも画の工みなるのみならず、工夫もまた常人の及ぶところにあらず。」（同記事は天保3年（1832）～9年（1838）の記事なので「先比」は天保3年以前の事を示している。但し、明確な年代は特定できない）。

※飯島虚心『葛飾北斎伝』（p76～78）の記事。

「時に徳川將軍家芥公 徳川十一世文恭院殿 北斎の妙技を聞き、放鷹の途次、写山楼文晁注 および葛飾北斎を浅草伝法院に召して、席上画を画かしむ。文晁先づ画く。(略)次に北斎、將軍の前に出で、従容として、おそるゝ色なく、筆を揮ってまづ花鳥山水を画く。左右感嘆せざるものなし。後に長くつぎたる唐紙を横にし、刷毛をもて長く藍を引き、さて携へたる鶏を籠中より出だし、さらに捕へて、趾に朱肉をつけ、これを紙上に放ち、趾痕を印残せしめ、是はこれ立田川の風景なりとて、拝一拝して退きたり。人皆其の奇巧に驚く。此の時写山楼傍にありて手に汗を握りしと。写山楼の話。」(ルビは筆者による)

注) 写山楼文晁：谷文晁(宝暦13年～天保11年：1763～1841)。文人画家。和漢洋の画法を学ぶ。門下に渡辺崋山等がいる。

【竜田川の紅葉絵は失敗だったか】

瀬木慎一『画狂人北斎』(p82)では、明治39年(1906)6月刊の雑誌『高潮』に掲載された四葩山人による「丁子屋と北斎」という標題で、大島屋伝右衛門の文溪堂に関する談話の一節を紹介している文を孫引きしている。

「『又飯島虚心といふ方の著された葛飾北斎伝には・・・』とあるけれど、『事実を申しますと、之は失敗したので、更に紙面の処処へ墨をこぼし、其墨を爪の先で雲龍の図として漸く面目を全くして引退がつたといふ事に聞いて居ります。立田川は一寸思付ではありませんが、実際は散々であつたさうで御座いました。』」

※以上のエピソードの信憑性については、鶏の足の爪が紙を損ねることからも、疑問視する説もあるが北斎らしき逸話である。

★シーボルト『日本』(20分冊)で、北斎のみを偉大な絵師として紹介。同誌に『北斎写真画譜』(文化11年)『北斎漫画』(初編：文化11年)が掲載される。

★『柳多留』116編に9句、119編に9句、120編に4句載る。

【柳多留 116 編】

☆海苔亀朶の浪旧苔の髭をなで 卍 (海苔の養殖用の亀朶の杭に古い海苔が付いて髭のようだ。宿六心配『謎解き北斎川柳』では天保2年)

☆羽虱で土器になる迦陵頻 卍 (雅楽の羽をつけた迦陵頻も羽虱に食われたらつるつるの土器になる)

☆初夢がモシさめますと獺の妻 卍 (目覚めると夢を食べられない獺。その妻は早く食べないと夢も冷めて目も覚めますと言う)

☆海苔亀朶の浪旧苔の髭をなで 卍 (他者評により前出)

☆つま恋の娘を母の虫封じ 卍 (妻恋の鳴く鹿ならぬ、色気づいた娘に母親が虫封じの薬を飲ませる)

☆姫とよふ粥に付そふ小殿原 卍 (お姫様の白い粥に、黒いごまめの小殿原が添えられた。姫に黒魚は?)

☆はつ夢が醒るハねモシと獺の妻 卍 (他者評により前出。但し、表記に異同あり)

☆羽虱で土器になる迦陵頻 卍 (他者評により前出)

☆門万歳銭にならんのけふの雪 卍 (門付けの万歳も今日の雪では仕事にならず、銭にもならない)

【柳多留 119 編】

☆宇治よりも育ちと葉向茶を誉ル 卍 (氏より育ち。宇治の茶より風に倒れた下等の茶でも旨いものだ)

- ☆山出しの千代か生れも小松川 卍 (加賀の千代女ではないが、田舎出の千代だって小松川の生まれだ)
- ☆雪隠へ六十六屎馬喰町 卍 (六十六部が泊まる馬喰町の宿には、全国六十六カ所の屎が溜まっている)
- ☆赤免馬の尻に雲長が苦笑 卍 (一日千里の関羽の愛馬・赤免馬の尻に雲長(関羽の字)も苦笑い)
- ☆雪隠へ六十六屎馬喰町 卍 (他者評により前出)
- ☆振る汐花も一筋に局見世 卍 (不浄払いの汐花も最下級の局見世の入り口ではほんの一筋にまく汐で済む)
- ☆指人形も居敷から手を入れる 卍 (指人形は尻から指を入れるが、男の指も女の着物の下から入る。宿六心配『謎解き北斎川柳』では「入れる」)
- ☆柳原戸棚ハ箱を横にする 卍 (神田川東岸の柳原には床に商品を並べ棚は箱を横にした貧しい店が多い)
- ☆榎ハ柳絞りにあふらじみ 卍 (折角の柳絞り模様の榎が油じみになってしまった)

【柳多留 120 扁】

- ☆世からく寄ますかく盆の懸 卍 (あの世からあの世から、呼びましようか、呼びましようかと盆の掛提灯)
- ☆竹笠で雪に野糞のイキみ形 卍 (竹笠を被った男が雪のなかで息んで野糞を垂れる姿は雪見灯籠のよう)
- ☆世柄く寄りますかく盆の懸 卍 (他者評により前出。但し、表記に異同あり)
- ☆躰にハ国なまりなし馬喰町 卍 (全国からの六十六部が泊まる馬喰町の宿。流石に躰にはお国訛りはない)

●合巻表紙絵『花雪吹縁柵』前帙 (春。中本四冊。柳亭種彦校合。相州磯辺(仙客亭柏琳))

作。表紙図は、図の丸枠に国芳の美人大首絵が描かれ、北斎は、鮎が五匹泳いでいる姿に赤い石竹(筆者注：ナデシコ科の多年草)を描く。「柳亭応需白口魚(筆者注：イシモチ。グチ。但し、鮎としている)写前北斎為一」とある。挿絵は国芳が描く。

「天保壬辰春(天保3年)の書き込みがある。前北斎為一。鶴屋喜右衛門版。島根県立美術館：永田コレクション/国立国会図書館蔵

※相州磯部(現神奈川県大磯)在住の仙客亭柏琳が、自作の草稿を柳亭種彦に送り出版を請い、種彦が手を入れて、表紙絵を北斎に頼んで刊行したものの。



前帙表紙：裏

表紙：表(立命館大学 ARC)

●合巻表紙絵『花雪吹縁柵』後帙 (柳亭種彦校合。表紙には「相州磯部(仙客亭柏琳)作。歌川国芳画。四冊 天保壬申春」とある。鶴屋喜右衛門版。島根県立美術館：永田コレクション/国立国会図書館蔵)

※北斎は箆に鮎が三匹入れられ、紫の桔梗の花と雀が柄に絡み付いている絵を描く。左下の四角枠に国芳の美人大首絵の上にも雀が描かれる。「柳亭応需白口魚(筆者注：イシモチ。グチ。但し、鮎としている)写前北斎為一」とある。上記の合巻と、翌天保4年(1833)の合巻表紙『出世奴小万之伝』を含め、北斎が合巻の表紙に作画したのはこの三冊のみだという。「壬辰春」とある。(『年譜』による)。

前帙下の見返しに柳亭種彦の文で「為一翁にへうしへ鮎の画をかいてもらいましたるは、かのいそべあたりの名産ゆゑにござります。もうさずとも知れました事ながら、あねさま顔ハやはり国芳画にござります」とある（鈴木重三「近世小説の造本美術とその性格」『絵本と浮世絵』（p131）所収）。

●『琉球八景』（秋頃。横大判錦絵。8枚揃。前北斎為一筆。西村屋与八版。森屋治兵衛版の後摺あり。

※この年 11 月 16 日の琉球使節参府を見越しての刊行か。琉球に訪れた官吏周煌が宝暦 7 年（1757）年に中国で刊行した『琉球国志略』所収の琉球八景図を、天保 2 年（1831）に幕府が模刻し刊行した『球陽八景』（「琉球八景図」）を種本にしたという。琉球人の朝貢は慶長 15 年（1536）より始まる。

☆「泉崎夜月」（「いずみざきやげつ」とも。25.3×37.3 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/慶応義塾大学/浦添市美術館）

※屋敷の前に太鼓橋風の石橋があり、遠く山の上には月が出ている。月の欠け方が不自然だが、右下が欠けているので有明の月（陰暦 16 日以降の夜明けまで残っている月）頃の風景とされる。『球陽八景』も同画題。

泉崎夜月（日本浮世絵博物館）



☆「臨海湖声」（25.7×37.5 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/島根県立美術館/太田記念美術館/ミネアポリス美術研究所/ホノルル美術館蔵）

※屋敷の前からくねくねとした石橋が島に続いている。海には渡し舟の図。西村屋与八の印と伊勢屋利兵衛の印が捺されている。『球陽八景』の画題は「臨界湖声」。

臨海湖声（日本浮世絵博物館）



☆「桑村竹籬」（25.3×38.0 日本浮世絵博物館/すみ



だ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/アレ・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション/慶応大学蔵）

※木の葉に覆われた籬に囲まれた村の門の前で掃き掃除をする男たち。村の前の海には舟が一隻浮かんでいる。『球陽八景』も同画題。

桑村竹籬（日本浮世絵博物館）

☆「龍洞松壽」（25.5×31.5 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/山口県立美術館）

※雪の村を鳥瞰一覽で描く。沖縄では雪は降らないが、この年の11月16日（太陽暦12月7日）の使節団参府時には雪が降ったといわれ、その印象を描いたのではと推測されている。伊勢屋利兵衛の印が図右に捺されている。『球陽八景』も同画題。 龍洞松壽（日本浮世絵博物館）



☆「**筍崖夕照**」（25.3×37.3 東京国立博物館/日本浮



世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/浦添市美術館）

※海に突き出した岩山の先には石垣に囲われた山城。その下には帆船が二隻浮かんでいる。山の麓には鳥居と神社が描かれる。『球陽八景』も同画題。

筍崖夕照（日本浮世絵博物館）

☆「**長虹秋霽**」（25.0×36.9 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/島根県立美術/アレン・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション館）

長虹秋霽（日本浮世絵博物館）

※長い虹のような石橋が海上に渡され、二人が渡っている。海には唐船と和船が並走し、水平線には富士のような山影が描かれる。『球陽八景』も同画題。



☆「**城獄霊泉**」（24.5×35.6 日本浮世絵博物館/すみだ



北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/太田記念美術館/慶応大学）

※松林を前にした門のある山端から海に流れ落ちる滝。遠くには富士のような形をした山が見える。西村屋与八の印と伊勢屋利兵衛の印が捺されている。『球陽八景』も同画題。

城獄霊泉（日本浮世絵博物館）

☆「**中島蕉園**」（24.6×36.19 日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/浦添市美術館/太田記念美術/慶応大学/ホノルル美術館）

※石垣の塀から伸びた蘇鉄の葉が見られる家々。画面上方には、遠く雪を被った富士山が描かれる。西村屋与八の印と伊勢屋利兵衛の印が捺されている。『球陽八景』も同画題。

中島蕉園（日本浮世絵博物館）



天保4(1833) 癸巳 74 歳 前北斎為一、前北斎為一老人、画狂人北斎、時年七十四前

北斎為一 印之印、ふもとのさと、葛しか：孫(24歳) 阿栄(36)

◇5月、二代目蔦屋重三郎没。

◇8月1日、江戸市中の米穀払底のため幕府より御蔵米を支給。

◇8月頃、曲亭馬琴、右目に異常があり見えなくなる(67)。

◇9月～12月、米価高騰。全国に一揆打壊し。

◇天保の飢饉(天保7年迄)。

◇この年より、相撲興行は江戸・本所回向院が春夏2回の定場所となる(「資料館ノート」第106号 江東区深川江戸資料館より)。

◇富賀岡八幡宮(砂村の元八幡。現東京都江東区南砂7-14-18)の小富士建立。

【広重 保栄堂版 東海道五十三次刊行】

○歌川広重『東海道五十三次之内』刊行始まる(55枚揃。このうち「四日市」は北斎の『富嶽三十六景』(駿州江尻)を意識したもの。保永堂(竹内孫八)版。初めは僊鶴堂との合梓。東京国立博物館蔵)。

歌川広重『東海道五十三次内 四日市』(保栄堂版：知足美術館)



○為永春水『春色辰巳園』(人情本『春色梅児誉美』の続編)初編。

○溪斎英泉『浮世絵類考』の増補をし『无名翁随筆』と題す。

○シーボルト編『日本動物誌』。

【歌川広重、北斎と会った?】

★この頃、歌川広重、風景画の描き方について尋ねるために北斎に会ったが、北斎の冷淡な態度に腹を立て退出したといわれるが確証はない。

★この頃、浅草寺前に住んだか。

※「今浅草寺前に住す」と溪斎英泉の『无名翁随筆』(天保4年：1833)に記される。

★『柳多留』121編に川柳1句、122編に1句、123編に3句、125編に4句載る(『年譜』による)。「俳風柳多留全集」(三省堂)では天保5年以降に卍号の句は見られない。

【柳多留 121 編】

☆泥水へ踏込足袋も目くらじま 卍 (うっかり泥水に足を入れ、めくら縞の足袋もめくらになったか)

【柳多留 122 編】

☆紹芭織質の流をせき留て 卍 (質草に高級な紹芭織を入れたが、請け出す金がないが、せめて利子だけは、)

宿六心配『謎解き北斎川柳』では「紹芭織」「流れ」。田中聡『北斎川柳』では「流れ」)

【柳多留 123 編】

☆眞猫ハヤンワリ^{しめ}る首ッ玉 卍 (人目を避けて語らう男女も、つい熱くなり互いの首をやんわり絞める)

☆間のわるさ月の影さす夜蛤^{とほまぐり} 卍 (満月の夜に食べる蛤売りも月が陰っては間が悪い。男女の密会も同じ)

☆紹芭織質の流もせき留^{とめ}て 卍 (122 編で他者評により前出。但し、表記に異同あり)

【125 編】

☆紹芭織質の流もせき留^{とめ}て 卍 (122 編・123 編で他者評により前出)

☆紹芭織質の流もせき留^{とめ}て 卍 (122 編・123 編・125 編で他者評により前出)

☆顔^{がん}氏のたまはく丘^{きゅう}ぼうが未^だた寐^だず 卍 (孔子の母・顔氏が夫に丘坊(孔子の幼名)がまだ寝ていないよ、少しお待ち。田中聡『北斎川柳』による)

☆木魂^{こだま}して天地へひゞく井戸屋の屁 卍 (井戸浚いの職人の屁が反響して天地に木魂した)

【『北斎漫画』パリに到着】

★この年、『北斎漫画』(何編か不明)がパリに到着したという考証がある。

※『秘蔵浮世絵大観 8 パリ 国立図書館』所収：小杉恵子「パリ 国立図書館 東洋写真室の浮世絵」より。

「ブラックモンがパリ摺師ドラートルの家で 1856 年『北斎漫画』を発見・・・(信憑性はともかく)芸術的反響とも浮世絵流行とも無関係な別本『北斎漫画』が、1833 年の春、パリに到着した。所持者はティチングと同じオランダ人で、1820 年(文政 3)から 1829 年(文政 12)まで長崎オランダ商館員を務めた J・F・ヴァン・オーヴェルメール・フィッシャー(1800～48)であった。フランスにはじめて『北斎漫画』をもたらした人物として明記されるべきであろう。」

フィッシャーの所蔵品は、その後クラブロートに渡ったという。「こうして姿を消した『北斎漫画』が再びパリ国立図書館に現れたのは、十年後、1843 年のことである。ただし六編の一冊のみで。」

筆者注：「ブラックモンがパリ摺師ドラートルの家で 1856 年『北斎漫画』を発見」とは、次のよく知られたエピソードを指している。

「仏人フェリックス・ブラックモン(1833～1914)、パリの印刷屋ドラートルの仕事場で、日本から送られてきた陶器の包み紙の『北斎漫画』を発見。ブラックモンはドラートルに譲ってほしいと願うが断られる。2 年後、版画家ラヴィーユの家で再び『北斎漫画』に出合い、ようやく手に入れる」(大島清次『ジャポニスム』p 28)。このエピソードは近年疑問視されている。

【この頃の北斎の評判】

★この頃の北斎がどのように見られていたか、少し長いが溪齋英泉の『无名翁随筆』(天保 4 年：1833 刊行。別名『増補浮世絵類考』)が要領よくまとめてあるので、少し長いが引用する(岩波文庫『浮世絵類考』〈p143～148 武田勝之助編校〉及び「国立国会図書館デジタル・コレクション」より)。

「葛飾^{かつしか}為^い一(明和の生れ(筆者注：誤り)、寛政^{かんせい}より、享和^{きょうわ}、文化^{ぶんか}、文政^{ぶんせい}、天保^{てんぽう}の今に至る)俗称 幼名^{ぞくしょう}時太郎^{ときたろう}、後鉄^{のちてつ}二郎^{じろう}、居、始本^{はじめほん}所横網^{じよこあみちよう}町、数十ヶ所に転居す、今浅草寺^{いませんそうじま}前に

住す。姓氏 江戸本所の産也。始は業を勝川春章に受く。勝川春朗と画名す。故ありて破門せられ叢春朗と云り。古俵屋宗理の跡を継いで二代目菱川宗理となり、其此画風をかへて（宗理の頃は狂歌の摺物多し、錦画はかゝず）一派をなさず（堤等琳孫二注1の風を慕ふ）、亦門人宗二に宗理を譲り（三代目宗理トス）名を家元へ帰せり。于時寛政戊午の末年、爰に至り、一派の画風を立て、北斎辰政雷斗と改む、（一説、北辰妙見を信ず、故に北斎と改しと云、其頃は東都に明画の風大に行れ、画心有ものは唐画を学ぶ事専ら流行す注2。俗に従ひて画風を立しは、世に出るの時なり。雷斗の画名は重信にゆづる）北斎流と号し、明画の筆法を以て浮世絵をなす。古今唐画の筆意を以て画を工夫せしは、北翁を以て改租とす。爰に於て世上の画家（俗ニ云本画師）其画風を奇として、世俗に至る迄大にもてはやせり、一時に行れて、門人多く、高名の妙手となれり。従来書を読み学才あれば戯作の絵草紙多く、草双紙の画作を板行す。作名を時太郎可候と云へり。（叢春朗の頃は役者の錦絵を出せり。北斎に至りて錦絵の板下を画かず。狂言摺物を多くかけり。錦絵風あらぬを以てことごとく北斎の画風を用ゆ。摺て奇巧なりし）画狂人の号は門人北黄に譲る。北黄は板下をかゝず。専ら画狂人葛飾北斎と画名して雷鳴す。画風錦絵草紙等の尋常にあらず。繡像読本の挿絵を多くかきて世に行れ、絵入読本此人より大いにひらけり。（此頃絵入読本世に流行す。画法草双紙に似よらぬを以て貴とす。亦時にあへり（筆者注：流行した）。読本画とて別にす。杏花園蔵書浮世絵類考に云、北斎宗理は狂言摺物に名高し。浅草に住す。すべて摺物は錦絵に似ざるを貴とすと云）、京師大坂より雷名を慕ひ、門人多く学ぶ者有し故、尾州名古屋を始として京大阪に至れども、必観する画家絶てなし。板刻の蜜画に妙を得て当世に独歩す。数万部の刊本枚挙すべからず。漫画と題して絵手本を發布す。大に世に行る数編を出せり。（始板元江戸麹町角丸屋甚助なりしが、故有て後、尾張名古屋永楽屋東四郎蔵元となれり）再名注3門人に譲りて錦袋舎戴斗と改たり。前北斎戴斗と云。（二代目北斎は本所の産なりしが、後吉原仲の町亀屋注4と云茶屋なり。両国回向院にて大画錦袋をかけり。錦袋舎弘め画会あり。大画は十六間四方十八間四方、名古屋にては釈迦出山の図をかけり）是をも文化の末、門人北泉に譲り与へて前北斎為一と改名す。門人に臨本を与ふる違あらず。画手本を是が為に板刻して数十冊を世に行はしむ。生涯の面目は画風公聴に達して、御成先に於て席画上覧度々あり。希代の画法妙手と云べし」（注・ルビは筆者による）

注1) 堤等琳孫二：堤等琳吟二の誤りか。吟二は等琳の俗名。

注2) 画心有ものは唐画を学ぶ事専ら流行す：唐画は、主に南蘋派を指す。南蘋は中国清朝の浙江省の画家沈南蘋で、享保16年（1731）に長崎に来た。その花鳥画の写実的な画風が当時の絵師に広がり、北斎も唐画を以て画を工夫したというのである。

注3) 名：北斎号を指す。亀屋：亀屋喜三郎のこと。二世北斎。吉原の引手茶屋の主人。二世戴斗（北泉。犬北斎）と混同される向きがある。

★同書は更に続けて以下の様に記している。

【総て総身に画法充満したる人】

「伝に曰（略）、彩色に一家の工風をこらして、一派の妙を極めたり。総て総身に画法充滿したる人にて、一点の戲墨をなさずと云事なし。希代の名人なり。倭漢の画法に委し。骨法自ら宋明の筆意ありて、尋常の画風にひとしからず。眞を写すに、一家の筆法、画体、悉く異りといへども、能其眞に似たり、（狩野流にても、似て似ざるを画法の第一とす。画中不全して画をなすを以て善とす）自ら云、数年諸流の画家に入、其骨法を得て、一派の筆法、画道の業に於て、筆をこゝろみ得ずとせざる事はなしと云り。香具師の看板画より、戯場操の看板、油画、蘭画に至る迄、往々新規の工風を画き、刻本の細密、定規引きの奇巧なる、一家の画法を起せしは尤妙なり。他郷に至るも、画者皆門に入て業を学ぶ。京師浪花は、悉く翁の画風を学びて名を改ずといへども、門弟にならぬはなし。（為一翁転宅する事一癖あり。数十ヶ所に住を替たり）浪花発市注1の絵本を見て世に知るところなり。紅毛よりも需に應じて、二三年の間数百枚を送りしかば、蘭人も大いに珍重す。故有て是を禁ぜられたり。天保の今に至るまで六十余歳、筆法少も衰へず。老年に及びて彌筆に潤あり。近年錦絵を多く出せり。（諸国の山水、花鳥尽し、三十六富士、百鬼夜行、琉球八景、瀧尽し）肉筆彩色は、他に優れて見事なり。別に為一翁が画伝を誌す。委しくは其書注2を見るべし」（ルビは筆者による）

※以上の文は本稿「文化年間」の【北斎翁は曲画を善す】の項の引用文に続くものである。

注1) 発市：発兌の誤りか。発行すること。

注2) 其書：未見にして不明。

★同書に記されている「葛飾為一系図」では「女子栄女、画を善す、父に従いて今専ら絵師となす、名手なり」と阿栄を評している。

【余の美人画は、阿栄におよばざるなり】

★「北斎翁管人に語りて曰く、余の美人画は、阿栄におよばざるなり。彼は妙に画きて、よく画法にかなへり」（飯島虚心『葛飾北斎伝』p 309～310 ルビは筆者）。

【阿栄の絵、気韻生動、筆力非凡なり】

「（露木氏の話）梅彦氏注、管阿栄に依頼し、稻荷社前に供する発句の奉灯の口画を画かせたるが、阿栄諾して盆栽の桜のかげに、猫児の戯るゝ所を画く。下筆密にして、設色佳麗なり。同氏阿栄に謂て曰く、奉灯の口絵なれば、此の如く細密なるを要せずして可なるべし。阿栄曰く、此の絹本は、裏打せし者なれば、画きたるなり。従来裏打ちせし絹本は画き難きものなれば、尋常の画工ならば、謝絶して画かざるべし。妾は、試みに其の画き難きものに画きたるなり。知らず知らず、細密になりたれど、他人のいふごとく、画き難きものにあらずと。同氏携へ歸りて、熟視すれば、気韻生動、筆力非凡なり。よりにて奉灯となすは、おしければ、更に他人をして、口画を画かしめ、神前に供し、しかして此の阿栄の画は、裱装して珍藏せしが、後火災に罹り、これを失ふ、惜むべしと、同氏の話。」（『葛飾北斎伝』p 310 ルビは筆者による）

注) 梅彦氏：露木梅彦。名は孔彰。北斎から号を譲られ、露木為一と号す。

●絵本『唐詩選画本 五言律』六編（1月。半紙本5冊。見返しに『画本唐詩選』。前北齋為一画。袋には「前北齋為一老人画」。22.7×15.8（嵩山房・小林新兵衛版。国文学研究資料館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北齋美術館：ピーターモース・コレクション/フリーア美術館：ブルーエアー・コレクション蔵）



『唐詩選画本 五言律』六編 見返し（国文学研究資料館）

「送遠」

※唐詩選五言律の略解書。中国の故事や動植物を描く。「送遠」と呼ばれる絵は、杜甫が戦地に赴く友人を送った詩を題材にして、馬に乗り雪景色を眺める男の後ろから下僕がついて行く様子を描き、天保4年～5年（1833～34）の『詩歌写真鏡』の「無題」の絵に反映している。

五編～七編は高井蘭山著。北齋は六編・七編（天保7年：1836）を描く。六編巻一に11図、巻二に15図、巻三に13図、巻四に12図、巻五に6図の挿絵を描く（『ピーターモース・コレクション北齋図録』による）。全七編三十五巻三十五冊。初編は天明8年刊（文化2年再刊）、二編は寛政2年刊（文化11年再刊）、三編は寛政3年刊、四編は寛政5年刊、五編は天保3年刊。七編は天保7年刊。

●合巻『出世奴小方之伝』（1月。二冊。柳亭種彦の依頼で制作された合巻の表紙絵。歌川国直が美人を描き、北齋は国直の美人の背景になる雪景全体を描いている。柳亭種彦作。「柳亭応需雪景写 前北齋為一」の書き込みがある。印之印。鶴屋喜右衛門版。島根県立美術館：永田コレクション/早稲田大学図書館蔵）

『花雪吹縁柵』左：裏表紙 右：表紙（『2019新北齋展図録』より転載）

※『花雪吹縁柵』（合巻。天保3年：1832）同様、合巻の表紙絵。図は、国直が、高札のある雪の岸边に、黒い高下駄を履き、版元の「鶴屋」の文字と定紋の鶴のマークが書かれた傘をさして、両袖に手を入れて立っている芸妓を描く。北齋は、川の水辺に水鳥が三羽泳ぎ、雪が降りしきる対岸には雪を



被った屋根の家並みと、^{たてかわ}豎川辺りの材木を多く立ててある背景を描く。

●読本『^{しんぺんすいぎやでん}新編水滸画伝』二編後帙（秋。五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。英屋平吉版）

●読本『^{しんぺんすいぎやでん}新編水滸画伝』三編前帙（秋。五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。英屋平吉版）

●絵本『^{ちやうのうみ}千絵の海』（この頃か。横中判錦絵揃物。10 図（他に、出版されなかった校合摺の〈^{しながわ}品川〉〈^{かづさうら}上総浦〉がある。森屋治兵衛版。フランス国立図書館に画帖仕立てがある）

☆〈^{あぶらなほし}蚊針流〉前北斎为一筆。18.4×24.8 フランス国立図書館/東京国立博物館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション/千葉県立中央博物館蔵）

※「蚊針」は、羽毛などで蚊や虫の形に作った疑似針で、川魚を釣るのに用いた。川の流れに任せて糸を垂れる漁法と思われる。5 人の男が釣り糸を垂れている。

蚊針流（フランス国立図書館）



☆〈^{まちあみ}待ち網〉前北斎为一筆。18.2×24.7 フランス国立図書館/東京国立博物館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション/千葉県立中央博物館蔵）

※「待ち網」という漁法は、水中に網を張って魚を捕らえる方法。烈しい水流が滝のように流れる中で^{あき}箒や網を張っている男たちのいきいきとした動きが描かれる。

待ち網（フランス国立図書館）



☆〈^{みやとがわ}宮戸川長縄〉前北斎为一筆。18.5×25.8 すみだ北斎美術館/フランス国立図書館/ミネアポリス美術館/東京国立博物館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵）

※「宮戸川」は隅田川下流の別称。版下絵の画題では「^{りやうごく}両国」と記されている。現在の台東区蔵前付近の図。岸边近くに停めた船の中で獲ったものを桶に入れる男や船頭たち。川の中央でも船から網を入れて貝などを獲ろうとしている男や岸边で竿をさしている男もいる。対岸には規則正しく並ぶ御船蔵の建物が描かれる。右隅の小さく見える橋は元柳橋といわれる。

宮戸川長縄（フランス国立図書館）



☆〈^{きぬがわ}絹川はちふせ〉無款。18.2×24.7 島根県立美術館/ギメ美術館/フランス国立図書館/ボストン美術館/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション/千葉県立中央博物館蔵）

※絹川は奥日光から発する鬼怒川のこと。「はちふせ」とは、籠を魚のいそうな水面にかぶせ、底穴から手を入れて魚を手づかみにする^{はちふせ}鉢伏漁法をいう。大勢の男がそれぞれに川に籠を入れている姿を、小高い岸边でのんびりとそれを見る男の図。



絹川はちふせ (フランス国立図書館)

☆〈五島鯨突〉 18.2×24.9 前北斎為一筆。すみだ北斎美術館/フランス国立図書館/東京国立博物館/ホノルル美術館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)



五島鯨突 (フランス国立図書館)

※五島列島の島の高台から鯨のいる漁場を俯瞰する構図。五島鯨はゴンドウ鯨と呼ばれ大型のいるかをいう。

☆〈甲州火振〉〈甲列火振〉と記されている。無款。18.2×24.7 島根県立美術館/フランス国立図書館/東京国立博物館/太田記念美術館：長瀬コレクション/日本浮世絵博物館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション/千葉県立中央博物館蔵)



※深夜に水面を火で照らして行う漁法。火振り漁法。「夜振」「焼網」などとも呼ばれるという。関東の秩父地方、神奈川の中郡、飛騨地方、静岡の秦原郡などで行われていたという(『浮世絵八華5 北斎』平凡社)。星の点在する暗い空の下、烈しい水流の中に入り赤々と燃える松明を水面で振りかざしている。

画稿と版下絵あり(檜崎宗重『北斎論』p383)

甲州火振 (フランス国立図書館)

☆〈総州利根川〉〈総列利根川〉と記されている。18.2×24.6 前北斎為一筆。すみだ北斎美術館/フランス国立図書館/ギメ美術館/千葉市美術館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※利根川は坂東太郎とも呼ばれ関東で親しまれた川で、江戸や房総などへの貨物輸送に利用された。その川で船を止め、四つ手網引き揚げる船中の男は必至に踏ん張っている。この構図は『富嶽百景』の「網裏のふじ」(三編)にも見られる。

総州利根川 (フランス国立図書館)



☆〈総州銚子〉〈総列銚子〉と記されている。前北斎為一筆。18.2×24.4 フランス国立図書館/ギメ美術館/ホノルル美術館/大英博物館/千葉市美術館/太田記念美術館：長瀬コレクション/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※「富嶽三十六景」の〈神奈川沖裏浪〉と同図趣。怒涛の中で必死に小舟を操る船頭たちの図。銚子は千葉県銚子で、利根川河口に開けた漁港。天保5年(1834)か6年(1835)に相州・豆州や浦賀に行っているの、あるいは銚子にも滞在したか。

総州銚子（フランス国立図書館）

☆〈下総登戸〉前北斎為一筆。18.2×24.9 フランス国立図書館/東京国立博物館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵



※登戸は現在の千葉市にある地で宿場として栄えた。木更津などを結ぶ要地。『富嶽三十六景』にも「登戸浦」の作品がある。房総半島を望む干潟で大勢の男女が潮干狩りをしている風景。

下総登戸（フランス国立図書館）



版下絵あり（檜崎宗重『北斎論』p 384）。

☆〈相州浦賀〉〈相列浦賀〉と記されている。18.4×24.9 島根県立美術館/ギメ美術館/フランス国立図書館/日本浮世絵博物館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵

※浦賀は神奈川県横須賀市浦賀で、三浦半島の東端の港町。江戸湾の入り口であるところから幕府によって享保5年（1720）に奉行所と番所が下田から移設された。

夜明け方に常夜灯のある磯で数人の男たちが釣りをする静かな風景が描かれる。北斎は天保5年（1834）の冬又は天保6年（1835）の春、相州、豆州へ旅し浦賀に蟄居しているので、その時の想いもこの作品に反映しているか。

総州浦賀（フランス国立図書館）



●「千絵の海：校合摺・版下絵」

※校合摺は、墨版ですべてを表現するのではなく、色の明度差を作り出す下塗り段階のもの。絵師の指示した色の数だけ墨摺する。版下絵は、彫刻のための下絵で、これを版木に逆さに貼り付けて彫るので、残存することは基本的にない。

☆〈品川〉（校合摺のため『千絵の海』10 図に含まない。前北斎為一筆。17.8×24.6 フランス国立図書館/東京国立博物館蔵）

☆〈上総裏〉（校合摺のため『千絵の海』10 図に含まない。前北斎為一筆。17.9×24.6 フランス国立図書館/東京国立博物館蔵）

☆〈両国〉（17.8×24.5 渡辺庄三郎『版下面帖』より）

☆〈甲列（州）火振〉（17.8×24.5 渡辺庄三郎『版下面帖』より）

☆〈下総登戸〉（17.8×24.5 渡辺庄三郎『版下面帖』より）

●『西村屋大判花鳥シリーズ』（この頃か。天保3年（1832）説もある。横大判錦絵。前北斎為一筆。全10 図。〈芥子〉一図を除き背景を地潰しにしている。全十図は大英博物館/ミネアポリス美術館/ボストン美術館/ギメ美術館蔵）

※植物等の説明は「デジタル大辞泉」による。

☆〈芥子〉（24.8×36.8 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/東京国立博物館蔵/大英博物館/ミネアポリス美術館/ボストン美術館蔵）

※羽ペンを使ったのではという見方もある（『在外日本の至宝』7巻「浮世絵」作品解説）。

芥子は、ケシ科の越年草。高さ1.5メートル。葉は白みを帯び、縁にぎざぎざがあり、基部は茎を包む。初夏、下を向いていたつぼみが上向き、大形の紅・紫・白色や絞りの4弁花を開くが、北斎は5弁で描く。種子は小さくて黒色、料理に用いる。白花の未熟な実からは阿片の原料をとるが、日本では栽培などが厳しく制限されている。



芥子（すみだ北斎美術館）

☆〈芙蓉に雀〉（25.1×36.5 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モーリス・コレクション/ベルリン東洋美術館/シカゴ美術館/大英博物館/ボストン美術館/ミネアポリス美術館/ /チェスター・ビュティ図書館/ギメ美術館蔵）

※花咲く芙蓉の左脇で羽ばたきながら静止している雀。芙蓉の葉が墨で塗りつぶされたように描かれる。

芙蓉はアオイ科の落葉低木。暖地の海岸近くに自生。葉は手のひら状に裂けていて、先がとがる。夏から秋、葉の付け根に淡紅色の大きな5弁花を開き、1日でしぼむ。園芸品種には城・紅などの花色や八重のものもある。



蓉に雀（島根県立美術館）

☆〈桔梗にとんぼ〉（「桔梗・蜻蛉」とも。24.8×36.2 東京国立博物館/ホノルル美術館/ボストン美術館/ギメ美術館/ミネアポリス美術館蔵）

※密集するように花咲く桔梗の上を飛ぶ一匹のとんぼの図。

桔梗は、キキョウ科の多年草。日当たりのよい山野に生え、高さ約1メートル。葉は長卵形で、裏面がやや白い。8、9月ごろ青紫色の釣鐘形の花が咲く。秋の七草の一。



桔梗にとんぼ（ボストン美術館）

☆〈紫陽花に燕〉（25.0×36.2 島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/ベルリン東洋美術館/ギメ東洋美術館/ボストン美術館/ミネアポリス美術館蔵）

※紫陽花の右上から羽ばたいてくる燕の図。

紫陽花はガクアジサイ～日本で改良された園芸品種。高さ1～1.5mの落葉低木。葉は大きな楕円形。初夏、淡青色から淡紫紅色に変わる萼のある小花が、球状に集まって咲く、庭木にする。

紫陽花に燕（島根県立美術館）



☆〈檜扇〉（「檜扇花」とも。24.8×36.2 島根県立美術館：永田コレクション/ベルリン東洋美術館/ボストン美術館/ミネアポリス美術館/ギメ美術館蔵）

※細い茎の先に米印のように開いた花と鋭く突き出すような葉が描かれる。檜扇は、アヤメ科の多年草。本州中部以西の山野に自生。剣形の葉が2列に互生し、扇形に広がる。夏、黄赤色で内側に多数の暗紅色の斑点をもつ6弁花を開く。



檜扇（島根県立美術館）

☆〈菊に虻〉（「菊に蜂」「菊花に虻」とも。23.8×36.8 島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/シカゴ美術館/フリーア美術館/ギメ東洋美術館/ボストン美術館/ミネアポリス美術館蔵）

※画面いっぱいに花開いた菊を目指して左上から虻が飛んでくる図。

菊は、キク科の多年草。日本の代表的な花の一。主に秋に咲き、花の色・形などにより、非常に多くの品種があり、大きさにより大菊・中菊・小菊と大別される。古く中国から渡来したとされ、江戸時代には改良が進んだ。観賞用に広く栽培され、食用にもなる。



菊に虻（島根県立美術館）

☆〈牡丹に蝶〉（「牡丹に胡蝶」とも。24.9×36.1 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/ブルーナー・コレクション/ボストン美術館/ミネアポリス美術館/ホノルル美術館/ギメ美術館蔵）

※華やかに咲き誇る牡丹の右上で舞う蝶を描く。南蘋派の画風といわれる。

牡丹は、ボタン科の落葉低木。高さ1～2メートル。葉は大きく、羽状複葉で、互生する。5月ごろ、白・紅・紫・黄色などの大形の花が咲く。花びらは5～8枚あるが、重弁や二段咲きなどさまざまな園芸品種があり、寒牡丹もある。

牡丹に蝶（島根県立美術館）

☆〈^{かきつばた}杜若にきりぎりす〉（「^{かきつばた}杜若にぼった」とも。24.8×36.2 フィッツウィリアム美術館/ミネアポリス美術館/ギメ美術館蔵）

※^{かきつばた}杜若の花が開き、細長く突き出している葉にしがみつくように逆様にとま



っている一匹のきりぎりすの図。杜若は、アヤメ科の多年草。湿地に群生。

葉は剣状で幅広く、基部は^{きん}鞘になり茎を挟む。初夏、濃紫色の花を開く。



杜若にきりぎりす（ミネアポリス美術館）

☆〈^{あさがお}朝顔に蛙〉（24.8×37.5 東京国立博物館/フィッツウィリアム美術館/シカゴ美術館/ブルックリン美術館/仏・ベレス・コレクション/ボストン美術館/ /ミネアポリス美術館/ギメ美術館蔵）

※朝顔の葉に同色で溶け込むように描かれた蛙。

朝顔は、ヒルガオ科の蔓生的一年草。茎は左巻き。葉は大きな切れ込みがある。夏の朝、らっぱ状の花を開く。種子は漢方で牽牛子といい、緩下剤などに用いる。東アジアの原産で、奈良時代に薬用植物として中国から渡来。江戸初期より園芸植物として栽培され、多くの品種が作られた。



朝顔に蛙（ミネアポリス美術館）

☆〈^{ゆり}百合花〉（25.8×37.6 シカゴ美術館/ケルン美術館/大英博物館/ミネアポリス美術館/ケルン美術館/ボストン美術館/東京国立博物館/ギメ美術館蔵）

※花開いた白百合と、これから開こうとする花が描かれている。四条派の筆致が認められるという（『在外日本の至宝』7巻「浮世絵」作品解説）。

百合は、ユリ科ユリ属の多年草の総称。温帯を中心に分布し、カノユリ、オニユリ、ヤマユリ、テッポウユリ、スカシユリなど、園芸用に栽培されるものも多い。鱗茎が食用になるものもある。葉は線形などで平行脈が走る。夏、白・黄・橙色などの大形の6弁花を開く。北斎は5弁で描いている。



百合花（ミネアポリス美術館）

●「諸国瀧廻り」(全8図。縦大判錦絵摺物。前北斎為一筆。西村屋与八版。国立国会図書館/東洋文庫/島根県立美術館/川端龍子記念館/東京国立博物館/サンフランシスコ美術館/すみだ北斎美術館/ベルリン東洋美術館/日本浮世絵博物館/ミネアポリス美術館/大英博物館/山口県立萩美術館: フォン・コレクション/ホノルル美術館/ギメ美術館/メトロポリタン美術館/ポーランド美術館/東洋文庫: 岩崎文庫/中外産業株式会社: 原安三郎コレクション蔵)

※天保4年の西村屋の吉見種繁作『改色団七島』巻末広告に「富嶽三十六景」に続き「諸国瀧廻り 右同画 是もまへに准じ、いと珍らしき絵なり」とある。

☆〈和州吉野 義経馬洗滝〉 (38.5×25.7)



※文治元年(1185)頃、源義経が都落ちので吉野地方をさまよった際、義経が馬を洗ったという伝説から取材。滝の下で馬を洗う二人の男。急な岸边と馬の茶色と幅広にS字型に流れ落ちる滝の藍色が対比される。奈良県吉野町喜佐谷の高滝と考えられている(『HOKUSAI 画狂人北斎』緑青 VOL2 日本浮世絵博物館 P43)。

和州吉野 義経馬洗滝 (日本浮世絵博物館)

☆〈木曾路ノ奥阿弥陀ヶ滝〉 (37.5×25.7)

※阿弥陀ヶ滝は、美濃国の最先端(岐阜県南部)の毘沙門岳山麓にある滝。高さ約80m。上部が阿弥陀仏の背光のように見えるところから名付けられたという。険しい山を切り割るように、溜まる川水を一気に落としている。落差60mの水は下に行くほどに縦筋を流れるように描いている。滝の途中の突き出した場所では、毛氈を敷いて爛酒で酒宴をする三人の男が描かれる。



木曾路ノ奥阿弥陀ヶ滝 (日本浮世絵博物館)

☆〈美濃ノ国養老の滝〉 (37.1×25.1)



※美濃国(岐阜県)にある養老の滝。高さ約32m、幅約7m。貧しい樵夫が滝から美酒を得て親孝行したという伝説で有名で、古くから霊泉として崇められていた。垂直に落ちる滝の下では笠を被る男が滝を見上げ、その傍らの粗末な小屋の中では数人の男が休んでいる図。

美濃ノ国養老の滝 (日本浮世絵博物館)

☆〈相州大山ろうべんの滝〉 (36.8×26.1 アレン・メモリアル美術館: マリー・エイズワース・コレクション蔵)

※大山は神奈川県伊勢原市・秦野市・厚木市にわたる標高1252メートルの山で、江戸から近い相模なので大山詣でとして大山寺(大山阿夫利神社)に参詣する人々で賑わった。この図は、多くの参詣人が「大願成就」と墨書きした細い木の板(木太刀)を持ち、良弁の滝で水垢離をしている様子を描く。

相州大山ろうべんの瀧（日本浮世絵博物館）

☆〈下野黒髪山きりふりの瀧〉（38.6×26.2）



※日光三名瀑の**霧降の瀧**をいう。男髪山（男体山）に流れる、日光参詣途中の名所。上流から流れ落ちる滝水は下方で幾筋にも別れている。滝の下で見上げる三人の男と、滝の真横から眺める二人の男が描かれる。校合摺がある（38.2×25.2 太田記念美術館：長瀬コレクション/クロード・モネ財団蔵）



下野黒髪山きりふりの瀧（日本浮世絵博物館）

☆〈東都葵ヶ岡の瀧〉（37.8×25.7 クロード・モネ財団蔵）

※葵ヶ岡は、現在の千代田区永田町近くの赤坂溜池に流れていた瀧。この付近は大名や旗本の家が並ぶ武家屋敷であった。画面左上に描かれる葵坂には武士や道を掃く男などが描かれ、坂の突き当たりには辻番所を描く。画面右側は溜め池と堰から落ちる瀧とその下の波打つ水面の三種の水の様子を描き分けている。



東都葵ヶ岡の瀧（日本浮世絵博物館）

☆〈東海道坂ノ下清瀧くわんおん〉（38.2×26.5）



※清瀧は、東海道の鈴鹿峠前の坂下宿にある瀧。清瀧観音や岩屋観音も呼ばれる石堂があり、多くの信仰の対象であったという。瀧の流れる傍らの山中の石堂に行く人、石堂の前でしゃがんで手を合わせて拝む人などを描く。瀧は細々と描かれ、むしろ参詣の人に焦点を当てた構図になっている。

東海道坂ノ下清瀧くわんおん（日本浮世絵博物館）

☆〈木曾海道小野ノ瀑布〉（38.1×25.9）

※木曾郡寢覚の床に近い瀧。図の左半分にまっすぐ下に落ちる瀧により、垂直を強調した画面構成となっている。瀧の右に祠があり、その下の橋の上で瀧を眺める数人の男が描かれる。このシリーズで唯一瀧を横から見た図。広重「木曾海道六十九次」の〈上ヶ松〉に影響した。



木曾海道小野ノ瀑布（日本浮世絵博物館）

●「雪月花」（この頃か。横大判錦絵三枚揃物。前北斎為一筆。西村屋与八版）

※下記「勝景 雪月花」とは別物。

☆〈雪月花 隅田の雪〉24.4×36.4 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/江戸東京博物館/ミネアポリス美術館/太田記念美術館/ホノルル美術館/足立区立郷土博物館蔵)

※隅田川の雪の川面に一艘の漁船と土手を行く二人の男の図。図中央に木立の中に富士塚が見える待乳山聖天宮、右下に川に突き出た隅田神社（現東京都墨田区堤2丁目）の祠が描かれる。

雪月花 隅田の雪（東京都江戸東京博物館）



☆〈雪月花 淀川の月〉25.5×37.1 すみだ北斎美術館/ミネアポリス美術館/アムステルダム国立美術館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/江戸東京博物館蔵)

※月下の淀川を往来する旅客を多く乗せて川下に行く何艘かの船。遠くには岸边の足が船を綱で川上に引いている。右には淀城と水車が描かれる。

雪月花 淀川の月（東京都江戸東京博物館）



☆〈雪花月 吉野の花〉24.5×36.8 日本浮世絵博物館/江戸東京博物館/ミネアポリス美術館/太田記念美術館蔵)

※馬子や旅人が雲と見まがうほどの満開の桜を見ながら道を往来する。図中の荷物の風呂敷に、「永楽」の文字や、三つ巴の版元の商標が書き込まれている。北斎は文化年刊末頃の関西旅行の際、吉野を訪問しているとされている。この図の画題のみ「雪花月」となっている。

雪花月 吉野の花（東京都江戸東京博物館）



●摺物錦絵「勝景 雪月花」（この頃か。天保1年～4年〈1830～33〉説もあり。小判（九ツ切）錦絵9枚続摺物。前北斎為一筆。赤松庄太郎版。島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/ギメ美術館/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館蔵)

※東都（江戸）、山城（京）、摂津（大坂）の三都それぞれから雪・月・花の三景ずつ計9枚の構成。同一寸法の9図を大奉書一枚に作画・製版・摺刷にして、その後に切断したもの。

☆〈東都 品川の雪〉（12.5×16.2 品川区立品川歴史館蔵）

※湾のまわりの品川宿が雪に覆われている図。

東都品川の雪（島根県立美術館）



☆〈東都 隅田の月〉 (12.5×16.2)

※夕暮れに、隅田神社近くに三隻の舟が浮かぶ図。左隅に薄く月。

☆〈東都 飛鳥山の花〉 (12.5×16.2)

※桜の花が飛鳥山のあちこちに咲いている図。山上では花見客が小さく描かれる。

東都 飛鳥山の花 (島根県立美術館)



☆〈山城 峯峩ノ雪〉 (12.2×16.7)

※茅屋の屋根や松の木に雪が被り、手前の橋には農夫や旅人のいる図。

☆〈山城 四条の月〉 (12.2×16.7)

※四条橋を渡る人々。川に浮かぶ納涼の屋台でくつろぐ人々。山の向こうに三日月。

山城 四条の月 (島根県立美術館)



☆〈山城 嵐山の花〉 (12.2×16.7)

※渡月橋を渡る人々と、橋の下を通る船の図。

☆〈摂津 能瀬の雪〉 (12.5×17.0)

※茅屋の家が点在する雪の山道を往来する人々。

☆〈摂津 淀川の月〉 (12.5×17.0)

※淀川に浮かぶ三隻の屋根覆いの舟。遠く山の横に三日月。

摂津 淀川の月 (島根県立美術館)



☆〈摂津 桜の宮花〉 (12.5×17.0)



※藍摺りの空の下で咲き誇る桜の木々。鳥居に続く道には牛に乗った人などが描かれる。

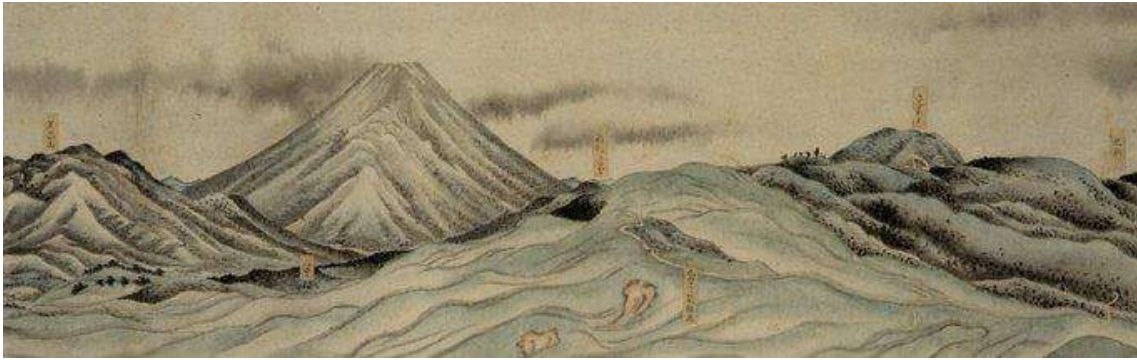
摂津 桜の宮花 (島根県立美術館)

●巻物絵「豆州日金山眺望絵巻」 (この頃か。紙本着色一卷。巻物。画狂人北斎画。印ふもとのさと。29.3×337.5 北斎館蔵)

注) 日金山：静岡県熱海市伊豆山宇日金山の十国峠のこと。箱根外輪山から南に続く尾根。伊豆山権現と箱根権現を結ぶ信仰道の要所。



※伊豆の十国峠からの眺望が広がる図。沖の遠くに伊豆大島の三原山の噴煙が描かれる。



豆州日金山眺望絵巻（部分：北斎館）

【年齢入り落款を以後継続して記す】

●屏風絵「玉川六景図」（紙本着色。紙本着色六曲一双押絵貼屏風。時年七十四 前北斎為一筆。印葛しか。各扇 132.0×47.8 フリーア美術館蔵）

※人物の六扇と景物の六扇の二隻となっていて、人物の一隻の第五扇目に「玉川六景 時年七十四 前北斎為一筆」と記される。落款に年齢を記すのは、既に文政4年（1821）「玄徳 関羽 張飛」（摺物：行年六十二 葛飾為一翁燈下席上画）、「桃園三契」（摺物：行年六十二翁葛飾為一燈火席上画）、天保元年（1830）「工芸職人下絵集」（七十一翁北斎為一筆/七十一翁為一筆）、「下絵帖」（七十一翁北斎為一筆）の作品でなされているが、「玉川六景図」から年齢入り落款が継続的に使用されたとされる。全12図。

※フリーア美術館所蔵では、右隻に人物図、左隻に風景図が配されているが、元来は人物画と風景画が対になっていて、全部で六対の配置であったことが雑誌『日本美術画報』初編巻九（明治28年：1895）に掲載された写真から証明されている（2019「フリーア美術館の北斎展」リーフレットより）。



玉川六景図 フリーア美術館の配列（綴プロジェクト高精細複製画）



玉川六景図 本来の配列（綴プロジェクト高精細複製画）

※本来の配置：右隻の右から、

☆〈摂津の国 三島の玉川〉

〈1 扇：歌人相模の図〉と〈2 扇：砧の道具と衣の図〉の対。几帳の脇に座る相模の図。相模は、998～1061。平安時代の女流歌人。中古三十六歌仙の一人。「見わたせば波のしがらみかけてけり 卯の花さける玉川の里」（後拾遺和歌集 175）と、せき止められた摂津三島の玉川（大阪府高槻市）の国の白波が、卯の花が咲いているようだと言んだことを踏まえる。対の2 扇には、卯の花の白さから連想して砧の白い布を描く。

☆〈山城の国 井手の玉川〉

〈3 扇：山吹の咲く山道を行く白衣の仕丁二人と背負われる貴族の子どもの図〉と〈4 扇：水の中を泳ぐ鯉一匹の図〉の対。井手の玉川（京都府綴喜郡井手町）は源順（911～83）「春ふかみ井手の川波たちかへり 見てこそゆかめ山吹の花」（拾遺和歌集 68）など古来多く詠まれた山吹の名所。4 扇では、川波から水に泳ぐ鯉を連想したのか。

☆〈紀伊の国 高野の玉川〉

〈5 扇：樵が、柴木の束に腰掛けて遠くの溪流を眺めている図〉と〈6 扇：崖に松の木が生える溪流の図〉の対。同画趣では僧侶や旅人が溪流を眺める図が多いといわれるが、ここでは樵の図にしている。弘法大師の歌と伝えられる「わすれてもくみやしつらん旅人のたかのゝおくの玉川の水」を踏まえたか。

※本来の配置：左隻の右から、

☆〈近江の国 野路の玉川〉

〈7 扇：源俊頼と月の図〉と〈8 扇：萩と野路に流れる玉川の図〉の対。野路の玉川（滋賀県近江市）は、萩の名所。源俊頼「あすも来む野ぢの玉川はぎこえて 色なる波に月やどりけり」（千載和歌集 281）の歌を踏まえる。脇息に右肘を掛け寛いで満月を眺める図と、萩の咲く曲がりくねる野路の玉川が描かれる。

☆〈武蔵の国 調布の玉川〉

〈9 扇：臼に杵をたてる砧の図〉と〈10 扇：玉川を行く一隻の舟と民家の図〉の対。臼に入れた白布を堅杵で突く二人の女の図と、調布の玉川（東京都・神奈川県）を行く柴木を積んだ一隻の舟。船頭が竿さしている。向こう岸には民家が並んでいる。調布の玉川は、「多摩川にさらす手作りさらさらに 荷そこの児のここだ愛しき」（万葉集・東歌）などに多く「砧」が詠まれて有名。

☆〈陸奥の国 野田の玉川〉

〈11 扇：溪流の上を飛び交う千鳥の図〉と〈12 扇：僧侶の図〉の対。白波を立てて流れる玉川の上を、ほぼ垂直に群れをなして飛ぶ千鳥の図と、頭巾を被り腰を屈めて後ろ手をした僧侶。裾が風に靡いている。側に笠と荷物が置かれている。能因法師（988～？）「夕されば汐風こしてみちのくの 野田の玉川千鳥鳴くなり」（新古今和歌集 643）の歌を踏まえる。

●絵暦摺物「宝船図」（1 月。中判着色。前北斎為一筆。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※画中に、「天保四のとし睦月初市 本町五丁目」とあるので、信州・松本で行われていた初市の祭礼で、本町五丁目が繰り出した宝船を描いたことが分る。

※これは、実際に祭礼の宝船を見た可能性があるという（『新北斎展図録』 p 336）。また、松本滞留中の作ともいわれる（井上和雄〈浮世絵志 3 号〉「北斎研究断片（三）」の説を『年譜』で紹介）。

※図は、「宝」と書いた大きな帆を立てた龍首の船に米俵などを乗せている。帆の上に月の大小が示される。

● 団扇絵「狎」（この頃か。大判団扇絵判錦絵。前北斎為一筆。21.7×28.5 伊勢屋市右衛門（角辻）版。太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※蒲公英が咲き初夏の雰囲気の中で、鞆に手をかけて戯れる狎の毛並みが流れるように描かれる。印辻が用いられていることから天保6年（1835）頃の「群鶏」、天保4年頃（1833）「雉と蛇」と同シリーズか。



狎（太田記念美術館）

● 団扇絵「雉と蛇」（この頃か。大判団扇絵判錦絵。前北斎為一筆。伊勢屋市右衛門（角辻）版。重要美術品指定。22.6×29.1 ギメ美術館/東京国立博物館〈21.5×28.3〉蔵）



雉と蛇（東京国立博物館）

● 「群鶏」（この頃か。大判団扇絵判錦絵。前北斎為一筆。伊勢屋市右衛門（角辻）版。22.5×29.0 重要美術品指定。東京国立博物館蔵）文政5年～6年説あり。また、『2005 北斎展図録』（p350）の解説では、版下絵と署名は、天保5年3月「卍」に改名する以前になされたものの、何らかの理由により版行が遅れ、天保6年に検閲を受けて出版されたものとしている。

※それぞれ七羽の雌雄の鶏は眼光鋭く固まるように集まって描かれる。背景はベロ藍で塗りつぶされる。団扇の形に沿って切りとり団扇に貼って使用した。「狎」と同シリーズか。

右下に、囲みに辻の版元印がある。従来は、南伝馬町二丁目の辻屋安米兵衛とされてい

たが、近年、岩切友里子の研究で、団扇問屋の角辻と呼ばれた伊勢屋市右衛門であるという（『2017 北斎一富士を超えて』図録 p 160）。



群鶏（東京国立博物館）

天保5(1834)	甲午 75 歳	土持任三郎、三浦屋八右衛門、前北斎為一、葛飾前北斎為一
老人、前北斎為一述卍、前北斎卍老人、七十五齡前北斎改画狂老人卍、画狂老人卍、		

前北斎為一改画狂老人卍、前北斎卍、よわいななじゅうごさいほくさいいつあらためまんじ 卍 富士の形、葛しか：

孫(25歳) 阿栄(37)

◇諸国飢饉。

◇2月7日、江戸神田大火(甲午火事)。神田佐久間町より出火。2月13日まで続き、死者4000人といわれる。

◇6月、江戸町会所で窮民33万4000人に施米。

◇7月6日、歌川国安没(41)。

◇長崎オランダ商館参府。

◇水野忠邦、老中に就任。

○歌川広重『近江八景』(この頃か。名所に因む和歌を載せる)。保永堂版『東海道五拾三次』完結。

○斎藤月岑(1804~1878)『江戸名所函会』(前半1~3巻10冊。後半は天保7年:1836刊)。

【画狂老人卍期 肉筆画に傾注】

★この年まで転居56回に及ぶ。

【愚老も久々疝痛にて、未だ歩行相成らず候】

★5月4日付け、小林新兵衛宛書簡(『葛飾北斎伝』p234~235)「時候御機嫌奉伺候。愚老も久々疝痛(筆者注:胸や腰の痛み)にて、未だ歩行不相成候て、乍存御無沙汰仕候。江川注も此節は、大病に御座候間、相頼候儀不相成候、(中略)全快次第参上仕、万々御礼可申上候以上。

五月四日

御留守にても、此書面御開封被成、遠方故、何卒金談御済し被下度候。

いつものおやぢ

小林新兵衛様

土持仁三郎 九拜

御店衆中様

御留守にても御開封被成下候様奉願候」。

注)江川:江川留吉。北斎が信頼していた彫り師。

※これによれば、疝痛をわずらい、彫師の江川留吉も大病のため、仕事が出来ず、全快次第、挨拶に伺うが、遠方にいるので云々と記している。「遠方」とは浦賀塾居中を指すと思われる。この頃は手紙の自称に土持仁三郎や三浦屋八右衛門などの署名を用いている。

「土持」とは朱楽菅江の洒落本『大抵御覧』(早稲田大学「古典籍総合データベース」より)に「(略)かたはらの山をきりたいらげ、その土を以て、新規に山のかたちをきづく。それより、老若男女を論ぜず、(略)われもわれもと土をはこぶ。力すぐれし壮士は、十人前も一人ではこび、或は一もつこう、二もつこう、又やごとなき姫御前も紙につゝみ

てそれ^{それ}くに、多少を論ぜ^{つちか}ず土持して、だんだんつもる一^{いっ}簣^き功終に九^{きゅう}仞^{じん}の山となれり」とある。人それぞれに^{それぞれ}に応じて土を運び積み上げて高い山となるというイメージから名乗ったか。

★8月16日、柳橋^{やなぎばし}の河内屋半次郎^{かわちやはんじろう}の料理屋で書画会を催す。書画会は、期日の前^{きごう}から揮毫する画家や書家のなどの名を宣伝しておき、客は揮毫する画家達を眺めながら会食し、気に入った書画を買い求めるといもの。絵師たちの資金集めでもある。

★「画狂老人記」時代、錦絵はほとんど描かず。肉筆画を多く手掛ける。

【卍に改め、北斎なることを知らず】

※「梅彦氏曰く、此の頃、北斎の名世に顕れて、婦女子といへども知らざるものなし。然るに名^なを卍と改めし時は、人皆前の北斎なることを知らずして、大に怪みたり。それにつき一話あり。北斎翁、嘗て川柳風の狂句を好み、名を百姓といひ、秀吟頗る多し。実に葛飾連^{かつしかれん}注1の棟梁たり。或時中橋^{あるときなかはし}注2の小川といへる茶店にて、川柳点^{せんりゆうてん}注3の開卷^{かいかん}注4ありしが、其の帰りがけ、人々と共に日の暮れければ、日本橋の雨店^{あまだな}注5にて、小田原提灯^{おだわらちようちん}注6一ツを買ひ求めんとするに、これなし。只油も引かぬ白き提灯のみありたり。連中の夢助といへる人（本所^{ほんじよ}堅川^{かたがわ}の人）指して卍さんチョット、かきて給はれといふ。翁はよしくとて、傍^{かたわら}の硯箱^{すずりばこ}にありし筆を採り、提灯のさげ方を見世の男にもたせ、底の方を左の手にもちて、???注7二ツ三ツを画きたり。其の男これを見て、おまへさんは、なかく画心がありますといひしに、人々ドット笑ひて、いとおかしかりしとて、翁嘗て余に語れり」」（『葛飾北斎伝』p139～140 ルビは筆者）

注1) 葛飾連：狂歌や俳諧等の愛好者のグループを連という。北斎は自分の川柳グループの主催者だったのだろう。

注2) 中橋：中橋広小路。日本橋の南、通4丁目に隣接した地帯（現東京都中央区八重洲3・4丁目）（『葛飾北斎伝』脚注）。

注3) 川柳点：前句付の評点を行う川柳の会（『葛飾北斎伝』脚注）。

注4) 開卷：俳句や川柳を一座の前で披露すること。

注5) 雨店：尼店であろう。室町一丁目西側の一面の俚俗の称（現東京都中央区室町一丁目）。古く尼ヶ崎屋某という漆器店があり、この略称に由来するという（『葛飾北斎伝』脚注）。

注6) 小田原提灯：ぶらさげて携行する円筒状の提灯。天文年間（1532～55）小田原の甚左衛門の創始によるといふ（『葛飾北斎伝』脚注）。

注7) ???：実際は疑問符の下^かの点がない模様^かに似た図柄^かが三つ並ぶ。意味不明。

【どら孫を自立させるも、依然物入りの生活】

★放蕩の孫に店を持たせ肴売りとさせ、女房を持たせる。

※10月23日、嵩山房^{そうざんぼう}（小林新兵衛^{こばやししんべゑ}）宛書簡（金策依頼の手紙の一部）。

「(略)さて、愚老どら者にふり込れ、夫より人足島^{にんそくじま}脚注、彼是と評議仕^{つかまつり}、色々打寄相談^{いろいろうちり}の上にて、引受人等出来仕^{ひきうけにんとうしゅつたいつかまつり}、店を為持^{もたま}、肴売と相成^{あひな}、両三日中には、ヤツト女房を、も

たせ候手筈に候、乍然未だ老人の物入に罷成候(略)」（『葛飾北斎伝』 p233 ルビは筆者による）。

脚注) 人足島：免囚や無宿者の収容と何らかの技術習得を目的として石川島に設置した人足寄場。現在の東京都中央区佃2丁目辺。

※この二ヵ月後には出奔したといわれる。孫は25歳ぐらいである。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 十二編』(1月2日。初摺版は墨摺。無款。22.7×15.7
すみだ北斎美術館/島根県立美術館/浦上満氏/フリーア美術館：フルヴェアー・コレクション蔵)

※奥付には書肆として、河内屋喜兵衛(大坂心斎橋筋)、永楽屋東四郎(尾州名古屋本町七丁目)、同出店(江戸日本橋通本銀町)、角丸屋甚助(同麴町四丁目)と記されている。最終ページに彫工の江川留吉の名が記される。

※十一編は文政6年(1823)～天保4年(1833)頃に刊行か。

序文「北斎漫画は、雇愷之注甘蔗(筆者注：さとうきび)を食ふが如く、漸佳境に入れり。十二編に臻て狂態百出、筆力老てますく壯也。僧正注₂が俵と軽量を論じ、一蝶注₃が鞠と高低をあらそふべし。絵難房注₄ふたゝび生るとも、いかでか間然する事を得ん。天保甲午芍薬亭注₅」(『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎より)

注1) 雇愷之：344?～405? 中国東晋の画家。サトウキビをかじるにも、一般の人と違って先端の方から甘い根の方へとかじるのが常であり、その理由を問われたときに「漸く佳境に入る(漸入佳境)」と答えたという。この言い回しは、感興が高まる形容として使われるようになる(Wikipediaより)。

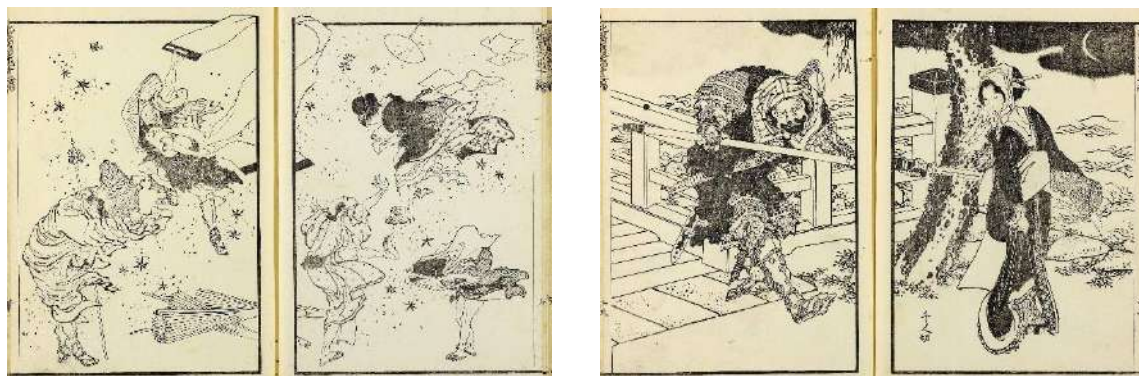
注2) 僧正：鳥羽僧正が米俵が風に吹かれて塵灰のように飛んで、それを小僧や法師たちが追いかけている絵を描いたので、院がその意味をたずねたところ、寺に届けられた供米を俵に入れるとき不正が行われて、中は糟糠(米ぬかなど)だけになって軽いので風に吹かれて空に飛んでしまう旨を描いたのでと答えた。そのことで上皇は、俵に米を詰める際に不正が行われている事を知り、以後供米の取扱が厳しくなったという『古今著聞集』の話を念頭にしている。

注3) 一蝶：1652～1724。英一蝶。江戸元禄期の画家。一蝶の「清水の舞台の蹴鞠図」には、清水寺の舞台の高欄の上で蹴鞠をしている人物が描かれている。『古今著聞集』の「蹴鞠名人成通の事」にある藤原成通が清水の舞台の高欄の上で蹴鞠をした逸話を画材にした一蝶の絵を念頭にしている。

注4) 絵難房：平安末期から鎌倉初期、後白河法皇の頃の人。どんな名画でも必ず非難した人。『古今著聞集』11に「同御時、絵難房といふ物候ひけり。いかによく書きたる絵にも必ず難をみいだすものなりけり」と記される。

注5) 芍薬亭：1767～1845。芍薬亭長根。江戸後期の狂歌師。

☆表紙：「北斎漫画十貳編図」と横書きで書かれた下に、前北斎為一 尾州書肆 永樂堂の文字を人物のあちこちに配している図。



伝神開手『北斎漫画』十二編（ARC 古典籍データベースより）

●絵本『絵本忠経』（1月。墨摺。絵本一冊。葛飾前北斎為一老人画。見返しには、前北斎卍老人画。高井蘭山注解。奥付に「天保五甲午年正月発兌」とある。江戸・小林新兵衛、大坂・秋田屋太右衛門、大坂・敦賀屋九兵衛、京都・出雲寺文次郎、京都・勝村治右衛門、江戸・岡田屋嘉七、江戸・英大助、江戸・須原屋茂兵衛版。22.8×15.8 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東洋文庫蔵）

※中国古典を題材にした絵本。



絵本忠経（大英博物館）

●錦絵『諸国名橋奇覧』（春。横大判錦絵揃物。全 11 枚。前北斎為一筆。西村屋与八版）
 ※全 11 枚のシリーズは不自然として、檜崎宗重氏は「甲陽猿橋」あたりを付け加えて 12 枚揃とするという意見を『名品揃物浮世絵 8 北斎 I』解説で紹介している。あるいは 10 図の予定であったが、後から「摂州阿治川口天保山」1 図を付け加えたのではとする見方もある（『2017 北斎一富士を超えて』展図録 p 120）。

☆〈かめんど天神たいこぼし〉（25.3×37.8 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館/国立国会図書館/すみだ北斎美術館/ 日本浮世絵博物館/ウィクトリア・アルバート博物館/ミネアポリス美術研究所/フルウェー・コレクション/ホノルル美術館/アレン・メモリアル美術館：マリー・エインズワース・コレクション/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵）

※江東区にある亀戸天神には境内の心字池に架かる小さな太鼓橋がある。菅原道真を祀り毎月 25 日に書道の手習いで多くの人が参詣したという。境内には梅や藤が見事に咲き名所となっている。本図では数名の人物が橋上などで静かに池などを眺めていて、梅や藤も描かれていない。全体に周囲の景色を簡略化して太鼓橋を強調している。

かめみど天神たいこばし (メトロポリタン美術館)

☆〈足利行道山 くものかけはし〉 (25.7×38.2
メトロポリタン美術館/北斎館/日本浮世絵博物館/
山口県立萩美術館・チコチコレクション/ポーランド美術館/
ホノルル美術館/すみだ北斎美術館/ウィクトリア・アルバート
博物館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館：ブルヴェ
ー・コレクション/アレク・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション
//中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※行道山浄因寺 (栃木県足利市) の名刹を舞台に、
本堂と茶室・清心亭に架けられた突桁橋 (兩岸から
の跳木で橋の桁を支える構造で脚柱が無い橋) を
描く。中空に浮いているような橋を円形に描き、
岷々たる山の峰を強調することで、修験道の山の厳
しさを出している。人物は描かれない。

足利行道山 くものかけはし (メトロポリタン美術館)

☆〈山城あらし山吐月橋〉 (25.6×37.3 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館
/日本浮世絵博物館/フリーア美術館：ブルヴェー・コレクション/すみだ北斎美術館/ホノルル美術
館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

山城あらし山吐月橋 (メトロポリタン美術館)

※吐月橋は、京都嵐山の太閤川に架かる渡月橋のこ
と。霞のかかる山中に法輪寺の堂が小さく見え、そ
の前の川岸には桜が咲き誇っている。橋には桜を楽
しむ人や歩いている人が数人描かれ、川面にはゆつ
たりと筏が行く。

☆〈すほうの国きんたいはし〉 (25.0×36.9 メトロポリタン美術館/北斎館/すみだ北斎
美術館：ヒーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館/大英博物館/山口県立萩美術館/島根県立美
術館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館ブルヴェー・コレクション/ホノルル美術館//中外産業株式会
社：原安三郎コレクション蔵)

※錦帯橋は、山口県岩国市の錦川 (岩国川) に架
かる日本三大名橋の一。太鼓橋の連なる雨の中の橋
上で、傘をさしている侍の後ろを笠を被って長鍵を
持って従う男や、鉢箱を担いだ男などが描かれ
る。遠方に岩国城が見える。後摺版では、雨が削
られている。

すほうの国きんたいはし (メトロポリタン美術館)



☆〈飛越の境つりはし〉（25.7×37.9 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館：新庄コレクション/大英博物館/ミネアポリス美術研究所/日本浮世絵博物館/山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館/東京国立博物館/太田記念美術館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館/ブルーエター・コレクション/ホノルル美術館/アレキ・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション/ブリュッセル王立美術歴史博物館//中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵）

※飛越は、飛驒と越中、あるいは越後を指すか。農家の夫婦が荷を背負って渡る吊橋はその重さに大きく下に撓んでいる。橋の右の山頂には二匹の鹿が静かに草を食んでいる。このような橋が実際にあったか、どこにあったかは不明。

飛越の境つりはし（メトロポリタン美術館）



☆〈かうつけ佐野ふなはしのこづ〉（24.9×36.8 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館：新庄コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/大英博物館/ミネアポリス美術館/太田記念美術館/ギメ美術館/群馬県立歴史博物館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館：ブルーエター・コレクション/ホノルル美術館//中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵）

かうつけ佐野ふなはしのこづ（メトロポリタン美術館）

※上野国佐野にあった船を並べた橋。万葉集巻 14にある「上野佐野の舟橋取り放し親は離くれど吾は離かるがへ」と詠われる烏川（群馬県高崎市上佐野）で有名な橋だが、北斎の頃には既になく、「古図」によって描いたもの。ほぼ右へ直角に折れて対岸に渡る橋の上を雪を被りながら渡る二人

の男と、馬に乗った男とその手綱を引く男の図。雪景色の図になっているのは、藤原定家の「駒とめて袖うちはらふかげもなし 佐野のわたりの雪の夕暮れ」からの着想ともいわれる。但し、この佐野は和歌山県新宮市の佐野である。「百橋一覽」（文政 6 年：1823）の右下に、小さく同じ構図が描かれている。



☆〈東海道岡崎矢はきのはし〉（25.0×37.4 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館/日本浮世絵博物館/山口県立萩美術館/ホノルル美術館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館：ブルーエター・コレクション/ホノルル美術館//中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵）

※矢作川に架かる多くの橋梁に支えられる太鼓橋。橋上には多くの旅人が行交い、橋下の中州らしい所で大的を射る弓道の演武が行われている。この弓道は、藤原為家の和歌「あづさ弓矢矧の里のかば桜 花にのみいるわが心かな」を踏まえているのではないかという説もある（『名品揃物浮世絵 8 北斎 I』解説）。

橋の手前の下の洲には柄の長い傘が刺してあり、その面には版元の永寿堂の文字や版元印、版元の住所（馬喰町二丁）がさりげなく記されている。

東海道岡崎矢はきのはし (メトロポリタン美術館)

☆〈**ゑちぜんふくゐの橋**〉 (25.8×38.4 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/福井県立美術館/フリーア美術館：フルヴェラー・コレクション/クラブ・ホーン・コレクション/ルヴェラー・コレクション/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/神奈川県立美術館/ホノルル美術館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)



※福井県足羽市内に架かる九十九橋を描く。石橋と木橋を中央で組み合わせた珍しい橋が北斎の興味を惹いたのではともいわれる。橋の向こう側の岸边にすだれのように立てかけてあるのは、越前の名物である奉書紙だろうか。『日本山海名物図絵』(宝暦4年：1754 平瀬徹斎作。長谷川光信画)三巻の「越前福井石橋」を参考にしたといわれる。 ゑちぜんふくゐの橋 (メトロポリタン美術館)



※校合摺がある (島根県立美術館：永田コレクション蔵)

☆〈**三河の八ツ橋の古図**〉 (25.8×38.1 メトロポリタン美術館/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館/大英博物館/すみだ北斎美術館/クラブ・ホーン・コレクション/フリーア美術館：フルヴェラー・コレクション/ホノルル美術館/メトロポリタン美術館/アレン・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション//中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※『伊勢物語』九段の杜若で有名な八つ橋 (愛知県知立市の東部、逢妻川南の水郷地帯) を描く。「ある男」が伴の者に「ここに咲くかきつばたの五文字を頭に据えて旅の心を詠め」と所望され、「からころも きつつなれにし つましあれば はるはるきぬる たびをしぞおもふ」(いつも着て柔らかく着なれた唐衣のように、慣れ親しんだ妻を都に残して、はるばるとここまで来た旅をしみじみと思うことだ)と折り句を詠んだ故事で有名な橋。但し北斎の頃にはこの橋はなかったと思われ、「かうつけ佐野ふなはしの古づ」同様「古図」によって描いたもの。杜若が群生する上に架けられた曲がりくねった橋を旅人や農夫などが渡っている。



三河の八ツ橋の古図 (メトロポリタン美術館)

☆〈**摂州阿治川口天保山**〉 (25.2×37.8 この図のみ「應需似浪花之図 前北斎為一筆」の落款がある。メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館/大英博物館/すみだ北斎美術館/フリーア美術館：フルヴェラー・コレクション/ホノルル美術館/神奈川県立歴史博物館/日本浮

世絵博物館/山口県立萩美術館/アレン・メリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵)

※天保山は、阿治川（安治川）河口に、天保3年(1832)に完成した人工の小丘で眺望がよいので行楽客で賑わったという。図は、天保山全体が描かれ、麓から山頂にかけての道の途中に架かる二橋を描く俯瞰の構図になっている。全体が遠景となっていて、人物も小さく描かれている。「似浪花之図」とあるので、大坂で描かれたなにかの図から描いたと思われる。



阿治川口天保山（メトロポリタン美術館）

☆〈摂州天満橋〉（25.8×37.6 メトロポリタン美術館/北斎館/島根県立美術館/国立国会図書館/すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/ギメ美術館/クラブ・ホン・コレクション/フリーア美術館/フルガ・エー・コレクション/ホノルル美術館/中外産業株式会社：原安三郎コレクション蔵）

※天神橋、難波橋に並んで浪花三大橋の一で淀川に架かる。旧暦6月25日（現在は7月25日）、天満天神の大祭の人出の賑わいが描かれ、橋上には提灯がたくさん据えられ、所狭しと人々がいる図。橋下には提灯を付けた何艘かの船が浮かんでいる。



摂州天満橋（メトロポリタン美術館）

●「西村屋版中判花鳥シリーズ」（正月。縦中判錦絵揃物。10枚揃。2図ずつ組み合わせた装丁となっている。漢詩や俳句が添えられる。前北斎為一筆。西村屋与八版）

※『千代椿良著聞集』（曲亭馬琴作）第二輯の出版広告（西村屋与八の天保5年の広告）に「花鳥色紙絵 極彩色」とある。動植物の説明は「デジタル大事典」による。

☆〈芍薬 カナアリ〉（24.3×17.9 大英博物館/東京国立博物館/ギメ美術館蔵）

※背景は全てペロリン藍（ペルシアン・ブルー）。紅色に咲く芍薬の花の蜜を吸うように近づくカナアリ（カナリア）。漢詩は「千葉揚州種 春深覇衆芳 王十朋」

芍薬は、ボタン科の多年草。高さ60センチ。葉は複葉。初夏、大形の紅・白色などのボタンに似た花を開く。漢方で根を乾かして鎮痙・鎮痛剤とする。カナアリは、カナリアで、アトリ科の鳥。野性のもはスズメ大、全体に緑褐色で、カナリア諸島などに分布。日本には18世紀末に長崎に舶来。姿を楽しむ巻き毛カナリア、声を楽しむローラーカナリアなどがあり、羽色も黄・白・灰・赤・橙色などさまざま。



芍薬 カナアリ（大英博物館）

☆〈鶯 垂桜〉（24.3×18.2 大英博物館/ベルリン東洋美術館/ギメ美術館/オーストリア応用美術館/東京国立博物館/ホノルル美術館蔵）

※垂桜の枝に逆様にとまる鶯。喉の部分が淡紅色なので雄の鶯である。背景は無地で全てベロリン藍（ペルシャン・ブルー）。雪萬の句「鳥ひとつ 濡て出けり 朝さくら」が添えられる。



垂れ桜は、バラ科の落葉高木。ウバヒガンの変種で、枝先が垂れ下がるもの。3月上旬に淡紅白色の花を開く。紅色の花をつけるベニシダレなど品種も多い。鶯は、アトリ科の鳥。全長16センチくらい。頭は黒く、背は青灰色。雄は頬の辺りに淡紅色の部分がある。山地の樹林にすみ、フイーフィーと口笛を吹くような声で鳴く。

鶯 垂桜（大英博物館）

☆〈文鳥 辛夷花〉（25.0×18.1 島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/東京国立博物館/すみだ北斎美術館/ベルリン東洋美術館蔵）

※辛夷の花を付けた左上から右下に流れる茎の途中で止まって休む文鳥。足でしっかり体を支え、下に向かって飛び立とうとしているようにも見える。背景を紅色で上からのグラデーションで描いている。漢詩は「東風日夜發 桃李不禁吹 檢点濃華事 辛夷落較遲 陳淳」



文鳥は、カエデチョウ科の鳥。全長約15センチ。体は灰色で、頭や尾が黒、ほおが白、くちばしは太く赤い。飼い鳥とされ、全身純白のものもある。ジャワおよびバリ島の原産。辛夷は、モクレン科の落葉高木。山野に見られ、葉は幅広の倒卵形。春、葉より先に、大形の香りのある白色の6弁花をつける。秋に実が熟すと裂けて赤色の種子が垂れ下がる。

文鳥 辛夷花（大英博物館）

☆〈藤 鶺鴒〉（25.8×18.6 大英博物館/東京国立博物館/ベルリン東洋美術館蔵）

※垂れる藤の下で、鋭く尾を立てた鶺鴒が止まっているように見える。背景は淡紅色で、上からのグラデーションで描いている。漢詩は「引蔓出雲樹 垂綸覆巢鶺」



藤は、マメ科の蔓性の落葉低木。山野に自生し、つるは右巻き。葉は卵形の小葉からなる羽状複葉。5月ごろ、紫色の蝶形の花が総状に垂れ下がり咲く。園芸品種が多く、棚作りなどにして鑑賞する。鶺鴒は、スズメ目セキレイ科の鳥のうち、キセキレイ・セグロセキレイ・ハクセキレイなどの総称。水辺でみられ、スズメより大形。尾が長く上下に振る習性がある。

藤 鶺鴒（大英博物館）

☆〈子規 杜鵑花〉（24.4×18.0 大英博物館/東京国立博物館蔵）

※杜鵑花が赤く咲き乱れ、その上を飛ぶ子規。背景は雲と青空が描かれる。背景は上部を薄いベロ藍で描く。漢詩は「只驚白昼山竹裂 杜宇初聞第一声 楊誠齋」



子規は、時鳥、杜鵑とも表記する。カッコウ科の鳥。全長 28 センチくらい。全体に灰色で、胸から腹に横斑がある。アジア東部で繁殖し、冬は東南アジアに渡る。日本には初夏に渡来。キョキョキョと鋭く鳴き、「てっぺんかけたか」「ほぞんかけたか」「特許許可局」などと聞きなし、夜に鳴くこともある。自分の巣をもたず、ウグイス・ミソサザイなどの巣に托卵する。

子規 杜鵑花 (大英博物館)

☆〈黄鳥 長春〉 (26.0×19.0 島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/東京国立博物館蔵)

※図の左右に薔薇の花が描かれ、横に伸びた細い茎に止まる黄鳥。黄鳥は高麗鶯のこと。背景は上部を薄いベロ藍のグラデーションにしている。乙二の句「はらの華 ありぬる折か 岡の家」が添えられる。

高麗鶯は、セズメ目コウライウグイス科の鳥。全長 26 センチくらい。全体に黄色で、尾や翼の先、目から後頭部にかけて黒い。中国・朝鮮半島・東シベリアに分布。日本では迷鳥。鳴き声がよい。ウグイスとは別種。黄鶯、朝鮮鶯とも。長春は、長春花のことで庚申薔薇の別名。コウシンバラは、バラ科の常緑低木。主に 5 月ごろ紅紫色の花を開くが、四季を通じて咲く。名の庚申は隔月の意で、たびたび花が咲くことによる。中国の原産で、庭園に植えられる。

黄鳥 長春 (島根県立美術館)



☆〈鶇 白粉花〉 (25.2×18.7 東京国立博物館/ミネアポリス美術館/ベルリン東洋美術館蔵)

※白粉花の茎に止まり上を見ている鶇。賛の句は「白粉の花や牡丹のうしろ垣 瑤台女」

鶇は、アトリ科の鳥。全長 23 センチくらい。体は灰色で、頭・風切り羽・尾羽は紺色。くちばしは太く黄色。木の実を食べる。さえずりは「お菊二十四」などと聞きなされ、「月日星」とも聞こえるところから三光鳥ともいう。東アジアに分布。白粉花は、オシロイバナ科の多年草。園芸上は一年草としても扱われる。高さ約 1 メートル。葉は広卵形で、対生する。花は夏から秋にかけて咲き続け、色は紅・白色や絞りなどがあり、らっぱ状で、夕方に開く。江戸時代、種子の白い粉をおしろいの代用にした。

鶇 白粉花 (東京国立美術館)



☆〈翡翠 鳶尾艸 瞿麦〉 (25.0×18.8 東京国立博物館/ギメ美術館蔵/ヴィクトリア・アルバート博物館/ホノルル美術館蔵)

※鳶尾艸は、あやめのこと。青いあやめの根元に赤いなでしこが咲き、カワセミがアヤメの緑の葉の間から顔を覗かせている。漢詩は「回顧生碧色 動揺揚縹青 蔡邕」

翡翠は、ブッポウソウ目カワセミ科の鳥。全長 17 センチくらい。頭から背にかけて光沢のある青緑色、腹は栗色。くちばしは大きく、黒色で、雌は下くちばしが赤。水に飛び込んで魚を捕って食べる。鳶尾艸は、射干、著莪とも表記する。アヤメ科の多年草。林下に群生し、高さ 50～60 センチ。葉は剣状。5 月ごろ、黄色い斑点のある白い花を咲かせる。種子はできない。胡蝶花ともいう。瞿麦は撫子とも表記する。撫子は、ナデシコ科の多年草。山野に自生し、高さ約 50 センチ。葉は線形で白色を帯び、対生。夏から秋、淡紅色の花を開き、花びらの先は細く裂けている。秋の七草の一。



翡翠 鳶尾艸 瞿麦 (東京国立博物館)

☆〈^ア鶇 (鶇) ^{おにあざみ}小薊 (25.4×18.6 島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/東京国立博物館/ベルリン東洋美術館蔵)

※赤い薊の花を咲かせている緑の茎に止まっている鶇。背景の上部はベロ藍でグラデーションに彩色している。「鶇」は「鶇」の誤表記。賛の句は「暮るまで日あたる岸や花薊桃坡」

鶇は、アトリ科の鳥。全長 18 センチくらい。全体に雄は暗紅色、雌は黄緑色。くちばしは曲がって上下が食い違い、松やモミの実を食べる。ユータシアと北アメリカに分布。日本には冬に渡来するが、繁殖することもある。小薊は鬼薊と表記する。鬼薊は、キク科の多年草。日本特産で、本州の山中に自生。高さ 0.5～1 メートル。全体に毛が多い。葉は基部が広く、縁に長いとげがある。6～7 月ごろ、粘りけのある紫色の頭状花をつける。



鶇 (鶇) 小薊 (島根県立美術館)

☆〈^{もず}鶇 ^{るり}翠雀 ^{ゆきのした}虎耳草 ^{へびいたご}蛇莓 (25.4×18.6 東京国立博物館/ベルリン東洋美術館/すみだ北斎美術館蔵)

※赤い蛇莓と緑の虎耳草に向かっている鶇と翠雀。背景の上部はベロ藍で下に向かってグラデーションになっている。賛の句は「百舌鳴や分別は皆草にある 蘿雲」

鶇は百舌、百舌鳥とも表記する。鶇は、モズ科の鳥。全長約 20 センチ。雄は頭部が赤茶色で目を通る黒い帯があり、背面は灰褐色、下面は淡褐色。雌は全体に褐色。くちばしは鋭い鉤状をし、小動物を捕食。秋になると、獲物を木の枝などに突き刺して速贄にを作る習性があり、また、長い尾を振りながらキイキイキチキチと鋭い声で高鳴きをする。平地や低山の林縁で繁殖。翠雀は瑠璃鳥で、ヒタキ科ヒタキ亜科の鳥。全長 17 センチくらい。雄は背面が瑠璃色でのどから胸が黒色。雌は全体に褐色。日本へは夏鳥として渡来、溪流近くで繁殖し、冬季は東南アジアへ渡る。高い木の上で朗らかにさえずる。オオルリ。虎耳草は「雪の下」と表記する。ユキノシタ科の多年草。湿った所に生える。全体に毛があ

り、茎は紅紫色で地をはい、節から小苗を出して増える。葉は多肉質の腎臓形で、長い柄があり、裏面は暗赤色。夏、20～50センチの花茎を伸ばし、白い花をまばらにつける。花びらは5枚あり、下の2枚が長い。葉を腫れ物の民間薬にし、食用にもする。蛇莓は、バラ科の多年草。原野や道端にみられ、茎は地をはい、節から新芽を出してふえる。葉は3枚の小葉からなる複葉で、長い柄をもつ。4～6月、黄色い5弁花をつけ、実は赤く熟し、食べられるが味は淡白。

鴟 翠雀 虎耳草 蛇莓 (すみだ北斎美術館)



●**団扇絵シリーズ** (「西村屋中判花鳥シリーズ」の別摺版。所在不明) 団扇絵判錦絵。前北斎為一筆。版元不明)

●**『森治版長大判シリーズ』** (仮題。5図。前北斎為一筆。長大判錦絵揃物。各平均52.0×23.6 森屋治兵衛版 すみだ北斎美術館/東京国立博物館蔵)

☆**〈滝に鯉〉** (「鯉の滝登り」とも。重要美術品。52.2×23.2 大英博物館/ホノルル美術館蔵)



※滝を上る鯉と、滝下の烈しい水流から顔をのぞかせる鯉。

滝に鯉 (大英博物館/ホノルル美術館)

☆**〈牧馬〉** (「群馬」とも。51.3×23.5 日本浮世絵博物館/東京国立博物館蔵)

※若松の茂る野原に放たれた馬の群れ。手前には朱色の馬と茶色の馬(鹿毛)が大きく描かれ、葦毛(白馬)の小馬が足元で懐いている。遠景に、水面を泳いで向こう岸に渡る馬や腹這いの馬、小松の生えた丘に二頭の馬などが描かれる。

牧馬 (日本浮世絵博物館)



☆**〈游亀〉** (「水中の亀」とも。重要美術品。50.0×23.8 東京国立博物館/ホノルル美術館蔵)



※水中に三匹のが泳いでいる。手前の亀は幸福の象徴である末広がり尾を靡かせている瑞亀となっている。水草の浮く水面は日の光を浴びて輝いている。

游亀 (東京国立博物館)

☆**〈桜に鷹〉** (「止まり木の鷹、桜」とも。

52.0×23.6 東京国立博物館/日本浮世絵博物館蔵)

※桜の花が咲く側の鷹狩用の架垂れの紐付きの架(止まり木)に止まって天を見上げる鷹の凜とした表情の図。



桜に鷹（日本浮世絵博物館）

☆〈雪の松に鶴〉（「雪中松に鶴図」「鶴二羽雪の松」とも。49.6×23.2 島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館/ボストン美術館/ヴィクトリア・アルバート博物館/大英博物館/千葉市美術館/ホノルル美術館蔵）

※雪を被った湾曲した松の老木に二羽の鶴（一羽は羽を広げている）がとまっている図。手前の鶴の羽はベロ藍で描かれる。

雪の松に鶴（日本浮世絵博物館）



【イメージとアイデアが自在に広がる『富岳百景』】

●絵手本『富嶽百景』初編（3月。半紙本薄墨摺一冊。江戸馬喰町、西村屋祐蔵（成鄰堂）版。連梓：永楽屋東四郎、角丸屋甚助、西村屋与八。柳亭種彦序文。七十五歳前北斎為一改画狂老人卍筆。印富士の形（表紙のみ）。各平均 22.6×15.7 大英博物館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/檜崎宗重コレクション/東京国立博物館/国立国会図書館//山口県立萩美術館/浦上蒼穹堂/日本浮世絵博物館/東洋文庫：岩崎コレクション/フリーア美術館：プルヴェーア・コレクション）

※二編は翌年出版される。三編の刊行年は不明。

※初編から三編まで全 102 図。河村岷雪の「百富士」（1767）に倣う。『富嶽三十六景』から更に富士に対する画興を深化させたと思われる。『富嶽百景』では、富士から受ける自由なイメージを広げていて、単調な墨摺のグラデーションを生かし、『富嶽三十六景』で描ききれなかった富士との自由な関わりや心象を表現したと思える画帖となっている。イメージのカラーージュであり、名所絵や風景画の範疇を超えている。

【色をすて、墨一色の濃淡で大地の空気が動く】

※檜崎宗重『北斎論』（p 425）に参考にすべき記述がある。

「（略）晩年北斎は風景画の表現に色数を二三色に限定した。絵手本類では僅かに一色にしたものがある。それは線を以て立つ北斎が、線をすてることが出来ず、線を有効に働かせる為の色の削減であったとみるべきであるが、この富嶽百景に至っては、思ひ切つて色をすて、墨一色摺となした。墨を濃淡二色に分ち、濃墨を以て線を作り淡墨を以て色感を凝集表現した。従つて線は有効に活動して居り、而も大地の空気が動いてゐるのである。実にこれこそ風景版画の絶妙ちいふべきであつて、北斎最大の傑作となすに憚らない」

【我真面目の画訣この譜に尽せり】

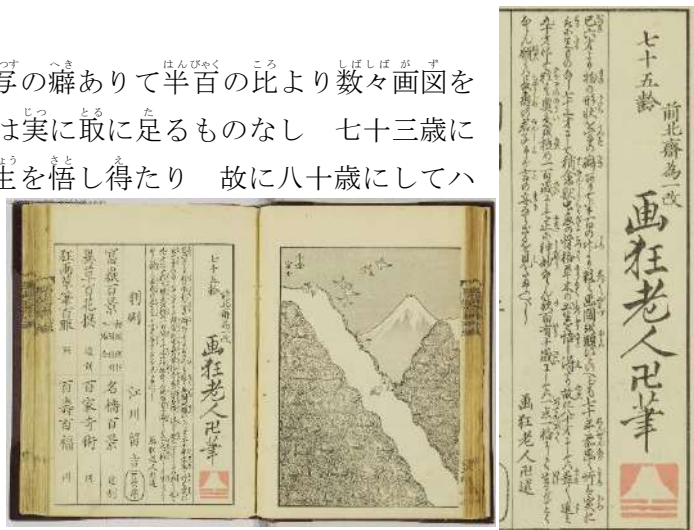
※西村屋与八・西村屋祐蔵（成鄰堂）の前年の広告。

「（略）此編ハ翁諸州を遊歴せる比普く勝槩（筆者注：勝景に同じ）を搜り佳景を索め山川原野閭巷（筆者注：村里）僻陋（筆者注：田舎びた所）幽邃の地といへども遺漏なく

其真趣を模写し 管笥（筆者注：四角い竹籠）に秘蔵する縮図なり 翁僕に語りて曰 我真面目の画訣この譜に尽せりと 愛玩して措ず 僕展覧するに些々たる片楮の中千山万水の妙境を収め丹青の奇絶所謂全龍の顕然たる者也（略）」（檜崎宗重『北斎論』：『年譜』資料 21 所収。ルビは資料のまま。読みやすくするため句点を示す空白を施した）

【己六歳より物の形状を写の癖ありて（略）七十年前画く所は実に取に足るものなし】

※跋文「己六歳より物の形状を写の癖ありて半百の比より数々画図を顕すといへども七十年前画く所は実に取に足るものなし 七十三歳にして稍禽獣虫魚の骨格草木の出生を悟し得たり 故に八十歳にしてハ益く進ミ九十歳にして猶其奥意を極め一十歳にして正に神妙ならん歟 百有十歳にしてハ一点一格にして生るがごとくならん 願はくは長寿の君子予が言の妄ならざるを見たまふべし 画狂老人卍述」。



『富嶽百景』初編・跋文（大英博物館：古典籍 ARC ポータルデータベースより）

【初めて川柳の号である「卍」の落款を用いる】

※「天保五年、北斎翁『富嶽百景』の初編を画きし時、名を改めて卍といふ。これより落款には、かならず画狂老人卍、或は前北斎卍と書す」（『葛飾北斎伝』 p138）

文政 8 年（1825）の川柳本『十二評十六題 狂歌国尽』（瀬川路蝶撰）の序文には「干時文政酉夏 前北斎為一述卍」とある。

※「富嶽百景」以後、錦絵・風景画を離れ、故事古典・歴史・動植物・教訓本に専念。歌川広重の風景が人気であることの影響もあるか。

【初編】

☆〈袋〉（図上部に横書きで、「天保甲午 新鑄（筆者注：新彫に同じ）」とある。足を紐でつながれ止まり木に止まる鷺を描き、前北斎為一改画狂老人卍筆と署名する。オランダ国立民族学博物館蔵）

※以下の図版は山口県立萩美術館：浦上記念館作品検索システムより。

☆〈扉：富嶽百景 成鄰堂〉

☆柳亭種彦の序文。

☆〈木花開耶姫命〉



※富士山の神体とされる木花開耶姫命（浅間大神）が鏡をかざす姿を描く。江仙（江川仙太郎）彫刻。

木花開耶姫命

☆〈孝霊五年不二峯出現〉

※孝霊5年（BC286）に富士山が出現したと伝えられ、新たな山を検分する役人たちと、座って富士を指差しながら記録する男たちを描く。江仙彫刻。

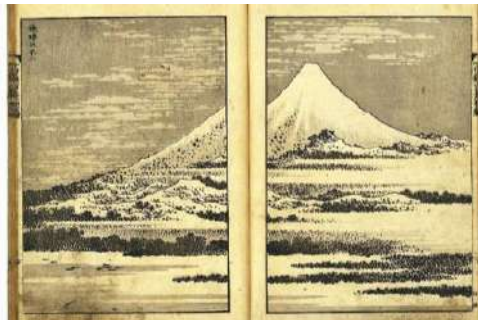
孝霊五年不二峯出現

☆〈役ノ優婆塞富嶽草創〉

※役ノ優婆塞は文武天皇の頃の山岳修験者の祖といわれ、坐ったまま金剛杖を抱え、右手の指で印を結び、前に置いた高下駄を見つめる姿を描く。伊豆に流されたとき、夜に空を飛び富士山で修行したと言われる。江仙彫刻。



☆〈快晴の不二〉



※『富嶽三十六景』の「凱風快晴」に似た富士の図。24.0×16.0 静岡県立中央図書館蔵。富士の裾には残雪が点苔で描かれる。左上の空には鳥が三羽飛んでいるように見える。江仙彫刻。

快晴の不二

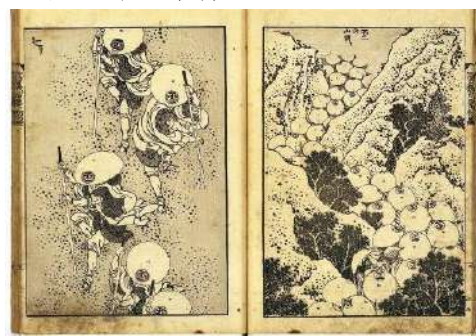
☆〈不二の山明キ〉

※富士の山容が描かれないのは、『富嶽三十六景』の〈諸人登山〉と同様。旧暦6月1日の山開きに「不二」の字を書いた饅頭笠を被った群衆が、S字のように狭く曲がりくねった山道を行く。一人だけ笠の内側の顔を見せて法螺貝を吹いている。江仙彫刻。

迂り 不二の山明キ

☆〈迂り〉

※同じく富士の山容は描かれず、金剛杖を使いながら大砂走り、または砂走りと呼ばれる七合目からの砂場を杖をついて、逆S字に滑り降りる男たちを描く。皆「不二」の字を記した饅頭笠を被り、顔を見せない。



☆〈宝永山出現〉

※宝永4年(1707)の駿河印野村（富士山東麓の村。静岡県駿東郡の村だったが、現在は合併して御殿場市の一部となった）辺での噴火で、いくつかの火口が富士山の瘤のように隆起した。その大噴火で人も家も吹き飛ばされている様子が描かれる。山容は描かれない。梅林彫刻。

☆ 〈其二〉

※ 〈宝永山出現〉の其二の意味であろう。宝永山が富士山の瘤のようになっているのを望み、三人連れの旅人が、顔に瘤のある仲間のそれと見比べて、宝永山を指差している。富士山に見入って背を向けている農夫の後ろで、鋤を持ち腰をかがめる農婦の尻を指差して笑っている二人の旅人。梅林彫刻。

其二



☆ 〈霧中の不二〉

※ 早朝、霧に霞む富士山を遠景にし、別の山の尾根を農具や籠を担ぎながら登る農夫たち。尾根の左側の溪谷に霧に霞む舟がうっすらと五隻描かれる。和助彫刻。

☆ 〈山中の不二〉

※ 山中の老木木の洞に生えた茸を採る農婦たちと、木の根元で鉄砲の手入れをする二人の猟師。その向こうに富士が見える。和助彫刻。

☆ 〈柳塘の不二〉

※ 柳の群れ立つ木々の間から望める富士山の山道を往来する旅人。腰を下ろして富士を見る二人の農夫。「大吉」と染められた腹巻をつけた馬に乗りながら富士を見る男。手に荷物を持って煙管を銜えながら赤子を背負って歩く女。天秤の荷物を担ぐ供人を連れた侍など、多くの人が往来する。吉寅彫刻。

☆ 〈七夕の不二〉

※ あちこちの屋根より高く立てられた竹竿に括りつけられた短冊が風にそよいでいる。手前の屋根の柵には二本の竹が立てられ、図の上部に突き抜けている。吉寅彫刻。

☆ 〈袖ヶ浦〉

※ うねる波と切り立つ岩の下に掘られた室に座像らしきものが描かれ、岸近くの家並の向こうに富士が描かれる。空には鳥が群れ飛んでいる。相模国足柄郡袖ヶ浦の寒々とした景觀といわれる。

☆ 〈尾州不二見原〉

※ 『富嶽三十六景』の〈相州梅澤左〉の構図に似ている。地上に群れる十羽の鶴の向こうに富士山を描く。古雪彫刻。

山亦山 尾州不二見原

☆ 〈山亦山〉

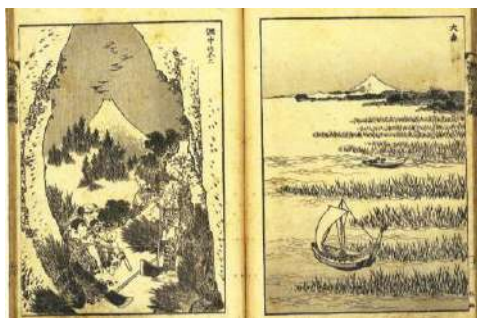
※ 図の手前から瘤のように凹凸を繰り返す連山の山容は、文字通り山亦山のようなものである。尾根を続きを鳥瞰し、その先に富士山を描いている。

☆ 〈大森〉



※江戸の大森海岸から富士を望む図。手前には帆掛け舟が停泊し、その向こうの葦の間には海苔を採っていると思われる舟が浮かんでいる。葦のように見えるのは竹や木を組み合わせて海苔を付着させる筵と呼ばれる養殖用の仕掛といわれる。江仙彫刻。

洞中の不二 大森



☆〈洞中の不二〉

※山の洞で、鉞を置いて座って休んでいる樵。その前で鉞を杖にして立って休んでいる樵。二人のいる洞の内側から富士山を見た図。空には雁が群れ飛んでいる。

☆〈松山の不二〉

※群生する丈の低い若い松のある丘陵で、多くの旅人が休んでいる。揚帽子の女の一行やお供の男たち。向こうから坂道を登ってきた旅人たちがいる。杉の向こうに富士山。一説に茸狩りの図としている。吉寅彫刻。

☆〈烟中の不二〉

※木の股に「青面金剛」注の文字が彫られた石と、その下に小さな金剛が安置されている。その木の前で、旅人が、はらはらと落ちてくる紅葉を集めた焚火の前で手をあぶったり、煙草を吸って休んでいる。馬も手綱を垂らして側で休んでいる。焚火の煙を通して透かし見える富士山が描かれる。吉寅彫刻。

注) 青面金剛：帝釈天の使者の金剛童子。身体は青色、目は赤く三眼。怒りの表情で病魔を退散させるという。

☆〈田面の不二〉

※田面に移る逆さ富士。四羽の鶴が地上に降り立ち、二羽の鶴が飛んでいる。向こうの岸にも四羽の鶴が休んでいる。江仙彫刻。

田面の不二



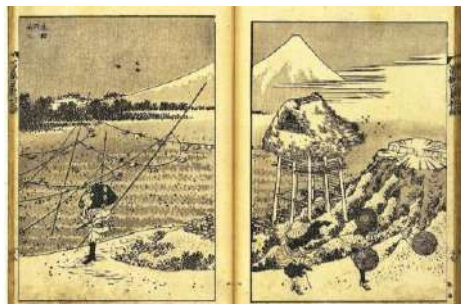
☆〈蘆中筏の不二〉

蘆中筏の不二

※舟着き場で笠を被る二人の男が釣りをしている。船着き場から突きだした板の先に座って景色を眺める子ども。蘆の生える水面には船頭が竿さす五隻の筏が進んでいる。背の高い蘆の穂先から富士が覗く。江仙彫刻。

☆〈木枯の不二〉

※『富嶽三十六景』の〈駿州江尻〉同様、木枯らし吹きすさぶ中を行く男は、鳥もちの竿を持ったまま、鳥が集まるように仕掛けた所に立っている。側に建てられた小さな祠のような屋根の茅葺が風で煽られ、その前の道を行く男の担ぐ天秤の前後の籠が裏返しになっている。後ろを行く僧の僧衣も強く煽られて木枯らしに吹きさらされている。背景に富士が描かれ、鳥が三羽飛んでいる。米吉彫刻。



木枯の不二

☆〈元旦の不二〉

※富士を背景に、丸杵に三の字の模様を染めた衣装を着た三河万歳の二人とすれ違う年始周りの一行。主人は袴姿で、荷物を担ぐ使用人が先を行く。主人の後ろには差し箱を担ぐ供人。一行の右側にも松飾を背負った男がすれ違う。図の左下には大きな門松と「富」と書かれた凧が置かれている。正月の風景。江仙彫刻。

☆〈江戸の不二〉

※江戸城の鯨鉾から雪の富士を望む。

☆〈鏡臺の不二〉

※富士の頂上にかかる巨大な夕日が光が放射状に空に放たれている。手前には山形の小さな橋を渡る農夫。その後についていく。橋の下を潜り抜ける舟は、狭く低い橋下を通るため、身を屈めている船頭と客たち。図の左の岸には藁を被った大きな樽が二つ描かれる。富士を鏡台に、太陽を鏡に見立てる。



図左の桶はなにか不明。江仙彫刻。

鏡臺の不二

☆〈裏不二〉

※馬を洗う男の前には煙草の葉が整って干されている。裏富士が望める農家の風景。馬の足元には桶に手をやっている女と子ども。図右には、赤子を背負った女が紐を引きながら何かの作業をしている。側で鳥が餌を啄ばんでいる。富士は干した煙草の葉の向こう側に、影のように黒く描かれる。米吉彫刻。

☆〈笠不二〉

※富士の頂上にかかる巻きつくようにかかる笠雲。手前の浅い川を渡る人たち。赤子を背負い鍬を担いだ農婦。牛を引っ張り渡る男。大きな背負い箱を担ぐ男。鉢み箱を担ぐ男。大きな籠を棒に結わえて運ぶ男。糸車を抱え頭に荷物を載せる女。獅子舞の衣装と道具を担ぐ男。全員は膝まで皮に浸かって渡っている。笠雲は『富嶽三十六景』〈甲州三鷹越〉でも描かれる。古雪彫刻。

※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある（17.8×24.4）。

☆〈雲帯の不二〉

※帯のような雲が富士の中腹にかかっている。それを遠く見ながら僧侶が横座りに牛に乗って、富士を見ながら橋の上を牽かれて行く。牛飼いの男は手綱を強く引っ張っている。図の左には水車小屋が描かれ、大きな鉢み箱を三人の人足が運んでいる。横で大小の刀二本を差した侍が、笠を少し持ち上げて様子を見ている。江仙彫刻。

☆〈花間の不二〉

※咲き誇る桜花の間から望む富士。川辺の台地に咲く花の下では三味線を弾く芸者と三人の男が酒宴をしている。川のこちら側の茶店と、川向こうの高台にある座敷には料理を運ぶ釣り綱が仕掛けられ、店の男がそれを引いて籠に載せた料理を運んでいる。吉寅彫刻。

☆〈豊作の不二〉

※稲の実った田圃の盛り上がった畦道を行く二頭の馬につけた腹巻等には「大吉」「仕合吉」などと書かれている。馬を牽く男は鍬を肩に担いでいる。馬の後ろには荷物を天秤棒に架けた行商の男。そこから直角に曲がった細い道にも、天秤棒を担ぐ行商人。向こうからやってくる女は頭に荷物を乗せ、左手で子どもの手を引いている。富士は広い田圃の向こうに描かれる。吉寅彫刻。

☆〈千金富士〉

※富士の稜線のように左右に積み上げられた米俵の間に見える富士。空には数羽の千鳥が舞っている。千金とは、富嶽の「富」と、米の「富」を掛けためでたさを表すため、この図のみ、めでたさを示す「富士」の表記。全体に三角形の構図。江仙彫刻。



千金の富士

【歌川広重が北斎の富士を評価する】

※歌川広重は、安政6年(1859)の『富士見百景』自序で、北斎の描く富士について評価し、さらに自分の富士について述べている。

「葛飾の翁、先に富嶽百景と題して一本を顕す。これは翁が例の筆才にて、草木鳥獸器財のたぐひ、或は人物都鄙の風俗、筆力を尽くし、絵組のおもしろきを専らとし、不二はそのあしらひにいたるもの多し。此図(筆者注:「富士見百景」を指す)は、夫と異にして、予がまのあたりに眺望せしを其儘にうつし置きたる草稿を清書せしのみ。小冊の中もせばければ、極密には写しがたく、略せし処も亦多けれど、図取ハ全く写真の風景にして、遠足障りなき人たち、一時の興に備ふるのみ。筆の拙きはゆるし給へ。一立斎注誌」(信州大学附属図書館「近世日本山岳関係データベース」より)。

北斎は富士を画材としながらも、いつもながらの筆才で、いろいろな対象をそのアイデアやイメージの面白さで表現している。富士はその点景としているものが多い。それに対し自分の富士は見たままを写し清書したもので、紙本も小さいので極密には描けないが、構成はそのままの風景を写したものであり、一時の興とするものであると述べている。

北斎の画才を評価しながら、「筆の拙きはゆるし給へ」と謙遜しながらも、自らの立場を多少の自負も込めて表明している。北斎の『富嶽百景』の評価ばかりでなく『富嶽三十六景』についての評価も含めていると思われる。

注) 一立斎：広重は天保3年(1832)より一立斎と号した。但し、この序文は広重没(安政5年9月6日)後の刊行なので、広重の文ではないとの見方もある。

●肉筆画「雲龍図」(絹本着色一幅。齢七十五歳北斎為一改卍筆。印葛しか。97.5×24.2 個人蔵)



※墨摺風に描く。縦長の画面の左中央から「つ」の字のように龍尾が下に伸び、図の中央左に顔を向けている。図の左下と上に雲の中から龍の爪がのぞいている。

雲龍図(2007『北斎展図録』より転載)

●肉筆画「鶴鴿図」(「雪中せきれい」とも。この頃か。紙本着色一幅。前北斎卍筆。印葛しか。27.2×44.8 北斎館蔵)(『北斎クローズアップⅡ』東京美術)

※雪を被った杭に止まって図の下の方を見る鶴鴿。尾が図の右上に向かった真直ぐ伸びている。

※落款で卍を使い始めた天保5年(1834)以降の作。年齢の記述がない。天保5年～6年と幅を持たせるべきか。天保5年西村屋中判花鳥シリーズでも「鶴鴿藤」を描いている。



鶴鴿図(北斎館)

●扇面画「鶴鴿図」(この頃か。紙本扇面一面。着色。画狂老人卍筆。印葛しか。22.8×49.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※雪で白くなった杭にとまる鶴鴿。下向きで、鋭く伸びた尾は扇面の中央上に向いている。杭の後ろに胡粉による草が白く薄く描かれる。扇面全体は茶色の塗り潰し。

天保6(1835)	乙未	76歳	豆相ノ旅客北斎改画狂老人卍	七十六歳	百姓八右衛門、
三浦屋八右衛門、土持仁三郎、前北斎事画狂老人乞食坊主万字、時年七十五前北斎為一					
(前年の版を引き継いだ名)、(葛飾北斎)、(葛飾戴斗先生)、(前北斎為一老人)、					
前北斎為一改画狂老人卍、七十六歳前北斎為一改画狂老人卍、前北斎卍、前北斎、齢					
七十六歳前北斎為一改画狂老人卍、印富士の形：孫(26歳)阿栄(38歳)					

◇飢饉が続く。

◇5月8日、曲亭馬琴の長男宗伯没(39)。馬琴の宗伯の妻への態度に猜疑した百が別居して長女幸と住む。

◇6月26日、仙台大地震・津波。

◇8月29日、田能村竹田没(59)。

◇11月15日、坂本龍馬生(～1967)。

○歌川広重と溪斎英泉の『木曾街道六十九次』刊行始め。

○鈴木牧之『北越雪譜』初編刊行。

○シーボルト他『日本植物誌』刊行。

【浦賀に蟄居】

★前年冬または今年の春、相州、豆州へ旅する。『絵本和漢誉』(嘉永3年：1850)の下絵(天保6年：1835)の署名に「豆相ノ旅客前北斎改画狂老人卅七十六歳」とある。浦賀に蟄居する。この時、手紙では百姓八右衛門、三浦屋八右衛門、土持仁三郎などを名乗る。

※正月17日付、小林新兵衛(嵩山房)宛書簡には旅中でも元気な様子を伝えている。

「(略)私事も時候故、霜雪に被閉、旅中も心にまかせ兼候。去暮は在体故、衣類等当行キ不申候而、七十六の老人、布子一ツにて寒中を過し申候。余は御賢察可被下候。乍然未だ(腕を振りあげているコマ絵)は、ヨンヂリとも不仕候。益出精仕候而、愈上手に相成度候。夫のみ楽みまかりあり候以上」(『葛飾北斎伝』p148 ルビは筆者)

【『唐詩選』の画料の残額を請求】

★この頃の小林新兵衛宛書簡の終わりに「浦賀旅人」とある(『葛飾北斎伝』p151)。

「舌代注(略)唐詩選注残丁三丁半(筆者注：7ページ)、差上申候。毎度恐入候得共、画料四十二匁之内に●、過借老匁五分御引落し被遊、差引四十匁五分、何卒此者へ御恩借被成下候様、偏に奉希候云々。

板下三丁半添

浦賀旅人

画狂老人卅三拝

小林新兵衛様

御店衆中様(以下略)」

注)唐詩選：天保7年9月刊『唐詩選七言律』を指すか。天保4年正月には『唐詩選五言律』が出ている。残りの三丁半の画稿を送り、画料四十二匁のうち、前借の一匁五分を差し引いた四十匁五分を、自分は浦賀にいたので、使いの者へ渡してほしいというのである。

※天保5年の5月と思われる小林新兵衛宛の書簡に浦賀と思われる「遠方」の文字があるので、あるいは天保5年(1834)の夏にも浦賀にいたのかも知れない。

浦賀行きについては、海外に絵を売り渡した罪から逃れるため、放蕩の孫の借金の取立てなどの災厄から逃れるため、天保の飢饉による食糧不足から逃れるため等諸説あるも不明。

浦賀には、実父といわれる仏師川村市良衛門注の実弟川村八右衛門が西浦賀の御用廻船問屋倉田屋を引き継ぎ、倉田屋藤三郎と名乗っていたが、天保5年(1834)から7年(1836)頃には他界し、三代藤三郎の時代となっていたという(由良哲次「北斎の父系と母系」より。昭和47年『浮世絵芸術』35号所収)。その倉田屋を頼った浦賀行きと思われる。

注) 川村市良衛門：実父ではなく、後妻ことの実家であるという考察もある。

【旅先の旅住之場所は、したゝめ不申候】

★天保7年（1836）1月17日の嵩山房（小林新兵衛）宛の書簡に「遠慮の儀御座候間、旅先の旅住之場所は、したゝめ不申候」と、思うところあって、旅先の住所は記載しないと告げている（『葛飾北斎伝』 p 150）。

また、2月中旬の嵩山房や英（万笈堂）や角丸屋（衆星閣）などに送った書簡には、彫刻は江川留吉脚注にするようにとの指示に続けて、終わりに「右や左りの書林様、ア、かなひませぬ、ゑかアきには何も後生と、御ぼしめし」（『葛飾北斎伝』 p 144～145）と書いて、杖を突いた人物を描いている。北斎の自画像といわれる。



「杖を突いた自画像」

脚注) 江川留吉：彫師。彫工の旧家江川八左衛門の系を引く名手。号五常亭。北斎の絵本・挿絵本を多く手がける。

★2月中旬の小林新兵衛宛ての手紙には「前北斎事画狂老人乞食坊主万字九押印富士の形」の署名がある（『葛飾北斎伝』 p 142）。

※この頃の自画像として『葛飾北斎伝』では「書肆嵩山房が、嘗百人一首の画注を依頼せし時、翁自仮に簗并に画の下図を認めておくりたり。其の図左の如し。これ翁が自画像にして、頭に覆ひたるは五布蒲団なるべし。前に置きたるは洩瓶なり（割書：尿をそゝぎ入るゝの器）、これまた翁が老ひて、猶赤貧なりし形状を想像するに足るものなり」として次の絵を掲載している。

絵には「前北斎親父 此簗に曰くをつけて簗せきと 老が疑惑は書肆が迷惑」とある。



「洩瓶を前にした自画像」

「簗とは、罨のわくなり、簗せきとは、わくせくといふ意にて、心せわしきことなり。大意は、此の罨の簗が大きいか、小さきかなど、曰くをそへて、わくせくこゝろせわしく、此の老人が疑ひまどふは、おのれはよけれど、書肆が迷惑するなりといひ、最初よりハキと慥にきめて、御注文あらば、まどふまじきにといふ意を含みて、よめるなり。罨のワク、曰くのワク、簗せきのワク、疑惑のワク、迷惑のワク、ワクの字をかさねたるが、手際なるべし」と解説している（p 209～211）。

注) 百人一首の画：上記の天保6年2月中旬の嵩山房他に宛てた書簡には「新百人一首中本、娘へ御注文候が、少々立テ引（脚注：かけひき）も御座候間、新百人一首は、老人認申し候（略）」（『葛飾北斎伝』 p 146）とあり、新百人一首は、お栄ではなく自分が引き受けるとしている。

「按ずるに、此の新百人一首は、蓋し彫刻せずして止みたるならん、過ぐる頃、書肆

嵩山房^{すうざんぼう}に到り、此の書を問ふに、知らずといふ。よりにて四方^{しほう}の書賈^{しよか}（筆者注：書籍店に同じ）につき、百方^{ひゃくぱう}穿鑿^{せんさく}すれども、今猶^{いまなほ}詳^つならず」（同p147）とある。

以上の自画像については山本陽子「葛飾北斎の肖像画における自己演出」（明星大学研究紀要 人文学部第52号を参照した）。

※荒井勉^{あらいつとむ}は「浦賀潜居^{うらがひんご}というのは、物的な証拠がない飯島虚心^{いひまおこころ}の仮説である」としている（『北斎の隠し絵』p83）。

★この頃、深川^{ふかがわ}万年橋^{まんねんばし}辺^へに住む。（『絵本魁^き』序文による）。

★正月、北溪^{ほくせい}画^が『狂歌東関^{きやうかとうかん}駅路^{えきろ}鈴^{すず}』（文政13年：1830）を『五十三次^{ごじゅうさんじ}北斎^{ほくさい}道中^{どうちゆう}画譜^{がふ}』と改題して北斎の名で再版する。

【百歳の頃は、画工の数にも入るつもり】

★2月、北斎^{ほくさい}の書賈^{しよか}嵩山房^{すうざんぼう}（小林新兵衛^{こばやししんべゑ}）その他への手紙。

「老人^{かゝら}いつも不替^{ひつり}、筆力^{ひつりき}日増^{ひつり}に出精^{しゆつせい}仕候^{つかまつりそうろう}、一百歳^{ひゃくさい}の頃は先^{まづ}ツ者^は、画工^{がこう}之^の数^{かず}にも入可^{いりもち}申^ま存念^{ぞんねん}御座^{ござ}候^{そうろう}」（『葛飾北斎伝』p142）

【投米会で糊口を凌ぐ】

★この時の北斎は困窮^{こうきゆう}のため「投米会^{とうまいかい}」注1を企画したというエピソードを『葛飾北斎伝』（p163）が紹介している。

「又露木^{つゆき}氏^{うぢ}（露木^{つゆき}為^な一^{いつ}）の話に、北斎^{ほくさい}翁^{おきな}、天保^{てんぽう}飢饉^{ききん}の時^{とき}にあたり、肉筆^{にくひつ}画帖^{がてう}を売^うりしが、画帖^{がてう}のみにては、三食^{さんしょく}に供^{こう}するに足^{たり}らずとて、絵直^{えなお}し注2をな^なし、飯米^{はんまい}を得^えるの工夫^{こうぶ}を案出^{あんしゅつ}せり。其^{その}の法^{はふ}は、絹本^{きんぼん}紙本^{しほん}に拘^{かか}はらず、絵直^{えなお}しを請^こふ者^{もの}、先^{まづ}づ筆^{ふで}に墨^{すみ}をつ^つけ、其^{その}の面^{めん}に点^{てん}或^{ある}は線^{せん}を引^ひき、これに米壺^{こめいしやう}升^{しょう}を添^そへて、翁^{おきな}の許^{もと}におくれば、翁^{おきな}即^{すなは}ち其^{その}の線^{せん}或^{ある}は点^{てん}をもとゝし、筆^{ふで}を添^そへて、種々^{しゆじゆ}のものを画^えき与^{あた}ふるなり。これを投米会^{とうまいかい}といふ。請^こふ者^{もの}争^あひ乗^まり。一日^{いちにち}に米^{こめ}二三斗^{にさんとう}を得^えたることありしと」（ルビは筆者による）

注1) 「投米会」の読み方は不明。仮に「とうまいかい」と呼ぶ。

注2) 「絵直し」は、無意味に施^あげられている点^{てん}や線^{せん}を、工夫^{こうぶ}により形^{かたち}を成^なした絵^ゑに作り改^かめる遊^{あそ}び（鈴木重三^{すずきしげぞう}による脚注^{きゃくしゆ}による）。

【『武者絵』の画料、金一両と銀四十二匁を受け取る】

★天保6年5月29日、小林新兵衛^{こばやししんべゑ}（嵩山房^{すうざんぼう}）宛^あ書簡^{しよかん}。

「金壹両^{いんちやう}と銀四拾貳匁^{しじゅうにもんめ}注 右者^{みぎは}、武者絵本^{むしゃゑほん}、初^{しよちゆう}丁^{てう}より八^{はち}丁^{てう}半^{はん}（17 ページ）の画料^{がれう}として、慥^{たし}に受取^{うけとり}仕候^{しこう}、為^な念^{ねん}此^{こゝ}之^の如^{ごとく}に御座^{ござ}候^{そうろう}、以上」（昭和7年、高見沢木^{たかみざき}版社^{ばんしゃ}出版所^{しゅつぱんじよ}、井上^{いの上}和雄^{わお}『北斎』p7）。

※金壹両^{いんちやう}と銀四拾貳匁^{しじゅうにもんめ}：1両=6,000文（天保13年には1両=6500文になっている）×25円=15万円（1文25円で換算）。1両=銀60匁。1匁=15万円÷60匁=約2,500円。銀42匁=2,500円×42匁=約105,000円。合計約25万5千円を受け取ったことになるが、相場は一定していないのであくまで参考である。1ページ1万5千円程度である。

●絵本『料理通』(角書「江戸流行」)。四編。八百屋善四郎著。時年七十五前北齋為一他画。北齋改為一筆ともある。泉屋市兵衛・永楽屋東四郎版)

※料亭八百善(現東京都台東区東浅草1-8-12 辺)の栗山善四郎による料理献立本。現在の八百善は現在、神奈川県鎌倉市十二所32、明王院境内にある。初編：文政5年(1822)、二編：文政8年(1825)、三編：文政12年(1829)に続くもの。「八百善増築の様子」など描く。谷文晁も描く。落款の表記は「時年七十五」となっている。



『料理通』八百前増築の様子(すみだ北齋美術館)

●読本『絵本西遊全伝』(『絵本西遊記』とも。三編。葛飾戴斗画。岳亭丘山(岳亭春信)訳。河内屋太助他版。早稲田大学図書館/野田市立図書館蔵)

※奥付には「図画 葛飾戴斗 印戴斗」とある。初編は文化3年(1806)刊。北齋は三編と四編の挿絵を描いている。四編は天保8年(1837)に完結。

●読本『新編水滸画伝』三編後帙(1月か。五冊。高井蘭山作。前北齋為一老人画。英屋平吉版)

●読本『新編水滸画伝』四編前帙(五冊。高井蘭山作。前北齋為一老人画。河内屋版)

●絵本『画本千字文』(12月。墨摺。半紙本一冊。挿絵44図。葛飾前北齋为一画。永楽屋東四郎・河内屋喜兵衛・天王寺屋市郎兵衛合梓。22.4×15.5 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北齋美術館：ピーター・モース・コレクション/東京学芸大学/フリーア美術館：ブルグエー・コレクション蔵)奥付に「天保六年乙未晩冬」とある。

※『千字文』の語句のいくつかに対応した挿絵を描く。『千字文』は南朝・梁(502-549)の武帝が、文官・周興嗣に文章を作らせたものという。同じ漢字を使わずに、四文字の対句(計8文字)を125句作っているので千字文という。

『画本千字文』(国文学研究資料館)



【天保飢饉を肉筆画帖等で乗り切る】

※肉筆画帖を作り絵草紙屋で売らせて好評を博す。


天保飢饉の折、版元休業に伴い北齋も貧窮し、肉筆画帖を多く描いて絵草紙屋の店先で販売させて生計の足しにしたという。そのあたりの事情を飯島虚心は聞き書きの形で『葛飾北齋伝』(p162~164)に次のように記している。

「(略)柴文(筆者注：柴屋文七)曰く、天保七年注、諸国飢饉にして、人民生に安ぜず。江戸市中にても、餓えて路上に倒るゝもの多し。故をもて諸商売は、恰休業のありさまにて、人々患難せるか中にも、錦絵、画草紙などハ、もと玩物なれば、誰ありて買ふ者なれば、新刻の絵など、発行する版元なし。随て画工などの困窮は、殊に甚しかりし。

此の時にあたりて、北齋^{きたさい}忽^{いっ}一計^{いつけい}を案出し、唐紙^{からかみ}、奉書^{ほうしょ}、半紙等^{はんしとう}、何紙^{なにかみ}を論ぜず、堆^{うずたか}く机^{つくまへ}に積みおき、日夜腕^{にちや}を揮^{ふる}つて、山水人物^{さんすいじんぶつ}、花鳥草木等^{からうそうもく}、筆^{ふで}にまかせて画^{えが}き出だし、これを裱^{ひょう}して（表装^{ひょうさう}して）、画帖^{がてう}となし、所^{ところ}々の画草紙屋^{がくそうしや}の店^{みせ}に列^{つら}ねたり。北齋^{きたさい}の画^{えが}、既に世^よに現^{あらわ}はれたる頃^{ころ}なれハ、飢饉^{うご}の中^{なか}なれども、さすかに購^{かひ}うものありて、北齋^{きたさい}ハこれが為^{ため}めに、餓死^{がし}を免^{まぬ}かれたり。其^{その}の時の画帖^{がてう}ハ、往々^{おうおう}世^よに存^{ぞん}せり。表題^{ひょうだい}に、肉筆画帖^{にくひつがてう}とあり（略）」

注) 「天保七年」の話としているが、この『肉筆画帖』を指すかどうかは不明。天保6年(1835)の『富嶽百景』二編(西村屋祐蔵版)巻末広告に『絵本肉筆画帖』の名が見え、また同14年(1843)の丁子屋平兵衛の広告に「北齋^{きたさい}^に老人肉筆画帖^{らうじんにくひつがてう}」も見えるという(2019『新北齋展図録』(p339)。

また、文政6年(1823)の西村屋与八^{にしむらやよはち}の広告に「前北齋先生肉筆画帖^{まききのほくさいせんせいにくひつがてう}」の名も見えるという(2005『北齋展』図録p362)。以上、刊行年は不明だが、天保の飢饉に際しての北齋のアイデアではあった。

●肉筆画『肉筆画帖』(この頃か。天保6年~15年<1835~44>)としている説あり。紙本着色各一幅。10図一帖。前北齋^{まききのほくさい}為^{ため}一^{いつ}改画^{あらためがき}狂人^{きやうじん}卍^{まんじ}筆^{ふで}(〈桜花^{おうか}と包^{つつ}み〉〈塩^{しお}鮭^{さけ}と鼠^{ねずみ}〉)に落款^{らくくわん}があるもの、ないものがある)。富士^{ふじ}の形^{かたち}。全^{ぜん}図^ず、背景^{はいけい}を省略^{しょうりゃく}している。各^{かく}25・6×36.1 北齋館蔵

※『新北齋展図録』(p339 2019年)では、天保14年(1843)に丁子屋平兵衛の広告に「北齋^{きたさい}^に老人肉筆画帖^{らうじんにくひつがてう}」とあるが、落款の様子から、天保6年(1835)の西村屋祐蔵の広告に「肉筆画帖」の名が見えるのを、本画帖に該当すると推測している。

※『2019年 永田生慈 北齋コレクション展図録』(p195)では次のように解説している。「(略) 実際、本画帖と同一の題^{だい}僉^{けん}注¹ [挿^さ図^ず] が貼^はられ、同じ図が収載された画帖が他にも知られ、複数点制作されたことは間違いない。(略) なお全十図が完存する画帖は現在、三例^{さんれい}注²が確認されている」

注1) 『北齋翁 肉筆画帖』と書かれた題僉。

注2) 三例：北齋館(長野県上高井郡小布施町大字小布施485)。津和野葛飾北齋美術館(閉館。島根県立美術館：永田コレクションに寄託。島根県松江市袖師町1-5)。香雪美術館(兵庫県神戸市東灘区御影郡家2-12-1)の所蔵。

※「福寿草^{ふくじゆそう}と扇^{せん}」から描き始め「桜花^{おうか}と包^{つつ}み」で描き終わったとされる(伊藤めぐみ「肉筆画帖について一制作の背景と研究上の諸問題」、『北齋肉筆画大成』所収。p248~256)。

※以下の、動植物の説明は主に「デジタル大事典」による。

☆〈福寿草^{ふくじゆそう}と扇^{せん}〉(「福寿草^{ふくじゆそう}と扇^{せん}」とも)

※画面いっぱい^{かめん}に広げられた扇^{あふぎ}には薄く富士山が描かれ、扇の要^{かなめ}の手前^{てまへ}には鉢^{はち}に植えられた2本の福寿草^{ふくじゆそう}と若松が植えられている。福寿草は、キンポウゲ科の多年草。北地に多く、

高さ 10～20 センチ。早春、黄色い花を 1 個開き、やがて茎が伸び、羽状に細かく切れ込む複葉を互生する。盆栽にして正月の飾り物とする。根は強心薬になる。

福寿草と扇 (北斎館)



☆〈鷹〉 (「鷹匠の鷹」とも)

※赤い紐のついた金具のある止まり木 (鷹架) に鋭い目をした鷹



が左下方をにらんでいる。

鷹 (北斎館)

☆〈雀とはさみ〉 (22.8×49.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※画面左上に中空の雀を描き、画面右下には赤い房のついた握りばさみ (和ば



さみ) が置かれている。雀は鋏を見て驚いているように見える。舌切り雀のイメージ。雀は、スズメ目ハタオリドリ科の鳥。人家周辺や農耕地にふつうにみられ、全長 14 センチくらい。頭は茶色、ほおとのどに黒い点がある。背は茶色に黒い斑点があり、腹は灰白色。

雀とはさみ (北斎館)

☆〈桜花と包み〉 (「杯と梨の花」「器と梨の花」とも)

※画面の左側に可愛らしく葉をつけた桜花が品良く描かれ、その右側には、縁の赤い梅の絵付けの椀を半透明の布で包んでいる図。この絵に落款と印影がある。



桜花と包み (北斎館)

☆〈蛇と小鳥〉

※竹の釣り竿と思われる竹の棒に止まっている小鳥を狙って、竿に巻き付いている蛇。山かがしと文鳥と思われる。

蛇と小鳥 (北斎館)



☆〈ほととぎすと虹〉 (「ほととぎす」とも)

※画面左上から右下にかけて虹が描かれ、その下をホトトギスが飛んで、白い腹を見せている図。ほととぎすは、時鳥、子規、杜鵑とも表記する。カッコウ科の鳥。全長 28 センチくらい。全体に灰色で、胸



から腹に横班がある。アジア東部で繁殖し、冬は東南アジアに渡る。日本には初夏に渡来。キョキョキョと鋭く鳴き、「てっぺんかけたか」「ほぞんかけたか」「特許許可局」などと聞きなし、夜に鳴くこともある。自分の巣をもたず、ウグイス・ミソサザイなどの巣に托卵する。

ほととぎすと虹（北斎館）

☆〈鱧となでしこ〉

※赤い撫子の花と茎の上に裏表に置かれた二尾の鱧の図。鱧は、カレイ目カレイ科の海水魚の総称。体は楕円形で、側扁が著しい。頭部が右にねじれ、両眼が体の右側にあり、背びれとしりびれが体に沿って長い。右眼側は砂泥に似た褐色、無眼側は白色。海底に有眼側を上にして横たわる。マガレイ・イシガレイ・マコガレイ・ムシガレイなど。食用。撫子は、ナデシコ科の多年草。三夜に自生し、高さ50センチ。葉は線形で白色を帯び、対生。夏から秋、淡紅色の花を開き、花びらの先は細く裂けている。秋の七草の一。



鱧となでしこ（北斎館）

☆〈蛙とゆきのした〉（「かわらと蛙」「蛙と瓦」「ゆきのしたと蛙」とも）

※円筒形の巴瓦が置かれ、それを跨ごうと片足を掛けた蛙の先にユキノシタが咲いている図。ゆきのしたは「雪の下」と表記する。ユキノシタ科の多年草。湿った所に生える。全



体に毛があり、茎は紅紫色で地をはい、節から小苗を出して増える。葉は多肉質の腎臓形で、長い柄があり、裏面は暗赤色。夏、20～50センチの花茎を伸ばし、白い花をまばらにつける。花びらは5枚あり、下の2枚が長い。葉を腫れ物の民間薬にし、食用にもする。

蛙とゆきのした（北斎館）

☆〈鮎と紅葉〉（「鮎」とも）

※澄んだ水の中を三尾の鮎が泳ぎ、紅葉の葉が数枚水面に漂っている図。鮎は、サケ目アユ科の淡水魚。全長20～30センチ。体は細長く紡錘形で、脂びれをもつ。背側は緑褐色、腹部は銀白色、胸びれ上方に黄金色の斑紋がある。秋、川の中流域で産卵。稚魚は海へ下って越冬し、春、川を上り、藻類を食べて成長する。夏に美味。



鮎と紅葉（北斎館）



☆〈塩鮭と鼠〉

※新巻鮭に白鼠を添えた図。新巻鮭と斯尊繁栄の象徴の鼠は、正月を迎える目出度さを表す。この絵に前北斎為一改画狂老人卅筆（印富士の形）の落款あり。

塩鮭と鼠（北斎館）

●絵本『富嶽百景』二編（正月。半紙本一冊。墨摺。七十六歳前北斎為一改画狂老人卅筆。印富士の形。剝厥（彫り）江川留吉。西村屋祐藏版。連梓：永楽屋東四郎、角丸屋甚助、西村屋与八。各約 22.6×15.7 山口県立萩美術館：浦上記念館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/静岡県立美術館/東京国立博物館/浦上蒼穹堂/国立国会図書館/日本浮世絵博物館/オランダ国立民族学博物館/東洋文庫：岩崎コレクション/フリーア美術館：ブルヴァエラ・コレクション/静岡県立中央図書館蔵）

※末尾の跋文に「七十六歳」と記されて初編跋文と同じ文が掲載されている。

※以下の図版は山口県立萩美術館：浦上記念館作品検索システムより。

☆〈扉〉

※「富嶽百景二編」成鄰堂（西村屋祐藏）の書き入れ。

☆〈井戸浚の不二〉

※富士を背景に、滑車を使って綱を引き井戸を浚って掃除する職人。富士の稜線と綱の線が三角形の構図になっている。

井戸浚の不二



☆〈信州八ヶ岳の不二〉

※舟の舳先から網を打つ漁師と、舟を操る二人の漁師の図。遠く八ヶ岳越しに小さな富士が見える。網を打つ漁師のポーズは「富嶽三十六景」の〈甲州石班澤〉の構図と似ている。

江仙彫刻。

☆〈竹林の不二〉

※富士の左側の稜線に沿うように竹林が生え、その間から富士が描かれる。江仙彫刻。

竹林の不二



☆〈堤越の不二〉

※遠く土手の向こうに富士。その土手を馬を引き連れた農夫が行く。手前の川に渡された細い板橋を農婦が頭に桶を乗せ、手に鋤を持って渡っている江仙彫刻。

☆〈登龍の不二〉

※（「のぼりょう」と読むか）龍が富士の稜線に沿うように登る図。龍の周りには渦巻のような雲がもくもくと立ちのぼるように描かれる。下書きのスケッチがある。江仙彫刻。

登龍の不二



☆〈容齋不二〉

※うねる波で水面の富士の形が歪んでいるのを舟から見ている旅人の図。吉寅彫刻。

☆〈紺屋町の不二〉

※紺屋の染めものが干されている間から見える富士の図。吉寅彫刻。

☆〈盃中の不二〉

※腰蓑をつけた漁師が酒を飲んでいて、その盃の酒に映る富士を指差して笑っている図。漁師の後ろには背負い籠が置かれ、なぜか中から鳥の羽根がのぞいている。漁師は仙人を見立てたともいわれるがはたしてどうか。

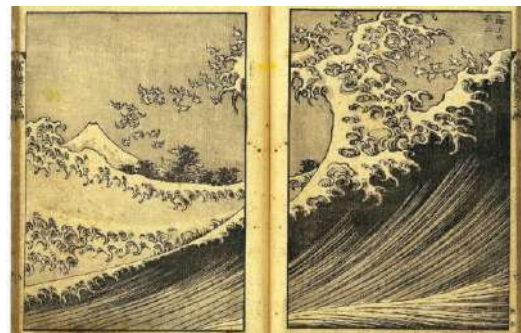
左・盃中の不二 右：紺屋町の不二



☆〈海上の不二〉

※いわゆる「北斎の波」といわれる巻き波のしぶきが、そのまま千鳥の群れに繋がり、その先に富士が描かれる。『富嶽三十六景』〈神奈川沖浪裏〉と比較されるが、人物は描かれない。朝百彫刻。

海上の不二



☆〈洲崎の不二〉

※洲崎弁天と思われる瓦屋根の上から江戸湾を眺望する図。帆船が浮かび、鳥が羽ばたいている海の向こうに富士が描かれる。朝百彫刻。

☆〈夢の不二〉

※大書きした鷹の羽先に雪景色の富士が薄く描かれる。鷹の足元には茄子が小さく描かれる。いわゆる一富士二鷹三なすびのめでたい図。朝百彫刻。

☆〈三白の不二〉

※白鶴、白雪の富士、降り積もる雪の三種の白の風景。朝百彫刻。

☆〈掛物の発端〉

※障子はずし、絵のような富士を旅人に見せる主人。この風景から壁にかかっている掛

軸ができたことを示している。

左：掛物の発端 右：三白の不二

☆〈松越の不二〉

※高く伸びた日本の松の木の間から富士が描かれている。梅林彫刻。

☆〈不二の室〉

※富士そのものを描かず、山中の岩室で休む登山者たちを描く。「富嶽三十六景」の〈諸人登山〉と同趣の画。

☆〈寫真の不二〉

※遊山しながら、二本の筆を持って富士の姿を写生する絵師。富士の左側の稜線の角度に沿うように生えている松の木越しに、富士を見ている絵師は北斎自身と見る説もある一方、貧窮の北斎が供を三人連れた遊山など出来ないとの見方もある。

図の右には、杭の上に白鷺が一羽とまっている。傍らでは酒の徳利を温めるため扇子で火を起している男、敷物などを入れた荷箱から画紙を出している男。食べ物をいれた箱の風呂敷を解いている男などがいる。和助彫刻。

寫真の不二



※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある（18.0×25.1）。

☆〈七橋一覽の不二〉

※前面の太鼓橋の橋桁の間から、遠景の橋も含めて六つの橋と富士が描かれる。手前の大きな太鼓橋、そのしたの橋、図右の杖を突いた男が渡る橋、富士の両側の二つの橋、その手前の土手に架かる屋根形の橋、七つ目は図左の釣り人の背後にある二本の丸太とされる。古雪彫刻。

☆〈大石寺の山中の不二〉

※大石寺の山中の奇岩のある道に行く旅人たち。岩の向こうに富士。大石寺は静岡県富士宮市上条にある寺。古雪彫刻。

☆〈嶋田か鼻夕陽不二〉

※多くの杭が突き立てられた護岸で、釣りをする人や往来する人が描かれる。

※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある（18.2×25.4）。梅林彫刻。

☆〈不二の麓〉

※籠を背にしたり、天秤棒で籠を担ぐ農夫や農婦たちが富士の麓を歩いて行く。富士の全景は描かれない。梅林彫刻。

☆〈夕立の不二〉

※雪化粧の富士の裾野の村に夕立が襲い、雷が光る。「富嶽三十六景」の〈山下白雨〉の

雷の線と同様の描きかた。

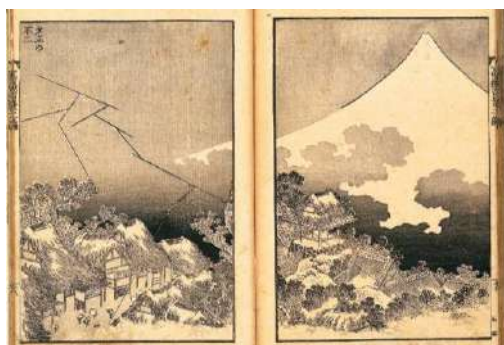
※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある（18.3×24.）。和助彫刻。

夕立の不二

☆〈遠江山中の不二〉

※山中の斜めに突き出した巨木に縄をかけ、斧で切り取ろうとしている三人の樵。一人は太い枝に足をからませ、逆さになって斧を振るう。

木の斜めの線と逆さの男の線が三角形となり、その間から三角形の富士が描かれる。アムステルダム国立美術館蔵。和助彫刻。



※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある（18.4×25.1）。

☆〈笥の不二〉

※山に架けられた笥から瀧のように落下する水を眺めながら往来する旅人や農婦たちが描かれる。古雪彫刻。

☆〈月下の不二〉

※遠く月下で砧を打つ婦人たち。近くでは野犬が遠吠えをしている。但し、『画本彩色通・二編』に描かれた狼と同じなので、この図は狼とする見方もある。遠く夕暮れの富士の上に月が出ている。江仙彫刻。

月下の不二



☆〈雪の且の不二〉

※「且」は「旦」の誤り。雪の朝、降り積もった雪を掻き、富士山のように積み上げられた雪山に二匹の犬が足跡をつけながらのぼっている。吉寅彫刻。

☆〈文邊の不二〉

※座りながら頬杖をついて何かを思う貴人。背景に白富士。貴人の前には静かな浦が描かれているので、山部赤人の「田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」を念頭にした絵であろう。「文邊」とは、文人の趣程度の意か。吉寅彫刻。

※下絵（画稿）がギメ東洋美術館にある(18.7×25.3)。

☆〈武邊の不二〉

※「富士の巻狩」（文化3年：1808）に描かれた仁田四郎の猪退治の図と同趣の画。猪にのしかかり七首を振りかざしている四郎の背後に富士が描かれる。「武邊」とは、武人の趣程度の意か。江仙彫刻。

☆〈刻不二〉

※竹格子に刻まれた富士を描く。白丸印の饅頭笠の士卒たちが駕籠に入れた米をそのまま大釜に入れようとしている。その他の男も兵糧の準備をしているが、もう一人は、何もせず蹲っている。あるいは「刻」と読んで、一定の時刻に、という意味か。江仙彫刻。

☆〈窓中の不二〉

※読書に疲れた男が文机の前で大あくびをしている。その前の丸窓からは群れ飛ぶ雁と富士が見える。両手を大きく上げて背伸びするために両手を大きく上げた形は、さながら円窓の形のように。

左：窓中の不二 右：刻不二



☆〈谷間の不二〉

※岩間から流れる水を柄杓で汲む男と、柴を担いで休む男の図。岩の線と富士の右稜線が釣り合っている。江仙彫刻。

【富嶽百景三編以後、主に肉筆画に傾注】

●絵本『富嶽百景』三編（半紙本一冊。刊行年不明。二編と同時期か。無款。明治8年版あり。江戸西村祐蔵の経営不振により売却され、永楽屋東四郎版となった。各約22.6×15.8 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/国立国会図書館/山口県立萩美術館：浦上記念館/浦上蒼穹堂/アムステルダム国立美術館/フリーア美術館：プルヴェール・コレクション蔵）

※この作以降、ほとんど錦絵を描かずに浮世絵から離れる。和漢の故事や古典、花鳥や宗教的な画題で、主に肉筆画に傾注する。

※以下の図版は山口県立萩美術館：浦上記念館作品検索システムより。

※全図、江仙（江川仙太郎）の彫刻。

☆〈赤澤の不二〉

※富士の裾野の赤澤山（静岡県伊東市南部の海沿いの山）で、源頼朝が行った相撲で、河津三郎祐安と膜野五郎國久の取り組みを描く。『曾我物語』では、この取り組みで膜野が負けたのを怨んだという話になる。富士は描かれない。

☆〈男體山行者越の松・野州遠景の不二〉

※男体山は、栃木県日光にある山。老松が橋のようにかかっている、雪を被ったその上を渡る数人の行者を描く。松の橋の下の間から富士が見える。

左：野州遠景の不二 右：男體山行者越の松



☆〈深雪の不二〉

※富士の裾野の街道に雪が降り注ぎ、足跡をつけながら行く旅人たち。馬の腹がけには「魁」の文字が染め抜かれている。

☆〈貴家別荘砂村の不二〉

※舟の前半分を切って屋根のようにした祠の側で、三人の男が釣りをしている図。舳先に「水中出現不動明王」と書かれた木札が掛けてある。その下に木像らしきものが見える。左奥に富士が描かれる。砂村は現在の東京都江東区砂町（北砂、東砂、南砂の町名がある）辺の一带。貴家別荘は、貴人の別荘の意。

☆〈市中の不二〉

※火の見櫓に天を突くように建てられた梯子の先に半鐘がある。その先に梯子を横切るように風糸が描かれ、さらにその先に富士が描かれる。

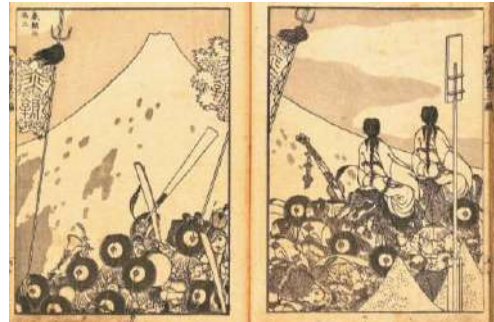
☆〈曇天の不二〉

※道祖神の石碑のある道端で、荷物を点検整理をする旅人と、それを立って見ている合羽姿の旅人。富士は全体を雲で山形に覆われ、その姿を現していない。

☆〈来朝の不二〉

※朝鮮使節が江戸参府の途中、富士の威容を全員で見ている図。

来朝の不二



☆〈暁の不二〉

※明け方の富士を背景に、道を急ぐ飛脚を描く。

☆〈跨キ不二〉

※桶に乗って大槌を振りあげる桶職人の股の間から富士が覗かれる。桶に乗る職人の図は、森治版短冊シリーズ（天保1年～5年）でも「桶屋」として描かれる。

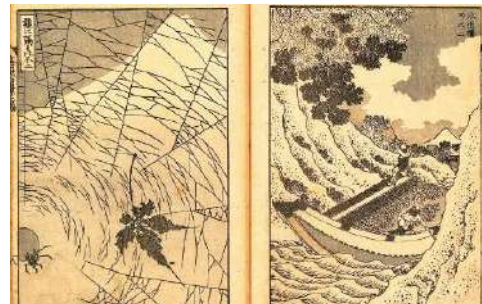
☆〈水道橋の不二〉

※水道橋を流れる神田川に、薪を積んだ舟が行く先に富士が見える。

☆〈羅に隔るの不二〉

※蜘蛛の巣に紅葉がかかり、巣の中央に蜘蛛がいる。その蜘蛛の巣を透かして富士の姿。「羅」は、網目のような巣の意味で用いている。蜘蛛の背後の大きな円は腹部とも、巣の中心のこしきと呼ばれる部分ともいわれる。

左：羅に隔るの不二 右：水道橋の不二



☆〈兀良哈の不二〉

※朝鮮のオランカイから見た富士。朝鮮風の衣服をつけた女性と天秤棒を担ぐ男性が遠くの富士を眺めている。

☆〈阿須見村の不二〉

※明日見湖畔の小明見村（現山梨県富士吉田市明見）の風景といわれ、茅葺の独特な形をした屋根が並び、その間から小さく富士が見える。富士吉田は吉田口登山道の入り口。

☆〈隅田の不二〉

※隅田堤（現墨田区堤通り辺り）は隅田川添いの堤で、桜の名所で賑わった。その賑わいを描く。桜花の向こうに春の富士が見える。

☆〈八塚廻の不二〉

※お鉢巡りとも呼ばれ、富士の火口を巡る人々を描く。富士の山容は描かれない。

☆〈風情面白キ不二〉

※寺の門前で毛毬に興ずる僧侶、それを面白がる二人の男は富士に関心を示さない。毛毬が上に蹴られて、富士の山頂に乗っているように見える。

☆〈甲斐の不二濃男〉

※富士の雪が解け、山肌が男の姿に見えるようになると、それを「農男」と呼んで農作業を始める合図とした。農男が現れると豊作の吉兆としたという。農作業をする農夫の向こうに男が立っているように見える山肌の富士が描かれる。

☆〈稲毛領夏の不二〉

※川の両側で布を晒す作業をする人々。手前の土堤では食事をする人々が描かれる。稲毛領は神奈川県にあったという。霞の向こうに富士が見える。

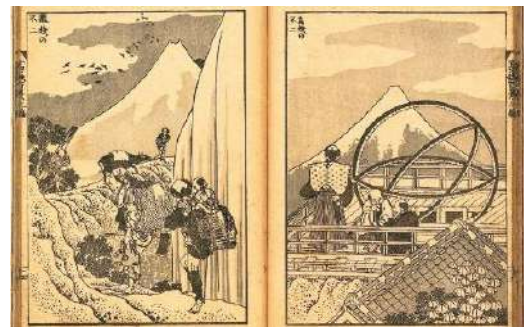
☆〈鳥越の不二〉

※江戸鳥越（台東区浅草橋3丁目。近くに鳥越神社がある）にあった渾天儀（天体の位置観測器）を供えた領歴所（浅草天文台）から富士を見る図。

☆〈瀧越の不二〉

※右側一面に流れ落ちる滝の脇を行く農家の男女。男は背負った荷物に赤子を乗せている。遠く牛を引く男の背後に富士が描かれる。

左：瀧越の不二 右：鳥越の不二



☆〈村堺の不二〉

※村の境界に注連縄を木に渡して張り魔よけとしている。その下を往来する人々。注連縄が逆三角形に下げられた構図に、富士の頂上の三角形が対称的に描かれる。

☆〈青山の不二〉

※傘職人が画面いっぱい傘を開いて並べ、その間から富士が見える。傘に「富岳百景」「書肆」の文字が記されている。

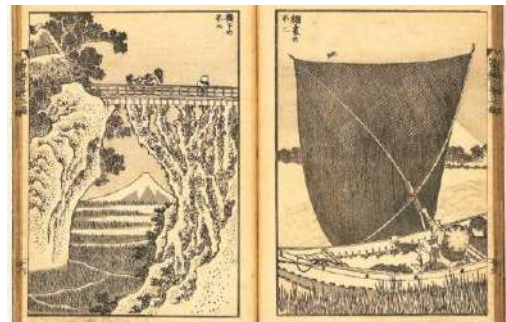
☆〈網裏の不二〉

※漁師が力いっぱい引き上げた四手網を透かして薄く富士が描かれる。四手網は、網の上に魚をおびき寄せて引き上げる漁法。佃島は白魚の四手網漁が盛ん。

☆〈橋下の不二〉

※巨木が橋桁になっている橋の下から富士が望まれる。この構図は北斎がよく用いる画趣。

左：橋下の不二 右：網裏の不二



☆〈足代の不二〉

※壁塗りのために組んだ足代（足場）にいる職人に、下から塗り土を差し出す職人を描く。

足組みの向こうに富士が見える。

☆〈村雨の不二〉

※激しく降る雨の中、蓑笠の人々が行く。垂直に激しく降る雨の向こうに霞む富士。さしている傘に「三編」の文字がある。

☆〈狼煙の不二〉

※遠く富士の上空に狼煙(のろし)がたなびいている。手前の浜辺では打ち上げた舟の脇で焚火をしている漁師たち。護岸の上には茅葺屋根の家が立ち並ぶ。

☆〈福祿壽〉

※空飛ぶ三羽の蝙蝠の「蝠」(フ)は福を、手前の鹿(ロク)が「禄」を、遠くの富士が不死で「寿」を表しているという。「不二」の字がない図。

☆〈大井川桶越の不二〉

※大井川を大きな桶舟で渡る人々。川向こうの木の陰に富士。

☆〈見切の不二〉

※障子張りのためにはずした障子の棧に四角く区切られた富士が描かれる。船宿の看板には「やねふね にたり(荷足)ちよきふね つりふね」とある。「先客萬来 ふじや」と箱看板に描いている職人は、紙の余白がたりないため、「や」の字の縦線が書ききれない(見切れない)様子。

☆〈武蔵野の不二〉

※薄が生い茂る野の先に、月を抱いた富士が描かれ、武蔵野の風情がかもし出される。

☆〈茅の輪の不二〉※茅の輪くぐりは、六月晦日に行なわれ、茅で作った輪を潜って厄払いをする習慣。鳥居に吊るした大きな茅の輪の間から富士を描く。

☆〈不斗見不二〉

※供連れの武士が、土塀の崩れた空間から、ふと富士を見ている図。

☆〈山氣ふかく形を崩の不二〉

※山中の気流が富士を取り巻き、あたかも富士が崩れるように切れ切れに見える。手前では猟師と鋤を持つ農夫が煙管の火を分け合っている。

☆〈郭公の不二〉

※扇を持ちながら縁台に座り、富士を背景に空飛ぶ郭公の姿と声を楽しむ男の図。郭公は飛びながら泣くことはないので、図中の鳥は郭公ではなく、描かれていない郭公に耳を傾けているとされる。〈寫真の不二〉に描かれた男と同一なので北斎の姿とされる。

☆〈羅漢寺の不二〉

※寺塔の先端の向こうに富士を見る。塔に向かって飛んでくる鶴の群れ。「羅漢寺」は、「富嶽三十六景」でも描かれている。

☆〈千束の不二〉

※洗足池(現東京都目黒区南千束)から見た富士といわれる。池のほとりを天秤棒で荷物を担ぐ男、しゃがみ込んで休む女旅人、先を急ぐ饅頭笠の旅人。富士の手前に富士形の物

が三つ並んでいる。

左：千束の不二 右：羅漢寺の不二

☆〈ふし〈山冠に俊のイが木〉穴の不二〉

※朝の掃除の際、閉めていた雨戸の割れ穴から、富士が障子に逆さに映っている。その富士の影に驚いている男たち。

☆〈海濱の不二〉

※半円の形で海に突き出す奇岩の間から見える富士。

左：海濱の不二 右：ふし穴の不二

☆〈蛇追沼の不二〉

※沼に富士が逆さに映っている。この画趣は「富嶽三十六景」の〈甲州三坂水面〉や『北斎漫画』13編にも描かれている。逆さ富士の位置が富士と大きくずれている。この沼の所在地は不明。

☆〈大尾一筆の不二〉

※最終の富士。墨画風に描かれ黒雲が下にかかっている。

大尾一筆の不二

●絵手本『おとり独稽古』（夏。一冊。葛飾北斎画編。藤間新三郎補正。大島屋伝右衛門版。すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※文化12年（1815）『踊独稽古』の改彫版。奥

付に「葛飾北斎画編 藤間新三郎補正 文化十二年歳次乙亥夏発市 後編嗣刻 天保六乙未年夏月 求版 京橋弥左エ門町大島屋伝右衛門」とある。

●絵手本『万職図考』二編・三編（葛飾戴斗先生画。河内屋茂兵衛版。国立国会図書館蔵）

※染色・根付け・煙管その他の職人のためのデザイン集。初編は文政10年（1827）刊。四編・五編は没後の嘉永3年（1849）刊。

●団扇絵『勝景奇覧』（この頃か。天保6年～15年〈1835～44〉と幅を持たせた見方もある。前北斎卅筆。団扇絵着色揃物。藍摺の画と錦絵の画とに分れる）

☆〈木曾摺針峠〉（藍摺。四角の中に団扇形に描かれる。23.3×30.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館/日本浮世絵博物館蔵）

※ベロ藍の濃淡で風景を描く。眼前に琵琶湖が広がる峠道を往来する人々。石垣の上に建つ茶店に向かう人々。摺針峠は、木曾街道の滋賀県彦根市中山町にある峠。『千絵の海』〈木曾摺針峠〉図と同じ構図。

校合摺あり（17.9×24.5 渡辺庄三郎『版下面帖』より）



木曾摺針峠（太田記念美術館）

☆〈甲州身延川〉（錦絵。後摺の藍摺物もあるという。
22.5×30.1 すみだ北斎美術館/東京国立博物館/日本浮
世絵博物館/ホノルル美術館蔵）

※突き出した岩に立って投網をする人々。その背後で膝
まで水に入って漁っている二人。身延山を背景に川を行
く漁舟。



☆〈甲州湯村〉（藍摺。東京国立博物館/ホノルル美術館蔵）

※四角の紙の中に扇面に描く。並ぶ旅宿の入り口に向かう旅人たち。宿の中には先客が数
人いる。

☆〈上列（州）榛名山〉（藍摺。23.1×30.2 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎
美術館：ピーターモース・コレクション/東京国立博物館/ホノルル美術館蔵）

※四角の紙の中に扇面に描く。山道で遙か彼方の榛名山を眺める男女の旅人たち。

☆〈上列（州）妙義山〉（上部の空が藍摺の錦絵。26.4×30.9。すみだ北斎美術館：ピー
ターモース・コレクション/ボストン美術館/立命館大学図書館蔵。国立国会図書館には藍摺りの後摺が
ある）

※四角の紙の中に扇面に描く。妙義神社の鳥居と寺社を眼下にして、妙義山の山頂まで登
る旅人たち。前方にも針のように聳える山々が描かれ
る。当初は団扇形の下部のくりぬかれた部分に妙義神社
が描かれていたが、団扇絵に合うように構図を整え直し
ているので、当初から団扇絵として作画されたかどうか
疑問が残るとする見方がある（『2005 北斎展図録』 p
362）

校合摺あり（渡辺庄三郎『版下画帖』より）。



上列（州）妙義山（プーシキン美術館）

☆〈信列（州）諏防（マ）湖〉（錦絵。ホノルル美術館蔵）

☆〈相州袖ヶ浦〉（錦絵。横長図。23.7×30.4 千葉市
美術館/ホノルル美術館/プーシキン美術館蔵）

※海岸にそそり立つ岩山に雪を被った松が伸びている。
その下の砂浜を行く旅人と、駕籠かきたち。崖下の道を行
く旅人たちの先には雪屋根の家並みが続く。

相州袖ヶ浦（プーシキン美術館）

☆〈房州鋸山〉（藍摺。27.0×32.8 すみだ北斎美術
館：ピーターモース・コレクション蔵）

校合摺あり（17.8×24.6 渡辺庄三郎『版下画帖』より）。



●錦絵『百人一首うはがゑとき』(この頃か。「乳母が絵解き」など数種の表記あり。乳母が子どもに百人一首を読み聞かせるという構想で作画したもの。北斎最後の錦絵の揃物。横大判。ベロ藍)。

※前北斎刊(「柿の本人磨」のみ無落款。「猿丸太夫」の落款は「前北斎」で無)。西村屋与八(永寿堂)から出版されたが、天保中期に経営不振となり、板木とも伊勢谷三次郎(榮樹堂：永寿堂をもじったもの)に譲って続刊されたものの結局断念された。

27首だが64図の版下絵(2005『北斎展図録』p360による)を合わせると91図以上。100首の構想があったか。作者の意欲とは裏腹に不評であり売れなかったのは、各歌人の歌意と画の内容が合わないものが多かったためという説もある。

版下絵〈従二位家隆〉の画中に「九 戊 戌年朱明」(天保9年夏)とあり、その年(79歳)まで版下絵を描いていたことが分るといふ(『北斎の肉筆画』p151 青幻舎)。

※(1, 2, 3, 6, 8, 西村屋与八(永寿堂)版。4, 5, 7, 9~27伊勢屋三次郎(榮樹堂)版)

【表題の表記の異同・『百人一首うはがゑとき』】

※表記については、「恵」を、そのまま「恵」と表記する図録や、「ゑ」と表記する図録もある。たとえば「宇波かゑと起〈春道列樹〉」とあったり、「宇波か恵と起〈春道列樹〉」と表記されている。漢字の崩し字を漢字のままとするか、ひらがなとするかで、研究者に判断によって異なることを念頭に入れたい。また、画題の前の数字は筆者による。

☆1「うはかゑとき〈天智天皇〉」(24.0×35.6 蔵)

「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ わが衣手は露に濡れつつ」

※菅や茅を組んだ苫を背や肩にした農夫たちが、田の道を行く秋の風景を描く。

☆2「うはかゑと起〈持統天皇〉」(蔵)

「春すぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山」

※川で晒した白い布を棒に架けて二人で担いで行く先には、小高い山が見える。手前の川を徒歩で渡る旅人たち。

☆3「乳母かゑと起〈柿の本人磨〉」(26.2×37.7 無落款 日本浮世絵博物館/町田市立国際版画美術館/ホノルル美術館/大英博物館/東京国立博物館蔵)

「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の ながながし夜をひとりかも寝む」

※焚火の煙が立ちのぼる入り江で地曳網を牽く漁師たちを描く。「乳母かゑと起」柿の本人磨(日本浮世絵博物館)



☆4「宇波か恵とき〈山邊赤人〉」(26.0×38.0 国立国会図書館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/ミネアポリス美術館/町田市立国際版画美術館蔵)

「田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ」

※田子の浦際の山道を往来する駕籠や旅人。遠くに雪化粧の富士山を描く。

☆5 「乳母かゑとき〈猿丸太夫〉」 (25.2×36.1 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北齋美術館：ヒーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館/ギメ美術館/ホノルル美術館/町田市立国際版画美術館蔵)

島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北齋美術館：ヒーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北齋美術館：ヒーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館/ギメ美術館/ホノルル美術館/町田市立国際版画美術館館/ギメ美術館/ホノルル美術館/町田市立国際版画島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北齋美術館：ヒーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館/ギメ美術館/ホノルル美術館/町田市立国際版画美術館美術館「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」

※秋の山里で働く農婦たちが、熊手を持ち、籠を背負って、列をなして手前の坂を下って帰って行く。画面左方の二人の女が指さす先の山の上には、紅葉の木の下に番の鹿が小さく描かれる。



「乳母かゑとき」猿丸太夫 (日本浮世絵博物館)

☆6 「乳母か絵説〈中納言家持〉」 (25.8×37.7 町田市立国際版画美術館/山口県立萩美術館・チコチコレクション/ホノルル美術館/日本浮世絵博物館蔵)

「鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」

※かささぎが三羽浮かぶ海には、唐人船が浮かんでいる夕景。岸辺の山間には民家の屋根が見える。

☆7 「宇波かゑと起〈安倍仲磨〉」 (25.2×37.4 町田市立国際版画美術館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/すみだ北齋美術館蔵)

「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」

※長安の山の上から水面に映る月を眺めている。仲磨の足元には膝まづいて仲磨を拝している二人の従者。手前には風でちぎれた軍旗がたなびく。

☆8 「うはかゑと幾〈小野の小町〉」 (25.1×37.1 日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/国立国会図書館/町田市立国際版画美術館蔵)

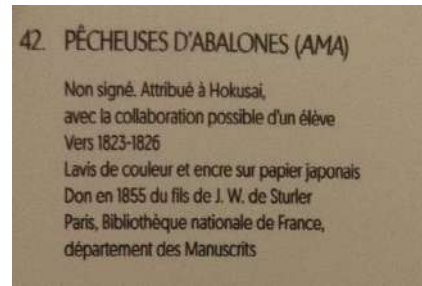
「花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」

※桜の花が咲く所の農家では、洗い張りをしている二人の女や、道を掃く男、川で洗い物をする女などが描かれる。

☆9 「乳母が絵と起〈参議篁〉(小野篁)」 (25.0×36.3 日本浮世絵博物館/すみだ北齋美術館/市立津山郷土博物館/ギメ美術館/山口県立萩美術館：浦上記念館/ホノルル美術館ギメ美術館/町田市立国際版画美術館/国立国会図書館/ /東京国立博物館/ブリュッセル王立美術歴史博物館蔵)

「海原八十島かけて漕ぎ出でぬと 人には告げよ海女の釣舟」

※海辺の岩の上で休んでいる三人の海女。海では三人の海女が漁をしている。その側では採った貝などを受け取る舟が描かれる。海女は、文政9年頃フランス国立図書館蔵の北斎に関わる作品25図の中にも描かれている。



参議堂（日本浮世絵博物館）

海女 文政9年頃 45.3×31.7 着色 無款 フランス国立図書館蔵

☆10「うばがゑるとき〈僧正遍照〉」（26.5×37.9 島根県立美術館：永田コレクション/町田市立国際版画美術館/ホノルル美術館/日本浮世絵博物館蔵）

「天つ風雲の通ひち吹きとちよ 乙女の姿しばしとどめむ」

※桜咲く側の舞台上で二人の女による舞楽の舞が催されている。舞台下の帳の前などには畏まった男たちが描かれる。

☆11「乳母か絵説〈在原業平朝臣〉」（25.2×36.4 国立国会図書館/日本浮世絵博物館/山口県立萩美術館：浦上記念館/ベレス・コレクション/ホノルル美術館/町田市立国際版画美術館蔵）

「ちはやぶる神代も聞かず菟田川 からくれなみに水くくるとは」

※橋の下には散った紅葉の葉が多く波に流され、橋の上からそれを見ている女将と赤子を背負った男。太鼓橋を上る旅人を紐で引っ張り助ける男は、額に扇子をかざしている。

☆12「宇波かゑ登起〈藤原繁行朝臣〉」（「藤原敏行朝臣」とも。25.1×35.9 島根県立美術館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/中右コレクション/町田市立国際版画美術館蔵）

「住の江の岸に寄る波よるさへや 夢の通ひ路人目よくらむ」

※岸边に寄せた北前船の窓から二人の男が外を覗いている。遠くの海上には鳥が群れをなして飛んでいる。

☆13「うばがゑと起〈伊勢〉」（25.3×37.1 日本浮世絵美術館/大英博物館/ホノルル美術館/国立国会図書館蔵）

「難波瀉短き葦の節の間も 逢はでこの世を過ぐしてよとや」

※瓦職人たちが屋根で働く家の中で梅を眺める二人の芸妓を描く。

☆14「乳母が縁説〈元良親王〉」（25.6×36.7 島根県立美術館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/国立国会図書館蔵）

「わびぬれば今はたおなじ難波なる 身をつくしても逢はむとぞ思ふ」

※海辺の道で、木賊を背にした牛を牽く農夫の脇を、蛇の目傘で顔を隠した二人連れと荷を背負った供の男を描く。

☆15「姥かゑと幾〈菅家〉」(菅原道真 25.7×37.0 日本浮世絵博物館/大英博物館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館/町田市立国際版画美術館蔵)

「このたびは幣も取りあへず手向山 紅葉の錦神のまにまに」

※紅葉が散り飛ぶ神社の境内に牛車を停めて休んでいる従者たち。車を牽く牛も膝を折り曲げて休んでいる。

☆16「宇破か縁説〈貞倍(信)公〉」(藤原忠平 26.1×37.5 日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/町田市立国際版画美術館蔵)

「小倉山峰の紅葉葉心あらば いまひとたびのみゆき待たなむ」

※紅葉深い山門で帝を迎える仏僧たち。帝が乗ってきた車が右側に描かれる。宇多上皇が嵯峨の紅葉の見事さを、子の醍醐天皇にも見せたいと仰せになったのを受けて貞信公が詠んだ歌。

☆17「うはか恵と起〈源宗于朝臣〉」(23.9×35.0 大英博物館/国立国会図書館/日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館/ギメ美術館/太田記念美術館/東京国立博物館/町田市立国際版画美術館蔵)

「山里は冬ぞ寂しきさまさりける 人目も草もかれぬと思へば」

※雪の山中で5人の猟師が焚火をして暖をとっている図。

源宗于朝臣(日本浮世絵博物館)



☆18「姥か衛登喜」〈壬生忠見〉(この絵のみ校合摺。前北斎刊 25.8×37.5 島根県立美術館:永田コレクション蔵)

「恋すてふわが名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひそめしか」

※「船宿」「新叶屋」と大書きした戸のある宿の前に門付の女が二人いる。その側で、赤子を背負った母親、風呂敷の荷物を背負った行商人、どてらを着流して手拭を頭に乘せた男、通りがかりの男たちが門付を見ている。宿の白壁に、おそめ・久松の名を相合傘に書き入れた落書きがある。

☆19「宇波かゑと起〈春道列樹〉」(25.1×36.6 日本浮世絵博物館/大英博物館/ウィスコンシン大学マディソン校/シカゴ美術館/ボストン美術館/ホノルル美術館/東京国立博物館/国立国会図書館/町田市立国際版画美術館蔵)

「山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」

※川を紅葉の葉が赤く染めるほど流れ、頭に桶を乗せ、子どもの手を引いて細い丸太の橋を渡る母親。子どもは紐の先の亀を引いている。向こう岸では巨大な材木が斜めに支えられ、その上で木曳きで縦に切り込みを入れている図。『富嶽三十六景』〈遠江山中〉では同じ構図が左右逆となっている。

☆20「うはか縁説〈清原深養父〉」(26.1×37.1 日本浮世絵博物館/大英博物館/国立国会図書館/東京国立博物館/町田市立国際版画美術館蔵)

「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを 雲のいつこに月宿るらむ」

※宵闇の川に「新板川壺」と書かれた提灯を下げた遊興の大船の隣の船では、棹をさす船頭、炭火の火を団扇でおこす男、川水で井を洗う男などが描かれる。対岸には薄暗闇に並んだ蔵が描かれる。

☆21「うはか恵と幾〈文屋朝康〉」(26.1×37.1 日本浮世絵博物館/大英博物館/町田市立国際版画美術館/ホノルル美術館/アメリカ議会図書館/ウイスコンシン大学マディソン校/ハーバード大学/シカゴ美術館/江戸東京博物館/クロード・モネ財団蔵)

「白露に風の吹きしく秋の野は つらぬきとめぬ玉ぞ散りける」

※舟の中から蓮の葉を刈り取ろうとしている女たち。蓮の葉には白露が描かれる。二人の女が棹を突き立てて舟の揺れを防いでいる。

☆22「宇破か縁説〈参儀(議)等〉」(源等 25.0×36.1 日本浮世絵博物館/町田市立国際版画美術館/市立津山郷土博物館蔵)

「浅茅生の小野の篠原忍ぶれど あまりてなどか人の恋しき」

※浅茅生の生える道を俯きながら行く貴人と二人の伴人。土下座して貴人を迎える道端の二人の男。手前では籠を背負い帰路につく五人の農夫。

☆23「姥か恵登幾〈大中臣能宣朝臣〉」(25.9×37.5 日本浮世絵博物館/町田市立国際版画美術館/ベレス・コレクション/中右コレクション/すみだ北斎美術館蔵)

「御垣守衛士のたく火の夜は燃え昼は消えつつものをこそ思へ」

※門の手前で焚火のまわりでくつろぐ六人の衛士。門の向こうの丘に腰を下ろして遠くを眺めて物想いにふける貴人の姿。

☆24「宇波か縁説〈藤原道信朝臣〉」(25.5×37.0 日本浮世絵博物館/千葉市美術館/町田市立国際版画美術館/山口県立萩美術館・浦上記念館/東京国立博物館/ギメ美術館蔵)

「明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな」

※日が暮れないうちにと路を急ぐ辻駕籠かきたち。その脇で天秤棒の両端の荷物を担いでのんびり歩く行商の男。

☆25「うはかゑと起〈藤原義孝〉」(24.0×35.6 日本浮世絵博物館/大英博物館/国立国会図書館/町田市立国際版画美術館蔵)

「君がため惜しからざりし命さへ 長くもがなと思ひけるかな」

※遊興の家で寝転んでくつろいだり、外の川面を眺めている女たち。部屋の手前では風呂に入っている男二人。全員が命の洗濯をしている様子。川には鶺鴒が二羽。詞書に「女の許より帰りて 遣わしける」とある。

☆26「宇波か衛とき〈三条院〉」(24.8×36.3 大英博物館/日本浮世絵博物館/町田市立国際版画美術館/すみだ北斎美術館蔵)

「心にもあらで憂き世に長らへば 恋しかるべき夜半の月かな」

※満月の夜の儀式で幣をかざす男と、垂冠を被り、笏を持ち平伏する三人の男。廊下の外には満月が光る。

☆27「う波かゑと幾〈大納言種（経）信〉」（25.0×37.6 日本浮世絵博物館/国立国会図書館/山口県立萩美術館：浦上記念館/ベルリン東洋美術館/町田市立国際版画美術館蔵）

「夕されば門田の稲葉訪れて葦のまる屋に秋風ぞ吹く」

※葦の生える田舎道を、棒にぶらさげた籠を運ぶ二人の農夫。道端の小川で足を洗う旅人や、桶に水を汲む女が描かれる。遠くの空には雁の群れ。

☆28「宇波か縁説〈権中納言定家〉」（「ていか」とも。25.0×36.8 日本浮世絵博物館/国立国会図書館/町田市立国際版画美術館蔵）

「来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」

※塩水を桶に汲みとって来る二人の女。積み上げた簀に海水を染み込ませ、これを焼いて藻塩を造っている夫婦。その窯から出る煙が立ちのぼっている。左にはうず高く簀を積み上げる男が二人描かれる。

【29～32 大正 10 年、版下絵からの錦絵刻版】

※大正 10 年（1921）10 月に、京都の佐藤章太郎商店が、〈権中納言匡房〉〈素性法師〉〈中納言敦忠〉〈赤染衛門〉の 4 図に色付けして錦絵として刊行した（2010 年『HOKUSAI 画狂人北斎』緑青 VOL2 日本浮世絵美術館 p 78 による。マリア書房）。

☆29「百人一首うばが衛登記 権中納言匡房」（大正 10 年、佐藤章太郎板）

「宝砂（高砂）のおのへのさくらさきにけり 外山のかすみ立すもあらなん」

※海の見える小山の桜を見る男達。湧き出る水を柄杓ですくう姉さんかぶりの女。御簾を入れた桶を頭に乗せ、赤子を背負って立っている女。山の下から登ってくる人々などが描かれる。

☆30「百人一首乳母が縁説 素性法師」（大正 10 年、佐藤章太郎板）

「今こんといひしはかりになか月の 有明の月を待いてつるかな」

※鐘楼のある坂道を、かがり火を持つ男に付いて行く老人。眼下には寺社の大きな屋根が連なる。鐘楼の屋根先に月が冴えている。

☆31「百人一首乳が恵登記 中納言敦忠」（大正 10 年、佐藤章太郎板）

「逢見ての後のこゝろにくらふれば むかしを物をおもハざりけり」

※柵に囲われた注連縄のある神木に、頭上に蠟燭三本を乗せ、鏡を首から下げ、口に釘をくわえながら釘を打つ白装束の女。「奉納」と描かれた狛犬像の側に立てられた高札に「大正十年 開板」と書かれている。

☆32「百人一首うはか恵とき 赤染衛門」（大正 10 年、佐藤章太郎板）

※「やすらはてねなまし物をさよ更て かたふくまでの月をみしかな」

屋敷の回廊風の廊下に、手燭を持つ女の後にいる女主人。その後に荷物を持って付いている下女。夜空には満月が描かれる。

【『百人一首うはがゑとき』の版下絵】

※1895年に仏人シャルル・ジローによって亜鉛凸版（14.8×21.3）で復刻されたものも入ると91図に及ぶ。現存する版下絵（紙本墨絵）は64図という（ここに掲載するのはその一部）。

☆33「うはかゑと起」〈喜撰法師〉（前北斎卍。25.7×37.8フリーア美術館蔵）

「わが庵は都のたつみしかぞ住む 世をうちやまと人はいふなり」

※遠景の山に二匹の鹿がいる。手前の山の頂上から鉄砲で鹿を狙う二人の獵師。手前の街道には、客の乗った駕籠かき、天秤棒の草を担ぐ男、笠を手に持つ旅人がいる。周囲の山には紅葉が咲いている。

☆34「宇波か縁説」〈蟬丸〉（前北斎卍。25.6×37.8フリーア美術館蔵）

「これやこの行くも帰るも別れては 知るも知らぬもあふ坂の関」

※図左の民家の前に立つ髭を蓄えた古い師風の男。脇の街道には徒歩や馬上の旅人が行く。

☆35「乳母かゑるとき」〈陽成院〉（前北斎卍。26.2×38.1フリーア美術館蔵）

「筑波嶺の峰より落つる男女川 恋ぞ積りて淵となりぬる」

※民家の前の川で洗濯をする女。その周りで作業をしている、腰蓑を付けた男たち。

☆36「乳母かゑと起」〈光孝天皇〉（前北斎卍。25.6×37.1 島根県立美術館：永田コレクション・府川家資料蔵）

「君がため春の野に出でて若菜つむ わが衣手に雪は降りつつ」

※屋敷の門の所で駕籠に乗って来る貴人を迎える宮人たち。

☆37「姥か恵登喜」〈文屋康秀〉（前北斎卍。25.7×37.8フリーア美術館蔵）

「吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風を嵐といふらむ」

※「祇園御祭礼」と書かれた幟、旅人の笠、手にした巻物や紙の束等が強風にあおられ飛ばされている。着物の裾があおられ前かがみになる女、荷物を背負った小僧なども描かれる。

☆38「姥がゑるとき」〈大江千里〉（前北斎卍。25.9×37.7フリーア美術館蔵）

「月見ればちぢに物こそ悲しけれ わが身ひとつの秋にはあらねど」

※薪を背負った農夫や農婦。腰をかがめて杖を突く老婆の腰を押している小僧。満月が浮かぶ田舎の風景。家鴨が数羽田圃にいる。

☆39「うはかゑと起」〈三條右大臣〉（シャルル・ジローによる復刻。14.8×21.3フリーア美術館蔵）

「名にしおはば逢坂山のさねかづら 人にしられでくるよしもがな」

☆40「姥か恵登き」〈中納言兼輔〉（24.8×36.6 大英博物館蔵）

「みかの原わきて流るる泉川 いつ見きとてか恋しかるらむ」

※渡し船に乗っている男女。船首の船頭が舳先の向きを調整するためにかがんで棹を岸边に当てている。船尾の船頭は川に棹をさしている。

☆41「宇波かゑと起」〈坂ノ上是則〉（25.2×36.7 大英博物館蔵）

「朝ぼらけ有明の月と見るまでに 吉野の里に降れる白雪」

※川に流してきた材木を引き上げて、雪を被った貯蔵庫に運ぶ男たち。

☆42「うはか恵登喜」〈紀友則〉（前北斎刊。25.8×37.8 フリーア美術館蔵）

「ひさかたの光のどけき春の日に 静心なく花の散るらむ」

※陸揚げされた舟底の付着物を松明の火で焼き落としている男たち。側で薪を運ぶ女たち。

☆43「乳母か縁説」〈藤原興風〉（前北斎刊。25.7×37.8 フリーア美術館蔵）

「誰をかも知る人にせむ高砂の 松も昔の友ならなくに」

※巨大な松の木の側の縁台でくつろぐ男女。茶の湯を沸かしている女もいる。

☆44「姥かゑ登き」〈紀貫之〉（無款。25.7×37.7 フリーア美術館蔵）

「人はいさ心も知らずふるさとは 花ぞ昔の香にほひける」

※松の木のある家の門をくぐる狩衣姿の高位の男と供の侍。門前に籠と籠かき。道を挟んだ家の屋根に上り、壁に漆喰を塗る職人。その屋根の端に、長鍮を持った者や供人の被った笠が見える。

☆45「姥か絵と幾」〈右近〉（前北斎刊。25.7×37.7 フリーア美術館蔵）

「忘らるる身をば思はず誓ひてし 人の命の惜しくもあるかな」

※木の鳥居に縄をかけ、補強をしている仕丁たち。手前の石灯籠の側には、女が二人、荷物を背負った旅人の男が二人いる。

☆46「姥か恵と起」〈平兼盛〉（25.7×37.7 大英博物館蔵）

「しのぶれど色に出でにけりわが恋は 物や思ふと人の問ふまで」

※街道の茶店に立ち寄る旅人たち。茶店の座敷では大きな点眼鏡で人相見らしき男がいる。

☆47「宇波か衛登起」〈清原元輔〉（前北斎刊。25.7×37.8 フリーア美術館蔵）

「契りきなかたみに袖をしぼりつつ 末の松山波越さじとは」

※松の木の側に駕籠を置き、貴人が烏帽子を被らず、両手を袖に入れ休んでいる。その前に膝まづき、遠くで何かの作業をしている二人の男を指差している伴侍。貴人の後ろには、角隠しをした婦人がいる。

☆48「宇波か恵登き」〈中納言朝忠〉（前北斎刊。25.8×37.8 フリーア美術館蔵）

「逢ふことの絶えてしなくはなかなか 人をも身をも恨みざらまし」

※鳥居の前の桜の木の脇に腰を下ろして休む男親と子ども。前帯で打掛を着て、前髪を布で覆い、笠を持ち杖を突く遊女が、親子に向かって行く。「恨みざらまし」から、当時よく知られた「うらみ葛の葉」の古浄瑠璃から発想した絵と思われる。

安倍保明の長子安名が和泉の信太神社（葛葉稲荷明神）に参詣の折、妻の熱病に良いとされる狐の肝のために狐狩りに来ていた石川悪右衛門尉と争い、安名が一匹の狐を逃がしたことで悪右衛門に殺されそうになったとき、狐の化けた上人が現れて救われた。その後、谷川で溺れかけていた狐の化けた女を助け、やがて二人の間に子どもの清明が生まれたが、やがて七歳になった清明が狐姿の母親を目撃するという筋だて（古浄瑠璃「信太妻」〈葛の葉の子別れ〉『瞽女の記録と唄・語り』p23より。令和元年。江戸川区教育委員会）。

☆49「うはか衛とき」〈謙徳公〉（前北斎刊。25.6×37.4 フリーア美術館蔵）

「あはれともいふべき人は思ほえて 身のいたづらになりぬべきかな」

※大がかりな糸繰り機での滑車を回す紐を操る二人の女。座って、糸巻き車で糸を括る二人の女。家の窓からは、部屋で機織りをする女が見える。

☆50「姥か縁説」〈恵慶法師〉（前北斎刊。25.6×37.7フリーア美術館蔵）

「八重むぐらしげれる宿のさびしきに 人こそ見えね秋は来にけり」

※農家の前で手で米の粃を篩い分けている母子。その側で馬から下ろした鞍を畳む女。午の後ろ足を盥に入れて洗っている農夫。

☆51〈乳母か縁説〉〈藤原実方朝臣〉（25.4×36.7 ビクトリア・アンド・アルバート美術館蔵）

「かくとだにえやはいぶきのさしも草 さしも知らじな燃ゆる思ひを」

※看板に「伊吹山」と書いた茶屋で背中を見せて休む二人の男。茶を出す女に顔を向ける旅の女の図。

☆52「宇破か縁説」〈右大将道綱母〉（シャルル・ジローによる復刻。14.8×21.3フリーア美術館蔵）

「嘆きつつひとり寝る夜の明るる間 はいかに久しきものとかは知る」

☆53「うはか縁説」〈大納言公任〉（前北斎刊。25.8×37.5フリーア美術館蔵）

「滝の音は絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れてなほ聞こえけれ」

※山肌を流れ落ちる滝の向かい側の台地で、毛氈を敷き宴を開いている男達と二人の芸者。側で薪を用意している樵に酒を注いでいる男と、火吹き竹で火をおこしている男。

☆54「宇破か衛とき」〈和泉式部〉（前北斎刊。25.7×37.7フリーア美術館蔵）

「あらざらむこの世のほかの思ひでに いまひとたびの逢ふこともがな」

※桜の大木がある家の二階には、障子を開け放した部屋に病で寝ている女が見える。一階の門の前には供の小僧を連れた歌占の男が立ち、家の女が盆に載せた紙の札を差し出している。

☆55「姥母か縁説」〈紫式部〉（前北斎刊。25.7×38.0フリーア美術館蔵）

「めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に 雲隠れにし夜半の月かな」

※川に渡した板橋の向こうに駕籠が数人の男と一人の女に付き添われていく。川のこちら側では、母子と女が駕籠を見やっている。子どもにつけられた紐を母親に引かれている。女は駕籠を指差している。天秤棒を担ぐ男が跡に付いている。天秤の荷物の一つから花が覗いている

☆56「宇破か縁説」〈小式部内侍〉（前北斎刊。25.8×37.7フリーア美術館蔵）

「大江山いく野の道の遠ければ まだふみもみず天の橋立」

※「文殊菩薩安置」と彫られた石碑のある寺社の渡り廊下の下で休む旅の女。その前に立つ旅の男。籠を持ち上げようとする腰蓑の農夫。道行く笠を被った二人の旅人。

☆57「乳母か縁説」〈伊勢太（大）輔〉（前北斎刊。25.4×37.8フリーア美術館蔵）

「いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重にほひぬるかな」

※屋敷の門に、数人がかりで花の咲いた桜の木を乗せた車を引き入れている。車の後ろからは二人の男が梃子の棒を使って押している。その様子を二人の仕丁が見守っている。

☆58「乳母か縁説」〈清少納言〉（前北斎刊。25.7×37.5 フリーア美術館蔵）

「夜をこめて鳥の空音は謀るとも よに逢坂の関はゆるさじ」

※坂下から上がってきて唐門をくぐる兵士たち。門前の木に登っている男が、その様子を見ている。

☆59「姥か衛止起」〈左京大夫道雅〉（25.8×37.2 フィッツウィリアム美術館蔵。近年まで所在不明であった。シャルル・ジロー（1854～1903）による復刻がされたものがフリーア美術館にある。25.8×37.2）

「今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならで言ふよしもがな」

※内親王と密通した道雅だが、内親王の父により内親王の家の門に警護の者を立たせたという話を画材にした。門に三人の警護の者を描き、屏と幕によって通雅の行く手を阻んでいる

☆60「うはかゑ登き」〈仲(中)納言定頼〉（前北斎刊。25.9×38.0 着色。フリーア美術館蔵）

「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに あらわれわたる瀬々の網代木」

※川沿いの街道を往来する旅人。馬上の籠に乗る旅人と馬子。振分け荷物の旅人。長持ちを前後で担ぐ男達。

☆61「姥がゑとき」〈相模〉（前北斎刊。25.6×37.8 フリーア美術館蔵）

「恨みわびほさぬ袖だにあるものを 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ」

※竹で組んだ高い物干しに、竿を使って布を干している女。その側で天秤の荷物を持つ男。家の中では、紐を横に渡した竿に紐を掛けている女。煙管をくわえてそれを見ている男。

☆62「うはかゑとき」〈周防内侍〉（前北斎刊。25.9×37.4 フリーア美術館蔵）

「春の夜の夢ばかりなる手枕に かひなく立たむ名こそ惜しけれ」

※宮殿の外廊下に座り、薮の下から部屋の中に手を入れている貴人。柱の横からその様子を見ている二人の官女。廊下の角で話をしている二人の貴人たちがいる。

☆63「姥か縁説」〈能因法師〉（前北斎刊。25.6×37.3 フリーア美術館蔵）

「嵐吹く三室の山のもみぢ葉は 龍田の川の錦なりけり」

※川の筏には竿を持つ男や腰を下ろしている男、火吹き竹で火をおこしている男がいる。遠くにも棹差す筏が行く。手前の川岸には、釣りをしている男達。岸边や川には紅葉が散り、流れている。

☆64「乳母か縁登起」〈良遍法師〉（前北斎刊。25.7×37.5 フリーア美術館蔵）

「さびしさに宿を立ち出でて眺むれば いづこも同じ秋の夕暮れ」

※祭礼の鉦や太鼓を鳴らしながら道行く人々。幣や提灯を持つ男、杖を突く女たち。側の柵で囲まれた屋根つきの高札の向こうには鳥が列をなして飛んでいく。

☆65「宇破か縁説」〈祐子内親王家紀伊〉（前北斎刊。25.7×37.3 フリーア美術館蔵）

「音に聞く高師の浜のあだ波は かけじや袖のぬれもこそすれ」

※高師の浜の大波がある浜辺で籠を持つ裸足の女と手を取り合う男。駕籠の簾を上げて浪を見る男と、客のわらじを揃える駕籠かき。高師の浜は和泉国（現在の大阪府南部の堺市浜寺から高石市あたりの一带）の浜。

☆66「姥か恵登喜」〈藤原基俊〉（ボストン美術館蔵）

「契りおきしさせもが露を命にて あはれ今年の秋もいぬめり」

☆67「乳母か恵とき」〈法性寺入道前関白大（太）政大臣〉（25.5×37.2 ビクトリア・アンド・アルバート美術館蔵）

「わたの原漕ぎ出でて見れば久方の 雲みにまがふ沖つ白波」

※6人で船を漕ぐ船頭と3人の乗客の図。爪のような、いわゆる北斎の波が船に掛かっている。

☆68「宇破か縁説」〈崇徳院〉（前北斎刊。25.7×37.5 フリーア美術館蔵）

「瀬を早み岩にせかるる滝川の われても末に逢はむとぞ思ふ」

※湾曲して流れる川に掛けられた板橋を渡る貴女二人に付く供人が三人。天秤の薪の束を担いですれ違いに向かう農婦。

☆69「乳母か縁説」〈源兼昌〉（前北斎刊。25.7×37.3 フリーア美術館蔵）

「淡路島通ふ千鳥の鳴く声に 幾夜寝覚めぬ須磨の関守」

※浜辺の高台で塩水を入れた樽を台車に載せ、塩水を溜める大樽に向かって引っ張る女と、樽を後ろから押す女。その側の塩掻き用の丁を担ぐ女。

☆70「姥か衛登幾」〈左京大夫顕輔〉（前北斎刊。25.7×37.7 フリーア美術館蔵）

「秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ」

※満月の下、二組の男たちが餅をついている。近くの湾曲した土手を僧侶と篝火を持った男が行く。

☆71「乳母か縁説」〈待賢門院堀河〉（前北斎刊。25.7×37.4 フリーア美術館蔵）

「長からむ心も知らず黒髪の 乱れてけさは物をこそ思へ」

※宮殿の部屋に座って物思いにふける女。部屋に続く渡り廊下には、女に持って行く湯桶を持つ女と、洗面の盆を持つ供の女が歩いている。

☆72「乳母か縁説」〈皇太后宮大夫俊成〉（前北斎刊。25.6×37.5 フリーア美術館蔵）

「世の中よ道こそなけれ思ひ入る 山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」

※崖に吊した箆に乗り岩茸を採る二人の女。その下の道を行く天秤の草の束を担ぐ男。客を乗せた駕籠かき。笠を背にした道中差しをした旅人。遠くの山頂に小さく二匹の鹿が描かれる。

☆73「う波かゑと起」〈藤原清輔朝臣〉（前北斎刊。25.6×37.5 フリーア美術館蔵）

「長らへばまたこのごろやしのばれむ 憂しと見し世ぞ今は恋しき」

※小さな広場に作られた舞台上で踊りを披露する袷姿の芸人。舞台の周りで見物する男女。

☆74「乳母かゑと起」〈俊恵法師〉（前北斎刊。25.5×37.5 フリーア美術館蔵）

「よもすがら物思ふころは明けやらで 闇のひまさへつれなかりけり」

※家の板戸を開け、袖を口元に当てて月を眺める女。

☆75「乳母か縁説」〈西行法師〉（前北斎刊。25.6×37.8 フリーア美術館蔵）

「嘆けとて月やは物を思はする かこち顔なるわが涙かな」

※笥から水が流れる手水鉢のある庵の部屋に座り、遠くの満月を眺める僧侶。

☆76「姥かゑと起」〈寂蓮法師〉（前北斎刊。25.6×37.7 フリーア美術館蔵）

「村雨の露もまだひぬ真木の葉に 霧立ちのぼる秋の夕暮れ」

☆77「うはかゑとき」〈皇嘉門院別当〉（25.0×37.1 大英博物館蔵）

「難（波）江の苜のかりねの一ト夜ゆゑ 身をつくしてや恋ひわたるべき」

※イグサの束を多く乗せた大八車の前に渡した横棒を引く男、後ろから車を押す二人の男。坂下には塀のある屋敷が見える。

☆78「うはかゑと起」〈式子内親王〉（前北斎刊。25.6×37.5 フリーア美術館蔵）

「玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば 忍ぶることの弱りもぞする」

※部屋の座敷で、火鉢に薬缶がかかる大きな火鉢の前で、二人の女が身を寄せ合って眠っている。部屋の脇の小上がりの部屋ではもう一人の女が立膝のまま眠っている。板壁には馬の絵が嵌め込まれている。

☆79「乳母か縁説」〈殷富門院大輔〉（メトロポリタン美術館蔵）

「見せばやな雄島のあまの袖だににも ぬれにぞぬれし色はかはらず」

☆80「うはかゑと幾」〈後京極摂政前大（太）政大臣〉（前北斎刊。25.6×37.6 フリーア美術館蔵）

「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに 衣片敷きひとりかも寝む」

※開け放たれた二階の座敷で布団の上に座り、首を背中にひねって外を見ている女。

☆81「うはかゑ登起」〈二條院讃岐〉（前北斎刊。25.6×37.3 フリーア美術館蔵）

「わが袖は潮干に見えぬ沖の石の 人こそ知らね乾く間もなし」

※砂浜の斜面を塩の塊を入れたかごを紐で引く二人の男。塩の塊を入れた籠を持ち上げている男。赤子を背負った母親と童が塩塊を入れた籠の紐を通した棒を支え持っている。

☆82「うはか恵とき」〈鎌倉右大臣〉（前北斎刊。25.8×37.8 フリーア美術館蔵）

「世の中は常にもがもな渚漕ぐ 海人の小舟の綱手かなしも」

※砂浜で数人の漁師が小舟を綱で引いている。海上には千鳥が群れをなして飛んでいる。

☆83「姥か絵登起」〈前大僧正慈円〉（シャルル・ジローによる復刻。14.8×21.3 フリーア美術館蔵）

「おほけなくうき世の民におほふかな わが立つ袖に墨染の袖」

☆84「姥か恵登喜」〈入道前太政大臣〉（前北斎刊。25.7×37.7 フリーア美術館蔵）

「花さそふ嵐の庭の雪ならで ふりゆくものはわが身なりけり」

※石燈籠の側の桜の木から庭に散る花を、箒で掃いている母親としゃがんで塵取りに花びらを集めている童女。

☆85「乳母か衛登起」〈従二位家隆〉（前北斎卍。26.6×37.5 フリーア美術館蔵）

「風そよぐならの小川の夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける」

※画中の幟旗に「祭礼氏子中」とあり、その脇に「九 戌 戌 朱 明」（天保9年夏：1838）とあるので、その頃まで版下絵が書かれていたと考えられる。

神社の門にくくりつけられた付けられた輪をくぐる水無月祓えの神事で、御幣を振る神主と座って祈る男。肩車された子どもが輪を結わえた紐を引っ張っている。提灯を持った角隠しの女。小田原提灯を下げた杖を突く老人が帰りかけている。

☆86「宇葉か縁説」〈後鳥羽の院〉（前北斎卍。25.5×37.5 フリーア美術館蔵）

「人もをし人もうらめしあぢきなく 世を思ふゆゑに物思ふ身は」

※屋敷の屋根付き板塀の前を、竿の先につけた高提灯を担いで急いで走る男。その前に、馬上で疾駆する武具を着た武者。その前を抜き身の長刀を肩にして走る男。塀の門口から屋敷内に入る男の下半身が見える。塀の向こうから高提灯が三本、屋根越しに見える。

※未確認版下絵、〈中納言行平〉〈凡河内躬常恒〉〈曾禰好忠〉〈源重之〉〈儀同三司母〉〈大式三位〉〈前大僧正行尊〉〈参議雅経〉〈順徳院〉の9図（2005『北斎展図録』p 360）。

●屏風肉筆画「鳳凰図屏風」（紙本着色。八曲一隻屏風。齢七十六歳前北斎為一改画狂老人卍筆。印富士の形。35.8×233.2 ポストン美術館蔵）



鳳凰図屏風（ポストン美術館）

※縦 35.8 cm に比して横 29.6 cm の縦大判を 8 枚続けて描いたもの。金箔を施した背景に横いっぱい羽を伸ばした鳳凰が極彩色で描かれる。

天保7(1836) 丙申 77 歳 天竺浪人画狂老人卍翁、浦賀旅人画狂老人卍、画狂老人卍、
齢七十七前北斎為一改画狂老人卍、七十七歳前北斎改画狂老人卍、前北斎改画狂老人卍、
画狂老人卍翁、前北斎為一改画狂老人卍、前北斎画狂老人卍、独流開祖齢七十七画狂老人卍、
前北斎事画狂老人乞食坊主万字、齢七十六前北斎為一改画狂老人卍（前年のもの）、画

狂人前北斎卍、印富士の形：孫(27)、阿栄(39)

◇諸国に飢饉続く。奥羽地方で死者 10 万人。

◇8月14日、曲亭馬琴、70歳を記念して柳橋万屋八兵衛（万八楼）で所蔵品書画会を開き、その収入（135両）で孫に同心株を購入し与える。株に付いていた四谷信濃仲殿町（現、東京都新宿区霞ヶ岳町）の屋敷を改修。この年、神田宅を地主の杉浦清太郎に42両で売る。孫の太郎（9歳）を嫡家の当主とする。

- ◇12月19日、富岡鉄齋生（～1924）。
- ◇二代目永楽屋東四郎没（62）。
- 為永春水『春告鳥』。
- 歌川国貞「東海道五十三次之内（美人東海道）」。
- 齋藤月岑『江戸名所図会』（後半4～7巻10冊）。

【秋ごろまで浦賀に逗留】

※正月17日小林新兵衛宛の手紙。

「(略) 来二月初旬には、筆紙、画之具、切れ目、相成候間、無是非老人老人、江戸へ出府仕候間、其砌は、内々にて御店へも参上、委細は、御面上に万々可申上候(略)」(『葛飾北斎伝』p148 ルビは筆者)

二月には画材が切れたので、調達のために江戸に一旦戻るが、その際には内々に小林新兵衛(嵩山房)へ出向き、いろいろ話をしたいというのである。内々に訪ねるのは浦賀に居ることを知られたくないからであろう。嵩山房は日本橋通二丁目にあった。この手紙に北斎自身と思われるコマ絵が添えられる。



「コマ絵」

嵩山房とは、武者絵の顔の彫り方について、目、鼻の具体的な形を図示しての注文をしているので、それらのことでの訪問であろう。また、同手紙に「遠慮之儀御座候間、旅住之場所は、したゝめ不申候」(p150)と、思うところがあつて、浦賀に住んでいる場所は書かないとしている。自らを「天竺浪人画狂老人兎翁」と署名する。2月に一時的に江戸へ帰ったと思われる。

【歌川風の鼻、どうぞ此のやうにならぬやうに】

※同手紙の後半には、彫師に対し、鼻の線描を示し「職人衆、能御承知之はなは、歌川風の(歌川風の鼻の線描が書かれる)此分は、画法にはづれ候間、私の方にては、どうぞ此のやうにならぬやうに、(北斎風の鼻の線描)と御ほり可被下候。(歌川風の目と鼻の線描)此類流行にても、あるべけれど、私はいやく」(『葛飾北斎伝』p149～150)とあり、歌川風の描き方が流行とはいへ、「私はいやく」と言っているのである(ルビは筆者)。

★3月頃。江戸深川万年橋(現東京都江東区常盤橋2丁目と清澄1～3丁目に架かる橋)付近に住む。この年刊『和漢絵本魁』の自序に「貴き御代の民たる事、実浮木の亀注の幸にして、万年橋の辺りに寓居なし(仮の住まいを構え)(略)」とある(注・ルビは筆者による)。

注) 浮木の亀: 「盲亀の浮木」のこと。大海中に住み、百年に一度水面に出て来る目の見えない亀が、ようやく浮木に遇い、その穴に入るという事。めったに遇えない幸せということ。

★墨摺りの濃淡について述べた小林新兵衛宛ての手紙の末尾に「(略) 唐詩選残三丁半、差上申候。(略) かげんの違た 涼しい土用 浦賀旅人画狂老人卅三拜」(『葛飾北斎伝』p 151) とある。唐詩選は、文化7年の『唐詩選画本 七言律』と思われ、「涼しい土用」とあるので夏の頃の手紙であろうから、一時的に江戸に戻ることはあっても、この年の夏までは浦賀にいたと推測できる。

★この年の秋に刊行された『広益諸家人名録』(天保丙申秋校正)に「北斎 名戴斗字雷震一号為一画狂人 居所不定 葛飾北斎」(『年譜』による)とあり、秋頃までは居所が不明とされた。

【北斎の晩年の支援者・高井鴻山と出会う】

★この年、貧窮の北斎が絵草紙屋に売り込みに来た絵を、居合わせた江戸遊学中の高井鴻山が金二分注で購入したといわれる(尾崎周道『北斎 ある画狂人の生涯』(日経新書。p 193)。

注) 金二分: 約7万5千円。金1両=6000文(仮)=二分。1文=25円で換算。

同書では鴻山との出会いについて更に別の見方も紹介している。

「北斎と鴻山があったのは天保七年ではなく、六年のできごとで、当時小布施の商人で十八屋というものが江戸日本橋で呉服商を営んでいたが、この十八屋と北斎はかねてから懇意であり、北斎は高井鴻山の人となり十八屋から聞いていた。鴻山が京で岸駒、岩岱について、また横山(筆者注: 三島とも) 上龍について絵を習い、絵に非常に興味を持っていることなども承知していた。十八屋はまた飛脚屋も営んでいたもので、江戸遊学中の鴻山も北斎の人となりを知っていて、北斎に逢いたく思い、同郷のことゆえ、この十八屋の紹介で両者が逢った」というのである(同書p 193~194)。

後に高井鴻山は北斎の生活面・金銭面の支援者となる。文化3年(1806)生。明治16年(1833)没。信濃国高井郡小布施の豪農商・高井家十代目の熊太郎と母ことの四男。15歳のとき、京都に遊学、絵画・国学・和歌・儒学・漢学等を学び、天保4年(1833)に江戸に移住。天保7年(1836)の飢饉に小布施に帰郷し、自宅の蔵を開いて庶民を救済した。

●絵手本『新雛形』(1月。角書「諸職絵本」。墨摺。半紙本一冊。全27丁。齢七十七前北斎為一改画狂老人卅筆。印富士の形。須原屋茂兵衛版。22.4×16.0 すみだ北斎美術館: ピーターモース・コレクション/国文学研究資料館/島根県立美術館: 永田コレクション/大英博物館/東洋文庫/フリーア美術館: プルヴェラー・コレクション蔵)

新雛形見返し(新日本古典籍総合データベースより)

※見返しは「前北斎改画狂老人卅筆 諸職絵本 葛飾新雛形 天保七丙申孟春」とある。自序には「天保七丙申 孟春 画狂老人卅述 印富士の形」とある。最終丁には「齢七十七前北斎為一改画狂老人卅筆 印富士の形 剗刷



江川留吉」とある。奥付には三都書肆として「勝村治右衛門（京都寺町通松原）、秋田屋太右エ門（大坂心齋橋安堂寺町）、小林新兵衛（江戸日本橋通貳丁目）、須原屋佐吉（同四丁目）、須原屋茂兵衛版（同壹丁目）が連名で記される。後に永楽屋東四郎版『葛飾北斎遺墨 北斎新雛形』（刊行年不詳。淡色摺）が出る（『ビーターモース・コレクション北斎図録』による）。須原屋茂兵衛版の広告に中・下。続編の広告あるも未刊。

※様々な職人が使用できるよう文様や図面の割出しなどに言及したもの。

【北斎の細密画批判に反論・不学者の論一笑に備ふのみ】

※巻末の「神馬図」に添えられた、北斎の細密画法への批判に応えた文。

「客来ッて叱つて曰く。足下の細画委きに過たり、故に忽にあらざと譏る人多し。改ルにしかじ。答て智者ハ其智に誇る。業等閑にして、文雅を礼とし、あるハ流行を常として、智を以て世に鳴ル、わざ鈍キハ老て下タる事速なり。幸に天我をして遇ならしむ。剩 文旨にして、古法に縄せられず。去年を悔ヒきのふをハぢ、ひとり塞翁が馬に鞭うつて、此道に走る事をほしひまゝにす。齡八旬にちかしといへど、眼氣筆力壯年にかかわらず、百歳の命を保チて、独立のこゝろざしをじやうじゆ（成就）せん事を思ふ。其客にも命あらバ、老人が言の違ざるを見給ふべし。客いかつて（怒って）憚る。不学者の論一笑に備ふ而已」（注・句読点・ルビは筆者による）。



『新雛形』巻末（新古典籍データベースより）

●絵本『和漢絵本魁』（正月。半紙本。三巻一冊墨摺。全32丁。最終ページに、七十七齡前北斎改画狂老人卍筆。印富士の形。自序には「前北斎改画狂老人卍述」とある。彫工・杉田金助・江川留吉とある。扉には、「和漢絵本魁 初編 前北斎改画狂老人卍筆 書林崇山房 北林堂 梓」とある。22.6×16.0 大英博物館/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ビーターモース・コレクション/山口県立萩美術館/東洋文庫/フリーア美術館：フルヴェラー・コレクション蔵）。

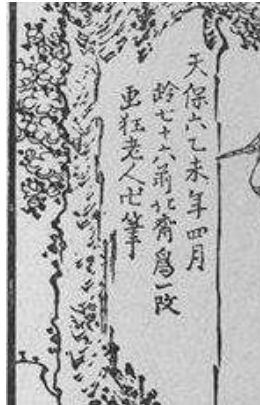
※北島順四郎（北林堂。江戸神田鍛冶町）、小林新兵衛（崇山房。江戸日本橋通二丁目）、秋田屋太右衛門（大坂心齋橋安堂寺町）、永楽屋東四郎（尾州名古屋本町）、和泉屋市兵衛（江戸芝神明前）、西宮弥兵衛（江戸中橋広小路）の相合版（共同出版）。

※最終図「備後の三郎高德」の図に、高德が木に「天保六乙未年四月齡七十六前北斎為一改画狂老人卍筆」と書き、版下絵の制作年月（天保6年4月）が記されていて、下絵は天保6年4月に描かれたことを示している。

『和漢絵本魁』備後の三郎高德（ゴンス：1883「日本の美術」国文研データベースより）

続編「葛飾振」（岡田屋嘉七広告）は未刊（永田生慈『北斎の絵手本四』p 262による）。

※北斎自序に「尊き御代の民たること、実に浮木の亀の幸にして、万年橋の辺りに遇居なし、年の功を日に暄るの折から、来られる人は、書肆嵩山房主人、例の板下をものせよと乞ふ。基巻中遍く治世に武を忘れざる有名の壮士剛強の像を写して、智仁勇



の三編に兼備せよとなり、潔きすゝめに引きたてられつ、七十に奈れる老にも屈せず、弓にひとしく、まかれる腰に光陰の箭うち刻へて、的をはつさぬはつ春の唯中、時の拍子にはやり雄の画本魁と表題して、今年巳午の口を形つて恵方にむかつて筆はしめに誌す。天保七 丙申の艶陽 前北斎改画狂老人卅述 印富士の形 董斎盛義（書家）書（注・句読点・ルビは筆者）とあり、有名な和漢の剛士の像を、智仁勇の三編で完成する予定で、その版下絵を描くよう版元から依頼があったことを記している。これは『勝鹿振』と題して出版予定であったが未刊となった。版下絵は完成していて、メトロポリタン美術館蔵という（永田生慈『北斎の本懐』角川新書 p 102）。

〈多力雄の命〉 〈豊玉姫の本形・彦炎出見尊〉 〈堤婆達多 鉄弓を彎〉 〈夏の禹王洪水を治〉 〈大蛇の再生 盤永姫 天児家根命〉 〈藤原広嗣の霊霊 玄暴僧正〉 〈大伴の良雄 記の名虎 両狐の英雄角觥に力を挑〉 〈物部の守屋の大臣〉 〈漢の張良〉 〈蒼海公〉 〈平親王 将門 倭藤太秀郷〉 〈韓信〉 〈伊予の尉藤原の純友 橘の遠保純友を生捕〉 〈楚の項羽 烏推といふ名馬を得〉 〈平井の保昌 土蜘蛛退治〉 〈焚燬 鉄門を破〉 〈夢中出現の鍾馗〉 〈隋の臣下魔叔謀 好で小児の肉を喰〉 〈制多伽童子 文覚荒行〉 〈汜額女怪力〉 〈平忠盛怪僧を捕ふ〉 〈備後の三郎高德〉 など。

●絵手本『絵本武蔵鑑』（8月。墨摺。半紙本一冊。見開きに「前北斎改画狂老人卅筆 画本武蔵鑑 甲冑之篇 書林嵩山房 北林堂新梓 天保七丙申朱明（筆者注：夏）発兌」とある。奥付には「七十七歳 前北斎改画狂老人卅筆 印富士の形」とある。彫工・江川留吉。秋田屋太右衛門（大坂心斎橋安堂寺町）、永楽屋東四郎（尾州名古屋本町）、和泉屋市兵衛（江戸芝神明前）、北島順四郎（江戸神田鍛冶町）、小林新兵衛（江戸日本橋通二丁目）西宮弥兵衛（江戸中橋広小路）の合版。島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東洋文庫/大英博物館蔵）

※和漢の武者を題材にしたもの。『和漢絵本魁』の二編として刊行。奥付に「天保七丙申年八月發行」とある。明治10年の刊行もあり）

※画中の何か所で自らの画論を短く記している。また、序文には「（略）老人ことし七十有七歳、眼鏡を用ひずして、燈下に毫を揮ふ。その健にあらされは、此勇壯をうつ

すことあたはし。其氣力にあらずは、この密は急かきかたからん。奇巧妙画、おのれが拙辞のおよはさる所ハ、巻中の絵のたすけによりて、おのつから明らかならむ。天保七年六月 銀官局司 秋田太義識」(句読点・ルビは筆者)として、北斎の健康ぶりが無ければこれほどの奇巧妙画、細密の画は書けなかつたらうと述べている。

注) 秋田太義：不明。

【酔中筆の拙き画】

※『絵本武蔵鑑』29 丁の上杉謙信と武田信玄の図について、『葛飾北斎伝』(p190)では次のように厳しく批判している。

「謙信のきりこみたる太刀を、信玄左手に軍配を持ち、逆にうけとむるのさま甚拙し。しかして信玄の右手は、一刀を引き抜かんありさまなれど、これまた甚拙し。北斎も自ら拙しとおもひければ、此に副書して、『酔中筆して曰く、紙中寸尺限あり。形自在ならず。馬上と歩行との風情は、横に広からんものを立にす。余は押ししてしるべし』と、これ即酔中の字をかりて、拙を覆ひたるものなり。実に酔中とか言はざれば、人に示されぬ画なり」(ルビは筆者による)。まるで酔って描いたような絵だというのである。

ちなみに、北斎は「文化文政年間の諸名家、大抵酒を飲まざるものなし。惟北斎翁に至りては、絶えて酒を飲まざりしなり。画の味は、蓋し酒よりも猶甘きが故なるべし」(『葛飾北斎伝』p181)とあるように下戸であった。



上杉輝虎 入道謙信/武田晴信 入道信玄(すみだ北斎美術館)

●絵本『画本葛飾振』(版下絵一帖墨摺。無款。25.4×39.4 メトロポリタン美術館蔵)

※『和漢絵本魁』『絵本武蔵鑑』の巻末広告に『画本和漢葛飾振』とあるが未刊。見開き22図。半丁図6図の日本の武人等の版下絵。『和漢絵本魁』掲載の「絵本魁」二編と『絵本武蔵鑑』掲載広告にある「勝鹿振」がこの版下絵をもとに刊行される予定であったとされる。『2017 北斎一富士を超えて』図録p225には「俵藤太秀郷 龍宮城より宝を得る」(メトロポリタン美術館蔵)と題した『画本葛飾振』の版下絵が紹介されている。

●絵本『唐詩選画本 七言律』七編(9月。半紙本5冊。画狂老人卍翁筆。高井蘭山著。小林新兵衛版。島根県立美術館：永田コレクション/同志社大学図書館蔵)

※天保4年の六編とこの年の七編に挿絵を描いている。巻一に11図、巻二に11図、巻三に10図、巻四に7図、巻五に6図の挿絵を描く。袋には、画狂人前北斎卍筆とある。

●絵手本『画本和漢誉』(墨摺半紙本一冊。全30丁。三都書肆として、出雲屋文次郎(京都三条通升屋町)、河内屋喜兵衛(大坂心斎橋通北久太郎町)、河内屋茂兵衛(同博労町)、須原屋茂兵衛(江戸日本橋通壹丁目)、山城屋佐兵衛(同二丁目)、小林

新兵衛（同）、岡田屋嘉七（芝神明前）、山城屋政吉（日本橋四日市）、紙屋徳八（下谷御成道）の連名版。大英博物館/フリーア美術館/メトロポリタン美術館蔵

※和漢の武者が戦う様子を描く。没後の翌年、嘉永3年（1850）3月に出版される。下絵は76歳（天保6年）のもの。

嘉永3年の序文「（略）いでやはつかに此一卷をひらき見んにハ。漢に和に。いにしへの誉ある人々の戦ふさまを。まのあたり見る心ちぞせらるゝ。猶かつ画狂人の筆の巧にハ。健きものゝふのうごきはたらくばかりにこそあれ。嘉永ミとせ卯月日 山崎義成しるす」
注) 山崎美成：不明。

※奥付には「七十七齡 前北斎改画狂老人卅筆 印富士の形/彫工 杉田金助 江川留吉（五常亭）」とある。



蒲田又八がちから（大英博物館）

※見返しには「前北斎画狂老人卅筆 画本和漢誉 全一卷 嘉永庚戌（嘉永3年）孟春新鑄（新たに版を彫ること）江都東昌軒発行」とある。

※裏表紙見返しには「画狂老人卅筆 嘉永三年庚戌五月八兌」とある。



右 拡大図

※巻末の挿絵「鎌田又八がちから」図中には「画本和漢誉 豆相ノ旅客 前北斎改画狂老人卅筆 時七十六歳」とあるので天保6年の伊豆・相州の旅中に下絵が描かれていたことが分かる。

●摺物「歌占図」（1月。独流開祖齡七十七画狂老人卅）

※文政10年の「歌占図」（北斎為一敬画。大英博物館蔵）とは別図。

天保8(1837) 丁酉 78歳 齡七十二画狂老人卅（前年の「七十七」の彫り誤りか）、

応需画狂人卅写意、齡七十八画狂老人卅 印葛しか：孫（28）、阿栄（40）

◇2月16日、成島柳北生（～1894）。

◇2月19日、大塩平八郎の乱。3月27日、鎮圧・自殺。

◇3月24日、江戸窮民に2万俵の施米。

◇4月2日、将軍家斉から家慶に。

◇6月、生田万の乱（越後の国学者生田万が、飢饉困窮を訴えて越後・柏崎で起こした反乱事件）。

◇6月、モリソン号事件（音吉ら日本人漂流民を乗せたアメリカ商船が浦賀に入港。浦賀奉行が砲撃した事件）。

◇仏人タゲール、写真機「タゲレオタイプ」を発明。

◇シーボルトの日本の民俗関係資料がオランダ政府に買い上げられる。これによりシーボルト日本博物館が設立される（現、オランダ国立民族学博物館）。ここで「北斎漫画」が展示され、世界初の浮世絵展となる。

◇この頃、江戸で佃煮が売り出される。

◇秋、豊作となる。

○歌川広重『江戸近郊八景』

○鈴木牧之『北越雪譜』初篇。

【林町から本郷に住むか・放蕩孫没か】

★「天保十年六月八日針医某話」（朝岡興禎編『古画備考』嘉永3年項より）

「北斎男子ハ御小人目付ヘカ家ヲ継、加瀬田（多）吉郎トテ本郷ノ組屋敷ヘ別宅ス、娘於榮トカハ弟子（筆者注：「才子」の誤りか）也、外ニ孫ノ男子二人アリ、北斎其後、林町注1ヨリ外ヘ転宅ス、其後、年経テ途中ニテ逢タルニ、孫兩人共、放蕩ニテ注2甚困リ候ニ付、（以下国立国会デジタルコレクションでは判読不能により Web「浮世絵分館資料館」浮世絵師総覧・葛飾北斎による）只今ハ本郷ノ俵方（筆者注：次男多吉郎）ニ同居致候ト被申候、一昨年（天保八年）ノ頃没シ注3被申候由、加瀬氏ハ墓所一覽ニ漏タル名家ノ墓所ヲ編集致サレ候と也」（国立国会図書館デジタルコレクション「30-179 コマ」、及び WEB「浮世絵文献資料館」葛飾北斎：嘉永3年の記事より。ルビ・句読点は筆者による）

注1) 林町：林町三丁目の甚兵衛店。

注2) 孫兩人共ニ、放蕩ニテ：北斎の長女阿美与と柳川重信の間には男子が生まれたが、他にも男子がいて、二人とも「放蕩」であったという話には疑問がある。

注3) 没し：誰が没したのか不明。あるいはドラ孫か。

【天保8・9年は作画減少】

●地誌『日光山誌』（1月。大本五冊墨摺。植田孟縉編。序文は文政8年(1825)。齢七十二画狂老人卍筆（其一）。応需画狂人卍写意（其二）。挿絵二図〈龍頭の滝〉（其一と其二）を描く。他に二世柳川重信、谷文晁、渡辺崋山等が挿絵を描く。須原屋伊八・須原屋茂兵衛の合梓版。国立国会図書館/島根県利美術館：永田コレクション/東洋文庫蔵）

龍図の滝（初沢町の紹介による）右図：落款部分

※其一にある「龍頭瀧」について、
「この龍頭瀧の図に『齢七十二画狂老人卍筆』とあり、この年令からすれば天保2年(1831)の制作となるが「七十二」の「二」の字体に欠損がみられ、あるいは「七」の字を彫り誤ったか欠損してこのようになった



かと思われる点あり。刊年との関係からも合理性があるので、天保八年（1837）の項に入

れておく。」という見方もある（鈴木重三『在外秘宝』）。本稿もこの説に一応従う。他に、72歳の時に実際に日光に行つて写生をし、それに基づいて描いたものという説もある（2017『北斎一富士を超えて』図録p115）

●読本『絵本西遊全伝』（四編。文化三年初編参照）

●肉筆画「王喬図」（絹本着色一幅。齢七十八 画狂老人卅筆。印葛しか。33.0×56.5 個人蔵）

※明帝の時、楚国葉県そこくせつけんの官吏おうきやうの王喬は、仙人となつて、葉県から鴨の羽になつた靴を履き、馬車も用いず遠いところから毎朝早く帝にまみえたので、帝は不思議に思いその様子を伺い網を張つて鴨を捕らえると、王喬の靴が網に残つたという（橘守国『絵本故事談』巻六の記事を永田生慈が『北斎研究』35号で紹介。P5～6）。

図は、画面左下に墨摺で網を描き、図中央に羽根を広げた鴨の背に裸足で乗り、右手をかざして落ちた靴の行方を捜している様子の王喬を描く。

天保9(1838) 戊戌 79歳 前北斎為一老人、齢七十九前北斎卅：阿栄(41)

◇3月10日、江戸城西丸炎上。

◇4月、江戸日本橋・神田大火。

◇6月1日、山東京伝、剃髪する。

◇8月、この頃より都々逸坊扇歌の唄う都々逸節が流行。

◇10月23日、高井蘭山没（77）。

◇水野忠邦：農村復興策（人返令）。

◇長崎オランダ商館江戸参府。

◇緒方洪庵、大坂に適塾を開く。

◇シーボルト、『日本』仏訳・出版。

◇曲亭馬琴、春頃より左目が翳むようになり、眼鏡が曇つたためとして、値段の高い水晶製の眼鏡を購入する。

【天保9年の浮世絵等の価格】

◇天保9年の曲亭馬琴の書簡（『馬琴書翰集成』八木書店）に次の記述がある。

「（略）近来、紙ことの外高料のよしにて、錦画の価いたく登り候。『八犬伝』残り式枚の分ハ、おろし直段巻枚三分づゝ、又芝居にていたし候錦画は、おろし直廿四文づゝに御座候（略）」（6月28日、殿村篠斎宛て。第五卷p24。ルビは筆者）

「（略）錦画の紙イヨマコ、甚高料のよしにて、価前々とハ一倍に成り、西与（筆者注：西村屋与八）のハ巻枚おろし直三分づゝ、小うり店にてハ四十八文づゝにうり候よし。役者画ハ、おろし直巻枚廿四文づゝ、小うり店にてハ三十二文づゝにうり候へども、よくうれ候よし」（7月朔日、小津桂窓宛て。第五卷P36 ルビは筆者）

紙代高騰で、錦絵なども高くなつてきたというのである。それでもよく売れているという。

※一分=十文（250 円）として三分（30 文）は約 750 円（一文=25 円で換算）。役者錦画 1 枚は卸値 24 文（約 600 円）小売り値 32 文（約 800 円）である。文化 2 年（1805）では、役者絵 1 枚約 200 円、大判錦絵 1 枚は約 500 円程度であった。⇒文化 2 年「文化 2 年の浮世絵等の価格」参照。

●読本『新編水滸画伝』四編後帙（7 月。五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。丁子屋版）

●読本『新編水滸画伝』五編前帙（五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。丁子屋版）

●読本『新編水滸画伝』五編後帙（五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。丁子屋版）

●読本『新編水滸画伝』六編前帙（五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。河内屋孫三郎版）

●読本『新編水滸画伝』六編後帙（五冊。高井蘭山作。前北斎為一老人画。河内屋孫三郎版）

※初編は文化 3 年（1806）刊行（奥付は文化 2 年）。

●錦絵「百人一首乳母かえとき」下絵

※「従二位家隆」版下絵（フリーア美術館蔵）の画中の幟に、「九成年朱明」とあるところから、この頃までも版下絵が描かれていたという見方がある（『年譜』による）。

●肉筆画「大黒天図」（9 月。「俵上の大黒天図」とも。天保九 戊戌年 九月甲子日子ノ刻 齢七十九前北斎卅筆。印不明）

※天保 15 年（1844）「大黒天図」（現所在不明）とは別図。

天保10(1839) 己亥 80 歳 画狂老人卅筆 齢八十、画狂老人卅筆八十齢、画狂老人卅筆

齢八十歳、画狂老人卅八十 印 葛しか：阿栄(42)

◇曲亭馬琴、春頃より左目のかすみが生じたが、翌年春までは何とか稿本を書く。

◇1 月 19 日、ポール・セザンヌ生（～1906）。

◇3 月 17 日、月岡芳年生（～1892）。

◇5 月 14 日、蚕社の獄。高野長英、渡辺崋山等がモリソン号事件と鎖国政策を批判したため、鳥居耀蔵の首謀により獄に繋がる。12 月 18 日、長英は終身禁獄、崋山は蟄居となる。

◇8 月 20 日、高杉晋作生（～1867）。

◇12 月頃、人情本が流行。

★この頃、本所石原片町（現、石原 1・2 丁目辺。内藤山城守下屋敷跡辺。御厩河岸渡し場近く）に住む（『和楽』2017 年 9 月。10・11 月号 p 71 掲載の「嘉永 新鐫 本所絵図」による。文化 14 年（1817）頃に石原片町に住んだともされるが、検討の要あり。

【この頃、家には飯器なし。土瓶、茶碗二、三個あるのみ】

※「戸崎氏又曰く、本所石原町片町の頃、三食は隣の煮売酒店から取り寄せる。家には飯器なし。土瓶、茶碗二、三個あるのみ。(略)関根(只誠)氏『増補類考』に曰く、翁は、生涯赤貧にして世を終ふ。壮年の頃は、一脚の机なく、飯櫃を机にかえ板下を画きしとぞ」(『葛飾北斎伝』所収座談。p 200)

続けて『葛飾北斎伝』には、小林新兵衛(嵩山房)宛の手紙に『日光山誌』(天保8年:1837刊)の画料請求の言葉に続けて書かれた「娑婆にすむ粥なき鍋のつるされて、すくふぼさつもあらじとおもへば」(脚注:ぼさつは米の異称。すくい上げる米粒もない貧しい状態。「粥なき」の縁で出す。なお「粥なき」は「甲斐なき」に通わせる)の狂歌を記している(p 201)。

★さらに本所達磨横町(現東京都墨田区本所1丁目辺。駒形橋東岸)に住む。初めて火災に遭う。

【初めて火災に遭う。此の頃の貧苦は、殊に甚しかりし】

★達磨横町注1で初めて火災に遭い、多くの縮図や車一台分の和漢古今東西の図を焼失、筆のみを持って阿栄とともに逃げる。その後、筆はあるが他の物はない。有った磁壇を破り、底の方を筆洗とし、破片を絵の具皿にして作画したという。

※「同十年の頃、本所石原片町注2に住し、後に達磨横町に転じ、火災に罹る。(略)転居五十六回にして、火災に遇はざるは、実に珍し。されど終に火災を免るゝこと能はずして、乏しき衣類諸道具を失ひ、娘と共に赤裸となり、恰も乞食の如きありさまとなりし。其の火災に遇ひし時、翁は、筆を握りて家を飛び出し、娘阿栄もつゞきてあとより飛び出だし、家財をおしともおもはぬにや、取りかたづけ持ち出でる暇は、ありながら、跡をも見ずして、逃げ去りたり。さて画を請ふ者ありしが、筆はあれど、硯其の他の器具なければ、ありあふ磁壇を打ち砕き、底の方を筆洗となし、破片を絵の具皿となし、画きて与へたり。此の頃の貧苦は、殊に甚しかりし。されど更に憂ふる色なし。柴文の話」(『葛飾北斎伝』p 165~166 ルビは筆者による)。

【車一台分の縮写(スケッチ)図を消失】

「梅彦氏曰く、北斎翁幼より画道に志し、和漢古今を論ぜず、西洋の画図に至るまで、苟見るに足るものあれば、即縮写して、これを蔵し、殆一車にみつ。此の縮写せし画図は、本所石原注3にて、火災に罹り烏有となる。翁深く嘆息して、其の以来は縮写をなさず。またおのれが下画も、敢て残しおくの意なきが如し」(『葛飾北斎伝』p 165~166 ルビは筆者による)。

注1) 達磨横町: 現墨田区本所1丁目辺。

注2) 本所石原片町: 現墨田区石原1・2丁目辺。

注3) 本所石原: 達磨横町を指していると思われる。

【生涯の肉筆画 1326 点、80 歳以降 134 点】

★この頃からは、肉筆画に傾注する。ちなみに北斎の生涯における肉筆画は1326点（2011年3月現在。久保田一洋の北斎資料を島田賢太郎が「台東区生涯学習 浮世絵講座 葛飾北斎 第5回 北斎の肉筆画と問題点」〈2011年3月9日〉で紹介している）。

同様に、『北斎一富士を超えて』展図録（2017年10月）p18、テイシー・クラーク「逆順で語る晩年の北斎」では「現存する年記のある肉筆画点数」として、次のように紹介している。（ ）内は点数。

80歳（19）、81歳（13）、82歳（4）、83歳（3）、84歳（16）、85歳（14）、86歳（6）、87歳（8）、88歳（32）、89歳（7）、90歳（12）計134点

★此の頃にも『肉筆画帖』を描いたか。林忠正旧蔵の『肉筆画帖』（全12図）には「画狂老人卅八十歳画」とあったという（『Hokusai』Edmond de Goncourt 〈エドモント・デ・ゴンクール〉の説を『年譜』で紹介）。

●北斎と思われる川柳（田中聡『北斎川柳』による。河出書房新社）

☆草履取る手にあしはらを又握り 卅（豊田秀吉は草履取りから葦原の国を手にしたことだ）

☆下女報謝来れば摺ンで入れて遣り 百姓（托鉢僧の鉢に報謝を入れるように下女も来た客を入れてやる）

【北斎の孫・多知女に結婚祝いの「鯉図」を贈る】

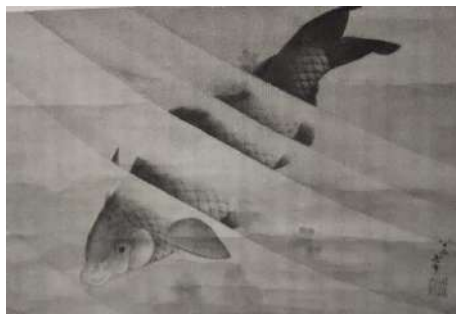
★北斎の孫（北斎の後妻ことの二男多吉郎〈後の加瀬崎十郎〉の子）多知女が白井久之助と結婚するにあたり祝いとして「鯉図」一幅を贈る。

●肉筆画「鯉図」（八十歳卅筆、印葛しか）

※水面に光が当たり、水藻が透けて見える。

鯉図（白井家蔵：内藤正人「北斎の裔一幕臣白井家の系譜と、その遺品」より転載：モノクロ）

※箱蓋裏「曾祖父葛飾北斎一多知女白井家に嫁スルニ当り此鯉図ノ画ヲ賜ハル 十三代 白井孝義（筆者注：多知女の長男）」



●肉筆画「遊鯉図」（絹本淡彩一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。65.7×30.8 個人蔵）

※光の当たる水面を泳ぐ一匹の鯉。尾の近くに水藻が描かれる。

遊鯉図（dramtic-history.comより転載）

【西瓜図の謎・皇室との関わりは？】

●肉筆画「西瓜図」（絹本一幅。86・1×29・9 画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）

※宮中の誰かに「応需」〈特別の求めに応じたもの〉されて描いたものとされる。（今橋理子「江戸絵画と文学—〈描写〉と〈ことば〉の江戸文化史」：小林忠「画狂北斎の実像」（2005『北斎展』図録所収）による紹介）。



従来、同図は、仁孝天皇(1800～1846)の光格上皇(天保11年11月18日崩御)の依頼という見方があった(内藤正人『浮世絵再発見—大名たちが愛でた逸品・絶品』)。

※図は、半分に切られた西瓜の表面が紙で覆われ、包丁が置かれている。図の上には張られた縄に西瓜の皮の細切りが掛けられている。

※宮中の七夕の星まつりである「乞巧奠」の儀式の飾りがこの図に見立ててあり、包丁の刃についての星座のような粒が数点あるという(辻惟雄『浮世絵ギャラリー3 北斎の奇想』)。

「乞巧奠」では、様々な色の糸をかけ、水を張った盥や梶の葉などを用いることからの見立絵とも考えられている。川は紅白の糸、西瓜は盥、包丁は梶の葉を「鍛冶の刃」に掛けたとする。

※以上の見方に対して、牽牛と織女に見立られた包丁の点は、黴の汚損であり絵の具の痕跡はない。また、この絵が皇室に収められたのは明治以降であるので、皇室との結びつきはないとの見解が示された(太田彩・すみだ北斎美術館主任研究官による調査。「読売新聞」2017年10月16日朝刊記事)。

西瓜図(宮内庁三の丸尚蔵館)

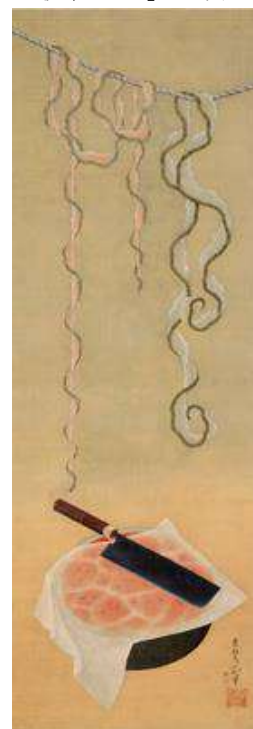
※また、令和1年(2019)5月4日「読売新聞」朝刊の記事によると、絵を納める箱の蓋裏に「雪衣珍玩」と記され、所蔵する宮内庁三の丸尚蔵館の太田彩主任研究官によれば、雪衣は同時代の国学者・小林歌城の号であり、柳亭種彦と交際があり、種彦の版本に挿絵を描いていることから、北斎とも接点があるという。本来は小林歌城の所蔵であった。明治30年1月に崩御された英照皇太后(考明天皇の女御。明治天皇の嫡母として皇太后とされた。旧名：九條夙子)の百日祭で4月に明治天皇が京都に滞在中、絵画好きの天皇のために画商が持ち込んだ「西瓜図」を買い上げたものという。

七夕の見立絵であるとしても、宮中ではなく、江戸の文化人サークル

の知的な趣向ということにもなるとする。また、美術商の浜田篤三郎の所蔵を経て、1897年(明治30年)、浜田に近い美術商が納入したことが確認出来るという。かくて光格天皇縁の品とする見方は否定されたとする。1890年(明治23年)の展覧会目録によれば、北斎筆とされる西瓜の絵はほかにも知られ、1890年(明治23年)の展覧会で正岡子規が見て瞠目したという西瓜の絵は、展覧会の目録によれば、出品者は浜田篤三郎であり、尚蔵館所蔵の絵と確定できたと、同紙は解説する。

注)北斎の他の「西瓜図」が何を指すのか不明。あるいは、文化7年～15年の「西瓜と包丁図」(紙本着色一幅。北斎館蔵)を指すか。

さらに、「美を紡ぐ 日本美術の名品」展(令和1年5月3日～6月2日、東京国立博物館)図録の解説によると、「西瓜」の季語は初秋で、七夕を示し、その赤色は染色の色で、織物の名手額田姫から織姫のイメージとなり、包丁は男性を表し、西瓜の露に濡れた和紙



は川を示すところから、天の川を挟んだ織姫と彦星を見立て、吊るされた西瓜の皮は、染めた絹を干しているという。

※いずれにしても、この絵が晩年の北斎の傑作肉筆画であることに変わりはない。

●屏風絵「春秋山水図」（絹本着色双幅。画狂老人卅筆齡八十 印葛しか。各 71.0×27.8 出光美術館蔵）

※右図：柴木の束に乗せた舟が溪谷を行く。船頭が棹を体を反らせて力いっぱい差している。右岸の崖には桜が咲いている。崖や岸边は点苔の描法。

左図：図の上部に岬々たる山が聳え、図の下から山肌に沿った道がくねくねと続き、その道を山上に向かって歩く笠を被った旅人が三人小さく描かれる。

●肉筆画「富士と笛吹童子図」（「富士を見る童子」「富士見牧童図」とも。絹本着色横判一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。36.2×51.1。フリーア美術館蔵）

※画面中央に右斜め上に伸びる木の幹に座り、向こう向きに笛を吹く童子。童子の前には雄大な富士が裾野を広げている。童子の足元には籠がぶら下がっている。



富士と笛吹童子図（フリーア美術館）

●肉筆画「樹上笛吹童子図」（絹本着色縦判一幅。画狂老人卅筆八十齡。印葛しか。90.0×28.2 フリーア美術館蔵）

※図の右下から左中央に伸び、そこから右上に伸びる木に腰掛け、向こう向きで笛を吹く童子。足元から籠が下げられている。「富士と笛吹童子図」に似た画趣。

●肉筆画「樹上で釣りする童子」（元掛軸。絹本着色一面。画狂老人卅筆八十。印葛しか。77.0×29.8 フリーア美術館蔵）

※木の枝に乗り、水面に竿を下ろす童子。板に魚籠が下がっている。伸びた木の向こうの空には雀が三羽飛んでいる。

●肉筆画「竹林の虎図」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。73.0×31.5 個人蔵）

※細い二本の竹に体を巻きつけるようにしている虎の眼が何かを狙っているようでもあり、弱々しくもある。

竹林の虎図（intojapanwaraku.com より転載）

●肉筆画「春日山鹿図」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十歳印葛しか。32.5×55.8 氏家浮世絵コレクション〈鎌倉国宝館内〉蔵）

※春日山の麓には萩の花が咲き、山の中腹には雌雄の鹿がいる。背後には薄く緑と青味がかかった穏やかな山が描かれる。



●肉筆画「**貴人と官女図**」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十歳印葛しか。35.4×60.4 すみだ北斎美術館蔵）

※貴人が垣根の間から垣間見をしている。家の縁側にはあでやかな衣装の三人の官女がいる。貴人の元の周りには細密に描かれた草花が咲いている。垣間見の場面は、『伊勢物語』や『源氏物語』等の古典文学にしばしば登場する。

貴人と官女図（すみだ北斎美術館）



●肉筆画「**猫図**」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。37.5×48.1 北斎館蔵）

※図の右側から中央に向けて伸びる蔦葉を背にして、両足を揃え首をそらして上を見上げる猫の図。

●肉筆画「**放屁図**」（紙本一幅着色。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。30.1×54.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※折烏帽子に素襖を来た男が扇を前にして蹲り放屁をする。その勢いが蜀台の蠟燭の火を靡かせている。

放屁図（島根県立美術館）



●肉筆画「**恵比寿図**」（紙本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。44.2×61.5 個人蔵）



※ヒラメを前にして、釣竿と魚籠を後ろに置き、腕を組んで座って魚を見ている恵比寿。

恵比寿図(bluedaiary2.jugem.jpより転載)

●肉筆画「**蟬丸図**」（紙本着色一幅。元掛軸。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。92.3×18.6）

※大きな袋を首から下げた髭の蟬丸が、裸足で空を見ている。背景には山水風の山が描かれる。蟬丸は

「小倉百人一首」に収録された平安歌人。琵琶の名人とされる。

●肉筆画「**捉魚図**」（紙本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。個人蔵）

※水中の鮎を捕えようと首を水中に入れ、嘴を差し出す鶇。

●肉筆画「**登龍門**」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。個人蔵）

※垂直に落下する瀧に垂直に登る鯉。端午の節句に依頼されたもと見られる。

●肉筆画「**珊瑚引きの図**」（紙本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。個人蔵）

※波打ち際で赤い大きな珊瑚を縄で引く黒い皮膚の異国風の男の図。

●肉筆画「**宝珠掃きの図**」（紙本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。個人蔵）

※卷子を肩にし、帚と塵とりを持って丸い玉（如意宝珠注）を集める男の図。

注) 如意宝珠：仏教で靈験を表すとされる宝の珠。観音や地藏が手に持つ。

●肉筆画「滝見巡礼」(紙本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。中外産業株式会社：原安二郎コレクション蔵)

※垂直に落ちる滝の下でそれを見上げる巡礼の男。図上方の土色の岩肌は垂らし込みと点苔の描法で描かれる。超縦長の構図を生かした滝の落下を強調している

滝見巡礼 (akumamoto.web.fc2.com より転載)

●肉筆画「月下獵夫」(絹本着色一幅。画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。66.5×23.6 北斎館蔵)

※雁の群れが横切る白い満月の下、火縄銃を抱え、山刀を腰にさし、腰蓑をつけて鹿笛を吹く獵夫。

●肉筆画「雑画卷」(28 図。紙本着色一卷。天保十己亥ノ冬 画狂老人卅筆齡八十。印葛しか。26.7×138.5 フリーア美術館蔵)

※様々な画材を散らして描いた巻物。巻の右から「鯉節・ごまめ・水引」「河骨に鷓」「蓮」「松」「雪景・狗子」「波濤」「南瓜」「猪」「茄子に山葵」「釣狐」「白梅に塩鮭」「鯉に笹」「唐芋に水仙」「開き秋刀魚に瓶」「かさごに鰈」「河豚に大根」「海浜」「隅田川の紅葉」「李白観瀑」「和鋏」「青白磁鉢に根葉」「蓮根にくわい・他」「猫に揚羽蝶」「山芋に鰻」「瓢箪に鯰」「樹陰小屋」「氷上の狐」「寿老人に唐子」(「大尾」と書いた巻物を持つ)

●「雁と歌仙」(紙本着色一幅。画狂老人北斎齡八十。印葛しか。中外産業株式会社：原安二郎コレクション蔵)



※火鉢を前にして、脇息に臂を掛け、顎に手をやり、遠くの雁の群れを眺めている歌仙。歌題を思案しているところか。


雁と歌仙 (akumamoto.web.fc2.com より転載)

●肉筆画「美人牛之図」(着色一幅。八十翁卅老人筆。印葛しか。60.0×32.0 山本美術 HP による)

※柴木を屋根型に組んで背に乗せた牛の手綱を持って、煙管を使いながら立っている女の図。牛は墨絵風に描かれる。



天保 11(1840) 庚子 81 歳 総房旅客画狂老人卅齡八十一、前北斎改画狂老人卅、

画狂老人卅筆齡八十一、画狂老人卅、之印、葛しか、富士の形：阿美与（52）、阿栄

(43)

◇11月、阿片戦争。


◇11月14日（西暦）、クロード・モネ生（～1926）。

◇12月14日、谷文晁没（78）。

【馬琴失明するも『八犬伝』執筆に意欲】

◇曲亭馬琴、左目が更に悪化。夏には11行の細字から5行の大字にして、手探りで「八犬伝」の第九輯、45巻までを何とか書きあげる。11月には失明状態となって、「（略）いかにもせん術なければ、書案を退け筆を投捨て、ひとり嘆息のあまり、『ながらふるかひこそなけれ見えずなりし書巻川に猶わたる世は』とうち詠じて、炉に寄りてのみ居る程に（略）」という有様となった。息子宗伯の妻お路に代筆させるようになったが、路は文字を知らず、古典の素養も無いため、一つ一つ教えながらの作業となった。馬琴の『八犬伝』執筆の壮絶な様子は、曲亭馬琴「回外剩筆」に詳しい（岩波文庫『南総里見八犬伝』（十）巻末所収。p 322～325）。

◇遠山景元（金四郎）、北町奉行に就任。

★房総方面へ旅行するか（「唐土名所之絵」の落款に、「総房旅客 画狂老人卅齡八十一 之印」とある）。

★『誹風柳多留』167篇をもって終刊。


●北斎と思われる川柳（田中聡『北斎川柳』による。河出書房新社）

☆疵物とすると血の出るほど値きり 百姓（商品が疵物と知ると血の出るほどに値切る客）

●教訓本『絵入 和漢陰陽伝』（2月。一冊。元禄2年（1689）藤井頼斎筆の『大和為善録』の改題本。和漢人物の伝記教訓書。挿絵は片頁4図、両頁8図。前北斎改画狂老人卅筆。藤井頼斎著。奥付に書肆7名の最後に「芝神明前 岡田屋嘉兵衛」とある。22.8×16.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/日本浮世絵博物館/大英博物館/フーリア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵）。巻末に「天保十一年庚子春二月」とある。

※正月刊（西宮弥兵衛版）があるか。序文の末尾には「天保十一年春正月」とある。文政7年（1824）版、天保5年（1847）版もあるという。

【最後の一枚鳥瞰図】

●「唐土名所之絵」（横大大判一枚摺錦絵。「唐土一覽図」とも。総房旅客画狂老人卅齡八十一 之印。青雲堂（英屋文蔵）版。41.6×55.3 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/北斎館/イエール大学美術館/東洋文庫蔵）

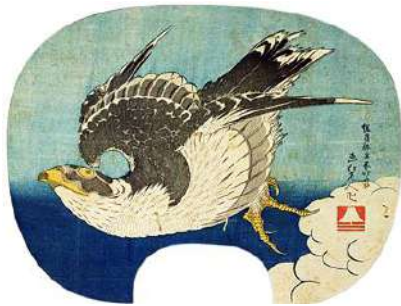
※袋 (44.2×37.3 太田記念美術館蔵) には縦書きで「前北齋改画狂老人卍筆 印八十式 唐土名所之絵 書林青雲堂発行」とある。島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美術館蔵)

※「東海道名所一覽」(文政元年)、「総房一覽図」(文政元年～2)、「百橋一覽」(文政6年)などの一枚鳥瞰図の最後の一枚といわれる。初めて国外の土地を描く。中国全土と台湾の一部を俯瞰する。「彫師 江川仙太郎」の書き入れがある。後の天保14年の版元の『世事百談』巻末広告に「北齋老人唐土名所之画 一枚 唐土四百余州の山川名所をくハしく画き、彩色にてわかち、見安からむれば、詩文ハさらなり。漢楚三国志の軍談を讀んでも、この地図をかたはらに置く時ハ、古戰場に至りて軍ものがたりを聞くがごとく、いささかも解せざることなし」(句読点は筆者による)とあり詩文や軍談を讀書する者の便に供するためであったという(『北齋クローズアップIV p 43』)。旅行先の房総で描いたとされる。



唐土名所之絵 (すみだ北齋美術館)

●団扇絵「鷹図」(この頃か。団扇絵一枚着色。動物の団扇絵の最晩年の作。総房旅客前北齋改画狂老人卍筆。印富士の形。判元不明。22.5×30.0 ギメ美術館/江戸東京博物館蔵)



※房総方面に旅した途中の絵か。北齋は天保11年(1840)に房総方面に旅している。図は、団扇の形に沿うように鷹が描かれる。背景は下から上に、濃い藍から薄い藍のグラデーションとなっている。

鷹 (東京都江戸東京博物館)

●肉筆画「若衆文案図」(絹本一幅。画狂老人卍筆齡八十一。印葛しか。各73.3×32.7 氏家浮世絵コレクション(鎌倉国宝館内)蔵)

※手紙の文案に思案する若衆の図。背後に風呂敷に包まれた数冊の冊子。手前には巻紙と硯箱と小刀が置かれている。

●肉筆画「若衆図」(絹本着色。一幅。画狂老人卍筆齡八十一。印葛しか。80.4×32.7 大英博物館蔵)

※「若衆文案図」と対で製作されたもの。床几に右足を左膝に足組をして腰掛けた若衆が、何かを思案している。賛に「春風春雨損嬌姿 露重幽花一両枝 何以佳人多所思 様注波

帯涙倚床時 為雪船君題奴」とある。

注) 様: 『2005 北斎展図録』では「様」としているが、「横」とも読める。

左: 若衆文案図 (氏家コレクション) 右: 若衆図 (大英博物館)

●肉筆画「椿と鮭の切身図」(絹本着色一幅。画狂老人卅筆 年齢八十一。印 葛しか。24.7×32.0 北斎館蔵)



※椿の切り花の茎に支えられるように鮭の切り身が一切れ置かれている。背景は描かれない。

椿と鮭の切身図 (北斎館)



●肉筆画「箒星を見る唐人図」(紙本着色一幅。画狂老人卅筆・年齢八十一歳。印 葛しか。133.0×37.7 中右コレクション蔵)

※縦長図の左上に黄色がかかった箒星が流れ、それを見上げている唐人が描かれる。

●肉筆画「海老に炭図」(絹本着色一幅。画狂老人卅筆 年齢八十一。印 葛しか。21.3×29.0)

※籠状の炭置きの前に、口先を前にして長い糸状の髭を地に這わせた図。

海老に炭図 (ameblo.jp より)

●肉筆画「仲国と小督」(絹本二幅着色。各 100.5×35.7。右幅: 画狂人北斎卅筆 印 年齢八十一歳。左幅: 画狂人北斎卅筆 印 年齢八十一)



※『平家物語』(巻

第六)からの画題。高倉天皇が妻となった平清盛の娘徳子より美貌の小督を愛し、天皇の子を産んだことで、清盛の怒りを買ひ、嵯峨野に隠れた小督。天皇から小督を探すよう命じられた仲国が嵯峨野で「想夫憐」の琴の音を耳にし(右幅図)、小督の存在を知った仲国が馬上のまま笛で琴に合わせた場面を描く(左幅図)。

仲国と小督 (<https://tamegoro.exblog.jp/iv/list/>より)

●摺物「鮎」(横長判摺物。画狂老人卅。印 印文不明。16.1×50.3 ベルリン東洋美術館蔵)

※二尾の鮎が水中に泳ぐ図の左側には俳諧が多く記されている。左端に「あめやすき(天保)十一子 中秋」とある。なお、摺物については『秘蔵浮世絵大観 12 ベルリン東洋美術館』の解説で永田生慈は次のように述べている。

鮎 (部分：ベルリン東洋美術館)

「寛政末年（1789～1801）から、天保（1830～44）初年頃にわたり数多くの摺物を制作。天保5年以降は、ほとんど摺物はしていない。最晩年期の摺物は極めて少ない」（p 247）



天保12(1841) 辛丑 82 歳 八十二翁画狂老人卍、北斎改葛飾為一、前北斎為一老翁、
八十二叟画狂老人卍、八十二叟、画狂老人卍、画狂老人、八十二老卍、北斎改為一、画
狂人北斎、北斎為一、試筆八十二翁卍、画狂老人卍筆齡八十二歳、葛飾北斎（文化3年の

落款を引き継ぐ） 辰政、葛しか、一老人、富士の形：阿栄(44)

◇閏1月30日、大御所徳川家斎没(69)。

◇2月7日、曲亭馬琴の妻百没。『回外剩筆』（岩波文庫版『南総里見八犬伝 10巻』所収）で自らの失明を告白。

※「（略）馬琴が八犬伝の著作中に失明し、苦心惨憺、漸く之を完成せるよしは、その回外剩筆に詳なり（略）」（『曲亭馬琴序文選』より。大妻女子大学文学部：高木元「近世後期小説受容史詩論—明治期の序文集妙文集をめぐって」所収）。

◇2月25日（西暦）、ピエール＝オーギュスト・ルノアール生（～1919）。

◇5月5日、水野忠邦による天保の改革始。書物問屋・地本問屋組合解散。

◇5月9日、高島秋帆、徳丸ヶ原で輸入砲の訓練。

◇10月10日、江戸中村座より出火。市村座など類焼。

◇10月11日、渡辺崋山自殺(49)。

◇10月25日、奢侈禁止令（儉約令）。

◇12月16日、江戸三座、浅草に移転。

◇シーボルト『日本』英訳・出版（仏訳は天保9年：1738）。

◇9月2日、伊藤博文生（～1909）。

◇月日不明、飯島虚心生（～1901）。

○8月、曲亭馬琴『南総里見八犬伝』脱稿（息子宗伯妻お路による代筆。翌13年刊）。

★御膳海苔所注、中島平左衛門販売の柳亭種彦による浅草海苔の報条（広告）文に添えた絵（藍摺「海苔採り」の絵）にある北斎の署名：八十二翁画狂老人卍筆。広告文は柳亭種彦。

注）御膳海苔所：将軍家や上野寛永寺に上納する新海苔を扱う所。中島平左衛門がそれを扱ったかは不明。

【阿栄、其の品行は頗正し、常に翁の傍にありて、孝養怠りなし】

★この頃の阿栄の様子（四方梅彦談。『葛飾北斎伝』 p 313）。年代は明確でない。

「又曰く、北斎翁は、もとより乱情にして、室内の掃除をきらふといへども、阿栄は、翁ほどの乱情にあらず、されば頭髮などは、常に乱だせしことなし、其の室内を掃除せざりしは、枉げて翁の意の従ひ居たるものゝごとし、しかして其の品行は頗正し、情夫などありたることを聞かざるなり、常に翁の傍にありて、孝養怠りなし、感賞すべきことなり」

【新編柳多留に序文を書く】

★『新編柳多留』刊行（五世川柳風叟〈水谷緑亭〉編。嘉永2年：1849まで55編 山口屋藤兵衛版）。北斎が序文を記す。

「柳樽の酒を好む人ハ 腹たゞず、泣きもせず、笑ひ上戸で、下戸にも～ 為一八十二雙 卅（百姓）」（宿六心配『謎解き北斎川柳』より）

★「百姓」も北斎の川柳号か。『葛飾北斎伝』（p139～140）には、天保5年頃のこととして、次のように記される。「（梅彦談）北斎翁 嘗て川柳風の狂句を好み、名を百姓といひ、秀吟頗る多し。実に葛飾連の棟梁たり」

この記事によれば、天保5年頃以前の『俳風柳多留』に載る「百姓」号による川柳は北斎のものか。

●北斎と思われる川柳（田中聡『北斎川柳』による。河出書房新社）。俳号：百姓・百性

☆一ト足つつに売れて行蛸の足 百姓（蛸の足は一本ずつ売れていく。近松門左衛門「曾根崎心中」の「死に行く身をたとふれば～一足づつに消えて行く」を踏む）

☆地藏堂近所の餓鬼の遊び所 百姓（地藏堂は近所の子どもの遊び所になっている）

☆病上がり折ふし苦い口も吸ひ 百姓（病み上がりの欲望のまま、薬の苦さの残る口で口づけを求める）

☆我顔に泣てわかれて売る鏡 百姓（困窮し、鏡まで売らざるを得ない泣き顔が映っている）

☆薬ふる日にハ干鰯も毒ハなし 百姓（五月五日正午の雨で薬を作るとよく効くので、干鰯にも毒はない）

☆腮で追ふ蠅は天窓で又つるみ 百姓（性交過多で体力もなく顎で蠅を追うも、頭の上では蠅も交接する）

☆たがひに吸た生キ口をよせて泣く 百姓（口寄せの巫女が、生きている恋人の接吻の唇で泣いている）

☆身を捨て美しく売る貝屏風 百性（貝屏風は身を捨てた貝殻で美しく売る。遊女も同じだ）

●絵手本『名頭武者部類』（見返しに『源平名頭 絵本武者部類』。角書に「絵本早引」とある。一冊。北斎改葛飾為一筆。和泉屋市兵衛（甘泉堂）版、鶴屋金助連梓。島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/立命館大学アート・リサーチ・センター蔵）奥付に「天保十二丑年秋新刻」とある。

※題材に関係した見出しの漢字によって絵柄が引き出せる武者図の絵手本。一部を色摺模刻した後摺の『絵本武者揃』（小本一冊 21丁 菊屋幸三郎版）や、一部模刻した『武者尽絵本 全』（中本墨摺一冊。16丁 大坂・鹿嶋堂版）等がある。

名頭武者部類 (すみだ北斎美術館)

●絵本『双錦画鑑』(一冊。前北斎為一老翁。西村屋与八。藤屋宗兵衛版。13.0×19.0 国立国会図書館蔵)

●地誌『花の十文 附 十論考』(一冊。墨摺。橘樹園早苗述。龍遊子閑淵校。八十二叟画狂老人卍筆。島根県立美術館：永田コレクション/国立国会図書館蔵)



※御殿山・南ノ海辺・西の山辺・小金井・

滝ノ川・飛鳥山・上野・日暮里・吉原・隅田川などの周辺の地誌。北斎は「小金井の景」一図を描く。橋の上を人々が行き、その先に茅葺屋根の家が数件版下絵のように描かれる。他は北溪が描く。

●絵手本『為一漫画』(一冊。画狂老人筆。清光楼版)

※文政6年(1823)『今様揃捻雛形』の「きせるの部」の装丁を变形して抜き出した改題本。奥付に「天保十二年補刻」とある。

●読本『絵本新田功臣録』前・後編(角書「矢口神霊」十冊。小枝繁作。葛飾北斎画。印画狂人。岡田茂兵衛版)

※『春宵奇譚 絵本玉璧落穂』(文化3年(1806)1月前編刊、文化5年(1808)1月後編刊)の改題再刊本。

●肉筆画「柳に鳥図」(絹本着色一幅。八十二叟画狂老人卍筆。印葛しか。84.8×42.5ボストン美術館蔵)



※柳の葉が靡く近くに、十四羽の鳥が一斉に飛んでいる様子が描かれる。画面下には、鳥の頭に噛みついている鳥がいる。

柳に鳥図(ボストン美術館)

●屏風画「扇面貼交屏風」(紙本墨画淡彩扇面。二曲一隻扇面貼交屏風。上弦49.3 下弦25.7×14.3 フリーア美術館蔵)

※第一図：蓮の葉に蛙図。北斎改为一筆。印辰政。

第二図：隠士図。画狂人北斎画。印辰政。

第三図：田舎の風景図。北斎为一筆。印一老人。

第四図：岩に帆船図。八十二老卍筆。印葛しか。

●肉筆画「大黒に大根図」(「見立児島高德図」とも。絹本着色一幅。画狂老人卍齢八十二歳 印葛しか。86.3×42.7 鎌倉国宝館：氏家コレクション)

※高德が後醍醐天皇に向けて桜の木に詩を書きつけた『太平記』の故事による着想。

※元弘3年(1332)3月、児島高德は隠岐に流される途中の後醍醐天皇を奪回せんと追いかけたが果たせず、志だけでも告げようと天皇の宿所に忍びこみ、庭の桜の木の幹に中国越王

勾踐の故事に習い十字の詩を書いたという。「天莫空勾踐/時非無汜蠡」（天は春秋時代の越王・勾踐を見捨てなかったように、後醍醐天皇をお見捨てにはなりません。必ず汜蠡のような忠臣が現れてお助けすることでしょう）

大黒に大根図（鎌倉国宝館：氏家コレクション）



●肉筆画「雲龍図」（1月。紙本着色一幅。試筆八十二翁卅。印葛しか。97.3×31.2 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※縦長の画面の上部に龍の顔を描く。図下に向かって身体が下がるが、途中の胴体は黒雲にまぎれて見えず、図下から尾の部分が巻き上がるように描かれる。黒雲が濃淡のグラデーションで描かれる。嘉永2年(1849)にも似た構図の「雲龍図」が描かれる。

雲龍図（島根県立美術館）



●摺物「三圃の初霞」（1月。「三圃渡し舟」とも。紙本着色一幅。八十二翁卅筆。印富士の形。14.4×18.6 すみだ北斎美術館蔵）

※初霞の中、隅田川に松飾りをつけた舟が浮かび、対岸には松が茂る三圃神社が描かれる。

天保13(1842) 壬寅 83歳 八十三歳八右衛門、亀沢町三浦屋八右衛門、前北斎卅、前北斎為一、柳亭心需雪景写前北斎為一、北斎先生（文政6年の署名）、画狂老人卅齡

八十三、画狂老人卅齡八十三歳、八十三翁卅 印葛しか、之印、富士の形：阿栄(45)

◇2月21日、富士講禁止（但し、江戸では92講あり）。

◇2月、為永春水（長次郎）の人情本の内容が淫らであるとして北町奉行遠山景元の取調べを受け、手鎖50日、家主のもとに監禁。版元の丁子屋平兵衛等七名も家主に監禁処分、過料五貫文（5000文＝約125,000円：1文＝25円で換算）。板木師三名も過料五貫文（約125,000円）。

◇2月、柳亭種彦（彦四郎）、『修紫田舎源氏』三十九編刊行後、絶版を命じられる（未完となる）。版元鶴屋喜右衛門は版木が没収・焼却される。種彦は6月に手鎖が解除されたが7月19日没（60歳、自殺か）。

【柳亭種彦、取り調べで北斎の所業を口外せず】

※種彦は一旦、赦免されたが再度、艶本『春情妓談 水揚帳』（歌川豊国画）に関し取調べを受けたり（三田村鳶魚説）、種彦の豪華な修紫楼（浅草堀田原：現蔵前3丁目）の新築（天保7年：1836）などで詰問（拷問）されたりして獄死したのではないか。その際北斎の阿蘭陀人に渡した絵のことや、北斎から譲られた西洋の品物なども詮議されたが、北

齋については一切口外しなかったため、北齋は種彦^{たねひこ}に対しての負い目と、贖罪意識^{しよくざい}がその後の制作の視点となり、詮議^{せんぎ}が及ぶのを避けて小布施^{おぶせ}行きとなったという説もある（荒井勉『北齋の隠し絵』（p 99～101））。

◇5月15日、鈴木牧之没（73）。

◇6月4日、一枚刷り錦絵の禁止。出版取締令。人情本禁止。

◇役者絵、遊女絵禁止。

◇唄・浄瑠璃・三味線の女師匠の弟子取り禁止。

◇琉球使節来朝（将軍家慶即位の慶賀使）。

◇長崎オランダ商館江戸参府。

◇江戸で岡場所（公的でない遊女屋）禁止令。

◇異国船打払令。薪水給与令。

◇アヘン戦争で清朝敗北。南京条約。

◇この年より地本絵草紙問屋の自主的改印^{あらためいん}から名主直接^{なぬし}の検閲となる。

◇寺門静軒『江戸繁盛記』が風俗紊乱により、静軒は他家への仕官禁止となる。

【七代目市川団十郎、江戸十里四方処払】

◇七代目市川団十郎（改海老蔵）が、身分不相応な贅沢として、南町奉行所鳥居耀蔵^{みなみまち とうりい とうぞう}により手鎖^{てづかり}、家主預り処分、江戸十里四方処払となる。団十郎は信奉する成田山新勝寺に一年間蟄居し、成田屋七左衛門と改名。その後上方や九州の芝居小屋を巡業し、7年後に江戸に戻る（「資料館ノート」第117号 江東区深川江戸資料館）。

◇天保の改革により、昨年末から翌14年にかけて、中村座（日本橋葺屋町）、市村座（日本橋堺町）、森田座（木挽町5丁目）が200年程日本橋地区にあった芝居小屋が猿若1丁目から3丁目辺（現東京都台東区浅草6丁目辺）に移転した。

【1両が6貫500文となる】

◇8月5日、「銭相場公定に伴う物価引下げ令」が發布され、1両を6貫500文（6500文）と定められる。1両=6500文×25円（筆者による想定価格）=162,500円。両の価値の引き上げで、逆に銭（最下級の文）の価値を下げ、諸物価の引き下げを図った（参考。大石慎三郎「〈資料紹介〉天保13年8月」銭相場公定に伴う物価引下げ令“について”学習院大学経済論集4号 1966年）。

◇11月、浮世絵価格制限令「壹枚絵之儀ハ、已来粉色七八編摺を限、売直（値）段壹枚拾六文已上之品、可為無用」

※浮世絵の一枚絵に7・8色以上の彩色を禁止、小売り価格は1枚16文（約400円）以上を禁止とした。

○曲亭馬琴『南総里見八犬伝』刊行（完結。文化11年～天保12年まで28年間の労作）。

★この頃、本所亀沢町榿馬場（榿馬場。現墨田区両国4-34-11。榿稲荷神社がある）の借家に住む（『葛飾北齋伝』p 201）。榿馬場は本所回向院の門前であった。あるいは天

保 10 年 (1839) の 81 歳から弘化元年 (1844) の 85 歳まで住んだか。(井上和雄『浮世絵師伝』 p 171 昭和 6 年 渡邊版画店 (『日本浮世絵博物館所蔵 大揃い北斎』北斎資料 759 所収))。

【榎馬場の仮託住まいの様子】

★弟子露木為一(孔彰)「北斎仮宅之図」による家居の様子 of スケッチ(北斎は炬燵を背にして布団を肩にかけ、筆をとって描いていて、その傍らで坐してそれを見ている阿栄の図。国立国会図書館蔵)。

北斎仮宅之図 (国立国会図書館)



※図の露木為一の書き込みには、「平常二人に語るに我者枇杷葉湯に反し九月下旬より四月上旬迄巨燵を放るゝ事無しと如何なる人と面会なすといへども放るゝことなし/画くにも又かけ倦く時は傍の枕を取りて眠る/覚れば又筆を取/夜着の袖は無益也とて不付候

本所亀沢町 はんの木馬場借宅の躰、老人長く住居故、御咄ニ多かく

御物語残、御目通之進上可仕候

昼夜如斯なる故炭にてハ逆上なす故、炭団を用ゆ、然るゆへ風の湧こと、たとゆるニ物なし、

画帖扇面之儀者堅く御断申候 三浦屋八右衛門

娘ゑい

為一百拜

角一疊分板敷ニ而、佐倉炭俵、土産物の桜餅の籠、鮎の竹の皮、物置ト掃溜と兼帯也(筆者注:同様である)

蜜柑箱ニ高祖像(筆者注:日蓮像注)ヲ安置す」とある。

注)日蓮像:北斎は日蓮宗を信仰していた。

【その部屋、物置と掃溜と、一葉なるが如し】

★同様の記述は露木為一談として次にも示される。

露木為一談「室内のさまは、いづれもあれはてゝ、翁が傍の杉戸には画帖、扇面之儀注は、堅く御断申候、三浦屋八右衛門とかきたる紙を貼りてあり。又阿栄の傍の柱には、蜜柑箱を少し高く釘づけになして、中には、日蓮の像を安置せり。火鉢の傍には、佐倉の炭俵、土産物の桜餅の籠、鮎の竹の皮など、取りちらし、物置と掃溜と、一葉なるが如し」(『葛飾北斎伝』所収 p 203。ルビは筆者による)。

注)扇面之儀:挨拶やお辞儀のこと。

【礼儀礼讓をなすことを好まず】

★柳亭梅彦談「北斎翁は、礼儀礼讓をなすを好まず、性頗淡泊にして、人に遇ふも、嘗首を下げたることなく、唯今日とはいひ、イヤといふのみにて、時候の寒暖、身体の安否

など、ながくと述べたることなく、又他より食物を買ひ来り、或は人より食物を贈らるゝも、これを他の器にうつすことなく、竹の皮、重箱を論ぜず、おのれの前に置き、箸にてはさむこともなさで、直につかみてこれを食ひ、食ひ尽して、重箱、竹の皮は其のまゝにすておくなり」と（『葛飾北斎伝』 p 204～205 ルビは筆者）。

★露木為一談「北斎翁は、外出のとき下駄をはくことなく雪駄もはかない。雨で道が悪いときは、草履をはき、晴れた時は麻裏草履をはく。歩く時は常に法華経普賢品の呪文「阿檀地 檀陀婆亭 檀陀婆亭」を唱え、他が目に入らない。余中人と会っても雑談することを厭う」（『葛飾北斎伝』 p 206～207 要約 ルビは筆者）。⇒弘化3年（1846）条参照。

【猫一疋も画くこと能はず 己れ及ばずとて自棄てんとする時は、即これ其の道の上達する時なり】

「露木氏曰く、余北斎翁の門に入り、画法を学びしが、一日阿栄にむかひ、嘆息して謂て曰く、蓮筆自在ならず、画工とならんを欲するも、蓋し能はざるなり。阿栄笑て曰く、我が父幼年より八十有余に至るまで、日々筆を採らざることなし。然るに過ぐる日、猶自腕をくみて、余は実に猫一疋も画くこと能はずとて、落涙し、自其画の意の如くならざるを嘆息せり。すべて画のみにあらず、己れ及ばずとて自棄てんとする時は、即これ其の道の上達する時なりと。翁傍にありて、実に然り、実に然るなりといへり」（『葛飾北斎伝』 p 217～218。ルビは筆者による）。

【読本挿絵の評判遠のくも、絵に於いては天下一品】

★人情本『縁結娼色糸』（天保十三年。松亭金水著。歌川貞重画）の三編・巻之上・第十四回に、娘の祝言の祝いに帷子を持ってきた角助と娘の母親の対話の場面がある。

母「オヤぐ、綺麗で御座いますねえ。その画の良い事」

角助「夫りやア、為一老人の下絵だから。」

母「成程、左様で御座いませう。彼の人にも近頃年が寄つた所為か、些と評判が遠のきました。私共の若い時分には、読本と云へば、北斎の画に限つた様で、御座いました。」

角助「夫りやア、絵に於ては天下絶品さ。古今に一人とは、彼の人計で御座いやせう。」

※北斎は文化9年（1812）以来、読本挿絵の数が減少し始め、特に文化13年（1816）以降は、ほとんど読本挿絵に関わっておらず、天保13年、83歳の北斎が別境地を目指していたことと関係なく、一般の読本読者は彼をこのように見ていたのであろう。

★この年、信州の豪商・高井鴻山が江戸から信州に帰る。

【小布施に行く 八の字のふんばり強し夏の富士】

★8月出発。9月、北斎は高井鴻山（37歳）に招かれ小布施に行く。「日新除魔図」の9月21日図の一枚に「獅子 書きはじめたる心おか獅子」脇文の入ったものがあるという（荒井勉『新訳 北斎伝 世界に挑んだ絵師』（p 124）ので、この頃には高井鴻山宅に居住して、「日新除魔図」を書きはじめたと思われる。

★時代は特定できないが、旅の途中で「八の字のふんばり強し夏の富士」と詠んだという（『葛飾北斎伝』 p 134）。

【小布施訪問はいつか】

「天保十三年秋より正月を越して翌三月まで滞在したことは、八十三歳銘記の生首の図と秋草の図、並びに八十三、四歳と歳書きのある図が、小布施の諸家に分れて保存されて居ることによる」（『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』（由良哲次：岩松院。平成15年2月1日刊。p18）。

但し『葛飾北斎伝』では、「天保二三年の頃、北斎翁信州高井郡小布施村に到り、門人高井三九郎（筆者注：高井鴻山の名）の家に寓し、居ること一年（略）」（同p134）とある。鈴木重三の脚注では、「この、高井鴻山宅訪問推定年時は、このころ鴻山は京都に居るので、誤りとされる」としている。

一方で、京都遊学中であっても、帰郷の時期もあつたのではないかと、天保2・3年頃に鴻山を訪問した可能性を指摘する見方もあるが、本書では一応、通説の天保13年訪問説を採っておく。以後、三度小布施に往く。

【小布施訪問の目的は？】

文化12年（1815）に焼失し天保2年（1830）に再建された岩松院（高井家菩提寺）の鏡間天井に大鳳凰（八方睨み図。5.5m×6.3m。150面の彩色。4400枚の金箔。現在価格約5千～6千万円をかける）を描くこと、その手始めに東町の祭用の屋台を改造して、その天井に鳳凰と龍の二面を描き、次に上町の祭のための屋台天井に波濤の二面を描く等の案を提示した。そのため、お栄を連れて来ることを鴻山は望んだ。

【高井鴻山の北斎の印象】

★一方で、北斎が高井鴻山を尋ねた様子を、鴻山自身が「卍老人予家ニ寓スルコト半歳余一日別レヲ告ゲズシテ去ル」という表題の漢詩によって伝えている。以下の訓下し文は筆者による。

「乗ルモ招ニ由ラズ/去ルモ別レヲ告ゲズ/去来吾ガ適ニ適フ/敢ヘテ倚撃受ケズ/敖然八十有余年/併吞手ニ在リテ心ノママ欲スル所ナリ/人鬼現シ羽毛簇マル/技ハ群ヲ抜キ/富貴坐シテ致スベシ/七上還タ八下/何為ゾ窮頼ニ至ル/貧困富貴ハ舎テ論ゼズ/唯物ヲ写シテ物未ダ神ナラザルヲ/君見ズ冷冷ノ冬ヲ作ス者/又能ク翁翁ノ夏ヲ成ス/冷翁敢ヘテ世ニ向カヒテ請ハズ/只是丹青便ハチ命ト為ス/工夫君ノ如キハ能ク幾許ゾ/骨格ノ精今古ニ絶ス/鎖骨新タニ新面目ヲ開キ/洗シ旧習ヲ一人ノ嗜ルヲ快クス/筆力年ト与ニ老ヒテ益強ク/巨障大壁ノ氣汪汪タリ/氣汪汪トシテ雲霄ヲ衝キ/翼ヲ博ツ九万ノ遥ナルヲ厭ハズ/秋風個ノ雲煙ヲ留メ去ル/描クモ未ダ乾ヲ成サズ染未ダ消エズ」

※鴻山記念館に掲示された訳文

「卍老人は、我が家に半年ほど/ある日、別れも告げずに立ち去った/卍老人（＝北斎）は、招いたわけではないのにふらりとやってきて/立ち去るときも、何も言い残しては行かなかった。/来る時も立ち去る時も、自分の気持ちに従う。/引き留めても、それに甘んじることはない。/自分の（心の）思うままに八十余年生きてきたのだ。/卍老人は、心に浮かんだものを描き出す手を持ち/羽毛に覆われた人鬼が次々に描かれる。/その技術は群を抜

いている。/富も名声も座っていて招き寄せている。/江戸へ戻っては、また旅に出る。/何をしようと疲れるということを知らない。/貧乏、富、名声など全く問題にしない。/絵を描いては（その技が）いまだ神の域に達しないことだけを憂いている。/寒く辛い冬にあっても作品を描くことのできる者は/夏の暑い盛りにあってもまた同様に過ごせるということなのだろうか。/寒くも暑くも（富や名声を得ようが得まいが）世間に媚びない。/ただひたすらに描くことが、己の使命とと思っている。/君（=北斎）の、絵を描く才能や創造力は、はかりしれない。/（絵の）骨組みの緻密さは、これまでに見たこともない。/鎖の輪のように連なるその骨組みは、真に新たな作品の境地を開く。/これまでの慣習を洗い流した絵は見る人を心地よくさせる。/年をとり老いてゆくに従って、その筆の力はますます強くなってゆく。/（行く手に）巨大な壁が立ちはだかっても、創作意欲は満ち満ちている。/その気迫は、雲をつきぬけて空に駆け上がってゆくほどだ。/翼を羽ばたかせ九万里を飛ぶことだって厭わない。/秋風（=北斎）は、色鮮やかな雲煙（=作品）を残して吹き去った。/描いた画はいまだ水々しく、染めた色はいまだ色あせない」（括弧内の補筆は筆者により）

★「^{こうざん}鴻山先生の詩文や^{おぶせ}小布施の伝説によると、北斎が小布施に最初に来た時は、全く突然であつたらしい。前ぶれの約束もなく、全く突然に^{たかい}高井家の門前に現れて^{こうざん}鴻山先生を驚かせたらしく、^{ほつぽすた}法被姿に^{あさうらぞうり}麻裏草履、長い杖一本、娘のお栄を連れていない単身であつた」（『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』（由良哲次：岩松院。平成 15 年 2 月 1 日刊。p5）。

★^{こうざん}鴻山宅（現長野県高井郡小布施町大字小布施805-1 「北斎館」の近く）では、北斎のために本宅に隣接して、近くの古民家を^{へきいけん}碧漪軒という仕事場に作り与えたと伝えられるが、実際は鴻山の祖父が建てた^{へまじいけん}倏然楼の一部が^{へまじいけん}碧漪軒であつたともいわれる。

【小布施までの道のり】

★小布施までは約 240 km で、徒歩で 5・6 日程度と思われる。旧中山道の日本橋、板橋、^{うらわ}浦和、^{おおみや}大宮、^{おけがわ}桶川、^{くまがや}熊谷、^{くらがの}倉賀野、^{あんなか}安中、^{まついだ}松井田、^{うすいとうげ}碓井峠、^{かろいざわ}軽井沢、^{くつかげどう}沓掛を通り、^{くつかげどう}沓掛道（現在の県道 235 号線）に入り、^{おおざき}大笹街道（現在の県道 406 号線）の大笹、旧鳥居峠を越し、^{にれ}仁礼（現須坂市）を経て、^{すざか}須坂から^{ほつこくかいどう}北国街道（現在の県道 403 号線）に出て小布施に至るルートが考えられる。

あるいは、^{おなぎがわ}小名木川から船に乗り、^{ぎょうとく}行徳から^{えどがわ}江戸川に入り、そのまま^{とねがわ}利根川を遡り、^{たかさき}高崎を通る^{からすがわ}烏川に入って^{くらがのじゆく}倉賀野宿に出、そこから徒歩・^{なかせんどう}駕籠・^{おおざき}馬などで中山道、^{おおざき}大笹街道、^{ほつこく}北国街道を行くこともある。いずれにしても北斎の年齢を思えば大変な旅である。

【北斎の自画像】

●「^{はちじゅうさんさい}八十三歳自画像」（絵入りの手紙。紙本墨絵。八十三歳^{はちえもん}八右衛門。印 26.9×16.9 オランダ国立民族学博物館蔵）

※北斎が 41・2 歳の頃描いた作品への質問に対する自画像入り返信文。

「扱申上候、此巻中に有之候下画者、老人四十一二歳之此之画にて、あまつさへ亦うつしの品も多く相見へ申候中に只今になり校合もいたし候ハ者、よろしからんと品も一二品者相見へ申候、其余者已前みしゆくの業、御用捨之上、御一笑可被下候 八十三歳 八右衛門 右申上候、以上（印）」（句読点・ルビは筆者による）

八十三歳自画像（オランダ国立民族博物館）



●「老人蔵」（この頃か。紙本淡彩一枚。無款。11.0×14.0 オランダ国立民族学博物館蔵）



※「八十三歳自画像」と似ているので、83歳の自画像ともいわれている。図の何カ所に崇の印が押されているので、あるいは崇山房（小林新兵衛）と関わりのあった絵とも思われる。

老人像（オランダ国立民族博物館）

【北斎自画像とアゴの四角ナ女】

★亀沢町三浦屋八右衛門（印葛しか）の署名のある書簡に北斎自身と阿栄の肖像画あり。ここに阿栄を「腮の四角ナ女」と記している（『もっと知りたい葛飾北斎』 p69）。

【朝日新聞 1989・9・2 朝刊の記事】

〈目は小さく、鼻が大きく、もじゃもじゃの白髪——。その容姿が様々に描かれている江戸の浮世絵師、葛飾北斎（一七六〇—一八四九）が晩年、自分と娘の肖像を描き、風ぼうの特徴までつづっていた手紙を、東京都内の収集家が所蔵していることがわかった。画料を受け取りに行く人物が相手にわかるように、と送った手紙で、ちやめっ気もうかがえる。北斎研究家の伊藤めぐみさんは『面長で厳しい顔つき』という従来のイメージを覆すもので、好々爺然としたイメージで描かれている」と話している。手紙は当時、亀沢町（東京都墨田区）に住んで三浦屋八右衛門と名乗っていた北斎が、「何屋何兵衛」にあてた画料の受取状。

「一金何両ト何拾何匁石は画料として慥ニ拜納仕候為念 かくのごとく御座候以上」としたためている。その手紙の最後に、自分の横顔と、娘お栄の正面からの肖像を描き、「眼の小キ鼻之大き成白髪之モジャ」と致候親父か腮の四角ナ女」と二人の特徴を述べて、どちらかがお金を取りに行く、などと結んでいる。お金の額や相手の名を特定しないまま出している受取状で、これからお金を取りに行くという内容などから、北斎は絵を描かずにお金を無心した可能性もあるとみられている。



「北斎自画像と顎の四角ナ女」(朝日新聞)より転載

手紙は、長野県小布施町で見つかったことが研究者の間で知られていたが、現物は行方知れずになっていた。業者を通じて数年前に東京都内の収集家の手に収まったという。

※永田生慈は、「三浦屋八右衛門」と名乗っていることなどから、北斎 80 歳後半に認められたものとしている (『新北斎展図録』 p 342)。

※他の自画像として、主に次の絵が知られている。

☆『間女畑』(寛政 4 年頃) 口絵見返しの像：机に伏して夢を見ている図。最も早い自画像とされる。⇒寛政 4 年 (1792) 条参照。

☆『鼈将軍勘略之巻』(寛政 12 年：1800)：下巻最終ページの像。「時太郎可候画作」の記載があり、巻物の置かれた文机の前に座り、羽織を着て両手をつき挨拶をする図。⇒寛政 12 年 (1800) 条参照。

☆「版元嵩山房(小林新兵衛)宛書簡」(天保 6 年 2 月。彫師江川留吉を使うように依頼した手紙)にある像。両手に一本ずつ杖をつき、尻端折りをして歩く姿(飯島虚心『葛飾北斎伝』 p 145)。⇒天保 6 年 (1835) 条参照。

☆「版元嵩山房(小林新兵衛)宛書簡」(嵩山房が百人一首の絵を依頼したときに送った手紙)にある図。

布団を頭から被り、尿瓶の前にしゃがむ姿を描く。⇒天保 6 年 (1835) 条参照。

☆溪斎英泉による「為一翁(北斎)像」。(天保末期から弘化 2 年頃。26.3×18.6)

※木村黙老『戯作者考補遺』所収された英泉による北斎像を、尾形月耕が写したと思われる絵が『新增補浮世絵類考』に挿入されている。明治期の写本では北斎の辞世が描き込まれている(慶応義塾図書館蔵)。北斎 80 歳代中ごろの肖像として真に近いといわれる。図は、羽織を着て両手を結んで膝の上に置いて座る像。いくつかの複製があり、着物に反転模様のないものもある



『戯作者考補遺』所収「為一」像(慶応義塾図書館)

☆「フェノロサ解説カタログの図」(37.2×23.7 ギメ美術館蔵)

※格子模様の袖無羽織を着て両手で杖を支え立っている全身像。80 歳ころの北斎といわれるが、年代は確定できない。よく知られた画像である。

井上和雄『北斎』（高見澤木版社出版所 昭和7年）では、天保末頃の応為の画として
いる（P32）。小林文七蔵版（小林文七が木版で摺起こしたもの）には「明治三十三年八
月製」とあり、羽織が無地なもので素描である（フリーア美術館蔵）。

※小林文七が本図をパリのコレクター、アンリヴェ
ヴェールに見せ、ヴェヴェールが美術商のジークフ
リート・ビングにこのことを話したところ、ビング
がすでに持っているそっくりな絵図をヴェヴェール
に譲り、ヴェヴェールは同図の真贋の鑑定を小林文
七に依頼したところ、文七は、これは北斎の直筆で
あり、自分が1900年に版画に起こした原画である
と話したという。文七が作った複製は多数存在して
いる。また、無地の着物の像が原画であろうとして
いる。（以上『北斎—富士を超えて』展図録 p248
による）。



フェノロサ解説カタログの図

☆「飯島虚心『葛飾北斎伝』口絵に掲載されている像」（p23）。

『葛飾北斎伝』解説で鈴木重三は次の様に述べている。

「本書でなお問題視されるものに、巻頭近くに挿入された『葛飾北斎翁の肖像』（本書
二三頁）の信憑性に関する件がある。従来、一部の論者を除いては、ほとんど無批判に、
代表的な北斎肖像として、ゴンクールの『北斎』（Hokusai, 1986）筆者注や、フェノロサ解
説付の北斎の肉筆展の目録 *Catalogue of the Exhibition of Painting of Hokusai*（小林
文七刊、明治三四年）に転載されるなど、広く普及、紹介されて来たものであるが、本稿
の「構成と内容」のところでも少しふれたように、すでに『北斎伝』刊行時点で、著者虚心
自身が巻下九丁裏（本書一九九頁八行目）に割注で、「巻首にある翁の像は、白井（筆者
注：白井孝義）、本間（筆者注：本間耕素）、小林（筆者注：
小林文七）諸氏のすゝめによりて、掲げたるのみ注」と、責任
回避ともとれる口調で、掲載をためらった気配を見せている。

（略）いずれにしても、現時点でこの図を真像と断定すること
は留保すべきである」（岩波文庫版 P393～395）」とある。

図は、眼窩が突き出て、耳が大きく口を結んでいる像。後頭
部にまばらな毛髪がある。

注：（ゴンクール『HOKUSAI』の巻頭に載せられた北斎の肖像
の下に「Peint Par SA fille Oyei」とあり、お栄の画として
いる。

『葛飾北斎伝』口絵に掲載されている像



※平成6年（1994）11月11日読売新聞夕刊記事で「北斎どんな顔だった？」と題し、以下
のように記載している。

〈一般的に知られている北斎の肖像は、ほお骨が張った長い顔で、切れ長の厳しい目が特徴だ（筆者注：本図を指す）。北斎が死んで四十四年後の明治二十六年（1893年）、浮世絵研究家の飯島虚心がまとめた日本で初めての北斎研究書「葛飾北斎伝」（蓬枢閣）に載った。三年後、フランス人ゴンクールが出版した「北斎」にも転載され、世界に広まった。

虚心の「北斎伝」出版から七年後、この肖像は東京・上野で開かれた北斎展に出品された。ところが、虚心は別人を装って「局外閑人」のペンネームで、読売新聞の批評欄に次のような批判記事を載せた。

「このごとき怪しき肖像を出せるは、これ世人を欺くに似たり、また北斎翁をあなどるに似たり」/翁死してわずかに四十余年の今日、その顔を知れる人々もなお現存すれば、これを掲ぐるは、はなはだ快からず」

さらに虚心は「事実の精確を主として著せるこの書も、それがためにあるいは信を失うに至らんとて、痛く拒みたれども、聴かず、ついに巻頭に掲ぐることとなりたるなり、遺憾の至りというべし」と告白している（筆者注：仮名遣いは記事のまま）。出版元の浅草の浮世絵商・小林文七の意向で、肖像を載せざるを得なかったのを悔やんでいた、とみられる。

この肖像の原図は現存しておらず、由来もはっきりしない。だが、文七は北斎展の年、この肖像とうり二つの「北斎像」（筆者注：フェノロサ解説カタログの図を指す）を摺（す）り物にした。

虚心の没後、「局外閑人」は虚心本人だったことが公になった。だが、北斎に関するこれまでの研究で、先の新聞記事についてはほとんど触れられていない

伊藤めぐみ（筆者注：当時、墨田区北斎館解説準備室〈現すみだ北斎美術館〉担当の学芸員）はこの記事に基づいて「虚心が『北斎伝』の肖像の件で悔やんでいる気持ちが痛いほど伝わってくる、文七が虚心を利用した可能性も高い」と分析している（『北斎研究』16号）

肖像画については「葛飾北斎の肖像画における自己演出」（山本陽子 『明星大学研究紀要一人文学部 第52号』2016年3月）の論考があるので参照されたい。

●合巻『^{「じらいやごうけのものがたり」}児雷也豪傑譚』（1月。全42編中の四編。美^み図^ず垣^{がき}笑^え顔^が作。前北斎^い筆^ず。和泉屋市兵衛^い版。17.8×12.0 早稲田大学図書館/専修大学向井信夫文庫蔵）

※天保10年（1839）から明治元年（1868）まで書き継がれた本。挿絵は歌川^{うたがわ}国^{くに}貞^{さだ}。北斎は袋に山田^{やま}抱^だ玉^{ぎよ}・歌川^{うたがわ}国^{くに}貞^{さだ}とともに合筆する。

●合巻『^{「おしどりものがたり」}鴛鴦譚』（角書き「^{「こんれいひながた」}婚礼雛形」。版心には「^{「おしどりものがたり」}をし鳥物語」とある。1月。二冊。山東京^{さんとうきやうでん}伝^{でん}作。柳亭^{りゅうてい}応^{おう}需^{きよ}雪^{ゆき}景^{けい}写^{しゃ}前^{ぜん}北斎^{きたさい}為^ゐ一^{いつ}。印^{いん}之^の印^{いん}。鶴屋^{つるや}喜^き衛^ゑ門^{もん}版。17.6×11.9 名古屋市蓬左^{はら}文庫蔵）

※北斎最後の合巻挿絵となるが、天保4年（1833）の合巻『^{「しゅつせやくこまんのでん」}出世奴小方之伝』の表紙絵をそのまま流用しているもので、天保13年に描いたものではない。

●絵手本『^{「いっぴつえほん」}一筆絵本』（3月。文政6年『^{「でんしんかいしゅ」}伝神開手 一筆^{いっぴつがふ}画譜』の縮模再刻版）

※『北斎の絵手本 二』（永田生慈 岩崎美術社）によれば、「『一筆画譜』の改題縮刷版（中本）一冊、全24丁」。見返しに「北斎先生画 一筆絵本 東都文江堂梓」とあり、奥付に「天保十三 壬寅年三月新刻 江戸馬喰町吉田屋文三郎 同亀井町藤屋宗兵衛 同南紺屋町三河屋甚助」とある。

【北斎作品の重要文化財指定第3号・孫なる悪魔を払う「日新除魔図」】

●肉筆画「日新除魔図」（紙本墨絵 10図。各 32.0×23.0 北斎館蔵）

現存作品から、「獅子の図」を、この年の11月28日から本所様馬場で描かれていて（久保田一洋氏『北斎娘 応為栄女集』p73による）、小布施でも翌14年12月29日まで、全219図を（国華社『葛飾北斎 日新除魔帖』（村山句吾編。明治40年10月。国立国会図書館デジタルコレクション。p7）日課として描いたと思われる。この219図は松本藩士・宮本慎助が所有していた。⇒弘化4年（1847）条参照。

※この「獅子の図」は、いわゆる「日新除魔」と呼ばれ、高井鴻山が保管していたものを、北斎とお栄が小布施を訪ねたときに、高井鴻山から渡され、弘化4年（1847）に、浅草田町の北斎宅で、江戸にやってき宮本慎助に譲られたとされる（金田巧子『栗の詩』44号の記事を、神山典士『知られざる北斎』（p222）で紹介）。

※「HOKUSAI 新聞」（2016 GW号 VOL28 北斎館）でも同内容の記事となっている。

「『日新除魔』（紙本墨絵。各図 32×23）。唐獅子や獅子舞の一連の絵は世界中に200以上あるという。天保13年（1842）～天保14年（1843）にかけて日課として描いたものをその都度軒下に捨てたものをお栄や弟子が拾い集め、弘化4年（1847）に「日新除魔」と名づけ、松代藩士・宮本慎助に与える」。

※露木為一談「北斎翁、本所様馬場に住せし頃、毎朝小さき紙に獅子を画き、まろめて家の外に捨てたり。或人偶拾ひ取りて披きみれば、獅子の画にして、行筆軽快、尋常にあらず、より翁に就き賛を請ふ。翁即筆を採りて、『年の暮さてもいそがし、さはがし』。或人更に翁に問ふ、何の故に毎朝獅子を画きて捨て給ふや。翁の曰く、『これ我が孫なる悪魔を払ふ禁呪なり』と」（『葛飾北斎伝』p232 ルビは筆者による）。

※孫は天保8年（1837）に没したと推定されるが、あるいは存命であったか。または没後も尻拭いに追われていたのか不明。

※「国宝・重要文化財（美術工芸品）の指定等について 平成15年3月20日 文化庁の文部科学大臣への答申」によりこの年（2003年）5月29日「紙本墨画日新除魔図」（219枚）として重要文化財に指定された。答申時の所有者は「坂本安子 京都府京都市左京区修学院関根坊町8-2」となっている。現在、九州国立博物館蔵。

【文化庁の「国指定文化財等データベース」の記事】

「（『二美人図』『潮干狩図』の重要文化財作品に比べて）これに対して、日新除魔図は注文制作でも画稿でもなく私的な作画である点で、他と区別される珍しい作例である。

多作で知られる北斎には、版画はいうに及ばず、肉筆画も多く遺存しているが、国内には画稿類はさほど多くは知られていない。いわんや一つの主題をかくも多様かつ継続的に描き続けた例は他に見出し難い。

本図は北斎の八四歳（筆者注：83歳の誤りか）の天保十三年（一八四二）から翌十四年にかけて、毎朝日課として描かれたもので、さまざまな姿態の獅子を伸び伸びとした筆致で描いた約一八〇枚の獅子図と、約四〇枚の獅子舞などの人物図からなる。

本画帖に綴じ込まれていた北斎の自序、宮本仲氏^{みやもとちゆうし}によって『先考遺墨』^{せんこういぼく}と題された、父宮本慎助^{みやもとしんすけ}氏の記録、仲氏による画帖跋文^{ちゆうし}によれば、北斎は弘化四年（一八四七）に本図を慎助氏に与えている。当初の形態は北斎の自序に毎朝描き捨てたというように、綴られてはいなかったと思われるが、『先考遺墨』によればこれを得た宮本慎助氏が仮綴じとした段階があり、画帖跋文には仲氏の時代に画帖としたことが記されている。

画帖装となる前に若干散逸したものがあろうだが、明治三十九年（一九〇六）に紹介された時点で二十九枚がまとまって宮本家に襲蔵されていた。注文制作に供する目的ではないため通常は保存しないはずのものが散逸を免れ、二〇〇枚を超える数量で一括されて今日まで伝えられたことはまことに稀有な事例であるといえよう。（略）

本図は北斎の豊かな創造力のあふれ出るさまをそのまま紙上にとどめた貴重な証左として一括して保存されるべきものである」

※一方で、「獅子の図」は小布施滞在中（天保13年〈1842〉9月～天保14年〈1843〉9月）に鴻山の別宅で日課として描き、200枚程を宮本慎助に渡したものだという説あり（荒井勉『北斎の隠し絵』p61 AA出版）。

※北斎は、「獅子の図」の他の一冊を松代藩家老・小山田老岐にも譲っていた。宮本慎助の絵を見て北斎に依頼したものという（荒井勉『北斎の隠し絵』p63 AA出版）。

※他に、晩年に弟子の本間北曜^{ほんまほくよう}に与えた「日新除魔」^{にっしんじよま}（年代不明。10/10、10/11、10/23、10/24、10.25、11/5、11/13、11/18、11/25の9図。酒田の本間家蔵本）の獅子画があるという（『北斎館肉筆画大図鑑』による）。

注：嘉永元年（1848）に、酒田から江戸に出た本間北曜は6月5日と8日に北斎に会い、8日には「認物」^{したためもの}（贈り物）を貰っている。このとき北斎から日新除魔図10図持ち帰っている（佐藤七郎「北曜の『旅日記』と北斎」（昭和53年11月8日「信濃毎日新聞」掲載記事より）。この10図は、現在北斎館所蔵。

霜月十八日図



●扇面画「秋草扇面」^{しゅうそうせんめん}（「秋草」「秋の七草」とも。紙本扇面淡彩。画狂老人卅筆齡八十三。印葛しか。23.3×50.5 北斎館蔵）

※秋の七草を墨で葉を描き、花のみ着色した図。小布施で描いたもの。これにより北斎が天保13年に小布施を訪れたことが分かる。

秋草扇面（北斎館）

●肉筆画「渡舟図」（「富士遠望図」とも。絹本着色一面。もと掛軸。画狂老人卅筆 齢八十三歳。印葛しか。84.8×42.2 フリーア美術館蔵）



※客を乗せた舟首の船頭が竿を差し、船尾の船頭が腰を屈めて舵をとっている、舟の反りと波の反りが一致している。中景に樹木繁る中に民家が描かれ、遠景に富士が聳える。

●肉筆画「拷問図」（画狂老人卅筆。印不明。松本の日本浮世絵博物館で発見）

※この年獄門死した柳亭種彦を念頭おいて描いたものか（荒井勉『北斎の隠し絵』P107～110）。 拷問図（日本浮世絵博物館）



●肉筆画「鬼を打つ鐘馗」（絹本着色一面。もと掛軸。画狂老人卅筆 齢八十三歳。印葛しか。85.2×42.2 フリーア美術館蔵）

※棍棒を振りあげ、反りかえった鬼を打つ鐘馗。

●肉筆画「生首図」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆 齢八十三。27.4×43.1 摘水軒記念文化振興財団蔵：千葉市美術館寄託）

※竹竿に縄で括りつけられているように見える生首。ざんばら髪が首全体に巻きついていて、歯を食いしばり、半眼の目つきで睨んでいる。右の頬には死斑が現れている。竹竿には柄杓が添えられている。打ち首の際の刀の血を洗ったのに用いたものか。他に文化7年～11年（1810～14）頃と嘉永元年（1848）にも「生首図」がある。



生首図（摘水軒記念文化振興財団：千葉市美術館寄託）

●摺物「門松」（1月。「門松に注連縄」とも。紙本着色一幅。摺物。八十三翁卅筆。印富士の形。12.7×18.6。すみだ北斎美術館蔵）

※図の左に門松と正月飾りをつけた注連縄が描かれる。

天保14(1843) 癸卯 84歳 前北斎卅翁、葛飾卅老人八右衛門、東都北斎卅翁、葛飾の老

人八十四老卅なり、八十四老卅、齢八十四歳画狂老人卅、印葛しか、富士の形：阿栄(46)

◇1月28日、長谷川雪旦没（66）。

◇3月27日、香川景樹没（76）。

◇閏9月、水野忠邦失脚。

◇閏9月11日、平田篤胤没（68）。

◇12月22日、為永春水没（54。深酒、神経症。自殺か）。

◇12月28日、江戸鍛冶橋より出火。木挽町、築地も類焼。

◇上海開港。上海はイギリス租界となる。

◇この頃、江戸で稲荷ずしが作られるようになる。

◇安永5年（1776）以来中断していた将軍の日光社参が復活する。

◇歌川国芳「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」が天保改革批判として評判となるも、版元が版木を削る。

【浮世絵一枚 20文～30文】

◇天保末年頃の浮世絵は一作品およそ20～30文（現在の500円～750円位）で、初摺で200枚、ベストセラーで2000枚程度の刊行といわれる。

★この年、『北斎漫画』六編がパリ国立図書館の版画室に収蔵される（2017『北斎一富士を超えて』図録所収、ティモシー・クラーク「逆順で語る晩年の北斎」p28）。

【転居 60回】

★本年まで転居60回といわれる。

★3月江戸に戻る。小布施から江戸へ帰る際、高井鴻山の別宅「碧瀨軒」での一人だけの生活では不便なので娘のお栄を連れてやがて小布施に戻るとのことであったが、なかなか小布施に戻って来ないので、9月には是非来るよう督促した鴻山に対する4月21日付の北斎の返信。

「(略)当年九月発足仕兼候へは、来三月ニ御座候。先達而、被仰聞候は四両金も入り可申与被仰聞得共、弥七様被申候は貳両ニて事足り可申と被申候。数々存寄も御座候得とも、兎角は御地へ参り候。而之上之御断ニ後座候得は、勘弁仕候。而之上亦々後便ニ可申上候。何連参り候ニは相違無之候。両人之身分は宜敷御取斗ヒ可被下候。恐々四月廿一日 三浦屋八右エ門 高井三九郎様 玉机下九拜」（天保14年4月21日 高井鴻山宛書簡。句読点・ルビは筆者）

※同書簡にある「四両」「二両」はお栄の件で金銭で処理する事を指すと思われるが、『北斎大鳳凰図』（岩松院。平成15年）では次のように解説している。

「九月にはとても行けません。それというのは連れて行く筈であった娘お栄の旅行につき、親戚のもので反対をし、それを訴えるとまで強がっている。お金をやって処置することもできるが、あまりにも口惜しい。何とか処置して、来年三月には、お栄ともども必ず参上するから、親子二人の身の上よろしく頼みます—こういう北斎の手紙です」（p6～7）

お栄の旅行手形の取得に手間取っているという見方もある。

【阿栄の「関羽図」松代にあり】

※小布施からの帰りに松代に寄った時のエピソードが荒井勉『北斎の隠し絵』に紹介されている。

「松代の郷土史家、高橋靈峰談『北斎の娘のお栄の作品が、真田家にはありました。『関羽図』といって、碁を打ちながら、関羽が腕の手術をしている場面です。山寺常山という人の家には、北斎が滞在した話が伝わっています。小布施からの帰り道に、北斎が常山の家に宿泊していた時、小布施の高井家から使いがやってきたそうです。使いの者が、謝礼金をたくさん持参し、北斎に差し出しました。でも北斎は、自分の取り分だけ手もとに置き、残りを使いの人に返したそうです。これを見ていた山寺常山は、北斎の無欲な様子に感心し、この話が山寺家に代々伝えられてきています』」 (p 150)

ここでいうお栄の図は「関羽割臂図」(絹本着色一幅。應為栄女筆。印葛しか。140.2×68.2)のことである。印号の「葛しか」の形は北斎が天保14年から弘化元年(1844)頃のものに似ているという考証もある(久保田一洋『北斎娘 應為栄女集』p 28)ので、その方印を使ったとすれば本図はこの頃の作品ということになる。但し、江戸で描かれたものか松本で描かれたものかは不明。



応為：関羽割臂図(クレーヴランド美術館)

☆松代で北斎の絵を持っている人は、宮本慎助、真田幸貫、山寺常山、小山田彦岐、八田彦次郎の五人という(同p 154)。

●北斎と思われる川柳(田中聡『北斎川柳』による。河出書房新社)

- ☆一年の埃が仁王の臍の垢 百姓(一年の埃が臍に溜まった仁王のお身拭い)
- ☆囿もひまを潰して狆の蚤 百姓(囿い者の女も旦那が来なければ、狆の蚤を拾って暇を潰す)
- ☆どうだ良香と旧苔の髭を撫 百姓(都良香が詩の下旬に悩んでいると鬼が即座に読み「どうだ良いか」)
- ☆真赤な嘘は紅粉の耳こすり 百姓(赤い唇を耳に寄せてささやく遊女の言葉は真っ赤な嘘だ。宿六心配『謎解き北斎川柳』では「口紅粉」)
- ☆二番目が出たでわけなく這入り升 百姓(正月の芝居の二番目は空いていて入りやすい。交接も同じ)
- ☆味ふて見よや新酒の柳樽 八十四叟新柳樽 卅誌(宿六心配『謎解き北斎川柳』による。『新編柳多留』は新酒のように楽しめるものです。どうぞ味わってください。天保5年以降なかった「卅」号を記す)

●読本『絵本漢楚軍談』(10月。角書「訂正補刻」。初輯。全二十冊。為永春水訳。葛飾卅老人八右衛門画図。丁子屋平兵衛版。22.5×15.7 早稲田大学図書館蔵)

※中国の小説を為永春水(筆者注：この年12月に没)が翻訳したもの。二輯は弘化2年(1845)1月刊。

- ☆『馬琴書翰集成』天保12年(1841)11月16日 殿村篠斎宛(第五巻・書翰番号94)
「当夏より丁子屋ニテ「漢楚軍団絵本」彫立候。絵ハ前之北斎ニ画せ候由。北斎ハ当年八十二三歳ニ成候処、細画之写本ヲ画キ候事、細心之至リニ候。文ハ為永春水ニ綴らせ候よし。(略)」(ルビは筆者による)。

●読本『江戸紫三人同胞』（4月。角書「万屋助六三浦屋総角」。文化5年（1808）と6年（1809）の読本『総角物語』前後編の二冊を合冊して改題再刊したもの。柳亭種彦作。葛飾北斎画。群玉堂：河内屋茂兵衛版。早稲田大学図書館蔵）

※北斎の絵は文化6年の後編に描いたものを採録。

●絵手本『卍翁艸筆画譜』（『北斎草画』とも。半紙本一冊。全24丁。和漢の故事や動植物の31図を描く。奥付には「前北斎卍翁筆。鈴木栄次郎彫刻 天保十四載癸卯初春 吉辰発市 東都書舗 金幸堂寿梓」とある。裏表紙には馬喰町の金幸堂の他に菊屋幸三郎など十の書肆が連記されている。大英博物館/メトロポリタン美術館/愛知教育大学附属図書館蔵）

※無題の後の画題は仮題。

【初巻】〈無題：大黒〉〈孟宗〉〈雨中の獅子〉〈晩冬の山水〉〈関寺小町〉〈蟻螂・香瓜〉〈鵜羽を振ふ〉〈屈原・汨羅の漁夫〉〈万歳の亀・野鶴〉〈無題：官女〉〈布袋の戯〉〈無題：椎茸・三番叟〉〈丁子・胡椒〉〈梨の花・鬘渠〉〈風雨の竹〉〈サフラン・花王〉〈群鳥・蜘蛛・千日紅〉〈無題：月見る狸〉〈奈良の秋〉〈無題：雪中船〉〈鳶尾〉〈烏骨鶏・莓〉〈無題：塾の先生〉〈黄尋〉



※〈無題：三番叟〉の画が「葛飾北斎筆 三番叟図 背景無地 縦長装 八十七志卍筆 印百 縦三尺九寸三分 巾一尺一寸三分」として有名な贋作事件（昭和4年、春峯庵事件）に出品された。⇒弘化4年「河骨に鵜図」の項参照

「卍翁艸筆画譜」無題：三番叟（大英博物館）

●絵手本『北斎漫画』草筆（1月。「北斎漫画草筆之部」とも。半紙本一冊墨摺。全24丁。前北斎卍翁筆。菊屋幸三郎版 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館：ヒーターモースコレクション/浦上蒼穹堂蔵）

※ほとんど『卍翁艸筆画譜』と同じ（配列は異なる）。序文・刊行年・版元の著名も同じ。

●絵手本『伝神開手 北斎画苑』（1月。半紙本淡彩3編。全21丁。前北斎卍翁筆。和泉屋金衛門、俵屋清兵衛、秋田屋太右衛門、永楽屋東四郎合梓。24.0×16.2 日本浮世絵博物館/東京芸術大学附属図書館/大英博物館蔵）

※ほとんど『卍翁艸筆画譜』と同じ（配列は異なる）。序文・刊行年・版元の著名も同じ。二・三編は北斎以外の絵師による別本（以上『年譜』による）。

●絵手本『北斎漫画 全』（全20丁。半紙本一冊墨摺。早稲田大学図書館蔵）奥付は『卍翁艸筆画譜』と同じ形式だが、「東都 前北斎卍翁筆 書舗 平林堂寿梓」に変わっている。内容は『卍翁艸筆画譜』とほとんど同じ（配列は異なる）。

●絵手本『肉筆北斎絵手本帖』（紙本着色。肉筆画帖。15図揃物。全体12.1×271.8 太田記念美術館）

※巻頭に「自出度八十四の春とハなりぬ」と口上が記され、その下に北斎が袴を着て座礼をしている図が描かれる。



肉筆北斎絵手本帖 ツバキ スイセン



エビ 口上 (太田記念美術館ツイートより)

〈北斎口上〉に続き〈エビ〉〈ゴマメ カヤ カチグリ〉〈マツ〉〈スイセン〉〈ツバキ〉〈羽毛 炭 香盆〉〈カキツバタ〉〈ナス〉〈蝶 セキチク〉〈葡萄〉〈トウモロコシ 虻〉〈キノコ〉〈コウロギ〉〈紅葉 トウノイモ クマデ〉が描かれる。

●狂句集『三芳野柳樽』(10月。中本一冊。序文末の署名に「葛飾の老人八十四老叟なり 天保十四癸卯年神無月」とある。島根県立美術館：永田コレクション蔵)。

※川越で刊行された狂句集。『年譜』(p135)によれば、催主・連慶堂其遊 為永春友となっている。北斎は序文と挿絵を描く。序文の後に、二つの樽を前に背中を見せて座っている袴姿の男を、永田生慈は「後向きの自画像を載す」(『北斎年譜』)と記し、北斎の自画像としている。『三芳野柳樽』(島根県立美術館)



【小布施での除魔図作画の様子】

●肉筆画「日新除魔図」(墨書き。1月1日～12月25日)

※『年譜』(天保14年条)には、1月1日の「はしる獅子」(「天保十四年癸卯正月元旦」の記述あり)から12月25日までのほぼ毎日描かれた「獅子図」が紹介されている。

同様に高井鴻山のもとでの様子の記事がある。

「北斎の起臥には居室の大小上下を意とせず、食を選ばず、但食前に慈姑を欠かさず。又味噌を好み。焼味噌に熱湯を注ぎて喫す。毎朝日課として獅子を画き、一日も之を廃せず、其の業を終ざればたとひ来客あるも接見せず。日々筆を揮って人物花鳥等を画き飽くを知らず画に生れ画に生くといふべきか。鴻山ついて学び画風のために一変す。其晩年雁田注の酒井某に与えたる画は北斎の肉筆にして、鴻山の手本として学びたるものなりといふ。」

(岩崎長思『高井鴻山小伝』上高井教育会刊 昭和8年：国立国会デジタルコレクション p44 コマ番号37～39 句読点は原文のまま。ルビは筆者による)

注) 雁田：現長野県上高井郡小布施町雁田。

●肉筆画「文昌星図」(紙本一幅。八十四老叟筆。印葛しか。79・8×28・2 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※妙見菩薩（北斗星信仰）信仰を示す画。文晶星は、北斗七星第一の星。文学を司る神とされる。通常は右手に筆を、左手には升（文晶星の別名、斗魁の斗を「ます」と呼ぶことから）を持って図画化されることが多い。図の上部に六星が描かれる。

※本図は、画家・川鍋暁斎の旧蔵品という（『永田生慈北斎コレクション展図録』 p 196）。
文昌星図（島根県立美術館）

●肉筆画「田植図」（絹本着色一幅。八十四老卍筆。印葛しか。36.9×51.8 佐野美術館蔵）

※母親が食べ物の包みを入れた盆を頭に乘せて、子どもの持つ鋤を握って、昼食を届けに行く図。子どもは紐で繋がれた亀を引き連れて



ている。田圃の中では笠を被った数人が腰をかがめて作業をしている。あぜ道では男が二人、しゃがんで休んでいる。笠を被った人々は白い○の連りのように見える。

田植図（佐野美術館）

●肉筆画「桜に鷲図」（「桜花と鷲の図」とも。絹本着色一幅。八十四老卍筆。印葛しか。97.2×45.7 氏家浮世絵コレクション蔵（鎌倉国宝館内））

※湧き水の流れる岸壁に立つ鷲の背後に八重桜が咲いている図。

桜に鷲図（氏家浮世絵コレクション）

●肉筆画「雪中鷲図」（紙本着色一幅。八十四老卍筆。印葛しか。118.5×54.0 滴水軒記念文化振興財団蔵）

※雪を被った老木に鋭い爪を立ててとまり、虚空を鋭く煮詰める大鷲の図。



雪中鷲図（滴水軒記念文化振興財団）

※『画本彩色通』（弘化5年：1848）で、鷲の書き方を解説している。

『絵本彩色通』（大英博物館）



●肉筆画「**南瓜花群虫図**」（絹本着色一幅。八十四老卍筆。印葛しか。37・7×68・5 すみだ北斎美術館蔵）

※黄色の地潰しを背景に、南瓜の弦が図の左下から右上に伸び、根本近くには赤い花が咲いている。茎には芋虫が這い、その先にはカナブンが飛んでいる。右下にはキリギリスやカマキリ、イナゴなどが描かれ、図の左上の空中には、虻やトンボが飛んでいる。ジャポニズムとして、エミール・ガレ(1846～1904)の花器の模様「バッタ」に影響したともいわれる（サントリー美術館蔵）。



南瓜花群虫図（すみだ北斎美術館）



エミール・ガレ
「花器・バッタ」
（サントリー美術館）

●肉筆画「**雪中張飛図**」（「雪中中国武人図」とも。絹本着色一幅。 齢八十四歳画狂老人卍筆。印葛しか。132・6×43・9 氏家浮世絵コレクション蔵（鎌倉国宝館内））

※張飛は、三国時代の蜀漢の武将。劉備を関羽と共に助け、魏・呉と戦ったが、呉への討伐の途中、部下によって暗殺された。

※雪中に笠をかざして天空を見据えている図。『三国志』の張飛ではなく『水滸伝』の豹子頭林冲とする説あり。

雪中張飛図（氏家浮世絵コレクション）



●肉筆画「**猿橋橋上角兵衛獅子**」（絹本着色一幅。八十四老人卍筆。印葛しか。97.4×35.6 北斎館蔵）

※猿橋は、山梨県大月市猿橋町の桂川にかかる刎橋。橋下が深すぎて桁だけでは組めないのので、刎ね木と桁を何重にも組み合わせて支えた橋。その橋を渡る三人の角兵衛獅子たちと、太鼓の男と笛の男の一行。

●肉筆画「**炭火**」（横判着色一幅。八十四老卍筆。印葛しか）

※「大坂三越呉服店肉筆浮世絵展」（大正8年：1919）の図録（大正9年：1920）によれば、京都 福田浅次郎氏所蔵」となっている。

※三脚の丸火鉢に炭が縦に組まれ、脇に薬缶が乗せられている。火鉢の縁に手を掛けている禿はお多福顔。側にいる花魁は右手を火鉢の縁に掛け、立膝で、左手に持った本を左頬に当てた姿、中着の袖や襟はチリチリに描かれる。

●扇面画「**四つの鳥居**」（「樹木に鳥居図」とも。紙本着色扇面一面。八十四老卍筆。印富士の形。上弦46.2 下弦22.5×14.6 フリーア美術館蔵）

※十面の扇画帖の一。巨木の前の四つの赤い鳥居を墨絵風に描く。同様の画趣は

「山水図巻」注（天保元年～5年〈1830～34〉）。巻子本一卷。紙本淡彩墨絵風全9図。26.5×595.0）にも描かれる。

注）「山水図巻」：門人布川一則（北嶺）に画手本として描き与えたもの（制作年不明）。

●肉筆画「米俵に鼠図」（絹本着色一面。もと掛軸。八十四老卍筆。印葛しか。91.4×30.0 フリーア美術館蔵）

※積み上げられた米俵によじ登る一匹の黒鼠。下からよじ登ろうとしている六匹の白鼠が描かれる。

米俵に鼠図（フリーア美術館：複製）



●肉筆画「夕顔棚納涼」（紙本着色一幅。八十四老卍筆。印葛しか。101.2×28.8 北斎館蔵）

※夕顔の棚の下で、上半身裸の女が煙管を銜え、夕顔棚の柵に左手をかけ、右手に菊が描かれた団扇を持っている。足元には上半身裸の男が座って、団扇の風を受けている。足元には、虫よけの除虫菊などを播るすりこぎ棒とすり鉢がある。

●肉筆画「日の出と双兔」（紙本着色一幅。天保十四年癸卯年元旦卯之中刻 八十四老卍筆。印葛しか。85.0×29.6 個人蔵） 日の出と双兔 (blog.goo.ne.jp より転載)

●肉筆画「田園春景図」（絹本着色一幅。八十四老卍筆。印葛しか。99.3×31.8 フリーア美術館蔵）

※濃彩図。高く伸びた先端に豊かな葉を付けた木の背後には、満開の桜の木がある。その向こうには頂に雪を残した山が描かれる。

●肉筆画「暁の富士」（絹本着色一幅。八十四老卍筆。印葛しか。個人蔵）

※雪を被る富士が淡緑色で描かれ、富士の裾は緑の点苔で、裾野の樹木や畑も緑に描かれる。

●扇面画「西行法師図」（紙本着色扇面一面。八十四老卍筆。印富士の形。大英博物館蔵）。

※『2005 北斎展図録』 p 41 による。



【以下、天保年間】

北斎改為一、前北斎為一、前北斎、画狂老人卍、画狂老人卍、卍、前北斎卍、（葛飾北斎）、（北斎）、春朗（天明8年～9年「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」の後摺判

に春朗号をそのまま用いる） 印不染居、ふしのやま、葛しか、富士の形

●絵手本『北斎画譜』上巻（天保元年～5年〈1830～34〉。中巻と下巻は嘉永2年（1849）。全三冊。墨摺。前北斎為一筆。永楽屋東四郎版。22.8×15.8 山口県立萩美術館/すみだ北斎美術館/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵）

※文政2年刊『北斎画式』(21図)に図を追加して改題改刷したもの。

●書画帖「羅漢図」(天保元年～5年〈1830～34〉)。北斎改为一筆。印ふしのやま。27.5×43.4 石洞美術館蔵)

※200名の作を集めた4帖仕立ての書画帖中の一図。白い袈裟、墨染の僧衣の羅漢が座って足に灸をすえながら虚空を見上げている。前に線香一本を立てた香炉と払子、艾を包んだ紙などが置かれている。羅漢の背後の円形のようなものは光背か月か不明。

※『新北斎展図録』(P336)には次の解説がある。「この画帖には、北斎と関わりのあった大田南畝、石川六樹園(1754～1830)、鋏形蕙斎(1764～1824)、十辺舎一九(1765～1831)、曲亭馬琴、芍葉亭長根(1767～1845)、などの作品の他、北斎門人の蹄齋北馬(1771～1844)、柳々居辰斎(生没年不詳)の作

品が収められており、それらの作品を眺めていると、北斎が生きた時代の息吹を感じることができる」

羅漢図(石洞美術館)



●掛物絵「日の出に鷹」(「日の出の鷹」とも。天保元年～5年〈1830～34〉)。印不染居。若狭屋与市版。日本浮世絵博物館蔵)

※松の老木に鋭い爪を立ててとまり、空を見上げる鷹の顔の向こうに大きな日の出が描かれる。

日の出に鷹(日本浮世絵博物館: douousato. or. jpyori より複製)



●錦絵「布さらし」(天保前期。小短冊判錦絵。前北斎为一筆。35.0×6.6 大英博物館蔵)

※被り物の女が布を川に晒している図。

●肉筆画「寒山拾得図」(天保元年～5年〈1830～34〉)。絹本着色一幅。前北斎为一筆。

印葛しか。33.0×52.2 すみだ北斎美術館蔵)

※寒山と拾得は、中国唐時代の道士で、浙江省の天台山近くに住み、寒山は文殊菩薩の化身、拾得は普賢菩薩の化身といわれる。図は、寒山が経巻を腰の竹筒に入れ、箒で紅葉を集め、拾得が塵取りを構えている。漢画風の絵。为一時代の数少ない肉筆画。



寒山拾得図(すみだ北斎美術館)

●肉筆画「山水図巻」(天保元年～5年〈1830～34〉)。紙本卷子本淡彩一卷。墨絵風。全9図。26.5×595.0 島根県立美術館: 永田コレクション蔵・府川家資料)

※門人^{あしかわかずのり}府川一則（北嶺^{ほくれい}：別号北岑^{ほくしん} 1824～34）に絵手本として与えたもの。茅葺^{かやぶき}の村落風景が墨絵風に多く描かれる。図によって横図であったり縦図であったりして統一されていない。卷子^{かんす}の裏に北岑の子^{ほくしん}の俊五郎^{しゅんごろう}（二代目一則^{かずのり}）が「山水^{この} 此卷物^{この}は父北嶺^{ほくれい}が師葛飾北斎先生^{きせき}に揮毫^{きごう}を乞ひ得たるものにして家に伝ふる物なり」と記している。

●錦絵『江戸八景』（天保元年～5年〈1830～34〉）。小判八枚揃錦絵。前北斎為一画。赤松屋庄太郎版。各平均 11・7×16.1 島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館蔵）

※額装の縁取りをして描いている。図の右上の丸枠に画題が記される。版元印は「中」の縦棒の下の左右に点が記されたもの。図は藍を基調に、俯瞰^{あいかんてき}的な景色となっている。元は長方形の紙の片方に小判の大きさに摺られたもので、「極製御菓子」と書かれた御菓子の袋だったものが、絵の部分だけ切り取られて残ったものとされる。

☆〈隅田落雁〉

※図の左下の茶屋の床几^{しじょうぎ}で休む人がいる。その前の隅田川には対岸への渡し船に大勢が乗っている。対岸にも茶屋らしき家があり、その背後の小高い丘のような土手に人が歩いている。紅葉の色づく夕方の空には雁が群れ飛んでいる。

☆〈御殿山帰帆〉

※桜咲く御殿山^{ごてんやま}の下の民家の先には海が広がり、数隻の帆船が浮かんでいる。

☆〈佃島夕照〉

※図の手前には帆かけ船のマストが数本見え、その先には佃島^{つくだじま}の民家と入り江が広がっている。

☆〈吉原夜雨〉

※吉原^{よし原}に続く土手から隙間なく並ぶ遊郭^{ゆうかく}の屋根が続く。雨の夜空は深い藍色^{あいいろ}で描かれる。

☆〈不忍秋月〉

※東叡山^{とういざん}の前の不忍^{しのぼず}の池の向こうに大きな月が浮かんでいる。

☆〈両国暮雪〉（太田記念美術館：長瀬コレクション蔵）

※隅田川に架かる両国橋^{りょうごくぼし}には大名行列と思われる一行が渡っている。こちら側の民家も対岸の民家も屋根に雪が積もり、橋の下を通り抜ける屋根船^{やねねぶね}の屋根にも雪が被る。

両国暮雪（日本浮世絵博物館）



☆〈葵岡晴嵐〉

※葵岡^{あおいがわ}は、現在の東京都港区虎ノ門^{みなとくらのもん}辺で、溜池^{たためいけ}の堰から流れる滝と、その脇の土手の坂道を往来する人々が描かれる。同画趣は『諸国瀧廻り』（天保4年：1833）の〈東都葵ヶ岡の瀧〉でも描かれる。

☆〈浅草晩鐘〉

※浅草寺^{せんそうじ}の屋根屋根と五重塔^{あかてき}を俯瞰的に描く。図の右には隅田川に架かる吾妻橋^{あずまばし}が見える。

●錦絵「^{しんしゅうすゐこすいこりわたり}信州諏訪湖水氷渡」(天保4～5年〈1833～34〉)。長大判注。前北斎為一筆。版元不明。東京国立博物館蔵)

※諏訪湖前面に氷が張った湖面をジグザグに行き来する人々が描かれ、その構図に合わせて左に^{うきしろ}浮城といわれた高島城が描かれ、さらに背景に南アルプスの向こうに雪を被った富士山が見える。

注)長大判：大判(B4に近い大きさ)を縦にして、更に上部に小判(19.5×13.0)を横にして継ぎ足した大きさ。

信州諏訪湖水氷渡 (東京国立博物館)



●錦絵『^{しいかしやうしんきやう}詩歌写真鏡』(天保4年～5年〈1833～34〉)。縦長大判錦絵揃物。10枚続。前北斎為一筆。森屋治兵衛版。各平均50.0×22.5 全10図ケルン美術館蔵)

☆〈^{しょうねんぎやう}少年行〉50.3×22.7 すみだ北斎美術館/ホノルル美術館:ミッチェナー・コレクション/城西大学水田美術館/大英博物館/東京国立博物館/中右コレクション/日本浮世絵博物館/アレク・メモリアル美術館:マリー・エイズワース・コレクション蔵)



※唐の詩人・^{さいこくほ}崔国輔の五言絶句詩「^{ちやうらくしょうねんぎやう}長楽少年行」注(遺却珊瑚鞭/白馬驕不行/章台折揚柳/春日路傍情)からの着想。若者が長安の花街に白馬で繰り出した帰り、珊瑚の鞭を忘れたのを思いだし、柳の一枝を折って鞭の代わりにしたという故事に取材。柳の木のある曲がりくねった道を白馬に乗り右手に柳の枝を持って帰り道を行く様子を描く。行く先の土手では笠を被った男が座って釣り竿を垂れている。

注)少年行：意識：珊瑚の鞭を無くした/白馬はいきりたてて先へ行かない/遊郭の柳を折って鞭とした/春の日、帰り道、遊女を思う。

少年行 (日本浮世絵博物館)

☆〈^{はくらくてん}伯楽天〉51.5×23.4 ホノルル美術館:ミッチェナー・コレクション/東京国立博物館/日本浮世絵博物館/アレク・メモリアル美術館:マリー・エイズワース・コレクション蔵)

ワース・コレクション蔵)

※謡曲「^{はくらくてん}伯楽天」からの取材。中唐の詩人・白楽天(772～846)が日本の知恵を計るよう命を受け、船で日本に渡ったところ、それを迎えた住吉明神が漁老に姿を変え問答を行った。白楽天は「^{せいさいこらち}青苔衣をおびて巖の肩にかかり、^{はくろうおび}白雲帯に似て山の腰を回る」と問いかけたところ、漁老は即座に「^{こはごらち}苔衣著たる巖はさもなくて^{いせつ}衣著ぬ山の帯をするかな」と和歌で答えたので、白楽天はその才能に驚き、正体を明かした住吉明神に勧められて帰国したという筋書き。図は背景に漢画風の峨々たる山に帯のように取り巻いた白雲を描く。白楽天が、海の岸边から下の岩場で釣り糸を垂れる漁老に問いかけている図。

白楽天 (日本浮世絵博物館)



☆〈李白〉50.9×22.9 大英博物館/千葉市美術館/ベルリン東洋美術館/ホノルル美術館・ミッチェナー・コレクション/中右コレクション/アレン・メモリアル美術館：メアリー・エイズワース・コレクション蔵

※盛唐の詩人李白(701～762)は、安禄山の乱(755)を避け、廬山に逃げ込んだ際に廬山の



瀑布を題材に七言絶句詩「日照香爐生紫煙 / 遥看瀑布挂長川 / 飛流直下三千尺 / 疑是銀河落九天(望廬山瀑布)」を詠んだが、このエピソードを題材に李白が滝を見る図が描かれるようになった。嘉永2年(1849)にも「李白觀瀑布」を描いている。本図は、右半分を使って垂直に落ちる滝を描き、その途中の山の台地から滝を覗き込むように見る李白を、落ちないように二人の童子が支えている。

※七言絶句の訳：日が香炉峰を照らして、景色が紫色に霞んでいる / 遙か遠くには、瀧が天に長い川をかけたように見える / 瀧の飛ぶように早い流れは、真直ぐ三千尺下に流れ落ちている / それは天の川が流れ落ちてきたかのように思えるほどだ

李白(千葉市美術館)

☆〈清少納言〉52.3×23.1 ホノルル美術館：ミッチェナー・コレクション/島根県立美術館/日本浮世絵博物館/アレン・メモリアル美術館：メアリー・エイズワース・コレクション蔵

※清少納言の和歌「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも 世に逢坂の関はゆるさじ」からの着想であるが、これは『史記』の「猛嘗君伝」にある函谷関の故事に由来する。斉の猛嘗君が秦王に殺されそうになるのを悟り、函谷関の門まで逃げたが、この門は朝に鶏が鳴くまで閉じられているため、鶏の鳴き真似をしたところ、付近の鶏も一斉に鳴いたので、門が開けられ、無事逃げる事が出来たというもの。

図では、木の上に登って門の外を眺める男が描かれているので、逃げおおせた猛嘗君を見ていると思われる。その下で門の鍵を閉めようとしている男と、時を知らせる太鼓と鉢をもつ男が描かれる。その脇の屏の屋根には二羽の鶏がいる。

清少納言(日本浮世絵博物館)



☆〈春道のつらき〉52.4×23.7 ホノルル美術館：ミッチェナー・コレクション /大英博物館/城西大学水田美術館/東京国立博物館/アレン・メモリアル美術館：メアリー・エイズワース・コレクション/:ブリュッセル王立美術歴史博物館蔵

春道のつらき(東京国立博物館)



※春道列樹の「山川に風のかけたるしがらみは 流れもあへぬ紅葉なりけり」（古今和歌集）の和歌が題材となっている。従者を随えて橋の上に佇み、飛鳥川の流れを見つめる列樹を取り囲むように山里の風景が描かれる。

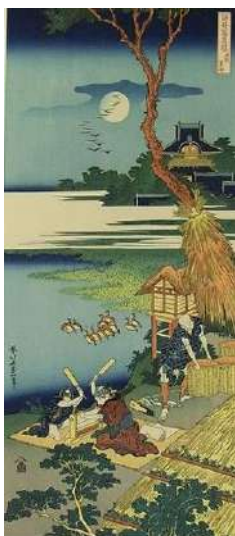
☆〈安倍の仲麿〉52.2×22.9 ホノルル美術館：ミッチェナー・コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/大英博物館/日本浮世絵博物館/アレク・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション/ブリュッセル王立美術歴史博物館蔵)

※安部仲麻呂は、養老元年（717）に遣唐使として唐の長安に渡り玄宗皇帝に20年仕えたが、帰国を許されず、更に30年後に漸く帰国の途についたが、暴風に遭い、願い叶わず再び唐に仕えて770年に73歳で没した。図では、仲麻呂の有名な和歌「天の原ふりさけ見れば 春日なる三笠の山に出でし月かも」に詠まれた望郷の思いを、全体の藍色を基調にした色合いの中で、建物の露台から月を眺める姿で描いている。

安倍の仲麿（日本浮世絵博物館）



☆〈在原業平〉52.3×23.2 ホノルル美術館：ミッチェナー・コレクション /ベルリン東洋美術館/すみだ北斎美術館/東京国立博物館/アレク・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵)



※月下に砧を打つ母子と傍に立つ男。かなたには浅草寺と思われる寺と飛来する雁の群れ。砧と雁は郷愁の象徴となっている画材。浅草は古紙の再製のための紙すき業の者が多く、その再生紙は安価な浅草紙と呼ばれた。

在原業平（すみだ北斎美術館）

☆〈融大臣〉49.8×23.1 ベルリン東洋美術館 /大英博物館/ホノ賀茂川縁ル美術館：ミッチェナー・コレクション /東京国立博物館/アレク・メモリアル美術館：マリー・エイズワース・コレクション蔵)

※謡曲「融」を題材にしたもの。左大臣源融がに豪邸を建て、庭を奥州の塩釜の景観にし、毎日潮を汲み入れ魚貝を住ませ、塩焼きの苦屋も作り、煙をあげて楽しんだというもの。図は、三日月の見える夕暮れに広大な庭を供の者と散策する融の姿を描く。遠景に三日月、手前の近景には、木の枝にとまる三羽の鳥を描いている。

融大臣（東京国立博物館）



☆〈木賊刈〉52.0×23.6 ホノルル美術館：ミッチェナー・コレクション/すみだ北斎美術館/ /東京国立博物館/大英博物館/ギメ美術館/中右コレクション/ブリュッセル王立美術歴史博物館蔵)

※謡曲「木賊」からの取材。都の僧が、父を捜す松若を伴って信濃の国で木賊（砥草）を刈って生活をする老人に逢い、その老人が松若の父であったと分る。老人は漸く会えた子

とともに仏門に入ったというもの。多年生常緑シダ類の砥草で、茎が堅く、物を磨くのに使用する。図は、木賊を天秤棒の両側につけて担ぐ老農夫が橋の上を歩く。池には二羽の鴨がひっそりと浮かび、樹の蔭には月が出ている。全体に哀愁漂う趣となっている。

木賊刈 (すみだ北斎美術館)

☆〈無題〉(仮題「杜甫」「雪中人馬」「雪中の蘇東坡」「東坡騎驢」)とも。51.6×23.0 ホノルル美術館:ミッチャー・コレクション /すみだ北斎美術館/フィッツウィリアム美術館/アレン・メモリアル美術館:マリエインズ・ワース・コレクション/平木浮世絵美術館蔵)

※シリーズ中で無題の一枚。誰を描いたかは不明。唐宋八大家の一人、蘇東坡説や韓愈説もある。雪が降る中で、馬上の男が静かに雪を被った松の木の側の家の屋根を眺めている。その後には伴の男がその主人を見上げている図。

2017年『北斎一富士を超えて』展図録では、この絵を「杜甫」と題して、杜甫の友人が戦場に赴く際に、雪の岩崖から馬に乗って杜甫の家を眺めている図としている (p176)。

杜甫には五言律詩「送遠」がある。「帶甲滿天地 胡為君遠行 新朋盡一哭 鞍馬去孤城 草木歲月晚 関河霜雪清 別離已昨日 因見古人情」(筆者意識:甲冑を付けた兵士があちこちにいる。なのにどうして君は戦場に行くのか。友よ、二人してひとしきり声をあげて泣くことだ。君を乗せた馬は孤立したこの村を去る。草木も年月が経ち、関所と川に清らかに雪が降る。君と別れたのものはや昨日のことになった。かつて江淹が友を送った詩にあるように、その思いと同じ思いがこみ上げる)

この図と同じ構図(左右反転している)を天保4年『唐詩選画本』六編卷之三に描いている。

無題 (すみだ北斎美術館)

●錦絵「狂歌入戯画」(天保元年~5年<1830~34>)。前北斎筆。森屋治兵衛版。ベルリン東洋美術館蔵)

※北斎は文政年間後期から天保4年(1844)にかけて『柳多留』に多くの川柳を入句させている。ここでは狂句の下に鳥羽絵風の戯画を描く。文化11年~文政元年<1814~18>にかけても「狂句入り戯画」がある。

☆〈素人義太夫〉

※三味線を弾く女房に合わせて浄瑠璃を唸る男。狂歌は「語り人が面白ロかるで聞人なし 女房に弾かせ鼻たらし語り」

☆〈借(ママ)し夜具〉



※「かしやく」と描いた看板を二人の男が見上げている。側に浴衣を手にした女がいる。男の一人は手拭いを肩にしているの、三人とも湯屋に出かけるところか。

狂歌は「ほうづきのかん所をふく糸切歯 借シ夜具を呵責と読ンだ地獄むれ」

☆〈鍛冶屋〉

※鍛冶職人の一人は、立て膝で木槌を振り上げてやっここに挟んだ金板を叩いている。もう一人の職人は右足を跳ね上げ、両手で頭を抱えて立っている。狂歌は「宗親ハ狐が附イテ名が高カシ 立膝で打ッが鍛冶の亭主なり」

☆〈砧〉砧打つ職人に向かって侍が刀の柄に手をかけ。今にも斬りかかからんとしている。狂歌は「小夜砧大肌ぬぎとおもわれず/夜砧にびんたうち切るさつま織り」

●錦絵「下手の鞠」（天保元年～4年〈1830～33〉）。中判。前北斎筆。森屋治兵衛版。島根県立美術館：永田コレクション蔵

※『新北斎展図録』（2019年）では上記「狂歌入戯画」と画趣及び制作年が同じだが、この図を単独で掲載している。

※二人の男が蹴鞠をしているが、蹴りそこなって鞠は下にある。

下手の鞠（島根県立美術館）



●錦絵「山本屋平吉版 大判武者絵シリーズ」（天保元年～5年〈1830～34〉）。大判錦絵揃物。前北斎為一筆。山本屋平吉版。各平均 37.2×25.2）

※井上和雄氏『北斎』では天保2年（1831）頃の作としている。

※背景を藍色のみで描く、いわゆる地潰しの画法。現在 5 図が確認されている（2014『北斎クローズアップ I』）。

☆〈渡辺の源吾綱と猪の熊入道雷雲〉（東京国立博物館蔵）

※源吾綱は源融の子孫で源綱。通称渡辺源次。京都一条戻り橋で、「大江山の酒吞童子の話や、京都一条戻り橋で、源氏の名刀「髭切の太刀」で鬼の腕を切り落とした逸話で有名。當光寺（現東京都港区三田）で生まれたので、近くに「綱の手引き坂」などの地名が残る。渡辺の源吾綱が仰向けの雷雲に跨り刀を突き刺そうとしている。

渡辺の源吾綱と猪の熊入道雷雲（東京国立博物館）



☆〈鎌倉の権五郎景政と鳥の海弥三郎

保則〉（すみだ北斎美術館/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/太田記念美術館/島根県立美術館蔵）

※いずれも歌舞伎「暫」の役名。16歳の景政は後三年の役（1083～87）平氏として出陣、保則に右目を弓で射られるが、矢を抜かないまま保則を追いかけて倒す話に取材。

鎌倉の権五郎景政 鳥の海弥三郎保則（日本浮世絵博物館）

☆〈鬼兒島弥太郎と西法院赤坊主〉（山口県立萩美術館・浦上記念館/名古屋テレビ放送/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/ボストン美術館蔵）

※越後国林泉寺（上杉謙信ゆかりの寺）の釣鐘を奪い悪行を行った妖怪・西法院赤坊主と上杉謙信の家来で鬼兒島の異名を持つ豪傑鬼島弥太郎が戦う場面。画面いっぱい二人の組みうちを描く。赤坊主が鐘を担ぎあげ、上から攻める弥太郎に防戦している。

鬼小島弥太郎と西法院赤坊主（すみだ北斎美術館）



☆〈楠多門丸正重と八尾の別当常久〉（日本浮世絵博物館/東京国立博物館/すみだ北斎美術館/島根県立美術館蔵）

※多門丸は楠木家として、八尾の別当一族と領土争いを繰り返した。別当常久が腰の刀の柄に手を掛けている背後から正重が石の手水鉢を持ちあげて押し掛かろうとしている。八尾別当常久の着物には、勝利を意味する毘沙門亀甲柄が施されている。

楠多門丸正重と八尾の別当常久（日本浮世絵博物館）

☆〈大伴の真鳥と大友の宿禰兼道〉（日本浮世絵博物館/東京国立博物館蔵）

※鎖鎌を手にした兼道に刀を持って上から襲いかかる真鳥。九州探題の真鳥の謀反を、大友正道と兼道父子が打倒した際、真鳥が自分の首を兼道に差し出したという逸話から、浄瑠璃や歌舞伎の演題となる。

大伴の真鳥と大友の宿禰兼道（日本浮世絵博物館）



●錦絵「江都両国橋夕涼花火見物之図」（天保元年～5年〈1830～34〉）。大判錦絵。春朗画。萬屋吉成判。24.2×37.0 大英博物館/島根県立美術館/酒井コレクション/北斎館蔵）

※「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」（天明8年：1788～9年：1789。西村屋与八版）の後摺だが、花火が画面左に打ち上がる軌跡とその上に花のように広がるものから、画面中央上に星のように10個の火の玉が広がる図に変わっている。西村屋（永寿堂）から木を譲り受けて色板を変えて刊行したもの。⇒天明8年新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」参照。

●肉筆画「蘇鉄を見る巡礼」（天保6年～10〈1835～39〉）。紙本着色一幅。前北斎卍筆。118.3×35.5）

※巡礼の男が蘇鉄を見上げて休んでいる図。

●版下絵「八日朝打上ル浪」（版下絵。天保年間〈1830～44〉）。38.3×27.5 大英博物館蔵）

※浪が左下から右上に打ち上がり、空欄に「八日朝打上ル浪」の書き込みがある。

- 肉筆画「小雀を狙う山かがし図」（紙本着色一
幅 無款 28.6×81.1 天保年間〈1830～44〉。
鎌倉国宝館：氏家コレクション蔵）

小雀を狙う山かがし図（氏家浮世絵コレクション）



- 肉筆「白蛇に雀図」（天保元年～5 年〈1830～
34〉。絹本着色。額装。北斎改为一筆。印葛しか。98.7×28.4 北斎館蔵）

※鍬の柄の先に雀が一羽とまり、それを狙って白蛇が下から鍬の柄を上っている図。同画趣は『肉筆画帖』にもある。

- 屏風絵「田園風俗図屏風」（「富士田園景図」とも。天保元年～5 年〈1830～34〉。紙本着色六曲一双屏風。右隻：前北斎为一筆。印葛しか。左隻：北斎改为一筆。印葛しか。各 150.7×350.8 フリーア美術館蔵）



田園風俗図屏風（フリーア美術館：複製）

※右隻には、右から、農家の屋根で茅葺を補修する 3 人の男、家の玄関口で荷物を抱える男、碇を打つ二人の女、荷物を背負った行商の男と天秤の荷物を下ろして話をしている男たち、小川に架かる橋の上には二人の旅人、橋の側には旅人を眺める白い犬などの田年風景が広がり、遠景に雪を被った白い富士が描かれる。

左隻には、右から、沼に船を浮かべ棹さしている男、沼の向こう側の道には行楽帰りの侍が扇をかざして、供の男と荷物を引き合せて持っている。布を洗い張りで幅を伸ばしている男と、布に刷毛で糊を塗っている男も描かれる。

- 絵本『絵本長生殿』（着色一冊。天保元年～弘化 5 年〈1830～48〉。版元不明。全 10 図。葛飾北斎他。国立国会図書館蔵）（『世界を魅了した鬼才絵師北斎』河出書房新社より）

※長生殿は、唐代に長安の南東、驪山に造営された華清宮内の宮殿名。白居易の『長恨歌』に詠われ、玄宗が楊貴妃を伴って遊んだ地として有名。清代に洪昇によって戯曲化された『長生殿』に因んで名付けたものであろう。半丁ごとに、浄瑠璃の曲の知られた詞章を載せ、その場面にふさわしい男女を描いたもの。各ページに五言絶句も載せる。第 10 図の「妹背山女庭訓」題の次ページに「北斎画」とあるのは後書か（「国立国会図書館デジタルコレクション」解説より）。

『絵本長生殿』〈恋女房染分手綱〉（国立国会図書館）





●肉筆画「魚貝図」(「魚貝静物図」とも。天保11年～嘉永2年(1840～1849)。油彩キャンバス一幅。北斎画。

印葛しか。30.2×38.0 個人蔵)

※平目と鰯と榮螺が絵付けの皿に乗せられている静物画。完璧な西洋画を思わせる作品。但し、落款はあるものの、あとから書かれたもので、北斎の作かどうか疑問視する向きもある。小布施での作といわれる。

魚貝図 (1998『東西の架け橋』展図録より)

●扇面画「雪中狐図」(天保年間(1830～44)。紙本着色一幅。前北斎卍筆。印葛しか。個人蔵)

※氷結した湖面に立つ氷の線に小さく描かれた狐が一匹、さらに、湖面の木に積もった雪の陰に一匹、雪の陰の背後に後ろ姿の狐が一匹描かれる。諏訪明神の御神渡りに困んだ画材と思われる。

●肉筆画「巖上の大鷲」(天保6年～10年(1835～39)。絹本着色一幅。画狂老人卍筆。印葛しか。134.0×54.2 北斎館蔵)

※舞い落ちる紅葉を背景に、巖上で何かを見つめる大鷲の図。

巖上の大鷲 (北斎館)



●肉筆画「鬼法師図」(天保10年～弘化2年(1839～45)。着色一幅。無款)



※唐傘を背負い、鉦を首から下げ、頭の禿げた頭の左の角が折れた赤鬼が、指をくわえて目尻の下がった目で物欲しそうに何かを見ている。黒い法衣をまとった鬼の前には奉加帳が置かれている。

鬼法師図 (toyotane.web.fc2.com より転載)

●屏風絵「鯉図」(天保年間(1830～44)。六曲一隻屏風。紙本着色。無款。55.8×25.7 個人蔵)

※伝北斎とされる。超大判で、滝の激しい水流の陰に姿を見せながら、垂直に滝を登る一匹の鯉を描く。天保5年(1834)頃の森治版長大判シリーズ「鯉の滝登り」(森屋治兵衛版。長大判錦絵)と似ているが、二匹の鯉を描いている。 鯉図(部分:1998年『東西の架け橋 北斎展図録』より転載)



●肉筆画「布袋の図」(天保5年～15年(1834～44)。絹本着色一幅。卍筆。印ふしのやま。30.0×38.2 足立・六町ミュージアムフローラ蔵)

※上半身裸で腰に軍配団扇を挿し、大きな袋を広げている。袋の中には様々なめでたい小物が入っている。

落款に卍のみを用いたのは天保5年（1834）頃からと考えられるので、一応、天保中期以降とするが、所蔵館の説明では文政2年（1819）、60歳頃の作品としているので、検討を要する。



布袋の図（六町ミュージアムフローラ）

右：落款

●画稿「日蓮波題目画稿」（天保年間〈1830～44〉。下絵一枚。無款。22.7×39.2 ポストン美術館蔵）

※日蓮が船端から身を乗り出して、波の渦巻く海面に経の真言と思われる文字を書こうとしている図。佐渡に流された日蓮が日本海を渡る場面と思われる。波面の一部は朱色が施されている。絵の着色についての指示書きがなされている。

天保15/弘化1(1844/12/2～)	甲辰	85歳	画狂老人卍筆	齡八十五歳、	齡八十五歳
画狂老人卍	中寫鐵藏藤原為一	八十五老卍	画狂老人卍筆	試筆八十五歳、	八十五翁卍

画狂老人卍	印	富士の形	葛しか	一顆	之印	阿栄(47)
-------	---	------	-----	----	----	--------

- ◇1月、歌川国貞、二代目豊国（実は三代目）を襲名。
- ◇2月5日、四代目川柳没（67）。
- ◇2月26日、間宮林蔵没（70）。
- ◇3月11日、フランス船、琉球で通商を求める。
- ◇5月10日、江戸城本丸炎上。
- ◇7月2日、オランダ軍艦が長崎入港。国王（1830～1844）の開国勧告を幕府に提示。
- ◇8月6日、蹄齋北馬没（74）。
- ◇11月頃、女義太夫が流行。
- ◇この年、鎌倉屋豊介子（芝居通）と齋藤月岑（町名主）の追考で写楽を阿波侯おかかえの能役者とした（『浮世絵類考』の追考）。

【長寿番付に入る】

★この年の長寿番付に、水口寿山の105歳、末吉石舟の101歳、花井白叟の98歳、大岡雲峯の80歳などと共に掲載される（檜崎宗重『北齋論』p338）。

この記事は弘化元年の『藤岡屋日記 第二巻』（p463 藤岡屋由蔵記）の記事として「浮世絵文献資料館」でも紹介している。また、『武江年表』（齋藤月岑）弘化元年条（「国立国会デジタルライブラリー」126コマ目）にも記される。

★正月20日、高井鴻山宛書状に、本年は牛島神社開帳の額面制作、藤堂家襖絵などがあり、出発は3月半ば過ぎになるかという。

★2月頃、向島小梅村に阿栄と住む。2月29日の嵩山房への稿料受取によると『年譜』にある。更に本年後半に浅草寺前に住むか（斎藤月岑『増補浮世絵類考』による。

★3月14日付、十八屋（日本橋にある小布施の豪商）宛てに、江戸の人形師松五郎は来年中旬にも應龍上納の見込みを告げ、二両を借りる依頼をする。

【二度目の小布施行きにお栄は伴ったか】

★3月、阿栄を伴い二度目の小布施村行き。高井鴻山宅の別荘をアトリエとして4月から約半年、東町屋台天井図（龍と鳳凰）を描く。その後、北斎のドラ孫の関係で侠客が小布施まで来て、阿栄まで関わりになるのを恐れ、先に阿栄を江戸に帰したという（『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』p19 由良哲次：岩松院）。北斎も秋に江戸に戻る。

※荒井勉『北斎の隠し絵』によれば11月にお栄を伴い小布施に行き、年内に東町屋台天井図（龍と鳳凰）を描いたとする（p213）。

※お栄の小布施行きについては、林美一『お栄と英泉』（有光書房 1967年）で、弘化2年（1845）の北斎の小布施行きについての記載があるので、弘化2年条を参照のこと。また、久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』では、「北斎が娘・応為を伴って小布施に滞在したのは弘化二年（1845）から」としている（p34）。

●北斎と思われる川柳（田中聡『北斎川柳』による。河出書房新社）

☆道下手な下女が荷になる己が尻 百性（歩くのが下手な下女は大きな尻が重荷になっている）

☆子の顔に乳にツメタイ女礼 百性（正月四日からの女の年始回りに連れた乳飲み子の顔が乳に冷たい）

☆雛ほどに喰はぬ鍾馗や金太郎 百姓（大食らいの鍾馗や金太郎も雛飾りほど銭は食わない）

☆穴なし小町と一度きりの弁慶 百性（男と縁がなかった小野小町。一生に一度だけ女と出会った弁慶）

☆陰陽の馬鹿は小町と武蔵坊 百姓（男女の表裏を知らない馬鹿は小野小町と武蔵坊弁慶）

☆観音を出しに息子の妙智力 百性（浅草観音詣りと称して吉原通いの素晴らしさは観音妙智力の霊力か）

【自らの誕生の年月日を示す】

●肉筆画「大黒天図」（1月1日。紙本着色一幅。落款に「天保十五年甲辰子ノ月甲子ノ朔日子ノ刻 宝曆十庚辰年九月甲子ノ出生 画狂老人己筆 印富士の形 齢八十五歳」とあり）

※縦一尺八寸二分（約74.2cm）、横一尺（約30.3cm）の本図は、北斎自らが誕生の年月日（宝曆10年9月23日）を記したものと貴重な画だが、現在所在不明である。米俵に右膝を乗せ、左足は地につけている。大国帽子を被り、右手に小槌を持ち、左手で大き

な袋を担いでいる。袋は大黒天の背後に、仏像の光背のように丸い縁取りで描かれる、表情は穏やかではほほ笑んでいる。

※『HOKUSAI 画狂人北斎 緑青 VOL2』（マリア書房）には、次の記事と図がある（p157）。

「(略)明治33年(1900)1月、上野公園日本美術協会での小林文七所蔵品を中心とした北斎展カタログ第190図に本図と思しき記録がある。その後、昭和11年(1936)2月「長春閣蔵品展観図録」(阪口覚編)に突如として写真掲載され、翌月大坂美術倶楽部で入札に供された。長春閣とは神戸川崎造船所の創始者川崎正蔵氏(1837～1912)。その後、檜崎宗重氏が『北斎論』(昭和19年)に本図写真を掲げ北斎の出生を論じるも、現在、作品の所在は不明」。



大黒天図：『HOKUSAI 画狂人北斎 緑青 VOL2』（『葛飾北斎傳』「上 一丁ウ」よりの転載）からの転載

- 東町祭屋台天井絵「龍図」（桐板着色。無款。123.0×126.5 北斎館蔵）
- 東町祭屋台天井絵「鳳凰図」（桐板着色。無款。123.0×126.5 北斎館蔵）

※この天井絵の裏に高井鴻山の息子辰二の次の証明書きがあるという。

「鳳凰ノ画北斎卅老人ノ筆跡 予先人ヨリ親シク聞所ナリ 今ヤ落款ナキヲ以テ其事実ヲ茲ニ記ス 干時天保十五庚辰注ノ歳也」（『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』(由良哲次：岩松院。平成15年2月1日刊。p7 ルビは筆者)

注) 庚辰：甲辰の誤り。



左：東町祭屋台天井絵「龍図」
右：東町祭屋台天井絵「鳳凰図」

- 肉筆画「龍図」（元旦。墨摺一幅。天保十五甲辰

ノ元旦辰ノ刻 宝曆十庚辰出生齡八十五歳画狂老人卅 中寫鐵蔵藤原為一筆。印葛しかフリーア美術館蔵)

※画面一杯にとぐろを巻くように天空を飛翔する龍が描かれる。墨の濃淡で描く。1999年イタリア・パラッツォレ北斎展図録・巻頭ジャンカルロ・カツア氏論文掲載図版に掲載(久保田一洋『北斎娘 應為栄女集 p97 記事より)。

龍図（伝フリーア美術館）

●絵手本「北齋女今川」（この頃か。『年譜』弘化元年（1844）条には「本書はのち『絵本女今川』と改題される」とある。一冊。見開き 23 図（口絵を除く）。永楽屋東四郎版。著者・画工名不明。22.7×15.8 大英博物館/東京大学学術資産等アーカイブズ共用サーバ：教育学部図書室蔵）

※作画については「文政年間とみられる永楽屋宛北齋書簡で本書について触れていることから、作画期は文政末から天保初年頃とされている」（『ピーター・モース・コレクション北齋図録』 p 138）という見方もある。

※見開き第 3 図に、狼が木に絡み付いて体をねじりながら、頭にロウソクを 3 本立てた女と対峙している図があり、「弘法大師



『北齋女今川』（大英博物館）

修法図」の構図に似ている。

「女今川」は、貞享 4 年（1687）に今川了俊の「今川状」を真似て、沢田きちが絵入り・かな書きで出した往来物（教訓書）。本書はさらにそれを真似たもの。「今川になぞらへて女子をいましむる制詞の條々」として様々な状況に対する戒めを説く。



●肉筆画「月見る虎図」（紙本着色一幅。八十五老叢筆。印富士の形。96.2×28.8 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※笹を踏み、後ろ脚を折って夜空の月を見る虎の図。図上部の月の右に見られる斑の線は、畳の目の跡と考えられている。

月見る虎図（島根県立美術館）

●「鼠と小槌図」（紙本着色一幅。画狂老人叢筆 齢八十五歳。印富士の形。88.8×28.6 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「月見る虎図」同様、背景を一面墨の濃淡で処理しているのは、この時代の特徴という。図は、大きな袋と小槌の側の二匹の鼠、袋の下にも一匹の鼠がいる。大黒天と、繁栄の象徴である鼠を描いたもの。

●肉筆画「鍾馗騎獅図」（紙本着色一幅。画狂老人叢筆 齢八十五歳。印葛しか。118.2×57.8 出光美術館蔵）

※病防ぎの鍾馗が魔除けの獅子の背に乗り、鞭を使い急いで災いを除くために行く図。





※北斎は天保 13 年(1842)頃から魔除けのために獅子図を描くのを日課にしており、天保 14 年(1843)分の獅子図は、信州松代藩士の宮本慎助に与えた 200 余図が「日新除魔」として残されている。この中にも獅子と鍾馗の組み合わせが描かれたものがある。

鍾馗騎獅図(出光美術館)

●肉筆画稿「朱描鍾馗図」(画稿。紙本一幅淡彩。島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※端午の節句に無病息災を祈って幟に描かれる朱色の鍾馗図の画稿。朱色は疱瘡除けとされた。弘化 3 年(1846)にも「朱描鍾馗図」(絹本一幅)がある。

●肉筆画「狐の嫁入り図」(絹本一幅着色。画狂老人卅筆齡八十五歳。印葛しか。96・2×35.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)



狐の嫁入り図(島根県立美術館)

※「狐の嫁入り」とは、日が差しているのに雨が降ることをいい、その時には狐たちが嫁入りの行列をしているという言い伝えがある。嫁入りによって子が増え、狐の好物の鼠が減り、その結果穀物の豊作を巡らすので、農家にとっては恵みの雨となるとされる。図は、下半分に農家の茅葺屋根の下で作業をする家族を描き、遠くの狐の行列に気づいていない様子。にわか雨に、白が濡れないように笠をかぶせる男。洗い張りを急いで家に取り込む母親と子ども。

武家装束の狐たちは静かに駕籠に乗せた花嫁を運んでいる。駕籠の周りには角隠しを被った女が数人いる。図上部左に薄く月が描かれる。

●肉筆画「雪中筍掘り図」(1月の筆始めの図と考えられている。「雪中筍狩」とも。紙本着色一幅。画狂老人卅試筆齡八十五歳。印葛しか。132.4×42.4。北斎館〈個人蔵〉寄託)

※笠を被り鋤の先に筍を二つかけて肩に担ぎ、雪道を行く農夫の後姿の図。中国元代の『二十四孝』(郭居敬作)に登場する孟宗が題材とされる。孟宗が病気の母が食べたがった筍を探しに雪の竹林に行き祈ったところ、筍が生えてきたという話をモチーフにしている。本図は、筍を掘り終えて帰路につくところ。



●肉筆画「竹に雀図」（紙本着色一幅。八十五翁卅筆。印一顆。59.4×32.3 北斎館蔵）

※図の左下から右上に向けて描かれた竹の中ほどで羽ばたく雀と、それに近づくもう一羽の雀。北斎は雀の頭と喉を朱色で描く。図の下には、八十翁雲峰の賛「緑竹娟々雨後新 秋風細々掃輕塵」（読み下しは筆者）がある。



また、弘化4年（1847）に田町一丁目の八右衛門（北斎）差出の文子（不明）宛の手紙が貼り付けられている。弘化4年には浅草田町に住んでいたと思われるが、なぜこの手紙が貼り付けられているのか不明。

竹に雀図（部分：北斎館Tシャツ図案による参考図）

●肉筆画「端午の節句図」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆。90.4×33.2 福田日本美術研究所蔵）

※龍が飾られた前立と、赤い鍔の兜が、立て飾り木に架けられ、その下の漏斗状の菖蒲包みに菖蒲が入れられている。

端午の節句図（福田日本美術研究所蔵）



●「唐獅子図」（絹本着色・縮緬袷沙。画狂老人卅筆齡八十五歳。印葛しか。71.5×66.5 ボストン美術館・ビゲローコレクション）

※縮緬袷沙の中の円枠に頭を下にした唐獅子を描く。円枠の周囲は牡丹の花が描き込まれていて、応為が描いたともいわれる。



唐獅子図（ボストン美術館）

●肉筆画「旅僧小憩図」（紙本着色一幅。八十五老卅筆。印富士の形。個人蔵）

※旅装の僧侶が頼杖をついて、笠を手にして座り、物思いにふけて休んでいる。後ろに杖が置かれている。



●肉筆画「芋とききょう」（紙本着色額一面。画狂老人卅筆 齡八十五歳。印葛しか。17.0×22.4 砂子の里資料館蔵）

●「逆筆注布袋図」（紙本着色。画狂老人卅齡八十五歳。印葛しか。個人蔵）

※布袋の右手でさし上げた壺から立ち上がる煙の先に大きく「寿」の文字が浮かぶ。脇に「延命宝貴」の書き入れがある。

注) 逆筆：筆の穂先から書き軸が後から付いていく描き方だが詳細は不明。一種の曲画。
文化7年～14年にも同様の「逆筆布袋図」(島根県立美術館蔵)がある。【文化年間】を参照。

●摺物「鏡餅と猩猩」(八十五老卍筆。印之印)

弘化2(1845) 乙巳 86歳 八右衛門、百姓八右衛門、北斎為一卍老人八右衛門、
葛飾为一卍老人、前北斎卍筆齡八十六歳、前北斎卍老人繡像、八十六叟卍、於深谷之 駅
画狂老人卍筆齡八十六歳、八十六歳、画狂老人北斎八十六歳、画狂老人卍筆八十六齡

印 富士の形、應：阿栄(48)

- ◇漂流民を乗せたアメリカ船が浦賀に入港、薪水を要求。
- ◇長崎にイギリス船入港。
- ◇1月24日、青山権田原(現東京都港区元赤坂2丁目辺)から出火し800人～900人の死者といわれる(青山大火)。
- ◇2月10日、芍薬亭長根没(98)
- ◇3月27日、伝馬町獄舎が火災。避難赦免の高野長英が戻らず脱走。
- ◇12代将軍家慶が向島百花園を訪れる。
- ◇藤田東湖が向島の水戸藩下屋敷に幽閉される。
- ◇『東辻君花の名寄』(夜鷹の出没場所・善悪・名前・年齢を記したもの。半紙二枚摺の細見番附)が出る。
- 曲亭馬琴『新局玉石童子訓』(読本。『近世説美少年録』の続編。馬琴の口述によるもの未完)

★この頃、番場町(「牛嶋神社社伝」によると『年譜』で紹介)と、本所荒井町(現東京都墨田区本所地区だが詳細は不明)に住むか(『葛飾北斎伝』による)。本所荒井町は、『年譜』では、本所区議会議員袴田喜四郎の裏長屋であったという児玉蘭陵「北斎筆の悪魔降服」大正8年『錦絵』23号所収の説を引いている。

※2月28日付、嵩山房宛て書簡(画料受取の挨拶)に「荒井町」とある。
「一金三分 右者、万物絵本大全注之中編、三丁之画料に、慥に受取仕候、為念此之如に御座候、以上。」

荒井町

八右衛門

二月廿八

嵩山房様

御店衆中様」(『葛飾北斎伝』p237～238)

注) 万物絵本大全：同本脚注には、「未詳。漆山天童稿本『絵本年表』の音訓目録に〈三ツ切本 二〉とのみ記すものが、これと関係あるか」とある。

同名の作品は、文政 12 年（1815）頃にかかれた下絵集『万物絵本大全』（未刊。真偽不明）がある。所在不明であったが、令和 2 年（2020）9 月に大英博物館で発見された。ただし、約 30 年前のデッサン集の画料を弘化 2 年に受け取るとは考えにくいので、別作品か。⇒文政 12 年条参照。

★この頃、牛嶋神社（当時は「牛御前」と称された。現東京都墨田区向島1-4-5）辺に住むか（本所番場町か〈「牛島神社社伝」によると『年譜』で紹介している〉。現東京都墨田区東駒形1丁目と本所1丁目辺）。

★佐藤正持（号：北溟）の本年刊行の『合璧邪正訣』には「（略）今年己ニ八十六歳 イマタ眼鏡ヲ用ヒズシテ能細画ヲナス、近頃牛嶋ニ居セントスルニ、画工ニテハ住居ナリ難カリケレハ、百姓八右衛門ト成テ住居セシト、清武知ニ丹靈ノ送ル書札ニ載タリ、今東師（江戸の画工）、江府（江戸のこと）、大阪ノ浮世絵師、皆北斎カ誕ヲ嘗ム（略）」とあるという（『瀨木慎一の浮世絵談義』p121 及び『年譜』p138 による。ルビは筆者）。

【阿栄を伴い三度目の小布施行き】

★7 月、阿栄を伴い小布施へ行くか（久保田一洋『北斎娘応為栄女集』p34 藝華書院）。※久保田一洋によれば、この時に初めて応為を伴ったとしている（同上著 p34）。

※『高井鴻山小伝』（岩崎長思編 上高井郡教育会刊 昭和 8 年：1933）ではお栄の同道を弘化 2 年としている。

「弘化二年北斎再び訪ね来りし時、間もなく帰東を志す。鴻山其故を尋ねたるに『余は一女あり、之を東都に遺し置けり。余は彼女をして東都に独居せしむるに偲びず』と。鴻山因りて帰て其女を携へ来らむことを勧む。北斎諾して江戸に帰り、其娘を伴ひ来り高井家に寓せしむ。里人北斎の娘といへば奇麗なる若き娘ならんと噂し合へるに、連れ来るを見れば六十位の老婆にて風姿甚だあがらず。其案外なるに驚く。名はお栄。画道に志し父を助け名声あり。お栄に一女あり注。鴻山其の世話をなし大に困りたりといふ」（国立国会図書館デジタルコレクションより。ルビは筆者による）。

注）一女あり：誤り。但し、林美一『お栄と溪斎』（p63 有光書房 昭和 42 年）では、北斎のドラ孫を連れて行ったかもしれないとしている。しかし、この年孫は 35 歳位と思われ、お栄と同行するとは思われない。また、孫は天保 8 年（1837）頃に没したとも推定されている。

※林美一『お栄と溪斎英泉』（有光書房 昭和 42 年：1967）でも、同記事を引用して弘化 2 年の 2 度目の小布施行きとしている（P63）。

『小布施行きの謎』

※北斎とお栄の小布施行きについては、いくつかの記事があり、小布施での滞在期間を勘案しながら整理・検討の必要がある。本稿では、以下の小布施関連の記述をしているが、十分な検討をしなければならない。

(1)天保 13 年（1842）9 月、北斎小布施行き。高井鴻山と屋台天井絵の打ち合わせ。天保 14 年 2 月末まで滞在。

(2)天保15年(1844年12月2日弘化に改元)3月、お栄を伴い小布施行き。東町と上町の屋台天井絵を描く。11月10日まで滞在。

(3)弘化2年(1845)7月、お栄を伴い小布施行き上町祭屋台天井絵を描く。弘化4年2月頃まで滞在。

(4)嘉永元年(1848)4月、小布施行き。5月、上町祭屋台天井絵完成。岩松院天井画に着手。同年11月まで滞在。

但し、小布施行きには以下の見方もある。

☆天保2年～3年(1831～32)：飯島虚心『葛飾北斎伝』

☆天保2年～3年(1831～32)：織田一磨『北斎』(p135)帰路「八の字のふんばり強し夏の富士」を詠む。

☆天保2年～3年(1831～32)：野口米次郎『葛飾北斎』(P36～37)。

☆天保12年(1841)：菊池貞夫『日本の美術』第74号「北斎」年譜による。

☆嘉永元年(1848)5月、お栄を伴い小布施行き。岩松院の天井絵を描く。

☆嘉永元年(1848)10月、小布施行き。

★本所石原町に住むか。本所石原片町(内藤山城守下屋敷辺。80歳の時に住む)より東の石原町(『和楽』2017年9月。10・11月号 p71掲載の「嘉永 新鐫 本所絵図」による)。

●読本『絵本漢楚軍談』(1月。角書「訂正補刻」。二輯。二十冊。佐々木貞高(為永春水注)著。北斎为一記老人八右衛門画。丁子屋平兵衛版。早稲田大学図書館蔵)初輯は天保14年(1843)10月に刊行。

注)為永春水：既に天保14年(1843)2月に没しているので二輯で終わる。

【牛嶋神社の額絵復活】

●「須佐之男命厄神退治之図」(板額一面。前北斎卅筆齡八十六歳。印富士の形。126.0×276.0 すみだ北斎美術館蔵・復原画)

※須佐之男命が厄神たちから病や凶事を起こさぬように誓約書を取っている図。

※牛嶋神社社伝によると、北斎は牛御前社(現牛嶋神社)に出向いて額絵を描くことを申し出たとされる(荒井勉『北斎の隠し絵』p212)。

幕府による各寺の開帳記録『開帳差免帳』(国立国会図書館デジタルコレクション・弘化2年「本所牛御前別当 天台宗最勝寺」条)によれば、同社の開帳は2月9日から60日間であった。北斎はこの画を描いた後、すぐに信州に旅立ったと思われる。

※牛嶋神社(東京都墨田区向島1-4-5)に奉納されたが関東大震災(1923)で焼失。明治43年、雑誌『国華』に掲載された白黒写真を分析し、墨田区と凸版印刷が共同で平成28年(2016)10月に復元し、平成28年11月22日に開館した「すみだ北斎美術館」で公開された。

※この図について、鈴木則子が『須佐之男命厄神退治之図』（葛飾北斎画）に描かれた病」（『浮世絵芸術』2018 N0175）で、「衆人に見せるための絵馬であるからには、当時の参詣者には様々な疫鬼達がどのような病気を象徴しているのか、見ればすぐに理解しえたはずだ。つまり、絵馬に描かれている病は弘化二年当時の江戸の庶民にとって身近な病であったり、恐れていた病であっただろう」（p6）という前提で、描かれている疫神が象徴する疫病を分析している。例えば、左の腰に鈴をつけた赤い衣装は「江戸市民にとってはおじみの疱瘡神のいでたち」（p8）で、疱瘡（天然痘）を象徴しているなど、興味深い考察がある。詳しくは同論文を参照されたい。

※永田生慈の説（「北斎の小布施滞在と牛島神社の額」『北斎研究 34号』平成15年11月29日 墨田区文化振興財団）を補足して、島田賢太郎が、京都祇園神社（八坂神社）の祭神で牛嶋神社の祭神でもある牛頭天王（災厄除去の神）が須佐之男之命に姿を変えて厄病払いをしているという説明している（「台東区北斎研究会ニュース」2016年11月27日）。



須佐之男命厄神退治之図（牛嶋神社旧蔵：すみだ北斎美術館（復元図）



窓鷺の写（大英博物館蔵）



※窓鴛（北齋の弟子である北齋の弟子）による同額絵の写し（板絵）が大英博物館にある。

【牛嶋神社にあったもう一つの額絵】

●「鬼が島図」

※『新撰 東京名所図会』第十二編「牛嶋神社の現況」（臨時増刊「風俗画報」第百六十一号「隅田堤 上」所収 P26。明治 31 年 3 月 25 日刊）には次のような記事がある。

「(略)最も瞩目すべきは、前北齋か八十六歳の時に画ける鬼か島の図。狂齋雪堤注1の合作に成れる渡辺綱鬼女の図注2の両巨額とす」

注 1) 狂齋雪堤：狂齋は川鍋暁齋。天保 2 年（1831）～明治 22 年（1889）。雪堤は長谷川雪堤（生年不詳～明治 15 年（1882）。両者とも江戸時代末期の絵師。

注 2) 渡辺綱鬼女の図：源頼光の家臣・渡辺綱は、女に化けた茨木童子の退治に出かけ、鬼女の腕を切り落とした話に由来した絵。

※いくつかの額のある中で最も注目すべきものは前北齋の「鬼が島」の図と、川鍋暁齋と長谷川雪堤の合作の「渡辺綱鬼女の図」の二図であるというのである。

【鬼が島図のスケッチ】

「鬼が島図」は『いろは別江戸と東京 風俗野史』巻の五（伊藤晴雨著 昭和 6 年 11 月・城北書院刊）にスケッチ風に描き写したものが掲載されている。甲冑に身を固めた源頼朝が弓を立て、矢を入れた 藁 を背負い、岩に腰を下ろして鬼たちを睨みつけている。その前で鬼たちは土下座し平服して疫病神の手形を紙に捺し、頼朝に渡したという伝説を描く。頼朝の両脇には御供の鬼たちが控えている。書込みに「牛嶋神社御宝前」「牛の御前奉納ノ額大略」とある。また、このスケッチの左には、鬼が手形を捺す図も描かれ、そこには「向嶋須崎町牛嶋神社の北齋の額ハ江戸ノ三額に称セラル」とある。「三額」が何かは不明。

「須佐之男命厄神退治之図」の厄神から誓約書などを取るモチーフは同じだが、絵柄は全く違っている。

すみだ北斎美術館の常設展示場入口には、「須佐之男命厄神退治之図」の復元額が掲げられ、その下のガラスケースに『いろは別江戸と東京 風俗野史』巻の五に載っているスケッチの頁を見開きで展示していて、このスケッチは、著者の伊藤晴雨が記憶を頼りに描いたものとしている。

「須佐之男命厄神退治之図」の下絵だったのか。あるいは関東大震災前にはそれとは別の額絵があったのかは不明。



『新撰 東京名所図会』第十二編「牛嶋神社の現況」（臨時増刊「風俗画報」第百六十一号「隅田堤 上」鬼ヶ島図（『いろは別江戸と東京 風俗野史』巻の五より）

●上町祭屋台天井絵「怒涛図（女浪図）縁絵 下絵」（紙本墨絵淡彩。11.3～11.9×112.6～116.5）

●上町祭屋台天井絵「怒涛図〈男浪図〉（女浪図）縁絵」（桐板着色。11.0～11.8×118.0～118.5）

※女浪図の左下の縁絵には翼をつけた天使が描かれる。浪の周りの花鳥部分は鴻山の彩色で翌年5月に完成したか。

●上町祭屋台天井絵「上町屋台天井絵縁絵下絵」（紙本四面着色。無款。112.6～116.5×11.3～11.8 個人蔵）

※「女浪図」の裏面の墨書き。

「濤二枚 弘化二年歳在乙巳七月 東都所随老人卅写於信州高井郡小布施邑高井氏別墅
縁花鳥所随老人図之着色 則門人高井健也 弘化二乙巳七月起筆至明年丙斗年閏五月畢業」
（『肉筆浮世絵大観』5 p155）（緑の花鳥図は北斎の下描きに従って門人高井健、すな
わち高井鴻山が着色したという内容）。

●上町祭屋台天井絵「怒涛図（男浪図と女浪図）」（桐板着色。無款。各 94.5×96.5 北斎館蔵）



【女浪図】



女浪図の枠図左下の天使



【男浪図】

★斎藤月岑日記、弘化2年6月8日条「北斎 春より信州へ参候よし」とある。

★江戸に帰って後、天秤棒の杖をつくようになったと伝えられる。

●読本『釈迦御一代記図絵』（正月。『釈迦御一代記図絵』（『釈迦一代記図絵』『釈迦御一代記図絵』『釈迦如来御一代記図絵』『釈尊御一代記図絵』『世尊一代記図絵』とも。4月。大本六冊。一編表紙見返しに「山田意斎編撰 前北斎卅老人繡像」とある。天保6年2月起画稿。六編裏表紙裏に「弘化二年乙巳年仲夏吉辰発兌」とある。一編表紙見返しに稲田玉山堂・岡田群玉堂版。六編奥付には越後屋治兵衛（京都）、山城屋佐兵衛（江戸）、河内屋茂兵衛（大阪）とある。見開き縦組みの図。18.0×25.5 島根県立美術館：永田コレクション/弘前市立弘前図書館/太田記念美術館/島根県立美術館：永田コレクション/東洋文庫/ラ

イデ大学図書館蔵)

※京都・江戸・大坂で刊行された 55 話の読本仕立ての**僞本**。

『釈迦御一代記図絵』一編 (ARC 古典籍データベース)

右「大恩教主釈迦牟尼如来法像」

左「悉陀大師之后妃耶陀羅女像」



●扇面画「**朝顔**」(紙本着色扇面。八十六叟**卍**筆。**印**應。12.8×38.2)



※扇面右半分に、朝顔の蔓と花を描く。北斎の落款で、娘**応**為の**印**影「**應**」が押されている例は、弘化 4 年 (1847) 肉筆扇面画「**亀**」がある。北斎が描き、何かの事情で「**應**」を捺したか、**応**為が描き、北斎の落款を書いたか不明。図は、扇を開いた右半分に青と赤の朝顔と、その蔓が扇の中央上部へと伸びて、別の朝顔の花に続いている。扇の骨跡があるので、実際に使われていたか。

落款と**印**影「**應**」(久保田一洋『北斎娘・**応**為栄女集』p 86 より転載)

●肉筆画「**寿**字に**唐子**」(唐子ハ八十六歳**卍**筆。**印**富士の形。ボストン美術館蔵)

※「**寿**」字の下に「御事婦帰 無量目出度存候 九十八翁 花井白叟書」とある。花井白叟の書に、「注文者の依頼か、あるいは北斎自らの意思によってかは明らかでないが、急遽二人の唐子が描き加えられたと思われる。」と『ボストン美術館浮世絵名品展 北斎』図録で解説される。

花井白叟は弘化元年 (1844) に『武江年表』等に長者の一人として北斎と共に記された。

寿字に唐子図 (ボストン美術館)



●肉筆画「**松魚**」(於深谷之駅 画狂老人**卍**筆齡八十六歳 **印**富士の形)。昭和十年三月、東京美術倶楽部「三楽荘某家 所蔵品入札」の出品目録に収められたが、戦災時に焼失したか、現在所在不明。

初鯉の図とすると六月頃、小布施に向かう途中、中山道の深谷での作か (久保田一洋編著『北斎娘 **応**為栄女集』p 40)。

●肉筆画「**双龍**」(絹本双幅。フリーア美術館蔵)

●肉筆画「**えび さば あわび**」(紙本着色一幅。画狂老人**卍**筆八十六歳 **印**富士の形。31.4×53.1 北斎館蔵)

えび さば あわび (北斎館)



※鯖の上に乗るように大きな鮑がある。鯖の頭の先に、長いひげをくの字に投げ出している海老。

●屏風画「雨霧山水図」（紙本双幅淡彩。画狂老人卍筆 八十六歳 印不明）

☆〈霧図〉（129.8×59.8）

※近景に二人の人物に樹木が描かれ、図の中景には霧に霞む風景。川を行き交う舟と対岸の岩上の家屋。

☆〈雨図〉（129.8×59.9）

※図の上から下に降りしきる雨が刷毛で一気に描かれる。

弘化3(1846) 丙午 87歳 三浦屋八右衛門、画狂老人、北斎為一老人八右衛門、 八十七老卍、画狂老人卍筆齡八十七歳、藤原祐則、不随老人卍筆齡八十七歳、八十七老人

印 葛しか、一颯、富士の形：阿栄(49)

◇1月15日、江戸小石川より出火。江戸大火。

◇4月、イギリス人ベッテルハイムが那覇に上陸、布教活動を行う。

◇5月27日、アメリカ東インド艦隊司令長官ビッドルが浦賀に入港、通商を求めるも拒絶される。

◇6月・7月、利根川堤防決壊。本所・深川地区浸水被害。

◇7月20日、アメリカの東インド艦隊ビッドル長官が浦賀に入港し通商を要求。

◇長崎オランダ商館江戸参府。

◇この年から検閲印は名主二人の双印となる。

★「本郷丸山鑑坂下」（現東京都文京区本郷4-20 と 30 の間の坂）に住んだか、あるいは住もうとしたか（『葛飾北斎伝』 p 30）。

※1月9日付本間北曜宛手紙では、義理の娘（次男崎十郎の妻）が思い病を患っていることや、本郷丸山町鑑坂下の武家屋敷に住む次男加瀬崎十郎の所へ引っ越そうかと考えていると言っている（2017『北斎一富士を越えて』図録所収「逆順で語る晩年の北斎」ティモシー・クラーク p 17）。

※書簡は次の通り。

「舌代 満寿々々御安康之趣奉喜慶候 / 当地無事ニ罷有候乍憚御安 / 慮可被下候拙老儀も数々取込出来仕 / 其上嫁（崎十郎の嫁）大病にて兎角者多用ニて / 筋ニ寄り候者倅方へ同居仕候哉ニ御座候 / 何れ三月此ニ者委しく細書ニ可申上候 / 先者御状御受而已如此御座候 恐々 / 正月九日出 / 三浦屋八右衛門 / 九拜 / 北曜君 / 「玉」机下」（ルビは筆者による）

★春頃、西両国（隅田川西岸）に住むか。8月13日の笠亭仙果（高橋広道）の書簡（後述）による。「（北斎は）春ごろも、雨ふりにあした（足駄）をはいて、日本橋までも西両国の辺からゆきゝして、へともをもはぬたつしや」とある。

【大坂の偽北斎・百歳の余までハ、死亡之沙汰ハ、まづ休みに仕候】

★弘化3（1846）年4月24日、日本橋通二丁目、書肆嵩山房（小林新兵衛）宛の手紙（御祝儀本受取挨拶）の末文に、「北斎」の落款号を30年前（文化13年）に門人新吉原の引手茶屋主人、亀屋喜三郎に譲った旨の記事あり。ここで大坂の偽北斎のことを大坂の書肆に訴えている。

「此節門人戴斗の画を北斎と唱へ候由、是ハ注新吉原亀屋喜三郎と申者へ、三十年以前ゆづり遣し候。満に戴斗の画を、北斎と申ふらし候儀、甚不埒之儀、能能御吟味被下度、殊に拙老死候など申儀も節々承り候。老人儀ハ、百歳の余までハ、死亡之沙汰ハ、まづ休みに仕候。其段も御承知被遊可被下候以上。

画狂老人

出三拜

大坂

書物屋衆中様」（『葛飾北斎伝』P104）

注）是ハ：「北斎」号を指す。北斎号は32年前の文化11年（1814）12月に譲っている。

亀屋喜三郎は二代目北斎となる。

【犬北斎はあっても、北斎名には二代目なし】

★「（略）二代目蓋し北斎には、二代目なし。かの戴斗の名を譲られし亀屋喜三郎注、後に大坂に至り、戴斗なり、北斎なりと唱へ、絵本類など画き、又絹紙などへも多く画きたり。当時大坂にては、真の北斎なりとし、大に行はれしが、後に事頭はれて、二代目北斎なりと称へたるなるべし。余近日此の大坂北斎の一面を見たりしが、画および印面は、真の北斎の如くなれども、落款の文字異なれり。幅面の時代は、五十年前後のものなれば、これかならずかの喜三郎が画なるべし。当時の人、既に真の北斎にあらざるを知りて、大坂北斎と称へ、又師恩を顧みずして師名を詐るは、人にして人にあらずとて、これを卑み、犬北斎と呼びたり」（『葛飾北斎伝』p107～108 ルビは筆者による）

注）飯島虚心の誤り。戴斗号を譲られたのは亀屋喜三郎（深川海辺大工町の橋本喜三郎：『浮世絵類考』p203）ではなく、門人北泉である。彼が大坂に行き、二代目戴斗ではなく北斎と名乗ったことに北斎は怒っているのである。北泉は、戴斗以外に、洞庭舎、昇山、玄龍斎、米華斎、米華道人、などとも号している（檜崎宗重『北斎論』p373）。二代目北斎は門人亀屋喜三郎と考えられる。

※『増補浮世絵類考』には「戴斗（文化文政の人）俗称伴右衛門 遠藤氏（小笠原家浪人なり）始は北泉、（居住麴町平川町天神前にありしが後は不知）北斎の門人なり、名を譲受けて二代目戴斗と云、画風師の筆法を能く学び得たり。真偽やゝもすれば不知、「新」注世に犬北斎といふ（略）」（『浮世絵類考』岩波文庫版p158）

注) 「新」は、『新增補浮世絵類考』(竜田舎秋錦編、慶応4年:1868)の記事を指す。その記事を以下に記す。

「始北泉号。俗称遠藤伴右衛門。麴町平川天神前に住す。小笠原家の浪人なり。後師の名を譲り受て二代戴斗となり、画風師の筆法を能く学び得たり。真偽やゝもすれば見まかふ計なり。世に犬北斎といふ。浪花の刻本多くあり」(句読点・ルビは筆者による。「国立国会図書館デジタルコレクション」より)

【紺緞の木綿を着、六尺の天秤棒の杖と草鞋履き】

★柳亭梅彦談「梅彦氏曰く、北斎翁が平常の扮装は、甚奇なり。衣服は、菅絹類を用ひしことなく、又流行の服を着せしことなし。あらかし手織の紺緞などの木綿を着し、上には、柿色の袖なし半天を着し、六尺有余の天拵(「秤」の誤り)棒を、杖にかへ、草鞋或は麻裏草履をはきて、あるきたり。其の杖、恰かの阿染久松の演劇中にある、質店の久作翁注の姿のごとし」(『葛飾北斎伝』所収、p206)。杖を突いた様子は天保13年(1842)自画像を参照。

注) 久作翁：歌舞伎「お染久松色説販」などに登場する久松を引取る人物。

【画風公聴に達す】

★清水侯が浅草観音に詣でるついで、北斎を伝法院に招いて揮毫させたという。「生涯の面目は、画風公聴に達し注、御成先に於て席上画覧度々あり、希代の妙手と云ふべし。」(弘化3年、斎藤月岑書『増補浮世絵類考』、明治18年版『東洋絵画叢誌』13巻所収。岩波文庫『浮世絵類考』p145に同様記事あり)。

注) 公聴に達し：このエピソードがいつのことかは不明。あるいは、天保3年(1832)に記載した「立田川」のエピソードなども含むか。

【めがねをかけず、背も曲がらず、健脚の達者】

★弘化3年8月13日付、笠亭仙果(1804~68。二世柳亭種彦。戯作者。狂歌師)が医師平出順益への書簡で北斎の達者ぶりを記している。

「北斎も九十に近し、八十七八か。今にめがねをかけず曲がき、せもかがまず、はんした(版下)が出来申候。春ごろも、雨ふりにあしだ(足駄)をはいて、日本橋までも西両国辺からゆきゝして、へともおもはぬたつしや」(土山節子「北斎晩年のおもかげ」〈『日本歴史』150号)の記事を、永田生慈が「北斎の生涯」〈『浮世絵八華5北斎』所収p138)で紹介している。ルビ・書き込みは筆者による)。

【雨でも草鞋、法華経を唱え歩き、雑談を厭う】

★天保末期~弘化期頃の北斎の様子。

「露木氏曰く、北斎翁は、外に出づるに、下駄を用ひしことなく、又雪駄を用ひしことなし。雨降り道路あしき時は、草鞋を穿ち(履き)、雨晴れ泥土かはけば、麻裏草履を用ひたり。露木氏曰く、翁は、常に、法華経普賢品注¹の呪文、阿檀地注²を唱ふ。途中にて、止むことなし。翁曰く、此の呪文を唱へ、歩行する時は、知る人に遇ふも、眼に入ら

ず。甚奇妙なりと。これ蓋し呪文を唱ふに専にして、眼に入らざるなり。翁は、常に途中人に遇ひ、雑談することを厭ひたり」（『葛飾北斎伝』 p 206～207。ルビは筆者による）

注1) 法華経普賢品：法華経二十八品の一。普賢菩薩勸発品のこと。

注2) 阿檀地：「阿檀地、檀陀婆帝、檀陀婆帝」の呪文（『葛飾北斎伝』 p 207 脚注）。

【病気再発する】

★12月6日、神山熊三郎宛書簡で体調不良で歩くことが困難と知らせる。

「(略) 此節病気再発歩行仕兼 (略)」(『年譜』 p 108)。

【最後の読本挿絵】

●読本『源氏一統誌』(3月。五冊。松亭中村源八郎定保輯、北斎为一老人八右衛門画。松亭金水作。菊屋幸三郎(金幸堂)版 島根県立美術館：永田コレクション/国立公文書館蔵) 『源氏一統志』(国立公文書館)

※北斎は初巻から4巻までの5冊に挿絵を描く。読本挿絵の最後の本とされる。

●肉筆画「羅漢図」(紙本着色一幅。八十七老叢筆。印葛しか。127.4×52.0 太田記念美術館蔵)



※文化7年～14年の「羅漢図」同様、羅漢が鉢をかざし、立ち上る煙の



中に龍を示す朱色の稻妻が描かれる。北斎は、鉢を掲げて毒龍を制する力を持つ伐那婆斯尊者(十六羅漢の一人)を描いたと思われる。また、『北斎漫画』二編に描かれた「半託(託)迦尊者」(十六羅漢の一人)と酷似しているので半託迦尊者ではないかとの説もある(『原色浮世絵大事典』8巻)。

羅漢図(部分：太田記念美術館)

●肉筆画「双鶴図」(紙本着色一幅。八十二歳の大岡雲峰(1765～1848)との合筆。画狂老人叢筆齡八十七歳。印葛しか。88.3×42.0 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※雌雄二羽の丹頂鶴を合筆した図。北斎は右側の鶴を描く。二羽の鶴の羽の白さが胡粉により鮮やかに描かれる。雲峰の落款は「八十二翁雲峰」とあり八十七歳の北斎にもあやかり、長寿を願った人から依頼された図といわれる。

双鶴図(島根県立美術館：2005『北斎展図録』より転載)



●肉筆画「富嶽と徐福」(絹本着色一幅。弘化三年ノ季冬 藤原祐則筆。印一顆。86.5×26.9 北斎館蔵)

※富士に向かって両手を広げ、赤い帽子を被って向こう向きの徐福。



富嶽と徐福（北齋館）

●肉筆画「朱描鍾馗図」（絹本朱描き着色一幅。八十七老卍筆。印富士の形。58.4×30.5 すみだ北齋美術館/メトロポリタン美術館蔵）

※朱画きの鍾馗は男児の疱瘡除けの力があると信じられている。腕を組み全身朱書きの鍾馗が正面を見据える図。朱描鍾馗図（すみだ北齋美術館）

●肉筆画「朱描鍾馗図」（絹本着色一幅。不随老人卍筆 齢八十七歳。印葛しか。108.0×38.5 すみだ北齋美術館蔵）

※弘化元年の「朱描鍾馗図」同様、朱書きの鍾馗図。右手に刀剣を下げ持ち、身体をやや左にねじり、正面を見据えた図。朱描鍾馗図（すみだ北齋美術館）



●「かれい・めばる・さより図」（紙本着色。掛幅。八十七老人筆。印富士の形。31.4×53.1 北齋館蔵）



※北齋周辺の画家の作ともいわれる。さよりの鋭い頭が左下に向き、かれいとめばるの頭はさよりと交差するように左上を向いている。

かれい・めばる・さより図（北齋館）

●肉筆画「波濤図」（絹本着色一幅。八十七老卍筆。印葛しか。117.1×44.6 個人蔵）

※波が灯台のある岸壁に沿うように打寄せ、手前の台地と対角線の構図をとる。遥か水平線に半島が伸びている。翌年の弘化4年（1847）にも同画題の絵（フリーア美術館蔵）があり左右反転して描いている。



●肉筆画「月下芋洗図」（絹本着色一幅。八十七老卍筆。印葛しか。個人蔵）

※満月の下、桶の淵に乗り、交差した棒で桶の中の芋を洗う農夫。この画趣は『森冶版中判藍摺シリーズ』（天保2年頃）の〈老人芋洗〉でも描いている。

月下芋洗図（ジャパンサーチより：モノクロ）



●肉筆画「豫讓」（紙本着色一幅。八十七老卍筆。印葛しか。光ミュージアム蔵）

※豫讓は、中国春秋時代、晋の生まれ。紀元前 453 年、趙無恤との戦いで主君の智瑤の死の仇を討つべく計ったが、囚われの身となり、最期の願いとして趙無恤の衣服を斬りつけた後、自刃した人物（『史記』刺客伝）。



図は、主君の仇を討ち、図の右から飛んでくる矢に自ら胸を開く豫讓を描く。文政 10 年～11 年にも豫讓を描いている。



豫讓（光ミュージアム）

●肉筆画「登龍図」（絹本着色一幅。画狂老人卅筆 齢八十七歳。印富士の形。112.6×33.5 個人蔵）

縦長図の上に首を向け、図下に「の」字の様に尾を丸めて登る龍を墨絵風に描く。龍の形に添うように黒雲が描かれる。

登龍図（Web 千葉日報より）

弘化4(1847) 丁未 88 歳 八右衛門、み浦や八右衛門、細画葛飾卅老人、八十八老卅、画狂老人卅試筆齢八十八歳、画狂老人卅齢八十八歳、前北斎改画狂老人卅、前北斎卅齢

八十八歳、八十八老人卅、齢八十八老卅、俗姓中島鐵蔵藤原為一 印葛しか、百、

北斎宗理：阿栄(50)

◇疱瘡が流行する。

◇徳川慶喜、一橋家を継ぐ。

◇8月1日、小林清親生（～1915）。

○阿栄「絵入日用女重宝句」（高井蘭山作。挿絵。木版画 2 点のみの一つ）。江戸で名声を得る（Richard Lane「Patricia Flster, Japanese Women Artist」より）。高井蘭山の序文は文政 12 年（1829）だが刊行はこの年。

★1 月頃、浅草田町一丁目、本所石原などに住むか（飯島虚心『葛飾北斎伝』）。

※2 月 1 日、神山熊三郎宛書簡に「田町壹丁目 み浦や八右衛門拜」とあるとという（『年譜』資料 26 による）。

★この頃、浅草馬道にも住むか。

【松代藩士宮本慎助に「日新除魔」の絵を渡す】

★『葛飾北斎 日新除魔帖』（村山句吾編 明治 40 年 1 月。国立国会図書館デジタルコレクション）によれば、北斎が小布施滞在中に宮本慎助が絵を求めたところ、江戸に帰ったら絵を送ると約束したにもかかわらず、数年しても送って来ない。そこで、弘化 4 年に江戸に行

った折、浅草田町の北斎宅を探し当て、約束の絵を求めると、北斎は「漫画」の作業に忙しく、未だ絵をなさずと言う。側にいたお栄が気の毒に思い、日頃溜めおいた日新除魔の画を宮本慎助に与えたとしている（p4）。

天保13年～14年に描いたもの219図を、浅草の北斎宅に訪れた小布施の松代藩御典医宮本慎助に与えた。あるいは応為が与えたか。宮本慎助は後にこれらを仮とじにし、息子の宮本仲氏が画帖仕立てにしたことが「先考遺墨」（宮本仲氏による宮本慎助の記録）によって知られる。

★北斎は松代藩士・宮本慎助に渡した「日新除魔図」に依頼されて序文と落款を記した。

自序に「日新除魔と号して朝なく画き捨たるを、高君子の応需て、末世の一笑となりしは、今更汗顔をぬぐふのみ。三浦屋八右衛門 印 葛しか 国の屋注高君」とある（同書p7）。

注) 国の屋：宮本慎助の俳号。

【この年応為は50余歳か】

★「先考遺墨」は、「日新除魔帖」に貼り付けた添書で、「先考遺墨 仮綴除魔帖 表紙之一 以為参考矣 仲 印」という別紙が貼られ、この書面の左下に、小さく応為について次の様に書かれているという。「娘といふ者〔名栄〕今/五十余齡也此娘子と/二人暮しにて食料毎/日三度共買上ニ而暮すといふ」（久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』p137より）

お栄という娘と二人暮らしで食事は三度共店屋物で暮らすというのである。「五十余齡」とあるが、これは実際の年齢なのか、宮本仲の印象なのか同誌では不明としている。

【長寿の薬】

★『日新除魔帖』の識語の追記にある長寿の薬の調剤。これを手書きにして宮本慎助に与えた。

「龍眼肉（筆者注：ムクロジ科の常緑喬木の果実の種子）、皮を去り目方拾六匁 太白砂糖八匁 極上焼酎壺升 壺へ入レ能々封シ日数六十日置キテ朝夕猪口ニ而二ツ宛御用ヒ右者長寿の薬ニ而候 此故に八十八歳之只今迄無病ニ而罷有候 画狂老人日記 印 百 齡 八十八歳」（『葛飾北斎 日新除魔帖』国華社 明治40年10月。国立国会図書館デジタルコレクションより）

※名古屋の墨僊から教えられた自家薬。

「竜眼肉（ムクロジの実）、柚子の皮、茯苓（サルノコシカケ）、附子（トリカブト）、大黃（タデ）、蒼朮（オケラ菊の根）、太白（純良）の砂糖を混ぜ、薄めた焼酎で煮詰める」（仁田義男『画狂一代 小説葛飾北斎』p200）これを60日間置く。朝晩2回、猪口二杯ずつ飲む。

※当時広く読まれた『珠術萬宝全書』（5冊、明和元年刊）にほぼ同じ製法が記されているという。

「病を除き 寿を延る薬酒の方 一極上焼酎壺升 龍眼肉拾六匁 皮肉を去り 一大白砂糖

八匆 右、壺へ入れ固く封じ、三十日過て口をひらき用ゆべし。其味香バしく甘美にして能神を安じ、智をまし顔色を潤し、病を除き年を延るの名酒なり。常に用いて甚効あり」（『北斎美術館 3 美人画』 p 156 より 句読点・ルビは筆者による）

【この頃から「百」に執着】

★百歳への執着から「富嶽百景」「百人一首姥が絵解」などに「百」を用いた。他に「名橋百景」「異本百花撰」「百家奇術」「狂画草筆百眼」「百寿百福」「温泉百景」「月下百景」「一百自然絵」「百馬百牛」などの執筆に意欲を示したが上梓されず（安田剛蔵「葛飾北斎改名考—北斎は五度改名した」『在外秘宝 葛飾北斎』所収）。

【蚊帳を売って観劇する】

★飯島虚心『葛飾北斎伝』では、清水晴風の話として次のエピソードを伝える。

7月、尾上梅寿が、市村座「尾上梅寿（梅幸）一代噺」の『東海道五十三次』（四世鶴屋南北の、各宿場に怪談仕立ての話を持ち込んだ怪談劇）を観てほしいと伝えたところ、北斎は家の蚊帳を売り、金二朱注を持って観劇した。その後、二朱を梅幸に渡し本所石原の家に帰る。その後、夜毎蚊に刺されるが落着いて普通に仕事をした。後に友人が蚊帳を買って北斎に与えたという（p 91～92）。

注）金二朱：8分の1両。この頃1両＝6500文（天保14年に改定に高騰しているのので約162,500万円（1文＝25円で換算）。162,500万円÷8＝20,312円になる。

「嘗梅幸が一世一題の演劇、東海道五十三次注₁を演ぜし時、北斎の乗りて一覽せんを請ふ。頃しも夏時、北斎夜々其の用みる所の蚊帳を売り、金二朱を得て、これを懐にし、劇場に赴き、一覽の後、かの二朱を紙に包み、梅幸に与へ、本所石原の家に帰りたり。抑本所の地は、卑湿にして、蚊多し、夏夜蚊帳の設けなければ、寝ること能はず。北斎蚊帳を売って後、夜々蚊に刺されるれども、晏然筆を採りて業をなすこと、平常の如し。友人某これを聞き、蚊帳を購ひて、与へたり（清水氏注₂の話）」（『葛飾北斎伝』 p 89～92）

注1）弘化4年（1847）7月、市村座の「尾上梅寿一代噺」を指すか（『葛飾北斎伝』 p 91 脚注）。

注2）清水氏の話：清水晴風（1851～1913）か。歌川広重の絵を学び、風俗資料収集家（同書脚注 p 133）。

※清水清風は北斎没後の嘉永4年の生まれであるので、以上のエピソードの根拠については不明。

★この年に描いた肉筆画は少なくとも32点あるという（2017『北斎—富士を越えて』図録所収「逆順で語る晩年の北斎」ティモシー・クラーク p 17）。

【この年広重と接触したか】

★この年2月頃に小布施から江戸に戻る。

★11月21日、「^{さいとうげつしん}斎藤月岑の日記に“同二十一日 昼後^{いつ}為一君並^{なら}庄田氏^{にしようだ}、^{ひろしげ}広重へ使^{つかい}やる”」とあり、この為一は北斎のことか」と『年譜』では述べている。とすれば、北斎は広重と接触したか。

●絵本『^{れいどのひやくにんいっしゅ}烈女百人一首』（1月。一冊。
^{りよくていせんりゆう}緑亭川柳輯。細画^{うたがわとよこく}葛飾卍老人画。歌川豊国三世
(^{いちようさいとくに}一陽斎豊国)と共作。北斎は数葉を描くのみ。山口屋^{やまぐちやとうべ}藤兵衛(錦耕堂)版。大英博物館/
岐阜大学附属図書館/八戸市立図書館蔵)

『烈女百人一首』（大英博物館）



【鳳凰図天井絵下絵】

●下絵（この頃か）。

※弘化5年の^{がんしょういん}岩松院天井絵「^{はつほうにら}八方睨み鳳凰図」の下絵。16枚の紙を4枚×4枚の正方形に近い大きさに貼り合わせている。

この下絵について久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』では次のように、下絵から天井の本図制作の過程を説明しているのので、少々長いが引用する。

「(略) ^{かがさき}矢ヶ崎氏による解説は(筆者注: ^{やヶ崎賢次編}矢ヶ崎賢次編『^{しん濃偉人遺芳帖}信濃偉人遺芳帖』に収められた「大正六年十一月三日からの「^{しん濃偉人遺物展覧会}信濃偉人遺物展覧会」の解説)『^{こうざん}鴻山が^{がんしょういん}岩松院の天井を描く可く、鳳凰の下絵を書き、此れに『^{さいしきなにぶんねがひげたてまつりそうろう}彩色何分奉願上候』と書き添へて北斎の許に送った、北斎が夫れを見て極めて丁寧^{そのとろ}に彩色して送り返して来た注、其處で鴻山は北斎の彩色した鳳凰を手本として書いたのが、即ち現存して居る岩松院の天井画であるが、頗る美麗なものである』とある。当地の^{くれは とういちろう}呉羽宇一郎(1822~1901)『^{れいたいこう}歴代枢要書』には『一、^{がんしょういん}岩松院客殿大間(長三間よこ三間)天井ノ鳳凰ハ、第廿一世^{たかいきんくろう}珍和尚ノ代高井三九郎氏(=高井^{こうざん}鴻山)ノ画筆ナリ、弘化四年度ナリ、鴻山氏ト北斎卍老人兩人談合ノ上、図ヲ定メ、鴻山先生^{これ}之ヲ描クト云』とある(『^{こぶせまち}小布施町史』昭和五十年十一月 小布施町史刊行会)。(略)

これら旧来より天井画は高井鴻山とされてきたが、昭和四十九年(1974)十一月九日、現地で^{ゆらてつじ}由良哲次氏(1897~1979)により北斎直筆と断定され、以来当地では、北斎八十九歳(嘉永元年/1849)、死の前年の大作として示されている。

しかし、北斎は嘉永元年六月には浅草で門人^{ほんまほくよう}本間北曜と面談しており、(永田生慈「再発見 鬼図をめぐる北斎最晩年の諸問題」、『古美術』六八号 昭和五十八年十月 三彩新社)、その他の周辺事情を勘案しても、現在では北斎直筆とする見方は否定される」
注)久保田一洋氏は、鴻山の下絵に北斎が色の指示をしたのではなく、後に、『NHK 歴史ドキュメント 1—北斎画 200 人いた—』(昭和61年3月 日本放送協会出版部 飯沼正治の発言)を引き、北斎自身が下絵を鴻山に送ったことが明らかになったと述べている(『北斎娘 応為栄女集』p 86~87)。

【鳳凰状】

★弘化4年8月9日付、高井鴻山宛て書簡（高井鴻山の、岩松院天井図の下絵についての催促に対する返事。いわゆる「鳳凰状」と呼ばれるもの）。

「鳳凰之儀、大延引恐入候。彩色を委しくと被仰聞ト候ならば、だうさ注のアル紙江、此品御写被下候て、被還可被下、其句切句切ヲケ所宛、さゐしき仕り差上可候。（両眼の絵）そうならば、なぜ此下画念画ニ認メナイのだと、被仰候半ハ、此方ニも色々くり合せのわるい時と能イ時と、アア、儘ならぬ浮世（絵師の画）に而御座候 八月 ア、ソレ三浦や八右衛門 ハイ、ハイ 九日書 高井様 玉机下」（『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』 p20（由良哲次：岩松院。平成15年2月1日刊）及び『年譜』資料24による。但し『年譜』では天保14年8月9日の書簡としている。句読点・ルビは筆者による）

※岩松院の天井図について、輪郭図を送るから、これをドーサ引き紙に模写して再び江戸に送りなさい、この図は数個の区画に区切りしてあるので、こちらもたいへん忙しいので一度にとすることが難しいときは、その区画を一区画ずつ彩色してさしあげるといふのである。

注) だうさ（ドーサ）は、明礬水と薄い膠との液をいい、これを和紙に塗って、彩色の際に絵の具が滲まないようにする。

これにより、下絵は北斎が鴻山に送ったことが分かる

※久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』（p88）では、小布施の川上安人氏の資料として同様の「鳳凰状」を紹介し（『季刊浮世絵』7号：昭和38年12月 緑園書房掲載）、弘化4年（筆者注：10月）に天井図が完成していることから推察して、書簡はそれ以前の弘化3年8月6日のものとしている。

写し書きのため文言が若干異なっているが、参考のため重複をいとわず掲載する。

「鳳凰之儀大延引恐入候/彩色ヲ委しくと被仰聞ト候 ならば/だうさのアル紙江此品御写被下候て/被還可申候其句切りくヲケ所宛/さゐしき仕り差上可申候（絵：両目）そうならば/なぜ此下画念画に認メナイのだと被仰候半か/此方ニも色々くり合せのわるい時と能イ時と/ア、儘ならぬ浮世絵（絵師が踊る文字絵）に而御座候/八月 ア、ソレ九日書/高井様 玉机下/三浦や/（絵：うずくまる猫）八右衛門/ハイ、ハイ」

●岩松院天井絵「鳳凰図 下絵」（初めの下絵。紙本墨絵淡彩。38.9×44.4）

※岩松院天井絵「鳳凰図」の下絵の左上に墨書きで「尾ノ玉ノ箔 六百枚、外三千八百枚、ゞ四千四百枚代金拾壱両」と記す（『肉筆浮世絵大観5』 p157 講談社）。

鳳凰図初めの下絵（『2017 北斎—富士を越えて展図録』より転載）



※裏書に天保十五年と弘化二年の間に描かれたとある（「リアリスト北斎の妖怪人生」による。〈久保田一洋『北斎の妖怪画』所収〉国書刊行会）

- 岩松院天井図「岩松院鳳凰図天井彩色下絵」（この頃か。紙本着色一幅。無款。38.5×52.0 岩松院蔵）

「鳳凰図天井彩色下絵」鳳凰図下絵（『2017 北斎一富士を越えて展図録』より転載）



※上記下絵に彩色したもの。江戸にいた北斎が、下絵に彩色したと思われるが、応為の手も加わっているのではないかとの見方もある。彩色された下絵は鴻山の許に届けられた。

- 肉筆画「琵琶に白蛇図」（絹本着色一幅。弘化四丁未年四月廿日己巳ノ日筆ヲ下ス 八十八老卍 印百 フリーア美術館蔵）



※赤い紐の付いた琵琶袋に包まれた琵琶に、赤い目をした白蛇が絡み付いている図。は、弁財天の縁日（己巳の日）に描かれたもので、白蛇も琵琶も弁財天の持ち物。

琵琶に白蛇図（フリーア美術館）

- 肉筆画「向日葵図」（縦長紙本一幅額装。着色。八十八老卍筆。印葛しか。97.2×28.3 シンシナティ美術館蔵）
- ※竹竿に向日葵の蔓と葉が絡み付いて真直ぐ

伸び、その先に一輪の向日葵の花が咲いている図。図下には針のように伸びた別の葉が描き添えられている。

※エゴンシーレの枯れた「ひまわり」も参考に載せる。

左：北斎 向日葵図（シンシナティ美術館）

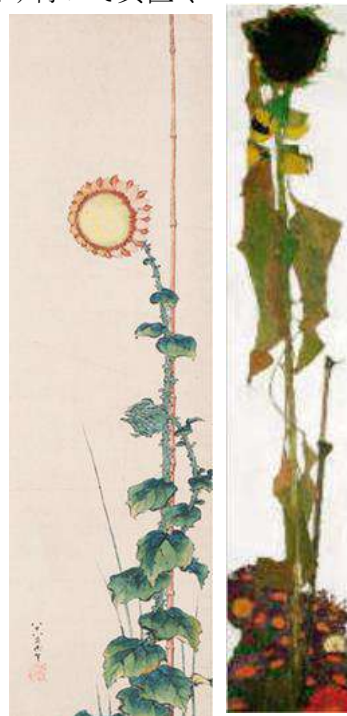
右：エゴンシーレ ひまわり（1909～10 149.5×30.0 ウィーン・ミュージアム）

- 掛幅肉筆画「白羊図」（「羊図」とも。紙本着色一幅。弘化四丁未年正月元旦画狂老人卍試筆齡八十八歳。印葛しか。高井鴻山記念館：市村次夫コレクション蔵）

※小布施で描いたか。白羊が雪の中、首を上げて雪を被った松の側に立っている図。

- 肉筆画「渡船山水図」（紙本着色一幅。八十八老卍筆。印百。127.0×53.5 北斎館蔵）

※近景に岩盤に繁茂する樹林の中に見える山村を描き、その背景に奇岩がそそり立つ図。岩山は点苔によって描かれる。水面には二艘の小舟が浮かんでいる。





渡船山水図（北斎館）

●肉筆画「**神功皇后**」(着色一幅。前北斎卅筆(齡八十八歳?)。印葛しか)

※山の傾斜に立ち、弓を左に抱え、白衣の右袖を振り上げて山下を眺めている皇后の図。

神功皇后 (pinterest.com より転載)

●肉筆画「**赤壁の曹操**」(絹本着色一幅。八十八老人卅筆。印百。115.4×34.4 島根県立美術館永田コレクション蔵)

※曹操は、中国三国時代の魏の始祖。建安13年年(208)11月15日、赤壁での戦いの前夜の勇姿で、弓を背にして、赤い柄の長槍を立て、舟の上で足を踏ん張って立つ曹操。背景に満月の下、三羽のカササギが飛んでいる。

※酒宴で酔った曹操が空を飛ぶカササギ(烏鵲)を詩中で詠んだところ、劉馥に不吉であると進言され、怒った曹操が劉馥を刺殺したという。曹操の背後を飛ぶカササギと、手に持つ槊(長い槍・ほこ)はこの話の暗示であるという解釈もある(『永田生慈北斎コレクション展図録』(p196))。

※本図は娘の応為の作かという説もある(キャサリン・ゴビエ『北斎と応為』彩流社 P283)。

赤壁の曹操図(島根県立美術館)

●肉筆画「**七面大明神応現**」(紙本着色一幅。八十八老人卅敬筆。印百。132.3×59.3 茨城・妙光寺蔵)画題の読み方は『2005 北斎展図録』



による。

※日蓮聖人が身延山頂の大石で説法中に熱心に聞いている美女がいた。周囲の人が不審に思ったので聖人が花瓶の水をかけると美女は龍となったが、直ぐに元の姿に戻り、七面山に住む七面天女(七面大明神)であると告げ、七面山に向け飛び去ったという故事に取材。

七面大明神応現図(画像:東京国立博物館)

●双幅肉筆画「**菊**」(絹本着色双幅。細密画。一對掛け軸。(右図落款)八十八老人卅筆印葛しか。(左図落款)齡八十八歳卅筆印葛しか。各95.5×31.4 北斎館蔵)

※ベンガラ(酸化鉄を主成分とした赤色顔料)の赤と青の菊が描かれる。対画の落款がそれぞれ違うことから、あるいは北斎没後に應為が高井鴻山から注文を受けた作品の作かとの考察もある(キャサリン・ゴビエ『北斎と応為』p289 彩流社。鈴木由紀子『浮世絵の女たち』p206 幻冬舎)。



菊図（北斎館）

左図中央の外側が黄金色、内側が深紅色の菊は「巴錦」という種類という。北斎も描いたこともあり巴錦の伝承の地を示す石碑が、小布施の玄照寺（長野県小布施町大字大島90）に2009年11月4日に建てられた。



●肉筆画「紅葉に雁図」（絹本着色一幅。八十八老卅筆。印百。85.1×35.3 個人蔵）

※地上に二枚の紅葉があり、その側で雁が散り落ちてくる一枚の紅葉を鳴きながら、首を伸ばして眺めている。

●肉筆画「流水に鴨図」（絹本着色一幅。齢八十八老卅筆。印百。111.2×40.3 大英博物館蔵）

※左上から右下に波が流れ、その中に二羽の鴨がいる。一羽は首を水面下に入れている。水面には紅葉や水草が描かれる。

流水に鴨図（大英博物館）



●肉筆画「源三位頼政図」（絹本着色一幅。八十八老人卅筆。印百。99.0×42.2 ファインパーク・コレクション蔵）

※頼政の鶴退治の図だが、頼政が天空に向けて弓を射る姿を描き、鶴は描かれない。背景に稲妻が線状に描かれる。



●肉筆画「雷神図」（紙本着色一幅。八十八老卅筆。印百 126.8×53.6 フリーア美術館蔵）

※手を振りあげ太鼓を打ち鳴らし、牙を剥いて、黒々とした天空で下界を睨む赤い雷神。赤い閃光が二本光り、一面に黒い飛沫が広がっている。

雷神図（フリーア美術館）

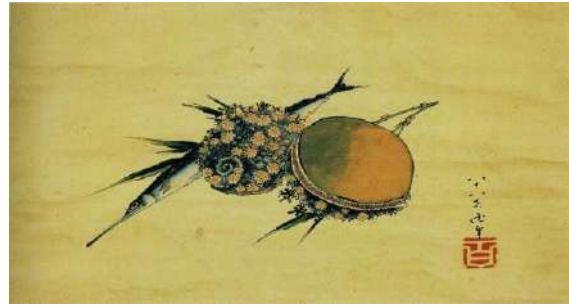
●肉筆画「隅田川」（八十八老卅筆。川田順三『江戸＝東京の下町から一生きられた記憶への旅』p 110 より）

●肉筆画「鮑に細魚図」（「鮑に細魚図」とも。紙本着色一幅。八十八老卅筆。印百。印：百。中外産業株式会社：原安二郎コレクション蔵）

※笹の葉に乗せられた鮑と、たふじつぼが付いた鮑。くちばしの細いさよりの静物画。

【中島鉄蔵藤原為一の落款】

●肉筆画「松に驚」（「驚図」「雪中驚図」とも。紙本着色一幅。俗姓中島鉄蔵藤原為一筆。印葛しか。印北斎宗理。143.8×70.5 北斎館蔵）



※『葛飾北斎伝』岩波文庫版の鈴木重三の

解説では、『葛飾北斎伝』の稿本（刊行本ではない）に次のように書かれていることを紹介している。

「近頃一閱せし翁か八十八歳の時に画きたる驚の図の一幅ハ紙本なれども甚だ珍しき落款ニ、前北斎画狂老人卅俗称中島鉄蔵藤原為一齡八十八歳とあり。上ニ田辺石庵氏の小文あり。（石庵ハ旧元老院議官たり。田辺太一氏の父なり）其の文の大意ハ徳川旗本の士某下総葛飾の堀江村ニ於きて大なる驚を射て幕府に上る。幕府其の功を賞して秩禄を加ふ。某大ニ喜ひ、北斎を招きて、其の驚の真形を写さしめ、田辺氏をして其の上ニ題せしめたることを記せるなり（略）」（p 384 句読点・ルビは筆者による）。

※「俗姓中島鉄蔵藤原為一筆」の署名は、天保15年（1844）「龍図」、弘化4年（1847）「郭子儀子孫繁栄図」（絹本着色一幅）、嘉永元年（1848）「獅子図」（紙本着色一幅）にも用いられている。

※松の枝に止まるのか飛び立つのか、獲物を狙うような目つきで下を見る驚。

●肉筆画「郭子儀子孫繁栄図」（「郭子儀繁栄図」とも。絹本着色一幅。前北斎改画狂老人卅。俗称中島鉄蔵藤原為一 齡八十八歳。印百 100.3×42.1 個人蔵）

※図中央に白い軍配を手にして椅子に座る郭子儀と、その横の夫人が多くの子どもに囲まれている。図右に柱が立てられ、下に北斎の落款と印影が書かれている。色彩や描き方から応為の手が入っているとする見方もある。北斎は享和年間にも、腕を組んで立つ郭子儀の後に番号札を持った多くの芥子坊主頭の子どもがいる図を描いている（画狂人北斎画。

印亀毛蛇足）

郭子儀は、唐の武将。後に汾陽王となった。子宝で家人三千人ともいわれ、皆栄達し、郭子儀も長寿であったため、めでたい画材として取り上げられる。

●肉筆画「南瓜花と虻」（紙本着色一幅。八十八老卅筆。92.5×28.2 すみだ北斎美術館蔵）

※画面下に南瓜の葉と弦が描かれ、中央に大きく花が開いている。その花をめがけて図の上から虻が飛んで来る。虻の羽は細かく羽ばたいているように暈して描かれる。文政9年～天保5年にも「南瓜に虻」を描いている。

●肉筆扇面画「吾木香に蝶」（紙本墨画淡彩扇面一面。十面添付された扇面画帖の一。八十八老人卅筆。印百。上弦46.3、下弦20.0×18.2 フリーア美術館蔵）

※扇の中央に吾木香と、その側で羽ばたく蝶を描く。

●肉筆扇面画「手妻図」(紙本墨画淡彩扇面一面。十面添付された扇面画帖の一。上弦46.3、下弦20.3×18.4 八十八老人卍筆。印百。フリーア美術館蔵)

※「手妻」は手品のこと。手を稲妻のように素早く動かすことから名づけられたという。図は向こうむきで扇子を操っている手妻師を描く。

●肉筆扇面画「亀図」(扇面着色。八十八老卍筆。印應。18.5×47.0 所在不明)

※北斎の落款に、応為の印「應」が押されている。何らかの事情で娘の応為の「應」印を使用したのか、あるいは応為が描いて北斎の落款を書いたか不明。

図は緑の水草と一匹の亀を描く、亀の足元の水草は黄みがかっている(久保田一洋『北斎娘 応為栄女』図版23より)。

●肉筆画「不二図」(「富嶽図」「富士に松図」とも。絹本着色一幅。八十八老人卍筆。印百。28.7×37.6 個人蔵)

※図中央に二本の松が伸び、その二本の幹の間に富士を描き、松の左右の線に裾野が流れるように描かれる。

不二図 (intojapanwaraku.comより転載)



●肉筆画「波濤図」(絹本着色一幅。もと掛軸。八十八老人卍筆。印葛しか。126.0×46.7 フリーア美術館蔵)



※岩頭下にはいわゆる北斎の波が青くうねっている。岩上には横に擦ったようにぼかした松が薄緑で描かれる。図上には薄く青空が描かれる、前年の「波濤図」と同画趣だが左右反対になっている。

波濤図 (フリーア美術館: 紬プロジェクト複製すみだ北斎美術館)

●肉筆画「宝珠図」(「宝珠に寿」とも。紙本着色墨画一幅。丁未八十八老卍 印百 31.6×44.5 個人蔵)

※一気に墨で丸く宝珠を描き、その筆先から「寿」の字が流れ出るように次第に小さくなって八文字記される。

●肉筆画「河骨に鶉図」(紙本着色一幅。八十八老卍筆。印百。126.1×47.8 大英博物館蔵)

※河骨はスイレン科の多年草で、小川や池沼に生え、黄色の花弁を付け、長楕円形の葉を持つ。その河骨の咲く水辺の杭に止まり、視線を右に向けている鶉を描く。

河骨に鶉図 (大英博物館)

鶉が左に向いて、近くの白鷺を見ている図が「葛飾北斎筆 鳥鷺図 二枚折 金屏風半双 竪四尺四寸七分 巾三尺九寸七分 不染居為一筆 印葛しか注1。として有名な贋作事件注2に出品された。



注1) 葛しか：この印影は、当時「天狗」と称された。

注2) 贋作事件：昭和9年5月12～14日の春峯庵事件といわれる贋作オーディション事件。北斎他浮世絵等67点が全て贋作であった。⇒天保14年「卍翁艸筆画譜」の項参照。

●肉筆画「胡蝶の夢図」（紙本着色一幅。八十八老卍筆。印百。93.1×28.3 大英博物館蔵）

※『莊子』にある話で、莊子が夢で胡蝶になり、目覚めて、自分が蝶になった夢を見たのか、蝶が自分になった夢を見たのか分からなくなったという内容を絵にしたもの。座っている莊子の頭上に5匹の蝶が舞っている。

●肉筆画「柳に燕図」（紙本着色一幅。八十八老卍筆。印百。126.2×53.4 すみだ北斎美術館蔵）

※柳の周りを飛び回る五羽の燕の図。 柳に燕図（すみだ北斎美術館）

●肉筆画「鉢叩き図」（紙本着色一面。もと掛軸。八十八老卍筆。印百。126.3×52.2 フリーア美術館蔵）

※細長く伸びる松を背にして、頭巾を被り布包を背負った鉢叩きが背中を向けて歩く。墨染の衣の裾が風に煽られている。鉢叩きは、空也を祖とする踊念仏の一種だが、江戸時代には門付芸にもなった。陰暦11月13日の空也忌から大晦日までの48日間、鉦や瓢箪を叩きながら行うものが有名（「デジタル大辞泉」による）。



●肉筆画「藻魚図」（表装色紙判着色。八十老卍。印縦長の「百」。2019年、日本で発見。個人蔵）

※メバルを描く。表装に江戸の料理屋八百善の献立が書かれているという。

藻魚図（日本経済新聞より転載）

●肉筆画「宝珠を搗く月兔図」（紙本着色一幅。八十八老卍筆。印百。82.2×27.8 個人蔵）

※白に入った宝珠を縦杵で搗く兔の図。

●肉筆画「都鳥に西瓜図」（絹本着色一幅。八十八老卍筆。

印百。30.0×34.3 個人蔵）

※2012「北斎風景・美人・奇想展」図録（大阪市立美術館展示）。

●「弘法大師修法図」（弘化年間〈1844～48〉。紙本着色一幅。無款。150.0×240.0 西新井大師総持寺蔵）

※弘法大師が病魔を収めようとして加持をしている前に、巨大な鬼となった病魔が姿を現し金棒と縄を持って大師に襲いかかろうとしている。大師の背後では老木に身を巻きつけながら、病魔に向かって吠える犬（狼とする見方もある）がいる。

※制作時には現在の掛幅ではなく扁額であつたらしい。昭和 58 年(1983)に発見され公開された。毎年 10 月第一土曜に開帳する。

※荒井勉『北斎の隠し絵』によれば、紙絵にしては大きすぎる、粗末な顔料しか使われていないことから、額絵の前の下絵であるとする (p 220)。



弘法大師修法図 (西新井大師総持寺)

弘化 5/ 嘉永元 (1848/2/28 ~)	戊 甲	89 歳	前北斎写、前北斎為一、	齡八十九歳
画狂老人卍、画狂老人卍、	前北斎卍老人、	八十八老卍 (前年の作画)、	八十九歳卍為一、	
齡八十九歳卍老人、	北斎為一卍老人、	卍老人筆齡八十九歳、	俗姓中島鐵藏藤原為一筆齡	
八十九歳、	画狂老人卍筆齡八十九歳、	眼鏡不用卍筆齡八十九歳	印 百、葛しか：阿栄(51)	

◇長崎の通詞本木昌造ら、オランダより鉛活字を購入。

◇佐久間象山、大砲を鑄造。

◇6 月 7 日 (西暦)、ゴーギャン生 (~1903)。

◇7 月 22 日、溪齋英泉没 (59)。

【馬琴没す】

◇9 月 16 日、曲亭馬琴食あたりか。喘息も発症。10 月 12 日、喘息、胸痛。10 月 18 日、真鳩の黒焼を服用。11 月 6 日、七ツ上刻 (午前 5 時頃) 没 (82 歳)。辞世「世の中のやくをのがれて もとのまま かへすはあめとつちの人形」。11 月 7 日、通夜。11 月 8 日、出棺。墓は深光寺 (現東京都文京区小日向4-9-5)。戒名：著作堂隠譽寰笠居士。

○阿栄、栄為應女名で『煎茶手引の種』 (茶道書。山本都竜軒作)。見開き挿図を描く。



煎茶手引きの種 (国立国会図書館)

★曲亭馬琴、『曲亭来簡集』 (別添朱記) で北斎を評して「名ヲかゆるとはこのをどこほどしばしばなるはなし」と述べる。

【長寿会では自分が一番壮健】

★正月 18 日、高井鴻山^{たかいこうざん}の招きの書状に対する返信に「(頭書に^{かみしも}袴を着て平伏している自画像あり)直ちに出発できないが、自筆の牛嶋天神額の開帳と藤堂邸の襖絵をすまして三月半ば過ぎに出発する」旨を書き送る。その際、昨年湯島で尚齒会(長寿会)があり、九十、百歳の知人が集まった中で、自分(北斎)が最も壮健であった旨も記された(『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』(由良哲次:岩松院。平成 15 年 2 月 1 日刊。p 30)。

【北斎デザインの立体造形物】

★4 月、江戸の人形師松五郎^{まつごろう}に彫らせた小布施上町屋台のための^{おぶりゆう}応龍(天に昇る龍)の彫刻を高井鴻山^{たかいこうざん}に送る(『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』(由良哲次:岩松院。平成 15 年 2 月 1 日刊。p 19)。

北斎のデザインによる唯一の立体造形物といわれる。また、小布施高井村の^{かめはら}亀原和田三郎嘉博(和田四郎とも)に同時に彫らせた同屋台のための「^{こうそんしょう}皇孫勝」(『三国志』に登場する武将)は、なかなか北斎の許可が出ず七回も改作させられたという。

応龍と皇孫勝



【四度目の小布施行き？】

★5 月小布施へ。この時お栄を伴ったか。11 月までに岩松院の天井絵を描きあげる(『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』(由良哲次:岩松院。平成 15 年 2 月 1 日刊。p 19)。

※この年の小布施行きを疑問視する向きもある。6 月 5 日頃には江戸で北曜^{ほくよう}が北斎と面会しているので、北斎が現地で描いたのではなく、江戸にいた北斎の下絵の彩色の指示により、^{こうざん}鴻山が彩色したとされる。あるいは、北曜と面会后、10 月に小布施に向け出発したかもしれない。

【北斎の画は「画」というしかない】

※小布施の高井鴻山^{たかいこうざん}の言を尾崎周道が『北斎 ある画狂人の生涯』(p 195)で紹介している。原文は白文(仮の読み下し・句読点は筆者による)

「翁之画、謂之逼真可乎。曰不可。下箇逼真字与真有問(間か)焉。曰直謂之真可乎。曰べからず。かぜつしんすなわらずでこれしんならず。いவுかり。すなわこれしんのみようというべからざるや。いவுかり。すなわちえていうべからざるや。いவுかり。しるものもつていなくべからざるといえども。すなわちしてこのめいをなせば。これえというのみ。だいつつうじんが。雖然物不可以無名、則姑強為之名、謂之画而已」(「題葛老人画」よりとしているが出典不明)

尾崎周道による意訳。

(北斎の絵は、この世のありとあらゆるものの真に迫っているといつてよいだろうか。否。迫るとするのは、真との間にまだへだたりがある。では真そのものだというべきだろうか。

否。真だと言葉でいえるものは真そのものではない。では、北斎の絵は言葉でいいあらわせないものなのだろうか。そうだ。言葉でいいあらわせないのが北斎の絵だ。しかし物にはすべて名がある。強いていうならば北斎の絵は、「絵である」というよりほかはない。

【北斎、終焉の地に移る】

★6月、本所亀沢町から浅草聖天町遍照院^{へんじょういん}注境内に移る。「画帖、色紙、扇面の儀、固く御辞退申上候」

注) 明治10年に出された記録では、遍照院は「天台宗^{てんだいしゅう} 武蔵国豊島郡浅草寺^{むさしのくにとしまぐんあさくさせんそうじ}寺中^{むさしのくにとしまぐんあさくさうでんよこまちじゅうろくばんち}武蔵国豊島郡浅草聖天横町式拾六番地」(現東京都台東区浅草6-37-12)で、北斎住居当時と変わらない。(台東区文化財調査報告書 第六集(基礎資料編Ⅱ)『天台宗細簿(旧浅草区)明治十年』東京都台東区教育委員会 昭和62年)

※一般に、上記記録の遍照院境内^{へんじょういん}図では、境内西側に「六間小舎」とある。俗に「狸長屋^{たぬきながや}」と呼ばれた長屋で、ここに住んだという。浮世絵師で終焉の地が明確なのは北斎だけとされる。

【本間北曜、晩年の北斎の弟子になる】

★本間北曜^{ほんまほくよう}、北斎が弘化4年(1847)2月に小布施^{おほふせ}から帰った直後に門人となる。

※本間北曜は、蘭学者。浮世絵師。出羽国(山形県)酒田の豪商本間一族の出身。北斎没後は国事に関心を持つようになる。ジョン万次郎^{まんじろう}や榎本武揚^{えのもとたけあき}と交流があり、島津斉彬^{しまづなりあきら}や西郷隆盛^{さいこうたかもり}とも面識があった。阿片戦争^{あへんせんそう}の教訓から、日本も自立すべきだとして株式会社を設立して産業を振興する必要があるとした。最後は毒殺されたといわれる。

※本間北曜は、この年5月22日酒田を発ち、6月4日に江戸に着いた。翌6月5日に北斎と浅草の仮宅で面談する。その後、京都、広島を経て、長崎に8月2日に到着している。

「九ツ半(午後1時)浅草寺^{せんそうじ}順拝直様^{じゆんぱいすくさま}目録^{めいろく}卍翁^{まんじゆう}訪候^{ぼうこう} 处在宅ニ而珍敷夕方迄咄^{してめづらしくゆうがたままではなしをいたしくれがたまたく}致暮方帰宅^{つかまつりそうろう}仕候」(本間北曜『西肥長崎行日記』嘉永元年条)。

※6月8日、北曜、再度北斎と面談。

「今日卍翁^{まんじゆう}訪認物^{ぼうにんぶつ}を貰^{もら}帰宅^{きたく}長崎に而キタコと魚物写可^{ぎょぶつずつすべきおもむきにいたりしやうち}致趣承知いたし帰宅^{きたく}」(同上)。

「認物」は、後述「鬼図」のこと。落款に「嘉永元戊申六月八日 門人北曜子於くる 齢八十九歳画狂老人卍筆 卍百」と記す。これから長崎に行く北曜へこの図を贈った。「キタコ」は、うつぼをいう。長崎で魚物を写してくるよう依頼されたのである。

この時「日新除魔図」(10図)を譲られたとされる。

★10月、最後の小布施行きに出発したか。

【93回の転居をする】

★関根只誠(1825~93)、聖天町の居宅を訪ね、北斎の転居は93回であると聞かされる。

「予がまみへし嘉永元申年なり、其居聖天町に住めり、是迄に九十三度目と云き」と記している。この時の印象を「頭髪白くして面貌瘦せたり」「瘦せて鼻目常人に異ならざれどもただ耳は頗る巨大なり」「氣力青年のごとく、百歳余も生きぬべし」などと記している(関根只誠版『増補浮世絵類考』)。

『葛飾北斎伝』では、同様のことを「関根氏、嘗て浅草なる翁の居を訪ひし時、翁は破れたる衣を着て、机にむかひ、其の傍に、食物を包みし竹の皮など、取りちらしありて、甚不潔なりしが、娘阿栄も、其の塵埃の中に座して画き居たりし。其の頃翁年八十九、頭髮白くして、面貌瘦せたりと雖、氣力青年のごとく、百歳の余も生きぬべしとおもひしが、俄然九十にして死せり」(p 198~199 ルビは筆者)と記している。

【転居三百、百庵にならひ】

★四方(柳亭)梅彦談「転居三百(割注:転居三百は、転居の費用は、如何なる貧人にてても、三百文位は、費やすといふ諺なり、三百文は即今の三錢なり。)転居すること、先生の如くなれば、たとひ富有なるも、終に費用に迫はれ、貧窮に陥るべし。先生時に居宅の汚穢を厭ひ、転居せんとおもひ給はゞ、人をして、全家を掃除せしめて、可なるべし。翁微笑して曰く、幕府の表坊主に、寺町百庵(脚注:越智氏。通称三知。俳人。江戸の人。天禄八~天明元年、一六九五~一七八一)といふ人あり。此の人、生涯に、転居百回すべしとて、自百庵と号し、既に今は九十有余回の転居をなせり。余もまた百庵にならひ、百回の転居をなし、しかして死所を卜すべしと」(『葛飾北斎伝』p 226)。

※四方梅彦の引越し祝いの狂歌「百越すもおろか千里の馬道へ まんねんちかくきたの翁は」(荒井勉『北斎の隠し絵』p 190)。「まんねん」は、近所の菓子屋「万年屋」に掛ける。「きた」は、「万年布団」ならぬ「万年着ている」と北斎の「北」に掛ける。

★11月、河原崎座の顔見世を見に行く。『花江都歌舞伎年代記』に「(略)此度小団次のちよこ平の立廻りは以前梅玉の勤しよりはたての間も長く大に出来よかりしと前北斎為一翁の話なり(略)」とある(『年譜』による)。

【身体は壮健、歩行は自由】

★斎藤月岑(1804~78)『睡余操觚』の記事の現代訳を2005年『北斎展図録』所収小林忠「画狂人北斎の実像」(p 25)よりそのまま転載する。

「(略)今年嘉永元年(1848)に八十九歳になっているが、身体は壮健で、歩行は自在である。目は絵を描くときに眼鏡を用いている。今も精細な絵(「細画」)を描いている。これまでに何十度となく転居を繰り返している。いずれのところでも借家で、狭い家ばかりだった。末の娘の「忍い」(栄、応為のこと)が父に似て、食事をしてても食器を洗わず、そのままに打ち捨ててかえりみない。浮世絵師ナンタク(南沢等明)の妻となったが、離縁されて父と同居している。年は五十歳ほどである。絵を描き、為一の名で刊行される版画の下絵は多くこの娘が描いている。(略)生の魚を人からもらうことがあっても、煮たり焼いたりするのが面倒くさいと、大方は人にあげてしまうということである。以上、成瀬吉右衛門という方に聞いた話である」()内は筆者による。

【金銭を得るも、消費すること土芥のごとし。常に赤貧】

★「翁は、酒を嗜まず、茶を好まざれども、常に貧し、衣服破れたりと雖も厭はず。金銭を得るといへども、敢て貯ふの意なく、これを消費すること、恰も土芥(筆者注:土とごみ。価値のない物のたとえ)のごとし。当時通常の画工の画料は、絵本類一丁、金二朱

(割注：今の十二錢五厘。) より多からざるが、北齋は、一丁金いちぢご五分ごぶ(割注：即廿五錢)にして、得る所頗る多しといふべし。然れども、常に赤貧せきひんにして、衣服寒を凌ぐに足らざること、屢しばしばこれあり。これ、金銭きんせんを貯たくわふに意なく、其の心唯一こころゆいいつに絵画えいゑに専もつぱらなるを以てなり」(『葛飾北齋伝』 p 197~198 ルビは筆者)。

※絵本一丁、二ページ分の下絵で通常は二朱(約1万2千円)のところを一分(約2万1千円)を受け取っていたにもかかわらず、老年の北齋はいつも貧しかったのは、絵に専心したためという。

※当時の価格：一朱=240文(ビタ錢)、一朱16つぶ=一両、一分=四朱(1/4両)

★北齋の画料：並寸肉筆軸物(三分内外)、版画大判(二分内外)、刊本挿絵一枚(一分)ちなみに当時の相場：百文=米二合五勺、260文=砂糖一斤。4文=大福餅一つ。

※1文=25円で換算。

●絵手本『北齋画譜』中巻(淡彩摺。永楽屋東四郎版。山口県立萩美術館蔵)

※天保初年頃の初巻に続くもの。文政2年(1819)刊『北齋図式』の21図と、文政3年(1820)『良美灑筆』の図を加え、改題改刷したもの。下巻は北齋没後に出版される。

【画法・画論を展開する『画本彩色通』】

●絵手本『画本彩色通』1月。中本墨摺。

初編一冊26丁。扉に「画狂老人えいさくらうじん卍筆 絵本彩色通 初編 戊申端月発兌 山口屋藤兵衛 小林新兵衛 和泉屋市兵衛」とある。自序に「無筆八右衛門むびつぱちゑもんが曰」とある。

二編一冊26丁。見返しに「前北齋卍老人著 錦耕堂(山口屋藤兵衛) 甘泉堂(和泉屋市兵衛) 崇山房(小林新兵衛)」とある。豊介子の序文あり。奥付には「弘化五申年正月発行」とある。

各冊18.2×13.0 すみだ北齋美術館：ピーター・モース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/ブルヴァー・コレクション/東洋文庫/名古屋市蓬左文庫/大英博物館/フリーア美術館蔵) 後編は未刊。初編と二編の同時刊行。

【油絵の具の調法を示す】

※油絵具の作り方解説あり。①鉛の鉄砲玉を削り、②削った鉄砲玉と油を七十日、土の中に埋め、③それを紙で濾して絵具とするよう示す。



『画本彩色通初編』絵具の製法(すみだ北齋美術館)

※初二編とも北齋の肉筆鳥獣花の図柄に共通するデザインが多くある。

【己六歳より八十八年独立して、心に怠らざりし事】

※初編序文「無筆八右衛門むびつぱちゑもんが曰。画えを好る児童こどもの為にとて、成なし安やすきさみしき(彩色)のミをくり出して一小冊となし、彩色通と題す。己六歳より八十八年独立して、心に怠らざ

りし事を、いかでか今方寸の帟中に演尽すことを得べき。唯赤きと紅のひとしからざる、藍と緑の別ちある、或ハ円方長短の形を説示すの外ハ能ハざるなり。されど編を継ぎ冊を重るにいたらバ、大洋の烈しき急流の尖き池水の平らかなる、惣て生る所により各その強弱異なり、翼あつて高く飛ず、赤花咲て実を結ばざるまで正し知らしむるにいたらバ、千里一步の勞をいとはず、此業に遊べる同志の輩に対し、鳥澁がましくも晶山の片玉を机上にてらし合せて、寸的の違はざる事もあらバ、我この道に杖突きたるしるしともなるべきもの歎」（『北斎の絵手本 三』及び『葛飾北斎伝』 p266）

【陰影法について】

☆陰影法については初編最終丁で次のように述べている。

「（略）扱ヨウロウツパの隈どりど、天朝の彩色の隈どハ、表裏のたがひなり。中華扶桑ハ共に垂細亜大洲にて、絵のくまどりハ、模様と同じことのやうに心得、またハ金泥くゝりなど加へ、円方浮沈のためにハあらず。彼も知り是も辨へ画く所死活なくんバあるべからざるや。画李彩色通畢」

「てりぐまとは物の高く日にあたりたる所を見する事をいふなり。かげぐまとは日かげになりて闇く見ゆる所をせんがゆえなり。かげひなたあらざればさみしき（彩色）とはいひがたし」

※最終丁の跋文に続刊の計画と、絵に対する思いを述べている。

【九十歳よりハ又々画風を改め、百才の後にいたりてハ此道を改革せん】

「今出す所のさいしき通ハ、山川草木鳥けだものむし魚のたぐひはいふにおよはず、衣服のもやう人物の肉あいより、武具馬具に及び、一さいの道具、風雨のふぜい、月かげの隈どりまで、委しくおしへ、すゑぐにいたりてハ、蹶の内にもものゝすけて見ゆる羅のかゝりて下のもやうのうつりしまでも、ゑのぐのしかた、くまどりのやうす、画をこのめる童の、おほへやすからん事を、導くの本なり。また本のいやしきは、価ひくゝして求めやすからんが為なり。編を次ぎ冊を重ねるにいたりてハ、我八十余年のうち、種々修行せし事とも、悉く伝ふことをいふ。九十歳よりハ又々画風を改め、百才の後にいたりてハ此道を改革せんことをのミねがふ。長寿くんし（君子）わが言のたかハざるをしりたまふべし」（『北斎の絵手本 三』及び『葛飾北斎伝』 p268）

※続編も企画したようだが、翌年に逝去したため中断したという（永田生慈『北斎の本懐』角川新書 p111）。

※カロリーヌ・レッタによると、お栄が中心的に描いたものとする。理由①北斎の最期に近すぎる。②本の挿絵が、お栄作といわれる小布施の書簡の絵に似ている。③お栄特有の色使いである（Caroline Retta, "Hokusai's Treatise on Colouring" 『北斎と応為』 p293）

●「日新除魔図」10 図（紙本墨画 北斎館蔵）

※本間北曜に与えた図。北斎のいつの作なのか不明だが、この年に門人になっているので、この時に譲られたものと思われる。

注：佐藤七郎氏「北曜の『旅日記』と北斎」（昭和53年11月8日「信濃毎日新聞」掲載）によれば10図としている。以下、寸法記載のある8図は2019年12月『北斎 視覚のマジック展図録』（すみだ北斎美術館）による。

☆〈十月十日〉（31.9×23.4 右向きの唐獅子を真横から描く。獅子は顔を上に向け、左前足を高く上げた獅子） 十月十日



☆〈十月十一日〉（32.0×23.5 図の下に向けた逆さまで、右前足を前に出して体が図の上を向いている） 十月十一日



☆〈十月廿三日〉（扇子に⊖の字が書かれた扇子と幣を持って踊る獅子）

☆〈十月廿四日〉（扇子に⊕の字が書かれたものと幣を持って踊る獅子）

☆〈十月廿五日〉（31.8×23.0 扇子とたて髪に⊕の字が書かれた扇子を持って、後ろ向きに踊る獅子）

☆〈十月廿六日〉（31.9×23.0 ⊕と書かれた扇子を左手に持ち、右手で幣をかざしながら右足をあげて踊る獅子）

☆〈十一月五日〉（32.0×22.8 扇子に⊕の字が書かれたものと刀を持って右足を揚げて踊る獅子） 十一月五日



☆〈霜月十三日〉（30.2×22.4 左手と左足を上げ、右手の刀で⊕の字が書かれている扇子を二つに切る獅子）



霜月十三日

☆〈霜月十八日〉（29.7×23.0 右手で幣を持ち上げ、左手で扇子に⊖の字が書かれたものを顔の前に差し出して踊る獅子）

☆〈霜月廿五日〉（30.5×23.1 両手に幣を持ち上下に構え、右足を上げて踊る獅子）

※本間北曜所蔵の獅子図は他に2図あるという。また、松代藩家老小山田壱岐旧蔵の「日新除魔」14点が画帖で伝わっているという（『北斎 視覚のマジック展図録』p149）。

●絵手本『絵本庭訓往来』二・三編（墨摺。前北斎写、他。永楽屋東四朗版）

●絵手本『秀雅百人一首』（1月。一冊。緑亭川柳輯。八十八老卅筆（前年の作画のため）。山口屋藤兵衛他版。国立国会図書館/尾道市立大学附属図書館蔵）

※口絵と20人の肖像を描く。奥付に、北斎が描いた範囲を「画工 口絵及従一至十 前北斎卅老人」と記してある。他に、一勇斎国芳、柳川重信（二代）、溪斎英泉、一陽斎豊国（三代）などが描く。

●絵手本『花鳥画伝』初編（前北斎為一。須原屋新兵衛版。国立国会図書館蔵）

※国立国会図書館の大蔵孫兵衛版（明治22年）には、「著画者 前北斎為一」とある。鳳凰、鶴、文鳥、加奈阿利など数種の鳥の絵と紅葉など数種の植物を組み合わせた絵本。

●料理本『**即席素人包丁**』（小本着色一冊。四季山人著。八十九歳卍為一。版元名、刊行記なし。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※北斎は「初茸の図」一途を描く。他に溪斎英泉、歌川国芳などが描く。

【制作年の分る最後の摺物・錦絵】

●摺物錦絵『**地方測量之図**』（3月。大大判錦絵摺物。応需齡八十九歳卍老人筆。39.5×53.2 島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/明治大学刑事博物館/誓教寺/クラブホーン・コレクション蔵）

※「袋」の表書きには「**量地之図**」とある。測量方の役人が高低の角度を測る大方儀だいほうぎや小方儀しょうほうぎを用いて土地を測量する様子を描く。図中の説明によれば、測量の師である初代と二代目の長谷川善左衛門はせがわぜんざゑもんの功績を称え、初学の人を啓蒙するためにこの図を作ったものという。また、図には門人三人の名と、「地方測量術免許」とあるので、測量免許を与える祝いの図でもあったと思われる。おそらく北斎の一枚摺物としては最後の作品といわれる（『原色浮世絵大事典』8巻p90）。



地方測量之図（すみだ北斎美術館）

●肉筆画「**狐狸図**」（重要美術品。紙本着色双幅。卍老人筆齡八十九歳。印百。各 123.6×57.9 京都国立博物館寄託・個人蔵）

※右図は、狂言「吼喊」に登場する老狐はくで白蔵主しろぞうずという僧に化けているが、好物の鼠ねずみを餌にした鼠ねずみに心を惹かれている様子ようすの図。左図は、茂林寺もりんじの狸たぬきで、寛政7年～10年作の「分福茶釜ぶんぷくちまかま図」にも描かれている。

狐狸図（ameblo.jpより）



●肉筆画「**唐獅子図**」（紙本着色一幅。俗姓中島鐵蔵藤原為一筆 齡八十九歳。印百。73.0×29.5 個人蔵）

※いわゆる「日新除魔図」とは別に、やや大きめの紙に藍と薄赤で彩色した図。弘化元年（1844）にも「唐獅子図」を描いている。

●肉筆画「**紅葉掃除の童子図**」（絹本一幅着色。齡八十九歳卍老人筆 印百 34.2×42.7 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※紅葉や松葉を熊手で集めて掃除している童子が、籠を脇に置いて腕を組みながら、下を向いて腰を下ろして休んでいる。

●岩松院天井絵「八方睨み鳳凰図」（檜板着色。12枚のブロックを組み合わせた21畳分。昨年（弘化4年）より一年で手がける。630.0×550.0 岩松院蔵）

※小布施の『歴代枢要書』では弘化4年（1847）作としているが、実際には翌年の嘉永元年（1848）完成と見られている。



岩松院天井画「鳳凰図」

※高井鴻山の描いた下絵に彩色を依頼された北斎が色を指定し、それにより鴻山が色づけをしたとされていたが、その後、北斎自身が下絵を描いて鴻山に送ったことが明らかになったという（久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』（p87）。（弘化2年：1845条を参照）。

※下絵の背景は黒だが、完成図は4400枚の金箔となっている。色彩部分は阿栄の手が入っているかもしれないという見方もある。

※検証の結果、絵皿を置いた跡や髪の毛が一本あったといわれ、床で描いたものを天上に持ちあげたことが判明している（市川次夫：北斎館理事長「小布施における北斎顕彰運動の歴史」：2019年2月9日第一回国際北斎学会講演より）。

●肉筆画「鬼図」（6月5日～8日の作。紙本一幅。嘉永元年 戊申年六月八日門人北曜におくる 齢八十九歳。印百。58.2×56.2 佐野美術館蔵）

※刺身と酒徳利を前にした鬼の図。

※北斎の門人本間北曜（本間光喜。天保14年：1843に弟子入り）が長崎に向かう途中、6月8日に浅草でこの図を受け取っていることが、北曜の日記『西肥長崎行日記』に記されている。「九ツ半 浅草寺順拝直様卍翁訪候 处在宅二而甚珍敷夕方迄咄致暮方帰宅仕候」（嘉永元年六月五日条）。「今日 卍翁訪認物注1を貰帰宅長崎に而キタコ注2と魚物写可致趣承知いたし帰宅」（『北斎美術館 5』p156。ルビは筆者による）。⇒本年条【本間北曜、晩年の北斎の弟子になる】を参照。

鬼図（佐野美術館）



庄内藩士の池田玄斎が嘉永4年(1851)に追賛した。「世の中は虎狼も なのみにて衣をきたるおにそ かしこき 七十七叟玄斎」が記される。

注1) 認物：「鬼図」を指す。

注2) キタコ：ウツボのこと。ウツボと魚類を写してほしいと依頼したのである。

※法衣に身を包んだ赤鬼の前には、刺身の乗った皿と青の波模様の徳利と箸と数珠が置かれている。それらをじっと眺める赤鬼。

●肉筆画「生首図」(絹本着色一幅。八十九老人卍筆。33.3×40.9 北斎館蔵)

※見開いた目、死斑の浮き出た頬や首、血の気の引いた歯茎、鼻や耳・口からも出血している、ざんばら髪の男の首には縄がある。男の顔は上を向いている。近年欧州から戻ってきた絵という。「生首図」は天保13年(1842)、文化7年～11年(1810～14)にも描いている。

●肉筆画「ほととぎすと虹図」(紙本着色一幅。卍老人筆齡八十九歳 印百。116.0×49.0 個人蔵)

※空から木立に向かって下りて来るほととぎすが鳴き声をあげ、図の上部には薄く虹がかかっている。『肉筆画帖』(天保6年)にも「虹と小鳥(ほととぎす)」で同画趣を描いている。

ほととぎすと虹図(2017『HOKUSAI 北斎 富士を超えて』展より転載)

●肉筆画「鴨」(紙本着色一幅。画狂老人卍筆齡八十九歳。印葛しか。29.5×39.5 北斎館蔵)

※水面を泳ぐ一羽の鴨と、水中に体半分と首を突っ込むもう一羽の鴨。鴨の動きによる水の波紋と水草が広がる。

●肉筆画「三すくみ」(絹本着色一幅。画狂老人卍筆齡八十九歳。印百。50.9×67.4 井上和雄『北斎』による)

※蛇とナメクジと蛙が向き合っている図。緑の丸瓦に這うナメクジが印象的。

三すくみ(kumareon.wordpress.comより転載)

●肉筆画「富士見西行図」(表装色紙判着色。八十九歳卍筆。印縦長の「百」。個人蔵)

※2016年米国で発見。笠を背にした西行が杖を肩にして座って右方向を眺めている。図上部に山の峰が連なるが富士は描かれぬ。縦長の「百」印は88歳以降に用いられる。



富士見西行図（日本経済新聞より転載）

●扇面肉筆画「富士見西行図」（扇面着色一幅。八十九歳
卍筆。印縦長の「百」。ボストン美術館蔵）

※富士と橋が描かれる西行図。

●肉筆画「雲龍図」（絹本着色一幅。画狂老人卍筆 齢八
十九歳。印百。74.5×27.0 個人蔵）

●摺物「松に月」（淡彩一幅。眼鏡不用卍筆 齢八十九歳
印百 18.1×25.4 ボストン美術館蔵）

※図の右下から中央に向けて松の巨木を描き、図の左に突
き出す二本の枝の間に満月が薄く描かれる。



【小布施にある北斎画】

※『北斎大鳳凰図—北斎小布施諸遺作と高井鴻山の功績』（由良哲次：岩松院。平成 15 年
2 月 1 日刊。P33）では、以下の作品が「小布施にあり、または小布施来歴と推せられる八
十九歳書きの図」（肉筆）として紹介している。

- 「衛士が社頭の鳥居を塗装している図」
- 「蛇と蛙の図」（本稿：嘉永元年「三すくみ図」か）
- 「虹に時鳥の図」（本稿：嘉永元年「ほととぎす」と虹図）か）
- 「ひらめにかじきの図」（本稿：天保 11～嘉永 2 年「魚貝図」か）
- 「獅子図」（本稿：嘉永元年「獅子図」か）
- 「月下竹林骸骨図」（本稿：嘉永 2 年「骸骨図」か）
- 「唐人夫妻魚を買う図」

嘉永2(1849) 己酉 90 歳 東都葛飾前北斎為一翁画図、葛飾为一老人、前北斎卍老人、

九十老人卍、齡九十歳画狂老人卍 印百：阿栄(52)

◇七代目市川團十郎赦免される（天保 13 年：1842、奢侈禁止令に触れ江戸所払いとなっ
ていた）。

◇7 回目の富士講禁止令。

○歌川広重、寿鶴堂（丸屋清治郎）版『東海道五十三次』（『隸書版東海道』とも）。

★1 月、小布施より帰る（?）。

★この頃弟子は孫弟子も含めて 200 人程度といわれるが、実数は不明。

★2 月頃から病床に伏す。このためそれ以後の作は応為の手も入っていると推測もあ
る。

【画工北斎 此せつ大病のよし】

★馬琴の日記に北斎の病気が記されている（馬琴は前年の嘉永元年 11 月 6 日に没している。この記事は長男宗伯の嫁路による記録）。

2月25日「昼時過、中村勝五郎注来ル。九ヶ年以前願候四天王序文の事にて来ル。右の序文ハ、稿被置候まゝ、種本其儘返し遣す。煎茶・くわしを薦、雑談数刻、七時頃帰去。画工北斎、此せつ大病のよし。勝五郎の話也」(『曲亭馬琴日記』第四卷、同日条。ルビは筆者)。

注) 中村勝五郎：勝五郎は天保4年(1833)4月2日に読本執筆依頼で初めて馬琴宅を訪れている(『曲亭馬琴日記』第三卷、同日条)。

【北斎逝く】

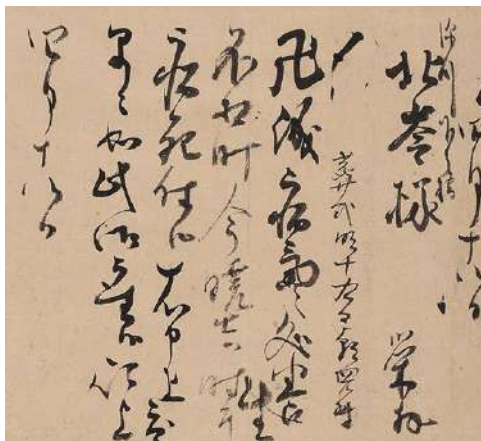
★4月18日(西暦5月10日、満88歳10ヶ月)、浅草聖天町遍照院境内仮宅で没す(暁七時、午前4時頃)

★同日、阿栄、死亡通知を府川北岑(北嶺)に送る。

「四月十八日/深川下橋/北嶺注様/榮拜/葬式明十九日朝四ツ時/正儀病氣之処養生/不相叶 今暁七ツに/病死仕候 右申上度早々如此御座候以上/四月十八日」(島根県立美術館：永田コレクション蔵。瀬木慎一が1983年に門人の子孫の家から発見。ルビは筆者)

今朝4時頃病死したので、明日10時頃に葬式を行うというもの。

阿栄による死亡通知(島根県立美術館)



注) 北嶺：：1824～76。北嶺は蚊斎北岑の別号。

天保6年(1835)、父の友人北鷺の紹介により12歳で北斎の弟子になったという。北斎没時は数え年26歳。阿栄が北岑に死亡通知を出した経緯は不明。若い北岑が北斎関係者に報告して回ったか。

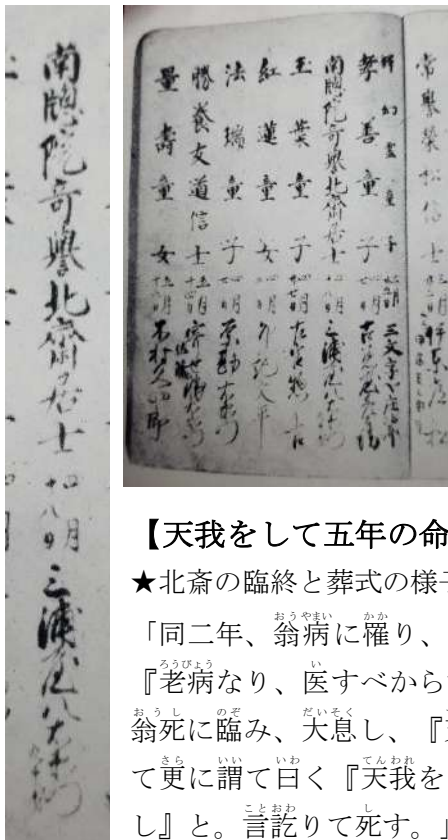
★4月19日(朝四つ、午前10時頃)、浅草誓教寺(浅草八軒寺町。現東京都台東区元浅草4-6-9。浄土宗)にて葬儀。立合は北斎の次男・加瀬崎十郎。墓は加瀬崎十郎の孫・加瀬昶次郎の施主。正面に「画狂老人正墓」。墓右側側面「辞世 飛と魂でゆく気散じや夏の原 行年九十」。法名：南窓院奇譽北斎居士。

★北斎の墓は、元は北斎の父・仏清(川村市良衛門：享和元年：1801没)の墓の下にあり。当初貧しく墓碑を建てられず。後に加瀬昶次郎が現在の墓を建てる。

現在の北斎の墓（誓教寺案内葉書より）



誓教寺過去帳（web「絵師塔婆考」より）



【天我をして五年の命を保たしめば、真正の画工となるを得べし】

★北斎の臨終と葬式の様子は『葛飾北斎伝』（p169）が伝えている。

「同二年、翁病に罹り、医薬効あらず。是よりさき医師窃に娘阿栄に謂て曰く、『老病なり、医すべからず』と。門人および旧友来たりて、看護日々怠りなし。翁死に臨み、大息し、『天我をして十年の命を長ふせしめば』といひ、暫くして更に謂て曰く『天我をして五年の命を保たしめば、真正の画工となるを得べし』と。言訖りて死す。」

【親族等会葬に来ずも多くの参列者あり】

- ★「四方梅彦曰く、翁は、兄弟姉妹なきが如し。其の故は、翁の葬式の時に、兄弟姉妹および甥姪などは、乗らざりしをもて知るべし」（『葛飾北斎伝』 p 35）
- ★「又北斎翁が葬式の時、兄弟姉妹甥なども来たらず。かの家元なる中島氏よりも、香花を手向けたるをきかざれば（略）」（『葛飾北斎伝』 p 160）
- ★「翁の死するや、門人および旧友等、各出金して、葬式の礼を行ひたり。棺槨などは、粗製のものなりしが、見送りの人々の中には、槍、挟箱脚注：ふたに棒を通してかつぐ箱など、もたせたる士もありて、凡百人程にて、誓教寺へ赴きたり。古来裏店より槍箱など持せて、見送りし葬礼は、嘗てこれなきことゝて、近隣の者共、大に羨みたり。（以上、四方梅彦の話）。又翁が死せし時、門人の外に、柳亭種員、脚注：柳下亭の誤り四方梅彦など、最もよく後事を担当し、周旋到らざるなし。割注：露木氏の話。種員、梅彦は柳亭種彦の門人」（『葛飾北斎伝』 p 170 ルビは筆者による）

●絵本『絵本孝経』上編（墨摺。絵入りの孝経の啓蒙書。高井蘭山注解。東都葛飾前北斎為一翁画図。北斎の著作の自序は天保5年（1834）の執筆。小林新兵衛版。22.5×15.5 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/東洋文庫/フリーア美術館：ブルグエー・コレクション/立命館大学図書館蔵）

●絵本『^{えほんこぶんこうきょう}画本古文孝経』(『^{えほんこうきょう}絵本孝経』下編 刊行は嘉永3年10月。墨摺。二冊。絵入りの孝経の啓蒙書。^{たかいらんざん}高井蘭山注解。東都葛飾前北斎為一翁画図。見返しに「前北斎卅老人画」とある。北斎の著作の自序は天保5年(1834)の執筆。^{こぼやしんべん}小林新兵衛版。22.8×15.8 早稲田大学図書館蔵)

【『北斎漫画』十三編の刊行年はいつ?】

●絵手本『^{でんしんかいしゅ}伝神開手 ^{ほくざい}北斎漫画 十三編』(没後の秋頃か。刊行年不明。半紙本一冊。葛飾為一老人。三代目^{えいらくやとうしろう}永楽屋東四郎版。22.8×15.7 すみだ北斎美術館/浦上満/島根県立美術館/高知県立高知城歴史博物館/フリーア美術館:ブルヴァエラ・コレクション蔵)

※奥付には、書肆^{えいらくやとうしろう}:永楽屋東四郎(尾州名古屋本町七丁目)、同出店(江戸日本橋通本銀町二丁目)と記される。

※墨摺版と淡彩摺版がある。



漫画十三編(すみだ北斎美術館)

☆表紙:「葛飾為一老人筆 ^{とうへきどう}北斎漫画十三編 書舗東壁堂押」の表題が書かれ、上部に13個のリング状から糸を垂らすように線を縦に引いている。

※「従来十三編の刊行年は不明とされていたが、^{さんきんがいにしゅうりゅう}山禽外史小笠の序文末尾「^{きせうしゅうそうらや}巳酉秋窓雨夜 秉燭書」にある「^{つちのとより}巳酉」により嘉永2年の版とする説が有力となった。

しかし、さらに刊行年を訂正する考証が『^{たのしいほくざいのふざん}楽しい北斎の富嶽三十六景 富嶽百景 動植物画 他』(有泉豊明 「目の眼」平成29年2月刊)によって示されたので紹介する。

^{さんきんがいにしゅうりゅう}山禽外史小笠は序文に「(太田) ^{しよくざんじん}蜀山人 六樹園 式亭(三馬)の諸先みな序あり 余また何をか言はむ」とあるので、彼らと親しい立場の人物であっただろうから、序文末尾の漢文はやや戯けて読むべきとして、次のように記している。「^{おのれ}己は酉なり(私は禽です。^{さんきんがいにしゅうりゅう}山禽外史小笠です)、秋の窓の雨の降る夜(秋の窓に雨の降る夜、夜には眼が効かず、羽は有れど手のない山禽が)、^{やまどり}燭を乗りて(明かりを手にとってこの序文を)書す(書いた)とやや戯けて読むべきなのです。これが^{さんきん やまどり がいにしゅうりゅう}山禽(山鳥)外史小笠なる人物が本来意図した読み方です。漢文が身近であった江戸の人ならこの様に読み、山禽外史小笠の漢文を大いに喜び楽しんだことでしょう」

そして、『^{しっぽうざんかろうじんしゅうりゅう}富嶽百景』三編序文の「七宝山下老人小笠」による筆跡と、『^{ほくざい}北斎漫画』十三編の序文の筆者序文の筆跡が同様であることから、^{しっぽうざんかろうじんしゅうりゅう}七宝山下老人小笠と^{さんきんがいにしゅうりゅう}山禽外史小笠は同一人物であるので、『^{ほくざい}北斎漫画』十三編は『^{ふざん}富嶽百景』三編の推定刊行年(天保6年

～7年：本稿では天保6年頃としている）に近接するとしている。「また以上のように考えますと、北斎漫画・十四編の出版年は嘉永二年以降では無く、十三編出版の数年内位となるでしょう」と述べている（p234）。

【北斎漫画 まねもならざる画風の筆癖】

※『日本奇人伝』下巻（嘉永2年頃。花笠文京著。歌川国芳画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）には、小鍛冶宗近、蟬丸、馬琴、光明皇后とともに北斎が作画している様子が描かれ、「北斎漫画の数拾編。まねもならざる画風の筆癖」と、その技量を賞賛している。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 十四編』（没後。刊行年不明。半紙本一冊。署名なし。奥付には書肆として、永楽屋東四郎（三代目。尾州名古屋本町七丁目）、同出店（江戸日本橋通本銀町二丁目）と記されている。22.7×15.6 すみだ北斎美術館/フリーア美術館：ブルヴァエール・コレクション蔵）

☆序文「文は道を貫くの器、画は形を伝ふるの具。しかれども、文の拙き、豈道を貫かむ耶。画のつたなき、もとより形を伝ふべからず。虎を画きて狗に類するごとき是なり。北斎が万物を忍がける、皆其形を伝ふるものにして、三歳の童子も、これを見て其物を知る。こは妙手の筆端ならずして、いかでか天地間の万物を陶冶する事、こゝに至らむや。今又、此編を梓（版木）に彫るとて、予に序を乞ふ。たゞ戯に児童のために手引きすること、しかり。百信翁漫題注」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による）

注）百信翁：アホウドリ。百天翁。誰か未詳。

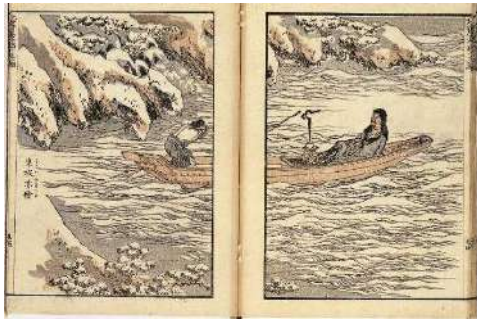
☆表紙：鯨鉾が描かれ、空白に「北斎漫画十四編」と草書で書かれる。



北斎漫画十四編（すみだ北斎美術館）

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 十五編』（明治11年：1871。完結。半紙本一冊。25.8×15.8 すみだ北斎美術館/山口県立萩美術館/フリーア美術館：ブルヴァエール・コレクション蔵）。

※奥付には、「従初編至十四編、文化十一年以降漸次出版。明治八年十二月十四日、版權免許。十五編、明治十年八月十四日、版權免許。明治十一年九月一日出版 編輯者 東京府故人 葛飾北斎 出版人 愛知県平民 片野東四郎 第一区玉屋町三丁目二番地」とある（句読点は筆者）。



北斎漫画十五編

【翁の遺墨若干葉を画本中に補い入れて十五編とする】

☆序文（元文は漢文）「北斎翁の漫画、余が家蔵の版也。此の編に画く所の山水草木、鳥獸虫魚、固より論なく、人物の如きに至りては、即ち、農圃の稼穡、百工の事業なり。凡そ覆載の間に森羅万象するは、一網遺すなし。蓋し、此冊子の濫觴たるや、先人注、翁と約して、予て十五編を以て全部と為す。随画随刻、第十四編に至り、既に世に行はる。其の第十五編の如きは、画半ば成るも、未だ梓に付さず。而るに翁没し、先人亦尋いで逝けり。余、先人の夙志以て果たす無きを憾むこと久し。然り而して、方今諸藩来舶の賓、之を賞愛し、購ひ求め齎し去る者鮮なからず。一日、余、輓近新刷の洋籍を観る。其の図中、往々にして、此編に画かるゝ者を挿入する有り。乃ち知る、翁の筆力遠く海外に達するを。是に於いて、益々九仞に一簣を虧くを惜しむ。奇なる哉、頃、幸ひにし翁の遺墨若干葉を、筐底故紙中に得たり。因て之を未刻の画本中に補ひ入れ、以て梓に付し、第十五編と名づけ、遂に全部と為すを得たり。而して、余の旧憾、亦一掃することを得たり。冀くは、江湖諸彦購求し、以て愛玩を加ふれば、幸甚とす。乃ち其の概略を書して、以て序文に代え爾云ふ。明治十一年歳 戊寅に在る七月 片野東四郎 謹 識印」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎より）

注）先人：柳亭種彦のこと。十一編序文で柳亭種彦は二十編まで続ける旨を書く。

●絵本『続英雄百人一首』（1月。一冊。緑亭川柳輯。前北斎卅老人筆。山口屋藤兵衛版。野田市立図書館/弘前市立弘前図書館蔵）

※北斎は、口絵と英雄20人を描く。他に、歌川国芳、歌川貞秀、柳川重信（二代）、歌川豊国（三代）などが描く。巻末広告に「義列百人一首 近刻」とある（嘉永3年に刊行される）。『英雄百人一首』（山口屋藤兵衛版）は嘉永元年（1848）9月刊で、北斎は描かない。

●肉筆画「鍾馗図」（正月。絹本着色一幅。嘉永二己酉正月九十老人卅筆。印百。113.7×29.6 北斎館蔵）

※右手で剣を台地に突き刺し、蓬髪で顔面髭だらけの鍾馗が、体を左に捻って立ちながら睨んでいる墨摺風の図。この図と同じ図がメトロポリタン美術館にある。二幅描いたか。

●肉筆画「うらめしや図」（縦長判。墨摺。九十老人卅筆。印葛しか。個人蔵）

※籠の外れた古井戸から煙の様に延びて出た幽霊。腰まで伸びた髪を背中に垂らし、左手を前に伸ばし手首を折っている。下半身は糸の様に細くすぼんでいる。井戸には細い棒が斜めに置かれている。

●肉筆画「扇面散図」（絹本着色一幅。九十老人卍筆 印百。51.5×71.4 東京国立博物館蔵）※青地に金粉を散し、赤い花などを描いた扇、水色の紫陽花などを描いた扇、赤無地の扇、墨色で母子を書きこんだ扇などに、半分閉じた扇が重なり合う。

扇面散図（東京国立博物館）



●肉筆画「李白観瀑図」（齢九十歳画 狂老人卍筆 印百。絹本着色一幅。93.4×30.0 ポストン美術館蔵）

※子供を背負った李白が垂直に落ちる滝を眺めている。滝の下から飛沫があがっている。李白は安録山の乱を避け盧山に隠棲し、滝を題材にした詩を書いた。



李白観瀑図（ポストン美術館）

●肉筆画「漁樵問答図」（絹本双幅。九十老人卍筆 印百 右 113.4×39.6 左 113.1×39.6 フリーア美術館蔵）

※漁師と樵の異なる二人が問答する題材は、中国北宋時代の詩人、蘇東坡の『漁樵閑話』に由来するといわれる。右図は、樵が柴木の束を下に置き、瓢箪を腰に、鉞を杖にして煙管をくわえながらなにやら思案している図。

左図は、腰蓑を付けた漁師が魚の入った大きな魚籠を脇に置き、竿を立てて足を組んで腰を下ろし、右図の樵に話しかけているような様子を描く。

漁樵問答図（フリーア美術館：複写）

●肉筆画「月に骸骨図」（「骸骨図」とも。掛け軸一幅。絹本着色。巳酉正月九十老人卍筆 印百。125.0×77.0 誓教寺蔵）

※明るい月に照らされて、提灯を持ち、笹藪から伸びる三本の竹の脇に、体をひねるように立ってこちらを見る骸骨。





※誓教寺蔵の画は、月に竹の葉が2枚掛かっているが、2009年、竹の葉が月に3枚掛かっている同図がアメリカで発見され、あるいは二幅描いたか（個人蔵）。

骸骨図（誓教寺）

●肉筆画「宝珠図」（縦長判。淡彩。嘉永二巳酉年正月 九十老人卅筆。印百。個人蔵）

※丸く縁取りした宝珠の先から「寿」の字が煙のようにいくつも出ている図。弘化4年（1847）にも同画趣の「宝珠図」（色紙判）を描いている。

●肉筆画「子路読書図」（「子路負米」とも。絹本着色。九十老人卅筆。印百。日本浮世絵博物館蔵）

※子路が米俵を背負い、本を詠みながら歩く図。子路（紀元前543～紀元前481）は、孔門十哲の一人。字は仲。名は由。母のため米を背負って百里歩いたという。二十四孝の一人。

●肉筆画「長寿表象図」（縦長判。墨摺。九十老人卅筆。印百。日本浮世絵博物館蔵）

※房状の尾と甲羅を見せた瑞喜の亀を描く（島田賢太郎2016年8月「台東区生涯学習北斎研究会定例会レジュメ」による）。

●肉筆画「桃盗る猿図」（「猿図」とも。絹本着色一幅。齢九十歳画狂老人卅筆。印なし。個人蔵）

※赤い縮緬の着物を背中に着た猿が、桃を一つ盗って、嬉しそうに右手で食べようとしている。左足は跳ね上げている。前には、木から盗った枝のついた桃が二つ転がっている。

●「雨中の虎図」（絹本着色一幅。九十老人卅筆。印百。

120.5×41.5 太田記念美術館蔵）

※溪斎英泉『无名翁随筆』には「肉筆の彩色殊に見事なり」とある（『肉筆浮世絵大観』5）。対の「龍図」の龍に向かって雨中で吠えているかのような虎。龍虎の阿吽の図。

左：雨中の虎図（太田記念美術館） 右：雲龍図（ギメ美術館）



●肉筆画「雲龍図」（「龍図」とも。絹本着色一幅。九十老人卅筆。印百。120.5×41.5 ギメ東洋美術館蔵）

※「雨中の虎図」と対の作品。黒々とした天上から龍がとぐろを巻くように現れ、眼光鋭く何かを睨んでいる。

●「雪中虎図」（絹本着色一幅。嘉永二己酉年寅月 画狂老人卅老人筆 齢九十歳。印百。39.4×50.5 元麻布美術工芸館寄託/個人蔵）

※死の3日前（『瀬木慎一の浮世絵談義』によれば4日前）の作。應為作とする説あり。

※荒井勉『北斎の隠し絵』（AA出版）では次の感想を紹介して「葛飾北斎の自画像である」としている（p.30）。

※「北斎の描くこの虎は、無動の空間の中をスローモーションのように浮遊しているようだ。北斎のくりだしたその超現実的世界の内へと、われわれはひきこまれて行きそうにな



る」(松木寛『名宝日本の美術23 北斎・広重』集英社)。

※「一匹の虎が、雪の中を跳ねている。爪をむき出し、眼を光らして、地上を駆けるというより、空中をとんでいる図であるが、妙にその姿は孤独である。上に対しても下に対しても、はげしい敵意をむき出している虎の姿であろう」(梅原猛『美と倫理の矛盾』集英社)。

雪中虎図 (2017『北斎—富士を超えて』図録より転載)

【北斎最後の傑作】

●肉筆画「富士越龍図」(絹本淡彩一幅。嘉永二年酉年正月辰ノ日注 宝暦十庚辰ノ年出生 九十老人卅筆 印縦長の百。95.8×36.2 北斎館蔵)

注)辰の日は1月11日又は1月23日。

※雪を被った富士山の背景から龍が黒雲を伴って昇天する図。嘉永6年(1853)3月11日、高井鴻山が購入したことが鴻山の手控帳「重脩堂主人」によって知られている。

富士越龍図(北斎館)



※『佐久間象山遺墨集』には、別に卅老人の落款のある「富士越龍図」があり、左上に象山(「ぞうざん」とも)の漢詩が書かれている。一畳ほどの寸法という。



「滄海翻波起伏龍 / 飛騰倏忽過芙蓉 / 沛然下雨物皆息 / 雨霽収無跡蹤」(意

訳：海中から起きあがった龍は、富士山をたちまちのうちに過ぎて飛ぶ、すべての者が息をのむ、雨や雲が収まると、龍の過ぎた跡もなくなる)」(荒井勉『北斎の隠し絵』p162 訓下しは筆者による)

【以下、江戸時代(年代不詳)】

●「渡し船」(横長判着色。●●北斎筆)

※渡し場から舟をこぎ出そうと、船頭が船尾から岸边に棹をさしている。船には煙管を銜え、頬杖をついている男、「富士」と染め抜かれた腹がけをした馬、鞍に敷いた布の端を手にして立っている揚げ帽子の女、棹の先の藁束に売り物を数多く挿して持っている行商の男、煙管を持ち大小の刀を差し、長羽織の侍などが乗っている。

●『画稿(デッサン集)』(江戸時代後期。紙本墨絵。無款。北斎館蔵)

☆〈本を読む女〉（40.0×41.3）

☆〈裸の男の動き・碁を打つ男たち・相撲をとる男たち・三味線を弾く男・股のぞきをする男〉（22.7×38.2）

☆〈狐・狸・鳥など〉（28.0×40.3）

☆〈天秤を担ぐ人物など〉（53.7×28.0）

●「人形遣いと曲芸師」（着色。印北斎）寛政10頃か。

※袴を付けた人形遣いが、碁盤の上に大名行列の纏持の奴の人形を置き操っている。その前で曲芸師が、一枚歯の高下駄を履き、徳利と盃二枚を放りあげて、順に受け取ろうとしている。

●「舌切雀」（林忠正がパリで出したカタログに絵がある）葛籠を開けると、三つ目のろくろ首などの妖怪が多数出てきて、驚きのけぞっているおばあさんを指差して笑っている図。（以上、『北斎美術館3 美人画』p148）

●屏風画「三国志英雄図」（江戸時代後期。6曲1隻屏風。紙本墨絵。各93.9×33.1 千葉市美術館蔵）

※『三国志』の英雄六人を書く屏風に描く。



三国志英雄図（千葉市美術館）

●肉筆画「偉大なる軍鶏」（葛飾北斎。印ふしのやま。紙本着色一幅。101.0×41.0 北斎館蔵）

※左脚を上げ、力強い表情で前を見つめる軍鶏。足元には蒲公英が咲いている。

●肉筆画「松に桜」（紙本着色二幅。無款。北斎館蔵）

※右図は、ごつごつした松の幹と枝、左図は、桜の幹と小枝に蕾が描かれる。

●肉筆画「みみずく」（着色色紙判一幅。無款。北斎館蔵）

※辛夷の枝に止まって正面を見るみみずく。春調亭、浅春庵などの狂歌が添えられる。

●摺物「納涼」（横長判。東京国立博物館蔵）

※浜辺に低い床机を二台置き、そこに座ってくつろぎ涼をとる男女。各床机には二人ずつの芸者がいる。

●摺物「摘草」（横長判。東京国立博物館蔵）

※遠く帆掛け舟と漁船が浮かぶ岸辺で、三人の女が摘草つみくさをしている。女の一人は立って遠くを見ている様子。

●「高砂たかさどの初日はつひの出」(横長判。無款)

※松の大木のある浜辺で、老夫婦が盛装して、沖に上がる日の出を拝んでいる。太陽の中心には霞が横にひかれている。

●肉筆画「貴賓遊きひんゆうご娯ごの図」(横判一幅。無款。個人蔵)

※大正8年「大坂三越呉服店肉筆浮世絵展」に出品されたもの。翌年発行の「図録」によれば、葛飾北斎筆として「松江 桑原羊次郎氏御所蔵」とある。北斎作品かどうかは不明。

図は、御殿に仕える奥方たち四人と娘が、紅葉咲く庭に面した豪華な部屋で語らい寛いでいる。図左には、松の木と石灯籠の庭が広がっている。

●肉筆画「遊女夢春駒うらじよゆめはるこまご図」(横判一幅。無款。個人蔵)

※大正8年「大坂三越呉服店肉筆浮世絵展」に出品されたもの。翌年発行の「図録」によれば、葛飾北斎筆として「松江 桑原羊次郎氏御所蔵」とある。北斎作品かどうかは不明。

図は、山中で、束ねた柴木に両腕を置き休んでいる女。手拭いを被り、眉を剃っている。

【北斎没後】

嘉永3(1850)

★阿栄、浅草聖天町から聖天横町に移る。

●絵本『義烈百人一首』(正月。一冊。緑亭川柳撰。前北斎卅老人画。他に歌川国芳、歌川芳虎、歌川国貞、歌川貞秀が描く。山口屋藤兵衛版。東京国立博物館/弘前市立弘前図書館蔵)

※本誌の挿絵は全て無款であるが、奥付に北斎の画の範囲を示す「画工 口画五頁 自二十一至三十 前北斎卅老人」が記される。

●読本『平将門退治たいじ図絵』(『将門退治たいじ図絵』とも。松亭金水(中村定保)編。大坂・群玉堂、東都・金幸堂の合梓版)

※巻五の奥付に「自首卷至四之卷 前北斎為一老人画」とある。即ち北斎は、一卷から四巻までの挿絵を描き、柳川重信(二世)は五・六巻の画を描き、歌川貞秀は七・八・九巻の画を描く。

●説話集『想山著聞奇集』(11月。五巻。三好想山作(?~1850)。八十八老卅筆。青山直意版。鹿児島大学附属図書館蔵)

※落款が「八十八老卅」であるので、弘化4年(1847)には刊行の構想が出来ていたと思われる。数名の画工が描いている中で、北斎は、巻の一「毛の降とる事」の段に、火の見櫓の中から、櫓に架かった蜘蛛の巣を見ている図と、巻の四「大ひ成る蛇の尾を截て嵩らしむる事」の段に、大蛇を鎌で退治しようとしている男を描く。

●『万職図考』四・五編(葛飾戴斗先生図。河内屋茂兵衛版。初編文政10年(1827)、二・三編天保6年(1835)刊)

※煙管や染色などのためのデザイン集。

嘉永 4 (1851)

嘉永 5 (1852)

◇パリ万国博覧会。

★高井鴻山が應為に「菊之図」を二両三分で注文。7 月に使者を遣わし先に絹地代金一分を支払う。高井鴻山『重脩堂主人』7 月 11 日条に「一金壹分 絹地代 広助出都之砌 菊之画御栄江頼 候ニ付遣す」ルビは筆者による)とある。

嘉永 6 (1853)

【應為の菊図。鴻山の菊図の謎】

★高井鴻山の手控帖『重脩堂主人』によれば、3 月、應為から「細密画 菊之図 絹本」が届けられた。鴻山は、3 月 12 日に浅草聖天横町に住む應為のもとへ飛脚定兵衛を遣わし、残りの二両二分の謝礼金を支払う。但し、この絵は他者に売り渡され、6 月 29 日に精算勘定が済んでいて、同図は小布施にないという(久保田一洋「北斎最晩年一小布施 北斎の周辺」〈『浮世絵芸術』95 号所収。『浮世絵の女たち』鈴木由紀子・p 206 より孫引))。

高井鴻山「菊之図」

※「菊之図」はロンドンで発見された北斎の「菊之図」があり、「八十八老人卍筆」の落款もあるが、北斎筆は疑問とする説あり。應為の「菊之図」が不明であるので、ロンドンで発見されたものが應為の作ともいわれる。また、高井鴻山にも「菊之図」がある。但し、この図は、應為に鴻山が依頼した二図の内の一図で、應為の作とする説があり、真偽の程は不明。



嘉永 7 (1853)

◇ニューヨーク世界博覧会。

◇7 月 8 日、三浦にペリーらの黒船来航。

安政 1 (1854)

◇ペリー 2 回目の来日。日米和親条約。

◇シーボルト追放令解除。

安政 2 (1855)

◇パリ万博(日本不参加)。文部大臣 W. L. ステュルレルがオランダから北斎、歌麿らの作品を入手。その他の作品も含め 259 点を帝室図書館に寄贈。

●絵手本「北斎模様画譜」(5 月。一冊。画工葛飾北斎。見返しには「葛飾為一筆 印 一人人形」とある。奥付前の最終ページには「前かつしか為一筆」とある。柏原徳蔵(探固堂)版。38.0×26.2 すみだ北斎美術館蔵)

※小紋等を含む図案集。

●地誌『利根川図志』(六冊。赤松宗旦注著。葛飾北斎他画図。山田屋佐助版。埼玉県立熊谷図書館蔵)

※利根川周辺の地誌を記したもの。本誌の各冊に挿絵が数葉あるが、北斎の挿絵がどれか不明。昭和13年に刊行された岩波文庫版の同誌における柳田國男の序文には「挿絵の画工の数が甚だ多い。多分は何度にも頼んでは溜めて置いていたものであらう。其中で落款の無いのは葛飾北斎といふことであるが、水虎の考略其他にも出て居る河童の絵が、やはり無名で入つて居るなどは不審である」として、結局どの絵か疑問の趣である。

注) 赤松宗旦：布川村(現茨城県利根川町布川)出身の医師。同誌は、利根川流域の地誌を書いたもの。

安政3(1856)

◇仏人フェリックス・ブラックモン(1833～1914)、パリの印刷屋ドラートルの仕事場で、日本から送られてきた陶器の包み紙の「北斎漫画」を発見。ブラックモンはドラートルに譲ってほしいと願うが断られる。2年後、版画家ラヴィーユの家で再び「北斎漫画」に出合い、ようやく手に入れる(大島清次『ジャポニスム』p28)。

このエピソードは1905年、レオンス・ベネディット(L, Benedite)「Felix Braquemond L'animalier, 『Art et Decoration』、XV11, PP.39-40」の発表した文章による。

但し、これは、ベネディットの文章がブラックモンからの聞き書きであり、ゴンクールやシェノーの証言と必ずしも一致しないこと、発見者を自称する人物が一人や二人でないことなどから、今では伝説と受け止められている(池上忠治氏)として近年疑問視されている(昭和62年(1987)大和文華館「北斎展」図録p5より)。

安政4(1857)

★阿栄、家を出る(?)

安政5(1858)

●9月、「日蓮上人一代図絵」(9月。松亭金水著。葛飾為齋画。明治21年に葛飾北斎の画として売り出す)。

●絵手本『北斎画鑑』(半紙本一冊。巻末に「前北斎為一老人画図」とある。永楽屋東四郎版。22.5×15.5 国文学研究資料館蔵)

※文政元年(1818)『伝神開手 北斎画鏡』の改題本。

安政6(1859)

◇シーボルト、オランダ貿易会社顧問として再来日。

◇この頃、偽葛飾北斎がいたらしい。「又按ずるに、東京橋場町、真崎の石浜神社(脚注：江戸時代には朝日神明宮という。石浜神明また橋場神明とも。荒川区南千住三丁目に現存)にある杉戸の牛馬の図に、安政屠維(脚注：十干のうちの己の称)協洽(脚注：十二支のうち未歳の異名。全項と併せ、安政己未は同六年(一八五九)之玄月(脚注：陰曆九月)、葛飾北斎謹画とあり、印章は左の如し(筆者注：印章の図)何人なるを詳にせず、画風は、葛飾にあらず、土佐の風に近し、甚拙なり」(『葛飾北斎伝』p109)

安政7(1860)

★大英博物館、北斎の作品を購入。

文久 1 (1861)

◇シーボルト、対外交渉のため幕府顧問となる。

文久 2 (1862)

◇ロンドン万博で英駐日大使オールコックが浮世絵を出品。

◇シーボルト、帰国。

★お栄、横浜から鎌倉東慶寺へ行くか。

●絵本『北斎画本雛形』(一冊。画狂人北斎画。山々亭有人序。若林喜兵衛版。もとは一板彩色摺で刊行されたものをこの年一部の書として刊行)

●絵本『北斎翁道之志遠里』(画狂人北斎画。玉養堂版)

※『葛飾北斎伝』によると、「文久二年若林喜兵衛の出板せしところなり。或は曰、此の書は、翁の筆にあらず。柳川重信か、或は阿栄の画ならんと。又翁が壮年の頃、画きおけるを彫刻せしものかと」としている (p278 ルビは筆者)。

※この題名は扉にあるサブタイトルで「北斎狂画 東海道五十三次」が正しい。享和 4 年 (1804) の『春興五十三駄内』の初版にあった短冊版 8 図を柳川重信の小判に差し替えて改題再刊したもの。⇒享和 4 年条『春興五十三駄之内』参照。

元治元年/文久 4 (1864)

●絵本『孝経画入』(二冊。北斎画。高井蘭山撰)

慶応 2 (1866)

◇シーボルト没 (70 歳)。

◇フィリップ・ビュルティ (美術評論家)、北斎を初めて評価し「ジャポニズム」の語を使う (『産業芸術の傑作』)。

慶応 3 (1867)

◇パリ万博に日本が参加。北斎の版本 2 件、『北斎漫画』『絵本武蔵鑑』等が出品される (2017『北斎一富士を超えて』 p28)。

◇「1867 年までにはフランスの芸術家たちからなるラ・ソシエテ・ジャポネーズ・ジャングラール (ジャングラール日本協会) とよばれる集団がすでに結成されていた。北斎はこのグループの人気の的であった」(「葛飾北斎論」『在外秘宝 葛飾北斎』所収 p16)

明治 5 (1872)

◇美術評論家フィリップ・ビュルティの提唱した。ジャポネズリー (日本趣味) は 80 年代にかけて広がる。

明治 6 (1873)

◇ウイーン万博。浮世絵を政府が紹介。起立工商会社設立。

明治 7 (1874)

◇印象派運動始まる。明治 19 年 (1886) に極点。ゴッホは 200 点以上の浮世絵を所蔵。

明治 10 (1877)

◇第一回勸業博覧会 (上野) 美術部により肉筆画展示。

明治 11 (1878)

◇パリ万博。政府は積極的に浮世絵を輸出。林忠正、東大を中退してパリ万博に参加、工芸品制作輸出会社起立工商会社の通訳をする。輸出も若井兼三郎と林が担当。

◇林忠正、万博終了後もパリに残り、ルイ・ゴンス「日本美術」2巻を若井兼三郎(元起立工商会社副社長)と手伝う。

◇フェノロサ来日。6万点以上の浮世絵を収集、ボストン美術館フリーア・コレクションに送る。

●9月1日、絵手本『北斎漫画』十五編(奥付には「東京府故人葛飾北斎 出版人 愛知県平民片野東四郎注 第一区玉屋町三丁目二番地」と記されている。ここまで総図数 3911 図)。

注)片野東四郎：四代目永楽屋東四郎のこと。この編は、沼田月斎(1787～1864)、織田杏齋(1845～1912)など他の絵師の絵や、北斎の別の絵手本の絵の寄せ集めによって編集された。

明治 12 (1879)

明治 13 (1880)

●絵本『画本 唐詩選五言絶句』(1月。二冊。故人葛飾為一。嵩山房小林新兵衛版)

明治 14 (1881)

◇ビゲロー来日。

明治 15 (1882)

◇ジョルジュ・ビゴー来日。

◇デオドル・デュレ(1838～1927)が美術誌『ガゼット・デ・ボザール』誌で「北斎は日本が生んだ最も偉大なる巨匠である」と評す。

明治 16 (1883)

◇林忠正、仏アパルトマンで美術商(若井・林商会)を開く。若井が日本から作品を送り林が売る。この頃より喜多川歌麿や鳥居清長の作品が出回る。

◇ビゴー、石版画集『あさ』の扉絵に「北斎漫画」二編の作品を使う(「仮面の図」)。

○ルイ・ゴンス(1841～1926)、『日本美術』。

明治 17 (1884)

◇正月元旦、林忠正、下宿先に店を開く。英政府の囑託としてロンドン美術館所蔵の日本品を整理する。

●絵手本『北斎模様画譜』(9月。安政2年『北斎模様画譜』の後摺版。

明治 18 (1885)

◇林忠正、法律を学びにパリに来た黒田清輝の才能を見出す。日本美術愛好家ラファエル・コランのもとに連れて行き画家に転向させる。

明治 19 (1886)

◇林忠正、店をヴィクトワール通りに写す(骨董屋)。渡仏した伊藤博文や大蔵次官らに日本美術の振興について述べる。

明治 20 (1887)

◇この頃、林忠正、本店を日本に移す。若井兼三郎と松尾儀助(元起立工商会社社長)も加わる。

明治 21 (1888)

◇パリ・国立グラン・パレで「ジャポニスム展」。

●「日蓮上人一代図絵」(安政五年刊の葛飾為斎の同画を葛飾北斎画として売り出す)

明治 22 (1889)

◇パリ万博。

●「前北斎富士勝景」(前北斎为一筆。12月。縮緬注錦絵。大倉孫兵衛版。早稲田大学図書館蔵)

注) 縮緬: 長谷川武次郎によって、明治 18 年(1885)に考案された印刷方式。和紙を使用し、木版多色刷りで縮緬のように加工する。

※「富嶽三十六景」から 11 図を抜き出し、縮緬本に仕上げたもの。〈江戸日本橋〉〈御厩橋より両国橋夕陽見〉〈東都浅草本願寺〉〈東都本町堅川〉〈武州千住〉〈遠江山中〉〈尾州不二見原〉〈常州牛堀〉〈甲州犬目峠〉〈甲州伊澤暁〉〈甲州石班澤〉など。

明治 23 (1890)

◇この頃、林忠正、工芸品から浮世絵と鏝の商売に転ず。1900 年にかけて大量の浮世絵をパリに運ぶ(錦絵 16 万枚、絵本類 9700 冊)。依頼したビングに渡さずゴンクールに売却(永井荷風『江戸芸術論』による)。

◇輸入商ビングによるパリ国立美術学校での「浮世絵展」開催。

明治 24 (1891)

○ゴンクール『歌麿』出版。

明治 25 (1892)

◇林忠正、小林文七(浮世絵商)の開いた日本最初の浮世絵展で浮世絵の芸術性を訴える。

明治 26 (1893)

◇林忠正、明治美術会で印象派を展示する。

◇ボストン美術館「北斎とその流派展」(アーネスト・ファノロサの企画)開催。

●「土農工商」(12 図。墨摺。北斎(「画」の字はない)

☆〈三方の杵を作る折烏帽子を被り盛装した二人の職人の図〉

☆〈盥で洗濯をする男と、井戸から水を汲む男の図〉

☆〈馬上から弓を射るために構える武士と、裸足で立って弓を構える武士の図〉

☆〈油売り野菜売りの図〉

☆〈土を耕す二人の農夫の図〉

☆〈包丁儀式で烏帽子を被り調理する二人の男の図〉

- ☆〈鎧よろいを客に着せて仕立てよろいしを確かめている鎧師よろいしの図〉
- ☆〈木に登って柿を取り、下の母親に渡している子どもと、柿を籠に入れていた父親の図〉
- ☆〈畑たわらで働く農夫や俵たわらを担ぐ農夫たちの図〉
- ☆〈不明〉
- ☆〈大名行列の荷を担ぐ男とお伴の武士と纏持ちんもちちの図〉
- ☆〈酒さけの菰樽こもづるを担いで川岸に運ぶ男たちの図〉

明治 27 (1894)

◇林忠正はやしただまさ、この頃より西洋美術館の設立を志すも実現せず。「阿諛追従あついでしゅうじゅうの男」「春画はるがを売った国賊」の悪評を浴びる。

◇古美術商山やまなか中定次郎渡米し、フェノロサふえのろさらに助けられて浮世絵うきゑを売りさばく。

明治 29 (1896)

○エドモン・ド・ゴンクール、『北斎』出版。

○ミシェル・ルヴオン、『北斎』出版。

明治 30 (1897)

◇この頃の浮世絵肉筆画うきゑにくひつが収集家しゅうじゅうか（丸鬼周一まるきしゅういち、高嶺哲夫たかみねてつお、小林文七こばやしぶんしち、服部一立はっとりいちりつ、武岡豊太たけおかちよた、桑原羊次郎くわはらようじろう）。

明治 33 (1900)

◇パリ万博。

◇林忠正はやしただまさ、伊藤博文いとうひろぶみと西園寺公望さいおんじこうもちの推薦すいせん（永井荷風ながいなるかぜ『江戸芸術論』では駐仏公使曾禰荒助そねあらすけの推薦）でパリ万博の事務官長じむくわんちやう（日本出品事務所長）に任命される。この頃、印象派が認められ始め、印象派の作品を 500 点集める。

◇フェノロサによる北斎展が東京の日本美術協会（上野公園）で開催される。本間耕曹ほんまこうざうの蒐集品しゅうじゅうひんを公開。

◇お雇い外国人のクルト・ネッターとゴットフリード・ワグナー共著『日本のユーモア』で 200 点の戯画ぎがを紹介。出品画しゅてんが中、河鍋暁齋かわなべきやうさい 37 点、北斎漫画 17 点が多い。

◇ゴンクール没（死に先立ち、収集した浮世絵を売却し、私立文芸院ぶんげいんを設立した）。

明治 35 (1902)

◇林忠正はやしただまさの企画によりパリで写真版目録を作り日本美術の競売きやうばいをする。

○アンリ・リヴィエール、リトグラフ集『エッフェル塔三十六景』（『富嶽三十六景』に刺激された作品）。

明治 36 (1903)

◇小林文七こばやしぶんしちが浮世絵をフリーアフリーアに売る（翌年まで）。

◇林忠正はやしただまさ、パリの商店を引き払い東京に帰る。

大正 9 年 (1920)

◇松方コレクションの版画がフランスから日本に持ち帰られる。

大正 10 (1921)

◇落合直成、三原繁吉らによる（第一次）日本浮世絵協会設立。機関紙「浮世絵の研究」創刊号に「吾が協会は、本邦独特の浮世絵版画の芸術的価値を一般に理解せしめる」（『季刊浮世絵 9』 p 7 昭和 39 年 5 月 1 日刊）

【春峯庵贋作事件】

慶應◆男爵九条良致旧蔵品 【葛飾北斎】筆 絹本着色 富嶽十二景 画帖 晩年の卍落款



昭和九年（1934）4月26日、東京朝日新聞に「珍しや写楽の肉筆現る」という大見出しが載った。記事では、某大名華族で春峯庵と号する人が秘蔵していたもので「いづれも得難い珍品」だと大学教授の笹川臨風が絶賛。同年5月14日には「発見」された一連の品々の売立入札会が行われた。入札会

に先立ち、豪華な画集『春峯庵華宝集』が作られ、笹川が序文を記した。

参考資料：阿栄（應為）

【阿栄、画をよくし、土偶人を作るに妙手で、火事を好む】

★「(略)娘ありて柳川重信に嫁せしが注1、離縁して今家にあり。此婦人も崎人にて当時（筆者注：弘化二年）三十歳余注2、画をよくし、且至て器用なり。土偶人を作るに妙手なり。一日土を以て町家の娘と町芸者と深川妓婦三人にて、遣り羽子を突く。偶人を作るに其情態髪形の体、真のごとし。又此婦人至て火事を好みて、夜中といへども十町廿町の場へ見物に往く事屢なれども、北斎も敢て足をとどめず。俱に崎人といふべし」（『戯作者考補遺』木村黙老編 p 315）

注1) 「柳川重信に嫁せし」は誤り。

注2) お栄の年齢については、弘化二年(1845)は北斎86歳であり、この時お栄が30余歳とすれば、北斎40代後半から50歳頃の子となるので誤りであろう。あるいは30数年絵を描いたという意味か。

【北斎没後、阿栄はどこでなにを、そして、いつ没したか】

★（北斎没後）北斎居住だった浅草聖天横町に嘉永6年（1853）3月まで住んでいたことは高井鴻山の『重脩堂主人』の嘉永6年（1853）3月条に、自身が応為に依頼した「菊図」の画料を浅草聖天横町の応為に飛脚を介して送っている記録からもあきらかである。

※「北斎の死するや、阿栄悲嘆座に安ぜず。これより居所を定めず門人或は親戚の家に流寓し、後親戚加瀬氏の家に居りしが、一日出て行くところを知らず。一説に、阿栄、加瀬氏の家を出で、加州金沢に赴きて死す。年六十七。また一説に、徳川旗本の士某

の領地、武州金沢の近傍に到りて死せり。又一説には、信州高井郡、小布施村、高井三九郎の家に到りて死せりと。詳ならず。白井多知女の遺書には、安政四年の夏、東海道戸塚宿の人、文蔵といへる者阿栄を招き画を請ふ。阿栄筆を懐にし、出て行きしが、夫より知れずなりしと。」（『葛飾北斎伝』 p 312 ルビは筆者）

同書の「北斎翁の死するや、阿栄、悲嘆座に安ぜず。これより居所を定めずして、門人或は親戚の家に流寓し」は誤り。

嘉永6年(1853)3月以降、阿栄は弟の加瀬崎十郎家に身を寄せたり、川村家に転じらしい。旅に出て相州戸塚か、加州金沢で客死の噂あり。北斎の墓のある誓教寺には葬られていない。

※安政2・3年(1855・56)頃、加賀前田家に抱えられ金沢で没したともいわれる。又、安政4年(1857)、家を出て消息不明とも(この時67歳)。一方で『葛飾北斎伝』では、『浮世絵師便覧』により慶応年間までの生存を示唆している。

★小布施の絵師小山岩治郎が、お栄から絵の通信教育を受けたという。他に商家の娘や旗本の娘が門人であったという。また、晩年は女仙人になりたくて茯苓(サルノコシカケ)を服用していたという(鈴木由紀子『浮世絵の女たち』 p 207)。

【應為の作品(広義の北斎作品を含む:北斎の制作に阿栄が手を加えたと考えられるもの)

※ほとんど肉筆画(確認されたもので10数点)。

●狂歌本「狂歌国尽」(帆掛け船の挿絵。栄女筆。文化7(1810)を下らない時期。最も早い作画とも)⇒文化7年(1824)参照。

●肉筆画「月下砧打美人図」(紙本着色一幅。應為栄女筆。印應。

113.4×31.3 弘化年間から天保後期の作か。東京国立博物館蔵)

※月明かりのもと、手拭いを被り赤い襷をした女が、砧を高く振り上げ、板に渡した衣を打っている。足元には白い衣が畳んである。跳ね上がった裸足の左足が印象的。

※本図の落款部分を削りながら途中で止めた跡があり、大久保純一は、新たに北斎の落款を入れて売り出そうとのではないかという(久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』 p 32 で紹介)。同画題では北斎に「詩歌写真鏡 在原業平」がある。 月下砧打美人図(東京国立博物館)

●肉筆画「吉原格子先之図」(文政~天保(1818~44)。紙本着色。一幅。無款。画中の三つの灯籠にそれぞれ「應」「為」「榮」の書き込みがある。26/3×39/4 cm 太田記念美術館蔵)

※吉原の妓楼の格子からの顔見せの図。その前で中を覗く人たちを包むように光と影が描かれる。



※昭和4年(1929)4月、雑誌『浮世絵志』の口絵に掲載。その後昭和6年(1931)、『浮世絵画集』(浮世絵研究会・長島譲。大鳳閣書房)、昭和7年『浮世絵大家集成 北斎』(大鳳閣書房)、昭和8年(1933)『浮世絵概観』(井上和雄解説 大鳳閣書房)に掲載される。昭和21年(1946)、美術雑誌に掲載後所在不明となるも、昭和57年(1982)2月、

『肉筆浮世絵大七巻 北斎』(集英社)で、岡山県の旧家で戦乱を逃れていたのが再発見されたという報告がなされ、昭和59年(1984)、「肉筆浮世絵名作展 咲き薫る江戸の女性美」(朝日新聞社主催)で公開される。その後、太田記念美術館所蔵となる(以上、『北斎になりすました女 葛飾応為伝』檀乃歩也 講談社 p16~17による)。



吉原格子先之図 (太田記念美術館)

●教訓書『^{あいにりにちよう}絵入日用 ^{おんなちゆうほうき}女重宝記』(墨摺一色。大本一冊。應為栄女画挿図。高井蘭山の序文は文政12年(1829)だが刊行は弘化4(1847)。元禄5年(1692)刊のものを高井蘭山が文章を一部改め、應為が挿絵を新たに描く。大英博物館/太田記念美術館蔵)



絵入日用女重宝記 (大英博物館)

●教養書『^{せんちあひてびき}煎茶手引の種』(嘉永元年。墨摺一色。須原屋新兵衛版。早稲田大学図書館蔵) ※唯二冊のみの版画本の挿絵⇒嘉永元年(1848)参照。



煎茶手引の種 (早稲田大学図書館)

●肉筆画「三曲合奏図」(文政～天保年間か。絹本大判着色一幅。應み酔女。印應み。

46.5×67.5 cm ポストン美術館/オランダ国立民族学博物館・シーボルト・コレクション/イタリア・ジェノヴァ東洋美術館蔵)

※胡弓を弾く町娘、その前で黒い着物と赤い襦袢の遊女が背を向けて琴を弾く。裾には赤や青の蝶や蜘蛛の巣の絵柄。その脇で、表が青、裏が赤の襦袢を覗かせて三味線を弾く芸者。



三曲合奏図 (ポストン美術館)

●肉筆画「関羽割臂図」(絹本着色一幅。應為栄女筆。印葛しか。右腕に毒矢を受け血を流しつつ馬良と碁を打つ関羽を医師の華陀が治療する三国志の場面に題材。140.2×68.2 クリーブランド美術館蔵)

※文政年間(1818～30)か(『美術品所蔵レファレンス事典 日本絵画篇』2015 日外アソシエーツ)。



※『三国志演義』の挿絵「関雲長刮骨療毒」では関羽が左肘に毒矢を受けているが、応為の作品では右肘になっている。

関羽割臂図 (クリーブランド美術館)

※印の「葛しか」の形状は北斎84歳から85歳に用いられたものに似ている。あるいは北斎から譲られて用いたものか(久保田一洋編著『北斎娘 応為栄女集』藝華書院、p84)。なお、北斎にも関東大震災で焼失した

「関羽図」があったという(同書p28)。⇒天保14年

(1843) 参照。

●肉筆画「百合図」「美人下絵」(弘化二年<1845>)。絹本著色。一面：應み栄女筆。印應。貼交屏風一隻のうち。個人蔵・北斎館寄託)。小布施に残された応為の唯一の作品。屏風に北斎の獅子図と共に貼交にしてある。「美人下絵」は書簡「絵具(生臙脂)製法指導状」にある「外ニ女絵の下タさし上申候」とある絵か。

百合図・美人下絵 (<http://lonpari2.blog.shinobi.jp>より)



●肉筆画「竹林遠見富士図」(「竹林の富士図」とも。絹本着色一幅。應為栄女筆。印富士山形。104×32.6 個人蔵)



※『美術品所蔵レファレンス事典 日本絵画篇』（2015、日外アソシエーツ）では、江戸時代末の作で、北斎館蔵としている。

竹林遠見富士図（高井鴻山記念館：town.obuse.nagano.jp より）

●肉筆画「蝶々二美人図」（絹本着色一幅。應為栄女筆。印文不明。108.1×33.4 所在不明）

●肉筆画「夜桜美人図」（弘化～嘉永初年〈1845～49〉。無款。絹本着色。88.8×34.5 メナード美術館蔵）「春夜美人」題で昭和7年、京都府美術館での「北斎翁建碑記念展覧会 第二回浮世絵総合大展覧会」に出品された（『北斎娘 応為栄女集』（p33）。

※灯籠の明かりの前で、指を絡めるように筆を持ち、短冊に歌を書こうとしている女。松の木先の夜空には瞬く群星が描かれる。

※元禄時代の女

流歌人・秋色女（生没年不詳）を描いたものという。秋色は十三歳のときに上野に花見に出かけ清水観音堂井戸の傍らの桜を見て「井のはたの 桜あぶなし 酒の酔」という句を詠み、この句が評判になり、その桜を秋色桜というようになったことを画題としている。そして、無款であるのは、北斎の作品として描いたものともいわれる。「酒の酔」の「酔」が「栄」を示しているので応為の作であるとしている（久保田一洋編著『北斎娘 応為栄女集』 p 32）。

夜桜美人図（メナード美術館）



●肉筆画「朝顔美人図」（絹本着色一幅。北斎娘辰女筆。印ふもとのさと。34.2×44.8 ロスアンゼルス・カウンティ美術館蔵）



※切り取った朝顔を投げ入れた水鉢が盆の上に置かれ、盆の端には歯磨き粉と房楊枝も置かれている。それを前にして、団扇を顔近くに寄せた黒い緋の着物に白地に花柄の襦袢の女が座って涼んでいる。

朝顔美人図（ロスアンゼルス・カウンティ美術館）

<http://lonpari2.blog.shinobi.jp> より）

※この絵とほぼ同一構図の「朝顔美人図」が清水軒記念文化振興財団にあり、落款はないが、画中の団扇に「辰」の文字があるという（久保田一洋編著『北斎娘・応為栄女集』による。鈴木由紀子『浮世絵の女たち』 p 192 からの孫引）。

●書簡「小布施栗礼状」（23.0×30.0 個人蔵。年月日不明。破損され宛名不明。久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』より）

※十八屋の流れをくむ穀平味噌醸造所の、九代目当家に所蔵（千野塚子『江戸のジャーナリスト葛飾北斎』p146～147）。

「御書拝見致まいらせ候。いまた御目にかゝり不申候得共、ますく御機嫌よく御出遊し、御目出度存まいらせ候。左候得者、先月も御手紙下され候得共、私内ニ居不申、御返事もさし上不申、恐入まいらせ候。何れ来月中旬に者帰り申上候。其節御手本上申へく候、先ハいそき用事にて申上まいらせ候。早々

御めて度、小布施栗沢山有かたく存候。誠に筆も御座なく嘩々、御読むつかしくと早々。〈ヤブレ〉様 三浦や榮」（読みやすくするため、改行し、句読点・ふりがなは筆者）

●書簡「**絵具（生藤脂）製法指導状**」（23.0×61.0 個人蔵。年月日不明。破損され宛名不明。久保田一洋『北斎娘 応為榮女集』より）

「舌代 先々御機嫌よく御目出度存まいらせ候。日外者、何よりの品いたゞき有かたく存候。私も何かといそがしく候間、お手本者まつ一ちまい上申候。外ニ女絵の下タさし上申候。またく来月ハ沢山上申へく候間、今月者是にて、御かんにん可被下候。

扱是よりハしやうゑんじの事申上まいらせ候。

一 先初めよくく、お■■■（ヤブレ）御先被成、あふら気の無キ様ニ被成候。而■■■■（ヤブレ/しやうゑんじ）をゆびの先にて、よくくもみ■（ヤブレ/赤）キこなをことく、其よりつめ（爪）にて（絵）此様ニ被成、しやうゑんじを、此位イなら、水をさらに（絵）此程斗りよく火にて、あたゝめ其中に入れて、わたの白く成ほよくくしぼり、其より余程ぬかき（ぬるい）火ニかけ候得者、少々まはりか焼付かゝる所を皿をまわしなから、せんじつめ申候。段々つまるにしたがつて、火を遠くニ成、しまいに誠に少ニ成候得者、皿のあたゝまりにてまわしなから皿へ干付候。くれぐも火がつよくよつて、きうに被成候。とくろく相成候間、お氣長に、御せんしニ被成可候。ゑの油にて合の中へなまりを大きサ（絵・丸）此位のでつぼう玉をこまかにけづり、六十日程、土中へうづめ置申候。注つかい様ハ中々筆談にてハ長く斗り成候て、わかり不申候。先御たづねゆへ申上まいらせ候。あらあら かしく

〈ヤブレ〉様 中嶋屋 榮」（読みやすくするため、改行し、句読点・ふりがなは筆者による）

注）此位のでつぼう玉をこまかにけづり、六十日程、土中へうづめ置申候。：この一節は北斎の『画本彩色通初編』（嘉永元年：1848）「絵具の製法」に同様の記述がある。

【以下、制作に関わったと思われる作品】

- 「**武家**」（広義の北斎作。和紙。フランス国立図書館蔵）
- 「**町屋の娘**」（広義の北斎作。和紙。フランス国立図書館蔵）
- 「**神楽巫女**」（広義の北斎作。二代戴斗説あり。和紙。フランス国立図書館蔵）

- 「**節句の商家**」(広義の北斎作。お栄との共作説あり。ライデン国立民族学博物館蔵・シーボルト・コレクション)
- 「**初夏の浜辺**」(オランダ・ライデン国立民族学博物館蔵)
- 「**手踊図**」(北斎為一筆。所在不明。講談社『肉筆浮世絵 下巻』国立国会図書館蔵)
(鈴木由紀子『浮世絵の女たち』幻冬舎・P199による)

【葛飾北斎末裔】

※内藤正人「北斎の裔一幕臣白井家の系譜と、その遺品」(2019年『浮世絵芸術』177巻 p15~25)を参照した。

前妻の子 長男：富之助

長女：美与

二女：鉄

後妻ことの子 二男：多吉郎(本郷竹町の商人：勘助に養育され、後、加瀬家の養子となり、崎十郎と名のる)

三女：栄

四女：猶

以下：加瀬家

多吉郎(崎十郎 文化7生 万延1/5/9没51 千駄ヶ谷：慈光寺 樹誓院积得寿居士) = きの(多吉郎の妻。嘉永4/9/29没48)

子：多知(明治19/4/14没56 諡号：鏡心院) = 白井久之助(幕臣、白井家12代当主、京都見廻：組並・40俵 明治10/8/9没53)

子：弥次郎(慶応2/9/16没26)以後、加瀬家途絶えたため、姉の多知の子：昶次郎が養子に入る。

以下：白井家

多知の長男：孝義(陸軍軍人、日露戦争従軍。昭和3/12没78) = 先妻：道子 後妻：あい

孝義・道子の子：長男・白井尚一

二男・哲(加瀬昶次郎家に養子に入る。明治41没30)

あいの子：義三(北斎より5代目。明治33年生。軍需省軍需管理官：昭和19年退官。日本石灰株式会社理事、昭和31/9没) = 三枝子(明治41生。仏英和高等学校：現白百合女子大卒。専売局長石井淳二郎三女)

義三・三枝子の子 正三

玲子

隆二

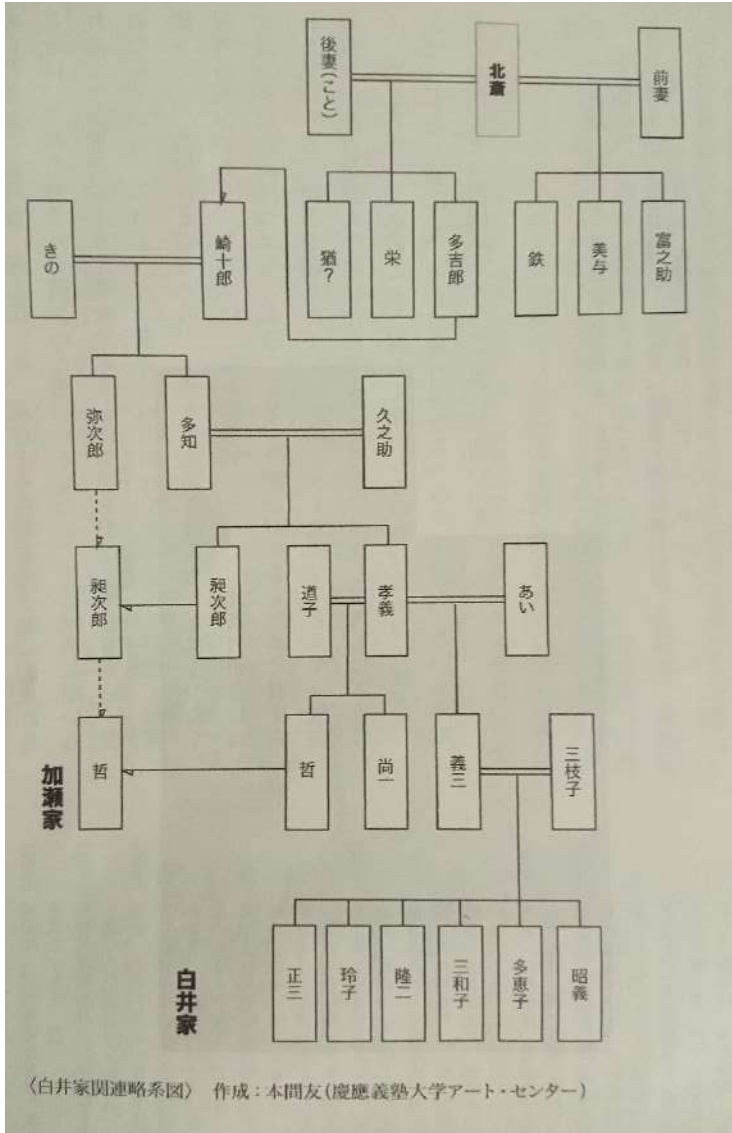
三和子

多恵子

昭義

孫：由紀子) 北齋から7代目)

「白井家関連略系図」作成：本間友（慶応義塾大学アートセンター）「北齋の裔」 p 24 より転載



【参考】

【北齋と中嶋家】

「過去帳において加瀬家養子：昶治郎の月命日に記載されているじょうほうである。

『十三代孝義母方祖父加瀬崎十郎実父 葛飾北齋浮世絵画師画狂老人己 嘉永二己酉四月十八日寿九十歳浅草区 永住町四十四 五ノ内誓教寺川村姓』

明治期に白井義孝が飯島虚心にらに語ったとする、先祖北川村家より中嶋家に養子に入ったという伝聞は、おそらくはこの部分の記載と一致するものといえる。この問題に関しては、御用鏡師中嶋家関連資料を踏まえた近年の考察によって、北齋が御用鏡師中嶋家二代目の長男ながら廃嫡された人物をその父親とする可能性が高いこと、中嶋家三代目を元文四年に継いだのは北齋の叔父金吉であること、さらに後年その叔父の養子として、今度は北齋長男の富之助が中嶋家四代目を享和四年に継いだことなどが紹介、報告され、一応の解決をみている注」（注：岸文和「北齋伝記の再検討―新出資料『御鏡師中嶋伊勢御目見願』を手がかりに」『美術フォーラム 21』34、醍醐書房、平成 28 年 11 月、86-96 頁）

【白井家の思い】

「先祖は北齋だと聞いてはいたものの、しかしながらその絵がねえ・・・」というニュアンスであったと聞いている。つまりは、春画をも含む俗世の産物である浮世絵というものの近代における城下が非常に低く、高位の職業軍人や官吏を輩出した白井家では、先祖に

浮世絵師北斎がいる、という事実がむしろ後ろめたい事実として、暗然のタブーであったという、誠に興味深いお話をうかがうことになったのである (p 18)。

【版型】

錦絵のサイズの平均は以下の通りである(単位はセンチ。縦×横)。

丈長奉書 約 72×約 53

大広奉書 約 58×約 44

大奉書(大々判) 約 39×約 53

中奉書 約 36×約 50

小奉書 約 33×約 47

長大判(長絵判) 丈長奉書を横にして縦3分の1にしたサイズ。約 72×26.5。「詩歌写真鏡」のサイズ。

大判 大奉書の縦2つ切り。39×26.5(実際には縦35.0~39.0、横21.5~26.5の範囲。B4判〈36.4×25.7〉に近い大きさ)。横大判は「富嶽三十六景」「諸国名橋奇覧」等のサイズ。

中判 大奉書の4分の1。大判の横2つ切り。19.5×26.5(実際には縦14.0~19.0、横20.0~26.0の範囲。B5判〈18.2×25.7〉に近い大きさ)。「百物語」のサイズ。

小判 大奉書の8分の1。大判の4分の1。19.5×13(実際には縦16.5~19.5、横12.0~13.2の範囲で、横小判として摺物に多く使われる。写真の2L判〈18.0×13.0〉に近い大きさ)

間判 小奉書の縦2つ切り。33×23.5

大短冊判 大奉書の縦3つ切り。39×18

中短冊判 大奉書の縦4つ切り。39×13

小短冊判 大奉書の縦6つ切り。39×9

色紙判 大奉書の6分の1。厚手の紙。20.5×18.5

長判 大奉書の横2つ切り。19.5×53.5

掛物絵 大判の縦2枚つなぎ。78×26.5

柱絵 1、小奉書の縦3つ切り。72~77×17

2、大奉書の縦4つ切り。72~77×13

細判 小奉書の縦3つ切り。33×15。春朗期の役者絵のサイズ。

九切判 大奉書の9分の1。横3分の1を縦3分の1に切断したサイズ。縦8.83×横13.0。宗理期から北斎期の摺物に多い。

十二切判 大奉書約(39×約53)の12分の1。横大奉書2分の1(大判。39×26.5。実際には縦35.0~39.0、横21.5~26.5の範囲。B4判〈36.4×25.7〉に近い大きさ)にし、大判を横2分の1にし、更に縦三等分したサイズ。

続絵 同じ大きさの紙を並べて大画面にしたもの。一枚ずつが独立した絵をつなぐので、それぞれバラ売りにされた。

【北斎作品を所蔵する美術館等】

- ・ 出光美術館（〒100-0005 東京都千代田区丸の内 3-1-1 帝劇ビル 9 階 TEL:03-5777-8600）
- ・ 浦上蒼穹堂（〒103-0027 東京都中央区日本橋 3-6-9 箔屋町ビル 3 階 TEL:03-3271-3931）
- ・ 浦添市美術館（〒901-2103 沖縄県浦添市仲間 1-9-2 TEL:098-879-3219）
- ・ 大分県立美術館（〒870-0036 大分県大分市寿町 2-1 097-533-4500）
- ・ 大阪市立美術館（〒543-0063 大阪府大阪市天王寺区茶臼山町 1-82 TEL:06-6771-4874）
- ・ 大阪府立中島之図書館（〒530-0005 大阪府大阪市北区中之島 1-2-10 TEL:06-6203-0474）
- ・ 太田記念美術館（〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 1-10-10 TEL:03-5777-8600）
- ・ 大田区郷土博物館（〒143-0025 東京都大田区南馬込 5-11-13 TEL:03-3777-1070）
- ・ 大田区立龍子記念館（〒143-0024 東京都大田区中央 4-2-1 TEL:03-3772-0680）
- ・ 岡田美術館（〒250-0406 神奈川県足柄下郡箱根町小涌谷 493-1 TEL:0460-87-3931）
- ・ 神奈川県立金沢文庫（〒236-0015 神奈川県横浜市金沢区金沢町 142 電話:045-701-9069）
- ・ 神奈川県立歴史博物館（〒236-0006 神奈川県横浜市中区南仲通 5-60 TEL:045-201-0926）
- ・ 鎌倉国宝館・氏家浮世絵コレクション（〒248-0005 神奈川県鎌倉市雪ノ下 2-1-1 [鶴岡八幡宮境内] TEL:0467-22-0753）
- ・ 岩松院（〒381-0211 長野県上高井郡小布施町雁田 TEL:026-247-5504）
- ・ 木更津市郷土博物館金のすず(旧千葉県立上総博物館) 〒294-0044 千葉県木更津市太田 2-16-2 TEL:0438-23-0011)
- ・ 北九州市立美術館（〒804-0024 福岡県北九州市戸畑区西鞆ヶ谷町 21-1 TEL:093-882-7777）
- ・ 宮内庁三の丸尚蔵館（〒100-8111 東京都千代田区千代田 1-1 TEL:03-3213-1111）
- ・ 熊本県立美術館（〒860-0008 熊本市中央区二の丸 2 TEL:096-352-2111）
- ・ 群馬県立歴史博物館（〒370-1293 群馬県高崎市綿貫町 992-1 TEL:027-346-5522）
- ・ 香雪美術館（〒658-0048 兵庫県神戸市東灘区御影郡家 2-12-1 TEL:078-841-0652）
- ・ 高知県立高知城歴史博物館（〒780-0842 高知県高知市追手筋 2-7-5 TEL:088-871-1600）
- ・ 神戸市立博物館（〒650-0034 神戸市中央区京町 24 TEL:078-391-0035）
- ・ 神戸市立博物館南蛮美術館（〒650-0034 兵庫県神戸市京町 24 TEL:078-391-0035）
- ・ 国文学研究資料館（〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3 TEL:050-5533-2900）
- ・ 国立国会図書館（〒100-8924 東京都千代田区永田町 1-10-1 TEL:03-3581-2331）

- ・五島美術館：大東急記念文庫（〒158-0093 東京都世田谷区上野毛 3-9-25 TEL:03-3761-0661
- ・埼玉県立熊谷図書館（〒360-0014 埼玉県熊谷市箱田 5-6-1 TEL: 048-523-6291)
- ・埼玉県立歴史と民俗の博物館（〒330-0803 埼玉県さいたま市大宮区高鼻町 4-219 TEL: 048-645-8171)
- ・嵯峨嵐山日本美術研究所（〒615-0057 京都府京都市右京区西院東貝川町 31 西院ビル 5 階 TEL: 075-313-6704)
- ・佐野美術館（〒411-0838 静岡県三島市中田町 1-43 TEL:055-975-7278)
- ・静岡県立中央図書館（〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田 53-1 TEL: 054-262-1242)
- ・品川区品川歴史館（〒140-0014 東京都品川区大井 6-11-1 TEL: 03-3777-4060)
- ・島根県立美術館（〒690-0049 島根県松江市袖師町 1-5 TEL: 0852-55-4700)
- ・城西大学水田美術館（〒350-0295 埼玉県坂戸市けやき台 1-1 TEL: 049-271-7327)
- ・承天閣美術館（旧萬野美術館 2004 年閉館。〒602-0898 京都府京都市上京区今出川通烏丸東入相国寺門前町 701 相国寺 TEL:075-241-0423)
- ・常楽寺美術館（〒386-1431 長野県上田市別所温泉 2347 TEL: 0268-38-2040)
- ・すみだ北斎美術館（〒130-0014 東京都墨田区亀沢 2-7-2 TEL: 03-5777-8600)
- ・清安山板橋不動尊（〒300-2307 茨城県つくばみらい市板橋 2370-1 TEL: 0297-58-1014)
- ・静嘉堂文庫美術館（〒157-0076 東京都世田谷区岡本 2-23-1 TEL: 03-5777-8600)
- ・誓教寺（〒111-0041 東京都台東区元浅草 4-6-9 TEL: 03-3841-5631)
- ・晴明会館（〒813-0001 福岡県福岡市東区唐原 6-7-1 TEL: 092-661-1535)
- ・大東急記念文庫五島美術館（〒158-8510 東京都世田谷区岡本 2-23-1 TEL:03-5777-8600
- ・高橋コレクション（〒144-0052 東京都大田区蒲田 4-29-11 TEL:03-3739-7184)
- ・千葉市美術館（〒260-8733 千葉県千葉市中央 3-10-8 TEL:043-221-2311)
- ・津山市立津山郷土博物館（〒708-0022 岡山県津山市山下 92 TEL:0868-22-4568)
- ・摘水軒記念文化振興財団（〒277-0005 千葉県柏市柏 4-5-3 TEL:04-7167-6153)
- ・天童市美術館（〒994-0013 山形県天童市老野森 1-2-2 TEL: 023-654-6300)
- ・東京芸術大学美術館（〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8 TEL: 050-5525-2200)
- ・東京国立博物館（〒110-8712 東京都台東区上野公園 13-9 TEL:03-5777-8600)
- ・東京都江戸東京博物館（〒130-0015 東京都墨田区横網 1-4-1 TEL: 03-3626-9974)
- ・東京都立中央図書館加賀文庫（106-8575 港区南麻布 5-7-13 TEL:03-3442-8451(代)
- ・東京富士美術館（〒192-0016 東京都八王子市谷野町 492-1 TEL: 042-691-4511)
- ・東京文化財研究所（〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43 東京国立博物館内 TEL: 03-3823-2241)

- ・東洋文庫ミュージアム（〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-28-21 TEL:03-3942-0280）
- ・たばこと塩の博物館（〒130-0003 東京都墨田区横川 1-16-3 TEL：03-3622-8801）
- ・長泉院（〒369-1802 埼玉県秩父市荒川上田野 557 TEL:0494-540-1106）
- ・出羽桜美術館（〒994-0044 山形県天童市一日町 1-4-1 TEL：023-654-5050）
- ・東北大学附属図書館：川内キャンパス（〒980-8576 仙台市青葉区川内 41 TEL：022-717-7800）
- ・名古屋市博物館（住所：〒192-0016 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂 1-27-1 TEL:052-853-2655）
- ・名古屋市美術館（〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄 2-17-25(芸術と科学の杜・白川公園内) TEL:052-212-0001)
- ・名古屋市蓬佐文庫（〒461-0023 愛知県名古屋市徳川町 1001 TEL:052-935-2173）
- ・名古屋テレビ浮世絵美術館（〒460-8311 愛知県名古屋市中区橘 2-10-1 TEL:52-331-8111）
- ・奈良県立美術館（〒630-8213 奈良県奈良市登大路町 10-6 TEL：0742-22-7032）
- ・西新井大師總持寺（〒123-0841 東京都足立区西新井 1-15-1 TEL:03-3890-2345）
- ・日本浮世絵博物館・酒井コレクション（〒390-0852 長野県松本市 大字島立 字新切 2206-1）
- ・八戸市図書館（〒031-0022 青森県八戸市糠塚字下道 2-1 TEL:0178-22-0266）
- ・林原美術館（〒700-0823 岡山市北区丸の内 2-7-15 TEL：086-223-1733）
- ・光ミュージアム（〒506-0051 岐阜県高山市中山町 175 TEL:0577-34-6511 ）
- ・弘前市立博物館（〒036-8356 青森県弘前市下白銀町 1-6 TEL：0172-35-0700）
- ・福井県立美術館（〒910-0017 福井県福井市文京 3-16-1 TEL：0776-25-0451）
- ・藤沢市教育委員会（〒251-8601 神奈川県藤沢市朝日町 1-1 TEL：0466-25-1111 ）
- ・北斎館（〒381-0201 長野県上高井郡小布施町大字小布施 485 TEL：026-247-5206）
- ・房総浮世絵博物館（〒297-0222 千葉県長生郡長柄町大庭 172 TEL:0475-35-2001）
- ・細見美術館（京都府京都市左京区岡崎最勝寺町 6-3 TEL:075-752-5555）
- ・本間美術館（〒998-0024 山形県酒田市御成町 7-7 TEL:0234-24-4311）
- ・MOA 美術館（〒413-0006 静岡県熱海市桃山町 26-2 TEL:0557-84-2511）
- ・町田市立国際版画美術館（〒194-0013 東京都町田市原町田 4-28-1 TEL:042-726-2771・0860・2889）
- ・三井記念美術館（〒103-0022 東京都中央区日本橋室町 2-1-1 三井本館 TEL:03-5777-8600）
- ・六町ミュージアムフォローラ（〒121-0073 東京都足立区六町 2-5-35 TEL：03-3885-7333）
- ・メナード美術館（〒485-0041 愛知県小牧市小牧 5-250 TEL：0568-75-5787）
- ・茂木本家美術館（〒278-0037 千葉県野田市野田 242 TEL：04-7120-1011）

- ・ 山口県立萩美術館浦上記念館 (〒758-0074 山口県萩市平安古町 586-1 TEL:0838-24-2400)
- ・ 山種美術館 (〒150-0012 東京都渋谷区広尾 3-12-36 TEL:03-5777-8600)
- ・ 洛東遺芳館 (京都市東山区問屋町通五条下ル三丁目西橋町 472 TEL:075-561-1045)
- ・ 立命館大学図書館(〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町 56-1 : TEL: 075-465-8144)
- ・ 早稲田大学図書館 (〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1 TEL : 03-3203-5581)
- ・ ウースター美術館 (米国・ボストン Worcester Art Museum : 55 Salisbury St, Worcester, MA 01609-3196 : 55 Salisbury Street, Worcester, MA 01609 : (+1) 508-799-4406)
- ・ オーストリア国立工芸美術館 (Museum für angewandte Kunst : Stubenring 5, 1010 Wien,)
- ・ オーバリン大学 アレン・メモリアル美術館 : メアリー・エインズワース・コレクション (米国オハイオ州オーバリン : Allen Memorial Art Museum 87 N Main St, Oberlin College, Oberlin, OH 44074-1161)
- ・ オンタリオ美術館 (カナダ・トロント : Art of Ontario: 317 Dundas St W, Toronto, ON M5T1G4: (416)923-1171)
- ・ ギメ東洋美術館 (フランス・パリ : Guimet Museum 6, place d'Iéna 75116 Paris : +33 (0) 1-56-52-53-00)
- ・ クラクフ国立美術館 (ポーランド・クラクフ : Muzeum Narodowe w Krakowie : al. 3 Maja 1, : +48 12 433 55 00)
- ・ ケルン東洋美術館 (ドイツ・ケルン : Museum für Ostasiatische Kunst Köln : Universitätsstraße 100, 50674 Köln, : +49 221 22128608)
- ・ シカゴ美術館 (米国イリノイ州シカゴ : The Art Institute of Chicago : 111 S Michigan Ave 159 East Monroe Street, IL : +1 312-443-3600)
- ・ スミソニアン協会フリーア美術館 (米国・ワシントン DC : Freer Gallery of Art : 1050 Independence Ave SW, Washington, DC 20560 : +1 202-633-1000)
- ・ スミソニアン協会アーサー・サックラー美術館 (米国ワシントン DC : 1050 Independence Ave SW, Washington, DC 20560 : +1 202-633-1000)
- ・ 大英博物館 (英国・ロンドン : British Museum : Great Russell St, Bloomsbury, London WC1B 3DG : +44 20 7323 8299 : 1-617-495-9400)
- ・ ハーバードアーサー・サックラー美術館 (米国マサチューセッツ州ボストン : Harvard University Art Museums : 32 Quincy St., Cambridge, MA 02138 : 1-617-495-9400)
- ・ ハーバードフォッグ美術館 (米国・マサチューセッツ州ボストン : Harvard University Art Museums : 32 Quincy Street, Cambridge, MA 02138)
- ・ ヴィクトリア&アルバート博物館 (英国・ロンドン : Victoria and Albert Museum : Cromwell Road London SW7 2RL : +44 (0) 870 906 3883)

- ・プーシキン美術館（露国・モスクワ：Pushkin State Museum of Fine Arts：12, Volkhonka Street, Moscow：+7 (495) 609-95-20)
- ・フランス国立図書館（仏国・パリ：Quai François-Mauriac 75013 Paris：+33 (0) 1 53 79 59 59)
- ・ベルギー王立美術館（ベルギー・ブリュッセル：Musées royaux des beaux-arts de Belgique：Rue de la Régence Place Royale 1,：+32 2 508 32 11)
- ・ベルリン国立アジア美術館（前ベルリン東洋美術館：独国・ベルリン：Museum für Ostasiatische Kunst：Lansstraße 8, 14195 Berlin,：+49 30 266424242)
- ・ホノルル・アカデミー・オブ・アーツ（米国ハワイ：Honolulu Academy of Arts：900 S. Beretania St., Honolulu, HI 96813：(808)532-8700)
- ・メトロポリタン美術館（米国・ニューヨーク：The Metropolitan Museum of Art：1000 Fifth Avenue at 82nd Street, NYC：(212) 535-7710)
- ・オランダ国立民族学博物館（オランダ・ライデン：Rijksmuseum Volkenkunde：Steenstraat 1：+31 71 516 8800)
- ・ロスアンゼルス・カウンティ美術館（米国・ロスアンゼルス：Los Angeles County Museum of Art 5905 Wilshire Blvd, Los Angeles, CA 90036：+1 323-857-6000)
- ・ワルシャワ民族博物館（ポーランド・ワルシャワ：Ethnographic Museum Warsaw：1 Kredytowa street, 00-056 Warsaw)